鮮血ノ月

天海リョウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
鮮血ノ月

【Ｎコード】
Ｎ２００７Ａ

【作者名】
天海リョウ

【あらすじ】
「さぁ、始めましょうか――あの忌むべき血塗れの月の下で、あのコの幸福な結末（ハッピーエンド）を目指す物語を」夜空が奇妙な紅い月に穿たれる世界、退魔概念の衰退が進む現代。人々は真実の白き月を忘却へ、偽りの赤を真と信じていた。白い月を幻視した夜、少年は少女に出会った。そして、一つの純愛を懸けた戦いが始まる――欲望と愛が交錯する学園伝奇アクション。

［壱］　月下の邂逅（前書き）

最低の人生。
最悪の夜。
最高の出会い。

［壱］　月下の邂逅

――――何事にも『番狂わせ』という事象（モノ）は有り得る。

例えば、勝利目前の勝負事に何らかのヘマが加わってしまい、逆転の果てに敗北などという事も。或いは、何の問題もない人生がある日道端の小さな石ころに躓いたばかりにドン底に転落するという事も。

つまりは、何事も絶対と言い切れやしないのだ。

即ち絶対と呼べるモノなどこの世に在りはしないということを表す。

これを否定する人間は、これからいろいろな形で覚悟を固めておくべきだろう。

……なんて、他人（ひと）の心配してる場合じゃねぇよな。

柄にもなく物思いに耽っていた自分を現実に引っ張り戻す。

ああ、と再び、そして先程よりも深く、実感する。

「――――ったく、とんだ番狂わせだよチクショウ」

先程思い浮かべた例えは吐き気がするくらい自分の現在の状況とそれへの運びに重なってしまい、男は酷くげんなりとした気分に陥った。

こんな気分になった日にはさっさと帰って寝るに限る、と怠惰な考えを持ったが、生憎それを行動に移すことを許すような状況では

なかった。

――――右を見て敵。
――――左を見て敵。
――――後ろを見て敵。
――――前を見て敵。

まさしく四面楚歌の図。
そして、濡れた腹部の痛み。

それらは男――――玖珂蒼助の人生史上最低最悪の夜を描いていた。

◆◆◆◆◆◆

まずは語ろう。
先に行くのはそれからだ。

◆◆◆◆◆◆

ここで一人の男のこれまでの人生を紐解くとしよう。

男の名は【玖珂蒼助（くがそうすけ）】。
東京都渋谷区を本拠に構える関東を牛耳る極道【玖珂組】――――という表の顔を持つ、剣神【須佐之男命】を祀る武道系統退魔組織の当主【玖珂善之助】とその正妻の嫡男として生まれる。
この手の物語の主人公としては上々の出だしとなっただろう――

――その身に致命的な【欠陥】を抱えてさえいなかったら。

――――霊力の低さ。

退魔師としては致命的な欠点にして落ち度。

それがあったばかりにこの男の人生は【最悪】へと転落した。

たった一つにして最大の欠落を授かってしまったことにより男の幼少時代には、常として一族内と業界からの侮蔑と嘲笑が憑き纏って離れなかった。

男は逆境の中、それでも退魔師の道を往こうとするが、その半ばで唯一の理解者であった母親にして師匠という人間を亡くしたことをキッカケに中学の一時期は荒れた生活に浸る。

その後、なんとか立ち直り父親の知人の口添えで国家退魔機関に勤めたこともあったが、高校進学と共に辞職し実家も出て、昼は高校生、夜はフリーランスの退魔師でこれまでに培ったモノを糧に十七歳になる現在まで生計を立ててきた。

――――さて、ちょっとした神の手違いか、悪魔の悪戯か。

用意されていた人生に欠かせないモノを前世かオカンの腹の中かに置いてきてしまったが、運の尽き。

最低に成り下がった人生の渦中を彷徨う羽目になったこの男。

人生に転機があるというのなら、今宵は男にとってまさにそうであった。

男に訪れる転機。

それは破滅への下り坂に続くのか。

それともようやく現れる祝福の階段への道筋か。

答えは言わずとも――――――彼と貴方がその目を以って直に確か

めることだ。
最低の人生の最悪の夜に起こった、最高の出会いを。

◆◆◆◆◆◆

事の発端となったのは、数日前のことだった。
その日、とある喫茶店に呼び出され、〝いつもの〟依頼人（クライアント）から仕事を寄越された。
依頼人の名は氷室雅明（ひむろまさあき）。
氷室は偽名であり、本来の性は土御門（つちみかど）。陰陽系統の名門【安陪】の子息であり、かつての所属組織【降魔庁】での同僚であった男。
ありとあらゆる意味で蒼助とは正反対で、出会いから全く反りが合わず犬猿の仲であるのだが、どういう因果関係が作用しているのか入学した高校は一緒で、辞職した後も何故か依頼人と請負人という妙な関係が続いている。
どういうつもりなのか、生まれ持った前評判のおかげでフリーになってから拝み屋まがいの仕事を始めても全く仕事が舞い込んで来ない蒼助に都内で少々目立ち始めた魔性の討伐などを氷室自身の個人名義で依頼として持ってくる。
家が名門なだけに〝その手〟の情報は動かなくても自然に隙間風の如くポンポン入り込むらしく、それから適当に見つけて持ってきているだけだったらしいが――――今回は違った。

『おい、これヤバくねぇか？　都内じゃねぇか』
『いつもことだが』
『っそーじゃねぇ……いつもは曰く付きな物品とか家に付いてるヤツだが、こーゆー徘徊型はお前ら降魔庁の管轄内だろうが。情報

漏洩で、規則違反になんじゃねぇかぁ？』

『心配ない。そいつが降魔庁の殲滅対象になるのは今日から……五日ほどか。ちょうど、新学期の始業式の日になるな。それまでに貴様が依頼を遂行してしまえばいいだけのことだ……何か問題があるか？』

『……』

反論の余地を無くされたところで、対象の資料を渡されこの件に身を投じる羽目になった。

今思えば、いつもと違うという点で引っかかりを感じた時に止めておくべきだったのだと切に後悔が募るばかりだ。

そんなこんなでまずは資料に書いてある事前情報を元に調査を始めた。

対象は人間であった頃は渋谷でも有名な不良で、ドロップアウトした高校生の中でも一際目立ち、不良達のリーダー格であったらしい。

やらかした犯罪経歴は、喧嘩、覚せい剤、ホームレス狩り、カツアゲ、レイプ、と殺し以外の一通りの悪行を済ませていた。

【奴ら】の恰好の〝器〟と見なされた対象は、いつぞやの夜に寄生されてめでたく人外の仲間入りを果たした。生まれ変わってもやる事や考える事に大して進歩はないらしく、夜に徘徊しては以前と似たようなことを繰り広げているという。

尚、最近では昔の仲間を再び〝仲間（しもべ）〟にして勢力を拡げ始めているらしく、それが降魔庁の目に止まる要因となったようだ。

昔から刑事ドラマの主人公が愛用する『足を使う』という方法は苦手であった――――舐めた態度で食って掛かってくるので短気起こして情報提供者になりえる不良をボコにしてしまうことが多発した――――為、調査は当初はなかなか進まなかったが、コツを掴め

ば簡単なものであった。
元より名がそれなりに知れている。
対象は周囲に変化を気付かせず、昼の出歩きが出来なくなった以外は以前と同じように生活を送っており、知人とも接しているらしく目撃情報は多く足跡を辿るのに苦労はしなかった。
そして、目標に辿り着いたのは期日の前日の夜。
最後に聞いた少々生意気さが際立つ鼻ピアスの不良に『交渉』の果て、対象とその仲間が集まる場所を聞き出すことに成功し、意気込んでそこに向かえば、対象はその他集団で女一人と強引にお楽しみの最中に入るところだった。

「あん？　何だ、てめ――――」
「宅配便。お届け物でーす」

そう言って突っ掛かってきた雑魚の汚い顔が乗っかった首を竹刀袋から引き抜いた真剣の太刀で薙ぐ。
五月蝿い口が黙ったところで開口を切る。

「おいそこの呑気に野外でアソコおっ立たせた茶ロンゲ……お前だよお前。散々手間かけさせてくれたな。ったく、お前の友達揃いも揃って顔も中身もレベル低い馬鹿ばっかだな……おかげで無駄に労力かけちまったじゃねぇか、ただでさえここ最近渋谷中歩き回ってるのによ。いつもは穏便な郵便屋さんもキレるときゃキレんだぞ、ああ？　ああすっきり……さて本題だ、ちょっぴり股間のムスコが不出来で哀れなキミに優しい郵便屋さん神サマからのステキな贈り物だぞぅ。……地獄への片道切符だ、嬉しさのあまりに咽び泣きやがれこのクソ」

ここ数日の間に溜まりに溜まった鬱憤と不満をほとんど息継ぎ無しで言い切ってやった。

すると、怒りに駆られた対象は性欲から暴力へと単純な思考は切り替えたのか、蒼助から見ればそれなりに整った顔を歪ませて立ち上がる。
しかし、行動を起こさせるつもりは蒼助にはなかった。

「てめぇのターンはねぇよ」

体勢を低く屈め、集団を掻い潜るように突進。
スタートダッシュを切った蒼助は速かった。
少なくとも、対象が仲間に司令を送るよりは早く。
そして、仲間が突っ込んでくる蒼助に対処を為すよりは早く。

その時点で、蒼助は誰よりも早く動き、先手を獲得していた。

一対多数。
接近戦のみでこれらを相手にするのは、圧倒的な力の差を有していなければ制することは難しい。
しかし、敵として存在するなら全て相手にするほかない。
遠距離戦術である術式を使用出来れば、たやすいことであったが、霊力が極弱といって良いほど弱い蒼助は行使できる術が一つも無く、習得もしていなかった。
蒼助の頼りになる味方であり唯一の攻撃手段はその手に持つ太刀一振りであった。

だが、難易度を下げる方法は蒼助にもあった。
それは蒼助でも出来ることだった。

集団。
一人がこれらを相手にする点で難点なのは、まず一に数の多さ。
そして、第二に集団というものを成すには大抵居るはずの中枢―

――――司令塔（リーダー）という存在だ。
だが、こちらに関しては逆手に取れる可能性が秘められている。
集団の行動がこの一体で統一されているというのなら――――この一体を潰してしまえば集団は烏合（うごう）の衆と化す。

「――――もらったぁっ」

邪魔な障害物を容易く潜り抜け、標的に到着した蒼助は目的を果たそうと決定打となる太刀を一閃せんと振りかぶる――――が。
対象は蒼助の想定外の行動に出た。
足元で脅え震えていた衣服の乱れた女の腕を引っ掴んだと思えば、

「っ――――？」

突っ込む蒼助に投げつけるように放った。
一つの目的に思考が統一されていた蒼助の意識は分散し、飛び込んでくる女に対処が出来ず受け取るしかなかった。
突進を止めた蒼助の腰に顔から突っ込んできた女は、自分をこの状況から救ってくれる希望（のぞみ）がこの場で唯一あるであろう蒼助に縋りつく。

「ひ、いぁ……た、助けて！」

混乱が生じた生存本能が促していることなのか、女は物凄い力で蒼助に掴みかかってくる。
まずい、と思考がひやりと水をかけられたように熱を失う。
これでは身動きが取れない。
しかも、当初の計画が潰れた。
敵のど真ん中に現在の位置を置いている。

一寸先は闇とはこの事だ、と妙に冷静な思考が蒼助に呟いた。
このままではまずい、ととりあえず女を引っぺはがすという次の行動を考えたが、

――――思考回路の邪魔をするかのように、腹部に抉るような痛みが生じた。

痛みに目を細めた瞬間、喉奥から急激に込み上げ咥内に粘度と臭いの強い液体が充満する。
こふ、と口端から零れ、地面に落ちる。

確認するとそれは――――紛うことなき血であった。
認識を終えて、更に呆然と確認に移る。
先程の痛みの発生源に視線をやった。

そこは――――左の脇腹は地面に落ちたそれと同じく赤で滲み、尚もその赤を噴いていた。
赤を噴くそこには食い込む【モノ】があった。
それは先程まで恐怖に錯乱し腰に縋りついていた、

――――巻き込まれた女の白い五指。

「うふ、助けて？」

女の指が更に深く浸透したかと思えば、次の瞬間――――――――抉り出すように引き抜かれた。

「――――、っ、っ、！」

痛みを耐え難く叫ぶ声は言葉にならなかった。
蒼助の腹部から大量の鮮血が噴き出し、地面を赤く濡らす。
咥内が新たな鉄臭い苦味に満ちると、同時に両膝が微妙なズレを生じながら折れて地面についた。

「――――んー……おいし。やっぱりイケメンの血の味はそこらのとは格が違うわぁ」

先程までの震えは何処へ行ったのか、しっかりとした足取りで立ち上がる女。
指先に付着した蒼助の血をうっとりと赤い舌で一本一本嘗め尽くしていく。
快楽に溺れたかのように悦を宿したその目は――――舐め取る血のような赤。

周囲と同じ、赤。

――――……マジかよ。

蒼助の中で己の状況に対する認識が改まった。
一つの可能性が蒼助の思考に影を落とす。

「――――――お前、最近俺の事を嗅ぎ回ってるって聞いた奴だな？」

ニヤニヤと蒼助を見下ろす対象の科白で可能性は確信に変わる。
思わず口を突いて出る言葉。

「――――……最悪」

追い詰めたつもりが気付かれていて、逆に罠に仕掛けられていた。
後悔が泉のように湧き出す。
何処から失敗したかなど今更考えたくもない。
ただ、一つだけ考えなくともわかることがあった。

――――慣れないことなんてするものじゃない。

◆◆◆◆◆◆

朦朧とする意識の中で思う。

四肢の骨は踏み潰され、蹴り砕かれた。
体中の部位が打撲による熱で熱い。
腹部から相変わらず出血続行中。

最悪だ、と。

現在の状況も、これから先のことについても。

こんな状態では仮に助かってもこれでは商売上がったりで、生涯寝たきり決定だ。
実家に連れ戻されて、一生介護生活なんて厭過ぎる。
――――そして、なにより自分の身に置かれたこの現状が。

「おーい、大丈夫でちゅかぁ？」
「まだ死ぬなよ。しっかりしろぉ」
「さっきまでの威勢はどうしたんですかー、郵便屋さーん？」

ここまで自分を嬲った連中の声が蒼助の鼓膜に煩わしく響く。
動ければ残らず同じ状態にしてやれるのに、と歯痒さが身の内で募った。
しかし、今は明日の陽を拝めるかどうかすら怪し過ぎる。

「ねぇ、もうそれぐらいにして食べましょうよ。死んだら鮮度が落ちちゃうわ」

女の進言が本格的に蒼助の状況を危うい方向に持っていく。
全くもって洒落にならない。
腕一本足一本も動かせない現状で、蒼助に抗う術は一切なかった。
己の中での迫る危機感による混乱と理性の戦いの最中、不意にうつ伏せに倒れていた体勢から仰向けに転がされた。
今度は一体なんだ、と思ったら女が傍らに膝を着いて――――ズボン越しに股間を撫で出した。

――――は？

堕ちかけていた意識はその奇抜な行動にはっきりと我を取り戻した。

「おいおい、またかよ」
「このスキもの。そんなもんによくがっつけるよな」
「んふふ……大人の味ならぬ女にしかわからない美味なのよ」

そう言って女は股間を見つめたままうっとり溜息を漏らす。

「ああ、この手応え……ステキ。まずはその雄雄しい姿を拝見させてもらうわ……」

冗談じゃねェ、と叫びたかったが、血が喉に張り付いて声がうまく出ない。
女の手がジッパーにかかり、ゆっくりと下ろしていく。

これ以上にない絶望感が蒼助を襲う。
なんてことだ。
自分の人生はロクでもない出発だったが、終着までロクでもないものになるのか。
しかも股間から食い殺される？
まだ足先から喰われた方が、大して変わらないがマシだ。精神的に。

ダメだ。死んでも死に切れない。
でも、死ぬ。
死にたくない。
死ぬ。
ヤダ。
死ぬ。
……。
死ぬ、死ぬ、死ぬ、死ぬ。

――――……なんか、もういいや。

抵抗できない虚しさと、結局死ぬしかないという辿る結果が生み出す絶望が蒼助の抵抗を蝕んでいった。

いっそ気絶してしまおう。
そうすれば幾分か楽だ。
羞恥など意識しなければ大したことはない。
どうせロクでもない欠陥だらけの人生だ。
いっそ最後までロクでもないまま終わった方が潔いかもしれない。

閉じていく視界がその中で、満天の夜空に【奇妙なモノ】を捉えた。
それは――――月だった。
おかしなことに蒼助の目に映るそれは濁りのない白さをもって自身を輝かせていた。

――――なんだ、ありゃ……。

普通、〝月は赤いはず〟だ。
生まれてこの方、見上げる空に浮かぶ月はいつだってそうであった。
なのに、今見る月は確かに白い。銀色にすら見える。

――――死にそうで目と頭がおかしくなっちまったのか？

ぼんやりと、今まさに自分の身に降りかかる災厄すらも他人事のように感じながら、思う。

そして、

「――――止めろ、変態。おめめに悪影響だ」

知らない声が響いた。
靄に呑まれかかっていた意識が引っ張り出される。
直後、

バカンッ――――！

何かの強く打ち付けたような音が下半身あたりで鳴ったかと思えば、ついさっきまで股間を執拗なまでに弄（まさぐ）っていた手の動きも感じなくなった。
天上に釘付けていた目を動かし、視線を下げてみると、女は口を押さえて転げまわっていた。
あてる手の隙間から溢れ出る黒い――――魔性に堕ちた者の証たる血が動きたびに噴き散らされる。
今さっき響いた打撃音に関係しているのはわかるが、

――――誰がやったんだ？

この場にそれを望める人間――――もしくは存在はいないはず、と思ったところで蒼助の思考に割って入り込むものがあった。
それは、打撃音の前にあった声だった。
無論、聞き覚えなどあるはずもない。

蒼助にわかるのは、曖昧な判断で下せる声の主が『女』であることぐらいであった。

不幸か幸いか、たった今起きた事象により意識は一時的ながらも明確さを取り戻していた。

視線でそれらしき存在の姿を探す。

右へ、左へ、下へと両目を忙しなく動かすが、映るのは今しがたまで自分を取り囲んでいた連中が何故か若干距離をおく姿だけであった。

ならば上は、と最後の一方に目玉を動かそうとした時、蒼助の顔に影が被さる。

一瞬、と呼べる僅かな時間しかなかった暗い覆いはすぐに蒼助の上から退いた。

代わりに現れたのは影の主と思われる人物の背姿だった。

後ろからでもわかる身体の線の細さと丸みからして、やはり女で間違いないと思った。

決定打として後頭部の上位置で一つに束ねられた長い長い黒髪が流されていた。

歳は、さすがに後ろ姿だけでは判断できない。

「不用意に舌なんか出してるからだ……そんな死にそうな暴れ方しなくても、もうそれぐらいじゃ死なないだろ、お前らは」

手元に霊装は見当たらないが、どうやら退魔師（どうぎょうしゃ）であるらしい、と新たな追加項目が蒼助に把握される。

同時に助かった、と僅かに希望が沸いた。

これで少なくとも今蹴った女に自慢のムスコを喰われることはなくなった。

蒼助にとっては、大きな前進であった。

心に僅かなゆとりが出来ると、ふと疑点に気付く。

――――――いったい、何処から現れたんだ？

周りの連中の目から見て取れる驚愕の色も、この疑点に着眼していることからだと思われる。

突然現れたこの乱入者にこの場にいる誰もが驚いているのだ。

無論、蒼助自身も例外ではない。

恐らくこの中の誰一人とこの女が現れる瞬間を目にしていないのだと蒼助は理解した。

「な、何だてめぇは」

周囲の一人が勇敢にもその場にいる全ての者達の想いを代弁した。

女はそれに答えた。

「何だって良いだろう。どうせ一夜のこの一瞬の逢瀬だ、俺が何処の誰かなんぞ知ったところで夜が明ければ何の意味もなくなる。いちいち下っ端臭い科白を律儀に言うなよ、下っ端」

そして、挑発めいた科白を口にし鼻で哂う。

怒りに我に返ったのか、臆病風に吹かれていた魔性たちは各々で殺気立ち始める。

その中でも、

「こ、このアマぁっ！　よくも……」

未だ自らの歯で舌を噛み切る羽目になった女が口元を吐き出した血で真っ黒にして髪を振り乱しながら、美しい表情を憤怒の色で険

しく醜悪にさえ見えるように変貌させて吠える。

「復活して早々よく廻る舌だな、元気で結構なことだ。……男は遠のきそうだが」

「――――っ、っ」

気が立っていたところに、女が油を注ぐ。

女魔性は理性をぶった切り、解読不可能な喚き声をあげながら女に飛びかかった。

もはや人の姿を模るだけとなった獣が己の命を狩り獲らんと向かうのにも、女は怯むどころか動じもしない。

振り上げた凶爪を備える腕が女の首を薙ぎにかかる。

「――――阿呆が」

女が呆れたように呟いた時だった。

その瞬間、一体の狩人は十数の肉塊となって空中分解した。

自分の身に起こったことに気付かなかったのか、獣の如き形相のまま肉塊の一つとなった首がボトリと地面に落ちて、転がる。

息を呑む音が一帯の空間に異様に響いた気がした。

それは己のものだったか、周囲の多くのものだったか、蒼助にはそんなことどうでもよかった。

注目し着眼すべきは別に目の前にあったのだから。

――――今、何が……。

観察の目を女に向ける。

今さっきまで手持ち無沙汰だったはずの女の手には、一刀の刃がいつの間にか握られていた。
蒼助のそれよりも遙かに長い反りのない刀。
白い月光に照らされての幻視か、刀全体が白く彩られているように見える。
その刀身の上を這い滴る黒い液体が、驚愕の事象を引き起こしたモノだという理解を蒼助に促させた。

「短気は損気と言うだろうに……――――さて」

女は刀を肩に担ぎ、

「お前らに一分間時間をやるよ――――――辞世の句を考えるには充分だろ？」

この時、女がどんな表情を添えてそう言い放ったのか。
それがわからなかったことを蒼助は悔しく思った。

◆◆◆◆◆◆

――――ドシャ。

また、一体が倒れた。
一つであった身体を〝二つ〟に分かたれて、〝者〟から〝物〟へ変わった。
一足先に同じようにされた前例となった多くのモノの中に混じる。
手足、首、腰から下がない、などとそれぞれ壊れた人形の成れの果てのように横たわっていた。

その中で、唯一残った最後の一体が、戦意を喪失して身体を震わせていた。
蒼助が討伐するはずであった標的である魔性だった。

「な、何なんだよ……一体、何なんだよお前ぇ……」

そこに蒼助を陥れた時に見せていた憎たらしい余裕に満ちた表情はない。
あるのは、子供のように泣きじゃくる見苦しい、なんとも滑稽な有様だけだ。

「――――何度も言わせるな。ただの通りすがりだ」

乱れた前髪を掻き上げていると思われる後ろ姿が、蒼助から一歩遠ざかる。
対象は自分に近づいた女を見て、ひぃ、と情けない声をあげた。

「く、来るなぁっ化物……！」
「お前……バケモンが言っちゃお終いだろ」

そりゃそーだ、と内心で蒼助は女の言葉に同意した。
最も、十を超える数の魔性をたった一人で、それも二分足らずで残る一体までに減らした女に関しては、対象の台詞を完全否定しきれるとは言えなかった。

暴殺。
繰り広げられた殺戮劇を一言で言い表すとしたらそれしかない。

「さて、お前の前の連中は一分を特攻で潰したが、お前はどうだ？最後まで後ろの方で隠れていたんだ。当然出来ているんだろうな

？」

「……た、たすけ……」

「……せめて五七五ぐらいしろよ」

女が振るった腕の動きと同時に首が宙を舞った。

多くの異形の屍が散らばる中、ただ一人立つのは黒を浴びるほど被った女。

新たに噴きかかった黒い飛沫が顔を濡らす。

「、……げ、口に入った」

渋い顔をしているであろう女は顔を手で拭うが、それも既に濡れており意味はなかった。

それに気付き、もう諦めたのか雫は伝うがままにして、倒れる蒼助の元へ歩みを進めてくる。

「――――立てるか？」

「――――」

差し伸べてくれた手すらそっちそけで蒼助は食いいるように見つめた。

それは、ようやく拝めた女の顔。

歪みのない顔の輪郭。すっと通った鼻。小さく形のいい唇。

何より目を奪われたのは女の眼差しを辿った先にある長めの前髪から覗く凛とした光を宿す眼。きりり、と目尻が吊り上がった目つきが意志の強さを主張していた。

それらが女の背後から射す月光に照らされる。

伝う流れる無粋な黒い雫ですら、その下の美貌を妖しく彩る装飾

となる。
頭の後ろで一つに結われた腰先まで伸びる艶やかな黒髪が夜風に吹かれて靡いた。
そのゆったりとした動きを追う。
女の歳は蒼助と同じか、もしくはさほど差はないくらいだと思われた。
装いはタンクトップにパーカーと酷くシンプルである上にその大部分が黒く染め上がってしまっていたが、それでも女の美しさは損なわれない。
――――地獄に仏、ってやつか……？
最悪の夜はこの美少女の登場で思いもよらない路線変更をした。
へへ、と思わず零れた笑みに女は訝しげに眉を顰める。
「何かおかしいか？」
「いやまさか……最後の最期でようやくツキが廻って来たからさ……嬉しいんだ」
「縁起でもない事を言うなよ……せっかく助けてやったのに。ほら、早く手をとれ」
急かすように近づく手が、蒼助に酷く申し訳ない気分で胸を一杯にさせた。
「わりぃ……無理。――――両手両脚の骨やられちまってんだ」
「……」
「どのみち、この傷じゃなぁ……血も流しすぎたし。あ、やべ今眼霞んだ」

可能な限り明るく無駄口を叩いてみるが、女の哀しげな顔は変わらない。
傍目で見てもわかるのだろう、と蒼助は他人事のように自分の状態を認識した。

「……ま、気ぃ落とすなよ。さっきよりマシだって、本当」
「……野垂れ死にじゃ大して変わらないだろう」
「そんなことねぇーよ……ムスコ喰われて死ぬに比べたら……ゲホッ」

渇いた喉に酸素が詰まった。
堰をするたび疼く腹部の傷の痛みに眉を歪めつつ、

「げふっ……なぁ、なんか飲み物持ってねぇ？」
「突然言われてもあるわけないだろ」
「じゃ、そこの自販機で買ってきてくれよ。俺の財布、ポケットに入ってるから……あ、俺死んだら残りはやるから」
「いるか。死人の遺したものなんぞもらっても、得した気分になんぞなれるか」
「ひ、でぇ……」
「ちゃんと買ってやるから、それまで持ちこたえ……」

女はパーカーのポケットに手を入れながら、自販機に向かおうと歩み始めかけて――止まった。
そして、唐突に、

「やっぱ、止めた」
「……はぁ？」
「持ち合わせの飲み物があった。それで我慢しろ、勿体無いから」
「あー……もー、何でもいいよ」

喉が潤せなかったばかりに未練残して成仏できず浮遊霊になるなど御免であった。
無駄な注文はなく、ただ単純に何か飲めればいい心境で蒼助は了解した。
女は蒼助の傍らで片膝を付き、ポケットから何かを取り出した。

「何だそれ……」

ポケットの中から取り出されたモノは香水瓶のようなガラス瓶。
中には、水に限りなく近い透明な液体がチャプチャプと揺れ動いていた。

「水みたいなもんだ。いいから、飲め」
「いや……ちょっとタンマ」
「何だ、早くしないと死ぬぞ」
「今それシャレになんないからヤメテ……それじゃついでに死に逝く人間の最期の願い聞いてくんね？」
「……何だ」
「……口移しがいい、っぉお！？」

発言の直後、顔の横に拳が振ってきてクレーターが出来る。

「じょ、冗談だって……だからまだ殺すなよ、な――――」

静止の言葉は不意に被さった唇に遮られた。
流れ込む無味無臭と思われる咥内で生暖かくなった液体が自分の口の中の血で鉄の味と臭いが付き、血を流し込まれているように思えた。
渇いた喉を通る液体が、その後に潤いを残していく。

「――――」

全て飲み干した後、意識は溶けるような感覚の中で、するり、と落ちていった。

◆◆◆◆◆◆

はふ、と吐息と共に女は唇を離した。

確認する男の顔が眠るように瞼を閉じており、なんとなく厭な予感を感じ念の為に脈を確かめる。

未だ不安定ではあるが、これ以上弱る気配はない。

意識がなくなったのは飲ませた『薬』の副作用なのか。

「ま、あとはコイツの生命力次第だな……」

よっこらせ、と男の身体を起こし、肩に腕をまわして背負う。

少し離れた場所に設置されたベンチまで引き摺っていく。

「くそ、重いな」

悪態をつけど、男はこちらの苦労など知らず夢の中。

それを見ていて芽生えた多少の頭から地面に落としてトドメをさしてしまいたいという気持ちを抑えつつ、ベンチにその体躯を下ろす。

「あー、疲れた……」

思ったよりも労働作業となったな、とこれまでを振り返りながら隣に腰を下ろす。
すると、男の身体が傾き、女の肩に寄りかかる形になった。

「……春だし、放置しておいても風邪はひかないよな」

抜け出すと、そのまま倒れる男を見ながら一人呟く。
ゴン、と頭あたりから聞こえた音は聴かなかったことにした。
意識のない男をしばし眺めた後、女はようやくこの場を離れることを決意。

「――――おやすみ」

素性も名も知らない、偶然が齎した一夜限りの逢瀬を交わした男に別れを告げて女は背を向けて去っていく。

眠る男。
去る女。

この時点で双方とも気付く由もなかった。

再逢が明日に待っているなど。
これがやがて己の人生を変える存在との出会いとなることを。

明日を知る術など持たない二人は今は一時の別れ路を行く。
再び交差することなど知らずに。
真実の白い月は再び偽りの紅い月に成り代わられ、男の記憶に己が姿を幻想としてを焼きつけ姿を消す。

――――――いつか、再び己の夜空に還る夜を夢見て。

［壱］　月下の邂逅（後書き）

別のサイトで置かせてもらっているのを持ってきました。途中、危ない方向に傾く事があると思いますが、なんとか表に載せられる展開に保つ事に専念します。
まずはヒーローとヒロインのレトロな運命の出逢いです。

七月三十日【追記】

改稿しました。
出会いの話が絡む回もある程度修正しましたのでご了承を。
二倍の長さになってしまいましたが（汗）

［弐］　不快の目覚め（前書き）

今は未だ夢より現を
いずれ来る瞬間を待て

［弐］　不快の目覚め

夢を見ていた。

自分が体験するようなモノではなく何かを傍観する、そんな夢。
宵の空に浮かぶ銀色の満月。
白い花が大地を埋め尽くしていた。
風に乗って舞う花弁がその奥に佇む人影の元へ誘う。
真っ白。否、花弁と共に風に弄ばれるその髪はどちらかと言えば
その人物の頭上に昇る月と同じ色だった。
闇の中で輝く銀色。
月の洗礼を受けたように煌めき、白の花と踊る。
息を呑んでしまうほどの幻想の中心にいる人影は少女だった。
後ろ姿を向けるその姿は存在感とは裏腹に酷く繊細で華奢だった。
抱きしめれば折れてしまいそうなほどに。
触れたい。顔が見たい。
ふと湧いた欲求に押され、手を伸ばす。

届くはずがないと理解っていても――――

そして、眩いまでのフラッシュが全てを白く染めて、無に還した。

◆　◆　◆

何も見えなくなった。
そこで蒼助の意識は現実に帰り、覚醒する。
フラッシュバックとともに観ていたものは全て忘却へと消えてし

まった蒼助は、何を見ていたか思い出そうしたが、記憶の引き出しを開けてもまるで見つからない。
それが大事な事だったか、それさえもよくわからない蒼助は、それを埋めるかのように一つの行動を選んだ。

「……寝るか」
「寝るな」

思わぬ一声、思わぬ痛快な一撃。
左に背を向けた途端、露になった後頭部にそれが炸裂。
サッカーボールを蹴るかのような抉るような一撃は蒼助の身体を浮かせ、蹴った方向にある障子をぶち破って廊下に蹴り飛ばされた。
ギャグ漫画のボケ役の苦労と痛みをその身をもって体験した。
しばらく、ピクリとも動けなかったが、持ち前のタフさでなんとか身体を起こし、いきなりの暴挙を繰り広げた相手をそんじょそこらのチンピラなら尻尾まいて逃亡するであろう、十代とは思えない威圧感を醸し出す鬼の形相で睨みつける。

「ふっ……何処の自殺志願者か知らねぇが、死にてぇならお望み通り……って」

胸ぐら掴み上げて相手の面を見たところでドスの利いた声は気の抜けたコーラのように締まりのないものなった。

「死なすとは穏やかじゃないな、起こしてやった相手に向かって」

やれやれ、と胸倉を掴まれながら肩を竦ませる少年。
長身の蒼助とタメを張る身長だが、涼しげな目元に宿る落ち着きが蒼助との違いを感じさせる。
短く切りそろえられた黒髪も明るい色の髪の蒼助とは相反する印

象を持たせる。
瞳には更に剛性の輝きが宿っていて、不用意に見る者をたじろがせてしまうだろう。
その眼差しを対等の立場で向かい討てる人間は蒼助を入れて数は少ない。

「あ、昶(あきら)ぁ？」

いるはずのない親友の登場に蒼助は目を丸くした。

「何でお前がこんな朝早くから俺んちにいるんだよ！鍵は！？まさか窓とか割ってねぇだろうな！？」
「それをまさに俺の家で実行したお前と一緒にするな。それに、お前の家はマンションの五階だろう」

胸ぐらを掴む手を振りほどき、やれやれと肩を竦める。

「全く、せっかく助けてやったのに礼の一言も無しか……命の恩人の胸ぐら掴んでギャーギャー騒ぎやがって」
「恩人だぁ？一体何の話をして……」
「何だ、覚えてないのか。お前、昨日の夜、公園で血だらけでベンチの横で倒れてたんだぞ」

昶の言葉で蒼助は昨晩の記憶を引っ張り出した。
渋谷に徘徊する『魔性』討伐の依頼。
交戦の中で起きたハプニング。
そして――――黒髪の女の乱入。

「血だるまもいいところだったから、本気で血の気引いたぞ。まぁ、それだけ元気なら無駄な心配したってことか」

「……なぁ、俺は一人だったのか？」
「当たり前だろう。でなきゃ、誰かがとっくに救急車呼んでお前は今頃病院だ」
「……そう、か」

イマイチ女との出会いに確信が持てず、実感が湧かない。
混濁する意識の中で見た幻だったのだろうか。
しかし、それでは自分が今こうして無事に生きている事に説明がつかない。
あの魔性を倒した人間も。
噛み合ない疑問と答えに四苦八苦している蒼助に声が舞い降りる。

「そういえば、あれだけ血まみれだったくせにお前何処も怪我してなかったぞ。どういう事だ」

傷がない？
そんなはずはない、と蒼助はシャツを捲った。
昨夜、ずっぷりいかれたはずの脇腹を確認した。

「……ない」

跡形も。まるで傷など最初からそこにはなかったように完治していた。
思考を巡らし、昨夜に起こった出来事が鮮明に思い浮かぶ。
そもそも両腕両脚を再起不能なまでに折られたはずだった。
確実に死に至る瀕死の重傷を負った、はずであった。

それが痕跡すら残さず蒼助の身から消えうせていた。
彼女と昨夜出逢った証拠となるものが。

「何だ、どうした？」
「……なんでもねぇ」

夢が現か。存在が曖昧なあの名も知らない少女の姿を思い浮かべた。
不思議なことに、瀕死の状態であったにも関わらず蒼助は女の顔をしっかり覚えていた。
自分が今まで知り合った中でも一際美人だったからだろうか。
そう考えたが、即座に違うなと否定した。
美人だけで、というならいくらでも知り合って来た。行きずりの女よりも短い時間の、それこそ刹那とも言える逢瀬をしたにすぎない相手をこんなにもはっきりと覚えている理由にはならない。
行きずりに知り合ってセックスした相手の事など行為が終われば すぐさま忘れてしまうのに何故かあの少女のことは忘れられない。
寧ろ、考えるのを止めようとすればするほど思考回路をあの女の残影が侵していく。
あの状況じゃなけりゃ携帯番号聞いてたんだけどなぁ、と後悔を募らせていた時、蒼助はふと『ある違和感』に気づいた。
その違和感の正体。それは自分が『今いる場所』に対してのもの。
先程、祀に蹴られて飛んだ際に突き破った障子。足下の木の床。
背後からカコーンと鹿威しの音が聞こえて来る池。
見回す限り、“和”のテイストの構造の『屋敷』。

あれ、おかしいぞ？確か俺んちってマンションの一室だったはず。
池もなければ、庭もねぇぞそもそもこんな長い廊下は、とぶつぶつ頭抱えて呟いている蒼助に祀が一声。

「お前の家だろう。ただし『実家』の方だが」
「やっぱりかぁぁぁっ！！」
「反応遅すぎる。起きて最初に気付くだろ、普通」

「ああそうだなぁ！　俺の目の前にいる馬鹿野郎が後頭部をサッカーボール蹴るみてぇに手加減なしでぶっ飛ばしてくれたおかげですっかり周りなんか目に入ってなかったぜおいテメェっ！！」

胸ぐら掴み、がくがく揺すり喚く蒼助。

「っ何で親父の屋敷なんかに運んだんだよ！　せめてマンションとまではいかねぇからお前んち運べよ！」

「血だらけの人間を家に連れ込めるか。夜食買いにコンビニ行った帰りにそんなもん背負って帰って来た日にはお袋が倒れる。あの人、元・一般人で血に慣れてないんだから」

もっともな意見に反論できずにいると昶がこれ以上にないと言える極上の笑顔を満面に浮かべて肩を叩いて告げた。

「お前を運んで来た時、親父さんものすごく狼狽してな。屋敷中の人間叩き起こしそうな勢いで騒いでたからな夜分に組の皆さんに迷惑かけないように手刀を首に打ち込んで黙らせたが、さっきの騒音で起きたかもしれんな」

「てめぇが蹴飛ばしたんだろうがっ！！つーか、なんだその楽しそうな笑顔は！」

「それより聞こえないか？」

「何がだよ！」

「床に響く足音が」

それは本能か、長年の直感か。急速に接近してくる壮絶な足音の持ち主の姿が脳裏を駆けていった。

バッと振り返れば、自分の名前を叫びながら騒がしく突進してくる紺色の着流し姿の初老の姿が視界に飛び込んで来た。

「そぉおおおおおおすけぇえええええええええええっつ！！！！！

！」

年相応の白髪入り混じった角切りの髪、幾本もの皺が刻まれた厳格な顔つき。それを強調させるかのように生やされた口髭。

ヤクザの親分を連想させるこの初老の男はまさにそれであり、紛れもない蒼助の父親だった。

止まらない勢いとその切羽詰った険しい表情で迫力五割増しで突進してくる様に怯んだ隙に生まれた一瞬の隙が命取りとなった。

抗う暇もなく伸びたゴツイ両手が蒼助の秀麗な顔をガッシリと掴み、固定しキスしそうなくらい厳つい顔を近づけられ、

「顔は！！　顔は無事か！？　美沙緒（みさお）さん似の顔に大事はないかぁぁっ！？」

「久々に顔合わせた息子に言う第一声がそれかこっの夫バカがぁぁっ！！むさ苦しい顔近づけんじゃねぇっ！！！」

息もつかせず特急の電車の如く勢いで箇所がズレた安否の確認をしながら整った顔を隅々まで傷は残ってないか痣はついてないかと嘗めるように見回す実の父親に対し息子は応戦するかのように罵倒し着物を襟を掴みあらん限りの力を込め、それを池に背負い投げた。

「ぐぼぁっ」

途中、うめき声と共にごきんっ、という硬いものに硬いものをぶつけたような音が聞こえたがそれはすぐに水音で被さるように掻き消えた。

それを最後まで見届ける事なく、くるりと向き直り廊下を歩き出し友に尋ねる。

「逝ったと思うか？」

「逝っちゃマズいだろ。過去に似たような光景を十回以上見た俺から観ての推測だが――――――――昼には復活する」

「だろうよ。さて、朝っぱらから誰かさんから頂戴した不満は解消できたし、暴走親父は鎮まったところでとっとと学校行くか」
「ああ、俺としては久々にお前ら親子の過激なふれあいを楽しく観戦出来たから異論はないが、池に浮かぶ頭の頂点にタンコブ生やした土佐衛門はほっといていいのか？」
ぷか～と水面に突っ伏して力なく浮かぶオヤジに目もくれず蒼助は答えた。
「後始末はウチのやつらがなんとかするからいらん気ぃ使うな。おーい、望月（もちづき）ぃ～」
呼びかけと同時に通りかかった部屋の障子が開く。
出てきたのは黒一色の背広を着たスキンヘッドにサングラスを掛けた男だ。
「お呼びですか、若」
「池にぷかぷかしてるアレをどうにしかしといてくれや。二、三時間すりゃいつもみてぇに痙攣して目ぇ覚ますから。寝かすのめんどくさけりゃ床に転がしといてもいい。頭打ってるから記憶一部抜け落ちてるかもしれないがそん時は黙っていましたがあなた実は夢遊病ですとでも言っといて俺がここに来た事は言うなよ」
「かしこまりました」
そんじゃ着替えて来るから、と寝ていた――――もといかつては蒼助の――――部屋に蒼助は引っ込んだ。

◆　◆　◆

「苦労してるな、望月さん」

いえ、と望月と呼ばれたスキンヘッドは首を振り、

「当主と若の世話は当然の務めですから」

ちらり、と二人は池で浮いているその当主を見る。

「毎回よくやるよな。親父さんもあの馬鹿も」

「父親と息子とはそういうものですよ。あれも一種のミュニケーションの取り方です。夕日を背景にキャッチボールするように」

「さっきの場合、球は親父さんで一方的に投げるだけだった気がするが」

その投げられたボールは未だ動く気配はない。

二人は暫く奇妙なものが入り込んだ庭を眺めた。

ふいに望月が口を開き、

「最近、どうですか。若は」

「何が？」

「女性関係です」

ああそっちか、と昶は思い最近の蒼助とやらを思い返す。

「相変わらずっすよ。今月ひっかけた行きずりの女の数、聞くか？」

「いえ……そうですか、変化は特にありませんか」

溜息と共に吐き出した言葉は声色から何処か残念そうだった。

サングラスで表情は読めないが。

「……アンタ、何を期待しているんだ？」
「ついこの間、当主がぼやいてましてね――――可愛くて美人の嫁と孫が欲しいと」
「……難題だな」
「ですね」

二人でもう一度池の土左衛門を見た。そのまま意味もなく見つめる。

「アイツにそういう希望は持つだけ無駄だと思うぞ」
「まだわかりませんよ。気長に待った結果、今の当主があって若という子宝があるのですから」
「父さんからたまに聞くよ。昔はあの人相当な女たらしだったんだろ？何人も妾を囲って。まんま今の蒼助だな」
「エロいところは当主譲りですから。――――当時は亡き先代も行く末を心配しておりましたが、やはり希望は棄てないで良かったと今では思っています」
「希望ってのはアイツのお袋さんだったっけな」

はい、と過ぎ去った遠いあの日を思い浮かべるように何処か遠くをサングラス越しに見つめながら望月は語る。

「今も鮮明に思い出せます。御友人の妹であった美沙緒様と当主が出会った日を。一目惚れなされた当主が結婚を申し込んだ返事代わりに脚払いをかけ見事な背負い投げで先程の若のように池に投げ込んだ瞬間。あれを運命的な出会いと言わずになんというのですかね」
「……父さん曰く“奴がマゾの気質に開花した日”だとか」

昶の言葉を無視して続ける。

「若にもそんな出会いがあることを望みます。どうも当主といい若といい普通の女性では物足りないようですから」
「どんな女なら満足できると思うんだ？」
「そうですね……あの方が言うには女は骨、だとか」
「……骨？」
「骨のある女、という意味らしいですよ」

そこで話は打ち切りになった。
背後の障子が開いたからだ。
出て来た蒼助は昶がマンションから持って来た学ランに着替え鞄を抱えていた。

「よぉ、待たしたな……って、何話してたんだ？」
「いえ何も。もう、お行かれるのですか？まだ時間があると思うのですが」
「進級早々、遅刻するといろいろうるせぇからな……それとちょっと寄りたいところあってよ。行こうぜ、昶」

それに応じて昶は先を歩いていく蒼助の後に続く。
望月を横を通り過ぎる際、

「骨がある女、見つかったら報告するよ」
「よろしくお願いします」
「俺もそんな女がいれば、アイツの面倒全部押し付けられるからな」

お互い微笑を浮かべ合い、一人は見送り、一人はそれを背に進む。

［弐］　不快の目覚め（後書き）

お久しぶりのところ突然ですが、改稿開始です。
話とキャラが（特にヒロイン）なんだか自分が設定していたものとは違う方向に走り出したのと納得が行かなくなってきたことが原因。
現在、六話まで書き直し済みなのでそこまでアップします。
ご迷惑掛けます。

［参］　運命の女神（前書き）

突然すぎる？
出会いと再会なんて昔からそういうものだろう

［参］　運命の女神

人とそうでない者。
どちらが先に生まれたか、存在したか。もはや、絶対と言える証明はなかった。この世界を自分たちのモノと主張できる証拠は何一つ。
故に彼等は証明を作ろうとした。
戦いという、互いの存在を賭けた証明を。
最初のぶつかり合いがいつだったか。どんなものだったか。どちらが勝ったのか。それを知る者はいない。故に過去を知る術はなかった。
ただ、わかるのは決着がつかなかったからこそ、今も戦い続けているということ。
その歴戦が記録されるよりも遙か昔から続いていた人の《退魔（たいま）》とそれ為らざる《魔（ま）》のお互いの存在の相違とその領域（テリトリー）の保持に固執する争いは長い長い歴史を刻んだ。
やがて、時の流れと共に進む《退魔概念（たいまがいねん）》の弱化の影響により《退魔》と《魔》の両サイドの力が衰えを見せ、時代の変革が起こるたびに変わる文化の進展に合わせて両者は歴史の表舞台から姿を消した。
《魔》は伝承へ、《退魔》は歴史の裏に姿を隠して。
闘争もかつてのように『勢力が戦う』大戦ではなく、平和の影で人知れず『個が闘う』という、そんな形に。

◆　◆　◆

そうなった現在（いま）も彼等は闘い続けていた。
まるでそれが世界のバランスをとっているかのように。

気忙しい桜の花弁が仲間の許を離れ、東京の空を漂う。
四月の風はそれを大空へと舞い上げるほど強くもなく、かといってその儚い旅路を中断させてしまうほど弱くもなく、ただひらり、ひらり、と気紛れに運ぶだけだ
桜咲き誇る渋谷区神宮前宮下公園。
昨夜、ここで魔性と交戦し殺されかけ、あの女と出会い助けられた。
早朝のためか、鳥がチュンチュン鳴きベンチで寝ているホームレス以外は人の気配のない公園を後ろに昶を伴って蒼助は歩いていた。
植えられた何本もの桜の木は期を満たし、満開に咲き誇っていた。
そして、見つける。
戦いの『痕(きずあと)』が残された場所を。
「おお～、残ってる残ってる」
止まった足のその下の地面はどす黒く、ほんのり赤が滲んだ痕があった。
蒼助が負傷した際にぶちまけた血だ。
しゃがんでそれを眺めている蒼助を見下ろし、口を開いた。
「一体何しに来たんだ？わざわざ登校前に……昨日、何か失くしたのか？」
「ああ。大事なもんだ」
「何だ、それは」
「俺の血。昨日派手にぶちまけたんだよなぁ、こんなになっちまったら持って帰れねぇちくしょうごばぁっ」
衝動的に蒼助の脳天に真っ直ぐ踵を振り下ろした昶は半ば据わった目で、
「そんなくだらない冗談の為に俺に朝練サボらせて付き合わせたってなら、蹴るぞ」
「も、もう蹴ってる……」
痛さが徐々に熱さに変わり始める頭を押さえ、蒼助は呻いた。
そして、内心落胆した。

本音を言うときちんとした理由はあった。
それこそ、本気で蹴り倒されそうだから口にはしないが。
また来ると、会えるのでは、と思ったのだ。彼女に。
心の隅で会いたいという気持ちに酷く驚く自分を無視して、蒼助は出会った場所へと足を運んだのだ。
淡い期待は見事打ち砕かれたけれど。
「……あー、ヤメタヤメタっ」
突然、やけになったような様子で立ち上がる蒼助に昶は目を瞬く。
「……蒼助？」
「悪かったな、昶。大事な朝練サボらせて俺の我が侭に付き合わせて……用は済んだ、行こうぜ」
「何なんだ、一体……」
「ちょっと血迷ってただけだ」
所詮、偶然の巡り合わせだ、と蒼助は未練を断ち切るように赤黒い染みを踏みにじりその場を去ろうと決める。
その一歩を踏み出そうとした時だ。
「何恥ずかしがってんだよ、ニィちゃん。若いうちは素直になった方がいいぜぇ～？欲望にも、気持ちにもよぉ」
と、聞こえて来たのは視界から外れたベンチの上から。
寝ていたと思っていたホームレスの男からだった。
蒼助と昶は揃ってその男の方を振り返った。
ふぁ、と欠伸をする男は一言で言い表せば『やぼったい』だった。
見たところ中年くらいの男はボサボサの短髪とこれまた伸びた無精髭にくたびれたベージュのロングコートを着ていた。その中で唯一汚れていないのはサングラスぐらいだ。
本当にそうかは知らないが、どっからどう見てもホームレスにしか見えないオッサンだ。それが二人の印象だった。
どっこらせ、と身体を起こしたその男はサングラスを上げて目脂を擦り取りながら、
「にしても、ご苦労なこったなぁ……そんなに焦んなくても、また

会えるのに。まぁ、我慢出来ねぇってのも若さの特徴か」
「何だてめぇは……喧嘩売ってんのか、オッサン」
眉間による皺と共に細まる双眸で蒼助は男を鋭く見た。
こっちはただでさえこのワケのわからない感情や肩透かしを食らったように翻弄されて、気が立っているのだ。
暇を持て余してちょっかいをかけて来ているだけだとわかっていても、些細なそれが苛立ちを荒立てる。
それを察したのは一早く沸き立ち始めた殺気を感じとった昶。
まずい、とキレると燃え尽きるまで収まりが付かない親友が行動に出る前に抑えようと思うが、その気遣いをヨソに男は続ける。
「そんな命知らずな事しねぇよ。こっちはただの親切心で言ってるだけさ」
「おい、それぐらいにしておけ。冗談半分でからかうと今のコイツにはシャレにならないぞ」
しかし、男は昶の言葉を無下にし、煽りをかけるように言った。
「アンタが動かなくても、向こうから来る。会いに来るというわけじゃないが、会えるさ……いずれな」
「……何を根拠に馬鹿言ってるかは知らねぇが、何処で昨日の夜の事を知った？　出歯亀でもしてたか？」
「いんや、昨夜は新宿の方でパチンコやってた。ただ、教えてもらったのさ。昨日の夜の事も、今言った事も」
誰に、と問う。
すると男は晴天を仰ぎ、
「――――――“星”に、さ」
苛立ちは頂点に達した。
そして、動いた。ただし、男の方にではなく全く逆の、寧ろ男から遠ざかる方向に。
「ん？　何だ、行くのかい？」
「ああ、電波ホームレスには付き合いきれねぇし消費する体力が勿体ねぇからな」

きっと昨日のアレを何処か近くで見ていたのだろう。
電波とはいえ一般人を巻き込んでしまったことや仕事を見られたことへの反省は苛立つ意識の外へと追いやられていた。
今は一刻も早くこの場を去りたかった。
背を向けて遠のいていく蒼助と昶を無視されるとわかっていても男は一声かけた。
「まぁ、見てな。必ず、また現れる。あれはお前さんの――――――運命の女神だからな」
勝手に言ってろ。
トゲトゲした心情を抱え、蒼助はその場を後にした。

◆　◆　◆

遠くなっていく二人の青年をこれ以上引き止めようとはせず、ただ見送る男はサングラスを指先で少し下ろし、裸眼でその姿を確認する。
「……あっちは玖珂ので……隣のは早乙女の、か」
こちらの言葉に何を苛立っているのか、過度なまでに食いついてきた薄い茶髪の青年は不気味なまでに気の短い性格も外見も“あのおっかない女”に瓜二つ。記憶にあるあの女の男版と言っても過言ではない（と言ってもアレ自体とても女と呼べるものではないが）。
追加事項のエロそうなところは親父譲りなようだが。
もう一人は生真面目な性格もフォローに回るところも親父にそっくりだ。
世代を越えて、“親と同じように”相棒の関係を築いているところは微笑ましい。
「そんで……昨日ここで、あの玖珂のガキが出会ったのが《あの人》の……」
《星》から話は聞いたものの姿は未だ見ていない存在。
確か、娘だと《あの人》は言っていた。

どんな風に育っているか非常に気になるところだ。
出来るなら今朝出会う相手をむさ苦しい男二人組みではなくそっちにして欲しかったものだ、と巡り合わせを考えた天を恨む。
だが、《あの人》の子供だ。相当上物に違いない、と男はまだ見ぬ少女へ多大な期待を寄せた。
「さて、と」
男はベンチから腰を上げて、コートについた無数の淡紅の花弁を払い落とす。
用は済んだ。とりあえず、朝五時からここでスタンバイしていた苦労は報われた。
パチンコ屋が開くまで何処かそこらをぷらぷらしていよう、とこの後の予定を立てたところで男はもう姿は見えなくなった先程の二人が歩いて行った方向を見た。
「さぁて……どう動くのやら」
それは誰へ向けた言葉なのか、ただそれだけ言い残し男は二人が去った逆の方向へと歩いて行った。
無人となった公園で、桜は尚も薄紅を降り積もらせていた。

◆　◆　◆

二年D組の教室は一ヶ月ぶりの喧騒に充ちていた。
春休みの間に起こった出来事をそれぞれ速射砲のように語り合う姿が教室のあちこちで見られる。
進級する、というのは、ただ年を重ねるのではない、薄皮を一枚脱ぎ捨てる行為に似ていて何処かくすぐったい気持ちをを揺り起こす行事であり、その感情に対する照れと戸惑いが彼らの声をとめどなく賑やかにしていくのだ。放っておけば一日中続いていそうなざわめきの中、蒼助は壁に背を凭れさせながら昶とそれを冷めた目で眺めていた。
「せっかくクラス替えしたってのにほとんど面子変わってねぇな。

どいつもこいつも一年の時さんざん見た顔じゃねぇか」
「このクラスは問題児が多いからな。ヘタに分散させると他の連中まで感化させると踏んであえて一塊にしたんだろう。それを束ねる“綱”も今年もご一緒だ」
「げっ、氷室の野郎もいるのかよ……と、なると、引っ付いてる朝倉も、か……それとあとは……」
記憶に探りを入れていると二人の間に割り込む人間がいた。
「なんや、今年もあんたらと一緒かいな」
蒼助と昶の姿を見るなり歩み寄ってくる女子生徒。
長めに切り揃えられた明るいブラウンのショートカットにそれの似合う元気と明るさを放つ顔立ち。弾むような関西弁を操る少女の口調と総合すれば天真爛漫の一言だ。
女子生徒の方を見るなり蒼助は視線を下げてある一点に集中させながら言った。
「そのとても女子高生の平均に達しているとは思えねぇ薄い胸は……七海か」
「何処を見て言っとんねんっ！！胸の事はほっとけぇ！これでも春休みの間に成長したんやからな！」
「せいぜい、ＡＡカップからＡカップだろ。大差ねぇな……ま、俺の守備範囲はＢからだから関係ねぇけど」
「……くぬぅっ……言いたい放題抜かしくさって……っっ」
実際当たっている為、それ以上言い返せない七海はぎりぎりと歯噛みし涙目で勝ち誇った笑みを浮かべる女の敵を睨む。
余計な喧嘩の種を蒔いてくれる馬鹿の頭部の側面にチョップを叩き込む片手間に、昶はもう一人の怒りでぷるぷる震えているクラスメイトを宥めすかす。
「落ち着け、都築（つづき）。いちいちこの馬鹿の挑発に乗ってると神経焼き切れるぞ」
「わかっとる……わかったとるけどなぁ」
やりきれぬ怒りを拳に乗せて誰のとも知れない机に叩き付ける七

海。
その背をポンポンと叩く昶。
二人は共通の相手（蒼助）を通して性別を越え固い友情を築いた仲だった。
春真っ盛りの時期に似つかわしくなくやや廃れた眼差しで七海は同志に訴えた。
「今年こそ耐えかねてあのアホを殺ってしまいそうな気がして気が気じゃないんやぁ……どないしょ、早乙女ぇ」
「早まるな。良い発散方法教えてやるから。我慢我慢我慢ツッコミ我慢だ。ある程度ゲージが溜まってきたら、限界超える前にぶちかませ。俺と違ってまだ日が浅いお前には適法だ。なに、あれは伴侶にで出会うとマゾに目覚める家系だ。覚醒前とはいえ行き過ぎたツッコミくらいには十分耐えられる」
「おい！　人んちの家系に妙なオプションつけんじゃねぇ！」
しばし、蚊帳の外に置かれていた蒼助が聞き捨てならない方向に話しが言ったところに割り込んだ時だった。
「――――――ちょっと、みんな聞いて聞いて！　特報（スクープ）、特報っ！」
シルバーフレームの眼鏡が若干鼻の頭からズり落ちている長い三つ編みをふりふり揺れ動かす女子生徒の只ならない様子に教室内の人間はそれぞれの会話に一時終止を打ち、彼女の話に耳を傾けた。
女子生徒は走ってきたのかすっかり上がった呼吸をある程度整え、堰を切ったように口を開いた。
「さっき廊下で会ったんだけどっ……今日、このクラスに転校生来るんですって！」
言葉に教室が静寂に還った。
そして、
「なにぃっ！？」
それを破っていきり立ったのは蒼助と昶、渚を除いた男子諸君。
僅かなズレもない見事な同調（シンクロ）による合唱だった。
女子生徒は更に一言追加。

「しかも、女の子」
教室が歓声に溢れかえった。
隣の肩を抱いて、滝のような涙を流す輩まで出だす始末だ。
倍にうるさくなった周囲に耳鳴りを覚えつつ、それを招いた人物を目に蒼助は顔を顰めた。
「げっ、お前もこのクラスかよ久留美（くるみ）……」
蒼助はこの新條久留美（しんじょうくるみ）という女が大の苦手だった。
新聞部に所属するこの女は、根っからの記者根性（ジャーナリズム）の持ち主で記事のネタの為になら手段を選ばない節がある。何処から仕入れるのか、盗聴器、ピッキング用具など犯罪紛いな道具も平気で駆使して、エサの匂いを嗅ぎ付けてくる。
そんな彼女の犠牲者になった人間は教師生徒関係なく数多い。蒼助自身も、一年の時に五股かけているを嗅ぎ付けられ、記事にされて多大な被害を被った痛い経験がある。
そんな曰くがあり、久留美は《秘密殺し（プライベートキラー）》と恐れられている。
あからさまにうんざりな表情をする蒼助に、ふふんとレンズの奥の吊り目がちなそれをにんまり細める。
「今年もよろしくぅ、ネタの水源くん。今度は去年の五股記録更新を目指して七股くらいを目指して見ない？」
「おう、したるわ。――――てめぇの眼鏡の視界範囲に収まらないところでな」
バチバチと火花を散らし始める二人にもどかしさを感じた七海は収集を治めて、滞っている話を進める。
「アホがアホやってんな。それよりどうなんや、その転校生」
「まー、そんな急かさないでって。さっき、恭ちゃんと一緒にいるところ遭遇しただけだから詳しくは説明出来ないけど――――これだけは言えるわ」
突如入った間に周囲に妙な緊張感が張り詰め、ゴクリと息を呑む音まで聞こえた。
長ぇよ、とツッコミを入れたくなるくらいの沈黙を経て、月守学

園のブラックリストＮｏ．３にして学校一の情報源がようやくその重い口を開いた。

「――――――美少女よ。しかも頭に超が付く」

二年Ｄ組の男どもが歓喜の雄叫びを上げた。

しょーもない彼女なしの男子達に哀れみとも呆れともとれる視線を送っていた七海が眉を顰めながら呟いた。

「アホか、あの連中。相手してくれる可能性が出来たわけもあらへんのによぉあーもはしゃげるなぁ」

「希望はゼロってわけじゃないんじゃない？　……オタクと美女のラブストーリーっての何かの映画で見たことあるし。世の中何処で誰がどんな縁で繋がってるかわからないもんだしね～」

縁があったら。

よく見知らぬ相手と主人公が翌日転校生として再会するというベタな展開あるよな、と思い浮かべたところでハッと我に返る。

何を考えてた俺っ、と思考に取り巻く思想を振り払う。

きっぱり諦めたはずだったのに、未だに未練を捨てきれずあまりにもご都合主義な期待を抱いている自分が情けなくなった。

「どうした、蒼助。苦虫噛み潰したみたいな顔して」

「……何でもねぇよ」

昶の声に素っ気無く返事を返す心の内で、会いたい会いたいと、自分はあの女にもう一度会って何がしたいのだろうか、と蒼助がその内で渦巻く望みに疑問を持った時。

ついさっき、久留美が入ってきた前のドアが再び開いた。

「席つけー、ガキどもー」

ガラガラと、教室の教卓近くのドアを開けて入ってきたのは若い男の教師だった。

肩につくかの長い髪はゴムで後ろに束ねられ、整った顔に乗せられた涼しげな双眸には滲み出ていて見る者に好意的な印象を与える。

ただし、服装は教師側の人間としてはいただけないものだった。

背広とネクタイはなく、黒のワイシャツと。しかもワイシャツは

第二ボタンまで外されていてやや胸元が肌蹴ていて健康的な色をした肌が見え隠れしていた。

教師としてはやや羽目を外し過ぎている格好だが、彼は一年D組を受け持っていたれっきとした教師で、名を蔵間恭一（くらまきょういち）と言った。

頭の堅い中年教師の教員の多い中で数少ない若い教師であり、教師らしからぬ服装と態度を生意気に思われ教員一同からは疎遠されているが、逆に生徒からは柔軟な姿勢と気さくな親しみやすい性格を好意的にとられ『恭ちゃん』の愛称で男女問わず人気の高い教師なのである。

そして、同時にこの曲者揃いのクラス一同をまとめあげていた強者でもあった。

担任も変わるはずの初日に入って来た前担任のその人に共通の疑問を唱えた生徒達の中でその一人がそれを口にした。

「あれ、何で恭ちゃん？」

「今年もお前らの面倒押し付けられたんだよ。どいつもこいつもすげぇ嫌がりようだったぜ？」

その理由は誰も問わなかった。

何が原因かはそれである自分たちがよくわかっていた。

この様子では卒業までこのメンバーで過ごす事になりそうだと誰もがなんとなく察した。

そんな皆の未来予想図を掻き消すように忘れかけていた転校生の事を投げかけた。

「恭ちゃん、転校生はー？」

「お、お前ら俺に対する歓迎の言葉は二の次かよ！」

その言葉に一同は顔を見合わせ、

「ようこそ二年D組へ――――――で、転校生は？」

「……もういい。――――入って来い」

これ以上あらぬ方向に興味が行っている生徒達に何を言っても無駄と判断したのか、口元を引きつらせつつ、まだ廊下に待機させているであろうD組の新たな仲間となる人物を招く仕草をした。

一度、蔵間の手で閉められた扉が再び開くと同時に、おおっ、と歓声があがる。

しかし、蒼助の反応だけは周りとは異なる様子となった。

「……――――――――っ！？？」

ドアの向こうから現れた人物の姿に蒼助はぐ、と息を詰まらせた。

喉から飛び出しそうになった叫びを無理やり押さえつける。

何で、と内側で何度も反映する問いかけ。

同時に、朝のあのホームレスの台詞が脳裏を駆け巡る。

――――――――にしても、ご苦労なこったなぁ……そんなに焦んなくても、また会えるのに。

――――――――アンタが動かなくても、向こうから来る。

――――――――会いに来るというわけじゃないが、会えるさ……いずれな。

――――――――まぁ、見てな。

――――――――必ず、また現れる。

――――――――あれはお前さんの――――――――

『ウンメイノメガミダカラナ』

教室に入ってきた少女は、驚愕の沼にどっぷり嵌まって抜けられなくなって蒼助のことなど知る由もなく蔵間の横に立つ。

窓から差し込む春の暖かな陽射しを受け、ほのかに輝いてさえ見える白磁の肌に解いたら腰まで届くのだろう、豊かで艶やかな黒髪を結い上げられ、動くたびにゆらゆらと揺蕩(たゆた)う。

そして、凛々しく曲線を描いた眉目はこれも当然漆黒で、特に瞳は凛とした輝きに満ちていた。

見る者を美しいと感じさせるのは単に顔立ちだけではない。真っ直ぐに伸びた背中や一つ一つが凛とした仕種も含まれているからこそ見る者を魅了する。

それにしても彼女の放つ神々しさにも似た眩しさは只事ではなく、教室の中で一人浮いているというか、酷く場違いな雰囲気でさえあった。

ざわめきを止まらない中、蔵間が視線で一撫ですると生徒達は不承不承口を閉ざしていく。

完全に静寂が訪れる寸前、役目を思い出した日直の威勢の良い声が響き渡った。

「きりーつ！」

その声に弾かれたかのように皆立ち上がり、蔵間と挨拶を交わす。

逞しさを感じさせる微笑でそれに応えた蔵間は、早速皆の興味を独占している人物について説明を始めた。

「あー、もう皆、そこのこの俺を進学早々記事のネタにしようとしやがった新條から聞かされたと思うが、今日からこの月守学園で一緒に勉強することになった転校生を紹介する。名前は……そうだな、お前の名前はちと読める奴は少ねぇだろうから黒板に書いてくれないか」

無言のまま頷いた少女はチョークを手に取り、淀みなく黒板に書き記す。

書かれた名前は漢字自体は難しくないが蔵間が言う通り一筋縄ではいかない読み方をするようで、「何て読むの？」というヒソヒソ声が教室の何ヶ所かで起こった。

名乗った方が早いと判断したのか、少女は閉ざしていた口を開き、誰の心にも響き渡る澄んだよく通る声で名乗ったのだった。

「終夜千夜です――――――よろしく」

［四］　猟奇的な彼女（前書き）

馬鹿につける薬はないと言えば
いやあるぞ、と言って彼女は拳を振りかぶる

［四］　猟奇的な彼女

確かに会いたいと思った。
それは認めよう。
だが、こんな形でまた会うことになると誰が想像しただろうか。
「……」
さっきから蒼助の視点を独り占めしている存在、終夜千夜はここから後ろの方の席で七海と話しこんでいた。
何かとお節介焼きの七海のことだ。隣の席のよしみで新参者にいろいろ教えてやっていたのだろうが、すっかり打ち解けている。
全く、人生何が起こるかわからないとは当にこの事だ、とつくづく思い知らされた。あれきりで終わると諦めていた矢先にこれだ。
だが、どうする、と蒼助は思う。再会できたはいいが、どうやって接触するか。それが蒼助を悩ませていた。
紹介の後、千夜は自分の指名された席に向かう途中、蒼助の席の通り過ぎる際にこちらをちらりと一瞥したがそれだけだった。
らしくもなく多大なショックを受けた蒼助はひょっとしてひょっとすると千夜は自分の事を覚えていないのではと考えた。通りすがりの相手などほとんど覚えている筈がないと考えるのは行きずりの女の事もすぐに忘れる自分の常識からだった。
そんな相手に「よぉ、昨日はどうもな」と言っても話にならない。
そもそもこっちが覚えているのにどうしてそっちが覚えていないんだ理不尽だろ、とどっちが理不尽何だかわからない事で悶々イライラし始めていた時、
「そ・う・す・け・くん」
「――――――っ！！」
背後から耳に息を吹きかけられ、蒼助は椅子から転倒した。
「うわ、お約束だね」
「気色悪いことするんじゃねぇっ！」

あはは、と笑うのは一人の女子生徒。
くっきりとした黒眉を八の字にしてごめんごめんと全然申し訳なさそうに感じれなく謝る。
カチューシャを取り付けた長い黒髪を胸元にさらさらと流すその様を見て、蒼助は呆れ返った。
「お前……二年になってもそれかよ」
「いーじゃん。似合ってるでしょ？　自分で言うのもなんだけどこれが男だとは誰も思うまい、ふっふっふ」
「何でお前が月守の生徒会の副会長に選ばれたんだろうな……」
蒼助のぼやきを無視して渚は、
「それより、俺の気配に気付きないほどなぁにを熱心に見つめてたの？」
とついさっきまで蒼助の視線が向いていた先を追う。
辿り着きにんまりと眼を細め、
「はは～ん、今朝から注目の的の美少女だねぇ？　同級生と下級生には興味無しの蒼助くんもさすがにあれはそんな枠を取り払って食指が動くのかな？」
「何言って……」
「あ、七海ちゃんもいる。いいなぁ～、七海ちゃんにあんなに積極的に話しかけてもらえるなんて……俺なんて抱きついたら間髪無しで切れの良いストレートかまされるのに。何で？」
「己の行動の危うさを理解しとらんのか、てめぇは。で、わざわざ俺をおちょくりに来たってなら丸めて棄てるぞ」
「人を飛んで来た紙飛行機みたいに扱おうとしないでよ」
右肩に手を置き、耳元に顔を近付けそっと囁く。
「マサが呼んでる――――――依頼した仕事について話があるって」

◆　◆　◆

「ぬぁんだとってめぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっっっっ！

！！！」

生徒達の安らぎで一時の昼休み、生徒会室から地の底から響くが如くの怒号が校舎内に轟いた。

その張本人がそこから不機嫌を絵で描いた様子で出て来たのはそれから僅か一分後だった。

◆　◆　◆

蒼助は隣に渚を連れ立って人通りの少ない第一校舎三階の廊下を苛立たしげな様子で歩いていた。

「ふざけやがって……報酬払わねぇわ、人のプライバシーを蔑ろにするわ……何処まで外道でいやがるあの陰険眼鏡っ」

陰険眼鏡こと『氷室雅明』。

渚を使いに来させ蒼助を呼びつけた相手であり、仕事を依頼して来た依頼人でもある男のこと。そして、蒼助を不機嫌不快の真っただ中に落とした張本人である。

生徒会室に呼ばれた蒼助を待っていたのは、「報酬は払えない」という氷室の宣告だった。当然、その理不尽な申し出に異議を唱えた蒼助。

しかし、反論は通じず逆に、

『ああ、そうだな。しっかり根っこから潰してくれている。おかげで残党もいなくて処理に手を回す手間も省ける。お前にしてはよくやってくれたと報酬も依頼時に言った額よりも上げようと考えた。――――だが、それもその所業がお前の手によるものだったらの話だ』

何故それを、と脂汗流しながら問えば、

『私が何も知らないと思っていたか、馬鹿が。この際だから明かす

が、仕事中のお前は志式神を通してその仕事ぶりしっかり自宅で拝見させてもらっている。――――何か言いたいことがあるなら、聞いてやる。無いなら、とっとと出て行け。おい、渚その不埒者を送って行ってやれ』

おまけに、

『ああ、そうだ。玖珂、一つ言い忘れていた。お前を助けた見知らぬ御仁にまた会う事があればこう言っておいてくれないか？　珍しいものが見れました、心よりお礼を申し上げる、と』

そう言って向けられた嫌味たっぷりの極上に不敵な笑顔を思い出し、蒼助の一度キレてキレやすくなっていた琴線が再びキレた。

「いつかぶっ殺す……絶対に」

「あのねぇ～……どーでもいいんだけど、“いつか”は永遠に来ない事を示してるって知ってる？」

無視して、それにしても、と蒼助は渚を横目に、

「それにしても、お前……よくあんなのと幼馴染やってられるよな」

「何を隠そう御年十年目でぇす」

渚の「朝倉」と氷室の「安倍」は家同士が古くから仲が良く、一族総出の付き合いがある。

それぞれ家の暦を解けば、過去に何度か婚姻を交わした記録すらある。

尤な話、関係が良好なのも婚姻を結ぶのも時代が進むにつれて薄くなりつつある一族の血と力を高い霊力を誇る両家の人間を惹き合わせる事で保たせる為でもあり、いざという時の強力なパイプラインを作っておく為というのが、根底の動機だろう。

過去にあったという両家の婚姻が政略結婚か、それとも相思相愛だったのか真実は過ぎ去った時の中に埋もれてしまったが、渚と氷室も元はそういった経緯で知り合ったのだ。

二人の間に一族の薄汚れた思惑が入り込んでいるか、は部外者である蒼助には知る術がないが、渚のこの様子を見る限りこっちにはそういったものを抱いているようには見えない。雅明の方は知らないが。

「ま、今回のことは諦めてよ。仕事しくじった君も悪いんだし」

「……っくそ、次の仕事まで収入なしか。折れてやるから早いとこ別の仕事寄越せよ？　じゃねーと相当切り詰めねぇと今月はやべぇんだからな……」

「はいはい。とりあえず、今日の昼は哀れな子羊に仏心で俺が特別に奢ってあげるから元気出してよ」

その言葉に、今しがたまで背中にどんより雲を背負っていた蒼助はそれを吹き飛ばす勢いでシャキンと覇気を取り戻す。

「マジかっ？　よっしゃ、そうとなったら夕飯の分まで食い貯めるぞ！　おら、行くぞ渚っ」

「え〝っ、ちょっと人のお金でどんだけ食い散らかす気で……ああああ――――っっ！」

叫び声をあげる渚の襟首を引っ掴んで、蒼助は食堂まで一気に疾走した。

さすが昼時と言うべきかそもそもこの時間のために作られた場所なのだが、食堂は生徒で溢れかえっていた。

出入りする生徒と行き違いになりながら蒼助と渚は食堂に入り込む。

「さぁて、何にすっかなぁ～。いいよなぁ、奢りって。財布と相談する必要ねぇから」

「俺はかぁなり深刻な会議をこれからマイポケットマネーとするところなんだけど……」

どんより気味の渚の重い調子の台詞を尻目に蒼助の頭は昼のメニューで埋め尽くされていた。

「やっぱ腹に貯まるもんだよな。ここはどかんとボリュームのあるもんで行くか。おばちゃん、カツ丼と天丼両方特盛……」

注文を申し付けようとした時。
後ろの方で上がる怒声、悲鳴。聞いただけ穏やかではない様子が充分伝わってきた。
渚と二人で蒼助は何事か、と振り返った。
離れたその先には、見覚えのある顔があった。
椅子から転倒した久留美。彼女と別の存在を交互に険しい表情を浮べる七海。
そして、終夜千夜。
彼女の視線の先には何人かの連れを率いた男がいた。
隣の渚に耳打ちする。
「誰だ、あのフライパンでぶん殴られた面した蛙」
「容赦ないイイ比喩だね。神崎陵だよ。うちの悪い連中の頭やってる、不良。入学以来、暴力沙汰は何度も起こしてる。女性暴行、喧嘩……血気盛んでしょ」
「何で退学になんねぇの？」
「家がね、極道なんだよ。評判と力は雲泥の差だけど君んちと同じね。曲がりなりにもある親の権力って奴？」
なるほど、とそれだけ聞いて不細工面のたった今認識したクラスメイトの大体の詳細を把握する。
典型的なクズだ。
暴力と権力しか重視しない仁義の欠片も持たない連中に囲まれ、甘やかされて育ち、親の権力の後ろ盾があるのを良い事におこぼれ目当てで近づいて来た雑魚を引き連れて好き放題。
世の中が自分を中心に回っていて、思うがままだと全てを舐め腐っているバータレだ。
この手の自分が最強と気取る奴は蒼助は人権を許さない程大嫌いだ。
「どっかの誰かさんが踏み外してたらああなってたんじゃないかぁ」
「そうなっても合意で女とやれねぇような両生類面にはならねぇよ」

着眼点違くない？と言う渚を言葉を無視して、首だけ後ろを振り返り、

「おばちゃん、注文変更。きつねうどんちょーだい――――――――あっつくしてな」

はいよ、と食堂勤め二十三年の為せる技なのか頼んで一分もしないうちに寄越された。

ほこほこ湯気立ち上る丼をトレイに乗せる蒼助に渚が首を傾げ、

「それどうするの？」

「まぁ、見てろ」

その場に渚を置いて、蒼助はツカツカと千夜を相手に傲慢な態度で話しかけている神崎の背中に歩み寄っていく。目の前の獲物を前にして夢中なのか沸き立った周囲のざわめきにも気付かないようだ。この程度の接近にも気付かないようじゃ、この男の強さもお里が知れている。

徹底的に無視している千夜に強引に躙り寄る神崎のその態度が何故か妙に癇に障る。

「っこの俺が話しかけてやってんだ、何とか言いやがれ！」

煮え切らない状態に痺れを切らしたのか、長く流れるような黒い髪を一房掴み自分に注意を向けようとする。

その行動が蒼助の理性の琴線に触れた。

衝動に駆られ、当初のぶつかって汁をひっかける予定を急遽変更し、

――――――――丼を引っ掴んで熱々のそれを神崎に頭からぶっかけてやった。

一瞬、静まる空間。

その沈黙を破ったのは、

「っうぼぉおぁぁぁっ！！？」

イボ猪の鳴き声とは行かないが、いい感じに絶叫してくれる神崎に満足し一先ず蒼助の琴線は揺れ止む。

それにしても激しいリアクションだ。７０℃超えの先程までぐつ

ぐつ沸騰していた液体を頭から顔の表面と肩にかけて浴びたのだから、無理も無いが。

驚いたように蒼助を見上げる千夜。それをちらりと一瞥し、すぐに我に返りつっかかってくる舎弟達に視線を向ける。

「てめぇっ」

「神崎さんに何て事してやがる」

ピーピー五月蝿く冴えずる連中を退けて、とりあえず怒りで復活を果たした神崎がそれらを押し退けて唸って来る。

「……てめぇ、玖珂蒼助か」

顔が赤いの怒りか、火傷のせいか。

初めてのこちらに対し認識のある様子で険しい顔をして蒼助を睨んで来る。

「悪い悪い、熱かったもんだから手が滑っちまった……で、俺の事知ってるみたいだけど、おたく誰？」

「んだとっ、ふざけてんのか！？」

「いやマジで知らねぇってお前みたいな蛙面」

人間離れした顔が真っ赤になる。

蛙も茹でたらタコのみたいに真っ赤になるのだろうか、と考えながら七海と久留美を見て、

「お前ら、何やってんだ。蛙と愉快なその仲間達と乱交パーティーか？」

「なわけあるかいっ！　昼飯食べてたらそこの蛙が終夜さんにちょっかい掛けて来たんや」

「鬱陶しいから、追い払おうとしたのよ。そしたら……」

それで止めようとした久留美を邪魔だと突き飛ばしたというわけ、だろう。

状況は呑み込めた。

再び、神崎に視線を戻すとさっきから蛙蛙と連呼されていたせいか、額に青筋が浮かんでいる。

「へぇ、うちの噂の転校生狙いだったのか、アンタ。無理し過ぎじ

やねぇ？」

「うるせぇっ！　中学の時から何一つ変わってねぇな……そのふざけた口先も、いけ好かねぇ面構えも」

「僻むなよ、不細工。それより、中学ん時にお前と知り合いになった記憶はねぇんだけど」

「……なにぃっ！　てめぇ、この俺にあれだけの屈辱を味あわせておいて……」

歯ぎしりする程、何をされたのだろう。

記憶を巡らしてみた蒼助だが、中学時代というとほとんど喧嘩と女の記憶しか無い。

数いるボロ切れにした連中の一人らしいが、生憎ながら個人として覚えてはいない。

「知らね。ボコにした奴の面なんか一々覚えて記憶の空きを埋めるなんて勿体ない事しねぇし」

「――――――っ！」

完全に頭に血が上ったと見れる神崎がその台詞を合図に戦闘開始しようと動きを見せた時、

「はいは～い、両者そこまで」

これから始まろうとしていた一つの騒動に終止符を打つように観戦者達の間を縫うように絶妙なタイミングで渚が現れる。。

キレて見境がなくなっているのか神崎は邪魔する乱入者に噛み付く。

「何だ、氷室の犬がっ……関係ねぇ野郎はすっこんで」

「副会長として暴力沙汰を見逃すわけには行かないんだよね。ここで押し止めない気なら、今年就任したうちの生徒会長直々の処罰下るけど……きっついよ？」

敵意を受け流してにこりと笑う渚。

そこにある含みを訳すと、「見逃してやるから、とっとと失せろクソ蛙」となる。

ポーカーフェイスを装っているが、内心では犬扱いに相当御立腹

らしい。
笑顔から伝わって来る威圧感を無意識のうちに感じ取ったのか、神崎は悔しそうに顔を歪めて手下を引き連れて食堂から出て行った。去り際に千夜を未練がましく一瞥して。
騒動の中心の一人がいなくなったのを見届けると、渚は蒼助に視線を向け、
「君も、ね。騒ぎを大きくした責任あるから」
「へいへい」
渚に後押しされ、蒼助もおとなしくその場を去ろうとする。
と、その前に一度振り返って。
「気をつけろよ。――――新入りってのは昔から男女関係なくあゆうのに目ぇ付けられるもんだからな」
騒動の原因となった少女に一つ警告を残し、蒼助は渚と共にその場を去った。

◆　◆　◆

昼時の平穏を取り戻した食堂を出て少し歩いた所で、渚が口を開いた。
「あれで、よかったの？」
「ああ、上出来だ。これ以上に無いタイミングだったぜ」
タイミングとはあの場で一触即発のところに渚が入った時のことだ。
全ては予定通り収まった。
あそこで渚が入るまでの筋書きは我ながら良作だと蒼助は思った。
「彼も報われないね。あそこまで執念深く覚えていても当の相手には欠片も覚えられないんだから」
「覚えてもらう価値も無かったっつーことだろ」
それとさ、と話を切り替え渚は呆れ返るように、
「彼女もふっとい神経持ってるよね。終夜さん……だっけ？悪いの

は神崎とはいえ、自分が原因になっているってのに君と彼が一触即発状態になっても止めるどころか眉一つ動かさないでずっと見ているだけだったんだもの。助けた君にもさっき出て行く時何も言わなかったし」

その言葉に少し溜めを持って、

「お前、アイツが箸持ち直したの、見てなかったのか？」

「へ？箸？」

どうやら本当に見えなかったらしい。

一般人ではない渚の眼でも捉えられなかったということは、近くにいた連中は誰一人千夜の異変に気付いてなかっただろう。

箸をある意図で持ちなした際に放たれた殺気に。

「別に、俺はあの女を助けたわけじゃねぇぞ」

「何？　照れてるの？」

そういうコトにしておこうと、蒼助は敢えて反論はしなかった。

事実だとしても、神崎の方を助けたとは言いたくなかったから。

「あ、忘れてたけど結局お昼どうするの？　食堂使えないし」

「……」

そこまで考えていなかった。

◆　◆　◆

新学期初日はいよいよ放課後に差し掛かった。

帰りのホームルームの終了と共に生徒達は教室からいなくなっていく。

皆、初日が余程だるかったのか蜂の大群を散らす勢いで生徒は校舎から姿を消していく。

その中、残る生徒が少数となった校舎内でほとんど空となった２―Ｄの教室に一人席に座って待つ見目麗しい女子生徒がいた。

終夜千夜。

彼女はある人物と約束を交わし帰宅を留まり待っていた。

新聞部に所属するクラスメイトの新條久留美が今度の記事に転校生である千夜の紹介や本人のコメントなど入れたいと頼み込んできたのを快く引き受けた。

新学期最初の部活動ということもあって一度顔合わせがあるのだというコトで活動の場で向かった久留美。すぐに終わるというと言うからこうして待っているのだが、一向に来る気配は無い。

いつまで続くかと思われた状態はドアが開かれたことで終わる。

「……――――」

開いたドアから入ってきたのは彼女が待ち望んだ相手ではなかった。

そこに立っていたのは昼休みに食堂で千夜に絡んできた、

「神崎、くん」

二時間ほど前にされたことがされたことだけに、あまり友好的な表情を浮べられない千夜。

表情に不快さを表現するその様にサディステックな汚らしい笑みで口元を歪める。

「よぉ、転校生。昼は悪かったな、アンタがあんまりつれないもんだからちとムキになっちまったんだ」

ちっとも誠意が見れない謝罪を吐きながら、神崎は言葉を紡ぎ続ける。

「だからよ、改めて歓迎させてくれや――――――俺の女として」

言葉と同時に教卓側のドアが開く。

入ってきたのは数名の男子と、

「……新條さん」

そのうちの一人に後ろから羽交い絞めにされた久留美。

「……何のつもりですか？」

「言っただろう？歓迎パーティーだよ、俺たち流のな」

久留美を捕らえた一人以外が千夜を取り囲むように周辺に立つ。

逃げ道を塞ぐように。

「……彼女を、放してください」

「はっ、この期に及んで他人の心配かよ。お綺麗なこった……思わず踏みにじりたくなるほど健気なもんだな、おい。……だけど、聞けねぇなその頼みは。アンタに下手な真似させない大事な予防だからな」

つまりは人質ということ。

声を上げて人を呼べないように、抵抗させないように。そのための卑劣な手段。

「尤も、この時間じゃ校舎にはほとんど人間はいねぇ。誰かが通りかかろうが、誰も助けてくれやしねぇよ……この俺に歯向かえる人間はいねぇからな」

あの昼休みの後、彼等なりの計画を立てていたんだろう。

人通りの少なくなる時間――――――獲物を蹂躙するのに最も適した時間を狙い、千夜の行動にも眼をやって、彼女の元へ向かう途中だった久留美を待ち伏せして。

人の弱み付け入る非道。彼等はそれに手馴れていた。

逃げ道を全て塞ぎ、ただただ泣いて脅えて好きにされるしかない獲物を思うが侭に痛めつけてきた。

千夜にもそれを強いる気でいた。

彼女から揺らめきだつモノに誰一人気付きもせず。

「……この校舎には、今ほとんど人がいないんですか？」

神崎に問いかけを放る千夜。

こんな状況になっても彼女は脅えもしなければ取り乱しもしない彼女の態度が気に喰わないのか神崎はなんとしてでもその落ち着きを崩そうと試み、

「何度も言わせるんじゃねぇ。誰もお前を助けちゃくれない。観念するんだな、大人しくモノになればイイ思いもさせてやるよ。パーティーは皆が楽しむもんだからな……なぁ？」

これからする行為を含みに舎弟たちにそう言えば、揃いも揃って下卑た笑みを浮かべる。

決定的な絶望を思い知らせたはずだった。

――――――が。

「――――――そうか」

綺麗に形整った唇から発された低い声。

絶望に打ち震える筈だった彼女が浮べたのは、

「それは好都合だ」

美しく、強く、そして何処までも残虐な笑みだった。

それを認識する前、微笑の僅か一秒後に神崎は腹部に衝撃を伴った激痛に襲われた。

神崎を襲った衝撃の正体は突き刺さったようにそこに打ち込まれた千夜の拳。

たがか女の力と侮ることは出来なかった。現に今、神崎は呼吸を強制的に止められた。

「がっ…は」

衝撃の際に開いた口が塞がらないまま神崎は膝を床についた。

興味を失くしたようにそれ以上神崎には構わず、千夜は久留美を捕らえる男に目を向ける。

その眼差しの冷たさに見据えられた男は、ひっと喉を震わす。

「こ、このアマ……よくも神崎さんを……」

ようやく事の衝撃から我に返った舎弟達が喚き出す。

雑音を聴かされているかの不快な表情をして先夜はただ一言。

「黙れ」

低いと言っても女の声。肩を震わすほど音量が大きいというわけでもなく、恐ろしく低いというわけでもない。

だが、そのたった一言に込められた威圧感にその場にいた舎弟はおろか久留美までもが喉の機能を停止させた。

鎮まる周囲のその様にく、と嗤う。

「人質をとって迫ってくるとはな……人を捻じ伏せるには最もな良策だ。だが――――――生憎、この手の状況は初めてじゃないんだよ」

先程までの丁寧な口調は何処へ飛んで行ってしまったのか。やや

粗暴で、年不相応の威厳に満ちた言葉遣いと雰囲気の変貌に周りの理解が追いつく暇すら与えず、千夜は次の行動に移る。
踏み出した足先が向かうのは、人質を捕らえる役目を果たす男の元。
「く、来るなっ……コイツが何なのかわかってねぇのか！そ、それ以上下手な真似するとこの女を……」
「殴るか？蹴るか？いずれにせよやってみるがいい――――――――それを実行すれば生まれて来た事を後悔することになるがな」
危機感を微塵も感じさせない様子でゆっくりと、しかし一切の遠慮無く近づいていく中で、つらつらと言葉を並べる。
「人質とは相手を牽制しそれを維持させる効果がある。だが、それは相手が応じて無抵抗でいればの話だ。向かってこられては人質は全くその効力をしめさなくなる。それと、これは私の経験上での話だが――――――」
距離が残る一メートルを切り、
「そうなった場合、正気の人間に人質を実際に傷つけることは出来ないんだよ。想定外の事態に思考が対処できないからな」
台詞の終わりと同時に、捻りを加えられて放たれた千夜の上段回し蹴りが反応できない男の頭部側面に叩き込まれ、脳が揺れる。
男の体が一時的に全身の機能を失い倒れる。
開放された久留美を届かない場所に追いやりつつ、あっという間に二人も倒された現実を受け止め切れていない残る舎弟達に告げる。
「パーティー、だったな……いいだろう、乗ってやる。好きなだけ楽しませてやろうじゃないか……足腰立たなくなるまで」
不敵に微笑うその様は類は違えど、凛々しさと優雅さに彩られた苛烈な美しさを醸し出していた。
「一人残らず、平等に……パーティーは皆で楽しむもの、だったよな？」

［伍］　為される再逢（前書き）

再会は果たされた
けれど、本番はココから
さぁ、気張っていけ

［伍］　為される再逢

放課後、四時を回った時刻。
いざ下校しようとした蒼助はその時ぎょっとする光景に遭遇した。
校門近くで双眼鏡を持って校庭を走る女子バレー部員達をじっくり眺めるあからさまな不審者。
ただの不審者なら蒼助も眼を見開く程驚くことはなかった。
その人物が認めたくないが見覚えのある姿形をしていなければ。
「いいねぇ……青春の象徴だな、部活で汗を流す女子高生の生足は。あの張りと引き締まった丁度いい太さが実に……」
「オイコラ」
鼻の下伸ばして生足鑑賞するその男を蒼助は思い切り蹴り飛ばした。
横っ面に直撃して派手に倒れる男は、つぁ～……と蹴られた頬を撫でながら顔を上げる。
「何しやがるっ」
「それはこっちの台詞だ！」
男――――朝の公園で遭遇したホームレスに振りかぶって鞄を投げつける。
短い射程で投げられたそれはコースから外れる訳も無く顔面に叩き付けられた不審者兼ホームレスはぐあっと呻き再び倒れる。
「なに堂々と犯罪してんだよ、てめぇは！　待ってろ、今警察しょっぴいてやる！」
「オイ待て待てクソ餓鬼。何で日課の行ないで留置所入らなけりゃならない！？」
「しかも常習犯か！」
いや、違うぞ、と男は否定し真顔で、
「これは犯罪じゃない。――――この学校責任者及び全生徒公認の行為だ」

「絶対有り得ねぇし無理あるし、仮にそうでも尚更だ。間違いは正さなきゃな――――来やがれ覗き魔」

止めろぉ、と暴れるホームレスの首根っこを腕でがっちり固定して職員室に引っ張っていこうとした蒼助の耳に校庭から黄色い声が聞こえた。

先程のバレー部の女子部員達が蒼助――――正確にはホームレス――に向かって手を振っている。

「おじーさん、今日部室来てねぇ。部活終わったら皆でお菓子持ち寄ってお茶会するからぁ」

「待ってるねー」

実に友好的なその態度に蒼助は気が遠くなった。

もちろんだともー、とご機嫌に手を振り返していたホームレスはズレたサングラスをかけ直し勝ち誇った笑みを浮かべて腕から抜け出した。

「いや、それにしてもお前がここの生徒だったとはな。妙な縁があるもんだ」

「待て、ココに来るのが日課だっていうのなら制服でわかるだろ」

「野郎になんか興味ないし」

共感できる話なので蒼助は殴らなかった。

「それよりどうよ、俺の言ったとおり女神には再会できたかい？」

にしし、と笑ってからかうように尋ねるホームレス。

蒼助はなんとも言えない『状態』に顔をしかめ、

「微妙、だな」

「ほぉ、そりゃどういうこったい？　オジサンに話してみな」

語る相手が目の前の人物というのはそれこそ微妙な気分である蒼助だったが、この事は胸に秘めておくより誰かに話した方が気が晴れるかもしれないと思い始めて半ば妥協の形で目の前の男に打ち明ける。

「どうもこうも……向こうは俺のこと覚えてねぇみてぇだし、それになんか……違う」

「違う？　一体何が？　良く似た他人で人違いだったとか？」
「そうじゃなくてだな……こう、雰囲気つーか」
蒼助の脳裏に蘇る記憶の彼女の残滓。
それと今朝、教室で見た千夜はそれと重ならない。
何処まで凛々しく堂々として絶対の存在感を与えたあの時と、今日見た確かに見る者の注意を惹き付けるが肝心の何かが欠けていた様。
それが蒼助には附に落ちずにいた。
「とにかく、俺が……会いたいと思ったのは、あんなんじゃねぇ」
自分でもなんだか相当恥ずかしく青臭いことを言っていると思えてきた蒼助は羞恥を紛らわすようにガシガシと頭を掻く。
発言とその行動に何のツボに入ったのか、男は腹を抱えて笑い出す。
ひーひー、呼吸を荒くしたところで、
「あー、おかし。青い春と書いて青春ってか……てめぇの感動的な彼女との再会シーンが美化したとか考えて冷めねぇのが若いうちの長所ってやつか」
あ、そうかも、とたった今気付いた蒼助だったがそれを言う前に、
「若い君に良い事教えてやろう。本当に彼女と再会を果たしたいと思うなら――――戻れ」
突然の言葉を蒼助は意味を解りかねた。
「突然、何言って……」
「まぁ、あれだ……学校ってとこには決まってある種の人間が必ずいるだろ。アンタの女神が美人なら尚のこと引き返すべきだ。連中は綺麗なもんをぶち壊すのが好きらしいからなぁ」
その言葉に蒼助はどくんっと跳ね上がる心臓の鼓動と共にはっとする。
かつて不良という人種を相手に散々暴れていた蒼助は知っていた。彼らは弱く群れて一匹の獲物を狙う。仮に倒されても、その蛇のように執念深い習性はある意味目を見張る。

昼の神崎陵の一味は一度追い払われたくらいで、狙った獲物を諦めるのだろうか。

去り際に千夜を見たあの欲望の渦巻く神崎の目が脳裏に甦る。

そう言えば、千夜が久留美と何か話していたな、と聞き耳たてた会話を思い出す。

『それじゃ、部活の顔合わせ終わったら戻ってくるから教室で待ってて』

それに頷いていた千夜。

もし、もし仮にもまだ教室にいるのなら。

神崎たちが諦めていないとしたら。

二つの仮定を結びつけた上で導き出された結論に蒼助の体中の流れる血液が急激に温度を低下していく。蒼助の心情を見透かしたのかホームレスは

「行きなよ。行けばアンタが再会を願った本当の彼女に会える。だがこれだけは忘れんな――――運命の女神が齎すのは祝福ばかりとは限らねぇ……もしかすると、その女がアンタに齎すのは……」

あんた自身の破滅かもしれない。

そう言い残し、ホームレスはコートを翻して校門から出て行った。

沈み始めた暮れ空の夕日の朱が背を向けて校舎に向かって走り出す際に蒼助が見た去りゆく男の背中を朱く染め上げていた。

◆　◆　◆

夕焼け色の染め上げられた教室。

そこに立っていた少女を見た途端、蒼助の心臓は瞬間的にきゅっと収縮した。

姿形は何一つ変化がない。だが、朝教室に入ってきた見た時とは比べ物にならない存在感が確かに在った。あの夜、蒼助の心と記憶

にしかと刻み込ませたあの絶対的存在感。
蒼助の視界に立っている少女に朝から昼間にかけての清楚な美しさは見る影もなく消えていた。あるのは粗暴なまでにの荒々しさを伴った凛々しい様。
背を向けていた彼女がこちらに気付き、振り返る。見えた顔はやはり醸し出して纏う雰囲気同様に凛々しさが際立つ顔つきに変わっていた。近づいてくる者たちに愛想良く応じていた『作った』微笑はない。
彼女だ。
蒼助が会いたい、と本当に願ったのは。
見つめてくる双眸と目が合う。何か話さなくては、と言葉を捜すが見つからず、声を出そうと思えば喉が引き攣る。
どうすることできず、蒼助はただただようやく再会できた少女の姿を瞳に焼き付ける。
時間が止まっているかのように思えたその瞬間は、
「あの～、なんか世界に二人な雰囲気つくっているところ悪いけど……周り良く見て、蒼助」
いたのか、と完全に意識からシャットアウトしていた久留美に気付いて一瞥し、言葉どおり千夜と己が周囲に目をやる。
思わず絶句した。
床に転がり、壁に凭れる多数の屍（といっても死んではいないが）。
屍の正体は神崎とその舎弟達。
どれも、気絶もしくは動けない状態で呻いている。
特に痛め付けられた形跡が見れないところから、少ないかつ必殺の一撃で先頭不能にされたのだろう。
しかし、これを行った人間が誰なのかを考えると蒼助は動揺せずに入られなかった。
「……これ、お前がやったのか？」
答えたのは問いを投げかけた相手ではなく久留美だった。

蒼助の言葉で何かのリミッターが外れたのか鼻息荒くした久留美が蒼助の胸倉掴み上げて詰め寄る。

「本当、凄かった！　何が凄いって……馬鹿で単細胞で両生類面とは言ってもそれなりに強いはずの神崎を一撃でのしちゃったんだから。その後はもう多数相手に大立ち回り！　キアヌ・リーブスとかアンジェリーナ・ジョリーなんて目じゃないわ、あれは！　あーっカメラが無かったのか口惜しいっ！！」

わかったから振るな揺らすな、と久留美の手を振り解きしゃがみ込んで近くで倒れ伏している一人の髪を掴み上げる。

完全に白目をイっている。これは当分起きない、と判断し、

「オイ……何があった。と言っても大体想像できるが、ここまでするかよ」

急所一撃じゃねぇか、とジト目で見れば、千夜はそれがどうしたと言わんばかりに、

「自業自得だ。この連中、そこの新條を連れて来るときかどうかは知らないが、手を上げたらしいからな。たまには被害者側に回るのもいい経験になるだろう――――尤も、それが肥やしになったかは怪しいがな」

言われて見れば、久留美の頬は少し紅くなっていた。

彼女の性格を知る蒼助にはわかった。自分の意に添わないことにはとことん反発的な久留美は抵抗したのだろう。

千夜の言っていた事が図星だったのか、久留美は頬に手をやりつつ、

「あ、もしかして紅くなってる？　いーのに……寧ろもうちょっと頑張れば迷惑かけなくて済んだ……」

珍しく汐らしい久留美の言葉を遮り、

「私は女子供に手をあげる外道と身の程知らずが大嫌いなんだ。この際だ、二度と愚行が出来ないように全員指の二、三本折っておこう」

『――――っはい！？』

冗談かと思ったら本当にやろうとする千夜を慌てて止めようと蒼助と久留美が動き出す前に、倒れる中で呻いて動き出す者がいた。
三人揃って同じ方向を見れば、その先では気絶していたと思った神崎が一早く目が覚めたのかそれとも動けなかっただけなのか身体を起こそうとしていた。
打たれた箇所がまだ痛むのか苦痛、そして悔しさに凄まじい形相に表情を歪めながら千夜を睨む。
その迫力に久留美はともかく蒼助ですらヒいた。不細工がここまでなると、もはや目にも当てられない強烈さがあった。
蒼助達が逃げ腰の中、ただ一人その様を呆れ顔で見つめる千夜。
「両生類かと思ったら中身は爬虫類か。……蛇並の執念深さだな、お前」
「……これぐらいで、俺から逃げら……っれると……思うな……諦めないぞ……必ず……っお前を俺の前に跪かせて……」
まだ言うか、と蒼助もその執念深さには呆れる。
「ケロタンよぉ……いい加減にしとけよ、お前マジで指折られるぜ？」
蒼助の言葉に神崎はぎょろり、と眼を見開き、
「っっ黙れぇ！　テメェに何がわかるっ……いつもいつも俺の事見下しやがって！　くそっ、ぶっ殺してや」
神崎の言葉は途切れた。
驚く程の早さで神崎の元へ近寄った千夜が負け惜しみさえ許さず殴り倒したからだ。
再び、倒れた際に身体を打ち付けた神崎の胸ぐらを掴んで引き起こし、
「よくもまぁ、人を殺した事も無いくせに面白い事をほざけるな。お前がこれからも私に付きまとうのはぶっ飛ばしてやるから構わんが、今回のように他の無関係の人間を巻き込んでみろ……次は殺すかもしれないぞ」
最後の台詞に、蒼助は背筋が氷を放り込まれたように冷たくなっ

た。
神崎が言うとちゃちな脅し文句にしか聞こえなかったそれは千夜が口にすると酷く現実味が増した。
まるで千夜がそれを経験済みのように感じ取れた。
それを察したのは蒼助だけのようだった。隣の久留美の方はただ千夜の行動に驚いているだけ、ただならぬ雰囲気には気付いていない。
背中を向けている為、千夜がどんな表情でその言葉を吐いたかはわからないが、華奢な肩越しに脅えた神崎の表情がちらりと見えた。
「一つに利口になれたなら、よく覚えておけ……いくら力で人の頭を押さえつけても、欲しいモノは手に入らないぞ」
そう言い捨てて神崎を床に放り出した。
ごんっ、と硬質な音が響いたが然して気にするわけでもなく見向きもしない。
その酷い扱いに蒼助は少なからず再び昇天した神崎に同情を覚えた。
千夜の素を知っていたとは言え、まさかここまでとは思わなかった。
二度目の裏切られた気分だった。
「――――さて、どうする？」
突然、千夜が投げかけて来た問いに蒼助は、は？と目を瞬いた。
「これに決まってるだろ。思わずここが教室だというコトを忘れて後先考えずのしてしまったがどう後始末するか……」
「あん？　んなことしなくても誰か来る前にとっととトンズラこいちまえば万事解決……」
最後まで言葉を言う前に物音が聞こえた。
廊下から、この教室に徐々に近づいてくる足音が。
「げっ、なんで」
「放課後の教室点検よっ。ま、まずいわ……どう説明するのよ、この状態」

どうしようもない。
もしこれが逆に最悪の状況を迎えていれば、神崎側の問題で済んだが。
「窓から逃げるか？」
「無茶言ってんじゃねぇ！　二階だぞ、ここはっ」
蒼助だけなら頑張れば出来るだろうが、一般人の久留美には到底無理な話だ。
「なら、仕方ない」
一つ溜息を吐き、上着のボタンを全て外しブラウスに手を掛けた。
その行動にわけもわからず目を白黒させていると千夜は次の瞬間、ブチブチィっとボタンを飛ばしてブラウスの前を力任せに思い切り引っ張り開けた。
唖然とした蒼助が露になった千夜の胸元に目を奪われたのは背後のドア開けられたのとほぼ同時だった。

◆　◆　◆

校門前。陽はすっかり暮れて辺りは薄暗くなっていた。
「それじゃ、しっかり送っていけよ玖珂。間違っても傷心の相手に送りオオカミになるなよ」
「へいへい」
自分に対する相手の認識を知りこっちが傷つきそうな蒼助だった。
年配の教師はそんな蒼助から上半身がジャージ姿の千夜に注意を移し気遣うような口調で、
「災難だったな……気をつけて帰りなさい」
「……はい」
少し溜めを置いて俯き加減に返された返事に教師は痛ましげに顔を歪めた。
そして隣の久留美にも、
「お前も一応な」

「……先生、この扱いの差は何ですか」
拗ねる久留美。
だが、蒼助には教師の気持ちがわからなくもなかった。
「神崎たちの処分は職員会議追い追い決まる。あとは先生たちに任せておきなさい。じゃあな」
そう告げて教師は職員棟に戻って行く。
その後ろ姿を尻目に蒼助たちもその場から離れるように歩き始める。
校門が大分小さく見えるようになるところまで来て、溜息と共に開口を切ったのは久留美だった。
「はぁ～、何とか誤摩化せたわね」
汗をかいているわけでもないのにそれを拭う仕草をする久留美を傍目に蒼助も緊張からの開放感に安堵しつつ今だ『演技』を止めない千夜に声をかける。
「しっかし……咄嗟によくあんな真似出来るよな」
「女にとって涙は世知辛い世の中を渡る必須アイテムだからな。涙腺くらい簡単に操れる」
「……お前も出来るのか、久留美」
まさかと思って聞いたが、
「出来るわよ。普通は」
まさかの即答が真顔で蒼助に返って来た。
もうその件には何も触れないことにした。
「それにしても……服破いた時はマジで何ごとかと思ったぜ」
あの時、千夜が謎の奇行に及ぶと同時に点検当番の教師が入って来た。
途端、千夜は自ら晒した胸元を庇うように腕を掻き抱きその場に座り込んで震え出した。
ケロッとしていた顔は青ざめ瞳は涙で滲ませて。
それが演技であることに気付いたのは状況と事情を聞こうとする教師に『ほんの少し歪められた事実』を震える声で話し始めた時だ

った。
神崎達に襲われた事はそのままにして、そこを蒼助に助けられた、と。
これによってまんまと千夜は自分のボロは隠蔽して責は全て神崎達に押し付けることに成功した。
あっさり事を丸く治めてしまった千夜に久留美は尊敬入り交じった感心の意を向けた。
「すごいわね。先生、すっかり信じちゃってたわ……」
「こんななりの女が大の男数人を倒すなんて普通は有り得ない事だからな。そこを有り得ない真実を信じ込みやすい嘘にすり替えてしまえば人を騙すなんて簡単なことだよ、新條」
説得力のある話だと蒼助は思った。
確かに、人は有り得ない事実よりも有り得る嘘を信じる。
己の常識を軸に物事を判断する人間は特に。
「へぇ、勉強になるわ……参考にしとこ」
「……オイ、終夜。お前は今とんでもない奴に恐ろしい事を吹き込んだぞ」
なんですって!?と噛み付いて来る久留美をかわしているうちに宮下公園の前まで来ていたことに気付いた。
そこでキャンキャン吼えていた久留美が、
「あ、もうここまで来てたんだ。あ、終夜ちゃん私こっちだから」
自分の帰り道を指で示す久留美は駆け出すが何かを思い出したようにすぐ振り返る。
「あー、そうそう。今日の事、内緒にといてあげるわ」
その台詞に蒼助は、何が?と脳裏に疑問符を浮かべた。
同じ状態であろう千夜に久留美はにんまりと笑って言った。
「美少女転校生のす・が・お。ネタには申し分無いけど……助けてもらってないて恩を仇で返すような真似はしたくないから。あの事は私の広ーい胸の奥でもにしまっておくことわ、じゃーね」
でもインタビューはするからねぇっ、と釘を刺して久留美は蒼助

と千夜の前から去っていった。
「あの利己主義にも人の尊厳を尊重をする良心があったのか……」
「素直に長所として見てやったらどうだ、へそ曲がりめ」
「裏と表が３６０度違う猫かぶりに言われたかねぇよ」
「ははは。それじゃ元通りじゃないか、――――発言はよく意味を理解してから述べろ考え無し」
低レベルな口論にお互いある程度攻撃し合った後、沈黙が訪れる。
短いそれを破って蒼助が口を開いた。
「お前、今朝俺の事わざと無視したろ。動揺どころか眉一つ動かさないでスルーしやがって」
「動揺はしたぞ。まさか、転校先で顔を会わせる事になるとは思いもしなかった」
「じゃぁ、何でシカトこきやがったんだよ……こっちはてっきり忘れられたかと――――」
そこまで言って蒼助は自分が口にしていた言葉を省みた。
理解した瞬間、蒼助は自分の顔が羞恥で熱くなっていくのを察した。
これはまるで『ひどい！　私の事忘れるだなんて』と恐ろしく乙女的な解釈が出来る。
訂正するよりも早く、面白げに千夜が笑みを深め、
「何だ、私に自分の事を忘れられたと思ってショック受けてたのか？」
「ち、違ぇよ、誰が――――」
とっさに否定しようとしたが、止めた。
続きを無理矢理呑み下して、別の言葉を紡いだ。
「……だったら、どうなんだよ……笑うかよ」
喉から絞り出した本音で顔が火が出そうな勢いで熱い。
らしくない。何でこんなことを言っているのだろうか、と自分がわからないなりそうな中、千夜の反応を待つ。
反発されるかと思っていたのか予想外の反応に千夜は驚いている

ようだったが、
「いや、笑わない。言っておくが私はお前をちゃんと覚えてたぞ」
え、と自分でも驚く程間抜けな声を蒼助は無意識に口から漏らした。
「忘れる訳無いだろう、あんな――――」
心臓が信じられない程激しく、大きく高鳴る。
そして、
「自分から仕掛けておいて油断大敵で死にかけたお間抜けさんはそうそう簡単に忘れられるものじゃぁない」
蒼助は自分の中で決して崩れない強固な壁が出来たことを感じとった。
胸の鼓動も通常状態に戻っていく。
一体どんな顔をしていたのか、千夜はおかしそうにくすくす笑い、
「冗談だ冗談。そんな人間を信じられなくなった動物みたいな目で睨むな」
人の純情を踏みにじっといてよく言う。
このまま帰ってやろうか、と思い始めた時、
「前の学校では素で通していたら、厄介ごとがばんばん降りかかってきてな。火の粉振り払うのに夢中で平和な学園生活とは無縁だったからな……だから、今回は少しばかり努力してみた……あまり実らなかったがな」
突然の言葉に見れば、さっきまでの大胆不敵な笑みを浮べていた表情には僅かながら哀愁が滲んでいた。
言葉を聞いて蒼助に解ったのは、やはり千夜は平穏とは程遠い日常を送っていたということ。
彼女は容姿といい存在感といい目立つ。いい意味でも悪い意味でも。千夜の場合では後者の方が大きいだろう。
欲求不満な不良はとにかく自分より弱い者を探す。溜まった欲求を暴力なり性欲にするなりしてぶつける相手として。
その場合、千夜は格好の獲物だ。そして、獲物はどう足掻こうが

獲物のままだ。
　歯向かい、叩きのめすとしよう。そうすると奴らは怒りを執念に変えて捻じ伏せるまで付きまとう。逆に抵抗せず泣き寝入りする。そうすると連中は何処までも付け上がる一方で要求はエスカレートする。
　どの道、全て無駄なのだ。
　千夜の場合もそうだ。足掻いても足掻いても、食物連鎖の最下層からは抜け出せない。
　きっと、本人も自覚しているだろう。もし、月守でなくほかの高校へ行っても同じことが起こると。同じ連中は何処にでも必ずいるのだと。光対して陰が存在するように。
「あのよ……よす」
「まぁ、諦めるにはまだ早い。いや、もうそれが来ていても妥協はしない」
　蒼助の言葉を、考えていたことを遮るように千夜は言う。
「高校に入ってからずっと密かに野望があったんだ。必ず、人生に一度の青春とやらを謳歌してやるってな。一年は……まぁ、過ぎたことは置いておこう。とにかく、私は例え砂の上でももがくだけもがいて、壁があるなら叩くだけ叩く。あとの二年、猫被るなりなんなりして何とかこの野望は実現させてみせるつもりだ」
　そう言い切った千夜の漆黒に濡れた瞳には先程までの哀愁など掻き消えていて、強く、傲慢なまでの輝きが宿っていた。
　心臓を掴まれたような感覚を覚えた。
　堂々とした様が綺麗だと思った。眼が眩むまでに。
　その時、蒼助の中で何かが動いた。
「あほ。二年間も猫被り続ける気かよ。気疲れして青春謳歌どころじゃねぇじゃねーか」
　蒼助の指摘に千夜はむ、と眉を顰める。
　気にせず蒼助は続けた。
「本性見せられるダチの一人くらいつくっとけ。少なくとも、お前

の前にそれができる人間が一人いる」
ぽかん、と一瞬呆気にとられる千夜。
「何の風吹き回しだ？」
「お前……もうちょっと、嬉しそうな反応とかしろよ可愛くねぇ……」
実際、蒼助自身も千夜のその言葉と同感していた。
本当にどういう風の吹き回しなのだろうか、と。
だが、そんな言葉は無視した。
理由はどうであれ、蒼助は目の前のこの女を放っておけなかった。
近づきたかった。
「で、どうなんだよ。――――――そーゆーお友達はいりませんかい？」
顔を背けながら手を差し出す。
一拍数の間を置いてその手が人肌の暖かさに包まれる感触に正面を見ると、微笑む千夜の顔があった。
あの夜、月明りの下で見た笑顔。
「……ありがとな、助けてくれて」
「それは昨日の事か？」
「……まだ、礼言ってなかったからな」
このたった一言の礼を言うだけで今日一日遠回りしていたかと思うと、どっと肩に疲れが来た。
だが次の千夜の言葉にそれも明後日の彼方に吹き飛ぶ。
「どういたしまして」
満面の笑み。
雰囲気が絶頂に達したかと思われた時、蒼助の腹が鳴いた。
「……」
「……」
蒼助は全てをブチ壊した己の腹の虫をかつてないほど憎んだ。
昼の時間、食堂で食べ損ねてから何一つ腹に入れていなかった事で激しい後悔の嵐に襲われる。

気まずい気分で額に脂汗を滲ませていると、千夜が口を開く。
「……何か食べに行かないか？　お近づきの印に……というわけでもないが」
からかうわけでもなく、純粋に誘っているようだった。
無かった事にしてくれるならそれはそれで有り難い事だった。
「……俺の行きつけのところでいいか？　ラーメンだけど」
「ああ、ラーメン……いいなそれ、案内してくれ」
先を促す千夜を傍目にようやくこの場から離れられるか、と動いた時、一陣の風が吹き桜の花弁が散り舞う。
そういえば、と今になってようやく気付き、思い出す。
昨夜、ここで千夜と出会った時も、桜が降らす淡紅の雪が乱吹いていたことを。

◆　◆　◆

「おーおー、ようやくここまで漕ぎ着けたか」
男はサングラス越しに公園前から動き出した青年と少女を遠目で見ていた。
向こうから決して見えないであろう一本の桜の木の影から。
見つめる先の二人はすぐに物陰に隠れて視界から消えた。
それを見届けると同時に、
「どうよ、ちょいと時間がかかったが……若い二人の再会の形としちゃなかなかイイ出来だと思うぜ？」
頭や肩に降り掛かる花弁を払い除けながら隣の存在に意見を伺う。
意見を求められたその人物は言葉を口にすることはなく、ただ口元に笑みを湛えるだけだった。
その反応に男は肩を竦め、
「桜に夜空に血塗れの紅い月……物語の始まりを彩るにゃ最高じゃねぇか」
男は満足げに呟き、胸から取り出したケースから煙草を一本抜き、

口にくわえた。

【六】　胎動の気配（前書き）

何かが動き出す
姿は見えず
けれど確かな速さで

［六］　胎動の気配

男は生まれながら恵まれていた。
極道という環境に、権力という絶対の力に。
物心をつく前から周りに存在した男に媚びへつらい、従う者達。
彼らは命令すればなんだって言う事を聞き、言う通りにした。逆らえないから。
それは幼かった男を慢心と確信に至らせた。自分には、人を思うがままに出来る権利と力がある、と。
時と年を経ても、男の周りは何も変わらなかった。変わったのは、ますます膨れ上がった慢心と傲慢さ、そして残酷さ。
傍には、男の後ろ盾に引き寄せられ権力のおこぼれを賜ろうと尻尾を振る者達。
それに付け加え、男は曲がりなりにもそこらの連中よりも強かった。自分たちよりも強い者に惹かれたというもの一理あった。
駒と力を手に男は王座に座っていた。
欲しいものは何でも手に入り、目障りなものは捻り潰せた。
望めば全てが自在に操れる思うが侭の世界。
そんな世界はある日、一人の男に完膚なきまでに叩き壊された。
中学の時、男はそれに出会った。
それは奇しくも男と同じ境遇、同じ環境、同じ力に恵まれていた。
男にはそれが気に入らなかった。
同じ王の素質を持つ人間。生憎仲間がいた、と男は喜び歓迎出来る人間ではなかった。
王の座は一つ。それに座るのはただ一人。同じ人間は要らない。
それが男が独りよがりな考えで導き出した結論だった。
おまけにその人物は男の領地を荒らす無法者だった。
周りから一目置かれているその男を潰そうと決めるのに、さほど時間はいらなかった。

思い上がった身の程知らずに、自身の程度を思い知らせてやるつもりだった。
粛正を下し、ひれ伏させるはず、だった。
「が……はっ」
多数に対して相手は一人だった。
男が圧倒的に優勢だった。
なのに、
倒れていたのは男の方だった。
周りに同じように再起不能にされて地面に突っ伏して呻く舎弟たち。
そして、たった一人で、数分足らずで自分たちを地べたに這わせた男がつまらなそうにこちらを見下ろしてただ一人立っていた。ズタボロのこちらに対してほとんど無傷で。
「……つっまんねぇ……周りの奴らが黙って放っとくからどんだけ強いかと思ったら……全然大したことねぇな」
期待外れ、と吐き捨てもはや倒れ伏す男達に興味を無くしたように背を向けて去ろうとするその人物を男は痛めつけられた身体に鞭を打って引き止める。
「待ち、やがれ……っこのままで済むと思ってやがるのか……俺の親父が黙って……」
「……ああ？」
四つん這いの男の腹を爪先で蹴り上げた。
「ぐわっ……あが！」
半回転し、仰向けになった男の胸をぐりぐり踏みにじりながら、心底厭そうに言った。
「んだよ……アイツらだから下手に手ぇ出さねぇようにしてたのか。くだらねぇ」
「……ど、いう意味だ、……ぐぅっ」
「わかんねぇのかよ、周りが怖いのはお前じゃなくて、てめぇの父親の権力なんだよ。転がってる連中もな。てめぇは自分がエラい、

強いとか勝手に思い込んでただけ。とんだ裸の王様だったな……」

男は自分の中の何かが砕ける音を聞いた。

絶句する男を捨て置いて、いつの間にか衝撃を与えた人物はいなくなっていた。

初めて味あわされた敗北。

その日、男は築いた地位、得ていた信頼、己のものと信じてやまなかった王座を失った。

それが男――神崎陵が全てをブチ壊し奪った男――玖珂蒼助に抱く憎悪の始まりだった。

◆　◆　◆

昼間の喧騒も失せ、都会の中心であることが嘘のように静まりかえった新宿中央公園。

その中を、一人の男が歩いていた。

瘴気めいたものを撒き散らしながら歩くその姿に、近寄ろうとする者などおらず、運悪く通りすぎる羽目になった者も道の端へと避け、小走りで去っていく。

それらの者を一顧だにせず、男は酩酊したような足取りで偽りの光に満ちた歌舞伎町の方へと、灯りに誘われる蛾のように向かっていた。

「……終夜、千夜……」

薄く開いた口から紡ぎ出されたのは今、男の心の過半数を占める存在の名。

二日前、転校生として男が通う高校に現れた少女。

誰もがハッとするような存在感とその容貌に一目見た瞬間に目をつけた。

最初の接触を試みた時の昼休みの食堂では、粉をかけたが無視された上に邪魔が入った。

向こうに真っ正面から行っても相手にされないと察した男は方法を代えた。
女とは屈服させ所有するもの、と前近代的な考えしか持ち合わせていない男は、全ての舎弟を連れて放課後の教室に乗り込んだ。
約束の相手を待って一人教室に残る千夜の元へ。保険として手に入れたその約束の相手を連れて。
計画は完璧なはずだった。
しかし、完璧だったはずのその計画は一つの誤算によってあっという間に崩れ去った。
誤算は千夜という存在を完全に捕らえ違えた事だ。
追い詰められた途端、少女の発する雰囲気ががらりと変貌を遂げたのだ。
一瞬の事だった。そして、たった一撃で男は反撃も出来ず地面に伏された。他でもない千夜の手で。
見事に欺かれた。彼女が被っていた仮面に。

『――――――殺すかもしれないぞ』

そう言った時、己に向けられた言葉と視線に込められていた感情。
悪意や敵意などと、そんな生易しい程度ではない。
あれは――――――殺意。確かな殺意だった。
炎のように刹那的に燃え上がる激しいものではなく、研ぎ澄まされた刃のように鋭く何処までも冷たい静かな殺すという意思がひしひしと肌に伝わって来た。
普通の者なら、戦意など掻き消えひたすら許しを乞う。
そして、二度と関わらないと心に固く誓うだろう。
だが、男は違った。
逆に今まで見て来た、抱いて来た、犯して来た女には無かった、そのギリギリの危うさに酷く感情を掻き立てられ、惹かれた。
あの時見せた殺気すら男には終夜千夜という女の魅力を更に見栄

えさせる装飾に思えた。
欲しい、と内側の奥底から渇望が湧き上がった。ぐつぐつとマグマのような灼熱の熱さでにあの日以来男の中でその想いは煮えたぎっていた。
まるでウィンドウに飾られたオモチャを強請る子供のような感覚。他に話せば、ゲテモノ食いと笑うだろうが、そんな事は知った事ではない。
それにあの手のタイプを犯して壊した時、どうなるのかひどく興味を惹く。
もう何度妄想の中で犯しながら想像しただろう。
冷徹な表情を悩ましげに妖艶に悦び、喘ぎ、縋るのか。
壊される恐怖に顔を歪ませ、苦痛と快楽の中でひたすら泣き叫ぶのか。
歪んだ笑みを口元に浮かべ悦に浸ろうとしたところで、男の脳裏をある男の顔が横切る。
途端、男の笑みは強張った。
「……ちくしょう、玖珂の野郎っ……」
男は溜まった唾を吐き捨てた。
そうすることで忘れようとした忌々しい顔は、逆に鮮明になってしまった。
玖珂蒼助。
思い浮かんだ男の顔は、悪意に満ちた笑みを浮かべていた。
千夜を奪って行った男。
自分を見下し嘲笑っていた男。
そして、かつて男の全てを奪っていった憎悪の対象。
またしてもやられた。
いつもそうだ。気紛れに現れては、男が欲しかったモノ、築いたモノを壊し、奪っていく。苦労して作った砂の城を悪戯気分で一瞬にして壊すように。
憎んでも憎み足りない。殺したいほど憎いのに、それも叶わない。

だから憎むしかない。
「くそっ……どうすれば奴に」
勝てる？
あの女を手に入れる事が出来る？
自覚のないまま口を動かし、憎しみを形にする。
その鬱憤を僅かでも晴らすべく、刹那的な快楽を求めて歩を進める男の耳に、突然囁きかける声があった。
「……力が欲しいか、人の子よ……」
「誰だッ！」
男は立ち止まり、辺りを見回した。
誰もいない。
気配すらない。
薄暗いとはいえ、電灯もあり、人影程度なら容易に識別出来る公園内にあって、声が幻聴であったかのように周りには自分以外誰もいなかった。
気に入らなかった。
姿を見せないのも気に入らなかったし、己の内心を覗かれたのも気に入らなかった。
どす黒い欲望を些(いささ)か晴らしてやろうと、男は必死に声の主を捜し求めた。
しかし、声は耳のすぐ傍から聞こえているというのに、人影は何処にも見当たらなかった。
苛立ちを募らせる男に、更に声は語りかける。
「貴様の内から放たれる生命波動(オーラ)は今、その深い怨恨によって黒く澱み”人”の枠からの解放の兆しを見せている。選ばれし者よ……あと一歩だ、あと一歩踏み込めば貴様は”こちら”に来る事が出来る……」
言っている言葉は半分も理解(わか)らなかったが、声は奇妙に心を安らがせる響きを帯びていた。
苛立ちを心安さが覆っていく。

「憎い者がいるのなら、嬲り、殺せば良い……欲しいものがあるのなら、思いのまま、奪うが良い……」

「奪う……殺す……？」

何と快い響きか。

生きる為に喰らい、牝を手に入れる。

己の欲望の赴くがままに生き、他社から奪う事は、牡の、獣の本能だった。

脳の最も原始的な部分を刺激され、男の心が緩む。

その瞬間に、声はぬるりと忍び込んだ。

「そうだ、”人”の常識に囚われるな……目覚めの妨げになるのならそんなもの棄ててしまえ。さぁ――――檻たる殻を突き破り、人を超越しろ。……”選ばれし者”よ、己の内渦巻きし暗き念に身を委ねるが良い」

侵入してきた声が頭の中を食い荒らす。

それは、酷く甘美な感覚だった。

「……ぐぉっ！」

男は地面に膝をつき、頭を抱える。

だが、次にの瞬間には奇妙な感覚なすっかり消え失せ、声も聞こえなくなっていた。

男は首を傾げ、訝しく思い、苛立ちに見舞われつつも立ち上がり、その場を去ろうとした。

が、そこへ少し離れた茂みから女の声が聞こえる。

「……あ、ちょっとっ……ダメよ……ん」

喘ぎ混じりの否定しつつもそんな意思はまるで感じない女の声。

その中、その反応をからかうような男の声も聞こえる。

どうやら、人気がないこの時間帯を利用して性交を行おうとしているらしい。

「……ちっ……クソがっ」

こちらの気も知らずイチャつくカップルに毒づきつつ、その場を一刻も早く去ろうと大股で一歩を出口の方角へ向けて踏み出すが、

――――――え……ろせ……。

突如、あの声は再び聞こえる。
違う。響いたのだ。男の内側から。
動揺する男を他所に声はだんだんはっきりと大きく反響する。

――――――喰らえ、殺せ……奴等を目覚めの糧とせよ。

声が響く度に男の中の憎しみ、殺意、欲望が増幅していく。
思考の隅々まで声はその淫靡な触手を伸ばし、男から理性も何もかも奪っていった。

「ぐぅっ……こ、殺す……っ」

――――――そうだ……そして我等の同胞となった暁には、彼の『姫』を手に入れろ。

「ひ……め……っだと……？」

――――――その霊力は神力に勝る事劣る事無し現世に生まれおちし神姫。力求める者が手にする至高の存在。手に入れ契りを交わればその恩恵により更なる強大な力を手にする事が出来る。

「だ、誰だ、そいつは……っ！」

――――――これは良き事か、貴様も知る存在だ。ほれ、“ここ”におるではないか……。

男の脳裏に突如フラッシュバックが起きる。

その一瞬に現れたのは――――――――
「っ……は、はは……そうか、こりゃいい……なんて運が良いんだ、俺はっ！」
男は事の愉快さに笑う。瞳に狂気の光を宿しながら。
そして、相も変らず聞こえる声のその発生源たる茂みに目をやる。
その目は獲物を求める獣そのもの。
最早、迷いなど一切なかった。

――――――思うがままに……。

頷き、完膚なきまでに砕け散った理性の破片を踏み越え、男は行動に出た。
静まり返った静寂の公園に響き渡った悲鳴と絶叫は外の賑わう人々の声に掻き消されその夜、何者にも届く事はなかった。

◆　◆　◆

酷い夢を見た。
悪夢、と一言で片付けるには生易しいすぎる。
とにかく酷く気分を悪くさせられる夢。
「うー、気持ち悪……」
寝苦しさに耐えかねて目覚めた瞬間、千夜はまずそう呟いた。それしか口に出来なかったと言うべきか。
首筋や額がじっとりとひどく汗ばんでいた。着ている寝間着が湿るほど。
体が変に熱を持っている上に猛烈に吐き気がする。
それを堪えてベッドの横の目覚まし時計を見た。
時間は二時三十五分。夜中のど真ん中でまだまだ寝れる時間だった。
カーテンの隙間から見える外の様子もまだまだ日の出の気配すら

ない。
もう一度、寝直そうかと思ったが、足先まで汗でベトベトの状態ではとてもそんな気にはなれなかった。
隣で寝ている小さな身体を起こさないように、千夜はそっとベッドから抜け出した。
気分転換にシャワーを浴びよう、と。

◆　◆　◆

栓を捻ると程よい熱さの湯が頭から壁に両手を付いて立つ千夜の一糸纏わぬ肢体に降りかかる。
身体に纏わりついていた汗を流していく。粘着質な嫌な熱も。
「……ふぅ」
気持ちがいい。
顔を洗って済ますよりこっちにして良かった、と選択の正しさを改めて認識する。
このまま湯船にも浸かろうかとも考えてみたが、風呂の栓を抜いていたのを思い出して断念。
湯船に向けていた目線を再び湯が流れていく足元に戻した。
そして、ふと先程までまどろの中で見ていた夢を思い返す。
暗い闇の中だった。足がついているのかさえもわからない、気味の悪い空間。その中にいた。何故か全裸で。
やがてただ漂っていただけだった辺りの闇が蠢き出して、身体に纏わり付き始めた。それがなんとも言えない気持ち悪さだった。まるで退場の毒虫に這われているようで。もがけばもがくほど、身体をきつく戒める。
挙句、下の方から中に侵入して来ようとするところで、目が覚めた。まさに危機一髪。悪夢から淫夢に切り替わって触手系エロゲーのような展開を免れただけマシだっただろうか。
「悪趣味だったな今回のは……いや、エロに走らなかっただけ

『前の奴』の方がマシだったか」
尤も、縛りプレイは一緒だったが。
しかし、転校三日目にしてこれか、と肩を落とさずにはいられなかった。
もう足が付くとは。
連中の鼻の利き具合には呆れを超えて思わず拍手だ。
「一体どこで嗅ぎ取るんだか……」
溜息一つを吐いて、シャワーを止めた。
温かな水滴を先端に滴らす黒髪を掻き上げ、バスルームから出る。
タオルをとろうとした千夜を小柄な人影が待っていた。
「……ん？」
先程まで自分のベッドで眠っていたはず少女が眉尻を下げた表情で、可愛らしい唇をきゅっと結んで俯いていた。
十分注意を払ったはずだったのだが、と思いつつ起こしてしまった少女の顔を伺う。
「起こしてしまったか？　それとも、怖い夢でも……」
最後まで言い切る前に少女が千夜の胸に飛び込んで来た。
思いの外勢いづいたその飛び込みに千夜は尻餅をつく。
「おいおい、まだ拭いてないんだから濡れるぞ」
少女は応えない。顔を千夜の豊かな胸に埋めたまま濡れた身体に抱きつく力を弱めようとはしない。
しばらく、千夜は困った表情で離れようとしない少女のさせるがままにしておいたが、
「……どうした？」
「……闇が、」
胸に埋められた顔から霞むような声が聞こえた。
ん？と頭を撫でれば、今度ははっきりと、
「姉さんに……また、あの、歪んだ気配が……」
撫でていた手を止める。
彼女にもわかったのだろう。寧ろ自分より鮮明に存在を感じれた

のかもしれない。
“感じ取る”のが得手であるこの少女には。
近づきつつある闇の存在に恐怖し震えながら、自分を心配してくれる。
それが千夜には堪らなく嬉しかった。
小さな身体で、力一杯自分を慕ってくれることが。
そんな少女を安心させるようと耳元で精一杯優しく囁く。
「大丈夫だ。まだ来ていない……まだ」
「でも、」
いるよ、近くまで来てる、と泣きそうにうわずった声で少女は訴えて来る。
「ヤダ……置いてかないで、姉さん……連れて行かれないで……お願い……」
「行かない。置いていかない」
ちゃんといるよ、と背中を摩り落ち着かせる。
「安心して眠るといい。守るから。お前といる時間も、これからの時間も……決して、奪わせたりしないから」
そう、守る。
何があっても。どんな事をしてでも。
この手にある一つ一つのかけがえのないもの。
何一つ、失ってたまるものか。
「奪わせない、絶対だ」
それでも奪うと言うのなら。
何度でも来るが良い。
来る者全て、徹底的に叩き潰してやるだけだ。
まだ見ぬ『刺客』に向けて、千夜は内心でそう言い放った。

［六］　胎動の気配（後書き）

と、ここまで載せてみました。
いろいろ改変された場所もありますね。
何やら変貌しているヒロインや名前変わっているキャラや新たに増えている登場人物など。
予定変更など都合が働いてこのような結果になってしまいましたが、これからはまたちょくちょく更新していこうと思うのでよろしくお願いします。

［七］　星の代弁者（前書き）

幸いあれ

［七］　星の代弁者

そこはいつも通りの教室、とは言い難かった。
違うのは、一つの話題が周囲の会話に犇いていたということ。
「ねぇ、今日のニュース見た？」
「うん見た見た。代々木公園のやつでしょ？」
その中の二人の女子の間でもその話題は会話の中に入りこんでいた。
彼女等を始めとして教室中で飛び交う一つの『事件』。
それは昨夜起こったある殺人事件。
世間では一日に最低一人の単位で人が殺されても遺族や一部を除けばほとんど関心を見せないのに、それについては朝から現在の昼休みに至るまでひきりなしに騒ぎ立てている。その理由は、今回のそれがただの殺人事件ではないからだ。
彼等の間で盛り立てられるその事件は確かに『異常』だった。
人が殺された、と一言で言ってしまえばただそれだけだが、中身を聴けば聞き手は例外なく顔を顰めるだろう。
事件が起こった渋谷区随一の敷地を誇る代々木公園で男女のカップルが殺された。
問題はその殺害方法と遺体の有様の方だった。
残忍かつ無惨な死に様で発見された二つの遺体。
男はまるで何かに食い散らかされたように臓腑を抉り出され剥き出しに、顔をグチャクチャにされていた。五体のうち左腕と右足が胴から引き千切られ、まるでフライドチキンを食べたかのようにあちこち削がれていたという。
対して女の方はそちらに比べれば綺麗なほうだったらしい。五体満足、肉を抉られたどころか傷一つなかった。ならば絞殺かと思えばそうでもない。確かに何一つ欠けていないその遺体は男に比べれば綺麗だが、別の意味で痛々しい姿だったらしい。身に着けていた

衣服はボロ布同然に破かれ、ひどい性的暴行を加えられた形跡が見れた、と警察からの情報。
まるで小説の中から飛び出てきたような猟奇的な殺人が日常で起こったことで、皆興奮しているのだ。
会話の中には、これきりで終わるのか、通り魔ならこれで終わるはずがない、などと今後の展開を予測する声すら聞こえる。
のんきなものだ、自然と入ってくるその話に蒼助は呆れて溜息をつく。
知らぬが仏というが、周囲はまさにその通りの状態だった。
お前らが知らないところでそんな死に方をしている連中は腐るほどいるというのに、と何も知らない彼等に忠告してやりたくなる。
「なぁ、女って何で毛虫ぐらいできゃーきゃー言うくせに、ぐちゃでグロな描写はしゃぎながら口に出来るんだ？」
「俺が知るか。今度、お前の数多く存在するセフレにでも聞いておけ」
窓に肘を立てて外を眺めていた昶に素っ気無く態度で何気なく投げかけた問いを蹴り返され、へいへいわかりましたよ、と拗ねたように呟きながら蒼助は自らが放った問いを放棄した。
周りの雑談がいくつも混ざり合う中、それを隠れ蓑にするかのように今度は昶が静かに抑揚を抑えた調子で話を振ってきた。
「……珍しいこともあるんだな。《降魔庁》の処理が遅れるなんてことがあるなんて」
「さーな、総員花見でもして職場放棄してたんじゃねぇーの？」
ちゃかすような蒼助の言葉に、昶は意外にも真面目な顔つきで頷きながら、
「よく考えてみればお前の元・勤め先だからな。それも有り得なくもない」
「そりゃどーゆー意味だ、てめぇ」
そのまんまの意味だろ、と臆せず言って来る相手を蒼助は衝動的に殴りたくなった。

しかし何とか理性を以てして自制し、震える拳をポケットの中に突っ込んで収める。
「とっくに辞めた俺が知るわけねーだろ。氷室も今回の件については何も注文寄越して来ねーし……っん？」
会話の最中、蒼助の左胸ポケットから振動が発された。
そこに入れていた携帯電話の着信反応によるものだった。
反射的とも言える対応で蒼助は即座に取り出し、
「はいもしもし……ってテメェかよっ」
噂をしていればなんとやらで電話の相手は氷室だった。
ここ、教室に姿は無い。いつものことだが、学校内の自身の領域である生徒会室からだろう。
携帯電話片手にどっかり椅子に腰掛けてエラそうにしている様が目に浮かぶ。
「てんめ……学校内にいるのに一々ケータイ使うんじゃねぇよ。用件あるならテメェの足で俺のところまで来やがれ……って一方的にてめぇの要求だけ言って切ろうとするんじゃねぇ！……あ、んにゃろっ」
一方的にかけて来られて切られた携帯電話はつー、つー、と虚しい音を流す。
みしり、と機体が撓る程の力を手に込めた後、それを元あった場所に戻しゆらりと立ち上がる。
「……生徒会室行って来る」
「ああ、行って来い」
会いに行く相手は何となく察しているのか、ただそれだけ言って見送る昶を背に蒼助は昼休みの喧噪に満ちた教室を後にした。

◆　◆　◆

照々と日射しを受ける屋上。
人気の無い昼休みのそこでたった一人で携帯片手で金網に凭れな

がら会話する少女がいた。
「はい、終夜です……ってお前か」
『きみの携帯に登録してあるの私だけでしょ。それともう自慢のガラスの仮面にゴキブリホイホイよろしくで騙されたお友達のアドレスまんまと手に入れたの――千夜？」
「お前も大概失礼な奴だな。否定はしないが。――で、何の用だ」
背中の金網に深く身を沈めながら今度は千夜が尋ねる。
昼食の後、七海を始めとした級友達と教室に戻ろうとしていたところに電話をかけて来た電話の向こうの相手に。
『一度鏡で自分の顔を見直して見るといいよ。君がメール寄越してきたくせに』
言葉と対照的にちっとも感情の揺れを感じない穏やかな音程で紡がれた言葉に、ああそういえばそんなメール家を出る前に送ったな、と千夜はそれを思い出した。
店に顔を出した時にでも返事を聞こうと思っていたのに、わざわざ自分から言って来る辺りこの人物は妙なところで気が利く。
「ああ、そうだった……それで、良い人材に心当たりはあるのか？」
『その前に一つ聞きたいな。突然、腕のいい占い師を知らないかなんて……何かあった？』
容赦無い質問だ。
やたらと勘が冴える鋭いこの相手に尋ねたのは失敗だったか、と思うがこうなってもはや後の祭りだ。
だから答えた。曖昧に、それでも意図がなんとなく伝わってしまう言葉を。
「……私のこの未来、どうなるのかな……と思ってな」
『……』
沈黙が返って来た。
還って深く思わせてしまい、更に問われるのだろうかと思ってい

たが、意外にもそれはなかった。
『……“星詠み”の《志摩雪叢》。私が知る中で最高位の占術師だよ』
「星詠み？」
『……巡る星々と意思を疎通することが出来る人間のことだよ。その声を聞く事が出来る異能から星の代弁者とも呼ばれている』
「陰陽師とかがやる占星術とは違うのか？」
『あれは星の位置で未来の往く先を占うもの。星詠みは道具や媒介など必要ない。直接声を聞く事が出来る。それが彼らの異能』
「それはわかったが、その星の声が聞ける連中は人の未来までわかるのか？」
『見えるらしいよ。彼らではなく星のほうがだけど。高い空から地べた摺りの人を見据えてる、その個々の未来すらも……と昔酒でベロンベロンに酔った彼から聞いた』
酷く信憑性が欠損している気がしたがあえてその疑心を口にしなかった。
それよりも気になったのは、
「何だ、知り合いなのか」
『昔の話だよ……たまにコーヒータダ飲みしてツケを溜めていく側とされる側の関係だよ、今は』
過去に何かあったのか、と気になるが埋めた穴を掘り返すなどという野暮な事はやめておいた。
「で、何処に行けばそいつに会えるんだ？」
『一定の間ごとに公園を移り住んでいる人でね。ちょうど今は渋谷にいるらしいよ、神前の宮下公園だって言っていたけど』
「宮下公園……」
最近、立ち寄った場所だった。
この学校で数少ない自分の本性を知ることとなった男と数日前に出会った場所。
千夜の声から僅かな様子の変化を過敏に感じ取ったのか、三途が

訝しげな声を発する。
『千夜……？』
「……いや、何でもない。そろそろ予鈴がなるから切るぞ。情報ありがとう、放課後店でな」
やや一方的かな、と思うが切った後に確認した携帯のデジタルタイマーがジャスト一分を切っていたので致し方ない。
五限目が化学室での実験だったことを思い出し、千夜は急ぎ足で屋上を去った。

◆　◆　◆

奇妙な夜だと、男は思った。
いつもは静かなここ――――宮下公園は今夜は騒々しく見舞われていた。
と言っても、今見頃の桜の下に人が集まってどんちゃんやっているというわけではない。
男を除いてそこに人はいなかった。
この騒がしさも男やごく一部の者以外には気に留められる事も無ければ気付かれすらしないだろう。
なにしろ集まっているのは浮遊霊や水子などの――――“霊魂”なのだから。
「こいつら、こんなになってもまだ花見がしたいのかねぇ……」
軽口を叩いてはいたが、男は本心ではそうではないことはわかっていた。
この集まる様はまるで何かに惹き寄せられいるようだ。
大輪の花の香りに魅了されて飛び集う蝶の如く。
「いや、こりゃどっちかっつーと電灯に集まる蛾か」
そう独り心地に呟いた時、霊魂たちの動きに変化が起きた。
この地に集ってはいても、何処か所在なさげに漂っていた一つ一つが一方に向かい出した。

何かを見つけたかのように。
男が目で追えば、霊魂たちが向かった先の闇から一つの人影が浮かび上がった。
人影は男のいる場所に近づいて来ているようだ。
……誰だ？
サングラスの奥の双眸を細めよく目を凝らす。
「――――――っ」
人影のがようやく確かな姿で確認出来るほど近づいたところで男は息を呑んだ。
無数の霊魂がその周囲をまとわりつくように迂回する幽玄な光景にはなく。
桜がちらほら散る中を歩くその様に見惚れたわけでもなく。
問題は現れた人影そのものの姿だった。
黒髪が似合う綺麗な少女だった。
八時過ぎたこの時間に何故制服姿なのか気になったが、男の心情はそれを深く考えるどころではなかった。
強い意思を感じる黒真珠のような瞳が印象的なつくりの顔立ちが男は己の中のある人物のそれを重なるのを感じた。
「こいつぁ……驚いたな」
息を吐くように漏れる言葉を少女の元に届かないように呟いた。
えげつないまでに“あの人”と似ていた。顔だけではなく雰囲気や立ち振る舞いすら。
いや、“あの女”に言わせれば“あの人”がこの少女に似ているらしいが。
少女は己の周りをふよふよ漂う数多いそれを鬱陶しがる事も気にする事も無くさせるがままにして男の前まで着いた。
男の顔を暫し見た後、
「……志摩雪叢（しまゆきむら）か？」
俺の名前を知っているのか、と誰が教えたのか考えて出て来たのは時折行く喫茶店の店長の魔女の顔だった。

「おう、確かにそうだが……アンタは？」
「――――終夜千夜。あなたに星の代弁を頼みたい」
終夜。
“あの人”の名が何故姓に使われているのか、と驚愕を覚えたがなんとか顔には出さないように出来た。
疑問を胸の奥にしまい込み、男――――志摩は少女に問う。
「俺が星詠みだって知っているのかい？」
「ああ、アイツが言うのには知る限りでは最高の星詠みだと」
「よせよせ、照れるじゃねぇか……そんな大したもんじゃねぇ、実際はフラフラし過ぎて本家から破門されたプー太郎だよ、俺ぁ」
胸を張って言うと少女――――千夜は呆れることも無礼な態度に不快を露にすることもなく、ただ笑い、
「なに、本家抜けでは私も同類だ……もっとも、こっちから出てやったのだが」
ほぅ、とその言葉に志摩は興味を惹かれる。
血は争えないのか、この少女も“あの人”と同じ道を選んだらしい。
もっとも、あの時とは事情は違うだろうが。
「で、星から何を聞きたいんだ？　嬢ちゃんくらいのレディになると、恋とか……」
「私のこれからのことを」
志摩の言葉を遮るように千夜は言った。
微笑は浮かべられたままだったが、声色そのものからはあまり穏やかなものを感じる事は出来ない。
その言葉にどれほどの意味が詰まっているのか、既に“あの女”から話を聞かされ既知はしていた男には酷く重く感じ取れた。
痛ましさを顔に出さないようにしながら、
「わかった……と、それにしてもアンタ……随分好かれているじゃねぇか」
その周囲を飛び交う霊魂たちを指させば、千夜はようやく周りの

それに関心を向けた。
「ああ、これか……懐いているだけだから“他より”マシだよ」
他より、ということは他からは懐かれるだけでは済んでいないということだ。
その言葉からだけでは現状が何処まで来ているのかわからないが、今はそれより注文に応えるべきだろう。
「……返事が返って来た。すごいな、かなり多くの星がアンタの未来について答えてる」
空から全てを見ている彼らは人という小さな存在の未来になど興味はほとんど持たず、こちらが聞いてもようやく無数のうち一つがきまぐれに返事をくれるのが普通。
これは星詠みの暦始まって以来の異例かもしれない。
……それほど、この嬢ちゃんが只者じゃないって事か。
本人に自覚があるわけがないだろうが。
「それで、星は何て答えてくれたんだ？」
「……お世辞にもいい返事じゃねぇなぁ」
こちらの言葉に少女は僅かに眉を顰めた。
それで？と促して来るので、少々気が滅入るが志摩はお告げを聞いたからには答えなければならないという星詠みの本能に従った。
「最悪だ。どいつもこいつも、アンタの未来は絶望的だと答えている」
「……いくつか代表をあげてくれ」
「……まぁ、これは言っておかなきゃならねぇよな。……アンタ、鬼に憑かれてるそうだ」
すると、ふむ、と頷き、
「確かに二匹に憑かれているかもな……家に帰るとたまに勝手に茶を入れて寛いでいる図々しいデカイのと小さいのがいるが」
「いや、そっちじゃない……確かに憑かれていると言っても過言じゃないくらい迷惑だろうがそれじゃない別のだ。もっと、悪質で陰氣がプンプンしてる奴がアンタを狙っているらしい」

下げていた顔をあげる。
そうして見上げた千夜の顔は依然と平然としていた。
まるで、予想が確信に変わっただけ。ただそれだけだと言うようで。
「アンタ……随分と落ち着いているな」
「取り乱して欲しいか？　代弁の報酬代わりにというならしてやってもいいが」
小憎たらしい口を叩きながら、皮肉っぽく笑う千夜。
人を小馬鹿にした挑発気味の笑みも“あの人”そっくりだった。
性格の方もさすがあの性格の元となったというべきか、相当な具合で捩じれているだろう。
「まぁ、大体その件については検討済みだったんだよ。どうも三ヶ月くらい前から妙な危険察知能力が付いたらしくてな。今回、あなたのところに来たのは確認みたいなものなんだ」
「ほう、それで……確認出来たかい？」
「ああ、充分にな。さすが、アイツが評価するだけの事あるというのが感想だ……それで、代弁のお代はいくらなんだ」
「いらんよ。俺は美人からは金は取らない主義なんだね」
そうか？と取り出した財布を上着の胸ポケットに戻すと、
「それではこれで失礼するよ。お騒がせして悪かったな」
「ん、毎度あ……」
そう返そうとした時、一つの『声』が志摩の耳に届いた。
「……ちょっと待ちな」
既に背を向けて離れていく千夜を引き止めた。
突然声を止められた千夜は怪訝な表情で首だけ振り返った。
「何だ、やっぱり報酬はい……」
「いやそうじゃない。ちょいと遅ればせながらでもう一つ言伝が来た」
千夜の目を見開く。
あんたもこれはちょっとした意表突きだろう？と思いながら志摩

は悠然と告げた。
「これから先アンタに“青”が関わる。そいつはアンタの行き先を照らす一条の光だそうだ」
「青……？　何だ、曖昧な……」
「属性概念のことなんだろうが……まぁ、青の概念の持ち主だということは確かだ。さすがに名前までは、な……向こうさんの機嫌ってのもあるから無理はできねぇ。悪いな」
いや、そんなことはない、と志摩に対して微笑み、
「御忠告どうも。これは礼だ」
そう言って小銭を放ってきた。的確な速さと加減で投げられたそれは反射的に広げた両手にスコンと入った。
百円一枚、十円二枚。
「今日は妙に冷えるからな……公園で寝るには少し寝冷えするぞ」
それだけ言って千夜は今度こそ去っていく。
公園に集まっていた全ての霊魂を引き連れて。
彼女が来る前までの騒がしさが嘘のように静まり返った公園に一人残された志摩は苦笑いし、
「……少女に良き幸いあらんことを……なんてな」

［七］　星の代弁者（後書き）

事件は現場で起こっている（特に深い意味はない
カップルというのは言わずともわかるでしょうが、前回の野外プレイをしようとしていた奴等。当然、犯人は……ね。
話は移りますがようやく判明したおっさんの名前。
ちなみに本当は勘当されていません。
星詠みとしては優秀な方なので、本家も手放すのは惜しいからフラフラしているのは目を瞑っています。

［八］　猟奇殺人街（前書き）

続くと思われた日常
けれどそれが偽りだと気づいた時、
それが終わりが近いと知った時、
そこに住む者はどうするだろうか

［八］　猟奇殺人街

登校早々、教室に入った蒼助を待っていたのはある種の地獄だった。
いつもの三分の一は欠けている2―Dのクラスメイト。
しかも見当たらないのは女子のみ。
男だらけという個人的には酷く喜ばしくない光景だった。
「何だこの異空間は……昨日までは共学だった筈だぞ、この学校」
朝から酷く気分を害された蒼助はかなり失礼なことぼやきながら、空手部の朝練で登校が早いため既に教室にいた昶のもとへと歩み寄る。
そして、いつもと違いすぎるこの状況に対する疑問をぶちまける。
「どーゆーこった、昶……この潤いのない空間は」
「朝来てお前と同じように驚かされた俺が知るわけないだろう」
素っ気無い返事を返された。
そこへ、同じくして弓道部に所属するため朝が早い七海が二人のもとへやってきた。
「おはようさん。他のところも似たようなもんやで。この調子でいくと学校の女子半分は休んどるやないか？」
「ったく、ストでも始めたのかよ……時代誤差なことしやがるもんだ」
そう言うと、違うだろ、と双方からツッコミをもらった。
そんな時、
「その件なんだけどねぇ」
突然、三人の輪の中に教室にはいなかったはずの久留美が現れた。
なんの気配も前触れもなく出現した級友に三人は驚きの声をあげながら思わず後ろに下がった。
「うおっ！　お、お前何処から生えた！？」
「人をキノコみたいに言うんじゃないわよ、失礼ね」

言われて仕方ないような登場をしておきながら憤慨する久留美に頭を抱えながらもズレが生じている会話を修正しようと昶が試みる。
「新條、お前この有様の真相を知っているのか」
「ああ、うん。私もそれ知ろうとさっき職員室で聞き耳立ててたんだけど、どうもあの連続猟奇殺人が原因らしいわよ。ほら、今朝報道されてたニュースで五人目の被害者。あれが月守の生徒だったの知ってるでしょ？　そのニュースを見た父兄が当分登校させないって電話が殺到しているみたいで。まぁ、うちだけじゃなくて渋谷の何処の学校もこんなことだと思うけど」
その事実に蒼助は沈黙する。
他の二人は苦渋の表情を浮べていた。
四日前に起こった猟奇殺人はもはや連続通り魔殺人と化していた。四日の間にもう五人も殺されている。最初のカップル以降は全て女性。その点から犯人の標的は女性に向けられていることがわかった。
被害者の中に娘と同年代の女子生徒がいたのだ。父兄としてはもう他人事として傍観視しているわけにはいくまい。
いってらっしゃい、という言葉が娘と交わした最期の会話になどしたくはないに決まっている。
最悪の事態を考えたら、出席日数も授業もどうでもいいと娘のみを案じる親は家から一歩も出さないと言う最終手段に出たのだろう。
「……で、そんな物騒な状況でよく登校しようと思ったなお前ら」
言葉の向かう先は現在、教室にいる数少ない女子である七海と久留美。
双方、お互い顔を合わせると胸を張って、
「はーい。うち、今、家出た姉と暮らしてまーす。姉、夜中に原稿上がって爆睡してて止められる以前の問題やったー」
「はーい。私、親に止められたけど振り切ってきましたー」
七海をそれ見てやっぱりねぇなー、とか久留美のそれを見て意外

とあるな、とか思いながら、
「まぁ七海はともかく……久留美、その心は？」
「ジャーナリストはいかなる危険にも怯まず常に戦線に立つものよ……って何で七海ちゃんはともかく？」
そりゃ、『退魔師』だから。
などとは言えないので、あえて何も言わずそっぽ向いている本人と同じように適当に誤魔化す。
「さすがに襲わねぇだろ、これは。男心を刺激する要素が外見にも中身にも一つもありゃしねがぁっ！」
青筋浮べた七海のラリアットの強襲に蒼助は強制的に台詞の中断を余儀なくされた。
ぶっ倒れた蒼助を尻目にした後、七海は開きっぱなしのドアを見やって、
「ちーちゃん来るやろかぁ……家厳しそうやから他と同じ見たく」
「っぐ……ってオイ待て、その気の抜ける呼び名は誰を指してる」
「誰って、終夜さんに決まっとるやないか。千夜って“ちよ”って読めるやろ？　だから、親しみ込めてそう呼んで……ってなんやねんその痛いものを見る目は」
「お前……呼ばれる方の気持ち考えてるか？」
「なんやとぉっ、ちーちゃんは別に良いって……」
「……いや、もういい」
この呼び名の許可を申し込まれた時の若干眉を引き攣らせる千夜の顔を蒼助は脳裏に容易に描く事が出来た。
ポーカーフェイスの裏での引き様は凄まじい事だっただろう。
仮面を被るってのいうのもやはりこちらの予想以上に大変な事なんだろう、とここにはいない千夜に本性を知る者としては同情せずにはいられなかった。
「都築、随分あの転校生と仲がいいみたいだな」
「へへっ……隣の席ちゅーこともあっていろいろ頼ってくれるんや。ほら、あのコ見たまんまお嬢様やろ？　悪い奴に絡まれないように

うちがちゃんと守ってやらへんと……ってだから何なんや、蒼助！
今度は久留美までっ」
こちらの哀れむような視線にぎゃーぎゃー喚く七海を尻目に蒼助は久留美と顔を見合う。
あの放課後、彼女のお嬢様とは程遠い本性を知ってしまった者同士には、今の七海はなんというか、哀れだ。
それは置いておくとして、家が厳しいかどうかはともかく千夜が登校して来るかは気になる。
と、そこへ、
「おはようございます」
開きっぱなしのドアから噂の当本人が優雅に微笑んで登校してきた。
きっちり『仮面』を被って。
しかし、教室に足を踏み入れて目の当たりにした光景に驚いた表情で目を軽く瞬く。これは恐らく演技でもなんでもなく素の反応だろう。
そんな彼女に七海がいち早く声をかけた。
「あ、ちーちゃんっ。来たんか」
「都築さん……あの、これは一体……」
事情を話そうと口を開いた七海だったが、更なる早さで先手を久留美がとった。
「最近、この渋谷で起こってる物騒な事件で……ちょっとね」
自分の役を横取りされてむくれている七海を無視して続ける。
「警察も相当手を焼いているみたいよ。現場の残っている手がかりが少なすぎて捜査は進まない。被害者の共通点も女性であることと殺害方法だけで最初のカップルを除いて人間関係に繋がりはなし。おまけに該者達は際立って人柄が悪いというわけでもなく、特定の恨みを買っている情報も見当たらない。そうなるともうこれは通り魔による無差別殺人としか考えられないけれど……それがわかっても目撃情報も無しでは八方塞がり……ってところかしら」

「……なぁ、ご丁寧に情報公開してくれるのは嬉しいが、その一般人が知れる範囲を超えた情報は何処から流れてくるんだ」
そんな野暮なことを尋ねる昶に、
「事件は会議室じゃなくて現場で起きてるってね。これは基本。ニュース見てわざわざ野次馬に混じって現場で聞き込みしたのよ」
「おいおい、最近の警察は一般人に内部の情報漏らすようになったんだぁ？」
「私の伯父さんが警視庁に勤めてるのよ。姪思いのやっさし～～～人だからちょっと頼めばすぐに教えてくれるのよねぇ～」
台詞の一部の強調に異様な含みを感じたのは自分だけではないだろう、と蒼助が周りを見れば皆、深く追求はしまいという決意が顔に出ていた。
そう気にしてはいけない。
何があって『優しい』のかは、気にしてはいけない。
誰に悟られる事も無く蒼助がそう決意した時だった。
「席つけー、ホームルーム始めるぞ」
いつの間にか朝礼の時間が来ていて、蔵間が教室にやってきた。
これを区切りにと思ったのか久留美はそこで話に区切りを付けて席に戻ろうとしていたが、ふと何かを思い出したように。
「あ、そうだ。終夜さん、この前出来なかったインタビュー図書室でやりたいんだけど構わない？」
あとで話しを聞けば、インタビューを頼んでいたばかりに様子を窺っていたそれを聞かれて人質にとられたらしい。
あんな目に遭っても諦めていないその図太い根性は大したものだ。
千夜自身もその負い目と断った後の“怖さ”を悟ってか、やんわりと受け入れた。
「いいですよ。放課後、図書室ですね」
「じゃ、よろしく」
会話の終了を機に蒼助一同はそれぞれの席へと戻った。
クラスの全員が席に着くと、蔵間は出席の点呼を始めた。

「まず、皆も知っているだろうが、近頃起こっている事件のことがあって保護者から欠席の連絡を受けた生徒を報せる。春原、佐々木、有川、木戸……」

淡々と挙げられていく生徒の名前。全て女子だ。

既に久留美の先取り情報によって熟知していた蒼助には驚く点がない。

聞き流しているうちに女子の半数以上の名前が欠席者としてあげられていた。

「――――以上の生徒は本日をもって近頃渋谷で頻繁に起こっている通り魔事件が止むまで当分の間休学を承諾された奴らだ。今日来ている女子も、これは校長から降りた今回限りの特例だから成績とか出席日数云々は気にせず、帰ったら親に聞かせて明日からどうするかちゃんと相談しろよ。――――それから、玖珂」

突然の指名に蒼助は浮ついていた意識を呼び戻す。

「……あ？」

「昼休み、俺のとこに来いよ。速攻でな」

蔵間の右手の親指を起てて上を示す。

その動作で蒼助は『用件』を即座に理解した。

蒼助にしかわからないその合図（サイン）に、

「了解。行きゃ良いんでしょ、行きゃ」

「よし、それじゃぁホームルーム終わり！　チャイム鳴るまで教室にいろよー」

奇しくも言葉と同時にチャイムが鳴り、生徒たちは動き出した。

◆　◆　◆

昼休みを迎え、蒼助は朝言われた通り蔵間のもとへ向かった。

ただし、職員室ではなく『指定された』屋上へ。

建物が古いせいか、やや立て付けが悪くなっている扉を屋上使用常習者のコツでガタガタ言わせて開けて、踏み入れば指定した本人

が既に来ていて煙草をふかしていた。
「速攻で来いっつったろ、蒼助ぇ」
「これ以上は無理だっつーの。これで、三分しか経ってねぇんだぞ“蔵間さん”」
知るか、と理不尽にも限界ギリギリの努力を切り捨てる蔵間に頬を引き攣らせながらも手すりに寄っかかるその隣に歩み寄る。
「一本くれよ」
「……一応、教師の立場に立つ俺が生徒に煙草勧めるのってどうよ」
「堅い事言うなよ～、どーせ教師なんて退屈しのぎなんだろ？　なぁ、“総統殿”」
最後の部分を強調して言葉にすると、蔵間はバツが悪そうに目を逸らし、
「……しゃーねぇな、黙っとけよ？　結構気に入ってんだからこの副業」
「へいへい。退魔業界の国家機関たる天下の《降魔庁》のボスがこんなところで高校生に古典教えてんだから世も末だよなぁ……」
「ほっとけ、エラいお世話だ」
蒼助の皮肉に蔵間は銜えた煙草を噛み締め、開き直る。
ポケットからライターを取り出し、火を付けていると屋上から見渡せる渋谷の街をしばし黙って眺めていた蔵間が口を開いた。
「……話ってのは例の事件のことなんだが」
「やっぱりか……ふぁ」
台詞の途中で込み上げて来た欠伸を噛み殺す。
それを見た蔵間が、
「何だ、昨日の夜は朝までご無体か？」
「ちげぇ。つーか、ご無体って……まぁいいけどさ。ここのところ氷室と朝倉に付き合わされて渋谷を一晩中巡回させられてんだ。あの野郎、毎回毎回ようやく切り上げたと思ったら朝の五時だぞ…日の出の朝日が目に滲みるったらありゃしねぇ」
ちなみに『これ』が四日前に呼び出された際に受けた依頼だった。

個人で自由に動けない上にあの氷室と再び行動をともにすることになるという非常に気の進まない仕事だったが、選り好み出来る場合と立場ではなく生活費の為にかなり自分を抑えて受けた。
「はっ、懐かしかったろ。降魔庁時代が」
「くそっ。面白がりやがって……俺と朝倉と氷室でチーム組ませたのアンタだっただろが……何の嫌がらせだったんだよ、ちくしょう」

悪態つきながら肺に溜め込んでいた鬱憤と一緒に煙を吐き出す。
思えば、この男に誘われて降魔庁に入ったのだったな、と言われた通り蒼助は昔を懐かしむ羽目になった。
『目標』と『理由』を失って、荒れていたガキだった手に負えないの獣のようだった自分を叩きのめし、失ったものを取り戻すチャンスをやろうと降魔庁に迎えたのが蔵間恭一だった。
日本を影から支える降魔庁の中心である一族の現当主であるこの男はどういった経緯があったのかは知れないが、玖珂家――――というより親父の善之助個人――――と旧知の仲であった。家に尋ねて来たところを何故か気に入られて以来、蔵間は蒼助にとって年の近い兄のような存在となった。喧嘩に明け暮れて知ったような振りして何も知らなかった頃、いろいろ教え込まれたものだ。本当にいろいろと。
初めてあった時から三年を過ぎたが、あれから入ってから様々な足りなかったものを手に入れはしたものの、結局『失したもの』は取り戻せないと悟って降魔庁は辞めてしまった。
あの頃より自分はどれほどマシな人間になれただろうか、とらしくもなく感慨に浸っていると、
「……っと、話がズレちまったな。で、例の事件の事だが……」
「ああ、アレな。珍しいじゃねぇか……アンタとこの隠蔽が遅れるなんて。仕事、放っぽり出して呑気に花見にうつつぬかしでもしてたかよ？」
からかうように言ってみたが、蔵間の顔はマジな表情のまま。

いつもと呼び出される時とは何かが違う。
「蔵間さん……？」
「……お前、今夜から巡回しなくて済むぞ。ゆっくり睡眠時間取り戻せ」
「あ？　突然何言って……」
「今朝の会議で、所属五年未満の退魔師は事件解決まで活動停止が決定した」
「……っなんだと！？」
銜えていた煙草を口を開いた際に落とした。
「か、活動停止って……」
「この事件に対する関与はもちろん、通常の活動も停止。ホシを討伐するまで無期限だ」
その言葉に蒼助は唖然とせざるをえなかった。
そして次に、『異常』を察した。
「おい、何考えてんだよアンタ……」
「会議の結果、総員一致でこの事件は若い連中には荷が勝ち過ぎてるっつー結論が出てな。そういうわけだ、今日中に命令が伝わるだろうからお前もお役御免だ」
「そうじゃなくて……」
そんな事を聞いているのではない。
聞いているのは、
「たかが魔性一匹に……何が荷が勝ち過ぎるってんだよ。どーかしてるぜ」
「……どっちかっつーと、どーかしてるのはこの事件の方なんだがな」
「……どういうことだよ」
蒼助のにじり寄るような視線に蔵間は少しの躊躇を沈黙で表し、そして諦めか決意か、溜息混じりに口を開き、
「……今回の事件の被害者の死因知ってるよな？」
「直接的な死因は知らねぇよ……ニュースでやってたレイプした

後殺されたとしか……」
「笑い話にしかならねぇからな……表には曖昧にしか発表を許してねぇんだよ。――――外傷はない。刺殺や撲殺の傷なければ、絞殺の痕もない。遺体には死に至る致命傷には程遠い掠り傷くらいしか残っていなかった」
「……なんだそりゃ、じゃぁどうやって殺されたってんだ」
「ヤリ殺し」
さらりと告げられた答え。
思わず脱力しつつ、
「……ふざけてんのか」
「いや大真面目。解剖の結果、子宮から大量の精液が出て来たそうだ。死因は医学的には腹上死による心臓疾患だった」
「医学的には……ってことは？」
「最初の男はフライドチキンみたいに食い殺されて、女は死ぬまで犯された。人間ができる所業じゃねぇし、それが出来たらもう“人間じゃない”。だから降魔庁が動くわけになったんだが……一応、どんな状態なのかうちも確認させている。調べさせたら――――」
次の言葉は蒼助を凍り付かせた。
「生気も魂も丸ごと持っていかれていた。こっちの業界的に言えば、真相は《感応法》によりそれが行われ衰弱死に至ったってところだ」
感応法。
性交などで精神を昂らせ、体液交換する事で相手の生気を賜る呪法。
本来なら互いの力を一時的に高め合うか、弱った相手に己の生気を分け与える応急処置的術だが、使用法を誤った方向で応用すれば相手の力、生命力を根こそぎ奪い取り己の潜在能力を上昇させる事も出来る。そんなことをすれば、奪われた方は衰弱死するが。
「殺害方法はそれ目当てで実行されたと思われる。唯一異なる死因の最初のカップルの男の方は、たまたまだな。本命は女で、おまけの男は肉ごと適当に食われただけって感じなんだ」

「……だからってよ、何もベテランにしぼって捜査する必要あるのかよ。珍しい事じゃねぇじゃねぇか」
「……確かに、これがただの魔性が起こした事件ならな」
意味深な言葉に蒼助は訝しげに眉を顰める。
蔵間は合間にふぅー、と口から煙を吐き出して、言葉を紡ぐ。
問いかけの形にして。
「今回の事件、何で表沙汰になったと思う？」
「あ？」
何を言い出すのだろう、と蒼助は目を瞬かせた。
「んなもん……アンタとこが差し押さえに遅れたからに決まって……」
「別にうちは総出で花見にも飲みにも言ってねぇ。真面目にお仕事してた……にも関わらず、先に気付いて発見したのは通りすがりの一般人で、動いたのは警察だった」
それは驚愕の瞬間だった。
まさか、と蒼助は思わず蔵間を顔を凝視した。
「……まさか……気付かなかったのか？」
「ご名答」
一言の肯定が何よりも事の異常さを蒼助に訴えかけて来ていた。
「アンタとこの探知機能は絶対じゃなかったのかよ……」
「のはずだっただがな……どういうわけか、あの夜は現場になる代々木に反応はなかった。もちろん、探知機能は正常な動きだった、故障していない。だが、結果はコレだ。初犯から四日で五人もやられてる……」
ぎり、と蔵間の口元から聞こえる歯軋りの音。
前歯に挟まったタバコが拉げていた。
「考え方としては……ホシは探知にひっかからねぇように陰気を隠しながら犯行に及んだと思われている」
「んな馬鹿なっ……器に入ったってそんなことは出来るはずがねぇ。あれはどうあっても隠せるもんじゃ……」

「それが自在に出来る新種が現れたってなら……話しは別だ」
蒼助、と続けて蔵間は凭れかかっていた手すりから背を浮かせ、真っ直ぐに蒼助の目を捉えて言った。
「そーゆーわけだ。手ぇ引け、蒼助。もう、事態はガキが首つっこんでいい笑ってられる状況じゃねぇみたいだからな」
普段学校で見せることない、一組織をまとめる頂点に立つ者としての威厳を醸し出す見慣れた男の姿に蒼助は言葉を失った。
少しして、要件は全て言い渡せたと思ったのか蔵間は一息付き、タバコを手すりの向こうに放り捨て、硬直している蒼助の左肩をポンと叩いて、
「俺たちは常に日常とは真逆の非日常側にいるが……その非日常にももっと深い場所があるのかもな……それこそ、触れてはいけない禁忌とば呼ばれる領域が」
呟きとも意見を求めるようにもとれる言葉を残して、蔵間は屋上から去って行った。
残された蒼助の内側に、やがて大きく拡がる、今は小さな揺らぎ起こして。

［八］　猟奇殺人街（後書き）

やっと出来た……蔵間との会話で時間食いました。
改稿前のおかしな点を直すのに意外と梃子摺った。
もうちっと書いたろかと思ったが、これ以上ずるずるやるのもね。
改稿になってからまだ直接登場していない氷室は次回ようやくお披露目の予定。
つーか私、期末考査（汗）

【九】　転がりだす石（前書き）

石は転がりだした
導くように
誘うように

［九］　転がりだす石

屋上を後にした蒼助は昼休み開始直後に食堂で昼飯を食べる約束をしていた渚、昶、七海の元へ向かい、蔵間から聞かされた話の一部の確認をした。

「で、本当なのかよ。活動停止って話は」

「うん、本当。今朝、俺とマサのところにもメール来た」

タヌキそばを啜りながら答える向かい側の席に座る渚に更に問う。

ある意味先程の事実の真偽よりも知りたい事を。

「氷室は？」

「いつもの場所。お昼いらないって」

「いやそうじゃなくて……命令に対する反応はどうだったんだよ」

「ん～……別に、特に怒るというワケでもなく理由を聞こうと本部に掛け合うわけでもなく。いいの？って聞いたけど、黙って生徒会の書類に向き合うばっかで」

あっさりした反応だ。

あの退魔師の使命と役割を至上にし重んじていた男が命令とはいえあまりに突然で理不尽な命令を受け入れるなどあるのだろうか。

古いしきたりに縛られているその様は蒼助自身とはあまりにも反面的で何かと「お前のような人間が退魔師だとは」と衝突していたのに。

「それにしても、あの降魔庁の不始末の裏にそんな事実があったとはな……」

隣でエビフライをかじっている昶が呟き、

「せやなぁ……でも、陰気が掴められへんのやろ？　どないして見つけ出す気なんやろなぁ……」

渚の隣でカツ丼をかっ込む七海が疑問を口にする。

それもそうだよなぁ、と思いながら蒼助も自分の頼んだチャーシューメンをずるずる啜る。

降魔庁の霊力探知機能――――《天理の眼》が使えないとなると退魔師が直接動いて探索する羽目になる。
効率が悪い上に、陰気を隠せる追われる側に対して追う側であるこちらには不利だ。
その問いに対し答えたのは口の中のそばを呑み下した直後の渚が答えた。
「気にはなるけどね、動くなって言われた俺達にはどうすること出来ないし、必要もない……かな。上がどうにかするでしょ」
渚のこの反応には今更驚く事ない。
この男はそういう人間だ。退魔師としての役目に使命感を持っているわけでもなく、ただそこに『氷室雅明』という相棒がいるから、同じ道を歩むべく隣を行くだけなのだ。
降魔庁にいた頃にチームを組んでいたときから、そうだった。氷室が望む事を自身の望みと、まるで影にように傍に立つ。
あの男の何処が良いのかは知れないが、渚は氷室を何よりも大事にしている。
そのべったりぶりには一時はそっちなのかと尋ねてしまったことがあるが、本気で殴られて否定された。
そんなじゃない、でも大切だ、と。俺が見つけた最初の理解者(なかま)だから、と。
何が、と問えば秘密の一言であしらわれてしまいわからずじまいだった。
二人の間には見えない共有の糸でもあるらしい。
「で、お前はどうするんだ蒼助」
「あん？　何が」
突然昶から振られた言葉に蒼助は一瞬意味を解りかねた。
「依頼人はもう動けない。それでも、お前はこの件に関わるかということを聞いている」
ああ、とようやく理解して。
確かに氷室が動けないとなるとこの仕事は存在理由を喪す。

つまり、今回の仕事は無しとなる。
これ以上関わったところで、報酬が出るわけではないのに首を突っ込む必要はあるのか。
元より、蒼助も退魔師として誇りや義務感を持っているわけではない。ただ、そういう家に生まれてショボイなりにも《力》があって。かつて在った『目標』がこの道の上にいただけで。そして、今はもう、昔取った杵柄を生かして日々を食いつぶす糧でしかない。
自分達がしなくてはいけないことではない。他にやる人間がいるというのだから、それでいいのではないだろうか。
「……俺は」
濃く色づいたスープから箸で掴み上げていた麺が冷めかけていた時。
蒼助が己の決断を口に出す前に、近くでやや昂ぶった口調の声があがった。
「体育館裏で？　マジかよっ」
「ああ、行ってみようぜ」
後方を見遣った蒼助の視界に映ったのは何やら興奮気味に会話しながら食堂を駆け出ていく男子生徒二人。周囲に視界を広げれば、彼等と同じように食堂から外へと向かう者が何名か。
何事だ、と口にする前に同じ思いを抱いていた友人がそれを一足早く口にした。
「なんやねん、一体……」
「体育館裏が、どうとか言っていたな」
しっかり会話を聞き取っていた昶がキーワードを口にする。
そして、蒼助は他の三人を見た。
他の三人も蒼助とそれぞれの顔を見た。
互いが交わした意思は同じものだった。
「……行ってみるか」
頷きもせず、彼等は同意を行動に表した。

◆　◆　◆

食いかけの昼食を放置して、体育館裏に来てみれば、そこは生徒で出来た人だかりでその奥が塞がれていた。

僅かな隙間を縫うように蒼助は先頭を切って突き進む。

後ろから続く渚が窮屈さに呻きながら、

「うぎゅっ……うわ、皆すごい野次馬根性だね。よっぽど暇なのかな」

「俺らが言える立場かよ」

こうして同じように来ているのだから人の事は言えないだろう。

人波を掻き分けて無理矢理進み、下手すれば押しつぶされかねないそこから一早く押し出される形でようやく脱出した蒼助の目に飛び込んできたのは――――

「……っっ！」

注目の的になっている目の前の光景を見た瞬間、蒼助は目を剥いて絶句した。

僅かに遅れて辿り着いた渚もその光景を見て同じ状態に陥った。

「これは……」

目にしたのは、地に伏し、壁に凭れるなど様々な形で倒れる複数の男子生徒。ボロボロだったが、その風体には見覚えがあった。

少なくとも、蒼助には若干なりとも認識のある。

「こいつら、あの時の……」

もう二、三日が過ぎていたらきっと記憶から消え去っていただろう。

だが、今は辛うじて彼らの事は残っていた。

一週間前、転校生の終夜千夜に絡んだ神崎が引き連れていた舎弟達。

それが、気絶しているのか動けないのか、ピクリとも動かず地面に転がっていた。

「っと、ボーッと見てる場合じゃないね」

一足先に我に返った渚の声に蒼助もハッとして改めて状況を認識する。

非常に気が進まないが、ここまで来てしまったからには退くわけには行かない。

とりあえず、後始末は教員達がやるだろうから、とりあえず渚のように舎弟達の状態を確認しようと蒼助は俯せになって地面に突っ伏している一人をごろりとひっくり返した。

「っ！」

隠れていた顔が露わになった瞬間、蒼助とその近くにいた人間は喉を引きつらせた。

女子が悲鳴を上げるのを遠くに感じながら、蒼助は目を背けたくなるような悲惨な様をただただ見つめる。

酷い有様だった。一体どれほど殴ったのか、肌は赤黒く変色し、元が分からなくなるほど腫れ上がり、鼻は拉げたように折れていた。

途中で泣き叫んだのか、青タンになって腫れた瞼の下の両目から涙が流れた跡があった。

ごくり、と唾を呑み込み、服越しに体を隠れた体の状態イメージした。

これは私刑（リンチ）だ。きっと服の下はもっとすごいことになっているだろう、と。

「酷い……こっちは両足折られてる。そっちは？」

壁にもたれている方を見ていた見ていた渚の質問に突き動かされ、両脚に触れる。

探ると、正常な状態では有り得ない不自然な手応えが手の平に伝わってきた。

「こっちもだ……まさか、こいつら全員……脚を折られて」

両脚を潰され、抵抗する事も出来ない状態にされて、されるがままに嬲られたのだろう。

蒼助の経験上の知識にある報復の中でも最悪の手段だ。

「顔はぐちゃぐちゃ、身体はボコボコ……再起不能ってとこかな

？」

周囲に広がる凄惨な光景を見回しながら、渚はそう呟いた。

◆　◆　◆

男――――神崎はご機嫌で悦に浸って廊下を歩いていた。

爽快な気分に比例して足並みが信じられない程軽かった。

ズボンのポケットに突っ込んだ手に付いた濡れた感触すら心地よく感じられた。

先程から前から神崎が進む方向とはまるで逆の方向の神崎が来た道を急ぎ足で辿って行く人間達。

きっと先程までいた『あの場所』に向かっているのだろう、と男は行き先をふんだ。

つい先程、男は『あの場所』で手に入れた『力』を試していた。

生意気にも自分を見限った塵共を相手に。

結果はいうまでもない。良好だったからこそ、神崎はご機嫌だった。

泣き叫んで、許しを請う連中のザマに神崎は再びかつての『己の世界』が戻ってきたことを実感した。

己の力が全てを支配する世界。虫けら共が強者である自分に従属し、逆らう愚か者を徹底的に弄りひれ伏せさせる。

それこそ、神崎が求める世界であり絶対の法則（ルール）。

「くくっ……この力さえあれば、俺は」

そう、この力さえあればもう二度と何にも屈することはない。

あの終夜千夜だってもう意のままだ。

玖珂蒼助も連中のように嬲れ、確実に殺せる。

あの二人だけじゃない、視界に映る限りの気に入らない全てを蹂躙できる。

「ひっ……ひはははは、――――ッ！？」

上り階段まで来た神崎は強烈な気配にバッと階段を見上げた。

見上げたその先に居たのは一人の男。
無表情に眼鏡のレンズ越しの冷たく澄んだ眼で、寒気がするほどの鋭い視線を向けてくる。
何も語らず、何もせず、ただただ冷たく怜悧な視線を向けてくるだけ。
それだけだというのに、背筋が寒い。
指先が何故か震える。
全身の毛穴が開き、冷たい汗が噴き出る。
目の前の存在に対して記憶に覚えはあった。
むしろ、忘れるはずがないほど。
この男も己が持つ力が通じなかった男だ。
いまこそは生徒会長だが、かつては書記を務めていた頃、校内で暴力沙汰を起こしたときの処分で初めて存在を認識した男だった。
名は氷室雅明（ひむろまさあき）。
蒼助とは違った形で、自身に決定的な敗北を知らしめたもう一人の憎悪の対象。
いつものように、父親の権力に恐れをなした教師達によって見送りになるはずだった。
だが、それは新任の書記によって妨げられた。
氷室の意見で場はひっくりかえり、三ヶ月の停学を食らうことになった。
父親に訴えたが、翌日に「諦めろ、今回は大人しくしておけ」と言い渡された。
何故だと言及すれば、らしくもなく青ざめた顔をしてただ一言。
『《土御門》には……関わるな。相手が悪過ぎる……っ』
震える声で紡がれた言葉は明らかな恐怖を表現していた。
あの怖がり方は己の上に立つモノに対するものだった。
食物連鎖に従った、捕食される側が捕食する存在を恐怖する、そ

れだった。
氷室が姓であるはずなのに、土御門と呼ばれることに対する疑問
について気にしている余裕などなどなかった。
ただ、その時感じたのは敗北だった。
二度目の敗北。忌々しいそれを味あわせた二人目の反逆者。
それ以来敵意を剥くようになったこちらに対し、氷室は気にする
素振りすらなかった。
更に憎悪が深まった。相手にすらされていない、無視という形の
屈辱によって。
それが今、出会った時以来関心一つ示さなかった自分と初めて真
正面から向き合っていた。
湧き上がったのは僅かな慶び、そして畏怖。
「…………」
氷室は視線を神崎に据えたまま、一歩を踏み一段降りた。
それに合わせるように己の足が一歩後ずさった事実に神崎は驚愕
し、そして憤怒した。
何故下がる。
何故震える。
何故恐怖する。
相手はもう自分にとって恐れるに足らない存在だというのに。
自分は、もう人間という脆弱な殻を脱ぎ捨てたはずなのに。
何故、何故何故何故何故何故何故何故何故何故何故何故何故何故
何故何故何故何故何故何故何故何故何故――――――ッ
蛇睨まれた蛙、の状態となった神崎は己の血走った眼で睨まれて
いるにも関わらずゆっくりと降りて来る氷室。
ワケのわからない威圧感に喉を抑えられているような感覚の中で
神崎は目の前まで来た男に、
「……て、てめぇ………」
ようやく絞り出せた言葉に氷室に答えたのか否か、無言を保って
いた口を開き、

「……何処で“そうなった”かは知らんが、“外れる”という事はどういうことを意味するのか貴様は理解しているのだろうな」
遠回し過ぎる台詞。
だが、理解出来た。
この男は気付いている。自分の手に入れた力を。
眼を開いて驚愕を露にする神崎に、氷室は眼を閉じ、
「まぁいい。どの道そうなったからには、辿る道は一つだということは忘れるな――――神崎陵」
毅然とした様で言い残し、そのまま振り返る事なく神崎の横を通り過ぎて行った。
残された神崎は氷室が遠ざかっていく一方で一人怒りに満ちた悔しさに打ち震えた。
「……くそがっ！クソがっっ」
何度も壁に拳を打ちつける。
傷が付いて血が出ても構わず叩きつける。
どうせ“治る”ものだから気にはかけない。
「ふざけやがって……っ！」
許せない。
許さない。
この期に及んで尚もまだこの自分を脅かすとは。
あの憎たらしい仏頂面をこの手で引き裂いてやりたくて両手十指が疼いてしょうがない。
こうなれば何が何でも終夜千夜を、一刻も早く手に入れなければならない。
幾度にも渡って犯し、更なる力を手にしてその時こそ。
「――――――放課後だ」
決行は放課後。
自分は今日、再び生まれ変わるのだ、と神崎は歪な笑みを浮かべて決意を滲ませた。

◆　◆　◆

目の前の悲惨な状況にどうすることも出来ず、見つめているだけだった蒼助の後ろで、人だかりに飲まれていた昶と七海がようやくこちらに辿り着いた。

「――っ」

「ぷはぁ、やぁっととーちゃぶっ」

突然立ち止まった昶の背にぶつかり寸前で押し留められる七海。

勢い良くぶち当たった鼻を押さえながら、涙目で昶を見上げ睨む。

「早乙女ぇ、変なタイミングで止まらんで先進まんかいアホぉっ」

「お前は止めておいた方がいい。女にはこれは少し……」

昶が言い終わるよりも早く、押し退けて七海はその先の光景を見ようと身を乗り出した。

「っ……」

忠告を無視して好奇心をとった七海は凄惨な光景に青ざめて言葉を失った。

言わんこっちゃないと背後のやりとりに呆れていた時、足元で虫の息かと思われていた舎弟の一人が息を吹き返したのか、蚊の鳴くような微かな呻き声を漏らした。

「っおい！　しっかりしろ」

全身の苦痛に呻く声すら弱々しい不良の身体を蒼助は揺さぶる。

しかし、突然それを制するように背後から肩を強く掴まれた。

「馬鹿が、瀕死の相手に無理に動かすな」

いきなり不快指数が一気に急上昇するような言葉を文頭のおいた台詞を紡ぐ声には嫌と言いたくなるほど覚えがあった。

振り返れば、

「氷室……何でこんなところに」

蒼助の問いを無視して氷室は肩膝を地面に着き、不良の無惨に潰された顔を動じる様子もなく見つめ、

「少しでも口が聞けるなら答えろ。ゆっくりでいい、貴様等をここ

まで痛めつけた相手の名を言え」
命令口調だが、無理を強いる雰囲気はない。
口の中があちこち切れていてまともに口を動かないであろう舎弟はしばらく呻いているだけだったが、何か伝えたげに口を動かし始める。
その動きは微妙な動作で、声があまりにも小さいため蒼助には何を言っているのは全く解らない。
しかし、それでも氷室は根気強く、力なく動く唇から片時も目を離さない。
そんなわけがないのにやけに長く感じれたじれったい時間は氷室が立ち上がると同時、誰が呼んだのかこの場に駆けつけた教員たちの到着により終止符が打たれた。
「皆、教室に戻りなさい！　貴方たちもよっ」
ヒステリックなキンキン声で怒鳴ってくる中年女教師に耳を痛くしつつ、蒼助達は不満げな声を所々であげる野次馬共々その場を追われた。
名残惜しそうにバラけて校舎へと戻って行く生徒たちの中、蒼助はその半ばで足を止め前を歩く氷室に尋ねる。
「……で、何だって？」
「……奴らは、見限ったかつての頭に報復をくらったようだ。いや、ただのそれはこじつけで本心はただ《力》を試す実践対象にされただけだろうな」
その言葉で犯人が誰かを蒼助は察した。
だが、後半の《力》を試すという話には疑問が湧いた。
その疑問に関しては蒼助が口を開くより早く渚が代わりに言葉にしてくれた。
「それは一体どういうこと？　まさか……」
「ここに来る途中、意気揚々としている奴に鉢合わせした。――――――答えは察しの通りだ、渚」
奴は既に《魔性》に堕ちた。

暗にそう言っていた。

「いつからかと言えば、おそらく一週間前から姿を眩ませていた間にだろう。校内での女子生徒に対する暴行未遂を起こした事件の主宰である奴は半月の停学処分を受けていたはずだが……おおかた夜の街を歩いているところを負の氣を撒き散らしているのを眼をつけられたのだろう」

筋の通った推論だ。

元々そっち側の資質はあると思っていた。それが若い今だけのものならいいが、奴――――神崎の場合は根っこからものだからいずれそういう末路を辿るだろうな、と他人事に思っていた。

七海は幾分か痛ましげに眉を顰めていただが、蒼助は欠片もそういう気分にはなれなかった。

いつかが時期早まって今になっただけ。それだけのことだ。

あ、そう、な感覚で耳を傾けていると、どんどん話は進んで行く。

「でも妙だね。魔性に器にされたにも関わらず、彼個人の意識が保たれているなんて。普通は憑かれた瞬間に取り込まれちゃうはずなのに」

渚の言葉に確かに妙だと蒼助は内心で同意を示した。

稀に深い私怨や執念深さを有した意思の強い者が器になった場合にはそういう事があるが、それも保って二、三日。徐々に意識が混濁して最後には他と同じ事になる。辿る道は同じである。

「まさか一週間もってことはないだろうけど……こりゃ意思のあるうちに片付けちゃった方が良いんじゃない？　完全に呑まれて見境無くなっちゃう前に」

確かに。二、三日といってもそれは最長。同じケースでも短い場合もある。

街でふらふらしているなら良かったが、学校に来られて自我を失われると羊の小屋に狼が投入された状態になるわけで。

これ以上面倒が起きる前に始末は早い方がいいだろう。

と、そこまで考えたところでさっきの台詞に微妙な違和感を覚えた。
「おい、ちょっと待て」
「何だ」
「今の口ぶりからするとお前ら……アイツを殺る気か？」
「当たり前だ」
平然返って来た肯定に蒼助は頭を痛くした。
「お、お前……今朝、活動停止喰らったんじゃ」
「こういう言葉を知っているか、蒼助」
終わりよければ全てよし。
渚と一秒のズレもなくハモらせて言ってのける。
普段やたら細かい奴がアバウトになった時は、それは本気の時だ。
既に命令違反上等の二人に脱力しつつ、何らかの火の粉が自分にかかる前に去ろうとゆっくりと、その場から徐々に後退を試みていたが、
「――――何処へ行く」
「っ！？」
思考を読まれたかと思った。
うろたえつつも反論に出る。
「お、お断りだからな、そんな面倒。第一、神崎みてぇな小物ならお前等二人で十分過ぎるだろ」
「何事にも保険は必需だ」
「っ、知るかンなもん！　とにかく、俺は手を貸させねぇぞ……お前と違って使命感で討伐やってるわけじゃ」
「報酬はこの前やるはずだった分と重ねて倍出す。これでどうだ」
「う」
そう来たか、と蒼助は言葉に詰まる。
「て、てめぇ卑怯だぞ……」
「何が卑怯なんだ。渚からお前が次の仕事をせがんでいると聴いていたからわざわざお望みの《それ》をくれてやろうとしているだけ

だが……？」

口端をつり上げ、ふんっと言わんばりに笑みを浮かべる氷室。

蒼助は嫌という程知っていた。この笑みは人の弱いところを完全に抑えた上で、自らを勝利を固辞する時に浮かべる表情だということを。

普段、無表情であるが故にたまにする感情表現が嘲笑という辺りつくづくこの天敵は根性が捻くれていると思う。

ギリギリ、と歯噛みしながら、ただただ睨みつけていると、

「まぁ、別にそこまで嫌だというなのなら仕方ない。せっかくの慈悲を無下にしていた愚か者が路頭に迷ってもこちらの知った事ではないが」

太々しく、更に追い打ちをかけてくるところがまた憎々しい。

口の中でガリっとした音が聞こえた時、同時に蒼助の中で張り詰めていた糸がキレた。

「……依頼、承ります」

「ふっ、最初から素直に受ければ良いものを」

今なら血の涙も流せそうだった。

その後ろで渚が腹を抱えて笑っているが、この際もうどうだっていい。

こちらを屈服させた氷室は次なる標的（えもの）に狙いを定めていた。

「さて、そこの二名」

蚊帳の外にされていたのをいいことにこっそり去ろうとしていた昶、七海の二人は急な呼び止めにギクリ、と擬音が聞こえそうな様でその場で固まった。

「確か、都築七海は本人以外は力を持たない矢代の分家の中でも末端の分家。そして早乙女、お前も似たようなものだったな」

一体いつ調べたのか、それぞれの家庭内情を述べる氷室に昶と七海は嫌な予感アリアリな表情を浮べ、逃げ腰状態だった。

逃げ道を塞ぐように氷室は早々に先手を打った。

「ついでだ。お前たちにも手を貸してもらおう」
「いや待て、それはいくらなんでもバレるとまず」
珍しく必死になって足掻こうとする昶の苦心のそれを氷室は何てことなく叩き落した。
「バレなければいい。そうなるようにせいぜい懸命に努力しろ」
もはや反論する気力と活路を見失ったのか、沈黙する二人。
哀れな子羊が新たに二匹堕ちた。
蒼助はそれを見ても助け舟を出そうとはしなかった。思いもしなかった。
なぜなら不公平だから。死なば諸共である。
不幸は皆で分かち合うものだ、と少しだけ気分は晴れた。
「決行は本日の放課後だ――――――――必ず、仕留める」
氷室は切れ長の双眸を鋭く細めて言った。

［九］　転がりだす石（後書き）

お久しぶりです。
期末考査に死に物狂いだったため殆んど執筆に集中できなかったため時間かけましたがようやく更新できました。
氷室がようやく登場。
本作では眼鏡二号（一号は久留美
彼はあの有名な「安倍」家の人。
もちろんそれだけではありませんが（分かりやす過ぎるますがちなみに「氷室」という姓は真名を隠す偽名。あの家は有名すぎる故に敵が多いので普段は家系の人々はそれぞれ偽名を名乗っている。跡取りである彼はそれだけでは頼りなさ過ぎるので他にもいろいろ対策をしてます。
さて、物語はようやく第一の山場へと向かい始めています。
当然、ヒロインも絡みます。寧ろ狙われていますし。
さぁ、やるぞ、と意気込んではいますが横で漫画もちょこちょこ描いていたり（笑）

［拾］　逢魔ヶ刻（前書き）

逢魔ヶ刻
大禍時
キミに良くないことが起こる時間だよ

［拾］　逢魔ヶ刻

陽が暮れ始めていた。
オレンジ色の日射しが窓から射し込んで、緋色に染まった廊下を鞄を肩にかけた久留美は駆けていた。
急いでいた。放課後になった途端、サボる気満々でいた清掃を化学室担当の教師に掴まり、サボろうとした罰に先程まで一人でメダカの水槽洗いをさせられていたのだ。
頑固な汚れに大分時間を取られてしまった。
先に行かせて待たせている千夜はまだいるだろうか。
待ちくたびれて帰られてしまっただろうか。
これを逃すともうインタビューのチャンスはなくなるかもしれない、と久留美は焦燥に駆られていた。
故に気付かなかった。
階段の曲がり角で待ち伏せしていた存在に。
鳩尾を狙って叩き込む為に握られていた拳に。

◆　◆　◆

「あー、すまない。急用が入ってしまってな……今日の夕飯には間に合いそうにはない」
電話と通して聞こえる『彼女』の不満げな声を耳に感じた。
夕食は必ず二人で食べる。それが『彼女』と交わした約束。
毎日、絶対として通してきた決まり事は今回で記録打ち切りとなってしまう。
『……何時に帰って来るの？』
「終わり次第すぐに。あんまり遅くなるようだったら先に寝てなさい。くれぐれも、私のベッドに潜り込んで待たないこと。潰しそうになってヒヤッとしたぞ』

『……けちんぼ』
むくれた呟きを無視して、電話を切ろうとするとそれを引き止めるように『彼女』が発声した。
『姉さん……』
「……っと、なんだ？」
回線を切ろうとした指を慌てて押し止める千夜の耳に、か細く真摯な声が届いた。
『……怪我、しないでね』
やはり見抜かれている。
『決まり事』を破ってまで優先すべき“急用”が何なのか。
何故、優先しなければならないのか。
千夜自身、嘘が付くのが下手なワケではない。むしろ、人格を偽って生きているのだから得意だという自覚はある。
ただ『彼女』が嘘を見抜くことに秀でている、それだけのこと。
“あの人”に似て。
「……埋め合わせとして今週の日曜に、好きなところに連れて行ってやる」
『え、本当？　本当に？　何処でもいいのね？』
「ああ、何処へ行きたいか考えておいてくれ。それじゃぁ切る。愛してるぞ」
『私もー。ミートゥー』
不安は消えていないだろうが、機嫌は直ったと思い、千夜は手にしていた携帯電話をポケットに押し込んだ。
窓側を見れば、その枠の中は緋色。それ一色に塗りつぶされたキャンバスの張られた画板のようだった。
時計に眼をやると、時刻は六時を回っていた。
黄昏時。それは昼と夜の境であり、同時に夜が始まる前触れ。
逢魔ヶ刻。またの名を大禍時。
闇が歩き出す、災いの時刻だ。

◆　◆　◆

黄昏の緋に染まった部屋――――図書室。
司書も帰り、閲覧者たる生徒も帰ったその一室にたった一つの人影だけが残っていた。
窓際の低い本棚の上に腰を下ろした少女、終夜千夜。
彼女はただぼんやりと暇そうに五階の窓から外を眺めていた。
ただそれだけの姿が異様に絵になる。
艶やかな流れるような線を持つ長い髪が緋の光に当てられ、うっすら赤らむ。
恐ろしく整った美麗の作りの顔に当たれば、憂いとも哀愁とも言えぬなんとも不思議な、眼を引く印象を醸し出す。
極上の美貌が夕暮れという背景により更に引き立てられ、そこにこの世のものとは思えない光景を生み出していた。
それは見ようによっては何かを待っているようにも見えた。
「……、」
ふと、無表情に固定させていた千夜の見事な線を描く柳眉がぴくりと動いた。
窓を向いていた首が緩やかな動作で出入り口のドアを向く。
千夜はその向こう、そこに何がいるのか見通したように、
「随分遅かったじゃないか――デートに遅刻は厳禁だぞ？」
皮肉げに、されど美しく笑って出迎える千夜の前に、『それ』は現れた。
きぃ、と静かな軋む音を立てて、僅かに開いた扉の間から顔の一部が見られた。
扉の向こうの暗い空間で見える片目は背筋が凍るほど見開き、血走っていた。
『それ』は、そこから酷く濁った声を発して、嗤った。
「くくくっ……待っていてくれたのか？　嬉しいじゃねぇか…

…」

「ここで無視して家に押し掛けられるとこの上なく迷惑なのでな」

「そう、つれなくするなよ……迎えにきたぜ、千夜」

すると、千夜はもの凄く不快な表情を浮かべて、服の上から二の腕を摩った。

言葉とは不思議なものだ、嫌悪する相手に名を口にされるとこうまで寒気がするものなのか、と感慨しながら。

「……貴様のお陰で全身鳥肌総立ちだ、どうしてくれる」

「暖めてやろうか」

「全力で拒否を宣言する」

千夜はそう吐き捨てる裏で訝しげ思っていた。

『それ』が今の挑発に乗って来なかった事にだ。

“以前”であれば即答の早さでキレたであろうに。

「それにしても、何やら変わったな。念願の“力”が手に入ったことで余裕が出来たか？」

「そうだ、俺はもう以前までの俺じゃねぇ……もう誰に頼る事もない、俺自身の手で全てを平伏せる力を手に入れたからなぁ、生まれ変わったんだよ、俺は」

「何に？　アオガエルからトノサマガエルに？　まさか、一人前の人間になれたなんて傲慢なこと考えていないだろうな」

『それ』に微笑と共に苛烈な言葉がぶつけられる。

扉の向こうで、『それ』はさすがに気分を害したようだったが、激昂するようなことはせず、頬を引き攣らせるだけだった。

或は、既に暴れ狂いそうな感情を、後の目論みの為に抑えているのか。

「……もう一度、言う。――――俺と来い」

幾分押し殺したような声。

恐らくは、怒りだろうが。

しかし、千夜にはそんなことは知った事ではない。

返す答えはとうに決まっていた。

「欲しけりゃ、取りに来い。尤も、蛙の嫁などゴメンだかな。そこら原っぱのメス蛙でもひっかけているがいい」
表情は笑み。されど、言葉には罵倒と嘲りをたっぷり込めて。
千夜の手酷い足蹴に、反応は返って来ない。
もしくは、扉の向こうの暗闇で声にならないほどの怒りで身震いしているのかもしれない。
さてどう出る、と千夜は『それ』の次の行動を見計らう。
「……そうか、それなら仕方ねぇ」
声が若干上擦っていた。
やはり、先程の千夜の罵倒は効いているらしい。
十センチ前後程の隙間を作っていた扉が開いた。
正確な姿が見えなかった『それ』――――神崎の姿が現れる。
「紳士的な態度は、止めだ」
その面で紳士とは笑わせる、と千夜は鼻で笑ってやろうとした。
しかし、それは神崎のニギテに握られていた『モノ』を見て急遽、中止を余儀なくされた。
ごつごつした節くれ立った手には一本の黒い三つ編みが握られていた。
それをぐいっと引っ張って、ずるりと扉の影から引きずり出されたのは、千夜が見知った少女だった。
ぐったりと力を感じない体、後ろ髪の三つ編みを引っ張られているせいでいつもは勝気な表情をする顔ががくりと項垂れ見えない。
「……生きている、な」
僅かに揺れている少女の前髪を見て千夜はそう判断した。
「殺しちゃぁ、意味ねぇだろぉ……人質ってのは」
にたにた笑いながら、神崎は己が掴むものを更に引っ張り上げ見せ付けるように持ち上げた。
無理矢理顔を上げさせられたその顔は、気を失っているのか瞼を閉じていた。

口端が何故か濡れている。
「新條に何をした」
「いいねぇ、その目……ぞくぞくする……大した事はしてねぇ、一発鳩尾を殴ってやっただけだ。たったそれだけでこの女、胃液吐いて動かなくなっちまったんだよ。ったく、人間ってのは脆いモノだよなぁ……“やめて”正解だったぜ」
その言葉を綺麗に聞き流して、千夜は静かに言い放つ。
「……こちらに渡してもらおうか」
「そりゃ、お前の態度次第だなぁ、おい」
そう答える神崎は水を得た魚のようだった。
何回と繰り返してきた、相手に選択権のない交渉。
「まずは服を脱いでもらおうか、上から一枚一枚、じっくり時間をかけてな」
神崎がそう命じた意図は、千夜の冷静さが崩れる様を見たいというところだ。
最後の下着一枚に追い込まれたところで躊躇するのを、手元の人質の命を掲げて早くしろと急かす。
そうされた千夜はどんな風に羞恥と屈辱に顔をゆがめるのか、と神崎は悪趣味な想像を思考回路にめぐらせていた。
「頭がいいお前ならわかんだろー？　お前に出来ることは一つしかないってことぐらいよぉ……」
無視すれば、この女を殺す。
暗にそう言っているのだ。
千夜は暫しの間、じっと神崎を見ていた。
そうする瞳の奥に怯えや焦り、動揺はない。
悪魔で冷静かつ、冷徹な光だけがそこに宿っていた。
とても劣勢に立たされた者がするそれではなかった。
いつまでも自分の命令に従う素振りも反応も示さない千夜に神崎が痺れを切らして、人質の久留美の顔に傷の一つでも付けてやろうかと思った時、

「……わかった」
静かに了解の言葉を呟き、千夜は上着のボタンに手をかけた。
ゆっくり、丁寧に、上から一つ一つ外していく。
その光景に舌舐めずりをしながら神崎は酔い痴れるように見つめた。
全てのボタンを外し終え、右腕から引き抜いて脱ぎ、
「まずは一枚目」
平然とそう言い捨て宙に脱いだそれを放り投げた。
バッと広がった深い紺色が空中で夕焼けに染まる様のに、神崎は一瞬気を取られた。
それが己の形勢をいとも簡単に逆転させてしまう最大のミスであることにも気付かず。
「間抜け。まさか、本当にひっかかるとは」
我に返った神崎の耳に届いた声はひどく近い場所から聞こえた。
“目の前にいた”千夜が笑う。
悪魔のように美しい、凄惨な笑みを湛えて、嗤う。
「この前言い忘れたことがあった。人質が効果を示さないパターンはもう一つあるんだ……」
それは、と先ほどまで数メートル離れた場所にいた少女が宙に舞った上着に気を取られた僅か一秒の間に目と鼻の先に間を詰めて現れた
ことに対して唖然としたままの神崎に告げる。
右手を拳にして。
「自信と確信を持っている人間だよ。人質を傷つけられる前に――――」
言葉の間にその腕を引き、
「――――調子付いた馬鹿を叩き伏せることが出来る、なっ！！」
神崎が行動の意図に気付いた時には既に手遅れで。ど真ん中に叩

き込まれた拳は鼻をへし折り、その顔をこの世のものは思えぬ悲惨な形状にした。

それだけで終わりではなかった。神崎が後ろのめりに倒れる前にすかさず横に滑らすように膝蹴りを叩き込んだ。

「ふん、たかが女の蹴りで随分と勢い良く吹っ飛んでくれるじゃないか」

本棚に激突する神崎を尻目に開放された久留美を肩に背負い込み、千夜は足早に廊下に駆け出した。

図書室から出たところで一旦久留美を床の上に置いた時、冷たいコンクリートに頬をつけた久留美が身じろぎし、呻いた。

「う、う……んっ」

「新條、しっかりしろ。私の声が聞こえるか」

殴られた時に外れたのか、眼鏡のかかっていない双眸が瞼の痙攣の後、本人の意思で抉じ開けられた。

数回の瞬きを終え、うっすらだったそれが通常通り開く。

「……あ、れ……私、確か……あ、終夜さ、……うっっ」

千夜の姿を確認すると同時に、体が痛みを思い出したのか殴られた場所と思しき腹部を押さえて久留美が呻く。

その時、図書室の中から地響きのような絶叫が聞こえた。

「っな、なに!?」

目覚めた直後の唐突な出来事に久留美は怯えの様子を露にした。

対して千夜は、図書室から聞こえてきたそれに目を細め、

「ちっ、もうキレたか。外れても、単細胞は単細胞のままか」

軽く舌打ち、勢い良く扉を閉めたと思えば、スカートのポケットから何かを取り出す。

取り出されたそれは、メモ用紙のようにノリの付いた上の縁でまとめられていた。枚数はほんのニ、三枚のようだが、一枚一枚に地蔵菩薩の絵が筆描きで描かれていた。

「なに、それ」

「御札だよ、仏が許す三度の慈悲さ」

そう答え、丁度二枚扉の中心の合わせ目に押し付ける。
千夜はその札に向かって一言命じる。
「“この扉を決して開けるな”」
言葉の後、千夜が手を離すとその命令に従ったようにノリもつけていないのに札はぴったりと扉にくっついた。
久留美はただただ唖然としていた。
否、混乱していた。
この状況、先程の絶叫と千夜の行為に。
千夜はそんな久留美の腕を掴み、
「行くぞ」
「へ？」
「あれは時間稼ぎにしかならん。札の効力を上回る攻撃をぶつけてくる前にお前を逃がす」
「は？」
「走れ。昇降口まで止まるなよ」
「い、一体何がどうなって」
今しがた起きたばかりで状況をまるで呑み込めていない久留美の思考回路は毛糸のようにこんがらがっていた。
説明している暇はない、と千夜はその手首を掴み有無も言わさず走り出す。
「え、あっ……何なのヨォ――――――っっ！！」
叫びも虚しく久留美は引き摺られるように千夜の後を走り出すのだった。

［拾］　逢魔ヶ刻（後書き）

夏休みです。はい。
とゆーことでうっかり昼寝して眠れなくなって夜更かししてます。
不健康ですね、はい（なんのこっちゃ

とりあえず、七月終わる前に更新できてよかった、と行っておきます。
そういえば、もうすぐでこの投稿サイトに登録してから一年経つ……。

【拾壱】　垣間見るモノ（前書き）

気のせい
そう思い込みたいのは
他の誰の為でもなく

［拾壱］　垣間見るモノ

突然、開かなくなった扉。
神崎は苛立ちと怒りに駆られ、それらをぶつけるように叩き続ける。
「開けろぉ！　開けやがれぇぇっっ！！」
憤怒に満ちた鬼の形相には先程殴られて切れた箇所からの血は既に止まっていた。
鼻は陥没したままだが。
扉を殴り壊しそうな勢いでその音と力は増していくが、廊下と図書室を隔てる一枚の壁となったそれは押そうが引こうが一向に開く気配はなかった。
「くそぉ、ちくしょうっ……がぁぁぁぁァァァっ」
扉に頭を打ちつけ始める神崎。
幾度もぶつけたことによって額が割れ、傷口から血が溢れ額の真ん中を伝う。
血の筋が出来た後、異変は起こった。
額の赤い一本筋がミチミチ……と肉が裂ける音を立てて縦に割れ始めたのだ。下から何かが突き上げてくるかのように。割れた谷間から現れたのは何かの突起だった。最初は小さかったそれは割れ目を拡げるようにその下から生え出て来る。現れたそれは尖った先端、岩のように硬質で、まるで角のような生え様。歪なそれの生え元である額に浮かぶ血管がどくんどくんと脈打つ。
心臓のように鼓動を打ち始める角を押さえ、神崎は裂けんばかりに口を歪める。
「く、かかっ……逃げられるかよぉ……逃がすかよぉ……」
神崎の体から黒く、暗い、暗雲のように澱んだ空気が分泌され始める。
霧のように立ち込め、驚くべき速さで一瞬にして図書室内に満ち

る。
「逃げられるものなら逃げてみやがれ……この“檻”から」
外の夕日が完全に沈みこむ。
昼の時間が終わりを告げると同時、それを待っていたかのように神崎の澱みきった瞳が紅く光った。
それが校舎を包む“異変”の前触れだった。

◆　◆　◆

外からの射光がなくなり、薄暗くなった生徒会室。
校舎の異変を感じ取った者たちがここに三人。
蒼助、渚、そして氷室。
ディスクの椅子に座った氷室が感じた違和感に眉毛を動かす。
「……結界、か」
「結界だと？　俺達の他に同業者がいるはずねぇだろ」
去年から在学のニ、三学年にいる退魔師はここにいる三人と七海、そして昶の五人。教員は蔵間という特例を除いていない。四月からの新入生の中には該当者はいなかった。
その中、蒼助の脳裏に一人の少女の姿が描かれた。
一週間前、この学園にやってきた転校生の姿が。
「う……この陰気は退魔師が張った結界じゃありえないよ……まるで、魔性の霊力で出来てるみたいだ」
巫覡の家系でありこの中で最も敏感に陰気を感じてしまう渚が若干眉を顰めて言った。
渚の言葉にそれまであった少女の事を記憶の隅に追いやった蒼助が目を見開く。
「魔性が結界だと？　連中にそんな芸当出来んのかよ」
「どうだろう……初めて聞くけど」
「関係ない」
戸惑いを露にする二人の言葉を遮るように氷室が椅子から立ち上

がる。
冷徹な眼差しの中に確かな信念を宿し、
「奴が何者であろうが、私達がすべきことは変わりない……あの二人はちゃんと校舎外にいるのだろうな」
「ああ、もうそろそろ部活も終わって外にいる頃じゃねぇか」
あの二人とは、この場にはいない昶と七海のことである。
五人の中で部活に所属している彼等は、氷室の与えた役割により敢えて部活は休まなかった。
元より神崎を逃がさないために結界を張る予定でいた氷室は、校舎に残っているごく少数の生徒の確保と保護を頼んだ。
結界は一度発動すると、発動させた術者本人が解かない限り内側からは決して出れない仕組みとなっている。特定の者を隔離して創り出すのも不可能という一見便利そうで不便な面も持ち合わせている空間呪法なのである。
その為に、外に出る必要のある部活組が外から入って校舎内に取り残されている人間を見つけて、保護することになった。
渚が壁にかかった時計を見遣れば、時刻は六時を過ぎていた。
「さぁて、時間もそろそろ頃合、敵さんも動き出してくれたことだし……行こうよ」
言われるまでもない、と言わんばかりに言葉ではなく行動で同意を示した。

◆　◆　◆

――その同時刻。
千夜と久留美はちょうど三階に降りてきていた。
五階から段を踏み外しそうな勢いで駆け下りて、ようやく三階に降り立った所で、千夜が突然その動作を止めた。
夢中でそれに続いていた久留美は突然立ち止まった千夜の顔を息切れしながら覗きこむ。

「ど、どうしたっ……の……？」
覗き込んだ千夜の顔は失敗した、とでも言うかのように強張っていた。
そうなる理由が全く読めない久留美はただただ怪訝な表情で戸惑うばかりだった。
「ね、ねぇったら……」
「……まずいな」
久留美が肩を掴んで揺すると、千夜がぽつりと言葉を漏らす。
「へ？」
「あの蛙、結界を張ったな……両生類の分際で生意気な」
何を言っているのかさっぱり理解できない千夜の台詞に久留美は眼をパチクリさせた。
問う暇すら与えず、千夜は走り出したときから掴んだままの久留美の腕を引いて真っ暗な廊下を再び歩き出した。
昇降口とは正反対の方向を。
「ちょ、ちょっとぉっ！　昇降口はあっちよ、しかもここまだ二階……」
この校舎――学生棟は階ごとに昇降口と玄関が備え付けられている。
第二学年の下駄箱はもう一つ下。しかも、何故か千夜は目指していたはずのそこから逆に遠ざかる方へ行こうとする。
「ねぇ、終夜さんったら！」
「予定変更だ。どれかの教室にお邪魔させてもらおう」
「はぁっ？」
全く意図が読めない展開と行動に久留美の思考はいよいよショートしようとしていた。
「奴が行動を起こす前にお前をこの校舎から出してやるつもりだったんだが、もう手遅れだ」
千夜は一番奥の教室まで来ると、出入り口のスライドドアを開けようと試みる。

「くそっ……やっぱり鍵がかかってる……」
「……鍵、壊したら？」
「立てこもるのに肝心の鍵を壊したら意味が無い。……こんなことになるなら、ピッキングでも習得しとけばよかったな」
ガタガタッと乱暴にドアをスライドさせようとする千夜はそれこそ鍵どころかドアを壊しそうな勢いだ。
ドアがギシギシ言い出したところで、言い出そうか迷っていた久留美は思い切って胸の内の言葉を口にした。
「あのさ……開けようか、鍵」
「お前が？」
思いもよらない久留美の申し出に千夜が意外そうに尋ねる。
一般人の久留美がピッキングが出来るというのだから驚くのも無理もない。
照れくさそうに頬を掻く久留美。
「親戚に鍵屋経営してる人がいてさ。将来の為にと思って教わったの。簡単な鍵なら二十秒で開けられるわ」
ほら、と太く編まれた三つ編みの編み目から針金を取り出してみせる久留美。
そこにいつも常備しているのだろうかと疑問が芽生えたが、千夜には他に聞く事があった。
「将来の為って？」
「私が何部か忘れてない？　ジャーナリストよ、ジャーナリスト！　偽りの裏に隠された真相を探る危険と隣り合わせの役職よ」
「何で新聞記者になるのに、錠前破りの技術が必要なんだ」
「何言ってんの！　裏社会と闘うとなったら、当然命を狙われることだってあるのよ！？　悪の秘密組織に監禁されたらどうするの！？　誰かが助けてくれるのを待つの？　いいえ、違うわ！　いざとなったら頼りになるのは自分の力だけ、自力でなんとかするしかないのよ！　敵は多くとも味方はいない孤高のジャーナリスト……なんて素敵な響き」

感嘆符の連続に千夜は魂が抜かれそうになった。
ただ、わかったことが幾つか。
新條一族の職は多種多様だということ。
久留美が意外に夢見がちかつ熱血系だということ。
ネタ探しの際に自分の家がピッキングされる可能性があるということ。
久留美が浸って戻って来なくなる前に鍵を開けさせようと思い、寸前の久留美の肩を叩く。
「お前の将来の夢への熱意は充分伝わったから早いとこやってくれ」
「あ、そうね」
どっこいしょ、と若い女子高生がそれはどうなんだという台詞を零しながら久留美はドアの前にしゃがみ込み針金を射し込んだ。
「でも、どうしてこんな奥の教室なの？　別にドアなんて何処でも強度は同じ……」
「時間稼ぎだ。昇降口から逃げようとすることぐらいはいくら単細胞でもわかるだろうからな、予想が間違っていなければ“アレ”は各階の昇降口で待ち構えているはずだ。奴らに見つかる前に教室に逃げ込めれば、とりあえずのところは安全だ。だから一刻も早く、その鍵を開けて……」
言葉が終わる前、そして久留美が『アレ』とは何か、と尋ねる前に千夜の表情が、纏う空気が変わった。
神崎とその一同を叩きのめした時のそれに似ていたが、それよりも遥かに温度が低い。
敵意だけではない。
同時にそこに存在する意思は、
『殺意』。
目の当たりにしてしまった久留美は凍り付き、動けなくなった。
それが己自身に向けられているものではないとはわかっていた。
けれど、あまりに強過ぎる存在感を持つ殺気はもし向けられればそれだけで自分の息の根を止められてしまうのではないか、と久留

美にそう思わせるには充分過ぎた。
久留美を我に返らせたのは一つの湧き上がった疑問だった。
この極寒零度の殺気は誰に向けられているのか、という。

――――――……カツ……――ン……っ

暗闇と静寂の空間に響く物音。
「――――っ！？」
驚いた久留美が肩を振るわせれば少し置いて、もう一度同じ音が木霊する。
それは足音だった。
人が歩く歩調にしてはテンポが緩やかだが、視界が不可視に近い状況で敏感となっている聴覚だからこそわかる。響くそれは確かに靴の裏がコンクリートを打つ音だった。
「……」
「警備員さん……かしら」
「ライトも点けずに点検か？」
「……う、」
「いいからお前はそっちに集中しろ。“コイツ”の相手は私がする」

「は？　相手って……」
久留美の言葉を無視し、千夜は足音が響いてくる漆黒の暗闇が広がるその先と向かい合う。
右手が前へ差し出される。
その仕草に久留美は鍵を開ける事すら忘れて、魅入った。
招くようなその動作が何かを呼び寄せるような気がして、それを見届けたくて。
「来い、舞の時間だ」
千夜がそう呟くと、右手がある空間がぶれた。
ぶれは歪みへと拡張し、ずるりと吐き出されるように一本の刀が

現れ、千夜の手に収まる。
「……、っ」
久留美はその光景、そして現れたそれを見て息を呑んだ。
あまりにも現実とはかけ離れた出来事は異常だった。同時に、現れた刀も普通のそれと呼ぶにはあまりにも“異質”だった。
その刀は鞘、柄、唾、全ての部分が白一色。あまりにも色がないそれは刀身だけでも一般の展示されている刀とは比べ物にならない長さを誇っていた。立てて並べれば、千夜の背丈以上はあるかもしれない。
見かけも凄いが何より異質なのは、その刀の存在自体だった。
霊感という超感覚的なものを持ち合わせていない久留美にも、それが只物ではないということは理解出来た。
千夜は無言のままその長い刀身を手慣れた手つきで難なく抜き放った。
お披露目となったその刀身もやはり白だった。白い刀身には反りが一切無く直線を描いていた。
不思議と絵になるその姿に呆けていた久留美は視界の端で暗闇の中に浮かび上がった人影だった。
それの登場により久留美の緊張の糸が解けた。
「ほ、ほらー、やっぱり警備員よ……もう、妙な脅かしはやめ」
ホッとしたのは束の間、とまさにそれが当てはまる刹那の安息だった。
窓際のそこから月明かりが差し込み、暗闇を掃い廊下を照らし出す。
それによって人影は明確な正体を見せるが、そこに照らし出されたのは彼女等が望んだ警備員などではなかった。
歩を進めてくるのは、彼女たちと同じ月守の学生服姿の女子生徒だった。
しかし、その女子生徒には欠落しているもの、異なる何かがあった。

本来赤みを帯びているはずの肌は血が抜かれたように青白く、黒いはずの眼は血のように赤く濡れてその奥には光がない。

足音がやけにテンポが遅く、不連続だったのは、おぼつかない足取りだったから。まるでゾンビのように。

「あ、あ、……」

久留美の口から漏れる言葉になれなかった破片。

驚愕に喉を引き攣らせていた。

目の前にいる女子生徒には見覚えがあった。

知り合いだったわけではない。寧ろ、話すら碌にした事も無かった。

その顔を、存在を知ったのはつい最近だ。

それも今朝の報道ニュースで、テレビの画面に現れた写真によって。

茶髪でセミロングという特徴も。

「よ、終夜さ、ん……私、夢でも見てるのかしら」

「至って現実だと思うが」

「だって、ゆ、夢じゃないなら何なのよ、あれ……有り得ないっ……有り得ないわよっ！」

だって、と一息おいて、久留美は目の前の存在の否定を叫んだ。

「――――――あの子、あの事件で殺されたはずじゃないっ！！」

久留美の言葉は確かな事実だった。

けれど、死んだはずの少女が目の前で立って歩いているのもまた事実。

パニックとなっている久留美に千夜は静かに告げる。

「お前の言っている事は正しい。彼女は死んでいる。だが、生きている」

「なによ、それ……」

「殺された瞬間、もう彼女としての意義を失った。あれは、もう――――人じゃない」

奇しくもそれは同時だった。

たった今、人外であると言われた死者が、赤い眼の瞳孔を獣のように細めて本性を剥き出しにした瞬間。
久留美が己が彼女にとって獲物なのだと察する瞬間。
それらの動作が交差した時、化け物と化したそれは人間には在り得ない鋭く尖った牙を誇張し、獣の爪のように鋭利さを帯びた爪を見せつけ、狩りへと赴いた。
「――――ひ」
信じられない俊敏さを持って獲物との距離を詰めてくる相手に久留美は本能的に悲鳴をあげそうになる。
それは連続するように起こった出来事によって阻まれた。
「がっつくな。あれはお前には過ぎたディナーだ」
千夜のからかうような言葉。
それが発されたのは“化け物の目と鼻の先”。
千夜はいつの間にか久留美の傍から離れ、怪物の傍に居た。
向かって来たそれよりも速く、それの前にいた。
「代わりにこれでも食っていろ――――――なぁ？」
まるで了承を受けさせる際に肩を叩くかのような軽さで、千夜は目の前の畏怖すべき対象を切り刻んだ。
己の身長を越える程の長さを誇る獲物をオモチャのように振り回して、人間の形をした身体をまるでバターを切るかのように切り分ける。
無駄な動きは一切感じないそれは、まるで舞踏を踏んでいるが如く。
動作の度に解体されていくそれは断面から黒い液体を撒き散らしながら小さく十数の個になっていく。
地面に溜まった黒い水溜りの中に落ちたそれはずぶずぶと沈んで行った。
解体ショーを目の当たりにした久留美は戦慄に震えた。
解体ショーそのものにではない。
それを実行した少女に対して。

ちらり、と見えた千夜の表情は破壊行為に酔って恍惚としていたわけではない。
殺意に満ちた、それこそたった今分解された怪物のような鬼の形相でもなかった。
そこにあったのは何の関心も見せない無表情だった。
あれが人間ではないのは久留美にも充分理解出来た。
例えそうでも、元は人間であったことを考えれば、殺す事には躊躇は覚える。
なのに、千夜からはそんなものは一切感じない。
その様子からはまるで一定の作業をこなす作業員のようなものしか感じ取れない。
人間だったものを殺すことを事務的に済ますなど常識では考えられなかった。
これなら、快楽の為に人を狂気の笑みで惨殺する殺人鬼の方が可愛らしい。
そう、これに比べれば、おかしな良い方かもしれないがずっと『人間らしい』。
「早くしろ、新條。ぐずぐずしていると他の連中が嗅ぎ付けて集って来るぞ」
「あ……」
腰に力が入らなくなり、地面に尻が付く。
久留美は呆然と視線の先の人物を見つめた。
これは一体誰だろう、と久留美の中でわかりきっているはずなのにそんな疑問が思考された。
違う。これは違う、と久留美は頑なに否定する。
自分が知っているあの少女は、こんな殺人人形のような人間ではないはずだ、と。
綺麗な見かけとは正反対で、過激な性格ではある。おまけに、本性は性格破綻者。
それでも自分が知る彼女は、こんな人間ではない。こんな。

――――ぴちゃっ…ん…

錯乱しそうな久留美を正気に戻したのは耳元で聞こえた水音、同時に感じた濡れた感触だった。

肩口をみれば、そこは紺を更に深くした色になって湿っていた。

上から降ってきた、と理解すると久留美はこれ以上にいない嫌な予感が降り掛かる。

予感しつつも、確かめなければ後悔する気がして、恐る恐る上を見上げた。

“それ”を意識が、眼が認識し、久留美は眼を見開き凍り付いた。

蜘蛛のように四肢を天井に這わせ、ぎろり、と正気を失った眼で久留美を見定める“それ”が唾液を口端から垂れ流していた。

久留美が叫ぶよりも、“それ”が唾液滴る牙を剥き出して飛びかかった方が早かった。

「っ新條！！」

鮮血が舞う。

見上げたことによって露になった喉とそれに喰らいつこうとした顎の間に入った千夜の腕から噴き出したものだった。

眼を閉じる間もなく、それを目の当たりした久留美は今度こそ悲鳴をあげた。

「いやぁぁぁっ！！　終夜さんっ腕が、腕がっ！」

喰らい付いた牙は骨を噛み砕かんばかりの顎の力によってどんどん白い肌とその下の肉に食い込んでいく。

叫びを噛み殺し、苦痛に顔が歪む千夜。

しかし、それもその一瞬だけだった。

追い詰められているはずの千夜は何故か悪企みを秘めたかのような邪な笑みを浮かべ、

「……そんなに私の血肉は美味いか？　……なら――――」

そのまま離すなよ。

宣告の直後、肉を断つ音と血が噴き出す音が交錯する。
千夜が左腕に食いついたことで固定されてしまった首に得物を取る手で振り下ろしたのだ。
首から上を失った身体は力を失いドシャッ、と崩れ落ちる。
そして、
「な、ナニっ……！？」
久留美と千夜の前で今度こそ屍となったそれは、端から黒く浸食されるように染まり塵になって消えた。
息絶えた後もしぶとく腕に喰らい付いていた恐ろしい形相の首も。
あまりに衝撃の強い出来事が風のように過ぎ去った後、久留美に訪れたのは安堵と緊張感からの解放。
とは言っても、後者は状況が解決したわけではない事を思い出し、若干落胆を覚えた。
暫く、真っ白になった頭で放心していた久留美だったが、千夜の腕から絶え間なく溢れ滴る赤が床に斑模様を描いているのを見て我に返る。
「終夜さんっ！　腕が……」
「ん？　ああ、気にするな、大した事ない。それより、もう一体いたとはな……鍵開けたら先に中に入っていろ。私はちょっと、向こうまで見回りに」
言葉の途中、千夜の頭に衝撃と激痛が襲う。
その上にはいつの間にか立ち上がって力一杯振り下ろされた久留美の拳が沈んでいた。
「……痛い」
「痛くしたんだから、当たり前でしょ！！」
先程の怯えっぷりは何処へ飛んでいったのか、仁王の如くの形相になった久留美が叱咤を飛ばす。
「気にするな？　大した事ない？　何考えてんのよ、この馬鹿っ！！　アンタ、目の前で血ぃボタボタ垂れ流しておいてよくのうのうとそんな台詞を吐けるわね！　気にするに決まってるでしょ！　大

した事あるわよ！」
「お、落ち着け新條……」
「落ち着け！？　はっ、廊下走ってたらいきなり腹殴られて気絶して目が覚めたら図書室前で変な遠吠えみたいなデカイ声聞こえたと思ったら全力で階段駆け下りてたら突然ワケのわからないこと聞かされてピッキングを要請されたと思ったら突然ゾンビモドキがなっがい刀で解体ショーでお次は天井から喉笛食いつかれそうになったり腕から血が吹いて首ちょんぱで落ち着けですって！？　息もつかせない衝撃の出来事連続で、落ち着けるかぁっ！！」
　それこそ息もつかずの長台詞を言ってのけた久留美の剣幕に千夜は呆気にとられ、反論を忘れた。
　それに乗って久留美が勢いに任せて攻撃を続ける。
「ああもうっ！　話している間にもボタボタボタボタぁっ！　ちょっと待ってなさい」
　そう言うなり、久留美は針金を鍵穴に突っ込んでガチャガチャ動かすとカチン、と音を立てた。
「はい開いたっ！　ほら、中入って！」
「いや、私は」
「つべこべ言わずにとっとと中に入んなさい！　これ以上まだなんか言うならまたこれだからね！」
　拳をつくってみせる久留美の迫力に千夜は一歩引く。
「……お前、なんで怒ってるんだ？」
「いろいろよ、いろいろ！　いろいろ基準がトチ狂ってるアンタにも、一瞬でも馬鹿な事考えた私にも！」
　あーっ、と頭を掻き毟り、
「もう止めたっ、遠慮するの！　アンタみたいな性格破綻者、体当たりで相手しなきゃやってらんないわよ！」
　ぐいぐい、と有無を言わさない勢いで教室の中に引っ張っていく中、久留美は千夜の顔をちらりと見た。
　引き摺られポカンとした顔。

初めて目にするけれど、それは確かに人間が浮かべる表情。
間違いだ、と久留美は先程の全てを否定した。
感情のない表情も気のせい、怖いと思ったのも気のせい、化け物に見えたのも気のせい、と。
「呼び方だって、呼び捨てにしてやるんだから。千夜千夜千夜千夜、かずやぁーっ！」
「何なんだ、一体……」
そんなのこっちが聞きたい、と心の中で叫んだ。
だが、この人物には酷く惹かれる。気になる。
『気のせい』なんかのせいで、離れたくないのだ。
だから、久留美は全部気のせいだと思い込んで、押し潰した。

［拾壱］　垣間見るモノ（後書き）

とりあえず、鮮血連載一周年迎える前にあと一話。
がんばりますよ。

【拾弐】　非現実的現実（前書き）

目の前のこれは非現実なのか
それとも現実なのか
そう判断するのは己自身
逃避するも立ち向かうもまた

［拾弐］　非現実的現実

頃合は既に来ていた。
お互い部活動を終え、学園の敷地には生徒の気配はなくなった。
だが、二人は言われた通りに行動に出ようとは思えなかった。
目の前で聳える校舎を包む不穏な気配に、とてもそうしようとは。
「なぁ、どないするー？」
弓を左手、背中に矢を詰め込んだ矢籠を背負う七海が隣の昶に尋ねる。
篭手で固定された両腕を組んだまま問題の校舎を見つめていた昶が眉を顰め、
「どうすると言われてもな……行かなければあとが怖いのはわかりきっているが……」
ほんの少し前のこと。
彼らがいざ入ろうとした時、その異変は起こった。
戦いの場となる学生棟の校舎が結界で覆われた。結界の話は計画上で決められていたことだったが、いざ現れたそれは“異質”だった。
顔を顰めたくなる程の陰気を漂わすそれは彼らが知る退魔師が張るそれはあまりにもかけ離れていた。
「げぇ……、ほんまに気持ち悪い結界やなー。なんか夏の炎天下一日履い歩いた後の蒸れた靴下嗅がされた気分やわぁ……」
「嗅いだ事あるのか、お前……」
昔、罰ゲームで姉貴に、とその言葉で苦い過去を思い出したのか嫌そうに顔を歪める七海。
ちらりと七海が隣を見れば昶は首をゴキゴキ鳴らし準備運動のように手首を回していた。
「……え、行くんか？　こんなヤバそうなトコに？」
「どうせ逃げても後が怖いんだ、それに……」

「それに、何や？」
問われた昶は不穏な氣にまみれた校舎を見上げ、
「得体の知れない輩に俺達の学び舎を占領されているというのも……なんか癪に障るだろ」
きょとん、とする七海の肩を叩いて昶は昇降口へと向かっていく。
その背を見送りつつ少し考えるように校舎を眺めた。
「……それもそうやな」
中で既に行動しているであろう『男』のことを考え、どうにもこのまま帰る気にはなれなくなった七海は、先を行く昶の後を追いかけるように駆け出した。

◆　◆　◆

窓際から射し込む月明りだけが深い闇を薄める空間。
比較的に明るい窓の近くの席に千夜を座らせ、久留美は腕を差し出すように急かした。
「ほら、腕見せなさい」
強い調子が効いたのか、案外千夜は素直に噛み付かれた腕を差し出した。
しなやかな細さの腕に無惨に刻み込まれた噛み痕に思わず久留美は息を呑んでしまった。
牙によって抉られ陥没した二つの肉の穴からは今だボコリ、と血が湧き溢れている。最も目立つそれ以外の噛まれた場所は均等性のない痕が白いきめ細やかな肌の上を血に滲ませて荒らしている。
綺麗な肌なのに、と思わず顔を顰めずにはいられない。
「酷い……これでよく大した事ないなんて言えるもんよねぇ」
まじまじと夥しい赤に塗れた患部を確かめて、気まずそうに目を逸らすを呆れの意味を込めて睨む。
勿体ない。これでは病院で手当も受けても完全に治すことは出来ないだろう。

どれ程良くても、縫い跡は残るのではないだろうか。
傷も悩ませものだが、出血も少なくない。
何せ止まる気配を全く見せず赤い筋が腕に引かれている。
傷の治療云々は久留美自身にはどうすることもできないので、まず出血を止めようと決めた。
しかし、持っている絆創膏では到底無理な話。
せめて逃げ込んだ場所が保健室なら包帯なり消毒液なり緊急時ということで好きに使えたのだが、ここは三階。しかも保健室は教員棟の一階にある。外には先程襲ってきた人の形を真似た化け物が徘徊している。
あまりに離れ過ぎている距離に久留美は正直挫けそうだった。
「もう、この際ハンカチで応急処置とか……いやでも今日持ってきたハンカチ昼間手ぇ拭いちゃったし……まずいわよね、バイ菌とか入ったら……ああもうっこんなことなら通販で携帯救急セットでも買っとけばよかった！」
後悔先立たず、という言葉をこんな風に噛み締めたことはかつてなかった。
「新條」
「何よぉ、笑いたきゃ笑いなさいよ……偉そうな事言っておきながら怪我の応急処置すら出来ないなんて有言不実行もいいところよ……所詮私なんか無力な小市民よちくしょー」
「何を突然ワケのわからんヤケに走り始めているんだ……いいから私の話を聞け」
血で汚れていない方の手で、どうどうと口ずさむ千夜に頭を撫でられる。
馬扱い？と尚更惨めになるが言われたとおり彼女がこれから語るであろう言葉に耳を傾けた。
「今からちょっとした非現実的なコトが起こるが……とりあえず、驚いて良いがあまり騒がないでくれ」
アレ以上に非現実的なことがあるのなら逆に見てみたい。

久留美は千夜の頼みを出来るだけ善処しようと頷いた。
「ありがとう。それでは、遠慮なく」
そう言うなり千夜は怪我を負っている腕の、患部にもう片方の手を覆うように傷に被せた。
何が起こるか全く皆目付かないところ、久留美はただその様子を見つめる。
何も起こらないじゃない、と彼女の言葉を疑い始めた時だった。
「えっ」
思わず驚愕が口から飛び出した。
目の前で怒り出したことに対して。
銀色の光が千夜の傷に被さる手に灯ったことに対して。
決して強くはない光。
まるで蛍が発する夜にぼんやりと存在を示すそれに久留美は何故か温かなイメージを覚えた。だが驚くのはこれからだった。
光がおさまり、手を離したその下はあったはずの凄惨な傷痕が最初からなかったかのように消えていた。
腕に付着した血が何処から溢れたかを感じさせる痕すらなく。
それはまるでゲームで僧侶が使う回復魔法のような所業。先程とはまた一味違ったあまりにも現実離れした出来事だった。
「うっそぉ……」
嘆息するしか無い久留美に千夜が笑う。
「どうだ、ご感想は。驚いたか？」
「……驚いたに決まってるでしょ。すっごい何よ今の……魔法？ね、もっかい見してよっ」
子供のようにはしゃいでもう一度、と催促する久留美の様子に千夜は若干予想を裏切られたようだった。
「新條はこういう異常現象、怖がったりはしないんだな」
「さっきの化け物強襲に比べたらこんなの夢と希望に溢れた可愛いもんよ。だから、もう一回」
千夜は子供にお菓子を強請られた大人のように少し困った風に溜

息を小さく吐くと、久留美の腹部に手を伸ばした。
「な、何っ？」
「神崎に一発入れられたのは何処らへんだ……ここ辺りか？」
服越しにちょうどその部分に値する箇所を押されて鈍い痛みに顔を顰める。
漏れた声に千夜は言葉を聞くまでもなく察したようで、探るように動かしていた掌を止める。
間もなく銀色の光が掌に帯び始める。
感覚を鋭くしてじっとそれを受けていると腹部に不思議な温かみを感じた。
「あれ？　……あったかい」
「鬱血した部分の死んだ細胞が息を吹き返しているんだ。再生する細胞が活性化する中でお互いに熱を出し合う。運動した後、体温が一時的に上がるだろう？　あれと同じことだ」
「へぇ、だから……あ～、あったかいこれいいわね」
「痣で済んでよかったな。傷となると再生するのも相当な労働だ。分泌する熱も半端じゃない、温かいどころが焼鏝押し付けられたような熱さと痛みを思い知るところだったぞ」
「そ、そうなんだ……へぇ～……あ、もう平気よ」
先程までの疼きはすっかりなくなっていた。
感心した久留美はしばらく腹を摩る。
見上げると、千夜は緩く微笑み、
「さて、新條。質問タイムだ、私に答えられる事なら何でも教えよう」
「へ？」
「とりあえず、ここにいればしばらくは安全だ。だが、逆に言えばここから下手に動けない。行動が制限されてしまっている今、私たちが出来るのは言葉を交わすくらいだ。お前には、私に聞きたい事があると思うんだが」
言葉通りだ。

此処に至るまでに知りたい事、聞きたい事は溢れ出そうな内側に溜まっていた。

だが、

「……そういうのってパターンとしては秘密だと思って、一応……持てる限りの理性で遠慮してたんだけど」

「巻き込んでおいて何も教えないわけにはいかないだろう」

予想と反して彼女は内緒にする気はないらしい。

正直訊きたいことだらけで逆に困る。

けれど、最初に問う質問だけは決まっていた。

「ねぇ……さっきの……あの化け物……何なの？」

人の形をした決して人ではないもの。

虚無に満ちた表情が、血に飢えた獣のそれに変わった何か。

鋭い人にはない牙を思い出して、殺されるところだったという事実を思い出す。ぶちまけた赤い色を想像して吐き気がした。

「あれは《屍鬼》というものだ」

「……し、き？」

千夜は眉を僅かに下げながら千夜は机上に細い指を走らせた。

「屍の鬼、と書いて屍鬼だ」

言うと、彼女は表情を引き締める。静かに語り始めた。

「彼らは元は人間。“ある者”に喰われ、死んだ尚もその魂を喰った者の元に縛り付けられた成仏も許されない存在。陰気を注ぎ込まれ、魂に肉付けした偽りの肉体を与えられた端末さ。屍から鬼へ……ゾンビ、が一番近い表現だろうな」

聞いた字面だけを見れば、笑ってしまうくらい荒唐無稽な話だ。

けれど、実際襲われた久留美にはその小難しい説明を笑い飛ばす事など出来なかった。未だに、千夜の腕から飛び散った鮮やかな赤色が目に焼き付いて消えていないのだから。

「屍鬼となった連中には思考や人格は無い。残っているのは地獄の苦しみと飢餓に近い食欲。その苦しみと飢餓というのは人間の血肉を補給するとその間は安らぐらしい。生前の姿を象って油断しきっ

て隙だらけの獲物に――――――がぶっ」
　顔の前での片手ジェスチャー。
　もし千夜が傍に無く、一人きりだったら間違いなくそんな末路を辿っていただろう、とそのシーンを想像した久留美は一人肝を冷やした。
「そうして、飲み食いし存分に貪った分だけ新たなエネルギーになって親玉の元へ送られる。それを得た親玉はまた強くなって、糧になった者達は新たな手駒となる……と、この質問に対しての説明は以上だ。他には？」
「……アンタって一体……何者？」
「そーゆーのを飽きもせず昔から一目忍んで相手にしている連中の一人さ。一応退魔師って奴」
「……それって、あれ？　普段は女子高生、しかしそれは世を忍ぶ仮の姿。しかーし、その正体はー……っての」
「大分レトロなフレーズだが、そう解釈してくれても構わない」
　彼女は言い切り、沈黙した。
　久留美も考え込むように沈黙する。
　少しの間が互いの間に訪れ、久留美は自身の中で導き出した答えを口にしてそれを破った。
「殺されたかけた身で、この期に及んでなんだけど……ぶっちゃけ有りなくない？」
「あー、やっぱり。こっちも言いだしっぺでなんだが私もそう思うよ」
　私もそう思うってアンタ……、と呆れて項垂れる。
　もう少し信じろと強要してくれても良いのに、と呟けば千夜がさらさらそんな気はなさそうな顔で、
「そう言われてもな。こっちのことはどれほど説明しても信用してもらえない事を何度も繰り返すほど、理解してもらう必要はないんだよ。信じられないのなら、信じなくてもいい。夢だと思うのならそれで全然構わない。寧ろ、大歓迎だ」

千夜の台詞に呆気に取られていると千夜はそれを知ってか、更に続ける。

「転校初日、あの後帰り道で私が言った言葉を覚えているか？」

「え、……と……」

「“有り得ない真実を信じ込みやすい嘘にすり替えてしまえば人を騙すなんて簡単なこと”。何故そうなるか、それはな新條……」

ガタリ、と物音を立てて椅子から立ち上がり、

「信じないからだ。例えそれが現実であっても、あまりにも非現実的ならば自然と否定する。見てみない振りをするのさ、今まで信じてきた常識を壊われることを恐れ、壊したくないと望む。だから誰かが、もしくは自身が偽りを用意すれば、それが目の前の現実よりも現実的であれば容易く受け入れる。そして、打ち捨てた有り得ない現実を忘れる。……無かった事として」

告げられたそれはあまりにも的を射ていた。

あの化け物に遭遇した時、久留美も同じように思った。

これは夢だ、夢なら早く覚めて欲しい、と目の前を現実を否定して、仮想を求めた。

人間はそうやって自己防衛の為に現実逃避する。その為に、“何か”を見捨てて――――。

「まぁ、こっちとしては逆にありがたいことだがな。昔ならばともかく、今は化け物と戦える奴なんぞ普通の人間から見ればそう対して変わらない。変に騒ぎ立てられるより知らん振りしてくれる方が面倒がなくていい……特に、親しくしている人間には尚の事な」

その言葉の後、一瞬千夜の表情に翳りが見えた。

何処か遠くを見つめるように呟かれたその言葉は何故か久留美にはとても重く感じられた。

「ん？　どうした、新條」

ここではない何処かを見ていた双眸はいつの間には久留美に戻されていた。

そこには先程見えたはずの翳りはない。通常通りの余裕に満ちた

頼もしい表情と瞳の豪華絢爛の輝きがあった。
「そんな顔をするな、ちゃんと傷一つなく無事にここから出してやるから」
ポン、と頭に置かれた手。
そこから伝わる温かさが、何故か胸に突き刺さるような痛みに変わった。

◆　◆　◆

空間のやや薄まった闇を久留美はぼんやりと眺めていた。
特に何もすることがないからだ。
「あーもう……あんなこと言っておいて何で一人にするのよぉ……窓ガラスを破って入ってきたらどうするのよ、一気に絶体絶命じゃないっ」
さっきから独り言が意味もなく口から零れる。
否、意味はある。独り、という恐怖を軽減できる。
先程までいた千夜は今、ここにはいない。
恐らくはこの頭上の先で怪物たちと戦っているに違いないだろう。
数分前までここにいた千夜との会話を思い出す。

『はぁっ？　ココ出て上に行くぅっ！？　アンタ正気ぃ？！』
『至って正気なんだが、つーか新條声デカイ』
むぐ、と口元を押さえられとりあえずのところ黙ると、
『さっきはここにいれば安全だと言ったが、このままじっと待っているわけにもいかないんだよ。防戦一方では、攻め込まれるだけだ。屍鬼は生きている人間の匂いに敏感なんだよ。僅かにでも残り香があれば嗅ぎ取り、その後を追ってくる厄介な連中なんだ。どういうことかわかるだろう？』
『う〝……』
匂いを辿ってくるということは、いずれここにも足が付くという

コト。
　ここが安全区域であるのも時間の問題。
『うう……わかったわよ、行けばいいんでしょ行けば』
『いや、お前はここいろ。行くのは私だけだ』
『はぁぁっ！？』
　更なる驚愕をぶち当ててくれた千夜に、一つ嫌な予感を覚える。
『まさか、私を見捨てる気……？』
『落ち着け。上にいる連中を片付けてくるだけだ。ここに来るのを待って迎え撃つのは、正直きついんだよ……』
　ハッとする。
　理由はなんだかわかった。他でも自分がいるからだ、と。
　先程のことを思い出せば、その答えに行き着くのは簡単だった。
　久留美と、というもう一人の獲物がいたから、化け物の注意が分かれて千夜が怪我を負ったのだ。
　思わず顔を伏せて黙り込むと、心情を察したのか千夜は気遣うように言った。
『安心しろ……出来る限り早く終わらせてくるから。……そうだ、私がいない間はこれを持っておけ』
　スカートのポケットから取り出されたのは、逃げてくる前に千夜が図書室の扉に使っていた奇妙な札だった。
　千夜は二枚しかないそれをぺりぺりと剥がし、一枚を久留美に渡した。
『これって……あの時使ってた札よね？　……一体、何なの』
『それはな、“三枚の御札”だよ。日本昔話……知らないか？』
『それって……あの、山姥に小僧が追いかけられる話よね？』
　久留美にとって、それは幼稚園や小学校で紙芝居で嫌と言うほど見せられた話の一つ。
　やめろって言うんだから止めれば良いのに、とか。山の中で年取った婆さんが一人で暮らしてるなんておかしいだろ、とか。そんなことを考えながら間抜けな小僧に苛々していたくらいしか印象がな

い。
確か物語の中盤で、小僧が本性を見せた山姥から逃げる時に和尚から貰っていた札を使っていたな、と古い記憶を探り出す。
『この札が……それ？　何でまだあるのよ』
『知り合いがそういうものを扱う店を経営していてな。バイトで仕事をしていたら偶然見つけた。面白そうだったから、ちょっと拝借させてもらったよ』
つまりは勝手に持ち出したということ。
なんてことなさげに白状する目の前の性格破綻ぶりを発揮する少女に頭痛を覚えた。
『……あれって作り話じゃなかったのね。この調子じゃ舌切り雀の話もホントにあったことみたい』
『ああ、それに出てきた葛籠（つづら）が大小二つあったな。中身は開けてみなかったからわからないが』
『マジでッ！？』
本気で驚くこちらに千夜はくすり、と笑い、
『何かあったら、それに念じればいい。私を呼びたかったら、敵を撃退したかったら、庇護をしてくれる存在を創りたかったら。それの効力はなかなかのものだから、大抵の願いに答えてくれるよ』
そう言って彼女は外敵の掃討へと出向いて行った。
「こんなので本当に大丈夫なのかしら……」
両手で大事持った札。
動かすとペラリペラリと揺れる様が頼りなさを煽る。
千夜がいない今、頼みの綱はこのほんの少し力を入れれば簡単に裂けてしまう紙切れ一枚。
なんというか、これ以上にない心細さを覚えずにはいられない。
「はぁ……」
不安を吐き出すような溜息を何度ついたかはもう覚えていない。
時計を見れば、七時を回っていた。いつもなら家でソファに転が

ってテレビでも見てる時間だ。
腹から空腹を訴えてる声まで聞こえてきた。
「……信じない、か」
腹の音を紛らわすように呟いたはずなのに、出てきたのはこんな言葉だった。
千夜の語り出した話はあまりにも突飛な内容だった。非現実的な与太話と片付けられてしまうような。
久留美は現実主義だ。目の前で起こった事、目にした者しか信じない。
小さな子供は一度は心を傾ける御伽噺もくだらない、と小さい頃から小馬鹿にしていた。
誰よりも現実を見つめていた。世界は決して平和ではない、と。皆ぬるま湯のようなそれに浸って見て見ぬ振りをしているだけだ、と。平穏の紛れて不穏が存在するということを。
だから記者になりたい、と子供の頃からずっと夢見ていた。
皆が目を逸らすなら、知らないと言い張るなら、私が真実を暴いて突きつけてやる。
その志の前に突然現れたのは自身が否定する非現実。紛れも無い現実になって、久留美に牙を剥いた。
それに立ち向かったのは、現実であるはずの最近知り合った転校生。非現実を纏って、非現実と対峙していた。
現実離れした現実。ほんの少しの思い込みで夢にも現実にも変わる不安定な存在。
思考を狂わす、不可思議。
延々と考え続けたせいで、久留美の思考はオーバーヒート寸前だった。
はぁ、と深い溜め息を吐き出し、目を閉じる。
信じられないのなら信じなくてもいい、と言っていた千夜の台詞が脳裏を掠めた。
「忘れる……？」

そうだ、忘れてもいいと言っていた。その言葉は酷く魅力で気な響きを孕んだ誘惑。

ここを、この化け物が徘徊する異常な空間を出れば、何もかも終わる。自分は迷い込んだだけだ、この非日常の世界に誤って踏み入れてしまっただけ。ここは自分がいるべき世界ではない。帰ろう、いつもの日常へ。退屈だけれど、あそこには奇異なものは存在しない。

家に帰って、すぐに寝よう。目が覚めたら朝で、全部夢だったと思える。化け物も、それが徘徊する狂った校舎も、全部夢になってやがて記憶から薄れて最後には全部忘れる。

忘れる。忘れる。忘れる。忘れる。忘れる。忘れ――――、

「……忘れる？　全部、あの娘がしたことも……？」

本当にそれでいいのか。

ここで起こった事全てを夢として終わらせてしまっていいのだろうか。

千夜が身体を張って自分を守った事も、一瞬だけ見えた不可解な彼女の素顔かもしれない翳りも。

この身を守る、たったそれだけの、薄汚い自己の保身の為に無かったことにしていいのか。

ほんの少し前に思ったばかりなのに。彼女を知りたい、もっと近よりたい、。

何より、今自分がしようとしている事は何より嫌う、『現実から目を逸らす』という行為なのではないか。

自分は現実主義（リアリスト）。幻想や夢想はくそくらえ。求めるのは、現実（リアル）という真実だけ。

どれだけ非現実に近くても現実が目の前にあるのに、逃げるのか――――――――？

「逃げる？　……冗談じゃ」

自身に対する怒りに奥歯を噛み締めた時だった。

静かだった空間に音が響いたのだ。

それも廊下から。
久留美は一瞬凍りつき、混乱する頭で懸命に今の音が何処から聞こえてきたかを分析した。
「階段……？」
嫌な予感が過ぎった。
それが下から上って来るならまだいい、もしそれが上から降りて来るものなら、千夜はどうなったのだろうか。
死、という最悪の考えへと結論付きそうなり、頭を振る。
今はそれどころではない。
どちらから来ていようと、近づいてきている足音はあの化け物に違いない。
それにしては、若干足音のテンポがアレよりも速い気がするがそんな淡い期待はですら今は命取りだ。
笑いそうな足を叱咤しその場から立ち上がり、扉を見据える。
コツン、コツン、と足音は徐々に、確実にこの教室へと近づいて来ていた。
来ないで、と眼を瞑り、必死で息を殺した。
そして、祈った。この教室とは正反対へ行く事を。
不意に足音が聞こえなくなった。
何を思ったのか、扉の向こうの何者かは階段を上がったところで行動を止めているらしい。
向こうへ行け。向こうへ行け。
速まる鼓動を感じながら、久留美はそれすら押し潰す思いで念じた。
お願い、と懇願した時、その想いが天に通じたのか、相手の足音は遠ざかって行く。
緊迫感から解放された久留美は大きく肺に溜めていた酸素を安堵と共に吐き出した。
気を抜いたはずみに、かろうじて保っていた足がバランスを失い、その場に崩れ落ちた。

その際に蹴った机が大きな音を立てて響いた。
「っあ……うそ」
自分の締めの甘さに泣きたくなった。
当たり前の事だが、遠ざかりつつあった足音は一度止まり、再び近づき始めた。無論、この教室に。
今更静かにしてももう遅いと覚悟を決めた久留美は、もつれそうな足に鞭を打ち、壁を支えになんとか立ち上がった。
右手に護身の札を握りしめ、
「どうすんだっけ……」
現在消息が不確かな千夜を呼んでみるか。それで死体がここに現れたらどうすればいいのだろう。
札の効力は一度きり。一度しか望みに答えてはくれない。
これを失えば、自分にはもう頼れる物は何一つ残らない。
何を願えばいい？　何を、何を、何を、何を、何を、何を、何を、何を
――――――――
足音がついに止まった。
この教室のドアの前で。
鍵のかかったそれを開けようと試みているのか、ガタガタッとドアが揺さぶられ音を立てる。
身を固くしていると、音が止んでドアの揺れが治まった。
そして次の瞬間、そのドアが吹き飛んだ。
「ひっ……」
引き攣る喉から悲鳴が上がろうとした時、外と内を隔てるものがなくなりその向こうが露となった。
「……久留美ぃ？　アンタ、何でこないなとこにおるんや」
喉から出たのは悲鳴ではなく、呆けた声だった。
そして、扉の向こうから現れたのは、物騒な得物を持ったよく知る級友の姿だった。

［拾弐］　非現実的現実（後書き）

一周年……間に合わなかった（泣／ガクリ
とりあえずやけくそで二日遅れで一周年を祝います。
イヤッハーイ（痛い
更新速度は相変わらず速くなりません。きっと、二周年迎えるまでの間もこんな調子です。それでも元気に連載していこうと思うので、こんな私でよろしければこれからも御贔屓よろしくおねがいします。
今回、やたら久留美が出張ってますが、一応レギュラーキャラなので消えないように前へ出して見ました。
久留美が現実（真実）に固執する理由はいつかなんらかの機会か番外編で明かそうかと思います。
最後に出て来た人、誰かなぁ～（わかるって

［拾参］　退魔師（前書き）

其は人が脅威に晒されし時
無力に嘆く彼らの
悪しきを断つ剣（つるぎ）と為らん

［拾参］　退魔師

血走った目が蒼助を見据えていた。
赤いのは充血のせいだけではない。瞳そのものが赤いのだ。
魔の領域に踏み込んでいる証を宿した“それ”は爪を振りかざした。
「ひゅっ……」
身を屈めて避けた直後、蒼助の背後の壁が粉砕音と共に砕けた。
その怪物は女の外見からは想像も付かないような破壊力を見せ付ける。
「ったく、せっかく美人なんだからよ。もう少し愛想良く笑ったらどうだ……」
蒼助の軽口にそれは奇声で応えた。
よく見知る、今まで相手にして来た存在とは違ってこの怪物は一つの本能に従うだけらしい。
それだけに容赦ない。
最初に見かけた時に見せていた鈍足で鈍重な動きとは別物のように俊敏で獣のように鋭い。
だが、
「攻撃パターンが単調なんだよっ！」
手首が壁に埋まって動けないその隙を突き、かがんだその位置から腰から左肩にかけて太刀を一閃。
一つのことにしか意識を向けられないと思われる怪物は手首を引き抜くことに気を取られ呆気なく黒い飛沫を吹き散らして倒れた。
ふぅ、と一息つき、周囲を見回すと切り伏せた怪物たちが物言わない塊となって転がっていた。
「……一段落ついたか……つーか、何なんだこいつらは……」
言葉の途中、怪物の屍骸は黒くくすみ塵になり始めた。
この校舎の魔性は何かおかしかった。異常だ。

肉食獣のような本能のみの凶暴な思考とそれ同様の俊敏さ。
獲物を狙う目には歪んではいても辛うじて理性と呼べる知力は欠片も感じられなかった。
かつてない相手に蒼助は動揺と違和感を隠せなかった。
倒れているうちの一体に蒼助は歩み寄り、その血の気の無い虚ろな顔を覗き込む。
「やっぱり……前と同じ奴だ」
おかしな点はもう一つあった。
場所を移動し、帰って来るとそこで倒したはずの魔性が復活している。
それはまるでＲＢＧゲームでダンジョンの中でフロアを移動する毎に敵が復活するシステムを模しているようだった。
氷室と渚と分かれてから、校舎を散策していたがやはりこの空間に徘徊しているモノは何かが違う。
今まで相手にしてきた魔性とは、違う。
「ああ、ちくしょう……厄介な事に首突っ込んじまったなぁ、くそったれが」
げしっと八つ当たりに塵芥になりかけだった屍骸を蹴った。
ぼろり、と乾いた泥団子のように崩れていく様はなんだか気味が悪い。
あの氷室二人はともかく、昶と七海が気にかかった。
あの二人は他二人と違って、退魔活動をしていない。この家業の家に生まれたら、教育は受けているだろうがそんなものは実戦ではあまり役に立たない。実際の戦闘ではマニュアルなど存在しない。ましてや、相手は人外の存在。卑怯や真剣勝負などという理屈は通用しない。
信用していないというワケではないが、やはり経験が足りないという点を考えるとどうにも不安を拭えない。
「下降りて昶達と合流するか、それとも他を回ってみるか……どうすーーーーー」

心臓の鼓動が一瞬止まり、言葉を途切らす。
背後から感じたとてつもない殺気に圧迫され、
「――――――っ！？」
バッと振り返るが、そこには誰もいない。何も存在しない。
だがビリビリと肌が、感覚が、感じる。確実に存在する何かが放つ、寒気がする程の殺気を。
「魔性、じゃないよな……」
魔性程度が、こんな全身を刺すような殺気を分泌できるはずがない。
これは『人間（ひと）』だ。それも並大抵の戦闘力ではない屈指の実力者。
身体が、心が、怖いと感じるほどの化け物。
同時に懐かしい、と思った。
今もう、決して対面する事が叶わなくなった『あの殺気』に近かった。
浸っている場合じゃない、と我に返り殺気を辿る。
根源となる存在はここにいないのは確かだ。だが、近い。向こうもこちらに気付いており、近づいて来ている。
「……あの階段の曲がり角……か」
触らぬ神に祟りなし、などと言ってもいられない。
このまま逃げて背を向ければそれこそ一巻の終わりを迎えかねないだろう。
できることは、やるべきことは、この正体知れない存在を攻めに入らせる前に一太刀で切り伏せる。それしかない。
「やらなきゃやられる……ったく、懐かしくて涙出そうだ、ある意味」
足音は聞こえない。恐らくは消しているのだろう。
おかげで今どれほど近づいているのか、感じづらくて仕様がない。
人間と思われる相手がどういった理由でこちらに殺気を向けて来るのか。どうして、こんなところに迷い込んだのかは知れない。
だが、蒼助にとってそんな事はもはやどうでもいいことだった。

考えていられる状況ではなく、一つ行動を間違えば確実に『死』が訪れるギリギリの一線上を歩いている状態。

（……っ今！）

徐々に曲がり角の死角へと近づいていた蒼助は相手と自分の距離がギリギリのところであることを気配のみで察する。

飛び出した。

「――――――っらぁ！」

早く、速く、疾く。

捻りをかけた横一閃を飛び出す同時に振るう。

が。

手応えは肉を引き裂く感触ではなく、金属音響く硬質な噛み合い。

（ちっ、外し……）

次の二撃の為に間合いを取ろうとした時、蒼助は相手の顔を真っ正面から見た。

瞬間に目を見開き、声を荒げた。

「……な、お前っ……終夜！？」

「……玖珂？」

蒼助の渾身の速さを以て放った剣閃を同じくして刀で受け防いだその人、終夜千夜（よすがらかずや）がきょとん、と目を瞬かせた。

◆　◆　◆

「まぁ、というわけだ。事情はわかったか？」

「わかるぁぁぁぁぁっ！！　作者の描きやすいように説明を省略するんじゃねぇ！」

読者の想いを代弁すると、千夜はやれやれと言わんばかりに肩を竦める。

「だから言ってるだろう。あの蛙男なら、札で五階の図書室に閉じ込めてある。しばらくの間は出られはしない。とりあえず、私は下で待たせている人間が一人いるんでな……一旦戻る」

「それは聞いた。そうじゃなくて、何でこんなところにお前がいるかって聞いてんだよ、俺は」
「放課後の人がいなくなって静かな図書室で優雅に読書に耽っていたら、野暮なことに発情ガエルが襲ってきたんだ。人質とられて、ストリップショーを強要されそうになったところをなんとか隙をついて一般人連れて必死に逃げてただけなのに……」
しくしく、とわざとらしく涙を浮かべる千夜のその仕草はとりあえず無視する。
涙は自在に操れると以前言っていたからだ。
「で、その自称被害者が何でそんなエラく物騒な代物片手にこんな化け物が徘徊するところ歩いているんだ？」
「後始末だよ。身の程知らずな真似をした代償をその張本人に払ってもらおうと思ってな……その死を以って」
突然低くなった声に蒼助は背筋に薄ら寒さを感じた。
辺りの気温が一気に下がった感覚の中で、ゴクリ、と息を呑み黙っていると、
「まぁ私はこれから一旦顔見せに戻るが、お前はどうする？　とりあえず、上に行ってアレと闘うのだけは止めておくべきだがな」
「ああ？　何言ってやがるんだ、てめぇは……何のために俺がここにいると」
「何処で嗅ぎつけたかは知らないが、この結界に巻き込まれて仕方なくなら止めておけ、仕事絡みならもっと止めておけ。アレは“お前たちが”的と認識して日頃倒している輩とはワケが違うぞ。悪いことは言わん、私が何とかするからここらで腰を落ち着けていろ。私も数少ない気の置ける友人をこんなことで亡くすのは嫌だ」
「何っ……」
小馬鹿にされた、と感じ取った蒼助はギラリ、と元々きつい目付きを更に鋭くし千夜を睨みつけた。
馬鹿を見下すのは大歓迎だが、見下されるのは死ぬ程我慢ならない。

「いい加減にしろよ……これ以上ふざけた事抜かすならお前でも……」

「“ただの魔性程度”なら私はここにいない。こんな結界、強引にでも破って降魔庁にでもまかせて今頃家族と夕飯の真っ最中さ。“素人（アマチュア）”には任せられないから、私が片付けるんだ」

「……っ、素人だの、先からワケわかんねぇコトばっか言いやがって……こっちにわかるように説明しや」

全く意味を解せない事ばかり言いつつ、尚も拒絶する千夜に食って掛かろうとした。

その時、蒼助の頭上の先から轟音が響いた。

◆　◆　◆

見る影も無く破壊された扉。

もはや怪物を閉じ込める隔てとしての役目を終えたそれの残骸は床に無数の破片となって転がっていた。

その一つを部屋の奥から現れた影が力いっぱい踏み潰した。

影――――――神崎は生暖かい息を吐きながら口を裂けんばかりに歪めた。

「かかっ……手間取らせやがって」

血行の悪い紫色の血管の張り巡らせた腕を撓らせる。

どくん、どくん……と脈動するそこは血液ではない何かも一緒に流れているようにも見えた。

「こんな紙切れ一枚で……俺を閉じ込めておけるかとでも思ったかよ。舐めてもらっちゃ困るぜぇ、お姫様ぁ」

床に皺が寄ってボロボロになった札を拾い上げるとそれを千々に破り捨てた。

獲物である少女の気配を探る。神崎の眉が寄った。

当初、閉じ込めたのは千夜とあの新聞部の煩い女だけだと思っていたが、改めて《結界》内の《氣》を探ってみると他にも複数の別

の《氣》の存在を感じれた。
だが、どれだけいようと殺してしまえばいいだけの話だ。
今の自分に敵う者などいない。蒼助も、千夜も、誰一人。
そうだ、あの新條久留美だけは千夜と一緒に殺さずに残して置こう。
千夜の目の前で、長くじっくり苦しませ痛ぶりながら殺す。
そして、千夜に言うのだ。お前のせいで死んだのだ、と。
転校して新しく出来た友達を失った時、あの女はすかした表情をどんな風に歪めて絶望するのだろうか。
考えただけで、身体が快感に武者震いしそうだった。
「くかかっ……」
サディスティックな笑みを深くした神崎は明確な位置を割り出した。
しかし、弾き出された結果に神崎の顔が訝しげに歪められる。
場所は三箇所。一つ目は三階、二つ目はこの下の四階、そして最後の三つ目は――――。
「“ここ”、だとぉ？」
おまけが迷い込んだのか？
と、その《氣》を感じる前方に目を向けた、その時だった。
「――――――っ！？」
神崎の目に飛び込んで来たのは、闇の奥から現れた無数の“鳥”。
閃光に近い形で現れたそれは神崎に咄嗟の反応すら与えずに一斉に襲いかかった。
辿り着いた“光”は勢いを衰えさせる事なく神崎の周囲を飛び回り神崎を切り刻む。
突然の事態を把握は出来ないものの腕で庇いながら、周囲を見れば、飛び回っているのは白く発光する鳥だった。
服と共に皮膚を切り刻まれていく神崎は激しい苛立ちを覚える。
何故、自分が鳥にコケにされなければならないのか。

元々、皆無に等しい忍耐の沸点を超えた瞬間、神崎は吼えた。
「こ、、、、、っのクソ鳥どもがぁぁぁぁぁぁぁぁっっっっっ！！！！！！」
天を仰ぐ咆哮と共に解放された力は衝撃波となって周囲を飛び交う鳥達のその小さな身体を襲った。
強烈な神崎の反撃に為す術無く吹き飛ばされていく無数の白。
「ははっ……ざまぁ――――」
落ちて行く様を見て嘲笑(わら)っていた神崎だったが、その表情は驚愕に塗り替わる。
地に伏した一羽の白い光が一際強く光った。そして、それに続くように落ちて行く、同じように床に伏すそれらが光り出す。
次の瞬間、鳥達が一斉に閃光を発して炸裂し、廊下一体を白く飲み込んだ。
「何が……ぐあっ」
激しい発光に目が眩み、視界が妨げられる。
軽くパニックに陥った神崎は、開けられない目を擦りながら正常な視界を取り戻そうとする。
戻り始めた視力で最初に捉えたのは辺りを舞う細かい紙切れだった。
「ち、くしょう……一体何が」
「式神だよ、知らないの？」
背後で聞こえた声に反射的に振り返る。
神崎の目に映ったのは跳躍の中で二本の短刀を振りかぶった少女の姿だった。
一度の瞬きの瞬間、額から左目を通り顎、左から喉仏をかけて右を一直線に斬り付けられた。
黒い線二つがすっと表面に引かれる。
次の刹那、そこから黒い飛沫が上がった。
「ぎ、やあああああああっ！！」
絶叫と共に傷ついていない目がぎょろり、と動き、得物を振り切

り片膝ついて着地した相手を見据える。
「て、め、ぇぇぇぇ、ぇぇぇぇっ！」
憤怒と怨嗟をあげて、見る見るうちに尖りきった凶悪な異形の手と化した右手を少女に振り下ろした。
少女は怯みもせず己の眼前で両手の短刀を十字に交差し、
「アマテラスオホミカミっ！」
一句一句力強い調子で紡がれた言葉の直後、少女と神崎の間に見えない“何か”が隔てるように発現した。
それの強烈な拒絶に神崎はその場から吹き飛ばされる。
下がる機を得た少女は神崎との距離を充分取れるところまで跳び退いた。
「どう？　攪乱させて隙を打つとしてはなかなかイイ線いったんじゃない、俺」
その背後、闇からテンポに乱れのない足音を響かせて一人の青年が現れた。
かけた眼鏡のブリッジを中指で押し上げながら、無愛想に評価した。
「……まぁまぁ、だ」
「え～、俺は百点だと思うけどなぁ……」
「渚、無駄口を叩くな……これからだ」
神崎は愕然とした。
唸るような声でその男の名を口にする。
「氷室……雅明っ」
男――氷室は向けられた敵意にも微塵も動じず、受け流す。
「昼間言ったはずだな、神崎陵。“外れる”という事がどういうことを指すのか、どのような道を辿るのか……」
何時取り出したのか、氷室の人差し指と中指の間には札が挟まれていた。
揺らぎの無い水面のように静かな眼差しの中に確かな戦意を浮かばせ、

「そして、これがお前の末路。破滅と言う名の片道だ」
感情の起伏を感じない調子だが、敵意が籠っているのは神崎にはわかった。
神崎は身を震わせた。
ふつふつ、と内側で沸き上がって来る感情。歓喜、によって。
やはり人間など止めて良かった、と改めて思う。
どれだけ憎しみを込めて視線を向けても、この男は欠片も関心を向けなかった。己の眼中にないとばかりに。
それがどうだ。今、あの氷室雅明が敵意をこの一身に向けているではないか。
「は」
知らずのうちに神崎は笑っていた。
裂けんばかりに、口を歪めて、
「くく、くははははははっ……」
「何が可笑しい」
突然笑い出した神崎を冷たく見据え、氷室は尋ねた。
神崎は笑い絶えないまま、間間に答えを返す。
「ははははっ……別に、おかしくねぇよ……ひっひひひ……嬉しいんだよ」
そう、嬉しい。
何故か？
決まっている。
「――――ようやくてめぇをぶちっ殺せるんだからなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっ！！！！」
絶叫と共に神崎の潰されたはずの目がカッと見開いた。
血が流れ込むそこにあるのは澱んだ光。爛々と輝く狂気。
そんな神崎の狂態を冷静に眺める氷室に、若干ヒいている渚が向いた。
「殺る気だねぇ、彼……どうする、向こうは準備万端みたいだけど……とりあえず、“挨拶”しておこうか」

「……」
「露骨に嫌そうだね。もういい加減慣れなよ、マサ。しょーがないでしょ、決まりなんだから」
氷室と渚は降魔庁に所属して、三年になる。
そこに所属した退魔師には、討伐の際にしなければならない“ある事項”があった。
入社当初も、今もこの行為は氷室は酷く受け入れられないでいる。
「はーい、いくよー……退魔機関《降魔庁》所属退魔師、氷室雅明並び朝倉渚」
「……我ら、人類の庇護を担う者として」
渋りながらも、
『闇よりいずりし汝を闇に帰す』

◆　◆　◆

建物全体が振動する程の轟音。
何の前触れの無い突然の出来事に蒼助を顔を上げ、
「何だ今のは……この上か？」
頭上は千夜が先程言った『神崎が閉じ込められている図書室』があるはずだ。
そこで蒼助はあることを思い出す。
「そういや……五階っつったら、氷室達が向かったはずだったな……」
何気ないその言葉に千夜は過剰なまでに反応を示した。
「何だとっ！？　お前、一人じゃなかったのか……」
「んなわけあるかよ。大体、この件にだってなぁ、氷室が人の生活がギリギリなのをつけ込んで仕事と称して無理矢理だなぁ……って聞いてんのかよ！」
「……あ……何？」

とても聞いているようには見えない千夜は額を抑えて、眉をピクピクさせている。
怒っています、を身体で表現された蒼助はう、とたじろいだ。
「な、何怒ってんだよ……突然」
「怒ってなんかいない」
「……いや怒ってるだろ」
眉間にしわ寄せて、整っているだけに目が細まるとそれだけに迫力があった。
千夜は怒りを振り切るように深呼吸を繰り返し、
「……行くぞ」
突然の言葉に、何処に、と返してしまい、
「上にだ。お前の仲間が下手打つ前に……あの蛙を殺す」
「下手打つって……お前、知らないから言うんだろうけど、アイツ等は……」
「腕利きか？　そんな肩書きは関係ない、澱の上での実力など……アレを前では滓だ」
「……っっ！」
蒼助は切れた。
こらえていたが、現界だった。
千夜のブラウスの第一ボタンが弾け飛びそうな勢いで胸ぐらを掴み上げる。
が、千夜の顔は憤怒の蒼助の迫力にも少しも揺らぎもしない。
それどころか、諭すように、
「聞け、玖珂……アレはお前達が知る衰弱した退魔概念の影響を受けた三下じゃない。アレは“澱”から這い出てきた怪物だ。深く、暗く、澱みきった底に沈む澱そのものだ。奴の前では、お前達、澱の上の人間が扱う術、力、常識は一切通用しなければ、意味も為さない。あの怪物をどうにか出来るのは同じ澱に沈む者だけだ……」
「……澱？　……お前、一体何言って……」
問いは最後まで紡げなかった。

それすら待たず、周囲に無数の気配が出現する。
「ちっ……」
千夜は舌打ちすると、蒼助の手を振り解き、
「話はまたの機会だ。今は、コイツらを片付けるぞ」
気配はやがて、人の姿形をとって存在を確定させた。
それは先程蒼助が倒したはずのここ四階を占拠していた化け物達だった。
周囲を囲むように現れたそれに蒼助は、下ろしていた太刀を再び構え、
「……おい、これにだけは答えてもらうぞっ」
「何だ」
「こいつらは一体なんだ、どうなってやがる。殺しても殺しても甦って来るんじゃゾンビより質(たち)が悪ぃぞ」
「この連中はそのものを倒してもその場しのぎだ。二度と目にかかりたくないなら、親玉を潰すしかない」
「……っどうあっても上に行かなけりゃならないのかよ」
今日という日はとんだ厄日だ。
蒼助はつくづくそう思いながら、最も身近にいた化け物の首を斬り飛ばした。。

［拾参］　退魔師（後書き）

暑い日が続きますね。この前、高校の文化祭の準備に行ってきたんですが、照り照りの外の方が涼しいという怪異に遭いました。校舎が、いるだけで汗かくくらい蒸すのですよ（怪異でもなんでもねぇなんだか知らない間に舞台セットで絵を描く事になっていた。寝坊して休んだ日に決まったらしい。えらいこっちゃ。

本文についてですが、何だか描き難い。理由は不明。調子の乗りが悪いよ、続き書きたいのに……。負けんな、私。

［拾四］　終幕の予感（前書き）

もう終わるよ、と誰かが告げる
もう終わりか、と告げられた誰かが立ち上がる
なのに何故か幕はいつまでたっても下りない

［拾四］　終幕の予感

軽く地面を蹴り、渚の体は低く浮いて後ろに跳んだ。
その瞬間、たった今までいた足場が陥没する。
振り下ろされた鉄槌により大きく罅割れたコンクリートの地面を見たが、また一つ増えた、と認識して終わる。
当然だ。何しろ、これと同じものが壁、床のそこら中に張り巡らされているのだから。
最初の一撃で、喰らえば即死を確信した渚は最低限の動きで避けつつ、
「すごいね……それが君が手に入れた《力》ってやつ？」
地面に着いたままの腕の、肩の付け根部分を深く斬り付ける。
直後、渚の神が後ろへ流れ靡いた。
それは前兆だ。
目前で、たった今傷つけたのとは逆の腕が後ろに引かれて突き出される瞬間の。
「はっ、それだけじゃねぇ！」
突き出された拳が空気の抵抗を引き裂いて渚の顔面に向かう。
紙一重でそれを避け、バックステップを踏んで距離を取る。
神崎が変わらず割れた地面に置かれたままだった拳をようやく離す。肩からは黒い液体がどくどく脈打つように流れていたが、やがてその勢いも見る見るうちに衰えて行く。
やがて、血は動きを止めた。まるで蛇口がしめられた水のように。
「……もしかして、今傷塞がった？」
見れば、初撃でつけたはずの首周りと顔の左半分の傷もこびりついた血を除けばそこに目立つ物は無い。
「もう一つは、その自己治癒……というよりは再生力かな？」
「そうだ。いくら攻撃されようが傷つかない肉体（からだ）、そしてこのパワー……もう俺に恐れるものはねぇっ！　どうだ氷室、さっきか

ら飼い犬の後ろに隠れたまんまじゃねぇか……怖くてぶるってるのか？」

渚の背後――渚よりも長く距離を保つ氷室はそのあからさまな嘲りに反応はしなかった。

それを己の思う通りととったのか、神崎は嘲笑を深める。

「ひゃはははははは、こりゃ愉快だ、傑作じゃねぇか。化けの皮引っぺ剥がしたら、一人じゃなんもできねぇ子羊ちゃんかよ、ははははははは……」

一目も憚らず高笑いする神崎に渚はぎり、と奥歯を噛み締めた。

その首を斬り落としてやろうと、無意識に踏み込みそうになった時、

――待て、渚。

耳ではなく、頭に響く制止の声。

氷室のものだ。

（……マサ）

――落ち着け、くだらん挑発に乗るな……それより、どうだ。

問われた質問の意味を問い返す事も無く理解した渚は、思考に言葉を並べる。

（パワーは上々、スピードもそれより劣るけど速い方……けど、なにより厄介なのは再生能力かな。そこから見える？　俺がつけた傷全部塞がってるよ）

――ああ、見ていた。確かに最も注視すべきところだな……

…。

（斬っても斬っても治られちゃキリがないよ……どうしようか、マサ）

少しの沈黙。

渚は何も言わず雅明の言葉を待った。

どんな言葉が帰って来ようと、彼の意を実行する気でいた。

――――……《十二神将》を使おう。

思わず、背後の雅明を振り返ってしまった。

『十二神将』。それは雅明が所持する最大の切り札とも言えるモノ。

時を遡ること千年、人と化生（けしょう）との間に生まれた陰陽師が契約を結んだ十二柱の神属。

長い時を経て、再び彼の者に仕える式神達。

一柱一柱が強大な戦力であるそれらは滅多な事では遣われない。

（……十二神将を？　確かに厄介ではあるけど、そこまでしなければならない相手じゃ……）

――――……感じないか、渚。私から見れば、あれは今まで相手にしてきた魔性の中で最も厄介……そして、“歪（いびつ）”だ。

言葉に目を細めて、神崎を凝視する。

目に見える範囲で“歪”ととれるのは、彼の額に聳える角のような突起だった。

それに対して、感覚を鋭くし、働かせる。巫女の家系に生を受け、生まれながらにして授かった突出している《氣》を感じ取る力を。

途端、軽い嘔吐感を覚えた。
角から発生し、神崎にまとわりつく汚れきった瘴気に。
これでは魔性など赤子のように可愛いものだ。この汚れよう、黒を黒で塗りつぶし続けたように深く暗い。
察する。これはこの世に在ってはならない存在だ。
そこにいるだけで、辺りの正常な氣が乱され、犯され、穢される。
こんな存在は初めてだ。こんな芯まで黒一色の存在は。

（……で、どれを降ろしてくれるの？）

――――……いいのか、あれはお前の身体に負担がかかる……。

（……何を今更……約束したじゃん、マサ。――――何処までもついていくよ）

この相棒と出会ってもう十年になるだろうか。
彼に出会うまでたった一人を除いて、友人などという対等の存在は自分には無かった。
巫女という女系の一族に生まれた稀に見る男児である渚は、いつも双子の姉の『オマケ』として腫れ物のように扱われ、時に蔑まれた。
母、祖母、そして姉だけは自分を見てくれたが、それでも独りという孤独だけは拭えなかった。
そんな時、古くから交流を持つ土御門の屋敷に招かれて庭を歩き回っていた渚は誰かが啜り泣く声を聞いたのだ。聞いた、という言い方は少しおかしい、正確には直接頭に響いたのだ。
響く声が大きくなって行く方へ向かえば、広い池でぽつんと立っている己と同じくらいの少年。
人知れず、泣き声すらあげず静かに涙を流していたその子こそ、

氷室だった。
彼も独りだった。ただし、自分とは違い親すら敵だった。
一目見た瞬間、不思議な縁を感じた。それは一目惚れした時にも似ていたけれど、断じて異なる。
誰も聞き取れなかった彼の本心を聞いた幼い渚は、ようやく探し物を見つけたような感覚に陥った。己の理解者を見つけた、と。
それは孤独を共有する者同士の共感だっただけかもしれない。
だが、いつからか自分は彼の側から離れられなくなっていた。
それが当たり前のように思えた。
そして、彼の決意の日に渚は誓った。一つの約束を自分と彼の間で糸で繋いだ。
「……この魂ある限り、幾度転じても君と同じ道を歩み続けよう……」
あの日の約束の言の葉。
氷室にしか聞こえないように口にする。
後ろは振り返らなかったが、彼が僅かに笑んだのがわかった気がした。
「……行け、渚」
「ラジャー……いっきまーすっ！」
彼の“策”を促す為に、渚は駆け出した。
再び戦闘の幕を切った。

◆　◆　◆

スパン、と切れのいい音が蒼助の背後で響いた。
己の周囲の敵、最後の一体を切り伏せ、振り返るとかなり壮絶な図が描かれていた。
床や壁に四散する首や手、足などの敵であったものの部品がぶちまけられ辺りがどす黒い液体が充満している。
その中に、物騒な長い刀を携えて、暗がりで見ると血にしか見え

ない黒い液体に塗(まみ)れて立っている様は、相当な具合にグロい光景だ。
「うっわ……壮絶」
それなりに修羅場をくぐり抜けてきた蒼助だったが、さすがにこんな光景を目にしても慣れることはできない。
見る目明らかに引く蒼助に千夜は呑気に笑い、
「六体目ともなるとさすがにスプラッターだな、ははははっ」
「……う、負けた」
三体しか倒していない蒼助は、同じ時間で倍の数を倒していた事実に軽く打ち拉がれた。
千夜は額から伝い落ちて来る黒い滴を乱暴に手の甲で拭い、
「さて、また復活される前にここを離れるとするか。上でアレの相手をしているお前の仲間も気にかかる」
またその話だ。
千夜はさっきも言っていたが、今この校舎に巣食っている魔性はとてつもなく強大な力を有しているらしい。
今の現代に先程のようなワケのわからない怪物を生み出して配下にするほどの強力な魔性がいた、ということは驚愕だが、あの氷室が太刀打ち出来ないというのは些か信じ難い心情だった。
あれはかの有名な大陰陽師が発展させた退魔の一族・土御門の次期当主と謳われる人間だ。もちろん、本人の実力が名前負けなどしていないのはかつて不本意ながらチームを組んでいた蒼助自身がよくわかっていた。
時折、都市から遠く離れた辺境に出没する高レベルの魔性を討伐しに行く事もあるほど、彼の周りもその力量に信頼を寄せている。
最悪に相性は悪いが、そこは蒼助も認めていた。
それに氷室の側には本人が絶対の信頼を置く相棒がいる。
幾重もの精密な策を練る氷室と、それを言葉を交わす必要すら無く受け取り実行する渚。あの二人が揃えば、正直怖いモノ無しだ。
「……なぁ、終夜」
「何だ」

「さっきは熱くなって悪かった……けどよ、この際俺の事は置いておくがアイツらは……俺の仲間はマジ強い。そこらの年期積んでも二流三流止まりよりはずっと。そんな退魔師でも、太刀打ち出来ないとお前が言うが……一体、何がお前にそう言いきらせるんだ」

背を向けて歩き出していた千夜が、ふとその足を止め振り返る。

「……一人の天才医師がいる。そいつはどんな難しい手術もこなしてきた超一流」

「は？」

突然何の脈絡もない千夜の発言に蒼助は目を瞬かせた。

千夜は構わず続ける。

「だが、ある手術で誰も見た事も無い未発見未解明の病魔に遭遇した。玖珂、その医師はその病を治せたと思うか？」

重なる突然に蒼助は躊躇したが、思った事口にした。

「そりゃ……無理だろ、治療法もどんな病気かもわかんねぇんじゃどうしようもねぇじゃねぇか。さすがにぶっつけ本番じゃ……」

「その通り。どうすることも出来ない。……それと同じだ、お前の疑問も。どんな手練も、聞いた事も見た事も無い、他と明らかな違いがある異質な魔性を倒すなど、困難だ。特に、アレはな」

千夜の言う『アレ』と比喩される魔性。

具体的に何がまずいのだろうか。

しかし、蒼助が問うよりも先に千夜が自ら答えを口にした。

「アレには弱点がある。だが、その弱点が何より奴の厄介なところなんだ」

「……どういうことだ？」

「行けばわか……」

突然千夜の足がよろめく。

安定を無くした膝はかくん、と折れた。

「お、おいっ」

反射的に、前のめりに倒れそうになったその身体を受け止めて支

える。
　ついさっきの壮絶な光景を生み出す程の戦いを繰り広げたとは思えないくらいの軽さに、驚きつつ顔色を伺う。
　既に付着していた黒い液体は元の残骸と共に消えていたが、代わりに額にびっしり汗が浮かんでいた。おまけに顔色が若干青ざめている。
　何事か、と不安が蒼助を襲ったその時だった。
　ぐ～……。
　音の発生源は腹からだった。
　千夜の。
　その本人は俯かせていた顔を上げ、はにかんで、
「いや～、腹は減っては戦は出来ないってこのことだな。思わず立ち眩みしてしまった」
　あっはっは、と一瞬感じたシリアスの予兆は粉々に砕いて笑う千夜。
　蒼助はどっと疲労を感じた。
「……お前なぁ～」
「はははは」
　蒼助は気付かなかった。
　笑う彼女の額に今だ汗が浮かんでいる事に。
　僅かに息が荒い事に。
　そして、それが間もなくして取り返しのつかない事を招く事に。

◆　◆　◆

　疾風を伴った拳が渚の頬を掠り、肌を浅く裂いた。
　渚は怯まない。それを安い代価と踏まえ、そのまま懐に入り込む。
　わき腹に突きたて、
「神火清明、神水清明、神風清明っ！」
　力強い声に乗せられた秘咒（ひじゅ）が放たれた瞬間、神崎のわき腹に突き

立てられた短刀が白い輝きに帯びる。
眩い発光と共に短刀の突き刺さるそこが弾け飛び、大きく穿たれた。
「っぐあっ！！」
すかさず、渚はそこから跳躍して離れた。
「ヒット&アウェイってね……さすがにこれならどうよ……」
頬を垂れる血を拭いつつ、大きく息を吐いた。
さすがに今のは、代償を覚悟して入り込んだようだった。
神崎はぽっかり半月のように開いた己の腹部に手を当て、噴水のように溢れ出る黒い血に慄いたように恐怖に顔を歪めた。
「ひぃっ……い、いてぇよぉ……俺の身体に、身体に、……なぁんてな」
瞬く間に、汚らしい笑みに表情が塗り変わる。
理由はすぐそこにあった。
たった今、渚が開けた穴が塞がり始めていた。
共に破損したであろう骨もまるで時間を巻き戻すかのように再生し、吹き飛び消滅した肉は断面から幾数本の細い触手が互いに絡み合い融合していく。
そうして瞬く間に穿いたばかりの穴は跡形もなく塞がった。
「ちょっと……それ、反則じゃない？」
げんなりしたように呟く渚に神崎は勝ち誇ったように哂う。
「どうした、もう終わりか……もっと、足掻けよ。そして、絶望しろ……無様に命乞いしやがれ……」
俺のように、と付け足す神崎に渚は微かに口元に笑みを刻む。
似ている、と不覚にも“彼”に大切な人が被った。
彼には、親の愛がなかった。それどころか、忌み嫌い、憎まれてすらいる。
この世に生を受ければ、与えられて当然であるはずの最低限のことすら彼にはなかった。
自分と出会うまで彼には友がいなかった。いるのは、敬い、内心

では恐れ、それで尚『次期当主』の目にかかろうとする腹の底の腐った軽薄な連中のみ。

誰一人、彼を見てくれるものはいなかった。フィルターなしで、彼自身を相手にするものは、誰一人と。

この男、神崎もきっとそうだったのだろう。

見せ掛けの愛、背後にある権力を宛にした低俗な連中。神崎を取り巻くのはそんなものばかりだったのだろう。

冷静に考えてみれば、彼と神崎は似た境遇を持っていた。

恵まれているようで、実際はどちらもそうではなかった。

渇いた心を癒してくれるものは何一つなくて。

一歩間違っていたら、彼もこの男のように闇に身を委ねていたかもしれない。

（……でもね、神崎……お前とマサはやっぱり違うよ。だって――――）

彼は堕ちなかった。絶望に取り囲まれながらも、もがいて、もがいて、今も出口を探し続けている。

彼は諦めなかった。己の境遇に嘆いたままではなく、ずっと希望を探し求めている。

「……ねぇ、今一瞬……君とマサは似ていると思った……けど、やっぱり違ったみたいだ」

「……あ？」

神崎は笑いを強張らせ、渚を見た。

「自分だけに絶望が訪れたなんて思うな。絶望を見た人間なんてこの世に腐るほどいるよ。だって、この世は希望よりも絶望の方が多いんだから……何か途方もない絶望をして自殺する人間と思い留まる人間……何によって分かれるか解る？　それはね……絶望に立ち向かう“強さ”だ。マサは強い、お前のように絶望に甘えて、苦痛を恐れて楽を選ばなかった。その力はお前にぴったりだな……本当に強くなろうとせず、他人からの力で得た……虚像に縋るしか無いお前に」

力の否定。己の否定。
今持つ全てを罵られた神崎の怒りはあっという間に沸点を迎えた。
「てめぇっっ」
「同情はするよ……けど、悪いが俺はお前のような弱い人間に何か思えるほど優しい奴じゃないんだ。さぁ、そろそろ遊びは終わりにしようか。生憎、君の相手もこの無意味な繰り返しにも厭きてきたところだ」
その言葉に神崎は渚の発言を捉え違えた。
「まさか……今までのが手加減していたとでもいうのかよ。ハッタリを……っ！」
「手加減はしていない。俺なりに必死だったよ……体力を使いすぎないようにセーブしながらの時間稼ぎにね」
渚はもう、神崎のことは感覚から外した。
“まもなく来る者”の余波を感じ取りつつ、彼の者を受け入れる為に全身の力を抜き、衝撃に備える。
その前に、渚は背後で“別行動”をしていた氷室に声をかけた。
「準備はいい？　頼んだよ、相棒」
言葉に対し、氷室はただ一言。
「――――万全だ」
不敵な笑みで答えた。

◆　◆　◆

神崎はそこでようやく気付いた。
今まで渚が氷室がしようとしている事の為に注意を逸らすのと時間を稼いでいたことに。
「くそっ……舐めた真似しやがって」
「鈍感で助かったよ。見たまんま単細胞なんだねぇ……」
なにっ、と食って掛かる神崎を無視して渚は目を閉じた。
構えも解き武器を下ろして完全な無防備な状態に入った渚を神崎

は怪訝な目で見た。
その後ろで、
「我、真名を土御門雅明……」
下準備である精神統一による霊力の活性を終えた氷室は詠唱を始めた。
渚は一度だけ深呼吸をした。身体の中の余計なものを吐き出すが如く。
視界を閉ざし、呼吸を整え、心と頭からは全てを追い出し空洞に。
それは渚にとってこれから身に降りる『存在（もの）』を受け入れる為の準備体操のようなものだった。
「な、何だ？」
今までに無い二人の行動に神崎は戸惑った。
無理も無い。陰陽の理すら知らない彼には未知の領域のもの。
これから起こるか予想する事も出来ない。
困惑する敵には目もくれず氷室と渚はお互いが“策”を実らせる為にそれぞれ役目に没頭する。
「古き盟約の元、我が名にその名を連ねし十二の式神の将よ。そこに捧げられしこの依り代にその神威を降ろすことを命ずる」
渚を囲むように風が巻き起こり、黒髪と服が踊る。
それは何かが来る前兆のようにも見れる光景だった。
ただならない様子を目の当たりにし、神崎はようやく自分にとって拙い事が行われ、起ころうとしていることに気付いた。
「てめぇらっ！　何をしようとしてやがる……っ！！」
内で脈動する不安と危機感に駆られ、阻止すべく身じろぎ一つしない渚に鋭く尖った爪を備えた腕が振り下ろされるが、
「っ……ぐあ！」
まるで何者も拒むかのように見えない何かに弾かれた。
強い拒絶に神崎が一メートルほど吹き飛ぶ。
もはや誰にもこの儀式を邪魔することは出来ないことは明白となった。

そして、その儀式自体もそろそろ仕上げへととりかかっていた。
「十二神将之伍、凶将『勾陣』っ！　――――此処に顕現せよ！！」
氷室が叫びに近い声を上げ、印を組んだ両手を前へ突き出した。
瞬間、目が眩むほどの光が空間を包んだ。
激しい発光に視界が遮られる刹那の間、神崎は渚の上に降りる“何か”を見たが、すぐに耐え切れなくなり自ら反射的に目を閉じた。
すぐに光は急激に収まり、神崎も多少の目の眩みは残っていたが再び渚を見た。
そこに先程光の中で見たそれはいなかった。
いるのは、微かに何事かの余波によって全身がパチパチ放電する俯いた渚だけだった。
動かない渚。
神崎はごくり、と息を呑みそれを見つめた。動かないことを何故か願いながら。
願いは虚しくも叶わなかった。
ぴくり、と渚の指先が動き、そして――――――、
顔が上げられた。
「――――っ！！！！」
渚に見据えられた神崎は凍りついた。
そこにあったのは、確かに渚自身の顔。しかし、そこに先程まで浮べていた“表情”という者が抜け落ちている。
代わりに置かれているのは無の中に存在を主張する威圧感。
虚ろな瞳だが、自分が創り出す屍鬼とは次元違いだった。
人であるはずの渚から今伝わるのは威厳と畏怖を伴った神々しさ。
別人のようだ、と考えて即座に考えを塗り替えた。
別人なのだ、と。
先程までの“渚”に対してなら神崎自身、怯む事は無かった。
ましてや立ちすくむことなど。
「神崎……貴様は先程言ったな、自分に恐れるものはない、と」

その背後の、渚を別人にした原因であろう張本人が口を開いた。
そこでようやく、微塵も揺らがなかった氷室の表情が変化を成した。
浮かぶ表情は、勝利を確信した笑み。
「今一度、それが言えるか？　己が頂点だと、まだ言えるのか？」
この正真正銘の一柱の『カミ』を前にして。

◆　◆　◆

カミ。
かみ。
神。
神崎は頭の中でその言葉を反響させた結果、その意味を理解した。
「ふざけやがって……馬鹿にしてやがんのかっ！！」
「わからないか、なら貴様はその程度ということだ……」
ぐ、と言葉が詰まる。
正直わからないわけではない。だが、認めたくない。
それが今の神崎の心情だった。
しかし、そんなことなど知る由も知ろうとも思わない氷室は、
「……命じるぞ。勾陣、我が敵を討ち滅ぼせ」
「御意に」
声色までが違っていた。
直後、渚――――勾陣の姿が神崎の目の前から――――――視線の先から消えた。
「なにっ、何処に……」
途中、襲った前触れなしの顔面に叩き込まれた衝撃に言葉は紡ぎ終えられることはなかった。
ボキリ、と顔の中心を突き出る部品（パーツ）が砕ける音を発した。
勢いに押され思い切り仰け反った顔が元あった所には突き出した短刀を握りしめた拳。

どぷり、と鼻の奥で切れた血管から大量の血が溢れ出す。
陥没した鼻を抑え呆然とする神崎に、氷室が告げる。
「舐めてかかるぞ瞬殺を免れないぞ。今、貴様が相対しているのは朝倉渚という《神降ろしの器》に召喚された式神《勾陣(こうじん)》。十二神将の中でも最強の戦闘力を有する《騰蛇(とうだ)》に次ぐ強さを誇る軍神だ。迅さと俊敏さではそれに追いつける者はいない」
《神降ろしの器》。
それが渚の異能力であり周囲からの敬称。
その身体はありとあらゆる霊的存在を受け入れることが可能なだけではなく、符という仮初めの肉体では出来ないその存在の本来の力を発揮出来る。並の巫女では死者などの下位の霊ならともかく存在として強大過ぎる神属は自らが力をある程度戒めなければその肉体はあっという間に破壊されてしまう。
それに引き換えて渚にはその心配は無用なのである。
生まれながらにして予め外部から受け入れる為の“空洞”を持つ渚は本来の力を妨げる事なく神属に力を振るわせる事が出来るのだ。
しかし、渚自身に神属が呼べるわけではない。それは氷室の役割であり、離れた存在に召喚するのは手間がかかるという欠点があった。
符に召喚すれば妙な手間はいらず手っ取り早いのだが、本来の力を思う存分振るえず、致命的な攻撃を受ければ符が破れ召喚した式神は依り代を失い還ってしまう。
式神を召喚するのには、相当な霊力を削ることになる。現世に維持させるのにも。
今の氷室には、一日で召喚出来る回数は三度までが限度だった。
そこで、渚に時間稼ぎをさせて氷室自体から注意を逸らし、その隙に召喚に必要な下準備を終え、一度の召喚で決着がつけるという策に乗じたのだ。
そして、“二つのうち一つの策”は成功した。
あとは、もう一つの読みが当たるか当たらないかだった。

「がぁ、あぁ、あっあああぁぁぁ、あああっ！！！！」
自分に起きた事が信じられない神崎は驚愕と怒りを慟哭に込めた。
折れた鼻から留めなく噴き出る鼻血を振り撒きながら神崎は拳を振りかぶり電光の如き速さで繰り出す。
避ける素振りすら見せない渚の顔面目掛けて放たれたそれは有無を言わさず渚を打った。
確かな手応えににやり、としてやったりの笑みを浮かべた。
しかし、それも一瞬の事だった。
「……何っ！？」
手応えはあった。
ただし、それは骨を叩いた感触ではなかった。もっと、硬質な手応えだった。
狙った物と神崎の拳の間にあったのは電光石火の勢いで打たれた拳をそれよりも速く受け止めた渚の短刀だった。
「馬鹿な……っ」
迅さでも上を行かれた事にショック受けて神崎は大きな隙をつくった。
軍神はそれを逃がすような甘い存在ではなかった。
受け止めた拳から滑らすように己の腕を絡め、捻り上げた。
それに驚愕した神崎慌てて逃れようと身を捩るが、一見緩く見えるその締め様はとても固く締められている。
「くそっ……離せっ、離しやがれぇぇぇぇっ！！」
神崎の筋肉質な太い腕に比べれば、女装しても違和感のない体つきであるだけに渚の肉体を借りた勾陣の腕は一回り二回りも細い。
その頼りない見かけからは想像も出来ない力で神崎の力は抑え付けられていた。
その事実を否定しようと必死にもがき、暴れた。
それを離れた場所で聞き留めた氷室が一言命じた。
「……勾陣、――――“離して”やれ」
命令を告げた声は凍えそうなほど冷えて切っていた。

その言葉に秘められた“真意”を感じ取った式神は主人の命令を忠実に実行した。

下ろしていた右手の短刀を、

「お、おい」

その動きに神崎は本能的に嫌な予感がした。

敵の制止などに聞く耳を持たない勾陣は、構わず短刀を振り上げ。

神崎の腕に振り下ろした。

「が、あああああああああああああああああああっっっ！！！！！！」

日本三霊場の一つ、青森の霊山《恐山》の霊気を注がれた朝倉家の人間が扱う霊剣は、肉を、骨を、筋肉を容赦無く断つ。

接続箇所の一切を切り離された腕は、左腕の拘束を外されると同時に地面にボトリ、と落下し、激痛に神崎の絶叫が廊下を響き渡った。

噴き出る魔性の黒い血液が留めなく噴き出る中、それをまともに浴びた渚の顔を借りる勾陣の表情は全くの無表情で痛みに喚く神崎に攻撃を光速の動きでガラ空きとなった胴体に無数の斬撃を浴びせる。

痛みの上乗せに神崎は声に成らない悲鳴を上げ、ついに膝を落とす。

ボタボタ、と音を立てて血を流す身体には傷の無いところを見つけるのが困難なほどの凄惨な状態となっていた。

その光景は氷室が抱いていた予想を確信へと変えた。

「やはり、か……」

く、と皮肉を込めた笑みを浮かべた。

「貴様の再生能力も無制限というわけではないようだな。傷の深さによって回復に要する時間も差がある。部品が欠ければ、治すものも治せない。おまけに複数の傷は一度に修復はできない、か」

その証拠であるかのように、神崎の胴体に刻まれた無数の切り傷は修復の気配を見せない。

「つまり、損害が許容範囲（キャパシティ）を超えてしまえば貴様の自慢の再生力はあまり役に立たないという事だ」
「……な、な…ん……だと」
「何を驚いている。まさか、自分の事だというのに気付いていなかったのか？それで無敵だと主張するとは……不様という言葉も貴様に使うのは勿体ないな」
「――――っっっ！！」
侮蔑の言葉に顔を赤くして歯を噛み締める神崎。
ぶちり、と唇を噛み切り吐き出した血が充満する口の中に新たな血が流れ込む。
何もかもが信じられなかった。
瀕死に追い込まれ、地面に這い蹲る自分も。この戦況も。
こうなるのは、自分ではなく目の前の二人だったはずなのに、と。
「貴様はもう終わりだ、神崎……」
静かに告げられた宣告を神崎は否、と否定する。
まだだ。
こんなところで終わるなんて事はないっ！
何もかもこれからなのだ。
自分を見下して来た全てに復讐するのも。
千夜を手に入れるのも。
何もかもっ！！
「ま……だ、終わらねぇ……っ！」
「終わりだよ」
「違うっ！……ま、だ……だっ！」
何かを掴むように神崎の指が地面を掻く。
もがくように。
「滅せよ、魔性」
再び、勾陣の腕が上がる。
彦星の狙う先は、
額の猛々しく生える歪な角。

「や、止めろ……っ！」
「やはり、そこが弱点か」
懇願する神崎の姿など目にも入れない氷室は静かに分析した。
そして、冷徹に、短く、冷酷に、指令を送った。
「やれ」
「やめっ……――――――――――――」
制止も虚しく勾陣の腕が振り下ろされるのはほぼ同時だった。
そして、

「よせ！その角に触れるな――――――――――っ！！！」

彼らから大分離れた背後から新たな絶叫が飛んだのと、
彦星の刃が神崎の角を打つ音が重なった。
ガチン、と硬いもの同士がぶつかり合う音が響いた瞬間は恐ろしいほど静かだった。

次に起こった《力》の爆発を予期させぬ程に。

［拾伍］　延長の宣言（前書き）

劇の延長が告げられる
ココから先は予測不可能

【拾伍】　延長の宣言

「……っ……ってぇ……くそ、何が起こったってんだ畜生っ」
強く打ち付けた身体が悲鳴を上げている。
ぶつけた箇所を摩りながら蒼助は腕を支えに身体を起こした。
先程、千夜の後に続いて五階まで上り、氷室と渚を見つけたのだ。
早速見つけた二人は何かと対峙していた。と、いっても、相手は地に伏していてもはや勝負は殆ど着いていたようだった。
止めを刺そうと渚が得物を振り上げているのを見た、千夜がよせ！、と叫んだが、時は既に遅く刃は下ろされてしまった。
その時だった。
倒れている奴の身体から《力》の膨張を感じたと思ったら、突然、爆発するかのように衝撃波が廊下一帯に放されたのだ。
有無を言わさず強力なそれに巻き込まれた蒼助と千夜は伏せる間もなく数メートル吹き飛ばされ地面に叩き付けられたのだった。
蒼助が振り向くと、その先には倒れている千夜があった。
止めを刺そうとしていた渚を止めようと駆け出して前に出ていた為、蒼助よりも後ろへ飛ばされたのだ。
「おい、大丈夫か、よす」
「……くそっ……遅かった……か」
千夜は身を起こそうと片腕を床に付く。
「くっ……」
しかし、その腕はがくり、と折れて再び千夜の身体は地に伏した。
「お、おい終夜……っ」
軋むような痛みを堪え、身体を起こし駆け寄った蒼助は驚愕した。
被さった髪から覗く顔は青ざめ、尋常じゃない汗を肌に浮かべていた。
繰り返される呼吸も忙しなく、荒い。
ただならない様子に蒼助は目を見開いた。

「しっかりしろ、どうした！？」
打ち付けただけはこうはなるまい。
原因は別にあるはずだ、と考えたところで先程もこんな状態は垣間見たのを思い出した。
まさか、こんな状態を我慢してこれから戦いに挑むつもりだったのだろうか。
無茶だ、無茶過ぎる。
「っ……おい、俺の声が聞こえるか。下に降りるぞ、こんな状態で戦うなんざ到底……」
「……に……ろ」
虫が鳴くようなか細い声に最初は何を言っているかわからなかった。
しかし、それを自覚してか千夜がもう一度今度は声を強くして言った。
「……にげ、ろ……玖珂」
「っ……そういうワケにもいかねぇだろ」
「……いいから行けっ……目の前のものを見たらそんなこと言ってられなくなる……」
何とか身体を起こそうとする中で、千夜は蒼助を睨みつけた。正確にはその向こうの何かを。
あまりに苛烈な眼差しに蒼助は思わず、その先を追って振り返った。
そこにいた“異形”に蒼助は言葉を失った。

◆　◆　◆

目の前で起こっている事に対して、氷室はこれ以上にない驚愕をわき上がらせていた。
爆発から身を守る為に張った結界の媒介にした護符が役目を終えて破れ散る様や後ろで待機する渚の存在を忘れてしまう程に。

「何だ、コイツは……」
これが自分の声か、と疑いたくなるような掠れた声が口から無意識に漏れた。
理由はかつてない揺らぎが己の中で渦巻いている以外に他ならない。
かつて、神崎であった『モノ』が荒い息を吐き出しながら佇んでいた。
一回りも二回りも膨れ上がった肉体。
膨張した筋肉の上に張り巡らされた紫色の血管がドクンドクン、と脈打つ巨大な両腕。
血のように紅く染まった異様にぎらつく目。
耳まで避けた紅い口、そこに生え揃う鋭く尖った牙。
振り乱れた髪。
そして、先程よりも更に根深く生え聳える角。
怪物と化した神崎はもはや人の姿を象っていた先程とは比較にならない程の圧力（プレッシャー）と邪気を全身から醸し出していた。
巨体の化け物は突然天を仰ぎ、
「があああああああああああああああああああぁぁぁぁぁぁぁっっっ！！！！！」
獣の雄叫び如き劈くような咆哮が校舎全体を揺らす。
耐えきれなかった窓ガラスが内側から一斉に割れて弾けとんだ。
「くっ……っ！！」
無数の刃となって降り掛かった破片に気を取られ、氷室は隙を生んだ。
これ以上にない絶好の好機を獣は逃さなかった
瞳孔を鋭く細めた目が獲物に狙いを定め、弾かれるように飛び出した。
まさに一気、という言葉を体現したかのような速さで間合いをあっという間に詰める。
避けろ、という思考が咄嗟に働いたが、氷室はその指令を突っ撥

ねた。
自分が避ければ、すぐ後ろに控えている渚が的になる。
今の彼には勾陣が降りており意識はない。
そして、氷室が使役する式神である勾陣は氷室の命令無しでは動かない。
命令を送ればいいのだが、焦りと混乱で思うように舌が回らない。

「ちっ……！」

氷室は最後の手段をして護符を取り出し、突き出す。
咒を紡ぐ時間はないので省略し、思念のみで結界の展開に試みた。

氷室の前方を覆うように半円状の青白い壁のようなものが出現する。

ギリギリのところで現れたそれが巨腕の一閃を阻む。
神崎は氷室と己の間に出来た壁に苛立ったように更に腕を振るう。
壊れる様子のない障壁に神崎は何度も何度も叩き付ける。

「……っ」

衝撃の度に意識が揺れる。堪えようと歯を食いしばった。
余裕は今の氷室には残されていなかった。
式神を現世に留め続けるのは使い手の霊力を消費し続けなければならない。
ましてや勾陣は高位の神属にあたる十二神将の一柱。消費する量は半端ではない。
その上で結界にまで霊力を注ぎ込んでいるのだ。
その結界も咒の欠けた完璧と言い難い即席のもの。
ずば抜けて高い霊力を誇る氷室もさすがに限界がある。
そして、限界は氷室の目の前に迫っていた。

「ぎがあああああっ！！」

幾度となく結界に攻撃し続けていた神崎は結界の抵抗が徐々に弱くなっている事に気付いた。

氷室に終わりが近いと悟ったのか、目一杯腕を振りかぶりトドメの一撃を叩き付けた。

「ぐっ……！」

そこまでが限界だった。

渾身の一撃を受けた結界は、ぱりぃん、と儚い音を立てて崩壊した。

飛んでしまいそうな意識を踏み留め倒れまいとした氷室を、非常な兇刃（きょうじん）が貫いた。

ザシュッ、という肉を切り裂く音が氷室の鼓膜と廊下に響く。

大きく目を見開いた氷室の目は勢い良く噴き出る鮮血と共に爪が引き抜かれると同時に膝を付いた。

がほっ、と血の塊を吐き、後ろの渚を振り返った。

「……な、ぎ……さ……」

逃げろ、と言葉を放ろうとしたが、喉に詰まった血液が咽せさせ出来なかった。

微動だにしない意識なき相棒を瞳に焼き付け、自らがつくり出した血溜まりに沈んだ。

カシャン、と眼鏡が落ちて血に濡れた。

◆　◆　◆

肉体に訪れた脱力感と引き換えに渚は意識を取り戻した。

勾陣が帰還した、と思考にその言葉が巡る。

同時に凍りついた。

式神の帰還、使役者の意思によるもの。強制帰還なら、依り代の破壊、もしくは使役する者の死、それに近い意識が揺らぐ程の重傷を負うかのいずれかによって成立する。

突然の切り離されたことで身体の節々が悲鳴を上げている。渚は死んでいない。だとすれば、自然と行き着くのは後者の最悪のケース。

この場合、現在氷室は意識を失った為留める意思の消失と同時に式神は在るべき場所へ還ったのだ。
脈拍が上がる中、五感の感覚が少しずつ戻って来る。
まずは触感だった。
床に手を置けば、生暖かい液体が触れた。
次の戻って来たのは嗅覚。鉄のような臭いが鼻を突く。
最後は同時に来た。隙間風（すきまかぜ）のような息づかい。ぼやけていた視界は徐々に色と線を取り戻して行く。
一番に理解したのは床一面に広がる赤。そして、その上に倒れ込む何か。
“何か”が何なのかが思考に駆け巡り理解した瞬間、渚は引き攣る喉で、
「……っ雅明っ！！」
恐慌状態（パニック）寸前の思考をなんとか正常に保ちつつ、血の海に浮かぶ氷室の身体を抱き起こす。
目を閉ざし衣服が紅く染く染めた氷室を見て渚は泣きそうになるのを堪えた。
「しっかりしろ、マサっ！雅明っ！！」
懸命に呼びかけ続ける渚を嘲笑うような雄叫びが頭上で響く。
顔を上げた瞬間見た事もない化け物に顔を引き攣らせたが、澱んだ紅い眼を見てそれが誰なのかわかった。
「……お前か、神崎……っ」
今すぐにでも八つ裂きにしてやりたかった。
動かない己の身体が恨めしくて仕方ない。
は、は、と嘲笑い一歩踏み出す姿を見て渚は思わず腕の中の氷室を被さるように強く抱いた。
死なせない。何があっても離さない。
先程までの状況からは考えられなかった絶体絶命の中、広がる絶望を噛み締めるよりも腕の中の氷室を生かす事を優先させ渚は祝詞（のりと）を唱えようとする。

しかし、標的は足下の渚達を既に捉えていなかった。
その先の向こうを見つめ、にやり、と裂けた口端を更に広げた。

欲望に歪んだ瞳は語っていた。
新たな獲物を見つけた、と。

◆　◆　◆

己の前で起こった衝撃の瞬間に、蒼助は目を疑った。
あの氷室が倒された。それも為す術もなく。
驚愕から立ち直れない蒼助はただただ言葉を失うだけだった。
こちらの存在に気付いたのか、目の前の渚達にはもはや目もくれず神崎は蒼助達を見ていた。
次の標的を見つけたようだ。
「ちっ……次は俺達の番ってか……」
戦力として期待していた千夜は何故か行動不能。氷室は目にわかる重傷で渚は使い物にならない。もはや闘えるのは自分だけか、と太刀の鯉口を切ろうとした。
が、それを阻む衝撃が蒼助の顔面に直撃した。
千夜の直刀による強襲だった。
鞘付きのそれに殴られた勢いで、壁に激突。
「つぁっ……てめぇ、この状況に及んで何を」
殴られた横っ面を押さえつつそこにいるはずの千夜に視線を向けた瞬間、蒼助の前も巨体が通り過ぎた。
腕に“何か”を抱えて。
それが何なのかを知った蒼助は思わず叫んだ。
「終夜っ！」
さっきのは庇ったのか、と蒼助は千夜の今しがたの行動の意味を悟った。
今の接近の速度からしてあのまま抜刀の時間は間に合わなかった。

それを察して蒼助を突き飛ばしたのだ。
己の身を呈して。
「……やった……ついに手に入れたぞ……終夜、ようやく……！」
巨腕に千夜を抱き込んだ神崎はここで初めて言葉を口にした。
嗄れた声は歪んだ歓喜に震えていた。
腕の中でぐったり、と力なく俯く千夜を目にした蒼助の中で正体不明の苛立ちが沸き立つ。
「てめぇっ！」
「この女が手に入ればもう此処に用はねぇ……だけど相手が欲しいならくれてやるぜ、玖珂」
凄む形相の蒼助をそう嘲笑うと、神崎の身体から一気に瘴気が噴き出る。
一瞬で五階を廊下を大量の《屍鬼》が埋め尽くし蒼助達を取り囲んだ。
「……これだけの数の魂を……どれだけ喰ったんだ、この悪食が……」
悪態をつく千夜の声も今は弱々しい。
代わりにとでも言うように蒼助は威勢込もる罵声を放った。
「はっ、他人任せで自分は逃げるのかよ……」
「……お前らが嬲り殺されるのを終夜と二人で見物してからなぁ」
そう言って、神崎は生み出した《屍鬼》の上を跳躍し屋上に続く階段へと消えた。
後に残された蒼助は状況に、ちっ、と舌打つ。
前方を埋め尽くす《屍鬼》の数には思わず感嘆してしまいそうだ。
置かれた状況は最悪の部類に入った。
とりあえず、戦闘不能の二人の元へ駆け寄った。
「……蒼助くん」
「……渚、やれるか？」
問いに渚は申し訳なさそうに俯き、口を横に振った。
「ごめん……式神の強制送還のせいで、まだぐらぐらする」

神降ろしの異能者といえども、渚は生身の人間。
次元違いの存在である霊的存在を無理矢理切り離されれば、身体に多少の支障はきたすのも当然の事だった。
「氷室は？」
ひゅー…ひゅー…、とか細い呼吸を繰り返す氷室に構えたまま一瞥をくれた。
間近に来て改めて認識する多量の血とむせかえりそうな血臭。
いつもの不敵な様子からはあまりにもかけ離れた姿だった。
「傷が深い　…　…出血も酷いよ。このまま放って置いたら……考えるまでもない。危険だ……」
「けどよ、治療云々以前に……この状況を打破しねぇとな」
氷室は瀕死、渚は行動不能。
今、まともに戦えるのは蒼助ただ一人。
目の前には無数の“甦る怪物”の大群。
圧倒的不利の中で背後の二人を庇いながら戦い抜くのは至難の業だ。
負けん気の蒼助もこの絶望的な状況にはさすがに弱音の一つも零したくなる。
「ああっ、畜生泣くぞこの野朗……」
額を伝う汗を拭いもせず、蒼助は刀の切っ先を異形達に向ける。
恐れを忘れた呻き声を上げてジリジリ、と蒼助達との間合いを詰めて来る亡者。
緊張の瞬間、圧力（プレッシャー）を跳ね除けた蒼助は飛び出そうとした。

「――――穿てっ！　天より撃ち降ろされし矢、“天降”！！」

背後から飛んだ力ある声が耳を打つ。
同時に、蒼助の横を何かが疾風を纏い通り過ぎた。
次の瞬間、最前列とその後ろの二、三列目が吹き飛び、肉体を爆ぜた。

何が起こったか理解出来なかった蒼助だったが、振り返った事で疑問は簡単に溶解した。
「いや、エラい威力やなぁ……ウチの破魔矢にアンタの風を纏わせるっちゅー案は正解みたいやで」
「だな」
互いのタッグ技を賞賛する人間が蒼助の振り返った先の――階段付近で二人。
矢を放った体勢の七海、そしてその傍らで己の腕に“風”を纏わせる昶。
「――昶、七海っ！」
「モテモテだな、蒼助……調子に乗り過ぎて彼女達の機嫌損ねたか？」
「生憎、誘われたのは俺の方だ。しつこいから断ったらあの有様だ」
「ははっ……軽口を叩けるくらいには立ち直れたみたいだな」
孤立無援から脱出したおかげか、緊張は幾分か解れて来た。
そこへ、
「――きゃァァァっ！　何よこれぇっ！！」
場違いな人間の声が聞こえた。
幻聴にしては随分音量がデカイ。
振り向きたくはなかったが、やらなければもっと後悔する気がした。
「……何で、久留美がいんだよ、昶」
「三階の教室で隠れていた。取り残されていたのは新條だけだったが、役割通り保護したぞ」
「……つーことは」
蒼助は千夜の言葉を思い出した。
「アイツが言ってた巻き込んだ一般人って、お前だったのかよ……」
「ちょっと、何嫌そうな顔してんのよ！　こっちだって好きでこんなところいるわけじゃない……って、そうだ蒼助！　あの娘は？

都築ちゃんたちと上に上がってもいなかったのよ。アンタ、会わなかった？」

久留美の言葉が指す人物が誰なのかはすぐさまわかった。

そして、同時に屋上に向かった神崎の事を思い出す。

「おい、昶……悪いがちょっと頼み事いいか？」

「手短に言ってくれ」

「ここを七海と二人で持ち堪えてくれねぇか？　もちろん、久留美とそこの二人を護りながらって事になるけど……」

蒼助が見遣った先を昶が追った。

傷ついた氷室を見ると顔を顰め、

「大丈夫なのか」

「何かしたくても、治癒術が使える奴がここにはいねぇ……それに、これくらいで死ぬようなタマじゃねぇよ。それより、お前らが……」

「……そ、の二人なら……心配の必要は無……い……」

渚の傍らで聞こえた息苦しさを隠せない声が発された。

その場にいた人間が一斉に見れば、切れ長の双眸をうっすらを開けた氷室がいた。

それにまず喜んだのは、重傷の氷室を一番心配していた渚だった。

「マサっ。良かった……」

「あ、まり……良くはない……がな」

じくじくと来る痛みに顔を歪めながら、氷室は微かな力を振り絞り顔を蒼助の方に向けた。

「やっぱしぶとい野郎だな……どうよ、気分は」

「とりあえ、ず……目覚め、て早々貴様の顔を……見たおかげで……最悪だ」

「そんな状態でもちっとも口が減らねぇな……」

「ふん……それよりも……さっさと奴を追え……貴様は、あの二人を……甘く見ている…よう……だが、……あれらは……どちらも……現当主に実戦、教育を直接、指導を施された……秘蔵の

当主候補者だ……いらぬ心配をしている暇があったら……っ……早いところあの両生類を叩き潰して来い……」

「ちっ……言われなくてもそうするっつーの。てめぇもそれまでくたばんじゃねぇぞ、依頼主（クライアント）が死んだら報酬入らなくなっちまう」

シニカルな笑みを浮かべ合うと、昶に声を投げる。

「聞いてたろ、昶……いいか？」

「わかった……ちょっと待っていろ」

応え、昶は背を向けた。

何を、と口にしかけて止めた。構えた昶の周囲に昂らせた氣が満ちて行くのに気付いたから。

濃くなる氣に吸い寄せられるかのように昶の身体に風が巻く。

グッ、と右腕を後ろに引くと使い手の意思に従い風がそこに集中する。

更に堅く閉じていた手を徐々に開いて行くと掌に収まるほどの球体の大きさに凝縮された。

「早乙女流《風繰術》……“崩の旋玉”」

突き出した昶の掌から風の球は放たれた。

勢いで敵一体を突き破るとそれは敵陣のど真ん中で球体の形状を崩し、旋風となって辺りの怪物を巻き込み、四肢を捻切る。

渦巻く風が治まると、そこには無数の屍と残骸が道をつくっていた。

その威力に蒼助は感動の溜息を吐いた。

「すっげ……カ○カメ波かと思いきや……」

「風繰術だというに……余計な感想述べている間があったらとっと行け」

くい、と開いた道を親指で指し示す昶に、悪い、と言って蒼助は駆け出す。

一言残して。

「大変なのはこれからだが、なんとか踏ん張れよ！」

その言葉に昶は眉を顰めた。

が、その疑問は蒼助が去った後に晴れる。
四肢をもぎ取られても息がありジタバタもがく化け物をわざなのか踏み越えていく蒼助の姿を見送りながら、
「大分減ったなぁ。これなら、ここのことも後始末ですぐに終わりそうやな」
「ああ、そうだ……」
目の前で起こった異変に昶の言葉は途中で途切れた。
異変は先程倒した《屍鬼》達に起こっていた。旋風に引き裂かれて事切れていた《屍鬼》の身体は紅い輝きに包まれると同時にもげた部分、ぱっくり裂けた場所がずぶずぶ…、と気持ちのいいとは言えない音と共に修復されていく。最初に骨が生え、それに巻き付くように筋肉と繊維が現れその上を覆い被さるように皮膚が貼られた。
「……」
「うげぇ……」
グロテスクな復活シーンを見てあからさまに顔色を悪くして年頃の女子高生が出すとは思えない呻き声をあげる七海と後ろの方でパニックになって喚く文子。昶はグロさに顔を顰めるよりも復活した事に驚愕していた。
そうして、それぞれが反応を披露している間に倒した怪物は再び人の形を取りは復活を果たしてしまった。
「なんやねんこれっ！　バイオハザードでもこんな反則技あらへんでっ！！」
「キレるな、七海。……なるほど、これは確かに大変なのはこれからだな」
「よぉこんな状況で落ち着いてられるなぁ、早乙女……中学ん時からあれの面倒見てると似たような状態に遭い過ぎて危機感麻痺しとんやないの？」
呆れて見て来る七海に昶は、そうかもな、と苦笑を浮かべた。
記憶を探れば、中学時代はそんな光景ばかりだ。
だが、今となれば悪くない思い出だと思う。

背中を任せてくれる、というのは嬉しいから。
癪だから死んでも本人の前で口にする気はないが。
「矢は足りるか？」
「うん、とは頷けへんなぁ……バンバン撃てるほど余裕はあらへん」
「そうか……じゃぁ、俺から離れて後ろから援護射撃を頼む。俺が境界線になるから俺を越えたら迷わず撃て」
「おっけぇ、そんじゃ頼むわ」
後ろへ下がって後衛につく七海に対し、一歩前に踏み出て、
「背中を任されるのは慣れてる……今回も同じ事だ。持ち堪えてやろうじゃないか」
そう言って昶は特攻して来た一体に掌底を叩き込んだ。

［拾伍］　延長の宣言（後書き）

この回が最も直したかったかもしれない。
改訂前と改訂後の違いは蒼助が昶と七海が退魔師だということに気付いていない、と言う点。
個人的に今回のあのシーンはなんか拒否反応が出るので改変。
まだ共闘とかしたことなかったけど、お互い面識はある、と言った感じで関係はありました。

【拾六】　血闘（前書き）

ご覧あれ
鮮血が彩る命の舞踏を

【拾六】　血闘

月守学園の学生棟で行われている死闘。
殺伐に荒れ狂うそこから遠くは慣れた場所で、小さな影と大きな影が高層ビルの上に佇んでいた。
大きな影――――ボサボサの白髪を頭に携え普通の人間の平均を二回りほど越えたがっしりとした筋肉質な男は、その厳つい顔に“焦燥”の二文字を貼付けて見据える一点と足下の小さな影の人物を焦れったそうに見移りしていた。
小さな影――――下から来るビルの明かりが無ければ周囲の闇に溶け込んでしまいそうな黒の装いの幼女は、幼い造りの顔立ちの中に不釣り合いな大人びた笑みを湛えたまま巨体の男とは対照的に視線を一点集中させている。
「……あの……こ、黒蘭様」
「なに、上弦……トイレなら早く行ってらっしゃい」
「違いますっ！！」
見かけからは想像もできないほど丁寧な口調の男は連れのわざととしか思えない発言に野太い声を荒げた。
空気を振るわすほどの大声に片耳を押さえる幼女は、煩わしげに隣の男に視線をずらした。
「少しは落ち着いたら？　そこでもじもじされると正直ウザいんだけど」
「うざ……ごほん、落ち着くなど……貴方こそよくそのような悠長にしていられるものですね。あの場所で何が起こっていられるのか、解っているのですかっ」
「解ってるわよ、私を誰だと思ってるの。アレが出て来たから、こうして見てるんじゃない」
「それです、何故傍観に徹しているのですか。先程見たはずだ、あの方があの悪鬼の手に落ちている様を……何故行かないのです、

何故行かせてくれないのですか。そもそも、あの悪鬼があのように行動に出る前に始末出来たはず」

「あなたの言う通り、あの“自分が駒になっていることにも気付いていない”馬鹿を消すなんて簡単なことよ……でもね、今回はそういうわけにはいかないの」

黒い少女はそう言って意味深げに微笑する。

白髪の男はその笑みと言葉に怪訝な表情を浮かべた。

反応として表れたその表情に、少女は満足したのか笑みを深くし、一言告げる。

「彼よ。この件には少なからず彼が拘っているわ」

「――なんとっ、彼奴が、見つかったのですか！？」

頷き、

「あのコの転校先にいたわ。見たところ、“あの男”の方はぐっすり眠って“彼”の方が肉体の主導権を握っているようだけど。他にも収穫はあるわ。《彼ら》のうち四人があの学校にいたのよ」

「それはそれは……やはり、宿命の“縁”というものは侮れませぬな。それにしても……彼奴が」

苦虫噛み潰すような表情を浮かべる男に少女は面白そうに赤く可憐な唇から笑い声を漏らす。

「相変わらず目の敵なのね……花よ蝶よと見守って来た姫を喰っちゃった男は転じても許せないもの？」

「然り」

仕様のない男ねぇ、と少女は溜息混じりに微笑い、再度見据えていた先に視線を戻した。

この場を動く気配のない少女に男は観念しつつも疑問を放つ。

「しかし、何故（なにゆえ）今回我らは手出ししてはならないのです。その理由に彼奴と何の関係があるのですか？」

「言ったでしょ、“あの男”は眠ったままだって。それじゃぁ、困るのよ……気に喰わないけど、“あの男”も玖珂蒼助というキャストの一人なんだから」

「それはわかっておりますが……それとこれは一体何の関係が……」

「寝坊助のうすらとんかちに起きてもらうのよ。多少荒治療だけど」

「しかしっ……大丈夫なのですか、紛い物とかいえ悪鬼羅刹に堕ちし者……若造が単身で向かって倒せる相手では……」

「それで起きて来ないような寝穢い奴は自業自得でくたばればいいわ」

清々するわ、と言い切る少女に男は呆れかえった。

自分のことを言えないくらい、“あの男”を徹底的に毛嫌いしているくせに。

「しかし、ではその後どうするつもりですか……姫様は……」

「そうなったら」

くっ、と口を歪めて少女は嗤う。

下から差すビルの光にライトアップされたその笑みは今まで貼付けていたものは明らかに違うものだった。

「身の程知らずは私が引き裂いて……咽び泣くくらい可愛がって上げるわ……たっぷり後悔の海に沈ませて……ね」

凄絶な笑みに、男は毛穴から噴き出た冷や汗を静かに伝わせた。

この自分の背筋を凍らせる程の殺気が隣から放出されていた。

男は気を取り直すように、少女と同じ方向を見つめた。

もう間もなくして始まるであろう血闘を思い浮かべ。

◆　◆　◆

上る階段はあちこち陥没していた。

あの巨体の重量に耐えきれなかったのか。そうなると周りの壁の皹割れやへこみに説明が付かない。

「欲しかった玩具手に入れてはしゃぐ子供の暴れた後……って感じだな。……おっと」

陥没部分に足を入れそうになり蒼助がよろめく。

興奮し過ぎて玩具まで壊しちゃいないだろうか、という不安に駆られつつもそれを掻き消し更に上る。
踊り場まで来るといつもは外と内側を隔てるドアが見えなかった。

代わりに神崎のあの巨体が悠々と通れる“穴”が出来ていたが。
上りきり、屋上へ出たがここへ逃げたはずの神崎の姿は無い。
「……何とかと煙は高いとこが好きって言うけどよ……まさにその通りだったな」
なぁ、何とか、と振り向き“出入り口の上から”蒼助を見下ろす神崎を仰ぎ見る。
蒼助の挑発じみた口調も弱い犬の吠え声程度にしか聞こえないらしく神崎は鼻で笑った。
「どうして、此処に居る事が気付いた……？妖気は完璧に隠していたんだ、お前みたいに霊力のしょぼい奴はおろかベテランの退魔師だって気付ねぇはずだぜ」
「自惚れんな、タコ。パンピー虐め殺してばっかで本当に強ぇやつと闘ったことねぇ分際で。消せんのは霊力だけだろ？武術家としては喧嘩屋程度でしかないお前は気配まで消せてねぇ。俺は退魔師としては最低だが、こっちの技術は餓鬼の頃から叩き込まれてんだ」
蒼助の嘲笑の言葉に神崎は醜悪な顔を僅かに歪める。
「っ……ふん、まぁいい……下の奴らはどうした？」
「助っ人が来てくれてな、そいつらに任せてる。かなり出来る連中だからもう片付いてんじゃねぇか？」
「それはどうだろうな、あの《屍鬼》の魂は俺の支配下にあるんだ。いくら倒して魂魄に戻っても俺が“力”を注ぎ込めば何度でも再生できる。俺を倒さない限り奴らは何度でも甦るのさ」
そういうことか。
やはり、諸悪の根源である神崎を倒さなければ昶達のところは解決しないようだ。
それにしても、と蒼助は歯噛みする。

癪に障るが、この男の所有する霊力は半端じゃない。
量だけで言うなら氷室を上回る。
「ちっ……ヤバい奴に憑かれやがって」
魔性が人を喰うのは存在するだけで消費する霊力を人間の生気と負のオーラを取り込むことで補充する為。
しかし、いくら補充しようがこれほどまでに膨れ上がるのだろうか。再生と生産の繰り返しを続けることが出来るの神崎を取り込んだ魔性の元来の力が桁違いだからだろう。
（ヤバいのは……見かけだけじゃないみたいだな）
蒼助は神崎の額から聳え立つ歪な突起を見つめた。
通常の魔性にはないものだ。
正体不明の特徴を持つ相手に警戒心を高めつつ、
「てめぇ、終夜はどうした」
「おいおい、人の女の名前を気安く呼ぶんじゃねぇよ……ここにいるさ、ほらよ」
床に横たえていたのか、蒼助の立ち位置からは姿の見えなかった千夜を神崎がその片手を掴み上げこちらに見せた。
足が浮くまで持ち上げられても力なく顔を俯き、だらりとぶら下がっている。
「……何しやがった」
「俺は何もしてない。どうやら、俺の《屍鬼》に瘴気を受けたらしいな。傷口から入り込んだ瘴気に身体が侵されて麻痺しているんだろ……塞いだのか傷は見当たらないが」
魔性が纏う瘴気は人間やその他の生命にとっては毒そのもの。
量によっては身体の自由が利かなくなるだけ済んだり、徐々に内部から器官を穢れに侵され死に至ることもある。
千夜が五階に駆けつける前に突然踞ったのも、吹き飛ばされた後に起き上がらなかったのもそれが原因らしい。
千夜はどちらの状態にあるのかわからないが、いずれにせよ一刻も早く助け出さなければならない事だけは確かな事だ。

しかし、それには神崎が邪魔だ。
「そいつをどうするつもりだ」
「俺の女をどうしようと俺の勝手だ……てめぇには関係ねぇ」
“俺の女”、という表現に蒼助の心が激しく波打つ。
あの食堂の時のように。
「いつからその女はお前の女になったんだ？　妄想は頭の中だけにしとけや」
「そんなもん関係ねぇ……あの時、“アイツ”が言ったんだ……この女は“力”持つ事を許された選ばれた奴のものだと……この女をものにして俺は絶対唯一の神になる……誰も俺に逆らえねぇ、馬鹿に出来ねぇ……この女がいれば俺は無敵だ……かかか……ぐはははははは」
馬鹿が何か言っている。
理解出来ない言葉を並べながら高笑いする様はまるで王者を気取っているようだ。
蒼助はそれを冷めた目で見つめる。
そして、一頻り笑うと真顔に戻り眼球が飛び出んばかりに両目を見開く。
「その前にお前を殺してやる。あの時、俺に与えた屈辱を今此処で晴らしてやる！……氷室の間抜けみたいになぁっ！！」
掲げた手の上で“力”が発生する。そこで出現した球体状の妖力の塊は一点集中して更に注ぎ込まれ大きく膨張して行き、巨大なエネルギー球体へと変化を遂げる。
膨れ上がった力はバチバチッ、と帯電までしている。
「死ねぇぇぇっ！！」
絶叫と共に神崎の頭上に顕現していた巨大な魔力塊が蒼助に投げつけられる。
回避しても余波で衝撃波を叩き付けられ、当れば即死する威力は見れば解る事だった。
どちらを取っても無傷では済まない敵意の込もった攻撃が襲いか

かろうとしているのに蒼助はその場から動こうとしない。
向かって来る自らを滅ぼすであろうそれを見て蒼助は思う。
もう、いいだろう、と。

◆　◆　◆

「おい、土御門の。生きてるか？」
「……外では氷室と、呼べ……」
「反撃出来るぐらいなら元気らしいな……」
飛びかかって来る一体をカウンターで吹っ飛ばしながら昶は渚の膝元で横たわる氷室に問う。
「行かせて良かったと思うか？　アイツを」
「何故そう思う……？」
「俺はアイツが退魔師として闘う様を見た事が無い。だから、今のところ霊力だけで退魔師としての程度を測っている」
「……貴様から見たそれは……どうなん、だ」
「――――最低だ」
氷室はそれに反論を返さない。
その最悪の欠点を本人の前で罵倒したのだから、とうにそれは熟知していた。
昶も出会った時にそれを察した。
玖珂。剣神《須佐之男命》を奉り加護を授かる《武道系統》の中でも屈指の名高き一族。
その名の下に生まれた蒼助の霊力は地を這うほど貧弱なもので、落ちこぼれの称号に相応しいものだった。
退魔師は霊力を扱うことで魔の調伏を可能とする存在なのに、それがない蒼助は退魔師としては生きれないと誰もが思っていた。
しかし、周りの声にも拘らず蒼助は自身の人生の中で最も不適切な道を選んだ。
「それにはウチも同意見や。アイツ、あないにショボイ霊力でよぉ

退魔師なれたな。ましてや、降魔庁勤めなんて……正直その話聴いた時は信じられへんかったわ」

祀という境界線を越えて来た一体の眉間に矢を放つ七海が言った。

当主の資格を持たない者たちにとって己の力を退魔師として生かす場所とされる降魔庁であっても、そこに所属するにはそれ相応の実力が必要でとされる。

七海は最初、落ちこぼれとしてある意味名を馳せるその玖珂家の長男が降魔庁の総統にスカウトされたと聴いた時、自分の耳を疑った程だった。おそらく、七海だけではなくこの業界の誰もが。

「確かにね……俺達もチームを組む三人があの落ちこぼれかって聴いた時は……総統の正気を疑ったよ、本当。マサもそれで喧嘩吹っ掛けてさ……それが二人の犬猿関係始動」

身の程知らず、と思った。

変な意地とプライドの為に相応しくない世界に来るなどなんて愚かな。

こんな足手まといと組む羽目になるは、と。

「でもね……彼は僕らの予想を大きく裏切ったんだ。初めての任務で……ね」

降魔庁に所属して与えられた初任務。

氷室は後衛、渚と蒼助が前衛。

蒼助は戦力にならないと決め込んで、手を出す暇がないようにと俊敏に事を終えようとした。

「まぁ、その頃世間知らずで実戦と稽古の違いってのはわかってなくてね。ちょっと無理して痛い一撃を喰らっちゃってさ。やられちゃうのかなって思った時、窮地を救ったのが蒼助くんだったんだ。驚いたなぁ……」

何も出来るはずが無いと思っていた人間に助けられるとは思わなかったから。

「何より驚いたのは……彼が見せた不思議な力だったよ」

「不思議な力？　なけなしの霊力で何か……」

「違う」
　昶の言葉を渚の膝元から氷室が遮る。
「誰よりも霊力が低く、退魔師としては最低の存在だったあの男は……逆に、誰にも真似出来ない、得る事の出来ない唯一にして、最強の異能を持ち合わせていた」
「……異能？」
　風を纏った掌底を異形の頭に撃ち込んで吹き飛ばす昶は怪訝な表情を浮かべた。
　氷室は血の気を失った顔を苦痛に歪めつつも、記憶にある光景を語った。
「あの時、アイツは……――――――」

◆　◆　◆

「なん……だ、と……っ」
　馬鹿な、有り得ない、とうわ言のように目を見開きながら神崎は繰り返し呟く。
　向かい来る攻撃に蒼助は横一閃の体勢をとったのだ。それを見た時、神崎は追い詰められて気がふれたのかと考えた。
　ついに目の前にそれが迫った時、蒼助は驚愕の瞬間を神崎に与えた。
　蒼助に真っ直ぐ向かって行った自身の魔力の塊。肉片一つ残さず消し去ってやろうと放った渾身の一撃。結界によって防壁を創るか、それ相応の力をぶつけて相殺する以外助かる道はない。
　霊力の低さ故にどちらの術も持たない蒼助では助かる方法など皆無のはず。
　その絶対の自信に背負った魔力塊を蒼助は振るった刀の一閃によって“真っ二つ”に断ったのだ。
　残り火のように消えてしまったそれの後に残っているのは有り得ない事をやってのけた無傷の蒼助と損害ゼロのその周辺。

想定に無い光景に狼狽する神崎は先程までの余裕は何処へ行ったのか、壊れたラジオのように滑舌悪く喚いた。

「く、玖珂ぁっ！……て、てめぇ、……今……何をしやがった！？」

煩く囀る神崎の声には反応せず、首をゴキゴキッと鳴らし捻る蒼助。

無視された事に苛立ち神崎は更に声を荒げた。

「この野郎、何とか言いやが……」

途中で神崎は言葉を噤んだ。

蒼助が放つ先程まではなかった殺気に満ちた雰囲気に呑まされたからだ。

続きを紡げずにいる神崎に蒼助は太刀を肩に担ぎ、

「……言いたい事はそれだけか？」

静かに、そして威圧的に呟き、

「勝手に恨んで、勝手にリベンジしようとして、勝手に暴走しやがって。はっ……覚えてなくて当然だわな、オレ。こんなくだらねぇクソ蛙がどうなろうと関係ねぇもんなぁ。てめぇがどんな目に遭ったかなんか俺は知らねぇよ、知ろうとも思わねぇ。勝手に死んで、勝手に地獄に堕ちろ。今まで好き勝手やらかして生きて来たんだから最期くらい人の迷惑にならねぇようにおっ死んじまえ。かぁー、すっきりした！　お前が長い事喚いている間、ストレス溜まりに溜まってて息苦しかったぜ……なぁ、もう終わりにしてもいいよな？　いい加減お前の不細工面には嫌気が指して来た頃だ。つーか、終わらせるよ、お前の意思なんか関係ねぇし」

それとよ、と刀を持ち直しながら付け足す。

「その女は返してもらうぜ」

口端をつり上げ犬歯を剥き出しにし、蒼助は凶悪な笑顔を神崎に向けた。

【拾六】　血闘（後書き）

「魔王のススメっ！」というもう一つの連載を始めてしまい、どっちを進めるか迷う日々です。
実はあちらとこちらは別世界という繋がりを持つのですが……今の段階ではまだまだ。
一人称の向こうばかり書いているとこっちの感覚を忘れる危険があるのでちゃんと書いてますよー。

［拾七］　遅い起床（前書き）

お寝坊さん
誰かがそう嗤うのを夢心地に聴いた

［拾七］　遅い起床

「――――ただの太刀で魔性を切った？　まさか……」

昶は信じられないとばかりに思わず、氷室を振り返った。

氷室は構わず続けた。

「あの時、私も信じられなかった。霊力で調伏するしか人間である退魔師には魔に対抗する術はないと思っていた概念をアイツはいとも簡単に覆してしまった。アレが何をしたのかはわからん……あとに残った残骸を燃やし尽くす青白い炎もそこにあった痕跡すら消して無くなった」

「いくら訊いても教えてくれなかったもんね、蒼助くん」

苦笑する渚があとを引き継いだ。

そして、命の危うい状況下で信頼を含めた笑みを浮かべた。

「その一件以来、俺達の中じゃ蒼助くんは“侮れない人”って刻み込まれてるんだよ。誰にも出来ない事を……不可能を可能に出来るデタラメな人間なんだって。俺らが出来なかったこと……今回も……予測もつかないことして何とかしちゃうんじゃないかな」

「ふん……ぐっ……げほっ」

意識を保ち続けていた氷室は喉から競り上がってきた血に咽せ、ごふっと吐き出した。

口元が更に新たに紅く染まる。

「マサっ……もう、喋るな……」

重傷とは思えないほど沈着な口調に彼が瀕死だということを誰もが一時は忘れていた。

だが、氷室の気丈な振る舞いももはや現界に来ていた。

「そん、な……顔をするな……私が……っ……このぐらいの、ことで……死ねる身体では……ないと、いうことは……承知して、いる……だ、ろう」

「わかってる……わかってるよ……だから、もう……」
しかし、それも何処まで通じるか渚は考えたくなかった。
尋常ではない血を外に流してしまっているのだ。普通の人間ならとうにくたばっている。
“普通の人間とは異なる存在”である氷室だからこそ瀕死ながらも命を繋ぎ止めていられる。
だがそれも、このままではいずれそうも言っていられなくなる。
誤摩化し続けていた絶望が閉めた蓋から染み出て来た。
「……朝倉ちゃん」
今まで話の間に入り込めなかった久留美が口を開いた。
訝しげに顔を上げる渚の顔の前にポケットから取り出した御札を差し出す。
「使って。これって願えば大抵のことは叶えてくれるらしいから」
「何処でそんなものを……」
「護身用に使えってもらった。早く使いなさいよ、会長死んじゃうじゃない」
「でも……護身って……」
「見損なわないでよ。自分一人だけ助かろうなんて狡い人間じゃないわよ、私」
それに、と久留美は上を見上げた。

◆　◆　◆

「今聴いてた話から……アイツが何とかしてくれんでしょ？」
――――その女は返してもらうぜ。
その言葉を合図に蒼助は駆け出した。
俊速の動きで一気に接近して来る蒼助に神崎は無数の球体エネルギーが撃ち出された。

先程蒼助が斬ったもの程威力と大きさはないが、代わりに注ぎ込まれた霊力が少なく軽い分スピードがあった。
一発一発絶え間なく撃ち込まれるそれらが一斉に蒼助に襲いかかる。
「……っ！」
蒼助は足を止めずそのまま上半身を捻り着弾する寸前に刀を振るった。
無数の球体エネルギーが蒼助の周囲に被弾する。爆発音が何度も鳴り響き、辺りに煙が立ちこめる。
「……は、ははっ……や、やったか？」
自らの攻撃が蒼助を打ちのめしたと思った神崎は渇いた笑い声を上げる。
下は大量の土煙が充満していてどうなっているか見えないだけに不安は残ってはいたが。
「馬鹿が……口先だけかよ」
「そりゃてめぇのこったろう」
背後から聞こえた声に神崎はゾッと寒気立ち、その場から跳躍した。背に迫る殺気がそうさせた。
宙に浮かぶ中、たった今まで自分が居た場所を見ると刀を振り切っている蒼助がいた。
「いつの間にっ……煙に紛れて後ろに回りやがったのか」
「ちっ……惜しかったな」
千夜を抱えたまま飛躍していた神崎が着地する。
双方は入れ換わった立ち位置で戦闘態勢を整えた。
「はぁ……はぁ……何なんだ、ちくしょう……」
神崎は先程の体験に冷や汗をかいていた。
直前まで殺気が消されていたので攻撃の寸前に発生したそれに気付かなければ確実に首を切り多されていただろう。
幾ら斬りつけられようと再生出来るが、蒼助には先程見せた奇妙な技があった。

あれを受けては自分の再生力も効果があるか怪しいものだ。
しかし、蒼助が狙ったのは首ではなかった。
「もう少し鈍ければ、その無駄にデカイ腕をぶった斬ってやれたのにな……」
どうやら蒼助の目的は千夜を捕らえる左腕を切り落とし彼女を解放する事にあったようだ。
「てめぇ……俺をそっちのけでこの女を狙ってやがったのか。何なんだ、一体何なんだ玖珂ぁ！　何でこの女を俺から離す事にこだわる!?　この女はお前の何だってんだ!!」
その問いに蒼助は表情を険しくした。
「理由だぁ？……ンなもん俺が知りてぇくれぇだ……ただなぁ」
出入り口の上から再び下へ降り立ち神崎を鋭く見据えた。
己の中でぐるぐると渦巻く疑問に対する苛立ちを絶叫に乗せて吐き出す。
「そいつがてめぇの腕の中に収まってんのがムカつくんだよっ!!」
そう、見ているだけ腸が煮えくり返りそうだ。
終夜千夜という女を所有物と主張されるその様が。
叫びと共に蒼助は弾かれるように走り出す。
その先は神崎。
「野郎っ……」
このままではまずいと焦る思考で判断した神崎は蒼助の周囲に数体の《屍鬼》を出現させた。
コンクリートの地面に点々と発生した澱んだ輝きを放つ場所から這い出て来る《屍鬼》達の登場に蒼助は侵攻を急遽中断した。
「てめっ……まだ残してやがったのか」
「お前ら、そいつをこっちに近付けるな!」
ここまでの交戦で蒼助は霊力は低いがそれと相反するように剣術の腕は滅法立つ事を思い知らされた。おまけに分析不能な奇妙な技まで持っている。まともにぶつかれば不利な事はここまで肝を冷やされれば嫌でも理解出来た。

下手に“力”をぶつけてもあの奇妙な力によって打ち消されてしまう。

かと言って接近戦に持ち込んでもスピードもテクニックも向こうが上回っており、巨体である神崎に対し小回りが利く事を利用して一方的に攻められるだろう。

なら……、と神崎はここである『奇策』に出た。

「邪魔だぁぁぁっ！！」

行く手を阻む《屍鬼》を蒼助は容赦無く叩き斬る。

目の前を一体を倒したばかりの状態で隙だらけの背中を背後から襲いかかるワンピースを着た亡者を蒼助は上半身を捻り無理矢理向きを変えて胴を真っ二つに分つ。

二つに分かれて地面に転がるそれに見向きもせずに新たな標的に眼を向ける。

目を血走らせ牙を剥き出しにして飛びかかって来る《屍鬼》の爪を身体を僅かにずらして避け、露になった青白い喉目掛けて刀を滑り込ませれば、首と左腕が宙に舞った。

素早く辺りを見回すと斬り殺した《屍鬼》達が転がっている。

立っているのは最早たった一体だけ。

「こいつで最後か……！」

仲間がやられても怯みもせずに向かって来るそれに対し蒼助は動かない。

刀を真っ直ぐ構え、正面から迎える構えをとった。

そして、右の肩から袈裟斬りするように、左の腰まで振りかぶった刀が通る。

最後の一体はそうして沈黙した。

「……お、俺の《屍鬼》が……」

倒されるの事は予想の範疇にあった。

だがしかし、その後の起こった出来事に神崎は目を見開かざる得なかった。

息絶えた《屍鬼》達が斬られた場所から燃えていた。

その炎はやがて全身にまわると、たちまち肉体を燃やし尽くしてしまった。

絶句する神崎は震える喉から声を絞り出す。

「……いったい……何なんだ、その力は……」

「ネタバレ無し……特に」

蒼助はそう答えると視線を神崎に向ける。

鋭い眼光が神崎を射抜く。

「これから死ぬ奴にはな。知る必要ねぇだろ？」

口端を吊り上げ凄絶な笑みを浮かべる。

まるで修羅を錯覚させるそれに神崎は背中が凍るような感覚に襲われた。

考えを改めさせられた。

この男は退魔師として出来損ない。そう侮っていたばかりに今自分は追いつめられている。

何故気づかなかったのか。

研がれた剣術。

抜群の運動神経と瞬発力。

そして、濃密な魔力の塊すらも一太刀で切り裂く正体不明の異能。

この男は、“戦士”としては超一級だったのだ。

どれだけ高密度な霊力もこの男の前では意味を為さない。

「観念しな神崎……こちとらこの男の戦り方でこの世界を生き残って来たんだ……てめぇの馬鹿デカイ妖力と怪力に頼った戦法は術中心の氷室には通じても俺には通じねぇぞ。……ま、それも“あの状態”の氷室に限るがな」

式神の召喚によって大きく霊力を消費して疲労していた氷室。

万全の状態であったら、ああも簡単にやられはしなかっただろう。

そう思った後、蒼助はもう一度言った。

「お前じゃ俺には勝てねぇよ」

「ぐっ……」

蒼助の放つ威圧感（プレッシャー）に押され神崎は一歩後ろに後ずさる。

怖じ気づいたその表情には当初の余裕は微塵も感じない。
「あばよ、神崎」
言葉だけの別れを告げ、蒼助は視線の先に神崎を捉え、迷わず駆け出した。
向かって来る刃の接近に神崎はそれ以上逃げなかった。
最後の抵抗か、空いている巨腕を蒼助を弾き飛ばす為に横に振るう。
「ちっ」
無駄な足掻きに舌打ち、向かい来る障害をまず叩き落とそうと蒼助は得物を振りかぶった。
その瞬間、神崎が薄ら笑みを浮かべたのにも気付かず。
そして、

ドシュッ……

蒼助は僅かな衝撃と共に胸の付近に異物感を感じた。
ゆっくり、とそこへ視線を下ろすとがら空きになった右胸に突き刺さる青白い手が映った。
向かって来ていたはずの“腕から”這い出るように出現した《屍鬼》の鋭い爪が深く食い込んでいた。
引き抜かれると同時にたがを失い血管を破られ溜まっていた大量の血液が噴き出て目の前が真っ赤に染まる。
「ごふっ……！」
流れる血液と共に全身から抜けていく力。
支えを失った膝が地面についた。
「て……め、どっから出して……」
込み上げて来た血を吐く蒼助をしてやったりの笑みで見下ろす神崎は、
「……こりゃとんだ形勢逆転だなぁ？　どうだ、この前ボコにした奴に膝つかされる気分は、よっ！」

容赦ない蹴りが抉るように蒼助の傷口に見舞う。
無防備な体は勢いを殺すことが出来ず、軽く宙に浮き数メートル離れた場所へ背中から叩き付けられる。
「――――……っ！！」
傷を蹴られた痛み、背中から伝わった衝撃が重なり声にならない悲鳴が上がった。
「《屍鬼》はその魂の所有者の意のままに創れる。だから、思ったんだよ……“俺の中に入った状態”でも創れるんじゃないかとな……」
しかし、試した事も無い事をそう簡単には出来ない。
出来るという保証も確信もないそれを実現するには幾分か時間を要する。
その前に蒼助に斬られては意味が無い。
だから、相手にならないとわかっている《屍鬼》を仕向けたのだ。
「……つー、こと…は……俺は囮の相手をさせ……られて、たのか……よ」
血が喉に張り付いて途切れ途切れの蒼助の言葉に神崎は、そうだ、と答えた。
「玖珂、てめぇさっき言ったな？“お前の戦り方じゃ俺には勝てねぇよ”。そうがどうだ、今お前はどんな様だ、俺の戦り方にはまって血反吐吐きながら倒れてるじゃねぇか」
笑いが止まらない。
愉快だった。
数日前の自分と同じように不様に地べたに這い蹲っている玖珂の姿。
これを笑わずして何を笑う？、と誰に問うわけでもなくそう尋ね嗤った。
「なぁ、気分はどうだ？玖珂よぉ」
「単細胞の、粗チン野郎が……苦し紛れに考えついたセコい作戦に、はまって……これ以上に……ねぇくらい……最悪だ、くそっ

たれっ」

追い詰められても口の減らない男。それが玖珂蒼助だった。

そのあらゆる悪意が込められた発言は優越に浸っていた神崎の感情を怒りへと変換させる。

やべ、と思った頃には既に神崎は幾つもの紫色に変色した青筋を額に浮かべていた。

目が完全にイッちゃっているだけにさすがに蒼助も怖いと素直に思った。

ブチ切れている神崎は足下に置き去りにされている蒼助の刀を踏みつけ叩き折り、

「てめぇ……自分がどんな状況かわかってんのか？そんなにとっとと死にてぇのか？上等じゃネェか今すぐこの手でそのムカつく面をグチャグチャに叩き潰してそれから――――」

怒りに任せてそれを実行しようとした時、不意に思考に理性が戻る。

このまま原型を残さないまでにミンチにしてやるのもいいが、それだけで自分の気は済むのか。

否、あの時の敗北感と屈辱はそれだけでは収まりがつかない。

それに今の蒼助は満身創痍。神崎の力ではあっと言う間に死んでしまう。

じわじわと痛めつけて、苦しめながらあの余裕が崩れるくらいの十分な恐怖を与えたい。

いっそこの世からその肉片残さず消し去って――――

そう思った神崎の脳裏にある考えが浮かぶ。

自分が考える限りの中で最も残酷で苦しく恐怖を与えられるこれ以上にない方法が。

蒼助は猪のような勢いでこちらに来ようとしていたのを止めて動かない神崎を訝しげに見つめる。

当然、痛みで顔を顰めながら。

「で……俺の末路はリンチで惨殺でミンチか？」

「――――と思ったが、予定変更だ。もっと、イイのがある」
不気味な笑みに蒼助は凄絶なまでに嫌な予感を感じた。
何をするつもりだ、と血の抜けた身体に力を入れようと足掻いた時、周囲に蒼助を囲むように再び《屍鬼》数体が出現する。
「今からそいつらがお前を喰う。端からじっくり時間を掛けて喰い尽くす。一思いになんて死ねない。地獄から抜け出せない。逃れられない恐怖に侵されて狂いやがれ――――そして」
小脇に抱えられていた千夜が前に出され抱え直される。
瘴気に侵された彼女の目は焦点を失い虚ろだった。
ただ、胸がゆっくりと上下している為、まだ生きている事は確かだった。
神崎はそんな彼女の形のいい顔の輪郭を常人の三倍はある巨大な指でなぞり、
「俺は終夜をヤりながらそれを眺める、最高だろぉ……」
その言葉が蒼助の耳には死刑宣告に聞こえた。
「喰われながら見てやがれ……この女が俺のものになるのをよぉ」
「……っ……！！」
地面を掻き毟りながら蒼助は起き上がろうとする。
突然、力が入った身体がもう少し起き上がれそうになったところを傍に来ていた《屍鬼》達に押さえつけられる。
頭をまともに打ち目の前が眩む。
再び、起き上がろうとするが、もう二度目はなかった。
視界には獲物を前にして牙を剥き出し血走る眼の《屍鬼》。
隙間から見える神崎と千夜。
神崎の指がブラウスの第二ボタンにかかり、爪が括る糸を切る。
そうして次々と外れて地面に落ちるボタン。落ちた時の音が妙に良く響いているように聞こえた。
虚ろでありながら美しい顔を神崎はうっとりと喰い入るように見つめる。
「本当にイイ女だなぁ……なぁ、お前もコイツに惚れてんだろ？

このウマそうな身体を犯してぇんだろ？　嬲って自分と同じ真っ暗な底へ堕としてぇんだろ？」

見せつけるように、べろりと首筋に唾液に濡れた舌を這わす。

「だが、ダメだ。――――これは俺のだ」

ぶつり、と唇が噛み切れ新鮮な血の味が口に広がる。

自分の中でどうしようもない憤りと恐怖が沸き上がるのを蒼助は感じた。

何故、そう思うのかはやはりわからない。

阻止する事も、何も出来ない自分に苛立った。

血に飢えた亡者共がそれぞれ己の身体のどの部分を粗食するかを決めているのも気にならないくらい。

全てのボタンが外れブラウスの間から見える千夜の白い肌。

汚い指が這い形の良い胸を保護するブラジャーを切ろう爪がかかるのを見て、蒼助の苛立ちは頂点に達したその時、

――――――許し難いか、あの男が。

目前に死を控えて気が触れてしまったのか、聞き覚えの無い男の幻聴が聞こえた。

――――――何が許し難い？

彼女に触れているのが、と蒼助は答えた。

すると幻聴は、殺されようとしている事にはないのか、と尋ねる。

違う。

そんな事よりもあれが彼女に触れているのが許せない。

罪があるとすればそれは彼女を己とものと主張するその愚かさだ。

――――――全くもってその通りだな、己の程度さえも見極めら

れず挙げ句の果てに“アレ”に手を出すとは……身の程知らずが

幻聴の声に確かな苛立ち、憤怒の意を感じた。

――――――あの程度のものなら貴様でも何とか出来ると思っていたが……期待はずれだったな。もういい、あとは己(おれ)がやる……お前は代わりに“沈んで”いろ……邪魔だ

失望したような声が聞こえたかと思うと急速に意識が朦朧とし始める。

まるで泥濘に意識が沈むような感覚だ。

もがく暇もなく蒼助はそのまま沈んで行った。

――――――愚か者が……“それ”が誰のものか、思い知らせてやろう……

沈む直前に聞こえた声は蒼助の意識に僅かな波紋を残して消えた。

◆　◆　◆

迎えた事態に男の我慢は現界を越えた。

首を向け、鬼気迫る表情で少女に詰め寄る。

「黒蘭様っ！！　この期に及んでも尚……」

「――――来たわ」

唐突な少女の言葉に男は相手を捻り潰しかねないほどの怒りを一瞬忘れた。

目を瞬かせる男に少女は一瞥し黒真珠の如き瞳宿る双眸を細め、

「ようやくお目覚めよ、お寝坊さんが……」

微笑った。

［拾七］　遅い起床（後書き）

明日から学校です。
授業はまだないだろうけど、文化祭の準備です。
絵、描くです。レンタルしたライオンキングが参考資料。せっかく熱がこもる図書室で資料探したのに……。
一ヶ月半なんてあっという間です……そんな私も最終日迎える度にあと一ヶ月続けと思う年をあと何回残っているのでしょうかぁ……。
夏って激しくて儚いですよねぇ。
まだ春の彼らもこれから激動の展開を迎えることになるのですが、いつになるのやら……。

【拾八】　足先から髪一本まで（前書き）

ヒビの入った殻の奥。
――――産声が聞こえる。

【拾八】　足先から髪一本まで

勝利の優越感に浸っていた神崎の目の前でそれは突然起こった。
蒼助に覆い被さり彼を食そうとした正にその時、《屍鬼》達は光に呑まれた。
それは内側から発された、と神崎は閃光のようなその光に目を潰されないように咄嗟に目を閉じる寸前に判断した。閉じる寸前の眼に光は青く映った。
腕で目を庇いながらジッとしていると近くでベチャリ、と生理的に嫌悪したくなる音が聞こえた。
青の光がおさまり、目をゆっくり開き瞬きを繰り返し、腕をどけた神崎は途端、恐ろしいものを目の当たりにする。

黒い血液がそこら中にぶち撒けられ地面、切り裂かれ、引き裂かれた《屍鬼》達の骸、そして身体と引き離されたその無数の肉片。
この光景を詩人が見ればこう一言で言い表すだろう。地獄絵図、と。

呆然としていた神崎はハッと我に返り意識を別のものへと移す。
現世に再現された地獄絵図の中心に立つ男に。
神崎は己の目を疑った。
先程までこの男は致命傷を負い、瀕死の状態ではなかったか。
己の策にはまって敗北したのではなかったか。
なのに何故、

この男は立っている……っ！？

男は口端を吊り上げて笑うと威厳と威圧に満ちた声を口から発する。

「良い度胸だな……」

もぎ取った血だらけの首を放り捨て、男は手にまとわりついた血を舐めとる。

その味に顔を顰めた。

不意に視線は神崎に向けられる。

「お前の腕の中に居る者が誰のモノなのか、承知で見せつけているのか？」

体中を矢のような鋭い眼光に神崎は全身を貫かれる感覚に陥った。

全身の毛穴が開き底から汗が吹き出る。

身体がやけに揺れると思ったら膝が恐怖に駆られ笑っていた。

脳が警告する。

逃げろ、止せ、奴は格が違いすぎる――――――と。

しかし、その警告を愚かにも無視した神崎は負けじと声を絞り出し相手の正体を問う。

「何なんだお前……」

「何だと思う？」

「玖珂じゃ……ない？」

姿形は玖珂蒼助だ。

何も変わっていない。
だが、中身が違う。
目の前に立ち、己を威圧する存在は先程倒した男ではない。

「ふん……馬鹿でもそれはわかるようだな。だが」

貴様が知る必要は無い、とまるでこちらの言おうとした問いを切り伏せた。
反論を翻そうとしたが、男の眼光に圧迫された喉は声を詰まらせてそれは為されなかった。

返答の無い問いを再び思考の中に巡らせる。

目の前に在(い)る存在は“誰”だ!?

そんな神崎を無視して男はゆるやかに吹く風に目を閉じた。
「こうして大気を肌で感じるのも久方ぶりだ……しばらくこれに身を委ねていたく思わなくもないが……それが目的で出て来たわけでは無いのでな」

そう独り心地に呟いていた男はスッ、と目を開き鋭さの戻った眼が神崎の腕の中であられもない姿になった少女を見据える。
意識のない少女を見るその目つきは一瞬優しくなったが、すぐに険しいものへとすり替わった。
男は従わせるような威圧感の籠った声で言い放つ。

「その女を離せ」

それが耳に響いた瞬間、神崎は叱られた子供のように肩を振るわせたが、陳腐な意地でその命令を振り払った。

「…い、嫌だ……」

駄々を捏ねる幼児のように拒否する。

「この女は俺のものだ……力を持つ選ばれた男がこの女を手に入れるんだ……そ、そうだ、俺は選ばれたんだ……俺にはこの女をものにする資格があるんだよ！！誰がてめぇなんかに」

「――――――そうか」

そう呟いた男の姿は次の瞬間目の前から消えた。

では仕方ない、と続いた声は神崎の左隣から聞こえる。

腕を掴む僅かな握力を感じたかと思うと、

「では、勝手にさせてもらおう」

鶏肉を裂くような軽い調子で男は神崎の左腕をもぎ取った。

「ぎ」

踏み殺された蝉の鳴き声のような短い叫びが最初に無意識に漏れて、

「ぐぎゃあああああああああああああああああああぁぁぁぁぁっっ！！！！！！」

結界に包まれた屋上に絶叫が響き渡る。

肩から先が無理矢理細胞を離された断面からホースの水ように噴き出る鮮血はあっと言う間に神崎の足下に黒い池をつくった。

痛い！！！！

激痛に気が狂いそうな思考。
再生させる事すらも頭の中から追い出す程の痛みが脳内を犯す。
痛みに狂気に走りそうな意識を痛みが正気に戻す、という事が神崎の中で繰り返される。

「て、てめぇっ！！……お、俺の、俺の腕を……俺の腕をぉぉっ！！！」
「ここにあるが」

本体を元を離された巨大な一本の腕が男の手によって掲げられた。
ゴミを捨てるように投げ捨てられた腕は神崎の傍に落ちる。
だが、それには何かが足りない。
そう思って男に視線を戻してみれば、その片腕に抱かれている千夜の姿があった。

「確かに返してもらった」

◆　◆　◆

全ての感覚が麻痺し、奪われていた。

千夜は完全な無の中で自分がどんな状態にあるのかわからずにいる。

視覚、聴覚、味覚、触覚、嗅覚。五感全てが使い物にならない。

四肢を動かすどころか感覚すらない。まるで人形のような気分だった。

糸が無ければ踊れない操り人形（マリオネット）の中に魂を封じられた、そんな気分。

こんな状態になったのもあの時、ちゃんと瘴気を取り除かずに傷を治癒してしまったせいだった。

すぐに中和出来ると思っていたのだが、今の自分の身体は以前とは違う状態であるのを忘れていた。

自責の念に陥っていると、不意に何かに触れているという感覚を覚えた。

（……触感が……戻って来ている？）

触感だけではない。聴覚が遠く響くようなものからはっきりと。

嗅覚が詰まったようなものからツンと刺すような血の臭いを嗅ぎ取れるように。

そして、真っ暗だった視界が白く暈けた光景変わる。

（……瘴気の浄化が始まった……一体どうして）

自分の身に宿る仮初めの霊力ではまだまだ時間が要る筈だった。

疑問が巡る中、感覚は段々と鋭さを取り戻していく。

触感が報せたのは誰かの腕に抱かれているという報告。

（……誰だ……？）

疑問に応えるように視界の光景が輪郭と色彩を取り戻していく。

身体の自由は未だ効かない為、かくんと上を向く首が上がらないまま千夜は視界を完全なものとした。
千夜の目に映ったのは見覚えある男の顔だった。

「……玖珂……？」

声帯が上手く働かない為、絞り出した声は掠れていた。
男が千夜に顔を向ける。
直感だった。千夜は自分を抱く男が玖珂蒼助ではないと悟った。
見据える青い瞳が、違う存在であることを語っていた。

「お前は……誰だ……」

その問いに知っている筈なのに見知らぬ男は、痛みを堪えるように目を細めた。
千夜にはそれが何故なのかわからなかった。わかるわけがなかった。
堪えるような表情を一瞬で掻き消し、男はキツめの目付きを心なしか優しくして、

「大人しくしていろ……――――すぐに終わる」

労るような声色に、千夜は不思議と肩の力が抜けるのを感じた。
同時に、突然巻き起こった砂塵が視界を覆い隠した。

◆

◆

◆

「死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ねぇぇぇっ！！！！」

神崎は無我夢中で魔力弾を放った。
無数の魔力弾は隙間を空ける事なく生み出され男に被弾する。
もはや、神崎の中には自分の腕を奪い千夜を奪い、プライドを踏み砕いた目の前の未知の存在に対する殺意しかない。
コケにされた、という屈辱。
殺らなければ殺られる、という恐怖。
二つの感情に支配されている神崎にもはや相手の実力を見極める理性は残っていなかった。

「ははははははははははははははっ！！！！殺してやる！殺してやるぞ！俺を馬鹿にする奴は全員殺してやる！！皆殺しだっ！ははっはははははははっ！！！」

狂い笑いながら神崎は攻撃し続けた。
限りなく放たれるマシンガンのような撃たれ方をする魔力弾は正確性が欠けていて標的の足下の地面をも抉っていった。
やがて、立ち上がった土埃が充満し視界が妨げられると同時にようやく神崎はそこで攻撃を停止した。

「はぁ……は、……ざまぁみやがれっ」

立て続けに魔力を消費し続けたせいで疲労がどっと襲う。
大きく力を消費してしまったが、それはあとで千夜で回復出来るはずだ。今まで以上の力を得ると共に。
汗にまみれた顔で醜く笑うと神崎はズタボロの状態であろう男の死体を確認しに行こうと、その場を動こうとした。
土煙に辺りの視界を妨げられて動き難くて仕方ないが、それは我

慢しよう、と数歩歩いたところ、

「――――っ！」

“それ”を目にした途端、息が止まる。

薄汚れた黄土色の視界の中である一点が青みを持っていた。

目の錯覚かと瞬くが、何度繰り返してもそれは見間違いではなかった。

嫌な予感が神崎を襲う。

まさか、そんな馬鹿なあれだけの攻撃を受けて、と頭（かぶり）を振った。

やがて視界が徐々に晴れて行き周囲が把握出来るようになる。

それは神崎にとっては恐怖の瞬間だった。

「この時代の退魔概念は衰退している事はこの小僧の身体を通して聞いていたが……まさかここまで脆弱だとはな」

呆れ返ったようにぼやく男の周囲はあちこち皹入り陥没するなどで壊滅的だった。

肝心の男自身は全くの無傷。外れたのもあっただろうがあれだけの魔力弾を浴びておいて、でだ。

姿も先程とは明らかな変貌を遂げていた。

薄茶の短髪は醒めるような青さを主張する長髪に。特に目立つこともなかった瞳の色も冷たさ際立つ青へ。

神崎はその姿が目の前の存在の本性ととった。

「な、何で」

「あのような捻りのない馬鹿正直な攻撃、霊力で相殺すれば造作もない事だ。貴様の相手にして来た退魔師はそんなこともできない連中だったのか？」

いなかった。
氷室は防御系結界を展開してこちらの攻撃を防いだが、あれは霊力を守護の概念を添加し加工したものだ。
本来は呪にのせて構成するそれを思念するだけに省略し通常の倍の速さで実行した氷室の腕は目を見張るものだったが、それもこの男には及ばない。

何の加工も概念も付与されていない、純然たる“力”を行使して相殺した、この男には。

本来、力から術への加工や攻守の属性をつける為の概念付与は霊力と言う強大な力がそのまま扱うには手に余るものであるから少しでも危険性を無くす為に彼らの退魔の始祖達が考えついたことなのだ。
行き過ぎた威力をある程度抑制する為の枷でもある過程をこの男はすっ飛ばした。
どれだけ危険でどれだけ驚愕するべき事なのか、最近人間を捨ててこの世界に踏み込んだ神崎は知らなかった。

唖然と立ち尽くしている神崎に尋ねる。

「もう終わりか？」
「……っ……」
「ならば次がお前が終わる刻だ」

恐ろしく冷たく下された死刑宣告に神崎は凍りついた。
そして、思考を、肉体を、死にたくないという本能が巡る。
隅々までにそれが巡った時、神崎は捨て身の攻撃に身を委ねた。

「お、おおおおおおおおおおおおっっ！！！！」

神崎は生き残るという彼の中でまだしぶとく残っていた人間の性、生き物の本能に突き動かされ残った腕を振り上げて男に突進した。
勝算があるないは関係ない。ただ生き残る為に。

「がああああああああああああああっ！！！」

咆哮を上げて五本の凶爪を目の前に立ちはだかる強敵に振り落とす。
避ける素振りは見せない。
ただ、片腕を上げて首を刈り取ろうと向かって来た腕を隔てるように顔の横に持って来た。
そして、

「おっと」

飛んできた蝿を払い除けるかのような仕草で豪速の巨腕を弾いた。

「ぐおっ……！？」

突然、ぐいっと後ろに勢いを持って行かれた神崎は片腕を失って不安定だったバランスが崩れた。
それに追い打ちをかけるかのように光速の速さで男の腕が閃き、神崎の猛々しい筋肉の防壁を突き破る。
ブッサリ、と突き刺さった腕は二の腕までズブズブ…、と肉を裂いて突き入る。

「おぶぁっ……！！」

逆流した血液出口を求めて彷徨った果てに神崎の口から流出した。

口が黒く染まった神崎は気管に入り込んだ血によって苦しみ酸素を求めて舌を突き出した。
その無様な様を見て男は、く、と嗤う。

「見かけのわりには随分と脆いようだな……単に魔力の影響を受けて筋肉が活性化しただけか」

ずぶり、と腕を引き抜くと滝のように血が溢れ出したそこを男は突き出す形で蹴りを見舞った。
バランスと踏ん張る力を失った神崎の巨体は嘘のように吹き飛び金網の柵に叩き付けられた。

「……が…っは……」

血に俯せ血を吐きながら神崎は恐怖を噛み締めた。
怖い。この男に比べたら氷室が喚んだ勾陣とかいう式神も赤子のようだ。
高速の動きを武器とした勾陣の戦闘力は確かに圧倒された。
だが、目の前の男はその場から殆ど動いていない。
こちらの攻撃を最低限の動きで防ぎ、先程の蹴りもまるで五月蝿い蝿を追い払うかのようなつもりで繰り出したのだ。
勾陣が赤子なら、自分はそれ以下――――――蟲同然。

化け物だ。目の前に佇む存在は“玖珂蒼助という人間の姿”を借りた正真正銘の怪物だ。

化け物は手に銀光を宿す何かを握ってこちらに歩み寄って来る。
それが力なく放り出された手に突き立てられて初めて何なのか理解出来た。
地面に縫い付けるそれは神崎が折った蒼助の刀の先端部分だった。

「ぎゃぁっ！　……て、てめぇ」
「再生能力についてもこの男の中から聴いていた。この小僧には聞こえていなかっただろうがな。多少痛みを苦しく感じるだろうが、我慢しろ」

もうじき感じなくなる、と男は神崎の髪を掴み顔を上げさせる。
そして、猛々しく生える角を掴んだ。
途端、神崎は顔から血が引いて行くのを感じた。

「や、止めろ……っ！」

蒼白になった神崎の顔を見て男は笑みを深め、

「何故？　これで楽になる」
「い、嫌だ……俺は死にたくないっ……こんなところで死にたくない……！」
「貴様が己の力の糧に殺して来た人間共もそう思って死んでいっただろうな」

頑に死を拒む神崎は出来の悪い頭が思いつく限りの謝罪と反省の言葉を裏返った声で訴えた。

「もう、もう殺さない……！　もう人間を殺したりしないから……
…街の隅っこで大人しくてしている！　だから……助けてくれ……」

挙げ句に咽び泣き始める神崎の今更な言葉に男は目を細める。
そして、低くなった声で問う。

「……貴様は何か勘違いしていないか？」
「……え？」

突然の言葉に神崎は呆気にとられ間抜けた顔で男を凝視した。
同時に微かな希望が湧くが男の眼を見た瞬間、それは呆気無く枯れる。
先程まで余裕に満ちていたその眼に確かな怒りが宿っていた。
次の瞬間、竦む神崎の耳に飛び込んで来たのは予想外な台詞だった。

「貴様が人間を喰おうが殺そうが吾（おれ）の知った事か。望むなら好きなだけやるがいい。吾は咎めはしない」

もはや何が何だかわけがわからなかった。
どういう事だ。
では何故この男は起こっている。
自分が犯した何に怒りを抱いている？

答えはすぐにわかった。

「――――だが、この女の件に関しては別だ」

この発言には神崎だけはなく腕の中の千夜も目を見開いた。

「随分勝手をしてくれたな……この美しい肌に触れた薄汚れた手はこれか？」

そう言って突き立った折れた刀身の上に足を乗せ踏む。
刃は上からの圧迫により更に肉を通して地面に深く刺さる。
苦痛に呻く神崎はみしり、と軋む音を聞いて更に青ざめた。

「ま、待ってくれっ」
「死ぬ前に一つ覚えておけ……血迷って再びあれの前に現れないようにな」
耳元に顔を寄せ、男はその耳にこびり付かせるように低く囁いた。
「これは吾の女だ、足先から髪の毛一本まで」
ボキリ、と折れる音が静寂の空間に悲鳴と重なって響いた。

【拾八】　足先から髪一本まで（後書き）

最近、更新早い？
修正箇所が少ないせいです。
ここ乗り越えたら、主人公には休戦とも言える一時が待っているのですが、改訂箇所だらけのそこは私にとっては死闘の時ですよ（笑）
それはそうと今日から新学期です。
始業式。話長いよ、先生。子守唄かね、それは。
それじゃぁ、おいとまします。

［拾九］　一時の幕閉じ（前書き）

ひとまず幕は閉じる
それは準備の為
それは休息の為
続く先へと進む為のひととき

【拾九】　一時の幕閉じ

骨が折れる音に近く、より生々しい音響が千夜の耳に響いた。

「あ……あ……あ、あ」

絶望の淵に立たされたの如く青ざめた神崎の顔は恐怖に引き攣っていた。

がたがた震える身体。股間からどぼどぼと溢れた出し、コンクリートの上に広がる黄色い液体。酸っぱさ際立つ異臭が鼻孔を突き刺す。

「……あ、あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝っっっ！！！！！！」

神崎は闇に染まった天（そら）を仰ぎ、絶叫をあげながら地面に縫い付ける刀身から無理矢理手を引き抜いた。

新たに飛び散る黒い飛沫。

そして、脅威から逃げるかのように背を向け、大きく跳躍し屋上から飛び降りた。

男はそれを追うことはなく、寧ろ興味を失くしたようにそこを動こうとはしない。

「……逃げたか。まぁいい……例え逃げても末路は変わらん」

その通りだ。あの《角》を折られたからには死は確実に神崎を捕らえる。

追わずとも“この件”はカタがつく。

だが、

「……もう、離してくれ。あの死に損ないを追う」
「放っておいても死ぬ。それにアレは……“本体”の駒でしかない木偶だ」
「関係ない……あの男は利用されたとはいえやり過ぎた。おかげで……あの化け物の存在が《澱》の外に明るみなった。これから随分とやりにくくなる。八つ当たりくらいしてやらなければ……私の気が済まない」

しっかりと身体を抱く腕から逃れようと試みるが、身体の麻痺だけはまだ引いていないようで、力が入らない。
それだけではないようだが。

「……何のつもりかは知らないが、頼むから離してくれ」
「なら本気で振り払え」

男はしっかりと抱いているが、それを振り払えないほど力は込もっていない。
しかし、千夜はそういう気にはなれない。

「……何でかな……どうにもそういう気にはなれない」
「……ほう、まさか助けられたから……などと浅はかな考えでいるわけではあるまい……？」

皮肉げに薄笑いを浮べる男にそうではない、と否定。
助けられたからといって、気を許すなど自分にはありえない。
そう、ただ――――。

「……お前は、大丈夫な気がする……だけだ」

その発言に男は目を見開いた。
予想外、と語る反応だと千夜は読んだ。
しかしそう言った千夜だって驚いている。
見知らぬ正体不明の相手の腕の中が心地よく、安堵するなどと。
ましてや、名残惜しいなんて。

「っ……今のは無しだ。忘れ――――」

言葉は最後まで紡げなかった。
ぐいっと一層強く身体を抱き寄せられ足が少し浮いたと思ったら目の前が突然暗くなった。
唇に触れる柔らかく暖かい触感が思考を停止させ、再び再起動。
キスされている、と思考回路が答えを叩き出した。

「ん、んぅっ」

突然の展開と息苦しさに千夜はもがくが、男の腕がそれを許さない。
自分の身体に強く押さえつけるように男の力が強くなり身動きが取れなくなる。
半開きだった口に覆いかぶさった唇が更に深く合わさる。
妨げるもののないその入り口にするりと舌が入り込み、存分に弄る。

「ふ……んっ」

口内の犯すような愛撫に腰から力が抜けていく。
それでも、意地でも意識は手放すものかと男の腕を掴み、現実に縋る。
短くも長くも思えたその時間は、男がようやく顔を離したことで

終わりを迎えた。

「……っ、もう起きたか……さすがに……最初はまだ意気がいいか……。まぁ、いい……いずれ」

額を押さえ、痛むのか顔を歪める男が何か呟くその目下で千夜は荒くなった息を整えていた。羞恥に千夜は男を突き飛ばしてやろうと男の腕を掴む腕に力を込めるが。

突然、男の身体の重心が千夜に圧し掛かった。

咄嗟のことに対応できるはずもなく、ましては千夜の身体よりも大きい体格の身体を支えきれるはずもない。

「うわっ」

受身すらままならない千夜はそのまま後ろに倒れ込んだ。

頭はなんとかフォローしたが、しこたま背中を打ちつけた。

「あつつ……一体何だ、お前っ……？」

視界の片隅に映った薄茶の髪。

あの長い青髪はもう何処にもなく、

「……玖珂？」

上に被さっていたのは今まで腰を抱いていたあの男ではなく何故かいる玖珂蒼助。

もはやワケがわからない。

「全く……次から次へ……おーい、玖珂。起きて状況を説明しろ」

無理難題を申し付けつつ、ベシベシと頭を叩く。
ふと、そこで気付いた。
叩いていた手を見つめ、

「身体が動く……瘴気が完全に浄化された？」

一体どうして、と思ったところで最大にして唯一の心当たりが脳裏に浮かび上げられる。
あの男のキスによって清浄な霊力を流し込まれた。それしか考えられない。
しかも驚異的なスピードでの浄化。そこに疑問の印が打たれる。
“他で貰う”霊力と何に差が出ているのだろうか。
目の裏に焼きついた鮮明的な青い髪と瞳を思い浮かべる。

「……青、だからか」

千夜は意識のない蒼助の身体を退かし、枷のなくなった体をゴキゴキと動かして慣らす。
一息つき、立ち上がる。
屋上から見える景色を見据える双眸は獲物を狙う狩る者のそれとなっていた。

「行くか」

一言残し、その場から千夜の姿は消えた。

◆　◆　◆

屋上の神崎が倒された頃、五階では今だ昶達は倒しても倒しても甦ってくる《屍鬼》を相手に戦っていた。
しかし、終わらない戦いに対して一方の昶と七海は体力の限界が近づいてきていた。
残り数少ない矢を渚達非戦闘者達に向かおうとしていた一体の頭部目掛けて射る七海はすぐ後ろで他の一体を真空波で切り刻む昶に声をかける。

「大丈夫か、昶っ」
「そろそろ疲れてきたと言いたいところだが……そういかないだろっ！」

死角から迫って来ていた《屍鬼》の首に回し蹴りを叩き込み、あらぬ方向に首を曲げて壁に叩きつけられるそれ目をくれる事なく次の標的に拳を突き出す。
鳩尾に吸い込まれた拳は疾風（しっぷう）を起こしそれによって生み出された風圧は真ん中から上半身と下半身を引き裂いた。
僅かに空いた空白の瞬間に昶は思い切り空気を吸い酸素を確保する。
顔中に伝い落ちる汗を拭う事すら忘れてひたすら呼吸を整えて少しでも動けるように肺の中に酸素を出入りさせた。
素質を見抜かれて幼い頃から後継者として他人とは比べ物にならない程、厳しい修行と稽古に鍛えられて来た昶ではあったが、どれだけ鍛えようと人間の体力にはいずれ尽きが来るのは当然。しかし実際、昶は充分なほどに奮闘していた。今、この場で接近戦が出来る唯一の人間である昶はたった一人で数多くの敵を薙ぎ倒した。
もう一人、七海がいたが彼女の武器は弓で数に制限がある。
今、自分たちがしなければならない事は自分たちと後ろに庇う渚達を守りながらこの場を持ち堪える事なので、下手に矢を消費すれ

ばそれこそ後がない。
その為に、七海は出来るだけ矢を節約させる為に援護に回っていた。
戦闘開始からまもなく三十分が経過しようとしている中、それもそろそろ限界を迎えようとしていたが。

「……っち、危ないやろがボケっ！」

向かって来た《屍鬼》の爪を咄嗟に避け、少し頬に掠る。
これだけ近くては矢が放てない七海は思い切り腹に押し出すような蹴りをくれてやる。
壁に叩きつけらた衝撃ですぐには次の行動へ移れない敵に七海は矢を放とうと背中の矢籠を探るが。

「げっ！？」

打ち止めだった。
しまった、と思ったときには体勢を整えた先程の《屍鬼》がギロリ、と血走った目でこちらを見定めていた。
追い討ちをかけるかのように左からも来ている。
二体が牙を剥いて襲い掛かったのは同時だった。
後ろで座り込んで見ていた渚と一体を蹴倒していた昶が気付いたが既に遅かった。

「都築っ！」
「っ七海ちゃん！！」

重なる叫びも虚しく兇刃に引き裂かれる……、と予想して反射的に固く目を閉じた七海だったが、いくら待っても衝撃も痛みも来ない。

妙に思った七海が恐る恐る目を開けて見るとそこに《屍鬼》はいない。
あるのは青白く光る球体――――魂魄がゆらゆらと上昇し天井をすり抜けていく光景だった。
それだけではない。
周りを見回せば、凶暴な血肉に飢えていた《屍鬼》達が青白い光を発しその人の姿を粒子へと変化させていた。

「な、何やっ？」
「これは……」

次々とすり抜けていく青白い魂魄をその場にいる者達は呆然と眺める。
そんな中、初めてそれを目にする文子。

「……何よ、これ」
「魂魄……この異形は……人、だったのか……ひょっとして……呪縛から解放されて？」

渚の言葉を継ぐように七海が確かめるように呟く。

「ちゅー事は……」

七海は後ろで肩で息をしている昶を振り向く。

「……やったか、蒼助」

頬を伝い落ちる汗を拭いながら昶はようやく一息ついた。

◆　◆　◆

頬に当たるひんやりとした冷たさが蒼助の意識をゆっくり引き起こした。
最初に意識が認識したのは自分の身体が俯せに倒れているということだった。

「……う……」

蒼助はズキリ、と痛む腹を押さえ上半身を起こした。
神崎に蹴り飛ばされた際の痛みだった。
と、思い当たった先で蒼助の意識を失うまでの記憶が一気に頭を駆け巡る。

「そうだっ……神崎！　……って」

屋上を見回すがそこには誰もいない。
神崎も、千夜も。
今、屋上に居るのは蒼助ただ一人だった。

「何で……一体何処に……」

逃げられた、という考えが巡る。
ザッと身体の血が急激に冷えていく感覚を覚えた。
しかし、その考えは一度踏み止まる。

「逃げたっつーなら……何で、俺生きてんだ……」

あの化け物に喰い殺される寸前だったはずなのに。

あれほどの殺意を向けていたのにも拘らず、自分を殺さず逃げたというのはどうにも腑に落ちない。
しかし、全てがなかったことかのように静けさを取り戻しているこの場では何も見出せない。

「あー……くそっワケわかんねぇ？」

地面に手をついた時、何かが指先に当たる。
見遣れば携帯がぽつん、と転がっていた。

「俺のじゃん……と、メールが」

携帯はメール着信を表示していた。
気になり、そのメールを開く。

『もう終わった。だから何も心配しなくていい　千夜』

と、それだけ書いてあった。

「あいつ……俺のアドレス勝手に……」

終わった。それは神崎は倒したということなのだろうか。
自分が意識を失った後、彼女がハンデのある状態を押して闘い、倒したのか。
事実を聞き出すべく返信しようかと思うが、すぐに止めた。
問い出そうしても、今までの反応を見る限りあの女が返事を返すとは思えなかった。

「……ん？　……あれ」

蒼助は胸を摩った。
そこは神崎の不意打ちによって貫かれた箇所であり、シャツも破れていた。
なのに、
「傷が……ない？」
瀕死は間違いない傷が、跡形も無く消えていた。

◆　◆　◆

彼は死にかかっていた。
彼の言う『化け物』に『角』を折られた彼はかろうじて残っていた意識を逃げるという選択に委ね、奴の注意が向かなくなった隙をついて死にものぐるいでその場を逃げたのだ。
途中で力尽きた彼は近くの公園で踞っていた。
力が入らない。
それもそのはず、力が彼の身体から蓋を開けた直後のシャンペンのような勢いでどんどん抜けているのだから。
原因はその蓋とも言え所有する力の蓄えられる場所、『角』を折られた事にあった。
言わば弱点なのだが、見た感じそれは石よりも硬い程度にしか見えないが、実質的は通常の鋼よりも遥に硬い物質だ。
相等の霊力を込めた一撃なければ、皹すら入れる事もできない。
それを、『あの怪物』は素手で折ったのだ。
まるで小枝を手折るように。

思い出しただけでも身震いがする。

「…ま、まだだ……まだ終わるわけには…い、か…ね……ぇ……っ」

彼はまだここで終わる気はなかった。
死にたくなかった。
何とかしなければ、と周囲を見回した。
人を、獲物を探して。

その時、生暖かい不気味な風が一陣吹いた。

振り向けば、空に浮かぶ月の紅い月光をバックに照らし出された1人の少女。
見かけは十代に入るか否か。月の光がなければ周りの暗闇に溶け込んでしまいそうなまでに深い艶やかな漆黒が少女を彩る立った一つの色彩だった。
髪も、瞳も、服装も。
透き通るような肌以外の全てが。

しかし、彼にはそんなものどうでもよかった。
少女は彼にとって極限の飢えに理性を忘れた獣である己の前にまんまと現れた獲物でしかなかった。

「がああああああっ！！」

彼は襲いかかった。
がむしゃらに。
生き残る為に。

ただただ、それだけの為に。
だから気付かなかったのだろう。

少女が何者であるかに。

「こんばんわ」

少女はにこり、と花のような笑顔を浮かべた。

“彼のすぐ隣に”立って。

そして次の瞬間、彼の残っていた腕が本体と別れを告げた。

「――――あ？」

肩からすっぱり切り落とされた本来そこにあるはずの腕がない事を最初は理解できなかった。

次の瞬間に襲った痛みで彼はようやく理解し絶叫した。

「あら、イイ叫び」

少女が鋭く長く伸びた爪に滴る血をぺろり、と舐める。

痛みに耐えきれず地べたをのたうち回る彼を涼しげに見下ろした。

怯えの色を露にした表情で己を見上げる彼を見て、

「あの娘の近辺に潜んでいる魔性はきっちり定期的に狩っているつもりだったんだけど……ちょっと気を緩めすぎてたかしら」

でもまぁ、と少女は続けた。

「おかげで“彼”の覚醒の手引きをせずに済んだから終わりよければ全て良し、よね？」

悪魔のような少女は天使のような笑みを浮かべて彼の意見を伺った。

当然、恐怖で震える彼にはそんな余裕などあるわけがないのだが。

彼のその反応を楽しげに見つめていた少女の白い手が折れた角をするり、と撫でる。

「この角、“彼”に折られたのね？ふふっ……あの娘を好き勝手にされた事、相当頭に来たみたいね」

その言葉に彼は凍り付いた。

何故、この少女は『あの屋上で起こった事』を知っている？

「だって見ていたもの――――――全部ね」

彼の心を読み取ったかのように少女はその疑問に答えた。

脳細胞は既に崩壊寸前に追い詰められていた。

泣き崩れそうな彼の顎を掬う。

「――――――ねぇ」

さっきとは打って変わって身も凍りつくような冷えた声だった。

「ふふ……そんな顔ないで、感謝しているのよ？あなたがでしゃばってくれたおかげで私が手回しする手間が省けたし――――――でも」

添えられた顎に力が込もる。

「あの娘に手を出したのは……やりすぎたわね」

凄絶な笑みを間近で見せつけられた喉が恐怖でひくっと鳴る。

思い知れ、と言わんばかりに少女は語る。

「あのコはとても綺麗よね。そして強くて気高い。いつまで眺めていても厭きない美しさを持った私にとっては至高の輝き。それがこの上なく愛おしいの。だからね……今は分不相応にもあの輝きを穢そうなんて愚かで身の程知らずな貴方を……八つ裂きしてやりたくて仕方ないの」

ひぃっと情けない悲鳴を挙げた。

「い、嫌だ……死にたくな……」

「無理ね、角を折られてはもう時間の問題……あなたは死ぬわ」

だから、と爪先を彼の目先に差し向け、

「せめて、前者の感謝と後者の断罪の気持ちを込めて殺してあ・げ・る」

まるで悪戯をしようとしている子供のように無邪気で、残酷な微笑。

彼は戦慄き、懇願するように左右に首を振った。

決して越えられない壁を二度も見せつけられた彼は恐怖の感情に囚われ、声にならない叫びを上げかけていた。

「さぁ、戦きながら」

じわり、と少女の爪が彼の額に沈み込む。

「ひ、やめ」

「途方もない絶望の海に沈みながら」

「やめてくれえええぇぇぇぇぇ――――――――っっ！」

美しく残酷な笑みをくくっと形の良い唇から漏らし、少女は圧倒的な力をもって手を、

「この耳に心地よく響く素敵な悲鳴を奏でて死になさい」

「ストップ、黒蘭。タンマだ、タンマ」

振り抜いた少女の手を止める者がいた。

いついたのか、と言われれば誰も答えられはしない。

両者、今気付いたのだから。

「あら、千夜……いつ来たの？」

「今。間一髪だな」

「ええ～……なんでぇ？」

不満げに唇を尖らせる黒い少女。

自分の獲物を間に挟んで少女の手を止めている千夜は、はぁ、と溜息を付いた。

「あのな、お前がコイツを八つ裂きにしてしまったら……」

「ひぎゃぁっ！！」

「――――私はこの怒りを何にぶつければいいんだ？」

会話の間に注意が逸れていることを良い事にずりずりと下がっていた神崎の右太股を千夜の振り抜いた直刀が貫く。

「この期に及んでもまだ逃げる気でいたのか……呆れるほど生き意地の張った奴だな……」

「ち、ちくしょう……何でだよ、俺が……俺は無敵じゃなかったのかよ……王者になれるんじゃなかったのかよ……」

泣きじゃくりながらの台詞に千夜は驚いたように少し目を瞬いた。

次に表れたのは呆れ返った表情で、

「お前……本当に自分が何なのかわかっていないのか？　自分が“神崎陵”だと……思っているのか？」

「な……に？」

今度目を見開いたのは彼の方だった。

驚いたのは後半の部分に対して。

「その紛い物の躯（からだ）……よく出来ているな。最初は解らなかったよ、まさか“角付き屍鬼”を創って私に差し向けてくるとは……上手く行けば私を手に入れ、失敗なら様子見として終わらせる気だったか、お前の創り手は」

何を言っている。

この肉体は神崎陵だ。

自分は神崎陵だ。

神崎は叫び、主張した。

「嘘だっ！　俺は……俺は……」

「そうか……なら、生年月日、両親の名前、その他一つでも良い

から自分の事を言ってみろ」

すぐに答えてやろうと彼は口を開いた、が。

言葉が出ない。否、言葉に乗せる事がない。

「そ、そんな馬鹿な……ことが……」

考える。考える。

しかし、何度思考回路を働かせ、記憶を探ろうと。

神崎陵の“思い出”が見つからない。

絶望し、放心する彼に千夜は冷たく見据えたまま口を開いた。

「やっと解ったか……影武者（ダミー）。なら、還ったら伝えておけ……今度はお前が直接来いとな。王者気取りのお前が抱く下らない夢ごと寸刻みにしてやるから、と」

突き刺していた得物が太股から引き抜かれ、次の瞬間、銀光が閃く。

同時に彼の身体は真ん中から真っ二つに切り裂かれた。

事切れた彼の身体は黒く腐食していきやがて吹いた一陣の風によって崩れて消えた。

「お見事。いつもながら、素晴らしいわ」

「やかましい。勝手な事ばかりして……どうしてお前は動いて欲しい時に動かないでこういう時ばかり……」

「まぁまぁそんな年寄り臭い溜息つかないで。綺麗な顔が台無しよ」

くすくす笑うばかりの少女に千夜は起こるだけ無駄だと悟る。
マトモに取り合わない相手にはこれ以上なに言ってもつけあがらせるだけなのである。
話を切り替えることにした。

「さっき消したあれは……何だと思う」
「自分の思念の複製を核に作り出した劣化疑似存在。まぁ、ようはオリジナルのコピーといったところかしら。屍鬼よりは強かったんじゃない？　それにしても……随分手間取ってたみたいねぇ、油断した？」
「ハプニングがあっただけだ」
「それにしても……若いとはいえ彼らも災難ねぇ……土御門の彼、ヤバいんじゃいの？」
「死にはしない筈だ。噂の大陰陽師の再来なら……“あの程度で死ねる肉体ではない”。私と同じように……っ」

言葉の途中、視界がぐらついた。
更に、傾く。

「姫様っ」

倒れるかと思われた身体を誰かに支えられる。
顔を上げれば、見覚えのある厳つい顔が目に入る。

「……姫と呼ぶなと何度言わせる気だ、上弦」
「私にとって貴方様はそうであり、そうに呼ぶ値する御方です。……全く、無茶を為さいますな」
「ああ……さすがに浄化直後の激しい運動はきついな……」
「どうか、そのままで。部屋まで御運び致します故」

「いいよ、子供じゃないんだ。放せ、歩ける」
「そう言うなら子供みたいな事言わないの、その世話焼きさんには貴方に甘えてもらえるのが至高の悦びなんだから」

少女に言われ、千夜は分が悪そうに大人しく丸太のような腕に身を任せた。
ふと見上げれば、空には無数の星が点々と鏤められていた。
あの中のどれかが、星読みに唯一異なる未来を教えた。

「……青の助け、か」

小さく呟き、千夜は目を閉じた。

僅か二日後に千夜は思いがけない邂逅を迎える。
先の事など知る由も無い千夜は、暫しの安らぎに身を委ねていた。

［拾九］　一時の幕閉じ（後書き）

よっし、書ききったぞ。
改稿前との違い。一番は今まで出てきていた神崎が実は偽者だったという箇所。いろいろ考えた末、奴にはもう暫く生きていてもらうことにしました。
とりあえず一区切りです。
物語は序盤もここで終わりようやく中盤へとさしかかります。サブタイに幕閉じとか使っているので、しばらくは恋愛路線を主に話は進みます。

１０／６
黒蘭の年齢修正。
何で十四なんて書いたんだろうか。
正しくは十か一つ上からくらいです。

【弐拾】　或る夜の邂逅（前書き）

下ネタ注意。

［弐拾］　或る夜の邂逅

千夜は深く後悔していた。

『ねぇねぇ。朱里、お台場のパレットタウン行きたーい。そんでね、夜の大観覧車に姉さんと二人で乗りたいっ。それでそれで、日曜じゃなくて土曜日行こうよぉ、いいでしょぉ、姉さん』

ある一件で約束を破ってしまった埋め合わせに好きなところに連れて行ってやると約束した。別に何処を指定されても必ず連れて行ってやるつもりだった。彼女との約束は可能な限り守るつもりでいる。

日曜日から土曜日というのも、絶対指定日に行くとこだわりは持っていなかった為、彼女の言うとおりにした。

東京レジャーランドでボーリングやったりスポーツゲームやったりお化け屋敷に入ったり。とにかく子供の体力というものは際限がなく、しかし、ほとんどのアトラクションを回り夜の大観覧車に乗る頃には彼女は疲れが出ていたのか既に眠そうにしていた。

降りるときにはすっかり夢の中の彼女を背中に背負って夜の渋谷に帰って来ると、待っていたのは“招かれざる客”。

一日中引っ張り回されて疲れている矢先に迷惑なことこの上なかった。

背中に背負っている彼女は恐らくはいつものように遠くで自分を見ていたであろう“二人”に持ち帰らせ、千夜は“客”の相手をし

た。
難なく終わるはずだった。だが、やはり自分は疲れていたのだろう。
二日目に自分の身体を侵した瘴気は生活に支障がないほど綺麗に清められていた。だが、まだ若干しぶとく身体にこびり付いている。だから、疲れに便乗して体力の限界が通常よりも速かった。
そうでなければ、不意打ちなど喰らわなかったはずなのに。

「やっぱり……観覧車は勘弁してもらうべきだったかなぁ……」

夜まで出歩いていた事も敗因だったかもしれない。
そうでなければ、限りなく後から後から湧いては寄って来る夜の獣達から隠れる為にこんな路地裏に逃げ込むこともなかっただろうに。
千夜は、深く後悔を吐き出した。
ズキンと刺すような痛みが腕を痛めつける。
来ているGジャンは滲み出た液体で黒ずみ、てらてらと湿った部分を光らせていた。

「っ……ったく、とことん運がないな、私は……」
『主様……ご無事でございますか？』

自分の唯一無二の愛剣が心底気遣う“声”でこの身を案じてくれる。

「無事とは言い難いが……大した事はない……だが、また瘴気を取り込んでしまった……暫く動けそうにない」

直刀だけはほとんど意地で握って離さずにいる。
これを手放してはもう後がない。

動けない今、この《夜叉姫》だけが敵を近づけないでくれる。
それにしても参った。このままではこんなところで日曜の朝を迎える羽目になる。しかも、無事に迎えられるがどうかも怪しい。
ふぅ、と一息。
そもそも路地裏に逃げ込むなど。夜は何処にいても魔性が出歩くが、奴等は闇の深い場所を好む。路地裏などまさにその穴場。
何で、こんな場所にうかつに逃げ込んでしまったのだろうか。

「……後悔先立たず、とはよく言ったもんだな……ん？」

ふと湧いた既視感（デジャヴ）に千夜は首を傾げた。
この状態。この状況。
忘れようと思っても忘れられない何か覚えのある体験。

「……ああ、そうか」

こんな状況は昔にもあった。
あの時もこのように手傷を負っていて、こんな風に路地裏で一人蹲っていて。
雪が降っていた。

誰にも理解されず。
誰にも見てもらえることはなく。
“帰る場所”に居場所はなく。

この息苦しさから開放されないのなら、いっそこのまま雪の中に埋もれて消えてしまおうとすら思っていたあの時。

目を閉ざして、耳を閉ざして、全てを拒絶して眠りにつこうと思ったあの時。

“彼女”が現れて、微笑んだ。

「ふふっ……ははは……」

自嘲し、夜空の見上げた。

優しい光を纏う月は変わらずそこに浮かんでいる。

「また……救(たす)けに来てくれないかな……」

無理な話だ。

“彼女”はもうこの世にいない。

二度と自分の前に立つことは、絶対にない。

ぐらり、と視界が揺れる。

「っ……やばい……眠くなってきた」

瘴気に後押しされた疲れが、眠気となって千夜を襲う。

まずい、と舌打つ。ここで眠ったら、終わりだ。

魔性が寄って来ても、深い眠りの中では察知も対処も出来ない。

そんな必死に現実に噛り付く千夜の耳に、砂利を踏み擦る音が届く。

ふと、顔を上げれば、もうぼやけ始めた視界に人影が映った。

どんな姿なのかを識別できるほど視界に自由はなかった。ただ、わかるのは大きくなる立体像でその人物がこちらに近づいてきていること。

もういないその人がまた来てくれた気がして、そこで意識はぷつ

ん、と音を立て切れた。

◆　◆　◆

――――好きになるならずっと離さないでくれる人がいいわ。

それは彼女の口癖だった。

まるで自分の経験を振り返るように、これから先に自分にそうするようにと言い聴かせるように。

彼女と出会って、彼女といる間に何十回と聴かされた言葉。

そして、決まって彼女はその後言うのだ。

――――愛している人を二の次にするような人は……絶対に、ダメ。

何処かここではない何処かを見て、哀しそうな眼差しでそこを見つめていた。

自分を通して、そこにいる誰かを。

◆　◆　◆

記憶に焼き付いて消えない残像を最後に、千夜の意識は深い暗闇から上昇した。

浮かぶような感覚の後、眩い光が飛び込んで来た。

「……ん……」

眩しかったのは電灯の光だった。
視界を閉ざした闇に慣れた目を擦り、改めて見て映ったのは見知らぬ部屋だった。
そして自分の身体はベットの上に寝かされていた。
記憶の途切れからは繋がりようのない今の状況を把握するべく右手を支えに身体を起こす。

「……っ！…つぅっ……」

突き刺すような痛みが二の腕の外周に奔る。
怪我の事を思い出し、見るとそこには丁寧に包帯が巻かれていた。

緩くそこを摩り、部屋に眼を移す。
見たところ自分がいるのはリビングのようだと千夜は判断した。
仕切り無しでキッチンがありその横には冷蔵庫。
更にど真ん中にカーペットを敷いた上にテーブル。
自分が住むマンションの部屋よりはずっと狭い。
そして、

「……汚い」

部屋のそこらじゅうに散らばる紙くずやら散乱する衣服。
ここの家主は整理整頓がなっていないようだ、と千夜はその光景を一瞥した。
ベッドから這い出て床に足を付ければ何か踏んだ。
布のような感触を足の指で摘んで、引き上げる。

「……パンツ」

女物。しかも赤でレース。

しかもなんか染みが付いているのがなんかリアルで妙な連想を掻き立てられて嫌な気分にさせられる。

「お前、足にパンツ引っかけて何やってやがんだ」

背後で聞こえた声に振り返ると、そこには、

「玖珂……？」

二日前、とある一件に巻き込まれた友人が黒のタンクトップとズボンの姿でリビングへの入り口と思われるドアを半開きにして立っていた。

千夜にとって、数少ない今の学校で本性を知り見せることができる存在。

何故、この男がここにいるのだろう。

「なんでこんなところにお前が？」

「んなもん、俺んちだからに決まってんだろ」

玖珂の家？と思考が弾き出し、意識が途切れる寸前の記憶を探る。

白く暈けて揺らぐ視界に映った最後の映像だった人影。

あれが目の前の玖珂蒼助だったとすると、ここに自分がいる理由が千夜にようやく見えてきた。

「お前が私を助けた、のか」

無意識に出た状況に対する理解の言葉に蒼助は、ようやくわかっ

たかと言わんばかり一息吐き、千夜のところまで歩み寄り隣に腰を下ろした。

「感謝しろよ、俺が通りかからずあのままだったら魔性の餌か公衆便所にされてたぜお前」

足先にひっかけている情事の残骸に続いてますます不快な気分に沈まされた。

もう少しマシな例えはないのか、と思っていると怪我をしている腕を引っ張られる。

「拾ってきてから二時間、お前ずっと眠ってたんだぜ？」

言われて時計を見れば、時刻は既に十時半ばを過ぎていた。

交戦を始めたのが、七時過ぎ。彼女と別れてから三時間以上も経っていた。

恐らくあの様子からして明日の朝までは起きないだろうが、もし起きた時は留守の間を『あの二人』が傍にいてくれるはずだから心配はない。

そう思っていると、腕を締め付ける加減が緩くなった気がした。

「……何、してるんだ」

視線を落とせば、蒼助が巻いてあった包帯をシュルシュルと解いている。

「包帯取り替えんだよ。魔性から受けた傷ってのは性質（たち）が悪いからな、細かく取り替えねぇと穢れが溜まって膿んじまう」

「いや、その心配はない。あれから二時間なら、もう治ってる頃だ」

「はぁ？　ナニ寝ぼけたこと……い、って……」

しゅるん、と赤い染みが出来た包帯が取れる。
容態を診るのに邪魔なソレが取り去られたそこには傷はなく、元から怪我などなかったような二の腕が曝されていた。
驚いたように腕と自分の顔を交互に見てくる蒼助に千夜は訳を教えてやる。
少々の“偽り”を含ませて。

「生まれつきの特異体質でな、自己治癒力が他の人間よりも高いんだ。おかげで生まれてこのかた入院知らずだ」
「けどお前……瘴気とかはどうすんだよ。さすがにそれは……」
「お前が来る前に処置した。お前を助けた時に使った薬、あれは知り合いの薬師が調合したもので瘴気を浄化する効能を持っている。事前に持ち歩いていたおかげで、あの時のお前も、今回の私も助かった。そういうわけだ」

半分は嘘で半分は本当の話。
特異体質なのは本当の事。ただし、いろいろ知られてはまずい部分を省いてはいるが。
嘘なのは薬。確かにあの時はたまたま持っていたが、いつも持ち歩いているわけではない。となると、瘴気は今だ身体の中で燻っているわけだがそれには心配は及ばない。時間はかかるが、それを過ぎれば瘴気は体内で中和され消える。これも“自分のような”特異体質によるものである。
千夜のこの話に、蒼助は「ふーん……」と僅かに信じ難いようだったが納得したように頷いた。

「ま、それでもこっちまではその特異体質とやらも防げなかったみてぇだけどな」

そう言って蒼助は千夜の前髪を指先で掻き分け、額に掌を押し付けた。
突然の行動に瞬くが、その手が妙に冷たく、気持ちが良くてとろんと目を閉じかける。

「三十八度二分。熱あんだぞ、お前」
「熱……？」

自分では熱いかどうかは全くわからないが、身体がだるく感じるのはわかっていた。
瘴気の浄化の際に体内の霊気が活性化する為、自然と体温が上がっているのだ。
風邪ではないとわかっているので、いつも我慢して普通にしていた。

「……お前、腹へってねぇ？」
「あまり。小腹程度には」

蒼助はその返事に暫し考え込むように眉を顰めた。

「ちょっと待ってろ、何か作るから。食ったら寝ろよ」

冷蔵庫を開けて中を覗き込む蒼助の背中を、千夜は遠慮の言葉をかけることすら忘れてずっと見ていた。

◆　◆　◆

前に出されたものを見て、千夜は顔に不満の二文字を浮べた。

「さけ雑炊か……しかもレトルト」
「なんだよ、文句があるならはっきり言いやがれ」
「自炊くらい出来ないのか一人暮らし」
「皆が皆出来た人間だと思うなよこのヤロウ、ちくしょー貧乏学生舐めんなよっ！！」

涙目になってきた蒼助を哀れと思ったのかせっかく出されたモノを勿体ないと思ったのか、ふぅ、と息を一つ吐き、雑炊の丼と一緒に盆の上に乗せられたスプーンを手に取り、

「まぁいい……下手に食えない代物を出されるよりはマシだと思って食ってやるよ」

元の場所に捨ててきてやろうかと本気で思い始めていた蒼助の心情など知らない千夜は憎まれ口の後にぽつりと呟いた。

「それに、誰かにこんな風にしてもらうのなんか……久しぶりだからな」

懐かしげに、そして何処か哀しげに紡がれた呟きに蒼助は毒を抜かれ、怒る気も失せて肩を力を抜いた。

「俺だって初めてだぜ……人にこんなことすんの」

周りは病気知らずの健康児だらけで病気の看病などする機会などなかった。

セフレが風邪を引こうとも見舞いに行ったことはない。向こうの神経が逆立った状態で相手をしても機嫌とりが面倒くさいだけだし、無理して青白い顔で微笑まれても気味が悪いだけだから。

しかも料理も家事も不得手の自分では何も出来ないのだから尚のこと始末が悪かった。

だが、今回何故かこの女には何かしてやらねばと思考がせかせかと動き、身体もそれに従う。倒れていたのを見つけた時は本当に心臓に悪かったし、気が付いた時にはそれまで落ち着かなかった心が平常を取り戻すなど、この終夜千夜という人間は蒼助の心を酷くかき乱してくれる。

「いただきます」

かちゃかちゃと食器を動かし、千夜は電子レンジで暖められた雑炊を口に運ぶ。

その動作に目を奪われ、暫しそのままじっと見つめる。

不意に千夜の視線がこちらの眼と合い、我に返り慌てて目線を逸らす。

自分の行動に奇妙な後ろめたさを感じ誤魔化すように話題を振った。

「そ、そういえばよ……お前なんで昨日休んだんだ？」

「んっ……ああ、先日の一件で瘴気を喰らってしまってな……大事はなかったが、浄化し損ねた僅かな瘴気のせいで一日ベッドで寝て過ごす羽目になった。妹に泣かれるわ、見舞いに来た友人には嫌味言われるわ、勝手に上がり込んで煎餅食い散らかしていく連中がいるわ……散々だったなぁ」

はふぅ、と溜息。

よっぽど辛かったのだろう。特に後半が。

「それはそうとあの後、お前の仲間どうなった？」

「あ？」

「重傷負ってヤバい感じなのが一人いただろ。アイツは生きてるか？」

それが氷室の事を指しているのに気付き、

「ああ、アイツか……生きてるぜ。一時は相当ヤバかったらしいけどよ、久留美が持ってた札のおかげで出血を抑えて一命を取り留めたってアイツの相棒から電話もらった。ま、問題があるとしたら上の命令に逆らって勝手に行動した責任をどう問われるかだよな。お前が気にする事じゃねぇけど」

「そうか」

それだけ言うとまた雑炊を口に運ぶ。

それ以上聞こうとしないのは一応気になっていただけ、だからなのだろうか。

「……なぁ」

「ん？」

口の中の柔らかく煮えた米を租借する千夜に蒼助は今度は自分が気になっていたこと訊ねた。

「俺、屋上で化け物になった神崎と殺り合って不意打ち喰らって意識失くしちまったんだ。で、気がついたらお前も神崎もいなくて……結局、あの後どうなったんだ」

千夜は少し目を見開いた。

僅かな動作に蒼助は気付かず見逃された。その間に微かな動揺はすぐにもみくちゃにされて消えた。

疑問を投げかけた蒼助に返ってきたのは、起伏のない返事と解糖。

「神崎は……死んだ。角を折ってやったら急に逃走を図ってな、混乱の中で奴の結界は解かれ、私はすぐにその後を追い……トドメを刺した」
「……お前が倒したのか？」
「それ以外に誰がいる」

そこで生まれるとてもなく大きな違和感と不自然。
蒼助はその言葉を撥ね除けた。

「んなワケあるかよ。お前、瘴気受けて身動きとれなかったから神崎に捕まっちまったんだろうが。そんな奴が闘えるわけあるか、ましてや勝つだと？　終夜……お前、一体何隠してんだ」
「……」
「終夜っ……答えろよ」
「――――玖珂」

追及すると、千夜は射るような視線を向けてきた。

――――ぞわり、と背筋が震えた。

全身の神経が凍り付くような感覚。
それは言葉に言い換えれば、恐怖と表現すべきものだった。

「神崎陵は死んだ。もう、終わったんだ」

声が出ない。
それどころか、指先すらろくに動かせなくなっていた。

まるでさっきとは違うこの空間を漂い、支配する空気。

それは突然異世界に放り込まれた気分に似ていた。
一刻も早くここから出たい、そう思った瞬間、

「それでいいだろう」

千夜は目を逸らし、瞼を閉じた。

途端、張り詰めていた薄ら寒い空気が消え去っていく。
指先がカタカタ小刻みに震えるのを何とか抑える。

……何だ、今の？

恐怖のせいか、心臓の鼓動が通常のそれよりより激しい。
比べて千夜はと言うと、何事もなかったかのように素知らぬ顔で雑炊を食べている。
目で殺すという行為をやってのけそうなさっきまでの勢いはそこには一切ない。
力ずくで捩じ伏せるような威圧感籠る視線と有無を言わさない言葉。
それは一方的な警告だった。
何かを知っている者が無知なる者へ警告する時のような雰囲気があった。
あるで火遊びをする子供に親が注意するような。

……やっぱり、何か知っているのか？

今、自分に対して話した事の他に、何かを隠しているかもしれない。
そう思わせるだけの材料が蒼助の中では揃っていた。

あの見た事もない異形を明らかに知っている素振り。
校舎内にいた時の言動の中での不可解な言葉。
そして、今の強い拒絶。

千夜は知っている。この事件の裏にある何かを。

と、そこまで考えて蒼助はふぅー、とりきんだ力を抜くように息を吐いた。

……って、こんなヤバそうな事に何で深入りしようとしてんのよ俺。

あんな目に遭ったというのに、これ以上危ない橋を渡ろうなど何を考えているのか。
興味本位で命を危うくするなど絶対御免だ。
なのに、どうしてこんな真似をしていたのだろうか。

……壁、だろうな。

千夜と蒼助自身の間に感じた見えない“壁”。
先程、それがはっきりと視覚に映った気さえした。
同じ世界にいるはずなのに、何かが千夜が蒼助と違う世界に住んでいると思い知らせる。
それが、どうしてか蒼助には歯痒くて仕方なかった。

「おい、玖珂」

突然の声に蒼助はビクッと肩を震わせて我に返る。

「な、なんだよ」

「御馳走様」

盆ごと空になった器を差し出される。
いつの間に全て平らげたのか。

「薬、飲むか？」
「いらん。一般の薬品は効かないんだ」

便利なようで不便な部分を持ち合わせている身体のようだ。
食器を片付け、ふと振り返ると千夜は横にならず、訝しげに着ているシャツを摘んで見ている。

「何だよ」
「……これ、お前のか？」
「ああ、そうだが」
「お前が着替えさせたのか？」
「……」
「で、見たのか？」

沈黙。
それを肯定ととったのか、

「このスケベ」
「なっ……血で汚れた奴をそのままベッドに乗っけられるかよ！大体、手当すんのに服脱がさなくてどうしろってんだよ！」
「うんうん。下着は脱がさなかったみたいだな、えらいえらい」
「……人の話聞けよっ！！」

喚き散らす蒼助をちろり、と何処か白い目を向ける千夜。

「大体、何でこんなシャツ一枚しか着せないんだ。趣味爆発じゃないか。生足好きなのか、お前」
「趣味爆発ってなんだ！　シャツだけで十分隠せてんじゃねぇか。それに俺のじゃデカ過ぎるだろっ！　あと俺は生足よりも何も着てねぇ方が」
そこまで言って蒼助は固まった。
うっかり地雷を踏んでしまったようである。
「は、正直な奴だ。まぁ、こんなの置き土産にさせているんだから当たり前か」
と、さっきまで足に引っかけていた派手なパンツを摘み上げ、観察する。
大分前にセフレが来た時に置いていったものだった。
別にあっても見つかって困る相手などいないから放っておいたのだ。
だが、やはり捨てておけば良かったと、蒼助は今になって激しく後悔した。
「べ……別に、裸ぐらいなんだよ。んなもん飽きるほど見てるし、今更同級生の身体見たくらいじゃ何とも思わねぇよ」
「うわ、開き直ったな」
そんな蒼助の見苦しい言い訳に呆れた様子だった千夜は、断固と罪悪感を見せないその態度に微笑を浮かべ、
「まぁ、いいだろう。逆にこれで安心だ」
「あ？」
「それだけ欲求と女に不自由していないなら、無闇に私に手を出す

ことはないだろうからな」

言って、千夜は布団の中に潜り込んだ。
肩まで潜ったところで声が放たれた。

「おやすみ」

向けられる信頼。
千夜の勝手な憶測に過ぎないはずなのに。
蒼助は何故か妙なこそばがゆさを覚えた。

◆　◆　◆

草木も眠る深夜二時。
電気も消えて、蒼助もベッドで眠る千夜のすぐ下で物置から引っ張り出してきた布団を敷いて床に着いていた。
いや、寝ようとしていた。
それも必死に。

そして、一つの事をずっと懺悔していた。

……嘘ついてすみませんでした。本当はめっちゃくちゃ欲情してました興奮してました。だって、めっちゃエロい身体してんだもん、勃つでしょ、男なら普通は勃つでしょ、正常な機能してんならアレは勃つでしょ。

目を閉じると甦る艶めかしい場面。

妖しいまでに白いきめ細かな肌。ブラジャーに吸い付かんばかりにフィットする張りのある平均基準を遙かに超えた胸。腰から足先までの歪みのない滑らかな曲線（ライン）。

全体的に豊かな体型と対照的に頼りないまでに線が細い首筋というアンバランスさ。

しかも、熱のせいで肌の表面に浮かぶ汗がエロさを更に煽り立てる。

現在、蒼助の頭の中ではそんな妙に明確な光景がぐるぐる回りながら、理性と欲望が脳内聖戦を繰り広げていた。

もはや眠るどころの話ではない蒼助と引き換え、戦いの引き金となった原因をつくった本人は不公平なまでにぐっすり寝付いていた。

「ん……」

ごろり、と寝返りを打ち、蒼助に背中を向ける。

挙げ句の果てに寝息まで聞こえて来る。

「ちくしょー……こっちの気も知らないでぐっすり寝やがって」

自分で寝ろと言っておきながら恨めしげにその丸まった背中を恨めしげに睨む蒼助。

「……どうするよ、これ」

見下ろした先では自慢の昂りが熱を持ち出している。

こんな状態では眠れない、と苛立ち頭を掻き毟る。

外を歩いて鎮まるのを待つか。それとも、強引にセフレ宅まで押し掛けるか。

しかし、病人を一人残して家を留守にするわけにはいかないので

両者却下。
自分で処理はプライドが許さないので即却下。
良い解決打法が見つけられない合間にも身体は火照る一方。
ふと、何気なく眠る千夜を見る。それが蒼助に思わぬ解決策を与えてしまった。

……ヤれるか？

その“術（すべ）”は幸いか不幸か、手を伸ばせば届く場所で寝ている。
今まで友人に手を出した事はなかった。
セフレはセフレ、友は友と割り切った関係を望む蒼助は一時の迷いや気紛れでその関係を壊したくなかった。

だが、今は何故か。
そんな事はどうでも良くなり始めていた。
このまま天秤が傾いて手を出してしまえば、一時の快楽の後に待っているのは厄介で面倒な今後の展開。
そんなのは御免なはずなのに。

抱きたい、と蒼助の中の熱が疼くのだ。
身体はもちろん、その奥に灯った熱も。

立ち上がり、寝息の聞こえるベッドへと歩み寄る。
ゆっくりとベッドに乗り、そこで眠る身体の上に被さるように乗っかる。
さすがに起きるか、と気構えたが警戒とは裏腹に千夜は起きる気配を全く見せない。
調子に乗って、右向きになって眠る身体を肩を掴んで仰向けにさせるが、それでも起きる様子はない。

「……ちったぁ、身じろぎくらいしてくれよ……夜這いかけられかけてんだぞ」

つん、と指先で頬を突いてみるがピクリとも反応はない。
眠る彼女の顔を目の当たりにして蒼助はゴクリ、と生唾を呑んだ。
隣の窓から射し込む月明りが蒼助の下で眠る千夜を淡く照らす。

「……やべぇ……マジでイイ女だな、お前」

『水も滴る良い女』という言葉が使える女は見た事がないが、『月光が映える良い女』なら今ココにいる。

もう、何だって良い。

蒼助はヤケになって心の中でそう叫んだ。
今、この女を抱けるなら後の事などいくらでも背負ってやる。

「宿代と看病代だ……悪く思うなよ」

今更押し付けがましい言い分だと思いつつも、一度決めた考えはそう簡単には変わらない。
信頼されていたのに、という罪悪感もあったがそれも今の蒼助を曲げられはしなかった。
布団を剥ぎ取れば、曝け出される千夜の上半身。
シャツとブラジャーと、か弱い武装。

「……ん？」

一瞬、蒼助は自分の眼を疑った。
眼に映ったのが、自分が知っているものとは“違う”ように見え

たから。
しかし、気のせいだと言い聞かせ気を取り直し、千夜の身体を探る為に手を伸ばす。
布団の下に隠れているシャツの裾を引っ張り出し、その下に手を忍び込ませる。
するすると指を滑らすと少し汗ばんだ肌が吸い付くような手触りを覚えさせた。
その手応えに興奮し、その上にある更なる心地よさを求め上る。
が、しかし探す二つの膨らみはいつまで経っても見つからない。
否、あるはずのそこに“無い”のだ。
蒼助は暫し、“そこ”を撫でるように摩る。
平たく堅い感触。

「……おい、待て」

蒼助は衝動的にシャツをたくし上げた。
そして、眼に飛び込んで来たのは、

「な〝」

蒼助に低く潰れた声を吐かせたモノ。
それは女の裸とは言い難い光景。

真っ平らな胸板。
しなやかな筋肉が付いた胴。

紛う事無き男の身体をした千夜の姿だった。

唖然とする蒼助の手は自然とその下へと向かう。
布団、その下の下着に手を入れる。

「……あった」

モノの手応え、感触。探ったそこには確かにあった男の象徴と誇り。

女にはない部品が蒼助の手の中にあった。

呆然としている蒼助の下で、その時その人物が動いた。

びくっと震え、千夜の顔に視線を落とす。

眠たげに半開きする千夜が焦点を合わせようと自分の顔を見ていた。

「……」

「……」

なんとも言えない沈黙が降りる。

言葉の浮かばない蒼助。ぼんやりと露にされた自分の上半身と蒼助の顔を交互に見る千夜。

そして、

「ああ、見たのか……――――――それじゃあ、おやすみ」

「っっ待て!!　今、その後半の台詞にどう繋がったんだ!?」

揺り起こそうとする蒼助に千夜は煩わしげに片目をしょぼしょぼと開き、

「うるさい」

「おぶっ!?」

横っ面に勢いよく叩き込まれた蹴りを興奮状態で予測出来るはずもなかった蒼助は為す術無くベッドから落とされた。

そして、彼は運が悪かった。
頭から絨毯の範囲が及ばない床のタイル部分に、

――――ゴンっ

寸止めも勢いの軽減もなくブチ当たった。
堅いモノ同士がぶつかり合う打撃音は既に再び眠りの中に落ちていた千夜には届かなかった。

こうして、蒼助宅は夜分相応に静かになり、夜は更けていった。

［弐拾］　或る夜の邂逅（後書き）

すみません、趣味爆発してんのは私でございます（笑／土下座）
改稿したら蒼助が欲望に奔った。何故（自分の胸に聞けつーか、来たよ大幅改稿。ここからはもうあんま改稿前の残滓は役に立たないからきっと更新速度落ちます。すんません。
最後でおかしな事が起きています。改稿前からの読者も「ん?」な展開です。言い訳と弁解（どっちも変わらねぇ）は次回の後書きで。

【弐拾壱】　彼女の秘密（前書き）

待っているといい。
暴かれる日を。

【弐拾壱】　彼女の秘密

鼻孔をくすぐる香ばしい匂い。
それによって蒼助の意識が覚醒する。

「う……」

ぼんやりする意識の中でズキズキと頬が痛むことを認識。
目を開けると、窓から射し込む光で明るくなった天井――見慣れた朝の部屋が映る。
ただし、逆さまで。
正しい理由としては蒼助がベッドからずり落ち脳天を床に付けていること。
何故だ、と理由を探るべく昨夜の記憶を展開。
しかし、逆さまのせいか朝のせいか思考回路が上手く働かない。

「……うーん」
「なに上下逆になって唸っているんだ玖珂」

突如かけられた声とドアが開く音に蒼助は聞こえた方向に床に押し付けられて不自由な頭を無理矢理捻る。
息を呑むほどの美麗な男が逆さまに映った。
艶やかな長い黒髪を背中に流す男は何故か、蒼助のシャツとズボンを来ていた。
悠々とした足並みで目の前まで歩いて来てしゃがみ込み、

「起きろ。てっぺんが禿げるぞ」
「禿げるか。つーか、てめぇこそ人んちに上がり込んで服漁りやが

るなんて良い度胸し……」

蒼助は目の前の男の顔を見た。

遠くに居た時は長めの前髪に隠れてよく見えなかった眼が、今その間からはっきり見れた。

黒く澄んでいても尚強い光を宿した双眸。

その眼を知っていたが、蒼助は自分の判断と目の前の事実を疑った。

「お前……まさか、終夜か？」

「やっとわかったか。まぁ、この姿じゃ無理も無いが」

「……お、おまっ」

昨夜の記憶が一気に思考回路の中を駆け巡る。

ベッドから完全に落ち、すぐにガバっと起きた。

胸、肩、腕、と蒼助はせかせかと千夜の身体を触った。

やや華奢で細身だが、今の千夜のそれは男の体つきだった。

「どうなってやがる……お前、女だろ？」

「今は男だ。今は、な」

ワケが解らない。

呆然とする蒼助を捨て置いて立ち上がり、テーブル前の床に腰を下ろす千夜。

テーブルの上には先程の香ばしい匂いを立ち昇らす炒飯が乗っていた。

「勝手に冷蔵庫にあったものを使わせてもらったぞ。ロクなものがなかったからこんなものしか出来なかったが、病み上がりの朝飯には充分だろう」

スプーンで焼き色の付いた溶き卵の絡んだ飯を食べ始めるその姿に、流されかけた蒼助だったが、

「ん？　どうした、食べないのか」

「こんな状況もロクに呑み込めてねぇ状態で、飯なんか喰えるか」

「ああ、それもそうか」

蒼助の言いたい事が何なのかがわかるのか、千夜はスプーンは下ろさないもののこのまましらを切る気はないようだった。

もぐもぐ、と租借を終えて、千夜は開口を切った。

◆　◆　◆

「三ヶ月前まで、私は“男”だったんだ。身体はもちろん戸籍もな」

さらりとあまりに唐突な言い出しは蒼助を唖然とした。

「は？」

「だーから、私は元はお前と同じ性別だったんだと言っている。前の学校では学ランも着ていたし、男子トイレも使っていた。一人称だって“俺”だったんだ」

「……」

「さっき触ってわかっただろ？　昔、そして今、私は正真正銘……って現実逃避しようとするな、布団から出ろ」

すごすごと床に敷かれた布団の中に潜り込む蒼助の気持ちも千夜はわからなくもなかった。

誰だって、突然昨日まで女だった人間が朝起きたら男になっていれば驚くし、実は元は男だったなどと言われても鵜呑みにするのには無理がある。

「きっと、これはまだ夢の中なんだな。夢の中で寝るってのは妙な気分だが、次に目が覚めりゃこのおかしな夢も終わってるはずだ、多分」

「生憎、現実だ。今寝て目が覚めても、状況は何にも変わらないからとっとと観念して続きを聞け」

手元のチャーハンをスプーンでぐるぐる掻き回しながら千夜は問答無用で続行する。

「三ヶ月前……去年のクリスマスイブに私の身体は“異常”を起こした。肉体が男のそれから女の身体へ変わり出したんだ」

千夜は眼を閉じて、“初めてのあの瞬間”を瞼の裏に思い描く。

クリスマスイブの夜、日付が変わる午前0時にそれは起こった。

突如身体が焼け付くような熱さに襲われ、骨が溶けるような感覚の中に突き落とされた。

灼熱地獄にいるかのような熱さによる苦しみは意識を失うほど長く続いた。

そして、気が付いた時“異常事態”は既に身体に現れていた。

違和感に不安を抱き、洗面所の鏡と向き合った時、愕然として自失に陥った。

「最初の変化は次の日には元に戻っていた。二度目と三度目は二週間後、それから十二日、十日……と回数を重ねる毎に苦痛は軽減されていったが、変化が起こる間隔が短くなっていった。そして同時に女でいる時間が増え、男でいる時間が減った。そして、気が付け

ば……私の身体は女でいることが常になっていて、五日おきに一度だけ男に戻れるようになっていた」
「……転校の理由ってそれか？」
「……ああ」

“それだけ”ではなかったが、大半の理由がそれであるのは間違いではなかったので千夜は頷いた。
いつの間にか、布団から出ていた蒼助は無言で千夜を見つめて来る。
千夜は蒼助の眼からゆるりと視線を逸らした。
今の蒼助がどんな風に自分を見ているのか、知りたくなかった。
異物を見るような目を想像し、心が重く沈んでいくのを感じた。
もう“慣れた”はずだったのに、この男にそのような目で見られるのは何故か胸が抉られたように痛む。
しかし、何故か胸に蒼助の手が伸び、摩った。
まるで確かめるような手付きに千夜は暫しポカンとした。

「……堅ぇ……ああくそ、マジで男だ」
「……お前」

男になったり女になったりすることなど、程度の問題としか思っていない蒼助に、それに過剰な心配をしていた自分に千夜は何だか力が抜けた。
同時に、理由は解らないが内側に安堵が広がった。

「なぁ、何で突然そんなことになったんだ？　中国で呪泉郷に落ちたとか……お湯かけたら元に戻るとか……ないのか？」
「わかれば苦労しない。言っただろう、突然だったと。……それと、後半のお前の言っている事がさっぱりわからん」
「知らねぇなら聞き流せ、こっちの話だ」

蒼助が胸を触り続けていた手をようやく諦めたように離し、

「その状態ってよ……どれくらい続くんだ？」

「きっちり一日だ。今夜の０時にはまた女に戻って、次にこの身体になれるのはまた５日後だ」

僅か一日でまた分かれなければならない本来の男の身体を惜しむように千夜は掌で二の腕を撫でた。

憂いた表情がほとんど女である状態になってもまだ男である事に固執していることを明らかにしていた。

それが何故か蒼助の内を波立たせた。

「お前、やっぱり……元のちゃんとした男に戻りたいか？」

答えなど決まっているのは目に見えている問いかけ。

だが、蒼助は聞かずにはいられなかった。

「……正直のところは、な」

予想していたのにも拘らずぐらりと来た。

しかし、まだ続きがあった。

だけど、と、

「……もう、元には戻れない気がする。あの日以来、私の中で確実に“何か”が変わった……それまで無かった何かに。変化を遂げたモノはもう二度と元の形には戻らない。物が壊れて、例え直しても以前とは何処か違うように見えるように。間隔が五日になってから……もうそれ以上時間が増えたり減ったりすることはなくなった。この中途半端な状態が続いているということは……これが安定した

状態なんだ、今の私の……」

翳りを見せる笑みとその言葉は蒼助の心境を複雑な状況に追い込んだ。

千夜は今ほとんど女も同然。だが、僅かにまだ男の名残も残っている。

どちらにも傾かないその状態に蒼助は奇妙な苛立ちを覚えた。

……何の問題もねぇじゃねぇか、そのまま女になっちまえば俺は……。

苛立ちの中でふと出た思いに蒼助は自分を疑った。

今、自分は何を考えていた。

千夜が完全な女になってしまえば何だと言うんだ。

男だろうが、女だろうが、千夜が友人であることには変わりはないはずなのに。

「あっ！」

突然あがった千夜の叫びに蒼助は我に返り、叫びの根源を思わず見た。

「話し込んでいる間に炒飯が冷めてしまった……悪かったな、長話になって」

冷えてしまったそれをぱくぱくと口に押し込む千夜に気を抜きつつ、いつの間にか湯気と熱気が消えた炒めた飯に蒼助も取りかかった。

自分の中で渦巻く“ワケのわからない想い”はとりあえず無理矢理隅に押し込んだ。

◆　◆　◆

千夜のつくった炒飯は冷めていたが、なかなか美味かった。
少なくとも、コンビニで買って来る弁当よりは遙かに。
たまに家に押し掛けて自分の夕食などをつくるセフレはいたが、余計なお節介程度にしか感じていなかった。
だが、今は寧ろ嬉しくすらあり、米粒一つ残さず全て食べきった。
カチャン、とスプーンを皿の上に放り、

「ごっそさん……ところで、お前熱はもう下がったのか？」
「ああ。すっかりな」

皿を流しに持っていこうと膝を立てた千夜の戒めの施されていない長い髪がさらりと流れる。男とは思えないほどの艶の出た髪は若干湿っているように見えた。

「……お前、風呂入ったのか？」
「汗をかいたからシャワーだけな。勝手に借りた、すまない」
「いや、別に良いんだけどよ……」

流しに立つ千夜の背姿が何故か異様に目に入る。
腰より下まで伸びた髪は大分渇いたのかさらっとしているが風呂上り特有のしっとりした感じを残していた。
仕草のたびに髪が動くその様がとても心惹かれる。
こうして見ると千夜は男としてもかなり魅力的な存在なのだと同じ男としても認めざる得ない。無駄な脂肪や肉がなく、華奢なようで実は引き締まった筋肉を纏う体躯。中性的な美形の顔立ち。

……別に女っぽいってわけじゃねぇが……なんか、コイツ……。

男のくせに妙に色気がある。

色気といってもオカマがしなを作って無理矢理醸し出す気色悪い拒絶感を催させるものではない。

かと言って、女が出すそれとも違う。

なんと表現すべきなのか非常に頭を悩まさせるが、あえてストレートに最も捻りの無い言い方をすれば『独特』だ。

老若男女問わず惹き付ける不思議な魅力。

冷静になって考えてみれば、男である今の状態に限らず出会った時から千夜に感じていたことだった。

……“存在として”の魅力……って奴か。

ようやく導き出した答えに満足しかけ、蒼助はハッとする。

思い出したのは昨夜のこと。

欲望に負けて千夜に夜這いをかけたという。

……よく考えてみりゃ、あの時男だったんだよな……。

記憶が正しければ、思い立った時には既に午前0時だったはず。

蒼助にざっと衝撃が走る。

……つーことは、俺は……男に欲情しちまった変態ってことかぁぁぁぁぁぁぁぁっ!!??

受けた衝撃はあまりにも大きく、蒼助は床に手を付いて項垂れた。

ショックで真っ白になっていく蒼助を千夜は怪訝そうに見つつ、触れたら崩れてしまいそうな儚い様子に良心の囁きを聞き入れ放っ

ておくことにした。
流しに食器を片付け、やることがなくなり手持ち無沙汰になった千夜の視界にある物が入った。
「玖珂、得物を代えたのか？」
部屋の隅で壁に立てかけられた太刀は校舎で見た時のそれとは異なる品だった。
「ん？　……ああ、長年の相棒は折られちまったからな……仕方ねぇから《ＳＨＯＰ》で一番良さそうなの買ったんだ」
「ほぅ……」
蒼助の新しい太刀に興味が湧いたのか千夜はそこまで歩み寄り手に取る。
鞘を抜き、刀身を拝見するが、
「……これはダメだな。こんなものを店で売るとは……ぼったくりも良いところだ」
「なに？」
「ロクな打たれ方をしなかったな、この刀。もう、刃先は刃こぼれを始めている……これは保って魔性五体くらいでボッキリ折れるぞ」
何だか説得力のある解説と同じ刀を扱う人間の言う事と思って、先程のショックを振り払い問題の刀を観察する。
千夜の言う通りまだ一度しか使っていない太刀は既に刃こぼれを起こしていた。
「うわっ……マジかよ、くそっ……苦しい経済状況の中無理して買

ったっつーのに……」
「こうなってから言っても後の祭りだが……ちゃんとした刀が欲しいなら名匠に打ってもらうのが一番だぞ」
「んなこと……コネも何もねぇ高校生に出来るわけねぇだろ」
そこで千夜は訝しげに眉を顰め、首を傾げた。
「玖珂家と言えば剣神と名高き武道系統の一族……古くからの繋がりを持つ刀匠ならいくらでもいるはずだが……」
「ああ……俺は二、三年前あの家出てな……そういうとこ頼れねぇんだ」
「……そうか」
と、それだけ言って千夜は理由を聞こうとはしなかった。
自分自身にも似たような節があるからだった。
「……まぁ、あと五回くらいは保つんだろ？　賞金首とかちまちま狩って折れたらまた買うなりして食いつないでいくしか……って、おい！？」
蒼助は目の前で起こっている事象に声を荒げ、目を見張った。
千夜が持つ部分から刀が腐り、塵となっていくだから。
「え、あっ……しまった」
そう言い終わる頃には刀は既に原形を残さないほど崩れてしまっていた。
千夜の手の平に僅かに残った黒い塵を唖然と見つめ、蒼助は驚愕に震える声を絞り出した。

「な、何なんだよ……今のは」
「えっと……とりあえずすまん。これは私のせいだ……忘れてた……」
意味がわからない。
「私の刀……《夜叉姫》はちょっと特殊な武器でな、武器として非常に優れているんだが極度に嫉妬深いんだ。他の武器を手にすると種類問わず完膚なきまでに破壊してしまう」
「武器のクセに独占欲丸出しかよ……」
退魔師が扱う《霊装》には上位クラスとなると自分の意思を持つ物が存在する。
作製の際に差し出された生け贄の魂が宿ったなど憑喪神が生じたなどといろいろ曰くじみた説があるが、年月を重ねるとその意思は人格を持つようになるという。
もちろん、使用途中で壊れてしまうことなど星の数ほどあるからそこまで保ち堪えて上級入りする《霊装》はそうはないから、数はごく少数だ。
その数少ない貴重なそれらは強力になると引き換えに一つの面倒が生じる。
長年連れ添った亡き使い手に固執するパターンが数多く存在し、その相手と比べて持ち主を選り好みするため次代への継承が一筋縄では行かないのだ。
中には所有者に恋慕する例もあり、武器としての一生をその相手に捧げ、他の人間に使われる事を拒み二度と使えなくなるものをあるらしい。
千夜の場合、それに近いケースなのだろう。
「あーくそ……どーすんだよ、これじゃ金稼げねぇじゃねぇか……

…」

武器を無くしては退魔師として商売あがったりである。

よもや家計が火の車どころの話ではない。

「……そー恨めしそうに見るな。責任とってなんとかしてやるから」

「なんとかって……どーすんだよ」

「まぁ、とりあえず支度しろ。出かけるぞ」

「はぁっ？」

一体何処にいくのか、と問えば千夜は玄関へ向かうところを振り返り、

「責任とってやると言っただろ。《ＳＨＯＰ》なんかよりずっとイイところ紹介してやるよ」

そう言って千夜は自信ありげに笑った。

［弐拾壱］　彼女の秘密（後書き）

千夜の性別変換体質について。
改訂前にはなかった設定ですね。元々入れるか入れないか迷って一度は切ったネタでした。理由は必要性があまりなく、趣味臭いから。
しかし、いつのまにか改訂理由になっていました。
千夜を取り巻く謎の一つとして必要性が出来てしまったからです。
ここで生じるのは「千夜は元男なのか？」という謎。これについてはこの段階では完全にネタバレになるで一切語れません。
ただ一つポロリすると、本人すら本当の性別を知りません。本人は男だと思っていますが。
存在そのものがこの物語最大にして最重要なヒロイン・千夜。
その全てが明かされる日が果たして来るのだろうか……。
もしくは作者がそこまで書ける根性があるのか（笑）

【弐拾弐】　魔女の庭園（前書き）

カラダの内で、何かがうねる
寄せては返す、波のように

【弐拾弐】　魔女の庭園

渋谷の街はいつもと変わらない騒がしさだった。
この前まで連続猟奇殺人事件に触発された女子高生の姿はめっきり減っていたというのに、人が死んだ事などあっという間に忘れ去られ元通り若者達がたむろっていた。
結局はどいつもこいつも誰かが死んでも他人事としか思っておらず、自分には関係ないと割り切っている。
何て冷えた世の中だ。
そして、そう思う蒼助自身もその日常の裏を知りつつも、何事もなかったように過ぎ行く日常に身を委ねる人間だった。

「おい、玖珂」

声に物思いに耽っていた意識が呼び戻される。
隣を歩いているかと思っていた千夜がいつの間にか自分の前にいた。

「ぼけっとしてるな。逸れたらどうする」
「ああ……悪い。つーか、この年で迷子はねぇだろ……なぁ」
「そういうことじゃないんだが……まぁ、いい。あ、信号が青になったぞ」
「ああ」

ちょうどスクランブル交差点前に来ていた。
溜まっていた人波が一気に動き出し、その波に乗って蒼助も千夜と共に踏み出た。
行き違う人間と肩をぶつけそうな狭さを突き進みつつ向こう岸を目指していたが、

「――――――ん？」

ふと前に視線をやると前方から流れて来る人波の中に一人の少女見つけた。

かなり遠くにいる少女はほとんど顔が見えない。捉えている姿も少女と辛うじてわかる程度の大きさだ。

それなのに、蒼助は見た瞬間、

ほとんど明確な姿も見えない彼女の存在を、鮮明に脳裏に焼き付けていた。

少女は後ろから大勢の人間が来るのにも構わず、そこを動かず佇んでいる。

勢いに流されず、ぶつかる事もなく、ただそこにあるがままに立っていた。

そして、人々はそんな少女を気にする事もなくそれぞれ思う先に進んでいく。

まるでそこに少女が在る事に気付いていないかのように。

辺りの雑踏が消え、いつしか世界が二人だけになったような感覚に陥った。

釘付けになった目は少女から一時も離れようとしない。

ふと、少女がついに動きを見せた。

その動きはまるでビデオをスローモーションで見ているかのようなゆっくりとした動き。

まるで人波など彼女の行く手を阻むには役不足であるかのように、誰にぶつかる事もなく少女は蒼助との距離を縮めていく。

そして、少女の容貌も視覚が捉えられるようになる。

昼間の空間では彼女は異様なほど浮いていた。

日本人形のように艶めいた長い黒髪。衣装もまた凄い。レースも生地も全て黒のゴスロリ。瞳も夜空の闇を閉じ込めてしまったかのような混じり下の無い黒。

逆に夜ならばそのまま闇の中に溶け込んでしまいそうなほど、黒一色の存在。

それにも拘らず、彼女の隣を通り過ぎる人間は誰一人その存在に気付いていないように目にもくれず素通りしていく。

人の目に映らないということは、この世在らざる者なのだろうか、と思うがそれは違うともう一つの意見が否定する。

彼女は生者だ、と。
思考が働く中、少女との距離はもう一メートルもなかった。
視線が交わる。少女の漆黒の眼差しと。
ぞくり、とした。その黒い瞳の奥には深淵の谷底のような底知れなさがあった気がして。
少女が微笑む。柔らかく、けれどただ優しいだけではない何処か得体の知れない笑み。
目を離せない蒼助の隣を少女が横切る瞬間、

――――――ちゃんと、見つけてあげるのよ？

鈴を転がしたような声色がそれに反して酷く大人びているように聞こえた。
少女が通り過ぎた直後、無音だった周囲から喧噪が溢れ出す。
少女以外のものに色が付き、彼女以外も存在が再び出現した。
蒼助は元いた世界に戻って来た。

そして、蒼助が取り戻した世界に存在を許されない少女は、少し目を離した隙に何処にもいなくなってしまった。

まるで最初からそこに在(い)なかったように。

かなり長い間あの状態であったと思っていたのに、信号はまだ点滅していた。
人々は急ぎ足で横断歩道を渡り、道の真ん中で突っ立っている蒼

助を邪魔そうに睨んでいる。
夢から醒めたような気分に浸っていた蒼助は既に向こうへ渡ってそこから自分を呼んでいる千夜に気付き、信号機が再び赤になる直前で向こう岸に辿り着いた。
一息ついていたところで違和感を覚える。
「……終夜？」
側に千夜がいなかった。
同時に、先程少女が残していった言葉がやけに耳に付いた。

◆　◆　◆

言ってる側から蒼助と逸れてしまった。
付いて来ているだろうと思って、ずんずん進んでふと振り返るとそこには蒼助の姿はなかった。
「全く……何がこの年で迷子はない、だ。しっかり迷子になっているじゃないか」
腹立たしげに周囲を見回すが、目当ての人物の姿は一向に見当たらない。
千夜は交差点から大分離れたところに来ていた。
「……くそっ……何処に行ったんだ、玖珂の奴」
下手に動くと更にこじれるため、その場から動けずにいた。
向こうから見つけてくれるしかない、と思ったが、

「……いや、それはダメか」

何故なら、彼は自分を見つけられない。

見つかる筈がない。

まだ見慣れていない“男”の姿の自分を見つけられるワケがない。

――――あ、ありがとうございます……すみません、私ったら……見ず知らずの人に迷惑かけちゃって……。

いつぞやの言葉が脳裏に鮮明に甦り、苦い思いが千夜の胸を締め付けた。

そうだ、彼女だって気付かなかった。

“ずっと一緒にいた”にも拘らず、姿の変わった自分に彼女も気付かなかったのだから、蒼助にだって見つけられる筈がない。

ショーウインドーのガラスに映る雑踏の中で立ち尽くす自分の姿をじっと見つめた。

そこに映る“男の自分”に、もはや日常となった“女の自分”の残影を被せてみる。

似ているようで、異なる存在はやはり重なり合う事はない。

姿が変わるということは、その人間の中身まで変わる事に繋がるのだろうか。

「……変わってなど……いないのに」

呟きは雑踏の喧噪に掻き消された。

いつまでもこうしているわけにはいかなかった。蒼助と合流しなければならない。

確か蒼助のケータイのアドレスは既に入れていた筈だった。

ケータイで連絡を取り合いながら互いに探し合うしかないと思い、ズボンの左ポケットに手を突っ込んだ。
掴んだ、と思った時、二の腕を横から引っ張られた。
突然の出来事に振り向くとそこには、

「やっと、追いついたぞ！　はぁ～……一人でどんどん進んでいくなよ」

余程忙しく動いていたのか、肩で息をしながらショーウインドーに寄りかかる蒼助。
千夜は、一瞬何が起こったのか、そこに誰がいるのか認識出来なくなるほど驚愕した。
目を見開き、暫し自分の腕を掴んだまま息を整えている男をただ見つめた。
まだ若干荒い呼吸の中、蒼助が顔を上げた。

「ったく……ちょっと目ぇ離してるうちにいなくなっちまいやがって……って、何だよ」

食い入るように見つめて来る千夜の視線に怖じ気づいたように身を引く蒼助に千夜はぼつりと言葉を小さく漏らした。

「どうして……」
「あん？　何言ってんだお前……」

心底不思議そうにする蒼助。
千夜は自分の思いを無意識のうちに口走っていた事に気付き、慌てて誤摩化す。

「それはこっちの台詞だ。目を離しているうちにいなくなったのは

お前の方じゃないか」
「あ、あれはだな……」
「やかましい。もう、いいから……行くぞ」

話を強引に逸らし、強引に尚も言い訳を考える蒼助の手を掴み引っ張った。
身体の内側で溢れ返る歓喜を抑えながら。
偶然だ、と見つけてもらえたことを嬉しい喜ぶ自分に言い聞かせながら。

◆　◆　◆

「ここだ」

と、千夜がようやく辿り着いた目的地の前で立ち止まりそう言った。
だが、

「ここだ……ってお前」

千夜の言う“ここ”を凝視する。
目を閉じて手で擦る。
そして、開き再び目の前の建物を探るように見つめた。

しかし、何度確かめようとそれは繰り返そうと、

「喫茶店じゃねぇか……」

そう、案内されたのは何処からどの角度でどう見ても武器屋ではなく普通の喫茶店。

目の前に喫茶店――――――『ＷＩＴＣＨ　ＧＡＲＤＥＮ』は、一戸建ての一階を改装して造られたごく小さな店だった。店の前に置き看板が無ければそこに店があるという事に気付くのも難しい。それ程目立たない。

「……俺ら刀買いに来たんじゃ」

「そうだが」

「この店どう見ても喫茶店なんですが」

「ごちゃごちゃ言ってないで黙って付いて来い」

強引に説き伏せられ、店の前までやって来た。

ドアには営業中の札が掛けられている。

ドアのぶに手をかける。ドアが風鈴のような音と共に開かれた。

中に入っていく千夜の後に続いて店に踏み込み、開けた時と同じ音色を立てて閉まるドアを後ろに玄関に立った蒼助は店内を見回した。

別段広くもない一戸建ての一階を改装しただけの店だから狭苦しい狭苦しいイメージを持っていたのだが、思いの外狭さは感じなかった。実際には狭いのだろうが、カウンターやテーブルが狭さを感じさせないように上手く配置されているのだ。

テーブルも椅子も真新しく、壁も白を基調としているために清潔感があった。だが、決して無機質というわけでもなく、要所に飾られた花や観葉植物、アンティークの装飾品が優しげな雰囲気をもたらしていた。

清潔感があって、何処か古風で――――――女性的なレイアウトと感じた。

内装のセンスから経営者は女なのだろうか、と思考していると、

「――――いらっしゃませー」

パタン、とドアの閉まる音と共に掛けられた優しげな声。

視線をやった先――――カウンターの向こうにその声の主はいた。

二十代の前半に位置するであろう眼鏡をかけた女性。栗色の柔らかそうな髪はセミロングの長さを持ち後ろで一つに束ねられている。歪みの無い輪郭に鼻筋、優しげな目――――化粧っけはまるでないが、彼女の素材の良さにそんなものは不要だろう。腕まくりのされたワインレッドのワイシャツとブラウンのパンツにその上にエプロンをかけている。

生粋の美人なのだろうが、シンプルな装いで派手さは全くない。全体的に地味でパッとしないが、逆に美人にありがちな近寄り難さはなく、見る者をホッとさせる素朴な雰囲気があり、ナチュラルな美人である事を知らされる。

おまけにエプロン越しでもわかるプローポーションの良さだ。

蒼助は一目でイイ女だと認識した。

この間僅か一秒。

蒼助に色目で観察されていたとも知らずに女性は親しげに千夜と話していた。

「来るなら電話くらいくれればいいのに……」

「急で悪かった。まぁ、今日は日曜で“喫茶店は”休みだからいいだろう？　後ろの男が今、得物を失くして新しい武器を探していると言うから此処を紹介しに来たんだ」

後ろで千夜達のやりとりを眺めていた蒼助は話が自分に振られた事に気付く。
その時、女性と目が合った。
刹那、何の前触れも無く蒼助に“異変”が襲った。
両目が燃えるように熱くなった。
「――――っ……！」
溜まらず目を瞑り、瞼の上から眼球を押さえつけた。
痛かったのか、熱かったのか、わからなかったその出来事はたった一瞬で終わった。
強く閉じていた瞼をゆっくり開き、数回瞬きする。何も無い。
今のは何だったのか。ただ、わかるのはあの女性と目が合ったから今の事象が起こったという事。
「どうしたんだ？　目にゴミでも入ったのか？」
何が起こったかすらも知らない千夜は訝しげに蒼助を凝視した。
「何でも……ねぇ」
誤摩化しでも何でもなく、そう答えるしかなかった。
蒼助自身にもわからないのだから。
もう一度、女性を見た。

再び目が合うと、彼女はにこり、と微笑んだ。

「初めて見る顔だね、名前は？」

「……玖珂蒼助」

「初めまして、この店の店長の下崎三途（しもざきさんず）です」

カウンターの外に出て蒼助の前までやってきた三途と名乗った女性は握手を求めるように蒼助に手を差し伸べた。

先程起こった出来事からの三途への違和感を拭えない蒼助は一瞬それに応対しようか迷ったが、不審に見られない極短時間で思い直しそれに応える。

「……ああ、よろしく」

優しげな表情。柔らかな口調。繊細そうな性質。

どれもこれも自分とは異なるはずなのに、蒼助は不思議な事に共感に似たようなものを目の前の女性から感じていた。

彼女と自分は“何か”同じものを有している、と。

そう考えているうちにいつの間にか握る手に必要以上の力が込もっていたのか、三途が眉を僅かに眉を顰め苦笑いしていた。

「……っ……はは、さすが男の子。力が強いね……でも、ちょっと痛いかな？」

「…っと、悪ぃ」

女性らしい細い手が軋む程の力を入れていた手を蒼助は慌てて離

す。
解放された手をもう片方の手で摩る三途は全く気にしていない素振りで本題を振って来た。
「いいよ、男の子は元気な方が良いしね。……さて、それはともかく武器を買いに来たんだっけね。何をお求めかな？」
「あ、ああ……刀、だ。太刀が欲しいんだ」
「刀剣類か……」
考え込む三途をよそに蒼助は今だこの店に武器が置いてあるなど信じられないでいた。
いざ入ってみても内装も外と同様に喫茶店のそれで、何処を見ても武器や道具など見当たらない。
念を入れてもう一度、と周囲を隅々まで見回す蒼助。
その時、三途が動いた。
「まぁ、私が選ぶより自分で見て選んでもらった方がいいだろうから」
そう言って三途は右手を軽く掲げ、指を一つパチン、と鳴らした。
次の瞬間、蒼助は大きな“変化”をその眼で捉えた。
喫茶店内の風景にぐにゃり、と歪みが生じる。
その様子はまるで筆洗いの容器に入った水の中に色水が一滴垂らされ螺旋状の模様を描いたそれに似ていた。
やがて元の空間が原形がわからなくなるまで歪むと再び何かを形成するようにその歪みが修正されていく。
蒼助が息を呑んでただただその様子を見ていると歪みは徐々に消

えていった。
新たなる驚愕の種を蒼助に残して。

「なっ……！？」

思わず声を上げて蒼助は目を見開いた。
目の前に広がる棚に並べられた薬品、飾られる刀剣類、幾種類もの正体不明の道具など。
それはアンティークや小物、テーブルなどが飾る喫茶店の風景ではない。そんなものはもう見る影もない。
まさに蒼助のような退魔師が足を運ぶ『ＳＨＯＰ』の光景そのものだった。

「な、何だぁ今のはっ」

「空間術式の一種だよ。さっきまでの空間の中にこの本来の空間を隠していたといったところかな」
「術式って……あんた、もしかして《魔術師》って奴なのか？」
「ええ、そうだけど……」
「へぇ……これが《魔術》って奴なのか……凄ぇな」
「ちょっと違うけど……もしかして、君……魔術は初めて見たのかな？」
「ああ」

だが、話だけならクソ親父から聞いた事がある。
知り合いに魔術師がいた、とかつて酒の場でその話が出た時にその存在を初めて耳にした蒼助は興味が湧き詳しく聞いた。
その時、深く疑問に思ったのは魔術師の使う《魔術》と退魔師が使う《術》はどう違いがあるのかだった。
聞けば、退魔師が扱う《術》はその称号に現れているように《魔

≫を調伏する術。対して《魔術》とは人為的に奇跡・神秘を再現する術。降魔を目的として産み出された前者と異なり超常現象を具現させる事を目的として産み出された後者。それが魔術であり扱う者を魔術師というらしい。

あとはいろいろ難しい理論が組み込まれてより複雑な仕組みになっているとか何とかバカ親父が「うー」とか「あー」とか頭抱えて説明していたのを蒼助は思い出した。

目にする機会に恵まれてなかった蒼助はこうして初めて見たそれに正直に感動していた。

三途は少し照れくさそうに笑った。

「感激してくれて嬉しいよ。さぁ、どうぞ好きなのを選ぶと良い」

ああ、と頷き蒼助は周囲の品々を眺めた。

『ＳＨＯＰ』をよく利用する蒼助だったが、此処のものは見た事もない品が多く、品揃えがいいと感じた。子供の頃初めてデパートのオモチャ売り場に来たような気分になった。

いろいろ触ってみたいと思ったが、自分は刀を買いに来たという本来の目的を思い出した蒼助はそこを堪え刀剣類が収められたガラスケースの一角へと近づく。

「備前長船、虎鉄、菊一文字……正宗まで。どれもこれも名刀じゃねぇか」

数だけではない。質も他所の『ＳＨＯＰ』とは桁違いに良い。

とんだ穴場を見つけた。

だが、

「た、高ぇ……」

自分にだけ聞こえる小声で呟いた。
此処の品は良い。だが、欠点が一つある。
刀に限らず、物を買うにはどうしても避けられない障壁。蒼助に限らず人間誰もが幾度となくブチ当たる見えない壁。それを前にして人はもがき、諦めきれず、やるせなさに襲われるだろう。
蒼助が対峙している人類の最大の敵。

値段、と言う名の。

「いち、に、さん、し……ゼロが六つもある……値段まで桁違いか此処は」

質がいいものはそれ相応に値が張るのは常識なのだが、どうしようもなくゼロの数が憎らしい。

「ちくしょー……」
「やっぱり高いか？」

苦渋の表情を浮かべて値段札とにらめっこする蒼助の心境を察した千夜がそっと耳打ちした。
吐息が吹きかかり場違いにドキッとしつつも、文句を漏らす。

「高いも何も……金欠だっつったろ。大丈夫なのかよ、本当に……マジで持ち金余裕ないんだぞ？」
「……ああ、そうだったな。心配するな、なんとかなる」

二人でごにょごにょと話し込んでいる姿を怪しく思った三途は眉を顰めた。

「決まった？」
「ああ、三途。――――この中のどれかくれ」
ずっこけた。
「何コケてんだ、玖珂」
「おまっ……そりゃ無理があるだろ。何処の店に商品ただでくれてやる店主がいると……」
「いいよ、どれがいい？」
「……ここにいたか」
至極あっさり承諾した三途を蒼助は珍獣を見るような目で見た。
三途はあはは、と決まり悪そうに頬を指先で掻きながら苦笑を浮かべた。
「実は、この店に“こういう目的”で来るのは千夜だけなんだ。だから、品物はほとんど売れないわけでね……いつまでも埃に埋もれさせといちゃせっかくの名品も可愛そうだしねぇ……千夜の頼みでもあるし、一本くらいタダで持っていっても構わないよ」
まさに隠れた名店。だが、隠れ過ぎて客が来ないのはどうかと思う。
しかし、せっかくのチャンスを逃す気もない辺り蒼助もちゃっかりしていた。
「それで、結局どれにするんだ？」
「ん～？……そうだな」
端から順に眺め、後で払う事を考えて選ぶ。
そして、

「これにしようか」

蒼助は七本のうち右から二番目の刀を指差した。
どれどれ、と三途が歩み寄り選んだ商品を確認する。

「あれ、それ確かにその中じゃ一番安いけど……無銘だよ？いいの？」
「いいの。それとも、お宅は品には自信がないのか？」
「ふふ……口が達者だね。じゃぁ、それで決まりだね？」
「ああ、こいつがいい。惚れた」

断じて貧乏性で尻込みしたのではなく。

「……わかりました」

ガラスケースから指定の刀を取り出す。
そして、両手で持ったそれを蒼助の前に差し出した。

「お買い上げ誠に有り難うございます」

こうして蒼助は新たな得物と贔屓の店を手に入れた。

◆　◆　◆

「――――またのお越しをお待ちしております」

業務口調で三途は千夜達を見送った。
風鈴のような音と共にドアが閉まるのを見届けると、三途は再び指を鳴らした。
空間が歪み、裏事業であり本業である『ＳＨＯＰ』の姿から表向きの喫茶店へと姿を戻す。
同時に店の外に張っていた『《人よけの結界》』を解除する。

「ふぅ……」

一段落し、椅子の上に腰を下ろし背もたれに身を委ねた。
一息ついていた三途に声が掛かる。

「――――――三途」

足下から響く三途にとって馴染み深い声。
視線を下げると予想通りの人物がいた。
いや、この場合は人物という言い方はおかしいだろう。

予想通りの『動物』がいた。

「クロか。おかえり」
「……誰がクロだよ、僕の名前はブラック・スノーだろ。……君が付けたくせに」
「あはは、ごめんごめん。つい略しちゃうんだよねぇ～。いつ帰って来たの？」

『クロ』、もとい『ブラック・スノー』と言う名の“黒猫”は抱き上げられ膝の上に乗せられた。
いつもの定位置に置かれた黒猫は顔を前足で掻きながら主の質問に答えた。

「さっき帰った客が帰った時にだよ。丁度良くドアが開いてくれて手間が省けた」
「おや、気付かなかった」

嘘つき、とぶぅたれる猫にごめん、と謝り頭を撫でる。
いいこいいこ、と口ずさまれるのは気に喰わなかったが、愛でる手の心地よさに気を良くした猫はあっさり機嫌を直した。
ちょろい、とにやりと黒く笑ったのを猫は気付いただろうか。

「ところで、さっきどうかしたの？」
「さっきって？」
「千夜が連れて来たあの客と目が合った時の事。彼が目を押さえてる時、君の顔も僅かに歪んでた」
「歪んだとは酷い表現だね。私の顔が変になっちゃったみたいじゃない」
「戦闘中の君のアレって歪んでるって言わないの？　貞子も裸足で逃げる……ってああ！　で、出る　！さっき散歩中に喰ったインコ出そう！！　やめてー！」

逆さになって本格的に青ざめて来たところを胃酸にまみれた鳥を吐かれては困るので解放してやる。尻尾を離された猫は自由落下。ぐえ、と呻き声を上げて床に落ちた猫は恨めしそうに見上げて来る。

「い、今喉まで来てた。この鬼め！　鬼畜！」
「“半分は”似たようなもんだから否定はしないよ」

罵倒をさらりと受け流す飼い主を悔しげに睨みつつもこれ以上の反抗は無駄と知った猫は潔く白旗を上げて降伏した。

「で、結局のところどうなのさ」
「……うん、実はね。彼と“共鳴”したみたいなんだ」

その言葉で猫のゆらゆら揺れていた長い尻尾がぴたりと静止したのを三途は見た。

「共鳴って……まさかあの客」
「うん……きっとそうだよ」
「でも、おかしいよ。だって眼が」
「そうなんだけどね……でも、反応したよ」
「……まだ未確認の種類なのかな」
「さぁね、共鳴しただけじゃその能力はわからないから……それに、もう一つ気になる事があるんだ」

付け足された言葉に猫を首を傾げた。

「なぁに？　気になる事って」
「まだ確証に至っていないから言わない」
「ケチ」

むす、と拗ねる猫に苦笑。
椅子から降り、猫の前でしゃがんで頭をポンポンと手を乗せる。

「まぁまぁ、そう拗ねないで。その代わり君にお仕事してほしいんだ」
「仕事……？」
「そう、お仕事だよ」

その刹那、三途の顔から笑みが消える。

「彼を――――玖珂蒼助を監視しなさい。期限は今から当分の間」
「……ご褒美は？」
「鯵三匹、おまけに鰹節もつけよう」
「了解」

やけにシャキッとなった猫は意気揚々と外へ出て行った。
チリンチリン……、と鈴に似た音が響いてドアが閉じていくのを三途は見ていない。
視線は虚空に向けられ、脳裏には先程刀を買っていった少年の姿を思い浮かべていた。

「玖珂、蒼助……か」

久しぶりに聞く『玖珂』という姓。
それを冠する人間から感じた“気配”。
決して合うとは思えない扉と鍵を前にして三途は胸騒ぎを感じていた。

◆　◆　◆

上機嫌の帰り道、千夜が予想だにしない事を蒼助に告げた。

「さて、御代はどうやって払わすかな……」
「はっ？」

不吉で要領を得ない台詞でウキウキ気分が一気に頭から吹っ飛んだ。

「ちょっと待て……何の話だ、今のは」
「何を勘違いしているみたいだが、その刀を貰ったのは私だぞ」
「な、なにおう？」
「私と三途との会話を思い出してみろ」

混乱する頭で蒼助は店での千夜と三途の会話を巻き戻す。
くれ、と言った千夜。いいよ、と言った三途。
その会話の中に蒼助は入り込めていなかった。
冷静に考え直してみれば、千夜の言う通りの内容になる。
さっと青ざめる蒼助に千夜が更に追い討ちをかけた。

「言っておくが、ただではやらんぞ」

ええ、わかっておりますとも。
底意地悪げに笑う千夜に、とてもつもなく嫌な予感を感じた。

「刀壊した責任とるんじゃなかったのかよ……」
「あれは、店を紹介してやると言ったんだ。代金まで払うとは言っていないぞ？」

揚げ足をとってやろうと試みたが、無駄な足掻きに終わった。
戦況は完全に蒼助の劣勢となっていた。

「安心しろ、借金させるなんてことはしないから」
「だ、だよな……」
「そんなことよりもっとイイコトさせる」

いっそ、借金した方が良いかもしれない、と蒼助は心底思った。
一体どんな無理難題を吹っ掛けられるのだろうと腹を括っている

といつの間にかマンションの前まで戻って来ていた。
千夜は今だ、見返りの要求を思案していた。

「んだよ、まだ決まらないのかよ……マンション着いちまったぞ」
「何だ、そんなに私に借金したいのか」
「ごゆっくり考えて下さい」

しばらくして、千夜はふと思いついたようにぽつりと呟いた。

「……海」
「ん？」

声が小さ過ぎてはっきり聞き取れなかった蒼助は耳を傾けた。
今度はしっかり決めたように千夜は告げた。

「なんか急に海が見たくなった。決めた、海に連れてけ」

【弐拾弐】　魔女の庭園（後書き）

何だか次回、海に行く事になった二人。
どうなるやら。

［弐拾参］　狂おしいほどの（前書き）

体中の血が、一気に沸騰するような、
灼熱した感情の、坩堝。

［弐拾参］　狂おしいほどの

朝から少女は不機嫌だった。
何故なら、せっかくの学校の創立記念日で一日休みだというのに、最愛の姉は転校先で最近出来た友人と遊びに行くとのことだった。
しかも、学校をサボって。

「不公平だ……朱里がいくら言っても休んでくれなかったのに」
「まだむくれてるのか。いい加減機嫌を直してくれ」
「ずるいー、ずるいー」

ソファから恨めしげな視線を送りつけてくる妹に千夜は出かける前から疲れてきた。
行くなら、日曜の昨日でもよかったのだが、蒼助に猛反抗を喰らった。

『日曜出かけると高速は混んでんだよ。それに俺は単車に男を乗っける気はねぇっ！』

などとケチ臭いこと言って譲らないので、仕方なく平日の今日、女に戻ったこの状態で行くことになった。
無論、学校をサボるわけだが、一日サボったところで学校での『顔』なら病欠だと言っても何の支障も無いはずだ。
普段の在り方から見て蒼助の方はそんなわけには行かないとは思うが、本人もそれを承知していると思われるからこの際気にしない。

「朱里も行きたい……」
「それは昨日からダメだと言ってるだろう。頼むよ」
「がうー」

いつもは大抵のこちらの言い分は聞き入れてくれる姉が今日は譲ってくれないことに少女は違和感を感じた。
何か自分が居ては都合が悪い理由でもあるのだろうか。
少女の中の大人びた感がピカーンと光った。

「さては……姉さんったら朱里に内緒で新しい恋人作ったわねっ！？　あれで懲りないなんて……信じられない！」
「今や人生の殆んどを女として過ごすことを釘打ちされた身でどうやって彼女をつくるんだ……だが、その心配は無用だよ朱里。――――もう、誰ともそういう関係にはならないと決めたんだ」

少し哀しげに笑うその表情を見て少女の中の熱は一気に冷めた。
夢中になっている間知らずのうちに最愛の人の古傷を抉っていたことに遅ればせながら気付き、唇を噛む。
その決意の裏にどれだけの哀しい思いが詰まっているか、一番わかっていたのに。
千夜はそうして勢いを失くした少女の頭を撫でた。

「それじゃぁ、留守番出来るな？」
「イヤ」

少女は己の頭を撫でる手にがっちり両腕で縋りついた。
それはそれ、これはこれと主張する妹に千夜は再び肩を落とした。
ここのところ心配かけるようなことばかり起こしている為、強く出れないでいる最近だった。
そこへ二進（にっち）も三進（さっち）も行かない状態となってしまった千夜に地蔵菩

薩の救いの手が差し伸べられた。

「あらあら、朝から白熱する姉妹愛ね」

突然の第三者の声に辺りを見れば、たった今まで無人だったダイニングテーブルで用意した朝食に手をつける存在が二人。

新たな要因で頭痛が走る。

「お前ら……」

「おはよう。このベーコン美味しいわね、また腕を上げた？　あ、でも卵がちゃんと固まってないわ。私、半熟ってご飯で食べにくいから嫌いなのよね……」

「おはようございます姫様。私としては日本人たるもの朝は和食の方がよろしいと思うのですが……」

「やかましい。和食は洋食より低カロリーと思われがちだが、実際は和食の方が塩分過多で高カロリーなんだ……ってそんなことはどうでもいい、お前らいい加減不法侵入はやめろ玄関から入って来い」

能々と人の家の朝食にケチをつける無礼者二人を睨みつける。

しかし、今回ばかりは好都合かもしれないと考えを改め、放とうとした文句を押し込める。

「お前らそれ食ったらからには相応に働いてもらうからな。これから出かけるからお前ら一日朱里のお守してろ」

「む、しかしその格好は……今日は平日だったはずですが学校は……」

「急用が出来た。それじゃ頼んだぞ」

腕にがっちり掴まる少女をひっぺ剥がし玄関へ駆ける。

黒いゴスロリ少女の隣を通る際、

「楽しんでらっしゃい、“彼”とのデート」
「……」
何もかも知っていると語る笑みを浮べるゴスロリ少女に千夜は顔を不機嫌で塗ったくった。
「お前……また」
「さぁ、早く行かないとウルサイ上弦が止めに入るわよ」
「……帰って来たら覚えていろよ、黒蘭」
追求は見送りにし、千夜はすっきりしない気持ちのまま玄関へ向かった。
その様子を見て黒い少女は楽しげに微笑んだ。
威圧感で上弦の動きを制しながら。

◆　◆　◆

「……遅ぇ」
不機嫌を隠さず、気分を述べる蒼助は黒塗りのバイクの上に乗って既にマンションの下に来ていた。
見かけによらず時間に厳しいらしい。
「いやぁ、悪い悪い。思いのほか説得に手間取ってな」
説得は出来ていない。

だが、そこらへんは土産か今度の穴埋めでなんとかすることにしていた。
今は目の前の相手の機嫌を直す方が先決である。

「それにしてもお前も四月の海行きてぇなんて物好きなヤツだよな。泳げねぇ海の何処が楽しいんだか……」
「別に泳ぎたいわけじゃない。見たいだけだ」
「……ふぅん、まぁいいけどよ。乗れよ、ほれヘルメット」
「ん。ところで、バイクって初めて乗るんだがどう乗れば良いんだ？」
「前のヤツの腰に両手回してしっかり掴まるんだよ。まぁ、密着してりゃそれでいい」

ヘルメットを被り、言われたとおりにする。
蒼助の背中に当たり胸が潰れて少し変な気分だが、そこは走っている最中の周りの光景で気を紛らわすことにした。

「江ノ島でいいんだったっけか？」
「ああ。ただし、最初は水族館だ」

◆　◆　◆

水族館なんて何年ぶりだろうと、懐かしさと虚しさが蒼助に吹き曝した。
江ノ島に着いた蒼助と千夜が訪れたのは海ではなく江ノ島水族館。
海だけ見て帰るなんて面白く無いだろうという出発直前の千夜の要望があったから。

小学校の遠足以来の水族館に決してワクワクなど出来ないが、現在の主導権は千夜にあるため従うほか無い。
最初に立ち寄ったのは相模の海ゾーンというコーナーだった。
食卓の魚コーナーではよく見知った海鮮物に何故か寿司が食いたくなった。
最も長く留まった館内の水槽では最大規模となる相模湾大水槽では出来る限り自然のままの環境に近づけるように二つの造波装置を設置し、絶えず波を発生させるという凝った仕組みを成されていた。
岩場にぶつかる波の音。波の下で雄大に泳ぐ魚たち。
八千匹のイワシの大群が銀色に輝いて、うねり泳ぐ様は最大の見所であるだけになかなか迫力があり目を見張るものがあった。

「綺麗だな……本物の海の底から見た光景っていうのもこんな感じかな」

天井の高い水槽から見える水面は陸から見るものとも違った美しさがあった。
だが、それを楽しそうに見る千夜の方に目を奪われるのは何故なのか。
水槽からの淡い水色の光を浴びて染まる千夜を食い入るように見てしまう。

「生まれ変わったら鳥になって空を飛び回りたいと思っていたんだが、魚になって気ままに泳ぐっていうのもいいな」
「そうか？　俺はそれよりも南の方の海でふよふよしてるワカメの方がいいけど」
「ははっ……それもいいな」

他愛ない会話の中、時間が過ぎていく。
いつしか、視界いっぱいの魚の入った水槽と波音しかないこの空

間にいるのが退屈で仕方なかったこの時間が終わることが蒼助は惜しくなってきた。

つまらないはずだった。

こんな子供だましな場所は子供の頃の埋もれてしまいそうな思い出の一つに留めておくくらいにしかならないと思っていた。

なのに、

「玖珂、次はカクレクマノミを見に行くぞ。ニモだ、ニモ」

一生忘れない気がした。

他の思い出に決して埋もれず、大事に宝箱の中しまわれてふとした拍子に思い出すだろう。

千夜と訪れた、二人でいた時間を過ごした場所として。

どんな記憶よりもずっと輝き続けて。

他の人間と来たんじゃ、こうは思ったりしなかった。

千夜と来たから、こんなにも心が弾んでいる。

そう気付いた時、蒼助は一瞬垣間見えた答えから目を逸らした。

今は余計なことを考えたくなかった。

今はただ、この時間を全身で感じていたかった。

◆　◆　◆

「なかなか美味かったな」

「俺はしらすの乗ったピザなんて初めて見たけどな……」

「まあな」

昼食を軽く済ませてそろそろ出ようと出口に向かっていた。
その途中、通りかかったショップで千夜の足が止まった。

「ちょっと待て。土産が買いたいんだが」
「誰に買うんだよ」
「妹。出てくる時、結構渋い顔されたんでな……ご機嫌とりに何か買う。安心しろ、自分の金で買うから」

そう言うなり、千夜はショップ内に入って行った。
一人残された蒼助は、「女の買い物は時間がかかるからな……」など、「あ、でもアイツ元男だからそうでもないか」などと考えながら他の客の邪魔にならないようにとテキトーに端っこの商品棚を眺めていた。

それから少しして千夜は思ったより早く買い物を終えて戻ってきた。
右手には買ったものが入った水族館仕様の可愛らしい絵柄のビニール袋が握られていた。
普通の女のように余計なものまで買わない辺りが、元・男の気質が影響しているのかもしれない。

「何買ったんだ？」
「腹を押すとキューと鳴くイルカのイルタンとイルカの取っ手付きのクランチチョコ缶。これだけ買えば充分だ」

妹の好みは熟知しているのか、千夜は満足げに土産を上げて見せた。

「待たせて悪かったな、さて……そろそろ出」

再び進行を再会しようする千夜の前に“ある物”を差し出す。

「……何だ、それ？」

目の前に差し出されたイルカのキーホルダーに千夜は目を丸くしている。

痒い気持ちが顔に出ないように気をつけながら蒼助は仏頂面で告げた。

「やるよ。お前、自分の土産は買ってねぇだろ」

「……くれるのか？」

「こんなもん自分のために買うかよ……」

千夜は蒼助の手の上のキーホルダーをじっと見つめた。

よく考えてみれば今は女でも心はまだ男。こんなものを貰って嬉しいはずもなければ、欲しくも無いのでは。

ハズしたか、と蒼助は冷や汗をかいた。

が、ふと伸びた手が蒼助の手の平から僅かな重みを攫う。

「……ありがとう」

イルカを指に引っかけて千夜は笑った。

その笑顔は、蒼助のフィルターがかった視界のせいかもしれないが。

確かに嬉しそうに見えた。

そう思うと何故か胸が熱くなった。

◆　◆　◆

大きな寄り道をしてようやく当初の目的地に到着した。
朝の九時に出発したのに、もう二時くらいにはなっていた。
水族館で聞いた波音とは比べ物にならない壮大な波音と潮の匂いが湘南海岸公園で止まった蒼助と千夜を迎えた。
関東地方の海など何処行っても汚いと思っていたが、去年の夏の終わりに掃除でもされたのか綺麗になっていた。

「にしても……春になっても結構肌寒いな、海って」
「水はもっと冷たいだろうな……泳ぎに来たわけじゃないから一向に構わないが。あ、ここらで座ろう」

ボードウォークまで歩いてきて、段に腰を下ろした。

「晴れてて良かった。これで曇ってたら海なんか見ても面白くなかったろうに」

海など夏来て泳ぐくらいの場所としか思っていなかった蒼助は、晴れてても見て面白いのかと疑問を湧かせた。
水面が太陽の光でキラキラして目がチカチカする。

「なぁ、何で水面ってあんな風に光るんだ？」
「太陽の光が水面で反射しているんだ。鏡で光が反射するみたいに」
「よく知ってるなそんなこと……お前、化学とか得意？」
「昔、ここに来た時に私がある人に同じ質問して教えてもらったんだ」

誰に、と自然と芽生える疑問。

しかし、何の権利があってそれを問い出すことが出来ようか。
喉から飛び出ようとするそれを無理矢理飲み込み、何とか堪えた。

「なぁ、話の話題にといろいろ考えてみたがあんまり長続きしそうなのが出てこない」
「……で？」
「少し不躾な質問をするが構わないか？」
「言ってもらえなきゃわかんねぇよ、ンなこと」

そうか、と千夜は一息つき、

「……お前はどうして退魔師になろうなんて思った？」

ズバッと切り出されたその問いは確かに不躾な類に入る質問だった。

「お前な……まぁいい、何でそんなこと聞くんだ」
「将来の選択としてはあまり適切な道ではないと思ってな……」

散々言われた台詞が出てきたことに蒼助は少々落胆する。
この女は万人とは違うと期待していただけに。
いつものように適当にはぐらかそうかと思った。
しかし、何故か今に限って蒼助はそうはせず、

「……お前は何だと思う？」
「最初に考えつくのは周囲を見返してやりたくて家を継ぐ為、とかかな。違うと思うが」
「何でそう思うんだよ」
「お前はそんなみみっちぃことに拘る奴じゃないよ」

言い切るようで、何処か試すようなその言葉が蒼助の心を動かした。

「正解だぜ、終夜。別に家を継ぎたくて退魔師になったわけじゃねぇよ。そもそも家とかの為に俺の人生使ってやる気なんか更々ねぇしな。ま、見返してやりたかったってのはあながち外れちゃいねぇよ」

ほぉ、と千夜が興味深そうにくっきりした眉を動かした。

「見返してやりたかったんだ、お袋を」

「母親を？　こう来るとこの場合父親じゃないか、普通」

「ウチは親父よりお袋の方が強いんだよ、冗談抜きで。考えてみればとんでもねぇ話だよな、剣神の一族を束ねる当主より強いってのは」

「尻に敷かれるとかの次元じゃなくてか？」

「ああ、あの女は剣神もを負かした超一流の剣士だったんだ。そんで、俺はそのお袋を師匠に子供時代は散々鍛え扱かれた。それはもう、下手すりゃ軍隊の訓練よりもキツかったかもしれねぇ。谷底に子供蹴り落とすライオンも真っ青だろうよ」

「……顔、引きつってるぞ」

それは過去の母の行いを思い出してきたからだろう。

「だぁっ、今思い出しても腹が立つ……性格悪くて、口も悪くて、ドSで、骨の髄まで俺様で……アレは人間の皮被った悪鬼だ、ちくしょう！」

「……で、お前はその悪鬼の申し子か」

「……とにかく、口先だけなら良かったもののマジで強ぇから尚更ムカついてよ……ガキの頃いつか見返してやりたくて岩に齧り付く

勢いで修行してたんだ。周りが何言おうと、お袋と同じ舞台に立った上で負かしてやりたかった。それだけが俺の夢で、目標だったんだ……昔はな」

昔は？と千夜の表情が訝しむ。

「まさか、諦めてしまったのか？」

「諦めざるしかないだろ、目標に死なれちまったら……」

千夜の表情が凍り付く。

そして、伏せるように視線を下げるを見て蒼助は続けた。

「お袋死んだ後は、もうむちゃくちゃだった。最後まで勝手なことして俺の夢奪ったお袋に対するやり場のない怒りをそこら中にぶつけて、喧嘩三昧。周りなんか全然見えてなかった。ただ、もうどうしたらいいかわからなくなっちまって……」

「だが、今は……」

「まぁ、一応この通りあの頃よりいくらかはマシになったみてぇだけどな。……だけど、何の為に闘うのか、何の為に強くなりたいのかわからなくなっちまってよ。ちょっとしかキッカケ貰って《降魔庁》に所属してみたけど、やっぱり新しい理由は見つからなかった。元々俺は世界の為とか、人の為にとか言われて熱くなれる熱血系じゃねぇからな、やっぱり具体的な理由が欲しいんだわ……もっと、一つのはっきりとした理由がさ……」

そこで会話にコンマを打ち、蒼助は目の前の波音を奏でる海を見た。

輝く水面が眩しく、目を細める。

ふと思う、何故こんなところまでぺらぺら喋ってしまったのだろうと。

理由を考えても、深いそれは見つからず、ただ話してしまってもいいと思ったとしか出てこない。
少なくともわかるのは、相手が千夜だったからということ。

……だんだんシャレにならなくなってきたな、俺……。

朧げだった“それ”は今ではしっかり輪郭を持ち始めている。
あの夜以来、無視できなくなってきていた。

「玖珂」
「……あ？　何だ、突然」

沈黙を破った千夜の声に蒼助は我に返った。

「さっき、闘う理由が欲しいと言っていたが……あまり焦る必要はないと思うぞ」
「別に、焦ってなんか……」
「そうか？　私には、何でも良いからこの業界に居続ける理由が欲しくてしょうがないように聞こえたが」
「あのなぁ……」

確かに中途半端に踏み込んでしまって今更抜け出せないという部分は否定は出来ない。
今になって日常で普通に暮らすというのはかなり無理な話だった。
しかし、何だか悔しい気分なので蒼助は逆に訊ねた。

「ふんっ……そういうお前は何で退魔師になろうと思ったんだよ」
「なろうなんて思わなかった。逃げ道も他の道もなく、それ一つしかなかったからなるしかなかった、それだけだ」

蒼助はそのあまりにも感情の籠もっていない言葉に目を丸くした。

「玖珂、お前は退魔師としての才に恵まれた人間を羨ましく思うか？」

違うかと聞かれればそんなことはない。

当初氷室が気に食わない理由はそこにあったから、答えはイエスだろう。

「正直、な」

「そうか……だが、逆にそういう連中の中にはお前のように周囲の期待と強要という縛鎖から逃れているお前のようなヤツを羨ましがる人間だっているんだよ」

まさか、と言いかけた蒼助に千夜は微かに笑う。

「人が皆同じ夢を見て、同じ望みを抱くとは限らない。人の数だけ想いがあるように。あえて言うなら、私はお前が羨ましいよ玖珂」

「なんだよ、突然」

「お前には今のところ日常と非日常、どっちを選ぶことも出来る。その選択肢があるところがが私には酷く魅力的だ。私には、選択肢がないだけにな」

それはまるで弱音を吐いているようだった。

あの、終夜千夜という人間が。

蒼助は言葉を失って、波の音も周囲の声も忘れてただ彼女の言葉にだけに耳を傾けた。

「戦闘センス、戦う術、退魔師の才……今持っている非日常のモノを全て捨ててそちら側へ行けるなら、きっと迷わず飛び込む。きっと……な」

だが、と遠くを見るような眼差しがそこできつく鋭さを持った。

「生憎無いもの強請りというヤツだ。一度この世界に踏み込めば、簡単には抜け出せない……底なし沼に足を取られたように、足掻けば足掻くほど深く沈んでいく」

まただ。

あの夜見えた“壁”が千夜と自分の間に立ちはだかる。

まるで世界を分ける境界線のように。

「夢は現実に成り得ないように、私のこの無謀な望みも……」

もうダメだ。

辛抱強く耐えていた蒼助の中の何かが切れて、勢い良く立ち上がった。

目を丸くする千夜に、蒼助は無理矢理表情を作り、

「お前、ここ来た事あんだろ？　ダベんのはこれくらいにしていろいろ面白そうなトコ案内してくれよ」

「あ、ああ……そうだな。いつまでも海ばかり見ているのも時間が勿体無いか」

“壁”はまたいつの間にか消えていた。

そして、蒼助は自分が千夜と世界を共有している感覚を取り戻した気がした。

潮風が蒼助の前で千夜の髪を緩やかに弄んだ。

◆　◆　◆

日が暮れ始めた頃に、蒼助と千夜は江ノ島から離れた。
東京に着いた時には完全に日が落ちてしまった。
マンション前で来ると、蒼助は愛車を止めた。

「着いたぜ」
「ああ、ありがとう」

千夜は返事の後、蒼助の腰に巻きつけていた腕を解いた。
走行中絶えずあった緩い締め付けと温もりがなくなったのが、惜しく感じた。
ヘルメットを脱ぎ、千夜はバイクから降りた。

「初めて乗ったが、気持ちよかったぞ。風を切って走るのってあんなに楽しいんだな」
「だろ？　また機会があったら乗っけてやるよ」
「良いのか？　一人で走るのが好きなんだろう？」
「背中に胸押し付けられて走るのもなかなか悪くなかったから、たまには良いぜ」

意地悪く笑ってみせると、千夜は渇いた笑みを浮かべた。

「元男の胸が気持ちいいのか。とんだ変態だな、玖珂蒼助よ」
「……そう来たか、この野郎」

「残念だが、今は女だから野郎じゃない。じゃあな」

ヘルメット押し付け、千夜は背を向けてマンションへ歩き出した。

その背中が見えなくなるまで、と見届けようとしていた蒼助に対し、千夜が突然振り返った。

「なんだよ、何か忘れたか？」

「いや、昼間言い忘れたことがあったのを忘れていた」

くるり、と全身をこちらに向けて、

「闘う理由なら、きっと見つかる。お前なら、いつか誰かに誇れる理由が見つかるはずだ。だから、諦めるなよ……玖珂」

極上の微笑が月明かりに照らされて、蒼助の視界に映り込んだ。

「おやすみ、また明日学校でな。二日間、いろいろありがとう」

今度こそ千夜は振り向かず、マンションの中へと入って行った。

蒼助はしばらく、その場で金縛りになったかのように動けなかった。

◆　◆　◆

がちゃり、と鍵を開けると電気が消えた暗い部屋が蒼助を迎えた。

そのまま片手にヘルメットを抱え、そのまま靴を脱ぎ捨て、玄関に上がる。

薄暗く短い廊下を歩き、蒼助はダイニングが一緒になったリビングへ行き、電気をつけた。
見慣れ、朝も見たはずの家の中は何故か寂しく、何か物足りない。
蒼助はGジャンを床に脱ぎ捨て、そのままベッドに背中から倒れこんだ。
手に持ったままのヘルメットを蒼助は掲げ、眺めた。
ついさっきまで千夜が被っていたものだが、温もりも痕跡もとっくに消えているはずだったが何故か手放す気にはなれない。
ふと、気付く。このベッドも一昨日の夜には千夜が寝ていたのだと。
そう思った途端、身体が熱くなった。

「……っくそ、マジかよ」

身体が欲情していた。
一昨日の夜にここで寝ていた千夜に残像に。
蒼助はそんな自分に苛立ちが髪を乱暴に掻き毟った。

「そーとーな悪趣味だぞ、俺……何だって、あんな面倒でおっかない女なんかに……」

目を閉じれば、駆け巡る出会ってからの千夜の表情の一つ一つ。
やっとわかった。
初めて出会った後、その後も千夜の顔が忘れられなかった理由が。
神崎の腕に抱かれていることに、感情が異常なまでに逆立った理由が。
もう限界だ。

今日のが留めだった。
これ以上誤魔化すことなど、目を逸らし続けることなど出来ない。

「……かずや」

狂おしいほどのこの想いを。
もう自分から隠し通すことなど出来なかった。

［弐拾参］　狂おしいほどの（後書き）

主人公、恋の自覚。
あっはっは（渇いた笑い）
つーか、ベッドに欲情ってお前……。

［弐拾四］　先に進む人（前書き）

踏み出す一歩で何かが変わる
自分か
世界か
いずれにせよ今を捨てて先へ進め

［弐拾四］　先に進む人

「なぁ、お前初めて男を好きになった時ってどんな感じだった？」

行為の後の気怠げな気分に浸っていた時、相手は突然そんなことを聞いてきた。

女の思考をとろんとさせる靄が一気に吹き飛んだ。

「なぁに？　突然」

「いいから答えろよ。どんな気持ちになった？」

いつになく真剣に聞いてくる相手の様子に何かおかしいと思いつつも、そんな様子がとても珍しくてこーゆー時は本人の気持ちに応えてあげなくてはと思い、背を向けていた体勢からごろんと質問者――――蒼助へ向き合った。

「そーねー……とにかく舞い上がったわ。恋に恋して、ようやく待ちわびた運命の人って思いこんじゃった。女の子ってこーゆー時、結婚して子供何人まで夢走らせちゃうのよねぇ～」

「……俺の童貞奪った女にもそういう純情な時代があったとはな」

「なんか言った？」

にっこり笑って訊ねると蒼助はナンデモナイデスと発言を無かったことにした。

少しムカついたから、先程の質問の真意を探ってやろうと思い、

「一体、急にどーしたの～？　お姉さん、まさか若の口から恋に関する質問が聞けるとは思わなかったわ～。も・し・か・し・て……やっと好きなコでも出来たの？」

もちろん、そんなわけがない。
何しろ、この男の女嫌いを発動させた母親に次いで心が動かない状態で性欲だけを発情させて恋愛不感症にさせたのは自分だった。
おかげで蒼助は発展途上の異性に対する気持ちを置いて、身体だけ大人になってしまった。時の流れと出逢いに任せて無責任に見守っているのが現状。

「……」

返事が無い。
ん？とその反応に違和感を覚えた。
おかしい、いつもならここで「ああ？　くだらねぇこと言ってんじゃねぇよ」とか何とかはぐらかすはずなのに何も返ってこない。
ちょっとした動揺の後、女の勘が閃く。

「え……まさか、ホント？」
「……だったら、何だよ。文句あるか」

バツが悪そうに顔を顰めて、開き直った。
確信する。これはマジだ。

「ええっ、誰々！？　どんなコ？　詳細教えなさい、まずは顔！何はともわれまずは顔よ！上中下、どれ？」

自分が面食いになった原因は親父の血だけではなく間違いなくこの女に一因があると蒼助は改めて思った。

「……特上」
「う～ん……惚れた分の欲目を差し引いても若がそこまで評価する

ならそこは合格ライン軽く越えてるわね」
「……お前、絶対面白がってるだろ」
「他人の恋愛沙汰なんてそういうものだもの」

けろりと言ってのける女に蒼助は、もういっぺん昇天させたろかと思いながら身体を起こした。

「で、どんな経緯で知り合ったの？　そこが一番気になるー」
「別に、四月の頭に転校してきたクラスメイト」
「捻り無いわねー……何か、こう……特別なイベントとか話すキッカケってなかったの？」
「イベントって……まぁ、あえて言うなら同級生の悪ぶれた連中に目ぇ付けられて、放課後輪姦されそうになってたのを俺が割り込んだっていうのが」

最も、半殺しにしたのは襲われた当本人だったが。
本当の出会いもその時の自分の立場などを考えると話したくはないので伏せておく。

「きゃーっ、青春漫画の王道って感じね！　悪ぶってるけど根は良い不良と美少女転校生って組み合わせはまさにだわっ！」

一人で興奮して騒いでいる女を傍目にやっぱり言うんじゃなかったと溜息の蒼助。
盛り上がって女はその様子に不満げに唇を尖らせた。

「もう、人がテンション上げてるのに何溜息ついてんのよ」
「相談相手間違えたと後悔のど真ん中にいんだ、ほっとけ」
「なんですって～……いきなり人を夜の九時にラブホテルに呼び出して六ラウンドも相手させておいてその言い様はないんじゃないの

お？」

後ろから抱き付いて首を絞められた蒼助は相手が半分本気なのだと悟る。

この女、見かけはおっとりしているが武術はかなり強い。

玖珂迦織（くがかおる）。蒼助の従姉であり、玖珂の次期当主として最も近いと噂されている強者だった。

その彼女が本気になれば、体格では上回る男の蒼助も首を圧し折られかねない。

「さぁ、元手として洗いざらいその事に関してゲロしてもらうわよ、若ー」

「わ、わかったから……放せ、マジで」

目の前が白くなり始めたところでようやく締め付けから開放された。

全く、洒落にならない。

「で、何処まで行ってるの？　最初の質問からすると……まぁだ手は出してないと思うけど」

「いや……昨日はちょっと危なかった」

「え……」

しまった、と思った時には既に滑った後だった。

「もう、お泊り!?　寝込み!?　ナニ先走っちゃってるの、ダメじゃない、本当の恋愛は焦らず急かさずが大事なのにっ」

「危なかったっつってんだろっ！　……ちゃんと踏みとどまった」

寧ろ、あのまま続けていたら別の意味で一線を越えてしまってい

ただろう。

「どんな経緯でそうなったかは聞かないでおくけど……ダメよ、勢いづいちゃ。そーゆーのはお互いの気持ちが噛み合わないうちにがっついちゃうと拗れる一方なんだから。で、自覚したのはいつ？」

「……今日、家に帰った直後」

その返答に迦織は一瞬言葉を失う。

そして呆れたように、

「若……自覚もしてないのに夜這いしちゃダメよ、本当。男以前に人間として」

「真顔で言うな。情けなくなるだろがっ」

「でも、恋の自覚直後にどーして私としようなんて思ったの？」

「そ、それは……」

己の妄想に欲情して我慢できなくなったからなどとは言えない。言いたくない。

「……我慢できなくなっちゃったから、とか？」

口に出さなくても空気から察する辺りさすがだった。

「ダメねぇ、若ったら……そんな調子じゃ先が思いやらちゃうじゃない」

「……わかんねぇよ、これ以上先なんてあるかどうかわかんねぇし」

「あれ、珍しく弱気ね……どうかしたの？」

すっかり女の扱いはうまくなったと思うほどの蒼助の頼りない発

言に迦織は首を傾げた。

「……いろいろ面倒なこと抱え込んでいる女でな……あと、男とかには興味ねぇみたいだし」

中身は男なのだから当然のことだが、そんなこと言うわけにも行かずかなり控えめに表現した。

そう、見かけと身体は女になっても千夜はまだ男としての意識が強い。

元の性別への未練もまだある中、男に好意を持たれるなど正直気色悪いだろう。

今日の江ノ島でのことだって相手を意識していたのは蒼助だけだ。千夜自身は友人と遊びに来ただけなのだから何とも感じなかっただろう。気落ちせずにはいられなかった。

深く考えれば考えるほど障害となる壁は高く感じる一方だ。

そして、望みは比例するかのように薄れていく。

「それって全然男として見られてないってこと?ちょっと前までの若みたいにまだオコサマなのかしら」

だったらまだマシだったたろう。

現実の問題に比べたら寧ろ容易いくらいだ。

恋を知らないゼロの状態なら、一から教えればいいだけのことだから。

しかし、と昼間の千夜の何気ない言葉を蒼助は思い出した。

江ノ島はかつても誰かと来たことがあったらしい。

あの時それを聞いて最初に考えたのはやはり男だった時にいたかもしれない恋人だ。もしくはそれに近い感情を抱いていた存在。

それが事実だとすれば、既に千夜は男として恋愛感情を自覚している。

つまり恋愛対象は女に絞られる。そこが最も厄介な点だった。

「……アイツは、ただ……俺をダチとして信頼してくれてだけなんだ。それに対して俺は一方的に女として好きになった、それだけなんだよ」

今、千夜と蒼助は非常に微妙な関係だった。

蒼助が本心を表に出さず、表面上友人と装っていればこの関係は壊れない。

だが、

「全部俺次第なんだよな……俺が一言でも好きだとか言えばこの関係はぶっ壊れる。二度と戻れねぇ……そこからアイツとの距離が開き始めて、さっきまで手を伸ばせば届くところにいたのが二度と触れなくなる。情けねぇ話だけど……俺はそうなるのが怖い……」

今、最も恐れていること。

それは千夜との関係が崩れることだ。

「そんなことになるくらいなら……この歯痒い状態が続くとしても、俺は今みたいにアイツの側に居れるなら……何も言わずこのまま素知らぬ顔でずっとダチとしてやっていこうと……」

言いかけたところで、ベシっと頬を弾くような衝撃が蒼助を襲った。

夢から覚めたように目を丸くして子供を叱る母親みたいな顔をしている迦織をまじまじと見た。

「わーか。らしくないわね、そんな女々しいこと言って。あーあ、

せっかく若が恋に目覚めたと思ったのにてんで期待外れ……簡単に割り切れちゃうような程度だったなんて……」
「あのな……真剣だからこんなに悩んでいるんだろが」
「甘い。真剣だからこそ、困難な道に進むのよ。ホントの恋ってものは」
ズビシ！と擬音が付きそうなくらい勢い良く蒼助の鼻先に迦織は指先を突きつける。
「さっき面倒ごとがどうとか言っていたけど、男なら好きなコの全部をひっくるめて抱きとめちゃいなさい。それが出来ないヤツは、恋なんかする資格ないのよ」
「……」
返す言葉を失くす蒼助に更なる言葉が降りかかる。
「手強いなら相手に不足なしじゃない。恋っていうのは一種の戦いなのよ、挑んで、気を引いて、振り向かせて。セフレつくるのとはワケが違うんだからね」
「う……」
痛いところを突かれた。
しかし、不意に今まで叱るようにキリリと眉を上げていた迦織の表情が柔らかくなる。
「ねぇ、若……焦る必要ないのよ。今は距離が遠くても、いっぱいいっぱい時間をかけて近づけばいいのよ。だって、若とそのコにはまだまだ時間なんて腐るほどあるじゃない」
「迦織……」

身を乗り出し、蒼助の頭を胸に埋めるように抱き込んだ。

「がんばれ、若。お姉さん、応援するから……好きなんでしょ、そのコのこと」

「……おう」

人肌の温もりの中、ほんの少しだけ人選を間違えたという考えを撤回しようかと蒼助は思った。

その矢先、

「よしっ。ウマくいったら、この迦織さんに紹介してね」

「断る」

「な、何で～？」

簡単な理由だ。

それは危険だと本能が警告するから。

◆　◆　◆

人工のエレキテルの光が点る看板の上で、盗み聞いていた会話にポツリと漏らす。

独り言のように、囁くように。

誰に聞き留められる事もない言の葉を。

「無理よ」

夜風が少女の周囲の闇に溶け込みそうな黒髪を弄ぶ。

「時間なんて……貴方たちの恋には、ないわ……」

まるで未来を見透かすような調子で一人心地に呟かれた言葉は、風が止むと同時に少女と共にそこから消えた。

◆　◆　◆

翌日、ばったりという表現がこれ以上なく当てハマる顔の合わせ方で本日最初の千夜との鉢合わせをした。

廊下の曲がり角でのことだった。

「……玖珂か、おは」

本日最初に聞く第一声を全て聞き終えることもなく、蒼助は朝から全力で来た道を逆走した。

一人残された千夜は、その唐突な行動に目を瞬かせるばかりだった。

◆　◆　◆

昼休みになると、蒼助は昼飯のことすら二の次にして真っ先に屋上へ向かった。

ばっ、ばっ、と左右前後を見回し無人であることを確認すると、蒼助は学ランの胸の裏ポケットに入れてある携帯電話を取り出した。

ある人物に繋がる番号を押した。

トルルル、と少しの間を置いて、かけた相手へと繋がった。

『はい、もしもし玖珂迦織です』
「迦織！エラいことになったっ」

普段誘い以外じゃ滅多に自分からかけて来ない蒼助からの突然の電話に迦織は少なからず驚いた。しかも昨日の今日でこれだ。
只ならない様子に迦織は電話の向こうで真剣に耳を傾ける。

『一体どうしたの？』
「アイツの顔がまともにみれなくなっちまった！　……って、どうした？」

繋がった先で聞こえた何かがひっくり返る騒音が蒼助の耳に届いた。
しかし、すぐに返事は返ってきた。

『あー……なんでもないのよ……これだから初恋少年って何処までもお決まりだけど楽しいのよね、ホント』
「何一人で納得してやがんだよ。ちくしょー……今日、五回鉢合わせして五回とも逃げちまった。こんなん毎日続くんじゃヤベェよ、くそ……」

好意を自覚すると相手を妙に意識してしまい、それ以前までの折り合いが出来なくなる良くあるパターンである。
しかし、蒼助がそんなこと知るわけが無い。
理性よりも本能で動く気質のせいで、逃げたのも意識した行動の本能的な表れだったのだろうと迦織は蒼助の心理状態を分析した。

『よくあることだけど……目の前にして即逃げ出すなんてことするのは、現実じゃ若ぐらいよね。全く……本能で生きて動く人は違う

わ』

「喧嘩売ってんのかてめぇは。んなこたぁ、どうだっていいんだ……何かいいアドバイスくれよ……頼むぜ」

『うーん……これは本人の慣れ次第だからどうにもならないんだけど……そうね、じゃぁ暫く自分の心に整理を付けて落ち着くまでは顔を一切合わせないっていうのはどう？』

「どうって……解決になるのかよ、それ」

『少なくとも敵前逃亡続けるよりはマシだと思うけど……』

う、と説得力のある返事に蒼助は言葉を詰まらせた。

セックスはともかく、恋愛に関しては初心者の蒼助より遙かに上手である人間の言う事なのだから一理あるだろう。

『まぁ、年長者の助言は素直に聞き入れなさい。迦織お姉さんのワンポイントアドバイスは以上、じゃね』

あっさり切られた携帯電話を元の場所にしまい、その場に一人立ち尽くし一つ溜息。

「こんなんでこれから先上手く行くのかよ……」

「何が上手く行くって？」

「――――うぉっ！？」

背後から脈絡無しに現れた声に蒼助は仰け反って奇声をあげた。

慌てて振り返ると半分くらい開けたドアの間からニョキッと顔を出す渚の姿があった。

「んだよ、お前か……脅かすなよ、渚」

「いやゴメンゴメン。あのさ、今日って放課後なんか用事ある？」

現れるなりの突然の問いに蒼助は何だ、と思ったが特に予定はないので、素直な返答を返した。

「別に。至って暇だが何だ」

「良かった。じゃ、俺に付き合ってくれない？」

にっこり、と何処となく嫌な予感を覚えさせる満開の笑顔を渚は蒼助に向けた。

◆　◆　◆

放課後、校内でネタを一つ収穫して部室に戻る途中、廊下で千夜が前から歩いてくるのを見つけた。

視界には行った瞬間、久留美の心臓はビクンと思い切り跳ね上がり、足が止まる。

あの一件から休日を入れて三日間の間、千夜とは話すどころか会うことすらなかった。

まさかあのまま行方をくらませてしまうのでは、というあまり根拠の無い予測をして心配していたが、朝登校してきたのをちらりを見て内心ホッとしていた。もう、会えないなんて結末は嫌だったから。

今日一日中、ずっと気になって仕方なかった。しかし、話すタイミングが掴めず、あの後でどう話題を吹っかけて機会をつくればいいかわからず歯痒い気持ちでずっと過ごしていた。　だが、今日の学校生活の終わりにそのチャンスはようやく巡ってきた。

幸い今、周囲には千夜と自分しかいない。

素の彼女と話すにはこれ以上に無い最良の環境だった。

目の前まで来て、こちらを見た千夜が足を止めたを見測り、

「ど、どうも……」

何がどうもなのよ、と思わず飛び出た自分の第一声を嘆きつつも次で挽回を狙う。

「あのさ……この間のことなんだけど」

「新條さん」

彼女の口から出た言葉に久留美は目を見開いた。

感じ取った違和感に顔を上げてみれば、千夜は静かに微笑んでいた。

それはこの学校で取り繕う“仮面”が浮かべる微笑。

淑女の仮面が言う。

「部活、がんばってくださいね。また明日」

そう言って凝固する久留美の横をスッと通り過ぎる。

何もかも拒絶するように。

久留美は暫し呆然とし、そして活動を再開した思考回路が答えを探し出す。

……何、今の。

何故、だ。

何故彼女はあんなものを付けている。

本性を既に知っている自分の前で、何故。

あの仮面を外さない？

恐ろしい勢いで脳内で弾き出されるヒントと無数の仮定。

そして、

「……そう、そういうことなわけ……千夜」

久留美の投げた言葉に千夜が応えることはなく、離れて行く。

唇を強く噛み、

「――――ふざけんじゃないわよっ！！」

バッと振り返り、千夜の肩を掴む。

振り向く隙すら与えず壁に叩きつけ、押し付ける。

微かに目を痛みに歪ませる表情を無視し、両手で胸倉を掴み上げた。

「アンタ……そうやって何もかも“無かった”ことにしようってわけ！？　校舎で起こったことも、私を巻き込んだことも、アンタは全部何もかも私に忘れろっていうの！？　勝手過ぎるわよ、そんなのっ！！」

そこにはもう先ほどまでの仮面の微笑は無かった。

だが、無表情のまま何も応えない。

手応えの無さに虚しさを感じても、久留美は叫ぶのを止めはしない。

「冗談じゃないわ、あんなことで……アンタとの関係もゼロに戻さなきゃならないなんて……私は絶対認めないわよ、こんなこと絶対に！　忘れてなんてやるもんですか、あの時起こった全部のこと欠片一つまで忘れないんだからっ」

「……」

そう訴え叫ぶ久留美を見据えたまま千夜に、閉じた口を開けようとする気配は見れない。

言葉は届いていないのか、と挫けそうになるがそんな弱気を久留美は強引に捻じ伏せた。

「私は現実主義なの！　現実主義者（リアリスト）なの！　例え、それがどんなに妄想みじて有り得ないことでも現実なら受け止めるわ、嘘偽りの仮想に逃げるなんて真っ平ゴメンよ！　皆が皆で楽な道選ぶなんて思わないで、私までそんなになるなんて吐き気がするわ！　ずっと嫌だったのよ……ずっと、こんなぬるま湯みたいな気持ち悪い世界を平気で平和だなんて思い込んでいる連中ばっかの世界が嫌でしょうがなかった」

いつのまにか彼女に対する叱責が自分の気持ちの吐露へと変わっていた。

しかし、それも留めることは敵わない。

「だから、友達なんてつくろうとは思わなかった。そんなふやけた連中なんか必要（い）らないって……だけど、私、アンタは違うって思ったの。あの時、神崎たちをボコボコにのしてるアンタを見てて思った……コイツは違うって……諦めとか、妥協とか……超えられない現実に、そんなことに屈するような周りとは違うって……初めて、私……人間って言うヤツに惹かれたの……アンタは現実を見据える人だわ、目でわかるもの、そういう人間だって……だから、私は、アンタが見据えてる世界が見たいの。アンタが、終夜千夜が見て知る現実を見たいの……退魔とかなんてどうだっていい。アンタの視点で、アンタの世界を……私は……だから……私は忘れない、アンタが私を身体はって助けてくれたことも、都合よく忘れられてるかもしれないのに命かけてくれたこともっ！」

積み重ねられた御託の一番下にある根底の想いを久留美は血を吐くような思いで告げた。

「ゼロになんかしないでよ……なかったことになんかしないでよ……私は、もっと、近づきたいの。こんなことで離れるなんて……イヤ。他じゃダメ、アンタじゃなきゃ……ダメなのよ」

心に溜めていた言葉を全て出しきった後、久留美は俯いた。
しかし、襟元を掴む手だけは絶対に離さない。
離れてしまうかもしれないのに、どうして離せるのだろうか。

沈黙が流れる。
言いたいことを全て言い切った久留美はこの静寂を破る言葉は持ち合わせていなかった。
どうすることも出来ないこの時間を押し殺すような声が破った。

「……？」

顔を上げてみれば、

「……何で、笑ってるのよ」

見上げた先ではおかしくてしょうがないと言わんばかりに千夜が肩を震わせて笑っていた。
それは嘲っているようなものではなく、ただ単純に面白いことで笑っているという、そんな笑い。

「ははっ……告白みたいだな」
「……？」
「すごい口説き文句だったぞ……今みたいなのは、男に言ってやる

と1ラウンドでノックアウトに出来るんじゃないか？」
「ちょっ……ふざけないでよ、私はねぇっ」
「悪かったな」

言いかけた言葉を遮るような突然の謝罪に久留美は目を瞬いた。
目の前の、本性を露にした千夜が言う。

「確かに勝手だったな……お前の気持ちを考えず、自分の考えだけで判断し押し付けていた。だが、その方がお前にとって幸せなのは確かだ」
「何でよ……」
「お前はさっき言ったな。自分のいる場所はぬるま湯のようなだと。ここがぬるま湯なら、私がいる世界と見ている現実は水温マイナス零度の氷水の中だ。熱帯魚など、到底生きれない想像を絶する場所だ。お前も見ただろう、あんな化け物がいつ出てきてもおかしくない常識が存在する。一般人が一歩でも踏み込めば、生きていられる保証など限りなくゼロに近い」

脳裏に蘇るあの夜に目の当たりにした異形の者の姿に一瞬、久留美の頭が冷える。
確かに、あれは恐ろしかった。
千夜がいなければ、今ココに自分は居なかっただろう。
それが冗談で済ませることなどできないくらい、久留美は生々しく実感した。

「アンタの言うとおりね……それは否定できないわ。私は、アンタの言うその世界じゃ生きていくには不適切な存在でしょうね……でも、それも一人でならの話だわ」

強気な切り返しに、千夜の目が見開く。

「私には、アンタって言う強い味方がいるわ。こっちはバッチリ見てるのよ、アンタの闘いっぷりを。冷たい水の中も、アンタがいれば平気よ怖くなんかない……それに比較的にあったかい私がアンタの傍にいればそこだけはちょっとは水温マシになるんじゃない？あと私も言った筈よ、ぬるま湯なんてもうウンザリなの。冷たいか温かいかはっきりしてる方が、いっそすっきりするわ」

深い信頼。出会ってまだ間もないはずなのに、不思議とそんな気持ちが久留美の中にあり、千夜に向けられていた。

つくづく変な女だ。

衝撃的な瞬間を偶然目撃したことをあるかもしれないが、その前に記事にしようと思ったのは転校生だったというだけではなかった。

やはりこの目に答えがあるのだと久留美は思う。

まっすぐ相手を見据えるその澄んだ凛とした眼差しは本人も無意識だろうが、人を惹きつける力がある。

カリスマ、昔辞書を引いた時に意味は天与の非日常的な力と記述されていたが、まさに千夜はその通りの力を持っていただった。

日常の人間を非日常の世界へと引き込む存在。

そして、久留美は引き込まれる人間だった。

「よくもまあ、そんな前向きな考えできるな……」

「それだけはアンタに言われたく無いわよ。絶望って壁に囲まれても力技で叩き壊しそうなヤツのくせに」

「よく観察してるな、見直したぞ。大した観察眼だ、記者としては将来有望なんじゃないか」

「止してよ、照れるじゃない……って話逸れてるし」

やっぱり油断できないな、と思っていると千夜が笑みを消して真剣な面（おもて）で、

「だが、新條……私は」
「大丈夫よ」
これ以上何も言わないようにと、トドメを刺す。
「危なくなっても、アンタなら助けてくれるでしょ」
呆気に取られたようにポカンとする千夜。
そして、呆れ返ったように笑い、両手を挙げて「降参」のポーズを取った。
「参ったよ……賢いと思っていたが、見当違いだったな。お前は大馬鹿者だよ、そして命知らずだ」
「馬鹿でケッコー。賢い人間はドキドキな冒険なんて出来ないツマンナイ人生送って終わるのよ、それなら馬鹿で悔いの無い人生で終えてやるわ」
互いに笑い合う。
退屈しのぎに何か悪巧みをする悪友のように。
「あと、長生きできない人間だな、新條は」
「百も承知。危険を省みない記者希望してんだから、それくらい覚悟してるわよ。それと、新條は止めて」
ずっと、言いたかった言葉。
襟から手を離し、胸を張って、
「く・る・み。私が千夜って呼ぶのに、それはおかしいでしょ。名前で呼び合うもんでしょ、友達ってのは」

時間はかかりそうだ。
だが、この相手には手間をかけるだけの価値はある。
清々しい気分で、久留美は心から微笑った。

［弐拾四］　先に進む人（後書き）

前半、迦織お姉さんの恋愛相談所。後半、久留美、挑む。豪華二本立てで送りました（サザエさん調
まぁ、別に豪華じゃねぇか。
蒼助の従姉の名前が変わったことには改訂前から読んでくださってる読者さんにはならわかると思いますが、あれはこの話には「美」から始まるキャラが多いからです。名前しか出てきて無いけど、美沙緒とか美朱とか。美古都って字とフレーズはかなり好きだったんで切るのは惜しい気がしましたが結局変えました。
んで、おニューな名前は１０分考えて（それだけ？）「迦織」に決定。「かおり」ではなく「かおる」と読みます。字はどれにしようかとやっぱ悩みました。薫っていうのがまず最初に出てきたんですが、なんかどうしてもるろ剣のヒロイン思い浮かべてしまうので、イメージとしてはこのキャラはあの人とは全くかけ離れた人柄と性格だから止めました。
１０分という限られた時間の中で試行錯誤しながらも字は変化球を狙って上のように。織の読み方をおりではなくおるにしたのも変化球。
大人な従姉のお姉さんの絡む蒼助の童貞喪失事件（事件って……）についてはまたいつかにとっておきましょう。
強引に久留美は急接近。腹割って話せる友達に昇格できました。積極的なようで実は人間関係には消極的な千夜にはぐいぐい迫る久留美みたいなヤツが必要かな、と。当初は七海でやろうかと思ったけど、アイツは正体知らないし、それにはちょっと弱いかな、と思い却下。それにこのままじゃ久留美の存在理由が薄（危険になってきたので、ストップ
次いでに気が付いてみれば、この二人は非常に対照的なのですね。
日常にいながらも日常的な過激さを求める久留美と非日常にいて日

常に焦がれる千夜。
今後の二人の友情関係もどうなるのか気にしてくれると嬉しいです。
イヤ待て、友情とか言ってる場合じゃなくてこの話って恋愛メイン
なのに進み遅（終了

［弐拾伍］　異端の者（前書き）

何者にも属さないこと
行く先は常に孤高であること
望み、望まなくても

［弐拾伍］　異端の者

夕方、連れて来られたのはそこらの病院とは比べ物にならないほどの敷地と大きさを誇ったまさに大病院と呼ぶに相応しい風貌と外観だった。
デカさを病院のスゴさに例えているようで蒼助は気に食わなかった。

「……で、俺らは誰の見舞いに来たんだ？」
「当然。ここは土御門のお抱え病院」
「やっぱりかよ……見舞いって聞いた時点で帰ればよかった……くそ」

恐らく、というか間違いなく氷室だろう。
あの件以来、氷室が学校には来ていなかった。
何の連絡も無いので、一応気になってはいたがやはり療養中だったようだ。
しかし、あの氷室が病人という姿もあまり想像しがたいが、見てみたい気はする蒼助だった。

「さ、行こうか」

僅かに沸いた好奇心と渚に導かれ、蒼助は病院の自動ドアを通った。
中は半端じゃなく広かった。
自分が知る白い空間ではなく、病院もののドラマで見るような中から外が見渡せるように白い壁の代わりにガラス窓が張り巡らされている。
待合場所というよりは、休憩所といった感じで立派な椅子やらテ

ーブルやらが広い空間を生かして置いてある。
気取った雰囲気があって蒼助にはどうも良い気分にはなれない。

「……なんか、偉い外科部長とかが手下連れて行進してそうなトコだな、ここ」
「蒼助くん、ドラマ見過ぎ」

そのまま階段を上り、外側がやはりガラス板の永い廊下に出る。
差し込む夕暮れの日差しで白いはずの廊下は緋色に染まっていた。

「……あれ、蒼助くん。顔色悪いけど、どうしたの？」
「……病院とは相性が悪いんでな」

病院に入った時から蒼助のテンションはかなり低空飛行していた。
無言で歩いていると、ふと前から誰かが来るのを見た。

まただ。

歩いてくる老人は不健康なまでに青白い。
病人だからというレベルではなく、それはもはや、

死者のそれに等しい。

そして、彼は全身を青白い炎に包まれていた。
熱さにもがき苦しむ様子はない。衣服燃えているわけでもない。
当然のことだ。それは、彼等の“魂”なのだから。

老人はこちらを見て、二コリと笑う。

悪意や邪な他意はないのだろうが、青白い顔で微笑まれても薄気味悪くて微笑み返す気にはなれない。
避ける気配もなく老人は蒼助たちと衝突しそうになるのにも構わず近づいてくる。
そして、すれ違った。
蒼助の“身体をすり抜けて”。
ひやり、とした冷たさが背筋に走る。

死者に触れるという独特の感覚。
やはり、何度あっても慣れることは出来ない。

「今のおじいちゃん、随分前に末期癌で亡くなったんだけど、生きてた頃はなんか俺らこと気に入ってたみたいで、知り合いが来るからってまだここに居るんだ。俺がいない間とかマサの相手もしてくれるみたい」
「……へぇ、陰陽師ってのはああいうのを祓うのが仕事じゃなかったか？」
「何でも祓えばいいってもんじゃないよ。それに、あの人、現当主の……マサのおじいちゃんの古い友達なんだ。癌で入院する前から京都の屋敷に遊びに来てはマサのこと可愛がってくれたみたいでね。マサも邪気が付いたら浄化するなりして、いろいろ長持ちするように気にかけてるんだ。俺もあのおじいちゃん好きだし……マサにとっては数少ない味方だったから」
「……あ、そ」
「そう言えば、蒼助くんって霊力ひっくいクセに霊視出来るんだ…」
…何で？」
「知るかよ」

蒼助はスパッと拒絶し、そのまま歩く。
渚もあまり無理に聞こうとはせずその話題はあっさり捨てた。

「……そういえばおじいちゃん、何でもう病室出てたんだろ。いつもは俺が来るまでは居るのに」
「誰か別に客が来てお邪魔だと思ったんじゃねぇの？」
何気なく応えた適当な言葉に、予想外にも渚の顔がしかめっ面になる。
「……やな予感」
一体何なのか、と蒼助が怪訝に思った時だった。
「何だ、その態度はっ！　貴様っ……自分が何をしたのかわかっているのか！？」
すぐ先の病室から響いた耳障りな怒鳴り声。
蒼助は一瞬何事か、と目を瞬かせた。
その合間に渚は颯爽と病室の前に立ち、僅かにドアを開けて隙間から中を覗き見るように身を屈めた。
「げっ……やっぱりか。予感的中、道理で……あの人も居辛いはずだ」
うんざりげに顔を顰める渚の様子に蒼助は更に驚いた。
この男がこんなにも嫌悪感を露にするのは、蒼助が知る限りではとても珍しいことだった。　どうやらここが氷室の病室らしい。中で何が起こっているのかが気になり、ゆっくりと近づき渚の頭の上から隙間を覗き込む。

見た感じ個室の病室の中では、病人着を着て自動なのかベッドの上半分を起こして背をかけている氷室がいた。表情は普段通り仏頂面だが、そこには確かな嫌悪の色が見て取れた。ちょうど、真下の渚と同じように。最も、普段から不機嫌そうな氷室の場合は見慣れていない者はよく観察しなければわからないが。

そして、他に見知らぬ顔の人間が二人。

「下された命令に背いて出しゃばった真似をしたばかりか、魔性を取り逃がすとは……とんだ失態だなぁ、次期当主殿っ！」

嘲笑を浮べながら氷室を罵るのは男の方だった。

歳は四十後半を過ぎたぐらいか。顔の造りは悪くないが、性格の皮肉っぽさが滲み出ていてそこがマイナス。高そうな着物はまるで自分の存在を誇張させているようだ。蒼助に言わせれば、会社に一人はいそうなネチネチ嫌味ったらしい上司のようなタイプだった。当然、気に食わない。

その横に付き従うようにいる同じ着物姿の女。

男とは同年代のようだが、こちらは反して年不相応に整った綺麗な顔立ちだった。やや濃い目の化粧で手を加えられていることを差し引いても。

喋るのは男に任せ何も語らぬが、やはり氷室を見る視線は冷たく白い。

まるで、氷室を忌み嫌うかのように。

「誰、アイツら」

小声で尋ねる蒼助に渚が不機嫌な調子で答えた。

「マサの両親。……わざわざ京都の本家から出向いて嫌味とはご苦労なことだね」

返答に蒼助は呆気に取られた。
あれが氷室の両親と言われてもピンと来ない。
あまりにも氷室本人と顔立ちが似ていないのだから。
蒼助が驚いている合間に部屋の中での張り詰めた状態は続く。

「貴様が犯した失態は貴様個人だけではなく我が土御門家の名をも汚したのだ。これではお前を次期当主に就かせる事についても考えを改める必要があるようだな……」
「……言いたいことはそれだけですか」

黙って聞いていた氷室が口を開いた。
ぶつけられた罵言などこれっぽっちも応えていない様子で。
その態度が癪に障ったのか、男は顔から笑みを消した。

「何……？」
「私は間違ったことをしたとは思っていません。我らは人の為に戦い、弱き人の子らを脅かす悪鬼を討つために存在する。その使命に従って行動しただけです。貴方や他のどんな輩、誰にどう言われようとこの意志を覆す気はありません」
「貴様……っ」
「降魔庁は先日、渚と共に辞表を出し退職しました」
「何だとっ……！？」

聞いた蒼助も驚いたが、反応の強さは男の方が上だった。
どうやら、その行動は男の予期しないところで行われていたようだ。

「貴方の薦めてくれたあそこは行動に制限が多過ぎる。今回の事で改めて実感しました。使命の枷になるようなところにはいつまでも

いれませんので」
「貴様……何の権限があって、そんな勝手なことを」
「当主はこの事を既に承知済みです。組織が己の行動の妨げになるのなら、私の一存で好きにしていいという言葉を貰っています」
当主、という言葉で出て来た途端男の顔色が変わる。
固まっている男に氷室はトドメとも言える痛恨の一撃を放つ。
「今、貴方は私に何の権限があると言いましたが……その言葉そっくりそのままお返しします。貴方こそ、何の権限を持っているのですか？　次期当主である私に当主でない貴方が、一々私のやる事に口出しする権限は無いと思うのですがね、父上殿」
男の顔が沸き上がる憤怒に真っ赤に染まる。
相当痛いところを突かれたようだ。
「き、さまぁ……よくもそんな減らず口を……」
男が逆上する素振りが見えた時、見計らった渚がドアを開けて中に踏み込んだ。
それに続いて蒼助も中に入る。
「はいはい、それくらいにしておいて下さいね。晴雅（はるまさ）様」
穏やかに静止する渚の顔はにこにことしている。
だが、明らかに作った表情だ。
入って来た渚に気付いた男はこちらを向いた。
同時に怒りの矛先が渚に移動する。
「朝倉のっ！　私の許可なしに降魔庁を辞めたというのは本当か！」

「はい。その通りですが、それが何か？　貴方の許可が必要などとは到底思えませんが……」

怒りを煽るかのような追い撃ち。

「貴様等……二人してこの私を馬鹿にしているのかっ！！」

「被害妄想は止して下さいよ、晴雅様。それより……もう日が暮れるのでそろそろ御返り願いたいのですが。あまり貴方の小言が長引いて、それが原因で大事な次期当主候補の傷の治りが遅くなっては困るでしょう？　……それに、あとが閊えているので」

何故、こっちに話を振るのか。

案の定、男は苛立たしげに蒼助に興味を向けた。

「何だ、コイツは……」

「玖珂蒼助。ご存知でしょうが、当主の友人である玖珂善之助殿の嫡子ですよ。降魔庁時代、チームを組んでいた一人です」

名を聞いた途端、男の顔が嘲笑に染まる。

蒼助がこれまで何度なく見てきた表情だった。

「玖珂の落ちこぼれか……こんな程度の輩とつるんでいるとは、お前の程度も知れるな次期当主殿」

カチン、と来たが反撃を返したのは蒼助ではなかった。

「貴方などよりは幾らか上ですよ。それくらい見極める目は持っています」

手痛い言葉に男が怒りで肩を震わす。

「――っ……帰るぞ！」
「はい」

ドアの近くにいた蒼助たちを押し退けて同行者の女性とドアのところまで来ると男はまだ何か言う事があるのか、首だけ振り向く。
そして、憎々しげに言葉を吐いた。

「見ていろ……私は決して貴様を許しはしない」

それに対して氷室は冷たく笑う。

「許さない……？　私の存在をですか？　……それならはなっから許していないでしょう」

二人の容赦無い言葉が交差して一瞬張り詰める空気。
しかし、特に行動は起こさず男はドアに手をかけ、ただ去り際に一言忌々しげに呟いた。

「《鬼子（おにご）》が……」

それだけ言って男は女性を連れて病室から出て行った。
後に残されたのは蒼助、渚、そして氷室。
流れる沈黙の中、口を開いたのは蒼助だった。

「死に損ないがどんな調子かと思って来てみれば……その調子なら元気そうじゃねぇか」
「おかげさまでな」

相変わらずの素っ気ない態度。
予想は出来ていたが、やはりムカつく。

「ったく……死にかけてちっとは丸くなってると思ってたのに……ちっとも変わってねぇ」
「下らん事を……そんな事より依頼だ。私もさっきの男を相手にして疲れている……するべき事をとっとと終わらせて眠りたい」
「依頼ぃ？」

渚を見る。
あはは、と手を合わせて「ゴメーン」と苦笑いしている。
最初からそのつもりで連れて来たのだろう。
呆然とする蒼助を置いて、強引に話は進んでいく。

「先日、渚に辞表を届けに行かせた帰りに降魔庁の資料庫で“或る事”を調べさせた。成果は出なかったがな。だが、諦めて資料庫から出ようとした時、上層部の幹部たちの立ち話を聞いたらしい」
「……何を？」
「幹部たちはこんな事を話していたそうだ。“今回の事件はまるで、二十年前の再来だ”と。今回のようなケースが以前にもあったと言う事だ」
「……」
「おかしいと思わないか。資料にはそんな記録は一切なかった。だが、記録のないことを口にする人間がいた。ならば、その一件に関する記録は何処へ行った？　消えた記録を消したのは誰で、どんな理由で……」
「氷室」

蒼助は氷室の言葉を遮るように口を開いた。

「依頼ってのは、この前の化け物に関係することか？」
「……そうだ」
「なら、俺は降りるぜ。この依頼は断る」
「蒼助くん！？」

驚愕を声をあげてこちらを見る渚を無視して、蒼助はいたって動じない氷室に告げる。

「はっきり言うぜ氷室……この件はヤバ過ぎる。俺らの手じゃ負えねぇってことくらいそのザマになったお前だってわかってるはずだ。命がいくらあっても足らねぇよ」
「……本気で言っているのか、玖珂」
「本気だ。あんなんに関わってよく生きていられたのが不思議なくらいだぜ。今回ばかりは、いくら報酬積まれても乗れねぇよ。そういうわけだ、じゃあな」

蒼助は背を向けて、ドアに手を掛けた。
ふと振り返る。

「神崎はもういない。あの化け物はもういない。これ以上、何を粗探しする気だよ」
「……闇に潜んだ闇を」
「なら、忠告だけはしとくぜ。これは俺が言われた台詞だが……この非日常にも深い場所があんだよ、触れちゃならねぇ禁忌っつーな……アレは、きっとそういうもんだ」

不意に脳裏を過ぎった一人の少女の姿。
彼女との間に感じた“壁”。
おそらくそれこそ、こちらと向こうを分け隔てる区切りなのだろ

う。
あの壁を超えない限り、自分達は決して向こうへは行けない。
蒼助は何度も感じたあの敗北感に今一度襲われる。
静かにドアを開け、部屋を出た。

◆　◆　◆

病院の廊下に置かれた自動販売機から買った紙コップに入ったコーヒーが渚から差し出される。

「はい、コーヒー。ミルクなしで無糖だよ」
「軽く嫌がらせか、オイ」

どばどば入れて甘い過ぎるのは嫌だが、ストレートも苦くて嫌だ。
ほどよくなったところが好きという好みのうるさい男・蒼助。
とりあえず、それでも受け取り飲む。
勿体ないから。

「苦ぇ……くそ、良いだろ別に。誰だって命は大事だろ」
「ま、確かにそうだけどね。でも、ちょっと腹立ったからこれくらいの腹いせは我慢して」

と、渚は細かく泡立った白いラテが紙コップの表面を覆い尽くすカフェ・ラテをぐいっと飲む。
悠然と飲むその様子を苦々しげにそれを睨みつつ、さっさと片付けようと猛烈に苦い液体を口に注ぎ込む。

「ぶはっ……で、お前らは結局続けるのか？　さっきの件の捜査」

「うん。その為に降魔庁辞めたようなもんだしね」
「わっかんねぇんだよなぁ……何だって三途の川渡りかけたってのに懲りもせず、深入りしようとするんだ？」
「今回の事が片付いたからといって、これでもう終わりとは限らない。第二、第三と同じ事が繰り返されるかもしれない。最初よりも大きな被害と犠牲者を生み出す可能性は大きい。それを防ぐ為にも、あの強敵についていろいろ探っておきたいのさ」

口端についた白い泡を舌で器用に舐め取る渚を見ながら、

「そうじゃなくてよ……危ないとわかっていながらわざわざ自分から突っ込んでいくその考えがわかんねぇんだよ。何もアイツが何とかしようとしなくても上がどうにかするだろう。降魔庁を辞めてまでアイツがこの件に拘る理由って何だ？」
「いや別に。特に個人的な理由はないんだよね」

あっさりな答えに蒼助はコーヒーを零しそうになった。

「お前じゃねぇよ。俺は氷室のバカのことを聞いて……」
「だから、特別な理由なんてないよ。今回に限らず、マサは自分の手が届く範囲であるこの東京（まち）で、何度事件が起きようと犠牲を出さない為に重傷負ってようと両足切られようと原因を潰しに行く。ああ見えて、マサって根底型退魔師だから」
「根底型って……何の？」
「退魔師のに決まってるでしょ。君さ……退魔師がどんな存在で、どんな使命を元に動くか知ってる？」

何を今更、と思いつつもその唐突な質問に蒼助は答えた。

「そりゃ……魔性を討つことだろ」

「テストで答えても間違いじゃないだろうけど、それって肝心なところが抜け落ちてるよ。大事な要点が。いい、退魔師の正しい存在意義っていうのは……」

いつの間にか講義と化していることに蒼助がツッコもうするを阻止するかのような絶妙なタイミングでビシッと鼻先に指を突きつけ、

「魔なる者から力なき人の子らを守ること。嘆くしかない彼らの代わりに異能という名の剣を振るい悪しきを討つ。……もう、言い出した当人たちですらが忘れているかもしれない、本当の使命で、退魔師の在るべき正しい姿だよ」

「氷室はその退魔師の鏡だってのか？　あの冷血漢がそんなヒーローみたいな奴とはとてもじゃねぇがそんな風には……」

「不器用なだけだよ。アイツは弱者にはスゴく優しいよ？　実は動物子供好きだけど、あの無愛想な顔を怖がられて、泣かれ吠えられ逃げられ損してるし。生徒会の仕事で不良の取り締まりにも厳しいのは、大抵がストレス発散の弱い者イジメでそれが許せないから。普段憎まれ口ばかり叩いているのも、言葉選びが下手くそなのと意地張ってるだけだし」

「俺には？」

「弱いの君？　あと、もうそれは相性の問題だからねぇ……炎と氷じゃ衝突するのはしょうがないんじゃないかなー」

「……」

その通りなので、反論出来ない。

「まぁ、あの飴と鞭は仕方ないよ。ほぼ四面楚歌状態の中で育って自然と鍛えられちゃったもんだから。アレはもう、敵から身を守るための一種の武器」

「四面楚歌……」

「さっきの両親の態度見たらわかるでしょ？」

実の息子に対する接し方とは思えない冷たい態度と言葉。
お前を許さないと憎悪の言葉を叩きつける父親。
産んだ子に対して、言葉一つかけずただ冷たく視線を投げる母親。
アレを親子と呼んで良いのだろうか。

「マジで実の親子なのか、アイツらと氷室って」
「実の親子であるのは間違いないよ。でも、血は直接繋がってない」
「何だ、それ。矛盾してるぞ、言ってること」
「あー、と……結構長くなるよ？　君、《半妖》って知ってる？」

聞き覚えのない言葉だ。
知らない、と首を振れば、

「人と神属とか化生とかの人外との間に出来た混血児のこと。人外の方の強大な霊力と人の限られた寿命を授かって生まれてくる双方どちらにも分別されない世界の“異端児”ってところかな」
「それと氷室に何の関係があるんだよ」
「土御門……旧安倍家の大陰陽師の出生は？　人間・保名と信太の霊弧・葛ノ葉姫との間に出来た安倍清明は半妖だったが故に人の身では及ばない域の力を誇り史上最強の陰陽師と名高き名声を得た。マサはその再来とか言われてるけど、ぶっちゃけ事実その通りなワケよ」
「生まれ変わり……とか？」
「ピンポーン。もっと細かく言うと土御門雅明は安倍清明の三人目の転生体なんだけど」
「三人目……って」
「安倍清明以降の過去の歴史の中でマサと同じように再来と言われてた人が一人いるんだ。多分それだね、正確なマサの前世って」

混乱してきた。
冷めつつあるもやはり猛烈に苦いコーヒーのそれで頭を落ち着かせる。

「ちょっと待て、何でその転生って奴が三度目だってわかるんだ。たまたまその代が先祖がえりして強かっただけかもしれないだろ。そもそも、そう何度も人間に転生出来るわけが……」
「それはないね。半妖ってその血筋の流れに沿ってその関係性を持つ人間を母体に選ぶんだ。そもそも人間じゃないし。半妖は生まれ変わっても半妖のままなんだ」
「有りかよ、そんなの……」
「どういう仕組みかは知らないけどアリ。　最初に半妖として生を受けた時の親の血をそのまま持って生まれてくるんだ。だから、転生後の親となる人間とは血液型も合っていない。たまたま組み合わせが揃ってて判断しにくいパターンもあるけどね。変な話、本当の意味で親を持てるの最初の一度きりで後はどう足掻いても形式上の親子関係が続くんだ」

そこまで話が進んで、蒼助はようやく話が見えてきた気がした。

「つまり、それがあの親の氷室に冷たい理由か？」
「一番深いところで根付いているもんとしてね。人間の自分たちから生まれたのが人外の血を半分持った得体の知れない子供……産んだ側の勝手な言い分としてはこんな奴は自分たちの子じゃないって頑にマサの存在を否定したいんだろうね……特に母親の方はそんなのが自分の腹にいたかと思うとおぞましくて仕方ないんじゃないかな」

あの汚物を見るような視線にはそういう意味があったのか、と蒼

助は一つ疑問を消化させた。

「あのオッサンが最後に言ってた台詞聞こえた？」

「ああ、確か……鬼子って？」

「半妖の蔑称。親に似ていない子っていう本来の意味もあって使われているんだ。顔、似てないでしょ？」

確かに、父親は論外として母親の方は綺麗な顔の作りだったが、氷室とは似ていない。

「でもよぉ……母親のアレはともかく父親の方は異常だろ。それだけっていうのもを変な言い方だが、あそこまでなるか普通」

「まぁ、あの人はまた別の個人的な理由でね。まぁ、珍しくはないらしいよ、半妖の子とその親の人間関係って。忌み子であっても、一族の血を再び濃くするには大事な存在だから一応丁重に一族は扱うけど」

「……外側に対する飾りと道具の役目があるからか？」

「否定できないところが哀しいなぁ……」

胸くそ悪い、と蒼助は危うく紙コップを握りつぶしそうになった。

「でも、利用されるようなタマじゃないってのはアレ見ててわかるでしょ？」

見事な反撃で返り討ちにしていた氷室の姿を思い出す。

確かに、とささくれた精神が少し安らぐ。

「絶望の淵から這い上がった人間の姿だよ。それまでにちょっと角っこ欠けちゃったりもしたけど、ずぶずぶ沈んでは行かなかった。蒼助くんも、確かな芯を持ってるってわかってるから何だかんだつ

るんでるんでしょ？」

悪戯っぽく、にしし と笑う渚の頭を衝動的に殴る。

「イテテ……素直じゃないなぁ。やっぱり意地張るところは何かマサに似てるなぁ。類は友を呼ぶって奴かな……」

「どたまカチ割られてぇか、てめぇ……」

「冗談だよ、冗談……あははは」

眼の据わった目でギロリと睨むと、さすがにヤバイと察したのかそれ以上からかおうとはしなかった。

やっと一段落ついたと思い、残るコーヒーを全部飲み干そう一気に流し込む。

「でも、知ってる？　マサは君のこと好きなんだよ」

「ぶふぉっ！？」

勢い良くコーヒーが口と鼻から逆流し吹き出た。

しかも運悪く僅かに器官に入ってしまった。

「うわっ、大丈夫？」

「げほっ……げぇっ……てめぇが変なこと言うからだこの野郎っ！！」

袖で口元と鼻下についたコーヒーを拭いつつ、気遣いつつも一歩下がる渚に噛み付いた。

「本当だって……まぁ、正確には羨ましいのかな。君の立場が」

「天才と散々もてはやされているアイツが落ちこぼれの俺を？　天地がひっくり返ってもありえねぇだろ」

「ちなみに俺も。言っとくけどマジな話だから」
「オイオイ……何だよ、突然。一体どうしたんだぁ？」
話が妙な方向へ転がりだしている。
「蒼助くんは俺達みたいに退魔師の才能持った人間が羨ましかったりする？」
「……まぁ、一応は」
「それと同じ。逆に俺達も退魔師としての一本道に縛られていない君がとても羨ましい」
「……渚？」
そう言う渚の表情はいつものようにからかうとか悪ふざけに浮べるようなものではなく。
真剣に心の底から本心を語る顔つきだった。
「期待ってさ、嬉しいものかと聞かれたらそうでもないんだ。正直、される方には重荷でしかないよ、本当。気が付いたら、周囲の思うように歩かされるんだ。時々ね、錯覚するんだよ……自分は操り人形になっちゃったんじゃないかって。初めて君を見た時、本気で嫉妬したね……何でコイツだけって。僕らにとって、君は落ちこぼれじゃなくて家のしがらみという束縛を持たない自由を許された羨望の対象なんだよ、蒼助くん」
信じられない、と蒼助は耳を疑った。
落ちこぼれ、出来損ない、と口を開けば誰もがそう言った。
羨望とは無縁だと思っていたのに、思わぬ人間が自分をそう見ていたという衝撃に蒼助は言葉を失った。
――――人が皆同じ夢を見て、同じ望みを抱くとは限らない。人

の数だけ想いがあるように。

海を見ながら千夜が言っていた言葉が脳裏を駆けた。

自分の視界だけで何もかも決め付けていたという事実を蒼助は思い知った。

「ねぇ、蒼助くん。ちょっと一つ聞きたいんだけど」

「ん？　あ、何だ？」

「君はどうして今もこの業界にいるの？」

質問の真意が読めず、

「どういう意味だ」

「いやね、君さぁ……降魔庁を辞めた時に言ってたじゃない？　ここにいても俺の失くした探し物は得られそうにないってさ」

曖昧になっている記憶を朧げに思い出しつつ蒼助は相槌を打つ。

「探し物が闘う理由だって言ってたけど……何で、最初に理由がなくなった時点で他の道を選ぼうと思わなかったんだい？」

「あ？」

「何も退魔師になるしか道がないってわけじゃないだろ、君の場合は。周りに押しつけられる俺たちと違ってそうじゃない君は表の世界で何か別の生き方を選ぶことだって出来る。サラリーマンなんてのは想像付かないけど、修行で鍛えた身体を生かしてボクサーとか格闘技に打ち込むのだってアリだ。進む道は考えればいくらでもあるよ。なのに、君は何故……わざわざ理由を探してまでこの世界にいる事を固執するの？」

思考も心も全てが停止した。

少しの間を置いてそれらが動き出した後、蒼助はその問いに答える言葉を探したが、返答となるものは見つけられなかった。
自分は闘う理由を見つけたくて今も退魔師を続けているはずだ。
だが、逆に問えば渚の言うとおりどうしてそこまでしてこの世界にいることを自分は望むのだろうか。
言われてみれば、母親が死んだ時に諦めてもよかったはずだ。
諦めて、何か別のことに心を向けても良かったはずなのに。
氷室のように人の為に闘おうなんて思っていない。
渚のように誰かと同じ道を歩みたいからなどとも思っていない。
祀や七海のように家を継ぐ必要もない。

――――じゃぁ、何で俺は……。

まだ退魔師でいたいのだろうか。

「蒼助……くん？」

俯いて黙り込んでしまったまま、微動だにしない蒼助の様子を窺う。
すると、蒼助はゆっくりと顔を上げ、一言。

「シラけた……帰るわ、俺」
「は？　何、突然……あ、ちょっと……」

突然の展開を飲み込めずにいる渚に取り合うことなく、蒼助は腰掛けていた廊下の壁際に置かれた椅子から立ち上がり出口に向かって歩き出す。
だが、ふと立ち止まり、

「渚、さっきの質問だけどよ……俺も正直のところよくわかん

ねぇんだ。お前に言われるまで、気付かなかったけど……何で退魔師でいるのかはわかんねぇよ。だけど、今更別の道を選ぼうとも思えねぇ。本当にハッキリしねぇけど……本当はお前の言うこの世界から離れられねぇワケって奴を探してるかのかもな」

「蒼助くん……」

「じゃ、あんま無茶すんなよ。お前もアイツも」

再び歩き出した蒼助に何かを思い出し、ハッとした渚が強く呼び止めた。

「待って、蒼助くんっ！」

「んだよ、人が切りよく帰ろうとしてところに……」

「あのさ……たとえマサが半妖でも……お願いだから、嫌いにならないで……これからも、どうか……」

勢いのない声が最後の辺りでは聞こえないくらい小さく、それでいて必死に懇願した。

蒼助はそれを見た後、少し間を置いて、

「だあほ。俺は人間だろうが半妖だろうがアイツが大嫌いだ。じゃぁな、また別の仕事あったら寄越してくれよ」

不安げだった渚の表情が明るくなっていくのを一瞥して蒼助は、今度こそ自動ドアを通り抜けた。

◆　◆　◆

帰り道、昼間は人で賑わう代々木公園も夜になると都心とは思えぬほど静まり返っていた。
その中を歩く蒼助。
周りにはもはや残り僅かな花弁をつけるばかりの桜の木々。

「桜の季節も、もう終わりって感じだな……」

足元に散々踏み千切られ茶色く変色した桜の花弁の残骸を見つつ呟く。
満開だった記憶しているのは始業式の日の学校内とその行き帰りの中で見た桜。
もう、四月の半ば。気が付けば、千夜が転校してきて既に十日も経っている。
思い返すとその間にいろいろ起こった。
降魔庁の情報隠蔽が遅れて世間で猟奇殺人騒ぎになったり。見たことも無いタイプの魔性と戦って自分や氷室が死に掛けたり。
たくさんのことが忙しく過ぎ去っていった。
こう言っては何だが、千夜が現れてからというもの蒼助の周りではおかしな出来事ばかりが起こっている。
まるで、彼女が嵐を引き連れてきたかのように。

「嵐を呼ぶ転校生ってか……こんな風に言われちゃアイツも迷惑だよな、ははっ」

「ふふっ……あながち外れてはいないわ、それ」

突然の含み笑う女の声に、蒼助は固まった。
己以外人気のない辺りから聞こえたその声に。
そしてその直後、そこかしこで炸裂音が響いた。

「っ！？」

ハッと無意識の束縛から解放され、蒼助は弾けるように背後を振り返った。
途端、目を見開いた。

代々木公園中の桜が、満開の花を咲かせる。波打つように桜花の海が広がっていく。

春の澄んだ空、冴え渡る白い星と満月。
それらを背景に、満開の桜が咲き誇る。
風が花びらを吹き上げて、藍の空に、薄紅色の新たな星が咲く。

美しく不確かな、魔の情景。
あまりに幻想的な光景に、魅入られていたように蒼助は押し黙っ

た。

「な、んなんだ、これは……一体」

「あら、気に入らなかった？　男と女の逢瀬を飾るには、だいぶ侘しいと思ったから、桜に今夜一杯頑張ってもらったんだけど」

また背後から。

振り返った先には、一本の桜の木。

女の声は咲き誇る無数の花の中から聞こえた。

ゆっくり、と歩み寄り真下へとやって来た蒼助の目に飛び込んできたのは、

「はあい」

片手を軽く上げ、ニコリと笑う少女。

泥付いていなければも乱れもない状態で、どうやって登ったのか太い枝の上に座っていた。　黒い髪が淡紅の中でひどく浮いており目立つ。

同様に黒いゴスロリドレスも対照的な彩色の中では異様なまでに異色。

「お、まえ……」

「初めまして、じゃないわよね？　私の事、覚えててくれたかしら……」

交差点での出来事が脳裏を眩いほどにフラッシュバック。

――――ちゃんと見つけてあげるのよ？

かけられたたった一言の言葉。
会話にもならなかった。
すれ違っただけと言ってしまえば、それまでの出来事。
しかし、蒼助はあの瞬間を、千夜と出会った時と同等に並べられるくらい鮮明に、確かに覚えていた。
忘れられるはずがない。
忘れられるはずがないのだ。
目の前の少女が、そのようにしたから。

「こんばんは――――――玖珂蒼助」

この黒ずくめの少女を、蒼助は覚えていた。

【弐拾伍】　異端の者（後書き）

新たな用語出現。つっても皆説明なくても大体把握出来るわ、これは……だってねぇ？（某サンデー連載漫画の犬耳主人公を知っていれば
この先、メインの半分はこーゆーのが出てきます。
実は気付いていないだけで、蒼助の周囲にはまだいます、『彼』とか『彼女』とか（誰のことかな
最後、セカンドコンタクト為される。
黒蘭がついに動いた。
どうなる次回、な感じで今回は終わる。

「弐拾八」　生まれる決意（前書き）

己が望む、ただ一つの事

【弐拾八】　生まれる決意

コトリ、と置かれたカップ。
湯気を立ち昇らせる中身はコーヒーだった。
置いた蒼助は目の前の相手に、

「はい、どうぞって……インスタントだけど、いいのか？」
「そんなに気を配らなくても結構よ。大丈夫、もう飲み慣れたから」

と、一緒に置かれたスティックシュガーの封を切り、半分くらいまで入れてスプーンで掻き混ぜる。
そして、一口。

「うん、最初は不味くてとても飲めたもんじゃないと思ったけど……慣れればこの安っぽい味も一興よね」

悪びれてない笑顔と正直なその感想に蒼助は軽く殺意を覚えた。
溜息で怒りを発散させ、自分のには砂糖とミルクを好みの量を加える。

「あら、意外。顔からしてストレートかと思ってたんだけど……まだ素材そのものの大人の苦味は好きになれない？」
「ガキのくせにナニ言いやがる」
「……ふふっ……本当にそう思う？」
「……なワケねーだろ」

わかっている。見た目通りの年齢ではないことくらい。
ましてや、人間ではないことくらい本能がうるさいくらい告げている。

冗談と笑って済ませるような半端な存在ではないことも。

「で……アンタ程の奴が俺んち上がりこんでナニが目的だ」

場所は代々木公園から蒼助の自宅マンションの一室に移っていた。
ただし、あの場所から歩いて帰ってきたのではない。
黒衣装の少女の“指先を鳴らすというワンアクション”で“この部屋に直接”帰ってきたのだ。
所謂、“瞬間移動”という手段で。
そんな大それた所業が出来る者など、退魔師でも魔性でも聞いた事が無い。
というより、いくらなんでも有り得ない。
それだけではなく、散りかけた桜を再び満開に咲かせるなど。
ココまで来れば、もうスゴイとかの問題ではない。
ありとあらゆる意味で目の前の少女の姿をした存在は“次元違い”だ。

「目的って言われてもねぇ……」

警戒する蒼助とは打って変わってカップを口元に近づけて和む少女。
そのままごくり、と一口飲み、

「見ての通り。こうして貴方と話したいと思っただけ」
「真面目に答えろ」
「いたって私は本気よ？本当はあの時、そうしたかったけど……あのコとのデートを邪魔しちゃ悪いと思って自粛して顔だけ見に行ったの」

台詞の途中で出てきた言葉に腹の底がひやりと冷える。

まさか、と思ったが、思い至るのは一人しかいなかった。

「アンタ……アイツを知って……」

「ええ。貴方のことも、千夜から聞いたから、それで興味を持って」

言葉に混入された親しみの色。

こちらの名前を千夜から聞いたというのなら、この女が一方的に知っているというワケではなさそうだった。

「お前……一体、アイツの何だ」

「まるで恋敵に言う台詞ね。女遊びしてそうな顔の割には意外と青いのね貴方」

「……っ」

顔の熱が一気に上がる。

完全に場の主導権を握られていた。

少女は微笑ましげにクスリ、と笑って、

「可愛いところに免じて、その質問答えてあげるわ」

コトリ、と少女は中身が半分まで減ったカップをテーブルの上に置いて床から立ち上がり、ふわり、と漆黒のドレスの裾を浮かせてベッドの上に座った。

「私と千夜の関係……それは言い表すなら、姉と妹……もしくは母と娘……或いは古くからの友人……他にも探せばいろいろ当て嵌まる言葉があるかもしれないわね」

はっきりしない口ぶりに蒼助の神経は逆立つ。

じれったさに耐えかねて、

「勿体ぶらないで、ハッキリしろっ」
「あ、そ。じゃあ、思いつく限りの関係性全てが当て嵌まるくらい親しい仲」
さっきまでの思わせぶりさの欠片もなくあっさりと答えを返した。
ピキーン、と蒼助の琴線が張り詰め始める。
「てめぇ……俺のことおちょくってんのか？」
「まさか。それはまた今度の機会にするわ」
「……」
やはりおちょくられている、と蒼助は確かな確信を得た。
同時に耐性のない我慢の糸が切れた。
「だぁーっ！！てめぇ、いい加減に……」
ぺらり。
血気盛んな雄叫びと共に、テーブルを引っくり返さん勢い立ち上がった蒼助の前に一枚の写　真が突きつけられる。
写っているのは、
「こ、これはっ……」
「クールダウンしなさい、少年。駆け引きっていうのはキレた方が負けなのよ、知ってた？」
にこり、と花のように笑う少女の指先が摘む写真には、千夜のセミヌード姿。無論、女の。
この瞬間、蒼助の中で少女の位が仏よりも上にグンと上げられた。

「このブツは……」
「名付けて千夜の初ブラ記念写真。まだ女に成り立ての頃に隠し取った一枚よ。ふふっ……あのコったら、自分じゃ付けられないくせに人前じゃ着替えたくないって部屋に閉じこもって必死にホック付けようとして……そんな初々しい光景を写した貴重な一枚」
「……どうやら、今の話は本当らしいな」
「ふふふっ……ちゃっかりしてるわねぇ」

家宝となった一枚をポケットにしまいつつ、蒼助は元の場所に座り直した。
そして、目の前の存在と面と向き合う。

「男だったアイツのことも知っているんだな」
「それどころか、もっと前のことも知ってるわよ」
「……どこまで」
「全部」

全部ときた。

「俺の知らないこともか」
「もちろん……とゆーか、貴方知らないことばかりでしょう？」

痛いところを突いてくれる。
無言を肯定ととった少女は更に続けた。

「これはさっきの質問の答えになるわね。……千夜という存在が辿ってきた過去を知っている、それが私よ。玖珂蒼助」
「……こりゃ、思わぬキーマンの登場だな」

口から出たそれは今の蒼助の心情そのものを表した言葉だった。

顔に出てはいないはずだが、少女はそんなもの取っ払って蒼助を見透かしているように、

「聞きたい？　私が知ってるあのコのこと」

と、こちらの心を弄ぶかの如く尋ねた。

しかし、蒼助は、

「聞きたくねぇ」

その返答に少女の表情が初めて十三そこらの幼い見かけに似つかわしくない微笑ではない驚きのものへと変わる。

予想外、と。

「あら……どうして？」

「他人から聞いちまったら面白くねぇだろ。惚れた女の過去とかは自分で探っていく楽しみの一つだ。自分で聞いて知らなきゃ意味ねぇじゃねーか」

本音を言えば、この場で聞きたいという気持ちもなくはない。

だが、それは押し留める。

そんな蒼助の心の内を知ってか知らずか、少女は艶っぽい笑みを深くした。

まるで、目をつけていたオモチャが予想していたよりも楽しいとわかった子供が喜ぶかのように。

「……面白いわね、貴方。気に入ったわ」

「それって褒めてんのか？」

「ええ。おかげで気が変わったわ……この程度のエサに簡単に食いついてくるようならからかい倒して帰ってやろうと思ってたんだ

けど……貴方が今、最も知りたい質問に答えてあげる。もちろん、気が変わったとあのコのことを聞いてもいいわ」

「そうか。だが、他に聞きたいことがもう一つあるんで、それはねぇな」

「あら、何かしらそれ」

「お前が何者なのか、だ」

「それは……私がどういった存在なのか、と聞いているととっていいのかしら」

無言の肯定で返すと少女は少し考え込むように滑らかなラインを描く顎に人指し指を当て、

「人間じゃないってことは承知してるでしょ？」

無論。むしろ、こんなデタラメな人間がいるなら一度お目にかかりたいものだ。

「そーねぇ……まぁ、とりあえず言葉でいうより実証しましょうか」

そう言うなり、少女が天井の電灯で黒光りする黒髪を手で梳くように掻き上げた。

さらりと細やかに揺れ動いて指の間に引っ掛けられ上がる髪から覗いたものに、蒼助は目を見開いた。

髪が除けられたことによって露になった生え際から生えていた先端に鋭利な尖りを持った奇妙な突起物。

それはあの夜見た、怪物と化した神崎の額から聳えていた、大きさに差はあれど少女が生やすモノは間違いなく角だった。

驚愕に放心状態となった蒼助に少女はクスリ、と笑う。

「こーゆー者です……って言ってもその様子じゃ貴方何か勘違いしてるわね」
「勘違いなワケあるかよ……ってめぇ」

バッと立ち上がり、万が一の為に近くに寄せておいた太刀を引っ掴み、後ろへ滑るように下がり己の安全領域を取る。
いつでも鞘から抜けるように抜刀の体制をとった。
完全な警戒態勢に少女は、仕方ないとでも言うように肩を竦めた。

「露骨ねぇ」
「うるせぇっ！　てめぇやっぱり」
「あの下等生物と同じとでも言いたいの？　……あんな、身の程知らずな塵と、私が……同等の存在だと……本気で言っているの、貴方」

声色の音が一気に低く、威圧的に変わる。
瞬間、室温が一気に下がった。
否、そんな気がしただけ。
蒼助があまりの悪寒にそう思い込んだだけだった。
漆黒の瞳から放たれる圧力に手がカタカタと震え始める。
怖い、という恐怖を蒼助はこれほどまでに実感にしたことはかつてなかった。
弾む会話の中ですっかり忘れていた。

相手が常識外れの“人外”であることを。

まるで百キロの鉄板で圧されいるかのような感覚の中で、蒼助は気が狂わないように正気を留め続けた。

……こ、の……化け物っ……。

激しい圧迫の中では悪態すら喉から出せず、心の中で吐き出すしかない。

しかし、いつまで続くかと思われたその意思同士の闘いも、蒼助がふと身体にかかる圧力がゆるりと和らいだのに気付いたことであっさり終わった。

凍えるような冷たさで見据えていた眼は閉じられており、

「なんて、ね。冗談よ冗談、本気で震え上がっちゃった？」

先ほどとは打って変わって少女はあっけらかんと笑う。

気が抜けると同時に蒼助の身体がガクンと崩れ落ちた。

膝が折れ、床に勢い良くぶつかったが鈍い痛みは遠く感じた。

信じられないが、足に感覚がない。立ち上がることはおろか力を入れることすらも出来ない。腕も同じくダランと下がり、指先すら動かせない。

まるでそれは全機能を停止して、緊張からの開放感に浸っているかのよう。

「でもまぁ、ちょっと腹立ったのは事実かしら。でも、物知らずな坊やには言葉で説明しても伝わるかどうか怪しいし……そうね、こうしましょうか」

外見上は小娘同然の存在に坊や呼ばわりされたことに腹を立てることすら忘れていた蒼助は、ベッドから腰を上げた少女がこちらに歩み寄って来ることに気付き身を硬くする。

その反応に少女は面白そうに笑んだ。

しかし、その行動を止める気配はなく、蒼助の目の前までやって来た。

白魚のような手が伸びるが、蒼助は眼を閉じることすら出来ずただそれを受ける覚悟をし歯を噛み締めた。

「……？」

少女の両腕が蒼助の首に回る。

そして、華奢で未成熟な身体が蒼助の身体に擦り付けられるように密着する。

窓から風が吹き、長くスッと僅かな癖もなく伸びた黒髪が靡いて蒼助の鼻をくすぐる。

鼻孔に入る奇妙な香り。

……花の香り？

シャンプーや香水などという人工的な匂いではなく、正真正銘の本物の花の香りが黒蘭の髪、だけではなく身体から香っている。

まるで、ココに来る前まで花畑の中にいたかのような移り香が漂っていた。

しかしその香りは何故か気が安らぎ、蒼助は尖っていた警戒心すら忘れてその香りに身を委ねた。

「……どう？」

「なに、が」

「血の臭い、するかしら」

「……血の……臭い？」

突然の問いに蒼助は意味をわかりかねた。

だが、しかし改めて嗅いでみてもそんな生臭いものは一切しない。

あるのはこの神経を溶かすような花の香りだけ。

「血の臭いってね……洗っても落ちないのよ？　だから、臭いに過敏な犬とかはすぐにそれを嗅ぎ取る。浴びてもそうだけど、喰らうともっと酷いのよ。何しろ、内側から身体に染み込むからね」
「……それが、一体何を」
「鈍いわね。私から臭わないってことが示すことなんて一つしかないでしょう」
靄（もや）のかかったようなふわふわした気分から我に返る。
言うとおり、人を喰らうことを本能とする魔性に纏わり付く血臭がこの身体からは一切嗅ぎ取れないのだ。
それは、ただ一つの事を証明していた。
「人、食ったことないのか……お前」
「喰いたいとも思ったこと無いし、喰う必要がないからね。だって、私――――」
――――魔性じゃないもの。
ガバッと華奢な両肩を掴み、身体から引き剥がし、また引き寄せる。
「何だと……じゃぁ、その角は……だって」
「退魔師の端くれともあろう者が、妖気ではなく見かけで判断するなんて……頂けない話ね。そもそも、仮に私がそうだとしても夜しか活動できない魔性がどうして昼間外を出歩けるの？」
「……っ」

少女はするりと少し汗ばんだ蒼助の頬に両手を添えた。

「カ・ミ・さ・ま」

一句一句区切りをつけて唇から紡がれた言葉に蒼助は目を瞬かせた。

「私という存在が該当する欄があるとすれば、それくらいかしら」

「……よくも自分をそこまで持ち上げたもんだな」

「……ならば、貴方は何を定義においてカミと認識するの？　敬う人の数？　讃える名声？　授ける加護の強さ？　都合のいい話よ、そんなものは人が己の利益を基準に引いた陳腐で身勝手なデタラメな分け目。例えば、古い人が言うでしょ？　日本は八百万のカミの国だと。あれはなかなか言い得て妙な発言よね。ああいった人間には長生きしてもらいたいものだけど、それに限ってぽっくり逝ってしまうから世の中都合よくいかないものだわ……あ、こほん……話がズレたわね、つまり私が言いたいのはカミを証明する本当に正しい定義なんて一つしかないということ。もっと単純で、原則的で、いい加減で、されどこれ以上に無い明確で正しい証……それは、“ヒトでは無い”……ただそれだけでいい」

「……何だそりゃ」

「だって、その通りなんだもの。世界には大きく分けて本来カミとヒト……永遠の存在（もの）と限りある存在（もの）……その二種類しかいないのよ」

それはおかしい、と蒼助は切り返す。

「だったら何だ、お前は魔性もカミだって言うのかよ」

「あれはイレギュラー。本来、在る筈の無いモノ。それだからこそ貴方たち退魔師はあれらを狩るんじゃないの？」

「うっ……じゃ、じゃあ、化生はどう説明するんだよ」
「貴方たち若い人たちは大分誤った知識を植えつけられているようね。彼等を魔性と同意義の存在と決め付けて妖怪なんて扱いしているのは貴方たち人間だけよ？　他の神々は誰もそんなことは口にしないし思っていない」
「じゃあ、何で……化生はカミと呼ばれない」
「そんなの退魔師の存在誇示の為にご都合に決まってるじゃない。倒す魔が昔より比較的に少なくなっている現代では、そうでもしないとお役目御免だものね……全く、人間って奴は本当に困った存在よね……まぁ、精霊に格下げされてたり認識すらされてなかったりする自然界の小神達よりはマシといったらそうかもしれないけど」

その困った人間の一人である蒼助は何となく居心地が悪くなった。

「カミである証明なんてその身がカミではあれば簡単なこと。人が出来ないこと、人が及べない域にいること、超えられない壁に隔たれていること。人に不可能なことをやってのける超越の者であり、深い深い澱の世界に住む澱そのもの……それがカミ。この島国に八百万、世界に億千万と存在する者達の称」

澱。長い台詞の中に混じっていた言葉に蒼助の意識が過敏に反応する。

「わかった……だけど、お前もあの化け物と同じなんだろ？」
「……それは、どういう意味？」
「同じ、澱の世界ってやつの住人なんだろって聞いてんだ。千夜は言ってた、あの化け物は澱から這い出てきた澱そのものだって……」

少女から微笑が消える。

「その澱というやつがお前達カミの住処なら、お前は知ってるはずだ。あの化け物が何なのか」

「……知ってどうするするつもりなの？」

「……」

「貴方は拒絶した……なのに、何故再び近寄ろうとするの？」

何もかも見透かしたような台詞。

まるで病院での氷室たちとの会話すら聞いていたような口ぶり。

実際聞いていたのだろう。

相手はカミ、常識の外側に立つ奇想天外の者にそんなことを問い詰めても労力の無駄だ。

それよりも、喉の奥で出るのを待つ言葉と思いは別にあった。

搾り出すような思いで、蒼助はそれを吐き出した。

「拒絶したのは……そっちが先だろ」

有無も言わさず、一方的に跳ね除けたのはそちらが先だった。

知る必要は無い、と縋る暇すら与えず払いのけたのはそちら。

「教えねぇつもりなら、そっちに踏み込ませないつもりなら何で俺の前に現れたっ！　ちらつかせるだけそうしてこっちが掴もうとしたらそうやって手を引っ込める……ざけんなよ、人が諦めようとしてたのに何で……」

「何故諦めるの？　たかが一度拒絶されたくらいで……」

蒼助の激しい感情の炎をぶつけられながらも、堪えた様子もなく冷静に淡々と少女は問いかける。

「諦めたのは貴方の意志によるもの。譲れないことなら、それでも尚強く迫れることだって出来るはず。そうしなかったのは、半端な覚悟で踏み込もうとした意思が立て札に気圧されて折れた……そういうことではなくて？」

悔しさに歯噛みする。

その通りで、言い返せないから。

あの時、押し切れず折れてしまったのは確かに当たっていた。

完全なる拒絶に怖気づいたと言ってもいい。

そこで自分は仕方ないと諦めてしまった。

仕方ない、と理由をつけて妥協した。

少女の言うとおり、生半可な興味本位だった。覚悟などとお世辞に呼べないような。

正直、拒絶されて安心してすらいた。これで自分は進んで入り込む機会を失った、と心の中で喜んでいた。

しかし、その直後襲ったのは妙な疎外感だった。

どんなに頑張ろうと決して千夜のいるところへはいけないという自覚。

出来ないとわかってからは、想いが募る一方だった。

“壁”を感じるたびにそれが強くなる。

無理だ、と何度も諦めるように言い聞かせ、挫いた。

今日の氷室の依頼も受けようとしている自分が心の片隅居るに気付いていたが、あえて押し込んだ。

「……俺、は……」

結局、自分はどうしたいのか。

迷いはある。だが、進みたい道は一つしかない。

「俺は……っ」

少女のか細い肩を掴む手に自然と力が入る。
その手の上に温かで柔らかい感触と重みが重なる。
少女は微笑んで、顔を覗きこむに近づける。
目と目が合わせられ、

「ねぇ、近づきたい相手に時間と距離を置くなんてタブーの選択肢よ。逃げ腰と弱腰は禁じ手。覚えておきなさい」
「……あ……」
「あの“壁”はこちら側とあちら側を遮り分ける境界線。貴方一人がどれだけ叩いても輝すら入らないでしょう……そっち側の人間がこっちに来ることなど出来やしないのだから」

また拒絶か、と蒼助の頭に血が昇りかける。
が、

「……《禍神（まがつかみ）》」

突然、耳元に唇を寄せられたかと思えば少女は呟きのようにこう言った。
何のことだがわからないで、目を白黒させている間に少女は蒼助から離れた。

「アレ、そういうものなのよ。奴等のこの名を辿っていけば、貴方はおのずとこちら側に来る事になるわ。否が応でも……ね」

背後の窓が何の前触れも開く。
誰が触れたわけでもなく突然と開いたそこから外の外気が風と共

に部屋に舞い込む。
カーテンと共に髪と衣服をはためかす様子に慄く蒼助に少女は平然と、

「はっきり言ってね、もう時間が無いのよ。じきに嵐が来るわ。貴方に選択の猶予を与える時間は、あまりない。……不順(まつろ)わざる者どもは既に動き出して、あのコに牙を向けようとしている。くだらぬ愚か者たちにあのコを好きにはさせない為にも……貴方には悪いけど、一刻も早くこちら側に来てもらわないと困るの」
「っおい、ちょっと待て！　お前、何で俺にそんなことを教える！　俺に何をさせたい！？」
問い詰めても、少女はクスクス笑うばかりで、

「おやすみなさい、坊や。コーヒーご馳走様」

言葉が終わるその刹那、一陣の強い風が吹く。
思わず目を閉じたが、その後すぐに目を開けて部屋中を見回してもそこに少女の姿はなく、動くものは蒼助と今だはためくカーテンだけだった。
窓に近づき外を覗くが、人が今さっき立ち去った様子は見れない。
少し考え、そもそも窓から出たのではないと気付く。ここに来る時と同じようにして帰ったのだろう。

「ったく、本気で何しに来たんだ……ん？」

足の裏でクシャッと紙の擦れる音とその感触を得る。
さっき風でゴミ箱がひっくり返りティッシュでもこぼれたかと思ったが、見遣った先には見覚えの無い小奇麗なメモ用紙のような紙切れが一枚落ちていた。
買った覚えのないそれを訝しげに見つめ、踏んだことで少し皺が

寄ってしまったそれを拾い上げる。
書き残されている字列を読む。

『有力情報源　ＷＩＴＣＨ　ＧＡＲＤＥＮ

※注意

店長は手強いから絶対に一人で立ち向かわないこと。

攻略アイテム　千夜

黒蘭より　』

読み終わった後、蒼助はどっと肩を落とした。
こういうマメなことをするくらいなら、その口から教えてくれればいいものを。
そうしないのは、あの少女――黒蘭にとって面白くないからなのはわかっているが。

「あの怪物を辿れば……おのずと、か」

あの少女が味方なのか、敵なのかを判断するのにはひどく労力を使いそうだ。
黒蘭が何故自分に手を貸すのかわからない。
何の目的を持って自分に近づくのかも。
あの自称カミ様には謎が多すぎるが、唯一つ確かな自信を持っていえることがある。

黒蘭の言うとおりに《禍神》を追えばあの壁の向こうへ行けると

いうこと。
恐らくは千夜がいるであろう、“澱”の世界に。

「……上等だ、やってやろうじゃねぇか」

黒蘭の言葉どおり、自分は煮えきれずにいた。
今ある退屈だが穏やかな日常への未練とそれとは異なる完全なる非日常に対する好奇心との間で揺れ動いていた。
だが、いざ今への未練を取った時に抱いた別の未練はいつまでたっても消えはしなかった。それどころか時間がたてはたつほど膨らんでいった。
考えて、今のこの平穏がそれほど大事なものなのだろうかということに気付く。
ただなんとなく心に穴を開けたまま生きていたあの時に何か執着すべきものなどあっただろうか、と。
答えは否、だ。
少なくとも執着しているものは別にある。
そう、あの壁の向こう側にいる彼女に。

あのどうしようもないやるせなさにいつまで弄ばれているくらいなら、この先どんな危ない橋でも渡ってやる。

力の入った手の中でメモ用紙がクシャリと潰れる。
それは蒼助の中で、一つの決意が生まれた瞬間だった。

◆　◆　◆

病院内では消灯時間を迎えて一時間が経過し、時刻は夜の十時。

患者たちのほとんどが寝静まる中、個室の氷室は一人起きていた。
ここ暫くずっと一日中ベッドの上にいるのだ。体内時計はとっくに狂って正しい時間帯で来るはずの睡魔には昨日辺りから見かけていない。
しかし、無理に寝ようとする必要はない。この先もう暫くこの状態を強いられるから、時間を気に掛ける心配は今の氷室にはなかった。

――――こんばんわ。雅明君……。

一人のはずの部屋から聞こえた声。
ただし、肉声ではなく、耳よりも頭に直接響くような。

持ち上げられたベッドに寄りかかる首だけをその方向へ向ける。
そこにはこの病院で“普通の人間には見えない”であろう存在となって一年ほどになる老人がいた。
うっすら透けている彼は足音を立てることなくスゥっとベッドの傍らまで近づいた。

――――眠れないのかい？

「ええ、今日来たあの煩い連中のおかげで……少し胸焼けがして、落ち着けないんです」

――――ご両親か。君が本家から東京へ移り住んでもう二年経つのか……早いものだ。

懐かしげに何処か自分を見て過去を振り返る老人の霊に氷室は薄く笑って返した。
三年前、降魔庁への所属をきっかけに東京へ一人暮らしをするこ

とになった。
東京本部への所属と移住はあの男が勝手に決めてしまったことだったが、敬愛する祖父の勧めもあり素直に従った。
関西支部でもなんら支障がなかったはずだが、あえて離れた東京本部に入れた父の思惑はわかっていた。降魔庁の本拠地が何故東京なのかを考えれば簡単なことだった。
国の中心であるだけではなく、この発展都市は日本最大の魔性出没区域だから。夜になれば、数え切れないほどの魔性が外へ溢れ毎夜救われぬ魂をつくる。
無論、そんな領域での任務は危険である他ならない。
例え退魔師であっても、一歩間違えば死ぬ事だってあるほどに。
そんなところへ十三の訓練ばかりで実践経験の浅い少年を追いやったことへ含まれた思いなど、氷室には一つしか思いつかなかった。

あの男は自分の死を願っている。
懇願と言っていいほどの。
自分から次期当主への未来を奪ったプライドから来る憎しみしか抱かない男の考えることなど、それしかない。

京都の本家に帰省するたびに、あの男は自分を見てこう思っている。
まだ生きていたのか、と目で語り。

今ではもう慣れっこだった。
そうでなくてはやってはいけない。
これからも、あの男か自分が死ぬまで憎悪が尽きることはないのだから。

――――雅明くん、一つ聞いてもいいかな？

氷室を追憶から引き戻した老人はそう尋ねた。

「何ですか」

――――東京（ここ）は、君に“善い時”を与えてくれたかね。

その問いに氷室はすぐには答えられなかった。

初めて訪れた時から今日までことの思い返す。

自分の上京の話を遠く離れた青森から聞きつけ、追って来た幼馴染の親友。

高い人口と発展力を誇る喧騒に満ちたこの都市での生活は比較的に静かだった京都の古都に対して最初は煩わしくて馴染めなかった。

実際の魔性と交戦も、思っていたようには行かず、手が及ばずして救えなかったこともあった。自分の求める理想と夢があまりにも遠く、高いことを知って挫けそうになったこともあった。

それでも、今も自分はこうして立っている。

かつて、一つの出会いがあった。

お互い最悪の第一印象。

相性も悪い。

されど、きっとこの先どれだけ苦難が待っており、苦痛のあまりに記憶が擦り切れようともその男のことは何度も確かな形を留めて思い出せるだろう。

古きしがらみに縛られる者たちを多く見てきた中で、ただ一人だけ錆びきっても尚強固な鎖に捕らわれていなかった姿が眩しく鮮明に映ったその男のことは。

沈黙に幾らかの時間を注ぎ、氷室は答えを気長に待つ老人に顔を

向け、

「……はい、とても」

氷室を見て老人は目を軽く見開き、そしてその優しげな目を細め満足げに笑みを浮かべた。

――――変わったのぉ……あの泣き虫だった君が、そんな顔が出来るようになるとは……。

「いつの話ですか。俺はもう子供じゃありませんよ、雅（ただし）さん」

――――君の名付け親の役目を道明から任された私にとっては君はいつまでも子供のようなものだよ。

「……確かに、死んでも貴方に敵わないのはまだ未熟だという証拠かもしれませんね」

そうだとも、と老人は愉快そうに笑い声をあげる。

氷室がバツが悪そうに眉を顰めた時、ベッドの傍らの椅子に置かれていた携帯電話がバイブモードで振動を起こした。

腕を伸ばし、着信表示を見る。

「……玖珂？」

いつもなら決して自分からこちらにかけて来ないはずの相手がこの時間に何の用なのかと訝しげに思う。

しかも、今日見舞いの際に蒼助は依頼を断った。

目的が読めない中、それでも氷室は回線を繋げた。

「なんだ、負け犬」
『お前マジでいっぺん三途渡りきれよ……あー、昼間の依頼のことで話しがある』
「……いくら金を積まれようと断るのではなかったのか？」
『気が変わった。その依頼受けるぜ』

昼間とは打って変わった強気な言葉。
あれほど振り払おうとしていた様子からは想像出来ないほどの。

『ただし、報酬は危険度に相応した分払えよ。それが条件だ』

心に広がっていく歓喜。
それを口にしないように、押さえ込みながら、

「ふん、いいだろう。だが、貴様こそそれ相応の働きを見せるのを忘れるな」

この都市で己に“善い時”を与えた男に、氷室は皮肉じみた言葉で応答をした。

◆　◆　◆

生き生きした表情で電話の相手と話す氷室を見ながら、老人はずっと胸の中にあったものが氷解していくを感じていた。
やはり、この東京で過ごした時は彼に良い影響を与えたようだと確信する。
孤独に泣いていた幼い少年の面影がとても朧げで、今の姿とは結びつかないほどにその青年は逞しく成長を遂げていた。

家族に恵まれなかった自分が友人に孫の名付け親になって欲しいと言われた時から、氷室を自分の本当の孫のように錯覚し始めていた。

特殊な事情ゆえに親から愛されない。ならば、友人と共に代わりに自分が埋める分だけ愛そうと。

末期ガンに侵され、死ぬ間際まで考えていたことは自分が死んだ後の彼の行く末だった。

友人を除けばあの一族は土御門の繁栄の持続しか頭にない。

そんな薄汚いカビの生えた思惑に、青年の未来が押し潰されやしないだろうかと、気が気でなかった。

彼の味方は少ない。自分が死に、友人とて先が長いとは言えない年だ。一族内では唯一の変わり者で正常な思考を出来る味方である友人がいなくれば、彼の助けとなれるのは朝倉の青年だけ。

それが気懸かりで仕方なかった。

しかし、もうその心配はもう無用だと悟る。

あの俗物の父親の勝手を許したのは、この近い未来を友人も見据えてのことだったのだろうと、今ならわかる。

あの窮屈な世界の外へ出し、そこでこそ得られるものを得させる為に。

友を。

現実を。

より強い折れない志を。

その結果は出たと、既に昼間のことで確信していた。

渚が伴ってやって来た、あの青年のことで。

家の知名度に対し、その霊力の低さからおちこぼれ、などと世間では蔑まれているようだったが、連中の眼は余程の節穴なのだろう。

あの男は近い将来に大物に化けるだろうと、断言できる良い眼を

していた。
何か迷っているような翳りが見えたが、あの青年ならどうにかしてしまうだろうと心配はしていなかった。

嬉しくて仕方なかった。
長年見守ってきたこの青年は自分の力で心強い味方を見つけることが出来たのだから。
同時に親離れされたという若干の寂しさもあったが、それでもいい。

もう満足だった。
別れの前に、青年の口から確かな安堵を貰えた。
この魂(みたま)を繋ぎ止める未練という楔も、もはや意味を成さない。

煙のように高いところへ昇るような感覚の中、電話の相手に夢中の青年の顔を“最後”にもう一度、刻み付けるように見た。
最後に見る顔がこんなに楽しそうな顔でよかった、と肩から荷が下りるような開放感を覚える。

――――達者でな……。

肉体を失った身で、声にならない思いを精一杯届くように残す。
己の名をその名に継いだ孫同然の青年に、別れの言葉を。

◆　◆　◆

電話を切り、そこにいるはずの老人の霊を相手にしようと視線をやる。

が。

「……雅さん？」

そこには、誰もいない。

何の存在を感じなかった。

まるで、そこからいなくなってしまったように。

そして。

その夜を境に、氷室は二度と慣れ親しんだもう一人の祖父の姿を眼にすることはなかった。

［弐拾六］　生まれる決意（後書き）

く、首痛い。マット運動なんてクソくらえだ、ちくしょう。自分の運動不足も憎らしくてしょうがないです。
おかげで更新に少しかかってしまいました。
他にもいろいろ理由と事情が重なって当分、少し更新速度落ちると思います。
漫画の原稿描かなきゃならないし、中間ももうすぐだし。
あー、もう一人自分が欲しい。
でも、怠け者だから二倍速にはならない。
ダメだ、こりゃ。

［弐拾七］　澱の番人（前書き）

向けられる笑顔は
無防備にすら見える鉄壁

［弐拾七］　澱の番人

『検索結果　禍神

・災いをなす神。邪神。悪神。』

ＹＡＨＯＯの辞書で検索した結果がこれだった。

なんともシンプルで簡単な説明に思わずぶちり、と琴線が切れる。

「いくらなんでも淡白すぎるっっ！！」

バンッ、とキーボードを叩き椅子を引っくり返して立ち上がる。

途端、背中にチクチク無数の視線が刺さる。

振り返ると、顔に「うるさい」と書いた図書室使用の生徒たちが蒼助を責めるように睨んでいた。

そのジワジワくる攻撃に慄いた蒼助は、全面的に悪い立場もあって素直に倒れた椅子を起こして座り直した。

恨めしげに画面を見つめながら、

「考えてみれば……一般の情報見ても仕方ねぇんだよな」

あの化け物は《禍神》と呼ばれているに過ぎず、本当にそういう存在なのかは肯定できない。

つまり、図書館やインターネット情報を幾ら探索しようとそこで得た情報には何の意味もないのだ。

今頃になって気付き、蒼助はズンッと疲労感に襲われた。

貴重な昼休みを無駄に浪費してしまった。

キーボードの凸凹の上に顔を突っ伏して、

（……やっぱり、あのメモに書いてあったこと頼るしかねぇのかな……）

黒蘭が書き残していったメモには先日行ったあの喫茶店を装ったＳＨＯＰ『ＷＩＴＣＨ　ＧＡＲＤＥＮ』が有力な情報源として書かれていた。

ということは、あの魔術師の店長が何か知っていることになる。

（……でも、魔術師が何で……）

この日本は原住民である日本の退魔師によって裏側の一切は支配されている。

そして、魔術師はその退魔師たちに嫌われており、降魔庁の取り決めによりこちらの事情には一切首を突っ込んだり手を出すことは禁じられている。

退魔師から言わせれば、ヨソ者は余計な口を出すなと言う事なのだろう。

そもそもそんな魔術師にとってこれ以上にないほど動きにくい国である日本に、何故都市のど真ん中で隠れてＳＨＯＰなど経営しているのか。

いつからああしているのかは知れないが、よくもまぁ降魔庁に見つからずにいるものだ、と思わずその強運に恵まれた身に感心を抱いてしまう蒼助だった。

（つーかさ……攻略アイテムが千夜ってどういうことよ？）

何しろ、そのことについて聞いて一度猛烈な拒絶を喰らっている。

下手するとアイテムどころか攻略対象が増える危険性すらあるというのに、と蒼助は黒蘭の思慮が全く読めなかった。

この難易度が高いあたりが、黒蘭自身が観客として楽しむ要素に思えてならない。

（……なろぉ～……こうなったら、何が何でも聞き出してやろうじゃねぇか）

闘志の炎を燃やす蒼助はその第一段階として、

（まずは、千夜をさりげなく誘って……）

「すみません、そこ使っているんですか？」

気配もなく耳元で突然聞こえた声に蒼助は今度は自分ごと椅子と共に引っくり返った。

「な、な、な」

どうして自分はこうも背後から近づかれることが多いのか。そして、それに気付かないのか。無論、近寄る人間全てが気配を消して来るからなのだが。

そんなことを考えながら打ち付けた腰の痛みを我慢しつつ顔を上げた先では、

「あ、驚かせて御免なさい……大丈夫、ですか？」

ブラボー。マーベラス。

ここまで完璧に“顔”を使い分けられるともう賛辞するしかない程の、素ではまず有り得ない儚げな表情でこちらを心配そうに見下

ろす千夜がいた。

「お前な……」

「オーバーなリアクションだな。そんなに驚かれるようなことをした覚えはないんだが」

「普通の人間は気配消して後ろから接近されて耳元で囁かれたら心臓が跳ねるぞ」

しゃがみ込み、周りには聞こえない音量で素に戻る千夜に文句を尻持ちついた状態で文句を言うが、

「普通の人間にするわけないだろ？」

つまり、確信犯だというわけだ。

清々しいまでに爽やかに言い切られるともう返す言葉もなくなる。

「お前から図書室という発想が付かなくてな。パソコン使って何か調べていたのか？」

と、画面を覗き込もうとする千夜の行動に、慌てて立ち上がり庇うように立ちはだかり後ろ手で器用にもページを消す。

明らかな不審さが匂う行動に怪訝な表情をする千夜に、蒼助は誤魔化しを含めて話を切り出した。

「たいしたことじゃねぇよ。それよりも、今日学校終わった後、暇か？」

「いや、今日はバイトが入っているから」

出鼻をいきなり挫かれた。

蒼助はぞりっと勢いを削り取られた気がした。

◆　◆　◆

古い夢を見ていた。
終わったはずの出来事を繰り返す、巻き戻しては再生されるテープに記録された映像を。

同じように終わってしまった『あの人』との、大切な、大切な思い出。

『よ、初めましてだな。名前はなんつーんだ、お嬢ちゃん？』

初めて会った時のこと。
見たこともない綺麗な顔立ちで向けられた無邪気な笑みに芽生えた“想い”の始まりの瞬間。

『さーんず、六歳の誕生日おめでとう』

そう言って手渡しされた薄紫のリボンは他の誰が贈ったプレゼントよりも嬉しかった。
何よりも大切な宝物になった。

『イギリス行っても頑張れよ。それと、イイ女になって帰って来い』

空港まで見送りに来てくれた。

見えなくなるまで、ずっと振り返りながら手を振った。

そして、必ずこの国に帰って来ると自分と彼に誓った。

『よ、おかえりー。すっかり見違えたな三途』

十年の空白の間に行方を眩ませていた『あの人』との偶然の再会。

すっかり自分を変えた年月の中で、『あの人』はちっとも変わっていなかった。

しかし、傍らに長く想い続けて再会し、守り通した女(ひと)はなく、代わりに小さな女の子が彼の隣に寄添っていた。

その顔立ちには幼いながらも彼の面影を強く残されていた。

少女を両腕で横抱きにし、

『紹介する、俺の娘だ。ほーら、パパのお友達の三途だぞー』

少女は無垢な瞳に自分の姿を映し、あどけない表情で、

「三途」

小さな唇が紡ぎだした声は、現実からの呼び声だった。
それによって三途は過去の泉から引き上げられた。

◆　◆　◆

蒼助は愕然としていた。
目の前には目的の店『ＷＩＴＣＨ　ＧＡＲＤＥＮ』が聳えている。
たった今、“ドアを開けて中へ入った”はずの店の前で蒼助は驚愕に身体を震わせた。

「な、何で」

疑問を口にしつつも、もう一度ドアノブに手を掛け開ける。
そして、店内に足を踏み入れるが。

「ま、また……」

二歩目を地面につけることなく、蒼助は再びドアから一メートルほど離れた地点で店の前に立っていた。

「なにくそっ」

めげずに蒼助は再度挑戦。
三度目。
四度目。
五度目。

十回目に失敗して蒼助の息が上がり、折れた。

いちいち無駄に力んで入ろうとしていたせいで、肩で息をするほど精神的にも体力的にも疲労した蒼助は目の前を建物を恨めしげに凝視する。

「……ちくしょう……何で、この前来た時はすんなり入れたじゃねーか……」

十回の挑戦と失敗を経て、気付いた事があった。
それは中へ入ろうと一歩を踏み出す一瞬のこと。
十回中で十回とも、その瞬間に奇妙な浮遊感を感じるのだ。
まるで、そこから外へ運び出されているかのように。
しかもその感覚は、何かに似ており覚えがある。

（って……考えてみればこれって、黒蘭の瞬間移動と同じじゃねぇかっ）

違いは距離だけで、要領は同じだと蒼助は悟った。

「まさか……あのカミ様と同じことが出来る人間がいるとはな……マジでいたかよ、出来る人間。……つーことは、あの店長も……“澱”の……」

カミと同じ、まさに神業の所業を成し遂げる人間までいる。
これが澱の世界か、と蒼助は想像を絶する事実に寒くもないのにぶるりと震えた。
だが恐らくこれもまだ入り口の前に立っている程度に過ぎない。
だとしたら、その先には一体何が、

「――――玖珂？　何をしているんだ、そんなところで」

「千、夜？」

振り返れば、そこにはバイトがあるはずの千夜が学校帰りの様で奇妙なものを見るような目でこちらを見ていた。

「お前こそ、バイトあるんじゃなかったのか」

ああ、と千夜は頷き、

「もちろん。ここが、私の仕事先だ」

と、親指で指差す先は蒼助を苦しめる城塞と呼んでも過言ではないだろう建物。

「お、お前、ここで働いてんのか」

「ああ。まぁ、任される事と言ったら喫茶で注文取りと掃除するくらいだが」

注文取り。

つまりは、ウェイトレス。

それは是が非でも店の制服姿が見たい、と会話の最中にも関わらず蒼助は心の底から叫んだ。

悪魔で心の中でだが。

「話を戻すが、お前ここに何の用だ。まさか、もうあの刀折ったのか？」

「なんで俺が折ったみたいな……じゃなくて、ちげぇ。ちょっと、この店の店長……下崎さんだったか？　……あの人にちょっと話が」

「話？　アイツと一体何を話すんだ？」

「え、あ……そりゃまぁ、色々と……」

何か適当にそれとない嘘はないか、と内心ぐるぐる焦る中で考える。

そんな中で千夜の追求する視線が刺さり、痛い。

針の莚（むしろ）のような状態がいつまで続くかと思われた時、

「玖珂は……三途みたいな女が、好みなのか？」

ぽとりと滴が落ちたかのような呟きのような問いに、蒼助は眼を瞬かせた。

「お前……今、なんて」

俯いていたせいで、顔が見えなかった。

近づき、もう一度先程の台詞を聞こうと試みるが、

「まぁ、別にいいがな。ただし、気合を入れて取り掛かるんだな。アレは見かけと裏腹に相当な根性悪だぞ」

「お前が言うか……じゃなくて待て、俺は別に」

「別に責めちゃいない。それよりほら、中に入りたいんだろう？」

それどころか、うやむやにされたばかりか誤解までされてしまった。

何だか面倒くさいことになってしまったと頭を痛くしていると、

「あ、昼の休憩時間のままだ。アイツ……寝こけて結界張りっぱなしだな」

「結界……？」

「そうだ。三途が店に張ったアイツのオリジナルの特殊な結界だ。招かれないと外から入れないんだ。害意がある人間、または力のな

い人間には建物すら見えない。まんまとひっかかってたみたいだな」

そう言って、千夜はドアノブに手を掛ける。

「おい、それじゃお前だって……」

「私にこの手の術の効果は無意味だ」

千夜はそう言うなりドアノブに引っ掛けられたプレートを裏返すと、躊躇いもなくドアを開けて中に踏み込む。

蒼助は目を疑った。

言ったとおり、何も起こらずすんなり千夜は店の中に入ってしまった。

あれだけ苦労していたのに、こんなにあっさり解決してしまうと妙に釈然としないが、難問を一応突破ということで蒼助は念願の来店を成した。

が、少し目を離した隙に千夜の姿が目の前からなくなっていた。

「三途、休憩時間はとっくに過ぎてるぞ……いい加減目を覚ませ」

困惑していたら、ドアの死角になって見えないところから千夜の声が発された。

ドアを退けて閉じると、客席のテーブルで両腕を枕にし眼鏡を外して眠る三途に千夜が起きるように肩を揺すっていた。

「ん……あれ、千夜……何でこんなに大きくなってるの？」

「お前が寝ぼけるとどうも背中が薄ら寒いんだが……しっかりしろ、もう四時だ。とっくに午後の開店時間だぞ」

え……、と三途はぱちくりと瞬きして壁の時計を見た。

眼鏡なしで時計が見えるのだろうか、と思っていたが、

「わっ。いつの間に……寝過ごしちゃったかな……アハハ」

客を逃していたにも関わらず、三途は脳天気に笑う。

この前の気前の良さといい、店を経営している割には案外儲けには拘らないのか。

呆れる千夜の前で一頻り笑うと、こちらに気付いたのか、

「やぁ、いらっしゃい。また来たの、今度は何をお求めかな？」

と、三途はにこりと人の良さげな笑みを向ける。

こうして対すると、傍目では魔術師、しかもあれ程の高度な技術を操れるほどの凄い人間だとは到底思えなく、蒼助は一瞬だけココへ来た目的を果たすことに迷いを覚える。

「いや、今日は……」

刹那。

「三途、お前個人に話があるらしい」

割り込むように、間を取り持つように千夜の言葉は入り込む。

三途はその代弁に目を丸くする。

「私に……？」

「奥で着替えてくる。それまで、二人で“ゆっくり”話しているといい」

何か含みを感じる言葉に反論を許さず、千夜は奥のドアの向こうへ消えた。

残された蒼助は、一気に後に引けないところまで立たされてしまったと二人になって五秒後に自覚。

「玖珂……くん、だったかな？」

三途は座っていた椅子から立ち上がり、立ち尽くす蒼助に向き直る。

「何？　話って」

ここまで来たらもはや後戻りは出来ない、と蒼助は覚悟を決める。

「俺は無所属のフリーの退魔師なんだが……実は、最近ある仕事を引き受けたんだ……引き受けたはいいものの……いくら探そうが情報量があまりにも少なくて全然進展していない。そこで、アンタにちょっと協力してもらいたいんだ下崎さん」

「いくら探しても得られなかった情報を私が持っているという確信は何処から？」

整った顔に微笑みはずっと浮べられている。

しかし、その笑みは何かと酷似していると蒼助は感じた。

そう、これは“仮面”だ。本性を覆い隠す、あの千夜の仮面と同等の“偽装”。

三途は探っている。仮面越しに、自分の真意を。

ごくり、と溜まっていた唾を飲み下し、蒼助は口を開いた。

「……ある女から流れた情報だ。俺は今……《禍神》と呼ばれる存在について調査している」

言葉の後の瞬間、蒼助は“仮面”が外れるのを見た。

“優しげな店長の仮面”の下から現れたのは、“澱の世界を住処とする魔女”の本性。

「黒蘭か……また、あの女狐は……いらない茶々を入れて引っ掻き回してくれるね」

淑女の仮面を被った悪女とはまさにこんな感じなのだろうと蒼助はつくづく実感した。

先程とは打って変わった腹に何か隠しこんでいそうな含みを感じる笑みを浮かべながら、三途はここにはいない者に悪態をついた。

しかも、見抜かれている。

「玖珂くん、悪いけど……君の質問には一切答えられない」

「ああ、わかってたさ……けど、こういう反応覚悟で来たんだ、それぐらいで折れる気はねぇよ」

「それはそれは……その覚悟って……どの程度のものなのかな？」

“そっちの世界”のヤバさをこの前の体験で知って上で、踏み込むくらいの覚悟はしてるぜ」

この前？と三途の片眉が眉間に寄り動いた。

どうやら、千夜からあの事は聞かされていないらしい。

「ちょっと前まで騒がれていたこの渋谷で起きていた猟奇連続殺人事件あっただろ。あの正確な働きで有名な降魔庁が情報を押さえ損ねた事件だ。その犯人たる魔性が、俺の高校に現れた。そいつは奇妙なことに、頭に角が生えていた……あんな魔性は今まで見たこともなかった……俺も危うく殺されかかった」

「それは災難だったね……で、そんな目にあっても尚こちらに首を突っ込もうとするその心は？」

「……とある理由で、どうしてもそっち側の事情が知りたい。《禍神》を辿れば、“澱”とやらの世界に行けるとあの女は言った」

ちなみに、依頼は口実に受けただけ。

個人の事情で探っていると称するより、その方がいろいろ都合がいいからだ。

ふんふん、と三途は頷きながら相槌を打つ。

そして、

「君の事情はわかったよ……――――――帰りなさい、玖珂くん」

やんわりとしていながらもはっきりとした拒絶が放れた。

「……っ」

「答えられないと言ったけど……言い直すよ。――答える気も教える気もない」

つけいる隙も与えない。

メモに書いてあった「手強い」との表示を思い出し、手強いどころじゃねぇっと蒼助は内心で黒蘭に毒づいた。

相手にターンを与える気がない辺りから舌戦には慣れているようだ。

それだけではなく、口の達者さでは到底敵う気がしないほど上手だと感じた。

「覚悟をして来たと言ったけど、そんなもの無意味だよ？　覚悟すら打ち砕かれる、そういう世界だこっちは。あの女はそういうところは省いて話して君を唆したみたいだね」

「唆した……？」

黒蘭が、自分を？と突然の方向性に蒼助はしばし次の言葉を見失う。

「あれを賢者が何かと勘違いしていると本当に痛い目に遭うよ。あの女はね、決して慈善活動なんかで他人を導こうなんてことはしない。自分の目的の為に、その糧にする為にしか自分から動こうとはしない。あの女の世界は……ただ一人を中心にしか動かないのだから」

つまり、自分をこうしてここまで来るようにしたのは、そのただ一人の為に。

あの捉えどころのない女にそうまでさせる人間とは一体どんな人物なのかと心が移りそうになるが、今はそれどころではなく。

「澱の世界の問題は澱がどうにかする。あの女の手の平の上で踊らされることはない。澱を足場にその上をのうのうと歩く俗世の君が干渉する必要も関心を示す必要もない」

その台詞は訳すと、「部外者は余計な首を突っ込むな」となる。

選ぶ言葉はいちいち容赦がないのは、本当に彼女がいる“澱”は相当にヤバイと切に告げているということ。

それは、助かったのは運が良かっただけだと暗に告げてもいる。

「とにかく、大人しく自分の世界へ帰りなさい。関わっても、君に出来ることはない、何一つ。次からは普通のお客様として迎えるよ、普通に商品も売る」

蒼助はその真意はわかっていた。

全てココでリセットして、忘れろということだ。

《禍神》のことも、“澱”のことも、それに関わろうとしたこと

も、何もかも無に返してしまえと目の前のこの“澱”の番人は言っていた。
だが、それは諦めろということだ。

千夜の隣に立つ事を。

「踊らされてなんかねぇよ……」
「え？」
「アンタの言うとおりだとしても、一つだけ間違ってることがある。俺は俺の意志であの女の手の上で踊ってるんだ。裏があるとわかっていて、俺はあの女の導く方を辿ってココまで来た。そうするしか、俺は目指す場所へ辿りつけねぇから」
「“澱”が君が目指す場所だというの……？　正気？　自殺願望者だって拒否するようなところへ何が目的で来ようというの？」
「アンタが何一つ答えねぇのに、俺に答えさせるのか？　そいつは不公平だろ、そもそも問われているはずのアンタがさっきから質問ばかりじゃねぇか、今だけで三回も。それより前のをカウントに入れないとしても二つ余ってるぜ、その数だけ俺の質問に答えてくれてもいんじゃねぇの？」
「――いいよ。はい、これであと一回だね」
「……。二十年前、この東京で起こった事件について何か知っていることはないか？」

三途の表情が僅かに動く。
微かな目の見開きを見逃さず、

「これは依頼人の、数日前に降魔庁を退職した時に内部で偶然手に入れた事前情報だ。今回の渋谷の事件が二十年前の事件と同じだと上層部の幹部達が話していた。だが、資料庫にはそんな記録は一切残されていなかった。これは俺の勝手な推測でしかないが、同じっ

て事はその事件にも《禍神》が関わっていた、だから記録を消されたんじゃないか！？　澱の事は澱の人間が何とかするだと？　そう言っても、二十年前だけじゃなく今回の事件が表沙汰になったのはアンタたち澱の連中の手じゃ抑えられなかったからじゃないのか！？　自分たちの世界の問題を自分たちの領域内でどうにか出来ないくせ偉そうに人を部外者呼ばわりかよ、ああ！？」

バンッ！、と手元のテーブルに拳を叩き付け蒼助はようやく見えた僅かな隙を怒濤の勢いで攻める。

その結果、表面上全く動じていないように見えていた三途がここで一つ溜息をついた。

「……参ったね、痛いところ突かれちゃったな……まさか、そんな情報を自分で得ていたとは……さてさてこれは予想外だなぁ、どうしよう……」

唸るように考え込むその姿に、蒼助は勝算が見えた気がした。

しかし、三途は蒼助の中で芽生えた微かな希望を踏み砕くかのように、

「なんてね……それは大きなお世話。まさか、今回とその二十年前の事件だけが俗世に漏れた“澱”の問題だと思ってる？　お笑い種だね、玖珂くん。“澱”は君たちの足場となっているすぐ近くにあるのに、たった二度しか俗世を巻き込んだことがないわけないじゃないか。君たちは、そこにある“澱”に気付かず、気付いても無視して来た。記録がない？　それが答えじゃないか、自分たちじゃ何も出来ないから、想像を超える脅威に怖じ気づき有ったことを忘れて関わりを抹消し、全部責任をこちらに押しつけている俗世の君らが、今更こちらの事にうるさく意見を述べて口出しするなんて烏滸がましいにも程があるんじゃないか？　君の言い分は、その無

力で傍観者で勝手で卑怯な俗世の人間の、非常に傲慢極まりない文句そのものだよ」

次々と捲し立てられる俗世（こちら）汚れた部分によっての全てが覆される。正当にして正論。

多少無茶苦茶な部分ですら、正しいように取れてしまう。

これを打ち負かす言葉を持ち合わせていなかった蒼助は、ただ悔しげに睨むしかない。

三途はまだ蒼助の意志が折れていないのを見取ると、それを完全に叩き折るべく己の中から言葉の大槌を選び出す。

「それにね……この化け物の徘徊する“澱”で、無力な俗世の人である君に、何が出来るの？」

振りかぶられ、打ち下ろされた凶器に蒼助の心が大きく揺れ震える。

ぐらぐらと激しく揺さぶられる心を蒼助は必死で壊れてしまわないように押さえた。

あと少し、と三途はもう一度振りかぶるために口を開いた。

「君はこの先何を知ろうと、何も出来ない。全て無意味、わかったら――」

「ちょっと離れた間に、随分と盛り上がっているじゃないか」

割り込んだ声が聞こえた方を、二人は同時に向いた。
店の奥とこの空間を遮る扉に背を凭れさせ、“先程と何一つ変わらない姿”で千夜がこちらを半目で見ていた。

「千夜……」
「面白そうな話をしているな、三途。二十年前？　初耳だな、そんな話。ついでだ、私にも聞かせてくれないか」

に、と笑う千夜。
言葉は穏やかだが、醸し出す雰囲気がただならない怒りを感じる。さっきまでの余裕は何処へ行ったのか、相手が千夜になるなり焦りが表面に浮かび上がる三途。

「千夜、これは」
「あれは《禍神》と呼ぶのか。私は、俗世の人間ですら知っていることを教えられてなかったというわけか」
「せ、千夜……別に、わざと教えなかったわけじゃ……」
「いや、それはともかくとして、やはり興味があるのは二十年前の事件。しかも、東京で今回のような事件が起こったとは……な。ここで聞かなくては、後で後悔してしまうなこれは」
「あ、あの……千夜？　いつ、から話を……」
「“ある女から流れた情報だ。俺は今……《禍神》と呼ばれる存在について調査している”あたりから」

ほぼ最初から、ということになる。
ずっと扉の向こうで立ち聞きされたいた、と。
ちらり、とこちらに視線を向けられザッと血の気が引いた。
一度警告をされたにも関わらず、それを無視してチョロチョロしているとバレてしまった。これは、こちらの立場としても相当ヤバイ、と蒼助は三途に劣らずに修羅場の崖へと追い込まれた。

不意に視線が元の位置に戻され蒼助はホッと一息だが、三途はそれどころではなかった。

「さ・ん・ず」

語尾にハートが付きそうなほど甘い声。

そんな声で甘えられてぇとか呑気なこと考えつつ、蒼助は現在この場で最も肩身が狭い三途に眼を向ける。

引き攣った笑みを浮かべて、たらーり汗を頬に伝わせていた。

それは、普段絶対しない仕草をする時の千夜は怒髪天を突いているからだと知っているから。

「教えてくれるな？」

「……え、と……それは」

千夜の顔から笑みが消え、鋭く貫くような目で三途を射抜いた。

「あの男に知る権利がなくても、私にはあるはずだ。ないとは言わせない。アレは私の問題であり、私がどうにかしなくてはならないこれからの問題だ。その為に、私はアレに関することを……《禍神》を知らなくてはならない。それがわからないお前ではないだろう、三途」

「……」

「言え、言わなければ言わすまでだ……例え、お前でも」

千夜の身体から吹き出し始める暴力のオーラ。

冗談ではなく、本気でヤる気だと悟った蒼助は止めるべきかと迷う。

だが、実際に間に入ったとして、千夜を止める事が出来るのだろうか。

澱の人間である彼女を、しかも怒りに駆られて加減を失っているかもしれない相手を俗世の自分が止められるのだろうか。
空間に緊迫が張り詰めた瞬間、

「……わかったよ、降参降参」

緊張が爆発するかと思われた矢先で、両手を上げて参ったと三途は観念した。
それと同時に千夜の張り詰めていた殺気も霧散した。
さっきまでの怒りは何処へ行ったのか、不敵に笑う千夜が、

「お前のそういう物分かりのいいところ好きだぞ」
「あのね……。まったく……本当に、役者顔負けだよ君の演技は。いつもいつも本当に怒ってるみたいだからわかっていても抵抗できないんだよねぇ……」

演技？と蒼助は台詞中の言葉に愕然とした。
しかも、いつも。
殺気まで出していたアレが演技だとは。
信じられないものを見るような目ですっかり緊迫感とはかけ離れた場を作り上げる二人を蒼助はどっと疲れた気分で見つめた。
そして、いつしかその視線を千夜に絞る。

（攻略アイテム……そういうことか）

確かに、下崎三途をクリアするのにこれ以上にない最適の必須アイテムだった。
下手をすれば最強にして最凶の敵にもなりかねないほどの。
何か手順を間違えれば、そうなっていただろうと考えると頭が痛くなった。

「玖珂、どうした」

完全に疎外されていると思っていた蒼助は突然意識を自分に向けられ、思わず反射的に肩を僅かに震わせた。

そして、顔を見て本当にぶるりと大きく震えた。

「三途が口を割る気になったぞ。コイツこだわりのコーヒーでも入れさせて聞こうじゃないか」

笑っている。

とっても笑顔だ。

しかし、とっても不自然で。

千夜は、こんな爽やかな笑みを浮かべている人間ではない。

今のそれはまるで作り物みたいな笑顔だ。

まるで何かを隠す為の仮面。

まさか、と思い当たる。

三途へと怒りは演技だった。

だが、自分への怒りはどうだったのだろう。

思い出すと、あの一瞬だけ向けられた冷たい視線が妙に生々しく思えて仕方ない。

（……と、すると……やっぱり……）

千夜は怒りの演技の中で本物の怒りも燃やしていた。

ただし隠し事をする三途にではなく、警告を無視した蒼助に対して。

これから話を聞くと言うのに、蒼助は身体が鉛のように重くてしょうがなかった。

［弐拾七］　澱の番人（後書き）

そろそろテスト勉強の期間だから真面目に勉強しようと思ったのに、何故かパソコン開いてキーを打っている今の私。

昨日突然、父親にケータイの契約切りと学校行くバスに乗るのを禁止された。

金かけ過ぎだとか言ってたが……一年以上も続けて今になって気付いたのか、おいオッサン。

はぁー、バス代はバイトで稼ぐ羽目になりそうです。

修学旅行近いのに、ケータイ取り上げられちゃったよ……どうしよ。迷子になるよ（待て

【弐拾八】　識る代償（前書き）

全身に絡みつく、鎖の重さ。
引き摺られるままに、沈んでいく。

【弐拾八】　識る代償

遡るは二十年前。
それは昭和が終わりを迎えるのが二年ほど先に迫った年の冬に起こった、とある事件が全ての始まりだった。

東京のある一角で一人の民間人が殺された。
その人の手によるものとは思えないほど猟奇的な有様から魔性の仕業であることは、すぐにわかった。
一つ奇妙な点が残ったが、その時点では誰も気にしなかった。
日本を影から支える退魔代表機関である降魔庁は表で警察が動く中、裏で通常通り捜査を進めた。何の変哲も無い事件、と誰もがそう思っていた。

しかし、事件の翌日に違う地区で事件は起こった。その翌日も、その次も。全て違う場所で何の接点も無い人間が殺されていった。

そして、最初の事件から二週間、被害者が十人を超えたところで降魔庁は事のおかしさに気付いた。
共通する奇妙な点。それは、降魔庁の眼である《天上の眼》が魔性が出現しているにも関わらず、その事件の連なる現場では、どの場所にも魔性探知の反応を示さなかったということ。
明らかな“異常事態”だと、誰もがここでようやく認識した。

事態の深刻さに降魔庁は捜査を強化に特殊部隊を出動させ、元凶たる魔性を追った。
毎夜続く東京中の捜索と巡回の結果、ついに魔性を発見するまでに至ったが、倒して終わり、という終結は追跡者達には待っていなかった。

魔性を追い詰めその場に居合わせた特殊部隊のメンバー計十六名。
一人残らず、その魔性を前にその命を散らした。
唖然とする降魔庁をその後待っていたのは獲物の逆襲だった。
夜な夜な降魔庁の退魔師が襲撃され惨殺された。
これに焦った降魔庁は各退魔組織に助勢を求めた。

お互い不可侵の条約を張っていた各退魔組織はこの事態を見兼ね、一時それを解きそれぞれ実力者達が魔性討伐に乗り出した。
結果、実力を兼ね揃えた各一族の当主や候補が集い奮闘した末にその魔性を討ち滅ぼす事が出来たが、倒したそれはこれから都市を恐怖のどん底に突き落とす脅威の先兵に過ぎなかった。

現代の退魔の暦（こよみ）に暗黒時代と刻まれる十四年間の始まりでしか――――――。

◆　◆　◆

こぽこぽ、と三つのカップに注がれるコーヒー。
二つは蒼助と千夜。三つ目は、三途自身の自分のもの。

「暗黒時代というのは言葉どおり、不安と絶望の隣り合わせが続いた十四年間のこと。表の方ですら一般人の間では口裂け女などの都市伝説がいくつも産み出され飛び交うくらいに誰もが見えずとも恐怖を感じ取っていた。いつしか、誰も日が暮れて夜が訪れると誰も外を出歩く事はなくなった。家に閉じこもったからと言って、安全だったとはお世辞にも言えなかったけどね」

三つ目のカップに注ぎ始めた三途に、何故と蒼助は尋ねた。
答えたのは千夜だったが。

「お前な……化け物に人間相手の対策が通用するわけないだろう。運悪くな連中は三匹の子豚の兄二人と同じ道を辿ったに決まってる」
「……レンガの家は？」
「狼だったら助かっただろうな」
「……」

蒼助が沈黙したのを確認すると、三途は続きを語った。

「夜は悪鬼邪霊の大行進、と比喩しても言っても誰も否定しなかったよ。何しろ、当時の東京の異名は、“百鬼夜行都市”……皮肉なくらいぴったりだよね。その悪しきの巣窟では退魔師も決して安全ではなかった。十四年の間で死亡した退魔師の数は地方から呼ばれ遠征してきた者も含めて総勢およそ二百を超えた」

蒼助は三途の口から出た事実に、唖然とした。
現在では有り得ない死亡数だった。
大昔よりも比較的に力も数も減ったとはいえ危険に変わりないこの役目には、よく訓練し実力を積んで一人前になってつくものだ。
ちゃんとした実力を兼ね揃えていたはずの退魔師すらそれほどの数だけ魔に敗れたというのか。

「そして六年前、東京を恐怖のどん底に陥れていた元凶は退治され、再び以前のバランスが取り戻せた今に至るってところだね」

湯気を昇らせるカップ三つをおぼんに乗せて、歩み寄って来た三途は席に着く蒼助と千夜の前に二つを置き、自分の分は手に取った。

「と、おおまかな説明は以上だけど……どう？」
「やっぱり、その時の元凶っていうのも……その、《禍神》って奴なのか？」
「そう。アレはまさに人と魔の対立バランスを崩したと言ってもいい。相容れないながらも、戦い続けてることでとれていた常にギリギリとれていたバランスを……ね」
置かれたコーヒーには手を付けないまま、蒼助は更なる質問を飛ばす。
「結局のところ……そいつは、《禍神》って一体何なんだ？」
重要な点だ。
そもそも自分はそれを調べに来たのだから。
「魔性……と言ってしまえばそれまでなんだけど、そういう単純なもんじゃないんだよね。
どうなってあんな怪物が生まれたのか、それは私も知らないし、誰も知らないよ……おそらくね」
おそらく、と言うのは“それを知っているかもしれない人物”に心当たりがあるからだろう。
それは蒼助も同じ。思い浮かぶのはあの黒一色のただ一人だけだった。
「ただね、昔……その当時、ある人がこんな事を言ったんだ。“澱はカミが沈む世界。なら、この澱に侵食された街に巣食うあの連中も、きっとカミだ”、とね」
突然、三途が言い出した言葉に蒼助は眼を丸くした。

「あれが、カミ？」
「ふふっ、蒼助くんったら……その時の私と同じ反応。もちろん信憑性は限りなくゼロだったから私も信じてなかったけど……でもね」
三途はコーヒーカップに口付け、一口飲むと、
「今なら、その言葉もあながちぽっと出のデマカセとは思えないんだよね。神は仏と違って祟ることだってある。民話で人身御供をさせて人を食う神も目にする。神話には世界を終焉へ誘おうとした神だっている。全てのカミが善きと、全能の者が魔に堕ちることが無いと本当に言い切れるのか……とね」
ことり、と三途の手によってテーブルの上に降ろされたカップの音が沈黙の中で妙に響いたように蒼助には思えた。
水を打ったような訪れた静寂。
その中、蒼助は口を開きそれを破った。
「……アンタ、魔術師だったよな？」
「そうだけど？」
「何でこんな事情を知っているんだ？　この国で起こる裏のこと全てに絶対不可侵であるはずの魔術師が……何で、資料から消されていることを……」
「昔、ちょっとある一部の退魔師とつるんでその件に首を突っ込んでいたんだ。と言っても、解決の年の僅かな間にだけどね……二十年前じゃまだ三歳。しかも、七歳から十六歳までの間には日本にはいなかったからね」
「……退魔師とって……魔術師であるアンタと……？」
「信じがたいって顔だね……でもまぁ、世の中に数いる人間の中

にちょっとズレた変人がいるだから、退魔師にそーゆー変わったのがいてもおかしくはないんじゃい？　現に、ココに自分から“澱”に飛び込もうとしている命知らずな変人がいるし、ね」

ぎくり、と蒼助は肩を強張らせた。

触れて欲しくない部分を最後に出したのは、ワザとなのか。

蒼助は慎重に視線を三途からテーブルのすぐ向こうにいる千夜に映した。

カップを片手に目線は伏せられていた。

話が始まってからというものの、千夜は蒼助の思慮の浅い質問に口を挟んで以来、それからは質問はおろか相槌すら打とうとしない。

質問に対するフォローするの声も何処か棘を感じた。

そして、沈黙と無表情が逆に怖かった。

「……三途」

「っ」

震えた後、自分ではないのにビビっている己が情けなくなった蒼助だった。

「この答えにはあまり期待はしていないんだが……いいか？」

「どうぞ」

黙っている間に随分飲んでいたのか、中身が半分ほど減ったカップを置き、

「それほどの大事件を降魔庁は何故、資料から記録を消したんだ？　今回のような事の為に後世に残しておくだったはずだろう」

確かにその通りだった。

あの組織の記録はどんな小さな事件も明確に記される。それも十四年も続いた大惨事。
記録ミスなど有り得ない。

「……さぁ、ね。降魔庁という組織に関しては完全な部外者の私には何とも言えない……まぁ、国家を裏で支える程の大組織なんだから、内側で穏便ではない事情もいろいろある。……知られたくない、残すべきではない事でもあったんじゃないかなぁ」

知られたくないこと？
歴史に残すべきではないこととは？

問われた質問は膨らみ、二つの疑惑に分かれて蒼助の中で膨らむ。

喉が酷く渇き、置かれてから大分経ったコーヒーにようやく手を掛けた。
口に注いだ一口は、

「にげぇ……」
「あれ、ブラックは嫌い？」

注文聞かなくてゴメンねぇ、と謝る三途と視線すら向けない千夜はブラックを平気で飲んでいた。
蒼助はこの場において疎外感を感じずにはいられなかった。

◆　◆　◆

日が暮れ始めた五時過ぎ。

真っ赤に染め上げられた空の下に出た。

「情報、どうもな下崎さん。……あと、俺……午後の営業時間も丸々潰しちまって……」

そんなことないよ、と三途は笑って片手を振った。

「まぁ、半分は私の居眠りだし。こっちの経営なんてカモフラージュのほとんど形だけだから、気にしないで？　それより、私の情報は役に立ったかな？」

「ああ、充分なくらいに。助かった、サンキュー」

礼を言う裏で、蒼助の心の中では複数の糸が複雑に絡まりあっていた。

結局、本筋である《禍神》そのものの正体には辿りつけなかった。

その変わりに出てきた、いくつかの予定外の疑惑、疑問。

蒼助は謎の一つである三途を見据えた。

魔術師であるにも関わらず、記録にも残されていない退魔師の事情を知る女。そして、穏やかさの裏に狡猾な本性を隠し持つ澱の領域に立つ底知れぬ実力者。

《禍神》そのものについて確信を持って答えられる事は知らないと言っていたが、恐らく嘘だ。

彼女の口から語られた話は、悪魔で二十年前の事件にまつわるものだけ。

何だかんだ言って《禍神》については何一つ語っていない。

何より、あの黒蘭が目の前の魔術師を勧めたということは、己が知ることを代わりに語る存在であるからではないのか。

そもそも、何故彼女が二十年前の詳細をあそこまで詳しく知っていたのだろう。

当時の三途は物心もつかない子供のはずだ。
しかも、七歳から十六と問題の十四年間の殆んどを日本ではない何処かにいたのに、何故日本の事情を知っていたのだろうか。
いや、それは仮に海外に届くほど日本の事態が悪化していたと考えれば、大した事ではない。問題は、それほど危険な場所となっていることをわかっていて何故日本に帰国したかだ。

そんな危険で厄介な国に訪れようなどと誰が思うだろう。
それにも関わらず、この国にやってくる理由とは一体何だったのか。
そして、事件が終わった後もこうして喫茶店を模して隠れ住んでまで魔術師に優しくない日本に留まっているのは何故なのか。

謎は明るみになるどころか更に深まった。
深みに嵌まっていく感覚。
これが、“澱”に拘るということなのか。

「蒼助くん？」

ジッと顔を見つめて来る蒼助に三途はきょとん、としていた。
何かを探るように指先を頬や鼻、口元に滑らせ、

「あ、もしかして……顔、何か付いてたりする？」
「いや……やっぱ美人だなって見惚れていただけ」
「上手だね。残念だけど、お世辞で商品安くしたりはしないよ？」
「そんなんじゃねぇって……ひでぇな」

何であれこの女は、これからも眼を光らせておく必要がある。
ようやく見つけた“澱”への扉の鍵になるかもしれない存在だ。
親しくなっておいて損は無い。

身体でたらし込んでおくというのも有りだろう。

「ねぇ、蒼助くん」

「ん？　……なんすか」

黒い目論見を胸の内で巡らせていた蒼助は、三途の顔を見た。

思いの他真剣な表情を浮べていた三途に、蒼助は今度は何だ、と目でわからない程度に身構えた。

「ここまで話しておいて今更だけど、“澱”には拘らない方がいい。これは、本当に君の為に言っていることだから」

余計なお世話だ、と言いたいところだったが、そういうわけにもいかず沈黙で曖昧に応えた。

「俗世の君が“澱”に来るということは、君自身の世界が変わる。それで、そこから見えるものも、変わる。知らなければよかった、と後悔することも知る事になる。そして、元の世界にあったものを失う。大切なもの、かけがえのなかったもの、続くと信じてやまなかったもの……それら全てが、己の意志に関係無く周囲から取り去らされる。それが、澱に沈んでいくということなんだよ」

遠くを見透かすように手の平を見つめる三途。

先程までの姿とは打って変わった儚い様子に蒼助は驚き、そして悟った。

彼女は、澱に来ることで何かを失ったのだと。

失った果てに、澱に辿り着いたのだと。

彼女が何を失ったかは知れないが、自分はこの先を進み、引き換えに何を失うのだろう。

「三途」

思考を切り、声のほうを見遣るとちょうど入り口を塞ぐように立つ三途のすぐ後ろには千夜がいた。

「今日は帰らせてもらってもいいか？　……接客が出来るような気分じゃない」

そんな千夜の言い分に蒼助は呆れる。
普通のバイトでそんな無茶苦茶な我侭が通るわけがない。
体調が悪いながらともかく気分じゃないなどと。
しかし、

「そう、じゃぁ今日は帰りなさい」

通った。
当然のように要求した千夜も千夜だが、同じようにすんなり応じる三途も三途だ。
これが雇う者と雇われる者の関係なのだろうか。
それ以上の、何か特別な関係性があるように思えて仕方なかった。
疑問が、また一つ増えた。

「蒼助くん、途中まで千夜と一緒に帰ってくれないかな？」
「は？」
「は、じゃないでしょ。男の子なんだから、それぐらい引き受けてくれない？　一応、このコ女の子だから」

一応、という部分への含み。
この人物も千夜が男だった過去を知っているのか。

しかし、今のこの状態での二人で帰るという行為は自分の首を絞めるような気がしてならない。立場として、蒼助は非常に弱いところにある。そして、千夜は蒼助に対して不穏な態度を保ち続けている。

こうでなかったら底知れなく嬉しくてしょうがない絶好の機会が今は心苦しい。

「え、ああ……その」

「そうだな。逢魔ヶ時はいろいろと危険だからな……一緒に帰っても構わないか？　このまま一人で帰るのは心細いんだ……お前さえ良ければの話だが」

作られた伺うような笑みと共に紡がれる言葉。

断る自由は無い、と暗に言われていた。

◆　◆　◆

帰路。東京の灰色の空で濁った朱色が頭上のある。

互いに無言を保ちながら帰路を辿っていた。

途中、数名の同じ高校生と思われる集団がすれ違う。

通り過ぎた後、ちらりと後ろに視線を送れば揃いも揃ってこちらを興奮気味に見ていた。正確には、千夜単体をだろうが。

じろり、と睨んでやると慌てて素知らぬ顔を作って誤魔化し、早足で遠ざかっていく。

溜息を一つつく。

これが初めてではなく、五回目くらいの出来事。
若者だけじゃない。いい歳超えた脂の乗った四十過ぎのオヤジですら年若い女子高生相手に頬を染めて振り返っていた。
その度に威嚇をして追い払っていた蒼助はすっかり不機嫌だった。

黙っている千夜を視線だけ下げて見下ろす。
どの角度から見ても千夜の美貌は見事なものだった。
しかも、化粧などの飾り気はないにも拘らず年不相応の天然の色気まで漂っている。
魔性の女、とはよく言ったものだ。

そんな極上の女を傍に置いて歩いている蒼助は、満足感や優越感などを抱いてはいなかった。
あるのは、誰かにこの少女を欲望対象として見られていることへの嫌悪感と怒り。
一言で言えば独占欲だった。

女どころか、“何か”に対してこんな感情を抱いたことは無かった。
縛りつけたいほど大事だと思ったことなく、渡したくないほど惜しいと思ったことは今までなかった。
身体の結びつきという見かけだけの浅い関係しか知らなかった蒼助は、この恋にどっぷりはまってしまっていた。
考えてみれば、千夜に出会わなかったら何も変わらずつまらない日々を食い潰して生きていたかもしれない。

（……いや、かもしれないじゃねぇよな……）

仮定ではなく、間違いなくそうだったに違いない。
何故なら、あの夜から全てが始まったのだから。

『俗世の君が“澱”に来るということは、君自身の世界が変わる』

世界ならとっくに変わっている。

千夜という“澱”に出逢った、あの時から。

そして、《禍神》という存在が蒼助自身を更なる“澱”の深淵へと導き引きずり込む。

（ここまで来て……今更後戻りなんか出来るかよ）

もう決めた。

己の隣を歩くこの少女と対等になるのだと。

俗世と澱を隔てる“壁”を決壊させるのだと。

「……」

店を出てから千夜は一言も喋らず、幾度も向けられるすれ違いざまの視線すら気にもかけず、ただ蒼助の隣を歩いていた。

気まずく、何処かプレッシャーを感じる沈黙を伴って、蒼助も歩調を合わせるという自分にしては珍しい気を遣いながら、口を開くことなく千夜の隣を陣取って歩いた。

空気が重い。

この前の休日に同じように歩いた和やかなあの時が今は酷く懐かしくて仕方ない。

何故こんな沈黙が己と千夜に付きまとうかは、理由はわかっている。

その理由が、千夜を今静かに怒らせていた。

情報はいくらか手に入ったが、その代償は蒼助にとっては非常に大きかった。

何か話題を、とさりげなくピリピリした空気を和らげようと蒼助

は考えを巡らせ、

「……あ、のさ……野暮なこと聞くみたいだけどよ」

「なら聞くな」

会話のキャッチボールは受け止められず、思い切り打ち返されて蒼助を通り過ぎた。

（なにくそっ……）

これぐらいで折れてたまるかと蒼助はやや強引に会話を繋げた。

「……下崎さんとお前って……随分親しいよな。雇い主と店員っていうよりは、なんかダチって感じがするんだけど」

「……保護者みたいなものだ」

「ふーん……まぁ、アレは確かにそんな感じだよな」

うんうん、と頷き。

あの甘やかしっぷりは親ばか顔負けだ。

「にしても、どうなったらあんな風に溺愛されるようになるんだよ……もしかしたら、お前に気があんじゃ……」

「どうだっていいだろう。お前には関係ない」

有無を云わさずの一刀両断。

手酷い仕打ちに元々あまり丈夫ではない蒼助の忍耐の糸もピンと張りつめ、

「っ……あのなぁ、何でそんなに怒んだよ……確かに、お前の警告無視したのは悪かった。けどな、俺にだって譲れねぇ事情って奴

があ……」

千夜の足が止まる。

それにつられて止まった蒼助の目に飛び込んできたのは冷たく突き放すような千夜の眼差しだった。

「……お前は、もう少し利口な奴だと思っていた」

凍えそうなまでに低く下げられた声。

それに蒼助の中で嫌な予感が募り出す。

「か、千夜？」

「譲れない事情とは、依頼に組み込まれた報酬のことか？　たかが、それだけの為に命を危地に立たせるような愚かな男だったとは思わなかった……」

待て、と誤解を解こうとする声は千夜のそれを許さない視線で遮られた。

「説教をする気はない。そんなことをできるほど偉い立場ではないからな。だから、最低限の言葉をくれてやる」

緋色の影に帯びた千夜が形の良い唇を動かす。

そして、ただ言い渡した。

説教でもなく叱咤でもない、

「見損なった、好きにしろ。お前など、もう知らない」

拒絶の言葉を。

◆　◆　◆

紺一色の空になった頃。
白い病室で氷室はベッドの上、渚は折り畳み式椅子に腰掛けて見ていた。
世にも奇妙な珍獣を。

「……」
「……」

二人の沈黙の中、珍獣は唇を動かし言葉を紡ぎ出す。
その声はかなり小さく、速い。聴く側にはあまりにも苦しい。
氷室と渚は互いに顔を合わせ、目で会話する。

あれは何だ、と。

そして、再び視線を戻す。
聞き取れない言葉を続ける珍獣――蒼助に。

「……以上、調査報告は終わりだ。で、何か質問はあるかお前ら」

渚と同じように椅子に座り語っていた蒼助が顔を上げ、二人に対して言う。
その声も、小さく頼りない。
聞き取りにくい事この上ない喋り方をする蒼助に渚は、“その様子”に引きつつ、下手な刺激は与えないようにと警戒体勢に入っている小動物を相手にする要領で控えめに手を上げ、意見を主張する。

「あー、えっと……ちょっと、声が」
「何を言っているかさっぱりわからなかった。もう一度、一から内容を語れ、今度は大きくゆっくりと聞き取れるようにだ。わかったら、イエスと言え馬」

鹿、と最後の一言を言わせる前に渚は光速の反応で両手で口を押さえた。
空気は読めているだろうが、気遣う気がまるでない相棒の言葉に冷や汗かきつつ、半分ではこのおかしな珍獣がいつもの友人に戻るのではないかと期待した。
が。

「ああ、悪かったな……それじゃぁ、また最初から」
「わぁーっ、もういい、もういいからっ。聞いた、聞こえたよちゃんと」

悪かった、と言いつつもちっとも改変の様子のない声量から、この天敵の喧嘩上等を固めたような言動でも効果はなかったと渚は判断した。

「あのさ……なんか、あった?」
「何が」
「いや、何か……落ち込んでるみたいだからさぁ」

落ち込む。
そんな言葉とは無縁だとばかり思っていた男が今目の前でそれを体現している。

奇妙。
不思議。

不気味。
恐怖。

様々な言葉が混ざり合って、ミックスした結果が“珍獣”だ。
これは蒼助をよく知る人間であればあるほど、深く浸透するだろうと渚はしみじみ思う。

「……別に」
「いや、そんな腹の底から溜息吐きながら言われても説得力ないし」

かつてない落ち込みように渚は戸惑いっぱなしだった。
氷室も同様。見た感じではそうは見えないが、なっがい説明が終わるまで突っ込めなかったのが事実だ。

「別に、何でもねぇよ……心配なっしんぐ」
「その言動がこっちの不安を煽るんですが」

本格的にヤバいのでは、と思った矢先、

「今の話を聞く限りでは、肝心のあの魔性……《禍神》という存在についてはまだ何一つわかっていないようだな」
「ああ。だが、今日話しを聞き出した魔術師はまだなんか隠してると俺は見ている」
「その根拠は」
「あの魔術師自身にも謎が多すぎなんだよ。最初の事件の頃はまだガキで、事件が多発している間はほとんど日本にいなかったのに、何でこんなに詳しく知っていると思う？　それも日本においては不可侵条約に縛られる魔術師が、だ。　そもそも何でそんな危ない時期に日本にわざわざ帰ってきた？　しかも、事件が終わって六年も経っているにも関わらず日本に隠れ住んでいやがる……どう思う、

氷室」

沈黙をおいて、

「……その魔術師の名は？」

「下崎三途。一歩間違ったら、“下先三途”だぜ？　すげぇ名前だよな」

「……さん、ず？」

確かめるように、氷室が呟く。

それを見た蒼助が怪訝な表情を浮べる。

「何だよ、どうかしたのか？」

「いや、何でもない。……引き続き調査を続ける際はその魔術師から目を離すな」

「言われんでもそうする。じゃ、今日は帰るぜ」

と、蒼助は椅子から立ち、颯爽と部屋から出て行こうとする。

それを見ていた渚はホッと一息ついていた。

見間違いではないのは確かだが、何だかいつの間にか蒼助の調子が戻っている。

何があったかは知れないが、この調子ならきっと大したことではないのだろう、と渚は踏んだが。

――――ゴンっ。

硬質物同士がぶつかり合う。

足が縺(もつ)れた蒼助が閉まったドアにバランスを失った勢いで、前の

めりに倒れ頭を打ち付けていた。
間抜けな光景に、氷室と渚は言葉が出なかった。
音の割にはさして痛くなかったのか、蒼助はずるり、とそのまま顔をこちらに向け、
「……じゃあな」
活気の無い声を残した蒼助は取っ手に手をかけた。開いて、閉じるドア。
蒼助がいなくなった後、
「本当に何があったんだろ……」
「知らん」
そして、病室に謎が残された。

◆　◆　◆

頭の中でリフレインする言葉がある。
――――お前など、もう知らない。
氷のように冷たい眼差しに拒絶を込めて投げつけられた突き放し。
あれから何時間経とうと、初めて言われた時と同等の疼きが蒼助に訪れた。
「……どーすんのよ、俺」

ベッドの上で黒のランニングシャツとズボン姿になって天井を見つめながら自分を責めた。
三途のように演技や冗談ではなかった容赦ない怒り。
言って千夜がさっさと帰ってしまった後、蒼助は五分ほどその場で凍り付いていた。
何とか立ち直って、気分なおしに収穫した情報を片手に氷室のところへ行ったが受けた傷は時間の経過と共に癒えることはなかった。
寧ろ、時間が経てば経つほど痛みがより増していく。

「俺って意外とデリケートだったのな……知らんかった」

脳裏に浮べるあの時の千夜の顔。
本気で突き放す表情に、胸の奥がジクジクと痛む。
蒼助の中の問題は今や“澱”とは別のものにすり替わっていた。
千夜との関係に入った亀裂をどう修復するか、だ。
今の蒼助にとってはそっちの方が優先地位が上である。
自嘲する。
女一人にこんな風に一喜一憂するとは、昔の自分が見たらどう思い何と言うだろう。

「くくっ……きっと、こんなの俺じゃねぇって認めねぇだろうな」

手で額を押さえながら思い浮かべた想像に笑いを漏らす。
一人の女に夢中になるなど、こうなるまで想像もつかなかった。
ここ数日、女をひっかけることも、セフレの誘いにも乗っていない。
今の蒼助にとって、そんなものは全て眼中になかった。
この腕に抱きたいのは、ただ一人。

「なぁ、神崎……今なら、お前の気持ちちったぁわかるぜ」

今はいない、かつて千夜に妄執的なまでに執着していた男。
人を捨ててまで力を求め、その果てに滅ぼされた。
今気付いた。
あの男と自分は根源は同じだ。
現に、彼女が手に入るなら悪魔に魂を売り渡したって構わないとすら思っている。あの神崎のように。
欲しいものは何がなんでも手に入れたい、という貪欲な神崎の本質が自分にもあったのだと思うと非常に腹立たしいが。
だが自分がこれが初めてだ。欲しい、と何か求めるのは。
後にも先にも、こんな欲を抱くのはこれを最初にして最後にする。
この手に既に荷物があって抱えられないなら、そんなもの捨ててやる。
彼女が手に入らないなら、必要(い)らない。
だから、

「……なぁ、神でも悪魔でもいるなら叶えてくれよ」

誰にかけるわけでもない言葉を懇願として紡ぐ。

「全部くれてやるから」

だから、千夜を。

「ならば、引き換えに汝のその望み……叶えよう」

室内で響いた濁った声。

同時、電灯の明かりが不自然な点滅を始めた。

「――――っ！？」

蒼助はベッドの上から跳び起きた。

辺りを見回すが部屋の何処にも“声”を発した存在らしきものは見当たらない。

何が起こっていると、警戒心を募らせたその時、蒼助は視界の端で“異常”を捉えた。

振り向いた先では空間にぶれが生じていた。

まるでモニターに映る映像が砂嵐によって荒らされているように、『何か』がそこで姿を乱されながらも“在(い)た”。

僅かに特徴として確認できるのは辛うじて人の形を留めている“それ”の顔や全身に巻きつく黒い布のようなローブ。

まるで己の存在を不穏と誇張するかのよう。

全身を駆け巡る悪寒。

空間の乱れによって明確な姿が見れない存在に対する、人為らざる者への恐怖だった。

吐き気をもよおす嫌悪感。それは、あの夜学校を覆った結界から

感じた良からぬ力の“質”。
悪しき存在。脳裏に駆け巡る一つの言葉。

「……ま、がつ……かみ？」

だが、形が違う。
神崎が《禍神》だったなら、これは違う。
物の存在としての大きさが、違いすぎる。

「け、い……やく…っ…を……」

雑音交じりの声が紡いだ。
契約。
一体何のだ、と蒼助は声にならない疑問を放った。

「我は、……なん、じの……望、みを……聴きとめた……叶えよう、故に契約を……結ぼうぞ……」

“それ”はじわり、と蒼助ににじり寄る。
蒼助はベッドの上で引き摺るように後ろに下がる。
頭と背中に硬いものがぶつかる。壁。
これ以上下がれないところまで来た蒼助は戦慄しながら、ただ止まる気配のない“それ”を瞬きさえ忘れて両目で捉えるしか出来ない。

「……契約を、今一度望みを……汝の全てと引き、換え、に……汝も……あ、の男の……ように……人であることな、ど……棄てよ……」

肉が腐乱した臭い。それを嗅がされいるような感覚に陥る。

黒布の中から青白い筋張った手が伸ばされる。
振り払わなければならないと思うのに、本能がそれを抑える。
受け入れろ、と心のどこかで底知れない闇を招きいれようとする自分がいる。

「さぁ、今一度……のぞ、みを……」

骨を皮で包んだような手が眼前まで迫る。

「――――何をしている」

第三者の声。

手の進行が止まる。
蒼助は見た。
異形の背後に立ち、その首を片手で握り締める新たな見知らぬ男を。
“それ”は突然現れたその男の存在に僅かに怯んだ様子を見せたが、負けじと威嚇する。

「……っ？　……なに、やつ……じゃ、まだ、てを……するな……」

「邪魔は貴様だ、落ちぶれが。戦局を動かす手駒を増やしたければ、他を当たれ」

男が握りつぶすようにその首を絞めた。
この世のものとは思えない絶叫が鼓膜を突き破る勢いで響き、黒布が千切れ飛ぶ。
部屋の明かりの点滅が止み、完全に消えた電灯。
暗がりを照らすのはもはや窓から差し込む外の淡い光のみ。
男は宙を舞う一切れを掴み取り、手の平に乗せた。
布切れは煙のようにそこから消失した。

「……迂闊に欲望を曝け出すな。もはやこの街では心内で願うことすら自殺行為に等しい。僅かな隙も奴等は見逃さん」

人目を惹く闇の中でも映える青い髪。
長いそれと部屋の暗さで顔は見えない。
現代には似つかわしくない、古い時代に取り残されたような異国情緒漂う全体が青に強調された衣服と両肩を覆う青の鎧。
まるで誰かが夢見た幻想かた飛び出てきたような民族衣装を纏った男は蒼助に向けてそう言い投げた。

「お前……一体――」

次の瞬間、襲った衝撃。
首がもげるのはではないかと思うほど勢いよく首を掴まれた。

「っっ……がっ……は、」

器官を締め付けられ、僅かにしか取り込めない酸素。
ギリギリ……とジワジワと徐々に強められていく握力。

突然のことに蒼助は状況を飲み込めず、目を見開いて自分の首を片手で絞める、自分を“先程救った”男を見た。
唯一見える唇が凶悪に歪む。

「何だその目は……何故、とでも言いたそうだな。ならば、逆に問おう。何故、吾(おれ)が貴様を助けたと思った？　この吾が、何故？」

息苦しさに意識が霞み始める。
その中、追憶からある事を思い出す。

屋上で死に掛けていたあの時に響いた声。
己の意識を最終的には沈めた、あの声と男の声は同じだった。
思い出すと同時に意識を覆っていた霧が一気に晴れる。
再び正気に戻った瞬間、蒼助の視界に映ったのは自分が見知る部屋ではなかった。

――――っ…んだ、これは……！

見上げる先は何処までも暗闇。
そして、下は膝まで足が浸かる水が張っていた。
突然、周囲から消え去った現実。それとも自分が現実から切り離されたのだろうか。
異空間に青髪の男の声が木霊する。

「驚くか。まぁいい、そのうち慣れろ。これからお前はこの躯が朽ち果てるまでこの下で沈み続けるのだからな」

直後、蒼助の足下がぐらついた。
ガクン、とバランスを失う感覚。水の下にあったはずの足場が突如無くなっていた。

底なし沼のようにずぶずぶと身体があるかどうかもわからない底に沈んでいく。
腰まで浸かった蒼助に対し、男は何の異変もなく首を掴んだままだ。

「く、ははははははははっ、沈め沈め！　お前が身体を使っている間に吾が沈み続けた沈み続けた常闇の底に！」
「てめっ……がぼっ……っっ！」

藻掻き暴れているせいで立つ波に呑まれかけた。
もう肩まで来ていた。

「先程あれを追い払ったのは、貴様が浸食されると吾（おれ）にも及ぶからだ。くだらぬ契約を呑み、ようやく得た身体だ。魔性に堕とすわけにはいかなかったからな……」
「何を……わけのわかんねぇことばっか言いやがって……っ一体何なんだよ、てめぇはっ！！」

口に入り込む水を吐き出しながら放った激昂の言葉に男は笑みを深くし、身を屈めて首から下が水の下に沈んだ蒼助に囁いた。

「このような表現は些か不愉快だが……まぁいい。吾は――――」

男の告げた言葉に見開いた瞬間、それを最後に蒼助は水の中に堕ちた。

◆　◆　◆

息苦しさが一転し、押さえつけられていたような圧迫感からの開放によって肺の急激な酸素の吸入に咽る。
それが蒼助の意識の覚醒だった。

「っげほっ……げほっ……ぐぇ……」

身を撓らせ、横になっていた体が跳び起きる。
酸欠状態から呼吸が落ち着くまで時間を置き、蒼助は我に返ったように周囲に目をやる。
自分の家。見慣れた部屋。ベッドの上。
電気が消えた薄暗い部屋で蒼助は自分がいる環境を呑み込んだ。
そして、記憶を巡らす。
嵐のように起こり、過ぎ去って行った出来事。
今、それはまるで無かったかのように蒼助の記憶の中にしか痕跡が無い。
眠りの中の夢のように。

「夢……？」

思ったことを声に出して繰り返した。
口にしたことで、それは幾らか現実味が増した。

「そうだよな、夢だよな……だよなー」

繰り返すことで疑問を抱くもう一人の自分を丸め込む。
額に滲んだ汗を拭い、もう一度寝直そうと蒼助は身体を仰向けに横たえた。

壁の時計を見る。
まだ二時過ぎだった。
いい夢を見直す時間はまだ充分ある。
そう言い聞かせ、蒼助は目を閉じた。
夢と済ませるにはあまりにも生々しく残る記憶も。
首の痛みも。
全て覆い隠すように。

しかし、眠った蒼助を待っていたのは、安らかな眠りではなく同じ悪夢だった。

［弐拾八］　識る代償（後書き）

長ぇ……詰め込みすぎたか？

とりあえず、千夜と仲違いしてしまいました（ほぼ一方的だが

今後の問題はそれと最後のなにかの予兆。

前者は案外あっさり片付くけど、後者は引っ張るぞー。青い人（おい）が何

て言ったかはまた今度にー。

［弐拾九］　距離は遠のいて（前書き）

想いとは裏腹に、その背中は離れて

［弐拾九］　距離は遠のいて

放課後の職員室。
今日一日の授業は終わり、部活の顧問などで何人かの教員が出払っているそこのある一カ所で、

「聞いてくださいよ。昨日、エラい夢見ちまって」
「ふんふん」
「セフレとヤってる最中の夢だったんですがね、いざ突っ込もうとしたら下の女がムキムキのマッチョ野郎にすり替わってて。幸い、俺が逆に突っ込まれそうになったところで目が覚めたんすけど、その後は続き見そうで怖かったからほとんど寝てなくて」
「ははっ、そりゃ災難な夢だな。――――だ、そうですよ堀田（ほった）先生」

「ふ、ふざけるなっ！」

顔を赤くして――――実際左頬が赤く腫れている――――頭部の毛が儚いご様子の中年教師が蒼助（そうすけ）と蔵間（くらま）に向けて唾を飛び散らせながら怒鳴った。
怒りに震える教師・堀田はビシリ！と蒼助を指差し、

「玖珂ぁっ！　そんなデマカセが居眠りの言い訳として通用すると思っているのか！　嘘をつくならもう少しマシな嘘をつけっ！」

教師が嘘の洗練を要求するのもどうもな話じゃないのか、と聞き耳立てる周囲の人間は思ったが表面では素知らぬ顔で静かに荒れるその場から退室していく。
己の独壇場と化したそこで堀田の熱はヒートアップする。

「日頃の行いの悪さが夢に現れるんだ！　寝ぼけていたとはいえ、貴様は教師である私を殴ったんだぞ！　停学……いや、即刻退学だ退学っ！」

無茶苦茶言う堀田に聞く耳持たずもう帰ろうか、と蒼助が逃亡を図ろうと思い始めた時、

「まぁまぁ、落ち着いてくださいよ。悪意があったわけじゃないんですから、夢見た衝動じゃ不可抗力ですよ、不可抗力。大目に見てやりましょうよ」

抑えて抑えて、と対照的に呑気に笑う蔵間に堀田がギッと睨む。怒りをぶつける標的を変えたようだ。

「そんなことだから生徒に舐められるんですよ。生徒と仲が良いのも良い事ですが……貴方も、もう少し教師としての自覚をもって対応を改めたらどうですか？　少なくとも、こんな自分の分も呑みこみ切れない出来損ないをきちんと管理出来るくらいには」

この手の人種は口先だけしか能だけに嫌味が非常に達者だ。しかし、頭の固い古株教師連中から若くて生徒に人気があるというのが気に入らないことから散々グチョグチョ言われている蔵間にはもうこれくらいじゃ琴線を揺らすことすら出来ない。

だが、この男の説教の長さとねちっこさは生徒と引けをとらないくらい重々と目をつけられている蔵間も知っていた。

それがこれから一時間ほどかけて始まろうとしていることも。

冗談じゃなかった。

だから、

「堀田先生、説教は勘弁してくださいよ……それよか今日って木

曜ですよね？」
「それがどうしたっ」
「良いんですか？　木曜は“あのコとしっぽりお楽しみの日”でしょ」

底意地の悪い笑みを浮かべて蔵間が放った言葉に堀田の顔が赤からさー……と青に変色する。

「く、蔵間先生……一体何を」
「心配しなくてもちょっと顔が変形してても向こうも気にしはしませんって。どうせベタ惚れなのはアンタがくれるお小遣いなんだろうし」
「ま、待てっ何の話を……」

先程の上から見るような嫌みを言っていた口は何処へ行ったのか、可哀想なくらい言葉をつっかえながら蔵間の言葉を遮ろうとする。
脂汗かきながらの必死な堀田の姿に蔵間はそのみっともない様子が楽しくて仕方ない蔵間はトドメの一撃を放つ。
左手首の腕時計を見ながら、

「そろそろ四時っすよ。早く行かないと乗り替えられちゃいますよ――――――ぱ・ぱ」
「――――……っっ！！」

お、お先に失礼するっと堀田は大急ぎで自分の机の上で鞄に荷物を詰め込み、逃げるかのように脱兎の勢いで職員室から飛び出していった。
ぽつんと二人だけに取り残される。腹を抱えて爆笑している蔵間に目を遣り、蒼助は訊ねた。

「なんすか今の」
「ははっ……あー腹いて……あのオッサンな、普段俺らに散々偉そうな口きいてるけど、ここだけの話――実は自分の娘と同じくらいの女子高生とエンコー中」
「うえ、マジで？」
「マジマジ。新條筋の情報だから間違いない。実際、俺、聞いた待ち合わせ場所に確かめに行ったし。“パパ”、なんて呼ばれて腕組んで鼻の下伸ばしてさー……全く、傑作だったぜありゃ」

それは良い事を聞いた。
今後はそれをエサに奴の説教から逃れるとしよう、と蒼助はほくそ笑んだ。

「で、蒼助……本当のところはどうなんだよ」
「あん？」
「顔色悪いぜ。ただの寝不足ぐらいで、そんなになるか。魘されて無意識に堀田殴ったくらいなんだ、大層おっかない夢だったんじゃないのか」

目でわかるほどか、と顔を何気なく撫でる。

「ま……ちょっと、夢見が悪かっただけっすよ。後味の悪い奴でさ……」
「さっきの冗談よりも性質（たち）の悪い奴か？」
「ああ……――っっ」

突然、何の前触れもなくこめかみに走る鋭い痛みに蒼助は言葉を噤んだ。
苦痛に歪んだ表情を見た蔵間は気遣うように訊ねた。

「おい、大丈夫か？」
「あ――――何でも、ねぇ……」

そう言う内心では、何だ今のは、と蒼助自身も正体のわからない頭痛に驚いていた。
しかし、先程の痛みは後を引くようなことはなく、状態は至って疼く前と変わらぬ正常。
続く第二弾もない。
ほんの一瞬の刺すような激痛。

「……あ、俺……もう帰ってもいいですか？」
「別にいいが……本当に大丈夫か、お前」
「平気だよ。夢だって思い切り疲れてふかーく眠りゃ見ねーっしょ？　今夜は大丈夫ですよ」

根拠も自信もない話だが。
夢なんてものは相談して解決するような問題ではなさそうだから、無駄なことはしたくなかった。
ふーん、と変に訝しむことなく後に続けて蔵間が言う。

「まぁ、お前が平気だっつーならいいんだが……ただ、もしもあんまり続くようなら精神科医に行って診てもらえよ。夢ってのはその人間の心理状況の表れだって言うらしいからな」

どうも、と短く礼を言い、背を向けて職員室を出た。
扉を閉めて、一息。
下駄箱に向かう途中で、蒼助は蔵間の助言を脳内で反響させた。
夢はその人間の心理状況の表れ。

蔵間の何気ない言葉は意外なことに的を射ていた。
そう思うには十分なほどに蒼助の心情は掻き乱れていた。
一昨日の夜から見続ける奇妙な夢。
光のない、足下に張る地平線の向こうまで続く水一面以外は闇に覆われた世界。
それ以外何もない空間で、“あの男”は忽然と姿を現す。
そして、男の出現と引き換えとでも言うかのように蒼助の身体はいつの間にか足場の無くなった水の中へ沈む。
どれだけもがいても抗いにはならず、むしろ落ちていく。その感覚はまるで蟻地獄のよう。
蒼助が沈んでいくその様は“あの男”は、ただ見ている。
惨めに無駄に足掻く自分を、心の底から嘲笑うように。

そして、男が“蒼助に成り代わる”のだ。
身体も、存在も、仕種も、何もかもを蒼助から奪い取り身につけ、周囲の人間から『玖珂蒼助』として呼ばれ、認識される。
そして、彼女も笑うのだ。
蒼助の皮を被った、まんまと玖珂蒼助になった男の横で違和感すら抱かず――――――

「あたっ」

胸に当たる軽い衝撃と共に声があがった。
我に返った蒼助の下げた視線の先には、

「つー……ちょっと、どこ見て歩いてんのよっ」

鼻頭を押さえて涙目の久留美が恨みがましく蒼助を睨んだ。

「……なんだ、久留美かよ。てめぇこそ、そのかけてる眼鏡は伊達かオイ」
「いきなり喧嘩腰ぃ？　いいわよ、この際場所がどーこーなんて知ったこっちゃ無いわトコトンやってやろうじゃないのぉ～、このスケコマシー」

んぎぎー、と激しい睨み合いの中で視線がスパーク、火花が散る。
普段ならまともに取り合わない蒼助だったが、今は呼び出しや悩みの悪夢のおかげで腹の虫の居所が悪く、ちょっとした喧嘩の種ですら惜しまず買ってしまう状態に煽られていた。
まさに一触即発の空気をまとった二人。
周りの人間が逃げるように急いで通り過ぎていく中、触ると怪我しそうな二人に拘る勇敢な人間が一人いた。

「久留美、無闇に噛みつくな」
「たっ」

こつん、と久留美の頭の天辺を小突いたのは、怒りのあまりに意識と視界に入っていなかったその倍後の人間だ。
声を聞いて蒼助はハッと我に返る。

「誘った人間をほったらかして、廊下で喧嘩とは……なかなか良い度胸だな」
「だぁって、こいつが……」
「まさかこうなるたびに一々突っかかっているんじゃないだろうな……いいから、こういう時は向こうから絡んで来ない限り、一言誤って素通りするのだが礼儀だ」
「絡んできたら？」
「望み通り骨一本ぐらい折ってやれ」

急降下で物騒な会話に変貌させたその人――――千夜は蒼助に視線をやった。
跳ね上がる心臓。
しかし、視線はすぐに外され、

「ほら、行くぞ。お前が奢ってくれるというケーキ屋に連れていってくれるんだろう？」
「ちょ、ちょいまちっ、奢るっていう覚えのない事項が私の知らぬ間に約束の中に含まれてる気がするんだけど！？」

気にしなーい気にしなーい、と想定外に焦る久留美の言葉を軽く無視して千夜は蒼助の横を通り過ぎた。蒼助にちらりとも視線をやらず。
足音が遠くなっていく。
見せ付けられた静かな拒絶に蒼助は歯を噛み締めた。

己の意志と関係なく離れて、開いて行く距離間。
蒼助自身が最も恐れていた事態がじわりじわりと迫っていた。

［弐拾九］　距離は遠のいて（後書き）

久方ぶりの更新です。
中間テストやら修学旅行やらで更新が滞ってしまいました。
そして、また期末……おのれ、次から次へと（ギリっ

あまり進展のない本編。
この短さじゃ当たり前だが。
蒼助が“澱”の事情に首を突っ込むのを快く思わない千夜。
千夜のいる世界を知ろうとする蒼助。
考えの食い違いで溝が出来た二人。
蒼助に見え隠れする不穏の気配と予感。
なんだか雲行きの怪しい本編の先の行方はいかに。

【参拾】　彼女達の午後（前書き）

変わらぬ平穏
変わった日常
君が傍にいるからこそ

【参拾】　彼女達の午後

音と声の満ちた空間。
部屋の隅に置かれた観葉植物、部屋の空間を考えて設置されたであろう椅子とテーブル。
大きな窓から差し込む暖かな日差し。
シックな落ち着いた木目。
木材の質感を生かし派手さをとらず落ち着いた雰囲気を取った茶色を基調としたインテリア。
吹き抜けをイメージとした高い天井にはステンドグラス。
サロンにはシャンデリアの淡く柔らかな光。
外の人が急ぎ足で過ぎては去っていく光景とはかけ離れたゆったりとした空間だ。

客が呼び出しボタンを押せば、ウェイトレスやウェイターなどの接客担当の店員が要求に答えに行く。皆、平均的に年齢は二十代前後と若い。客の年齢層も。
売り出すものはケーキを初めとしたデザートであるこの店は今日も賑わっていた。
最近ではテレビや雑誌でもしばしば注目されることもあるようになった賜物である。
客足も多くなり、経営も順調な軌道に乗ってきた当店は今日も、平和だった。

――――チリン……。

穏やかな世界にまた新たな来客が踏み込んできた。
平和なこの場所の一定の空気を揺るがす、“波”が到来した。

◆　◆　◆

美人がいる。

“その人”の周囲の席、離れた席、挙句店員すらひっくるめて店内の全ての人間がその瞬間、同じものを見て同じことを思った。

部屋の隅のシャンデリアの下、二人の女子高生。

一人はどうでもいい、問題はその向かいに座るもう一人の方だった。

あらゆる詩人もこの人を前にしては語りつくせないほどの表現と賛辞を口にし、決定的な言葉を出すことは出来ないだろう。

故に詩人でもなんでもない、ごく一般人の彼等はこう思った。

本物の美人。

極限に無難で、最も適した言葉だ。

周囲の反応は多種多様だった。

くっちゃべっていた女子高生たちは一瞬水を打ったように静まり返り、ある男は恋人が隣にいることを忘れて彼女に見惚れ、その恋人は自分を放っておいてだらしなく鼻の下を伸ばす彼氏に青筋立て、ウェイターたちは誰が注文の品を持っていくかと揉める。

そんな中、誰かやるのではないかと思いつつも尻込みして誰もやらなかった行動につい出た一派が。

「ねぇ、彼女」

茶髪。ピアス。軽い感じな服装。

いかにもナンパな装いをした男が二、三人。
他に捻りの入った誘い方はないのか、と思わされる使い古されつつも現在も何故か愛用され続けるパターン。
連れと思われるおさげ編みの眼鏡少女は完全に数に入っていないらしい。
目当ての獲物（ターゲット）は美人一人に絞り込んでいる。

「良かったら俺達の席に来ない？　あ、ついでにそっちのコも一緒にどう？　俺達奢っちゃ」
「間に合っていますので、気遣いは無用です」

にっこり。
女神の微笑み。されど「帰れ」という意味合いは馬鹿にでも伝わる。
比較的馬鹿に近いこのナンパ一行にもそれは脳に伝達された。
しかし、馬鹿は愚かな事にそれで退こうとはしなかった。
この程度の拒絶で退くには獲物（ターゲット）は上等すぎ、惜しかった。

「そんなこと言わずにさぁ……二人じゃ淋しいでしょ、ねぇ」

こうなれば多少強引にでも、と思ったのか獲物の肩を掴む。
が、その手首に次の瞬間、思いがけない締め付けがかかる。

「え」

先急いだ行動に出た男は惚けた声を出した。
ぎりり、と締め付ける手は他でもない、獲物の手。
細く白い手からどうしてそんな威圧感込もる力が出てくるのか。
想定外のことに驚く男に少女は男たちにしか聞こえないように言葉を放った。

「……二度は言わない――――失せろ」

先程の清楚な声色は何処へ行ったのか。

握られた箇所の骨が軋むのを感じ、男は真っ青になった。容赦のない言葉と極寒の眼差しに男達は首振り人形のようにおもしろいほどの速さで上下に何往復も振ると、転がるように店から飛び出して行った。

食い逃げだ、と店員側は彼等が店からいなくなってから五秒経て気付いたが既に遅かった。

「全く、人が優しくしてやっているうちに退けばいいものを……どうした、久留美」

目の前で溜息を着いている三つ編み眼鏡――――久留美は、どこか遠くを見て、

「……これから先、アンタとどこか行くたびにこうなるかと思うとちょっと気が遠くなっただけよ。うん、頑張れ私――――さぁ、放課後のお楽しみー」

切れの良い切り替えを終え、久留美は持って来られた頼んだケーキを受け取った。

なかなか適応力に長けているようだ。

「あーむっ……はうーん、この為に生きてるぅ」

口をもぐもぐさせながら極上の幸せの浸っている表情の久留美。

ケーキ一つでこうも盛り上がれるのか、と眺めていた千夜の元へも頼んだ品が到着する。

極上の微笑を貼り付けた外面で紅くなるウェイターに対応した後、さっそくフォークを突き入れる。

「あ、ザッハ頼んだの。渋い線行くわねぇ、チョコ好き？」

「ああ。ん……これは美味いな。少し酒の味が……これはラム酒か」

「へぇ～、食べただけでわかるんだ。もしかしてケーキに関しては結構うるさかったりするの？」

「昔、ある人に散々行きつけの店やら気に入った店やら連れ回されたんだ。で、食べるケーキ一つ一つに親切な解説が添付されてな。知識に関してはそれで、だ。特に、チョコレートを使ったケーキに関する薀蓄（うんちく）はこと細かくてな。気がついたら好物になっていた」

「ふーん」

「それは……ちょっと変わってるな、どれ」

と、千夜のフォークが久留美のケーキの一部を攫う。

「あ、ドロボーっ」

「栗の味がする……中はマロンペーストか。なんだこれは」

「もうっ……この店自慢の特製モンブランよ。そっちのももらうからね」

「変わったモンブランだな、土台がロールケーキなのは初めてだ……」

「そう？　割とあるけど……でも美味しいでしょ？　私、ココのこのモンブラン大好きなのよねぇ」

そう言ってまた一口。噛み締め、プルプルと快感に悶える。

女子高生っていう生き物はどうしてこうも人目も憚らずリアクションがオーバーなのだろう、と素朴な疑問を抱きつつ千夜も久留美同様に（ただしリアクションは無い）ケーキに舌鼓を打つ。

「そーいえばさ……あむっ……」
「久留美、食いながら喋るのはよせ」
「んっ……さっきの連中追っ払うの、随分雑な仕事だったわね」
「そうか？」
「そうよ。だって、いつものアンタならすぐそこの路地裏に自慢の外面（そとづら）で誘い出して二度と馬鹿できないように全治二ヶ月の重傷負わせて六十日間の悪夢に苛ませ」
「……お前、私を何だと思ってるか言ってみろ」
「七年遅れてやってきた恐怖の大王」
「……久留美ちゃんにイジワルなこと言われた」

くすん、と鼻を啜る声を無視しつつ久留美は話を進めようと試みる。

慣れって怖い、と実感しつつ、

「なんかあったの？　今日、アンタ機嫌悪く見える」
「気のせいだろ。あ、この季節限定のタルトショコラっていうのもいいな。すみませーん、追加お願いしまーす」
「あ、ちょっと、いくつ頼む気よ」
「小腹が埋まるまで」
「太るわよ」
「哀しいことに燃費の悪い体でな。過去に店十件渡ってケーキ三十個食わされたが体重は微動だにしなかった」
「財布は」
「お前の奢りだろ、学校出る前に言ったじゃないか」
「言ってねーっっ！！」

まずい、と久留美は全身の血液が冷たくなっていくのを感じた。
敵は痩せの大食い。

テレビでよく見るが、まさかこんな身近に現れるとは。
なんて羨ましい体質――――ではなく、なんて恐ろしい体質。
こちとら財布の中身など高校生の平均程度の金額。
ココのケーキだって安くはない。
数が重なればとんでもない額になる。それこそ、財布の中身が冷える。
幸い、今財布の中は今月の頭に稼いだ転校生の新聞の売れっぷりでホカホカだが、このままでは店を出る頃には財布の中だけ真冬に突入してしまうことは火を見るより明らかだった。
フォークを噛み締めながら涙目の久留美は後悔の念を吐き出す。
「こんなことなら、アンタ抑えてあのナンパ組に奢らせるんだったかなぁ。見返り求められてもどーせアンタだし。どーせ支払いは全員コンクリと冷たく熱くチューだし」
自暴自棄に呟いていた久留美は、ふとあることに観点を置いた。
「……そういえば、アンタって基本男に厳しいわよね。もしかしなくても男嫌いだったり？」
「……お前達の目からはそう見えるのか」
「いや、どう見たってねぇ」
そこで、一度フォークを置いた千夜は傍らのコーヒーを一口啜り、一息。
「男に限ったことじゃない。私は、濁った目をした人間は性別関係なく生理的に受け付けない、それだけのことだ」
「目？　アンタもしかして目で人間の人柄がわかるって人？」
「祖父の教えだ。人間の中身を唯一肉眼で捉えることが出来る部分、それは二つの目」

と、千夜は久留美のそれを人指し指で示した。

「瞳の奥には光がある。真っ直ぐな人間のそれは一層強く輝いていて、性根の腐った人間、もしくはそれに近い人間は光がくすんでいる。そして、正気を欠いた人間はそれ自体が無い。狂気に走った人間は光が爛々として何処かおかしな輝き方をしている」

「それって目でわかるもんなの？」

「この間の化物、屍鬼はどう見ておかしいと思った？」

「んー……あっ、なるほど」

その時のことを思い出したのか、久留美は納得したと表現するように手の平で手を打った。

「鋭い人間は無意識に相手の目を見て異変を感じ取るんだろう。鈍い人間は、本能の危機感で。だから、気がついた時には大抵手遅れな事態を迎える。まぁ、お前に関しては心配は必要らないな。勘も察しも良い、度胸もある上観察眼は特に。ジャーナリストを狙うだけの素材は充分備えているだけある」

「そりゃどーも。……で、中身は？」

問われた言葉に、千夜の目が伏せられる。

そして、上げられた目はにやりと口元の歪みと共に細まり、

「よろしくないな」

「失礼しちゃうわねー、私みたいな純粋無垢な女の子を捉まえて」

「どの口がそんな戯言をいうのか。まぁ、生憎私は――――――嫌いじゃない」

「……そうこなくっちゃっ」

かんぱーい、と千夜の持った陶磁器のカップと久留美の差し出した紅茶のそれがぶつかりカツン、透き通った音を奏でた。

「で、大分話の路線がズレた気がするんだけど、実際のトコロはどうなのよ」

あんむ、と大口でモンブランの欠片をパクつきながらの久留美の問いだった。

「どう、とは？」

「……んく、男、嫌いなの？」

「どうしてもそこに拘るのか」

「……ちょっと、気になるのよね。アンタの、もしそうだとしても、なんか違うように見える」

久留美の指先で操られるスプーンが紅茶に渦を生む。

「その違うっていうのは……アンタの男に対する拒絶が、女が男を恐れるそれとは違うように見えるのよ、私には。アンタの場合……恐れ、というよりは……憎しみ？」

ぴくり、と千夜のカップを置いた直後の手が震えた。

しかし、死角となっていたそれは己の意見を述べるのに夢中の久留美の目には入らなかった。

「……そう見えた理由は？」

「ほら、普通さ。過去に男によるトラウマとか作った女で、男勝りになる奴いるじゃない？　そーゆー奴ってさ、なんだかんだ強がってもいざ追い詰められるとトラウマの前じゃ何もできなくなっちゃうらしいのよ。怖くてね。でも、アンタの場合さ、さっきの見てて

も全然。心の底では怖がってるっていうのすらちっとも見えなくて。つまり、私が言いたいのはね、仮にアンタが男嫌いだとしても、アンタは男が“怖い”んじゃない、憎いんじゃないかってことなのよ」

と、久留美は掻き回していた銀色のスプーンを渦から取り出し、千夜に先端を向けた。

「……人を指差しちゃいけませんってお母さんに習わなかったのか」

「悪かったわね、不躾な女で。そんなこと言ったらさっきのアンタも。それと、これは指じゃなくてスプーンよ」

一息で三度も揚げ足をとった久留美に溜息をつきつつ、千夜はスプーンを奪い取りテーブルに置いた。

「つくづく感心させられるな、その観察力の良さ。てゆーか、何でそんなところまで事細かに私を観察するんだ？　ストーカーされてるみたいな気分になったぞ、一瞬」

「人を変態と一緒にしないでよ。興味があるからよく見るの」

「それこそ軽いストーカーだろ」

「はぁっ？　アンタ、友達をそういう風に言うわけー？」

「……何で、お前みたいなの友達にしたんだったっけ」

はぁ、と溜息の変わりにザッハを抉り取り、一口放る。

「んぐ……まぁ、問われたからには答えないとな。別に隠し事じゃないし。――――お前の言うとおりだよ、ほとんど当たりだ」

「よっしゃっ……え、でもほとんどって」

「別に私は、さっきの連中や……男全部が憎いってわけじゃない。ただ――――」

ただ？と先を促すように久留美が繰り返す。

「――世界で生まれて初めて憎んだ存在（モノ）が男だった、それだけだよ」

そう答えた千夜の表情は恐ろしいまでに、無表情だった。

◆　◆　◆

カチリ、とフォークの先が皿を突付いた。

「そりゃまた、スケールのデカイ言い方するわね」

「事実さ。ついでに言えば、そいつは最悪の意味で私の人生に大きな影響を与えてくれたよ」

「……影響って……」

「その男は、私が信頼していた少ない人間の一人でな。まぁ、信頼の度合いで言えば、一番低い位置にいたかもいれないが。――――そして、ある日そいつは私を裏切った」

ごくり、と久留美は唾を飲み込んだ。

裏切った、の意味を探る。

最悪の意味で人生に影響を与えたとまでいうほどなのだ。

よほど酷いことをされたのだろう。

しかし、この場合その『裏切り』に値する『酷いこと』となると、

男と女でそれを探索すると行き着く答えは一つで――

「あ、あのさ……ちょっと、確認したいことあるんだけど」
「なんだ、話の途中で」
「いいから……何も言わずに耳貸して」

訝しげに眉を動かしたが、千夜は久留美の言葉どおりにする。
ごにょごにょ、と千夜の耳元で久留美は小さく囁いた。

「……」
「……」

しばしの硬直。
その後、二人は顔を見合わせた。
千夜は渋い顔で。久留美はやっちゃった、と言う顔で。
呆れたように声を先に出したのは千夜の方だった。

「……お前」
「だ、だってー！　気になるじゃない、この話で一番大事じゃことじゃないの！　で、ど、どうなの、そこんとこ」

問い迫るその顔は羞恥で真っ赤だ。普通なら逆だろう。
恥らうくらいなら言わなきゃいいのに、と思いつつも千夜は答えた。
己と久留美にだけわかるように言葉を控えて、

「ないない。至って清いまんまだよ。前も後ろも」

その発言が世間一般的に控えめと認められるかどうかは置いておくとして。

「で、でも……」
「……されかけはしたがな。奴に一線越える度胸が無かったのが、救いだったな」
だが、と千夜は続けた。
「その後しばらくの間、人を信じられなくなった。そいつよりもずっと信じていた人間までも、誰一人と……いわゆる人間不信という奴をプレゼントしてくれたのさ、奴は。まぁ、今は大分よくなったが……まだ男は全然だな。多分、この先治る見込みはないな」
言葉にはしなかったが、久留美もその考えには肯定だった。
自意識過剰でも自信過剰でもない。千夜に近寄る男は皆多かれ少なかれ、そういう欲望を膨らませて近づいてくるのだろうから。
「男達の目の奥の光が、アイツと同じ欲望を仄めかせた光が、奴を彷彿させるんだ。あの男の幻影がダブり、私の奥底で眠る強い感情が昂ぶるのさ……殺してやりたい、と思うほどに」
なんてことないように千夜の口から言葉が流されていく。
何でもないことだと言うようには、千夜を見る久留美にはとても思えなかった。
言葉を棒読み。怒りで拳を震わすという無意識の動作の表れもない。
だが、目だけは誤魔化しきれていなかった。
横の窓越しに外を眺める目はナイフのように鋭い視線を放っていた。
視線の先に捉えているのは、此処にはいない誰か。されど、この世界の何処かで生きている誰か。

そいつに対する憎悪の眼差し。

向けられた者は恐怖するだろうその視線、久留美は怖いとは思わなかった。

それは自分に向けられていないからというのは当然のことなのだが、そうでなくても見る者にこれは怖いと思うのが普通。

けれど、久留美には何故かそれほど怖いものには感じれなかった。

あの時見た表情に比べれば、だが。

機械人形のような、無感情な表情。

アレに比べれば、こんなものそれほど怖くは無い。

寧ろ、安心さえしていた。

憎しみ。愛情の対となる人間の中で最も強い感情の一つ。

それがこれほどまでに表現し抱ける千夜に、久留美は心の底からホッとしていた。

なぜならば、それは彼女が人間だという証だから。

人間らしい感情を持っているという証明だから。

あの夜以来、心のずっと深い底で消えないで凝り固まっていた残骸が、今跡形も無く崩れていくのを久留美は全身で感じ取った。

「……美人って苦労すんのねー……あ、でもさ」

不意に沸いた、泡のような疑問。

「――じゃぁ、何で蒼助は平気なの？」

「……は？」

この瞬間、久留美は驚くべきものを見た気がした。

きょとん、とした顔。
あの。あの千夜が。
しかし、その表情もやがて気分を害されたというような不機嫌なものへ移り変わる。

「……何で、ここで玖珂の話が出てくるんだ」
「だって……アンタ、アイツとじゃ態度違くない？　アイツだって男なのに、アンタ普通に話してたじゃない。しかも素で」
「態度が違う……？　いや、それは初日にアイツに見られたから」
「いや、そうなんだけどさ。でも、アンタ……アイツと話してるとなんか楽しそうだから……」
「……楽し、そう？」

千夜は久留美の言葉を疑った。

楽しそうだとは、一体何のことだろう。
他人から見て、自分は蒼助と一緒にいるとき、本当にそんな風に見える表情をしているのか。

「私は寧ろ、それが不思議なのよね……だぁって、あの蒼助とよ？　あれこそ、この世の中で一番警戒すべき最悪の男、女の敵じゃないのよ」
「どうしてだ」

だって、と久留美はテーブルの向こうから身を乗り出す。

「アンタは知らないかもしれないけど、アイツって我が学園一の女たらしなのよっ！　下級生と同学年はどーゆー理由かこだわりだか知らないけど守備範囲外だけど……上級生と他校生が何人アイツに食われたことか。股がけは最高で五股。人妻に手を出して夫に怒

鳴り込まれたこともあるらしいし。行きずりの女とも平気にラブホ直行よ？　どうなのこれ、会ったばっかの女とヤるだけやってハイさよーならなんてっ……絶対、アイツ女を昂ぶる性の捌け口としてか思っていないのよ、きっとそうよ、絶対そうよっ！！」

ダンっ！、と言い切ると同時に久留美は拳をテーブルに力いっぱい叩きつけた。

周囲の注目の視線が一気に二人の席に集まる。

熱弁を終え、一気に捲くし立てた反動か、肩で息をする久留美に千夜は若干引きつつも、

「……おい、大丈夫か」

「ぜぇ……はぁ……私としたことが……つい犠牲者の女子達の代弁に熱くなっちゃったわ……とにかく、アイツはそれだけケツの軽い男なのよ。歩く性犯罪なのよ」

酷い言われ様だ、と千夜は思う。

しかし、自宅で見つけたモノを考えるとフォローも考えものだった。

「で、何でそんな奴がアンタは平気なの？　アンタが嫌いな“男”そのものじゃない」

「……――――アイツは、違うだろ」

へ？と久留美は目を丸くした。

違うと言って返って来た千夜の返事に。

「アイツは違うだろ」

もう一度繰り返される言葉に久留美はますます怪訝な表情になっ

た。

「違うって……何が？」

「だって……玖珂は……」

玖珂の目は少しも欲望で濁ってなんかいないのだから。

いつだって真っ直ぐな光が見える。

それに、

「久留美は、手を出されたのか？」

「な、なわけないでしょ！！　んなことされたら、とっくにアイツを殺してるわよっっ」

「都築は？　クラスの女子は？」

「……いやー、ないんじゃないかしら……って、何が言いたいの？」

「なんだ……潔い奴じゃないか。――友人には、手を出さないのだから」

呆気に取られた久留美に千夜は言う。

「本当にどうしようもない奴は、平気で裏切るんだ。友達も、仲間も。自制もできない奴は。アイツはちゃんとそれが出来ている。分別がきっちり付けられてる。友達は友達。セフレはセフレ。自分の中で相手に付けた取り決められた枠から外れたことはしない。久留美も、アイツが根は腐った奴じゃないとわかっているからつるんでいるんじゃないのか？」

う、と図星を突かれた久留美は喉を詰まらせた。

「……アンタ、知り合ってそう経ってない相手のこと、よくそん

なところまでわかるわね」
「人のこと言えるのか。……実は、ぶっちゃけるとこの前の休日にちょっとした成り行きで玖珂の家に泊まってな」
「どんな成り行きでそこに至ったっ！？」
「それで部屋で女物の派手な下着を見つけたりしたが」
「……やっぱ、さいてー」
「でも、私には手を出さなかった」

千夜の告白に久留美はポカーンの状態になった。
信じられない、と。
そんな世間一般で言う『据え膳』又は『美味しい状況』下であの男は一晩何もしなかったというのか。
何故そんなことになったのかその成り行きも気になるが、何もしなかったその真意は数倍気になる。

「一体どーゆーこと……まさか、ヤりすぎで不能に」
「お前、もう少し公衆前での発言に抑制かけろ。じゃないと服着た逆セクハラになるぞ」
「……っと、そうね。……ふーん、アンタの言うことが正しいとしたら……ちょっと見直したかも、アイツのこと」

久留美にとって馬が合わないが、嫌いではないあの男。
若干、認識に改竄（かいざん）の必要があるようだ。

「でも、いがーい」
「……？　何がだ」
「アンタの感情をそこまで動かしたのが、蒼助だったって話。……ひょっとして、苛々している原因も蒼助だったりして……なーん、て」

ビシッと久留美は言葉を途切らせ固まった。
目の前の千夜が一瞬、物凄い不機嫌な形相をしたのを正面から見逃すことなく見てしまったから。
にこー、と極上の、されど凄みが伝わってくる笑顔が描かれ、

「久留美」
「は……い？」
「話していたら腹が減ってきた。追加するが……かまわないよな？」
「え、ちょ……」
「あのーすみませーん、さっき頼んだのと一緒にまた追加を」
「きょ、拒否権なし！？」
「えーと、シューにコシールにアップルパイにベリーフロマージュにカスタードプリンにタルトショコラに苺のショートケーキに……」
「きゃー！！　やめてーっ！！」

一体何の地雷を踏んだのだろう、と千夜を怒らせた理由を探る余裕は久留美にはなかった。
今はただ、衰える様子なく並べられていく追加注文を止める言葉だけを死ぬ気で考え、叫びに近い声を上げ続けた。
しかし、一時間後、彼女はすっかり軽くなった財布と共に店を出ることになる。

◆　◆　◆

チリンチリン。

小気味いいベルの音に見送られ、二人は店を出た。

外に出た時には、真っ赤な夕陽が沈みかけてる寸前。薄暗い。
そして、久留美の心も深い闇に沈みそうになっていた。

「……持ってかれた。全部持ってかれた」
「元々は私の記事で稼いだ金だろ。因果応報、めでたしめでたし」

ちっともめでたくなーいっ！と叫ぶ久留美を無視して歩く。
手応えがすっかり軽くなった財布を抱いて、ぶちぶち文句垂れていた久留美が不意に別の言葉を漏らす。

「……アンタ、本当にナニ苛ついてるのよ」
「全然。腹の虫が治まって気分爽快なんだが」
「そりゃ店のケーキ全品制覇すればねっ！！　……でも嘘ね、だって目が笑ってないもの」
「一度、眼鏡の度の調整した方がいいんじゃないか」
「人の眼鏡にケチつけて丸く治めようとするなっむ」

言い終える言葉尻の方で、呻き声に変わった。
突然ぐきっと首を向きを変えられ、両頬を両手で挟み込まれた久留美はやはり目が笑っていない凄まじい笑顔の千夜とご対面する。

「触らぬ神に祟りなし、という言葉知ってるよな？　意味、わかるよな？　祟られたくないだろ？」

顔の両サイドのほっぺをムニムニ捏ね繰り回される中、久留美は一心不乱に首を縦に振った。若干、涙目で。
頷く久留美に満足したのか、手を離して帰路を辿る再開をしようと前を向いた時、

「――――っと」

「ん？　……あー」

面倒くさそうな顔とうんざりした顔が見た前方では、道を塞ぐように立ちはだかる見覚えのある男たち姿があった。
店でしつこく誘いをかけてきた、千夜が手酷く払い落としたあの連中だった。

「なにかしら、アレ」
「辺りが薄暗い、周りに人気がない、多勢に無勢……こんな条件が揃った状態で向こうがやりたいことなど一つしかないだろう」
「無勢の頭数に私って入ってるのかしら……」
「なんなら聞いてみるか」
「……止めとく」

聞かなくても、空気が久留美の肌に伝えてくる。
優しくしてやりゃつけあがりやがって男なめんなコラーってところだろうか。
眩暈が久留美を襲う。
どーして世の中こんな男ばっかりなのか。女と見たらヤりたい一直線なのか。
こういう男の汚れたばっちぃ面ばかりを見せられると男を嫌う千夜の気持ちを嫌でも理解してしまう。

「で、どーすんのよアイツら……あからさまに逃がす気ないわよ」
「とりあえず、そこの路地裏に入る」

と、千夜が見やった先を追うとこちらと男達の間隔のちょうど中間地点に二つの建物の間に出来た広めの空間が。

「あそこ通って逃げるの？」

「いや。それと入るのは私だけだ。鞄、持っててくれ」
持ち上げられた鞄が久留美の胸に押しつけられる。
「何する気？」
「食後の運動を軽く」
向こうの男達には見えないように向けられた笑みは実に、人の悪いものだった。
それによって『運動』の正しい意味を察した久留美は少なからず同情した。
これから『運動』に付き合わされるだろう男達に。
果たして、軽くで済むだろうか。
多分無理だろうが。
「頼むから殺人とか起こさないでよー……いやよ、死体隠すの手伝うの」
「もう証拠隠滅まで考えが飛躍してるのか。安心しろ、半分くらいは生かしとくから……――――いや、やっぱり１０分の３くらいに」
それは生かす方と殺す方のどっちに当てはまる分配なんだろう、と久留美が思っている間にも千夜は路地裏へと入っていく。
男たちは伺うように久留美を見た。
「わ、私よりあのコの方がオイシイわよっ」
反射的とはいえかなり卑怯な台詞かもしれない。
しかし、事実だ。言っていてかなり哀しい気分だが。
言わずもがな、男たちは元々の獲物を選び各々（おのおの）想像

に先走って欲望に染まった表情で草食動物の皮被った猛獣の檻へと入っていく。

数秒後、まず暗い奥から聴こえてきたのは肉を打つ打撃音。僅かに遅れてくる呻き声。仲間の怒号。また打撃音。奥で何かがひっくり返る音。以後、連続的に起こる打撃音。そして、つんざくような複数の男の悲鳴。

ごめんなさいすみませんもうしません家に帰してごっぺぁっ。

奥の凄惨な光景は見なくても充分だ。

寧ろ見たくないもはや一方的な暴力と化した闘いなど。人が来ないうちに早く終わって欲しい。

「……まだ、続いてる」

衰える様子ない闘争の音色。

彼女の転校初日で巻き込まれた神崎の時は案外あっさりだったが、これは妙に長くないだろうか、と久留美は違和感を覚えた。

「ナニよ、やっぱり苛ついてるじゃない……」

何が千夜をこうもぐらつかせているのか、と久留美は思考に走る。有力な可能性は一つにして一人しかいないが。

「……何があったんだか」

とりあえず、この物騒な協奏曲が一分でも早く終わることを久留美は願った。

［参拾］　彼女達の午後（後書き）

文の量が元に戻ったところでようやっと調子が戻ってきた気がします。

男には常に欲望の眼差しで見られていた千夜。

美しすぎる美貌と優秀すぎる頭脳はときに、呪いになるという一説を宮部みゆきの小説のキャッチコピーで見たことがあるのですが、千夜の場合前者のそれですね。

ちなみに三ヶ月前までは男だった千夜。えー……まー、そーゆーこったです。自覚なしの魔性の男だったんだろうか、うちのヒロイン。

作者、その手の漫画とか読むけど描かないし、書きません。だって、自分の作品を男同士でやる必要性が見つからないし。男と女でイチャつかす方が好きですし。ギャグのネタに使うなら別ですが。

本編でも男ヴァージョンで蒼助が喰いにかかることはないと思います。我らが主人公が妙なところでふっ切れて開き直らなきゃの話ですが（意味深な台詞を残して去っていく

【参拾壱】　夕暮れの疾走（前書き）

全て、飲み込み始めた

【参拾壱】　夕暮れの疾走

『女の機嫌を直す方法？』

回線の向こうで迦織（かおる）がこちらの質問を繰り返した。

そうだ、と言えば、

『若ったら……また、ドジ踏んだの？　もしかして、俺様と思わせて隠れヘタレ？　そこんところ伯父さんに似ちゃったのかしら……』

「言ったなこの野郎。お前、いつか覚えてろよ。マジで、後悔させてやるその発言。……と、話がずれちまったじゃねぇか。いいから教えろよ、女の機嫌直す巧い方法。手っ取り早くて一番イイの頼む」

『若、ついでに聞くけどセフレと拗れた時ってどーしてたの？』

「あん？　大抵、他の女といるところ見られて文句言われてた場合だったからな……段々彼女気取りになってきやがるからコイツももうー御開きだな、と……何だよ、溜息なんかついて」

受話器越しに聴こえてくる深い深い溜息の音の後、迦織は僅かな間を置いて気を取り直すように口を開いた。

『ちょっと過去を振り返って自分のした事を後悔してただけ。――ん、わかった。不甲斐ない若に迦織おねーさんのワンポイントアドバイスその2、教えてあげる。それはズバリ、女の子なら誰もが持ってる弱点を突くことっ！　――多分」

最後に付属した一言がイマイチ不安を拭わせてくれない。

◆　◆　◆

――――お買い上げありがとうございましたー。

店員の声をバックに蒼助は早々と店を出た。

湧き上がる羞恥と人の視線に耐えながら。

「ちくしょー……何で俺が」

ケーキなんぞ買わなきゃならんのだ、と蒼助は手に持った確かな重みを感じる箱を睨み小さく呻いた。

そして、こんなアドバイスをした迦織を憎憎しく思いながら、

「これで上手く行かなかったらマジで呪うぞ、あのアマ……」

電話越しに聞いた迦織の熱弁を脳裏で甦る。

『美味しいケーキかお菓子を持っていって、ひたすら土下座っ！口じゃ何と言おーとこれやられたら大抵のことは許してくれちゃうわっちなみに贈り物は美味しさの上に高いと有り難味増して尚グッドっ！　お店は私がオススメする一押しの“アラカルト”よーん、それじゃ善は急げレッツゴーっ』

と、急かすような迦織の言葉に背中を押され、その勢いでいざその店へ行ってみれば驚愕の場面を迎えた。

トリュフやらプラリネやら何だかヘンテコな名前の付いたチョコレートがセットで最低千円最高五千円以上の値段を付けられて店頭に並んでいたのは甘いものを食べない蒼助にとって未知の衝撃だっ

た。

セフレの何人かが自分に買ってくることはあったが、まさかこんなカカオ豆のペーストと砂糖の塊に五千円も注ぎ込んでいたのかとはショックはデカかった。

常に貢がれる側で貢いだことのない蒼助は贈り物を選んだこともした経験も薄く浅い。実父の誕生日すら一月過ぎて「あ、そうだったったけか」と一言でまた翌年まで忘れる始末だ。

何を選んだらいいかさっぱりわからなかった蒼助だったが、とりあえず値段の上下の間をとったトリュフの詰め合わせを買った。

「はー……こんなんで本当に上手くいくのかよ」

不安が溶け込んだ溜息が口から駄々漏れる。

それもそのはす。

敵は普通の女ではない。三ヶ月前までは自分と同じ男だった人間だ。

女の喜ぶもので果たして怒りを解けるのだろうか。

もはや、これは賭けだった。それも人生最大級の。多分。

「……くそ、こーなりゃ当たって砕けろだ」

「――――砕けちゃダメでしょ」

独り言に対する乱入が背後で起こった。

蒼助は奇声を上げて、危うく箱を落としかけた。

何故、自分はこーも背後を取られることが多いのか、と己の力量に嘆きつつ大きく脈打つ心臓を押さえつけ振り返る。

「うっわ、びっくりした……止めてよね、大げさに悲鳴なんてあげるなんて」

「久留美……？」

千夜と放課後何処かへ行ったはずのクラスメイトの登場に蒼助は目を瞬いた。

「何だよ、驚かすんじゃねぇよ……」

「声かけただけじゃない。……それはそうと蒼助、アンタ今《アラカルト》から出てこなかった？」

「……っ何のことだよ」

「誤魔化しても無ー駄。ちゃんと見てたし、じゃなかったらその後ろに隠してる箱何よ」

しっかり見られていたようだ。

チャンスの神とやらはこの女に一体何回己の前髪三本掴ませる気なのだろうか、と蒼助は見当違いな的に怒りを向けた。

「アラカルトって言ったら私たち高校生が手を出すには財布が適わない渋谷でも有名なチョコレート専門店じゃない。私だってまだ入ったことないのに。アンタ、甘いもの嫌いなのに何で……」

言葉の途中、久留実は嫌な表情をした。

蒼助がよく知る何かに勘付いた面だ。

「……なーるほどねー、そーゆーことかぁ」

にまぁー、とこれまた嫌な予感をぷんぷん臭わせる笑みを久留美は顔一杯に浮かべる。

「な、何だよ」

「千夜のご機嫌直しってわけ。これは驚きだわ、アンタにそんな健気な一面があったなんて」

蒼助はポカンとした後、何故それを、と我に返る。

「ちょっと待て、何でお前……」

「その反応。やっぱり、アンタがあのコの不機嫌の原因なのね」

そこでやっとこれが誘導尋問だったということに蒼助は気付いた。

絶対包囲。逃げ場はない、と。

「女に貢がれてなんぼのアンタが女に貢ぐ日が来るなんてねー……明日は槍でも降ってくるのかしら」

「うっせー……つーか、何でお前が知ってんだよっ。……アイツが話したのか？」

「違うわよ。今日、なーんかピリピリしてるからさりげなく話をちょっとずつずらしながら聞いていってアンタの名前が出たら突然、不機嫌まっしぐらになっちゃったのよ。それでね……その代償はあまりにもデカかったけど」

遠くを見て久留美は早々と切り替え、蒼助に詰め寄った。

「で、何したのよアンタ。あの千夜をあそこまで怒らせるなんて……ある意味表彰ものよ？」

「お前には関係ないだろ……」

迂闊に話すとろくな事はないのは今までの付き合いから十分承知している。

「あ、そ。じゃ、さっき店出てくるところを取った写真今度の記事に使わせてもらうけど」

「わかった話す」

もはや手遅れだった。

◆　◆　◆

弱みを手にせっつかれて簡潔に経緯を聞かせると久留美は、

「へぇ……そんなことでねー」

そんなこと。

久留美に言われて気付いたが、そんなに悪どいことを自分はしただろうか、かと蒼助は思い直す。

確かに、千夜の言葉を無視したことは無礼だったかもしれない。

だが、こちらにも都合というものがある。

何もシカトするほどのことでもないのではなかろうか。

それでどーして自分がこんなに振り回されなければ鳴らないのか。

振り返ってことで沸き始めた怒りがふつふつと沸点し始めた蒼助のをよそに久留美は納得げに呟いていた。

「聞いて真実味ましたわー……やっぱ、アンタ結構大事に思われてるのねあのコに」

「は？」

何でそーなるよ、と怪訝な顔をする蒼助に久留美が説くように言った。

「だってそーじゃない。警告ってね、時の場合じゃいろいろパターンあるけど……大抵その人が危ない目にあってほしくない人にす

る行為なのよ。恋人とか家族とか友人とか……まぁ、いわゆる特別な存在に対するちょっと不器用な愛情表現なの」

答えを見つけた気がした。

つまり千夜は自分のことを心配してあんなことを言った、と。

その心配を無視した自分に腹を立てた、と。

……じゃぁ、完璧俺が悪いんじゃねぇか。

一瞬でも灯らせた自分の怒りこそ理不尽に値する。

改めて己の反省の蔵に入ろうとしている蒼助をよそに久留美が忌々しげにぼやいた。

「じゃぁ私とあの連中はアンタのイライラぶつけられたってわけ？　冗談じゃないわよ、私の小遣い返しなさいよもーっ！」

「……あの連中？」

「放課後、私の行き着けのケーキ屋でナンパされたのよ。ほら、千夜ったらあの顔でしょ？　……いっぺん追い払ったと思ったら店出た後も待ち伏せしてて……まぁ、結果的には阿鼻叫喚の地獄絵図？」

「……」

やはり、その手の連中に関しては引く手数多らしい。

安い連中があの体に指一本でも触れたかと思うと腹の底からマグマが沸きそうだった。

「……あのさ、ちょっと聞きたいんだけど」

「んだよ」

「アンタ、千夜に惚れてるでしょ」

ギクン、と蒼助の全身が一度思い切り強張った。
それを目撃した久留美は半目になりながら、
「案の定ってやつ……か」
「……何のことだ」
「あからさま過ぎる反応の後にそれは見苦しいわよ。素直に吐きなさい、どうなの」
「……まず録音テープをしまえ」

チッと未練がましそうな舌打ちのあと、久留美は素直に鞄にそれを戻したのを確かに見届け、蒼助は深呼吸を間に置いて、言った。
「……ああそうだよ、何か文句あるかこの野郎」
「んー別に。ただね……いつもの遊びで、アイツの気持ち踏みにじる気なら今まで貯めてきたアンタの裏事情の全部次の記事で出してやろうって思ってただけ」
「……をい……」
「怖い顔。冗談よ、そんなことしないわよ　――――モノはあるけど」

どこまでが冗談なのかわからない台詞の後、久留美は感慨深げに、
「それにしても“女殺し（レディーキラー）”のアンタが一人の女に入れ込む日が来るなんて……世界滅亡が間近なのかしら」
「喧嘩売ってんのか。そーゆーなら、お前だって随分とアイツと親しいじゃねぇか……“秘密殺し（プライベートキラー）”のお前が。他人との付き合いは浅く広くがモットーなんじゃなかったか？」

奇妙な名称の呼び合いの後、蒼助の問いに久留美は押し黙った。
僅かな間を置いて、決まり悪そうに言い放った。

「気が変わったのよ……将来に備えて……一人くらい、気心許せる人間を……つくっておこうかなって」
「何でアイツなんだよ」
「……それは……強いし、頭よさそうだし、機転も利くし、いざって言う時本当に頼りになりそうだから……それに」
言いずらそうに口篭り、
「……アンテナ、立ったから」
「突然の電波発言だな……妖気でも感じ取ったか？」
「やかましい。……言い方変えるわ、“退屈な世界に一条の光あり”って感じ」
「もっとわかんねぇよ。まどろっこしい言い方止めろって」
「ったく、これだから学のない単細胞は……例えて言うなら、本かしら」
「本ー？」
結局まどろっこしいままだが、久留美は面倒くさそうな蒼助をそっちのけで語り始めた。
「とある図書館で読む本を探しているとするわ。本棚には数え切れないほどの本が上から下まで端から端まで隙間なくぎっちり詰め込まれている。私はその中から読む本を探すんだけど、どれもこれも読む気が起きない。根気よく探してはいたもののそろそろあきらめちゃおうかなって思い始めて。――そこでようやく一冊の本に興味を示して読み始めようと思うの」
「……」
「私には何故か途中から読む癖がある。中途半端なところから読むくせに、それで面白くないって判断していつも放り出してた。とこ

ろがその本はそんなめちゃくちゃな読み方をする私の気をひきつけるの。先が知りたいと思う、けれどその前も知りたい。本好きの人間見れば冒涜としかいえない本の扱い方をしていた私はこうしてやっと読みたい本を見つけた、とさ」

「……訳せ」

「図書館は世界。本は人。内容はその人間の中身と人生」

あ、と蒼助は声を漏らし、ようやく理解した。

久留美が言いたいことを。

「興味わいたってことか……人を記事のネタ生産工場くらいにしか思ってなかったお前、新條久留美が一人の人間に」

「そ、女を性処理道具くらいにしか思ってなかったアンタ、玖珂蒼助が惚れた女にね」

ふぅ、と久留美は溜息を吐き出し、

「本当、正直不思議よね……あんな触らぬ神に祟りなしな奴の何処かいいのかしら」

「……だな」

「性格破綻してて」

「羊の皮被った狼で」

「容赦ないし」

「底意地悪くて」

「本当に食えない」

「厄介な女なんだけどよ」

二人はふと足を止め、向き合い互いにジッと顔を見た後、

「でも、なんでか」

「気になるんだよなー……」

妙な意気投合だった。

出会って以来、そりの合わないとばかり思っていた互いはここでようやく共通の思いを得た。

それは恋の始まりでも、友情の芽生えによるものもなく。

ただ一人の人間を通した共感だった。

「ま、私はともかく問題はアンタよね」

「あ？」

「知らないの？　千夜、極度の男嫌いなのよ」

「なにっ」

初めて聞いた、というのがわかる反応に久留美は更に続けた。

「んー、昔信用していた人に裏切られたとかなんとか……その恨みが相当根深いらしくて。何しろ言うに事欠いて“世界で生まれて初めて憎んだものが男”だったなんて言ってたし。あの千夜を一時期人間不信に陥らせるほどのトラウマになるほどのことらしいから」

それを聞いた蒼助は驚愕と絶望の嵐のど真ん中にいた。

なんだそれ、初耳だぞ。

つーかなんでそんなこと知ってんのよ久留美さん。

例えようのない絶望を頭から浴びせられ自失に陥りそうになっている蒼助に久留美は何を思ったのか唐突に話題を変えるような言葉をかけた。

「あのさ、ちょっと聞きたいんだけど」

「……なに」

「アンタ、私や都築ちゃんとエッチしたいって思ったことある？」

その発言にずっこけそうになった。

「うわ、失礼しちゃうわね」

「失礼ってお前……いきなりなんだよ、薄気味悪ぃな……欲求不満か？」

「殺すわよ」

マジな殺気を眼に宿して鋭い眼光を放つ久留美。

なら言うなよ、と思っていると、

「いいから無駄口叩かず正直に答えなさい」

「正直にって……」

正直に答えても殺されそうで怖い。

「さぁ、さぁっ」

射殺さんばかりに睨み覇気の込もる迫力で迫ってくる久留美に恐れをなした蒼助はついに白旗を揚げ、

「わ、わかった……思ったことはない。つーか、何でお前らとする必要がある？」

「は？」

「セックスするセフレはもういるのに、何でダチのお前らに手ェ出す必要があるんだよ」

「……何でって言われても、聞いてるのこっちなんだけど」

「チッ……だからよ、俺は……嫌いなんだよ、そーゆーごちゃごちゃ見境ないのは」

「人妻にまで手ぇ出しといて見境なくないなんてよく言えるはねこの口は……」
「るせぇ、黙って聞け。俺はセフレはセフレでそれ以上の関係にならねぇし、ダチはダチで手ぇ出さない。めんどくせぇだろ、あっちもそっちにも中途半端な関係作ってゴタゴタするの……そーゆーはっきりしねーの、嫌いなんだよ」

わしわしとかき乱しながら蒼助が紡ぐ言葉に久留美は思わず眼を丸くした。するしかなかった。
同時に、驚愕するこの事実を見抜いていたここにはいない千夜に賞賛を送った。

言葉はぞんざいであれど、言いたいことはわかる。
千夜が久留美に聞かせたとおりの話だ。
やはりこの男の認識を改めようと思った。
馬が合わないからといって少々この男を軽く見ていたかもしれない。

「ま、仮にダチでなくてもお前みたいにうるさい女は御免だけどよ」
「奇遇ね。私もアンタみたいな品のない無神経な男となんて絶対ありえないわ」

ギリギリと睨み合い、やはりそれはやめておこうと固く思う久留美だった。

「ま、腹の立つことにアンタは異例らしいから……せいぜい頑張ってみれば？」
「何だよ、異例って……」
「ムカついたから教えてやんなーい」

ぷい、とそっぽ向いたかと思えば、にやりと悪巧みするような笑みを浮かべて蒼助の耳を掴み、

「いろいろ聞かせてもらったからにはこっちも情報提供しないとね」

ごにょごにょと耳に小さく声を吹き込んだ。

数秒静止した蒼助は、

「んだとっ？　それ、本当か？」

驚愕の声をあげ、なんらかの真偽を確かめる為に久留美に詰め寄る。

「マジマジ。さっき本人から聞いた話よ。前も後ろもまだ清いってさー。頑張った暁にそーゆーご褒美もついてくるんだから努力しなさいよー」

じゃーね、と手を振りながら久留美は背を向けて蒼助の前から去って行った。

闇の中へその姿が消えたところで、

「……あの女、もうちっとＴＰＯつーのをわきまえた方がいいんじゃねぇーかぁ？　……っても、人も時間も場所も問題ねぇけど……なぁ」

くるり、と振り返り、

「そこに隠れてる覗き屋さんよぉ」

蒼助の見遣った先の茂みが風がないにも拘らずざわめいた。

葉と枝の擦れる音が動きと共に響くとそこから複数の人影が姿を見せた。
妙齢の若い女が三人。
ＯＬ姿の女が一人。あとの二人は私服だった。
あまり共通点の見れない彼女等に一つだけ確かな共通点があった。
それは蒼助の目にもわかる覚えのあることだった。

「眼ぇ血走ってんぜ、アンタら……男日照りなのか？」

女たちの血のように赤い焦点の定まりの見れない虚ろな眼。
加えての正常とはとても見れない不自然な身動き。

「覚えてるぜ……お前らに似た連中のことは……あんまり薄気味悪かったから、忘れるに忘れられねェよ」

同じだ、と本能が訴える。
あの夜、校舎を徘徊していた化物と特徴と死人の臭い。

「ちっ……二度と会いたくなかったぜ、その不気味な真っ赤な眼には」

悪態をついた後、蒼助はその場を走り去る。
女たち――――屍鬼はぎょろり、と眼球を動かして蒼助を視線で追うと血に飢えた獣の本性を剥き出しにして人間離れの速さでその後を追った。

◆

◆

◆

走りながら蒼助は昂ぶる神経を動かして思考を巡らせていた。
何故、またあの怪物が自分の前に現れたのか、と。

全ては元凶たる人の道から外れた神崎を倒して終わったはずだった。
千夜はそう言っていたはずだ。
なのに何故、

「……俺が追っかけられなきゃなんねぇんだっ……！」

応戦するにも得物である太刀は今持っていない。
通常の退魔師なら霊力を以って“喚ぶ”が、蒼助にはそれをするほどの霊力もなければその技術もない。術の名が付く類を全く身につけていないのだ。

「くそっ……こんなことなら、才能ねぇからとか開き直ったふりして面倒臭がらず真面目に術の習得しとくんだったぜ……ぬぉっ！」

足音がしないと思っていたら敵は建物を足場に高速で壁伝いしていた。
両手両足を使ってのそれはまるで蜘蛛のようだ。
一度振り向いて、もう二度と振り返らないと誓う。

「っっ不気味な移動してんじゃねぇぇっ！」

不満をぶちまけながらも、蒼助は周囲を見回した。この通りは日が暮れても人はまだまだいるはずだ。通常なら。
にも拘らず、幾ら走っても人影一つ見かけない。
答えに繋がる可能性があるとすれば、

「……結界かっ……範囲は何処までだよ」

とりあえずまだ結界の“境”にぶつかっていない。
この分では相当広く囲われているようだ。

「野郎ッ……何処のどいつか知らねぇが、見つけたら絶対にぶっ殺してやるっ……」

と、言ってはみたもののその殺す道具はおろか術すら今の蒼助にはないのだった。
まずはこの無防備な状態をどうにかするのが第一だ。

「攻めることが出来ないなら守り……っと、そうだ、護りだ！」

思い立った蒼助は走る速度を上げた。
目指す場所を定めて。
それは、

「神社だ、神社っ……神域である場所に入り込めば魔は鳥居の邪魔されて先に進めねェはずだっ」

この近くに古びた神社があったはずだ。
既に人から忘れ去られ祀られていた神も去ってしまっているような予感がするが、その残り香としての神気はまだ効力は落ちていないかもしれない。

「イチかバチか……賭けるしかねェ、おりゃぁぁっ！」

恐るべき速さで徐々に距離を詰めてくる化物。
それが蒼助の精神を恐怖で煽り追い詰める。

無視して蒼助は目指す場所に辿りつくことにのみ神経を集中させた。

そして、

「――――見えたっ……ラストスパぁトぉおっ！！」

鳥居が見えた前方の視界に見えたことで、蒼助は速度の自身の限界値まで上げた。

肺がいまにも破裂しそうだが、それさえも無視。

着々と古びてくすんだ赤の建物が視界に大きく映っていく。

「ど、りゃぁぁ……っ！」

足にかかる負担を後回しにして、蒼助は石段直前でしゃがみ、それを反動（バネ）に跳んだ。

二段抜きで上っても遅かった。何しろ全力で走ったに限らず既に敵はすぐ背後。

捨て身の最終手段に出る他ない。

僅か数秒にしかならないはずの浮遊している間は長く感じた。

そして着地。

その場所は、

「ぐっ……は」

頭を庇い咄嗟の受身をとったが、勢いは殺せずそのまま転がり、

「ぐぼっ」

何か固く平べったいものに脳天が叩きつけられた。

しばし、悶絶。
目尻を緩ませながらも顔を上げると、目の前には黒ずんだ茶の色の壁――ではなく板。
尻をついて後ろに下がって視界を広げて確認すればそれはぼろくなっても頑固に丈夫な硬さを保つ賽銭箱だった。
ということは、
「つー……へへっ、俺の勝ちっと」
ズキズキ疼く頭を押さえて後ろを見遣れば赤い鳥居が立っていた。その向こうにあの化物が中に入ろうとはせず立ち往生している。
賭けは蒼助の勝利だった。
予想通り、神社はまだその役目たる力を失っていなかった。
「よっし、これでひとまずは安心だな。次は昶を呼んで来てもらう……」
携帯を取り出し、親友のアドレスを開いた時だった。
鳥居の方から奇妙な音がするのだ。それは電気が帯電するような発し方に蒼助には聞こえた。
とてつもなく嫌な予感を胸に蒼助は恐る恐るその音の発信源を見た。
答えはドンピシャ。
鳥居の外にほっぽり出されている化け物たちは驚くべきことに結界の抵抗を受けながらもそれを越えて神社の敷地内に入り込もうとしていた。
うち一体は正面から力づくで押し切ろうとしている。激しい抵抗によって傷がつこうとお構いなしのようだった。
そして他二体は結界の媒介となっている鳥居そのものの破壊にとりかかっていた。

拳を叩き込みへし折ろうとしたり、見るも恐ろしい形相で噛り付いて柱を削ったりとがむしゃらな勢いで邪魔な障害物の排除に総員でかかっている。
これは蒼助も唖然とするしかない。

「おいおい、確かに女の恨み腐るほど買ってきた自覚はあるけどよ……ここまでしつこい女どもに手ぇ出した覚えはねぇぞ……」

軽口を並べる声も僅かに震えていた。
敵の勢い壮絶そのもの。このままではまさかとは思うものの、やってしまうかもしれない。
祀への救援もこれでは無理だ。間に合わない。
実のところを言えば、“闘う術は無くはない”のだ。
ただし、勝ち残るとなると得物がなくてはそれへと繋ぐ条件が揃わない。
太刀さえあれば、それさえここにあれば恐れるものはないというのに。

「くっそ……こんな時になって未練がましいが、本気で召喚法くらい死ぬ気で覚えとくんだった」

ぼやいた時だった。
近くでゴトリ、と重苦しい音が響いた。
反射的に背後を振り返った何事もない。それが間違いと気づき、足下に視線を引き戻した。

目を見開き、“不思議なもの”を見た。
足下に転がっていたのは蒼助にとってとても親しいモノで、
ここはあることは有り得ない、

最近、相棒となった太刀だった。

［参拾壱］　夕暮れの疾走（後書き）

読み返してみたら走ってる最中蒼助喋りすぎ。
それで全力疾走。うちの主人公はは体力オバケという名の怪物か。
最近、久留美の設定が自分の中で変わりつつある。
このままいくと彼女にはそーとー可哀相な未来が待っているのですが。うーん。

【参拾弐】　月の導き（前書き）

それは他意無き気まぐれ
嫌われ者のお節介

【参拾弐】　月の導き

「何で……」

蒼助は呆然としながら足下のそれを拾い上げた。
手から伝わる質感は幻ではない。確かな実物。
まだ甘いと更に調べると、この前落っことしてついた傷跡を見つけた。
間違いない。本物だ。
しかし何故、と疑問は当然芽生える。
そしてまさか、の可能性を見いだす。

「……俺が、呼んだのか？」

自分で言っておきながらなんて説得力のない言葉だろう、と思う。
今まで術など何度試そうと成功しなかった自分が呼び寄せた？
最下級の術を発動させるくらいの霊力すらない自分が？

自分のことだからわかる。
両親、友人、周囲の人間――どんな人間に言われなくても、他でもない自分がそのことはよくわかっている。

しかし、現に遠くにあった求めたモノはこの手の中にある。
これこそどう説明すればいいのか。

蒼助の思考を中断させる騒音が響く。
我に返って見た先では、いよいよヤバイ状態に期していた。
鳥居の柱が暴力に耐えきれず、崩れ落ちようとしていた。

もともと誰にも世話されず放置され、古くなっていたものだ。それを考えればよく持ちこたえてくれたものだと判断すべきだ。

「今はそんなことに頭使ってる場合じゃねぇよな……――――得物が来てくれたんだ、やるしかねぇ」

みし、という鳥居の悲鳴を耳に入れた。
蒼助は太刀を腰に寄せ、構えた。
再び同じ音がする。今度は一つ前より大きい。
指先を押し出し唾を切る。

――――ズ……ーンッ

重く響く崩壊音。
鳥居がついに崩れた。
そして、聖域はその意味と力を失くし、

「――――来やがれ、化物」

血風舞う戦いの場と化した。

◆　◆　◆

進行の障害が消えたことで屍鬼たちは何の躊躇もなく踏み込んできた。
しかし、それぞれ拒絶の抵抗による損害はあった。

顔が眼球が丸々見えるほど焼け爛れていたり、片腕が肩の根元から千切れていたり、とどれも凄惨な有様だ。
屍鬼たちにはその深手からくる痛みに苦しむ様子は全くない。
痛覚がないのか、それとも、

「……治っちまうものだから気にしねぇってか？」

憶測の問いかけに応えたかものかは知れないが、その考えは現実となった。
損害部分が急激な速度で修復を始めた。
焼け爛れた肌は元の死人の青白い肌に。欠けた腕は傷口から触手が飛び出し、あっという間に肉色の不気味な、より凶悪な武器へとなって生まれ出た。
浮き出る紫色の血管らしきものが心臓のように脈打つ。

「ったく、災難だぜ……ホント、こんなところで何してんだろ、俺……」

千夜に頭下げに行くはずが、こんなもはや神社としての機能を失った場所で化物に追い掛け回され、闘っている。
なにがどーなったらこんな状況に一転するのか。

だが、ここを潜り抜けなくては本来の予定も遂行できない。

「とっとと終わらせてやるっ」

蒼助が闘志を剥き出した時、屍鬼も本性そのものと思える凶暴な表情を露にして襲撃を開始した。
先行は屍鬼。一斉と言えるタイミングで一気に蒼助目掛けて駆け出す。

瞬きの瞬間、その凶爪は蒼助の首を狩る距離まで来ていた。

「――――っ！」

咄嗟に仰け反り、爪は空間を掻くに終わる。

蒼助は後ろに傾いていた上半身を無理矢理前に戻し、太刀を横一線に振り抜いた。

目の前にまとまっているところを一気にカタをつけようとした一撃だったが、掠ることもなく空を斬っただけだった。

渾身の速さで振り抜いた一刃をまるで予測されていたかのように飛び退かれたのだ。

「疾(はや)い……っ？」

前に相手にしたものより俊敏さと切れの良さがこの相手は上がっていた。

明らかに強くなっている。

何故、と疑問を胸に今度は己から攻撃に飛び出そうとするが、

「っ……」

踏み出した右足首に鈍い、されど確かな痛みが走る。

……さっきの跳躍で。

全力疾走の後の更なる酷使が祟ったのか。

或いは、着地をしくじったか。

「……ちっ、さすがに十五段一気越えは今の俺じゃちと無茶すぎたか」

以前ならば何でもなかったはずだった。
以前なら。

……アンタしか、そーゆーことで張り合える人間いなかったからな。

ふてぶてしいまでに不敵な笑みを湛えた女の姿が蒼助の脳裏を通り過ぎた。
息が上がってヒーヒー言っている子供に平然と勝ち誇ってみせている、そんな懐かしい一場面と共に。

「……って、アンタとの思い出に浸ってる場合じゃねぇんだよ」

現実を直視する。
敵は以前の同種の相手より戦闘力が高い。
引き換え、自分の足は通常より自由に動かせない。
逆境だ。

「……くそ、“視(み)えて”んだけどなぁ……」

悔しげに唇を噛む。
それだけではダメだ。
視えている“モノ”をこの手でどうにかできなければ。

――――何を手間取っている。

不意な虚脱感が蒼助を襲った。
目の前に敵がいるというのに、何もする気が起きない。
ただ、この“声”を聞くことにのみ身体が機能している。

――本当に使えん奴だ。あの程度如きに苦戦するか……。

気楽に言ってくれる。
そういうお前なら、この状況をどうにか出来るのか。
貶された怒りを仄めかせた蒼助の反論に“声”は嗤う。

――見るか？

勿体ぶるような言葉を最後に、蒼助は我に返った。
虚脱感は消えていた。
しかし、僅かなその間に一体が目前に迫り、爪を振り上げていた。

「げっ……――――」

死、という言葉が脳裏を過ぎったときだった。
視界で何が残像を残して動いた。同時に、顔に冷水のように冷たい液体が迸った。

◆　◆　◆

一瞬、蒼助は自分が“どのような状態でいる”のか理解しかねた。
しかし、徐々に甦る自分の行いの感覚が蒼助に現状を知らせる。
己の身体が柔らかい肉を突き破り、切り開き、潜り抜ける生々しい感触。
溢れかえる液体で皮膚が濡れる。
腕は真っ黒に染まり、貫通して肉の向こうで“生えていた”。

「、？」

袖に染みた黒い雫が滴り落ちる様子が異様に夢心地に思えた。
だが、紛れもない事実だった。
いつのまにか突き出された腕が、襲いかかってきた屍鬼の心臓部分を貫いていることは。

――――どうだ、簡単なことだろう。

子供に見本を見せた親のような口ぶりの直後、腕にぶら下がっていた屍鬼の身体が黒い霧のようになって散り爆ぜた。
蒼助は枷のなくなった手を呆然と見つめた。

黒血も一緒に消えて、手は元の肌の色だった。衣服には血痕もない。
けれど、それらと消えなかったものが唯一つ。
この手で肉を突き刺した感覚だけがこびり付くように残っていた。
「今、何が……」
――司令塔である支配者を消さずとも、奴らには“核”となる御魂（みたま）がある。いくら腕や足を削り取ろうと再生するのは全身に回す霊力の源泉である核があるからだ。元を潰してしまえば、再生も利かない。
貫いた瞬間に、感じた異物感。
あれが御魂だったのだろうか、と考えに至った時はひやりと嫌な寒さを背筋に感じた。
御魂を破壊した。
それから繋がる答えに至った。
「――ってめぇ、何てこと」
蒼助は眼に見えない“声”の主に対し、声を荒げた。
御魂とは魂。
生きるモノ共通の存在するにはなくてはならない命そのもの。
それの破壊が意味することは、

「消滅（け）しちまいやがったな……元は人間だった魂を」

完全なる消滅。
輪廻に帰することも巡ることも叶わなくなる。
修復の利かない完全なる終わり。

それをこの声はやったのだ。
よりによって蒼助の手で。

「自分が何したのかわかってんのかっ！　消しちまいやがったんだぞ、奪いやがったんだぞ、巡った未来でまた人間として生きる権利も可能性もっ」

――――……それがどうした？

「なにっ」

――――知ったことか。吾（おれ）にとってはカミもヒトも取るに足らん存在（モノ）だ。消えようがどうなろうが吾の知ったことではない。

心底興味がない、という意志が伝わってくる言葉が吐き捨てられた。
罪悪感の欠片もない、本当にどうでもいいと思っているこの見えない相手に蒼助は反論を返そうとするが、

――貴様も吾に説教できるほど他人を大切に思える人間ではあるまい。違うと言うなら問おう、ここでこの成れの果てどもの為に殺されてやれるか？

「、……それは」

痛いところを突かれ、蒼助は口を噤む。

酷い質問だ。

答えられないと、わかって問いかけてきているのだから。

否定できない悔しさに言葉を出せずにいると、

――ふっ……仮にそうだとしても、吾の存在も拘ることだ。しなれては困るからやることは変わらないがな。

「っ！？」

まただ。

先程のように、再び腕が、身体が蒼助の意志関係なく動いた。

右腕の動きに合わせてぐるり、と身体が反転するように背後へと振り返る。

右手の五指が鷲掴んだのは、屍鬼の顔だった。蒼助の意識が逸れているうちに背後へ回り接近していたのだろう。

腕はそのまま地面に後頭部を叩きつけた。

ぐしゃり、と何かの粉砕音が鈍く聴こえた。

人外なだけそれぐらいでは死ななかったが、しっかり地面に押さ

えつけられているせいで起き上がることが出来ない。
そこへ追い討ちをかけるように左腕が振り上がった。
心臓めがけて。

「っやめ――――」

制止の言葉も虚しく黒い飛沫（しぶき）が蒼助を漆黒に染め上げた。
真紅の月明かりがその手が貫いたモノを赤々と照らし出す。
骸に戻ったかのように動かなくなったそれが流す黒いそれが人の赤いそれと錯覚した。

人を殺した、という錯覚を。

「あ、あ……」

手に伝わる液体と肉の感触それが尚一層と蒼助を人殺しの幻覚に陥らせた。
自分の意志以外のモノで手が引き抜かれ、

――――さぁ、あと一匹だ。

“声”はまるで目障りな蝿を叩き潰すくらいの行為を行っているような感覚としか思っていないようだ。
不意に顔が仰ぐように上がる。
月の逆光を背にこちらに飛びかかってくる屍鬼が落ちてくる。

「……せ、」

腕が構える。

「この、よせって」

力が込もる。

「ヤメロよっ……」

そして、

「やめろぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉっ！！！！！」

悲痛な叫びが夜に空に木霊した。

◆　◆　◆

千夜はふらふらと普段は通ることもない道を、なんとなく歩いていた。

久留美と別れた後、本日の予定はなくなった。

しかし何故か、すぐに家に帰る気にはなれなかった。

今すぐ帰れば、まだいつものように三途のところで長い間一人で

待っているのは嫌だと時間を潰している朱里に先に家で出迎えてささやかなサプライズを与えてやれる。
いつもならそうしようと迷うことなど欠片もなくそっちを選んでいた。
だが、そうではなくこうして用もないのにただふらついている。
たいした理由はなかった。
ただほんの少しだけ、静かな一人の時間を欲した。ただそれだけのことだった。

すっかり宵色に染まった空を見上げる。
乱れのない円を描く赤い月が浮かんでいた。

良い月夜だが、千夜はあの血のような紅さの月は好きではなかった。
それに赤い月夜には魔性が多く出歩く。
だから、この月は千夜にとってあまり良い事を運んでくれることはない。

「……いや」

そうでもないか、と考えを改める。
たった一つだけあの月が導いた“善き出会い”がごく最近にあったことを思い出す。

『彼』と出会ったあの夜もこんな月が浮かぶ夜だった。
そして、今と同じように特に目的も行く先もなく夜道をふらりふらりと歩いていた。
転入前日のことだった。
とある所用で出かけた帰り、翌日から新たに本格的に『女として』人生をスタートすることを考えていたら、無性に一人になりたくな

った。

薄気味悪いほど赤い月の下で、今までの自分の歩いてきた道の記憶を一つ一つ掘り返しながら確認していたら、ふと通りかかった公園で『それ』を見かけたのだ。

一人の男が集団でリンチされている、という珍しいというわけではない光景。

ただ集団の方は全員魔性であった。これから男は彼らの餌食になるところ、と判断できた。

通り過ぎて、見なかった事にしようと当然思いはした。

東京の夜では日常茶飯事だ。

自分には関係ないし、無闇に人と関わりを持ちたくも無いと考えていた。

しかし、男がいよいよとなったところを目を逸らせず見てしまい――――――そんな考えは吹き飛んだ。

手を出してしまった、と気付いたのは既に魔性を一匹残らず殺し尽くした後だった。

敵を一掃した後に、訪れたのは後悔の念だった。

衝動的に助ける形になってしまったが、危機は去っても男にはもう一つの危機が死の影となって身体を蝕んでいた。

虫の息と言っても過言ではない、瀕死の重傷を負った男はもはや助かる見込みは見れなかった。

どの道、〝今の自分〟に助ける手段は持たされていない。自分がしたことは全く無意味だった。

それなのに、男は青白い顔で出来損ないの笑みを浮かべて礼を言って来た。

ああ、だから厭だったのに、と目の前で死に逝く男を見ながら嘆

息した。

しかし、男に最期に何か飲みたいと強請られて右のポケットに手を突っ込んだ時に触れた中にある〝物〟の感触で一つ思い出したのだ。

今日の店のバイトの時に裏商品の整頓を言いつけられて片付けていた時に見つけた薬品だった。あの魔術師は霊薬の調合の腕も秀でているらしく、“えりくしーる”とかいう万能薬のモドキが作れるらしくそれもそっち系も人間に売っているようだ。

お駄賃に、と多額のバイト料を貰っておきながら我ながら図々しくも一つくすねたのだった。

オリジナルの完璧なものなら瀕死の人間を全快させることはおろか不老不死にでもできる代物で、モドキでもあっても三途ほどの腕前なら傷の治癒や解毒くらいの効能はあるらしい。

途中、男がふざけたことを言ってきたが、案外それはこの場において最も適切な方法だった。

薬の量もそれほど多いというわけでもなかったから、無駄にしたくなかった。

ただの手段なのだ、と考えを割り切りながらそれを実行して、それでも尚ここまでして助けなければならないのだろう、という疑問が芽生えもした。

ワケがわからなかった。

だが、もうそうすると決まってしまった。

なんだか悔しく釈然としなかったから、せめて理由は自分で決めようと思いああした。

ただの気紛れだ、と。今晩は月が綺麗だったから、と。

そう嘯いて嫌いな赤い月に全てを押し付けた。

正体不明の何かに突き動かされるこの衝動も、理由も何もかも。

そうして、千夜は『彼』を救けた。

一夜だけの邂逅だと。これきりの拘りだと踏まえて去った。

この月夜の出来事は自分と赤い月しか知らない。他は消したし、相手の男も霞む意識の中の一連の出来事は朝目覚めれば夢だと思い、すぐに忘れるはずだ。

明日は新たな日常の幕開けだ。

新しい環境で、新たな多くの人間に出会う。

そこで、自分は必要以上に近づかないように距離をもって生きる。

“面倒”はもう御免だったから。

そうなるはずだった。

その新しい環境たる学園で一夜限りだったはずの『彼』と再会しなければ。

初日から全ての予定を狂わせていった。

仮面の下の自分も一部の予定外に見られ、思わぬ関係を持ってしまったり。

魔性と化した同級生の不良が起こした封鎖された校舎での騒動で更なる予定外に走ったり。

その後日、救けた『彼』に今度は助けられ、運と時期の悪さが重なり男である自分のことも知られたり。

そして、流れに流れていつの間にか、一人の人間のことで頭の中を満たす今となっている。

甦るのはケーキ屋での久留美の言葉だ。

彼女は男嫌いかどうかと自分に問い、理由を聞いた後こう言った。

何故、『彼』は平気なのかと。

『彼』は自分が嫌う男そのものではないか、と。

千夜は不思議ことを耳にした気分になった。
何処が、と問い返したくなった。
彼女ほどの洞察力を持つ人間が気づかなかったのだろうか。

『彼』は違う。
『あの男』とは違う。
自分が嫌と言うほど知る男たちとも違う。
そう断言できる理由だって無論ある。
何も無闇に自分の直感だけで否定しているのではないのだ。
彼女の知る限りの『彼』の素行を聞かなくても見かけからなんとなくそういうイメージはあった。そのままなのだろう、と。

だが、確信に至れた要因がある。
同じ部屋で寝ていたというのに、『彼』が自分に手を出さなかったというのもある。
自分の秘密を知った後も、驚きはしていたが態度は出会った時から微塵も変わっていないのも。

そして何より、あんな真っ直ぐな眼で見てくる男は、千夜は知らない。
今までそんな男はいなかった。
唯一違うと認識してきた“ある男(ひと)”を除いて、そんな男は千夜の周りにはいなかった。

この欲望の強い人間の溜まり場でそんな出会いが出来たのはかけがえのないことだと自負している。
しかし、その相手とは今――

「……さすがに完全無視はやりすぎたか……？」

先日のいざこざで千夜は昂ぶった感情に任せて絶交発言に近い言葉を一方的に『彼』に叩き付けた。

そしてその翌日である今日、帰りに偶然廊下で顔を合わせた時はそこに相手がいないという前提の態度を通しそのまま無視の形で素通りした。

今思い返すと拗ねた子供じみた態度だと我ながら呆れてしまう。

だが、と衰えかけた怒りがむしかえる。

悪いのは向こうの方だ。

首を突っ込むな、と。危ないから、と。振り払ったこっちの気も知らずにいらないことをするから。

ふつふつと煮立ち、沸点を上げていく怒り。

吹き出るまでに達するかと思ったところで、不意に過ぎる無視した時の絶望の淵に突き落とされたような情けない表情をしていた『彼』の顔。

急激に温度が衰えを見せた。

「……とはいえ、私にも問題があったかもしれないな」

立ち聞きで耳に入れた「依頼で調べている」という発言で多額の報酬に釣られたと勝手に決め込んだ。

責めた時、彼は明らかに何か言おうとしていたが己の感情を優先して無視した。

理由は別にちゃんとした、それこそ譲れない意志によるものだったかもしれないのに。

時間の経過で自分の悪い点も見えてきて、千夜の怒りはもはや弱々しげに揺れるキャンドルの火のように小さくなっていた。

「……理由は納得のいくものだったら……許して、やるか」

許す側を譲らないのは、最後の意地だった。
何はともわれ、貴重な存在を失うのは気が引ける。だから、明日にでも顔を合わせたら何事もなかったように挨拶して拍子抜けさせてやろう、と思った時。

誰かの悲痛な慟哭が聴こえた。

◆　◆　◆

熱い。
熱い。
熱い。
熱い。

頭から足先まで。全身の血管を流れる血がマグマのように煮えたぎって、骨を焼かれているような気分だった。
煉獄の炎に骨の髄まで焼き尽くされるのではと思わせるには十分過ぎるほど。

苦しい。
苦しい。
苦しい。
苦しい。

心臓の脈動が信じられないくらい速い。一拍も間も関係ない、めちゃくちゃな動き。

「ぐっ……ぁぎ」

耐え難い苦痛にもがくように蒼助は胸を掻き毟るが、無駄な足掻きだ。

……どうしちまいやがったんだ、急に、身体が……っ。

危機が去り、声も聞こえなくなった直後にこの異常事象は起こった。

自分の身体を介して行われた事の余韻をただ呆然と受けて止めていた身に突如降りかかった苦痛と焼け付くような熱さ。

「――――うぅぐぁっっ」

胸を押さえ蹲って耐えたが、一層深い痛みが蒼助を襲い、たまらず仰け反った。

天上の月はそんな苦しむ蒼助を静かに傍観していた。

地獄の苦しみとも例えられる苦痛に苛まれる中の蒼助にはそれは嘲笑っているようにさえ見えた。

生まれてこのかた体験したことのない痛みに蒼助の精神はいたぶられ、弱った。

助けて欲しい、と心の底から救いの手を求めた。

……まるで、喰われているみたいだ。

内側から沸いた言葉に一瞬だけ痛みを忘れ蒼助はハッとする。

その通りだった。

これはまるで内(なか)からジワジワと苦痛を伴って侵食されているようだ。

“何か”に。

……そういう、ことかよっ。

何か。それは考えずともわかることだ。
アイツ以外に誰がいるというのだ。あの声の、悪夢の男以外に。

「……こ、うやって、俺の身体を……乗っ取ろうってか……っざけやがって！」

侵食されていく恐怖よりも自分のモノを勝手に奪われていく怒りが勝り、振り上げた拳を地面に叩き付けた。

「ふざけん、な……乗っ取られてたまるか、乗っ取られてたまるかよっ！！」

がむしゃらに額を地面にぶつける。
がち、と硬い音がし、額を何かが伝う感触がしても蒼助は止めなかった。
痛い。この苦痛を感じれるうちはまだこの身体は自分のものだという証拠だ。
だから、より多くそれを感じようと蒼助は必死だった。

「……っくしょ……っ」

やるせなさに蒼助は立てた両腕を崩し、横倒れになった。
そして、ぼんやりと意識が霧のかかったような状態がテレビの砂嵐のように視界の映像を乱し出す。
絶望した。あの化物にとって、結局自分の抵抗など露ほどでもない程度なのか。
ただ、無抵抗も同然でただ食われるしか道は残されていないのか。

視界がまたぶれる。
終わりが近い、と思ったとき、脳裏をある人物の面影が通り過ぎた。

ふと笑いたくなった。
こんな時でも自分の心を支配するのはあの女なのかと。
そこまで自分は彼女にイカれてしまっているのかと。

だが自分はここで終わってしまう。
諦めたくない。
でも、終わりだ。
それでも。

諦める。諦めない。
矛盾した思いが蒼助の中をぐるぐると回る。
そうして二つの思いが格闘している合間に、霞み行く意識と視界が視線の先で何かを捕らえた。
しかし、それが何かを視界が明確に捉える前に、意識が認識する前に。
蒼助は力尽きた。

◆　◆　◆

前にもあった状況だな、と千夜は目の前で倒れているものを見下ろしながらしみじみと思った。

「しかし、こーゆー場合慌てて駆け寄ったりするんだろうが……」

生憎、その手の王道的感覚は千夜は死んでいた。
こういう厄介な拾いものに遭遇することがあまりにも多すぎたせいだ。
何だかんだ言おうと、こういう場合では冷静を保ち対処することは決して間違いではない。
「血は……ない、な。今度は薬じゃ……」
指先を首筋に当てる。
「……何とかなりそうもないな。つーか、持ってないし」
押し付けていた指先を離し、じっと見つけ触れていた人差し指を初めとして中央三本を見つめる。
こうして離した後も高温の熱の残滓がいくらが残って消えない。
本当に厄介だ、と倒れる『彼』の頭を腹いせにつん、と小突いた。
「明日でよかったのに……やっぱり、アンタは嫌いだ」
暗い夜空を呑気に泳ぐ赤い月を忌々しげに睨み付けた。

【参拾弐】　月の導き（後書き）

期末終わったー！

よっしゃ、これでやっとテスト勉強の合間にちょこちょこ書くなんて痒い思いしなくて済みます。

物語はそろそろ真ん中あたりに来ようとしています。

やっと、そしてまだこんなところ。

完結まではまだ遠い模様です。

［参拾参］　侵食の予感（前書き）

大丈夫
大丈夫だ
この程度を一人で抱えられずに何が出来る

［参拾参］　侵食の予感

帰って来て早々、少女は小さな幸せを見つけた。
いつもは鍵がかかっているドアが開いた。
たった一人の家族である彼女は、常に小学生である自分より帰宅が遅い。バイトや都合が入ると尚のこと。それでもどんなに遅くなっても夕飯は一緒に食べるという約束は守ってくれているが（待ちくたびれて寝てしまうのを除いて）。

少女の頭の上で天使のラッパが鳴り響いた。
一人留守番続けてどれほど孤独と闘い続けたか、ようやく姉が自分におかえりと帰りを迎えてくれる日が巡ってきた。
理由などどうでもいい。いつもより姉と長く過ごせる、その至福が待っているかと思うと何も考えられなかった。

脱ぎ散らかした靴について怒られることですら頭の片隅に押し込めた。
ランドセルを自分の部屋に放り投げ、リビングへ向かおうとしたところで姉の部屋の扉から物音が聴こえたのを聴き取った。
部屋のドア前まで戻り、開けて覗くとベッドの掛け布団がその下に人がいることを知らせるように盛り上がっていた。
寝ているのか、と思い部屋に入り、気配を確認。目標から聴こえる寝息は確かに本物だ。
起こしてはまずいかとしばし次の行動に悩んだが、次に少女に中で悪戯心が芽吹いた。

起こさないように、ゆっくりとベッドから距離を取るように後ろに退がる。
目標との距離を充分に見測ると、その助走を一気に駆け、

「――ただいまぁねーさぁぁんっ！」

盛り上がり部分に身を躍らせ、飛び込んだ。

◆　◆　◆

潤んだ双眸。その奥で揺れる瞳。切なげに寄せられた眉。真っ赤に熟れたように紅潮した白かった頬。唇から漏れる湿った吐息。

その艶めいた眼差しは自分に向けられていて、

「玖珂……」

胸元まで開けられていたボタンがその手で更に外されていく。

白い下着に保護された豊かな二つの膨らみが露にされる。

チェック柄のプリーツのかかったスカートが腰から足先まで降ろされて、足先から抜き取られた。

「……ここから先は……頼む」

仰向けにベッドに身を沈ませると、両手を頭の下の枕の下に忍ばせる。

じっと、乞うように向けられる視線に答えようと、こちらを迎える彼女の上に覆いかぶさる。

そのまま無防備に捧げられた体を抱き締めるように腰と背中に腕を回し、身体を密着。

「んっ……」

胸板に押し潰される胸の刺激に鼻を鳴らすような吐息が耳元で漏れた。

それに刺激された興奮が沸き立ち、左手で後ろの上を、右手で下の下着をずらしにかかり、次の段階へと――――

◆　◆　◆

はっと目が覚めた時には、蒼助自身が仰向けになっていた。

しばしの理解の時間を要してやって来たのは、

「うっわなんだよ……夢かよー……ちくしょう俺がっかりだー」

せめて夢なら最後までイかせろよ、などと手で両目を覆い内心ぼやいていたところ息苦しさに気付く。

手を退かし、重みを集中的に感じる自身の腹の辺りを頭を上げて見た。

「あ……？」

ちょこん、と布団越しに腹に乗っかっている子供が一人。

蒼助は確認した途端、少々面食らった。

年は十歳くらいか。眠気の残滓も跡形もなく吹っ飛ぶ程の真っ白な髪の毛で作られたツーテールと通常のそれより白い肌。極めつけが普通の人間では有り得ない左右二つの血のように赤い瞳。

特徴的な外観の少女が腹に跨ってその大きなくりくりした赤い両目で蒼助をきょとん、と見下ろしていた。

目覚めて最初に目にした少女の衝撃から立ち直りかけて新たな疑

問を発見。

「つーか……ここ、何処……なぁ、お前」

見覚えのない部屋を見回しつつとりあえず手近な手がかりとなる少女に尋ねようと思った時だった。

不意に前に視線を戻せば、少女は何故かプルプルと震えていて、

「……い……」

「い？」

蒼助が恍けた声を漏らした次の瞬間、

「いやあああああぁぁぁぁ――――っっっ！！！！」

甲高い声がつんざくような勢いで蒼助の至近距離で少女の口から放たれた。

この小さな身体のどこからこんな声が出せるのか。ぐわんぐわんと耳から入った超音波紛いの高音絶叫によって脳の機能が麻痺した。

目を回しかける最中の蒼助に構わず、少女は怒濤の勢いで蒼助に詰め寄った。

「何で、何で、姉さんのベッドで男が寝てるのッ！？　しかも上半身裸ッ！？　姉さんは何処よ！？　てゆーか、アンタ誰よっ！　朱里と姉さんの愛の巣に何勝手に上がり込んでんのよー！！」

ぶんぶん、と少女は蒼助の首根っこ引っ掴んで揺さぶる。

加減もへったくれない容赦のなさで前へ後ろへ揺れる揺れる。

このままじゃ殺される、と気が再び遠くなりかけたところで蒼助は反撃に出た。

「ぐぅっ……でぇぇいっやまかしいっ！」

首を絞める少女の両手を振り払い、蒼助は負けじと叫び返す。

「殺す気かっ！　つーか、姉さんって誰だよっ」

「姉さんは姉さんよっ」

「答えになってねえよこの糞ガキ！」

埒が明かないことに苛立ち、暑苦しい布団を払いのけた。

少女は隠れていた下半身が思わぬ形で露になったことで更に喚いた。

「っ、きゃーっ！　パンツいっちょへんたーい！！」

「うおっ……だぁーっ知りてぇことたくさんだがまず俺の服何処だよッ」

いつのまに脱がされたのか。

そもそもここは何処なのか。

蒼助の中で対処し切れないほどの膨大な疑問が次々と湧きあがってきて溢れかえる寸前のところへ、疑問を一挙に解答してくれる人間がこの混乱の場に現れた。

「何だ、今の悲鳴はっ！」

バタン、と騒々しくドアを開けて入ってきた聞き覚えのある声。

はっと振り向いて蒼助は固まった。

同じく白髪赤眼の少女も喚くのを止めて固まった。

部屋に入ってきた第三者――千夜はじっと自分を見てくる二人を様子に首を傾げた。首にバスタオルを引っかけた全裸の姿で。

奇妙な沈黙が降りる。

そして、

「うおおおっ！？」

「キャァァ――――っ！？」

その場は更にどうにもならない状況へと転がって行った。

◆　◆　◆

一段落してその場が落ち着いた後。

小うるさい少女は千夜によって部屋を出され、千夜は服を着てようやくじっくり話が出来るようになった。

「いやー、悪かったな驚かせて。アレがそろそろ三途のところから帰って来る時間だというのをすっかり忘れててな」

「……いや、それよりも……ここ、何処なんだ？」

「ん？　私の家だが」

千夜の住むマンション。

外まで来たことはあったが、中には入ったことがなかった。

しかし、何故自分が千夜の家にいて、ベッドで寝ていたのだろうかという疑問が自然と湧き、

「俺……何で」

「散歩してたら通りかかったボロい神社で倒れてるお前を見つけた

……。見かねて私が家に運んだという経緯だ」

並べられる説明に引っ張られて、蒼助の中で記憶が段々甦ってきた。

思い出しなくない部分までも。

「……制服は魔性の返り血を浴びて汚れていたから勝手に洗わせてもらっている。この前借りたままだったお前の服、持ってくるから少し待って……」

「千夜」

呼び止められ、千夜は足を止めた。

振り向いた先では、蒼助がベッドの上で俯いていて、

「何だ？」

「悪かった」

唐突な謝罪。

何のことか、千夜は一瞬耳にしただけではその真意を理解しかねたが、すぐに何に対する謝罪か蒼助が言葉を続けたおかげでわかった。

「昨日は……その、俺が……」

「……何で私が怒ったのか、ちゃんとわかって謝っているんだろうな」

「ああ」

「反省の態度として、もう変な首は突っ込まない決心もあるか？」

「それは……」

口籠もる様子から千夜はその気がないことを悟る。

「……なら、その謝罪は受け取らない」
「……っ」
「折角の私の親切心を無下にしてまで譲れない事情があるなら、中途半端な謝罪など考えずに意志を押し通せ。じゃなきゃ、今度こそ見放すぞ」

バッと顔を上げ、蒼助は千夜の顔を見た。
こちらを振り返るその顔には微笑があり、

「せいぜい死にそうな思いをするがいい。――――死なないように、私が見張ってやるから」

蒼助の心を中心で大きくその面積を占めていた氷塊が急激な速さで氷解していく。

「……まったく、あの学校には馬鹿しかいないのか？　とんでもないところに転入してしまったみたいだな、私は……」

先が思いやられると溜息をついてはいるものの、嫌悪の色が表情にないことに蒼助はホっとする。

「と、ちょっと待て……何だ、もう既にいたみたいな言い方は」
「久留美にも警告無視された。しかも、胸倉掴まれて告白紛いな台詞浴びせられた……まさに類は友を呼ぶ」
「オレを見て言うな」

久留美と同じ枠に当てはめられたというのは気にくわなかったが、とりあえず怒りは解けて何よりだった。
肩の力が抜けていく蒼助に千夜は言った。

「あと、……今日はこのまま泊まっていけ」
「ああ……――――ああっ！？」
目を剥いて蒼助は声を裏返して叫んだ。
泊まっていけ、とはどういうことだ。
それは単なる仲直りの親交を深める目的があってか？
それとも別の真意があってのことか？
個人的には後者の方がいろいろ期待出来るなどと雑念に近い探りを入れていたが、
「ああって……まさか、帰る気なのかその状態で」
「あ、いや、この状態にしたのはお前じゃねぇのかっつーか……いや、な？　お前がいいっていうなら一晩でも二晩でも仲直りするけど……って、世間一般の常識と違うじゃねーか迦織のやろうっ」
「なに一人でわけのわからんヒートアップをしている……――――熱があるくせに興奮するな」
ピタリ。
妄想の展開が止まった。
「ね、つ？」
「三十八度五分。世間一般の常識ではベッドで安静の度合いだな」
ほら布団かぶれ、と千夜が端に追いやられた布団を蒼助に頭から被せる。
「傍目健康優良児のくせに意外なことに風邪ひけるんだな」
「……」
「食欲あるか？　あるならお粥でもつくるが……」

世の中そんなウマイことがホイホイ転がってるわけないでしょー
若ったら、などと笑っているある女の顔が安易に浮かんだ。

「……いらね。食欲ねぇ」
「そう言わず何か食え。というか食わすからな」

拒否権なしときたか。
なら最初から聞くな。

「安心しろ。私はお前と違って病人にレトルトなんて手抜きはしないから」
「嫌味かこのやろう……え、お前作んの？」
「私以外に誰がいる？」

千夜の手料理。
お粥とはいえ手料理。
二作目も米かよ。でも手料理。

熱で若干ぐらぐらする思考回路が『手料理』の言葉を何往復も巡らせ、

「……食べマス」

◆　◆　◆

ほっかほか。
そう主張せんばかりに白い湯気を立ち昇らせる取っ手付き鍋に入

ったよく炊けた粥。
そして目前には、

「ほれ。あーん、だ」

レンゲに盛られた粥を差し出して食べるように促す千夜。
「あーん」するのは非常に羞恥を感じずにはいられないが、これはまさに夢にまで見た（見てないが）状況だった。
ちんけな男のプライドなど捨てて蒼助はちゃっちゃと口を開けてレンゲを向かい入れた。
湯気の勢いは伊達ではないくらい熱かったが、幸い猫舌ではない。

「……」

もぐもぐと味わうように租借している蒼助に千夜が尋ねた。

「どうだ、味は。病人用に濃すぎないように味加減には気をつけたが」
「……いや、うまい」

嘘でもお世辞でもない。
本当に美味いのだ。
もともと蒼助は米オンリーのお粥は嫌いだ。
ろくに味もしない上にぐにぐにと頼りない歯ごたえがどうも好きになれない。
風邪を引いた時もこんなものを食うぐらいなら、何も食わない方がいいとほぼ断食している。

「本当にうまいな。味がする粥って初めてだぞ俺」
「味付けてるんだから当たり前だろ」

「いや、俺のお袋が面倒くさそうにつくった奴は何の味もしなかったぞ。つーかあれはもう米の形が見る影も無く砕けてドロドロの糊みてぇになってたな」
「……手抜き根性は遺伝だったか」
鍋から既にとってあるお椀にあるそれを掬い、また差し出す。
「ん……なぁ、さっきの子供って」
「ああ、さっきは騒がせて悪かったな。私と間違えたんだろう、悪気は無いんだ」
「誤解が晴れてからの後半はどうだろうな……じゃなくて、あの白いガキは何だって言いてぇんだ俺は」
「妹」
ぐっ、と蒼助はお粥を吹きかけた。
「い、妹ぉっ？」
「何をそんなに驚く。私に妹がいるのがそんなにおかしいか。つーか、前に話したろ」
「いや、そーゆー問題じゃぁねぇだろ……だって、――」
少女のあの常識から離れた異様な容姿に触れそうになり、蒼助は思わず口を噤んだ。
不自然に口を閉ざした蒼助の様子を見て、千夜はゆっくりと微笑んだ。
「……気を使ってくれてありがとうな。容姿はああだが、立派な私の妹だよ」
「……アルビノっつーんだよな、あれって」

「お前がそんな言葉を知っていたのは驚きだ」
「お前な……」
「母親似なんだ、あの色素は」

それは母親もアルビノだったということか。
しかし、妙だと蒼助は思う。
アルビノは突然変異で現れる二万人に一人と言われるぐらい珍しいらしい。
遺伝することなど有り得るのだろうか。
ましてや、千夜は普通だというのに。
蒼助のそんな心内を知ってか知らずか、

「ほら、早く食え。お粥は冷めるとまずいぞ」
「お、ああ……」

急かされ、蒼助はレンゲに食いついた。
食事が進む中、蒼助は千夜には謎が多いと改めて認識を深めた。

◆　◆　◆

また聞こえる。
沈め、というあの男の怨嗟の声だ。
気がつけば、あの無の空間に自分はまた居て、足はいつものように水の中に沈んでいく。
もう何度目といった事象に慣れることは出来ない。
そして、また足掻くのだ。
それでも、『玖珂蒼助という存在』をあの男に盗られたくないから。

「――っは」

夢の終点に着き、蒼助は身体を跳ねさせてベッドで飛び起きた。
荒い息遣いを繰り返し、蒼助は前髪を掻き上げた。
指の間を通る髪はしっとりとした感触。額は汗で濡れていた。
魘されてかいた冷や汗ではない。頭が若干ぼんやりする。此処――千夜のマンションで目が覚めた時には睡眠不足とそれによる疲労で身体の健康状態を崩したことで熱を出していた。
夜中である今が、その最高潮といったところだろうか。

「……あっ、ちぃ……」

だるさに加え、身体に籠もった熱でくらくらする。
首筋までビショビショで、来ている服は汗で湿っていて気持ち悪い。
こんな状態ではとても寝れたものではない。

「……水」

喉の渇きをどうにかする必要もあった。
蒼助は不安定な身体を鞭打ち、借りている千夜の寝室を出た。

消灯後の真っ暗な廊下を壁伝いで歩き、キッチンに辿り着く。
食器棚から適当なコップを選び、手に取ろうとするが、手に掴んだと思ったコップは手の平の中をすり抜けて、

――ガシャーン……っ！

重力に従ってガラス製のコップは床に叩き付けられ、割れた。

不揃いな大きさに割れたそれを見て、舌打ち拾おうとする。
しゃがんだところで、声が聞こえた。

「……こんな夜中に何してる」

顔を上げれば、前にはいつの間にかタンクトップと短パン姿の千夜が明かりの点いたキッチンに居て立っていた。

「喉が渇いたから水を飲もうと思ったんだけどよ……わりぃ、コップ一つダメにしちまった」

破片を拾おう伸ばした手を押さえられ、

「ここはいいから。ソファに座ってろ、辛いだろその身体じゃ」

病人はおとなしくしていろ、という暗黙の含みを受け取った蒼助は、その気遣いに甘えてふらふらとソファに背中から倒れ込むように腰を下ろした。
高そうな弾力のある感触に受け止められた後、熱い息を、は、と吐きだした。
早々に片付け終わった千夜が水の入ったコップを持って蒼助の側にやってきた。

「ほら、水」
「サンキュ」

今度は落とさないようにと倦怠感漂う手になけなしの力を込めてしっかり受け取った。
汗になって流れ出た水分を取り戻す勢いで一気に飲み干した。
空になったコップを千夜に渡し、そのままソファにもたれかかり

息を吐いた。

「ベッドに戻らなくていいのか？」

「……いい。汗で湿ったベッドになんか今更戻る気ねぇよ……」

「そのお前が湿らせたのは私のベッドだぞ、こら」

明日にでもシーツ換えなきゃな、と呟きながら自分の氷の入った水を飲みながら、千夜も蒼助の隣に腰を落ち着かせる。

「……お前は」

「トイレで起きて来たんだがな、さっきの騒音ですっかり眠気が失せた」

「……悪い」

「別にいいさ。このまま病人放って寝床につくほど非情じゃないしな……眠気が戻ってくるまでは一緒いてやる」

何処か恩着せがましい台詞だったが、正直ありがたかった。

起きていても、独りは安堵など少しも沸かないから。

「熱さで眠れないなら冷却シートでも持って来るか？」

「いらね……どーせ熱で魘されたわけで起きたんじゃねぇから……」

千夜はその言葉に、そうか、と頷いて沈黙を生む。

しかしそれを僅かにして終わらせ、

「……何か別の原因でも抱えているのか？」

「……だったら、何だよ」

「無理強いする気はないが……聴く耳ならお前の隣にいる」

わかり辛い気遣いだと蒼助は思った。

だが、この少女はもう見抜いている。
自分が何か身体に負担になるモノを溜め込んでいることを。
そろそろ限界だ、と喉まで言葉が来ているのを感じ、蒼助はついに吐き出した。

「……昨夜から……奇妙な夢、見てんだ……さっきも、それで起きた」

夢？と聞き返す千夜に対して頷き、

「夢の中で……気が付くと、変な空間にいるんだ……足元は水が張ってて……周りどこ見ても誰も、何もなくて……地平線まで真っ暗な場所で俺一人で立ってる。……声が……“沈め”って……声が響くと今まであった足場が無くなって……足から沈んでくんだよ」

始まりの瞬間はそれほど怖くない。
本当に怖いのは、

「一気に沈まねぇんだ……逆にそれが怖ぇ……その、じわじわってのが……ちょっとずつ食われていく間の恐怖が……。そして……その最中に、“アイツ”が現れるんだ」

「アイツ……？」

「……水に飲まれていく俺を……ずっと眺めてんだよ……そんで、俺が水の底に沈んじまった後、アイツが俺に“成り代わり”やがるんだ……仕草とか喋りとか雰囲気とか……まんま俺で誰も気付かねぇで……俺は、何も出来ないでそれを見てるしかない」

自分を奪われる。
そして、奪われた自分は誰も気付かれず、たった独りで消えてい

くのだ。
これが恐ろしくなくて、一体何が恐怖なのだろうか。
くしゃり、と蒼助は髪を苛立たしげにかき回す。
もう、今にも気が狂いそうだった。

「ははっ……案外、次は夢見た後目が覚めないまま消えちまってるかも……なーんてことが」

無意識に首を押さえた。
あの男に掴まれた感触は、一晩たったというのにまだ残っている。
あれさえも、夢だったとは言い切れない。
そして、夕方のあの誰かに肉体を使われる感覚がその不安に拍車をかけていた。
そんな不安定な蒼助の肩に手が置かれた。
ささくれ立った心を鎮めるように、千夜の手が。

「――っ馬鹿か！　しっかりしろ」
「千」
「お前が、お前がそんな事を言うな、消えるなんて、消えないでほしいと思う私に言うなっ……消えないでほしいのに、そんなこと言うのか！」

肩を揺さぶって訴える千夜に蒼助は顔を上げた。
さっきまで落ち着いて聞いていた千夜が必死な表情で自分を見据えていた。
こんな感情的な表情を見たのは、蒼助にとって二度目となる。
一度目は、昨日の拒絶。
あれは怒り。
そして今は、

「消えるなんて……言うなよ馬鹿」

蒼助の中を駆け巡る一つの感情。

心配をかける申し訳なさではない。

愉悦。

この少女が自分の為にここまで感情を動かす快感。

消えるなと言って感情をぶつけてくる少女の心を動かしているのは自分。

何という快感。骨の髄まで悦に浸りそうだ。

――――――うっわ……俺って、結構歪んでたんだな……。

新しい自分を発見、などとさっきの悲壮な気分など軽く吹っ飛んだ状態で内心呟いた。

熱で相当頭が温まっているせいかもしれない。

何はともわれ吹き込んだ新風によって先程の陰鬱な気分は大分霞んでしまった。

「っくく……」

「く、が……？」

「かー、もうだめだー」

堰を切ったように笑い出す蒼助に千夜はポカンと呆気に取られた表情。

先程のシリアスな空気など知らんこっちゃないと言わんばかりにその発生源が大笑いしているのだから無理もない。

涙目になるほど笑った蒼助はひーひー言いながら、

「……マジになんなよ、夢くらいで……いやー、つーか俺って意外と役者に向いてのかな」

そこで千夜はカチンと来た。

「……まさか、今まで私をからかってたのか」

「うわ、顔赤い。やべー、今俺相当レアなもん見てる？」

リンゴみたいに耳まで赤くしている千夜に興奮してますますテンションがハイになる。

しかし、やりすぎた。

「玖珂」

「ん？」

「消えろ」

我に返るとヒュッと空気を切る音と共に放たれた拳が目の前に迫っていた。

鬼気迫る中、場違いに蒼助は考えた。

まだ、大丈夫だと。

［参拾参］　侵食の予感（後書き）

ちゃっかりオイシイ思いしてんな、おい。
しかし、危機は着実と近づいてきている。

やっと、朱里が本登場。
若いのに耳年増なシスコン雪ウサギちゃん。
アルビノだけど、一応オカルト要素があるこの作品では遺伝子の問題ではないのです（いずれ進展上わかりますが）

［参拾四］　在りし日の面影（前書き）

まだこのままでいたい
だから、何もなかったことにした

【参拾四】　在りし日の面影

意識が眠りの底から浮上し、その水面近くまで来た。
朱里の目覚めかけの意識は追い討ちをかける窓から差し込む眩しい朝日によって完全に起こされた。

「…ん　ゞ……んー」

瞼の下で闇に浸っていた二つの眼に慣れない光は痛く、逃げるように布団の下に潜り込んだ。
今日は土曜日。週に二日しかない学校に行く必要のない日。せっかくの休日なのだから『隣にいる人』と一緒にもう少し惰眠を貪っていたい。
同じ上にいるはずの温もりを求めて、手探りに探すが、

「……んぅ？」

首を傾げた。
いくら手を伸ばし、動かそうと何の手応えもない。
いつもなら、手を伸ばせばすぐそこに、

「……いない」

呟き、起き上がりバッと布団を捲りベッドの中を露にしたが、そこには『いるはずのその女(ひと)』の寝ている姿形はない。
ベッドには朱里一人だけだった。

「姉さん？」

尋ねに答える声は当然のことながらない。
おかしい、と思い、昨夜の記憶を振り返る。
久々に夜中に目が覚めて、トイレ帰りに姉の部屋に行ったのだ。
以前は毎晩姉と寝ていた。しかし、姉がもう五年生なんだから一人で寝ろとうるさく言うので、夜中に目が覚めた時だけ途中から姉のベッドに潜り込んで寝るに押さえた。
そうして、ベッドに潜り込んでふくよかな胸に顔を寄せて二度寝した。
その時は姉は確かにこのベッドにいた。

「む、名残り惜しいけど……」

姉の残り香が僅かに残るベッドを降りて朱里は姉の部屋を出た。
大して長くない廊下を歩いて、遮りであるドアを開ける。
広いリビングに姉はいた。
ソファでこちらに頭を向けて寝ていているようだった。
何故、こんなところで寝ているのかはさて置いて、大事な人の姿を確認してようやくホッと一息するかと思ったが、

「……え？」

おかしなものが視界に入った気がして朱里は眼を擦った。
もう一度凝視。
更にゴシゴシ。
凝視。

何度同じ事を繰り返そう、見えるモノは変わらない。
一人しか寝ていないはずのソファから腕が一本はみ出して垂れ下がっている。
それも不自然な方向で。向きからして明らかに姉の腕ではない。

不審と嫌な予感を同時に感じた朱里はそろりそろりと姉を起こさないように歩み寄った。

「――――っ！！！」

眼にしたものの衝撃は予想を遥かに上回り、そしてデカかった。

すやすやと安穏とした様子で姉は眠っていた。

ただし男の姿でだが。

いや、姿に関して何かおかしな点はない。寧ろ、以前はこれが当たり前の姿だった。

問題は眠る姉の上に“乗っかっているモノ”だ。

「な……な〝……っっ」

思考は混乱混雑。声はろくに声にならず。

眼はただただ今目の前で続いている光景を直視するしかない。

最愛の姉の身体の上に男が覆いかぶさっている覚めない悪夢を。

「……――――――っんの」

慄いていた精神がついにぶち切れた。

タガが外れて飛び出したものは、

「朝から一体全体何なのよ、これぇぇぇぇぇぇぇぇぇ――――っっ！！！！」

とりあえず、惰眠を貪っていた大人（？）二人を眠りから引っ張り出し、外のベランダで屯（たむろ）っていた雀達を空へ散らせた。

◆　◆　◆

いきなり甲高いキンキンした絶叫に近い怒鳴り声で起こされたかと思ったら、何コレ今の状況。

そんな蒼助の気分は本日の外の晴天の青空と引き換え、どんより曇り空のような感じだった。

しかし、その隣には更に上回る気配が。

こちらは言い表すなら雷雨が適切か。

その最悪の天候を気配で表現するのは今朝、これ以上にない騒々しさをもって起こしてくれた少女。昨日、最悪の出会い方をした千夜の妹。

きりり、と眉を吊り上げて眉間に皺を寄せて、あからさまな『不機嫌』を装っている。

心なしか自分と少女の周囲だけ空気がピリピリ放電しているように感じれた。

絶対に気のせいではないだろうが。

「……」

「……」

辛い。

この異様に張り詰めた空間は非常に居辛い。

場を和ませてくれる唯一つ可能性を秘めた千夜は、現在キッチン

で朝食を作っている。
孤立無援。今の己の状況を言い表すにはこれ以上の言葉はない。

「……い」

ん？と小さな音が聞こえた右を振り向くとそこには少女がいた。
気のせいか、と思いもう一度捻ろうとした時、声は今度こそ確かに響いた。

「変態」

がん、とコンクリートの塊が脳天にぶち当たったような衝撃とショック。
がくりと倒れ込みそうなところをぐ、と堪えて蒼助は自分に言い聞かせた。
確かに、今朝のアレはそう貶されても無理はないだろう。
寝相のせいだかなんだか知らないが、例え意識のない状態でもあの体勢は上になった人間が悪いに決まっている。
一晩経っても完全には引かなかった熱のせいか、いつもなら自分に非があっても簡単にぶち切れる理性の糸はたるんでいた。
しかし、

「変態変態変態変態……――ホモ」

こんな状態でも許せない、譲れない一線だけは存在する。

「……ヲい、ガキ。てめぇ、人が下手に出てりゃ調子に乗りやがって」
「フン、何よ。男に覆いかぶさって寝てた変態を言い表すには他にないじゃないホモ」
「っ、二度も言いやがって……大体、俺は男には興味もなけりゃ勃ちもしねぇよ。お前こそ、その若さでそんな言葉自然と出てくるなんざ頭湧いてじゃねんじゃねーのか、ああ？」
「はっ、馬っ鹿じゃないの。小学生どころか幼稚園児だって無邪気に使ってるよ、それぐらい。てゆっか、近づかないでよ口臭い」
「お前こそ、その上越えるなよ。小便クセェ」

ここを境に、二人の中でエンジンにアクセルがかかった。

「大体、私と姉さんの愛の理想郷（ユートピア）に何で、アンタみたいな男が土足で踏み込んでいるわけっ!?　出てけ馬鹿ぁっ」
「この状態で出来るか、タコっ！　そもそも此処に来たのは俺の意志じゃねぇ！」
「うるさいうるさい！　姉さんにアーンしてもらうのは朱里だけの特権だったのにぃ！」
「見てたのかよ！　その歳で覗き趣味か、このませガキっ」
「ホモの強姦魔に言われたくないわよっっ」
「ホモじゃねェっつってんだろっ！　手ぇ出すなら女の時にするに決まってんだろ！」

一瞬の沈黙。
プルプルと朱里の身体が震えたかと思うと、

「いやぁぁぁー、両刀使い（バイ）ぃぃぃっ!!」
「待て待て待てつーかホモ要素からいい加減離れやがれってんだっっ」

どうにも止まらない口論を止める女神の声が間に入った。

「朝から盛り上がっているところ悪いが、朝飯できたぞ」

ぴたり。

「……一時休戦」

「腹が減ってはなんとかって言うしな」

食は偉大なり。

朝御飯を求めて隣のダイニングテーブルに移動する蒼助を千夜が引き止めた。

「そうだ、玖珂」

「ん？」

「お前、ホモって本当なのか？」

「……」

久々に心の底から泣きそうになった。

◆　◆　◆

テーブルに並べられた朝食を前に会話が始まった。

「まぁ、まずは改めて状況の説明と個人の紹介だな……って言ってる側から一斉に食べ出すなそこの大小二人」

ちゃきちゃきと空腹を満たすべく箸を動かしていた朱里と蒼助。

「いいじゃねぇか、食べながらでも」

「そうよ、姉さん。こんなのの説明なんて食べる片手間で十分だよ」

「んだと」

「何よ」

紹介するまでもなく既に一触即発の関係を作っている双方を溜息を付きつつ、千夜は口を開いた。

「まず玖珂。そっちの白いのは私の妹の朱里だ。ほら、挨拶しなさい朱里」

「……初めまして」

どこか釈然としない間が気になったが、何か文句を言うより先に蒼助の番が来た。

「次に朱里。こっちの目つきの悪いのは私の友人の玖珂蒼助だ」

「悪かったな、目付き悪くて。……まぁ、よろしくな雪ウサギ」

「なっ……誰が雪ウサギよっ」

「あー……なるほど。なかなか的を射てるな、それ」

「――――っ!?」

最愛の姉のまさかの裏切りに朱里はプルプルと小刻みに震えた。

見つめる目がウルウルと涙目になってきたところでハッとし、

「あ、いや……いいじゃないか、私は好きだぞー雪ウサギ可愛いし」

「……っっう〝ー」

何故か特に問題のなかったフォローはトドメになった。

オロオロと蛇口を捻った水道のように涙を駄々漏れさせる妹を必死で泣き止まそうとする千夜のその様は普段からは想像もつかないほど滑稽に蒼助の目に映った。
家族の前ではこんな表情もするのか、など。
意外と姉馬鹿なのか、など。いろいろ思わされる。
あれこれして何とか朱里を泣き止ませた千夜はふーと一息つき、

「話が逸れたが……朱里、このお兄さんは土日の間体調が整うまでうちに泊まることになった。仲良くしろよ」
「え」

明らかに不満そうな顔をする朱里のその反応は蒼助にとってはもはや予想の範疇だった。

「姉さん……正気？　本気で、それ言ってんの？」
「至って正常だよ。構わないだろう、犬猫と違って帰る家があるんだから長期間居座ったりしない」
「明らかに犬猫よりタチ悪いよっ！！」

バン、と叩いた両手が揺れた。

「今朝のこと考えれば絶対反対っ！　姉さん、起きた時自分の上に何が乗っかってたか忘れてない！？」
「乗っかってただけだろ。別に妙なすっきり感も下着も下ろされてなかったし。なぁ？」
「そこで何で確認するかのように俺に聞く。信用してねぇのか」
「してるとも。一応」

最後の一言だけがどうにも腑に落ちなかったが、ともわれ千夜は自分が無実と思っているだけ救いがあった。

「朱里、私がそんな奴と拘り合うと思うのか？　変態色魔絶滅希望者のこの私が」
「う……そりゃぁ、そうだけど……」
「コイツはそんな奴じゃないよ。それに玖珂は男じゃなくてふつーに女が好きなんだ……多分、きっと、恐らく」
「何で確率がどんどん低くなっていくんだ。つーか、余計だその部分」

というかホモじゃないから安心というのもおかしくないだろうか。
普通、健全な男だからこそ一応は女の身として警戒すべきなのが正しいのでは、と蒼助は口にはせず心で呟く。

「まぁ、女たらしだからこそ逆に安心なんだよ」
「……？」

言葉の意味をわかりかねているのか怪訝な表情で眉を顰める朱里。

「大きくなったら、朱里にもわかるよ」

なぁ、と何故かこちらに同意を求めてくる。
自分が出会って数分の見知らぬ女を躊躇もせず抱いても、友人には手を出さないことを知っていて言っているのか。
しかし、その予想は残念なことに外れている。
確かに自分は、玖珂蒼助は友人には手を出さない。
だが、千夜だけは別なのだと。
あらゆる枠を超えた、この唯一人は除くのだと。
今は理性で欲望を抑えていることを彼女は知らない。

「さて、話が長引いたな。朝飯が完全に冷めてしまう前に片付けよ

う」

◆　◆　◆

朝の十時という大分遅い朝食を終えた後、蒼助はベッドに戻された。
シーツはいつのまに取り換えられたのか、汗で湿っていたそれではなくさらさらと手触りのいい新しいものに換えられていた。
寝心地のいいその上に転がり蒼助はしばらくゴロゴロと暇を持て余していた。

「……暇だ」

一晩経っても完全に引かなかった熱はまだ胸焼けのような焦れったさを蒼助に与えながら残っている。
微熱程度だが、千夜は安静にしていろと言う。
なりゆきとはいえ面倒見てもらって身で嫌だとは言えないので大人しくしているが、こうしていても一向に眠気はやってこない。
こういう時に限って、人間というのはやたらと動き回りたくなる。

ジリジリと時計と天井を見つめて過ごしてようやく二時となったところで蒼助の限界が来た。

「……だーっ、くそ……退屈で死んじまいそうだ……」

そんなわけがないのだが、それぐらいこの無意味な時間はきつい。
何か退屈しのぎは出来ないだろうか、と怠惰の中で緩んだ思考を働かせる。

とりあえず、ここは千夜の部屋だった。
さすがは元は男の部屋。
普通の女がするようなゴテゴテした無駄なものが置かれも貼られてもいない必要以上のものがないシンプルなレイアウト。
アイドルのポスターが壁や天井に貼ってあってもヒいたが、これでは暇を紛らわすネタも見つけられない。

「せめて、ゴテゴテのクマのぬいぐるみでも隠してありゃからかうネタになりそうなんだが……」

と、呟きながら先ほどから気になる配置物をちらちら見る。
この部屋に唯一千夜の私物が仕舞われていると思われる机の引き出し。
さっきから蒼助の興味を惹いて仕方ないそれを前に、手が疼く。
人の部屋で勝手に私物を漁るなんてのは、恥じ入るべき行為だというのはわかっている。

「ま、下着漁るわけじゃないんだからな……ちょっと、見るぐらいなら」

良いワケないのだが、若い男の好奇心はここまで来たらそう簡単には収まりが付かない。
意気揚々とベッドから起き上がり、机の前に立つ。

「さーて、何が出るかなー……と」

カタン、と軽い手応えで引き出しは開いた。
中に入っていたのは、

「……アルバム、と……写真立て？」

その二つだけがしまわれていた。
奇妙だ。アルバムはともかく、写真立てというものは普通は立てかけておくものだろうに。
他にないのかと他の引き出しも開けてみるが、ノートや教材などしかなく、興味を惹くものはこの二つだけだった。

「本当に一切無駄なもんがねぇな……まぁ、収穫がないことはなかっただけマシか」

手始めにアルバムを拝見することにした。
パラリと表紙を開けてまず最初に現れたのは千夜一人の写真。
どこか照れくさそうな表情で映っている姿は学ラン。
角のある体型の印象からして中身が男であることは目に明らかだった。

「うちの学ランなわけねーか……つーことは、前の学校の制服か？」

即ち、このアルバムに映っているのは転校以前の頃のモノか。
大物を当てた。
嬉々として次のページを捲る。

今度は三人で映っていた。
真ん中に千夜がいえ、左右を挟むように男子生徒と女子生徒が立っていた。
絆創膏を頬に貼り付けた男は面白くなさそうにブスっとしており、可愛いの分野に入る女の方はほんのり頬を染めて千夜に寄添っていた。

「ふーん……前の学校のダチってところか……」

暫く、三人で映っている様子のモノが続いた後、二三ページ捲った先で雰囲気が“変わった”。

そこから先は少女と千夜の世界となった。
二人だけで写っている写真しかない。
それらの写真を見ているうちに、蒼助はある感情を抱いた。

罪悪感。

それはアルバムの中で孤立した彼らの聖域に土足で踏み込んでいることに対する後ろめたい気持ち。
何故なら、まるでこの二人は――。

「……――」

その中の一つの写真を見つけて、蒼助は息を呑んだ。
それもまた、二人きりの写真だった。
背景を見る限り、何処かの遊園地で撮られたものだと判断出来る。
格好といい色合いといい、写真の中でも一番新しいもののようだ。

二人は手を繋いでいた。
千夜の大きめの手は少女の手を包み込むように、
少女の小さな白い手は千夜の手に縋りつくように、

添えられているだけかのように緩く絡んだそれは決して切れない二人の絆を体現しているようだった。
何があろうと、互いはこの手を離さない。
そう見る者に訴えかけているかのように見えた。

たかが、写真は蒼助の心を酷く抉り、傷口から何かを溢れさせた。
嫉妬。
黒く灯ったそれは蒼助にその写真を千々（ちぢ）に破り捨ててしまえと促す。

「……っ」

不意に我に返り、写真を抜き取ろうと動いた右手を左手で押さえた。
何を馬鹿なことを、と一瞬でも邪な考えを働いた自分の思考に叱咤する。

こんな事実は想いに気づいた時から覚悟していたことだ。
今更、動揺してんじゃねぇ俺。

そう言い聞かせる中、思い浮かぶのは江ノ島の海岸での千夜の台詞だった。

――――昔、ここに来た時に私がある人に同じ質問して教えてもらったんだ。

自分と来る前にあの場所にこの女と行ったのか。
自分に教えたことを、この女が千夜に教えたのか。
自分よりも先に千夜の世界に足跡をつけたのはこの女なのか。

「……――玖珂」

不意を突くように部屋の外で千夜の声が割り込んだ。
蒼助は反射的にアルバムを飛び込ませ引き出しを閉めた。
そして、見事な手際でベッドの中に飛び込んだ。
返事はそれからだった。

「な、なんだー？」

返事の後、ドアが開いた。
顔を見せる千夜に隠し事の後ろめたさに心臓をバクつかせながら表面的には平常を装う。

「今から夕食の買い物に行くんだが……留守番を頼んでもいいか？」
「……あのクソガキ……じゃなくて妹も連れてくのか？」
「お前と一緒にしたらまた喧嘩するだろ。本人も一緒に行くって言ってるしな」
「そうか……じゃぁ、気をつけて――」

言いかけて、考えを切り替えた。

「いや、やっぱ俺も行く」
「え……でも、お前熱がまだ……」
「買い物の荷物持ちするぐらいの体力はあるって。家の中でじっとしてるのいい加減飽きてきたところだしな」
「病人はそれを耐え忍んで病気を治すんじゃないのか……」

考え込むように少し黙り、

「ま、元気そうだしな。お前が平気だと言うなら」
「よっし」
「ってその格好で行く気か」
「別におかしかないだろ。一応、外着だぜ？」
「いやそーゆー問題じゃ……まぁ、いいか。それしかないし」

こうして同行を許された。
先程の不快と後悔を忘れたい。
そんなチンケで身勝手な理由から出た行動だった。

［参拾四］　在りし日の面影（後書き）

人んちガサ入れしちゃいけません。
気になるあの人の在りし日あの日の宝箱を見つけてしまった蒼助でした。
作成した外伝（脳内保管中）の多い千夜ですが、この本編が始動する三ヶ月前から直前までのＢｅｆｏｒｅストーリーもあります。
この話がこの先長く続いてシリーズ化すれば、進行中にそれに大きく触れる機会もあります。
問題は、始動編たるこれが完結しないかぎり次に進行できないことだ。
……がんばろ。

［参拾伍］　縛鎖の想い（前書き）

死の名の鎖に戒められし、遠い日の中で笑む彼（か）の人への想い

［参拾伍］　縛鎖の想い

茜色に染まる街がある。
商店街と呼ばれるそこは主婦を筆頭とした買い物客である人間を呼び込む声や、カセットに録音された宣伝曲がＢＧＭとなって流れていた。
東京に常にありがちな人の混みあう騒々しさとは別の賑やかさがあった。
その中、やけに見目顔立ちのいい青年二人と白髪の少女が歩いている。
人ごみの中でも隠せない小さな特徴を連れ歩いていることも彼らを周囲から浮かせている要因の一つだが、若い青年二人が今晩の夕飯らしき収穫をスーパーのビニール袋で引っ下げているだけでも十分だった。

「……」
「何だ、さっきから大人しいと思っていたが……もうへばったのか」
「この格好見て尚それを言うか。お前、今俺が両手にいくつ持ってるか数えてみろ」
「喜べ、これからもう一つ増えるぞ」

ニヤリ、と笑う千夜を見た蒼助の脳裏に女王様というこれ以上にない抜擢な言葉は浮かび上がった。

「くそっ……なんつー人遣いの荒い奴だ……」
「買い物に男がついて来るってのはそーゆー覚悟が必要なんだ。今まで散々女と付き合って来たクセにそんなことも知らなかったのか」
「少なくとも何日分あるか知れねェ食材を持たされた覚えはねぇな

……」

息を荒くしながら反論する蒼助を見ないで千夜の隣を歩いていた朱里が一言。

「……根性ナシ」
「なんつった雪ウサギ」
「べーだ」

あっかんべーと思い切り舌を蒼助に向けて出し、千夜の腕に抱きついて歩く。

小憎たらしい朱里に神経を逆立てつつ、とりあえず両腕にかかった重量を支え、尚且つ先方へ続いて歩行することに努める。

「なぁ……これだけ買えば十分だろ。この上、わざわざ初台まで足伸ばして何買おうってんだ……」
「今晩の夕飯の材料」
「これはっ!?」
「週末の買出し。男手があるからいつもより多めだが」
「お前も男だろっ!!」
「今は八割ぐらい女だが。いいから黙って歩け、今晩は客用に我が家なりに豪勢にしてやろうって言うんだ」

豪勢、という言葉に蒼助は反抗の色を弱めた。

一人暮らしで、しかも仕送りナシで自分の身体で（ヤラシイ意味ではなく）稼いでいる金のみで日々を食い潰している身としてはロクなものを糧にしていない。

極貧とまでは行かないが、あまり贅沢が出来ない生活を送る者として、蒼助はこの手の誘惑に非常に弱い性質を持っていた。

「……で、何でココなんだ？」
「品が良くて安いからだ」
「……何故に」
「スーパーと違って、店主本人と顔を毎度合わせる。通いつめると馴染みとして扱ってもらえて安くしてもらえるからな」
「……」
「八百屋のおばちゃんは若い男に弱い。肉屋のおっさんは子連れに甘い。魚屋は……今日はダメだな、女の時に顔出してるから」
「……お前、真っ黒だなホント」

惚れた女にはいろいろ問題があると知っていたが。
やはり、自分は道を大きく踏み外しているんじゃないかと改めて蒼助は思い返した。

◆　◆　◆

身体がだるい。
それは決して体に残る熱のせいではなく。

「この、人一人が持つにはあまりにも過酷過ぎる大量の荷物のせいだ……っ」
「誰に説明しているんだ、玖珂」

そんなツッコミすら今はどうでもよく感じれた。
とにかく今は休憩したい。
体力回復の時間が欲しい。
心の底からの願いがそれだった。

「……買う物は買ったし、急いで帰る必要も特にないからな……少しここらで休んでいくか……って行動早いな」

発言の直後、既に通りかかった公園内の中にいて、ベンチでふーっと息を吐きながら座っている蒼助を見て千夜は言った。

「私達も一足遅れて休もうか、朱里」
「姉さん姉さん。朱里、鳩にエサあげたい」
「ああ、ほら買っておいで」

渡された小銭を手に握り締めて走っていく背姿を見送り、千夜は蒼助が座るベンチへ向かった。

「お疲れ」
「かー、よく言う……俺ぁ、一瞬自分が召使いになったかと錯覚したぜ」
「文句を言ううちは向いてないから安心しろ」

千夜は足元に寄って来た鳩を見た。

「ははっ……ここにエサはないぞ、向こうだ向こう」

言うが、千夜の言葉には興味を示さず。
ポッポッ、と鳴きながら他にも大量の鳩がてくてくと可愛らしい足取りで寄って来た。

「げっ……鳩も一羽二羽ならともかく、これだけ集まると怖ぇな」
「そーか？　可愛いじゃないか」

差し伸べた千夜の手に一匹の鳩が飛び乗った。

首を傾げる姿は確かに可愛いかもしれない、と蒼助は思い直す。
それも一羽だけならの話だが。

「しかし、手乗り鳩なんか出来るほど懐かれるなんて……既に洗脳済みか？」
「平和の象徴に洗脳とか言うなよ。もともと人懐っこい生き物だろ」
「だからってこの数は……」

しかも寄って来ている鳩は全て千夜に一点集中して集まっている。
ある一羽は肩に、ある一羽は膝に、と場所さえあれば鳩たちは千夜の身体に触れようとさえしている。

「っ、こら……あんまり人の身体で歩くな、くすぐったいだろ」

戯れるその様は本当に人間を相手にしているかのよう。
もはや、懐くというよりは慕っているという言い方の方が適切な当てはめだと感じれるほどに。

「お前、動物好きなんだな」
「ああそうだな……もっと広く言えば自然が、かな」
「自然が？」
「私は田舎育ちだからな。私が此処に来る前に住んでいた土地には、住民も怖がって踏み入れようとしない深い森があるんだ。そこには古くから住み着く精霊、住処を追いやられた動物が住む森なんだよ。よく寝静まった夜に無断で入ったなー。ああそうそう、とうの昔に絶滅したはずの日本オオカミまでいてな……と言っても、長く生きてとっくに神格入りした奴だが」

そうやって故郷の話をする千夜は子供のように幼く見え、楽しそうだった。

自分の事のように、森に住むモノたちのことを自慢して。
語るそれらが千夜の中の最上の思い出なのだと、蒼助は察した。

「夜中にそいつらのところへ行った日には遊び呆けて翌日は夕方まで起きなかったりして。それで夜中に森に入ったことがバレてよく怒られた」
「お前ね……それじゃ人間のダチなんかいなかっただろ？」

軽口のつもりで言った言葉が思わぬ結果を導き出した。
その言葉の後、千夜から表情が消える。
そして、さもどうでもよさげに形の良い唇から零れ落ちる。

「さぁ？　欲しいなんて思わなかったよ……」

今の今まで楽しげだったその表情は酷くつまらなそうなものになっていた。
ひやり、と冷たいものを蒼助は背中に感じた。
もしかすると自分は今とんでもない地雷を踏んだのでは、と。

「……相容れない。理解されない。そうだと解り切っている連中と無駄な接触をするより、ケモノや精霊と共にある方があの頃の私には気楽で、大事で、とても充実していると思えた。なぁ、玖珂……決して自分を受け入れないとわかっている人間と両手を広げて歓迎しているモノ……お前だったらどちらの手を取る？」

思わず蒼助はごくり、と息を呑んだ。
その問いの答えによっては、千夜の自分を見る眼がどう変わるのかと、自分の中で酷く脅えを感じた。
沈黙の蒼助の答えを待たずに千夜は再び口を開き、

「簡単な話さ。誰だって、自分に近しいと感じるものを選ぶ。そうするのが、自分にとって誰かと共有する中では最も充実な時間を得る方法だから。私も、そうだった。人と過ごす息苦しい時間よりも、人ではない者達と意思を通わす時間の方が、充実していた」

人から理解されない。

それは蒼助にも身に覚えのある思いだ。

一時期は、蒼助もそんな思いに焦燥し、めちゃくちゃやっていたことだってあった。

だが、それでも千夜ほどの非常識に走ったりはしなかった。

通常ならそれこそ相容れないはずの人外の手をとるなど。

「人は人外を恐れる。だが、私にはそれがちゃんちゃらおかしな話にしか思えない。人は笑って嘘をついて他人を欺いたり、平気でさっきまで親しくしていた者をどたんばで切り捨て裏切るという惨い行為をする。私は、そんなことを何てことなく繰り返して行うことが常識だと思っている人間の方が恐ろしい存在だと思うよ。特に、多様な表情で取り繕って本心を隠し続ける人間はな。私が知る限り、そんな人間にはロクな奴がいなかった。よりにもよって、そんな人間ばかりが私の周囲を固めていた」

なんてことだ、と蒼助は頭を抱えた。

久留美のバカが。これはもう男嫌いなんてレベルじゃねぇぞ。

これは、もう人間嫌いの領域だ。

しかも相当深くて重傷な。

同時に蒼助は気づいた。

千夜は仮面で人と接している。

それは心許していないという表れ。

彼女はまだ他人を拒絶し続けている。

ふと次に至った考えは、自分に対してのことだった。

こうしている間も千夜は仮面を被っているのではないだろうか。

拒絶されているのは自分の例外ではないのでは、と。

その時、猜疑心に捕らわれかけた蒼助の目を覚まさせる言葉が耳に響いた。

「……と、以上がかつての私は思っていたわけだ。考えてみればこんなのただの自分の殻に閉じ篭もった子供の言い訳だな」

「……は？」

「視界が狭かったんだな、あの頃は。偏狭の箱庭の中で何もかも理解した気になっていただけだったんだ。ここ、東京に来て、いろんな人間と出会って思い知ったよ」

「……」

「嫌な人間も少なくなかった……でも、こうして世界の見方を変えるキッカケとなった例外もいた。理解しようと努力してもいい、と思える人間がな」

ちらり、と横目で蒼助を見ながら千夜は笑った。

意味を解すると蒼助は嬉しいような照れくさいような痒い気分になり、下手な笑みを浮かべ返した。

「だからな、自分から近づいてみようと思った。決め付けるのは止めて、挑戦しようと思った。本当に相容れないのか、そうではないかもしれない、と試してみたくなったんだ。この“世界”で」

「なら、もう少しクラスの連中と溶け込めよ。何で、上っ面被って必要以上接しようとしねんだ」

「……え」

気づいていたのか、と言わんばかりに千夜の目が瞬く。
気づかずにいれようか。本性を知ってしまった者にははっきりとわかる仮面を被って他人の接する姿を見続けていながら。

「別に、その過激な性格を表に出しても誰も疎遠にしたりなんかしねぇぜ、あのクラスは。既に教師一同と他のクラスから疎遠されまくってる問題児の集まりだから、ちょっとやそっとのことじゃ怯みもしねェよ、寧ろ……」
「浸り過ぎないようにしているんだ」

蒼助の言葉を断つように放たれる言葉。

「最初は居心地が悪く感じたぬるま湯の中が浸り過ぎてちょうどよく感じるようにならないように。ふやけないように。じゃないと、いつか結果が出て、やはりダメだと冷たい水の中に戻った時その凍えるような寒さに耐えられなくなる。私は、用心深い人間だから……保険がないと不安でしょうがないんだよ。だから気をつけているんだ――――あの寒さを忘れないように」

一瞬距離が遠くなった気がした。
千夜と自分の間隔が。手を伸ばせば届く距離が、それが叶わなくなるほどの間が空いたように思えた。

「……おっと、何だか話が暗くなったな。悪いな……そうだ、何か聞きたいことがあるなら遠慮なく聞いてくれ。詫びだ、何でも答えてやるぞ」
「そうか、じゃぁ」
「ああ何だ」
「お前、童貞？」

「……今物凄いデジャブを感じたが前言撤回。ＴＰＯを踏まえた質問しか答えない」

これくらいの下ネタは今時昼間でも盛んに発されているが、と反論を抱きつつも、条件に応じ、形を変えて再び問う。

「お前さ……男の時に、彼女とかいた？」

◆　◆　◆

ぱちくり。

呆気にとられた表情で見てくる千夜のその反応に、蒼助はやばい直球過ぎたかと内心冷や汗だった。

「……野暮な奴だな。お前、人の恋愛経歴を酒の場の勢いでまんまと聞き出して、別の場所で酒の肴にするタイプだろ」

「何でそれを……じゃなくて、ふつー気になるだろ。お前みたいなそこらの女を敗北のどん底に突き落とすようなツラした野郎と並びたがる勇者がいたかぐらい誰だってよ」

「誉めてるのか小馬鹿にしているのかはっきりしろ」

面白くなさそうに一息。

渋々と口を開き、

「……いたよ、一人。それがどうかしたか」

やはりか、と蒼助は目を細めた。

あの写真に写っていた女が恐らくそれだろう。

「へぇ〜、そんなら詳しく聞かねぇとな。で、どーゆー系だよ。可愛い系？　美人系？」
「妙に楽しそうだな……そうだな……適切に言い表すならチワワかな」
「んだそりゃ、プルプル震えてるのか？」
「いや、癒されるとゆーか、和むとゆーか。まぁ、一家に一人は欲しい癒し生物」

一応恋人だった女のことを家電製品みたいな言い方するな、と思いつつ、

「で、何処まで行ってたのよ。イクトコまでイったのか？」
「肘で小突くな鬱陶しい。つーかお前言動が完全にセクハラ親父……」

悪態をつくと、気恥ずかしそうに、面倒くさそうに千夜は吐いた。

「キス。それしかしてない」
「キスぅ？　お前……普通、それを勢いにしてどーんと押し倒してだなぁ……」

と、言いつつも内心ホッとしている蒼助だった。
そうか、キスだけか。
全体的に身体は真っ白か。
って男の方は別にいいんじゃねぇ俺。

「行きずりの女とラブホ直行のお前と一緒にするな。こっちは友達上がりで付き合い出したんだ、順序ってものがある」
「順序ねぇ……って何でそのことを」

「久留美印の情報だ」

あの女……、と高笑いしている脳裏の久留美に怒りを燃やす。

「まぁ……付き合っていたと言っても僅か二ヶ月足らずだが」

「そりゃまた急な展開だな。何で……」

言葉を待たず、千夜は答えた。

「仕方ないさ――――死んでしまったんだから」

その瞬間、血の流れが凍りついたような気がした。

言葉だけがそうさせたのではない。

告げた千夜の表情が。

その一部の眼が。

まるで切れない鎖で繋がれた囚人のようだった。

それを見た途端、蒼助の中であの写真の女に対する感情に変化が起きた。

嫌いですむようなものではなく、一気に憎悪へと変わった。

千夜を死という形をもって永遠に自分のものにした“彼女”がどうしようもなく憎くなった。

「……ねーえーさーんっ！」

ベンチの二人から遠く離れた場所から朱里の声が届く。

「餌なくなっちゃったー！」

「あー、わかった。新しいの買ってやるからそこで待ってなさい」

立ち上がり、朱里の元へ小走りで駆けていく千夜を見送りつつも、蒼助はその場に留まったままだ。

鳩が飛び去っていく中、蒼助は何かに耐えるように歯をきつく噛み締める。

だんっ

後の背もたれに握り拳が叩きつけられ、板がミシリ、と悲鳴を上げた。

くそっ、とやりきれなさの篭もった声が噛み締めた歯の間から漏れた。

◆　◆　◆

その姿を近くの茂みから見つめるモノがいた。
枝の間に潜むのは滑らかな黒い毛並みの紫の瞳を持つ細身の猫だ。

シルバーの首輪には『B・S』と刻まれている。
この黒猫、B・C――ブラック・スノーは今週の日曜から今日にかけて『ある人物』を監視対象として見張っている。
事の始まりは任務開始の初日、六日前の日曜日のこと。
散歩から帰ってきた彼は突然この役目を己の主（マスター）から任された。
理由は説明されること無く、任務中に何度尋ねようと「確信はないからまだ話せない」の一点張りでしつこく聞くと物干し竿に干されるという始末。
そんな不条理な仕打ちを受けつつも、報酬の鯵――もとい主の為に下僕（サーヴァント）として忠実に命令をこなして六日目。明日でちょうど一週間になる。
しかし、監視対象の男には一向に変化や異変は見れない。

……そもそも何でこんな男を監視させているんだろうか、三途は。

そこが一番の疑問だった。
男の名は玖珂蒼助。
退魔師らしいが、感じる魔力はその役職に不釣合いなほどに微弱なもの。
監視しろというには、何らかの危険性があるのだろうがこの貧弱な霊力しかない男の何を主は警戒しているのだろうか。

……期限は当分って言われてもね。

こうも何もないのでは報告のしようもない。
その上、この仕事の終わりも来ない。褒美も手に入らない。

主も難儀な仕事を押し付けてくれたものだ。

……もう何でもいいから、なんか変化見せてくれないかなぁ……。

いい加減な考えを巡らせていた時だった。

ぼんやりと眠たげに目をとろんとさせていたブラック・スノーの意識が硬直した。

彼は何者にかに射竦められていた。

……誰、だっ。

ロクに身動きの取れない身体で、何とか目だけをぎょろりと動かす。

答えはその視線の先にあった。

圧倒的な威圧感でブラック・スノーの動きを制する者がいた。

……なんだ、とっ？

驚愕にブラック・スノーは強張る瞼を見開けない代わりに痙攣させた。

彼の今や自由を失った視界に映る存在は、先ほどまでただの人間だったはずの監視対象がこちらに鋭い視線を放っていた。

……玖珂、そう、すけ？

頭に浮かんだ言葉をすぐに否定した。

違う。

アレは人ではない。

自分と同じ、『人為らざる者』だ。

己を視線で刺し貫く青い双眸を、ブラック・スノーは見てそう判断した。

「ふっ……ご苦労なことだな、成り上がり。主の為に健気に今日も吾(おれ)を見張りに来ていたか」

口調も高圧的なものへ変貌している。

しかも男は自分が純粋なカミではないことも見抜いていた。

身体から放たれている波紋を描くオーラから只事ではない強大な霊力を感じる。

……桁が、違う。

カミとしての存在の霊位が、二桁も三桁も。

次元違いとはこのような者に使う言葉だ。

「……アンタみたいなカミにこんな人間の欲で穢れた街でご対面するとは……な」

声を絞り出す。

「何のつもりかは知らないけど……ここは止めておいた方がいい。力の強い奴ほど、闇に飲み込まれやすいか、ら」

次の瞬間、見えない力の衝突に身体を吹き飛ばされる。

短時間の飛躍の後、その小さな身体は地面に叩きつけられた。

「く…、…が…」

受身すら取れずまともに衝撃を受けた体から痛みの悲鳴が上がる。

……何だ、今のは……。

奴は動いていない。
一歩たりとも。
指先一つも。
しかし、自分は攻撃を受けた。

……まさか……不可視の攻撃が、出来るのか……。

指定した空間を霊力で歪める。
そんなことが可能なのか。
信じられない気持ちがブラック・スノーの中で膨らんでいたが、
それは急激に萎んだ。

……この男だから、こそか。

これが、生来のカミたる者なのか。
圧倒的な力の差に悔しげに眼を細めるブラック・スノーに青い眼の男は言う。

「小物が随分と偉そうな事をほざくのだな……貴様の主は、下僕に目上の者への口の聞き方というものをしっかり躾けなかったみたいだな」
「僕の目上は……一人だけだ」
「ふん、大した忠誠心だ」

男はベンチから立ち上がり、ゆっくりとした足並みで地面に伏せるブラック・スノーの足を踏みつけた。

「――っっ」
「悲鳴もあげないか。ただ、温室育ちで生きてきたわけではないようだな……」
ぐりぐりと地面に擦り付けられるように足の裏のとの間に挟まれた足がブラック・スノーに変わって悲鳴をあげていた。
……ぐぁ……こ、コイツ、カミのクセにドSかよ……。
なら絶対に悲鳴をあげちゃいけない。
自分の人間よりは長い人生経験の中で、本物のサディストは悲鳴を上げると更にテンションあげることは知っている。
口から飛び出そうな呻き声を噛み殺し、堪える。
「安心しろ、小物。この場では殺さん……貴様には貴様の主に伝えてもらわねばならないことがある」
と、言いつつも足は変わらず踏みつけたまま、
「吾はもうすぐこの身体を手に入れる。そして、あの女を手に入れる」
青の鋭い視線が背後の離れたところで少女と一緒になって鳩と戯れる男を射る。
「……あの女の前にその死に様を曝したくなければ、邪魔はするな、と」
威嚇か。

警告か。
それだけ言うと、玖珂蒼助の姿をしたカミは向こうの二人の元へ歩いていく。
男は振り返った二人に何事もなく接する。
その様は、ブラック・スノーが六日間監視する中で見続けた『玖珂蒼助の振る舞い』そのもの。

「……まずい、な……」

報告事項が出来てしまった。
今になって気づく。
主としては、無いままで終わって欲しかったのだろうと。
当分、と期限を曖昧にしたのは、心配ないと安心できたら切り上げるつもりだったから。

「っ……」

地に立てると、傷ついた足が軋む。
折る直前まで骨を痛ぶられたようだ。

「なん、のっ――――」

ぐ、と堪えて、ブラック・スノーは片方の後ろ足を引き摺り、歩き出す。
時間はかかろうと、主の元へ帰るべく。

不穏は人知れず影で、静かに、確かに動き出していた。

【参拾伍】　縛鎖の想い（後書き）

昔の恋人という王道な障害が立ち塞がる。
しかも故人。
どうする、蒼助。

の巻、みたいな回でした。
ただの友達ではないのはアタリだったみたいですね。
肉体関係はないと言っていますが、ただならぬ関係だったのは明白。
蒼助の恋は前途多難ですねぇ。
初恋は実らないといいますが……あ、実んなかったらこの話次に行けねぇじゃん（笑）

【参拾八】　魔女の決意（前書き）

もはや、止めることは出来ない

【参拾六】　魔女の決意

夜の都市の一角に明かり灯る店があった。
喫茶店『ＷＩＴＣＨ　ＧＡＲＤＥＮ』。扉のノブには「ＣＬＯＳＥ」と描かれたプレートが下げられており、店はとうに閉店していた。
点灯する店の中には一人と一匹のみがいた。
店主、下崎三途とその飼い猫のＢ．Ｓ（ブラックスノー）だ。
Ｂ．Ｓはあるテーブルの上に横倒れになり、四肢を伸ばした状態でいた。

「……あー……うー……」
「情けない声出さないの。カミ様でしょ、一応」
「カミでも痛いもんは痛いんだよ……あー、酷い目にあったホント」
「その台詞帰ってきてから十回目。もー、わかったから」
「他人事みたいに……事件は現場で起きてるんだ、会議室で起きてるんじゃない」
「ここ、喫茶店なんだけどねぇ」

よいしょ、と近くにあった椅子を引き寄せて三途はＢ．Ｓが乗せられたテーブルの前で座った。
「さて、それじゃぁ何かあったみたいだから報告聴こうか」
「ちょっと待って、この場合治療が優先じゃないの？　足、すっごい痛いんですけど」
「治してあげるから早く言って」

鬼畜だ鬼畜ばっかだどーして自分にはこんな人間としか巡り合わ

せが来ないなんだ、とB・Sは己の境遇を嘆き、心で涙した。

「……何で、君が彼を見張れって言ったのか……今日、やっと理解ったよ」

「と、言うと？」

その促しに、答える。

「あの男はクロだよ。君の危惧は的中だ」

「そう……やっぱり、彼は魔性に憑かれていたんだ」

「いや、違う」

違う？

三途は小さく驚き、

「違うって、一体何が」

「あれは魔性じゃなかった。彼の中にいたのは――――あれは、カミだよ」

「なに……？」

三途の耳に欠片も予想していなかった言葉が入った。

「それは……本当に？」

「ああ、本当さ。それも僕みたいな“ヒト”から成り上がった“雑種”じゃない。生来生粋の骨の髄までカミ様な奴だ」

「“純血”……まさか、そんな大物が何故この東京に」

純血。

それは生まれながらにしてカミとして生まれ、カミとして生き、カミとして終わっていく超越種。不老不死の分類たるカミの中のカ

ミ。

寿命と老化に縛られるヒトからカミとなった者である雑種も同種として一括りにされるが、その差は力の面でも認識の面でも大きく、埋められるものではない。

「僕としては、そんな青森とか出雲とかの辺境で、穢れの及ばない聖域作って籠っているような大神レベルのカミが人間の男を乗っ取ろうとしている魂胆の方が気になるけどね」

「そうだね」

魔性なら何らおかしくないことだが、そうでないとなっては状況も考え方も大きく変わってしまう。

カミが人間の身体を乗っ取る。“降りる”のとはまるでワケが違う。

ヒトの中でも人間は身体的に最も脆い。そんな壊れやすい容れ物の中に入れば、乗っ取ってもそれ以前の力は使えない、無理をすれば器は簡単に壊れてしまう。

B．Sの言うカミがすることにはデメリットや問題点ばかりでメリットが見えない。

「でもまぁ……一つだけ確かなことはあるよ、三途」

B．Sはその確信を口にした。

「奴は――千夜を狙っている。目的は……多分、“一ヶ月半くらい前のアレの時”と同じと考えてもいいんじゃないかな」

三途の表情が険しいものへと変わる。

やはりか。

警戒の裏にあった、己の危惧していたこと。

敵の正体が違っても、それだけは違わなかったようだ。

「……三途、どうする？」

Ｂ．Ｓの問いかけが三途に投げられた。
次の行動を促す問いではない。
その問いかけの真の意味は――

「……さん」

「そうだね。とりあえず、君の怪我を診ようかな」

と、不意を突くように立ち上がり、伸ばされた四本の足の――
後ろ足の左を持ち、握った。

「――――に〝っ」

「あー、これは酷くやられたねぇ……あと一息で折れちゃうよ、これ」

にぎにぎ、と揉むように幹部を触られ、Ｂ．Ｓは生き地獄に突き落とされた。
悶えるように苦痛に呻く黒猫を見ながら楽しそうに、

「とんだサディストだったみたいだね、そのカミ。輝くらいなら自然治癒にしても全然構わないんだけど、こうもギリギリのところまでやられてると骨が瀕死状態って感じになってて自力だろうが他力だろうが治癒かからないんだよね。しかも歩くと折れそうな骨が響くからすっごい痛いんだって」

「ああ、痛かったよ！　途中何度も泣いて挫けちゃおうかと思ったよ！　てゆーか、今アンタが追い討ちかけてるよ、ねぇっ！！　つーか今泣いてもイイッ？　泣いてもイイ？」

本当に涙が滲んできたところで三途は手を止めた。
そして、先程の問いに対する返答を並べた。

「……クロ、私の命はもう私のものじゃない。六年前のあの日からそうなって、二年前に千夜と“再会”してそれを思い出した。あの人と交わした約束を――あのコに誓った約束を」

視線をここではない何処かへ、今ではない何時(いつ)かへ向けて己に言って聞かせる三途にB・Sは溜息混じりでぼやく。

「その約束とやらを……千夜がどれだけ嫌がっていても？」
「それでも、だよクロ。誰にだって譲れないものって……あるでしょ？」
「勝手だって、迷惑がられるよ？」
「そうだね」
「いい加減にしろって怒鳴られるよ？」
「そうだね」
「泣かれるよ？」
「……それはちょっとキツイかな」

困ったような苦笑を浮べた後、眼に真摯な光を宿し、

「でも、それでも私は考えを変えはしないよ。恨まれても、責められても、拒絶されても、私はあのコを、千夜を守る。千夜の為に戦う。千夜の為に血を流す。千夜の為に山となる屍を積み上げる。あのコが、生きているから……私は救われている。過去の犯した罪に贖罪できる。私は、あのコの為に、あの人と交わした約束の為に――」

既に彼女の中で固められていたであろう決意をB．Cは、ただ聴く。

哀しくも、揺ぎ無いその言葉を付き従う者として受け入れるべく。

そして魔術師は――――

「――――彼を、玖珂蒼助を殺す」

その一つの決意をかみ締めるように、決断した。

【参拾六】　魔女の決意（後書き）

背景が黒なのは気分ッす。
魔女の蒼助抹殺計画始動です。
危うし主人公ってか。

【参拾七】　語る言葉（前書き）

水のように、溢れて。
溢れた分だけ、何かを知る。

【参拾七】　語る言葉

一室を充満する湯気。
煙のように上へ昇っていくわけでもなく、呼吸器官を侵すわけでもない。
ほんのり温かでさえあるそれが満ちる空間――――バスルームに蒼助はいた。
自宅のより遙かにサイズの大きい風呂の中で適度の温度の湯の中に浸っていた。
十分に足の伸ばせる広さの中で、蒼助はゆったりと寛いで――――

「もうちょっと、そっち行ってよ。陣取りすぎ」

……いなかった。

蒼助の安らぎ気分を見事ぶち壊してくれた朱里は“その隣”でムスッとした顔で居座っていた。
彼らは何故か、一緒に居た。
一緒の風呂に入って。

◆　◆　◆

時は僅か五分ほど前に遡る。
買い物からの帰宅後、千夜の最初の開口が全ての発端となった。

「玖珂、お前今すぐ風呂入って来い」

帰ってきていきなりの台詞に、は？と蒼助は眼を瞬いて千夜の顔を思わず見た。

突然何を言い出すのか。

「昨日風呂入っていない上に、汗かいてそのまんまなんだろ。いい加減ばっちいから洗って来い」

「何でまたいきなり……飯食ってからでもいいだろ別に」

「却下。汗臭さと不潔さで混沌の化身と化している奴に食わす飯は無い。つべこべ言わすにさっさと行け」

「なっ……」

有無も言わないという口調に反感を覚え、言い返そうとするが、

「玖珂」

突然、千夜の目が厳しい目付きになる。

ビシッと指を蒼助の鼻先に突き付け、

「郷に入ったら郷に従え、という言葉がある。うちに踏み込んだからには、うちにいる間はうちの決まりに従ってもらう――朱里、この汚物を風呂に叩き込んでやれ」

「はーい」

終いには手下（朱里）を使った実力行使でバスルームに連行された。

そして、どういうわけか、

「……何で、お前まで入ってんだよ」

「姉さんが直前でついでに一緒に入って来いって耳打ちしたのよ……私、ヤダって言ったのにぃ」

さめざめと涙を湯の中に垂れ流す朱里を傍目に蒼助も何が哀しくて小学生に風呂に付き合ってもらわななならんのか、と泣きそうだった。

そんな二人分の虚しさと切なさで風呂の中の空気が湿っぽくなった時、

「……洗うか」

ゆっくり足を伸ばせないのなら、と蒼助は湯の中から出た。
身体を洗うべく湯船の外へ移動。
その過程を観ていた朱里がゲッと顔を顰め、
「うぅわー……グっロテスクな色ー……どん引きなんだけど」
「……俺は小学生に自分のモノ見られて実直な感想言われてどん引きなんだがよ」
「ねー、それって元からそういう色なの？　使いこむとそういう風になるの？」
「後半の台詞が出るあたりでもう手遅れもかもしれないが、小学生はそういうこと知らなくて良いの」
一体千夜は妹にどんな教育しているんだろうか。
耳年増な小学生を傍らに、風呂場のイスに腰を下ろした蒼助は湯の詮を捻った。
流れ出た湯で濡らしたタオル片手に石鹸を擦り付けていると、
「……」
「なんだよ」
まだジッと見てくる朱里に蒼助は手を止めて、怪訝な表情でそちらに視線を向ける。
幸い視線は高さからして先程の対象とは別のモノを見ているのは確かだった。
食い入るように見ていた朱里がふと口を開けた。
「すっごい筋肉……漫画で見るみたいにボコボコしてないけど」
「あん？　あんなんボディービルダーくらいしか現実にはいねぇよ、一緒にすんな」
「何、ボディービルダーって」
ガクリ、と項垂れる。
「お前……歳不相応な余計な知識持ってるくせにそんなんも知らないのかよ」
「むぅ、知ってるならちゃっちゃと教えてよ」
知ってどうするのか、と疑問に思いつつもこの歳の子供は何でも

聞きたがる、そうして大人になっていくのだとどっかで聴いたような聴かなかったような事を思い出して自分を納得させ、
「モテねェ可哀相な男が筋肉鍛えて下克上したろうとか馬鹿な考え持った挙句の成れの果てだ」
「……成れの果て？」
「ようは筋肉バカだ。お前そーゆー男にだけは惚れるなよ、筋肉は鍛えられても頭の中は鍛えられてないからな」
「ふん、言われなくても。朱里は姉さんみたいな美形が好きだもん」
「あーそうですか」
アレと同じレベルの美形なんてそんじょそこらで転がってるもんじゃないだろうに。
これは結婚が遅くなるタイプだ、と傍らの少女の将来を柄にもなく心配してしまう。
ゴシゴシ、と泡立ったタオルで身体を擦っていると今度は何か発見したように、
「そういえばよく見ると、蒼助って割と美形なのね」
「はっ、今になって気づいたか」
「姉さんには劣るけど」
「オイオイ、そりゃお前……ありゃぁ別格だろ別格」
完璧すぎるといっても過言ではないあの美貌を前にしては、そこらの俳優も裸足で逃げるしかないだろう。
「……！　そういや、お前も……」
蒼助にも会話の中で朱里の顔を見ていた気づいたことがあった。
確かめるように顔を近づけ、
「よく見ると結構似てんのな」
「似てるって……誰に？」
「お前の姉ちゃんにだよ。最初はその真っ白な髪に気ぃ取られて気づかなかったけどよ……やっぱ、キョウダイって感じするよな」
目鼻立ちはやはり何処か千夜に似ていた。
良かったな顔は将来有望で、とわざと場所を特定して言ってやる。

挑発に乗って突っかかってくる反応を待っていたが、それは来なかった。

きょとん。

朱里は怒りはせず、固まっていた。

その表情は純粋な驚愕。

確かめるようにその小さな口は動き問いを形作る。

「……本当に？　朱里は、姉さんと似てるの？」

「あ、ああ……今気づいたけどよ」

それを聞くと朱里は、ほんのりと顔を赤らめ、感慨深げに呟いた。

「そっか……似てるんだ、ちゃんと……良かった」

その言葉から察するに、朱里自身も自分の容姿について悩んでいたことが伺えた。

やはり、自分の目から見ても己の容姿は姉である人物とは共通しているとは言い難いと思っていたらしい。

「……気にしてるのか？」

「……」

問いに対し目を伏せた。

肯定のようだ。

気にしない、という方が無理な注文であるとはわかっているが。

「皆、キョウダイって言うと変って言うの。似てないし、朱里はこんなだから……だから」

無神経な大人たちの陰口。

悪気のない子供の無垢な刃。

大勢の人間の悪意たるそれがこの小さな少女にどれだけ降り注ぎ、傷つけただろう。

「朱里は、朱里だけが悪く言われるなら別に平気……でも、関係ない姉さんまで悪く言われるのだけは、許せない」

傷ついているのは自身であるはずなのに、それでも尚気遣うのは最愛と慕う姉。

強がっているのはほんの一面で、本質はとても献身的なのだ、と蒼助は少女の芯を理解した。

「……別に、いいじゃねぇか。血は繋がってんだろ？」

「……わかんない」

「わかんないって……オイ、待てずっとアイツと一緒だったんだろ？」

「……一緒に暮らし始めたの、二年前から。物心ついた頃には、それまで一緒暮らしてたお母さんは私を孤児院に入れてそれっきりだし。その後も、ワケわかんない変な施設に入れられちゃったりしてワケのわからないことといろいろされたし……おかげでちっちゃい頃の記憶も今じゃ殆んど曖昧だし」

何だワケのわからないことって。

急激に話の雲行きが怪しくなってきた。それも同時に人には軽々しく言えない暗い過去まで明るみになった。

気のせいか、風呂場の空気が異様に湿っぽくなって来ている。

「でも」

どろどろとした空気の生産がそこで止まる。

「いろんな事の中で、自分の名前とかお母さんの顔すらわかんなくなってく中で、ずっと忘れてなかったことがたった一つだけあるの。お母さんがね、お別れ時に言ってた。“お母さんとはここでお別れだけど、何があってもこれだけは忘れちゃダメよ。いつか、必ず朱里を迎えに来てくれる人がいるということを。朱里の中の一握りの記憶とこれだけは、お母さんや自分が誰なのかを忘れても忘れちゃダメだからね”って」

手すりにかけていた手を外し、ちゃぷりと水音を響かせて肩まで浸かる。

「施設に入るまでの記憶はもう殆んどぼやけてちゃってるだけど……赤ちゃんの時の事はちょっとだけ覚えてるんだ、はっきりと」

普通それこそ覚えてねェだろ、と突っ込みたくなったが、さすがにシリアスな中にそんな横槍はまずいだろうかと思い直し、蒼助は

無言を維持する。
「揺りかごの中の朱里を誰かが覗き込むの。今の朱里よりもう少し小さい子供が。男の子だったか女の子だったかはそこまではわからなかったけど、朱里の事をこれが自分の妹かってもう一人いる誰かに聞くの。そうだよって、誰かが言って……その子供が誰かを向いている間に朱里は頬っぺたつんつんしてた指を握るの。その指がすっごく温かくて、安心して……そんな記憶だけは……ずっと、覚えてた」
うっとりとした表情で、その赤い目は何処か遠くを見つめて、
「名前も思い出せなくなって、お母さんの顔も忘れちゃった頃に……姉さんがね、私のところに現れたの。最初は、ちょっとびっくりしたけど……優しく姉さんは朱里に向かって笑って、手を差し伸べて……迎えに来たよって、待たせてゴメンって、これからはずっと一緒だよって……突然すぎて頭の中ごちゃごちゃでワケわかんなかったけど、その手は取らなきゃいけないって思って……そうして取った手がすっごく温かくて……その温かさが記憶の中のそれと同じで……この人がお母さんが言ってた人なんだって。お兄ちゃんか、お姉ちゃんなんだって……って、今はお姉ちゃんだけど」
付け足しの後、一息置かれる。
息を吸い、語り手たる少女は再び言葉を紡ぎ出した。
「周りが朱里の見かけとか姉さんとのことで何か言って、それで朱里が泣くと姉さんは言うの。“無駄に細かい馬鹿のいうコトなんか気にするな。朱里が私を兄だと思って、私が朱里を妹だと思う。その認識が成り立ては立派なキョウダイで家族だろ。世の中には血が繋がってたって認めないとか喚く例だっているんだ。そんな連中より私達の方がずっとキョウダイらしいじゃないか”って。だから、周りのいうコトはムカつくけど朱里は平気」
「……なら、いいじゃねぇか」
黙っていた蒼助の開口に朱里は水面に俯いていた顔を上げ、見る。

視線が捉えた自分と同じく裸体の男はシニカルに口端を上げて笑っていて、

「アイツは他人の無駄口いちいち気にするような軟(やわ)な神経してねぇってのは“妹”のお前ならよく理解ってるんだろ？　ったく、同感だぜ。てめぇの悪口にゃ野生動物みてぇの反応しやがるくせに、他人のことにゃ何も考えてやしねぇ……あーゆークソな連中はツラ見てると鼻へし折ってやるたくなるね」

うんざりげに話す蒼助を見ていて朱里はハッと我に返った。

自分は何をしていたのだろう。

こんな他人に自分の内情をペラペラ口を滑らせてしまうとは。

湧きあがる羞恥心が浸かる湯以上の効果を出し、顔の熱が一気に上昇する。

自身の不覚とそうなる筋に誘導した蒼助に対し、やや理不尽にも怒りを向けた。

「なにを、わかったような口聞かないでよっ。アンタみたいにチャラチャラした奴に、朱里みたいなのの気持ちなんてわかりっこないもんっ……」

「残念だな。生憎、わかるんだわ――――――俺もそうだったからな」

思いもよらない言葉が蒼助の口から出た。

その瞬間、理解を要した朱里の思考が僅かな時間停止した。

今、この男は何と言った。

この特に異質な点が見れない人物がかつては自分と同じ思いをした、と。

そう言ったように聴こえたのは気のせいか。

言葉を失う朱里に構わず、蒼助は特に感情の起伏なく語り始めた。

「俺は由緒正しい血統だがなんだかの退魔師の名家に生まれたんだが霊力が全然名前負けしててな。普通ならそーゆーデカイ家は親戚内で結婚するらしいが、ウチの親父は何処の馬の骨とも知れねぇ家の女と反対振り切って結婚しちまいやがってよ。そんで生まれたの

がこんなだから散々言われてな。中でも酷かったのが、俺が親父の子じゃなくてヨソの男の子なんじゃねぇかって奴だな」

朱里の表情が強張る。

「今思い出してもかなり手痛い言葉だったな、ありゃぁ。くだらねぇ、と一言で片付けばなんてことなかった。だが、そうは行かなかったんだな。そうならなかった原因は俺だ。俺は親父にちっとも似てねぇガキだった。しかも、親父の家の血筋は皆霊力に個人差はあれど恵まれてるのに対して俺は出来損ない。デマカセでしかないはずの一言も一応は筋が通っちまう」

「……おとう、さんは？」

それに対し何と言ったか、と問いたいのだと蒼助は意思を受け取る。

父親は朱里が心配しているような、蒼助とその母親を捨てるなんてことはしなかった。

それは有り得なかった。

何故なら彼（か）の男は母親に盲目なまでにベタ惚れ。若くして既婚者であった父・善之助は前妻と離婚してまで蒼助の母親と一緒になったくらいだ。

蒼助の母に出会って以来、善之助の世界は彼女を中心に廻っていたと言っても過言ではなかった。

「あー、親父なぁ……んーと」

少し迷った。

この先は小学生は立ち入り禁止のR指定仕様が若干含まれている。

言っても教育に悪影響はないだろうか。

躊躇の末、結局、

「キレた。溺愛してる女房とそのガキにケチつけられたんだ。ましてや、夜一生懸命作った女房との共同作品。それを他の男との、なんて言われちゃな……馬鹿なこと口走った奴は一応生きてるぜ。片腕だけどな」

ひっ、と血の気の引いた脅えの青に染まった顔で小さく悲鳴をあ

げた。
やはりグロ系は別か。失敗だ。
しかし、中間部分の言葉の表現は控えめにしようと試みたが、返って生々しくなった気がする。
やはり自分に国語的表現力はないのだろうか。
ダメと言ったら勉強全般に及ぶが。
「当主……ボスのお怒りを目の当たりにしたその他はそれで表面的には大人しくなった。ま、陰口は相変わらずだったが、マシな方だったかな」
「……蒼助は……辛く、なかったの？」
気持ちがわかるのか、しんみりした様子で朱里が尋ねる。
「昔はそれなりにな。今じゃ耳にタコだよ。元々、家を継ぐとかそういう面倒くさいのには興味なかったし、そんなに五月蝿く言うなら出てってやるよな感じで今は一人暮らししてんだ」
「……結構、苦労してんだ」
重さを感じさせないように気楽さを強調して蒼助は話したのだが、軽減にはならなかった。やはりちょっとやそっとではこの手の黒い話は軽くはならないようだ。
「ま、こうして自分の身の上話まで出して俺が言いたいのはだな。皆それなりに不幸なんだってことだ」
「……？」
「お前が一人が世界中全部の人間の不幸背負い込まされたわけじゃねぇんだ。現に俺のことだって今可哀相だとか思っただろ？　お前を可哀相だとか思ってる奴こそ自分がそれなりに可哀相なんだって気づかねぇ馬鹿なんだよ。そんな可哀相な連中が何言おうと気にすんな。ムカついたらぶん殴ってやれ。言いたいことも言えないで我慢して苦しい生き方するよか、その方が楽しいぜ」
そう言って笑い、降り注ぐシャワーを頭から被る。
朱里は暫し蒼助が見せた笑顔を脳裏に反映させ、見惚れた。
自分のように辛い境遇で生きても尚、それが欠片も見れない笑顔

を浮べられる蒼助が羨ましく思えた。
この男のように、楽しく生きて笑いたい。
と、思ったところで我に返った。
「え、偉そうな事言わないでよ馬鹿っ！　アンタなんかに言われなくたって、朱里のこと何もわかってないやつらなんかに負けないんだからっ……このお節介！」
「ったく、本当可愛くねェガキだな……他人が折角励ましてやったのに……」
「うるさい、うるさーいっ。そんな事して点数稼ぎしようってしても無駄なんだからね！」
バシャーッと勢いよく立ち上がり、朱里の人指し指が蒼助にビシっと突きつけられる。
「姉さんはもう恋人作らないって言ってたんだから！　男のアンタなんか尚の事望みゼロ！　わかったらせめて男らしく諦め――」
「そうだな」
それば同意の言葉だった。
ふえ？と朱里が目を見張れば、先程まで自分をからかっていた男の表情は一瞬目を疑うほど無表情。
蒼助はシャワーを止めると立ち上がり頭をガシガシ掻いて水を飛ばすと、
「お前の姉ちゃんは……俺にゃちょっとハードル高かったみたいだわ」
「え……ちょ、」
突然何を突飛なのことを言い出すのか、戸惑う朱里の頭に手を置き、
「お前、髪の事何か言われても気にすんなよ。この真っ白い髪、似合ってるぜ」
濡れた大きな手が脳天の髪を濡らして、離れる。
呆然と蒼助が風呂場から出て行くのを見届け、ドアが閉まった後、座り込むように湯の中に沈みこむ。

「何なのよ……一体」
あれだけ姉に気があると素振り丸出しだった男が突然、諦めるなどと言い出す理由がわからない。
わからない、と思った直後、理由が脳裏をリフレイン。
「その気がないからって……たったそれだけ、諦める普通っ？」
なんだかそれはそれでムカつく。
成り行きとはいえ、自分と姉の世界に入り込んでさえみせたくせに、こんな簡単に諦めるなんて。
ムカムカッと怒りが膨れ上がる中で、ふと熱が冷めるように思い直す。
「別に……いいじゃない」
これが自分が望んだはずの結果だ。
悪い虫な邪魔者はいなくなって、また姉と自分の生活が戻ってくる。
これでいいはずなのに。
何だ、この胸の奥でもやもやと漂う感じの悪い気分は。
あの男は嫌いだ。
男を重視した、他人を近づけない気質のあの姉が驚いたことに気を許している。
今日の買い物の最中、楽しげに会話している様子に危機感を覚えた。
このまま姉を取られてしまうのではないか、と。
そんなの許せない。
やっと手に入れた幸せをたった一人の人間に横から取られてしまうなんて、我慢ならない。
けれど。
「……髪、似合ってるのかな」
湯に浸かって、濡れ細った白の長い髪を一房摘む。
初めてだった。
姉以外に、この髪を誉められたのは。

子供には白髪とからかわれ、大人には薄気味悪いものを見るような目で常に見られてきたロクなことを招かなかった大嫌いな髪。
水面に映った自分の顔を見る。
大好きな姉に似てると、先ほど言われた己の顔を。
「似てる、かな」
それも初めてだった。
キョウダイであることを疑われるばかりだった、この顔を似てると言われたのも。
耳に残る言葉に口が緩む。
嬉しい。
よく考えてみれば、姉があれだけ親しく接する人間が悪い人間なわけがない。
自分とて、“ある意味”姉以上に他人の善し悪しを識別に長けている。
それで、あの男は、
「……悪い奴じゃ、ない」
自分を雪ウサギなどと呼んでからかうが。
子供相手にムキになって向かってくる大人気なさだが。
悪い奴ではないが善人とも言い切れない。
「……でも」
言いかけて、ぼんやりとしていた頭をぶんぶんと振って、もやのように思考にかかる霧を払う。
まだ、足りないと湯の中に頭ごとすっぽり潜る。
認めたくない。
心の何処かで、あの男を好きになりかけている自分を。
認めたくない。
姉に関心をなくしたあの男に会えなくなるのが寂しいなどと思う自分を。
「――――ぷはぁっ！」
ザバァッと大量の水分を纏って湯から這い出る。

そのまま湯船から出て、容器から出したシャンプーを手に乗せ、頭でガシガシと泡立てる。

もやもやしたものをこそぎ落としたい一心で朱里は痛いのを我慢して指先十本を駆使して掻き回す。

「～～～～っ！」

シャンプーが目に入り、悶絶。

声無き悲鳴がバスルームに響いた。

［参拾七］　語る言葉（後書き）

風呂です。
シャワーシーンです。
野郎のですが。どーでもいいですね。

ちょっぴり語られた疑惑のキョウダイの過去とその経緯。このコもロクな目に遭ってなかったようです。
つーかこの物語の主要キャラはみんな個人差はあれど痛い過去を持った傷持ち。
今現在、登場している中で順位つけたらダントツは千夜。次いで三途と氷室。ちなみにこれは幸せにしてやりたい奴らランキングでも同位である。
蒼助？ああ……あれは私の幸せにしてやりたいという気持ちを形にするために働く、なら一位。馬車馬の如く扱き使われる、ね（笑）

とりあえず、今年中の更新はこれが多分、最後。
もう一つくらいイけるかもしれませんが、世の中そんなに甘くないです（渇いた笑い
明日、山形の実家に帰省するのでＭｙパソとは暫しのお別れ。
一応向こうにいる間は筆記で書くつもりはありますが、暇があるかないか次第。
それじゃぁ、皆さん良い御年を。

【参拾八】　散りゆく想い（前書き）

深い諦めと一緒なら
希望を抱いてもいいだろう？

【参拾八】　散りゆく想い

豪勢にする、と予告をもらっていたその日の夕食は鍋だった。
しかもキムチ鍋。
何故にこの季節に。暖かな春の季節に何故鍋なのか。

一瞬、遠回しな嫌がらせかと思ったが、千夜の家では気が向けば年中鍋をやるとのこと。
太陽の陽射しギンギンの夏でもやると聞いた時は正直それはどうかと思ったが、北海道の人間が真冬に暖房のかかった部屋でアイス食う感覚と同じで冷房かけた部屋で熱い鍋を食べるらしい。正直、意味がわからなかったが。
キムチ鍋にしたは、病み上がりの蒼助に精をつけようと思ったのだと千夜は言った。
ぐつぐつと煮えたぎる鍋の熱気と強烈な匂いに食欲が一歩引いたが、隣の朱里が平気な顔して食べている様に妙な対抗心が芽生え、意地でも食ってやると思いいざ口にしてみると結構いけるものだった。
暑い時には熱いもののを食べる、と言うが、ただの馬鹿のやせ我慢だと思っていた。それも多少覆った。
具も何でもアリな種類豊富、味付けも辛さを基調に濃厚さが目立ったが万人向けの美味さですいすい食べれた。
一通り具を食い尽くした後のうどんで夕食は締めくくりとなった。
久々に腹を膨らます目的の夕食ではなく、味わう夕食をしたことで気持ちは存分に満ち足りていた。

――――――そして、その食後。

「ほい、これが最後の食器」
「ん。そこに置いてくれ」
流しに置かれた食器を洗う片手間の千夜の返事を聞き、要求どおりにする。
これで蒼助の役目は終わった。
しかし、蒼助はその後もその場に留まり、
「……何だ？」
「いや別に」
「向こう行けよ」
「……ちょっと、失礼」
ぺたり、と千夜の頬に蒼助の筋張った手の指先が触れる。
そのままついっと自分の方に動かした。同時に千夜が首だけこちらを振り向く形になる。
何だ、と言わんばかりに目を丸くしている千夜に構わず、そのまま指先を輪郭をなぞるように滑らす。半月を描くが如く１８０度で止まるそこか９０度戻り、喉に降りる。
喉仏をその存在を確かめるように摩る。
ん、とくすぐったそうに喉を鳴らす反応で、離れた。
「はい、ごくろーさん」
「……何だ、一体」
「気にすんな気にすんな。もういいぞ」
釈然としなさ顔に出しつつも千夜の顔は元の向きになる。
そうなったところを、
「うわっ」
後ろから抱きついた。腕は胸に当てて、顔を首筋に埋（うず）めた。
探るように服の上から胸を揉むように撫でる。
……カタい。
滑り落ちるように位置を下げて、腰。腰囲を測るように腕の下か

ら触る。
崩れやたるみのない腰つき。しかし、細いというわけではなくしなやかに筋肉もついている。
顔の輪郭。胸板。腰つき。何もかも“男”のものだ。
目の前のいる彼女は、今は男。
……やっぱ男なんだなぁ……匂いはこんななのに。
男の汗臭さや体臭とは無縁の柔らかい香りを首筋あたりにかかる髪から嗅ぎ取る。
摺り寄せた鼻にさらりとした髪の繊細な感触が触れる。
まずいイイ加減歯止めかけんと理性がふっ飛びそうだ、とギリギリのところで離れる。
離れると千夜が全身をこちらに向けてぐるりと反転させて、怪訝な表情で、
「さっきからなんだ、人の身体にベタベタ張り付いて。会社に一人はいそうな全体的にねちっこい上司のセクハラみたいに……」
「そこまで言うか……まぁ、スキンシップを兼ねた確認を」
「ホモ度チェック？」
「誰のだ、違うッつってんだろ。……お前のオトコ度チェック？」
「はぁ」
わけのわからんという表情。
言ってもわかるまい、と蒼助はそれ以上は触れないことにした。
「ま、そんな顔でもやっぱ……オトコってことだな」
「何を当たり前な……」
「小さい頃から男になりたくて拾った本に宿っていた悪魔に男にしてほしいと願いごとして元・男と思い込まされた女かなんじゃと希望を持ってみたが……無駄か」
「本当に無駄だな。ちょっと危ない人の思考だぞ、それは……大丈夫か？」

気遣うように手を伸ばしてくる。
蒼助はぼんやりと千夜を見た。
１８０越えの自分より少し低いが、男の平均以上はある背丈。
細身ではあるが、立派な男の身体。
額に押し付けられたしなやかな五指を生やした手も――――
男。
そして、身体だけではなく心も。
「熱は……もう無いな。おかしいな」
「だから熱に浮かされて走った行動じゃねぇっての。体力も取り戻したし、明日にでも家に帰れるぜ」
「そうか……そうか、それはよかった」
「お前にゃ二日間いろいろ世話になったな……アイツに言っといてくれや、お前と愛しの姉ちゃんとの生活に割り込む居候とも今日限りだとよ」
「ああ……」
そう受け答える千夜の表情が若干曇る。
「……千夜？」
「……っあ、いや……その、ちょっと淋しいな……あんまり賑やかなのは好きじゃなかったんだが……お前が入り込んだこの時間は……結構楽しかったから」
照れくさそうに笑うその様に“決意”が少しグラついた。
「っは、何言ってんだよ……夜中に徘徊し出してコップを一個ダメにしたような奴がいちゃ疲れるだろ」
「それもそうだな」
「そこは即答！？」
額に張り付く、先ほどまで水に触れてひんやりと冷たい手に名残惜しくも別れを告げる。
離れて一歩引く。
「俺、今日はこっちのソファ使わせてもらうわ」
「え、別にまだ……」

「いつまでもお前の寝床奪っとくわけにも行かねぇだろ。気にスンナ、俺はガキの頃はほとんど山の中でいつ夜襲かけられるかわからない中で熟睡したことがある」
「その状況で寝なければなくなる経緯についてはまたの機会に遠慮しておくが……まぁ、お前がそう言うなら」
「おう、後で毛布一枚くれりゃいいからよ」
背を向ける寸前、蒼助は笑顔で言った。
“全て”に踏ん切りをつけるが如く。
「そんじゃ、一足先におやすみ」
短い距離を歩き、蒼助はソファに寝転んだ。
身体は夕方の作業の後の後遺となる疲れも大して残っていなかった。
病み上がりの身体はすっかり全快していた。
それは幾つかの終わりを示していた。
……本当に終わりなんだな。
この新鮮で、居心地の良かった生活も。
千夜と過ごす時間も。
千夜に対する想いも。
初恋は実らないとかなんとか誰かが言っていたがまさにその通りだ。
実際、自分はよくやったと思う。
相手が男嫌いだったり、元・男だったり、性別変換体質だったりする女。
その時点で挫けなかったのが正直不思議なくらいだ。
理由を考えれば、簡単だった。
自分は外見や性別を差し引いて、『終夜千夜そのもの』に惹かれ、

恋をしたのだ。
大事なのは顔ではなく中身だ、などとほざく連中を嗤っていた自分がそうなるとは思いもしなかったが。
身体も欲しくないわけがなかった。だが、もっと欲しいのはその心だった。
らしくもなくこの恋に対し、蒼助は酷く初心に接していた。
酷く臆病に、触れればあっさり壊れてしまいそうなまでに繊細に作られた硝子細工を扱うように。
それほどまでに、愛おしいと感じていた。
だが、それも終わりだ。
千夜の心は既に他人のものとなっていた。
それも“死”という最悪の鎖で縛られていた。
ダメだ、と蒼助の中で絶望を釘で打ちつけたのは夕刻の買い物帰りの会話だった。
死んでしまった、とあの写真の女のことを口にした千夜の目は遠くを見つめていた。
よく知る誰かのそれと酷似していた。
己の母親という最愛の女を失ったあの父親が時折見せる眼差しと同じ、死者に想いを馳せている様。
死とは、最高に卑怯な思いの残し方であり、害悪なまでの束縛。
他者が断ち切る術はないに等しい。
縛られる本人が自ら断つ以外に決して切れない強固で頑丈な鎖。
その証拠に周りにどれだけ上等な女が集い言い寄ろうと、少しも心を揺り動かさない。
縛られることを幸せと言わんばかりに。
そんな前例をよく知っている蒼助は千夜もそうだと考えた。
自分の負けは確定だと。
潮時だ。
今、千夜が男でよかった。
女でいられたらとても諦め切れそうにはなかったから。

千夜達が寝付いた頃を見計らってこのマンションを出て行こう。
家に帰って寝て、起きたらこの恋慕を忘れて元の自分に戻る。
何が何でもこの気持ちは忘れるのだ。
一晩に何人抱いてでも、この恋情を忘れ想いは友愛に変換。
そして千夜と接する。
想いが良からぬ方向に走ったらまた女を抱く。
すぐにとは行かないだろうが、繰り返しているうちにいつかは千夜をただの友人としか思えなくなるはずだ。
そして、このあまりにも苦味の強すぎる経験の中の僅かな甘さを胸に、いつかきっとちゃんとした女と今度こそ何の異常もない形で恋を成就出来るはずだ。

……グッバイ、俺の初恋。なかなか悪くなかったぜ。

「期間一ヶ月足らず……か。……短け」
「ん？　今何か言ったか？」
「言ってねぇよ」
蒼助は目を閉じ、短い眠りに落ちた。
その短い眠りの終わりは、僅か五時間足らずで迎える。

◆　◆　◆

蒼助は目を覚ましていた。
それは全身に灯った熱が意識に苦痛を与えたからだった。
熱い、と感じると同時に例えようのない痛み。
頭からつま先まで。
不覚の事態に思い浮かぶのは疑問ではなく、答えだった。
「――――――――っっっあ、あ〝」
仰向けに寝た状態で仰け反り、胸を掻き毟る。
最大のにして最苦の熱と痛みがそこにあったからだ。

もがき苦しむでのた打ち回った挙句、身体は反転した勢いでソファから落ち、絨毯とキス。　鼻を打ったが全身を満遍なく痛めつけるモノに比べれば、そんなもの痛みのうちに入らなかった。

亀のように四つん這いになった姿勢で熱が籠った灼熱の吐息を吐き出す。

「あ、あ〝、あ、あ〝あ〝あ〝っ」

灼熱の熱さに苛まれるこの苦痛に覚えがあった。

それは侵食の感覚。

「くそっ……ま、たかよ、ぐっ」

今にも全身が燃え上がりそうな熱さに、何故また、などという疑問は一瞬にして溶解して形を失くした。

熱は精神まで焼き尽くさんばかりに勢いづき、収まらない。

喉の奥が信じられないくらい渇いていた。

呼吸すらままならないまでに、カラカラに。

「はぁ……はぁ……は、ぁ……っ」

立つ、など到底できず。

両手両膝をついたまま、蒼助は這うに近い動きである場所へ移動した。

苦心の果てに往きついた場所は――――浴室。

身体に触れた床の水が一気に水温を上げ、蒸発していく。

まずい、と思い、苦痛と熱さの鬩ぎ合いの中最後の力を振り絞り、シャワーの詮を全開まで捻った。

留めなく溢れ出し、降り注ぐ冷水を浴びながら蒼助の身体はそこで力尽きた。

水で濡れた床の上にうつ伏せに倒れこんだ身体から立ち昇る白い湯気。四十度を遙かに上回った体温を宿した蒼助の身体の熱に冷水すら蒸発せざるえないのだ。

「……くそ、やっべ……脳ミソ溶けそ……」

正直な話、脳味噌どころか身体まで溶けたアイスのようにドロドロに溶解してしまいそうな気さえする。

“最初の時”よりも酷い。
これではまるであの苦痛がほんの前触れでしかなかったように思える。
それから考えると、今のこの痛みは“あの男”がメインディッシュを食べる勢いで本格的に侵蝕を始めたということになる。
「こ、れが……てめぇの本気とでも、……っ言いたいのかよ」
強烈だ。
何処までも容赦なく、獰猛。
それを不意打ちでやられたらこちらに為す術はない。
あとは、ただ食われるのみ。
それが残された道。
「っざけんな、こんなんで……俺の人生終わっちまうのかよ……取られちまうのかよ、こんな簡単に……」

……ふざけるな。

ふざけるな。
ふざけるな。

冗談じゃない。
初恋は破れたとはいえ、まだ千夜と並ぶことを諦めたわけではない。
恋人がダメなら相棒でもいい。親友でもいい。
どんな形になろうと彼女と生きると決めた。
どんな形で居ようとも、最高の人生となるであろうその道を選んだばかりなのだ。
それをこんな、ワケのわからない奴に、中途半端なタイミングで

邪魔されてたまるか。

「っそー……簡単に上手くいくと、思うなっ……よ……みっともなくても、絶対に……足掻いてやるか、ら……な」

そこまでが最後の言葉となった。

動かなくなった蒼助の身体から発生する白い蒸気が浴室一杯に溜まり、やがて蒼助自身の身体すら埋め尽くしていった。

シャワーから流れ出る水音とそれが床を打つ音だけが、深夜の時間に響いた。

［参拾八］　散りゆく想い（後書き）

まず、一声。
あけましておめでとうございます。

帰ってきました、我が家に。
久しぶりのパソの手応えに不覚にも感動してしまいました（アホだやっぱいいな、キーボードを打つ感覚は。
速くて、楽です。
手書きは指と手首に負担がかかって書いていると疲労が早いのですよ。
おまけに山形は寒いので、指が震えます。シャレになりませんよ。

さて。いろいろ雑談を語りましたところで、本編にうつりましょうか。
ここらはもう中間地点です。
そろそろ起承転結の“点”に来ています。
ホント、いつ終わるかと途方にくれそうでしたが、目標としては四月までになんとか第一弾は書き上げてしまいたいですね。これは今年の目標の一つ。
今年もよろしくお願いしますねー。

【参拾九】　不明の理由（前書き）

見えない理由
それでも、やらなければならないと心は動く

【参拾九】　不明の理由

部屋の外から聞こえた物音が千夜の目覚めの促しとなった。
物音の正体は水だと覚醒しきらない意識が解明した。徐々に眠っていた部分が醒めていく中、浴室のシャワーのものと細かい判断も可能となった。
想定外の起床を強要した事象。ベッドの中で重たい瞼をこじ開けた千夜は怪訝に思いつつ上半身を起こした。
風呂の戸締りは出る時にしっかりチェックしたはずだった。
こんなに時間に浴室から物音がするのは誰かが使っているから、と答えは決まっている。
そしてその誰かもほぼ確定していた。

……玖珂か。

また夜中に起きたのだろう。
何故こんな時間に、という疑問もあったが、人によっては夜中にシャワーを浴びる習慣だってあるのだからなんらおかしいことではない。
何も気に留める必要のないことだ、と自身の関心に区切りをつけ、再び眠りに落ちようと枕に頭部を委ねた。
「……」
シャワーの水音が耳についた。
それは眠りに落ちようとする千夜の意識をあと一歩のところで、引き止める。
そう、あと一歩を踏み出せない。
「……っ、ああもう」
痒い感覚での僅かな思考の後、とった選択肢は“観念”だった。
気になって寝れない。

恨めしげに薄く開いた不可視の扉の向こうを睨み、千夜はベッドから降りた。
扉を開くが、廊下は一切の明かりはついていなかった。
無論、浴室も。
しかし、確かにシャワーの音がする。
「……？　……っ！」
一歩踏み出した先で、足に衝撃となんとも耐え難い痛みが走る。
「つぅ～……まさかドアに小指ぶつけるとは……やっぱり力落ちてるな……」
長く響く痛みを堪えつつ、壁に手を這わせて歩いた。
暗闇の中を進み浴室に近づいた途端、辺りの空気の温度が急激に上がった。
湿度を多く含んだ温かさだ。
この感覚は、
「まさか……ドア、開いてるのか？」
急いで壁のスイッチを押して電気をつけた。
カチリ、という機械的な音と共に視界が浴室が明るくなる。
目にした光景は千夜の目を驚愕で見開かせた。
「な、何だ？」
浴室の中を白い蒸気が中を覆い隠し、溢れかえらんばかりにもんもんとしていた。
「……玖珂、いるのか？」
呼び声に対し、返事はない。
踏み入れた足先に伝わったのは、
「っ、冷たい？」
こんなにも湯気が満ちている空間で、足元の水は冷たかった。
不自然すぎる。
そう思いながら、蒸気を掻き分けた先で答えは置かれていた。
「――っ玖珂！？」
シャワーから流れ出る湯を浴びながら床に衣服を着たままうつ伏

せに倒れる蒼助がそこにいた。
反射的に身体はすぐさまその元へ駆け寄った。
その際に浴びた湯は、
「な、これ冷水じゃないかっ……こんなものどうして」
すぐさま水の勢いを止めて、動かない蒼助の容態を確かめるべく首筋に手を触れる。
しかし、
「――――あつっ！」
短い悲鳴をあげて、触れた手を引っ込めた。
その手を思わず見つめ、そして蒼助と交差に見た。
触れた途端、肌を通して神経に伝わったのは沸騰したてのやかんに触れた時のような強烈な熱さだった。
しばらく考え込むように蒼助を凝視して、まさか、と思い風呂の蓋を開けて転がっていた手桶で中の生ぬるくなった湯を掬い蒼助の上にかけてみた。
「っ！？」
浴びせた湯はあっという間に蒸気となって白く立ち昇った。
まさかの予感は当たった。
この周囲の大量の蒸気は蒼助が浴びた冷水をその高温の体温をもって蒸発させ、気化させて出来たものだ。
「ったく、夜中に何ワケのわからないことになっているんだお前……」
昼間は大荷物を持って歩けるくらい元気だったというのに。
まさか、気取られないように不調を隠していたのか。だが、そうだとして反動がこれでは割に合わない。
「って……考えている場合じゃないな」
目の前の身体を食い入るように見つめる。
高熱に侵される状態を放っておいていいわけがない。この燃え上がらん限りの熱を放つ身体が本当に人体発火を起こしてしまうかもしれない。

今のこの場ですべき対処は、このめちゃくちゃな熱をどうにかして下げることだ。
千夜は再び詮を捻り、シャワーから冷水を出した。
蒼助の身体の向けて降り注ぐ大量の冷え冷えとした水は触れるが、すぐに蒸発してしまう。
あっけなく蒸気と化していく結果に、千夜はそれでも冷静に思案した。
……手っ取り早く済ませる方法は駄目か。
他に方々があるとしたら、じっくり、と熱を奪っていくしかない。
何がある、と可能性を形にする術を思考で練る。
……何か、ないのかっ？
冷静。
考えれば考えるほどその言葉が状態に不釣合いになっていく。
時間がない。
一体いつからこの状態でいたのか。
気づかないで朝を迎えていたらどうなっていただろう。
考えただけで寒気がした。
「くそっ！」
焦りが思考の機動力を妨害する。
どんな状態、状況下に陥っても焦りは禁物と普段言い聞かせている言葉がこれほどまでに無意味にはなるとは思いもしなかった。
「……っ」
千夜は垂れ流しだったシャワーを自分の頭に浴びせた。一瞬、感覚を狂わせる冷たさが痺れるように脳天から伝わる。
「……はぁ……」
服に染みていく水の冷たさで思考の落ち着きを取り戻そうと測っ

たのだ。
それは同時に、千夜にある記憶を引き出させた。
――――ねぇ、姉さん。
それはいつかの他愛ない記憶。
――――雪山とかで遭難した時、どうやれば温かくなれるか知ってる？
――――なんだ、突然……必要以上に動かないとかか？
――――ブッブーっ。正解はお互い裸になってつっつきあうことでしたー！　あれ、くっつき合うだっけ？
――――後者であることを祈るがな。……それより、そんなこと誰に教えてもらったんだ？
――――これ読んだの。えーとね、月刊『大人の階段』。すっごい面白いのよ、いろんなシチュエーションの話が揃ってて、よくわかんないけど最後はどれも皆裸になって抱き合ってるの。キャッチフレーズは『いつかは来る少女の大人へのステップアップ聖書（バイブル）』。姉さんも読む？
――――はは、姉さんは少女漫画好きじゃないからいいかな。それより、それは誰が？
――――ランランがくれたの。退屈しのぎにも勉強にもなるわよーって。

――――……そうか。……おい、上弦。あの馬鹿呼んでこい。

回想が終わる。
必要な知識は拾えた。
それは、
「冷えた肌で暖めあう……か」

――――ならば、逆はどうだろう。

可能性がないというわけではない。
普段の自分ならアホらしいと切り捨て、もっとマシで確実な方法を探すだろうが。
今はそんな場合ではない。
「やってみる価値はある……」
千夜の内で一つの決意が生まれた。
ぐっしょりと濡れたワイシャツを脱ぎ捨てる。
シャワーは元の高い位置に戻す。
降り注ぐ冷たさを無視し、上半身を露にした千夜はうつ伏せに倒れたままの蒼助の身体を起こそうと抱える。
「……くっ…ぅ」
灼熱の熱さが千夜の冷えた肌に熱による痛みで嬲る。
顔を歪めつつも、悲鳴を口の中で噛み殺し、抱き起こした身体を壁にもたれさせる。
閉じた瞼。力なく項垂れる頭が不安を掻きたてるがそれを黙殺し、濡れて本来の藍色から紺に染め変わったワイシャツを脱がした。

触れないように距離を気をつけて、頬に手を添える。
直接触れてもいないにも拘らず充分に熱気が伝わってくる。
一呼吸の間。
残っていた躊躇を振り払う時間だった。

息を吐き出した後、両腕を蒼助の首に回し、充分に冷え切った上半身を可能な限り、蒼助のそれに触れさせた。

「……っっ……あ！」

熱い。痛い。意識を失うまでこの二重重ねの苦痛を蒼助は気が狂う思いで味わっていたのだろうか。

触れている部分に焼け石を押し付けられているかのような熱さが執拗に襲う。

「くっ……」

前門の熱さ、後門の冷たさ。

異なる責め苦にも耐え、千夜は離れようとはしなかった。痛めつけられた肌がジンジンと痛み出しても、それでも蒼助の身体を手放しはなかった。

「……、あっ……頼むから起きろよ……目が覚めて、この状態を見て痴女扱いしても一発殴るだけで……勘弁してやるから」

だから、と抱きしめる力を強め、より密着度を高めた。

こんなにも必死になる理由はなんだろう。

そう最中にふと思った。

しかし、その疑問も床を打つシャワーの音に掻き消されていった。

【参拾九】　不明の理由（後書き）

方針を変えようかと思います。
今まで回数より一度の量をとっていましたが、今度から量より回数をとろうかと。
その方が能率的にもやる気にも影響することが判明しました。
タイトルもつけやすいですしね。

それにしても。
今回も趣味全開だなぁオイ（テメェだろ

［四拾］　追憶の人（前書き）

もう、誰も触れてくれるなと
頑なに封じの鍵をかけたまま

［四拾］　追憶の人

蒼助は見知らぬ空間にいた。
最初に視覚が捉え認識したのは古びた濁った赤の鳥居。
ほぼ均等に敷かれた石の地面。ちょうど立つ位置から左右を固めるように置かれた表情の異なる二対の石造りの狛犬。
頭の上から照り差す日光。春の陽射しとは程遠い、焼け付くように強く厳しい印象の陽射しだ。。
しかし、不思議なことにそれを感じない。
「ここは……」
そう思った時、声が耳に入った。
ハッとしてその方向を見遣る。
鳥居の向こうだ。
「今の声、どっかで……っ！」
言いかけた瞬間、人影が鳥居の向こうから現れた。
影は跳躍していた。鳥居を軽く越えるまでに高く。
その果ての着地を見事こなした影を見て、蒼助は思考が凍りついた。
現れた影は、藍色の着流しを着た女だった。薄い色素の後ろで無造作に束ねられた長い髪が立ち上がる際にさらりと揺れる。
化粧っけのない整った顔立ちは、射抜くような目付きの鋭さ相俟って気の強そうな印象が強く、何処か野性味を美しさだった。
蒼助には、『忘れられるはずのない』顔だった。
「ゴールッ！　ははっ、またアタシの勝ちだな、蒼助ぇ！」
女は高らかに何らかの勝利を宣言し、敗者である後方のまだ姿を見せない者を振り返った。
しかし、いくら待ってもその相手はなかなか姿を現さない。
「……おーい、どしたぁ。坊ちゃんはママが手伝ってあげなきゃこんな石段も登りきれないのかぁ？」

「――――……ぅるせぇ！　誰が坊ちゃんだクソババア！！」

高い声が響いた。蒼助の耳に。

その声の主はようやっと姿を見せた。

女と同じ、髪色。目の前の女を連想させる幼いながらの顔立ち。

それは、

「……んな馬鹿な」

信じられない、と蒼助は自分の周囲、状況、目にしているもの全てを疑った。

疑わずにいられるものか。

何故なら、ここは。あの二人は。

過ぎ去った遠い日。己の過去の光景。

幼き日の自分。

そして、

「おふくろ……」

焼き尽くさんばかりの陽射しを木陰で免れた蝉の鳴く声が、木霊する。

◆　◆　◆

幼い頃の自分を振り返るといつも母と何かを競っていた。

かけっこ。ゲーム。早食い。大食い。武道の稽古などｅｔｃ。

種目様々でいろいろ競ったが、何一つ勝てはしなかった。

文武両道にたけた性格は生粋のどＳにしてオレ様。それが蒼助の母親・美沙緒だった。

相手が弱かろうが下っ端だろうが、歯向かう者には一切の手を抜かない何事においても徹底主義。

もちろん、子供相手にもだ。

いつも立ちはだかっては全力でぶつかり、叩き伏せる。敗北した自分を見下ろすその様は悪の帝王。

母の慈愛という言葉とあれほどかけ離れた女を蒼助は他に知らない。

母親としては最悪だったかもしれない。

だが、皮肉なことに、退魔師の家に生まれながらその才の欠けたオチこぼれとして生まれた蒼助を唯一人真正面から受け止めたその人だった。

かつて望月から聞いた話があった。

自分が生まれて間もない頃、子の霊力の弱さを知った父は、正直な話、嘆いたらしい。

決して、父自身に霊力云々のこだわりはなかったらしいが、問題は一族とその周りの人間だった。

血統と非凡の力を何よりも誇りに思う連中がそんな存在は認めるはずがなかった。

生まれた子供の鼻を摘んで遊んでいた母に父はこれからの心労を打ち明け、すまないと謝ったそうだ。

決して、オチこぼれを産んだことを責めずに。

しかし、母は何故か逆に父を殴り飛ばしたそうだ。

そして冷静な口調で、据わった目付きでこう言ったという。

『何で謝る。霊力が低いから苦労する？　だからどうした。上等じゃねぇか。才能揃った将来有望のガキ育てて何が楽しいってんだ。アタシはそんなクソつまんねぇもんいらねぇよ。そんなもんより、この才能なしの運にも神にも見放されたガキが、地のどん底から這い上がってどんな風に成り上がるのか、そっちの方が楽しみだ。それによ、正直安心したんだぜ？　コイツが霊力極貧だって聞いたときは、嬉しくて飛び跳ねそうだった。何で？　昔から決まってんだよ、優等生より問題児の方が実は将来大物になるってな。アタシとお前でそれを証明しようぜ、パパ』

異能の血統の元に生まれた平凡は祝福などされない。
母はそれを鼻で哂い、平凡に近しい子を息子と呼んだ。
周囲の中傷や蔑みの中で抗う自分のたった一人の味方となった。
だが、慰めなどしなかった。
寧ろ、劣等感を煽る言葉すら口にした。
周りには手酷く扱っているようにしか見えない、ひどく歪んだ愛情だったかもしれない。
けれど、自分とその可能性を信じ、敵となり続けた唯一人の女(ひと)。
優しさや慈しみは与えない代わりにへこたれない雑草根性の促進を。
立ち向かう限り、全力で応えてくれる人間。
蒼助が求めていたモノ。
蒼助にとって、あの母親とはそういう存在だった。

◆　◆　◆

蒼助はただ呆然と立ち尽くし、見ていた。
記憶に残るいつかの夏の光景。
目の前には、それを証明するモノが二つ。
「どうなってやがんだ……」
混乱する脳がまず叩き出したのは、ここが過去。
自分は過去へ来てしまったのか。
前後の記憶がはっきりしない蒼助は何がどうなってこんなことになったのかわからなかった。
ただ言えることは、自分は今ただならない状況下にいるということだけだ。
少年――――幼き日の自分はようやく昇り終えた石段を後に完全に息が上がって座り込んでいた。
母親はそれを呆れと小馬鹿にする様子をかけて割ったような表情

で見下ろしていた。
「なっさけねぇな……これくらいの段差登ったくらいでそんなにヒーヒーいっちゃってよぉ」
「……そりゃアンタは霊力補強で一ッ跳びしちまったらいいだろうよ……」
「勝負の世界は厳しいんだよ」
「その厳しさに反則技は含まれてねぇだろ！！」
母は非常に負けず嫌いだった。
子供相手にこんな風に反則技を使うこともしばしばだった。
だから、蒼助はいつか自分だけの力で彼女に勝つことが何よりの夢であった。
「……にしても、暑いな……ちょいと木陰で休むか。……どうした、早く来いよ」
「無茶言うなよ……足腰しんどい、歩けねぇ」
「ああ？　ったくしょうがねぇな坊ちゃんは」
「坊ちゃん言う、なぁ――――っ！？」
抗議は途中で叫びに変わった。
母親が突然、胸倉を掴み上げて神社の社向けて分投げたからだ。

在りし頃の自分は社の中にピンボールのように叩き込まれた。
母はいつも自分の扱いはぞんざいだった。
傍目で見ている父親や組の人間はひやひやしていた。
しかし、誰も止めなかった。
だって、怖いから。
「おーい、涼しいかぁ？　しっかし、大分重くなったなぁ……片腕でこれが出来るのは来年までが限度か」
言葉どおり、中学に入ってから両腕で投げられるようになった。
ほぼ日常的に投げられてよく自分もここまで育つ過程で死ななかったものだ。
などと考えていたら、母親が自分の目の前までやってきた。

「あ、……あ？」
まずい、などと思っていたらそのまますり抜けて、通り過ぎた。
さっきから気になっていたがまるでこちらが見えていないようだ。
この時代の人間ではない異分子である自分は幽霊みたいなものになっているのだろうか。
そんなＳＦチックなことを思考にめぐらせていると、
「お、でっけぇ瘤。つんつーん」
「いってぇー！」
賽銭箱に衝突して伸びていた二分の一スケールの自分は膨れ上がった脳天の突起物を無遠慮に刺激されて息を吹き返した。
「おはよう、息子。あん？　何青ざめてんだよ、周り全然寒かねぇぞ？」
「オレ……いつか、ぜってぇ殺される……」
「誰に？」
「アンタにだぁぁっ！」
「ひでぇ言われよう。可愛い息子殺す母親が何処にいるんだよ……
……第一、勿体無い」
「……」
子供の自分ともども蒼助は沈黙した。
この時、何がどうも勿体無いのか、聞かなかった理由は大体想像がついたからだった。
子供なが利口な判断だったと思う。
知らなくてもいい事も、あると今なら言える。
「なぁ、おふくろ……毎日毎日、こんな風に身体鍛えてばっかで……
……こんな調子で本当に俺、退魔師になれるのか？」
「どいつも最初は体力づくりから始めんだよ。霊力扱うにも精神力はもちろんそれなりの体力も必要だ。敵さんだって、じっとしていてくれるわけじゃねぇ。スポーツと同じだ。攻めるには相手を上回る行動力は自然と欠かせなくなる。のろのろしてたらあっという間にゲームオーバーだ。特に、霊力っつーもんが徹底的に偏っちまっ

てるお前は普通の退魔師の十倍の機動力を持たねぇとな。せっかくのその”眼の力“も全く活かせねぇぞ」

才能がない分、体力にはまでは見放されていなかったのか運動神経は抜群に秀でていた。

たかが知れている短所をそこそこ伸ばす努力を目一杯するよりも、その長所を可能な限り伸ばそうというのが母の考えだった。

その考えをより強くさせたのは、自分が持つたった一つの”特異な力“だった。

「アタシの考えが正しけりゃ、お前のその眼と俊敏な動きが加わりゃ、どんな一流の術師もお前ににゃ敵わなくなるね」

「アンタよりもか？」

「ばっか、調子にノンな。このアタシ相手じゃお前みたいなハナタレ、一生かけても敗北記録伸ばすだけで終わるよ」

「～～～今に見てろよぉ、絶対に……」

そうだ。

他の誰かより強いと言われてもしょうがなかった。

自分の願いは、この人に勝つことだったから。

ハナタレから一人前に認めてもらうことだったから。

「なぁ、蒼助。”志“って言葉が世の中にゃある。これがどーゆーもんかわかるか？」

「何だよ、突然……わかんねぇよ」

「だろうな。じゃなきゃ、説明のしがいがねぇ」

――――これは……。

酷く心を揺さぶる言葉が出てきた。

思い出した。

この場面（シーン）は。

「いいか、”志“ってのはその人間ごとにある人生の命題（タイトル）だ。人間の価値ってのは生きている間に何をしたかじゃねぇ。何を思って、

何のためにどう生きたかだ。どれだけ人から誉められる大層なことしても自分を偽ってちゃ何の意味もねェ。逆にどれだけ人から詰られるような悪行をやっても、それが自分の意志を通したことなら、他の誰が認めなくてもアタシがその価値を認めてやる。自分が定めた何かの為に精一杯人生を注ぎ込む、それが最高点だな」

「じゃぁ、何だよ……悪いことしても、それが俺がやりたいことだったらアンタは文句言わねぇってのか？」

「まあな……ようはな、アタシが言いたいのは、後悔するような人生で終わらすなってことだ。魂は存在する限り何度も巡るが、玖珂蒼助の一生は今回たった一度しかねぇ。今の人生、自分に嘘つかないで力いっぱい生きろよ」

これが母が唯一自分に教えたマトモな教えだった。

最初で、最後の。

心に焼き付いて離れない自分を振り返るたびに思い出し、響く言葉だ。

「まぁ、まずはお前が自分の志を見つけるのが先だな」

「その志ってのは……具体的には何だよ」

「まぁ、目標みたいなもんだな。それも一生分のな」

「よっし、それなら俺はもう持ってるぜ！」

ほぉ、と眉を上げる母親に幼き自分は高らかに宣言する。

「アンタより強くなることだ！」

「無理だな」

「早ッ！？　何で、言い切れるんだよ、証拠はあるのかよ！」

「決まってら。アタシが強いからさ」

「うわ、なんてしじんかじょうだっ！」

「自信過剰の”自信“くらい漢字でかけるようになってから言うんだな。まぁ、本当の志ってのは見つけられるのは口で言うより結構難しいことなんだぜ。見つからない、ってのも少なくねェ。これからまだ長いてめぇの人生で、ゆっくりでいいから確実に見つけてみせろ、そしたら――」

とりあえず、ハナタレは卒業だな。

彼女がそう言ったところで変化がおきた。

周りの風景に。

［四拾］　追憶の人（後書き）

傍目から見たらタダのマザコンにしか見えない（笑）

［四拾壱］　志の意味（前書き）

叫べはいい、受け止めるから
封じを解く鍵を探しに行こう

【四拾壱】　志の意味

移り変わった風景のあとに現れたのは今度ははっきりと見覚えのある光景だった。

蒼助が立っているのは玖珂の武家屋敷だ。

その中に建てられた、玖珂家の墓地。

そこは玖珂の血を引く者のみが骨を埋めることを許された地。

だが、何故此処なのだろう。

「今度は一体……」

数多くの立派な先祖たちの墓石が立て並べられている中、蒼助は一つの墓石の前にいた。

一際小さく、みすぼらしくすら見えるそれは蒼助にとって酷く覚えのあるものだった。

忘れるはずのない。

何故ならこれは、

「……ああ」

母親の墓だ。

一族の墓地に入れることを最後まで反対された父が、小さく、ひっそりと墓地の隅に建てたのだ。

よく見れば、角が少し欠けている。

原因に覚えがあった。

他でもない蒼助自身がやったのだ。

加減を考えず、自身が痛みを受けることも無視して思い切り蹴飛ばしたのだ。

母の死に皆が泣いていた。

父親など一生分の涙をむせび泣いて。

滅多に笑顔を崩さない迦織も静かに涙を伝わせて。

声を押し殺して泣く者、人気のないところで泣く者、或いは声を張り上げて泣く者。

生きている間散々騒ぎを起こしていた独裁者のような女が死んだことを誰もが悲しんだ。
けれど、蒼助だけは泣かなかった。
悲しみを勝る感情（モノ）があった。
怒りとやるせなさ、そして喪失感だ。
最期まで勝手に気ままに生きて、勝手に死んだ母親を、何者にも縛られず我が道を生きる様を焦がれたその人物を、初めて恨んだ。
「……アンタがこんな風になってやっと気づいたんだよな……俺、アンタが大嫌いだったけど、アンタみたくなりたかったんだ……」
彼女に一人前と認めてもらうこと。
それが自身の”志“だったのだ。
皮肉にもそれを奪った人間は、同時に与えた人間でもあった。
その死によって、永遠に失った。
胸にぽっかり穴が空いたような気分だった。
半分自暴自棄になりながらもその穴を埋められる代わりとなる新たなそれを見つけようと思った。
どれも空いた穴を塞いでくれる代物ではなかった。
「そういや聞いてなかったよな……志がそんなに大事なもんなら失くしたらどうなるかって……こんなことなら聞いときゃ良かったな」
だが、母が生きてきた頃と今の自分を比較すれば、自分なりに答えは見出せた。
定めた”志“が砕けた時、訪れるのは死だ。
命がなくなるわけではない。
だが、人生は死ぬ。
志が人間の価値を測るものなら、それを失えば無価値、死んだも同然だ。
いわば、自分は死人だということだ。
「そういや俺……」
此処に来て、ようやく記憶が明確な形を描き始めた。

確か、深夜に眠っていた時に”あの男“が起こす高温の熱と痛みに襲われたのだ。
熱と苦痛をどうにかにしようと、浴室まで移動したところでついに力尽き、
「……死んだのか？」
ならばこれは過去ではなく、
「――――走馬灯でもないわよ？」

心を先読みした如くの声が蒼助の背後で響いた。
振り返るとそこには、
「お前は……」
その姿を決して多く見たわけではなかった。
だが、二、三度しか目にしなくてもその姿はそう簡単には忘れられないだろう。
漆黒に彩られたその姿は。
「黒蘭……？」
「はぁい、元気してたかしら？」
手をひらひらと振る黒蘭を本物と認識した蒼助の思考が再びパニックを起こした。
「な、何でここにっ!？　つーか、何でお前っ？」
「そ・れ・は・私がカミ様だからっ♪」
「答えになってねェっ!!」
いたずらっぽく笑う黒蘭は名も知らない先祖の誰かの墓石に座っていた。
「おい、それ一応俺の先祖の墓石なんだけどよ」
「構やしないでしょ。どーせ、貴方の”記憶の断片“の中だもの」
「俺の、記憶の断片？」
「そ、貴方がさっき見た光景もこの光景も……全て貴方の記憶を映し出したモノ」

あの母親と自分も過去の映像。
これで向こうにこちらの存在を認識されなかった理由とこの事象の正体も納得が行く。
だがしかし、一つ腑に落ちないのは、
「俺、死んだのか？」
「私もそう思って貴方の深層意識に入り込んだのだけど……違うわ、貴方は生きてるわよ」
その言葉が与えた安堵は、何故か少なかった。
僅かではあるが、落胆すらあった。
「ちょっとヤバイかとらしくもなく焦ったけど……今回の事で大分”貴方たち“の状態が把握出来たわ。思わぬ収穫って奴よね」
「……なに、言ってんだ？」
「こっちの話よ」
にっこりと微笑んだ笑顔は、それ以上の拘りをきっぱり拒絶する力を持っていた。
「まぁ、いいけどよ……とりあえず、俺は何だってこんなところに来ちまったんだ？」
問いかけても仕方のない台詞だった。
しかし、独り言をぼやいたつもりのそれに思わぬ返答が返ってきた。
「深層意識でふわふわしてた貴方を私が放り込んだからよ。場面を入れ替えしたのも私」
「なっ……」
驚愕入り混じった蒼助の非難じみた視線を受けた黒蘭は事無さげに言う。
「ちょうど良い機会だと思ったのよ。せっかく、こっちの手間いらずで深層意識に落ちてくれたんだから見るもん見てもらって気づいてもらわなきゃって」
蒼助は黒蘭の言う事を何一つ理解出来ないでいた。
どういうことだろうか。

見てもらわなきゃならないとは？
それが何故母に関する記憶なのか。
疑問が量産させていく。
「あの光景とこの光景が……俺が見なくちゃならないモノなのか？」
「そう、貴方が失ったものの再確認、そしてその誤認を改正するために、ね」
「再確認……？　誤認って……」
自分が失くしたと思っているものをもう一度改めて認識しろという。
しかもそれが間違っているから改めろと。
「とぼけちゃって……貴方、ついさっき自分で言っていたじゃない。自分が失くしたものについて考えて、自分は死人だなんてネガティブな思考に突っ走って浸っていたようだけど。おかげで出るタイミング見つけるの大変だったのよ？」
心の中まで見透かしたような発言が答えを促す。
「……俺の”志“……か？」
確かに失ったものだ。
だが誤認とはどういうことだ。
「……オイ……なにが、間違ってるって？」
「それに関する全部。得た気になって、失った気になっているその考えよ」
「なに、言ってやがる……」
くすり、と幼い顔立ちが不意に妖艶に笑う。
「貴方は志を失ってなどいない。それどころか手に入れてすらいなかった。それを認識しろって言ってるのよ」
言葉を聞いた心が吐き出したのは反論を評する怒りだった。
「勝手なこと抜かすなっ！　わかったような口をきくんじゃねぇっ！！」
ふざけた話だ。

母親が死んで四年間、自分が彷徨い続けた時間が無意味だと言っているようなものだ。
何より、何もかも理解しているというその風情が癪に障る。
「カミ様なんだか知らねぇが、俺の事を知りもしねぇで何もかも把握したようなツラするな……っ」
「知りもしないねぇ……少なくとも、今の坊やよりは知っていると断言できるわ」
突然、黒蘭が視界から消えた。
直視の対象の消失と同時に後ろから抱きつかれる。
白く細い腕が蒼助の首まわりを抱くように絡みついた。

「”本当はただ怖かった。裏切られるのが“」

びしり、と身体が凍りついたように固まった。
表情が強張る蒼助の耳元で構わず言葉が囁かれていく。
「”俺に志について語り教えたおふくろは、その死で裏切りを形作った。俺の中で絶対と信じていたものが簡単にぶち壊された。絶望した。俺が信じていたものはこんなにも脆くて壊れやすいものだったのか、と“」
やめろ、と小さく漏れた声。
しかし、それは聴き止められず言葉は続く。
「”それからだった。いくら新しい志になりそうなものを見つけても、必ず恐怖が引き止める。何かを志にしてもその何かにまた何らかの形で裏切られるのではないかと思う。また、あの喪失感を感じるのは嫌だ“」
「やめろ……」
「”だから、全部おふくろのせいにした。おふくろが、俺の志をぶっ壊しちまったから俺は志を永遠に失った。だから、俺はずっと新しい志を見つけられない。そう唱えていれば俺は俺を守れる。もう、あの喪失感を感じる心配も、しなくていい。だって、そうじゃない

か。――――――『アイツ』だって、結局は俺を裏切ったのだから”」
限界だ。
「――――――っっっだぁぁまれぇぇぇぇぇぇっっっっ！！！」
唸るような絶叫。
空間に轟くと、何処かで”ぱきっ“と殻に皹が入るような音がした。
それは前兆だったのか、次の瞬間に空間は跡形もなく弾け飛んだ。
まるでシャボン玉が割れて消える、そんな表現が当てはまる形で。
風景と呼べるものは掻き消え、残ったのは何もない、地面はおろか地平線があるのかすらわからない白一色の空間。
そして、肩で息をする蒼助といつの間にか離れ、それを見つめる黒蘭。
力を失くしたように、その場に座り込む蒼助。
今度は歩みをもって近づいた黒蘭は黒いレースをあしらったドレスをふわりと浮かせてしゃがみこみ、項垂れる蒼助の表情を伺うように見つめ、
「アレ、見たのね。自業自得でしょうに、人の秘密を盗み見ようなんて無粋な真似するからよ」
諭すように語りかけてくる黒蘭に、蒼助はいたずらがバレた子供のように拗ねた様子で言い返した。
「あんなもん見つけなくったって……結果は同じだっただろ。ダメなんだよ、もう……どう足掻いたって、アイツは……」
「あら、そうかしら。そのどう足掻いたって振り向いてくれる望みのないあのコは今向こうで貴方の為に必死なんだけど」
は？と顔を上げると、両手を包むように顔に添えられた。
「ダメかどうか諦めるのは帰ってそれを確認してからにしなさい。
それとね、さっきはああ言ったけど、貴方は確かに失ったわね、”信念という志“を。でもね、得てもいなければ失ってもいないとい

うのも本当よ」
　何のこっちゃ、と目をぱちくり瞬きさせる蒼助に黒蘭は呆れたように笑う。
「貴方のお母さんは片方の志しか教えなかったのね……まぁ、いいわ教えてあげる。志って言葉にはもう一つの意味があるのよ、知ってた？」
「もう一つ……」
「これが貴方が得てもいなければ失ってもいなかったモノ。あのコに会うまでは。わかる？　――――愛情よ、愛情」
　呆然とその言葉を受け入れる蒼助に黒蘭は更に言葉を重ねる。
「お母さんの言葉、よく思い出して。ゆっくりでいいから確実に見つけろって言ってたわよね。一生分を貫き通す信念がホイホイ見つかるワケないでしょ。失った志（モノ）は幼い心が抱いた小さくて、それでもいて大きな夢。彷徨い続けた時間は本命を見つけるための時間。ねぇ、いい加減気付きなさいよ……貴方がようやっと見つけた信念（ここ ろざし）に」
　脳裏に過ぎる影があった。
　一人の少女の姿を象ったものだ。
　恋は駆け引きと、溺れるものは愚か者と考えてきた蒼助の常識を一瞬にして打ち砕いた人間。
　性格にも抱える事情にも難アリな女だった。
　だが、接するごとに、その回が増えるごとに育つ想いがあった。
　それに引き摺られるように芽生えたもう一つの感情。
　決定付けさせたのは、路地裏で傷ついて気を失っている彼女を見つけた時だった。
　何者にも、この女を傷つけさせたくないという思い。
　護りたい。
　その想いの名は庇護。
「……俺は、」
「とりあえず、帰りなさい。あんまり長く居て良いところじゃない

のよ、ココは。まだ残ってるその不安も、きっと戻ったら吹き飛んじゃうわ。それと……」

ぐいっと添えられた手に力が入り引き寄せられる。

黒蘭の顔が近づいたと思った瞬間、触れ合うモノがあった。

二、三秒ほどで、ちゅくっと音を立てて離れた。

突然のことに目を見開く蒼助に黒蘭はいたずらっぽく笑った。

幼女が浮べるそれとは思えぬほどの大人びた表情だった。

「元気が出るおまじない。……あのコにはちゃんと手順踏んでしてね。いきなり濃いのしちゃダメよ?」

若干、ドキリと来る言絵葉に後ろめたい部分は胸の奥に押し込み、とにかく頷く。

相手がこの人物では隠せたかどうかは微妙なところでだが。

「さて、それじゃぁそろそろ頃合よね。あのコにこれ以上心配させるのも気が引くし」

立ち上がり、見下ろす形になった黒蘭は何を思ったのか腰を屈め、

「この次はちょっドタバタした中で会うことになるだろうけど、その時は……」

浮べた表情は大輪の花のような笑顔。

「――――出来るだけ、殺してしまわないよう心がけるから安心して……?」

次の瞬間、水の中から引き上げられるような感覚が訪れた。

［四拾壱］　志の意味（後書き）

この作品、連載期間は改稿前も入れて一年半以上になるんですが…
…こんなに長く一つの作品書き続けたのって初めてだなー、と思ったり（本当です
ここまで来たら何が何でも終わらせなくちゃね（汗

【四拾弐】　勢いの告白（前書き）

何もかもぶちまけてしまえ。
その相手を失う前に。

【四拾弐】　勢いの告白

鼓膜を叩く音がある。
二種類あった。
水の流れる音。そして、その先で地を打つ音。
徐々に目覚めつつある身体の機能で最初に働いたのは聴覚だったようだ。
次に触覚が肌に触れているモノの感触を感じとる。
柔らかい。それは湿り気を含み、吸い付くような感触だ。どういうワケか酷く冷えているが、それは間違いなく人肌の感触だった。
重い瞼を開くと、視界が開け光が戻る。
「……ん……」
身体の全機能が戻りつつある。
その時だった。
「っ、気がついたか」
耳元で聞こえた何処かホッとした様子が伝わる声。
酷く聞き覚えのあるものだった。
人肌の感触が離れて行く。
名残惜しく思っていると肩に顔を埋めていた誰かと正面向き合う形になった。
「玖珂、私がわかるか？」
「……」
ぼやけていた視界が段々と輪郭を持ち、明確なものとなっていく。
そして、立ち直った視界は”誰か“を映し出した。
「……千夜」
「ああ、そうだ……」
穏やかに笑う千夜に、思わずつられて笑みを浮かべそうになったところで、問題が起きた。
正常に近いところまで回復した意識が状況と目の前の千夜の姿を

捉えたことで。
「……っぶぉぉっぁ！？」
奇妙な叫びをあげて仰け反った。
慌てて後退しようと勢いづいた後頭部が勢い余って背後の壁に直撃。
悶絶。
「なにやってんだ……」
意識を取り戻すなりテレビで見る珍プレイ特集のような行動を取る蒼助に呆れる千夜は、それでも一息ついたと腰を床の上に降ろした。
痛みから立ち直ったとは言い難いが、蒼助はそこをなんとか堪える。
それよりも、顔が信じられないくらい熱い。
現実に帰ってきて早々いきなり何だろうか。
蒼助は目の前に座る”疑問“を思いきり言葉にして叫びたかった。

何で、風呂場に半裸の千夜がいるんだ！！

と。
しかも蒼助自身も上半身何も来ていない。
冷たい冷水が今も尚降り注いで寒いのだが、今はそんなこと些細な問題だった。
「お、まえ……何して……」
「ん、ああ……言っておくがな。話すが、何か一つでも変なこと言ったら風呂に沈めるからな」
いきなり脅しか。
大人しく頷いておくのが無難なのは馬鹿でもわかる選択をし蒼助は千夜の言葉を待つ。
「夜中にシャワーの音がするから奇妙に思って浴室覗いたら……お前が倒れてて……何事かと思ったら、赤熱化した鉄みたいになって

るから……これはまずいだろうとなんとか冷まそう思って……」
ぽりぽり、と頬を掻き、
「冷水かけてもちっとも熱が下がらないから……水で冷やした人肌でじっくり冷まそうと……まぁ、そんな感じだ」
どんな感じだ。
人肌で体温を冷ますという言葉から蒼助の中で言葉の意味の解釈が始まる。
……つまり、今の今までずっと……？
上半身裸で抱きしめられていたということ。
必然と行き着いた答えに蒼助は唖然とした。
「……ずっと、その格好でか？」
呆然と尋ねた蒼助にギロリと千夜は睨みをくれて、
「まだ冷め切らないなら、存分に冷やしてやるが？」
と、何を思って怖い目をするのか、現在進行形で流れ続けるシャワーの冷水を頭から浴びせられる。
「ぶわっ……っっつめて！！」
「よかったじゃないか。それがわかるなら体温はもう正常だ」
からかうような口調の中には何処か安堵を孕んでいるように蒼助の耳には届いた。
滴る水を目元から拭っていると頬に何かが触れる。
千夜の手だった。
冷水に当たり続けてすっかり冷え切ったそれがそこに蒼助がいることをを確かめるように頬を撫ぜた。
「よかった……」
心の底から、と言えるほどその吐息のように漏れた言葉は感慨に満ちていた。
見つめられた蒼助はギシリ、と石のように固まった。
いつのまにか周囲に流れている奇妙な空気がそうさせた。
……何だ、この空気は。
背筋がくすぐったい。

そもそも“この状態”が問題だ。
視線釘付けの相手である千夜は上半身は何一つ身に付けていない。
目にする機会は悪戯にもあったが、じっくり見たことなかったそれは溜息をつきたくなるほど見事な曲線（ライン）を描いた肢体だ。
隠すもののないこんもりと胸部に乗った撓（たわ）わに実る二つの果実は標準の大きさを遙かに超えた代物で生唾ものだった。
肌を伝う無数の水滴が妖艶さを煽り立てる。
目覚めたての意識には非常に“毒”な絵だ。
ごくり、と唾を呑み下し、蒼助は千夜の無自覚の誘惑を振り切ろうと、
「っ……いつまでその格好でいるつもりだ、服着ろ服！」
「いや、もう濡らしちゃったから」
「ないよりゃマシだ！　俺にはっ」
言葉どおりビショビショに濡れ細ったそれに強引に腕を通させる。
怪訝な表情を浮かべつつも、特に抵抗はせずに好きにさせていた千夜はいざ着ると顔を顰めた。
「服がびっとり貼りついて気持ち悪いんだが……」
「なら向こうで着替えて来りゃいいだろっっ」
「復活した途端煩い奴だな……さっきから一体何なんだ玖珂」
「う、うるせぇな……いいからとっとと向こうに行けよ」
顔を逸らしたまま素っ気無く言い捨てる蒼助の顔が赤いことに千夜は気付いた。
それがどういうことなのか察したのか、ニヤリと底意地の悪い笑みが浮かぶ。
「お前……もしかして私の裸見て興奮したのか？」
「っっ……何言って」
「なら、こっち見ろ」
ぐいっと顔をがっちり手で固定させられ、否が応でも豊満なそれを見なければならなくなった。
ぺっとり、と肌に貼り付いた服から浮き出るその様は着せる前よ

りもエロさを増していた。
絶句する蒼助を見て、千夜は呆れ混じりの笑いを口から漏らした。
「ぷっ……変な奴だな。お前、女の身体なんて腐るほど見てきたくせに何を今更私の身体見て真っ赤になっているんだ？　これでも――元は男なんだぞ、私は」
極度の興奮状態に陥っていた蒼助の思考は千夜の科白の片鱗たる言葉で一気に冷え、そして怒りの沸点を上げ始めた。
……何もわかっちゃいねーんだな、本当に。
この女は何も知らない。
自分がどういった目で見られているのかも。
蒼助がどんな感情を抱えて葛藤していたかも。
元は男？
そんなことはわかっている。
だが、それがどうした。
元が何であれ今は“女”であることはその身体が証明しているじゃないか。
何で何も感じないと思う。
静かに熱くなっていく怒りに押し上げられ、蒼助は顔を掴む千夜の両手を己のそれで捕らえた。
「……、玖珂？」
「全くお前の言うとおりだな……女の身体なんざ見飽きるくらい見てきたのに、お前みたいな変体女に馬鹿みたいに欲情してる……どーかしてるわ本当」
「……？」
日付が変わったのだろう、寝る前までは男の身体が女のそれに戻っている。
本当にデタラメな奴だ。
せめて今のこの瞬間、男の姿でいてくれたなら自分を抑えることも出来ただろうに。
もし、と蒼助は千夜という存在を視野に考える。

もしも、千夜が普通の男だったら、と。
男という箇所だけ置き換え、あの出会い、あの再会を果たしていたら。
昶と自分と三人で男の信頼関係を築けたのではなかっただろうか。
そんな思いを馳せ、次の瞬間には下らないと自ら一蹴した。
今更『ＩＦ（もしも）』などと考えても何にもならないというのに。
「なぁ、お前気づいてたか？　俺の目にお前がずっとどんな風に映ってたか……」
「……」
「お前、前に言ったよな。女に苦労していない俺は無闇に自分に手を出したりはしないって」
記憶を思い返し、嘲笑う。
「んなわけねーだろ。知ってっか？　俺、あの夜実はすっげー欲情してたの、着替えさせた時に見たお前の裸思い出して。そんで、寝てるお前に夜這いかけようとした」
「――なっ？」
「あん時はさすがに未遂で終わったけどよ。……でも、今度は無理だな」
明かした事実に驚愕して一瞬の隙を晒したその身体を蒼助は両手に片方ずつ掴まえた千夜の手を押した勢いに自分の体重の追加をかけて濡れた浴室の床に押し倒した。

「っ、」
何も纏っていない背中を打ち付け、骨に伝わる痛みに千夜の顔が顰められた。
これからもっと痛い思いをすることをこの少女は予測出来てはいないだろう、と蒼助は不思議なくらい冷静な思考で思った。
陳腐な科白で、こんな言葉があったな、とふと思う。
心が手に入らないなら身体だけでも、と。
馬鹿な科白だと小馬鹿にしていた言葉を今まさに行動しようとす

ることになるとは、その時の自分が知ったらどう思うだろう。
物思いに耽っていたら下に組み敷いた千夜が当然と言える怒ったような口調で下から睨み抗議を上げた。
「お前、ふざけるのもいい加減に……」
その言い終えることもなかった言葉がトドメになった。
「ふざけてんのはどっちだ……」
ぎり、と力むと歯と歯が痛いくらい噛み合う。
「何で悪意にはこれでもかってくらい敏感なくせに好意には激ニブなんだよてめぇは」
「それとこの状況にどんな関係が……」
「あるに決まってるだろ!!」
熱くなった思考が勢いで言葉を弾き出す。
「お前が元が男だからどーした！　飽きるほど女抱いてるからなんだ！　そんなもんがどーして俺がお前を女として見ない理由になるっ!?」
激しい奔流に呑まれた蒼助の勢いは止まらず、
「初めて会った時から俺の目に映るお前はずっと“女”だった！
今まで出会った腐るほど大勢の女なんか及びもつかないほどに……誰よりも“女”だって感じてたんだ!!」
「何を言って……」
そして、

「まだわかんねぇのかよっ……――俺はお前が好きだって言ってんだっっ!!」

血を吐くような思いと共に、蒼助は奥にずっと溜め込んでいた言葉と想いを吐き出した。
一時の快楽などで終わらせたくなかった。
互いの名を呼び合うことにさえ喜びを感じれるような絆。
欲しかったのはそれのはずだったのに、

……もう、無理だろ。
それを望むことも。
何もせず、ただ身を退くのも。
だから、せめて自分の痕を彼女に残したい。
傷でもいい、恨みでもいい。
どんな形でも良いから千夜の中に“己”を刻み込みたかった。
眼下にある存在をめちゃくちゃにしたい衝動に駆られ、蒼助が見据えたのは、

「……ぇ？」

蚊が鳴くような掠れた小さな疑念の声と顔を茹でダコの如く真っ赤にして目を見開いて自身を見つめる姿だった。
予想外の域を軽くひとっ飛びした反応に蒼助は一瞬、思考を止めた。
……え？
奇しくも己の中で千夜と同じ台詞を漏らした。
何故、こんな反応をするのか。
仮にも犯そうとしている人間相手に。
怒って嫌がって抵抗するのではないのか、普通は。
なのに、現実はこうだ。
これではまるで、
……告白されて、嬉しい……みたいな？
どうにも動けなくなった。
互いに凝視し合ってどれほど経ったのか、時間を経て先に動いたのは千夜だった。
真っ赤になった顔をそのままに、弱まった拘束を解いてずるずると硬直状態から抜け出す。
そして、何事もなかったように押し倒された際に床に投げ出されたぐっしょりと水を含んだ重いワイシャツを持って浴室から出て、

ドアを閉めた。

一人残された蒼助は出て行く過程をドアが閉まるまで止めることも声をかけることすら出来ず、ただ見送った後、脱力したように四つん這いから胡坐をかく体勢に移行し、

「……どういうオチだよ、これは」

疲れ切った声が溜息のように吐き出され、浴室に響いた。

［四拾弐］　勢いの告白（後書き）

一週間ぶりです。
順調な更新速度が落ちた理由は何か、と言います……インターネットの接続具合がどーもご機嫌ナナメになってしまいまして。
家族共有の方は翌日直ったのですが、私のノートパソは一晩経っても変化なしで、ＭＹ親父がこれを機会に有線コード取っ払ってワイヤレスにしよーと言い出し取り替えたのですが、この無線がまた曲者で。
気紛れに接続切りやがるものだから、執筆作業中に更新したら未接続なんて底意地の悪いことしやがるものだから進みやせず、そんなこんなのトラブル入り込んで遅れましたがやっとの更新です。

ついに告った蒼助（後に無理矢理ヤる気でいたが）
意外な反応を見せた千夜。
次回はそんな二人の翌朝から始まります。

［四拾参］　不感知の降り立ち（前書き）

まだ、誰も気づかない

［四拾参］　不感知の降り立ち

朱里は一週間の中で日曜、それも朝が一番好きだった。
嫌いな勉強を受けに学校に行かなくていいから、というのもあるが、本当の理由はもっと別にある。
時間に急かされることなく大好きな姉とゆっくり朝御飯が食べられるからだ。
それなら土曜も同じと言われれば、それは違うと言いたくなる。
土曜はダメだ、姉は平日に溜まった疲れの鬱憤を晴らすかのように昼過ぎまで寝こけている。
だから日曜日なのだ。
土曜日さえ辛抱すれば、姉はその翌日は自分よりも早く起きて朝食を作ってくれる。
時の流れは変わらないのに急ぐ必要のないその日の朝食の時間は平日のそれよりずっと遅く感じる。
その長く感じる時間の中でする姉との何気ない交流の刻（とき）が朱里にとって最高の幸せの一時。

――――の、はずだった。

そんないつもは幸せのはずのこの時が、“今”は早く終わって欲しくて仕方ないと感じるのはなぜだろう、と朱里は目の前の光景を見ながら思った。
今回の日曜の朝食はいつもと少し違った。
まず、この場に居合わせているのが姉と自分だけではないということ。
朱里の隣の席には、一人のイレギュラーの男が座っていた。
二日前からこの家に居座っている自称・姉の友人『玖珂蒼助』。
そしてもう一つ、この朝食がいつもと違うものとさせているモノ

があった。
それは、
「……朱里、ドレッシング取ってくれ」
「あ、うん……んーっ」
頼まれたものの生憎ドレッシングは朱里の手が及ばない距離を置いた場所にあった。
それでも何とか取ろうと手を伸ばしていると、
「何してんだよ……ほら」
不毛な足掻きを見かねた蒼助が傍らのドレッシングを手にし、千夜に差し出す。
その一瞬、姉の目に躊躇が映されたように朱里には見えた。
しかし、姉はそのまま差し出されたドレッシングを受け取ろうと手を伸ばす。
受け渡しの瞬間、僅かながら蒼助の手にその手が触れた。
その時だった。

――――ぱっ……ボトッ。

まさに一瞬のことだった。
触れた次の瞬間に姉は空気を切り裂く勢いで伸ばしていた腕を引いたのだ。
蒼助の手が離れるタイミングと重なって、支えのなくなったドレッシングは真下のサラダの中に為す術なくダイヴ。
唖然。朱里も蒼助も。
無論、ドレッシングがサラダの中に埋もれたことにではない。
千夜の反応に、だ。
「あ、す、……すまん」
更に唖然。これは朱里自身が特にショックが大きかった。
あの姉の口から蚊の泣き声のようなか細い声が漏れた。
しかも、顔は暑くもないのに不自然に赤らんでいた。

何故、と動揺する思考が疑念で埋め尽くされる。
無意識のうちに視線は隣の蒼助に移動した。
「――――……っ！」
そこに衝撃が待ち構えていた。
蒼助がきまずそうに視線を逸らした。
こちらもやや頬を赤くして。
バッと視線を姉に戻す。
以下同じ。
「……っ……っ……」
これは一体どういうこと。
パクパクと口が動くばかりで肝心の言葉が喉の奥から出てこない。
ようやく理解したもう一つの異なる朝の原因に気づいた朱里は考えた。

落ち着け朱里。
まず昨日を振り返れ。
起きた朝から夜寝るその瞬間まで、こんな空気は一瞬たりともなかった。
鳩に気を取られて公園で二人にしてしまった時だってそうだった。

いつだ。
一体、いつ変化が起き……、

ぐるぐる思考を巡らせていた最中にハッとした。
まさか、自分が惰眠を貪っている間か、と朱里は一気に核心に近づいた。
一晩の間に互いを意識し合うほどのことが起こったということ。
そして、一体何が起こったと言うのか。
若くてピチピチの無限大の想像力が考えを無限大に膨張させていく。

まさかまさかまさか。
このケダモノに押し倒されて悪代官も思わず平伏して崇めてしまうようなあんなことやこんなことを!?
あ嘘信じられない、そんなハードなプレイまで……！

二人が気まずい空気を生産し、一人が己の想像に勝手に慄く混沌の空気の中、
気遣いも遠慮もなく電話が鳴った。

◆　◆　◆

電話が鳴った瞬間、全てがゼロに戻った。
そして、その場にいた人間の注意はズレることなく同じものに集中した。
最初に動いたのは家主である千夜だった。
が、動いた拍子にコップが倒れ、中身の牛乳がテーブルの上一部と一面にぶちまけられた。
「あ、くそ……すまない、蒼助。出てくれないか」
「……俺かよ」
「イイから早く。向こうの言うこと一言聞いて切れるだけでいい」
「……」
知り合いだったらどうするのか、と思いつつもそこが千夜らしい捻じくれた部分だと無理矢理納得し言われたとおりにするべく席を立った。
ワイヤレスのそれを取り、
「はい、終夜です」
とりあえず、と思いこの家の苗字を名乗ると、
『あ、千夜……って違うね、誰?』
受話器を通して聞こえた声は覚えのある人間のものだった。

「……あの、下崎さんっすか？」
『……蒼助くん？』
向こうも思い当たったのか、確かめるように口にした言葉にそうですと肯定した。
『……えーと、どうして君がこんな朝から千夜の家にいるのかなぁ……』
「え……、あ、いや……ちょっといろいろあって……べ、別にやましいことはまだ何をしてませんよ誤解しないで下さいマジで」
『……まだ？』
こんなところで墓穴を掘る自分が我ながら恨めしくなった。
沈黙すると、耳に届いたのは笑い声。
『っふふ……ゴメンゴメン。そんなに必死にならなくても大丈夫だよ、変な風に捉えてないから。本当に何かしていたら私とこうして話していないだろうから」
さらりと恐ろしい事を言ってくれる。
「で、用件はなんすか。伝えときますよ。千夜？　ああ、今、家主はドジ踏んでその後始末でそれどころじゃないすよ」
ひゅん、と風を切る音がした。
瞬きの後、目の前には蒼助の顔すれすれのところの壁にぶっさり突き刺さったフォーク。
朝から血圧が下がる体験をした矢先、蒼助の耳に三途の声が届く。
『ああ、じゃぁお願いしようかな。お昼にウチの店に来るように伝えて』
「はい。じゃぁ……」
『あ、待って。それと……』
まだ何かあるのか、と切る寸前で押し留め、聴く。
『……君も、一緒に来てくれないかな』
付け足すようなその言葉を紡いだ声が、何故か背筋が凍るように

冷たく無感情に聞こえた。

［四拾参］　不感知の降り立ち（後書き）

二月入りました。一発目、その事後の朝（笑）
朱里、脳内妄想拡大。彼女のいうハードなプレイとは何なんかは作者である私ですらわからん（目を見て言ってみろ→ギロッ（睨む）

実際冗談抜きで最近の小学生は歳不相応なＲ指定なことばっか知っとります。
例の如くうちの妹なんか小学生五年生でＢＬやら１８禁の二次創作小説＆漫画をＷｅｂで読んでは私のお気に入りに入れていました。
三年寝かせた（漬物？）今じゃ、色んなもん取り込んで私よりディ～プな下層まで堕ちてしまいました。
親父はテレビで男優見るたびに「コイツはゲイだ」とやたら強く主張するし、母親もさりげにＢＬとか夢小説とか好きだし（主にジャニＪｒ．系）
従兄も一人はオタク。
ろくな人間いねぇな、ウチの家系。

うっかりウチの家庭事情に走って路線ズレましたが、戻ります。
更新に間が開きましたが、一月は充分更新したと思ってまだ書けないだろうなー、な先の部分をチョコチョコ書いていたからです。
おかげで一話分ストック補充。ほぼ終わりに近い部分なのであまり意味はありませんが。
来年受験生で推薦目指してコツコツやっているせいであちこちで穴が空きそうな更新速度ですが、可能な限り書いていくので、今後もよろしくお願いします。

［四拾四］　直前の語り合い（前書き）

惨劇の幕は切って落とされた

［四拾四］　直前の語り合い

午前十時。
開店早々から喫茶店『WG（ウィッチガーデン）』は“とある知人”を客として迎えていた。
その客は本日の最初に淹れたコーヒーをぐっと飲み、
「ぷはー、やっぱうめーなお前の入れたコーヒーは」
「誉める気があるなら飲んだ後にそれはやめてくださいよ。ビール飲み干したわけじゃないんですから」
ここ喫茶店ですから一応、と釘を刺し、三途は目の前の客を冷めた目で睨んだ。
「それと、店内ではその胡散臭いグラサンは外してください。客が逃げますし、何より私の気に障りますから」
「あからさまに本音後に持ってきて強調しやがって……だってぇ、これ俺のトレードマークだもーん。ポリシーポリシー」
「そんなポリシー、溝（どぶ）にでも捨ててしまいなさい」
素っ気無く切り捨て、三途は男の相手を片手間に自分の分をカップに注ぐ。
最後の一滴がカップの水面で跳ねるを見届けると、新たに切り出す。
「それで、今日は何の用ですか――――――志摩さん」
時々店の訪れるこの男。
名は志摩雪叢。
“かつての仲間”であり、星の予言を代弁する『星詠み』。
ただコーヒーのツケを増やしに来たわけではない、と三途の勘が告げていた。
問いを投げた相手はカップに口付けたまま。
喉をごくり、と鳴らして液体を流下させカップを置いた後、そこでようやく口を開いた。

「……この前、会ったよ」
「……誰にですか」
「惚けるなよ。お前が寄越したんだろ」
「ふふ、わかりますか」
「今、俺がまともに顔見せてるのはお前くらいだからな。……いや、それにしても驚いた。まさか、あそこまでそっくりとはなぁ……」
カウンターに肘を立て、その手の平に顎を乗せた志摩は視線を何処か遠くに飛ばして、
「綺麗になってたなぁ、外見(そと)だけじゃなくえげつねぇまでに中身まで似ちまったのはちと惜しいが。……ああ、一つ違ってたな……――あの微笑(わら)い方だけは“あの娘”のもんだ」
彼の言うそれは彼女が心の底から微笑う時のものだろう、と予想がついた。
直接ではないが、似ていると出された人物の影に三途は気分が若干白けた。
「ん、何だそんな面白くなさそうな顔して……ああ、そういえばお前……彼女のこと妙に嫌ってたよなぁ……あの人にはあんなに懐いてたのによぉ」
「だから、ですよ」
だからこそ、嫌いだった。
『彼女』は自分がどれだけ足掻いても辿り着けない地位を揺らぐことなく独占していたから。
そして、『彼』は自分がどれだけ慕ってもいつも心を占めさせていたのは『彼女』。
間に入り込む隙など微塵もなくて。
『彼』をそんな風にできる『彼女』がどうしようもなく羨ましくて、嫌いだった。
「ぶっちゃけ、千夜があの人にそっくりでよかったと思っていますよ。笑顔だって、千夜の顔であの女のそれを浮かべるなら全然気に

なりません」
「逆だったらどうしたよ？」
「例え外見があの女似でもあの人の子供です、何の問題もありません」
「……相変わらず至上主義だよな、いっそ清々しいくらい」
苦笑し、合間にコーヒーを一口含み、会話の中で渇いた口内を潤した。
香ばしさ立ち上る苦味に満足し、
「何とでも。私にはもう、千夜しかいないんです」
何気なく口にしたつもりだったが、その言葉は志摩の視線を落とさせた。
その言葉の意味が、嫌でも理解出来たから。
気まずさに三途も志摩から視線を外し、足元に視線を落とした。
沈黙が生まれ流れる中、志摩がぽつりと漏らした。
「……生きていたんだな、あのコ」
「……ええ」
「いつ、知った」
「二年ほど前に、あのコがこの店にやってきました」
あの時の衝撃は一生忘れられないと断言できる。
“殺されたはずの少女”が十四歳という成長を経て再び現れたあの日を、忘れられるはずがない。
「一生分驚いたんじゃないでしょうか、あの時は。後に、更なる衝撃が待ち受けてましたが」
何故か、男になっていたという衝撃。
下も脱がせて確認してチョップを脳天に叩き落された日が懐かしい。
「おいおい、目が危ねぇぞそこの変態女」
「万年不審者に言われたかありません。それと誰が変態ですか、誰が。あーもー邪魔です早く留置所に帰ってくれませんか？」
「まだ家と呼べるほど行ってねェ！」

あと何回くらいでそうなるだろう、と考えていると、
「それはそうと、あのコのこと……知っているの、仲間内で何人いるんだ」
「私と、貴方……それと、黎乎（れいこ）さんと……くらいでしょうか」
「他の連中は知らないのか」
「おそらくは……私も貴方と黎乎さん以外とは失踪以来、連絡とってませんから」
「ふぅん……まぁ、土御門の狸爺あたりはこっそり勘付いてそうだが。おお、そういや、ジジイの孫は上京してこっちで暮らしているらしい。朝倉の石頭のとこの双子の……息子の方と一緒にな。前に気になってその二人通ってるっつー……なんつったからな、月なんとかっていう私立高校なんだが……」
その刹那、三途の思考は停止した。
そして、無意識のうちに口から呟きが漏れた。
「……月守学園」
「あ、それだ！　あー、すっきりした……あと、玖珂のとこの放蕩息子と早乙女の末息子、それと矢代（やしろ）の姪もそこにいるらしいぜ」
「……そう、ですか」
動揺を見抜かれないよう笑顔を崩さないことに心がけ、なんとか応対の声を絞り出した。
「何の縁なのかねぇ……あの頃一緒にいた奴らの血筋がまた一箇所に集まり始めてやがる……必然か偶然か知らねぇがよ」
必然か偶然か。
付け足されたその言葉が三途の中に落ちて大きな波紋を描いた。

――――――ねぇ、千夜をまた高校に入れるんですってね。

数週間前の三月終わりの頃、“あの一件”以来何処か何をしていても表情に陰が目立つようになった千夜を立ち直らせようと新たな環境に入れようと考えた。

そう、転入だ。
しかし、都内に私立は腐るほどあるが、腐るほどあるのはどれもこれも内側が腐った学校ばかり。
裏口入学、テスト問題流出などを未だ摘発されず腐り続けているものしか出てこなくて、行き詰っていたところにあの女はいつものように神出鬼没に現れ、

――――――お困りのようだから、助け舟出してあげる。あら、遠慮しなくて良いのよ？　いやぁねぇ、何も企んでなんかいないわよ失礼ねいいから聞くだけ聞きなさい。渋谷地区にある私立高校なんだけど、ほらちょっとマウス貸して……あ、これこれ。この学園、どう？　汚い噂も裏もない。なかなかユニークな祭りごとも多くて楽しそうじゃない？
ここならあのコもすぐに馴染めそうじゃない、ねぇどうかしら？

見せられたとある私立高校のホームページ。
名は月守学園。
ぞくり、と背中に妙な寒気を感じ、小さく震えた。
偶然かもしれない、彼らの血縁がそこに集ったことは。
だが、そこに千夜が放り込まれたのは？
「……おーい、三途ー……戻って来いよ、うりゃっオレ流心臓マッサーずぼぉっ！」
もにゅ。
胸部の膨らんだ左の片割れに不自然な圧迫がかかると同時に三途の手はいつのまにか手にした拳銃の底で打撃音を奏でた。
「はっ……あれ、何倒れてんですか志摩さん。あ、口の端切れてますよいつのまに」
「このアマ、無茶苦茶白々しい気遣い顔でそれを問うか……つぅ～……容赦なく殴りやがって、傷痕ついたらどうしてくれんだ」
「……男が上がる？」

「何で疑問系なんだよ……もういい、これ以上傷が増える前に俺はここらでおいとまするぜ」
「コーヒー代は？」
「またツケといてくれや」
「払う気あるんですか貴方……」
ははは っ諸君また会おう、と手を上げポーズを決めて誤魔化し去ろうとするのを白い目で見送っていると、彼はドアを開けた手前不意に真摯な目を乗せた笑みを浮かべ、
「三途、その銃は殴るだけならいいが、撃つ時は一人突っ走って早まんなよ。じゃねぇと、痛いしっぺ返し喰らうぜ？」
「……どういう意味ですか？」
「コーヒー代がわりの忠告だよ」
ドアが閉じ、ベルの音を残して志摩は去った。
三途は手にした拳銃を見つめ、苦い何かをかみ締めるように目を閉じた。
かの時間は、もうまもなく迫っていた。

◆　◆　◆

店を出て数メートル先、行き交う通行人に紛れて歩行を進めていた足を、路地裏前で止めた。
「よぉ、行ってきたぜ」
路地裏の日の届かない薄暗い奥から声が問う。
「それで？」
「一応忠告はしたがね。ありゃ、ダメだ。やるよ、アイツは。昔からそうだ、自分に自信がないくせにそうだと思ったら何と言われようと梃子でも考えを変えようとしねぇ頑固な奴さ」
「相変わらず、馬鹿な子ね」
「そういうもんさ。人間って奴は変わったと思っていても実際根っ子のところはなかなかな……アイツがそうであって、俺はホッとし

ているんだが」
「それはアレの母親を思い出すから？」
切り出された話に志摩は不快そうに顔を顰めた。
「……アンタ、本当に何処まで知ってんだ？」
「さぁ？　それより暫く、貴方はここで私達と居て。その時になったら一緒に来てもらうから」
「おい、止めないのかよ」
「無駄だって言ったのは貴方じゃない。好きにさせておけばいいわ、どーせ殺せやしないんだから。少しここらで鼻っ柱折ってやればちょっとは改善させれるんじゃない？」
「……見殺すなよ」
「そんな怖い顔しなくても大丈夫よ。こんなところで死なせはしないわ。――――アレも大事な役者の一人なんだから」
ふと言葉を区切り、声が止んだ。
「ん？　どうした」
「……やっぱり、ちょっとお使い行ってきてくれない？」
お使い～？と怪訝な表情をする志摩に声は続ける。
「簡単よ。この先に続いている通りをあの曲がり角まで歩いてくればいいの。ね？　お・ね・が・い」
その闇から聞こえる甘い声で紡がれた『お願い』に志摩はデレッとするどころか顔を引き攣らせるしかなかった。
何故なら本能的に嫌な予感しかしなかったから。

［四拾四］　直前の語り合い（後書き）

またやってきましたよ奴が。
期末テストの奴が！（笑）
またスピードが落ちるかも知れませんが更新は続けます。
せめて盛り上がりまで行きたい……。

［四拾伍］　午前の再逢

正午近く、蒼助は渋谷の道のど真ん中で何故か人を殴っていた。
血反吐を吐きながら飛ばされていく男を見ながら思う。
何故こんなことになったのだろう、と。
事の始まりは十分程前を遡る。

◆　◆　◆

晴天の空の下の渋谷の街を蒼助は千夜と二人で歩いていた。
喫茶店『ＷＧ』の店主、下崎三途に店に呼ばれてその当本人のもとに向かっている。
約束の正午に近づいてきたので、一緒に行くと騒いだ朱里を千夜が宥めて説得し、何とか留守番を押し付けて千夜宅を出た。
「……」
「……」
家を出てからというものの千夜と蒼助の間に会話は一切なかった。
それどころか視線すら交わらせていない。
今朝の千夜の過剰な反応、否、昨夜の一件以来気まずい空気が絶えず互いの周囲に立ちこめているせいで。
……嫌われたか？
蒼助は一つの可能性を思い浮かべ、それはないと直後に切り捨てる。
断言、とまではいかないが否定は出来た。
勢い余った告白に対する千夜のあの反応があったからだ。

その問題の瞬間は一晩経った後も鮮明に脳裏に映し出せる。

……にしても可愛かったなぁ。

元は男でもあんな顔できるのか、と別の感動もあった。

衝撃から立ち直れず一晩を濡れたまま浴室で明かしてしまった。

おかげで、

「っ、ぶぇっくし！」

飛び出てきそうな鼻水をなんとか鼻孔内で押さえつつ、啜る。

寝津が引いて体調を持ち直したかと思ったら、本当に風邪をひいてしまったようだった。

「風邪……引いたのか？」

「ん……おお、ぶり返しちまった……まったく、意味ねぇよな……、」

蒼助のそれは反射的な行動だった。

話す相手に向き合う。どんな人間にも最低限身につけられているはずのマナーだ。

それが彼の背を押した。

「……あ」

千夜が蒼助を見上げていたのだ。

視線が交わった彼らは家を出て初めての互いの直視に言葉を失い、静止した。

動かせない目。動かない目。

蒼助はかつてこれほどまでに行動することに迷いを抱いたことはなかった。

しかし、蒼助が迷いを払うまでもなく次は促された。

連結しているかのようにがっちりと嵌まっていた視線の交わりは、千夜によって崩された。

断ち切るように目を逸らし、そっぽむいてしまった。
だが、蒼助は見逃さなかった。
顔を背ける直前の瞬間の千夜の頬が赤らんでいたのを。

……やっぱり、

確信に近いものを得られそうになったところで耳が騒音を聞き取った。
「あん？　何だ……げ」
思わず語尾が濁った。
思考を中断させたその騒音の元の方角へ目を向けると、そこでは大体予想範疇の事態が起きていた。
見るからに柄も素行も悪そうな若者の数人の集団に男が一人の中年に袋叩きを見舞っていた。
複数が一人を痛ぶる、なんて光景は渋谷では昼間も夜も珍しい光景ではない。喧嘩なんてものは特に。
問題はそこではないのだ。
注目すべきなのは、間間から姿が見える複数の標的となっている中心のサンドバックの方。
くたびれたコート。胡散臭いサングラス。
思わず目を背け、現実逃避に入る。
何で。どうしてこういう時に限ってこんな。
運命の女神とやらがいるなら何が憎くてこんな仕打ちを自分に課すのか。
不運に浸っている場合ではない、となんとか立ち直り、厄介事に気付かれる前にさっさと通り過ぎようと千夜に進行を促そうとするが、
「何だ、喧嘩か。行こうぜ、千――――ってオイ待て」
さりげなさを装うという注意は千夜を見た一瞬で吹っ飛んだ。
既にその足は渦中へと歩き始めていたから。

慌てて蒼助は二の腕を掴み、引き止める。
「コラコラっ、ナニしてんだよっっ」
「何って、ちょっと」
「行ったら、ちょっとじゃ済まねぇだろお前の場合。――連中が」
この場合、危険なのは千夜ではないのはもう考えるまでもない。
「真っ昼間からこんな通りで堂々と人殺すほど阿呆じゃねぇよ。約束の時間に遅れちまうだろ、あんな胡散臭ぇオッサンにかかわって時間浪費はよせよ」
「生憎そのオッサンは――――知り合いなんだって言ったらどうする？」
目眩がした。

◆　◆　◆

後ろから声を掛けられ振り向いた直後に吹っ飛び、コンクリートの地面に投げ出された仲間を見て不良達は一瞬唖然とし、すぐに表情に敵意を満たした。
「っトシオ！　てめぇっ」
「いきなり何しやがる！」
ごもっともだ。
だが、自分等だってそういうことは頻繁にやらかしているだろうに、と冷めた視線で蒼助は応戦する。
「おい、大丈夫か。志摩」
「つつっ……おー、嬢ちゃんか。まさかこんなところで会うとはな……あー痛ぁ……」
不良の相手をする蒼助の傍らで千夜と男の会話。
そこからわかる双方の認識。しかも千夜は蒼助は知らない名前まで知っているようだ。
本当に知り合いだったのか、と蒼助が抱いていた半信半疑だった

気持ちが消える。
「オイ千夜」
「何だ」
「手ぇ出すなよ。悪魔で自主的に退場させるまでの相手するだけなんだからな」
「ええ～」
明らかな不満が伝わってくる声だ。
無視して注意を不良一同に向ける。
「……あー、まー俺としては本当は全然ヤル気なかったんだけど、じゃないと警察沙汰は免れないんで。適当に付き合ってくれや。んじゃ、ヨロシク」
言いきった瞬間に放たれた拳があった。
おいおい間髪無しかよ気ぃ短ぇな、と思いつつ何気に結構火がついた自分も人の事言えないかと嘆息。
左から来た第一弾を己の左手で受け止める――――素振りをして滑らすように受け流す。
そのまま相手の腕を伝い、カウンターが打たれた。
「ぐぴっ」
真ん中目掛けて打った拳が顔の中心部の突起の砕ける感触を伝える。
「ひがぁぁっ！　はぁ、はひゃぐぁ……はひゃがぁ……っっ」
陥没した鼻らしき部分を押さえながらどぼどぼと血を撒き散らす様をつまらないものを見るような目で一瞥して、
「げ、服に血ついちまった……てめ、これから人に会いに行くんだぞこのモブ野郎」
やや理不尽な怒りを向けられた男は痛みに苦しんでいるところを脳天に踵を落とされ、撃沈した。
白目を向いて離脱した仲間を目にした不良達は戦慄した。
各々がこの男は危険だ、と動物の本能で察していた。
繰り出した拳の速さと俊敏さ。そして、容赦無さ。

相手が悪過ぎると、誰もが我が身可愛さを優先してこの場を退こうと考えていた。
が、例外はどんな時どんな事に置いても一人はいる。
くだらないプライドを捨てられないうちの一人がなんとか優位に立ち逆転出来ないかと思案していた。
すぐにそれは見つかった。
そして、行動に出た。
それが逆に悲劇を招く事とは知らずに。
「っ動くな、テメェの女がどうなっても知らねぇぞっ！」
グラサンと話し込んでいた千夜を背後から羽交い絞めにし、蒼助に見せ付けるように拘束をしてみせた。
それを見て蒼助は青ざめた。別の意味で。
「ば、馬鹿っ！　人の苦労を何だと思ってんだ！　早くソイツから離れて逃げろっ！　お前らもその馬鹿ひっぺ剥がしてどっか行け！！」
急に必死になった蒼助の様子を見て男は勝機を得たと勘違いし、高らかに言い放つ。
「ごちゃごちゃワケのわからねぇことを言ってねェと言う事聞きやがれ！　命令するのは俺だっ！！」
「だぁぁっ、このわからんちんがぁっっ！！」
ちっとも先に進まない言い争いに先程までの緊張感がギャラリーからも雰囲気からも消えていく。
が、それも次の瞬間一気に跳ね上がる。

「――――ひぎっ！？」

跳ね上げたのはつい先程まで自らが優位に立ったと信じて止まなかった男。
まるで豚の鳴き声のような悲鳴を上げた。そこに驚愕を入り混ぜて。

彼に相対する者はまだ何もしていない。
ただ、一つ変わったのは人質の千夜の片手が拘束する男の手首を掴んだことのみ。
げっ、と蒼助は顔色を蒼白させる。
しかし、異変に気づいたのは彼一人ではなく、
「……おい」
いつのまに移動してきたのか、蒼助の隣に現れた志摩が確認するように聞く。
「なぁ、あれって……」
「……ああ、間違いなく」
握り潰してる。
そう確信せざるえない不良の苦痛によって声も出せず涙と鼻水だらけの顔。
「なぁ、玖珂。手を出すな、とさっき言ったが……」
女の掌で掴みきるには無理がある太さの手首が、“それが可能なほどにスリムに”なっていた。包み込むようにかかる多大な負荷によって。
そして、
「――――これは立派な正当防衛だから、いいよな？」
返答を待たず千夜の手に一気に力が込もった。
「っっぎゃあああ――――」
「煩いな。喚くなよ、たかが手首を砕かれたくらいで」
その反応が大袈裟だと言うように呆れ、千夜は泣き叫ぶそれをさっさと投げ飛ばした。背後の壁に頭から激突するように。
ピクリとも動かなくなったその身体を一瞥し、唖然とするの残った不良達に視線を向け、笑った。
酷く嗜虐的に、
「さて、お前らに選択肢をやろう。負け犬らしく大人しく尻尾巻いて撤退するか、このまま悪足掻きなんていう愚劣で矮小な考えに身を委ねて歯向かうか。前者ならとっとと家に帰って布団に包まって

部屋の隅で今日の事を反省しろ。後者なら……仕方ないな、私も正当防衛せざるえまい……正当防衛だからな、悪魔で」

そして、彼らが選んだ道は――――

◆　◆　◆

「いやー助かった、礼を言うぜお二人さん。参ったねーちょっとぶつかっただけなのによ。最近のガキどもは短気すぎるぜ」

参った参った、と笑う。来るまでに散々いたぶられたのか、志摩の顔にはあちこち青痣が出来ていて、口端が切れて血が滲んでいる。

「まぁ、アンタは身なりからして親父狩りにゃ格好の獲物だからな」

「しかし、まぁひどくやられたもんだな。口切れてるぞ」

自分の口端を指差す千夜の示しに、志摩は「ん？」と模倣するように己のそこに触る。

「ああ……これは違う。別にところでやられてついたんでな……あてて」

ぺろりと撫でるように舌で触りツキンとした染みるような痛みに志摩は眉を顰めた。

蒼助が呆れたように言う。

「おいおい……他のところでもやらかしてたのかよ」

「いやいや。喧嘩じゃねェ。ただ……俺は不器用なんでな、大事にしたい相手にはそうしたいんだが……上手く行かなくていつもこうなるのさ」

その時、サングラスの奥が光の加減で一瞬だったが見えた。

飄々として掴み所のない様に隠れた本来の男の一面が。

呆気に取られ、その間に反射に紛れてそれがまた隠れてしまう。

「けど、短気すぎると思わねぇかい？　気分が沈んじまってるみたいだったから気ぃ使って、気分を和ませようと胸部にマッサージか

けただけなのによぉ」
「警察呼ばれなかっただけマシだと思えよ、この猥褻物め」
気のせいだったと、蒼助は先程のこと全てを一瞬で無に還すことにした。
それにしてもコイツに好かれた女も災難だな、と此処にはいない見知らぬその相手に同情を抱いていると、千夜がしている“とある動き”に気づく。
「って、お前何してんだ！」
ふんふんと、顔――――もとい鼻を近づけて志摩に触れんばかりに接近していた千夜を慌ててひっぺ剥がす。
「馬鹿か！　不用意に近づくな、胡散臭さ漂う得体の知れない菌が移ったらどうする！！」
オイ、という物申したげな志摩を無視して、千夜の弁解を聞く。
「いや、志摩からなんか覚えのあるコーヒーの匂いがしたから」
「したから？」
「気になった」
「……」
誰かこの女に大規模の意識改革してくれないだろうか、と一瞬の本気。
「なぁ、志摩――」
「おっと、わりぃな。これからちょっと用事があるんでここらでおいとまさせてもらうぜ、じゃなお二人さん」
何かを問おうとした千夜が発した言葉を遮り、志摩は颯爽とかつ胡散臭い「スタコラ」な仕草ですれ違うように去ろうとした。
その時、
「――――」
すれ違いざまに耳の近くで発された言葉。
かろうじて蒼助のみが聞き取れるような、小さく抑えられた声。
その一瞬の後、振り返る。
志摩は何事もなかったように歩いていて、徐々にその姿は遠くな

っていく。
「どうした、玖珂」
千夜の声で我に返り、蒼助は志摩から目を離した。
「いや、なんでもねぇ」
「そうか？」
「ああ……それよか、さっきなんて言おうとしたんだ？」
「ん？　何がだ」
「何か聞こうとしてただろ」
すると千夜は思い出したかのように、ああ、と呟き、
「あれは、香った匂いが三途のところのヤツのそれに似てたから、ひょっとしたら店からの帰りだったんじゃないかと思ってな」
ふーん、と受け応える中、蒼助は一つの事を察した。
先程、一瞬垣間見えたかもしれなかった男が物憂げに思った相手が千夜の言うとおりだったとしたら下崎三途かもしれない、と。
千夜に相次いで、今度は下崎三途か。
あの一見胡散臭い中年男は一体何者なのだろうか。
「そういえば、玖珂。お前、あの男と面識があるみたいだが」
見抜かれていたようだ。
「ああ……知り合いと言っていいかは微妙だけどな。そういうお前だってあのおっさんとどういう経緯で知り合ったってんだ？」
四十過ぎの中年と女子高生。組み合わせは客観的に見れば、見事に援助交際が成立する。
実際、まさかそれはないだろうと切り捨て思う。
事実であったら今頃あの男は生きていない。
「少し前に知り合いのつてであの男の力を借りたんだ。なかなか本音が見えないが、自身の異能に関してはプロフェッショナルだ」
「異能？　ってことは……アイツも？」
「勘当喰らったみたいだがな。星詠み、というらしい」
「星詠みぃ？」
「万物を巡る大いなる星々から未来やら過去やら、世界の何処かで

起こった事すら聞き出すことが出来る、そういう力だそうだ」
電波みてぇ、とあんまりな感想を抱いていて、不意に思考に差し込むように鋭く何かが入り込む。
それは先程の、志摩が残した言葉。

『銃と女の誘いに気をつけな』

あれは、

「玖珂？」
呼ばれて向くと、そこに千夜はなく。
いつの間にか、二メートルほど先を行って、振り返り立っていた。
「何をボケッとしているんだ。行くぞ」
「あ、ああ」

煮え切らない思考を振り切るように蒼助は千夜を追うように歩き出した。

［四拾伍］　午前の再逢（後書き）

テスト期間ラスト一日を前にして我慢できなくなったので、自分を追い詰めつつも更新です。
最近ふと自分を振り返ると、ここに登録したのって高校一年の夏なんですよね。そんな私ももうすぐ私も受験生。しみじみ時の流れを実感しつつ、文芸部に入りたいと思うこのごろ（関係ねェ
そんで、連載増やすの嫌で書けない鮮血ノ月第二部の序章を書きたいなぁと思いまして。名前だけが本編にちらほら出てたり、中年になっちゃってる方々の二十年前の話です。
ちなみに更新遅れている理由が、そっちに手ェ出してるのが原因だったり。
第二部についてはまた後ほどにして、それでは。

【四拾六】　魔女の誘い

「や、思ったより早く来たね。――――入って」

と、会いに来た本人――――下崎三途に迎えられ、店へと入る。

店内には全く人がいない。それも当然。日曜の今日は『喫茶店の』定休日なのだから、いるはずがない。

「で、わざわざ日曜の麗らかな日和に人を呼びつけて……何の用だ？」

「私、一応キミの雇い主なんだけど、ね……」

とても従業員とは思えない不遜な態度をとる千夜に呆れ苦笑い。

このやりとりがこの二人でなかったら「クビ」との一方の突きつけで雇用関係は一撃で破砕するだろう。

というか、こんな雇用関係はここ以外では絶対に在りえない。

「コイツも呼んだということは、人手がいるようなこと押し付ける気なんだろう」

「ご名答。さっそく――――」

「帰るぞ玖珂」

最後まで言わせてたまるかと言わんばかりに千夜は颯爽と蒼助の腕を引っ張って店を出て行こうとするが、突然静止した。

「おい、どうした？」

怪訝そうに蒼助が伺うと、千夜は険しい表情で、

「オイ」

「なんでしょ？」

「結界を解け。出れん」

「ダメダメ。ちゃんと働いてもらわなきゃ……この前あげた太刀の代金代わりに、ね」

「……俺が呼ばれたのも……それっすか？」

「もちろん。あげるとは言ったけど、“タダ”なんて言った覚えは

ないけど……？」
それは確かにそうだが。
「……性悪女め」
全くもってその通りだが、そっちも人のことは言えないだろ。
心底そう思っても口にはしないのは基本だ。
三途はチェックメイトと言わんばかりの笑顔を顔に乗せて、
「さ、よろしく頼むよお二人さん」
魔女は柔らかくも強かに微笑んでみせた。

◆　◆　◆

三途に案内されたのはカウンターの奥に取り付けてあった扉の向こう。
数多くのカップが並ぶ棚の横にひっそりと隠れるように存在していたその一枚の扉を三途は先導するように後ろに蒼助と千夜を控えさせ、開ける。
踏み込むと奇妙な光景があった。
「……って、また扉……？」
長い一本通路があった。
外から見た建物外観からは不可能なほどの長さの。
そして、両脇にはいくつもの板チョコ模様の扉が並んでいた。
その一つ一つの中央には全て異なる表示が刻まれたプレートがはめ込まれていた。
「自宅……倉庫……資料庫……書庫……廃棄室……何すかコレ……つーか、この一本通路、店の構造的に有り得なくありませんか？」
「この建物の中は私の魔術で創った擬似空間と入れ換えてあるんだよ。つまり、全て私の思うままに作り変えてあるわけ」
「……マジで？」

だとしたら、溜息をつくしかない。
魔術で空間を丸ごと入れ替えるなり、自身で空間を創るなり。
まるで神の如き御業。そう、神業だ。
なんて、デタラメな――――
「……可愛い顔してすげぇえげつねぇな」
「だろう？」
ぼそり、と隣接し合う二人は互いに言葉を交わす。

「じゃぁ、まずは倉庫の商品の整理をお願いするよ」

えげつない女はそれを一片も見せない笑顔で振り向いた。

◆　◆　◆

絶景。
倉庫の中は一種のそれと呼べるものだった。
棚に並ぶ全てが奇怪かつ神妙不可思議な雰囲気を漂わせる品ばかり。
札だらけの壺。インディアンの生首。ヨーロッパの美女が彫られたカメオ。不気味なフランス人形。丁寧に飾られた見事に織り上げられた着物。古びた香炉。
「そして何で……人体模型？」
壁にひっそりと寄り添い立つ人体模型。
怪しい品々が並ぶ中で一際怪しく浮いているその存在。
そして、異様に目を惹く。
「それは表の商品だ。なんでも区内の小学校から注文されたらしい」
古びたいかにも骨董品という味を感じる壺を擦り拭く千夜は視線はそのままで答えた。
喫茶店の他にも表向きにしている仕事があるのか、と問題の人体模型を思わず蒼助はジッと見入る。

昔から思うが、見れば見るほどこの物体は不気味だ。
よく展開された中身が動き出しそうだと何度も――――
「って、動いてるしッ！？」
「何でも知り合いの魔術師兼理科教師の特注らしくてな。二度と破壊されないように予防として怪談が自然と発生するような仕込みをしてくれと言われて、その動いてる部分は錬金術で動物の臓物を素にして作った触ると動く人工肉にしたんだと」
つまり表向きの裏商品ということ。
ピンク色の内臓のリアルな動きに退きつつ、蒼助は素朴な疑問を口にした。
「下崎さんって……本業なんなんだ？」
ある時は喫茶店『Ｗ・Ｇ』のマスター。
ある時は『ＳＨＯＰ』の店長。
そして、またある時は日本に隠れ住む凄腕魔術師。
その実態は一体なんなのか。
「本業ねぇ……実質的に稼いでいるとしたら間違いなくこっちだろうな」
「こっち？」
「ネット通販」
何故に、と魔術師の肩書きとの組み合わせに生じる違和感（みすまっち）に動揺しつつ、
「守備範囲はネットワークが通じるなら何処までも。金さえ払うならマフィアだろうが秘密結社だろうが得体の知れない個人だろうが誰だって客だ。所謂、裏商人だな」
「裏商……」
不思議と全然違和感がない。
むしろそ何の疑念もなく受け入れられる。
魔術師の豊富な知識を活かして、曰く付きの品を扱うのは有意義な選択だろう。
「オイ、玖珂。いつまでも眺めていないで手伝え。特別手当もらえ

ないぞ」
「あ、ああ……っと」
千夜の元に歩み寄ろうとして、ふと視界に入った『モノ』があった。
黒猫の置物だ。
片目が深い紫（パープル）のオッドアイ。しなやかな細身の体躯で座り、蒼助をその吊り上がった双眸で見据えていた。
目が合った瞬間、ゾクリと背中に寒気が走る。
「っ、……よく出来てるな、ホンモノみて」
「ホンモノだよ」
置物が声を発した。
「っっっっぎゃぁぁっ！！？」
ギョッと目を剥き、蒼助は物凄い勢いで後ずさり、後ろの棚にぶつかった。
置物であるはずの黒猫は煩わしそうに首を振り、四本の足で立ち上がる。
「五月蝿いな……猫が喋ることがそんなに珍しいことかね、こっち側の人間が」
「ば、馬鹿ッ！　それとこれとじゃ話が別だっっ……ってお前ナニ？」
どうやらこの黒猫は置物ではなく本物らしい。
商品ではないかどうかはおいておくとして。
「――――クロ。そんなところで何してるんだ」
壺を拭きながら蒼助の叫び声を聞きつけてやってきた千夜が黒猫の名を呼んだが、猫は嫌そうに拒否反応を示す。
「クロいうな。僕の名はB（ブラックスノー）・Sだ、B・Sっ！」
「いちいち細かいな。いいじゃないか、呼びやすくて」
「定着して本名忘れられる危惧があるから必死なんだ！」
言葉から必死さが伝わる黒猫――――B・Sの訴えを無視して千夜は蒼助に向き直り、

「玖珂、コイツは三途の使い魔だ」
「使い魔？」
「魔術師が契約して従わせるカミ様だよ。二種類あってな。主従関係を結んで下僕にする動物上がりの若いカミ。何らかの条件を呑んでもらって協力関係を結ぶ上位のカミ。お前は前者だったな？」
「ちょっと違うけど……そうだよ」
B．Sは何処か投げやりに言い捨てると疲れたようにそっぽ向いた。
「そういえば、何でお前こんなところにいたんだ？」
「昼寝。商品の霊気に満ちてて僕には居心地がいいからね。キミらが騒いでるおかげですっかり目が覚めちゃったけどね」
「そりゃ悪かった、代わりといっちゃ何だが――――邪魔だからどっか行け」
「何の代わりだよっ！！　喧嘩売ってんの、キミは！？」
「はいはい。イイコだから向こう行ってましょうねー」
千夜は全く取り合わずニャ―ニャ―騒ぎ立てる黒猫を部屋の外に放り出すとドアを閉めた。
まったく、と一息付いた時、頬を何かが掠める。
トン、と目の前の扉を節だった手が付いていた。
それが誰なのかなど考えるまでもなく、

「――――で。水入らずになったところで、聞きたい事があるんだがよ」

思いのほか至近距離で聞こえた真剣みに帯びた声に千夜の心臓の鼓動が跳ね上がる。
振り向けず、硬直した千夜は急激に渇いた喉を絞った。
「何を……」
「決まってんだろ。――――聞かせろよ、昨日の返事」
その言葉が昨夜の一場面を千夜の脳裏に甦らせた。

「返事って……冗談だろ？」
嘘付け、と心の中の自分が悪態づく。
本当はわかっているくせに、と。
そんな千夜の心中に同調するかのように、蒼助はせせら笑う。
「冗談？　……そりゃそっちの方だろ。んなわけねぇだろ、誰が告白なんて青臭い真似、冗談なんかするかよっっ」
背を向ける千夜の肩を掴み、蒼助は振り向かせた。
視線が噛み合ったまま離せなくなる。
「冗談なんかじゃねぇ。俺は本気で言ったんだ」
本気で。
それは嫌と言うほど伝わる。
言葉からではない。
自分を見据える蒼助の双眸に宿る光が一点の濁りもない。
「だから……返事って、どうしろと言うんだっ！」
ずるずると引き摺りこまれてしまいそうな感覚を振り払うように千夜は声を荒げた。
「熱でどうかしていたんじゃないか？　じゃなきゃ、高熱でどっか脳をどっかやられたんだ。腕のいい脳外科の医者を紹介してやるからとっとと正気に戻れよ」
「どこもおかしくなってねぇよ。大分前からずっとこうだ。お前と初めて会った時から……」
つっても自覚したのは江ノ島でのデートの後だったけどな、と苦笑する蒼助の言葉に唖然とする。
そんな前から、それなのに何もしないでいたのか。
パクパクと口を震わせ、それでも気力を振り絞り反論をぶつける。
「お、おかしくないわけあるか！　私は、俺は……男だぞっ！？　男同士で……同性愛は別に否定しはしないが……それは他人の問題ならの話でっ」
「お前何言ってんだ？」
落ち着けよ、と妙に冷静に言ってくる蒼助に腹が立ち、興奮は収

まるどころか一層憤り、
「落ち着けだと!?　同性愛強制されて落ち着けるわけあるかっ！　大体、お前女が好きだったんじゃないのかっ？」
「ああ、好きだぜ。至ってノーマルだ」
「じゃぁ何で……」
いやだからさ、と蒼助は呆れたように眉を顰め、
「お前、“女”じゃん。何もおかしかねぇよ」
「……」
確かにその通りだった。
今の千夜は紛うことなく女だ。
だから、蒼助がいくら好きと主張してもそれは同性愛にはなりえない。
蒼助は“女”が好きなのだから。至ってなんらおかしな点はない。
「……納得したかよ」
「……」
無言の返事。
全く、とでも言いたげに蒼助は溜息をつく。
まるで自身の方が不思議で仕方ないとでも言いたげに。
「正直、今考えても信じられねぇだがな。女に、しかもこんな、お前みたいな一癖も二癖もある女に惚れたなんてよ……まともなトコなんか顔以外ねぇっつーのに」
「はん、だったらやっぱりお前の頭がおかしいということだろう。病院に行け、病院に」
「おかしくなったとしたらお前のせいだろうよ……お前以外有り得ねぇ」
熱の籠った息を込めて出された蒼助の言葉に不意打ちを喰らったように心臓が跳ねた。
動いた手が流れるような後ろに結い上げられた黒髪を蒼助は一房

掴み取り、口付ける。
「聞かせろよ……まだ誤魔化すつもりなら、出来ないようにもう一度言うぞ」
くん、と気を惹く程度の痛さを感じない加減で手が内に収めた千夜の髪を引く。
「千夜……俺は、お前が……」
「っ……」
聞きたく無い、と思えど金縛りあったかのように両腕は動かない。耳を塞ぐ事は出来ず、せめてとただギュッと眼を瞑った。
「……」
「……」
言葉は途絶えたかのように続かない。
目を開けると、蒼助は息が詰まったかのように苦しそうな顔をしている。
少しして気を取り直すように、
「っごほん。……俺は、お前が……お前が、……す」
まただ。
肝心の域に達しようとすると行き詰まる。
さすがに様子がおかしいと気付いた千夜が伺うように蒼助の顔を覗き見ると、
「っっだあぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」
突然絶叫しながらぐるりと反転し、背を向けたかと思えば頭を両手で掻き毟りながら再び絶叫。
衝動に駆られたようなワケのわからない行動に千夜が呆然として見守っていると、脱力したように蒼助はその場にしゃがみ込んでしまった。
「……ちくしょー、ダメだぁ……やっぱ、場の勢いとかねぇとダメなのかぁ……」
頭を抱えてブツブツと呟くその背姿を見つめるしかない千夜はいつ復活するのかと遠巻きに眺めていると、

「……よしっ！」
何が「よしっ」なのか、と思っていると瞬く間に蒼助が再び千夜に迫ってきた。
両肩をガッシリ掴まれ、
「やめた」
「は？」
「言葉で言うのは止めた。だから行動で示すことにした」
と、言うなり千夜の顔に己のソレを寄せる。
それが何を意図した行為なのか嫌でも理解できた。
「ちょ、ちょっと待てっ……何をトチ狂ったっ？」
「何処が」
「何処がって……もう一度言うんじゃなかったのか！？　何で、いきなり……っっ」
「だから止めたっつってんだろ。こっちの方が早い。わかったらいい加減黙れ」
「……わかるかっ！　カラダが女になったからって中身までつられてなるなんてウマイ話があると思ってんのか！」
「うっせぇな……いいじゃねぇか、今更だろ。出会い頭で一回お前からしてきたくせに」
「状況を振り返れっ！　アレはキスじゃない、絶対違……っあ」
あ、そうだった、と一瞬でも納得しかけた思考を正気に戻すように横に振っていた首は顎を掴まれたことで静止をせざるえなくなった。

「千夜……」

熱の帯びた声で名前を呼ばれ、背筋に何かが走りゾクリとした感覚を覚えた。
固定された視界に映る蒼助が普段知る姿とはまるで違う妖艶さがあった。

それを直視した瞬間、思考の一切が麻痺したように動かなくなる。

昨日の夜に見た、想いを怒涛の勢いで告げた時に見せられた片鱗だった。

そして、今もまた昨夜のあの瞬間のように魅了されたかのように内側の全てが停止した。

徐々に縮まる距離にも先程までの焦燥感も拒否感も嘘のように消えてしまい、

「ぁ……」

か細い声が二人の僅かな距離を割り入るが、溶けるように消え意味はなかった。

極限に迫り、二つの息が重なり合う――――瞬間に閉じていたドアが外部から開けられた。

瞬間、二人は秒速の速さでその方を振り向いた。

二人きりの密室を外部から割入った人物は自身が目の当たりにした光景に一瞬だけ固まり、

「……え、と……」

何を口にすればいいかわからなくて困った、という風貌で苦笑しながら、

「……お邪魔だった？」

気まずそうに目を逸らして一言。

呆然としていた千夜と蒼助はその体勢のまま我に返り、慌てふためいた。

「しししし、し、下崎さごぶっ」

「さ、三途っ……誤解だ、別に私たちは」

「……あー……それより、そこの彼がスゴい痛そうなんだけど」

気にするな、と千夜は腹を押さえて踞る蒼助を捨て置いた。

「じゃぁ、蒼助くん借りてもいい？」

「ああ、煮るなり焼くなり好きにし……は？」
突然の言葉に素通りしかけたところを踏み止まり、千夜は目を瞬かせ三途を見た。
三途はレンズの向こうで微笑み、
「ちょっと、コーヒー豆の追加を買いに行こうと思ってね。力仕事に男手がいるんだ……いいかな？」
三途が見遣った当の男手たる人間は今だ踞ったままだった。

【四拾六】　魔女の誘い（後書き）

次回、急展開の予定。（予定は未定と同異議なんだがね

［四拾七］　患者と医者は語る

志摩は恐怖に汗を滲ませていた。
厚くも無いのに脂汗を額に浮かばせる原因となる恐怖の対象が彼の意思を捩じ伏せ、近づきつつあったからだ。
それは凶器だった。小さくとも見た目からは想像もつかないほどの威力を誇るそれはまもなく訪れる。拒否は無情なこの相手には通じない。どれだけ命乞いをしようと、この目的の為なら冷酷無慈悲に徹することも微塵も厭わない。
凶器はもう目と鼻の先。
そして、ついにその瞬間は来た。

ぶちゅり、と液体をたっぷり含んだ白い物体を口端の傷に押し付けられ、

「つぁっ」
「やかましい。男がこれくらいで悲鳴あげんじゃないよ、オラオラ」
「やめろぉぁ〜っ、擦り込むなぁぁぁぎゃぁーっっ」
「擦り込まなきゃ意味ないだろ、消毒液ってのは……こら、暴れんなイイ年して恥ずかしくないのかいこの親父は」

みっともなく暴れる志摩を看護婦二人がかりで押さえつけさせ、綿に染み込ませた消毒液をピンセットでその抵抗に見合わせるかのようにやや粗雑にグリグリと押しつける。
終わった時には、看護婦も患者（？）の志摩も息が上がっている始末だった。
若干息が荒い女医は忌々しげに舌打ちして椅子に腰掛けた。
黒の中に一筋の白が入ったオールバックの長髪が白衣の上を波打つ。

そして、白衣の下は鳳凰の見事な刺繍が為された太股を大きく露出した深い切れ目の入った見事なプロモーションを浮かび上がらせる深紅のチャイナドレス。

真っ赤なルージュに彩られたぽってりした唇が煙草を一本加え、白衣の裏に手を突っ込み取り出したライターをカチン、と手首のスナップで蓋を開けて慣れた手つきで火を点けた。

ギシリ、と背凭れを撓らせ、

「ったく、治療してくれっつーからしてやってんのに、暴れられちゃこっちの立場ないんだよ」

「だーから、何で治癒術で治してくれないんだよ。その方が早いし、こんな傷お茶の子さいさいだろーが」

「馬鹿かい。そんなちゃちぃ傷に霊力無駄遣いできるか」

「ケチババアめ……――――あちぃーっっっ」

眉間に煙草をジュッと押し付けられ、診察室の中をグルグルと走り回る志摩をイイ気味だとフンと鼻を鳴らす。

「レディに失礼な発言するからだよ。この久遠寺(くおんじ)黎乎(れいこ)の前で、目の黒いうちはその禁句(タブー)は気安く言わせないよ」

「へーへー……くぅ～、傷が増えちまった」

赤くなった眉間を摩る志摩に黎乎は呆れの意を込めた半目を向け、

「どーせその傷だって三途に変なポカやらかしてやられたんだろ？」

「だから難しい顔してるから、胸部マッサージを……」

「鉛球ぶっ放されなかっただけマシだと思いな。……ったく、羨ましい真似を」

アタシだってまだ揉んでないのに、とぶつくさ呟く黎乎に今度は

志摩が問いを放った。

「黎乎さんよぉ、聞いていいかい？」

「なんだい」

「あんた、あの娘のことは知ってるのか？」

僅かに目を見開いた後、名前を出さなくても察したのか、

「ああ、アンタも会ったのかい。どうだい、イイコだったろう……若さ弾ける実にプリプリしたいいカラダしてたねぇ、思い出すだけで涎もんだよ」

「そっちかよ……で、あんたはいつぐらいだ？　三途に紹介されたか？」

すると、いんや、と首を振ったので、志摩は訝しげに眉を顰めた。

「アタシは三途よりも先にあの娘に会ったよ。アタシの前にあの娘を連れてきたのは、アタシより先に……恐らく仲間内で最も早くあの娘を再会した人間だ」

誰だよ、と疑問視してくる志摩に黎乎はもったいぶるように呟いた。

「それにしても、大したもんだ。誰も手も借りずに、偶然とはいえ見つけ出すとは……立派な“母親”だとは思わないかい？　どっかのボンクラ親父と違って」

「ぐ、人の痛いところを……って、今何つった！？」

ガタン、と椅子を引っくり返し、荒々しく立ち上がった。

「あんた……“彼女”に会ったのか？」
「ああ、会ったさ。アイツが死んで以来、行方知れずだったのが、死んだはずの人間を連れてきた時はアタシは一体何がどーなってるのかさっぱりだったよ」
「“彼女”とは……？」
「暫くあの娘を通じて連絡とってたけどね……ある日、一本の電話がかかってきた」

何つってたんだ？と志摩が先を促す。

「“何も知らないあの子をよろしくおねがいします。もう、何も知らずにはいられないだろうから、その時は知る手助けをしてあげてください。――あと、セクハラはしないで下さい”とね。最後の方は承知しかねる内容だったがね。それで……次に会った時には土の下で永遠のおねんねしてたよ。昔からよく寝る娘だったから……本望なんじゃないかね」

最後の台詞が若干湿っているように聞こえたのは気のせいではない、と知っていつつも志摩はただ「そうか」と相槌を打つだけにした。

「ところで、何も知らないったーどういうことだ？」
「そのまんまの意味さ。なんも知らないんだよ、あの娘は。アタシと会った時に何て言ったと思う？
――“アンタのそれ、不老化処理だな。何者だ、アンタ”だとよ」
「あんたの正体見破るたぁ大したもんだな……つーか、前半と後半どっちに注目して欲しいんだよ」
「黙って聞きな。アタシと初めて会ったと言わんばかりだった。そして、自分をここまで連れてきた実の母親に対しても同様にね。恐

らく三途にもそーだったんじゃないかね。アンタは？」
「……俺は一度きりしか会わせてもらえなかったからな、アイツ。テメェの存在はオレの娘に悪影響及ぼすとかごねて」
「親馬鹿の感はなかなか侮れないからね。ウチの死んだ娘は孫がアンタみたいに節操なしになったらどうする、とか言って会わせるの嫌がってたが……危惧は当たっちまったよ参った参った……っと、話が脱線したね。つまり、はっきり言えばあの娘はアタシらの前から姿を消す以前の……“普通の生活”をしていた頃の記憶がまるで抜け落ちているのさ。綺麗サッパリ、掃除されちまってんだよ」
「所謂……記憶喪失ってやつか？」
「そういうこと。……一つ確かと言えることは、アタシらの知らないところでいろんなもんが動き回っていたつーことかね」

沈黙した二人の脳裏に浮かんだのはただ一人の存在。
全ての裏で暗躍する、常に微笑たたえる漆黒の人外姫。

「なぁ、あんた“も”か？」
「あの娘の存在を知っているということは黒蘭の手が及んでいるということさ。アタシも、一足先に手駒になったよ」
「……珍しいな。面倒くさいことは嫌いだろう」
「それはあの娘の母親の方だろう。アレはこの病院でアタシが取り上げたガキの一人だ。アタシの娘みたいなもんだ、気に入ってんだよ……アンタは何でだい、なんて聞くまでもないね。“娘”が大事なのはアンタも同じだったね」
「損ばっかする馬鹿な生き方しか出来ないみたいなんでな……目が離せねェンだよ」

互いにシニカルな笑みを浮かべ合い、

「損してるのはアタシらも同じじゃないか」
「そういやそうか。ま、お互い精々こき使われてやろうぜ。
――――次代の馬鹿どもの為に」

◆　◆　◆

時刻が午後一時に達した頃。
晴れた空の下で蒼助は己の状況に既視感（デジャヴ）を感じていた。
両手には抱える、といっていいほどの大荷物。
何故だろう。あの女に拘ってからというもの、こんな役割が廻って来るようになった。
晴れた蒼天を憎々しく思いながら、蒼助は両手に容赦なくかかる五キロのコーヒー豆の重量と闘いながら己を連れて歩く女性の隣に伴われていた。

「ん？　どうしたの？　荷物重い？」

女性――――下崎三途は首を捻って気遣うように蒼助を見上げた。

「あ？　……あー、大丈夫です。別に重くてしんどいとかじゃねぇっすから」

気にしないでくれ、と言った後、自分の心中に本音を撒く。

――――ただ、俺の状況も随分変わったなぁ。

前なら絶対に女の荷物持ちなんて真似はしなかったし、そんな女は周りにいなかった。

しかし、最近自分の世界は変わり始めている。
徐々に。しかし、確実に。世界は変貌し始めている。
――――つっても、望んだのは俺だけどな。
く、と小さく笑う。皮肉さが滲んでいた。
今までどんなことにも揺らがなかった自分の人生。
それが今、一人の少女が踏み込んだことで急激に変わりつつある。
否。
これから変わる。今まで見ていた光景そのものが、今こうして見ている景色が全く違うものに塗り変えられるだろう。
そして、その時こそ、彼女と同じ世界を共用できるのだ。
俗世と澱を隔てる壁を越え、その向こうの世界を。
――――……それにしても、惜しかったなさっきのは。
さっきというのは、倉庫での一件のことだ。
言葉が思うように言い出せず、行動で示そうとした。
多少強引で、しかも未遂で終わってしまったのは実に惜しかったが、収穫が全くなかったわけではなかった。
キスをしようとした時、千夜は抵抗を衰えさせた。
あの拒絶にも拒否感というよりも戸惑いが大きく浮き彫りになっていたように蒼助の目には映った。
昨日の反応と今日の反応で、確信が得られた。
――――少なくとも、全く気がないってわけじゃないみたいだな……。
そう結論付けが出来る。
ならば、どうにでもなる。可能性があるのなら、これからどうに

でも。

さて、どう攻めてようか、ととても恋心を抱える者とは思えない悪巧みを目論む笑みを浮かべていると、

「蒼助くん……なんかすっごい悪い顔になってるよ？」

「え……あ、何でもないっすよ……あははは」

笑って誤魔化している蒼助に、三途は然程気にしていない様子で曖昧に笑った。

「ねぇ、――――少し休もうか？」

［四拾七］　患者と医者は語る（後書き）

すみません。
急展開にたどり着けなかった（ガクッ
新キャラ登場。久遠寺黎乎です。レズじゃないです。両刀使いです。
察するとおり、歳誤魔化しまくってます。キャラ濃ゆいです。
親世代のキャラなんですが、ＯＢの一人としてサブ登場です。コイツには孫がいると語っていましたが、仲間になるのはソイツです。
登場は遠い未来の話ですが。
いろいろバラしてしまった感がありますが、こんなぐらいじゃバラした内に入っていないと我に返る。
記憶喪失の件は読者にバレても主人公は知らないというこれまたおかしな状態に。
にしても、明らかになった、というよりも謎がまた新たに増えただけな気がしてきました。
ま、いいか……この話、出題編だし（開き直ったな

とりあえず次回こそ、急展開。
まずはそれだ。

［四拾八］　真昼の銃声

渋谷一の規模を誇る代々木公園。
そこに変わらぬ平穏が存在し、中央広場にはいつものように一般人が訪れていた。
そして、

「まいどありー」

という店主の声に見送られ、蒼助は二つの香ばしい濃厚な香りを立ち上らせる温かなたこ焼きを収めたプラスチックパックを両手に持って、連れを待たせているベンチへと向かった。

「どうぞ。熱いから気をつけて下さいよ」
「ありがとう」

三途が座る隣に腰を下ろす。
前方には水面から噴きあがる噴水。そして、すっかり散ってしまったソメイヨシノの木。
それを眺めながら蒼助はそれとなく呟いた。

「桜がもう少し辛抱強ければ、桜眺めながら喰えたんすけどね」
「そうだね……そういえば、今年はまだ花見に行ってなかったなぁ、残念」

気落ちしたように唇から漏らし、代わりにタコ焼きを一つ放り込む。

「ん、このタコ焼き美味しい」

「最近ここらで開けるようになった店なんですよ。なかなかいけるでしょ？」

そう言って味に満悦する三途に続いて蒼助も手をつける。
昼飯を食べていないことも手伝って尚美味しく感じた。
しばらくそこで会話は停止し、二人は互いに食べる事に徹した。
そして、蒼助のタコ焼きがあと三つばかりとなった頃、

「ねぇ、蒼助くんって……」
「なんすか？」
「千夜のこと、好きだよね？」

ブフッ。
遠慮のない突きの蒼助は噛み砕いていたタコ焼きの残骸を思わず噴き出した。
一部が器官に入り、咽せ返る蒼助の肩を三途は軽い調子で叩く。

「あはは。今更な反応しなくても。結構前から気付いてたよ？」
「い……げふっ……いつから」
「ん？　君が最初に店に来た時」

って、最初からじゃねぇか、と閉じた口の中で毒づく。

「その時は自覚なかったでしょ？　次に来た時はもうあったみたいだけど」
「そこまで観察してたんすか……」
「こういう世界にいると人を見る目は大事でね。それに……あのコに向かう思惑はより用心深く観察するようにしてるから」

後半の台詞に何か含みを感じ、ずっと尋ねる機会を見計らってい

た「疑問」の解消に試みることにした。

「あの、ずっと聞きたかったんですけど……いいですか？」

「何？」

ごくり、と唾を呑み下し、意を決して切り出す。

「……アイツとはどういった関係なんですか？」

一瞬の沈黙。

次に訪れたのは三途が放った噴き出すような笑い。

「ぷっ……あはははっ！　……何それ」

「そんな、笑う事ないっしょ……気になるじゃないですか、好きなヤツと親しげな人間のことって」

そんなに笑われては、言った自分がとてつもなく恥ずかしくなる。

言わなきゃよかった、と後悔が滲み始めていた蒼助に腹がよじれるほど笑って目に涙を滲ませた三途ははぁ、と一つ息を付き、

「んー……いいよ、恋する少年……そうだね、どういう関係か……いざ問われるとどう言い表せば良いんだか……ぶっちゃけた話、奇妙な縁だったと思うよ」

と、それとなく呟く三途の視線はその一瞬、ここではない景色に向いたように蒼助には見えた。

「……もう二年の付き合いになるかな。きっかけは……私の店に依頼人としてあのコが訪れたことから」

「依頼人？」

そ、と短く相槌を打ち、

「私ね、商人以外にも裏家業もやってるんだ。いわゆる便利屋ってやつ」

また肩書きが増えた。

「でも、あんた隠れてるんですよね？　あの店結界で外から招かれないと中に入れないし、どうやって仕事してるんすか？」

「メールで請け負ってるんだ。というより、予約（アポイントメント）？　正式な依頼はそれを受け取ってから直接来てもらう、というのが……普通なんだけどね」

「と、いうと……？」

何かの含みを感じ、先を促す。

「あのコはね、何処で聞きつけたかは知らないけど私の店探し出して、アポなしで直接この店にやってきたんだ」

「あれ、でも結界は……」

「それをあっさり力づくでぶちこわして、だよ」

「……」

開いた口が塞がらないとはこんな状態をいうのだろう、と唖然としながら蒼助は自分の状態を評した。

あまりにも常識はずれで無茶苦茶過ぎる。

「生き別れの妹を探してるっていう……まぁ、何処かで聞いたような話をふっかけられてね。今思い出しても大分無謀で危険度の高い

依頼内容だったなぁ……何せ一組織を潰すなんて久々だったから緊張したよ」

この人も大分普通とはかけ離れたスケールを持った人間だ、とこの先まともな答えが出てこないと踏んだ蒼助はもう細かいことにこだわることは止めた。

「依頼遂行の後ね、これからどうするのって聞いたら……わからない、なんて言うから……見ていられなくてね……本人は遠慮していたけど、ウチにおいでって誘ったんだ。ビジネスからプライベートの付き合いはそこから、ね」

「ひょっとして……あの高そうなマンションも……」

「最初はウチで暮らしてたんだけどね……いやー、あの中が構造でしょ？　半年もしないうちに猛烈な抗議を受けて、しょうがないからあのマンションの一室を私のポケットマネーで買い取ったの」

安アパートでいいって言われたけどやっぱりねー、とコロコロ笑う三途に苦笑を浮べるしかない。

「……面倒見のいい人だな、アンタ」

「ん？　そんなことないよ」

「何処が。知り合って間もない人間にそこまで世話するような奴、あんまいねぇぜ」

同居や高級マンションの一室を買い与えるなど、よほどの懐の大きな人間でなければ出来ない行為だ。

やだなぁ、もう、と照れたように三途は顔を赤らめた。

「本当にそんなわけじゃないよ。……強いて言うなら、千夜だったからかな」

ふと三途の目が遠くを見つめた風になる。

「ちょっとバラすとね、さっき話したのは本当は初対面じゃなかったんだよ」

「は？」

「あのコはまるっと忘れてるけど……本当に初めて会ったのは、千夜が子供の頃なんだ」

まるでアルバムから引き出した写真を見せるように、蒼助に聴かせる。

「お父さんに抱きかかえられてね、まるでお人形さんみたいだったでさ。今じゃ、想像出来ないくらい、人見知りする子供で……それでいて、一度警戒を解くとヒヨコみたいに後ろをついてきたりして……。私一人っ子だったから、妹みたいに思えて可愛くてしょうがなかったんだ」

それになにより、と切り出された直後、蒼助は口の中のタコ焼きを噴き出すことになる。

「好きな人の子供だったから」

「ぶっっ」

いきなりのカミングアウトに無反応で返せなど無茶な話である。

ややお決まり的なリアクションを取られた三途は照れくさそうに顔を赤らめた。

「あはは……まだ若かったからねぇ」

そういう問題だろうか。
咽ながら、三途の意外性に驚きを隠せなかった。
大人しい顔して、と。

「まぁ、横恋慕って言ったら聞き覚えが悪いけどね……好きになったのは私のほうが先だったんだよ？」
「い、いつからっすか？」
「私が四歳の時。いわゆる初恋ってやつだね」

随分根深いもののようだ。
三途は誕生日にプレゼントをもらったなど、その初恋の相手――千夜の父親との思い出を語っていたが、そこにその恋人が絡んでくると浮かれていた表情が暗雲のようなそれになっていく。

「大体ねぇ、一目見た時から気に入らなかったんだよねぇ。わざとお茶引っ掛けても熱がりもしないし無反応だし……あれだけあの人が熱烈アプローチしてるのに、笑いもしない。まったく、あんな人間味の薄いのの何処がよかったんだが……」

思い出語りはいつのまにか愚痴にすり替わっていた。
しかもところどころに陰湿さが目立っている。
引き攣った笑みを浮かべつつ蒼助は何とか話しに乗っかる。

「……まぁ、相手の良さはそいつにしかわからないってのが恋みたいですから」
「へぇ～、その口ぶりは自分にも身に覚えがあるみたいだね、蒼助くん」
「っえ、あ……まぁ」

言葉どおり覚えありまくりだった。

「まぁ、相手がどれだけ悪くても……どうしようもなかったんだ、悩めば悩むほど底なし沼みたいにどっぷり嵌まって行っちゃって」
「そうなんすよね……止めとけって自分に自制かければかけるほど、止まんなくなって……」
はぁ、と溜息をつく蒼助に三途の問いが降る。
「蒼助くん」
「……なんすか」
「千夜のこと、好き？」
途端、蒼助は石像のように固まった。
顔色は青かったり赤くなったりと目まぐるしく変わっている。
三途はそんな蒼助に後押しするようにもう一度、今度は強く問う。
「好き、だよね？」
ぐ、と蒼助は口から零れ出しそうな言葉をかみ締める。
先程は出そうとしても出なかった言葉が肝心の伝えたい相手がいないこの場では自分から出ようとしている。
自分の感情の揺れ動きに呆れつつ、蒼助は我慢を止めた。
「……好きですよ、俺は……本気であいつが」
好きなんです、と最後に繰り返した蒼助を三途の双眸が見据える。
気まずげで、何処か照れくさそうな赤い顔の男を三途は懐かしいものを見るような目で微笑ましげに見て、目を細める。

「そう……――――――なら」

カチャ。

和やかだった空間に不意に響く重苦しい金属音。

思考と表情の動きを止める蒼助と対照的に三途は何一つ変わらぬ表情で告げる。

「――――――死んで？」

まるで祝福を祝うように告げられた言葉と同時にその手に構えた物質から銃声と鉛玉が放たれた。

【四拾八】　真昼の銃声（後書き）

性（！）少年の恋心打ち明けの後にそれは酷いんじゃ、三途さん。
和みムードから一気にシリアス急展開。
こっから先は作者もよく考えていない（待てや

［四拾九］　恋の芽

首筋に伝う濡れた感触。
汗ではない。
それよりももっと、粘度がある液体で、鉄臭さが香る。
そして、頬がチリリと疼くように痛んだ。

「……あ」

身じろぎはおろか、瞬きすら出来ずにいた。
目の前の光景はあまりにも衝撃的過ぎて。
蒼助に向かうは黒い銃口。そこから立つ硝煙の臭いと白い煙。

それを携えるのは先程まで談話していた下崎三途。

「避けられるとはね。この距離なら一発で終わると思ったのに」

無感情な言葉が冷水のようにふりかかる。
そこにはもう既に穏やかな笑みを湛えていた喫茶店の店主は存在しない。
ただ冷徹な光を宿した鋭い眼差しの魔女が蒼助を冷たく見据えている。

「何の……冗談ですか？　実弾は……ちょっと、きついっすよ……」

声帯がうまく機能しない。
一体この事態はどうなっているのか。
何故、彼女は自分に銃を向けているのか。
今、蒼助の全てが対応できていなかった。

混乱する蒼助を叱咤するように、三途が否定を示す。

「悪いけど、冗談じゃないよ」

同時の銃声。

音の自覚と目の前で起こった現象に対する認識よりも速く、身体が回避に出た。

後ろに倒れこむように反った身体はそのままベンチから落ちた。

「っぐ……」

背中と頭を打ち付けた痛みを堪え、未だ三途が着座するベンチから一歩距離を取る。

それ以上ができない。

背を向ければ容赦なく銃弾を浴びることが目に見えていた。

ただ、威圧感（プレッシャー）に押されないように視線で応戦するのがせめてもの抵抗だった。

「二度目か……まぐれじゃないみたいだね。やはり、君の中の“モノ”はその身体に馴染みはじめている」

その言葉に蒼助は身体を強張らせた。

何故、それを知っているのか。

目を見張らせた蒼助を見て、

「自覚はあるんだね。……それだけに抵抗も長引いていたわけか」

「……あんた、何で」

「君が店に来た日から使い魔に監視させていたんだよ。思い過ごしで済めばいい、と……クロが怪我を負って帰ってきた昨日までは万

が一を思って念を押してのことだった。彼はね、君にやられたと言ってきたよ……正確には、君の身体を使ったその中にいるモノにとね」

「…っんな馬鹿な！」

「一概にそう言えるかい？　乗っ取られている間、君には意識がなかったとしたら……」

ぐ、と押し黙る。

そう言われてしまっては反論の余地がない。

知らぬ間に身体を一時的に乗っ取られていたら、蒼助が否定できる要素は皆無だ。

「随分凶暴なモノがいるらしい……それでいて、酷く狡猾で残虐だ。もはや、君の身体をすっかりつくり変えているのに、じわじわと確実な君の人格の消滅を狙っている」

「俺の身体が……？　何の話だ！」

「たった今、証明してくれたじゃないか。言っとくけど、確実に急所を狙ったんだよ？　さっきも今のも。普通の人間に出来ると思う？　ゼロ距離にほぼ等しい間隔から発射された０．１秒速の弾丸を避けるなんて、離れ業が」

絶句した。

言葉と照らし合わせた先程の自分の行動に。

何故、あんな風に動けたのだろう。

考えて全神経に行動を促しても、許容範囲外の無茶な動きだ。

……俺は、さっき何した？

身体は危機感に反応し、本能で回避に動いた。

本能に応えた身体が為した動きは人間のそれと言えるのか。

「境目になる身に覚えはあるんじゃない？　身体に何らかの異常として現れたはずだ」

――――異常？

言われて蒼助の思考に記憶が残像が凄まじい勢いで駆け抜ける。
二日に渡って重ねがけられた溶解せんばかりの高熱。
灼熱の炎に焼き尽くされているかのような苦痛。

まるで自分の身体が作り変えられているような感覚さえ覚えた――――

……まさか、あの時かっ。

蒼助の表情の変化に三途はその奥の事実を見透かしたように目を細め、

「……自覚はあったみたいだね。どんなことがあったかは知らないけど、それでここまで自我を保ち続けてきたのは大したものだと思うよ――――それもここまでだけどね」

瞳の奥の冷ややかな光が一層強く輝きを増す。
まずい、と本能が警笛を吹くのを蒼助は聴いた。
逃げるという選択を肉体が行動に起こそうとしたが、

「……っが、あ……！？」

蒼助は驚愕に目を見開いた。

足はおろか指先一つすら動かない。
逸らすことが出来なくなった視線が硬直に抗いながら捉えたのは目の前の三途の双眸。
いつのまにか眼鏡を外されたそこにあったのは二つの紫紺の輝き。
「さっきみたいに逃げられちゃ困るからね、少しの間そうしていてもらうよ」
「……な、に……をっ」
「魔眼だよ。聞いたことない？」
魔眼？と蒼助は聞いたことない単語に動かない瞼で瞬く仕草を見せた。
「知らないか……まぁ、そうホイホイ転がってる異能じゃないしね。何かの話で聞いた事はない？神話でよく出てくる邪眼（イビルアイ）ってあるだろう？　あれの親戚のようなものだよ。といっても、あのメドゥーサの石化はこっちの変異例なんだけど。概念属性の法則に乗っ取った先天性異能。外界から情報を得るために眼球そのものを異能の媒体とし、その使い手の視界と眼力を以ってして力の発現を為す。結構レアな能力だよ？　何しろ上位のカミと異種族との混血にしか憑かない、その存在の目印みたいなものだからね」
その思いがけない言葉に蒼助は見開いたままの目を震わせた。
異種族との混血。即ち半妖。
ならば、三途は氷室と同じ――――
「まるで動けないでしょ？　動きたくても動けない。命令に逆らえない。それが概念属性の聖域の魔眼の特性――――『服従』。強力なやつだと複数にかけたり、精神崩壊させることだって出来る。これを防げるのは、強固な精神力を持つ者か、同じ魔眼憑きのみ」

「っ……精神、力には……じ、しんが……あったんだ、けどっ……な、……」

強がるように言って見せた言葉に三途は苦笑い、

「いや、大したものだよ。結構強力なのかけたのに、まだ口が利けるんだから。――――本当に、殺すのが惜しい」

「だったら……」

「ごめん」

切り捨てるかの即答。

それは蒼助の要求ではなく、自分の中の何かを吹っ切ろうとしているようにも聞こえた。

「なぁ……何で、俺を……そこまで、して……っ」

「……大事なものには順位がある。一番とそれ以下の数字。一番を残しておくのに、それ以下を切り捨てなければならないなら……君ならどうする？」

「……」

「出来れば、君には残っていて欲しかった……だって、君は……」

そこまで言って、無理矢理区切るように三途は口を噤んだ。

「喋りすぎたね……そろそろ終わらせよう」

一度は下ろされた腕が上がり、銃口は再び蒼助に牙を剥いた。

もう下ろされる気配のないそれはゆっくりと殺気だって行く。

「――――っ！」

「もう外さない。大丈夫一発で心臓をぶち抜いてあげるから」

苦しまずに、を意図しているのは私怨ではないからだろうか。
状況にそぐわないやけに冷静な思考がそう叩き出した。
そうあるのは、あまりにも三途の顔が自分よりも辛そうに歪められていたせいか。

「――――せめて、良き黄泉路を」

見送りの言葉と共に、無情な別れの合図が響いた。

◆◆◆◆◆

ごしごし。
きゅっきゅっ。

「……」

ごしごし。
きゅっきゅっ。

「……」
「……あのさぁ」

見るに耐え切れなくなり、物置の中で作業に没頭している千夜にB．Sは声をかけた。

ん？と我に返ったかのように振り向く千夜に指摘を放つ。

「気づいていないようなら言うよ。いつまでその壺拭いているの？二人が出てってから二十分ずっとそれ擦ってるよキミ」

「む、そうか……ありがとう」

と、手にある壺を床に置き、別の壺を取り付近で擦り始める。

ああ、と嘆きと呆れが入り混じった溜息を吐き、くてん、と長い尻尾を項垂れさせた。

昨日今日で偉い変わりようだとＢ．Ｓは思わざるえなかった。

いつもは異様に我の強い彼の主人の盲愛の対象たる人物がおかしなことになっている。

一つの作業に入ると、ひたすらそれを続ける。

熱中しているというわけではない。

何か物思いに耽りながら別の世界に意識を飛ばし、手がただ動く。

まるで、心ここに在らずとでもいうかのように。

「……どうしたの、千夜」

「何がだ」

「おかしいよ、今日のキミ……いや、それはいつものことだけど、今は殊更」

「――――猫は非常に柔軟な生き物らしい。高い所から飛び降りても無傷だそうだ、今度試してみるか……高層ビルで」

恐ろしいことを独り言のように口走られ、身の危険を感じたＢ．Ｓは本能的に口を噤む。

猫が黙ったのを見ると、千夜は一息。

そして、新たに開口を切った。

「……なぁ、クロ。ちょっと聞いてくれないか」
「……いいけど」
「最近な……おかしいんだ」
「は？」

何がおかしいというのか、と首を捻らせるB・S。
おかしいと言えばこの女は常人とは大分かけ離れた領域に立つ大変な変人だと思うが、それを口にしたら確実に生命の危機が直後に訪れるのは経験上間違いないので緩い口を結ぶ。
冷静な判断がB・Sの中で下されている中、千夜は陰鬱な表情で、

「……男に、ときめいたんだ」
「……突然なに」
「それはこっちの台詞だ。ついこの間まで男だったっていうのに……昔から男によく目をつけられてはいたが、この体のおかげで最近別の意味で目をつけられるようになるし……挙句の果てには、気に入っていた男に告白されて、更に不覚にもときめいてしまって……いい加減許容範囲にも限界がきてるんだ、こっちは！」

だんっ、と不満をぶつけるように壺を床に叩き置いた。
瞬間に壺の底から不吉な音がB・Sの耳に届いたが、あえて無視した。

「そうだ、何でときめいたりなんかしたんだ……おかしいだろ、あそこは殴って当然の状況だったはず……なのに」

あの時、自分はおかしなことに胸を高鳴らせてしまった。
あろうことに、嬉しいなどと感じて。

「何なんだこれは……これじゃ、まるで……」

「女だね。つーか、ふつーじゃん」

さっきも蒼助に言われた言葉に千夜の思考に火が点いた。

「普通なわけあるかっ！　俺は……」

「一人称、戻ってるよ」

「ほっとけ！　……確かに、今は女になってしまったわけだが……はいそーですかと簡単に中身まで切り替われるかっ。変わったのは、身体だけだ！　俺は、ずっと俺のままだ……」

纏わりつく何かを振り払うように頭を振る千夜を観察するように見て、B．Sは思う。

どうやら、男であるはずの自分が男にときめいたことが悩みの種らしい。

そして、身体は女になっても中身は男のままであるはずだと。

考えて、猫は自分なりの答えを主張した。

「……確かに、君は性別が変わっても善からかけ離れた性格はそのままだ。変わっていない。……でも、変わったと僕は思うよ」

「……はっきりしないな。どっちだ」

「どっちもだよ。まず変わったのは……雰囲気だ」

ぱちくり、と瞬く千夜に雰囲気の変わりようを説明する。

「ここ短期間で随分変わったと思うよ。前は、確かに女のはずなのに、男っぽさが抜けてなかった。どーゆーことかは知らないけど、この前に店に来た頃からかな、なんだか女っぽくなったよ君」

「馬鹿なこと……」

「そう思うならあとで三途にも聞いてみるといいよ。多分僕よりずっとねちっこく君の変化を見取っているから」

ねちっこいのは嫌だな、と千夜は思いつつ内心信じられない気持ちだった。
女っぽくなっただと？
この俺が。

「……女っぽくなったって……具体的にはどうなんだ？」
「雰囲気に丸みが帯びた。柔らかくなったっていうんだろうけど……男特有の荒々しさが今の君からはあまり感じない。女だけが持つ空気って奴があるだろ？　今の君には代わりにそれがある」
「冗談だろ……」

堪えるように頭を抱える千夜にＢ．Ｓは意見した。

「どうかな。僕はおかしくなんかないと思うよ。身体に性別の特徴をはっきりさせる為の第二次性徴があるように、それに伴って精神にだってそれは現れる」
「だったら、何か？　身体が女になったことで、精神状態も女のそれになりつつあると言いたいのか？」
「断定は出来ないけど……考えるとそういうことになるね」

馬鹿な、と千夜はその意見を足蹴にしたくなった。
そんなはずがない。
きっかけとなる事件から三ヶ月、これまで一度だって男に興味や恋愛感情的な関心など欠片も抱いたことなどなかった。
そうだ、と取り巻く全てを振り払うように否定した。
自分は正常だ。何も変わっていない。
今までだって、一度たりと――――

「……クロ」

「何？」
「俺の、恋心はとっくに死んでるんだ」
彼女と共に。
そう呟いて、千夜は深く項垂れた。
「……男としてはね、なら――」
“女”の今の君のはどうなのかな？
呟きかけたところでＢ．Ｓは喉で出かけた言葉を引き止めた。
危うく余計な事を口走ることだった。
千夜はここまで来ても気づいていないようだが、Ｂ．Ｓにはもう完全に理解できていた。
しかし、先程は危ういところだったが寝ている赤子を起こすようなことをする気はない。
千夜が煩わされているその相手は、もうあと十数分後には生きていないだろうから。
皮肉な話だ。
過去の負い目によって、再び訪れた形作り始めている想いを無意識に否定し続けているばかりにまた傷が増えようとしている。
それが己の主が守るが故に引き換える代償だとしても、決してはその傷は浅くはないはずだ。
きっと、この少女にとっては死ぬよりも辛いこと。
Ｂ．Ｓは覚えていた。
かつて、“少年”の中で慈しまれていた無垢な恋は無惨に刈り取られたことを。
そして今、“少女”に芽生え始めている恋心は再び摘み取られようとしていた。

「なぁ、クロ……」
「なにさ」
「それとも俺は……男に欲情する変態になってしまったのかな」
「……」

［四拾九］　恋の芽（後書き）

また、間が空いてしまいました。
どうも、天海です。
ついに撃った。
よしこれようやっとリタイヤ地点に戻ってきた。
千夜に自覚はさせるのは今回にしようかと思いましたが、止めました。もうそこだけ先に書いてあったのを思い出したからですね。

あとお知らせです。
友達と共同サイトを開くことになりました。
正確には友達が経営しているサイトの別館として小説サイトをつくるからとそこに作品を載せさせてもらうことになりました。
出しのはもち、鮮血。
修正をまったくといっていいほどかけずに放置だった第一話を改善し、先走って書き忘れたおかげで載せられない幻のプロローグを追加して、掲載する予定。
いつになるかはわかりませんが、でき次第ご報告しますので、その時まで～。

【伍拾】　紅の華咲く

「……撃っちゃったわねー」
「……撃ちましたね、とうとう」

同じ光景を見て、同じ感想を述べる大小の存在。少女と大男。黒蘭と上弦だ。

見つめる先と台詞が同じでも、反応はそれぞれ違った。

一切の動揺の無い黒蘭。上弦の方もそうだったが、その表情は何処か沈んだ色を滲ませていた。

「……貴方の計画通りではありますが……本当によろしいのですか、これで」
「愚問ね」
「……自分は嫌でございますぞ。あの方の相手をするのは……」
「本当に嫌そうね。どれくらい嫌？」
「貴方とガチで殺し合うのと同等でございます。選択肢として出されたら負け犬のレッテルと生涯貼られることになろうとも土下座の道を選びます、微塵も迷わずに」

真顔で答える上弦の表情は真剣そのものだ。

「あの男と同じ扱いっていうのは気に喰わないけど……まぁ、いいわ。さて……」

黒蘭の出だしに何かの予兆を感じた上弦はすかさず、

「行きますか」

「いいえ、ここでもう少し様子見。向こうからのアクションがあったら、志摩を迎えに行きましょ」
「……何故ですか？」
「だって、三途に痛い目合わさなきゃ。自分の度量ってものを一度再確認させる絶好の機会だもの。一石二鳥、これ以上のタイミングはないわ。いい？　文字通り絶体絶命ってとこで行くのよ？」
「……自分は貴方は最低最悪のサド野郎だと思いますが、間違っているのでしょうか」
「野郎じゃないわよ」

サドは否定しないのか、と相手が自覚ありであるというタチの悪い事実に上弦は頭を項垂れて、黙った。
ふぅ、と一息をつき黒蘭は眉を顰めた。
困っている、といったそんな顔だ。見た事のない珍妙な光景に上弦は酷く戸惑った。

「ど、どうなされました」
「困ったわ……」

全てを手の平の上で操るような女が何に困ると言うのか、と上弦はゴクリと息を呑み次を待った。
すると、

「……殺さないように気をつけるって約束したんだけど……自信無いわ、あの男の顔見た途端、理性飛んじゃうかも。どうしましょ、ねぇ上弦」
「……努力して下さい」

◆◆◆◆◆◆

匂い立つ硝煙。
嗅ぎ慣れたはずのそれがいつになく三途の中で不快感を募らせる。
己の得物がこの悪臭を放つ時はそれが役割を一つ終えたその時。
銃は今とてそれを使い手の意に従い、果たしたまで。
そうさせた三途も慣れた行為をまた繰り返しただけのはず。
なのに、

「……っ」

目の前で倒れる男の姿にショックを受けている自分がいた。
俯せに倒れる日本人にしては色素の薄い黄土色、下手をすれば金髪にすら見える短髪の男。
ピクリとも動かない。
当然だ。
僅か十数秒前にこの男の生命活動は停止した。
他ならぬ三途の放った鉛玉によって。

「……手が……」

身体の違和感に不審を感じ、見れば銃を持つ手が震えている。
為した行為への恐怖、そして罪悪感を表しているのは如実だった。
何故、と三途は自身に問う。
初めてとは到底言えない所業。
今まで何度も繰り返してきたことを、さっきもまた行っただけだ。
……それだけなのに……。

一番大事なものを護る為に、それ以下であるものを切り捨てた。

出会ってそう日が経たない相手。
接触したのも、二、三度程度。
ただそれだけの人間。
だが、

「……そうとも言えないか」

今死んだ本人は知らないだろうが、三途と蒼助の縁はそれだけではない。
少なくとも、『彼の両親』とは。
千夜の両親と同じく、浅からぬ因縁を持っている。

「あーあ……怒られちゃうな、あの二人に」

決意づく前に迷いはあった。
彼が『玖珂』と名乗った時は、顔を見た時は、内心驚いた。
父親の性に母親にソックリの顔。
間違いなく彼の出生を辿った先に『かつての仲間』は居ると確信を得た。
間接的な再会。
だからだろう、自然と彼に心を開いていた。
志摩からよく指摘される。

『お前は人殺しには向いてねぇな……喫茶店の店長の方が俄然天職だから早いとこ辞めとけ』

反論は出来なかった。
何者にも非情に徹せない。
下崎三途に殺せないものはこの世に二種類ある。
一つは年端もいかない子供。そして、二つ目は自らの至上の存在

である『彼女』。
それ以外は何とか殺せる。
一部の対象の場合に対する後に来る胸の幻痛を覚悟すれば。

「っ」

胸を突き刺すような痛み。
無論、実際に痛んでいるのではない。
罪悪感に苛まれた心が作り出す偽りの痛み。

それはあの日を境に襲うようになった。
三途の人生において『特別で大切だった人』をこの手にかけたあの時から。

そして今度は、大切な人の特別になるかもしれなかった男を。
その死と自分の行いを知った時、彼女はどんな表情で自分を見て、どうするのだろう。

「泣かれるかな……ビンタは……痛いだろうなぁ」

独り言と共に口から出た酷く渇いた笑い。
鏡があったら目にする自分の顔は酷く情けない顔をしているに違いない。

「ねぇ……蒼助くん」

どうして、君だったのか。
もし、君がどうしようもない悪人であったならもっと冷徹に事を為せただろうに。
それこそ利己的なこの理由を貫き通して。

彼女の傷を癒しながら育つはずだった淡い恋を摘むことに、こんなに罪を感じることもなかった。

返事を返すこともない男の屍から振り切るように目を強く閉じ、背を向ける。

「さようなら」

静かに、己の胸の奥に刻み込みように永遠の別れの言葉を告げた。

しかし、決して謝ったりはしない、とそれ以降は口を噤む。

自分の信念を、彼の死の意味も濁したくはなかったから。

踏み出す歩みは、彼の存在を過去にしていく秒刻みの時間の経過。

ゆっくりとそれを踏み出そうとした。

「――――何処へ行くつもりだ？」

結界によって特殊な空間として隔絶された空間には、三途一人のはずのそこに響いた声。

先程、ただの物を言わない屍へとなった彼を除けば、一人だけのはずだった。

しかし、耳元で聞こえた問いかけは聞き間違うことなく。

この手で殺したはず男の声。

振り返ることすら出来ずにいる三途に男は再び口を開く。

「まだ、何も終わってはいないぞ？」

ずくん、と心臓が大きく脈打つ。
それは本能が心臓を通して伝える危険信号。
振り返る――――前触れとして視線がその方へ向かう。

――――ドシュっ……。

突き破るような音。
そして全身に痺れるように伝わるその感覚。

胸が熱い。
その暑くなった中心には異物があり、その代わりに何かが急激な速さで抜けていく。

見下げた胸には濡れた赤の華が咲いていた。

◆◆◆◆◆◆

突然のことだった。
突き刺すような痛みが心臓に襲いかかった。

「――――ぐっっ！！？」

苦痛の呻きを挙げて前足を折って地面に蹲った黒猫の異変に千夜が気づき、

「どうした、クロ」
「っ……あ、三途……」

顔を歪ませながらも呟いた名前にこの事態に何が関連しているか千夜はすぐに察した。

「主従の契約は片方に何か降りかかった場合はもう一方にもその影響が及ぶ……だったな。三途に、何があったクロ」
「……」
「クロ」
「……どうやら、三途も僕も見測り損ねたらしいよ。彼という存在を」

何のことを言っているのか、わからなかった。
だが、三途が誰と出かけて行ったのかを思い出す。
彼の残像が千夜の脳裏を過ぎる。

「お前ら、一体」

「……っ……彼は、無事だよ……僕がこの状態であるから……代りに、三途が危ないようだけど」

おそらく失敗したのだろう、とB．Sは踏んでいた。
三途は気を許した一部の人間には甘いところがある。
玖珂蒼助はその類となってしまい、踏み切れなかったのだろう。
もしくは、相手がこちらの予想を遙かに上回る存在だったかだ。
悔いても仕方がない。
この心臓を痛みは、相当の深手を負わされたことを証明している。

「行かなくちゃ……さん、ず……っ」

息をするだけでも激しい激痛が胸を射抜く。
それでも行かなくてはならない。主の元へ。
使い魔としての忠義からではない。
そんなものよりもっと重く深いな感情がB．Sを突き動かすのだ。
唯一無二の大切な女性の元へ行け、と。

その時、不意に身体が何かに引き上げられ、浮く。

「……千夜」
「場所は」
「え」
「場所は何処だ。使い魔ならわかるんだろ？　連れて行ってやるから案内しろ」

ふぅ、と頭痛げに片腕にB．Sを抱いて額を押さえた。

「ちゃんと、後で説明しろよ……」

【伍拾】　紅の華咲く（後書き）

先月は一度しか更新していないという不始末には申し訳ないです。
部誌の原稿に手を焼きながらも、こちらにも手を出してようやくこの更新です。
何はともわれついに五十話です。
ひょっとするとこの連載終わるのは百過ぎてるかも……とちょっと気が遠くなりつつある。

【伍拾壱】　蒼色の鬼神

その瞬間は、自分の胸に咲く毒々しいまでに紅い花の意味が三途には理解出来なかった。

だが喉から込み上げて来る嘔吐感が、胸から突き抜ける紅い腕が、全てを瞬時に理解を促す。

勢い良く引き抜かれる異物。同時に杭となっていたそれを失ったそこからは真っ赤な噴出。

「……がっ」

口から溢れ出した赤黒い体液は紛うことなく三途自身のものが地面を染める。

出血と共に抜けていくのは全身の力。

がくん、と力を失くした膝が地面に落ちる。

「……ぐ、ぅ」

遠のこうとする意識をすんでのところで繋ぎ止め、傾きかけた上半身を咄嗟に地面に立てた腕で支える。

鉄の味と臭いで満たされた口内にある舌を動かす。

「どう、し……て」

首だけ動かし、背後に立つ男を見る。

男は赤く染まった腕に伝う雫が落ちていくさまを見つめながら、口を歪めた。そこに自分が知っている青年の面影は存在しない。

「何故？　当たってもいないもので死ねとは奇異なことを言うな、

貴様は」

と、指先に何かを挟んで見せてみせる手には、小さな金属の塊。
三途が男の心臓に撃ち込んだはずの、歪に拉げた銃弾だった。

「まさか……確かに当たったはずっ……、」
「なら、もう一度同じ事をしてみたらどうだ――今度は、頭を狙ってみろ」

皮肉がこもった言葉と共に、とんとん、と男は己の額を人さし指で叩いた。
挑発であることは明らかだった。

「……っ」

ぬるついた手で一度は収めた懐の拳銃を取り出す。
震えに妨げられながらも標準を定め、引き金を引いた。
言われたとおり、額を狙い、真偽を正すべくその行き先を見届けるべく視線を釘打つ。

が、放たれた秒速の弾丸は目標を寸前にして動きを止めた。

「っな……！」

勢いを失った弾丸は力尽きたように落下に、男の手に受け止められる。

「……今のは、“概念防壁”？」

弾丸が止まった瞬間に、見えた一瞬の不可視が可視に変わる場面。

その刹那に三途の視覚は光の壁を確かに捉えた。

「……純血のカミのみが行使可能の概念使用。……やはり、貴方は」

「ふん、人間にしては博識だな……いや、――――ヒトではないな、貴様。混じり者ながらの丈夫に出来ているな。さすが、曲がりなりにも我らよりということか。“半妖”」

「……っ」

自分が純粋な人間でないことを、僅かな間で見抜いていたようだ。

「こんな安易な概念の被いしか施していない鉛球で吾を殺す気だったのか？　……小僧に対するせめてもの報いのつもりだったか」

人間として、せめて。

その気で三途はほぼ拳銃単身のみを使用した。

「……見事に仇となったようでしたがね。余計な情けをかけてしまったものです」

傷の激痛を口の中で噛み殺し、三途は地面から膝を何とか離し立ち上がる。

胸に空いた穴はまだ半分の修復できていない上出血も止まっていない。

虚勢でしかないが、しないよりはいい。

「お初にお目にかかります……と、いっても……使い魔の有様を見てから出来れば御免被りしたかったのですが」

今となっては心底そう思う。

三途は自嘲じみた笑みを貼り付けて内心で吐いた。

「……それが、貴方の本性ですか？」

向き合った相手は、異なる姿へ変貌していた。
衣服はそのまま。変わったのは髪と二つの瞳の色。
短かった髪は腰先まで伸び、瞳と同様に鮮やかな青へ塗り変えられていた。
纏う装いに対する違和感など掻き消してしまうほどに神秘的なまでに美しい色鮮やかさ。

「こんな状況でなんですが……綺麗ですね」

場違いであると、わかってはいても見惚れてしまう。
幻想的に浸ってしまうまでに、現実離れしている存在。
神秘は不敵に哂う。

「いい加減聞き飽きた誉め台詞だな。いっそ貶された方が幾分マシだ」

「……捻くれてますねぇ。だから、人間にとり憑こうなんてナナメ目線な行動を起こせるんですかね」

本当に何を考えているのかわからない。
脆弱な造りの肉体であるヒトに次元違いのカミが乗っ取りを図る。
そこに何の利益があるのか、傷の修復の時間稼ぎとしなくても知りたい気持ちが三途にはあった。
男は目を細めると、

「……く、」

口端を吊り上げ、笑みのつくった。
そして、大きく声を張り上げて高笑い。

「……何が、おかしいんですか」
「ははははははははっ、……貴様、取り憑いただと？　全く、見当違いもいいところだ、このうつけが」
「……？」

見当違いとは、一体どういうことか。
自分は何を取り違えているというのか。
三途の思考に混乱が生じだす。

「貴様の言うとおり、そんなことして何の得がある。吾がそんな物好きではない」
「……はっきり、言ってくれませんか？」

苛立ちを口調に浮き彫りにさせる三途に、男は悠然と言い放つ。

「ふっ……この肉体は元々俺のものだ。それを取り戻しただけのこと。何の問題がある」

意味を理解り兼ねた。
何も言えずにいる三途を見て、男は更に続ける。

「理解できないか、半端者？　この身体は吾が母胎から授かったモノだ――――すなわち」

男は胸に手を当て、決定的な言葉を紡ぐ。

「――――俺は人間だ。元・カミのな」

◆◆◆◆◆◆

異常の起こる代々木公園を通行人は平常のそれと変わらないと、そう思って通り過ぎていく。

それも当然。

外から見れる敷地内には不気味なまでの人気の無さもなければ、人の注意を惹きつけるような騒動が中で起きているわけでもない。至って普通の日常の風景がそこにあるだけなのだから。

そんな中、一人の少女が代々木公園前に向かって走り寄って来る。その腕にはややぐったりした黒猫が抱えてられていた。

長いポニーテールを揺らしながらかけていたその足は公園の入り口を前にして止まる。

激しい運動により荒くなった息を整え、

「……ここか？」

こくり、と黒猫――――B．Sが首を縦に振る。

公衆の前で人語を話すわけにはいかなかった。

千夜の鋭くなった眼が公園を見据える。

「公園全体を結界で隔離したのか……三途め、真っ昼間か非常識なことをやらかしやがって……」

「……君に非常識とだけは言われたくないだろうに」

ぼそり、と腕の中で独り言を吐いた黒猫を腕で締め上げつつ、

「中で何が起こっているかはここからではわからんが……行くしかないな」
「で、でも、結界が」
「私には夜叉姫の概念加護が常にある。すり抜けていくくらいわけない」
「……僕は？」

訪れる沈黙。
破ったのは、異様に陽気な千夜の声だった。

「さー、はりきっていくぞー」
「なにそのカラ元気な陽気さしかない棒読み口調はぁぁぁ―！！」

激しい抵抗を見せる黒猫をがっちり腕に挟んで千夜は前進。
中に入る瞬間の謎の「にぎゃーっっ」という悲鳴に、通りかかる人々が振り返ったが、それらしきものが見当たらずそれぞれが奇妙な思いをした。

◆◆◆◆◆◆

驚愕に、三途は自身の目が大きく見開くのを自覚した。

「……そういうことか……いや、しかし何故」

世界には輪廻転生の法則は敷かれている。

ありとあらゆるものが、来世へ無数の可能性を有している。

異種混合によって生まれながらにして禁忌という罪を背負わされた存在である混血――半妖を除けば。

カミがヒトに転生し、ヒトがカミに転生することも有り得ることだ。

ただここで修正が働く。転じるということは存在が変わること、かつてあった全てがただの記憶となり深層意識の奥深いところへ押し込められ、本人が思い出すことはない。

例え、過去にカミであったとしてもヒトに生まれ変わったというのなら、かつての力もその現世においては何の意味も成さない。

だが、

「……ありえない、前世の記憶と力をそのまま遺してあるなんて……一体、何故」

驚愕に染まる三途の唖然とする言葉に男は答える。

「おかしい、のも当然か。何しろ正規に沿って手に入れた生ではないからな」

「……それは、」

「――古に為された契約によって、吾はヒトの体に産まれ落ちた」

契約？と三途は口の中で一部の言葉を舌で転がすように呟いた。

僅かに遠い目をして男は語る。

「かつて、吾は人間の男と契約を交わした。男は己の願望を叶えるべく。そして、吾自身にも願いがあった。無償で叶う願いなどない、

祈ったところで誰が聞きとめようか。……それゆえに、吾と男は互いに願いを叶えることとした。幸い、我らは相手の欲しいモノを持っていたからな……」

焦らすような説明に三途は耐えながら、次を待つ。

「欲していたモノ……男は力、吾は……――人であること」

「先程人間の身体を欲するほど物好きではない、とご自分の口でおっしゃっていませんでしたっけ……？」

矛盾している言葉を指摘すると、

「肉体はな。……求めたのは、その生だ……終わりある、短き生を」

尚の事奇妙な話だと思う。

カミの殺されない限り続く悠久の命は人間には人間であることからには絶対に得られない高嶺の至宝。

そして、カミはそれを生まれた存在としての誇りにしている。

それをこの男は捨てた、と。

「貴方のようなタイプはそれこそカミであることを誇りにし、人間を見下す難儀な性格だと思うんですが……いろいろ変わった趣向をお持ちでいらっしゃるようだ」

「……哂うか、このような愚かな望みを持った吾を。吾とて、以前は貴様の言うように人間などコチラから見れば刹那の生しか与えられなかった蝉のような存在だと見下げていた。だが、長い時を用意されていると自分でも予測できなかったことは否が応にも降りかかるものだ……永遠を煩わしい、などと思うようになることも」

一瞬、男の口調に憂いが混じる。
しかし、感じた違和感を即座に覆い隠すかのように男はふてぶてしい態度へ戻った。

「そこへちょうどよく現れてくれたものでな……契約は為された。吾は人間の生を手に入れ……男は力を手に入れた。力だけはな」

浮べる笑みが酷くあくどい。
その手口に、あっさりとそれに乗った前世の彼に、呆れてしまって三途は渇いた笑みを口端に乗せるしかなかった。

「それにしては……うっかりさんが相も変わらずいるようですが」
「先ほどまではな。貴様のおかげでようやく契約に背いた痴れ者を完全に制圧することが出来た……ヒトのくせになかなかしぶとかったからな、少々骨が折れた」
「貴方に責められたくはないでしょうに……まぁ、私もなかなか痛いところではありますけど」

これほどまでの桁違いの存在に人間である蒼助は必死で抵抗し、自我を保ち続けていた。
そのギリギリのバランスを崩してしまったのは、他ならぬ自身であることを述べる青きカミの言葉が身体ではない別のものを深く抉る。
結果、蒼助は消えてしまった。
罪悪感が内側から染みて行く。
唇を強く噛み締め、自ら生み出した痛みで弱気になった自分を引き戻す。

「……ですが、これでもう何も躊躇する必要はなくなりました。

今度は私の質問に答えてくれませんか？　――――貴方の目的が何なのかを」

「……知ってどうする」

「そうですね。私の大切なモノにさえ関わらなければ、どうもしません。ヨソんちのことは関係ないのでお好きしてください」

「随分とあっさりしているな」

「触らぬ神に祟りなしですからねー……世界の危機が絡んできたらさすがに首突っ込みますが。この世界で彼女と生きていくには関わりますからね」

「ふん……貴様の言う大切なモノとやらに関わるようならどうする」

笑顔のまま三途は答えた。

「邪魔させてもらいますよ。でなければ、彼を切り捨てた意味もない。私の存在にも意味がなくなりますから」

「なら案ずるな。心配せずともどう足掻こうと貴様の存在意義はまもなくしてなくなる……この場でな」

それは生かしてここから帰さないという宣言だったのは聞くまでなかった。

ただではすまないというのは充分理解していた。

人間に転じているとはいえ、転生前の記憶や力を保持しているような相手だ。

実力もまだ底知れない。不安要素だらけの中に確実な勝機を見出せない。

だが、だからといって諦めるわけにはいなかった。退く気もない。

『――サンちゃん』

幻聴。

不意に聞こえたそれは幼い舌ったらずな声。

懐かしさと、過去の罪を思い起こさせる。

「ご冗談を。私はこんなところで死ぬ気なんてさらさらありません。守れなくなってしまうじゃありませんか、彼女を……」

約束を、と小さく付け足す。

「貴方には悪いが、彼女には指一本触れさせません。私も、ここで終わりもしない。命以外の対価ならいくら払ってでも、貴方を倒して、帰ります――彼女の元へ」

今だ痛みやまない胸を押さえつけ、もう片方の手にある拳銃を力強く握り締めた。

［伍拾壱］　蒼色の鬼神（後書き）

ようやく今月二回目の更新です。
テストやら部誌原稿やら予定がかさんでこっちがなかなか手がつけられないのです（泣
ちなみに部誌原稿というのは最近更新が多いＢＦＴの一章のこと。
ああ、一日二十四時間って足りない気がするのは私の頭がイカレてきてるだけ……？（ＹＥＳ

【伍拾弐】　不明の違和感

真正面から放った宣言に、男は大きく皮肉んだ笑みを浮かべ、

「俺を倒し、帰るだと？　……随分と大きく出たものだ、混血如きが。五分後、その台詞もう一度言えるか見物だな」

「帰るったら帰るんですよ。手加減してくれるなら、いくらでも怪我させてくれてもいいですから。その方が、あとで怒られる量も少ないもので」

「寝言は寝て言え」

命がかかっているこの場でそんな悠長なことは出来るわけないだろうが、と貼り付けた笑顔の下で三途は悪態づいた。

「……ふん、まぁいい。その意気込みに免じて貴様に許してやる。――――足掻きの先手を」

足掻きは余計だ、と思いつつも正しいのは否定できなかった。

相手と自分の力の差は恐らく大きいのは三途は充分わかっていた。三途の慢心に変じていない理性がそう予想づかせていた。力量だけではなく、男が使い魔の言うとおり生粋のドSであることも。

完全に絶望させたいのか。それとも、最初に衝撃を与えてそこからじわじわと堕として行きたいのか。どっちにしろ、ろくでもない。

だが、気になるのは、

……何だ、この違和感は。

言い様のない感覚が三途の中でとぐろを巻いていた。

明確とはいえないがこれは「居心地の悪さ」に似ている、と三途

は感覚から俄の答えを出した。
己という存在を異分子と見なされ、周りから拒絶されているような気分だ。
そういえば、とピチョン、と足元で響いた水音で別の観点に移る。
視線だけを下げてみれば、足元に溜まる赤黒い水溜りがあった。
三途の胸から流れ出たものだ。

……傷が塞がらない。

違和感。
半妖の身にはほぼ五分に分かれてカミの血が流れている。
世界に流れる霊気を糧とし、不死身に近い肉体を持つ性質であるカミの血が周囲の霊気を吸収し、負った損害を癒す――それが半妖の急速な自己治癒力の正体。
三途も過去何度それに助けられたことか。
だが、頼みの特殊機能は上手く働かない。そして、出血も勢いはなくなったものの、止血の気配は一向にない。
異様だ、と三途は眉を顰めた。
何かがいつもと違う。

……けれど、一体何が。

考える。
考える。
考える。
考える。

……って、落ち着きなさい私。

考えればいいってものではない。

敵は目の前で、いつ何をしてくるかわからないというのに。
先手は譲るという発言だって、背後からの不意打ちをやってのけた輩の言う事なのだから信じるのは愚行だ。

「どうした、半妖。……来ないのか？」

明らかな挑発。
こちらを舐めきっている態度に神経を波立たせないように精神を震い、三途はついに思い切りに踏み出した。

……やらなきゃ、やられる……というわけですか。

考えるよりも行動。
三途の中で選択は定まった。

「……契約を展開す。その身に刻みし名は汝の隷属の印……其が隷属は我が元にあり……」

三途の立つ場所を軸に周囲に吹き巻く風。
それは召喚の前兆だ。
ここに喚ばれるモノが降り立つ足音として。
呼びかけは続く。

「支配者たる我が喚び出しに応えよ――――来たれ、我が下僕！」

叫びと共に、三途の足元が青の光を放ち出し、光が紋様を描いていく。
円を描くように瞬く間に書き綴られていく紋様は魔法陣を形成する。
バシャリ、と濡れてもいない地面で水の跳ねる音が発せられたか

と思えば、次の瞬間には三途の姿さえも隠す勢いでその足元から大量の水が天に向かって噴き上がった。
それを見て、男は感心したように口を開き、
「ほぉ……随分と上等な水精霊（ミズノタミ）を従えているようだな」
男の見据える先で、噴き出る水の柱は既に無く。
あるのは、三途の周囲に漂う女性の姿を象った水――精霊だ。
「イギリスにいた頃に、使役した精霊でしてね。ブリテンの騎士王に【王者の剣】を貸し与えた湖の貴婦人です。気位が高さと私の若さの短気もあって、少々荒っぽい契約の結び方をしましたが」
ねぇ、と水の貴婦人に声をかけると貴婦人はその時のことを思い出したのか眉間にしわを寄せて不自然なまでに美しく整った顔を歪ませた。
戦いに負けてしぶしぶ服従したものだから、仕方ないといえば仕方ない。
ヘソを曲げる精霊に苦笑いしつつ、前を向き直る。
「自分の魔力に自身がないというわけではありませんが、貴方ほどの存在を相手に慢心している場合ではありませんからね。……彼女の力を借りて、譲ってくださった先手を打たせていただきますよ」
言い切り、口を閉ざす。
そして、意志を精霊へと伝える。
精霊はそれを感じ取り、姿を変貌させていく。
人の姿が崩れ、水の塊へと変わった精霊は大蛇のようにうねりを見せ、

「かの偉大なる王に剣を授けた清き水の乙女よ……今再び汝の身を以ってして王者の剣を顕現させることを――――我、下崎三途は命ず！」

命令が下された精霊は三途の言葉に準えるように己のカラダのあらゆる場所から無数の水の剣を生み出した。

全ての剣先が男に向けられる。

「考えたな……純血のカミによる攻撃ならたとえ同じ純血が相手であっても無事では済まない」

「わかっているなら……――――黙って全て受けなさい！！」

三途が張り上げた声と共に、無数の剣も一点を目掛けて一斉に引き絞られた矢のように放たれた。

水の剣の猛攻が男へと凄まじい勢いで迫る。

が。

……何故、動かない？

三途は男が回避するどころか一歩もそこから動こうとしないことに目を見張った。

避けるまでも無い、というかのようなその慄然とした佇み様。

だが、この水の精霊は生まれながらの聖なる湖から発生した生まれながらの高位のカミ。それも相当の年月も積んでいる。

そうとなれば、同じ純血同士であることも重なって傷つけることも可能であり、上手くいけば殺すこともできる。

しかし、三途の目に映る男の余裕は微塵も揺らぎを見せない。

それはもう目の前まで脅威が迫っても変わらない。

そして――――――

◆◆◆◆◆◆

公園の敷地に踏み込んだ。
途端、千夜の周囲に満ち始める異変。
それは、景色を覆い隠すほどの濃霧となって目の前に現れた。
唖然と、千夜は呟いた。

「何だ、この霧は……周りが全然見えないぞ」

疑問に対し、答えたのは腕の中で焦げ臭い匂いを放ちながらぐったりとしている黒猫――Ｂ・Ｓだった。

「君に対する……対策（トラップ）だよ。勘づかれて、ここに来られた場合のね」
「大層なもん仕掛けてくれたな。お前ら、ここまでして私に隠れて何しようとしていたんだ」
「――――玖珂蒼助を殺すつもりだった」

迷いの無い台詞に千夜の放つ空気が張り詰めるのをＢ・Ｓは感じた。
それは驚愕か。それとも怒りか。
殺気に至っていないのが、せめてもの救いだった。

「……怒るのは、まだ待ってくれ。理由はあるんだ、それだけの動機は」
「……言ってみろ」

感情を押し殺したことから来る無感情な声色がＢ・Ｓに先を促す。

言われるがままに、黒猫は口を開いた。

「三途は初対面から……彼の何かに気付いていた。そして、その直後に僕に命じたんだ――――彼の監視を」

「……それで？」

「その時点では、三途もどうにかしようなんて考えていなかったと思う。――――けど、昨日……」

言葉を途切らせ、Ｂ・Ｓの視線は己の前足の片割れへと下げられた。

「……この足、昨日メタクソにやられたんだ。……あいつに」

「……アイツ？」

何の話をしている、と言いかけた千夜の言葉を遮り、

「初台に足を伸ばした買い物帰りに、公園寄っただろ。見てたよ。……君が眼を離した……ほんの一瞬の時だったけど……“玖珂蒼助ではない何者か”があの身体を使った」

千夜は、歩みを止めた。

脳裏に過る青の残影。

ただ一度の邂逅に過ぎなかった、瞬間に焼き付いた色彩だった。

一度であっても、その男の鮮明な青色は記憶に焦げ付いて離れずにいる。

「しかも、大神（たいしん）級の純血だ。半端じゃない力の持ち主だよ……そんなのが、何で人間の躯なんか手に入れようとしてるのかはわからないけど……君を狙っていることは、向こうの口から証明されている」

Ｂ・Ｓの言葉は限りなく近くから発せられているのにも拘らず、その声が千夜の耳にはとても遠く聞こえた。

腕の中の黒猫を負傷させたという。

三途を窮地に追いやっているという。

そして、

『――――――奇妙な夢、見てんだ……』

夜中に起きた蒼助が語った夢。

『――――――……【あいつ】が現れるんだ』

瞳の中の不安を揺らして、脅えながら話していた話の中に出て来た、蒼助に『沈め』と呪いの言葉を投げかけてくる夢の中の何者か。

肉体そのものを焼かんばかりの熱による責め苦を蒼助に科した顔も知らない誰か。

全てが一つの答えに集束していく。

一つの記憶にある存在へと。

かつては、己を救った青色の男へ。

「――――……千夜？」

「……クロ、三途の霊波はどの方角から来ているかわかるか」

「え……うん、えっと……こっちだよ。こっちから三途の存在を感じる」

「よし、いくぞ」

そう言って、千夜は霧の中をＢ・Ｓの言葉だけを頼りに進み始め

た。

脳裏に、青の男の残影を掻き消せないまま。

【伍拾弐】　不明の違和感（後書き）

あんま進展してないな、くそ……。
今月は学校の課題が山積みでなかなかこっちに集中できない。背負う物が多過ぎるんだ。好きな事がやれないって、マジで辛いですよ。嫌いな事を押し付けられるのもね。

と、話が脱線しましたね、本題に入りましょう。
そろそろこの鮮血も手を出しにくい話数になってきましたね（単行本の十巻越えじゃないんだから
というわけで、各話のあらすじを五話～七話ずつぐらいまとめてアップしていこうかと思います。
いえ、決して停滞の時間稼ぎではありませんよ？
断じて！（↑じろ～っと白い目

【伍拾参】　起死回生の策

――――何の前触れもなく、右腕に痛みが走った。

そこから吹き上がる赤い飛沫と共に。

「――――う、くっ！」

何かが力づくで引きちぎられるような感覚が三途の内で起こった。

それは鎖。

束縛対象を繋ぎ止める首輪と己の間にある縛鎖。

それが、たった今、

――――――――対象により、無理矢理千切り取られたのだ。

「……っな」

精霊を使役するには、真名を知り、奪い、そして術者が己の名を精霊に刻み込む必要がある。
そして、一度この契約が為されれば、使役される側からは破棄することは出来ない。
そもそも従僕が謀反を起こさせない為の縛りだ。そんな脆い鎖ではどうしようもない。

だが、たった今。
あの精霊は力づくで己の名を三途から奪い返した。
腕に起こった突然の裂傷は契約を破られたその反動。

「……一体、何を」

新たな痛みに歯を食いしばりながら、三途は数秒前の事態を高速で脳裏に反映させる。
何の問題も無かった。
攻撃はまっすぐに目の前の【的】へと向かって行った。
問題は無かった。
後はその勢いのままに【的】に負傷、あわよくば八つ裂きにできれば。

だが、異変は起きた。
直撃のその瞬間、不意に【的】が不敵に笑みを浮かべ――――――
何かが変わった。

「何を？　何もしてはない。宣告通り、吾は指先一つ動かさず、貴様の先手を受け止めようとしたぞ……したのは、コイツだ」

【的であった男】は嗤笑し、擦り寄るように纏わり付く形無き【

それ】を愛でるように撫でる。
人の形を再び取るようになった【それ】は光悦とした表情で男に腕を絡ませ、甘んじてそれを受ける。
まるで心を奪われた――――まさしく虜の様。

新たな痛みの発生源となった左の二の腕を抑えながら、

「……彼女が、自ら契約を破壊したとでもいうのか？　ありえない、そんなこと……」
「賢人の名を冠する割には理解の乏しい魔術師だ。現実をその両目で見据えろ、現に【有り得た】だろう……」

男の云うことは正しい。
確かにこれは外部からの呪詛の類による間接的な破壊ではない。
三途の目から見て、男はそんな仕草は確かにしていなかった。
そして、三途自身も受けた感覚はない。

だが、【異例】だ。

こんなことは、歴史を紐解いても記されてはいないだろう。

『精霊による契約破棄』

無いことは無い。前者の例として、縛り付ける術者の精神衰弱及び魔力が契約を維持できなくなるほどまでに魔力が弱まるというこのいずれかの条件が揃えば、反抗意識が残る精霊は術者を殺して契約から逃れるということある。そして、後者は術者の死により、自動的に契約解除がなされるという例。

今の三途の場合にはどちらも当てはまらない。

ならば、一体――――

「わからないのか。貴様には、こんな簡単なことがわからないというのか？　……おい、貴様……魔術師を名乗るのなら、その知識の根底に敷かれる――――この世界……【全ての世界】の根源たる法則を思い出してみろ。そして、己の愚劣を目の当たりにするがいい」

男に突きつけられた言葉に、三途の思考がようやく正常な活動を起こす。

世界の根源たる法則。
思考が分析を開始。

世界の根源――――それは、色。

それは、【色彩概念（カラー）】と呼ばれ、この世界に存在するモノ全てに各々の概念が色として魂に塗りこまれている。
――――ヒトにも。カミにも。

【聖魔の両極】と名付けられた概念理論によって、その色彩がどちらにより近いかでどちらに属するのか、――――概念属性が決まる。

聖域は青と白と緑。
魔の領域は赤と黄。

これらの原色を基（もと）にその存在の概念属性は定まるのだ。

……原色？

記憶の何処かに尾を引かれたき気がし、その箇所をもう一度辿る。
途端、思考が一時急停止し、活動が凍結（フリーズ）した。

「……ま、さか」

衝撃が全身を突き抜けるじわじわとした速度に従って三途の両目がゆっくりと見開いていく。

「……マジ、ですか？」

こめかみに痛みが走る。
脳からの現実逃避の要求だった。
頭痛を堪えつつ、理性を振り絞って要求を突っぱねる。

「……とんでもない大物を当ててしまったようだね、これは」

そう、確かに大物だ。
ただし目の前のものは、

「――――――【原色者（げんしょくしゃ）】……大当たり～、ってやつですかコレは」

こんなくじ運いらねぇ、と夢なら覚めて欲しい気分で三途は絶望に浸った。

◆◆◆◆◆◆

――――――『原色者』。

概念理論によると、力において、存在においては色――――概念の純度に左右されると説かれている。

水色よりも藍。
橙よりも紅。

より基に近ければ近いほど、力と存在の優位は高い方へといく。
そして、その極点――――五色の元素。
全ての色は格色系統に属し、統一される。
統一を為すその一点の濁りのない色――――原色を概念として宿す存在。
一代につき各一色しか存在しない、その五名こそ――――

「だだっ広い世界に六人……遭遇する確率はそれこそマンボウの子供が生き残るそれくらい低いと習ったんですが……つくづく運に恵まれているみたいですね、私という者は」

運は運でも強運ではなく凶運だが。

概念理論。

何年ぶりに引っ張り出した知識だろう。
学院で講義された覚えはあるが、基礎中の基礎というだけだったので殆んど記憶の倉庫の中で風化しかけていた。
何しろ、覚えていても全く使う機会のないのだから。
これが通るのは、原色者に対してのみであり、その他に対しては力の差を左右する理由にはならないのである。
唯一の対象となる原色者は遭遇率は極低。

故に三途も殆んど忘れかけていたのだが、

「なるほど、納得です。【水色】である彼女が契約を無理矢理切るなんて約束に誠実なカミの信条を無下にしてでも貴方に鞍替えしたのも。……私の傷の修復速度の遅さも」
「ようやく理解したか。――――【紫紺】」

紫紺。
三途の概念属性だ。

傷が治りが遅い要因はそこにあった。

三途の【紫紺】を構成する色は赤と青。割合は４：６。
どちらかといえば青寄りの三途は少なからず目の前の【青の原色者】たる男の所属していると考えていい。

だから、なのだ。
青系統でいえば三途よりも遙かに上位である男に【霊質粒子（マナ）】を全て持って行かれている為、三途の身体は外部から取り込むはずの支援である霊質粒子なしで自身の体内の魔力のみを以ってなんとか治癒の作用を行っているのだ。

それだけではない。

三途の概念属性は青系統。

青の頂点である男に三途の中の青が服従し――――抑制される。

それによって三途の体内の魔力の巡りも通常よりも遙かに速さが落ちている。

１０分の４を占める赤の概念が三途の中にあることが完全に魔力の巡りを止められずに済んでいる唯一の幸いだった。

だが、それも幸いと呼ぶに及ばない。

なぜなら、

「さて、半妖――――――全て理解したな？」

男の言葉に、三途の混戦気味の思考は水を浴びたように冷えた。

そして、男の言葉の意味を三途は分析する。

全て、とはそのまま全てのことなのだろう、と。

『己が魔術を使えないこと』。

そして、己の身体の状態。

この身体は今、体外の大気に含まれる霊質の支援なしの上で辛うじて稼働している魔力で持ち堪えている。

だが、それすら中止させて、体内の全魔力を活動させ無理に『切り札』を行使しようとすれば、傷の修復は止まり、出血を止めるに至れた身体に負担がかかり止った体液は再び外へ流れ出る。

いくら混血の生命力が強靭であろうと、限度を超えた出血をすれば、悠長に構えてなどいられる状態ではなくなる。

即ち、この身に訪れるのは――――――死。

これ以上足掻けば、死。

そうしなくても、死。

結論から一拍の間が三途の中で置かれる。

そして、ふう、と深く溜息をつき、

「……理解、しました。最悪ですね」

苦笑を浮かべる三途に男もにこやかに笑う。

「全くだ。――――――死ね」

言葉の直後に強襲は始まった。

蔓ように細く伸びる無数の水が三途の全身に突き刺さる。

かつての使役していた精霊による容赦ない攻撃は、三途の足、胴、腕、肩、太股、胸を抉り刺した。

「――――――ぁ」

小さな喘ぐような声が漏れたのが最後だった。

貫かれた全ての箇所から噴き出る鮮血と共に三途の身体は宙に浮き、後方へと飛ぶ。
力のなくなった身体は、地面に放り出され受身などなく叩き付けられた。
うつ伏せに倒れた身体の下に紅い泉が湧いていく。

「……よし、もういい。契約は消えた、貴様は在るべき場所へ還れ」

男はそれを見届けると、精霊に元の場所に還るように命じた。

精霊は頷き、しゅるん、とその周囲との水と共に収縮して、――消えた。

それを見ることもなく男は前方を見据える。
起き上がる気配もない三途の姿を、しばし眺めていた男はその足を倒れる体の方へと踏み出した。
近づく気配にも、三途の身体は少しの反応も見せず、力ない四肢は静止している。

「呆気なかったな、生きて帰ると豪語した割には……」

見下ろす身体は応えない。
ただ、その下に、足元に、血だまりが広がるだけだ。

「この程度であいつを守るなどと抜かすか……戯言を」

動かなくなった女に吐き捨て、男は膝を折り屈む。

「まぁ、いい……あとはこの女の記憶からあいつの居場所を」

頭部に手を伸ばすが、不意に動きは止まった。
男の中で不審の感が過ぎったのだ。
それは男の行動を踏みとどまらせ、

「妙だな……術者である女が死んだというのに……――――――何故、結界が解けない？」

結界の解呪の方法は二つ。

張った当人である術者に解かせるか、又はその術者の死。
後者が成されたというのに、その成果は今だ現れない。

守ると言った女の執念が尚も結界を維持させているのか。
しかし、その考えは男を納得させるに至らなかった。

何かがおかしい、と男の内で勝利の感覚が消えゆく中で、更に、

「……何だ？」

血の領域はいつのまにか足元にまで及んでいた。
男は止めていた手を下げ、そこに指を置く。
しかし、指先に伝わった感触は滑りのある液体のそれではなく、

「……固まっている」

先程流れたばかりの血が、だ。
しかも、そこは何故か冷たかった。
男は三途の身体から離れようとする。

――――が。

「――――っ、な」

足が地面の固まった血に付いて離れない。

ここで男は初めて動揺を露にしつつも、何が起きているのかを把握しようと状況を確認する。

そして、目に入ったのは血だまりの外の半径一メートルほどの距離の地面だった。

そこには、あるはずのない霜が立っていた。

男の本能が警報を鳴らす。

そして、

「――――――捕まえた」

二度と紡がれることのないはずの声がさえずるを、男の耳は確かに聞き留めた。

同時に足を引き裂くような痛みが男を襲う。
見れば、

「っぐ、ぁっっ！？」

左足に突き刺さる――――一本の氷柱（つらら）。
それを突きたてたのは、

「、半妖ぉ……がっ」

燃える様な憤怒を宿した眼が見据えたのは、あちこち破れた衣服を己の真っ赤に真っ赤に染め、絶えず血を流しながらも突き刺した氷柱を握る三途の姿だった。
その眼は瀕死の人間とは思えないほど生命力に満ちていた。

「油断、大敵……ってやつ、ですよ……ダメじゃないですか、不、用意に……近寄るからこうなるんです、よ……？」

にやり、とシニカルに笑み、血塗れた口端を釣り上げる。

「しかし、賭けは勝ち……です」

「賭けだと……――――まさか、さっきの攻撃はわざと受けたというのか」

「直前まで迷いましたがね……こう……す、る……以外に、私に勝ち目はありませ……ん、ので」

「勝ち目だと……？　この期に及んでまだそんな減らず口を叩けるか」

この女は、自分と相対している限り魔術は使えない。

結界内にある霊質粒子は全て男の支配下に置かれている。

まだ魔力が行使出来る状態であるとしても、魔術を発現させる為に魔力を連結させる霊質粒子がなければ、ガソリンのないエンジンと同じだ。

魔術を使えない魔術師など、ただの人。

この場合、異種族との混血である目の前の女は混血を有する者全ての共通である『切り札』たる術が残されているはずだが、それもこの瀕死に近しい悪状況の中ではそれも出せまい。

実行しようとすれば、勝ち目どころかその過程で傷ついた身体がその負担に耐えきれず、死に至る。

敗北は決定打されているというのに、この女は尚もその口で言った。

勝ち目、と。

「……なら、訊きますよ？　この……貴方の足に刺さっているも

の、は……何だと……思い、ます？」

問われ、男は自らの足を貫き、地面に縫い付ける氷柱を見る。
湧き上がる疑問。

そういえば、とこの氷柱の出所が不明であることに気付く。
隠し持っていたというわけではない。
魔術で作り出したというのもないはず。

思考する男の下で、三途がくすり、と笑う。

「……さっき貴方がかましてくれたモノの一部、だったモノです」
「――――、……まさか」
「ええ……ぐふ、っ……貴方が私から横取りしたあの精霊を構成していた水です。私の内部に入り込んだ時に、失敬させてもらいました……」

途中、喉奥から込み上げた血に咽せつつ、三途は回答を述べた。

「言ったでしょう……賭けだったんですよ……契約を解除されてしまったとはいえ……それなりの期間を通して概念の接触はありましたからね……直接、私の概念にあの精霊の概念が触れればまだどうにかなるのではないかと思いましたね……いえ、一歩間違えば死んでいましたが……そこは根性ですよ」

たはは、と眉尻を下げながら笑みを漏らす三途に、男は唖然とする。

失敗と成功の紙一重。
上手く行くなどという可能性が限りなく低い中、僅かな希望に賭けたという無謀さ。

一歩先を常に予測し、計画を練ることを戦術とする魔術師とは思えない行動だ。
計画性を重視する魔術師が、僅かな希望に身を委ねるなど。

「貴様……それでも、魔術師かっ」
「甘いですね。三流はてめぇの計画が絶対通るなんて思って挑むから、万が一打ち破られた時にすぐに取り乱して御陀仏になりますが……一流の魔術師はですね、ちゃんと次をすぐに考えるんですよ……夏休みの計画と同じですよ……計画した通りにいく……ことなんて、ほ……とんど、なくて……その場その場でなんとかやり過ごすでしょ……そんなもんですよ――――こんな風にね」

最後の言葉が終わった直後に男は己の身体に起きている異変を察する。

――――氷柱が突き刺さる足全体に感覚がない。

それだけに飽き足らず、逆の足にもその前兆らしきものが訪れていた。
目を凝らせば、ズボンの布の表面に霜が浮かんでいるのが映る。
それが男の中で疑問の答えを見出させる。

流出直後にも拘らず固まっていた地面の血。
周囲の地面に立った霜。

「貴様……自分の魔力を……」
「ふふっ……バレちゃいましたか……でも、もう遅いですよ」

地面に伏せられていたもう片方の手が男の右足を掴んだ。

ひやり、とした冷たさ。
まさに――――――氷そのものの如く。
「やはり――――そういうことかっ……！」
男はようやく全てを察した。
三途の本当の目的を。

三途はわざと攻撃を受けたのは、武器を得る為ではなかった。
自身と相手を繋ぐ媒体が欲しかった。
そして、死すれすれの重傷を負ったのも計算のうちだったのだろう。
自分を油断させ、ここまで誘き寄せる為の。
更には、自身に残された最終手段を実行させる為に。

「貴様……っっ」

氷のように冷えた身体。

――――三途は、自身の体内で、巡る魔力を冷気に変換していた。
そして、冷気と化した己の魔力流を氷柱を通して足の傷口から流し込んでいるのだ。
傷を治癒し、命を繋ぎ止めていたはずの最後の――――まさに命綱を。

「ええ……そのまま放出しても貴方を確実に倒すどころか傷一つ負わせる事もなく無駄に終わってしまってもおかしく無いと思いま

したので……ならば、内側ならばと思いまして……ビンゴ、ですね」

「馬鹿かっ！　貴様、そんなことをすれば……死ぬぞ、半妖！」

少し前まで生きて帰ると言っていた者がすることではない、と男は愕然とした。

あのまま倒れて死を装っていれば、生き延びれた可能性はまだあった。

なのに、目の前の女はそれを選ばず、このような捨て身に身を委ねた。

治癒が働かなくなっただけが問題ではない。

女の中では自身の中で肉体を内側から凍てつかせる極寒零度の冷気が生み出されている。

自分を襲う現象は女にも起こっているはず。

恐らく、このまま行けば、凍った部分は完全に氷となり砕け散るだろう。

それは女の方にも例外ではないはず――――――

「……先程私を殺しかけた者が、言う……っ台詞じゃないでしょう……余計なお世話です、どの道……貴方が原色者と言ったあたりから……最、初の宣言は……取り消しましたから……」

直後、三途の左足――――足先から足首までが陶器が割れる時のそれにようにヒビ入り、

「……でも、一人じゃ死にませんよ……連れて逝きます――

――貴方を」

砕ける。

身体の崩壊が始まったのだ。

しかし――――それでも、彼女は執念と死にかけた身とは思えない程の強い光をその紫紺の瞳に宿し、氷柱を強く握り、新たな決意を宣言した。

［伍拾参］　起死回生の策（後書き）

えー、今回は説明しなきゃわかんないよーな用語が出て来たので、読者から苦情が来る前に解説しようかと思います。
まず、【霊質粒子】講座～、作者変な時間にこれ書いてるからちょっと変なテンションですよ～、ヘイヘーイ（誰か止めて……そんじゃ、持ち直して始めます。

まず、これは『マナ』とルビってあったようにＲＰＧゲームとかやってる人はこーゆー単語聞いたことありませんか？
これは元を辿ると、太平洋の島嶼で見られる原始的な宗教において、神秘的な力の源とされる概念である、というのが正規の知識です。
鮮血の世界観においては、世界の大気に混じる霊的資質で、魔術や呪術において必要不可欠な物質なんですね。実は、その個は人格の無い最下級の小さな精霊（カミ）なんですが、それ自体の力はとても小さく意思もないので、ただただ世界のあらゆる場所で漂う存在です。空気に混じっているので、山の澄んだ空気の中にいてリフレッシュされる要因も呼吸で取り込んだ霊質粒子を生命力に変換していることとしています本作及び天海の世界観では。
これらは概念であるが故に概念属性が大きく影響します。
今回のように、より強い概念に惹きよられる気質があるのです。
これによって三途は青色の男（仮）よりも青系統としての概念が劣っていたがために、霊質粒子が全て男の方へ行ってしまい、魔術が使えなかったんですね。
魔術や呪術――――術式を行うには、自身の魔力（霊力）だけではなく霊質粒子が必要なのです。この世界観において、魔力（霊力）はそれ自体を力とするのではなく、原料をエネルギーへと変える為の作用力で、術の源になるのは霊質粒子の方です。元々その存在が持っている魔力を霊質粒子に対し感応、連結させ概念浸食すること

で己の魔力に変換させ増やし、術を練り上げるのです。魔力（霊力）の強さは、霊質粒子の量に比例し、魔力が強ければ強いほど、数多くの霊質粒子を操作することが出来るのです。
ちなみに三途が霊質粒子なしで魔術を使っているように見えるますが……それについては次回の後書きで。
ちなみに花木や石、土地や川にも霊質粒子が宿ります。
それが長年の月日を積む重ねることで……あー、これはまた今度で。キリが無いから。後書きのスペースにも限界がありますしね。

他に、作中に疑問点や「これわかんなーい」的な要素や用語があったら、メッセージで送って下さい。ちゃんとお答えしますから。

［伍拾四］　限界の最期まで

「……でも、一人じゃ死にませんよ……連れて逝きます――貴方を」

逃がすまい。
離すまい。
ようやく捕らえた獲物を執念めいた光でギラついた眼で三途は見据えた。

三途の途切れ途切れの、されど揺らぎの無い決意を感じる言葉に男は信じられないものを見るような目を向け、

「……、……生きて帰るのではなかったのかっ」

男の言う言葉は三途の意志から外れたものではなかった。
ほんの少し前までは、それに対し未練があったのも事実。
だが、

「……そうしたかったんん、ですけどね……まぁ、貴方を逃がすくらいなら俄然こっちですよ……」
「っ……命が惜しく無いのか」

命が惜しい。
直後、三途はきょとん、と目を丸くした。
そして、その響きに三途は己の喉の奥からおかしさが込み上げてくるのを感じた。

「……命が惜しい？　……ぁ、ははははははははははは

ははははははははははははははははははっ」

三途は声を出して笑う。

ヒューヒューと喉を鳴らしながら、おかしくて仕方ないとばかりに。

男は気が狂ったように笑う三途を怪訝な眼差しで凝視し、

「何がおかしい」

「……くくっ……貴方の質問がですよ……もう、私にとって……その言葉ほど馬鹿らしいものなどありませんから」

おかしい。

おかしくて仕方ない。

三途は笑いが堪えられなかった。

それは嘲笑でも渇いた笑いでもなく――――ただ、純粋におかしかったから笑った。

一頻り笑い切ると、三途は口元の笑みとは裏腹の鋭い眼を男に向けて、馬鹿らしいと評した先程の問いに答える。

「――――答えは肯定です。……惜しくなどありませんよ……もはやこんな命。……だって、私は」

――――一度死んだ身ですから。

◆◆◆◆◆◆

三途の言葉に男はますます顔を顰める。

「……死んだだと？　……貴様、今度は一体……何を」

「ああ……勘違いしないで下さいね。死んで甦ったとか、肉体的な死ではあり……ませんよ？」

「……巫山戯ているのか……」

「いいえ……では、逆にお尋ねしますが……――――――生きるって……【生きている】ってどういうことですか？」

突然の問いに男は答えない。

それをいいことに三途は己の言葉を続ける。

「脳が動いていることですか？　心臓が鼓動を打ち続けることですか？　……違いますよ、そんなの……を……繰り返しているくらいじゃ……生きているなんて言わない……ただ、【在る】だけです。……人はね……笑ったり、泣いたり……怒ったり……苦しんだり……外部から入り込む事象に感情を揺れ動かして表情を変えて……生きる事に……目標や目、的……夢を……持ったり、誰かといる事に喜びを感じたり……しながら、……人生を歩むことで【生きている】ことを自覚して、証明するんです、自分に……」

身体が動き、命が宿ることが、それが【生】であっても、【生きる】ことを立証することにはならない。

二十四年という月日の中で存在してきて、三途はそれを自らの【生】を以てして知った。

「……私は、そういった意味で六年前に死んだんですよ……二年前、息を吹き返すまで……私は死人だった……ただ、彷徨

うだけの……」

六年前のあの日。

三途は生きる目的、希望の全てを奪われ、失い――――――【死んだ】。

それからは死人として、ただ意味もなく世を彷徨っていた。

死ぬ事は出来なかった。

『生きろ』

あの日、最期に【彼】が告げた――――――呪い。

彼は己を【――した】事に対する罰を三途に科した。

そして、立て続けに訪れた絶望。

彼が遺した少女を守る事で償おうと、残る人生を全て注いで生きようという願いすら、奪われた。

何もかもを失った。

【復讐】も。

【恋心】も。

【希望】も。

【贖罪】も。

たった一つ残った絶望の闇の中を、ただ一人歩む以外に何も無くなった。

四年の月日を虚しさと孤独を抱えて、過ぎる日々に三途は身を任せていた。

それに終止符を打つ日が来るなどと、思いもせず。

――――【彼女】が、己の前に再び現れた二年前のあの日まで。

「貴方が狙う【彼女】は……私にもう一度人間としての【生きる】実感……【命】を与えてくれたんです。灰色だった世界に色鮮やかな色彩を……感情を揺り動かすということを思い出させてくれたんです……」

今思い出しても、鮮明に記憶は映る。

自分が知っている幼い面影はなかったけれど、その立ち振る舞い、言動に――――――【彼】の面影を感じた。

夢を見ているようだった。

あの時の心が打ち出した気持ちは、まさにそれだった。

もう叶いやしないのだと諦めていた自分に、運命は哀れんだのか。

それとも実はとっくに狂ってしまった自分が作り出した幻なのか。

どちらでもよかった。

夢でないのなら、何でも良かった。

例え、あの頃のままでいなくても――――【生きていてくれた】という事実が救いだったのだから。

それからの彼女と過ごした日々は楽しかった。

楽しかった。

楽しかった。

楽しかった。

――――楽しい、という意味を思い出させてくれた。

【彼女】から与えられた二度目の【生】は語りきれないくらいに充実していた。

本当に。

本当に。

「……もう一度、言います……貴方は【彼女】の元へなど行かせません……ここで、私と……死んで下さい」

「何故……そこまでして……」

「何故……って、……決まってるじゃありませんか。――――【彼女】こそが私の全てだからです」

何も持っていなかった三途の唯一となった【彼女】。

あの喪失をもう一度、【彼女】で味わうなど――――絶対にあってはならないことだ。

脅威となる全てから【彼女】を守る事。

それが――――かつて、【彼女】の幸せをこの手で撃ち抜いた自分の贖罪だ。

「ならば……何故、授かった【生】を無駄にしようとする！　ここで捨て去れる程度のものだったのか、それはっ！」

「……違います、捨て去るのではありません……もらったものを……還す、だけ」

言い終えるその瞬間、ぐらり、と意識が揺らいだ。
もう視界は白くぼやけて、ほとんど見えない。
手足に感覚はとうに無くなっている。

男の方も既に両腕は動かなくなっているはず。
最初に浸食された両脚にはそろそろ崩壊の予兆が出ている頃合いだ。
目標は頂きである脳まで。
それまでに自身を保たせなければならない。

ぱきん、という音が遠くなった耳に僅かに届く。
もう片方の足も砕けようとしているらしい。

「……ま、だ……」

動いているか、もうその実感すらない舌で三途は自身を奮い立たせた。

もう少し。
もう少しだ。

この男を完全に仕留めるまでは、死ねない。
無駄死にだけは、絶対にしない。
意味のある死を。
この命を使って、彼女の為になれることを為すまでは、死ねない。

「……終わり、です……」

終着を予感し、三途は最期の気力を振り絞り全魔力を総動員させ

ようと――――

「――――――させるかあああぁぁぁ、この馬鹿女あああああぁぁぁぁぁぁぁぁ――――――――――っっっっっ！！！！！」

遠くなった耳が、確かな覚えのある、されどここには響く筈の無い声が紡ぐ荒々しい音を拾った。

［伍拾四］　限界の最期まで（後書き）

前回、書けなかった『何故、三途が霊質粒子なしで魔術が遣えたのか』を説明します。

……まず、前提として言っておかなければならないのが、【魔力】というものについて。

そもそも【魔力】とは、元は霊質粒子なんです。特定の概念を有した存在がそれを呼吸などの方法で体内に取り込み、己の中で概念に感化させることで概念に帯びた霊質粒子は【魔力】になるわけです。その違いは前者が天然物で後者が加工物といった解釈をすればわかりやすいかと。

魔術において霊質粒子が必要な理由は、『己の魔力が底が尽きるのを防ぐ対策』なんです。

前回では【魔力】は霊質粒子を操作する作用力だと書いていたと思いますが、その作用というのは【感応】なんです。

例えるなら、カスピカンヨーグルトの菌を牛乳に入れてその菌を増やす……わかりにくいっすね（笑）

まぁ、幼稚な説明で言うと一人が二人、二人が四人……そんな感じな過程で仲間を増やしていく、と。

まぁ、そんな方法をとるのも、魔術を立て続けに使うにはそれ相応消費がある。しかし、それそのものが持っているそれでは量と数に限界があるのです。カスピカンが食べたら減るように（まだ引っ張るか

魔術師を始めとした術者にとって、燃料切れは命取りですから、減ったら増やす、足りないなら増やすといった感じです。

さて、本題に戻りますが。

……前途の解説を見ればわかると思いますが、三途は自分の魔力を使って、しかし放出せず体内で冷気を溜め込んでいました。

ぶっちゃけ危険要素アリアリです。

ただでさえ、重傷負っててそれを持参の青の人（？）せいで動きがあまりよくない魔力が何とか遅効的に治癒してギリギリなのに、それを消費して体内で冷却？死ぬよ、普通に。半妖だって生身。生モノは凍る。内側から凍っていってます。小学校の頃に理科の実験でゼロ越えてマイナス何度まで行ったら温度計割れました。それみたくなってる三途です。

コイツの場合、自分が死ぬことに対し過去のトラウマから全く恐怖とか持っていないから、こーゆーことが平気で出来る。わざと下手すりゃ死ぬような攻撃を受けるあたりもそーですね。死亡フラグ立ちまくりキャラだ……。

と、話はわかりますがお報せです。

他連載「ＢＦＴ」と「魔王」ですが……6月一杯で削除します。

理由、ですが……ぶっちゃけた話、勢いってやっぱりダメですね。後から衰えはやはり来るものです。

魔王に関しては全く更新していないし、ＢＦＴもいずれそうなる可能性が非常に高い。

改めて考えてみたが、私に二つ以上のものを両立させるなど無理だ。どうしても支障が出る。

鮮血という作品はやはり月日がかかっているだけに設定がしっかり出来ていて、先もがっちり考えてあるだけに続いているんですよ、実は。

ぽっと出はなかなかそうはいかない。

もちろん、この二作品をボツにいうわけじゃないんですね。ただ、更新もされない、放置されて干からびていくぐらいなら一度御蔵にしまって改めて熟成させてやろうと思いまして。

ちなみにその結果が今皆さんが御覧になっている『鮮血ノ月』です（これには皆さんが想像するよりも遙かに時間と神経が使われています

暇さえあれば、ネタを考えるような人間です私は。
暇さえあればこれら二つのことも考えるでしょう。
これら二つの作品を見ていてくださった読者には申し訳ありませんが、作者の勝手をお許し下さい。
ちょうど鮮血も盛り上がってきたので、一つに集中したいのです。
ついでに受験生ですし（取ってつけた感じだな、ヲイ

それでは失礼シーマス。

【伍拾伍】　真打ちの見参

千夜が異常を知ったのは、腕の中の黒猫が突然と冷たくなり始めた時だった。

ふさふさとしていた毛並みの感触は黒の中に白い霜を立て凍り始めて。

柔らかかった肉の触感は足先から岩のようにゴロリとした硬さに変貌。

何の前触れの無く起こり始めた事態に千夜は思わず走りを止めた。

「クロっ……これは」

四肢を強張らせる猫は驚く千夜に、Ｂ．Ｓは悶え苦しみながら声を発する。

喉もまともに動かないのか、途切れ途切れの苦しげな言葉が、

「ま、ず……いっ……三途が……」

「三途が、どうした」

「……最終手段に……入っ、た……あいつもろとも……死ぬ、気だっ」

Ｂ．Ｓのその言葉を聞いた瞬間、千夜の理性は一瞬で弾け飛んだ。

訪れた衝動的な感情に駆られて、依然と苦しむ状態のB．Sすら気にかけず、再び走行を再開した。
その最中、千夜はB．Sに問いかける。

「クロ、死にそうか？」
「何そのヤな質問……」
「いいから、答えろ」
「……ぶっちゃけこれ以上にないくらい死にそう。つか、死ぬ」
「――――よし」

え、何が？と不意に降ってきた呟きに不吉を感じたB．Sはガチガチガチに強張った首を無理矢理上げて、千夜を見た。
見上げた顔は何故か無表情。
得体の知れない恐怖をB．Sに与えるには充分だった。
千夜は表情をそのままに、B．Sを見もせず言う。

「今がこれ以上にないというのなら――――これから起こることなんてワケないよな」

何を起こすの？と視線で問うと千夜は、B．Sの小さな身体を抱える状態から背中を掴むそれに変え、

「お前なら出来る――――逝ってこい」
「字がちがっ、あああああああああああっ！！！！？？？」

千夜が【目標】を視界に捉え叫ぶ瞬間、猫は豪速の投球となって風を切った。

◆◆◆◆◆◆

声の直後、三途の薄らいでいた意識は驚愕という衝撃に、はっきりと輪郭を取り戻す。

嘘、どうして、と思った三途の耳に、「ぁぁぁあああああっ」と叫び声が徐々に音量を上昇させて行く様子で届いた。

近づいてきている。

思わず直で聞こえる左耳の方向に顔を向けた。

視覚神経が麻痺した目にはほとんど何か判断できない。

だが、唯一まだ機能している色彩判断を神経が脳に送り届けた。

黒。

脳に届いた瞬間、顔面に衝撃と最大音量の絶叫がぶち当たった。

痛いと感じる前に、三途の力尽きる寸前の体はぶつかった【モノ】の勢いを殺せず、そのままゴロゴロと掴んでいた氷柱すら離して地面を数回転がった。

顔が下に来る度にその下で「みぎゃっ」と呻き声が聞こえたがそれどころではなかった。
ようやく勢いがおさまり、片足が欠けた身体が俯せに静止した頃には三途の思考は何回と響いた絶叫の主を解明した。

「……く、クロ？」

疑問系の三途の言葉に返事はない。
視界が利かなくなった三途を余所にボロ布にようになって黒猫は気絶していた。

「……何だ、今度は」

突然の乱入者に状況を見失っているもう一人――――青色の男は、誰でも良いからこの事態について説明してくれる存在を求めていた。
男の願いは叶えられたのか、

「おい」
「っ！」

耳元で不機嫌そうに囁かれた声に男は驚き、振り返る。
だ、確かに聞こえた声は主ともどもそこには存在していなかった。

直後、

「邪魔だ」

一方的に声が投げつけられたのは、男の振り向いた体勢から更に背後。

捩った上半身を元に戻した男の蒼い両眼にに映り込んだのは、

――――――折り曲げた片足を上げる黒髪の少女の姿だった。

少女――――――千夜は目付きを鋭く尖らせて言う。

「お前は、あとだ――――――ちょっと、どっか行ってろ」

突き刺すような蹴りが、三途によって注ぎ込まれた凍気によって凍てついた状態から立ち直っていない男の胸目掛けて放たれた。

指一本動かせない男に回避の術など与えられなかった。

「ぐっ……――――――！」

一瞬の呻き声を打撃音で掻き消し、己の蹴りで数メートル先まで立ったまま地面を滑りながら吹っ飛んでいく男を見届け、千夜は背を向けた。

とりあえずのところは大丈夫だ、という確信が千夜にはあった。

第一に、己の攻撃に対し甘んじたこと。

たった蹴り飛ばしたのが、いつぞやの【あの男】であるなら今の攻撃に対し避けるなり衝撃を殺すなりの行動は出来たはず。
それをただ受けたのは、身体の自由が利かない状態にあるからという結論に行き着ける。

第二に、三途によって道ずれにされかかっていたということ。
下崎三途は計算高く、やる事がイチイチ狡い。
大方、使い魔であるクロが此処に来る途中で何度か奇怪な悲鳴をあげたり身悶えをするような目に進んで遭い、罠に嵌めて畳をかけたのだろう。
それによって捨て身だった三途はもちろんだが、男の方にもタダでは済まない被害が及び肉体に支障が出ている。

なんにしろ、三途がやったことだ。
そう簡単に立ち直れやしないだろう。

男にことについては、一時そう片付けて、千夜は今相手にすべき存在へと足を運ぶ。
その相手は完全に目を回している黒猫をうつ伏せた状態のままその両脇に手を入れて揺さぶっている。

「――――三途」

相手――――三途は呼ばれたことに反応し、その拍子に黒猫をボトッと地面に落とした。
肘を地面に付いて、顔を上げる三途は千夜を見ていたが――――それは明らかに不自然だった。

何故なら、焦点が合っていない。
こちらを見ているように見えるが、実際ほとんど視力は無く姿は

見えていないのだということを証明していた。

「かず……や……？」

「ああ」

確認の声に応えながら、千夜は三途という存在の全体をその目に捉える。

ボロボロの下崎三途。

着ていた服はベージュのブラウスは血だらけ赤黒く変色していて、それもそこらかしこが破けて千切れてボロ布も同然となっている。

そして、決定的に使用前と異なるのは下半身の更に下――――足。

片足が欠けていた。

その不揃いの断面からは血は出ていない。

欠けた、元は足だった一部もまるで陶器を割ったかのように【砕けていた】。

どのようにしてそうなったのかは、曖昧にだが予想が付く。

ふつふつ、と感情が沸騰し出す。

そして、それはとうとう沸点に達し、

「この、――――」

ギュリっ。

硬く握り締められた拳。

ぐん、と頭上まで上げられたそれが目指し、軌道に沿って下ろされたのは――――

「っっっ馬鹿がぁぁぁぁ――――――――――――――!!!!」

「――――っっっ!!!!??」

三途の脳天。

そして、再び意識を激しく揺るがすような衝撃。

頭蓋の中身が縦に揺れたのを三途はこれ以上に無く実感し、天辺の患部を両手で押さえてプルプル痙攣を繰り広げながら、

「な、何を……か、軽く意識がイっちゃいましたよ……と、ゆーか私、怪我人……」

か細い声の反論を、しかし千夜は歯牙にもかけず、

「怪我人飛び越えて、死人になろうとしてたヤツが何を今更なこと抜かしてる。……――――――てめぇ、三途」

途端、口調が一変した。

それに三途の危機感知が反応を示す。

まずい、とさっき殺されかかった時よりも心境が千々に乱れる。

目がほとんど見えてなくなっていても気配だけでもわかる。

「あ、あの……千夜さん？」

ひょっとして、怒ってます？と三途が恐る恐る尋ねた。

答えは予想済みで、多分当たってると確信付きながらも。

「言いがかりだ。怒ってなどいない……ただ、腸煮えくり返っていて、お前をぶっ殺してやりたいだけだ」

「いや、それを怒ってると言……ぐぇっ」

最後まで言う前に、何かの圧迫によって首が絞まる。

服が引っ張られていることから、締め上げられているのだろうと三途は酸欠状態になりながら理解した。

その締め上げ方といったら、重傷を負った瀕死の相手にも一切の容赦がない。

意識を引っ張り上げた相手によって、再び三途のそれは霞み出す。

「……前に言った気がするがな……俺は、隠れて裏でコソコソ何かされるのが死ぬほど――――大嫌いだと」

「……ぐ、……え、それ……嘘つかれること、じゃ……」

「黙れ。知らなかったなら、今後の教訓として脳に直接書いとけ。大体なんだ、そのザマは……隠れてまで通したいことなら最後まできっちり完璧に完遂しろよ、情けない」

理不尽だ、と圧倒されながら三途は思った。

普段から理不尽だが、怒るとその極みに達してこの上なく理不尽だ。

こうなると、悪くないことまで悪いように思えてしまうのだから不思議な話だ。

「そ、そこまで……き、君ね……私は成り行き上仕方ないとはいえ……どーせクロが喋ったと思うけど……玖珂くんを、君の友人を殺そうとしてたんだよ？　それを完遂って……あれ、そもそも君それに怒ってて邪魔したんじゃ……」

「……」

その言葉を聞いて、千夜は呆れと怒りが入り混じった表情を浮べた。

違う。

それもあったが、そうじゃない。

怒鳴りつけようと思ったが、それがどれだけ恥ずかしい科白か口を開いた直後に気付き、声を引き止め、

「ああっ、もういい！！　おい馬鹿、口開けろ」

「せめて名前で……あがっっ」

開ける前に開けさせられた。

入り口に硬い異物が差し込まれると強制的に口を閉じさせられ、歯に当たった。

「むぐぐ～～っっ！？」

「お前の調合した【えりくしる】だ。死に損ないはこれ飲んで大人しくしてろ」

途中咽る様子も無視して、瓶の中身を全部喉に通すのを見届け、その場に三途を放置し、

「おい、起きろ猫。いつまでも寝てないでお前の主人のお守りして

ろ」

依然と白目剥いて仰向けになった状態で伸びている黒猫――B.Sの腹をグリグリと踏みつける。

右足の前後運動を何度か繰り返すと、猫はビクビクっと薬切れの中毒者の症状のような痙攣を見せ、

「――っっ、止めるんだカーネルサンダース！！　……って、あれ？」

「……ケンタッキーのおじさんがどうしたって？」

「か、カーネルさんが、カーネルおじさんが油で鶏を……それを邪道だって僕は生が一番と主張して」

「邪道はてめぇだよ野生の王国。あーもーいいから、もういっぺん寝てろよ」

ワケのわからないことを寝ぼけのたまう黒猫を三途の方に問答無用で放り投げた。

手元が狂って三途の一歩前の地面に直撃したのが、背を向ける際にちらりと見えた気がしたが、この際無視することに越したことはない。

にゃーにゃー、と叫び声と共に黒いモノが転げまわる姿を背景（バック）に、

「――――――さて、待たせたな」

背後の三途達から、距離を開けるように千夜は前へと進み出て、

「とりあえず、蹴っておいてなんだが……まぁ、まずは……あれだ」

コキコキ、と首を動かし鳴らす。
左に傾けた状態のまま、

「――――また、会ったな」

挑むような目付きで微笑った。

［伍拾伍］　真打ちの見参（後書き）

やっと千夜が出てきました。
人格と口調変わってますか？
キレるとこんな感じなんですよ、本気で怒ることは滅多にないけど。
心配されているのに、気付かない三途。
アホだ。

最近ふと思った。
更新速度が以前より大きく落ちていると。
イカンイカンと思い、考えた結果。
……ちょいと、潜伏して書き溜めようかな。
期間は……八月までか、それとも夏休み一杯か。
予定通りでいければ、前者で抑えられると思いますが、なにせ作者は夏休みの計画とやらを予定通り遂行したことのない無計画人間ですからなぁ～笑（笑いごとじゃねぇ
まぁ、そんなことでちょいと更新が止まります。
うまくいけば八月頭には更新を再開できると思いますが、間違っても連載が中断ってことはないのであしからず。

……今、ちょっと練ってる新作の方もあるので（またか天海またなのか

【伍拾六】　奇策姫の期待

――――――一体、何の因果が巡ってこうなるんだ。

千夜は己の状況について考え、気怠げに心の内でそう吐き出した。
柄にも無く自分の人生とやらと振り返ってみた。

「……」

思考開始――――――――終了。
僅か五秒の黙想だった。
もちろん、五秒の人生なわけがない。
五秒以上思考する気になれなかったのだった。

……改めてもロクなもんじゃないな。

己の今までの軌跡を振り返って、ゲンナリとした気分になる。
しかし、一つこの状況について頭を捻らす己を納得させる理由にはなった。

とことん、ツイていない。
常に厄介ごとが降りかかり、付き纏う。
それが己のこれまでの人生だ。

――――ならば、こんなことがあっても今更の話じゃないか、と。

だれる自分に言い聞かせ、千夜は数メートル先の前方の地に立つ男を見据えた。

三途の捨て身攻撃による被害はある程度立ち直ったのか、男は身体を慣らすように動かしていた。

己の十指をバラバラに動かしながら、男は言う。

「……乱入とは、無粋なことをする……だが、助かった」

「お前を助けたなんて思ってるのか？　……これはいつかのお前の科白だったな」

「……ふ、そうだったか……」

おどけてみせる男を千夜はジッと凝視した。

長く伸びた蒼い髪。

青い双眸。

目立つ特徴は千夜に確信を与えた。

間違いない『あの男』だ、と。

誰かはわからない。

名も知らない。

ただその存在をもって、千夜自身が知る玖珂蒼助ではないことのみを事実と証明している蒼き存在。

「……にしても、なんだ。こんな再会が……いや、また相見えることになるとは思っていなかったが……」

言葉探しの中、同時進行させる作業が千夜の内で行われていた。

――移行せよ。
――移行せよ。
――移行せよ。

思考回路の中で無機質な命令が繰り返し響き、脳神経全体に伝達していく。

「うちの馬鹿店長に関してはいい……――だが、【そいつ】は返して貰うぞ」

頭に命令はもう響かない。
それは作業が終わった証だった。

男を――――【敵】と認識を改めた、と。

対して、千夜の言葉に男は不敵な笑みを浮かべ、

「貴様が言っているのは……俺の身体を分不相応にも巣食っていた残りカスのことか？」

「……巣食う、ね……確かに、立場逆転されてたら残りカス呼ばわりもフォローしようがないなあの馬鹿……――だが、俺は生憎その馬鹿を要求している。お前の身体、返してやってくれ」

「出来ない――――と言ったら、どうだというのだ？」

お決まりだな、と返された返事を千夜は然程反抗無く受け止めた。

この要求も通過上必要だと思ったから、言うだけ言ってみただけものだった。

要求を蹴られるのも、承知の上で。

そう、必要だったから。

本来の要求を通す為の、通過条件として。

「――――そうか、まぁ俺は一応言ったからな……これで、あとで文句は言えないぞお前」

あとで言い逃れできないように、手筈は踏んだ。

これで本来の自分のやり方を通せる。

労働だ。

だが――――簡単で、てっとり早くもある。

「……もう一度言うぞ。――――その身体、アイツに返せ」

「くどい」

「……あ、そ」

千夜の思考は完全に切り替わる。

一瞬伏せられた双眸は、目尻をきつく吊り上げて、

「なら、強制退去だ――――――来い【夜叉姫】」

すると、まず千夜の腕が動いた。

ここにいる誰にかけられたわけでもない言葉に応えるかのように、

何かの余興のように上げた右腕に集束する力の顕現を促す暴風。
強大な力を有する存在が近づいて来ていると言う証明。
男は僅かに眼を細めるが、邪魔をするわけでもなく動きを見せない。
千夜の行動を見届けようとするようにも見えなく無いその体勢を、視界に入れつつ千夜は無視して右手に向かい入れる一振りの【相棒】に意識を傾ける。

「舞の時間だ、舞台に上がれ」

千夜の促しにそれはついに姿を見せた。
手にしっくりと馴染む硬質な感触に、存在を確認する。

三途の結界で隔離された空間に新たに現れたのは――――白い刀。
通常の刀よりも遙かに――――千夜の背丈ほどもあると思われる刀身に反りのない直刀だった。
それが通常と異なる点。それは色だった。
鉛色が常であるはずの刀身は雪のように白い。
刀身のみならず、蓮の紋様に彫られた鍔、柄――――全てが純一色で彩られている。
芸術品と呼ぶだけでは賞賛にすらならないその直刀は――――まさに『宝』と呼ぶに相応しい道具とは思えないほどの気高さと存在感をその細身から醸し出していた。

「言い方を変える……――――そいつは返してもらうぞ」

神々しいまでの得物を携えて、千夜は男に宣言を放った。

◆◆◆◆◆◆

身動きのとれないまま始まろうとしている目の前の戦いに、三途は歯噛みしていた。

「……無茶だ、あんなヤツ相手に霊装のみで戦うなんて……、くそっ……」

憎憎しげに己の足首から下を失くした足を見て、舌打つ。

しかし、その表情も次の瞬間には苦痛に歪む。

通常の体温に戻ったことで、凍結されて無くなっていた感覚が戻り、傷が再び疼き出したのだ。

支えていた腕が震え、力が入らない。

「……ぐ、……っっぁ」

気力を振り絞り、足りない足でも立ちあがろうと奮闘する三途の意思も虚しく腕がガクリと折れて、浮いていた上半身が地面に向かう――――が、

「――――おっと、危ねぇな」

地面におちるはずだった三途の上半身（からだ）を受け止める腕が、ここに在る筈のない声と共に現れる。

寸でのところで止まった状態で三途はやや靄のかかった状態まで回復した視界でその人物の姿を捉えようと顔を上げた。

輪郭がにじみ、顔ははっきりと判断出来ない。
ただ、幸い三途に認識させる特徴が見つめた先にはあった。
二つの黒い靄――――サングラス。

「し……ま、さん？」
「おっす。ひでぇカッコしてんな……」

眼が見えないに等しい三途に志摩はニカ、と笑った。

「どうして、ここに……」
「だから言ったじゃねぇか、気をつけろって」
「質問をスルーしないで下さい」
「かー、そんなんなっても細かいなぁ……まぁ、あれだ――――全ては黒鬼姫の手の平の上にあったということさ」
「――――っ！」

三途の表情が、驚愕とショックの色に染まり強張る。

「……あの雌鬼はっ……私がすることも全て知っての上で……」

ギリ、と忌々しげに表情に屈辱感を滲ませて歯を噛み締める三途を見て、志摩は追い打ちをかける。

「お前如きがあの奇策姫の裏をかこうなんぞ無茶な話だった……ってことだな」
「……っ、志摩さん起こして下さい！」

カッと顔を赤くして立ち上がろうともがく三途からの要求を、志摩は――――突っ撥ねるように支えに差し出していた腕を退けた。

「っっ……志摩さん、殺されたいんですか」

支えを失くして地面に急行落下した三途はギロリと志摩を下から凄むように睨んだ。

そんな殺気を受け流すように志摩は飄々と答える。

「そんな状態で闘うってか？　無理無理、つーか行っても邪魔になるだけだぜ」

図星を突かれ、三途はうっと唸る。

この空間では魔術は使えず、身体も半死半生の目にあってボロボロで立つ事すら出来ない。

足手まとい以外の何者でもない、というのが三途に置かれた現状。

さっと頭に上っていた熱が急激に冷めて、三途はそれを再確認し、意気消沈を表情に表す。

「……でも、私は……」

歯痒さに悶えるように目を強く瞑るそんな三途の頭上に降る言葉があった。

対照的に目の前の対峙を見ながら平然としている志摩だ。

「あの嬢ちゃんのことなら心配いらんさ」

何を根拠に、という三途の疑心の視線を受けて志摩は言葉を返す。

「忘れてねぇか？　――――今回のことは全てあの女の手の内に収まっているんだ、悪いようにはならねぇよ、多分な」

サングラスの奥に見えない思惑を抱えているであろう志摩はニヤリと笑った。
三途は不安を拭えないまま、目の前の戦況に視線をやった。

◆◆◆◆◆◆

飛来する力の眼前に千夜は一つの明確な事柄を悟る。
この相手は――――――久々の強敵だと。

「夜叉姫」
『――――御意』

直刀が音声を発し応えを返すと同時に、攻撃が千夜の元に達する。
指す様に翳した夜叉姫の切っ先に接触した瞬間、その間に突如光壁が生じる。
力と力の拮抗から生まれた中立の障壁は互いの力が同等であることを示していた。

「……っ」

想像以上の強大な力に、気を抜けば後方へ圧されるであろう地に付く足に力を入れて踏ん張る。

「、姫の【絶壁】にこれほどまでの抵抗を示す力は今まで数えるほどしかなかったが……こいつはなかなかキツイ――――――だが」

小刻みに震えそうな腕を集中力で押さえつけ、地面を足先で浅く

抉る。
だからどうした、と鼻で哂うような笑みを口端を吊り上げて浮かべて、
「コイツの障壁は【絶対】だ。――そうだろう、夜叉姫！！」
『御意――主様のお望みのままに』
その刹那、続いていた拮抗が一気に崩れる。
千夜の意思が形になったかのように、夜叉姫を一薙ぎした瞬間、男の力が跡形もなく散った。文字通り『霧散』したのだ。
振り返り、千夜は音量をやや上げて数メートル離れた背後にいる男に言い放つ。
「おい、何でいるのかはこの際どうでもいいからそこの一人と一匹を連れて離れろ、志摩雪叢」
「はいよー」
ひょい、と黒猫を肩に、三途を小脇に抱えて戦況から離脱するべく小走りしていく志摩の姿を確認して、再び前を向く。
これで動けるようになった。
「さて、次は――俺の後手を行かせてもらう」
得物を振りかざし、千夜は疾走した。
降り注ぐ光弾の中を突き抜けた先にいる標的に向かって。
◆◆◆◆◆◆

向こうとは数十メートルは離れたと判断した志摩は周囲付近の一本の木に近寄りそこで三途を下ろし背中を凭れ掛けさせる。
猫は適当にその付近に落としておく。
ボトッと傾けた肩から自然落下した黒い物体を尻目に任務完了だ、と自己完結が志摩の中で為される。

「よし。ここまで来りゃ、とばっちりはまずないだろうな……一安心一安心」
「……志摩さん」

成し遂げた表情でいた志摩に三途の声がかかる。
視線を下げた志摩の目に映る三途は唖然の表情を顔に身に付けていた。

「……アレは、一体何なんですか？」
「どれだのことだ？　譲ちゃんか？　それともあの蒼いのか？」
「……剣です。千夜の持つ……あの刀の姿をした霊装です」

千夜が今目の前で披露している白い直刀【夜叉姫】は、裏ルート専門の商人として多くの様々な霊装や武具、曰く付きの物品と出会い扱ってきた三途自身も知らない見たこともない代物だった。
それは『再会した日』から三途の中でとぐろを巻いて居座っていた疑問の対象だった。
再び合間見えた千夜の元には『あの人の武器』はなく、見知らぬ白い霊装。
彼女がそれを振るう場面は見たことが幾度かあったが、そこでは霊装の秘める効能を目にすることは一切無かった。
自分といる時点で、それを使用するほどの敵に遭遇していなかったか。
それとも他人に見せないようにしていたか。

いずれにせよ、千夜は今まで己の霊装を単純な武器としてしか扱う姿は見せず、自身の霊力のみを用いて戦っていた、と思っていた。
そして、先程ついにその秘めたる力の片鱗を見せられた。
しかしそれは疑問の解決にもならず、新たな疑問を生み出す素に留まるだけとなった。
だからと言って尋ねたところで志摩が識っているとは限らないことを承知の上だったが、

「ああ、アレな……」

その反応は三途の予想を裏切った。

「っ、知っているんですか？」
「俺も直接目にするのは初めてだけど。……まぁ、お前が識らないのも当たり前だわな。なにせアレは四百年間の年月の間、ただの一度も一目に晒されずにいた眠り姫だからな」
「……どういうことですか？」
「……――あの【夜叉姫】はな、かの一族が用いる【黒の三神器】を初めとした多くの漆黒の霊装の中で唯一の白い霊装という別格の番外として存在し、四百年の間誰も使い手になることなく薄暗い蔵の奥で埃を被っていた代物なのさ」
「何故、誰も使わなかったのですか？」
「……正確に言えば、【彼女】は誰も認めなかった。己の使い手として何者を受け入れず拒み続けた。最初の主以外は誰一人、な…
……ちなみにその霊装としてのこの世界にそ現存する中で指折りで数えられる内に入るほど力は極上だった、かつては誰もが使い手として申し出たほどに」

それは一体どんな力だったのか。
三途が問うと志摩は詳細を語る。

「あの霊装に秘められた霊力はさることながら、一つの概念が特殊能力として組み込まれていた。――――――その概念の名は【絶対顕現】」

「絶対、顕現……？」

言葉だけでは意味が三途には解せ無かった。

それを予知していた志摩はその内容を言葉に乗せて連ねる。

「あの霊装は使い手の意志が望む要求に応え、叶える。さっきが良い例だ。嬢ちゃんが夜叉姫を翳した時、防壁型の結界みたいのが発現しただろ？　あれは防壁を発現させろという嬢ちゃんの念に夜叉姫が応答し、実行したのさ。夜叉姫自体に防壁展開の機能は添付されていない。出来るはずのないことを、本来の己にはないはずの機能を、あの霊装は健気なことに不可能を可能にしたのさ。主人たる使い手のいかなる要求も絶対として受け入れ、顕現させてみせる。それが霊装【夜叉姫】の力だ……で、どーゆーわけか何百年も誰も受け入れなかったその偏屈なまでに一途な姫刀（ひめがたな）をあの嬢ちゃんが陥落させちまったつーわけかなぁ」

志摩の講義が終わる。

しかし、三途の耳には最後あたりから入ってきていなかった。

【かの一族】。

志摩の言葉の中で出てきた単語。

その明確な表しではない曖昧な表現から三途が辿りつく意味は一つしかなかった。

三途の脳裏に一人の男の姿と、その場面で吐き捨てた科白が鮮明に浮かぶ。

――――――……アレは死んだ。早々に忘れるがいい……その時が来る日まで。

彼女の死を伝えた男が、同時に言い残した矛盾した不可解な言葉。
そして、志摩の言った事が真実なら、あの男の一族で保管されていた霊装を千夜が所持している意味。
この二つの要点が重なり合うと導き出される――――空白の刻の中、彼女がいた『場所』。

彼女が見せる戦闘スタイルは『あの人』と酷似していた。
『誰が』それを仕込んだのか。
『何処で』それが出来るのか。

そんな完成間近であったパズルに最後の一片（ワンピース）が嵌めこまれた。

完成したパズルが描くのは一人の幼い少女を模る漆黒を纏う鬼女。

彼女と同じく六年前に姿を消した。
彼女と同じく二年前に再び姿を現した。
千夜の在るところには、影ように必ず存在する。

――――『黒蘭』。

黒き妖艶なる乙女のほくそ笑む姿が三途の脳裏を過ぎる。
奇策姫。
あの、あらゆる全てを己の手駒に仕立て上げ戦局を思うが侭に進める女にこれ以上にない称号だ、と志摩の称した呼び名を三途はしっくりと胸に居座らせた。

何処までか策なのかわからない。
何が策なのかわからない。
策とは到底思えないような事まで策に仕立てる。
常に裏の裏をかき、奇抜な幾重にも張り巡らされた己の思惑に他者を絡めとる女郎蜘蛛の糸の如く。

そして、三途自身もとうに彼女の手の内の中にある。
意志があるにも関わらず、それすらも奇策姫は己に抗う意志の先を読み思うが侭に糸で括り無理には修正せず、徐々に、緩やかに――己の思う道へと乗せていく。

……そういうことか。

三途は悟った。
これも黒蘭の奇策なのだと。

あの女は自分が千夜の為なら何だってすることを熟知している。
そうして、危険因子である玖珂蒼助が例え千夜の友人であっても、躊躇はしても抹殺の行動は起こすと見透かしていたのだ。
恐らくは――――結果がこうなることも。
だとすれば、あの女はあの蒼色の怪物が何者なのかも知っているはずだ。
玖珂蒼助がそれを内に宿していたことも、その理由も。
蒼色の男の危険性も。
きっと全てを知っているあの女は、何をするつもりでいるのだろうか。

――――――玖珂蒼助という人間を使って、どんな奇策を練ろうとしているのか。

「――おい、三途」
「っ」
肩を叩かれ、三途はハッと我に帰る。
反射的に顔を上げると志摩の訝しげな顔が視界に入った。
「どうした、急に黙り込んじまいやがって……死んだかと思ったぜ」
「……勝手に殺さないで下さい」
幸い足の欠損を除き全身の傷は治癒を再開している。
無論、痛みは最悪だが。
「……この闘いだがな。理論上では、夜叉姫を持つ嬢ちゃんに勝敗が上がる。霊装に込められた【絶対顕現】が決め手だ。【絶対】っつー概念は一種の反則だ。なにせ、そいつに他が並ぶことなどできない。それこそ、【絶対】に。他がないからこそ【絶対】という概念は存在し得るんだからな。嬢ちゃんの望みを【絶対】のモノとして形にするあの刀は、あらゆる攻撃を無効にし、望まれれば切れないモノも断ってみせるだろう。それが実体のない魔力であろうとあの蒼いのを護る概念防壁であろうと。盾と剣の役目を同時にこなすあの霊装【夜叉姫】を持った嬢ちゃんは、まさに無敵だ。どんな相手にも【絶対】を操る彼女に勝ち目を見出すことはまず不可能だ……」
確かに志摩の言うとおりだった。
言葉がそのまま現実になるのであれば、千夜はあの化物にだって勝てるだろう。
だが、腑に落ちない点を三途は見つけた。
「……志摩さん、理論上というのは一体」

「そのまんまだよ。何の問題も無く事が進めばそうなるという俺が立てた仮説だ。……だがよ、仮説がそのまま結果に成り代わることはそうあることじゃない。理想と現実は必ずといって良いほど、どっかで噛み合わなくなる……必ず何処かで想定外の事態が発生して、な……」

茶化してはいるが、ふざけているようではなかった。

それを証明するかのように、ずり下がったサングラスからはみ出た眼差しは真摯なものであった。

それも正しいと言える、と三途は認めざる得なかった。

何しろ少し前の三途もその仮説を現実にしようと目論んだが、なしえなかったのだから。

物事の勝敗を決めるのは強さの差異だけではない。

例えどちらの力も同等であるという場合でなくても、運という見えない力が関わってくる。

例えば、劣勢である方に勝機が傾くことさえも。

「……志摩さん」

「何だよ、ビビっちまったか？」

「……貴方は……いえ貴方も、あの鬼の手駒に収まっているんですよね？」

「……」

沈黙は肯定ということか、と三途は言葉にすることなく自決した。

思い返せば、店で発したあの忠告めいた言葉からそれらしきと拾えるものが在った。

貴方も、と先程自分が言った表現に皮肉さを感じた。

自分もそうであると無意識に認めてしまったようなものだ。

あれほど、あの鬼の思うようにはなるまいと反抗していたのに、

結局は思うが侭にされてしまっているのだから、今更否定しようがなかった。

「……私は、このままでいいんでしょうか。このまま、あの女の思い描くがままに動かされていて……信じて、いいんでしょうか？」

「藪から棒だな……どうした？　つーか、信じてんのかアレを？」

「観念しようかしないで迷ってるんです……だから一足先に下ってしまってる貴方に意見を聞こうと思いまして、ね。……だって、そうでしょう？　今回の事でちょっとキちゃいました……どれだけこの先あの女に歯向かっても結局はあの女の思うように収まるんですから……それぐらいなら、いっそもう……」

「――――三途」

制止にも取れる志摩の声が割って入った。

三途はそれに妙な力を感じ、思わず言葉を止めた。

「……なぁ、三途。お前はなんか勘違いしてるようだが言うがよ……俺ぁ別にあの鬼のすることをイチイチ信じてるってわけじゃねぇぞ。つーか信じてねぇし、信じられねぇよあんな得体の知れねぇ思考の持ち主」

「なら、どうして……」

「ただな……俺がしなきゃならねぇ……したいことをする先にあの女がいる。まぁ、そこに乗っかっても乗らんでも出来るにゃ変わらねぇが、乗っかった方が確実に進めるから俺はそっちを選んだ。その方が俺がしたいことがすんなり巧く運べるから、だ」

「……何ですか、貴方のしたいことって」

にやり、と志摩が悪そうな笑みを浮かべる。

腰をかがめ、三途の顔に自分のソレを近づけて、

「そりゃ――――ナ・イ・ショだ」

途端、三途は顔一杯にゲンナリ、という心情を露にした。

「……イイ歳こいたオッサンが人指し指口に当てて内緒を区切りながら言うって気色悪いですよ。寧ろイタイ」

「こんな時でも容赦ねェな、お前ってヤツは！！」

「こんな時だからです。劣悪は正さなければ世の中のオジサンに申し訳ないでしょう……まぁ、自分の失態よりもみっともないもの見せてくれたおかげで幾分立ち直れましたが」

「すっげぇ釈然としねぇが……三途、お前もう一個勘違いしてるぜ」

「は……？」

志摩の唐突な発言に三途は間の抜けた声を出した。

他に志摩が言うようなことに思い当たることなど、三途自身にはない。

答えはすぐに志摩本人から出された。

「黒蘭に踊らされてたって自分の事を言ってたがよ……そりゃ違う。

――――お前はアイツの期待に応えただけだ」

三途は言葉を失った。

意味がわからない、と表情でそれを主張していると、察した志摩は先を続ける。

「前は俺もお前と同じように考えていた。だから言ったんだ、アンタは大した策士だ、ってな。……そしたら、アイツなんて答えた思

う？　――――私は貴方たちが動ける下準備をしているだけ、そこに寄せた私の期待に貴方たちが応えてくれてるだけよ……だとさ」

「……どういうことですか？」

「まぁ、俺もようやく最近になってわかってきたんだがな……あの女は手駒を自分の思い思いに動かしてはいない。ただ、本当に期待してるだけなんだろ……自分の施した下準備だけで手駒がどんな活躍を見せるのかを。想像はしている、だがその通りになるように自分の手は加えたりはしない。ヤツはこうも言っていた。――――自分はシナリオをつくる脚本家でなく、舞台設定を整える裏方だ。役者が演技を出来る下準備を整えることが出来たら、後は観客側にまわって傍観するんだとよ。次の展開、役者が演じる登場人物がどう動くのか予想し期待する。自分はストーリーを考える役じゃなくて、見て想像して楽しむ方なんだ、と」

「……つまり、私があの女の期待に応えたという言葉に沿えば……私がこの状態になることがあの女の予想だったということですか？」

「そういうことになる。……ちなみに、あの女は今のところ期待ハズレは……過去にあった一つを除いて無いらしい」

過去にあった唯一の期待ハズレ。

それを為した存在について。

どんな期待ハズレだったのか。

気にはなったが、今はそれどころではなく、

「でも……結局は、あの女の思うように事は運ばれ続けたんじゃないですか……腹立たしい、なら自分で動かしても同じじゃないですかっ……」

「――――だからこその【奇策】さ。……準備して、期待する。ただそれだけ。型破りな策士だろう、あの鬼姫は。まさに【奇策姫】

だ」

その称号の真の意味を知った三途は、重いものを吐き出すように深い息を漏らした。

「妙な気分です……その筋でいくと、私は誰の意志でもなく私の意志で行動した……にも関わらず事態はあの女の……期待通りに進んだ。そうがそうなら、踊らされているわけではないのにこのすっきりしない胸のつっかえはなんでしょうか」

「そこは単純（シンプル）な思考でいこうや。あの女の期待が外れるってことは、俺達にとっても都合の良くないってことに繋がるんだからな……それに、今気にかけるべき着眼点は――――」

志摩はくたびれたコートの胸ポケットから煙草を一本取り出す。ゴソゴソとそこから下に下がった先にあるポケットに手を突っ込み、火をつけるライターを探した。

手応えは程なくして志摩の手に収まり、口に咥えた一本の先端が朱く灯る。

一度煙を肺に溜め、吐き出しながら志摩はようやく続きを言った。

「――――今、奇策姫の期待はこの場のどちらに寄せられているか……だな」

サングラスの闇に隠れて見る側からは志摩の眼の焦点は曖昧だが、目の前で繰り広げられる戦禍の元へ向いていることだけは確かだった。

［伍拾六］　奇策姫の期待（後書き）

どうも、負け犬です（え
前言撤回。更新停滞取り止めです。
自分と言う存在のことを忘れていました。
……時間と猶予が与えられたところで、実績が上がった試しがない私（遠い目

というわけでタダイマです。
無駄な足掻きですた。
我が愚行の極みですた。
とりあえず、ようやく溜まった一話分を更新しました。

（そんな作者の心境）……ｏｒｚ。

ナンダヨコレ（誤字あらず。作者の精神状況はまさにこんな感じ）
戦闘メインのはずが、躍動感が全然ねぇ。
ひどい……酷すぎる。
何が酷いってそれをわかった上で更新するさくｓｈ（ブチグチョっ

―少々お待ち下さい―

……何だか、肩から下がスースーしますが気にしないで内容へ。
黒蘭。出てもいないのに、後半出張ってる。
奇策＝人が予想もしない策。奇計。
この意味を当てはめたら黒蘭のやってるそれは奇策の中でも奇策と成り得る異端でしょう。

だって、策ですらなく計画しているわけじゃないんだもの。

必要最低限の仕事である舞台設定と役者抜擢。
ヤツが事実上自分でしているのは本気でこれだけ。
そして、重要なのはコレ――――期待。
次の展開に対する期待。
役者に対する期待。
それに意識もしていないのに、役者は応える。
何の仕組みも施されていないというのに、彼女の思うように運ぶ展開。

策ではないのにまるでそれは巧妙に練られた策。
奇策以外に何と呼べるのか。

ちなみにネタをポロリすると、黒蘭は昔は自分で普通に策を練っていた。物凄く手が込んでいて、それに絶対の自信を持っていました。
そして、ただの一度の不発はなかったのです。

――――彼女の永い生の中で深く刻まれることになる【あの時】までは。

以来、彼女は自分の手で物事の展開を動かそうとはしなくなりました。
そして、最後の賭けに出ています。

最後の賭けとは？
それは今後の先でわかることでしょう。
（これからというところで切られた読者の白い目）……ひぃ、やめて許し（ぐしゃ

［伍拾七］　完成間近のパズル

機関銃の乱射。
相手の攻撃は勢いはそれに等しい激しさだった。
数える暇など数の光弾の飛来。その一つ一つの差異の速度は僅かしかなく、殆んど同時に着弾しているような錯覚さえ感じさせる。
激しい責め立てに千夜の足場は見るも無惨に抉られていく。
避けても遠隔操作が効いているのか、不発の弾は追尾に行動を移る。

「――――っち、変化球もアリか」

舌打ちと共に、通り過ぎて背後から曲がり向かってくる追尾弾を切り裂く。
断裂、という構成の破壊により行き場のなくなった霊質粒子はそれぞれ制御を失くし、暴発し合い誘爆する。
背後の爆風の勢いを助走に、再び回避の疾走が始まる。

……弾切れは……期待出来しない方がいいか。

厄介な【銃】だ。
物理的な弾丸を使用するそれなら、弾切れを待てば自滅するのを待てばいいが、この【銃】はそうはいかない。
なにしろ、大気中に弾の構成の素になる原料が溢れ満ちている。
期待なんてものを抱く方が間違っている。

……しかも弾は例えるならミサイル、遠隔操作付き。それも多数。

これだけの数を秒速で発生させるだけではなく、同時操作もこなすのは並大抵の技量ではない。
少なくとも、人間の寿命程度の時間を費やしたぐらいではここまで到達するのは不可能だ。

「ああ、面倒だっ……っっ」

爆音の中で千夜のぼやき声は掻き消された。
土煙の中、垣間見えた蒼い人影に眼を細める。

「ちっ、一歩も動いてないな……楽で結構だな、術士系は」

生半可な三流程度なら、術を放った後の無防備な状態を突けば一撃で終わる。
術士の最高位の土御門や葦谷の領域の実力だとそれはなかなか難しいことだが、目の前のコレは――――難易度最高潮と言ってもいい。
術士は術がなければ只の無能。
しかし、術があり、それも十八番（スペシャリスト）の領域まで達しているのなら彼らは――――無敵だ。

「しつこいな……」

避けても追って来る。
破壊しても次が控えている。
キリがない、とはまさにこの状況を言う。
千夜はいつまでたっても防戦一方を維持し続けることを強いられる戦況にそろそろ苛立ちを募らせていた。
長期戦は嫌いだった。
もとより一瞬で終わらせるなどと思っていなかったが、たらたら

いつまでも不毛な時間を続ける気も千夜には更々なかった。
そんな千夜の苦戦を男は挑発するように笑った。

「どうした、貴様の後手ではなかったのかっ！」

男の張り上げる声が爆音と光弾の風を切る音に入り混じって千夜の耳に響く。

……言ってくれるじゃないか。

その科白は見事に千夜の神経を逆撫でしてくれた。
同時にそれは温存していた考えを変えさせた。

術士の弱点である術発動後の隙。
攻撃の回避の中でそれが現れるのを根気よく見測っていたが、千夜はその攻略法を切り捨てた。
そして、次に移った行動は、――――停止だった。
動きを止めた的に複数の光弾は向かう先を一つにして、集うようにあらゆる角度、方向から軌道を描いて、接近。

千夜の行動に、その場にいた全員が眼を見張った。
一瞬でも止まれば命取りであることは誰もが理解していたが故に。
しかし、それを一番わかっていたはずの千夜の行動は誰にも理解できなかった。

着弾が刻一刻と迫る。
動けない者も、動ける者も、その瞬間から目を離せず、動けなかった。

そして――――。

◆◆◆◆◆◆

三途はその光景にただただ唖然とする。
着弾の瞬間に心臓の動きが止まった錯覚を覚えた直後、着弾した全てが起こした爆発による誘爆とそれが起こした土煙に千夜の姿は呑まれて視界から消えた。

言葉が出ない。
喉から込み上げるのは、あ、あ、と言葉には及ばない呻き声という破片のみ。
衝撃の大きさに身体と精神が立ち直ることが出来ないのだ。
三途がなんとしても避けたかった【光景】の顕現が与えたものに。

「うそ、」

ようやく形を成した漏れた声には泣きが入っていた。
見開いた目に涙が滲み始めたとき、

「――――ほー、なるほどなぁ」

緊張感をぶち壊す志摩の科白が辛うじて理性が残っていた三途の耳に入り込む。
その声色は何故か感心を含んでいた。

「やっぱ、あそこの戦闘教育は凄まじいわ。……なるほど、そう行くか」
「……志摩さ、ん？」

「戦闘のプロフェッショナルは違うわな……いかなる状況でも自分の活路を開く術を考えてやがる。……頃合的には、あと五秒が最適か？」

放心状態から立ち直れずにいる三途には志摩が何を言っているのかわからなかった。

だが、わかることは一つ。

志摩は自身とは異なり、絶望していないということ。

それは即ち――――

「カウントしてみるか……3……2……1……」

――――ゼロ。

志摩が口ずさむカウントは終わりを切った。

そして、

「――――〃断てぬものは無い〃」

もう聴こえるはずがない、と三途が思い込んでいた『声』が耳に凛と響く。

その瞬間、千夜と蒼髪の男がいた周辺一体を覆い隠していた土煙が〝二つに割れた〟。

それは爆発の発生源であった場所。

千夜がいた場所。

「――――っあ」

三途の頭は再び真っ白になった。

しかし、二度目のそれに絶望は伴われていない。

現れた【存在】は三途の内から絶望を跡形もなく薙ぎ払った。

「でも、どうして……」

「ショックで腑抜けてさっき言った説明全部吹っ飛んじまったのかよ、三途。あの刀は主(あるじ)の要求を絶対のものとして顕現させる。【自分の体に傷一つ付けるな】って要求も勿論可だろうよありゃ。そして、それも決して防御の為だけじゃない」

「……え？」

「見ろよ、さっきまで嬢ちゃんをしつこく追い回していたミサイルもどきの光弾は何処行った？　……そういうことさ。嬢ちゃんは全て受けることで自分の攻めを封じる邪魔モノを全部除けちまったんだ。そして、最後が爆発を利用したあの土煙による煙幕……これによって嬢ちゃんは欲しがっていたものを自分で作り出し、手に入れたのさ……。

――――アレを見ろよ、三途っ！」

志摩の促す声に引かれて、三途は視線を再び闘争の場へと戻した。

そこには――――――。

◆◆◆◆◆◆

その挑みは、賭けに近かった。
もし相手がこちらの出方を既に読んでおり、対策を練っていたら全てに無駄になる行為だった。
だが、戦闘とはそういうものだと千夜が常に覚悟は出来ていた。
前情報がある敵との遭遇はほんの稀にあることで、戦いとは常に未知の相手と相対することであるという認識が、既に思考に置いてあった。
勝つ事は、相手の読みを上回ることを意味する。
常に相手の予想を上回り、欺くこと。
それが勝機に繋がる道だ、と己の師から教わったことを千夜は脳裏に反映させた。
言われたとおり、いつだってそれを通してきた。
そして、今も――――――

……ここまで予定通り。

土煙は辺りを充分なまでに濃く充満している。
距離も充分な離れ具合だ。
これで自分も視界は一切利かなくなったが、向こうも同じ状況であることは変わりない。
そして、こちらの姿を隠すことも出来た。

……あとは。

こちらの存在に向こうが気付いていないか。
そして、タイミングだった。

……そうだ、ここを外したら意味がない。

気付かれていないことを重要であるが、後者も同等、もしくはそれ以上だった。
向こうの油断が最高潮に達し、〝完全な無防備となった瞬間〟が、千夜のこの策においての最大の狙いを成功させる鍵であった。
この瞬間を外してしまっては全てが水の泡となる。

……見積もって、五秒か。

自身の中で測定した時間のカウントを始める。

……4秒。

正面に夜叉姫を構え、握る力を強める。

……3秒。

視線は煙幕に遮られた前方にいるはずの存在に向ける。
目標がそこにいることを祈り、

……2秒。

勝負は一度。
これで全てが決まる。

……1秒。

息を吸い、肺に送る。
命令を相棒に告げる為に。
……――――ゼロ。
一句一字を確かな声色を持って、【発現】させる。
「――――〝断てぬものは無い〟」
同時に夜叉姫を振り上げる。
響く了解の返答。
『――――御意』
命令を受け取った直刀は忠実に実行し、まず〝空気を切り裂いた〟。
そして、
――――軌道上の大地をも。
千夜の足元から生じていく地面の亀裂と共に視界を妨げる土煙を切り開く。
開けた視界がまず望んだのは、正面にいるはずの【かの存在】の直視だった。
賭けの勝敗の瞬間だ。
「――――なっ、」
驚愕に滲む声がその姿を捉えたと同時に鼓膜を打つ。

千夜は口端を吊り上げた。
男は爆発前の立ち位置から微動だもせず、そこにいた。
不安定な視界の中、敵の姿も確認できない状態で動くことほどの愚行は他にない。

「……かかったなっ！」

土煙は完全に千夜と男を繋ぐかのように隔たれ、大地の亀裂と共に進む〝断〟の概念はは寸前まで迫った。
しかし、寸前で止まる。
阻む【モノ】があった。

「っ、【概念防壁】か」

カミのみが使える概念使用。
だが――――千夜の笑みは崩れない。

「――――だと思った」

それは千夜にとって想定内の事象であった。

「夜叉、どうだアレの手応えは」
『〝以前の〟の代物とは比較になりません――――黒の姫君のそれと同等かと』
「アイツと同等か……やる気失くしそうだ」

刀を持つ両手が震えるほどの手応えと反発が千夜に隔てる障壁がどれだけ強固なモノかを知らしめる。
破ることは難しいことは考えるまでもない、とすぐに理解した。

「だが、お前なら出来る……〝出来る〟さ。
――――そうだろう！？」

『――――それが、主様の御所望とあれば』

揺るぎのない夜叉姫の返答が返された時だった。
ビシ、と硬質な破砕音が千夜の耳に届く。
それは今、千夜が突破せんと相対する【モノ】が発した崩壊の兆しを示す音色であった。

「――――来たか。……っっあああああああああ！！」

絶叫に煽られたかのように夜叉姫の顕現する概念は強さを増す。
そして、

――――硬く砕ける崩壊の音（ね）がその場に響いた。

◆◆◆◆◆◆

「概念防壁を破った！？」
「だから言ったろ。ありゃ、反則武器なんだって」

信じられないものを目の当たりにした、という驚愕を露にする三途に応えつつ、志摩は思った。
ここまで理論上通りだと。
自らの組み立てた未来予想図が近づく気配を感じていた。
しかし、それと同時にもう一つの別の感覚を志摩は己の内で抱えていた。

それは、何かもがうまく行き過ぎているという違和感だった。

先程自分が言った言葉を思い出す。

――――理想と現実は必ずといって良いほど、どっかで噛み合わなくなる。何処かで生じる想定外の事態の発生によって。

我ながら良い事言ったな、と自賛する。

決して見当違いな発言ではないはずだ。

過去の自分の経験と、目にしてきた数多の光景が志摩に絶対に近い自信を持たせていた。

それよって、誤算は必ず生じるはずであると志摩は勘繰っていた。

しかし、それは今に至るまで未だ現実として現れない。

……おいおい、どうすんだよ黒蘭。

自分の推測が間違っていなければ、黒蘭は【あの男】も物語のキャストに入れるつもりでいるのだろう。

だが、このままでは黒蘭自身の言うところの『期待ハズレ』な展開に向かってしまう。

それとも自分の推測が間違っており、外れているのか。

このまま行けば、千夜は己の策の最終段階へと移る。

そこへ上る手筈は既に為された。

後は――――――恐らく、玖珂蒼助の身体から【あの男】の存在を切り離すだけだ。

それで、救出の対象である蒼助が無事で済むか否かははっきりと断定は志摩にはできない。少なくとも未然である今の段階では。

「――――――終わりだっ」

耳に届いた声が志摩を物思いを世界から現実に引き戻した。
光速と呼んで過言ではないと思われる速度で間合いを一気に縮める千夜の姿があった。
蒼髪が再び概念防壁を構成する前に片をつける。これが千夜の狙いだったのだろう。
概念防壁は、守りの概念の中で最強の守備だ。だが、強力である反面一度壊されれば再構成までに時間がかかる。千夜はこれを知っていて、そこに勝利への活路を見出したのだ。
両手で握り、振り被った夜叉姫でこの闘争に終止符を打つ気でいるのは、考えるまでもないことだ。
志摩は己の予想図（パズル）の完成があと僅かで成されてしまうことに得体の知れない脅威を感じた。

厭な予感、と過去に多く体験し呼んできたそれを。
この予感の到来は、多くの前例の際では予想が成り立つ寸前にいつもやってきた。

この状況で何が。
今になって何が。

……どんなドンデン返し起こるってんだ、ああ？

この場を何処かで傍観しているであろうかの存在に届かない問い

を投げた。
もはや他の展開へと予測は志摩には不可能であった。

何故なら、終結となるであろう千夜の振り上げた一刃は既に蒼髪の男に振り下ろされていた。

［伍拾七］　完成間近のパズル（後書き）

やろうと思えど、なかなか進まず。
人生とはなかなか思うように進まないものである。
どうも、毎度同じみの天海です（何

おかしな始まりですが、冒頭のは事実なのです。
書く気はある。進みたい。しかし、現実はさっぱり進行せずなのです。
何故だ、時間も余裕も熱意もあるというのに。
……どうして、他の小説を探そうとしてしまうんだ（それだ、原因な、何だお前はやめっ（ゴシャメキャ

……気を取り直して。
とりあえず、二つの作業を同時進行しようとしている事も大きな原因の一つでもあります。
一つは無論、皆さんがお待ちの続きの執筆作業。（ま、待っててくれてるんですよね？
もう一つは第一話の全体改稿作業です。
一度この作品全体を私的都合により書き直したことがありますが、第一話のみは内容は変更の予定はなかったのでそのままにしたのですが……。
進むに連れて、読み返すに連れて……募る思いがありました。

……ひでぇ、と。
何しろ本当に手を加えていなかった。
文章も何一つ。……ということはそれそのものは若きあの日の痛い産物なんです。心を抉るんです。目に痛いんです。

見る度に折れそうになったので、ついに改稿を決心したわけです。
現在半分くらいまで進行。このままいくと量が二倍になりそう。

主人公が出て来なくなってどれくらいになるだろう、と書きながら思うこの頃ですが、影が薄くなりつつあるヤツを再び皆様の前に見せられるまで踏ん張ろらせてもらいますので。

【伍拾八】　黒と蒼

振り下ろした白刃は迷いも無く使い手の意志がままに男に振り下ろされる――――――はずだった。

「――――ちょっと、失礼」

それまで空間には無かった声が〝間〟に響いた。
まるで道を尋ねるかのような台詞が千夜と男の鼓膜を叩いた瞬間、白刃はその勢いを突如急停止させた。

使い手の意志ではないモノによって。

千夜は己の振りかぶった刃を〝指二本で挟さんだだけ〟で動きを止めた小柄なその存在を見て、目を見開いた。
驚愕の感情が促すがままに、その相手の名を叫ぶ。

「――――黒蘭っ！？」

突然現れた乱入者（イレギュラー）は、悪びれる様子も無く笑った。

「真剣白羽取りぃ～。凄いでしょ？　褒めて褒めて？」

この状況において全く見当違いな要求と発言をしてくる黒蘭に千夜は怒りのあまりに眩暈を覚えた。

「っの……馬鹿言ってる場合か、即刻そこを退け！」
「心配後無用。――――邪魔者にはちょっと席を外してもらったから」
千夜が眼を怪訝そうに眉を顰めたが、すぐに気が付いた。
己が白刃で切り裂くはずだった対象が先程までいた自分の目の前から無くなっていた。
すぐにそれらしきものは見つかった。
黒蘭の向こう十メートル先で砂塵が巻き上がっていた。
「……何のつもりだ？」
「貴方の為よ。……夜叉姫であの身体からアイツを切り離す気でいたんでしょう？　アウトよそれは。そんなことをすれば――――――玖珂蒼助も死ぬわ」
「……どういうことだ」
「今はそれだけ理解しておいて。色々込みの説明は後でちゃんとしてあげるから……【彼】も一緒にね」
「……」
納得した、とは言い難い眼差しを千夜から向けられても、黒蘭は軽く受け流しながら、
「とりあえず、この場は私は引き継ぐから離れてて――――――上弦」
「はい」
新たな声は千夜の背後から発せられた。
振り向く間もなく、千夜は背後の人物に抱きかかえられた。
「っ上弦！」

「姫様、ここは危険にございます。一旦離れましょうぞ」
「あ、こらっひょっこり現れて勝手に話を進めるなお前ら！　……降ろせ、降ろせったら」

筋肉質な巨体の男にがっちりと抱え込まれた千夜はその力強い抱擁の中でもがくがビクともしない。
無駄な足掻きを繰り返しながら遠くなりゆく漆黒の小柄な少女に声を張り上げる。

「っっ、黒蘭！！」
「大丈夫よ、大丈夫。……それより、彼を引きずり出す方法に早く気付きなさいよ？
――――――私が我慢出来なくなる前に」

小さく呟かれるように発した不可解な最後尾の台詞は、怒鳴る千夜の耳には届かなかった。
徐々に離れて行く上弦の背中を確認しつつ、

「――――さて」

黒蘭は先程自分が吹き飛ばした距離の向こうから何かが起き上がる気配に注意を完全にそこへと一点集中とし、向けた。
晴れていく土煙の中から姿を再三見せた青髪を靡かせる男。
その蒼く鋭い眼光は射抜かんばかりに黒蘭を見据えていた。

「やはり貴様が出て来たか……――――――黒蘭っ！！」
「……はんっ。無駄に打たれ強いところは相変わらずみたいね――
――――【蒼雲（そううん）】」

殺気に満ちた荒れ狂う霊気が叩き付ける突風に煽られる黒髪を撫

で押さえながら、黒蘭は目の前の男と正面を切って相見える体勢に入る。

「久しぶりねぇ……あの時以来かしらね？　ほら、アンタと【彼】の契約執行の場に居合わせた四百年前。あれから結構経ったのに、お互い変わらないわねぇ」

「――――戯言を抜かすな！」

黒蘭の言葉を撥ね除けんとばかりに男は怒号した。

男は三途や千夜の前では保っていた冷静さを崩し、憤怒という感情を露にして鋭く切り裂かんばかりの目で黒蘭を睥睨する。

鮮やかな蒼の瞳の奥では、憎しみに煮えたぎる炎が揺らめく。

「アンタ、随分と突っかかって来るじゃない。何をそんなに怒ってるの……？」

「白々しい……貴様、忘れたとは言わせんぞ……十年前、吾にしたことを！」

「……ああ。あの時のこと？　あらら、”その身体の奥深くに押し込んでやった時”にそこらへんの記憶はぶっ飛んじゃったかと思ったのに……」

自身の記憶を探るように呟いた刹那、黒蘭の黒髪の一部が薙ぎ散る。

一瞬にして距離を縮め迫った蒼髪の男の腕が放った突きの一撃によるものだった。

「――――殺すっっ！」

「熱くなりやすいのも進歩してないわね……それじゃ人間になった意味まるでないじゃない」

第二撃がもう一方の腕で撃たれる前に黒蘭はその小柄な姿を宙に跳び立たせ、逃れる。
すとん、と足先から優雅に地面に着地した。
弾けとびザンバラに短くなった部位を指で掬い、
「あーあ、やってくれちゃって……。酷い腕の美容師がいたものね……こんな切り方見た事無いわ」
「それは申し訳ない事をしたな。――――次は首ごと綺麗に刈り取ってやろう」
「遠慮しておくわ。次はもっと腕のいい美容師にあたるから」
撫でるように髪を摘んだ指を伝い下ろすと、”その動きに合わせて髪が伸びる”。
指を離した後には、元の長さの髪がするり、と肩から胸に落ちた。
「貴様があの時余計なことをしなければ……この身体は吾のモノのままだった。貴様が、吾を押し込め、【あの男】を人間としての人格として確立させて目覚めさせなければっっ!!」
感情の爆発。
それが起こしたかのように男の周囲の地面がヒビ入り、円状に陥没した。
男の醸し出す殺気と怒気に満ちた威圧感が空気を震わせる。
「わかってないわね……」
強烈なプレッシャーに当てられる中、怯む様子は微塵も見れない黒蘭は呆れたように呟いた。
「何に変わっても思慮の足らないままの男ね、アンタは……

だから、”あの時”も――――」
「――――っ黙れ！」

男の周囲の霊質粒子に雷の氣が帯びる。
見る見るうちに男は迸る電流を身に纏わせた。
掌にそれらを凝縮させ球形のエネルギー体と化した霊質粒子の群を黒蘭に向けて地面に叩き込んだ。
地面に吸い込まれるように消えた、かと思えば異常はすぐに生じる。
溶け込んだかと思わせたそこから電光が発した途端、大地が下から砕け散った。
大地の氣を喰らっているかのように、再び現れた光球は進行するにつれてその姿を膨張させ、巨大な電磁球（プラズマ）となって黒蘭を飲み込まんと迫る。

「……本当に、何処までも見下げた奴。私ね、昔からアンタのそういう見たくないものから眼を逸らそうとするところが――――」

迫る脅威を前にしても、黒蘭の反応は冷めていく一方だった。
細められた眼に宿るは蔑みの色を濃く見せる凍てついた眼差しであった。

「――――反吐が出るくらい、大嫌いなのよ」

瞳の漆黒が赤へと移り変わった瞬間、黒蘭が動いた。
片手を前へ突き出し、”電磁球を掴んだ”。

「あらあら……”半分人間になって”も活きの良さは全く衰えていないみたいねぇ……いいわ、”喰い尽くしてあげる”」

黒蘭は荒れ狂う極上の霊気を前に己の概念気質の本能が促すがままに、”喰らった”。

凶暴なまでに鳴り散らしていた放電はみるみる内にその勢いを衰えさせていく。それだけではなく、その大きささえも萎んでいく。

まるで、黒蘭にその力を吸われているかのように。

やがて、雷電の塊は黒蘭の掌に収まるまでにその存在を縮小させ、最後にはその手の奥へと消えた。

「……まあまあ、ってところね。理由はアンタのもんだから――――以上」

「世界を喰らうべく生まれた獣たる由縁の暴食ぶりも相変わらずか……。全く、貴様ほど殺しにくい存在は他に例を見ない。各世界に反世界存在として産み落とされ全ての概念属性を相殺し喰らう反概念【黒】の原色者よ」

「いちいち説明口調にならなくていいわよ、メンドくさい奴ね……。……ん？」

視線の端に映った赤色に黒蘭は気を止めた。

それは先程吸収する際に男の電磁球に触れた手の指先から小さく湧き出る自身の血であった。

「……ふん、活きが良すぎるというのも食べる側には問題ね……。まぁ、いいわ。上弦には我慢するって言ったけど……もう充分我慢したわよね、私的には」

ぺろり、と紅い舌で指先の血を舐め取る。
長い睫毛から除く赤い眼差しは挑戦的に男を見据え、
「アンタ、私を殺すんだっけ？　……いいわよ。そのムカつく面見てたら……私もその気になっちゃった」
くすり、と黒装束の少女は、優雅にそれでいて妖艶に哂う。
その赤い瞳に――――確かな殺意を仄めかせて。

◆◆◆◆◆◆

抵抗も諦めてされるがままに千夜が上弦の腕の中に収まり始めた時だった。
そんな彼らの背後で鼓膜を破る勢いの轟音が鳴り響く。
思わず振り向く上弦と共に腕の中の千夜もその光景を見る事になった。
二人の目に映ったのは、激しくぶつかり合う黒と蒼の二つの色彩だった。
「っ、黒蘭様……上弦はあれほど手加減をと申し上げたというのに」
「軽く無理難題だな、それは……」
千夜の記憶には、黒蘭という輩はやれと言われてやった試しがな

い根っからの天の邪鬼である。
言われなくても上弦もそれは承知のはずだった。

「――――おーい、嬢ちゃーん、ゲンさーん」

絶景を見つめる彼らの背後から呼び声が近づいてくる。
振り返った先には、片足を失った三途に肩を貸しながら歩み寄って来る志摩の姿があった。

「おお、雪叢か」
「オイオイ……やらかしてんなぁ、黒い姫さんは……ありゃ、スケール小の怪獣戦争に相応するぜ」
「……言い得て妙ですね」

志摩の手を借りながら共に歩む三途が納得げに相打つ。

「三途っ」

下ろせ、と上弦に命じ腕からその身を解放させた千夜に、三途は志摩の手から放れて倒れこむ形で抱きついた。
不安定な身体を地面に下ろし、千夜を見上げる。

「千夜……怪我は」

その開口一番の台詞を聞いて、千夜は思わず呆れ返った。

「お前……自分の状態見て物を言え」
「私なんてどうでもいいんですよ。”足が欠けたところでこの身体に何の問題がありますか”」
「……そういう問題でもないだろが、阿呆が」

本当に、わかっていない。
千夜は諦めの境地に立つ心境になりながら深い溜め息をついた。
一方で、志摩と上弦はそんな二人をヨソに声を最小限に抑えながら、

「ゲンさんよぉ、何だよこりゃぁ。黒蘭のヤツ、自分じゃ手ぇ出さないんじゃなかったのかよ。思っくそ、ヤッてんじゃねぇか」
「……そう言うてくれるな。この場合、仕方がないのだ。あのままあの方が間に入らねば小僧は問題なかったが、姫様の【宿業（しゅくごう）】は知れるところだった」
「……何だよ、それ。なんかマズいことでもあんのか？」
「大有りだっ……何としてもアレは他者に知れるワケにはいかん。当人である姫様自身にも、だ」

僅か前に見た光景を思い出し、上弦は再び冷や汗を滲ませる。
黒蘭の突入タイミングはまさに絶妙であった。
もしも僅かにでも遅れていたら、避けねばならない事態は確実に避けられなかっただろう。

「断じてならんのだ……幸い、”不完全である為”視る事は出来んようだが……」
「よくわからねぇが、重要機密だってことは肝に銘じておくよ……で、それはともかくとして」

話題に切り替えを入れながら、志摩はある方向を見た。
上弦も相手が何が言いたいのか汲み取ってか、それに倣って同じものを見据える。

「どうすんだよ、アレ……俺の記憶の限りじゃ、”俺達の時代（とき）”

にゃあんな熱い表情した試しがなかったぜ。何よ、そんなスゲぇ因縁持ちなわけ？　……うおっ」

志摩の疑問を遮るように一際大きな轟音が響く。

「……しかし、まさに激闘の一言に尽きる殺り合いぶりだわな。特に、黒蘭なんかこのまま放っておくと殺しちまいそうな勢いだぞ。いいのかよ？　ヤバいんだろ、殺しちゃ。ここまで相当な手間かけておいて、こんなところでパーになるなんざアンタらにゃシャレにならんだろ」

「言われずともわかっておるっ。だが……」

下手に止めようとあの間に入れば――――暫くの間、肉の塊の状態から立ち直ることは出来なくなる。

長年の培われた生存本能の警告が頭痛にすり替わらんばかりに、上弦の頭の中に響いていた。

誰も間に入る事が出来ない中、黒と蒼のぶつかり合いはその激しさを増していく。

だが、その終結は思いの外近いところまで来ていた。

［伍拾八］　黒と蒼（後書き）

まさか今回の話を出来あがる寸前で全部マルッと書き直す羽目になるとは思わなかった天海です。ちなみに本当の話ですよ。
どうにもこうにもガチガチに行き詰まってしまい、いろいろ設定バラしを組もうとしたらあちこちに矛盾が出たので。
スランプ入る寸前まで悩みました（汗）

夏休みも半分終わりましたね。
あーヤダヤダー（ジタバタジタバタ
小説全然進んでねぇのに、終わっちゃやだー。マジで。
夏休み中にどうにかして今の騒動を終えて、新展開に持って行きたいものです。
しかし、夏休みのイベントもまだ残っているのである。
友達とオーシャンズ観に行くし、友人宅に泊まりにも行くし。
腐っても十代な天海だって、高校最後の夏は大事にしたいのである。
つーわけで、残る夏休みをエンジョイしつつも小説もがんがん書いて行こうと心に決めます。悪魔で私なりに、だが（限りなく頼りにならなんね

次回、長らく再登場待ちだったアイツが帰還って来る！？（予定）
ちなみに皆は予定は未定と同意義であると知っているか（死ねよ

［伍拾九］　君求む声（1）

粉塵巻き上げる蒼と黒の激闘を十メートルほどの距離が空いた位置から傍観の体勢に入って、二分が経過した。
時折及ぶ余波や突風を夜叉姫の護りで防ぐ中、戦闘不能の志摩や三途、B．Sを後ろに庇いながら千夜は上弦と前へ出て目の前の戦況に目を凝らし、

「……おい、上弦」
「一応、手加減をしろと申し上げはしましたが」

心中を読み当てた上弦の言葉に、「はぁ」と深く溜息をついて、グイと親指で問題の光景を示し指し、

「……アレは？」
「この上なく殺気だっていると、御覧じあげます。……ええ、それはもう」
「噛み締めんでいいから、どうにかしろ！　お前らには色々聞きたい事があるがこの際細かいことなんぞ気にしないから、とりあえずあの中に突っ込め上弦っ！！」

ＧＯ！と投げた棒を犬に拾わせに行くような調子で言う己の主のあまりにも無情な命令に上弦は本気で血の気を引かせた。

「そ、それだけはお許し下さい！　そのお言葉は死ねと同意義でございますっっ！！」
「大丈夫だ、お前なら出来ると俺は信じる。――――――根拠はないが」
「ひ、姫さまぁぁぁぁぁぁっっ」

本気で嫌なのか大の男は涙目だった。
自分の倍以上のデカイ図体の上に厳つい顔の男に泣きつかれた千夜は、舌打ちしつつもこの案は断念する。

「……じゃぁ、どうしろっていうんだ」

涙を拭う白髪の巨男を放置し、千夜は解決策を練ろうと試みる。
黒蘭は言っていた。【あの男】を蒼助の肉体から切り離そうとすれば、蒼助も死ぬと。だから、黒蘭が止めに入り今に至った。
だが、このまま放っておけば暴走している黒蘭が確実にあの男ごと蒼助を殺してしまう。
そう確信づける理由はある。【あの男】とて相当なカミとしての神格を持つ強大な存在だ。
恐らく力量は黒蘭と並ぶ。

――――だが、”黒蘭が相手となるとそんなことは関係ない”。

力の強さなど、黒蘭という”別格”を前にしては何の意味もない、塵芥も同然だ。
千夜にとって黒蘭という存在は、奇妙な腐れ縁の相手であると同時に、生きている限り絶対に殺し合いたくない相手でもあった。
早くどうにかしなければ最悪の事態を迎えることになる。

焦る千夜の思考に記憶から滲み出て入り込む言葉あった。

『――――――彼を引きずり出す方法に早く気付きなさいよ?』

少し前に黒蘭が言い残した言葉だ。

「……上弦、さっきの黒蘭の台詞は聞いたか？」

「……はい」

「アイツを切り離す以外に……玖珂の意識を引き出す方法があるということか？」

上弦は返答するべく口を開いた。

が、その間に割り込む声があった。

「……無理だよ、千夜」

膝をつけて地に座り込む三途だった。

否定の言葉に千夜は意味を探る。

「どういう意味だ、三途」

「……彼は……あの身体にもう玖珂蒼助の人格は残っていない。【あの男】がそう言った。恐らく、彼を銃で撃った時に……」

「だがっ今もああして……」

「弾ははじかれ、肉体に致命傷はおろか傷一つ負わせることは出来なかった。けれど、蒼助くんの意識は〝撃たれて死ぬ〟という強迫観念にとらわれ、大きく揺らいだ。あの男にとっては、これ以上にない待ち望んだ隙だっただろう。……最も、その最悪の展開への後押しをしたのは私だけれども」

脳に衝撃を感じた。

金槌でぶっ叩かれたような、揺らぎ。
思考が打ち震える中、絶望が千夜の内で染み広がっていく。

もし、それが事実なのなら、全てが無意味になる。
自分がやろうとしていたことも。
これからやろうとしていたことも。

何もかも全てが――――。

「――――それはない」

暗くなりゆく視界に沈みかけた千夜の耳に上弦の否定の言葉が入りこんだ。
三途はその言葉にどうして、と困惑気味に問いかけた。

「何を根拠に、そんな」
「無いからだ、三途。それこそが、有り得ないことなのだ。確かに、お前の言うように玖珂蒼助の意識を【あの方】は呑み込んだ、それは事実に違いない。だが、それで消えるなど……あるはずがない」
「……取り込んでも、しばらくは消化されないということですか？」

三途の言葉に首を横に振り、激しい騒音の現地を見つめ、

「そうではない。どちらか一つが残ることも消えることも無いのだ。

【あの方】が存在しているのは、小僧の意識が在るからであり、小僧が消えないのもまた、【あの方】が存在するが故のこと……最も、どちらもその事をまだ知らないようだがな」

上弦によって述べられるあまりにも含みと不可解な点が多く存在する言葉に、三途の表情の曇りは深くなる。もはや、何処から追求すればと思考回路が展開について行けない。

一方、志摩は理解出来ているというわけでもなく、ただその言葉を耳に入れるに留めていた。

いずれ説明されるだろう、とこの場では言及せずにいようと踏んだのだ。

「なんだっていい」

その中でまた違う反応を見せたのは千夜だった。

言及することもなく、静観もなく、彼女の目は現状に向いており、

「まだ、あいつを……玖珂を元に戻す手段があるのなら教えろ……上弦」

「……姫様」

絶望に浸りかけた寸前から這い上がった千夜の眼差しは、強くギラついており、それでいて縋るようなものも上弦には見て取れた。

それはある昔話の一説の仏の垂らした蜘蛛の糸にしがみつく罪人を彷彿させる。

上弦が見慣れた、この主君が何かに必死となる時の目付きだった。

その多くの場合は、自身の他者を失うまいとする際に見せるものだった。

この場にはいないあの男は既に主君のその域まで踏み込んでいる

のだと上弦を確信を得た。

腹立たしい、と無表情の下に男に対する怒りを孕ませた。
ほんの僅かな先の未来に主は”再び”あの気に喰わない小童に掻っ攫われるのかと思うと腸が煮えくり返るような心地であった。
それを黙って見守るしか選択肢がない自分にしても、歯痒くて、腹立たしい、と。

しかし、上弦はそれら全てを捻じ伏せて言の葉を紡ぐ。
全ては己の至上の存在である、主君が為に。

「――――ひとつだけ、ございます」
「それは、何だ……」

千夜の問いかけに上弦が返したのは、答えではなく新たな問いかけだった。

「……姫様、人が己という存在を最も強く意識し、自覚する時とは……いかなる時でございましょうか」
「……は？」

唐突過ぎる言葉に千夜は唖然とし、目を瞬かせた。
質問を無視するかのように放たれた新たな質問。
脈絡のなさに上弦の意図が見えなくなる。

「……上弦、今はそんなことを言っている場合じゃ」
「――――名前、か」

言いかけた言葉に後ろから上がる別の声が割り込む。
とっさに振り向く。

志摩だ。

「……志摩？」

「答え。名前だろ？　大勢いる人だかりの中で自分の目的の相手を見つける時、どうする？　どうやって探していることに気づいてもらう？　……どうよ、ゲンさん」

「……私は姫様に質問したのだがな」

「細かいこと言うなよ。時間はねぇんだ、出来るだけ省けるところ省くにこしたこたぁねぇだろ～？」

アッタマ堅ぇなゲンさんは、茶化す志摩に、図星を突かれたのか、喧しい！とバツが悪そうに怒鳴る上弦は堰を一つ入れて、

「……【名】とは、その存在に与えられた”自己そのもの”を証明する強力な言霊。呼ばれれば、すぐさま意識は強く反応を示すように……」

「つまりは、こういうことか。押し込められた弱ったあいつの意識を名を呼ぶことで……」

「御察しの通りにございます」

「だが……そう簡単に」

言葉を濁す千夜に、上弦は諭すように語りかける。

「……【名】は、言霊の中でも一際特殊な代物です。その効力に差が開くのは、術者の力量の影響ではなく……その存在に対して存在そのものがどれだけ影響力を所持しているかなのです。それらに該当する例は家族、友人……或いは――――想い人」

「……何が言いたい」

渋い顔をする千夜の後ろで志摩が納得げに呟く。

「なるほどなぁ……惚れた女に必死に名前を呼ばれでもすれば或いは、ということかぁ。やぁ～、嬢ちゃん罪な女だなぁ」
「っっ、何でお前までそれを……黒蘭か、黒蘭なのか！？」
「まぁまぁ、それよか早いところ済ましちまった方がいいんじゃねぇの？　――――――取り戻したいんだろう？」
「……っ」

胸倉を掴んで揺さぶった際に見えたサングラスの下から覗いたふざけた台詞回しとは対照的な真摯な視線を受け、言葉詰まる。
それから、暫し苦悩に表情を歪ませたが、吐き出すように長く溜息をつき、

「……確実なんだろうな」
「それは姫様……否、あの男次第かと」
「ふん、いいだろう。――――――やってやる」

上弦の言葉に千夜は口端を吊り上げ笑った。

中途半端な別れなど認めない。
なんとしてでも再び相対してみせる。

いつか必ず来る、避けられない別れの瞬間を迎えるために。

◆◆◆◆◆◆

激戦は衰える気配もなく、寧ろ激しさを増す一方であった。

蒼の猛攻は大気を振るわせ、黒はそれを受け流しつつ時折明確な迎撃を撃つ。

互いに一歩も引かぬ戦況が描かれる中、

「――――答えろぉっ！　何故、裏切ったぁっっ！」

憤怒に震える叫びが黒蘭を穿たんばかりに放たれた。

もはや蒼の男に先程までの余裕は一切見れない。

剥き出しにされた一つの感情――――燃える炎のような憎悪は相対する存在である黒蘭を灰燼に帰せんとばかりに攻撃に反映されていた。

「裏切った？　何のことかしら」

華奢な身体を胴から真っ二つに引き裂かんと閃光に見間違うような疾さで振り抜かれた一閃を踊るような振る舞いで紙一重で避ける。

激戦の渦中にいる当事者の一人であるにも拘らず、黒蘭は相も変わらず飄々としていた。

それが蒼の男の神経を逆撫でする。

「恍けるなっっ！！　……忘れたとは、言わせんぞっっ」

「した覚えのないことを忘れるななんて支離滅裂なことを言わないでくれないかしらね……。私が、いつアンタと裏切るなんて行為が成立するような協力関係になったの？」

「貴様ぁっ……」

男は低く唸ると、絶えず繰り出していた攻撃の手を止めた。

黒蘭もそれを見て間合いと呼べる一定間隔の距離の取れた位置に場所を落ち着ける。

射殺さんばかりに睥睨したまま、男は口を開く。

「自分が持ちかけた【計画】を忘れたと……本気で言っているのか」

「……」

「昔から貴様のことは何一つ理解出来なかった……だがっ」

男は砕かんばかりに歯を噛み締め、

「だが、”あいつ”に関しては……あいつに関しては同じ想いであると思っていた。だから、吾は……あの【契約】を」

「――――――――黙れ」

凍てつきそうなまでに冷え切った声が男の言葉を遮った。

直後に響く何がひび割れる音。

黒蘭の足下の地面に大きく亀裂が生じていた。

「アンタみたいな卑怯者と一緒にしないでほしいものだわ……あのコを貶されたようで、吐き気がしそう。速攻でリミッター外して存在しうる限りの殺害方法でぶち殺してやりたくなりそうだからそっから先は口に気をつけなさい」

瞳の奥で赤い光が爛々と輝き、殺意に満ちた眼差しが男を刺し貫く。

男のそれに少しの引けも取らない。それどころか、黒蘭のそれの

方が上回る勢いだった。

「すればいいだろう。望むところだ……返り討ってくれる……」

「……ああ、もう……その気にさせないでよ。

――――本気になっちゃうじゃない」

ニタリ、と凄絶な笑み。

恐ろしくも尚も美しいそれは、まるで般若の貌（かお）そのものだった。

高まる黒蘭の放つ殺気に触発されたかのように、周囲の霊質粒子達が連鎖を起こし力を増幅し、その流れが大気の渦として目に見えるようになる。

黒蘭を中心に旋廻する気流は霊質粒子を餌に徐々に規模を拡大させていく。

「”獣”……昔から失礼な呼び名だと腹が立ってたけど、アンタと顔合わせた時ほどその通りになってやりたいと思うのは他にないわ。理性も、加減も……何もかも忘却の彼方に捨ててね」

「奇遇だな、吾もだ。……だが、吾は抑えはしないぞこの衝動。貴様のような嫉妬深いヒス女、この場で跡形もなく消えてなくなれ。どうせ貴様は”この世界”の覚醒前の【黒】を殺して成り代わった本来ならイレギュラーである存在だ……世界とて、正しい軌道に戻せるとせいせいするだろう……もう、計画なんぞ知ったことか。どういう意図が絡んでいるかは知らんが貴様から破棄したことだ……貴様を消して、吾は今度こそ……」

「過去の過ちも自分の落ち度も、全部清算して一からやり直せるって？　……つくづく見下げたヤツね。

――――でも、無いわよソレ」

冷めた眼差しから一転して、黒蘭が意味ありげな笑みを口元に刻んだ。

しかし、どういうわけか。

そこには見下すような皮肉はあれど、先程まで双眸から溢れんばかりであった殺意は消え去っていた。

［伍拾九］　君求む声（1）（後書き）

あと一話でこの騒動には一区切りつきます。
で、新展開に入っていろいろ新たな事実やら設定やらを明かす予定。

夏休みもあと二日。
八月は今日で終わりですが、休日入って後二日の猶予が出てうっしっしな天海ですたー。
お泊まり行ったり映画観たりで結構満喫しました。
オーシャンズおもろかった。ＣＭ見るたびにウヘウヘしてましたが、当たりでしたね。皆、すっげぇ格好いいし。今回は復讐なだけあって、結構手段を選ばない上、えげつない。でも、それがいい。何より笑えたのが「媚薬」でした。そんなん使わなくても充分カッコいいと思うんですが……ヘタレだからか？

さて、夏休みは多くの更新できると随分前に話していましたが、全然行動に表せなかったぜ……ｏｒｚ
ちょっと意気を夏休み中に思いついた新作に取られたのが大きな原因です。シリアスばっか書いてた反動か、コメディ色が強いです。
テーマは「親子」「子育て」です。
これでどーやってコメディになるんだとは聞くなかれ。
ある程度準備が整ったら連載するつもりです。
詳細もその時に～。

ちょっとこれから先のことについて。
間もなく本格的に受験に入る身なので、そっちの活動に時間を取られてなかなか更新できなくなる可能性があります。
御迷惑かけてすみませんが、更新は間が開いても止まらないように

心がけますのでこれからも「鮮血」をヨロシクおねがいします。

それじゃ。

【六拾】　君求む声（2）（前書き）

名を呼ぶ声は君に届くのか

【六拾】　君求む声（2）

「――――――蒼助ぇっっ！！」

千夜は叫びに乗せて求める相手の名を呼んだ。
呼ぶを形にする言葉を喉の奥から張り上げた。

いつも呼ぶ際に口にしている姓ではなかった。
人が生まれてくる時に、誰もが最初に与えられるその人である証明――――名前。
与えられ、呼ばれることを当然と普通なら気にも留めないことであったが、千夜は知っていた。
名前はその人間にとって二物と与えられることは決してない大事なモノ。

それを呼ぶのは、その人にとって特別な人間だけが出来る特別だと千夜は認識していた。
故に今まで千夜は蒼助を名で呼んだことは一度たりともなかった。
そして、これからもそんなつもりはなかった。

もうこれ以上、名前で呼ぶような深い関係を築く気はなかった。
その行為を禁じるのは、自身の中の”戒め”としていた。
もう二度と誰にも己の中には踏み込ませない、と。

だが、今はそんなことはどうでもよかった。
あれほど固く決めていた決意すらもはや余計な考えとその地位を墜落させていた。
それよりも、もっと重い決意を優先させる。

――――もう二度と、誰も失わない。

己の何を代償にしてでも、為さなければない自身への誓いだった。

呼んでしまえば、一つの事実を受け入れ認めることになる。

だが、そんなことは失うことに比べればまだ取り返しがつく。

気が付いたが、既に久留美で既にその禁忌を破ってしまっている。

千夜はやけになった。

後のことは後で考えればいい。

今はただ、一人の男を取り戻すことにのみ意志を集中させる。

「蒼助っ！　聴こえているなら戻って来いっっ！！」

面倒なことになった。

本当に面倒だ。

けれど、それでも――――絶望するよりは遙かにマシだと千夜は思い、希望の言葉を叫びに変えた。

◆◆◆◆◆◆

拡声器もないのに、空気が震えるほどの叫びが木霊する。

異変はその直後に起こった。

「――――うっ！」

ハンマーで殴られたような揺らぎが男の脳に訪れた。

同時に心臓が痛いほどに大きく脈を打った。
一斉の奇襲に男は目を白黒させて驚愕した。

「っ、これは……」
「あら、やっぱり効果絶大ね」

頭を押さえて苦悶の表情になる男に、してやったりの笑みを浮かべクスリ、と哂う黒蘭。
男は知っていた。
それは己の姦計が上手く運んだ時浮べる嘲笑だということを。

「……貴様、何を」
「私じゃないわよ。ちなみにあのコでもないから。私達はきっかけに過ぎないの。……大きな原因はアンタが消したと勝手に思って自己完結させられている……――彼よ」

何を指しているのかは言わずもがなだった。

「馬鹿な……奴は完全に消したはず」
「バーカ。消えるわけないじゃない。――――アンタが存在する限り、ね」

その時男は黒蘭が何を言っているのか、理解できなかった。
しかし、思考する暇は与えられなかった。
離れた場所にある声は再び糾弾するように声を張り上げた。
揺らぎが再び訪れる。先程よりも大きい。

「おのれっ……」

このままではまずい、と本能が促すがままに自身が掻き消えそう

な揺らぎを生み出す元へ接近しようと考える。
しかし、不幸なことに行動へ移そうとしたのを遮る存在が男の前にはいた。

「させないっての♪」

非常に楽しげに笑いながら、その身を光に変えながら光速で接近した黒蘭は動揺によって隙だらけとなった男の顔を鷲づかみそのまま突き出した手を男ごと地面に叩き付けた。
割れる大地。

「……ぐ、ぁ……っっ」

後頭部を地面にめり込まされ、ギシギシと更に圧力が頭部に加わる。リンゴのように砕けるか砕けないかのギリギリの加減で。
わざとではなかった。
小刻みに震える腕がそれを証明していた。

「……このまま砕いちゃいたいけど……我慢我慢、と」

欲望の暴走を食い止める理性に力を奮わすように黒蘭は呪文のように呟いた。

「黒蘭っ……」
「うふ、イイかっこう……手じゃなくて足だったら靴をお舐めとでも言ってやりたいわ」
「……何故だ」

男は呻くように問いかける。

「……何故、ひとおもいに吾を殺さない」
「……」
「昔から、貴様が吾に抱く感情は一つだった。昔ならともかく……今となっては貴様に吾を生かしておく……殺意を抑える理由などないはずだ」

先程から抱いていた疑問であった。
戦闘を開始してから黒蘭は言動と視線に相変わらずの殺意めいたものを仄めかせる。
だが、行動にそれは現れていなかった。
容赦のないようで、何処か手加減がかけられた攻撃。
その証拠に、彼女は黒の概念属性の象徴ともいえる能力の”概念喰らい”は使っていない。概念の使用はそのワンランク下の”概念殺し”で自分の雷撃による概念攻撃を相殺するのみであった。

本気で戦っていない。
男にとって驚くべき事実は、疑問へと姿を変えた。

「確かにそうね……あのコ、もうアンタのこと綺麗サッパリ忘れちゃってるから泣かれたりはしないから遠慮する必要はないのよねぇ？」
「……っっ」

顔を歪める男を心底楽しげに見つめていたが、ふと眼差しは真摯なものへ変わる。

「けど、そういうわけには行かないのよ。私の目的には、アンタ達――――【玖珂蒼助】が必要不可欠なのよ……だから、我慢」

黒蘭の言葉に男は目を見開いた。

「”吾達（おれ）”……だと？　一体何を……」
「アンタ、わかってなかったの？　……あの時の契約の儀式で造り出される”切り札”の材料に使われたのは、彼じゃなくてアンタの方だってこと」
「――――っ」

絶句する男の表情を見て黒蘭はおかしくて、愉快で仕方ないと言わんばかりに肩を震わせてクスクスと声を漏らして笑った。

「滑稽な男……忘れたからといって全てがなかったことになるがないじゃない……。当然の報いよ……せいぜい消えることも出来ず、想いを昇華することもできず、あのコがアンタじゃない別の男と幸せを手に入れるのを指咥えて見てるがいいわ……わかる？　これが四百年の年月を経て与えられる――――」

――――アンタが犯した罪に対する罰の形よ。

赤い瞳には再び憎悪が仄暗く揺らめいていた。
まるで悠久に絶えることのない煉獄の炎ように。

◆◆◆◆◆◆

何度目かの発声の後、千夜は叫びを一旦止め息を切らせながら様

子を伺う。
目にした光景に息を呑む。

「っ、よせ黒蘭！」

相手を引き倒し、優勢のポジションをとる馬乗りの黒蘭の体勢はトドメを刺そうとしているように千夜の目には映った。
もう少し冷静であれば、黒蘭からそれを匂わせる殺気が立ち上っていないことに気付けただろうが、今の千夜は通常では在り得ないほど焦りを募らせていた。

そして、察した危機感によってそれに拍車がかかる。

「……っ、どうした蒼助！　いつまでそんな奴に自分の身体をすきにさせておくつもりだ！　お前はその程度の男ではないはずだろう、玖珂蒼助！！」

立て続けに叫びを生んだことによって喉の痛みが走る。
それも無視して尚も声を張った。

「沈められたならもがけ！　もがき出て、お前の上にのさばってるそいつを引きずり込んでしまえ！　出来なくてもやれ！　――――蒼助っっ！！」

無茶苦茶なことを口走っている。
それは自分でも理解できていた。
だが、無茶であっても叶わないなんて始末は許せなかった。

このまま終わるなど認めない。
絶対に認めない。

――――馬鹿なことを。どうしていつも損なことばかりする？

自分のやっていることは損なことであると頭の隅で冷めた自分がぼやく。

――――放っておけばいいじゃないか、どうせあの男だっていつかは手放す気だったのだろう。

五月蠅い、と制しても声は尚も囁く。

――――馬鹿な奴だな、そうやって余計なことばかりして自分から傷つきに行く。いい加減、学習したらどうだ。

学習するのはお前の方だ。

嘲る自分を更に哂う。

そうやって自問自答して出る答えは、いつだって同じでこれからも変わりはしない、変える気もない。

どうせ、同じ気持ちでいるのなら、その馬鹿なのはお互い様だ。

「……俺は、俺の望むままに進むだけだ。その先でいくら傷つこうが、自分で決めたことだ……意志を通せたのなら、本望だ」

独白を周囲に聴こえない小さな声で呟き、顔を上げた。

ここであの男を取り戻せるのなら、自分の何を代償にしても構わない。

決意は千夜の意志を決定打をぶつけるべく促した。

「……戻って来いっ蒼助！！　さっきの続きを……っしてやるから、ここに帰って来い！！」

今はただ、千夜は願う。
彼という存在が再び自分の前に確立することを。

会いたい。
取り戻したい。

そして――――

「――――本当だろうな、それ」

大して間も空いていないというのに久しぶりに聞いた気がする声が聞こえた。

◆◆◆◆◆◆

男が”己の内で起こる異変”を察する前に異変は現れた。
足首を強い力で掴まれる、という予想できるはずもなかった出来事ととなって。

錯覚であった。
押さえつけられる顔の自由が利かないまま目だけを動かし見遣った先の足には、それらしき圧力をかけるものは見る影もない。
怪訝に思う男の上からクスリ、と哂い声が振ってきた。
元に戻した視線は笑みを浮かべる黒蘭を捉える。
「ほら、アンタが消したと思ってた彼がお呼びのみたいよ？　――――いってらっしゃいな」
枷にように張り付いていた黒蘭の手が離れる。
手の平が軽く額をトン、と叩いた。
他愛もない力のない衝撃とも言えない衝撃。
だがそれは、男の意識を己の内の深い場所――――かつて長い時を過ごした意識の深層――――に落とした。
暗い天上と足元に水が張るだけの何もない空間。
現実に存在すれば人の精神など容易く狂わせるであろう果てのない世界に男は戻ってきていた。
「くそっ……女狐め――――――」
悪態をついたその時であった。
「――――――――――っっ！？」
足首を何かが締め付け、強く引いた。
今度は錯覚ではない、確かな感覚だった。

男は反射的にその問題の部位に目をやった。
そこには――――水面から伸びる手が男の足を掴む光景。
目を見開き、男は驚愕を露にした。

「ぐっ……！？」

千切らんとばかりに強い力で握りしめ、引き寄せようとしてくる
足を蹴り払おうとするが、途端足場がなくなる。
片足が沈み込み、代わりに出てくるものがあった。
それは新たな手だった。
一対となった二本の手は男の身体をツテに這い上がってくる。

手は二の腕まで出てきた。
そしてすぐに腕全体が。
水面に浮かんできた顔を見て、男は声をあげた。

「貴様っ――――――」

二度と目にすることはないはずだった顔。
それはにやり、と口端を吊り上げると、水面から顔を出した。

「――――……よぉ、随分好き勝手やってくれたじゃねぇか……」

ずるり、と【それ】は肩から上を水面から這い出させた。
その目はギラギラと欲望に飢えた獣ような強く揺らめく光を宿し、
男を強く見据えて離さない。

馬鹿な、と男は信じられないという想いが込もった動揺を口端か
ら溢した。

「……何故だっ……貴様は消したはず……っっ！！」
「ナニ、三流悪党みてぇな台詞かましてんだぁ？　ちと、ここまで来るのに手間がかかっちまったが……そろそろ舞台を降りてもらうぜ、三文役者」
くくっと悪党のそれのような凶悪な笑みで表情を彩らせた【それ】――――蒼助は凄むように男を掴む手に力を込めた。
すると、男の身体はずぶりと腰まで水に沈んだ。
それだけでは済まず、徐々にもがき波立つ水の中に吸い込まれるように更に侵蝕されていく。
「っぐ……おのれっ残り滓風情が……いつまでも執念深くこびり付くかっ！！」
「ごちゃごちゃワケのわかんねぇこと言ってんじゃねェよっ」
ぐい、と暴れる蒼髪の男の首を掴み、もう片方の手で固定し押し沈める。
存在として有利であるはずの自分を圧す力が非力な人間としての人格、それもあの男の残り滓であるはずの存在の何処にあるのだろう。自身の身に降りかかっている事実に男は驚愕に打ち震えた。
「……おい、コラ……元の鞘におさまる前に一つ覚えとけ。てめぇが散々馬鹿の一つ覚えみたく残り滓呼ばわりしやがった……この身体の持ち主の名だ……一度しか言わねぇ、忘れねェよう脳みそに直接みっちり隅々まで書き込んでおけ……」
噛み締めるように一句一字に力を込める。
“彼女”によって自分を呼び起こす原動力となったその名を。

「俺の名はっ……玖珂、蒼助だあああああああぁぁぁ――――――っっっ！！！」

咆哮。

意志と個の主張を絶叫し、蒼助は拳を振りかぶり眼下の敵に打ち下ろした。

◆◆◆◆◆◆

「――――げ、やばっ」

千夜は蒼助の上に跨る黒蘭が少し焦ったように呟くを聞き取った。

何事だ、と声を張り上げるのを中止して千夜は反射的に駆け寄ろうとする。

が。

「っ！」

その行動を為す前に黒蘭が蒼助から跳びのいた。

一跳躍で千夜の前に降り立ち、

「伏せてっ」

「な――――」

小柄な身体が胸に勢いよく飛び込む。

急な事態に対処出来なかった千夜は、その衝撃に耐えることが出来ずそのまま後ろに倒れこんだ。

受身もとれず背中を地面にモロに打ち付けた千夜は痛みに眉を顰める。

「黒蘭様っ！」

「上弦、伏せなさい」

逆さまになった視界で、上弦が他の二人と共にそれに従うのを千夜は見た。

黒蘭の焦り。

それを見たのは本気で千夜がキレて、口も利かなくなった時くらいだ。

変わらず笑顔だったが、やることなすことに余裕は見れなかった。

その時と同じだ。

地面に這い蹲るなど、実はプライドの高い黒蘭が進んでやるはずがない。

ならば、この状況は否が応にもやらざる得ないという事情から、ということになる。

一体これから何が起ころうとしているのか。

黒蘭は何を警戒して退いたのか。
全ての疑問を解き明かす答えは、次の瞬間、千夜の前に曝された。

「――――っっがああああああああああああああああああああああああアアあああアアアアアアアアアアアああアアアアああっっっ！！！！！！」

空気を震わせたのは先程まで黒蘭がいた場所から放たれた咆哮だった。
ビリビリと大気が小刻みに揺れ動くのが肌に痛いほどに伝わる。
まるで獣が発するような叫び。
しかし、これを発しているのは人間――であるはず。
「そうす……――」
「目、閉じて。ツブれちゃうわよ」
呼びかけを遮るように黒蘭の手が目を覆ったその瞬間、眩むよう

な閃光が視界を、そして周囲を呑み込んだ。
その刹那の間、空間から音という音が消え去り無音の世界と化した。

◆◆◆◆◆◆

聴覚も視覚も閉ざされた時間はそれほど長く続きはしなかった。
その時間に終止符が打たれたのは、両目を覆う黒蘭の手が退かされた瞬間にだった。

「もう、いいわよ……千夜」

身体に被さっていた重みがなくなる。
目を開けると、黒蘭の顔があった。

「黒蘭……今のは……」
「暴発、みたいなものかしらね……周り、見てごらんなさい」

身体を起こし、千夜は飛び込んできた光景に愕然とした。

――――あちらこちらの地面に出来た無数の大きなクレーターが大地を大きく変形させていた。
それだけではなく、周囲に生えていた木々も僅か前までの緑色に茂る葉は消し飛びその胴体は黒く焼け焦げ炎をちらつかせている。

視界を閉ざした僅かな時間の間に代々木公園の姿は見る影のなく

変貌していた。
言葉を失う千夜の横で黒蘭はやれやれ、と溜息混じりで呟く。
「ほんの一瞬の同調（シンクロ）でこの有様……反発し合ってのことであっても、一瞬にしてここら一体全ての霊質粒子を共震させるなんて……これが禁忌の”重ね塗り”の概念色の力ってわけね……」
「黒蘭……？」
ぼそり、と聞き取れない音量で何かを口走った言葉に反応し、訝しげに眉を顰めた。
黒蘭は千夜の注意を逸らすように別の言葉で発言を塗りつぶす。
「これは、三途のボロボロの結界のままにしといたら修復不可能だったわね。もしもの為に私の結界上重ねしておいてよかったー……ちょっとー、そっち大丈夫ぅー？」
なんとかー、と上弦が背中ごしに返事を返す中、千夜は一人別の方向を向いていた。
見据える先で何が動いた気配を機敏に感じ取ると、思考が理解するよりも早く身体が反応し、行動に出た。
一際大きなクレーターに向かって駆け出した。
平面を失った大地に足をとられながらも、意志は一箇所をただひたすら目指す。
そして、すぐ前まで迫った時、
「――――っは……！」
荒く息を吐き捨てる声と共にクレーターから出た手が地面を掻くように掴んだ。

千夜は足を止め、それを緊張した心持ちでジッと見つめた。
現れるのは、本当に蒼助だろうか。
それとも――――。
千夜は暴れ狂う胸を押さえつけ、その姿が現れるのを待った。
「……ぐ、ぅ……はっぁ…」
呻きながらも這うように登りつめたその髪は――――砂に塗れていながらも金に見間違うほどに薄い茶色。
長さも千夜の見慣れたそれであった。
目を大きく見開き、千夜は口を開けた。
「……蒼……助、か」
「――――それ以外誰だってんだ？」
聞き慣れた声がふてぶてしく言う。
上げた顔には、見慣れた口端を吊り上げるシニカルな笑みが彩られていた。
「ったく……無茶苦茶言ってくれたじゃねぇか？」
「……無茶なもんか。出来ると思ったから言ったんだ」
「出来なかったらどうしたんだよ」
「出来たじゃないか」
「すっげぇしんどかった……」
「でも、おかげで勝利の実感は一押しだろ」
「そういう問題かよ」
「そういう問題だ」

他愛のない会話がぽつりぽつりと二人の間に溜まっていく。

「手間かけさせ過ぎだ……馬鹿が」

「ひでぇ……でも」

蒼助は立ち上がろうと身体に力を込めた。

それを為すのに自分の知らないところで散々酷使された今の身体にどれだけの負担と無茶がかかっているかギシギシと身体の中で響く軋み音で自身がよくわかっていた。

顔を俯かせ、見えないところで歯を食いしばる。

立て。

立って言うんだよ。

咽び泣くような足の震えも無視して、蒼助は二本の足を地面に突き刺すようにして立った。

素振りも見せず、息を吐き、

「――――ただいま、帰って来てやったぜ」

そこで蒼助の意識はぷつん、と張り詰めた糸が切れるように途切れた。

力と意志を失くした身体は自然と前へ傾き、倒れこんだ。

一気に押しかかってきた重みに、千夜は後ろに倒れかけるがなんとか持ちこたえた。

緊張は耳元で短い一定の間隔で繰り返される寝息で解けた。

「ひやひやさせるな……」

力尽きたのだろう。

恐らく本人は悟らせないように気をつけていただろうが、クレーターから這い上がってきた時点で身体は限界だったはずだ。
気力だけで言葉を交わしていたのだ。
その鋼の如き精神力に千夜は恐れ入った。
腕からずり落ちそうな身体を抱き直す。
名前を叫び通した相手が腕の中に確かに存在しているのだと、実感し千夜は目を閉じた。

そして、一言呟いた。
眠りの中にいる届かないであろう、その相手に。

「――――――おかえり」

それを遠くで眺めていた黒蘭は驚くほど柔らかく笑い、指を動かしパチン、と小気味良い音を鳴らす。
その瞬間、惨状と呼ぶに相応しかった変わり果てた代々木公園は塗り変わるように元の風景を取り戻す。
黒蘭の敷いた結界はその存在の消滅にその懐に抱いていたもの全てを持ち去っていった。

後に残ったのは、”平和な公園の姿とそれを描く人々だけ”だった。

【六拾】　君求む声（2）（後書き）

『鮮血ノ月』もついに六十話。
しかし、これだけやっておいて本編の中ではまだ四月。半年も経っていないという現実。
こっちじゃ、もう二年以上も経っているというのに（汗
ここらへんか作者の不精さが滲み出ているのがおわかりいただけますでしょうか（知りたくもないだろう
それにしても、この作品が日陰者だった連載当初のころから見てくれている読者っているのだろうか……もしもし、ちょっと手上げてくれませんか居たら（ハァハァ↑危険

……まぁ、冗談（？）はおいておくとして、飽きっぽい私が一つの作品にこれほどまでに執着出来ているのには我ながら少々驚いています。
うちの愚妹ほどではないと思うが、天海は飽きっぽいです。ちょっとでも嫌になると結構投げやりになります。
無論、鮮血でもそういう気分にはなるのですが、何故かいつもすぐに再燃するのです。
割と連載打ち切りや長期休止の危機は多い本作品はそんな調子の気まぐれで毎回何を逃れています。
……続く理由というのは、やはり付き合いの時間と入れ込み具合ですかね。
過去にこの作品は十回以上にも及ぶ改善改稿練り直しが行われているのですが、形が幾度多少変わろうとなおも私と時間を共にしています。

産み落とされたのは本当に偶然であったのに、この作品。
彼らとこの先を進むことで、いつかこの執着の正体がわかると思い

ます。

さて、この後も作者のマイペースな執筆速度で進む『鮮血ノ月』。

今後もよろしくおねがいします。

【六拾壱】　一時の休息（1）（前書き）

運命なんて
ただの案内役に過ぎない

［六拾壱］　一時の休息（１）

陽が傾き、空が朱色に染まり始めた時刻。
喫茶店『Ｗ・Ｇ』のドアにかかる掛け札は『ＣＬＯＳＥ』。いつもより早い閉店を迎えていた。
『Ｗ・Ｇ』は二階建てのビルの一階を使っている。その上は三途の自宅として扱われている。

そのリビングにて、

「あいたたっ……ちょっと、志摩さん。もう少し、丁寧にやってくれませんか？　それと、ここんとこ緩んでます」
「な、なにぃ？　く、くそ……おのれ包帯の癖にナマイキなっ」

ソファで負傷した中で大きな損傷がある三途の胸部に包帯を巻こうと怪我人の後ろで悪戦苦闘の志摩の姿とテーブルについて茶を啜りながら遠巻きにそれを見守る黒蘭と上弦。

一行は黒蘭によって代々木公園から『Ｗ・Ｇ』へと移動させられた。

早々に店じまいし、全員が二階の三途の自宅へ集まっていた。

そして志摩はというと、しっちゃかめっちゃかになりながらも努力と根性のおかげで包帯巻きに終わりの兆しが見せ始めて、

「よし、こうして……よっしゃ完璧、出来たぁっ！！」

「何処が。……赤点です」

なにぃ、と下された無情な評価にあからさまな異議を唱える志摩を無視して、三途は新しく出してきたブラウスに腕を通す。

体のあちらこちらに傷の保護を成す処置である白い包帯などが服の下から覗いている。

「おい、本当に黎乎のとこ行かなくていいのか？」

「いいですよ。怪我してる状態でセクハラまでされたら治るもんも治せません、気力的に」

黎乎は腕は最上級だが、どうにも安心して任せられない面が別にある上必要のない精神的疲労が重なる恐れがあるため、それは出来れば避けたかった。

「だけどよ、足は……」

「これですか？」

三途は尚も言い募ろうとする志摩に彼が気にする問題の足を掲げるように上げて見せた。

志摩の目が見開く。

見せ付けられた足には、欠如してしまったはずの足首から先が何

事もなかったように存在していた。

「いつのまに……」

「後ろでヘタクソが奮闘している間で充分足りますよ、肉体の再生なんて。……まぁ、といってもまだ神経まで再生できていませんから明日までこっちの足先は指一本動かせませんが」

何せ凍りつかせたせいで、傷口と神経と細胞が一度壊死しているのだ。通常に比べて再生に時間がかかってしまうのは仕方ないことだった。

耐性だけではなく、混血の自己治癒力は人間の比ではない。例え心臓を突かれようと、即死はない。頭であろうと手足であろうと吹き飛ぼうが、体内を循環する濃密な魔力を動かせば僅かな時間で再生させることができる。

大量の霊気が満ちる土地にでもいれば、いくら傷つこうが霊質粒子をすぐに取り込んで再生。不死に近い状態になる。

店と自宅は三途の支配する領域内。

そこに満ちる霊質粒子は全て空間の主である三途の味方である為、傷も順調に治っていくだろう。

「私にしてみればこれぐらいで済んだなら安い買い物です」

「まぁ……片足欠けるのが安いなんてもんかは置いておくとして。――――一人の忠告を無視して死亡フラグ立てちまった割りにゃ、軽くすんだもんかもなぁ」

ぐさり、と志摩によって致命的な箇所に釘が打ち付けられ三途は顔を顰める。

反論が出来ないところが実に哀しく、悔しい。

だが、しかし。

「……ちょっと黒蘭、一つ聞きたいんですが」

「なぁ～に？」

素知らぬ顔で茶を飲む黒蘭は、返事はしても顔を向けない。

怒りを煽られつつも、

「貴方、ちょっと出てくるタイミングおかしくありませんでしたか？」

「あら、アレ以上に絶妙な登場シーンが他にあると？」

「絶妙すぎて逆に不自然でしたよ。まるで、遠くから出てくるタイミングを正確に計っていたみたいでしたがね」

じろり、と睨まれても何処吹く風といわんばかりに黒蘭は笑みを絶やさず、

「さてね……まぁ、最近いっちょ前になった気でいるから懲らしめてやろうかなぁとは思ったけど。でも、私は何もしてないわよ？アンタが勝手に神風特攻しちゃっただけだものね、”サンちゃん”」

「……っ、……っ、……！」

ぎりぎり、と奥歯をかみ締めながら反撃の隙のない台詞を耐えるしかない三途を宥めるように頭をポンポンと叩き、

「ほれほれ、力んでると塞がんねぇぞ傷。……まぁ、本当の話、あんまり一人で無茶すんのは止めてくれ。――――心臓に悪すぎる」

「……志摩さん」

振り返った志摩の顔があまりに真剣だったもので三途は自然と燃やしていた怒りを鎮火させた。
黒蘭は腹が立つが、冷静になって考えれば自分の行動は周りから見ればさぞかし危なっかしいことこの上なかっただろう、と三途の心の沸きあがって来るのは後悔と申し訳なさ。
心配させたのは志摩だけではない。
千夜とて同じ気持ちのはずだ。
傷ついた自分を見つけた時、彼女はどんな気持ちで怒鳴っただろうか。

もし少しでも何かが異なった果てに最悪の結末を迎えていたら。
それを考えると、自分が行った行動がどれだけ思慮の浅いことだったかを改めて身に滲みた。
眉を寄せて、俯く三途を見て志摩は一息。

「まぁ、何はともわれ……無事でよかった」
「……すみません、でした」
「わかればいいんだよ、わかれば。……忘れんなよ、お前が死んで哀しむ人間はまだ……少なくとも俺を含めて二人はいるんだぜ」
「……っ」

息を呑み、三途は絞るように目を閉じる。
そしてもう一度、ごめんなさい、と謝罪を繰り返した。

「もういいよ。……じゃ、俺帰るわ」
「……え、突然ですね。貴方にかけた迷惑のお礼というわけではありませんが、お茶でも出すんで飲んでい……」
「いーって。怪我人に茶汲みさせるような人でなしにゃなりたかね

ぇよ。――――じゃな、お大事に」

それ以上引き止めさせる暇も与えない素早さで颯爽と志摩は帰っていった。

いなくなってしまった余韻を感じながら、

「……ツケが増えるわけでもないのに、なんでしょうね」

「自分不器用ですから、ってやつよ。しょーがないわねぇ……」

「どっかで聞いた台詞ですね……まぁ、それはこの際おいておくとして――」

場を切り替えるように三途の視線が鋭くなる。

異様に和やかだった部屋の空気も緊張感の張り詰めたそれへと様変わりし、

「……いい加減、話してもらいましょうか」

「あら、立ち直りの早いこと。タフになったわね……」

「そこ、話を逸らさない茶化さない。……貴方、仕組みましたね？」

「……人聞きが悪い出だしね」

黒蘭の言葉を三途はハ、と鼻で笑い飛ばし、

「その通りでしょう？　違うなんて、言いませんよね？　……黒蘭、貴方はこの件に関して、殆んど動きを見せなかった……誰よりも狡猾で手回しのいい貴方が」

核心を突いたつもりだったが、黒蘭の表情に一点の曇りも見れない。

この程度ではダメだ、と更に深く潜り込もうと三途は試みる。

「おかしいでしょう。千夜を何よりも大事と自称する貴方が、今回のことを察しなかったわけがない。おそらく、彼の中の存在に私よりも先に気づいていたはずだ。その危険性も！　……にも関わらず、貴方は今日まで何の手出しもしなかった。逆に玖珂蒼助に澱のことを教え、こちらに近づけようとそそのかしさえもした。……私がどう出るかさえも予想済みでしたね？　そして、この件……志摩さんも一枚噛んでいるんでしょう？」

「……」

「……貴方は、一体何を考えているんです……何処までその手は及んでいるんですか、――黒蘭っ！」

投げつけるような三途が荒げた大声がリビングに響く。

上弦は手にした湯のみの水面を見つめたまま微動だにしない。というよりも、自分の出る幕ではないと自ら蚊帳の外にいるようであった。

そして、黒蘭は、

「……くっ」

顔が不意に俯き、深淵の色彩の髪が深く覆い被さったその下から漏れた呼気。

ようやくは反応を見せたかと思えば、その両肩は小刻みに震えていて、覗く口元には笑み。笑っていた。

嘲笑ではない。

ただ、笑っているのだ。

愉快だ、と。

「ふふふっ……成長したわねぇ、三途。あの頃に比べたら大分物事の見通しがよくなってる……これから先を考えるとそこは安心

したわ。あとは、一人で突っ走る見かけから外れた猪突猛進ぶりを直すことが課題ね……」

「私の事はどうだっていいんですよ……質問に」

「考えてること、ね……愚問じゃないの、これは。私の世界はいつだって我が愛しの君を中心に廻っているんだから。……でもね、あなたの推理は大分ハズレが混じっているわ。確かに私は前もって彼のことを知っていたわ……彼が何処の誰に縁があるものか……その内に何を内包しているかもね。けれど、あの二人を引き合わせたのは私じゃないわ……それに関しては、それこそ目には見えない”縁”が引き合わせた運命ってやつじゃないかしら」

「ふざけないでくださいっ！」

「大真面目よ。皆馬鹿にするけどね……宿命や運命って奴は鼻で笑えるほどチャチなもんじゃないのよ……この私でも、思うままに動かし操ろうなんておこがましいくらいにね」

微笑を掻き消した翳りのある真顔で呟く黒蘭に、三途は思わず押し黙った。

その言葉は悠久の刻を生きることを許され、流れゆく多く魂のそれを見てきた者としての説得力に満ちていたからだ。

「自分に結ばれた糸の先が気になり、それを手繰り寄せた先にあるものが運命っていうなら、彼らは自らの意志で出会ったのよ。私じゃないわ」

「……」

「彼が千夜に惹かれたのも彼自身の意思。私は、やきもきしていた彼に親切心で手助けしてあげただけよ？　貴方だって、私があしろって言ったから行動に出たわけじゃないんでしょ？　蒼助が善之助と美沙緒の子供だって気づいていながら、千夜を優先したのは他でもない貴方の決断だったじゃない」

何てこともないように図星を突いてくる黒蘭を苦々しく睨みながら三途は、質問の角度を変えることにした。

「……どうして彼を……こちら側へ誘ったんですか？」

「来たがっていたから、誘導してあげただけよ。年下を誘惑する悪女みたいな言い方して……や～ねぇ～」

「――――――真面目に答えてくださいっ！！」

一喝のような声にその場は一瞬静まる。

黒蘭も茶化す笑みを消してそれを受け止め、沈黙していた。

上弦もその隣で依然と黙したまま。

黒猫は主を見守るように見上げるだけだ。

沈黙の破り手はその打破となる口上を述べるべく口を開けた。

「……貴女たちの為すことが全て千夜の為に繋がるということは信用しています。ですが、今回のことについてはその内情を話していただかなければ信用など出来ません。私には、千夜を守る上で貴女たちの懐に抱え込まれた事情を知る必要がある。……教えてください、何故っ……貴女は何を考えて彼のような危険因子を千夜に近づけるんですかっ……彼は、一体何者なんですか！」

荒れる感情の吐露の後、再び沈黙が訪れる。

不満を吐き出しきった三途は、険しい顔つきのまま黒蘭の動向を見測る。

「……教えろ教えろって……何でも知りたがる駄々っ子じゃないんだから少しは年齢相応に振る舞いなさいよ。本当、感情に突っ走るとすぐに熱くなって冷静さを失うのは……変わんないわねぇ」

呆れを表す冷めた目つきで見つめられ、カッと頬を赤らめる三途。
怒りのままに立ち上がりかけたところを制するように、
「何事にも時期と順序というものが付き物よ……秘密にもね。大事なことよ？　これにズレが生じると、例え全て明かしても……わかることも理解できないわ」
「……黙秘を主張しているんですか？」
「誰も教えてあげないなんて言っていないでしょー？　ここで語るには余る……結構なポジションにいる存在とだけは理解してくれないかしら」
口調は軽いは目はそうではなかった。
「ま、細かいことは抜きして言えば――――私の切札（ジョーカー）なのよ……あの二人は」
ぼそり、と最後に呟かれた部分は三途の耳に拾われることはなかった。
「切り札……？」
「或いは、それとなる素材というべきかしら」
「……黒蘭、回りくどい言い方をしないではっきり言ってくれませんか。貴女は彼を一体に何に使おうと……」
「――――【神狩り】」
その一言を告げられた途端、三途は大きく目を見開いた。
信じられないものを見るような目つきで、黒蘭を凝視した。
構わず、黒蘭は続けた。
「実は去年の誕生日、私まだ千夜にプレゼントあげてないのよ。ま

だ、”手元になかったから”、仕方なかったけれど……でも、これでようやく渡せるわ」

黒蘭の表情の笑みは一層深くなる。

クスクスと声を赤い唇の端から零しながら、楽しげに呟く。

「はりきって”つくらなきゃ”……私の最後の作品を――――三ヶ月遅れの贈り物として恥じない、あのコの傍に置くに相応しい最高傑作に。きっとこれ以上にない素晴らしい代物に仕上がるわ……何せずっと待ちに待ち続けた最高の素材だもの」

細まる漆黒の瞳は底知れない策略を渦巻かせた。

［六拾壱］　一時の休息（1）（後書き）

三途遊ばれとる……年下連中が相手なら逆なのに。
つーか、黒蘭相手に遊べる奴はこの話の中にはいないか考えてみると（笑）
そして蒼助、そろそろ料理される頃合いです（何

次回、バケツ用意。
何のため？
そりゃ……ねぇ（意味深に終わる

【六拾弐】　一時の休息（2）（前書き）

君は問う
そこにいるのか、と

【六拾弐】　一時の休息（2）

三途達がいる居間（リビング）からやや離れた部屋――寝室。
右足首の欠損と心臓を突き破られるなどその他諸々大きな損害を被った三途の治療が済むまで、と千夜は居間を離れてこの場所にて一人放置される男の元へ様子を見に来ていた。
椅子に腰掛け、千夜は一人静かにベッドを見つめていた。

そこには一人の男が、眠るように気を失っている。
つい先程まで内なる者に身体を奪われ、我を失っていた男。
自分の呼びかけに応じて、帰ってきた――玖珂蒼助。
喜ぶべきことだ。
何より、千夜自身が強く望み願ったことであった。

しかし、一つの後悔の念も混在していた。

無論、蒼助の帰還に関することではない。
そんなことは以ての外だ。

その後悔の矛先は千夜自身であった。
正確には、千夜が起こした行動に対して。

千夜は眉を寄せ眉間に皺をつくり、口をキュッと結び、険に満ちた険しい表情で汗をにじませていた。
睨むような目つきであったが、それはベッドの上の蒼助には既に

向けられておらず、膝の上でギュッと握り締められた両拳に下りている。

……何で。

内心で千夜は何度となく繰り返した自問自答を呟く。

それは――――

……何で、あんなこと言ったんだっ……！

『あんな事』――――蒼助を呼び戻す際に恐らく彼のヤル気に大きく影響を与えたであろう発言。

あの続きをしてやる、と。

それは三途によって蒼助が連れ出されるまで二人の間で行われていた行為の続行の許可を自ら示したことを意味することであり――――自ら墓穴を掘った愚行でもあった。

いくら場の空気で思考回路が単調な動きしか出来なくなっていたとはいえ、あまりにも軽率な発言であったと千夜自身が痛いほどに理解していた。

もっとも、あの場で後先など考える余裕など欠片も残されていなかったのだから、仕方ないといえなくもない。

しかし。

だが。

けれど。

それであっても。

否定・対立の接続詞が千夜の頭の回路をグルグル巡る。
こうしてこの男が助かったことに比べれば、こんなことは些細なことでしかないのに戻ってきた理性はそれで済ませることを良しとしなかった。

「……はぁ」

俯き、深い溜息。
目が覚めたら忘れていてくれないだろうか、と微かな希望を目の前で眠る男に向けてみるが。

……ない、な。

希望を自ら掻き消し、再び息を吐く。
何せ復活第一声が「本当だろうな」だ。
餌に食いついて釣れたのなら、釣れた魚は恐らくその餌を食い尽くす気でいるはずだ。
蒼助自身にとっては大事なこと。なら、忘れているなどという希望は早々に捨てるべきだ。

そうなると、残る問題と今後の方針は同じだ。

――――この、交わしてしまった『約束』をどう処理するか。

難関だった。
千夜はかつてこれほどまでに困難な壁にぶつかったことはないと自負し、表情を一層険しくした。

正直のところあんな発言をしておいてなんだが、物凄く気が進まない。

出来ればなかったことにしたい。
むしろなればいい。

「って……そんなこと言っていても仕方ないだろ……ああ、くそっ……」

問題はこの約束をどうするかなのだ。
いっそのことシラを切って無かったことにしてしまえればいいのだが、蒼助がそうはいかせはしないだろうし、何より『約束を破る』という選択が千夜には受け入れがたい。
例えどんな約束であろうと、宣言を覆すことは千夜の信念に反する。

「……落ち着け、俺。何でこんなに意識する必要がある……ようは、コイツが思っているような感覚で捉えなければいいんだ。最初の時……そうだ、あの時と同じことをするだけだ……何の問題がある。」

考え方を変えてみた。
最初の時――――蒼助と出会った時に形式的にとはいえ一度はしている。
あの時は薬を飲ませるための行為として、何の違和感も躊躇も抱かずに出来た。
ならば、今回も同じだ。

ただ、するだけ。そこには何の深い意味もない。

過去を振り返ってみれば、そういった状況は何度もあった。
大抵は相手が酔っていたり、止むを得ない状況下であったりで、そこに恋人同士がするような意味合いが感じることはなかった。

しかも、いつもされる側だった。
そうだ。いつだってサラリと流せた。

「そうだ、してしまったものは仕方ない……約束を果たす為だ」

上手く意思を丸め込むことに成功した。
そうと決まればさっさとしてしまおうと、決意づく。
いっそのこと寝ている間に済ませてしまえ、と。

決意の勢いに促されるような形で、千夜は椅子から立ち上がり、蒼助の元に更に近づく。
顔を両脇に手を置き、寝息を立てる男の顔を見下ろした。
それは千夜に一つの事実を気づかせた。

「……意外と、睫毛長いな」

見ているうちにまじまじと蒼助の顔を鑑賞するようになった。
そうして一つ一つと新たな発見を拾っていく。
スッと通った鼻筋。鋭い目つき。形のいい薄い唇。生えそろった眉毛。歪みのない輪郭。
今までじっくりと見る機会も時間もなかった故に気づくことはなかったが、改めてみると蒼助という男は美形、と呼ぶに相応しい容姿端麗さを備えていた。
切れ長の鋭い目が、細く見られがちの美形によくある頼りなさを払拭し、野性味を醸し出している。
単なる鑑賞物としてのそれではなく、”男”としての魅力がそこにあった。

「……なるほどな、これは女が好きそうな顔だ」

これなら女が腐るほど寄ってきても文句の言いようがない。
この男を寵愛を得ようとどれだけの女が醜い争いに身を投じたのか。

だが、報われないことにこの男が「好きだ」と口にしたのは、そんな戦禍から遠く離れた場所にいた自分にだった。

「どうして……」

どうして自分なのだろう。
女にもなりきれず、男を捨てることもできない中途半端な存在が良いなどと世迷い言を言ったのだろうか。
この男の気を惹くような真似などした覚えはない。
自分の”女”など所詮取り繕っただけの偽りであって、決して本物の女が出せるそれには及びもつかない。
多くの女を知ったこの男なら、それがわからないはずがないのに。

「っ……どうでもいいことだろうが」

理由が何にせよ、この男の気持ちに応えられるものを自分は持っていない。
それよりも今すべきことは面倒を一つ片付けることであった。

「……よし」

腹は決まった、と意気づく千夜は早速行動を起こした。
覚悟を秘めた眼差しで目標を捉え、

「……」

徐々に顔を下ろしていく。

「……」

吐息が顔にかかる距離まで間は縮まった。

が、そこで止まる。

「……」

静止。

「……」

静止。

「……」

静止。

「……」

静――――

「――――っっっ！！！」

突然、バッと顔を上げてそのまま後ろの壁まで後退し、反転して突っ伏する。

酷く思い詰めた表情で、

「……ダメだっ……どうしても出来ない、つーかしたくないっっ……」

心底嫌そうに千夜がそう吐き捨てたその時、

「――――――っっっだあああああああっ！　いい加減腹くくれよ、それでも元男かぁ！！」

寝ていたはずの蒼助が、耐えかねたようにベッドから跳ね起きた。

◆◆◆◆◆◆

その瞬間、空間に重苦しい沈黙が発生した。

あ、と蒼助は自分の行動が己を危機に追い込む結果となったのに気づくが、もう遅い。

「……お前、ひょっとして起きてたのか？」

「……え、と」

「……いつから？」

「……あ、いや……割と前から」

「……何処から？」

「……部屋に、入ってきたあたりから……あは、あはは……」

途端、顔の横を突風が突き抜けた。

無表情のまま千夜が打ち出した拳が繰り出したものだった。

危険を察した本能によって蒼助は皮一枚と引き換えに死の一撃を免れる。

が、それは何を逃れることに結びつきはしなかった。

「お、落ち着け！　冷静になれよ！」

「落ち着け……？　何を言っている、至って冷静だ……冷静に判断している――――犯した過ちは正さねば、と」

目がマジだ。

やばい、と蒼助は自身の生命の危機に摺るように後ろに交替するが、

「おわっ」

誤算なことに、後ろに続くものはなく蒼助の身体はベッドから転げ落ちた。

――――ドタン！

床を打つ音が響いた。

「馬鹿、何をやって……」

あまりに間抜けな行動に、怒りも冷めた視線で呆れたように呟く。

しかし、すぐに復活するとばかり思っていた千夜の予想に反し、蒼助の身体は一向に反応を示さない。

ぴくりとも動かないその様に、千夜は嫌な予感を感じた。

「……蒼助？」

試しに呼んだ声にも反応は返ってこない。

予感は更に募った。

まさか落ちた拍子の打ち所が悪かったのか。

千夜は衝動的に反対へ回り、倒れる蒼助の元に駆け寄る。

「おい、しっかりしろっ。大丈夫……」

しゃがんだ拍子を見計らったように伸びた手に腕を掴まれ、引っ張られた。

強い力と不意を突かれたことが要因となり、抗いを行動にすることは出来なかった。

気が付けば、されるがままに仰向けの身体の上に顔から飛び込み、顔を立派な胸板に押し付ける羽目になっていた。

「うっし、確保」

「……ヲイ」

「まぁまぁ。落ちたのはマジで事故だぜ？　それに落ちた関係なく身体は背中だけじゃなくて、頭っから指先まで動かすと死ぬほど痛い」

胸に伏して低い声を漏らす千夜を宥めるように蒼助はそのなだらか背中を撫でながら笑う。

千夜は呆れて息を吐いた。

そういうことなら、今こうして己の背中で行われている動作も痛みを伴っているということになるのだ。

「馬鹿。だったら、今すぐ止めて離せ。じっとしていればベッドに戻してやるから……」
「ヤダね」
「……聞き分けろ。お前の身体は許容範囲を遙かに越える酷使によってあちこちガタが来ている。全身の極度の筋肉痛はそのせいだ。だから、しばらく安静にしていないと肉体の疲労が回復しない……あとで三途の霊薬をやるから、早く腕を……」
「……なぁ」

まるで千夜の言葉など耳に入っていないかのように、蒼助は己の言葉を口にした。

「――――俺は、ここにいるか……？」

突然の問いに千夜はその意味を理解しかねた。
決して難しい理論でもなんでもない単純で、単調な言葉。
だが、この状況でそれはあまりにもミスマッチな具合だった。
当たり前のことを問うその理由が、わからない。

「……蒼助？」

顔を上げようとするが、背中を撫でていた手はいつのまにか千夜を拘束するように強く抱きしめていた。痛いほどに、強く。

「あのワケわかんねぇのに身体乗っ取られた後……真っ暗な何も見えねぇ水の中に一人で沈んでて……もがいてももがいても、何も見

えない、何も聞こえないし、すごく息苦しい……最初はあった恐怖感も感じなくなって……だんだん何もかもどうでもよくなって抵抗すんのも止めた。だってよ、自分が生きてるかどうかすら曖昧になってきてたんだぜ……？　俺がすること何もかもが意味がなくて、何の成果もなくて……しまいにゃ俺にとって何が現実で何が夢なんだかも……わからなくなった」

吐露するたびに胸にその想いが突き刺さるようで、幻の痛みに千夜は腕の中で顔を歪めた。

闇、とはそういうものだ。

それらが奪うのは視界だけではない。

精神から常識を塗りつぶし、孤独という『無』となって精神を犯していく。

侵食。崩壊。そして最後には何も残らない――――在るのは理性や思考などの他に存在するモノ全てを食い尽くした『無』だけ。

そこへ至るための道。

まずは『苦痛』、もしくは『恐怖』だ。

肉体に与えられる苦痛よりも、実際は精神に与えられるそれの方が遙かに耐え難いのを千夜は知っていた。

そして、肉体に与えられる痛みを感じるのも、また精神である。

結果的に全ての痛みを請け負うのは精神なのだから、そこを責められることがどれだけの苦痛であることか。

人が痛みから逃げるために自棄になり生きることすらも放棄するのも、珍しくない。

恐怖から逃れようとするために自棄になることも、また同様に。

次に『崩壊』。

苦痛と恐怖にあっさり屈して崩壊する者がいる
逆に痛みを乗り越えた先に行こうと耐える者がいる。
だが、いくら乗り越えようと待つのは更なる絶望であること知り、
結局は打ちのめされてしまう。
崩壊していくのは、精神を構成するモノ。
理性。知性。人格。感情。思考。記憶。
全てが飲み込まれ、崩れ落ちた先にある最期。

それが、終わりにして最後となる『無』だ。

話に聞くだけでも蒼助は第二段階まで追い詰められていたということが汲み取れる。
危うかった。
あともう少し遅れていたら。
想像するだけでも、背筋が寒くなる。

「でもよ……もう何もかんもがグチャグチャになりかけたところで押し留まれた」

思考しながら蒼助の言葉を聞いていた千夜は、重い内容がやや方向を変えるのに眉を顰めた。

「声がさ、聞こえたんだよ。……お前の声が」

とても嬉しげに蒼助は言った。
諦めの境地に立たされた時、何も聞こえなかった場所で確かに響いたのはこの愛しい女が叫ぶ自分の名前だった。
途端にそれまでが嘘のように気力が戻り心が滾った。
現実と夢の境界線が己の中に再び敷かれ、再びもがいた。
より強く。より激しく。

何故なら、今度は闇雲にではなかった。
千夜の声が一筋の糸となって確かな道を導いた。

「お前が思い出させてくれたんだよ。俺の”現実”を……現実そのものであるお前が。だから、感じたい。お前の存在をこの手で、この身体で感じたい……俺がここにいるっていう証明を、させてくれ」

熱烈な口説き文句のような言葉が並ぶ。
普通の女ならこれで陥落するだろう。
だが、千夜はそうではなかった。
頬を赤らめることもなく、ただ目を伏せた。

言葉を紡ぐ声に感じる微かな震え。
千夜はそれを感じ取っていた。

この男は不安で仕方ないのだ、と内心にて思う。
ここがまだ現実として信じ切れていない。
何がこの男に一番なのか、と考えた瞬間、千夜は動いた。

「……少し、腕を緩めろ苦しい」
「あ、悪ぃ」

ほんの少し、力が緩む。
千夜は身動きが可能となったその瞬間をすかさずモノにした。
ずるり、と身体を蒼助の上で這いずり、上へと押し上げる。
少し上半身を起こした。

そこに深い考えはなく、それは衝動に動かされての行動であった。

「――――」

蒼助の顔に千夜の顔が被さる。
唇が落とされた。

落ちた先は、重なる合うことになるであろう地点から僅かにずれた場所であった。
僅か二、三秒ほど続いたその状態は千夜が離れたことで終わる。

ポカン、と呆気とられた顔をした蒼助の視線と合う。

「……実感できたか？」

コクコク、と頷く反応を見て千夜は満足した。
同時にこれで約束からも開放されたわけで千夜にとっては一石二鳥である。

「いや、出来たけど……また何つー微妙なとこに」
「……」

人の精一杯の譲歩を無駄にするこの阿呆をどうしてくれよう、と千夜は内心ムカつきを募らせた。
とりあえず、相手が療養しなければならない身であることを理性の要とし、殴りたい衝動を抑える。

「……起きれるか」
「立つのはちょっときつい。肩、貸して」

なんとか自力で上半身を起こすまではした蒼助は手を伸ばした。
伸ばされた手を受け取るように肩に回させ、千夜自身のそれよりも一回りも大きいガタイのいい体つきをした重みをなんとか立たせる。
男の自分でも及びのつかない男臭さ漂う肉体を肌に感じながら、こういうのになりたかったんだよなぁ、と本気で羨ましく思った。
それに引き換え、と長くしていた髪と生まれもった女顔のせいでよく女と間違われていた嫌な思い出が甦り、気分が暗くなる。
そんな時だった。
「――――隙アリ」
そんな言葉が聞こえたかと思えば、突然強い力が腕を担いだ方の肩にかかり体が傾いたかと自覚した次の瞬間。
何故か自分がベッドの上にいて、その上に本来ならいるはずの男が覆いかぶさっていた。

◆◆◆◆◆◆

「なんですって？　……もう一度言ってください」
「やーね、三途。アンタまだ二十代前半のくせにもう耳が遠いの？」
「約四世紀年齢詐称ゴスロリババアがあまりにも理解しがたい発言を通じない日本語でほざいたもので。つーわけでもう一度言ってください」
「ふふっ……鼓膜の張りが緩くなった耳に届くようにもう一度言

ってあげる。
――――――だ・か・ら……彼を【神狩り】にしようっていうのよ」
――――――ダンっ！！
黒蘭の繰り返した言葉を掻き消さん勢いの大音と大音声が響き渡る。
「馬鹿も休み休み言いなさい、黒蘭っっ！！」
テーブルに両手を叩きつけ怒声をあげる三途に黒蘭は悪魔で冷静な言葉を返す。
「もう、頭ごなしに怒鳴りつけないでよ。向こうでは、怪我人が寝ているんだから」
一端な正論によって若干頭の冷えた三途はやや声を抑えながら、それでも尚怒りを納めきれないまま、
「っ……自分が何を言っているかわかっているんですか？　今、貴方は途方もなく無茶な意見を主張しているんですよ……？」
「無茶なもんですか。出来るったら出来るわよ」
「何処がですか！！」
再び怒声。
しー、と口に人差し指を当てて「静かにしろ」の形をとる黒蘭に三途は一度、押し黙り、
「……無茶に決まっているでしょう。大体、あれは【真神】の人間だけが持つ……貴女の血族だけが成れるモノ……そうじゃな

かったんですか」
「違うわよ」
「……は？」
あっさりした否定の返事に三途は思わず惚けた声を漏らした。
「違う違う。アンタもまだまだ真神（うち）の定義ってものが理解できてないわねぇ……あんなの、〝血〟如きでどうにかなってなるものですか」
出来の悪い子供を見るような色を視線に含ませながら、黒蘭は続けた。
「まぁ、ここでそれについて云々語る気はないけど……一つ教えてあげるわ」
「……なんですか」
「真神の定義……それは――――私よ」
恥ずかしげもなく言い切った。
「私の眼に適った者が【真神】に成り得るのよ。情けないことに勘違いしてる馬鹿は腐るほどいるけどね……昔、人形を【神狩り】にスカウトして引き入れたこともあるのよ？　そいつは本当に血も何の縁のない奴だったけど、今じゃ上から数えた方が早いところにいるわ……だったら、彼と今日闘ったアンタなら理解できるでしょ？」
「……何を、言っているんですか。彼自身は、普通の人間じゃないですか」
三途が闘ったのは、蒼助そのものではなくその内に巣食っていた

別次元の存在だ。
その呪縛から解き放たれた今、彼はもはや普通の人間。微弱な霊力しか持たない脆弱な存在でしかない。

三途はそう言い含めていた。
だが、黒蘭はそれに納得した様子は欠片もなく、

「普通、ねぇ……」

その言葉の一字一句噛み締めるように呟いた。
まるで意味を確認するように。
そして、

「あと数分ぐらいかしら。その時は普通……どころか、――――――”人間”って言えるかどうかも微妙よね？」

その瞬間を待ち焦がれるかのように黒蘭は楽しげに言葉を零した。

【六拾弐】　一時の休息（2）（後書き）

珍しく短期間に連続更新できた。
もう無理だが（これが私の限界である

黒蘭がいろいろ設定ボロリしてます。
【真神】は今後大きなキーワードになります。
この先チョロチョロ出てくると思います。
ひょっとしたら、先に『人形』を主役にした外伝っぽい短編を先に書くかもなので、その時チラホラ【真神】について出てきますでしょう。

黒蘭の台詞の意味は次回わかります。

［六拾参］　一時の休息（3）

「信じられねぇ……」

ベッドの上で心底そう思うと言わんばかりに呟きが吐き出された。

蒼助だ。

シングルベッドの広さの上で布団に包まった顔色は何故か青い。

身体は天井を向いていたが、その視線だけは傍らで不貞腐れた表情をしてそっぽを向きながら椅子に腰掛ける千夜を射抜いて離さない。

それは心無しか――否、はっきりと恨めしげな色で滲んでいた。

「普通やるか……怪我人に膝蹴り。しかもあの状況で」

「いかなる時でも性犯罪を前に人類が屈してはならないと常日頃から考えることを実行しただけだが」

「性犯……ひでぇ、俺はただお前が続きしていいって言ったからキスしようとしただけなのに」

「……お前はキス一つするだけのために尻を鷲掴んで揉んだり、舌突っ込もうとしたりするのか？」

皮肉のつもりで言ってやると、

「――――え、しねぇの？」

「素で返すなっ！！　今までどんな恋愛経験積んで来たんだお前はっ！」

何がおかしいのかと言わんばかりの顔と言葉に千夜は思わず声を荒げた。

しかし、蒼助は依然と冷めた様子のまま、

「……まぁ、セックスが恋愛経験だっていうなら腐るほど。でも、ま……それだけじゃ違うってんだろ？」

確かめるように問われ、自分が思っているものが果たして正しいのかと千夜は断言を少し迷ったが、思いのまま返答した。

「……まぁ、少なくとも、私が思っているのと違うのは確かだ」

人の恋愛価値観にどうこう意見できるほど千夜自身とて、経験が豊富なわけではない。

「ふーん……キスなんてもんはヤる為の前戯程度にしか思ってなかったんだが」

「おいマテ。だとしたらお前、あの時もさっきもした後、俺を……」

「あ、ヤベ」

口が滑ったと自らのしくじりを顔でわかりやすく露した蒼助の胸倉を無言で掴みあげる。

「ぐ、ぐえっ……わ、悪かったって……つーか、結局その先どころかキスも出来てなかったんだからそんなに怒んなくても」

「そういう問題か！　その歪んだ価値観叩きなおしてやる！」

怒りと激情に任せて口走った台詞に、蒼助は表情を一瞬固めた。そして、ニヤリとイタズラを考えたついた悪ガキのような笑みを浮かべた。

真正面から捉えた千夜は本能的に嫌な予感を察し、ひょっとしたら今自分は墓穴を掘ったのではないか、と自分の犯した間違いを記

憶を紐解き探す。

「いいね……じゃぁ、治してくれよ。手取り足取り一から……」

「……何をだ」

「トボケんなよ、たった今自分で言ったじゃねぇか。――――俺の間違った恋愛価値観、治してくれんだろ？」

その瞬間、尾上の背筋に寒いものが走ったのを千夜は確かに感じた。

「よっし、そんじゃセンセイ。まずは正しいキスの仕方から」

「何だセンセイって！？　俺を置いて勝手に話を進めるな！」

「お前が言い出したんだろが。俺はアッチの腕前は超一流なんだが、生憎”恋愛経験”はペーペーなんでね……意外なことに恋人がいたという先輩の千夜セ・ン・セ・イ……教えてくれよ」

胸倉を掴まれて顔が近いことをいいことに蒼助は千夜の耳元に顔を寄せてわざと息を吹きかけるように囁いた。

ぞくり、と先程とは違った得体の知れない何かが千夜背中を伝う。

「っ……冗談じゃ」

「それにまだあの約束終わってないし」

「……それはっ……さっきしただろっオイ！」

「あんなの寸止めと一緒だっつーの。俺がしたい続きってのはあんなんじゃねぇし。……あの約束ってのは、そーゆーもんだろ？」

ぐ、と反論もできず、押し黙る。

確かに、蒼助の言う通り『あの続きをしてやる』という発言は、倉庫でキスを求めた蒼助の意志が望んだ通りにするということに理屈が通る。

「……キス、だけでいいんだな？」
「お前から、でな。まぁ、これをいいことにもっといろいろさせたりしたりしちゃいたいところだが……さすがにそれは俺も気が引けるからな。この約束は、キスまでってことにしとこうか」
言葉の中にいろいろ引っかかる部分が見受けられたが、とりあえず危惧するような要求はこれ以上されないとわかっただけでも一安心だったが。

「……私が、するからな」
「なんかやらしく聞こえんな」

蒼助のからかいを無視して千夜は胸倉を掴む手を離した。
代わりに両肩に手を置いて、その顔を見据えた。

「……絶対に、何もするなよ。指先一つでも動かしたら……」
「わーかったって。つーか、お前が制限かけたら約束通りにならないんじゃ……」
「うるさい！」

一喝の後、はいはい、と蒼助は口を閉じて、迎え入れる気持ちを示すように目を閉じた。
ようやく望んだ状態となり、千夜は一息。

これさえ済めば、自由だ。

今だ途惑う自身に言い聞かせる。
そして、一仕事に挑んだ。
鼻先同士の距離を自分のペースで徐々に縮めていく。

同時に蒼助の顔が近づくにつれて心臓の脈の乱れが大きくなる。

「……っ……」

今度はそんな自分に動揺した。

しかし、それに対し千夜は無視を対処として選択した。

するべきことを目の前に別に存在していて、それを探ってはならないと何かが警告していたからであった。

だから、無視した。

無視して、そして――――。

「――――――――」

考えを打ち消すように衝動に任せて踏み切った。

合わさる唇。

押し付けるようなキスが成った。

される形となった蒼助は何も反応を返さず、言われたとおりに黙って動かずされるがままにしている。

互いの体温を合わせる。見方を変えれば、そんな行為とも考えられるキスであった。

長くも短くもないその時間は、する方がゆっくりと離れたことで終止を迎えた。

瞼を開けると千夜は一足遅れて目を開ける蒼助と視線を交わらせた。

開口を切ったのは、気まずく口を開いた千夜だった。

「……気は、済んだか」

「――――ガキがするみてぇなキスだな」

もう殺そうか、と殺意が芽生えかける。

が、そこに付け加えが入る。

「でもま、悪くはねぇ。相手がお前なら、他の女と舌突っ込んで長ったらしくするよる断然ヨカッた」

「……褒めているのかそれは」

「純粋な感想だ」

あっけらかんに言い切って、蒼助は憮然とした表情の千夜の手をとって口付けた。

「いずれもっと深くて長いのを俺が教えてやる」

「いらねぇ」

「遠慮すんなって」

ココに来て何度目かの溜息を千夜は吐き出し、

「お前……なんかキャラが変わっていないか？」

今日ずっと抱えていた疑問を、このタイミングをもって吐き出してみた。

すると、蒼助は平然と質問に対し「否」と返す。

「スイッチが入っただけだ。けど、あえて言うなら……お前の前じゃ結構猫かぶってた。転入初日のお前みたく」

「何で……」

「それ自覚したのは江ノ島から帰ってきた時だったけどな。お前といる時とかお前が話しに絡んでくると俺はいつも調子が狂ってた。らしくねぇ俺をお前に見せててよ。単純に考えてみたら答えは簡単なんだよな……ただ、お前に……好きになった女に嫌われたくなかったんだわな」

千夜の手を弄びながら蒼助は独り言のようになんてことないようにとんでもないことを述べた。

蒼助にとってはなんでもなくても千夜にとっては大問題だった。

おいおい、ちょっと待て何でいつのまにか口説き文句に入ってんだコイツは。

自分が今異常な状況下に置かれていることを千夜は嫌というほど理解していた。

次々と蒼助が衝撃的な新事実を浴びせてくるせいで、千夜の思考回路は精密な情報処理及び思考作業に支障をきたしている。

「最初はなーんでこんなおっそろしい奴を、なんて自分の正気を疑ってたりなんだりしたけどよ。やっぱ、惚れた弱み……いや、欲目っつーんだっけか？　そーゆーのが作用すると、お前が可愛く見えて仕方なくって――」

「ちょっと待て！　いいから待て！」

耐え切れなくなってついに制止に出た千夜は弄られる手をブンっと振り払う。
肩で息をして、落ち着く。

「……ちょっと前からかと思っていたら、大分前からおかしなことになっているお前にいくつか聞きたいことがある」
「おう」
「俺が男だったっていうのは知ってるよな？」
「見たし、触ったし」
「……五日に一度、男に戻るんだぞ？」
「水をかぶるたび性別変わるよか安定してる。気にすんな」
「俺は、女が好きなんだけど……」
「意識改革が必要だな」

ぶつ、と頭の中で何かが切れる音と共に千夜は理性を放り投げた。

「――――だ・か・らっ！　遠回しにお前をそういう目じゃ見れんと言っとるんだ、俺は！　察しろよ！」
「んな回りくどい言い方じゃわからねぇって」
「そんなんで女と別れる時どうやってんだ！」
「俺がフラれたことなんてねぇし」
「……」

つまりは一方的に捨てているということらしい。
意外と女に対しては酷い奴だ、と認識を変える。
多くの女と関係を持っているくらいだから、博愛主義とかそういう類の恋愛主観の持ち主なのかと千夜は思っていた。
だが、そんな男が何故今更自分などを、と思考が原点に還ったことをきっかけに再び口を開く。

「いいか、俺は表面上は女として生きていくことを余儀なくされた身だが、男の主観までは切り替える気はない。つまりは、だ。俺は男を恋愛対象にしない。だからといって、今更この身体で女を好きになろうとも思わん。この先、もう誰かと恋愛関係を持とうなんて考えはないんだ。わかったか？」

息をつかず一気に言い切る。

一部たりと付け入る隙もない拒絶だった。

一息ついた後、千夜は蒼助の様子を伺った。

目を伏せて無表情で何か思案するように考え込んでいた。

そして、

「……俺のことは？」

「は？」

唐突な問いかけに千夜は相手の意図が汲めなかった。

「お前が恋愛に関してどういう姿勢でいるかどうかは大体は言われなくても察しついてた。

俺がお前の口から聞きたいのは、お前は言うべきなのは、そんなわかりきったことじゃなくて相手である俺に対する感情がどういうもんかじゃねぇのか？　何でそんなわかりくどい言い方しかねぇんだ、千夜」

まっすぐな言葉を突きつけられ、千夜は思わず息詰まった。

すかさず蒼助は追撃をかけるように言い放つ。

「で、どうなんだ。俺のこと、吐くほど嫌いか抱かれたいほど好き

か。

――――――どっちだ」

何でそんなに選択肢が両極端なのか。

かつてこんなに難しい二択に遭遇したことがあるだろうか、と千夜は過去の経験を思わず振り返った。

無い、と事実を受け止め一瞬の現実逃避から帰還した千夜は言葉を濁しながら、

「……嫌い、なわけがあるか」

「……で？」

「どちらに傾くかといえば……好きだ――――だが」

答えを出した後、千夜はすぐに対立の接続の意を示した。

「お前のいうものとは違う。俺はお前を気に入っている。一緒にいるととても楽しい。出会えたことを心から幸運と思える存在だ。大事な、友人だと……思っている」

目の前の存在に対し把握している己の感情を有りのまま告げる。

そして、呼びかけるように次を放った。

「……それじゃぁ、ダメなのか？　俺と同じように、お前は俺を想うことは出来ないのか？」

「無理」

即答であった。しかも断言。

気持ちを込めた多くの言葉を僅か二文字の一言で拒否され、千夜は再び堪忍袋を切らしそうになったが、グッと堪える。

その努力が肩に痙攣となって表れたが、原因と男は気づくことも

なく、

「まぁ、俺もそう考えたことがなかったわけじゃねぇんだぜ？　つーか、昨日までがんばってた。男のお前見て、自分の頭のおかしさ実感して……諦めようって決心固めかけてた。もし欲情しちまったら、一晩に何人女はべらしてでも気持ち忘れて、次の日にはまた友達面してお前の隣に立てるようにしようって。どんな形でもいい、お前の隣にいる権利がもらえるなら……何だってよかった」

するり、と伸ばされた手が頬を撫でた。

怖いくらいに優しい手つきはまるで愛でるようだった。

真剣な眼差しと合い、千夜は何も言えなくなった。

「――――と、そう思えたのは昨日までの話」

「……あ？」

「いやもう無ー理。勢いでした告白で箍が外れちまったみたいでな。今じゃ、もうそんな意見却下却下。先の希望は、エロエロな男と女の関係。もうそれ以外は無し。

――――だ・か・ら」

突然腰に力が加わり、力強く引き寄せられる。

抱き寄せられたと気づいた時には既に蒼助の腕の中に千夜はいた。

それをした蒼助は耳元で言葉をその小さな穴に吹き込む。

「もう遠慮はしねぇ。必ずオトす。抱いてくれって言わせてやる。絶対に俺のモノにしてやるから覚悟しとけ」

そう宣言するなり蒼助はぬるり、と千夜の耳に湿った舌を這わせ舐める。
濡れた感触を離したかと思えば、ふっくらとした耳朶を口に含み吸いつくようにそこにキスをした。
まるで手始めといわんばかりの仕打ちに千夜は、
「――――――っっ！！！！！」
何も言わずにその鳩尾に拳を叩き込んだ。
迷いのない一撃であった。

◆◆◆◆◆◆

「……うぐぅ……」
やりすぎたか、とベッドの上で蒼助は反省に浸っていた。
ズキズキと鈍く、されど確かな存在主張をせんとばかりに痛みは鳩尾あたりで疼く。
感情に放った一撃だったのだろう。
危うく胃液が逆流するところだった。
「俺、今日飯食えっかなぁ……つっ」
溜息をついたら腹に響いた。

蒼助は今部屋に一人でいた。
千夜は殴った後、そのまま部屋を勢いよく出て行ってしまった。

「ま、これぐらいのリスクは……な」

殴られることくらいはある程度覚悟していた。
相手にそれだけのことを強いている、ということだ。
勝負にリスクは付き物だ。

問題は、最後に勝つか負けるか。
大事なのはそれだけだ。

「……にしても、ここは一体何処だってんだろうな。……あいつんちじゃねぇし……だとすると後は」

必然と三途の家、という憶測が出る。
一階は店でその上は自宅と聞いている。
この外観から組み立てられるイメージから大きくズレた実際の広さも魔術か何かが作用しているせいだろう。

「俺……これからどうなんだろうな」

この家の主は自分の命を狙った。
無論生きているのだから失敗したに決まっているが、問題はその後自分をどうするかだ。
また殺そうとするだろうか。
もうそれはない、とは言い難い。

何故なら、まだ終わっていない。
そう、

――――【奴】は今もこの身体の中に在るのだから。

蒼助にはわかる。

こうして今は身体を取り戻したが、”取り戻しただけに過ぎない”。

あの男は消えていない。

三途が殺したがっていたのは自身ではなく、あっちの方だったようだからそれを知れば自分をまた狙う可能性は高い。

まったく災難だ。

この身体の中の疫病神のおかげで品揃えのいい店の気のいい店主には命を狙われるようになってしまうとは。

前途多難だ。

「これも【澱】ってやつなのかねぇ……っん？」

ふと沸いた違和感に蒼助は身体を起こした。

首を鳴らしてみたり、腕回しなど唐突に準備運動のような素振りをし出した。

それらを終えた後に、右手の五指を動かしながら手の平を見つめる。

「……何で、」

呟きかけた時だった。

閉じたドアが外部から開けられた。

そこに見えたのは、

「千夜……？　お前、出て行ったんじゃ」

「その家出した妻みたいな呼ばわりは止めろ。寒気がする」

酷い返しをしながら後ろでに扉を閉じると、こちらに歩み寄ってくる。

閉じた方と逆の手には、盆の上に乗った中で水が揺れるガラス容器と、コップが一つ乗っていた。

「……これを取りに行っていただけだ。腹減っているだろう？今、向こうで茶漬けつくったからそれも持ってきてやる。これ飲んで少し待ってろ」

「……」

「何だ」

「いや、お前って捨てられた犬とか猫とか絶対素通りできないタイプだろうなぁって」

「余計なお世話だ」

「別に悪く言ってねぇだろ。俺のことも拾ってもえらそうだし」

「お前のような計算づくな駄犬は論外だ。去勢するぞ、馬鹿犬」

コップに水を注ぐ。

五分の四ほど面積を水が満たすと、それを蒼助に差し向けた。

「ほら」

ぶっきらぼうに差し出された。

こいつのこういうところいいよなぁ、などと暢気に思いながら蒼助はそれを受け取ろうとした。

――――――……パリン……っ……

細く透き通った音が響いた。
ガラスの割れ音だ。

「っは？」

それは蒼助の手の中で起きたことだった。

［六拾参］　一時の休息（３）（後書き）

……（読み返してる）。

……うん。

多分、蒼助はスイッチが入ったんだと思います。ラッド・ルッソみたいにパチリパチリって。エロいスイッチが（それが貴様の精いっぱいの言い訳か

ちくしょう、こいつら二人が必要以上にイチャついてるから本来載せるはずだったところまで行けなかった。

くそ、中間近い上来月推薦入試なのに（マジです

話は変わりますが最近、未成年による物騒な事件が多発していますね。

それも斧とか使用してるとか。

どうもひぐらしとかの影響だとか言われて、アニメの放送が休止したりしてます。

それと前から悪名高い「Ｓｃｈｏｏ○　Ｄａｙｓ」も最終回がテレビで流せないとかになったらしく、あの話の後味悪さはたまたま見たＹＯＵＴＵＢＥのエンディング動画とかで知っていますが、アニメはそこまでだったのかと気になったのでニコニコで見てました。

ほんの好奇心でした。

……。（鑑賞）

――やべぇ。

何だ、これは。

吐きそう。後味悪すぎて胃液が奥から込み上げてきた。
半端じゃない。原作ある意味超えてる。前に見たエンディングよりもタチが悪いよ。
これは放送できないのも納得。むしろしちゃダメだ。

主人公が最後（バキューン！）とか。
ヒロインB（幼馴染）がヒロインAを（バキューン！）そうとしたら逆に（バキューン！）されちゃったりとか。
挙句にヒロインAが（バキューン！）された主人公の（バキューン！）を（バキューン！）っちゃったりして。

ちなみにこれを見たのはテスト勉強を兼ねた早朝でした。
この後食べた朝飯が恐ろしくまずく感じましたマジで。
これ見て寝たら最高の悪夢が見れそう。
原作つくった人、余程恋愛に憎しみとか屈折した感情抱えてるんだろうか。
興味持った勇者は見てみるといいです。
引くから、本当に。

ちなみに出る結末に対する感想は一つでした。
「二股野郎は殺されても文句言えないってことだよな」としみじみ。
見終わった後に爽やかなタイトルを読むと妙に生々しく感じるこのアニメ。

気を取り直して次回ですが、黒蘭が蒼助に衝撃的な事実を打ち明けます。
そして、一つの交渉を……。

待て、次回。

［六拾四］　理解の時間（前書き）

口調は優しく丁寧に
じっくり耳から注ぎ込ぎ、脳を浸すように
――否定なんてする余地なんか、与えないように

［六拾四］　理解の時間

「それじゃぁ……これ、持ってみて」

そう言って差し出されたのはガラスのコップ。
目の前に差し出されたそれを見つめた後、怪訝な視線をやればその意味を承知した様子でそれでも尚黒蘭は、

「いいから」

もう何でも良くなって蒼助は結果は見越してはいたものの、言われたとおりにした。
手がコップの表面を包み込むような形で、それを持とうとした時。

――――パキ……ッ。

触れる、という寸前でコップに異常が起きた。
そして――――それを前兆として区切り、後は一瞬で砕け散った。
まるで外部から圧し潰されるかのように。

キラキラと破片が床に散らばるのを見届けて、蒼助は黒蘭を伺うように見た。

「……と、いった感じなんだけど」
「うむ、なるほど。ありがとうね」

少し前の出来事を“再現”しただけで何かを理解した様子で黒蘭は頷いてみせる。

「これと同じことが、寝室の方で起こったのよね？」

その問いを向けられた蒼助の隣に座っていた千夜は頷くという動作でそれを肯定した。

「……そう」

「おい、納得してねぇで説明しろよ」

「多分人体には影響が出るほどじゃないだろうけど、霊力がね……暴走してるのよ。霊質粒子の流れ通る道が出来ている自然から生じた物質や存在ならそれを受け止めることが出来るから問題ないけど、こういう人工的に生み出された化学物質にはそれが通る流脈が存在しない。当然、霊質粒子は宿らず付着するだけに留まる。そこに坊やの制御も手加減も何も出来ていない霊力が負荷となってかかるから脆弱な物質そのものが耐え切れず崩壊した……と。わかった？……目が点になってるけど」

「お、おう」

嘘だ。

その場にいた誰もが見抜いたがあえてスルーした。

それよりも優先して気にすべきことが他にあったからだ。

「黒蘭、そういうことを聞いているんじゃない」

「あ、そうだって。俺が聞きてぇのはそーゆーことじゃなくてだな……俺の身体は一体……」

「だから言ってるじゃない。霊力の制御がなってないから、軽く暴走してるのよ」

「……制御ぉ？　暴走って……オイオイ、俺にそれほどのもんになるほどの霊力なんぞ自慢じゃないが持ち合わせちゃいねぇって」

本当に自慢にならないが、生まれてこのかた霊力の制御などしたことがない。

そもそも制御する必要もなく、微弱すぎて何の役に立たない代物だ。

それが暴走しているという。しかも、先程のような現象を起こしている原因だと。

そんな馬鹿な、と笑う蒼助に黒蘭は肩を竦め、

「仕方ないわねぇ……」

やれやれという仕草を見せてからその後一秒にも満たさない間に”行動に出た”。

「っな――――――！」

「っ！？」

徐にコーヒーカップに挿していた小振りのスプーンを掴んだかと、黒蘭はそのまま蒼助の喉元向けて突き出したのだ。

それは周りの者はおろか、一番近くにいた千夜と矛先の当人である蒼助ですら対処する隙も無い疾さで行われた一手だった。

為す術もなくスプーンは蒼助の喉仏に突き刺さった――――ように見えた。

「……こくっ、……っ？」

非難をあげかけた千夜は、問題の部分を見てその手前で止めた。
喉に深く入り込んでいるように見えたスプーンの先端。
それを注意深く見てみれば、

「……あ？」

刺された当人である蒼助も自身に起こったことに違和感を察した。

痛みがないこと。
違和感の正体であった。

不意に下げた視線が床下で反射する小さな物質の欠片を捉える。
欠片は歪んだ金属のようだった。
まさか、と思った途端、喉元から凶器（スプーン）が退いた。

「ほら、ね？」

掲げるように見せられたそれに蒼助と千夜、そして周囲の者は目を見張った。
スプーンの先端は大きくかけており、既にその機能を失った形をしていた。

「貴方の体とその表面上をのたうち回っている力がこの化学物質であるこれを拒絶して、こうなったのよ……さぁ、これで実証になったかしら」

勿体無い事しちゃったけど、と呟きながら黒蘭は変わり果てた器具を元の場所に戻した。

「……一体、何で……何で」

呆然とする蒼助は自身の手の平を見つめた。
そこには、以前と変わらない己の手があった。
何も、変わっていないはずの手が。

「んー、ごたごた説明を並べるよりも……まずは、こう言ってあげた方がいいかしら」

そう一人で決めるなり、黒蘭は己よりも遥か高い位置にある蒼助の顔を見つめながら、その手の上で己のそれを重ねた。

「おめでとう、坊や」

突然の祝辞。
蒼助はどう反応すればいいかわからず、ただ聞き入れた。

「……は？」
「壁、越えたみたいよ？　貴方の前に立ち塞がっていた、〝こちら側〟と〝あちら側〟を隔てる境界線を」

相も変わらず微笑を湛えながら、黒蘭は、

「〝澱〟へようこそ……もとい、〝人外〟昇格おめでとう」

衝撃的発言をにべもなく言い切った。

◆◆◆◆◆◆

「黒蘭っ！？　何を言って……」
「嘘だと思うのなら直に触れてみなさいな。三途、貴女が一番わかるだろうから」

驚愕の反応を見せた中で、指名を受けた三途は疑心の心境のまま、

「……すみません、少しこちらへ。動けないので」
「あ、ああ、いいっすよ」

ソファに腰掛けたままの三途の元に二、三歩近づく。

「少し、前へ屈んでください」

言われた要求に従うと、胸に三途の手が置かれる。
ただそれだけの状態がしばし続いた。

何がわかるのだろうか、と疑問の答えになるであろう反応目を閉じている三途に期待して待っていると、

「これはっ……」

三途は目を開き、驚愕に瞼を震わせた。
そこに追い打ちをかけるように、

「彼が肉体の主導権を握れば、体の変化も元に戻ると思ったんでしょうけど……その読みはハズレね」
「……あのー」
流れるシリアスな空気に耐え切れず、蒼助は思わず手をあげた。
「話が弾んでいるようで悪いんだけどよ……勝手に納得してないで俺にもわかるように説明してくれね？」
さっきからどうも一人話題に置いていかれている気がして仕方ない。
問題の渦中にいるにも関わらず、話に全く入れないのだ。
不貞腐れたような蒼助を顧みた黒蘭は会話対象を三途から移し、
「あら、ごめんなさい。……まぁ、手っ取り早く簡潔にいい表すと――――貴方もう人間じゃありません」
「ホントにあっさりだなオイっ」
とりあえず、ツッコミを入れる余裕は蒼助の中に残されていた。
「わかっていると思うけど……自分の中にあの”異物”が残っていることには気付いてるんでしょう？」
千夜と三途が目を見開くのが目に入ったが、あえて無視して蒼助は頷いた。
「その状態であるのは、言わずともその異物のせいであるけれど……逆に、貴方が退魔師としてオチこぼれになった原因も然りな

のよ」
「……あ？」
思わず気の抜けた声が喉を突いて出た。
突然、自分のコンプレックスを指摘された怒りよりも、何の脈絡があってそこへ跳んだのかという疑問と驚きの方が大きかった。
しかも、相変わらず話が見えない。
「まぁ、そこらの云々はひとまず置いておくとして。それより……貴方、【混血種】ってわかるかしら。日本じゃ、半妖って呼び名の方がメジャーだろうから、そっちの方なら知っているかしら」
出た単語と共に、一瞬蒼助の脳裏を元同僚の残像が駆け抜ける。
「……ああ、知ってる。人間とそうじゃないのとの間に生まれるっつー……ヤツだろ」
「そこまでわかってるなら話は早いわ。――――ぶっちゃけ、貴方は”ソレ”よ」
「……オイオイ」
突飛な話加減に更に加速がついてきて、そろそろ付いていけなくなってきた。
理解しがたさに頭痛すら感じ、それを堪えつつ、
「ちょっと待ってくれ……いくら何でもそれは冗談か何かだろ。俺はどっちの親もかなり偏った奇人変人だが……生物分類的（カテゴリー）には人間だぞ」
「そうね、有り得ない事だわ。玖珂家は武道系統。崇める神に信仰で加護を授かるタイプで、間違っても信仰対象と交わるという過ちを犯したことはない真っ当な一族だもの」

「だろ？　だったら……」
「でもね。――――”特例”だから、有りなのよ」
「……は？」

不意を突かれた表情になる蒼助に、黒蘭は子供に言って聞かせるような優しい声色で、

「昔話をしてあげるわ。むかーしむかーし、の……”貴方の昔話”を」

◆◆◆◆◆◆

「あれは……そう、時は戦国時代。織田信長の本能寺の変から数年が過ぎた頃。その”異例の儀式”は行われたわ」

謡うように黒蘭は語り始めた。
その声を濁す他音は一切ない。
誰もが真剣にその語りに聞き入っている態勢でいた。
語る場として整った舞台で、黒蘭は思うように語り手に扮した。

「儀式の当事者は一柱のカミと一人の青年。彼らは互いに”望み”を抱えその儀式に試みた。そして儀式は、その双方の”望み”を昇華させるべくして行われたものだった」

聞き入る中、三途は一人思い出していた。
その内容はあの青髪の男が自分に零した話と同じであると。

「立会人もなく行われたそれを目撃した者はなく、ただ二つ噂だけが残り……その噂もやがては薄れて消えた」
「……それで、それと俺に何の関係が」
「二つの噂……一つはその儀式そのもの、もう一つは青年の身元。その人間は――――玖珂の一族の出だったそうよ」

黒蘭の言葉に便乗した衝撃が聞き手達の間に降り立つ。

「ちょっと待て……そんな話ウチには」
「なくて当然ね。その男は、家を出たっきりその後の行方を絶っていたらしいから。そんな話伝わるはずもないわね……確かあの頃流れていた噂で聞いた、名前の方は忘れちゃったけど性は玖珂だっていうのは覚えるわ。剣神でも一、二を争う須佐之男が付いて回る姓だから、なかなか大きな噂になったもの、忘れるはずない」

衝撃から立ち直りきれない蒼助はそれを唖然としながら、耳に入れていた。
そこに、もう一つの重要な観点に三途が触れる。

「……ところで、肝心のその儀式の正体とはいったい何だったんですか？」

再び空間に沈黙による静寂が舞い降りる。
口を開くことを許された唯一人、語り手の役を担う黒蘭は問いに対する答えを述べる。

「魂の融合……いえ、存在の融合ね。耳にする噂で明かされていたのは、カミは有限の命を、人間の方は力を求めていたということ。憶測だけど……当人たちが考えた末に辿り着いた答えとやらが、”

どちらでもない存在”になるということだったんじゃないかしらと私は考えた」

「どちらでもない存在……っ、まさか！」

三途が蒼助を見た。

「……え、なんだよ」

「黒蘭……そういうことなんですか？」

自分を向かれた意図を理解できていない蒼助を相手にせず、三途は黒蘭に何か確認する。

それに返す黒蘭の言葉は多くはなく、簡潔に明確なものだった。

「ええ。儀式とやらは成功したみたいね」

「いや、だから……何だってんだよっオイ」

再び話に置いていかれた蒼助は困惑と苛立ちに揺れながら、周りに説明を求め声を荒くした。

それに応えたのは双方のどちらでもなく、彼の隣の人物の溜息混じりの声だった。

「まだわからないのか……お前のこと言ってんだぞ」

「あん？　俺？」

目を瞬かせる蒼助を顔を見て、更に溜息。

こうなれば、と気遣いも何も捨てて千夜は直球を投げることにした。

「……だから、――――――”お前がその儀式の成功の証明だということだ”」

沈黙。
固まる蒼助。
反応を伺う周囲。

そして、

「……マジっすか」

縋るように最終確認を求める声が蒼助の口からポロリと落ちた。

◆◆◆◆◆◆

立ち直りは周囲が思ったよりも早かった。

立ち直ったというよりも、好奇心の前進力が勝ったというべきだろう、と蒼助は一人自分の精神状態を解して、納得しながら、

「……つまり俺は……なにか、人間じゃなかったっつーこと？」

「貴方の場合、過去形じゃなくて現在進行形よ。人間じゃない」

どっちにしたって状況は変わらねぇだろ、と口の中でぼやき、蒼助は今だ現実味のない己の明らかにされた新事実を噛み締める。

「……いやでも俺だっていう証拠がなくね？」

「貴方が玖珂の家に生まれたことこそが証拠よ。混血はどういう摂理かはしらないけど、必ず血脈を辿って生まれるの。儀式の片割れが玖珂の人間だったなら俄然通る話よ、これは」

もっとも、と黒蘭は付け加えるように言った。

「完全、とはいかなかったようだけど。肉体は上手くいっても、中身の方は水と油だったみたいね」

「あ？　どういう意味だよ」

「マヨネーズにならなくてよかったわねってこと。卵とお酢があったら、融合しちゃってたのよ？　ちょっとびびるか安心するかしてみなさい」

思考してみて、鋭利で冷たいものが背中を刺すような感覚を覚え

て蒼助は青ざめた。
　完全に成功していたら、今ここに、玖珂蒼助たる自分の人格は存在していないということになる。
　例えのようない寒気のする話だ。

「ま、成功していたら今回みたいなことも起きなかったでしょうけど」
「不完全な結果に終わった儀式を、強引に完全なものにしようとしたのが今回の件の真相ということですか……」
「要するに、自分だけ得しようとしたわけかよ……ざけやがってっ」

　その儀式の意図とやらもだんだん読めてきた。
　恐らく、かつての玖珂の男は対等な立場で儀式に応じたつもりだったのだろうが、大間違いだ。
　意識の底に落ちた時に、遭遇したあのカミは明らかに自分の都合のいい方向に事を運ぶ筋を組んでいたのだろう。
　融合後、人格として残るのは自分を濃く残すという形を目論んでいたのだ。
　だから散々自分を”残り滓”呼ばわりしたのだろう。
　大体、そんな怪しげな受けた玖珂の男もどうかしてる。
　挙句にこうしてその後腐れで形としては”その後のである自分”が被害を被るなど。
　馬鹿馬鹿しいにも程がある。

「……恨むぜ、昔の俺……」

　知りもしないかつての自分に対する恨み言と共にはぁー、と深く溜息を吐き出し、頭を垂らす。

「……ん？　つーか、待て……ひょっとすっと」
「あら、何か思い当たることでも？」
「俺が……霊力極貧だったこともコレが関係してんのかなぁっと」
「ああ、それ……大方、予想外の結果の一つだと思うわ。今まで、貴方のコンプレックス以外に異常はなかったんでしょう？」
「ああ」
それだけで充分異常だったと思うが。
「乗っ取りが今回が初めて。今は溢れる霊力。……どういう捻りが効いたかは知らないけど、貴方の霊力は今までヤツの抑圧として注がれていた。貴方の霊力貧乏はそのせいって事になるんじゃない？」
「霊力貧乏……。じゃぁ、この状態は……」
「今まで抑圧に回っていた注がれていた霊力が行き場をなくしてところ構わず暴れ狂ってるのよ」
「……じゃぁ、これ、俺の？」
俺は出来損ないじゃなかったということなのか。
そういう意図を汲んだのか、黒蘭は、
「一応ね。正確には、アレとの共有物だけど」
気にしていない、それがどうした、と思いつつ、ずっと心の何処かで引っ掻き傷として残っていた引きつった痕が蒼助の中から消えていく。
だが、安堵と長年の密かな苦悩からの開放感に浸っている場合ではない。
すぐに我に返った蒼助は、今対峙している”問題”に正面から向き合い、

「……結局、このまま放っておくと俺ってどうなっちゃうんだ？」

誰も触れなかった最重要にして核であるその部分が曝け出され、なんともいえない重苦しい空気が生じる。

その場にいる全員の表情が無になった。

沈黙の中で、黒蘭は一人口を開いた。

結論を述べるべく。

「……普通の生活が出来ない。それはまだいいけれど、もう一つはもっと大問題」

「……と、いいますと？」

「再発の恐れが大。これが終わりじゃない。次回もあるわよ」

何が、とは問うまい。

誰もが聞かずとも皆それぞれ理解していた。

「今回は貴方が勝った。ひょっとしたら次も貴方が勝つかもしれない。でも、その次……その先、貴方は勝ち続けることが出来ると思う？」

「……負けたくは、ねぇな。少なくとも」

勝てる、とは絶対と断言出来ない。

今回だってギリギリだった。

黒蘭が言う次回は勝利に”かもしれない”という可能性すらないかもしれない。

そういうあまりにも強大な存在が、今も尚、自身の身体のうちに潜み、再び機会を伺っていると、蒼助は実感せずにはいられなかった。

耐えられるだろうか。
あの精神を堕とすべく、肉体と精神を削るような苦痛と責め苦に。
必ず、と言い切ることはさすがに出来ない。
「負けたくねぇよ……あんなヤツに」
過去がどうした。
約束がどうした。
自分だった誰かが勝手につくった厄介を、どうして自分が尻拭わなければならない。
違反であろうと何だろうと知ったことか。
自分は玖珂蒼助だ。
過去は、現在ではない。
自分ではない誰かがした約束なんかに、身を捧げる気など到底ない。
「……ちょっと、成長したみたいね。まずまずだわ」
「あ？」
何か呟いた黒蘭に握り締めた手を見つめていた蒼助は顔を上げた。
「どうしたの？」
「だから、今何か……」
「何か？」
首を傾げる黒蘭を見て、これ以上の追求は無駄な浪費だな、と蒼助はすぐに見切りをつけた。

「……いや、なんでもねぇ」
「そう？　まぁ、それはそうと……ね、坊や」
いい加減その坊やってやめねぇか、と思ったが、次の瞬間それも、
「――――”対処法”あるんだけど、どうする？」
欠片も残さず吹き飛んだ。

［六拾四］　理解の時間（後書き）

中間テスト真っ最中だというのに、何故かこんなことしてる人がいるぞー。
……私です（言わずもがな

今月は吐きそうなぐらい忙しい。
来月の今ぐらいには推薦入試。
その前に面接の練習だの三つくらい溜まった課題レポートの提出だのいろいろ重なる一方なのです。
ちくしょう、私をイジメテそんなに楽しいのかよぉ。

ところで最近の話なのだが、そろそろＡＯ入試やらなどでちょろちょろと合格者が出始めている我が校。
無論、楽観的に構えてたせいで痛い目見て落ちたのもいるが（ケケケケケ
顔見てるだけどれが合格者かわかるこの頃。
だってそいつの顔の緩みようが本当に馬（ストップ
先生もそれを把握しているのか、いつもより赤点が多く出るのではないかと危惧している様子。
十中八九、現実になると思うが。
私の、今となっては嫌悪の対象である元・友人ノリコ（仮名）も専門学校が受かったらしい。
すっげぇ納得できなかったが、そいつの世話係みたいな位置にいる私の親友のお母さんに言わせれば「誰でも行けるってことが証明されたじゃん」のこと。

それ聴いた瞬間、私の中で貴女はリンカーンと同じくらいの偉人として刻まれたよ、おばさま（笑）

すばらしい名言だ。
確かにそのとおりじゃないか。
金があって場所さえ選ばなければ、誰だって大学なり専門学校なり行けるんだと思う。
……だから、お前がスゴイわけじゃねぇんだよそこんとこ勘違いすんなよノリコ（黒

さて、この考えを確定すべく私も来月がんばらねば。

【次回予告】

身に巣食うカミを抑える対処法があるという黒蘭。
しかし、それには条件があると交渉を持ち出す。
蒼助に持ちかけられる交渉とは。
その条件とは。

次回　第六拾五話「交渉の時間」

【六拾伍】　交渉の時間

あまりにもあっさりと告げられた言葉に蒼助の頭の中は一度白紙に還った。
真っ白な頭が発言の分析に働きかけ、理解がなされること数秒後、

「本当かっ！？」

勢いあまり立ち上がる蒼助は飛びつかんばかりの迫力で黒蘭に凄んだ。
微動だに動じない黒蘭は簡潔に一言返す。

「ええ。誰も解決策がないなんて一言も言ってないでしょ？」
「何だっていいだろ、そんなことっ……それで、その対処法ってのは一体なんだよ！」
「がっつくわねぇ……ちょっと落ち着いたら、話してあげる」

じゃなきゃ教えてあげない、とそっぽ向かれて苛立つ。
しかし、蒼助は一度真っ白に還ったおかげで自分の立場を把握する余裕を持っていた。

自分は従う側だ。
ここで下手を打つわけにはいかない。

冷静な理解は行動にすぐさまとはいかないが移された。

「……」
「素直でよろしい。では、教えましょう。……でも、その前に質問」

肩透かしか、と一度堪えたものが再びぶり返しそうになる。
蒼助はそれをなんとか理性で押さえつけ、

「何だよ」
「”力”とは……何だと思う？」
「……回答拒否権は？」
「あるわけないでしょ」
「だろうな……力、な……」

いきなりふっかけられた難題に蒼助は慣れない頭脳作業にてこずりながらも自分なりの答えを出した。
要した時間は一分。

「……アンタがいう質問の力ってやつが権力財力能力戦力霊力知力重力その他諸々のどれにも当てはまらない……それ以前の、只の力だっていうんなら……。――――そこに在って無いモノだ」
「……その心は？」

探るような促しに蒼助は答えるように続きを紡ぐ。

「……力そのものに意味はねぇ。意味がねぇものは無いも同然だ。だが、曖昧ながらもそいつには”力”と名前がついている。在るようで無い、無いようで在るそれだけじゃ中途半端な存在……つーのを俺は言いたいわけだ」

自分の頭が決して良くないのは蒼助自身が一番わかっていることだった。
だから、借りたのだ。
昔、これを自分に教えた偉そうな女の言葉を。

「……ふーん、意外とイケるわね。なかなかの口回りよ……誰かの請け売りだとしてもね」
「……っ、」
バレている。
何故、と考え次の瞬間には馬鹿馬鹿しいと心の中で吐き捨てた。
相手は人外魔境の存在。
心を読むなんてことも平気でやってのけるだろう。
今更、この程度のことで驚いていてはこの先やっていけない。
「……じゃぁ、続けるわね。ならば、その中途半端な存在を確かなものとして確立させるには何か必要なのかしら」
「……うぉぷ」
「そんな吐きそうな顔しなくても。本当に肉体労働派なのね、貴方」
「勘弁してくれ」
小難しいことは苦手だ。
これ以上は限界だ。
表情でそう訴えると、黒蘭は、
「仕方ないわね。いいわよもう……そこも掻い摘んで説明してあげるから」
気を取り直すように黒蘭はまずは先程の質問の解答を明かした。
「――――概念よ、概念。わかる？　これが加わることで形があるんだか無いんだかの中途半端なモノがあらゆる可能性を持つ。さっき、貴方が言ったような例のいずれにもなりえるようになるのよ。意志によって抽象されることによって力は悪にも善にも姿を変える。

もっと簡単に言い表せば……力に形を与えるのは私達、それを求め使う者達。力に電力という考えを見出したのは？　重力を発見したのは？　ほら、力に意味を求めた過去の人々……そして、退魔師や魔術師も同じ。今も尚、力を霊力や魔力と呼称し扱い自分たちの目的に使い、よりその形を安定させるべく攻守の属性を添加させたりする。……力というものはそれだけではどうすることもできないただの木偶の坊。確かな存在として成り立つには使う意志を持つ者に意味を与えられなければならない。意味とは概念。与える私達も、すなわち概念よ」

「……で、人に散々壮大な哲学じみた話を聞かせておいてそれがなんだって言いたいんだ？」

「前提として知っておいてもらいたかっただけよ。坊やに関わる本題はこれからよ、こ・れ・か・ら」

「……これからかよ」

まだ始まってすらいなかったようだ。

「さて、本題。これらの概念をプラス概念としましょう。けれど、硬貨のように物事に表があるなら裏もある……という理屈を通すとこれの逆は何だと思う？」

「……マイナス？」

「正解。与える概念があるなら奪う概念も存在する。――――それが、【反概念（アンチ）】よ」

「アンチ……概念」

「全ての概念の真逆に位置に対立する特殊な概念なのよ。奪うといってもこの概念が力から意味を奪うということではないわ。こいつも力に意味を与えるわ。ただ……これが与える概念、それは――――”侵蝕”よ」

「……っ」

台詞の最後を聞いた瞬間、何故か蒼助はブルリ、と震えた。
たった漢字二文字の言葉がどういうわけかとてつもなく恐ろしい響きに思えた。

「他の概念に対する侵蝕……モノに付加されたプラス概念を消し去る。それが反概念の与える効能」
「……至って特別なもんでもないような気がするんだが」
「あら、どうして？」
「いやだって……そんなん、他の……普通の概念同士でもぶつかりあえば起こることだろう……理屈では」

そのはずだった。
だが、何故だろうか。
自分ではそう思っているのに、先程のあの戦慄した感覚はまだ余韻として残って消えてはくれない。

「ふーん……つまりは、言葉並べられたくらいじゃ信憑性がないってこと？」
「まぁ、はっきり言えば……そうなるな」
「――――三途」

突然話を振られた三途は目を瞬いた。

「何です、人を蚊帳の外においておきながら突然」
「拗ねない拗ねない。……ねぇ、ちょっとアンタの拳銃貸してくれる？」
「……お断りです」
「何でよ、いいじゃない一杯持ってんだから」
「だからといって貴方に駄目にされちゃたまりません。断固拒否します」

黒蘭が何をしようとしているのか知っている口ぶりで三途は本気で嫌がっていた。
そこまで拒否するほどのことなのだろうか、と傍観しながら蒼助は二人の会話を見守った。

「ケチ。じゃぁ、弾でいいわ」
「……一個だけですからね」

譲歩した要求にそれでも渋々とした様子で三途は応えとして何処からともなく拳銃に込める弾丸を手の平の上に出現させた。
コロリとしたそれを黒蘭は指先で摘むと、

「見てて」

蒼助に見えるようにそれを持ちながらそう言った。
何が起こるのか、と軽く身構えた次の瞬間にそれは起こった。

「――――――っっ！！」

見開く目に飛び込んできたそれは、蒼助の想像の範疇を一っ跳びした光景だった。
二本の指先に挟まれた弾丸は触れた端から徐々に黒ずみ始めた。

じわじわ。
じわじわ。

ゆったりと揺蕩うようなその進行はまさに”侵蝕”と言い表すに相応しい。
瞬く間に弾丸は鉛色のソレから黒一色に染め上げられた。

「――侵蝕完了」

押し潰したわけでもない。
閉じるように弾のある隙間を無くすと、弾はスカスカに焼かれた消炭のように崩れ塵になった。
破壊による崩壊ではなかった。
存在も意義も全て蝕まれ、中身を失い残った抜け殻が崩れたのだ。
起こった現実を目にして、蒼助は全てを理解した。

相殺などではない。
こんなもの、一方的な進攻だ。
為す術もなく飲み込まれるしかない、無慈悲な暴虐。

「これが反概念の侵蝕。いかなる概念であろうと問答無用で己の色に染め上げる【黒】を概念色として象徴とするマイナスの概念。聖魔の両極から外れた異端。赤、青、黄、白、緑のように多色を混じることのない、孤高の原色。そして、その概念属性を持つのは原色者ただ一人……」

理解した。
目の前の存在が何であるかを。
この消えない恐れの正体を。
蒼助は恐れていた。
黒蘭が、怖い、と。
途方も無い畏怖を目の前の少女の姿を象る存在に向けていた。

「さて、理解は出来たようだし……はっきり言わせてもらいましょうか」

畏怖の対象はそれを見透かしているのかいないのか、クスリと笑う。

優美に。
華麗に。
妖艶に。
不敵に。

濃縮された”巨大な侵蝕そのもの”である存在は、その微笑に幾つもの要素を絡めて笑い、断言する。

「私なら、貴方を助けてあげられるわ。無論、私もその気は充分あるわよ。貴方にそれだけのことをしてあげる価値を感じている。ここで喪すには坊やは惜しい存在だと思うから」
「随分と、デカく買ってくれてるんだな……たかが人間に」
「意外と謙遜なのね……あと、もう人間じゃないってば」
「ああ、そうだったな……でもよ、そんなことより早く言ってくれねぇか？」
「何を？」

白々しい。
そう思いながら、言わせる気でいるのを見越し、あえて蒼助はそれに乗った。

「惚けるなよ。アンタ、さっきからどうにか出来ると仄めかしても……”助けてやる”とは言ってねぇだろ。……何が、望みだ。助ける代わりに、俺に何を望む」
「頭は悪いみたいだけど、察しはいいみたいね。ますます気に入ったわ……。交換条件と言っても決して何か寄越せとかそういうのじ

ゃないのよ？　むしろ、貴方に損は無いわ」
「デメリット無し？　交換条件かよ、それ……」
「細かいことは気にしないで先に進みましょう。といっても、後は私が条件を出して貴方が頷くだけだけどね」
「選択の余地は無し？」
「あるけれど、必要ないんじゃない？　私は奪う気はない、でも予想では多分貴方はそれを自ら放棄するはずだから」
「ほほぉー……なら、言ってみろや」

自分の身の振りが掛かっているということは、一旦脇に除けて、蒼助は挑むような姿勢で先を促す。
どういう状況であろうと、自分の意思を無視されるのを蒼助は良しとしなかった。

「もう一度言っておくけど、貴方から何かを差し出せっていうことじゃないの。逆に、受け取ってほしいだけ」
「何だよ、贈物（プレゼント）でも貢いでくれるのか？」
「ふふっ……自慢の宝物だから、黙って受け取ってくれると嬉しいわ」
「へぇ……ぇ？」

蒼助は軽く受け流そうとしたが、流し損ねた。
黒蘭の指が動き、それを追った先にあったモノを目にしてのことだった。
その指先が指さしたのは蒼助――――――ではなくその隣であった。

「……オイ、何の冗談だ」

隣に座る人物が不機嫌そうに口を開いた。
黒蘭はそれに構わず、はっきりと、一句一字に満遍なく本気を込

めて公言した。

「私が出す条件は簡単なことよ。その娘を――――千夜を貰ってくれればいい。それだけよ？」

浮かべる穏やかな笑みからも本気を滲み出しながら。

◆◆◆◆◆◆

気が付けば蒼助は廊下の床で引きずられていた。

襟首を掴む有無も言うことも抵抗も許さない力に引っ張られて、人為的に床を走らされていた。

「あのー、千夜さん？」

そんな状況を作り出す相手は返事を返さない。
ただ向かっているであろう場所に絶えず足を動かすのみだった。
そして――

「オイオイマジでいい加減にしろよ!?　足とかケツとか段々熱くなって……っどわ!?」

突然、床と接する部分の摩擦が止まったかと思えば、一層ぐんっと強く引っ張られた。
喉仏に強い圧迫感が強襲したが、それは一瞬のことで自分が投げ出されたのだという自覚に掻き消された。
べしゃり、と床に顔から突っ込んで熱いキスの強制の後、蒼助はそれが自分の目の覚めた場所である寝室の床だと気づいた。

「っつ……お前、もう少し丁寧に扱えよ。つーか何っ?　本当、何なんだよ!」

黒蘭の「もらって」発言から始まって、ここまで僅か一分足らず。
脈絡も何もあったものではなく唐突に引きずり回された挙句、元の部屋に戻されて何の説明も無いのでは割りに合わな過ぎる。

しかし、抗議は床を激しく叩くように踏みつけた足音に消された。

「やかましい。理解しろとは言わんから黙って俺の意見を聞き入れろ」

暴虐無尽な発言は釘打つが如く低い音程で、一方的に突きつけられた。
これに蒼助は先程とは別の恐怖を覚え、思わず舌を巻いて黙る。

「俺は向こうで話を続けてくる。お前は俺が良いと言うまでこの部屋にいろ。いいな、絶対に出てくるなよ――――ぜっったいにだ！」

鼻先がくっつきそうなくらい超至近距離で顔を近づけられ、念を押される。

迫力に負けて蒼助が思わずただ首を縦に振るのを見て、満足したのか部屋を出て行こうとする。

「……待っているのが退屈なら寝てしまえ。ついでに全部夢に置き換えろ。明日からまた学校だ。最近寝てなかったんなら、ここで存分に惰眠を貪れ。……目が覚めたら、全部元通りだから、何も……心配するな」

背中越しに言葉を残し、ドアが閉じる。

床に座り込んだまま、蒼助はドアをしばらく見つめた。

そして、脳裏で反響させる。

全部元通り、という言葉を。

「……ざけんな」

口から出たのは理不尽に対する怒りを表す言葉だった。

「全部元通りにされて、たまるかっ……」

全てを0に還す。

何もかも無かったことに。

そんなことを望んでいるのは、自分ではない。

自分は望まない。

蒼助は衝動がままに立ち上がり、ドアに手をかけ――――かけた。

「……」

握り取っ手を見つめる。

金属だ。

蒼助の脳裏に二度にわたるガラス崩壊の光景が映像として流れる。

そして、ここは人様の家だ。

「……わざと閉めていきやがったな……トイレ行きたくなったらどうすんだよっ……」

かくして、ドア一枚を相手に傍目おかしな心理戦を開始する羽目になった蒼助であった。

【六拾伍】　交渉の時間（後書き）

今回はスローペースな作者にしては珍しく二本立て。
続きへゴー！

【六拾六】　決断の瞬間

「あら、おかえりなさい」

リビングに戻った千夜を白々しい声が迎え入れる。
怒りの沸点がワンゲージ上がったが、それを知ってか知らずかその矛先の相手である黒蘭は、依然と飄々としている。

「……黒蘭」
「何その手」

千夜は黒蘭に向けて手を差し出していた。

「寄越せ」
「何を？」
「魔力殺しの呪具だ。あいつにやる。それでこの件は解決だ」
「今持ち合わせてないわよ」
「なら、三途に加工させる」
「……千夜、私は」

言いかけた黒蘭の言葉を千夜の硬い声が遮る。

「今更、関係ないヤツを巻き込むな。〝アレ〟は俺の問題だ。あいつが抱える問題に重ねがけるな」
「……そんなに抱かれるの嫌なの？」
「そっちの問題じゃねぇだろ。着眼点逸らそうとするな、この馬鹿っ！」
「全然ってわけじゃないくせにぃ」

「っっ……そうじゃないと言っている」
「今の間のせいで、説得力ないわよー」
遊ばれている、と千夜が自覚するには充分の経緯となる会話が成立した。
このままでは限がない。そう思い抵抗を止め、折れた。
「……っ、あえて言おう。それもある。男に抱かれるなど……吐き気がする」
汚物を吐きだすような勢いで紡がれた最後の言葉に、どれだけの感情が、激情が込められいるかを知ってか、黒蘭は一瞬だけ笑みを消した。
そして、
「キスしてたくせに」
「――――」
爆弾が投下された。
「え、いつのまにそんなとこまで……」
「なんですとぉぉぉぉっっ!!???」
聞き入ってた三途や静観していた上弦はそれぞれ反応を示す。
それに後押しされるかのように羞恥心が千夜の中で膨張し、
「な、ななな、な」
何で知っているんだ、と言葉にならない訴えをしていると、

「もうびっくりしたわ……まさか」
「おい、一体いつ何で……」
「ん？　ああ、今の学校に転入する前日……貴女が借りたビデオ返しに行った後に、なんか炭酸飲料飲みたくなったから、ついでに買ってきてもらおうかと探しに行ったその時――――同居人は見た、ってな感じで」

ああ、そっちか。
安心してもいられないが、幾分マシな結果に――――

「びっくりよ？　まさか出掛けがけに行きずりの男ひっかけてるなんて……」

――――ならなかった。

「もう少し言葉を厳選して選べ！　アレは帰り途中でなんか死にそうになってたから助けただけだ！！」
「そこから何でああいう状況に？」
「三途のところからパクった霊薬飲ませるためだ、キスじゃないアレはキスじゃないっっ」
「……どうりで一本足りないと」

別の秘密が露見してしまったが、この際どうでもよかった。

「そもそも俺がああいう場面に居合わせて、あいつと妙な縁繋がりになった原因は、あの日お前が借りたレンタルビデオギリギリまで放置していたのを俺に返しに行かせたからだろうが！　大体何で毎度毎度ＡＶなんだ！？　しかも人格疑われそうなマニアックなものばっか借りやがって……店員が受け取る際の俺に対するチラリ見がどんなもんかお前は知らないだろうがな！！」

「その後、何度か一部の男店員に欲求不満呼ばわりされた上モーションかけられて容赦なく半死半生にしているのは知ってるけど。あんなに男店員ばっかり短期間で入れ替わるんじゃ、そろそろ店側も不審がるわよ？」

「誰のせいだ、誰のっ！」

「姫様、少し落ち着いてください。黒蘭さまも、いい加減になさってください。話が少しも進展しませんでしょうが」

いい加減このままでは収拾がつかなくなってきたのを見兼ねてか、上弦が間に入った。

実に慣れた様子で二人の間を仲裁していく。

彼ら三人にとってはもはや恒例とも言える光景だった。

「お聞きください、姫様。私めとて、あのような男に貴女様を任せるのには心痛みます。ですが……ですが、その”呪い”はそのようなことを躊躇していられるほど生易しいものではないのございます」

宥めるように上弦が連ねた言葉に、千夜の高ぶる精神は水に浸されたように熱が収まりだした。

そこへ、黒蘭が更に被せるように、

「少しでも夜うろつけば、その”匂い”を小物の魔性が蟻のように集まってくる。それだけならまだよかったけれど、今、貴女は……それより”厄介なやつ”に狙われている。対して、貴女は万全の体勢はおろか……。

――――”自らの霊力すら消失した状態”にある」

「……」

「現状でも相当ヤな状況だけど……この先もっとヤバいことになるわよ。はっきり言わせてもらえば……貴女一人で切り抜けるの

は無理だわ。貴女だってそれがわからないほど、馬鹿じゃないでしょう？」

「もう十分な逆境だろうが。これ以上、何か起こっても俺はもう驚かないぞ」

「真面目に聞きなさいって。何度も口を酸っぱくして言ってるけどその呪いはマジで性質が悪いのよ。私が今まで見て知ってきた中でも……それは存在しうる”呪”の中でも指折りの――――獰猛にして貪欲たる、凶悪にして、最悪の悪食なんだから」

多重の豪語。

ゼロが二桁つくほどの時を生きてきた黒蘭にそこまで言わしめるほどの悪質なものなのは、千夜とてそれを受ける身として十分に理解している、つもりだった。

「……いい？　一度よ、たった一度。僅か一度のミスでゲームオーバーなのよ、今の貴女は。それだけで、人から”道具”に貶められ、貴女の身は貴女のものじゃなくなる。……貴女が毛嫌いする、何処の馬の骨かもわからない腐れた奴に問答無用で力で全てを捻じ伏せられるのよ。以前の貴女なら、ともかく今の貴女じゃこれから先降りかかるもの全てを退けることは無理、断言してもいい」

取り付くしまもないくらい言い切られ、千夜は別のところから話に差し入る。

「そこで、何で……蒼助を」

「人は病原ウイルスから命を守るために何をする？　予防、あるいは自らの身体の中で飼う免疫によってこれらを撃退する。彼に担ってもらうのは、まさにそれと同じ役目」

「……まさか、お前」

「王とは常に一つの場所に一人が原則。その呪もそれに倣っている。

貴女を所有できる資格の席は一つだけ。ならば、その席を――――
私たちが人材を用意し、先に埋めてしまえばいいだけのこと」
「――――っっ！！」

千夜の手が黒蘭に伸びた。
胸倉を掴み、ドレスの生地を引きちぎらんとばかりの勢いで自分の鼻先まで引き寄せた。

「姫様っ！」
「黙れ、上弦！」

蛮行に対し、制止に入ろうとする上弦をその場に留めさせる。
千夜は鋭い眼光を目の前の黒蘭ただ一人に向けた。

「お前……それがどういう意味かわかっている上で俺に言っているのか」
「何か問題でも？」
「……お前がしようとしていることは、あいつを俺の前に置き……注意を逸らす。そうなれば……」
「ええ、間違いなく……――――あらゆる全ての殺意の標的になるわね」

表情一つ変えないまま、黒蘭はありうる先の未来を肯定した。

「……あいつを、生贄にする気か」
「まさか、それじゃぁ席を埋める意味がない。そんな役不足な人材は、こっちから願い下げよ」
「なら、どうして」
「さっき言ったじゃない。席に相応する人材で埋めるって」
「あいつがそうだというのか……？」

「合格点は取れてると思うわよ？　意思は申し分なく強い。ポテンシャルの高さも今のところはまずまずだし、この先も見通しがいい……素材はそれ自体が上質であれば、後は磨きようでどうとでも化ける。グロテスクな魚だって腕のいいシェフの手で洗練された料理に変わる。……それと、同じ。今が相応でないなら……輝くことを知らない原石ならば、これから目一杯磨きかけていけばいい……昔の貴女のようにね」

黒蘭の言っていることは正しい。

魚の喩えはともかくとして、宝石の原石でいうなら、そのものは見かけ只の石ころに過ぎない。外見だけで判断する輩はそれだけと見向きもしない。だが、稀に見る目のある者に見抜かれれば、磨けば磨くほど洗練されてやがては、誰もの目に留まる輝きを身に着けていくだろう。

それは、人間にしても同じことだ。

才能を持っていても、それは発揮されなければ宝の持ち腐れでしかない。

「あいつがダイヤの原石か……随分と高く持ち上げたな」

「それは私よりも貴女が一番わかっているんじゃない？」

「……」

世の中には、稀に戦いの中で己の成長の限界を超えて更に上を行ってみせることができる人間がいる。

限界を超える――それは即ち進化。脆弱なヒトのみに与えられた、カミには無い『先へと進む力』。ヒトはあらゆる面でその片鱗を見せるが、強さとて同じこと。

何事にも限界は存在する。

強さも例外ではない。

上へと登りつめるにあたってぶち当たる壁がある。それが個人に

用意された『限界』だ。
並大抵の者はそこで終わる。
だが、稀にそれを突き抜け、更なる極みに至る者も存在する。
その障害を超える為に必要なのは才能ではない。それを磨く力――――可能性を信じてに費やす努力だ。
限界という途方もない現実を前に、それでも諦めなかった者だけが、その更なる先に進める。

千夜は二十年にも満たない短い人生の中で、それでも多くと出会い、別れてきた。
何人かそういう類の者にも出くわしたため、わかる。
玖珂蒼助も――――――＼”そういう者”である、と。
今まで誰にも見向きもされず、放置されていた、まさに気づかなければ石ころにように扱われてしまう原石のような存在。
磨けば見違えるほどに光沢を持った宝石となるだろう。
間違いなく。
”――――――＼”と”生きること”は同意義の世界の中で生きていた千夜にも、黒蘭の品定めが正しいということがわかる。

だが、

「……却下だ」
「あら、どうして？」
「仮に俺があいつに抱かれるとしよう。奴がお前の望む程度に育つまでどれだけの時間が費やす気だ？　守る存在を教育するその間に、俺を守るのは誰だ？　力不足のあいつはどうやって身を守り、生き残る？　時間と手間の無駄だ、リスクも高すぎる。お守りをする相手を増やしてどうするんだ」

正論となりそうな要素という要素を徹底的に叩き上げ、一気に捲

くし立ててやる。
幸い、黒蘭の案が欠点だらけであるのは事実だった。
この提案はあまりにも、お粗末だ。

「なーによー、やけに批判的ね……やっぱり、口じゃなんだかんだ言っても結構」
「黙れ、覗き魔。てめぇの勝手な憶測を突き進むな」
「……だって、自分から遠ざける……それが――――貴方の愛し方じゃない」

脳裏を過ぎる幾つかの残像。
過去の投影を振り払い、千夜はぶっきらぼうに呟いた。

「そうじゃないって言ってるだろ。関係ない……俺は、ただ……」

黒蘭は間違っている。
これは、愛なんかじゃない。
もう、この心は新たにそれを生み出せはしない。
だから、きっとこれは――――ただの、

「これ以上、余計なものを背負い込むような真似して、損するのは御免なだけだ……もう、面倒はうんざりなんだよ」

我侭（エゴ）なのだろう。
どうしようもなく身勝手な。
自分のことのみを優先した望み。
自己満足に塗れた、或いはそれそのもの。

“――――たくない”。

ただ、それだけのことなのだ。

「だから、俺は必要ない。守ってくれる存在なんて必要ない。これから先も――――今まで通り、お前らこき使うなりしてなんとかやっていく。余計なことをするな」

自らの意思は揺るぎないことを表すが如く、千夜は強い眼差しで黒蘭の漆黒の双眸を射るように見据えた。

相変わらず憎たらしいくらいのポーカーフェイスでそれを受ける黒蘭は、ふと目を逸らし、溜息を吐いてから、言った。

「……頑固ねぇ。――――――ねぇ、嫌なんですって。どうするー？」

それの言動は自分に向けているのではない、と千夜は自覚した。

だが、顔は相変わらず自分と向き合っている。

話しかける相手は三途でも上弦でもなく、そしてその二人も双方同じ方向を見ていた。

千夜に背後――――部屋の出入り口へ。

まさか、という予感を抱きながら千夜は黒蘭から手を離し振り返った。

「……そう、すけ」

予感は見事的中し、ドアに寄りかかるように予想の相手は立っていた。

「お前、いつからっ……」

「結構前から。お前が俺の助けたのがエロビデオ返却しにいった帰

りだってところあたりからずっと」

ほとんど最初からということか。

そんなに前からいたというのに気づかなかった自分の不甲斐なさがこれ以上に無く情けなかった。

「って待て、何であの部屋から出れたんだ」

「俺もそう思ったんだけど、よく考えてみたらこの建物の中ってそこの下崎さんの魔術で操作されてんだろ？　空間の間取りも魔術で構成されたってんなら、ドアノブがぶっ壊れなかったのも納得だよな」

「……」

失念していた自分に千夜は更に失望し、言葉を失った。

だが、その直後に気づいたもう一つの事実があった。

最初から聞いていたというのなら、黒蘭の目論みも耳にしていたはずだ。

それならば、話は早い。

自分が利用され、また更に利用されようとしていると知ったからには、この男も黙ってはいないだろう。

早々にこちらとのこれ以上の接触を断ちたがる。

それに加担していたと自分も判断され、男は距離を置くようになる。

「ま、何にせよ……いろいろ聞かせてもらった」

「それで？　坊やは……貴方は何を理解したのかしら」

「厄介な女は更に厄介を抱え込んでいたということと……俺自身、また利用されようとしてるってとこくらいはキチンと理解したぜ」

重要な点は十分に把握出来ているようだった。
ここまで出来ていれば、あとは簡単だ。
自身をいとうのなら、辿る道は一つ。
交渉を断る、と。それを意思として言葉にして宣言すればいい。
黒蘭が望まない結果であろうと、構わない。
支援は自分がしてやるつもりでいる。

「ふぅん……それじゃ、その点を踏まえた上でのお返事を聞かせてもらおうかしら。
――――この条件、呑む？」

呑むな。
千夜は心の中で念じた。

呑むな。
呑むな。
ここはお前が在るべき場所じゃない。

蒼助の居場所は千夜が一度は諦めたあの世界にある。
学校。
友人。
昼間の街。
落ちこぼれという烙印を押されたからこそ、他が得られなかったものを得られた。
日常とはそこにいて当然と思っている者には想像できないくらい脆いものだ。
何も自分から、こんなところで打ち砕くこと必要などない。
来るべき時は思った以上に早く来ただけなのだ。
此処が、今のこの瞬間が、自分と彼との分岐点となる。

自分にとっても、蒼助にとっても、これは二度とないチャンスだ。

もう終わりにしよう。

未練がましくぬるま湯に浸り続けるのも。

失くした一つの感情を思い起こさせるこの男との関係も。

終わりにして欲しい。

その一言で。

「……その前に、条件を確認しようか」

しかし、蒼助の口から出たのは、答えではなく先延ばしであった。

その言葉に千夜の心に動揺が生じる。

何故すぐに答えない。

今更、確認をしてどうするのか。

声にならない問いかけに答えが返るはずもなく、蒼助と黒蘭の会話は続く。

「あんたらは俺にこの女を守らせる。そして、俺は引き換えにこの身体の問題をどうにかしてもらう。つっても、さっきの聞いてる限りじゃ、あんたらの要求の方が傾き気味な気がするんだが」

「千夜を受け取るということはそういうことだからね。で、確認したけど……”それでも貴方はどう答えるの？”」

交渉ですらない交渉。これは黒蘭からのほぼ一方的な要求という

のが正しい姿だ。
どれだけ相手の要求が多くても、蒼助は己の身体のために断ることはできない。
公言しなくても、拒否権は蒼助にはないことは明白だ。

「……そうす」
「――――いいぜ。”利用したのはお互い様だからな”」

自分がなんとかしてやるから応じる必要はない、と言いかけた時、予想もしなかった台詞を庇おうとした相手が言ったのを千夜は一瞬幻聴かと思った。

「利用……？」
「俺をここまで連れてくるのに利用したが、俺もここまで来るのにアンタを利用したからな。おあいこだろ？　そんで、この交渉もその延長線の上にあると考えりゃ別に俺はどうってことない。俺は一向にかまわねぇぜ」

蒼助の言っていることが理解できない。
混乱の境地立たされいる千夜を置いて、話は先に進められていく。

「おもしろいわね貴方……でも、いいの？　けっこー半端じゃないわよ……これから私が貴方に押し付けようとしてることは」
「そんくらいは妥当だろ。俺の身体の面倒を見てもらってとこいつを貰うんだ。どんなツケがきても文句いえねぇよ」
「ふふっ、やっぱりイイわね。アタリだわ、貴方」

くすくす、と楽しげに笑い、黒蘭は蒼助を見据えて言った。

「では、改めて聞きましょう。最後の確認よ。

――――この交渉、貴方の返事は？」

千夜は返答する側の蒼助を見た。
そして、凍りついた。

その問いかけを受け止めた男の、目に。
次の瞬間に、返答の際、口元に浮かべた笑みに。
返すその反応に。

思いもしなかった。
考えもしなかった。
予想もしなかった。

「利害があるのはお互い様だ……返事は――――当然、イエスだろ」

自分が世俗の世界に帰そうとしていた男が、〝澱の住人の顔〟をして有り得ない答えを返すなど。

［六拾六］　決断の瞬間（後書き）

利用されたいたのはわかっていたが、利用していたのは蒼助も同じ。黒蘭の思うように動いていれば、途中どんなにヤバイ状況になっても流れ着く先は自分の目指す場所ってなんとなくわかっていたようです。

さすが、本能で生きる奴は違うよって感じ。理性で生きてる奴にはできない危険な賭けだろうね。

まぁ、ここで肝心なのはもう人間じゃないってところなんだが、本人あまり気にしていない。

厄介な存在が己の中にいるっていうことは気にしているみたいだが、人間としての定義から外れたことには危機感を抱いていないんですな、実は。

ちなみに今回の中で、千夜は大きな勘違いをしています。蒼助が何処にあるべき者であるか、又は世俗か澱のどちら側向きの存在なのか、についてですが、本人は薄々自分の本質に気づき始めています。千夜とか一部の読者さんはこの先の蒼助について明らかになることで、結構認識を改めることになるでしょう。

一つネタバレすると、黒蘭が蒼助を気に入っている理由は「自分と同類」だと彼の本質を見抜いているから。

もう一つ言ってしまうと、天海は「正義の味方的な主人公」は書きません。

魔王でもＢＦＴでも同じことですが、そうなると蒼助がどんな主人公として確立していくかはおのずと見えてくると思います。

余談だが、「主人公」ってのになるのには、「意志」って必要不可欠だと思う。
そうなると、この話の中には資格を持った人たちが溢れているかも。

［六拾七］　選定の五日間（前書き）

それでも突き放せない自分が、一番、憎い

【六拾七】　選定の五日間

約七秒。
それが、千夜が蒼助の宣言による衝撃から我に返るのに要した時間だった。
我に返った千夜は、湧き上がる感情に従い、行動した。

「どういうつもりだ、蒼助っ」

千夜は胸倉を掴み、詰め寄った。
驚愕と怒りが混沌と入り混じり、表情に険しく表れる。
対して蒼助の返事は飄々としたものだった。

「どういうつもりも何も、なぁ？……決まってるじゃねぇか。わかるだろ？」
「……聞いているのはこっちだ。答えろ」
「わざわざ言わせるかよ……ったーく、しょうーがねぇな。……話は粗方聞かせてもらった。
一つ。お前は妙な呪いを引っかぶっていて、そいつのせいで妙なもんを引き寄せちまう。
二つ。お前はそれを一人で追っ払えるような態勢じゃない。
三つ。よくわからんが一度でも抱かれたら、即そいつのものになる。
四つ。それに俺が宛がわれようとしている。……大体こんなもんだろ？」
「……ああ」
「あ、それともう一つ。これが、俺にとって絶好のチャンスだってこと」

その言葉の後、千夜の表情が凍りつく。
失望の色を浮かせ固まった表情をその目で確認し、その心境を見透かしながらも、蒼助は発言を引っ込めはしなかった。
かみ締めるように、千夜は唇がきゅっと結んだ。
そして、感情を押し殺しきれない声で低く投げかける。

「……俺を失望させるな」
「は、俺は言ったはずだがなぁ……もう、遠慮はしねぇ、って」
「冗談だと、言ってはくれないのか……？」
「絶対、言わねぇ。最も確実にお前を手に入れる方法が今目の前にぶら下がってるのにだぞ？　それが例え食らいついたら最期の釣り針に引っかかってる甘い罠だとしても……」

言葉が途切れると同時に、伸びた手が頬を撫でる。
愛でる仕草と共に言葉は再開する。

「こんなふうに……お前に触れることが当たり前に出来る権利が手に入るなら、手段なんか選んでられるか」
「――――っ」

遠まわしに見えて、とんでもなく熱烈な愛の詞が千夜の鼓膜に響いた。
しかし。身体と心を熱くさせるはずのそれは、むしろ鋭利に研ぎ澄まされた刃のように千夜の内部を深く抉りこむように突き刺さる。

刺さった箇所はかつての”古傷”の上だった。

「あ、っ」

貫くような鋭い痛みが古き傷と新しきそれから発された。

呻き、胸を押さえる。
重ねがけるように脳裏にフラッシュバックが起こる。

記憶。
複数人の面影。
笑顔。
それが散りばめられた過ぎた日々の残影。
そして――――■■■■。

「おい……どうし」
「――――っ……あ」

トン、と突き放すように胸倉から手を離し、身を引き、後ろへ下がった。
軽度の錯乱状態に陥る千夜の耳に、宥めるような声が届いた。

「千夜」

黒蘭の声だ。
その一言が千夜を我に返らせた。

「……」
「わかったわ……だから、落ち着いて。私の話を聞いて」
「今度は何だ……」
「貴女がそこまで言うなら、お互いの納得のいく処置をとりましょう。
――――五日間、彼と私たちに猶予を頂戴。貴女が望むところまで到達するための時間を。仮に出来なかったら、貴女の好きにするといい。それに私も従うわ」

黒蘭が何を言いたいのかはわかった。
五日間で、蒼助を自分が認めざるえないところまで鍛えあげてみせるということだ。

「たった五日間で……お前の過去の”作品”達のように仕上げられると？　随分と無謀な賭けだな」

異例だ。
不可能に近い挑戦である。

「本当ね。でも貴女にしてみれば、かなり有利なんだからいいんじゃない？」

その通りであった。
確かに、不可能に近いということはこの賭けは十中八九、千夜に軍配が上がるだろう。
ここで埒も明かず言い争うよりも、素直に黒蘭の要求を受け入れる方が得策であると千夜は考えに至った。

「坊やもそれでいいわよね？」
「俺は別にかまわないぜ。それで、納得がいくっつーならな」

然して迷う様子もなく賛成する蒼助に千夜は頭が痛くなった。
読みが浅い。
この男は、その選択の先でどれだけの苦難が待っているかも知らないのだろう。
自身を欲するということが、己の人生をどう転ばせるかさえも。
五日間。
何かを決めるには、長いようで、あまりにも短すぎる時間だ。

「だそうよ……千夜」
「っ……なら、勝手にしろ！」

ドアの前に立つ蒼助を押しのけ、千夜は部屋を急ぎ出る。
しかし、出る寸前で歩みは唐突に止まり、

「……明日から、五日間だな」
「ええ。あ、貴女が勝ったら相手どうするかも聞いておこうかしら」
「抱く抱かないの前提は変わらないのか……ちっ、まぁいい。予防接種だと思うことにしてやる。……そうだな」

悩み、思考。
そして、

「……じゃぁ、お前」

指が指し示したのは、黒蘭。
黒蘭以外の誰もが息を呑み、信じられないものを見る目で千夜を凝視した。
想定外のまさかの選択。
というより、女である。

「か、かずや？」

衝撃から一足先に立ち直った三途が戸惑いを露によろける。
大袈裟な、と千夜は眉を顰め、

「……消去法だ。上弦は図体とかいろいろでかくてこっちの身が持ちそうにないし、クロを擬人化させるにして元を辿れば猫だ、俺のプライドが許さん」

「いやでも、黒蘭は……」
「その女は常識の外側を歩く人外魔境だぞ。自分の性別くらい反転することが出来るだろう」
「さすがに黒蘭でもそれは……」
「お安い御用よ」
「ほら……って、えええっ！！」

ケロリと答えが返ってきた。

「ふーん、そう来るのね……フムフム……その手もあったわね……――うふっ」
「……かず」
「何も言うな、三途。これでも目一杯ギリギリのところまで自分を抑えているんだ」

予想としては、まだ見たことは無いが黒蘭が男を擬態しても自分が苦手とする男臭さはあまり感じない所謂「美形」に仕上がるだろう。

それに相手は黒蘭だ。黒蘭なのだ。

そう考えると何故かあまり抵抗を感じなくなる千夜だった。

すっかり機嫌を良くした黒蘭はこの提案をすんなり受け入れた。

稀に見る満面の笑みの嬉しそうな顔で、

「いいわよ。貴女が勝った場合はそれでいきましょ」
「……をい」

かなり不機嫌な声色が異議ありげに割り込む。

男のプライドをかなり傷つけられた蒼助であった。

「ナニ不貞腐れてんの。汚名返上で頑張ればいいのよ、頑張れば」

「ちゃっかり乗り気で応じたアンタに言われてもな……」
不機嫌な蒼助を黒蘭が宥めている隙に千夜は、一言残して出て行く。
「せいぜい五日間、頑張れよ」

◆◆◆◆◆◆

外に出れば、うっすらとした緋色が空を色染め始めていた。
騒々しい昼間の出来事に空が幕を下ろしているように、千夜には思えた。

「……わざわざ壁伝いしてまで見送らなくてもいいんだぞ」
「いや、割と大丈夫だから」
「階段から転げ落ちたのは何処のどいつだったか……」

部屋を出て一階の店まで来たところで、奥を遮るドアの向こうから何かが落ちる派手な物音をが響いたかと思い引き返した。
すると、後を追ってきたらしい三途が階段から転落していた。
神経が再生しきっていない片足引きずって階段を下りようなど無理があるのだから、当然といえば当然の結果であった。
救助の後、二人は今、店の玄関前にいた。

「せっかくの日曜の休日が暮れていくな……誰かさんのおかげで」
「け、怪我人にこれ以上の追い討ちは……っ」

「何が怪我人だ。……死人になるところだっただろうが」

後半の声のトーンが下がったところで、三途は伏し目がちになり沈黙した。

「……ごめんね」

「謝罪の誠意は言葉ではなく、今後の行動で示せ」

「うん……でも、言うね。ごめん」

二度の「ごめん」は三途が自分の自己満足のための言葉であること理解し、千夜はそれに返す言葉は吐かなかった。

「ところで、お前はどうなんだ？」

「え……何が？」

「黒蘭の案に対するお前の意見だ。珍しく口を挟まずおとなしくしていたからじゃないか」

話をしている時の三途は、どこか一線引いていたように見受けられた。

「いや、勝手な行動した手前下手に何か言っても、嫌味の応酬喰らうだけだったしね」

確かに、と千夜はその理由に簡単に納得を得た。

弱みを握らせた黒蘭に勝とうなど、無謀の極みだ。

「それに、流されて正解だった」

「……なに？」

「結果的に、私が彼を殺さずに済んで、君の安全を高めるという現状では最良の選択の可能性が出てきた」

その言葉の意味を察し、千夜は顔を顰めた。

「……三途、お前もか」

「正直、現段階でこれ以上の選択肢はないと思うよ。彼を救うには、黒蘭の力が必要だ。おそらく、黒の概念であの内のなる存在を抑え込む気なんだろうね。そして、黒蘭はそれを事質に蒼助くんを君の護衛に据える……どの道、彼に危険が付きまとうのは変えようが無い」

「……」

「それに、彼はこの展開を望んでいたらしい。自ら澱に来ることを望んだ。向こうが自分で選んだ道だ、だから……君が、責任を感じることはないよ」

慰めるような言葉に、千夜は目を閉じて息を吐いた。

「まったく、どうしてかな……俺の周りには変態と馬鹿と死に急ぐ奴しか集まらん……」

「皮肉らないでくださいよ、もう……」

自分のことも含んでいることを理解してか、三途は苦笑した。

「でもね、変態も馬鹿も死に急ぐのも……みんな、君が好きなんだよ？」

「……だからこそ……だろうが」

「え？」

なんでもない、と千夜は詮索を遮るように言葉を切り、背中を向けた。

変わりにポツリと、独り言のように言葉を零す。

「……こんなことになるくらいなら、アイツを中の奴ごとあの時殺してしまえばよかったのかもしれないな」
「千夜っ？」
千夜の突然の発言に三途は声を上ずらせた。
振り向き、千夜はニヤリと笑った。
「冗談だ」
「……あのね」
性質の悪い冗談だ、と呆れる三途再び背を向け新たに問う。
「……なぁ、三途」
「ん？」
「……続かないとわかっていても、それでも未練がましく執着する俺は……愚かなんだろうか」
「――――え」
表情を凍らせる三途。
「……妙なことを聞いたな。すまん、忘れてくれ……じゃぁな」
三途の返事を待たず、千夜はその場を立ち去った。
空の緋は一層、深みを増していた。
◆◆◆◆◆◆

始めは気の抜けた炭酸飲料を飲まされているような気分だった。
ひどく緊張感にかけた、締まりのない心地。
そんな感覚を抱かせる。
それが千夜にとっての『日常』というものに対する印象であった。

最初はひたすら馴染めなかった。
精神と心が感じるのは、どこか苛立ちすら感じさせる居心地の悪さと、己が”この世界”で異端であるということの自覚であった。
しかし、それは”ある時”から変わり始めた。
大きな違和感の波はやがて小さな細波に治まり出し、不快感はなくなった。
異端であった自身が世界に溶け込み始めた時に、気づいた。
居心地の悪い違和感の正体に。

それは――――”安堵”であった。
千夜にとって、途方も無く縁遠い感覚。
死と暴力と略奪に満ちた”かつての世界”に、そんなものが許されるはずがなかった。
平穏という現実離れした代物に憎しみさえ抱いていた時期もあった。

「それが、今じゃ……この有様か」

日暮れの通りにて、幾数人の通行人とすれ違いながらポツリと自嘲する。
控えめなその音に、誰も気づくことなく通り過ぎていく。
こうしていれば、自分も同じく立派な通行人Aであるのだな、と”以前の自分”との違いを認識した。
かつては”認識すらされなかった”。

それが今と昔の違いであった。

……本当、何でこうなったんだっけか。

何が自分を変えたのだっただろうか。

あれほど憎んでいた平穏が今は愛おしく、大切に思っている。

――否。

一度失った。

しかし、“また大切になりつつある”のだ。

そうなった原因は何であったか。

考えた矢先、脳裏を通り過ぎる男の影。

……あいつのせいだ。

あの男と出会ったところから全てがおかしくなり始めている。

一度断ち切ったはずの未練を、再びその糸先をこの世界に繋ぎ止めようとする男、玖珂蒼助。

千夜は噛み潰すように呟いた。

「ちっ……忌々しい……」

拘るごとに何かを狂わせていく蒼助が。

そして何よりも、あの男と出会わなければ、助けなければよかった、と。そう見切りをつけることが出来ない自分が――憎い。

過去のあの瞬間を正そうという気にはなれない理由を考えたくなかった。

考えて、その先で出る答えを知ってはいけない、と頭の何処かで制止の声がかかる。

知れば答えを得ると同時に後悔の念も引き寄せてしまう、と。

……どうして、なんだろう。

何故、またこの日常を想うようになったのか。

此処には、もう己を繋ぎ止めていた”彼女”はいないというのに。

執着の元がなくなったにも拘らず、胸の奥で再燃しつつあるこの気持ちはどうして生まれたのだろうか。

「今の俺を見たら……”あんた”は……愚かと言うか」

その返事を一番に聞きたい人はもはやこの世にはいない。

考えても仕方ないとはいえ、千夜はどうしようもなく脳裏に浮かぶ残影の人物に会いたかった。

『千夜』が生まれた日に死んだ、その女(ひと)に。

受け止める相手のいない問いは、風に吹き消された。

胸の虚無感を抱き、千夜は夕日色に赤染められた道を歩き往く。

［六拾七］　選定の五日間（後書き）

とりあえず、近況報告。

・大学合格。家族で狂喜乱舞。脱・受験生活フォー！
・いろいろディープだった妹がついにコスプレ衣装を自製作しだす。しかも零崎舞織。何かいろいろ許せなかった。
・月刊少年ガンガンを購入。某騎士王道ファンタジーの最終回に怒り覚える。自分の書く話はああはしてはいけないと深く決意。あれだけ、絶対に。
・昨夜、今回の更新分書いてる時に前触れなくＭＹ椅子が崩壊。完膚なきまでに陥没したケツが乗っていた板部分を見てしばし放心。実話である。

最近の我が日常でした。平穏だねぇ？

話は変わりますが、そろそろ本編もややこしくなってきました。頭の中でプロットを立てて保存するにも限界が見えてきたので、ちゃんと作ることにしました。
あと二話で本編の日曜日が終わる予定。
それにしても一日を描くのに三十話も使ってしまった事実には唖然としてしまうな。
こんな調子では、最終話までに話数どんだけになるのやら……
でも百は越えるだろう、うん。

次回は主人公がエラい目に遭います。
それじゃー。

【六拾八】　世界の確立（前書き）

貴方がいなかった昨日には、戻れない

【六拾八】　世界の確立

千夜が立ち去り、それを追うように三途も出て行った後、蒼助は依然とその場から動かず立ち尽くしていた。
目に思想に落ちた空ろを湛えているその様子を見兼ねた黒蘭が声をかける。

「突っ立っていないで座ったら？」
「……ああ」

己の体質を思い一瞬躊躇したが、迷いを切って腰を下ろした。
そこに黒蘭の問いが来る。

「何か考え込んでたわね」
「あ？」
「心此処にあらずって……そんな様子だったわよ？」
「は。……御見通しってか」
「どうしたの？　さっきの勢いから急な消沈ぶりじゃない」
「……」

蒼助は答えなかった。

「当てましょうか。……さっきの嫌がりように、落ち込んでる？」
「……わかってんなら聞くなよ」

はぁー、と溜息と共に肩を落とし、俯く。
すると、堰を切ったかのように蒼助は口を割り出した。

「……さっき、啖呵切った後のあいつの顔……」

「……どうかしたの」
「すっげぇ、ショック受けた顔してた」

蒼助は思い浮かべた。
それは、迷い無く言い切った直後、思わず迷いを生んでしまうほどの揺らぎを蒼助に与えた。

ひどく傷つけられた、という。
初めてみる、千夜の表情であった。

「まるで、裏切られた……みたいに言いたげな……感じでよ。俺は、なんかすっげぇ間違いしちまったんじゃねぇか……って」
「ふーん……嫌われたんじゃないかって心配で気が気じゃないってわけね」
「……くそっ、思いっきり他人事みたいに言いやがる」

事実、他人事ではあるが。
本気で悩んでいるところをからかわれると、どうしても腹は立つのだ。
しかし、クスクス笑う黒蘭は言った。

「大丈夫よ。嫌われてなんかいないから」
「……やけに自信がある口ぶりじゃねぇか」
「伊達に長く一緒にいるわけじゃないもの。……でも、ちょっと測り損ねちゃった」

赤い唇は溜息を漏らした。

「……思ったよりも、傷が深かったか」
「おい？」

視線を逸らしてぼそりぼそりと呟く黒蘭に蒼助は訝しげに声をかけた。

「……まぁ、いいわ。それより、話……進めましょうか」

「……」

また、かわされた。

無理に押しても答えないことをいい加減わかってきた蒼助は黒蘭のペースに乗っかることに落ち着いた。

「坊やにする処置だけど……まずは、御覧なさい」

黒蘭の手が上へと持ち上がる。

払うように、下方へゆっくりと振った。

「さぁ、お出でなさいな。――――――【殺神鬼】」

それが合図となった。

直後、黒蘭の周囲の空間の一部がぐにゃり、と歪むのを蒼助は目視した。

歪んだ空間の隙間から徐々に”何か”が姿を見せる。

その先端と思わしき一部分が見えた時、蒼助は寒気のようなものを背中に、またゾクリと感じた。

そして、まるで這い出るかのように、”それ”は空間の隙間から現実に出でた。

「……っ、」

目の前に現れた”それ”に対し、蒼助は息を呑んだ。

漆黒の少女の隣に出現したのは、同じく漆黒であった。
それは、全身漆黒塗りの重剣であった。
黒蘭の身長を遙かに越える身丈。刀身の中心は刃先から柄まで一筋の浅い窪みが引かれている。刃こぼれ一つない研ぎ澄まされた刀身は妖しく黒光り、禍々しいオーラを放って存在を主張する。
そして、そのオーラを抑え込むかのように白い包帯のような布が剣の周囲を展開していた。

同じだ、と蒼助は己の本能の声に同意した。
目の前の剣から身体の芯にまで伝わってくる威圧感。
それは、先程の体験の際のモノとひどく酷似していた。
蒼助は自分が心の何処かで泣きたくなっていることに気づいた。
当然だ、と思った。
こんな途方もない、デタラメな存在がこの世に二つも存在するのかと思うと絶望のあまりに泣きが入りそうだ。

「紹介するわ。これは霊装【殺神鬼】。私の、息子……みたいなモノよ」
「……母親に随分と似たんだな」
「でしょう？　私に似て、よく出来たコなのよ」

冗談混じりの会話の中で、蒼助は溶けない緊張を抱えていた。
常のそれより、呼吸が苦しかった。
じっとりと、嫌な汗が額に滲み出る。

「……でも、息子自慢は、また今度の機会にしましょうか。今の坊やには、ちょっとキツいみたいだしね……」

ブゥン、と鈍い音を幽かに奏でて、重剣は空間の彼方に姿を隠した。

圧倒の存在がなくなると同時に、蒼助を圧していた重圧感もなくなる。
全身から負荷のような圧迫が消え、呼吸も楽になった。

「さて、今、坊やに見せた霊装……あれには私と同質の力が込められているわ。概念殺しの概念(ちから)がね。アレを坊やが所有することで、坊やの深層意識に潜むアイツの人格という概念を抑えこむことが出来る……当然、今の坊やにはそれが出来そうに無いわね」

蒼助はその言い様に反論は出来なかった。
現に、先程は見せられただけで圧倒されるばかりだった。

「強力な霊装の中には、意志が宿っているのを知ってるわよね？」
「ああ」
「人格があると無いとで違うのは、選択権の左右よ。無論、前者であれば……」
「選ぶ権利は、霊装にあるってか……」
「そう、坊やはまず【殺神鬼】に主として相応しい器であると認めさせなければならない。更には、千夜にも認めさせなければならない。……この二つを同時進行となると……かなりハードなスケジュールになるわね？」
「……わかってるつーの。――――でも、やる」

うんざりげに溜息の後、蒼助ははっきりと進言した。
黒蘭は満足そうに笑み、己の後ろで黙って控えていた上弦に言葉をかけた。

「――――上弦、下に行って三途に伝えてきて」
「は。しかし、何を……」
「”例の部屋”を使わせてもらうから、準備をして、と」

「……御言葉、確かにお預かりしました」

頭を軽く下げ、上弦は一瞬だけ蒼助を見た。
その視線とかち合った蒼助は思わず身を引いた。
一瞬の後、上弦はその場から姿を”消した”。

「普通に階段降りてけばいいのに……ああでも、さっき入り口で頭ぶつけてたっけ。……あら、どうしたの？」
「……あのオッサンにすげぇ目で睨みつけられた」
「やーね、大人気ないんだからあの筋肉は。でもまぁ、これぱっかは……坊やの今後の頑張り次第よね」

よくわからないが、自分はあの男に快く思われていないらしい、と蒼助は上弦という男に関しては、それだけを理解するに留めた。
二人きりになった空間で、蒼助は心に抱えていた一つの疑問を口にしようと思った。

「……二、三聞きたいことがあるんだがよ、いいか？」
「いいわよ？　待ってるのもなんだし、質問コーナーでも設けましょうか」
「……まず一つ。なんで、俺なんだ？」
「――――私の好みだったから」
「……」

どう答えたらいいかわからなくなった。
半目になる蒼助に、黒蘭は心外だと不満を露にした。

「あら、信用無いこと。……本当なのよ？」

黒蘭を不意に身を乗り出した。

柔らかなソファの感触から腰を浮かし、テーブルの上に膝を付き、乗りあがる。
ぐっと近づいた距離。蒼助は腰を引く暇すら与えられず、黒蘭と目と鼻の先で顔を突き合せる羽目になった。
沈黙のまま、視線が交じり合う。そして、夜空の黒を連想させる瞳から目を離せなくなった。
トロリ、と艶やかな声が耳に流し込まれる。

「貴方、とっても私のタイプよ？」

腰に来た。
やべぇ、と靄が漂い始めた意識を奮い立たせ、負けじと応戦を試みた。
カミさまとはいえ、見かけ幼女に興奮する趣味は無い。そっちに覚醒めるわけにもいかない。

「……俺の、どーゆーとこがお気に召しましたのかねぇ……」
「ふふっ、――――こ・こ」

つい、と白魚のような白さをまとう指が動く。
トン。軽く指先が突いたのは、蒼助の心臓に近い位置であろう胸の中央であった。
ポカンとして、

「……心臓フェチとは変化球な嗜好持ってんな、おたく」
「真顔で言われても、うんとは言えないんだけどね……そっちじゃなくて、此処に宿るもう一つのもの。そこが、私のピンポイント直撃だったの」
「……オイオイ、心とか……寒いぞ、それ」

意外にクサい少女漫画愛読してたりするのかよ、とげんなりと本気で引く蒼助の反応にも少しも動揺することもなく、黒蘭は悪魔で己の主張を続行した。

「……思ったとおりね。〝そこ〟がいい、と言っているのよ」

「何を……おい」

今度は蒼助の膝の上に跨ってきた。

ちょうど同じ高さにある胸に顔を摺り寄せる。

「ここに、貴方の心臓が……心がある」

「それとこの状況にはどんな関係があるんだぁ？」

「鼓動が聞こえる。心臓が脈打ってるわ……でも――――平常なのよ、速さが」

「何がおかしいって？」

「……こんなに私が近づいても、貴方の心臓は少しも高まらない。心が、動いていない」

するり、と黒蘭の手がそこを撫でる。

「坊や、貴方の心はとても冷たいのね。――――愛を知らず、理解もできない。酷く情というものが欠けている。それが貴方の本質を、よく表している」

突然の物言いに、蒼助は固まった。

それに構わず、言葉は続く。

「愛されても、愛さない。理解できないから。寧ろ、一方通行の押し付けにしか思えなくて、疎ましくすら感じる。他人はおろか、家族の情すらも。誰かと身体を交えている時ですら、身体は熱くても

頭の芯は酷く冷めている。常に心は酷く冷静に、物事を客観的に見つめている」

「……」

「心が動かないから、此処は……こんなに冷たい」

胸に頭を寄りかける黒蘭。

蒼助は背もたれに身体を預けながら、口を開いた。

「アンタは俺のそーゆーところが好き、だってのか？」

「ええ、とても」

「つーか、そうだって言える自信はどっから沸いてくるんだ……」

「だって、似てるんだもの貴方」

誰に、と問えば黒蘭はくいっと指先を己の胸へと向け、指す。

「私に……って、何よその哀しそうな顔は」

「……う、っわ」

「だから、何が」

言葉にするには難しい何ともいえない感じである。

沈痛な表情で遠くを見る蒼助の失礼な態度に、黒蘭は唇を尖らせた。

「失敬ね。嘘だと思うなら私の此処、触ってみなさい」

「ホイ」

「って、躊躇ないわね。女の胸触るんだから、ちょっとは戸惑ってみなさいよ」

「あれだけ根掘り葉掘り人の根っこの部分抉り掘られりゃ、遠慮もしなくなるつーの」

どうも要求に戸惑う姿が観たくて仕方なかったらしいが、蒼助としては、事実が露見してしまった以上この女に対し建前でそういう風に振舞う必要はない、と清々していた。

平然と手を伸ばす蒼助に、黒蘭はつまらなそうだったが無視して続けた。

布越しに胸に触れる。

幼い外見通りの慎ましい手応えを受け止めつつ、己が触られたと同じ部分へと手を這わす。僅かな起伏によって浅い窪みが出来たそこへ、触れる。

途端、予想を超えた体験が蒼助に降りかかる。

「……っ」

「冷たい？　でも、心臓は動いてるでしょう？」

目を見開く様を見て、調子を取り戻したのか、黒蘭はからかうように尋ねた。

蒼助は驚きから立ち直れないまま、うなづく。

黒蘭の言うとおり、手には鼓動の脈打つのが伝わってくる。

だが、足りない。

何が足りないか。

それは――――ぬくもり。

黒蘭の胸には、あるはずのぬくもりが宿っていない。

確かめるよう強く押し当てる。

しかし、氷に触れているかのような冷たさは一向に変化を見せることはなかった。

「こんなことって、あるのか……」

「不思議よね。心臓は動いているのは確かなのに、私たちのここには何故か温もりがない。それはね……心が動いていないからなのよ。温かな情が、私たちにはないから。感情がないのではない、け

れど情を持たないから冷たく凍り付いているのね」

黒蘭は一息ついた。

そして、

「もうずっと昔の話だけど、その頃の私は世界の何一つにも興味が無かったわ。静観と諦観だけで時間を満たしていた。どうしようもなく退屈だった。心は冷たいままで、それを抱えたまま……何かに揺り動かされること無く……ただ、生きていた。それだけ」

どくり、と鼓動が大きく弾む。

話を聞いて、蒼助はそれが他人のこととは思えなかった。

少し前までの己について語られているような気分だ。

失くしてしまったモノを諦めきれず、未練がましくいつまでもしがみ付いて。

冷め切った心と共にただ生きるだけだった、ほんの少し前までの自分を思い出しながら、蒼助は脳裏の回想に浸った。

そこで、我に返すように黒蘭の話に変化が見え出した。

「それが昔の私。愛なんて幻想だと思っていた頃の、哀れで無知なかつての私」

「……？　昔って……」

「もう一度、触ってみればわかるわよ」

どういうことなのか理解ができないまま、とりあえず言われた通りにした。

「……あ？」

拍子抜けたような声を蒼助は零した。
触れる手に伝わるのは、先程と同じそれではなく、

「あったかい？」
「あ、ああ」

何故だ、と表情に疑問を描いている蒼助に黒蘭は答えた。

「これが、今の私。愛を、情を知った、私の心」
「いや、でも何で……」
「私の心を芽吹かせてくれた人のことを考えたのよ。退屈を終わらせてくれた、その人のことを」

黒蘭は再び、過去に浸る遠い目になった。

「最初は興味と好奇心だと思っていた。珍しいものに興味を引かれた、そう思う自分に充分驚いてその想いの正体に気付けなかった。でも、だんだんとわかってきた。その人の姿が見えないと自然と求めて足を運ばせるようになった。そして、もう少し時間が経って気付いた。あの常温で脳を溶かしていくような退屈が、私の中から消え去っていることに。……その後、もう暫く経って、ふと気がついた。想いの名は、愛という情なのだと。私は、その人を愛しているのだ、とね」

語り紡ぐ黒蘭の表情は、光悦に満ちていた。
うっとりと、この場にいない相手への想いに酔いしれているように見えた。
演技でもなんでもない、嘘偽りのない黒蘭の一面に、蒼助は正直驚いた。

「今じゃ、この場にいなくても、考えただけで胸が熱くなる。貴方は、どうかしらね？」
「……」
蒼助は思った。
今はこの場にいない、千夜のことを。
不思議なことに、奥底から何かが湧き水のように溢れてくるような気分になった。
そこへ、胸に何かが寄りかかる重みを感じた。
再び顔を寄せる黒蘭であった。
「ふふっ……考えてた？　ここ、とっても温かくなったわよ？」
頬を胸に預け、黒蘭は笑った。
何処か、自嘲するように。
「まるで、不安定だった足元が落ち着いたように思えない？　私は思うわ、これが世界が確立するということだ、と。全く、おかしな話よね……全てを見てきたつもりになって、胡坐かいてたらひょっこり現れた一人に世界をひっくり返されちゃうなんて」
全くだな、と相槌をうちながら蒼助は思う。
世界をひっくり返す。
蒼助にとっては、あの時の、あの瞬間はまさにそうであった。
そう、アレは革命だった。
蒼助という小さな世界で起きた、大きな革命だった。
「……で、だがよ。それと俺がした質問の答えと、どう関係して

んだ？」
「初恋って、麻薬に似ていると思わない？」
「話聞けって」
聞いてるわよ、と黒蘭は顔を上げた。
「質問を変えるわ。例えば、処女と娼婦。快楽に溺れやすいのはどっちかしら？」
「……処女抱いたことねぇからわかんねぇ」
「コラコラ。全世界の女を敵に回すような発言は止めなさいって」
「めんどくせぇじゃん。俺はヤるなら無駄な手間省けててっとり早く突っ込めるのを重視して」
「ハイハイ、ストップ。そろそろ危険だから」
出来の悪い教え子を嗜めるような口調で、黒蘭は服越しに胸の尖りを抓り制止する。
あだだっ、と悲鳴が上がるのを無視しながら、
「正解は処女。理由はね、さっき言った初恋と同じよ。初めて体験することっていうのは、どうしても記憶に残るものなの、個人差はあれどね。もし、それが強烈であったなら尚のこと。初恋って長く引きずるし、無垢なほど、一度快楽を知ってしまうと歯止めが利かないからどっぷり堕ちて、盲目的なまでにハマッてしまうケースって多いのよ」
だから、なんだというのか。
無言の問いに答えるかのように話は続き、核心が見え出す。
「愛っていうのも同じなのよ。知らなかっただけに、知ればその想いから抜け出せはしない。今まで、何にも反応がなかったというの

が、尚タチが悪い。喰らった一度が、運の悪いことにとてつもなく強烈であったという証拠だから。私たちのような者は、もがけばもがくほど、堕ちていく」

ちなみに私はもう、堕ち尽くしちゃった更生不能ちゃんよーん。
ケロリと笑う黒蘭を尻目に蒼助は己はどうだろうと思い、今までを振り返ってみた。

堕ち始めた。
元男と発覚して、躊躇。
何故か落下速度が上がった。
死んだ恋人が心に残っているということが発覚。
吹っ切ろうとした。
けれど、出来ず。
そして、尚も落下続行中。

ダメだこりゃ、と蒼助は嘆息つく。
ドつぼにハマッている。
行き着く先は、もう見えていた。

「だからよ、坊や。貴方も、私と同じ。愛するという心地よさを知ってしまった。私も貴方も、もう昔の何も知らなかった頃には、二度と戻れない。いえ、戻りたくない。二度と、あんな生きながらにして受ける地獄のような日々には帰りたくない、と切に願う。己という世界が何を軸にして回るのかを忘れないために、いかなることもしてみせる」

するり、と蒼助の足の上から退き、身を屈めた。
視線は蒼助の目を貫くように見据え、

「答え、言うわね。
――――貴方は私と同じだから。ちっぽけで大きな、己の愛に全てを懸ける人だと、私にはわかったから」

心が冷たいタイプの方が、熱くなるとスゴイって言うしね。
からかうように呟き、黒蘭は身を引く。

「期待してるからね。期待以上のことをしてくれる、と」

そろそろ下に行きましょうか、と黒蘭はふわりとヒラヒラしたレースの裾を揺らしながら、蒼助の傍を離れて廊下へと歩いていく。
一人に近い状態になって、蒼助は動かず考えた。

『昔の何も知らなかった頃には、二度と戻れない』

戻れない。
戻らない。
戻りたくない。
千夜がいなかった、日々には。

「なら、俺は……」

何を望んでいるのか。
答えはおのずと見えてきた。
はっきりとした輪郭を浮かべて、それは形を成していく。
千夜のいる明日と、その更なる向こう側を。
欲しい。
どうしても、手に入れたい。

「手に入れる。絶対」

有言実行、と言わんばかりの強い決意めいた言葉を口にして、蒼助は立ち上がった。

足に伝わる手応えは、確立した世界のそれだった。

【六拾八】　世界の確立（後書き）

プロットで予定していたよりも長くなってしまったので、半分に割ることにしました。
主人公が酷い目に遭うのは次回に見送りです。

しかし、黒蘭と蒼助って二人でいるのを書くと妙にエロい雰囲気になる気がするのだが何故だろう。

【六拾九】　疑問の答え（前書き）

あの日言われた言葉の意味を
今も考えている

【六拾九】　疑問の答え

「なぁ、もう一つ聞いても良いか？」

二階から階段を降りる途中、その足を止めて蒼助は言った。
黒蘭はそれを聞き留め、振り返った。

「何かしら？」
「呪いだよ、呪い。聞き耳立てて端っこ程度には聞いたけど、千夜にかけられた呪いってのは一体何なんだ」

それが千夜の身の安全を危うくしているのは、何となく理解できていた。
だが、蒼助は肝心の呪いがどのようなものなのかを知らずにいる。
質問に対し眼を細め、沈黙する黒蘭。

「……」
「……」

数秒程の沈黙が持続。
何故黙る、と蒼助が痺れを切らし始めたところで、

「黙秘権を使用するわ」
「オイ待て」
「坊や、知識ってものは他人から教えてもらって〝知る〟んじゃなくて、自分から探って〝識ら〟なきゃダメよ」

クスクス、と黒蘭は笑いながら、そう諭す。
そう要求する理由は、なんとなくわかった。

それでは、黒蘭が楽しめないからだ。
快楽主義者め、と黒蘭を憎々しく睨みつつ、蒼助は脳裏で閃く。

「ちっ、じゃぁいいよ。……知識はいらねぇ。自分で調べる。だから、代わりに”情報”をくれ」

黒蘭が一瞬、不意を突かれた表情を見せた。
それはすぐに何処か意味深な濃い笑みに変わり、

「……ふふ、やるわね。いいわ、情報（ヒント）をあげる」

目論みは上手く行ったようであった。
よし、と蒼助はガッツポーズを内心でとり、貴重な情報の提供に身構えた。

「……由縁ある雑歌」
「……」
「以上」
「待ちやがれぇぇっ！！」

たった一言のみ残して去ろうとする黒蘭を慌てて肩を掴んで、止める。

「オイコラぁ！　情報ってそれだけかよ！　しかも意味わかんねぇしっっ」
「……勘が冴えてるのはいいんだけど、学がないのも問題よねぇ。まぁ、ちゃんと提供したから。ここから先は貴方の努力次第ってことでね」

ひらひら、と後ろ手を振りながら、黒蘭は階段を降りて先を行く。

その後を肩を落とした蒼助がのろりのろりと付いて行った。

◆◆◆◆◆◆

階段を降りてみると、曲がった角の奥の方で佇む二つの人影。
上弦と三途だ。
二人は建物の最奥と思われる場所で、一つの扉の前にいた。

「どう？　そろそろ準備は出来た？」
「ええ、ちょうど今終わりました。一応、設定は五分くらいにしておきましたが……」
「今は四時半か。……ちょうどいい塩梅ね」

準備とは一体何だったんだろうか。
少なくとも、目の前の部屋が関係しているというのは蒼助にも察する事が出来た。

「この部屋は……？」

えっと、と説明を始めようとした三途を遮るように、黒蘭が言葉を間に割りいれる。

「説明は後でたっぷりしてあげる。まずは、中に入りましょう」
「……ああ」

急かすような調子に、何処か違和感を感じつつ蒼助は言葉に従い、

ドアノブに手をかける。
押し開けて、一歩踏み出すと、
「――――――なっ！！！」
目に飛び込んできた光景に蒼助は息を詰まらせた。
部屋の中で待ち構えていたのは、”部屋”ではなかった。
それは、蒼助が良く見慣れた光景であったが、しかし、そこに存在するはずの無い有り得ない”景色”だった。
「……渋谷道玄坂？」
目の前に聳える渋谷駅前ビル見てそう呟いてみるもの、現実味は一向に増すことは無い。
現実はあまりにも受け入れ難きものだった。
しかし、そこへ強引な肯定が押し入る。
「ええ、そう。これは、渋谷の街並みよ。もちろん、本物じゃないけどね」
「んなこたわかってる……でも、何で」
「三途ご自慢の空間魔術よ。すごいでしょう、何か触ってみなさいよ」
見れば、人がいないだけで車や自転車まで無造作に置いてある。
少し離れた場所にある自転車に近寄り、まじまじと見つめた後、サドルに触ってみた。
「っ……」

雲を掴むような気分で、触れた手触りは確かな本物であった。

「……これ、一体どうなってんだ？」

「この部屋は本来のこの建物に唯一元から備えられてた物置。ちなみに他のずらっと並んだ部屋はこの女が勝手に魔術組み込んで追加した空間魔術の産物だから。安い物件買って、勝手に改築してるのよ、セコイわよねー。あとこの女、日本に密入国してるから存在確認されてのないのいいことに税金払ってないのよ、やーねもう」

「勝手に人の事情のポロリするのは止めてくれませんか……？」

関係ないところでいろいろ引っ張り出され、笑顔を引き攣らせる三途。

視線が何故か蒼助に向き、

「何か言いたいことある？」

「まさか」

バッと目を逸らしながら蒼助は即答した。

穏やかな笑顔だが、目が全然笑っていなかったからだ。

気は済んだのか、三途はコホン、と堰を一つ入れて、

「この光景は使用者の頭の中にある、出来るだけより鮮明の残っている場所を元に部屋に仕掛けた術式が映像化し、肉付けして実体化させているものなんだ。まぁ、若い人向けに理解してもらうのには、ＳＦでいうバーチャル空間みたいものかな」

「じゃぁ、これは……俺の一番はっきりした記憶？」

「そうなるね」

「へぇ……あっぶね」

「ん？」

「何でもないっす」

個人的に鮮明な記憶といえば、昨夜のバスルームでの一件だったものだから、もし仮にそれが出ていたかと思うと背筋が凍る。
それこそ、目の前の人物に今度こそ確実に迷い無く殺される可能性は無限大に思えた。

「で、俺は何でここに連れてこられたんだ？」
「一応、【賭け】スタートの明日に備えて下準備、みたいなものかしらね」
「……下準備ぃ？」
「貴方、明日”そのまま”学校に行くつもりなの？」

あ、と蒼助は己の今の有様を思い出す。
この状態では明日に限らず、その先の生活にも支障が出るという大問題は依然と解決していないままだった。

「いや確かにそうだけど……でも、何でここに？」
「まぁ、とりあえず――――戦いなさい」

一瞬、黒蘭が何を言ったのかわからなかった。

「は？」
「だから、戦って。――――彼と」

理解を待たず、黒蘭は更なる混乱を蒼助に突きつけた。
繰り返す要求と共に指差した先には、一人の男。

上弦。

「こ、黒蘭っ？」
「いいから、三途。……上弦、意地悪しちゃダメよ。初心者なんだから、優しくね……？」
「……かしこまりました」
上弦は厳しい目つきのまま、黒蘭に一礼し、蒼助を見た。
顰めるように、目は一層に細まる。
それも一瞬の出来事で終わり、射るような視線は蒼助から外され何処かへ放られた。
「それじゃぁ、私たちは外で待ってるから。行くわよ、三途」
「え、おいっ……」
引き止めの声にも黒蘭の背中は一切応じる様子無く、戸惑う三途に声をかけながら出入り口と思わしき空間に開いた不可解な縦穴に歩み入る。
三途は一度こちらを振り向き、申し訳なさそうに目を伏せるとその後に続いた。
二人が通った後、縦穴は空間からすぅっと陽炎の消える。
「入口が……」
「必要とすればまた現れる。気にかけることはない」
重く、低い声が蒼助の思考を遮る。
振り向くのをためらうような重圧が背後に忽然と現れた。
二人になった、その瞬間に、だ。
「……そうっすか」

ああ、嫌だ、と思いつつ首を捻った。
心の拒否反応は、正しかった。

振り向いた先には、なんとも嫌な、敵意を爛々を光らせる双つの赤い眼が蒼助を捉えていた。

◆◆◆◆◆◆

閉店を迎えた店内は、ガランと空白の多い空間となっていた。
今、そこにいるのは店主である三途と、私用の来客に分類されるであろう黒蘭の二人きりであった。
片足が不自由のままカウンターの向こうでコーヒーを淹れる三途を待つ時間をもてあますように、黒蘭は夕焼け色に染まった店の外を眺めている。

「まーだー？」
「まだですよ、というか怪我人にコーヒー作らせておきながら遅い遅いと非難の目で言うのは止めなさい」
「怪我は自業自得のくせに」
「……」

どのぐらいのこの弱みを引っ張られるのだろう、と気を遠くに飛ばしながら、それでもコーヒーはしっかり基準ピッタリにティーカップに淹れた。

「お待ちどうさま」

「どうも。どんな相手にも丁寧にコーヒーを差し出すのは、さすが職人魂ってところかしら」
「飲む人に罪はあっても、飲まれるコーヒーに罪はありませんからね。借金取りに子供を泣く泣く差し出す気分ですが」
「じゃぁ、親の風上にも置けないロクデナシってことね、アンタは」
皮肉には皮肉と返し技をかけて、黒蘭は焙煎された香ばしい香りを揺らめかすカップの中のそれを口の中に注ぐ。
「あー、おいし。やっぱり焙煎した豆をその場で挽いて淹れたものは格別だわ。やっぱり、コーヒーは三立てよねぇ」
「その分、通常より手間と時間がかかりますけどね」
「いいんじゃない？　良いものを手に入れるのに、手間と時間は惜しまない心掛けは大事だもの。感心感心」
黒蘭はコーヒーに対しては一つの譲れないこだわりを持っている。幼稚な外見を裏切ってブラックのストレートを好む。
昔、自分の淹れたコーヒーをこうして同じように飲みながら、「もし、この世がコーヒーがない世界だったら、そんな味気ない世界ぶっ壊してやるわ」とさも冗談のようにマジな目で語っていたこともあったな、と三途は思い出した。
黒蘭自体は苦手だが、コーヒー好きに罪は無いと、三途は思っている。
こだわりの一品を賛辞してくれるなら、例え相手が得体の知れない存在であっても嬉しい。
「あなた好きですよね、モカ」
「この独特の酸味とコクがたまらないのよ。もし、これが飲めなくなるかと考えるだけで発狂しそう」
「もう充分狂ってるから大丈夫ですよ」

私も飲もうかな、と黒蘭を背に、棚に並んだカップに手を伸ばす。

「そういえば、上弦さん。ここに来てから随分と機嫌が悪いようでしたが。また、貴方が何かしたんですか」

「何で私なのよ」

「彼の気苦労の元はほぼ貴方の奇行が占めているでしょうが」

「デカイ図体の癖に神経が軟弱なアイツが悪いのよ。てゆーか、私じゃないしぃ」

「じゃぁ、何で……」

クスリ、と三途の背後で笑みを刻む音が聞こえた。

「花よ蝶よ見守ってきた可愛いお姫様に近づく悪い虫が、気に食わなくって仕方ないんでしょうよ」

「……あははっ、お父さんは許しませんよ、ですか？」

「一応、簡単に済ますように言ったけど……簡単に、容赦なく、済ますでしょうね」

「……お気の毒、ですね、彼」

無論、蒼助のことだ。

ハエを潰すが如くぺしゃんこにされるだろう、と末路を思い浮かべ憐憫な気持ちで三途は己の内側を満たしていく。

そして、カップの中も濃い色で満たされていく中、三途は話題を変えようと言葉を投げた。

「さっきの、上での話なんですけど」

「言っとくけど、決定事項だから抗議は受け付けないわよー」

「今更しませんよ。それに私は今回は賛成派です」

「あら、珍しい。やっと反抗期に治まりがきたのかしら」
「あなたという理不尽に対しては生涯かけて反抗期貫く気でいますけど、彼は私もいいんじゃないかと思っていますよ。まぁ、最初は千夜が疎遠しがちなタイプを連れてきた時は、どういう風の吹き回しかと思いもしましたが……」

店に来た時は少々驚かされた。
だが、

「けれど、千夜は見たことがないくらい……楽しそうでしたから」

その時の感情は一筋ではいかない複雑なものだった。
驚き。嬉しさ。物珍しさ。
そして、ほんの少しの嫉妬が入り混じった。
混沌としたその時の記憶と、千夜の表情は、後の蒼助に向けた銃の引き金を引くのに足枷となるまで引きずっていた。

「ふーん、一応躊躇はする程度には認めてるのね」
「ええ。だから、殺そうとしておきながら勝手なんですが……死なないでくれて、よかったと思います」
「いやにあっさりね。もっと粘り強く反抗してくると思ってたのに、拍子抜けしちゃうじゃないの」
「あんな、わかり易過ぎるシーンを見せ付けられたら、何も言えません」

それは、蒼助が己を取り戻した直後の、三途が見た光景であった。
最後の力を振り絞って、千夜の前に立った後、気を失って倒れ掛かってきた蒼助を大事そうに抱きしめる千夜の姿。

「明らかに、余計なことをした上……あれでは、何も言う資格ない

でしょう。千夜の思うようにしてほしいと思っています、私は」

でも、と、三途は言葉を濁す。

自分が静観するということで、丸く収まるのではないかと思われた際に、新たな起きた問題を話題として切り出す。

「千夜はどうして今更……ひょっとして、自覚ないんでしょうかアレで」

「……無いんじゃなくて、自覚したくないのよ」

「なん、」

何で、と言いかけて、三途は言葉の続きを喉の奥に押し留めた。

疑問の答えを、既に得ていることに、気付いたのだ。

「……さっき、千夜に帰り際……聞かれたんですけど」

「……」

「続かないとわかっていても、それでも未練がましく執着する自分は愚かなのか、と」

黒蘭は答えない。

沈黙の後、息を一つ付いただけだった。

続けてもいいのだ、と勝手に解釈させてもらい、三途は独り言のように言葉を紡いだ。

「びっくりしましたよ……まさか、昔、【あの人】から問われたことと、似たような言葉を千夜の口から聞けるなんて……」

そして、その後は衝撃のあまりにその場で固まり、心此処にあらずの状態で、千夜を見送ったのだった。

あの瞬間と。
そして、今。
三途の脳裏に甦る記憶は、耳した過去のあの日から頭を離れない
――――【あの人】の言葉だった。

『続かない幸せだとわかっていても、それでも手放せず選んだ俺は
……馬鹿だと思うか？』

それは三途が初めて見た、表情だった。
他愛のない会話の中で、ふと見えた一瞬の貌。
いつでも強烈な印象をまとう【あの人】が、自分に見せた最初で
最後の弱気であった。

何かに儚んだ表情を、あの時自分はすぐに打ち消えたから気のせ
いだと記憶の隅に追いやった。錯覚だ、と。
また自分をからかっているのだ、と彼が呟いた悲壮感に満ちた言
葉も軽く捉えていた。
何故なら、【あの人】は何も言えずに固まっている自分を見て、
いつものように人の悪い笑みで大きく笑ったから。

冗談だって。
お前は真面目だからからかい甲斐があるよな。

そう、何でもなかったように。

本当に冗談であったかのように。

真面目で融通が利かなかったかつての青い自分は直でそれを受け止めてしまった。

笑う顔の下で、【あの人】が何を抱え、思っていたかも気付かずに。

「私、また……何も答えてあげることが、できませんでしたよ」

三途は、手元のカップの黒い水面に映る己の顔を見た。

無力な愚者の姿だった。

たった一つの問いにすら答えられず、大事な人が抱える負責を取り除いてあげられなかった。

何が守るだ。

空回りばっかして、肝心な時は何も出来ないくせに。

三途は、小さな水面に映る昏い顔をした己を罵った。

「――――良いんじゃないの？　その選択は、正解なんだから」

「は……？」

三途が思いに耽っている間に、コーヒーを飲み終えた黒蘭は空になったカップを指にぶら下げ、弄んでいた。

「答えても答えなくても、辿る道は同じだったのよ。知ってる？　誰かが、そういう質問を他人に投げかける時、その一方でもう自分の中で答えを出しちゃってるの。でも、迷いがあるから、誰でも良いから己ではない者の別の言葉を聴きたくなる。そして、それが自分の思っていることと違ったら、否定して自分の考えが正しいとい

う気持ちを強くさせるのよ。だから、仮にアンタが質問に答えていたとしても無駄だったってわけよ。他人がどーこー言ったって……結局は、本人は自分の考えを優先したくなるのだから」

「……なら、あの時……私が【あの人】に何を言っても……何も変わらなかったって……そう言ってるんですかっ？」

黒蘭の容赦ない否定に対し反発心を刺激され反論が口を突いて出た。

最後の部分で、三途は思わず揺れる感情のままに声を荒立てた。

「もう、あの時既に……【あの人】は……ああなることを決めていたっていうんですかっ……」

「そうよ。だから……アンタが答えられなかったことで――――＼＼＼＼”自分を責め立てる必要はない”」

「……それって、資格はないって暗喩してるんですか？」

「わかってるなら、その鬱陶しい悲劇ぶった憤りは治めなさいよ」

コーヒーの後味は悪くなる、とさらりと酷いことを言う。

いやに毒舌だな、と言葉に刺々しさを感じた三途は少し勢いを削られ、

「……何で急に、マジで苛ついてるんですか？」

「人の琴線に触れるからよ。自分が可哀相だとか主張する悲劇のヒロインぶったの、嫌いなのよね。アンタがあの時、あんな損な役回りに押し付けられたのは本当に運が悪かったと思うけど……それ、ムカつく奴思い出すから、私の前ではあまりしないで」

理不尽な言い様だ。

なのに、自分に非があるように思える。

「貴方は、人に理不尽な罪悪感を与えるのが上手ですよね……」
「褒め言葉よりも、おかわりがいいわ」

ハイハイ、と中途半端に話を打ち切られた感を抱きつつ、理不尽の権化の要求に答え、自分のを代わりに差し出す。
それと交差するように、黒蘭は言葉を差し出した。

「妙な気苦労を負わなくても、自問に対する答えは自分で見つけるものだから心配いらないわよ。あのコの答えとなるものは、もう、すぐ目の前にあるんだし、後はあのコが気付き、どう納得するかよ。アンタは余計なこと考えないで、ジッと見守ればよし、わかった？」
「答えって……」

言いかけたその時、扉一つ挟んだ見せの奥の方で音がした。
扉の閉会の音だ。
そして、三途のすぐに背後の左の傍らに位置する、奥を遮る扉が内側から押し開かれた。

開きゆく扉の影から現れたのは、

「あら、上弦。もう終わったの？」
「ご命令どおり、処置いたしました」
「……で、どの程度？」

そう問い探る黒蘭は、何故か半目だ。
その理由は三途が聞くまでもなく、上弦の口から遠回しに語られることとなった。

「まずは、両手を。次に両脚を。最後に、頭を潰しました」
「な〝」

「……」

凄惨な内容を、何処か晴れ晴れした様子を口調に漂わせながら言ってのける上弦に、三途は口を開けて絶句する。

黒蘭は、はぁ、とこれ見よがしに息を溜めて吐き、

「……足一本程度で充分だったと思うけどね」

「初心者だから優しくしろとおっしゃったのは貴方ではございませぬか」

「……その心は」

「何事も最初が肝心でございます。己がどのような選択をしたのを思い知らせてやったまで」

「やだ、私怨が正当に聞こえるわ。いつの間に、やるようになったわね上弦」

「伊達で貴方の側に四百年いたわけではございませぬぞ」

そのようね、と一呼吸入れるようにコーヒーを口に含む。

コクリ、と呑み下し、

「早く終わった割には、間があったわね。何をしていたの？」

「再生速度を視察しておきました」

「それで、具合は？」

「意識を失って”一時間ほど”で肉体の再生が始まりました」

「それだけの損傷を負って……初めてにしては速いわね。この調子なら再生速度とその機能は良い感じに育ちそう……となると、あと”十分”もすれば元に戻るかしら」

そこで急に黒蘭は、今まで味わうように飲んでいたコーヒーを一気に飲み干し、空となった二杯目のカップをコトリ、とカウンターに置いた。

そして、席を立った。

「それじゃ、失礼するわ」

「え……ちょ、」

「十分したら、様子見にいってあげて。何か聞かれたら必要最低限のことを教えなさい。あと、明日から本番よ、とも」

一方的に言いつけ、黒蘭は颯爽と店を出て行った。

上弦はその後を付いて行こうとしたが、一度三途を振り返り、

「失礼する」

一礼して、黒の少女の後を追って出て行った。

建物の中には、三途一人が残され静寂の時間が生まれる。

否、奥の方でもう一人が自身の”蘇生”を待っている。

「……はぁ」

三途はくったりと頭を垂れ下げ、息を吐いた。

その心を漂うのは、先行きの見えない事に対する不安だった。

これで本当によかったのか、と。

こんなんで本当に大丈夫なのだろうか、と。

「……答え、ですか」

黒蘭は彼が千夜の答えとなると言っていた。

では、

「……あなたは、どうだったんでしょうね」

思考が繋がった先には、【あの人】がいた。
彼は、あの時己の疑問に何を答えとし、己の結末にどう納得したのだろう。
誰が彼の答えになり得たのだろう。

少なくともそれは自分ではなかったのだな、と思い当たり、自嘲した。

三途は、思う。
彼は見出した答えとは何だったのか。

「あなたの忘れ形見と……その答えとなるかもしれない男を見ていれば、わかるのかな……」

独り心地に呟き、三途は壁の掛け時計を見る。
秒を刻む振り子が中で揺れる時計がさす時刻を見て、

「……十分。コーヒーを一杯飲むには充分ですね」

十分という長いような短いような時間が過ぎるのを、三途は気長に待つことにした。
自らの答えにもなるであろう男の目覚めを。

【六拾九】　疑問の答え（後書き）

今回の話の中で、黒蘭と三途が展開した話題は、割と誰にも覚えのあることではないかと天海は思うのですよ。
無論、天海自身にもありますとも。
自分がしたことも、されたこともあります。
される方は気分悪いだろうよ（私はそうだった

自分は正しいのか、と問い、相手がそれにイエスであれノーであれ返事を返してもなんか反発的な気持ちになりませんか？
多分、もう自分の中で答えが出ているからそう思うんでしょう。正しい、と思っているならイエスと言われれば勇気付けられ、ノーと言われれば意固地になる。逆も同じ。

すんごい、ウザい質問なんだろうな、コレ。
わかってんなら聞くなよって思う。
まぁ、私もそういう傾向があるなら胸を張って否定できるもんじゃないんですけど。
でも、仕方ないとも思う。こういう質問は誰もが弱気になった時に自然と口をついて出てしまうものではないでしょうか。
三途が思い出す【あの人】もそうでした。
答えも出ていて、納得もしていた。
けれど、ふと弱気になって無意識に呟いてしまった。
その相手が偶々三途だっただけなのですが、後の結果と惨劇が絡まって彼女はその時何も言えなかったことが心の傷の一つとなって残っているのです。

自分の知らないところで、いろんな期待を背負わされている蒼助。
コイツの今後の動向が物語の終結を左右します。

ようやく主人公らしくなってきたか（ホロリ涙

そういえば、蒼助が酷い目に遭ってるシーンが。

……また次回か（プロット書いてるのに

【七拾】　立ち位置の確認（前書き）

まずは己の立つ場所の自覚から

【七拾】　立ち位置の確認

「まず最初に言っておこう。――――私は、貴様が気に食わん」

唐突な宣言を告げられたかと思った瞬間に、それは起こった。

右肩が妙に軽くなった。

代わりに得た感覚は、喪失感であった。

「……あ？」

ごっそり重みを持っていかれたような違和感に、目線をそこへ下げてやる。

――――あるはずの右腕が肩口から無くなっていた。

「っっっあ」

実の起こった現実の自覚と共に、現実は激痛を発した。

短い引き攣った悲鳴をあげ、膝をついた蒼助を更に驚異が襲う。

「正直、口を聞くのすら嫌悪感を感じ……」

平然と痛みにもがき苦しむ蒼助を眺めていた上弦は、立派な極太い眉尻の片方を反り上げさせて顔を顰めつつ、もう片方の血が噴き出る傷口を押さえる腕に手を添え、

「――――腹立たしい気分になるのだ」

枝からりんごを採るかのようにもいだ。

新たに絶叫をあげる蒼助を、うるさいと揶揄するかのように胸を蹴りつける。

両腕という支えを失ったアンバランスな蒼助の上半身は容易く後ろに倒れ、頭を打ち付けることになった。

衝撃で意識が飛びかけるが、それを制するが如く上弦の足が胸を踏みつけた。

床に叩きつけるのと同様にされ、心臓が弾けそうな圧迫に息が詰まる。

「まだ堕ちるな。こちらの言いたいことはまだあるのだからな」

何処までも殺意に満ちた目で、蒼助を見下げ、足下の胸をぐりぐりと踏み躙りながら、

「腹立たしい。真に腹立たしいぞ、小僧。貴様のような輩に、我が主を任せなければならないとは……貴様が、そしてそうさせざるえない己自身が憎くてたまらぬっ」

ぐしゃり、と下のほう何かが潰れる音がしたのを、耐え難い痛みによって現と暗転の境を彷徨わされる蒼助は、不安定な遠くなりつつある耳で聴き取った。

胸から退かした足を今度は、蒼助の左脚に置き、圧したのだ。

力任せに骨はおろか肉や神経も踏む、という行為の有り得ない圧迫によって胴体とさよならをさせられた。

「あ〝っ、あ〝っ、あ〝っっっ」

「だが、これも我が君の為。その為ならば、私はいくらでも苦汁をなめてみせよう」

そう言って、更に蒼助の最後の四肢である右足を踏み千切った。

芋虫同然の格好となった蒼助は絶え間なく血液が四箇所から流れていくせいで、死人のような顔色になって目に虚無を宿していた。

それを眺めていた上弦は鼻を鳴らし、

「……ふん、そうまでなっても意識は落とさなかったか。これもまた忌々しいが、賛辞に値する気力だ。ならば、残ったその気力で私の話を聞け。明日より私はこの空間にて貴様を鍛えることになった。あの方の傍に立つに相応な存在に近づけるべく、な。今日のように簡単に済むと思うな。地べたを這うようなら引き剥がして立たせ、立つのなら地べたを捻じ伏せ這わしてくれよう。全てはあの方の為だ。こうして、貴様に痛みを与えることも、貴様と時間を共有することも、何もかもあの方の為……ならば私は、いかなることもこなしてみせよう」

もう蒼助には、長々しく語る上弦の言葉はあまり聞こえていなかった。

ただ、自分は確実に死ぬという迫る未来を予感し、実感していた。

今さっきで何でこんな目に遭っているのだろうか。

黒蘭は自分に手を貸すと言っていたはずだ。

なのに、今自分はこうして殺されようとしている。

この男が己の独断で私情に走り行動しているだけなのか、と考えたが、目の前の男は何故か明日のことを言葉に入り混ぜている。

両手両足を捥がれた身で、何を鍛えろというのか。
これは一体何のつもりなのか。
黒蘭は何を考えているのか。

疑問を頭に思い浮かべ、並べるが端から文字列が消えていく。
意識を保たせていた気力がもう限界を迎えているのだ。

「そういうわけだ、小僧。黒蘭様から仰せつかった命を、私は今為そう。まずは一度……」

一度？と霞みがかかる意識で疑問を掲げる蒼助に、

「――――死ね」

無造作に振り上げた足が勢いづいて顔に落ちてくる。
それが蒼助が見た最期の光景だった。

◆◆◆◆◆◆

「――――ここまで来て死にネタって、納得できるかぁぁぁぁっ！！！！」

「うわっ」

無情にも告げられた宣告に対する非難の絶叫と共に蒼助は、跳び起きた。

肺にあった酸素を総動員させたせいで、軽い酸欠状態になりながらも、パニックに陥っていた精神は徐々に沈静化していく。

そして、ハッとして己の手足を見回す。

「あ、あれ……？」

千切られたはずの四肢はどれも損害の欠片もなく、綺麗な部品として胴体という本体に何の不自然もなくくっついていた。

それどころか、身体の何処にも傷が見当たらない。

まさかあんなにリアルだったのに夢オチなのか、という考えに方向が向き始めた時、

「ちょっと失礼」

「え、あ……下崎さ、ん？」

「おはよう。ちょっと、待っててね」

先程目覚めの際に聞こえた声は、どうやらいつの間にか傍にいた

三途のものだったようだ。
　三途は、こちらの戸惑いの事情を知っているかのように、肩の付け根や足の付け根を引っ張るなど触るなどして、具合を伺っている。
「うん、ちゃんと繋がってるね。痕も残っていない」
「……といいますと、やっぱり俺の臨死体験は夢じゃ」
「ないない。上弦さん、両手足千切って頭潰したって言ってたし」
　わざわざ報告までしていたのか、あの巨人は。
　報告時に虫を潰したことと大差ないとでも言うかのような表情を浮かべていたに違いない、と勝手に推測し蒼助は腹の底で沸々と怒りがこみ上げさせた。
「でも頭まで潰したのが本当だっていうなら、何で……生きてんだ、俺」
「うーん、それが混血種の体質に表れる利点なんだけど。……何処から説明したものかなぁ……」
　数秒ほど目を泳がせ悩む様子を見せた後、
「……簡潔に言うと、私達、混血はね……カミと同じ、不死身に近い体質なんだ」
「不死身……って、俺死なないんすか！？」
「話は最後まで聞きなさい。死なないわけじゃない、それに近いだけで……まぁ、”死ににくい”というのが、一番しっくり来るか……な」
「いやでも……頭潰されて死なないって……」
「心臓が止まったら死ぬ。脳の活動が止まったら死ぬ。それは悪魔で”人”で通る常識。私たちは、体質的に言うなら……人とはかなりかけ離れている。ここは、カミ様的常識で行こうか、付いて来て

ね？」
「……努力はします」

こうして、三途は臨時講義を始めるに至った。

「カミ様的常識その一。【死】とは【肉体の死】にあらず。これは身体が致命傷レベルの傷を負ったり、身体の器官に壊滅的なダメージを食らったりして、肉体の活動が停止するとする。でも、カミにはそれが【死】にはなりえない。何故だと思う？」
「……わかんねぇ」
「教え甲斐があるね、君は。理由は――――蘇生しちゃうからだよ」
「ゾンビと同じ原理っすか？」
「あれはまた違った経路（ルーツ）での蘇生で、ハズレ。カミっていうのはね、ヒトと違ってとても世界に影響を受けやすい存在なんだ」
「どういう意味ですか？」
「霊質粒子っていう世界に流れる……私たちの身体に流れる魔力よりも、ずっとずっと純粋な世界が生み出している力なんだけど。それは、根源である世界に近い気質を持つ精霊であるカミはヒトよりもその力に馴染み易く影響の受け与えが激しいんだ。それゆえに彼らはヒトよりも遙かに強大な力として大量の霊質粒子を扱うことができる。そう、自らの身体の欠損を補う為のガソリンとしても、ね」
「あ……」

ここまで話してもらい、蒼助はなんとなく理解の光を捉えた気がした。

「……肉体を再生させることも、できるってことか？」
「正解。掴みが早いね。カミも肉体の構造はヒトと全く変わらない。けど、ここで両者を大きく分けるのは、さっき話した霊質粒子に対する影響。カミは、似通う気質を潜在的に備えているが故に自らの

意志を以ってして、それを自らの体内に取り込むことができ、それによって自然治癒力は驚異的な威力を発揮する。それこそ、腕一本まるまる消し飛んだとしても繊維一本から再構成出来るまでに。ちょん切れちゃったくらいじゃ、朝飯前でくっついちゃうよ」

「そういうわけっすか……でも、頭は」

「――――【死】とは【魂と肉体の離別】なり。これ、常識二つ目、ね」

講義は第二段階に移ったようだ。

「普通の人間は、退魔師と違って扱う術も知らなければ、霊質粒子をそんな風には使えないし、そういう機能はついていないからカミに言わせればどうしようもなく脆弱な存在で、肉体が傷つけば簡単に死んでしまう。でも、カミは一つで説明したとおり、強力な再生能力でそんなことには成り得ない。では、彼らにとって死とはどのように確立しているのか……それは、魂が肉体から完全に切り離れてしまうこと」

「でも、それって……人間も当てはまるんじゃないですか？　ああ、と……肉体が死んで魂が離れて亡霊ってのが出来るんですよね？」

「それも正解。でも、【殺す】ならともかく【死ぬ】にはもっとハードルが高くないと。例え、肉の欠片まで擦り減っても、魂が宿る肉体はまだあるから再生しちゃうんだ。……肉片一欠片も残さず、或いは灰にまで追い込んで、そこで彼らはようやく死ぬ。私達の場合は、寿命も有りだけど」

長い言葉続きの後に、三途は一息入れて、

「他にもいろいろ特殊ケースはありえるけど、今は基礎知識だけにしておこうか。他に質問は、何かある？」

返答は、イエスであった。
説明を聞いている最中も、蒼助の思考の片隅で昇華の瞬間を待ち続けていた疑問。
それは、
「……俺、何で殺されたわけ？」
殺すと死ぬの使い分けの境界線がいまいちわからないが、とりあえずそう言い表してみた。
「殺される前までの君の体質問題の解決の為じゃないかな。たとえば、ここにスプーンが一つ」
「何処から」
「そんなちっちゃいこと気にしちゃ負けだよ。ほら、握ってみて」
何に負けるんだつーかちっちゃいか？と思いつつも胸に秘めておき、言うとおりにした。
目の前のそれが紛うことなき金属であることを知りつつ、その真意を確かめるべく。
「……あ」
「大丈夫、みたいだね」
何の反発も異変も起きず、スプーンは蒼助の手の中に大人しく収まっている。
「……一体何で」
「発散されたんだよ。君のさっきまでのアレは、制御できていない力が身体に収まりきらないほどの霊質粒子を取り込むせいで起きていた暴走なんだ。だから、余る霊力を”消費出来る状態”にしたんだよ」

覚醒したばっかの混血種によくある現象なんだけどね、と付け足す三途の言葉を小耳に挟みながら、蒼助は自分なりの理解を試みた。

「……あー、つまり今の俺が五体満足なのは」

「そうだね。余っていた霊力を消費して再構築した。そして、状態もちょうどいいバランスに落ち着いた、ということだよ」

ここに連れて来た黒蘭の真意を、蒼助はようやく呑み込めた。

そして、勝負にならないことがわかっていながらも、「戦え」と言い表すことに含まれたその意味も。

最初に腕をもがれた時、全く反応の出来なかった自分。

手も足も出なかった、という事実は、今の蒼助がどれだけ無力で使い道にならないのかを思い知らせた。

己の立つ位置をわからせる為に、わざわざ「殺されろ」ではなく「戦え」と言ったのだろう。

澱に来ることは出来た。だが、蒼助自身はまだ【この世界】の最弱という出発点にいる。

食物連鎖でいえば、非捕食者なのだろう。

今のままでは、食われて嬲られるだけの存在。

力はある。

だが、扱えない力ほど”無力”と呼ぶに相応しいものはない。

今日、この場で黒蘭が要求したのは、二つの事柄だと、蒼助は推測した。

己が弱いということ。それを自覚しろという要求。

そして、もう一つ。

強くなれ、と。

「……まわりくどいんだが、直球なんだか」

蒼助は小さく呟き、己の手の平を見つめた。
そこには、何も無い。
何一つ掴めていない、空っぽな手である。
だが、それは同時に何かを掴める手であるということを表してもいた。

全ては、これからであった。
自分はようやくスタート地点にいるのだ、と蒼助は決意づくように何も無い掌を固く握り締める。
手応えのない感触を忘れないように、しっかりと。
この手に何かを手に入れたときに、違いを確かめる為に。

「……下崎さん」
「何？」
「ちょっとひっかかってるんだけどよ……」

己の中で腑に落ちずにいる疑念を問う。

「……霊力を安定させるのには、腕一本くらいじゃ足らなかったのか？」
「……」

何故か、三途の表情は強張った。
気まずそうに。

「……黒蘭は、そう言ってたんだけど」
「……」
「上弦さん厳しいからなぁ……本人、最初が肝心だとか言ってたけど」

あはは、と苦笑いをつくって並べる三途のフォローを聞きながら、蒼助は静かに一人察した。

「殺す」という選択自体は、あの男の独断であり私情であった、と。

そして、あの男は自分をどうしようもなく快く思っていない、と。

「あ、でもね、いくら治るっていっても、痛みまではなくならないから再生するまで相当辛いし……そこを汲んで気を使ってくれたんじゃ」

三途の言葉を遮るように、ダンっ、と地を叩く、というよりも殴る音が鈍く響いた。

座り込んだ蒼助の、握り拳がコンクリートの地面に付いていた。

付着した場所から伸びる線が何本か見れた。

「下崎さん」

「……え？」

「俺は五日間であのデカブツを殺せるくらいまでにはなってみせるぜ」

「……」

俯いた笑みが恐ろしく昏い。

フォローする言葉も失くし、沈黙する三途をよそに、蒼助は声を立てて笑う。

「くくっ……明日からが楽しみだぜ、まったくよ」

姑、或いはお義父さんという敵に対し、報復の炎を胸の内で燃やしながら。

【七拾】　立ち位置の確認（後書き）

期末終わったー、ということで勉強片手間に執筆する羽目にはならず思う存分書けたので仕上がりも割りと早く上がりました（自分的には

とりえあず、主人公いたぶる上弦を書くのが楽しかったとでも言っておきます（最低だ

せっかく表に強く出てきたということで【上弦】というキャラに対し、ここで項目を並べてみようと思います。

・白髪
・いかつい
・マッチョ。
・デカい
・千夜命
・苦労性
・オカン
・カミ

ちなみに一番の幸せの時間は、千夜の世話を焼いている時だとか。
蒼助を「ずっと昔から」毛嫌いしている。
青い人に対しては、苦手意識と畏怖と多少の敬意を抱いている。
黒蘭とは、約四百年の間行動を共にしている。
口でも実力でも一度も勝てたことがない。
こいつも黒蘭と同様に全てを知っているが、語らない（或いは黒蘭がそれを許さない
千夜を己の中で何よりも最優先としており、厚い忠義で大切に思っ

ている（過保護すぎるので本人からは鬱陶しがられているのが難点
黒蘭には劣るが、かなり上位に食い込む強さ。
デカイ図体に似合わず、礼儀正しく理性的（千夜が絡まなければだが

真面目なキャラほど憐れな目に合うという法則にギャグの法則に従
って、今後も胃薬が友達であろうな。
嫌い？
まさか。
愛ですよ、愛（迷惑この上ねぇな

［七拾壱］　彼女の負い目（前書き）

去りゆく時
彼女は何を思ったのか
何を振り返ったのか

【七拾壱】　彼女の負い目

蒼助は愕然とした。
あの部屋から出て、店の方へとやってきた。
そして、飛び込んできたのは、

「……あの、俺……どんぐらい気絶してたんですか？」
「二……三時間くらいかな」
「んな、馬鹿な……だって……ほら」

蒼助は目を見開いたまま、窓ガラスを指差し、

「――――夕方じゃ、ないっすか」

◆◆◆◆◆◆

「――あの部屋はね、立体投影の空間術式の他に、もう一つ空間術式が組み込んであるんだ」

カチャ、と蒼助の座る席のテーブルに皿を置きながら三途は言った。
目の前に置かれたのは、クラブハウスサンドであった。

どうしていいかわからず三途とそれを見比べると、

「おなか減ってるんじゃないかと思って。大丈夫、お金取らないから」

にっこりと心配無用の太鼓判を押される。

そういえば、と自分が昼から何も食べていないことを思い出し、それと同時に胃が妙に寂しく感じてきた。

無料、という言葉と目の前の据え膳に惹かれ、遠慮という言葉は崩れ落ちていく。

食べ応えがありそうな具が三段にたっぷり挟まれたそれを手に、食欲が動くままにかぶりついた。

「……うめぇ」

冷えているかと思ったら、香ばしく焼きいろがついたトーストと中の肉はまだ程よく熱く、トマトは瑞々しくレタスのパリパリと新鮮な歯ごたえだ。

たかが喫茶店の軽食メニューと侮って食べた蒼助は少々面食らった。

「これ、ベーコンじゃなくてチキン？」

「うん。うちはローストチキンを使ってるんだけど、鶏肉ってダメだった？」

「いや、平気っす……つーか、半端なくうまい」

「良かった。君の様子を見に行く前につくったから少し間を置いちゃったからどうかと思ってたんだけど」

「こんなウマいサンドイッチ食ったの初めてっすよ。いつも、こんなの出してんすか？」

「うちはコーヒーの付け合せに、サンドイッチ何種類かとケーキ類

を置いてるんだ。無論、サンドイッチは注文されてから出来るだけ早く作って出すようにしてるよ。作り置きってのは便利だけど、どうにも我慢ならなくてね……せっかく淹れたコーヒーに冷めたバサバサになったサンドイッチっていうのはちょっとね」

この店の趣向には、店主たる三途自身のこだわりが影響するらしい。

「あと、気が向いたらカレーとかパスタもメニューに入れたりもしてるよ」

「店の儲けとかって……」

「趣味で好きやってるだけだから」

本業で充分稼いでいるから、副業の方はどうなろうと別に影響は無い、ということだろう、と自己解釈しながら、ざくっとまた一口サンドに噛み付く。

チキンに効かされた胡椒がピリリと舌を刺激するのを感じながら、

「それでさっきの話なんですけど」

美味いサンドイッチのおかげで途切れる羽目になった先程の話題に話を戻そうと言葉を投げる。

三途は思い出したように、

「あ、そうだったね。えっと、その術式っていうのは……率直に言うと時間の流れに影響する代物なんだよ」

「時間の、流れ？」

「君があの部屋に入る時、外は四時半くらいをさす夕方であった。中に入って君が気絶していた時間は三時間。でも、外に出たらまだ陽が沈みきってなくて時間は十五分程度しか経っていなかった。こ

れは、どう考えてもおかしなことだよね？」
「はぁ……」
「その原因は組み込まれていた術式である、一時間＝五分という法則」
「は？」
「あの部屋は一種の異次元でね、こちらの時間の流れの速さが異なるようにしてあるんだ。あの部屋では確かに三時間の時間が流れたんだ、現実の方で十五分が経つ間にね」
「……つまり、俺はあの部屋にいたせいでちょっとばかし人よりも長く年をとったってことか？」

浦島太郎かよ、と少しばかり嫌な気分になったが、結論に対し返ってきたのは否定であった。

「うーん、ハズレ。君は三時間をあの部屋で過ごした。けれど、その身体は十五分の時間しか年をとっていないよ」
「……？　え、と……」

いよいよ思考が問題に対し、対処が出来なくなってきた。
目を泳がせ悩む蒼助を見て、三途は微笑ましげに目元を綻ばせる。

「さっき、言ったでしょ。一時間＝五分って。ここが重要です」
「……ギブ」
「ふふっ。それじゃぁ、正解を教えましょう。君の中にある十五分はね、”圧縮された三時間”なんだよ」

ポカン、とその言葉を受け止め、意味を問う。

「圧縮？」
「あの部屋にはね、外に出る瞬間にそこで過ごした時間を設定した

時間単位で圧縮する力が作用するんだ。今の設定は、一時間につき五分。こうして、君が三時間を過ごしたことも、十五分の時間を過ごしたということも両方の有り得ない事実が成立するわけ……わかった？」

こくこく、と蒼助はただ頷くしかなかった。

言葉が出ないのだ。

あの部屋の中でのことだって、圧巻だったというのに重ね掛ける勢いでコレだ。

「アンタ、すげぇんだな……」

「照れるね……でも、スゴイのは君の方だと私は思うけどね」

唐突な切り返しに、蒼助は目を瞬いた。

何がどういう方向を向いて自分がスゴイという繋がりになるのだろうか。

しかし、その疑問に対する答えは実に簡単であった。

「だって、ちょっと前に君を殺そうとした相手と、普通に話してる」

「あ……」

言われ、蒼助は思い出した。

彼女に何をされたのかを。

「いや、なんつーか……その」

「……？」

「……忘れて、た」

間を置いて告げられた返事に、呆気に取られた表情を浮かべる三途。

その一瞬の後、へにゃっと苦笑した。

「やだなぁ、もう……あれだけのことが忘れられちゃう程度にしか思われていなかっただなんて……ちょっと、ショックかも」

「あ、は……そうっすよね。まぁ、でも……」

付け足すように蒼助は言葉を繋げた。

「……アンタがしたことは、別に間違ってたとは思わないし」

「え？」

「自分にとって大事なもんを何よりも優先して、行動したアンタはすげぇんじゃないか、って寧ろそういう感じに思ってるんだけどさ」

「……」

三途の目が奇妙な何かを見るようなそれになる。

「……何を言って……るの？」

「まぁ、だいぶ変なこと言ってるのはわかってるよ。俺だって、アンタが俺に死ねって言って銃を突き付けてきた時はふざけんなって思ったし。でも、俺としては自分の大事な誰かに危機が迫ってるのに、怖気づいて見て見ぬ振りする……っていう方が、無茶苦茶腹立つ」

「……」

「今の状況もさ、よく考えてみりゃアンタに殺されかかんなかったらなかったかもしれない状況じゃん？　俺としては、今のこの状態は望んだ形に近いもんになってるし……アンタには感謝すらしてるぜ、下崎さん」

美味いメシもタダで食わせてもらったし、とニヤリと蒼助は笑う。

あまりにも予想を超える返事に、三途は唖然として沈黙し、

「……やっぱり、君ってスゴイ」
「溜息つきながら言われたって、あんま褒められてる気はしねぇんすけど」
「そう？」
くすり、と三途は笑い、
「千夜が何で君を受け入れたのか……わかった気がするよ」
「へ？」
小さく何かを呟いたのを蒼助は聞き取ったが、内容まではわからなかった。
なに？と返され、それ以上は言及させてはくれないだろうと察し、大人しく身を引く。
最近、身の回りが独り言を呟く人間ばかりになったと蒼助は改めて思いながら、三途をチラリと見た。
眼鏡は割れてしまった為、裸眼のままだが、その表情は自分に銃を向けた時のそれとは似ても似つかない穏やかさが泳いでいる。
穏やかな喫茶店の店長としての三途。
冷酷な澱の住人としての三途。
どちらが本当の下崎三途なのだろうか。
何が、彼女の顔を切り替えるのか、と考えたところでそれは、一つの疑問に繋がりを示した。
「……今度は、俺に質問させてくれねぇか？」
「……何？」
蒼助は手にあるサンドイッチの最後の一欠片を大きく開けた口に放り込み、数回の租借の後に呑み込み、

「……どうして、アンタはそんなに千夜を大事してんだ？」

問いは放たれると同時に、沈黙が降りる合図となった。

三途はその瞬間、笑みも何もかも表情が消し去った。

しかし、ある程度予想はしていた。

この問いが、何気ないようで、重いのだと。

未知数の敵に対し、彼女が己の身を削ってまで守り通したかったのは何故なのか。

そこにどんな理由が秘められているのか。

蒼助はそういった千夜が拘る面で三途にひどく興味があった。

それゆえの、温和な空気を変えることを覚悟の上での質問だった。

「……それは」

彼女は薄く口を開き、切り出し、

「――――――あのコがカワイくて愛しくて仕方ないからだよ」

ポッと、顔を朱にのぼせながら言った。

蒼助は正直、白けた。

「……」

「半目が痛いから止めてほしいなぁ。至って大真面目なんだから」

「……ひょっとして、アンタ、そっちの気があったりすんのかよ」
「断固拒否ってわけじゃないけど、違うよ。千夜に対してそういう感情はない」
若干これ以上掘ったら要らんことを露見させてしまいそうな部分が見えたが、それを無視して問いを突き進めた。
「……じゃぁ、初恋の相手の子供だから、とか？」
「それもあるといえばあるけど……言ったでしょ？　妹みたいなものなんだ……私はもう、家族はだいぶ前に亡くしてるから……」
「……朱里もか？」
「そう。……二人とも、私にとっては掛け替えのない家族だよ」
「……ふぅん」
何処か納得した様子ではない蒼助の態度に、三途は首を傾げた。
「……蒼助くん？」
「ま、言いたくないんなら……別にいいんすけどね」
「……何が、言いたいの？」
態度に引っかかるものを感じたのか、話を終わらすことに対し拒否を暗示してくる三途に、蒼助は椅子の背もたれに寄りかかりながら、ややダルそうに、
「……アンタは、なんかアイツに負い目でもあるんじゃないかって……俺としてはそういう風に見えてたんですけどね」
「っ……」
一瞬の表情の硬直を蒼助は見逃さなかった。

やはりか、と己の憶測に確信の兆しを見た。

「……俺は、高校に入るまで俺に対して負い目を抱えて接してくる野郎の傍で育ったもんだから……なんか、わかるんすよ、そーゆー雰囲気が」

視線を上に上げて、蒼助は言った。

天井越しに思い浮かべたのは、己の父の姿だった。

ゴリ押しで愛した女と共になり、その為に負担を掛けたと罪悪感を自分と妻に対し負い目を抱え続ける男。

過剰かつ大胆な対応の中に、何処か自分に対するよそよそしさを滲ませる男の態度を思い出し、蒼助は少し苛立った。

「アンタの事情までズケズケ踏み込む気はないから、言わなくてもいいけど……守る理由に含まれたそーゆー部分は……早いうちにどうにかした方がいいぜ。負い目で優しくされるなんざ、される側には正直迷惑でしかないもんだぜ、下崎さん」

「……そう、なのかな」

伏せられた紫の瞳が揺れる。

迷う言葉は、次に肯定に寄りかかる。

「……そうなん、だよね……きっと……でもね、蒼助くん」

伏せていた目が前を向き、蒼助を見据えた。

まっすぐとした視線は蒼助に突き刺さり、

「……一つ覚えておいた方がいい、この先君が何かを決意して、自分を通すことがあるのなら……その時、必ず負い目を背負う。必ず、ね。無い、なんて思っちゃダメだ、それは存在する事実から

目を背けているにすぎないんだから。ちゃんと、例え相手の負担になろうとも……受け止めなきゃ、いけない」

「……参考にしとく」

「ん、そのぐらいがいい。今は理解はしなくていい、わからなくてもいい……いずれ、わかる時は来るもの」

寂しげに呟かれた言葉は、まるで過去の己を振り返って言っているように、蒼助には思えた。

己を通すということが、蒼助にはまだわかっていないと暗に言っているようでもあった。

外を見た。

空はそろそろ最高潮の緋色を演出するところであった。

時計を見れば、時刻は五時にさしかかっている。

「……ご馳走様になりました。俺……そろそろ」

「そうだね。今日は、いろいろとゴメンね……」

「……いいすっよ。それより、明日から世話になります」

「うん、頑張ってね。私も、出来るところでバックアップするから」

三途の心強い台詞に、蒼助は少し気が楽になった。

「どうも……」

「それじゃぁ、さっそく一つしちゃうね」

「は？」

それじゃぁ帰るかと立ち上がろうとした蒼助の出鼻を挫くように、三途は唐突な言い出しをした。

「……千夜が君を拒む理由……知りたくない？」

「……」

ぐっと知りたいという気持ちを抑え込むように、息を呑んだ。
誘いに対し、否、とはっきり突っぱねる本音は蒼助にはなかった。
だが、これがフェアなやり方ではないという理性が頷くことを囁きかける本能を押さえつけている状態だ。
答えない蒼助に、三途は今度は言葉から問いかけという形を取り去った。

「……言い方を変えるよ。知って欲しいんだ、君に。……千夜が抱える、負い目を」

蒼助は大きく目を見開き、言葉は頭の中で反響させた。
負い目。
千夜の、負い目。
それが、自らを拒む理由であると、三途は言っている。

「……いいぜ、聞く」

ここで引いてはならないと、蒼助が今まで何度も頼ってきた勘が告げていた。
了解を得た三途は、落ち着いた口調で語り出した。

「……千夜は、”空白”を抱えている」

空白、という言葉はあまりにも曖昧すぎて、その意味が蒼助には汲めなかった。
怪訝な表情を浮かべる蒼助に構うことなく、三途は次の言葉を連ねた。

「その空白の範囲は、十四年という歳月として表そう。私が千夜に

再会したのは、千夜が十四歳の、二年前。朱里ちゃんも、それとほぼ同時期だった。奇しくも、私達二人が千夜と道を分かたったのは、同じく六年前。千夜が十歳の時だ。別れから再会までの四年間、それが私たちが知らない千夜の空白期間。そして――――残る十年という、私達が知る以前を……千夜は知らない」

蒼助はその言葉がとんでもない事実を形にしていると、耳を通して脳で理解するのに、数秒かかった。

「……それってつまり」

「そう、千夜は知らない。二年前の私たちの再会が、千夜にだけはそうではなかった。〝初対面〟という邂逅を果たした相手にすぎなかった。

――――十歳以前の記憶の一切を失っている、千夜には」

無感情な声もって紡がれた言葉が蒼助に与えた衝撃は、言葉を失わせる破壊力を持って顕現した。

［七拾壱］　彼女の負い目（後書き）

土日は早朝七時に某ドーナッツ男の店にバイト出勤している天海。
今日は何処で何を間違えたのか、災難続き。

え、何勝手に休憩入ってるんだ？
いやだって、Ｎくんが入れって言ったんですよー。
あー、もうこれ以上速くなんて出来ませんってー。
無駄な動きが多い？　だって、自分不器用ですからー。
大体なんで、１００円セールの時にやらすんですか店主ー！って……うがーっっ（以下てんてこ舞い

―少々お待ち下さい―

……どうも、追い詰められすぎてもう何度目かのバイト辞職を考えた天海です。
いや、辞めないけどね。つーか、辞められるか今更。
ここで諦めたら将来仕事について荒波乗り越えられるか、という話である。
若いからしょうがいないとかではない。
今が未来に繋がるのだから、その為にもここで折れてはいかんのではないかと思うのです。

まぁ、天海の愚痴はこれぐらいにして、今回のことに話題を移しましょう。
ついに主人公に露見した、記憶喪失の件。
千夜自身の十年の空白。
これは今後物語においてかなり重要ポイントとして扱われるでしょう。つーか、それを追う話なのだ。

探り続けた先には、時代と魂を越えた大いなる因縁が待っている。
その時、物語はどう動き、何処へ向かうのか。
……ここで問題なのは、作者の命が尽きるまでに書ききれるかだがよ（笑）

次回で長い日曜日終わる予定です（あるいは未定）

【七拾弐】　暮れる日曜日

初めて顔を合わした時は、特に蒼助自身にこれといった感想は無かった。

ただ、顔を見て、名前を聞いて、その姿を通して、かつての知人の面影を見た。

まさかこんなところで再び繋がりを持つとは、とその奇縁の巡り合わせに驚きはした。

そして、注意が向かったもう一つは内に秘めたる危険性を持つ何かにだった。

決して、その地点では”彼には”なんら関心があったわけではなかった。

そういったものがようやく芽生えたのは、胸騒ぎが事実となって発覚してしまった翌日の、今日であった。

殺すために、誘い出した場所で蒼助と交わした会話の最中であった。

問われたことに簡潔に答えればよかっただけなのに、いつの間にか口走らなくてもいいことを話している自分に気付いたのは、己と千夜の関係の経緯を話した後だった。

殺すべき相手に気を許していた自分に愕然としたのもその時だった。

皮肉にも、殺すべき瞬間を控えたその時に三途は、そこで初めて蒼助という人間そのものに興味を見出した。

軽薄な外見に対する疎遠的な気持ちも、千夜に対する気持ちを聞いた時に何処かへ行ってしまった。

何の思惑も関係なく、千夜を好いているのだという事実が、蒼助に対し三途の心を大きく揺るがした。

躊躇を振り切って計画を実行した後に起きたまさかの事態を最終的に収めたのも、千夜の呼び声に応えた蒼助であった。

想いの強さというものをこれ以上になく明確に表していたその出来事と、追い立てるような黒蘭の持ち出した話が、更に三途の興味を煽り立てた。

こうして話していた間にも、それは留まるところを知らず、千夜と同じ人を惹き付けるこの男に些細な一面を見つけるたびにどんどん飲み込まれていくのを感じた。

思わず、胸の中で呟いたはずの言葉を外に漏らしていたほどに。

三途の中で、玖珂蒼助に対する評価はかなり大きくなっていた。

この男になら、と自分が大切な人に出来ないことを任せられる希望を抱けるほどに。

しかし、それに揺らぎを齎したのは、蒼助がこちらに投げかけてきた一つの問いだった。

負い目、と口にされた時、三途は動揺を隠せなかった。

三途は、己の内をあっさり見抜かれ、その洞察力に恐れ入った。

しかしそれは、見落としていたあることを思い出させる起因になりもした。

そして、千夜が何故あれほどまでに黒蘭の持ちかけた話に拒否の反応を示す答えも見つけ出した。

千夜は、過去という大きな負い目があり、それが本人に翳りとなって染み付いている。

親しくなった今も、千夜はそれを三途自身の前に一線として引いている。

三途はその先に足を踏み出すことができない。

蒼助はどうだろうか。

彼は、拒絶という壁の、その向こう側にある彼女の抱える負い目を受け止めることができるのだろうか。

生じた不安は、三途に一つの賭けに身を乗り出させた。

他者が語ることはタブーであることは間違いない、千夜の失われた記憶について。

ルール違反だということは充分承知の上だった。

他人が本人に無断で露見していいことでないことは、もちろんわかっていた。

だが、それでも確かめたかった。

明かした事実を前に、過酷な道を敢えて行こうとする玖珂蒼助という男の覚悟が何処まで突き通されるかを。

そうして三途は、最後の試しに賭けた。

◆◆◆◆◆◆

予想した通り、表情を強ばらせる反応を見せる蒼助を見たまま三途は言葉を続けた。

「失くした記憶のことはもちろん、千夜は自分の数少ない過去すらも他人に語りはしない。二年の付き合いになる私や、朱里ちゃんにも……ね。それからは、人には話せない思い出ばかりが過去に詰ま

っているということがわかる……そう、親しい人にこそ、話せないような経験が、きっとね」
「……親しい奴にこそ？」
「後ろめたいことを進んで打ち明けようとする人なんて、そうそういないよ？　どうしてか、わかる？」
蒼助は短い沈黙を間にとって、呟くように答えを発した。
「……怖いから、か」
「正解。……親しいからこそ、その後の……相手の自分に対する変貌が怖いんだよ。今まで築いてきたものが壊れていくのも。知られたくない自分を知られるのも、千夜は怖いんだと思う」
「……そんな、タマには見えねぇけどな……アイツは」
「そう、見えないよ。千夜は、他人に弱みを絶対に見せない。自分に、甘えるという妥協は許さないから……それは、同時に何を意味していると思う？」
「……何ですか？」
「……誰かに見せたくない弱みを持っているということだよ。臆病な自分を、ね。自分の奥底の……無防備な自分を見られるのが怖くない人はいないよ……きっと」
そう私も、と三途は胸を手を当て、声しない言葉を己に向けた。
一瞬自分を顧みた後、再び前を見直す。
「……君はさっき、私に負い目はどうにかしろと言ったね。千夜にも同じことを言えるかい？　過去を捨てろ、と……本気で、そう言えるの？」
さぁ、どうする、と三途は挑むような気持ちで、蒼助を表面上は静かな様子で見据えた。

この大きな揺さぶりに対し、返す答えを三途は身構えた。

「……なりふり構わずっすね、下崎さん」

「え……」

「タブーな手段を持ち出してでも、俺を試したかったんですか？」

鋭い視線に三途は心臓を刺される錯覚を覚えた。

見抜かれていたのか。

いったい今までその研ぎ澄まされた洞察力何処に隠していたのか、と三途はつくづく感服せざるえなかった。

見開いた目で動揺を悟ったのか否か、蒼助は肩の力を抜いた様子を見せた。

「ま、そこまでさせたからには……収穫がなきゃ割りにあわねぇっすよね。……今の聞いても、やっぱり俺はさっきの発言を撤回する気も、考えを変える気もないぜ……迷惑なもんは迷惑だ」

「……っ」

落胆が三途の胸に落ちる。

期待が削がれたという感覚は否めなかった。

見誤ったかもしれない。

やはり、自分は彼に過度な期待をしかけていたに過ぎなかったのか。

所詮、この相手もその程度の器だったのか。

沈んでいく心。

しかし、

「過去が負い目だぁ？　そんなもんを拒絶の材料にして、諦めろなんて言われても納得いくわけあるかっ……」
「……へ、ぇ？」
続いた言葉に、思わず拍子抜けた声が漏れてしまった。
蒼助もこちらの反応に対し、ん？と表情を緩め何かがおかしいことに気付いたようだ。
話が噛み合っていない。
「……えっと……」
「あれ……これって、無駄だから千夜を諦めろって話、すよね？」
「……」
どうやら、違う取り方をされていたらしい。
「……そういうことで言ったわけじゃぁ、ないんだけどなぁ……あー、でもそう聞こえなくはないかもなぁ……」
洞察力はすごいのに、思い込みの激しさがちょっとなー、と別の意味で脱力しつつ、もう少し直接的な言い方にしようと思い直し、
「……今の聞いて、君は少しも気持ちが引かなかったの？」
「……さっきから、何が言いたいんですか？」
「少し、言い方は悪くなるけど……千夜を、面倒な厄介な女だとは……君は思わないの？」
言ってしまった後、仕方ないとはいえ千夜を悪く言い貶めた自分に嫌悪しつつ、蒼助の反応を今度こそはと、三途は待つ。
ああ、そういうことっすか、とようやく三途の問いの意味が理解

出来たと言って、蒼助が見せた返しは、皮肉じみた笑みだった。

「……そりゃ、思いますよ。性格やら体質やら厄介だらけなのに、更に記憶が無いと来たらなぁ……」

蒼助の言葉も、無理は無いと思う。

憐れなほどに、千夜は『普通』とはかけ離れた存在だった。

しかし、蒼助は落ち着かない気持ちの三途に言う。

「でもまぁ、俺としては……んなもんよりもっと困難な壁にぶち当たってましたから」

「……え？」

今並べたこれらよりも、蒼助を悩ませた要因とは一体、と三途は検討つかない。

蒼助は堪え切れない何かを押し潰すように拳を握り締め、ブルブルと腕と肩を震わせながら、叩きつけるように断言した。

「――――好きになった女が、男だったという事実に比べたら他に何が来よう全然イケるっっ！！」

店内の空気を震わすほどの叫びに近い声だった。

呆気に取られる三途をよそに、蒼助は己の心に溜め込んでいた鬱憤をここで晴らすが如くの勢いで止まらない。

「俺、ニューハーフとオカマとホモは人類として見なしてなかった

のにっ。まさか、自分がその危うい一線を行き来する羽目になるなんて思いもしなかった……そりゃ、何度も自分の正気を疑って自問自答しましたし、せっかく問題点だらけなんだからそこばっか重視して何とか嫌気さそうと思いました。でも、段々何処見ても全然抵抗感なくなって、しまいにゃソコもカワイイんじゃねぇかとか思い至るようになっちまうし、女の姿を見てたらもういいっかなぁなんて――」

「……ぷふっ」

列列（つらつら）と己の決心までの心境や迷いを真剣に語る蒼助の語りを遮ったのは、何かが吹き出す音だった。

堪えきれず、吹き笑いした三途だった。

蒼助は気分を害したのか、目を細めて、

「……笑うことねぇだろ、下崎さん」

睨む視線の目元もほんのりと赤らんでいる。

照れているらしい。

しかし、三途が笑いを治めるのに少々の時間が要した。

「あははははは……っ、はは……ふぅ、ごめん」

「ちょっと。まだ、顔が笑ってるっすよ」

「馬鹿にしたわけじゃないもん」

本当のことだ。

ただ、おかしかったのは確かだが、それは蒼助に対してではない。

杞憂なことを悶々と一人悩んでいた自分が、あまりにも滑稽であったからだ。

「……本当、馬鹿なのは私の方だったから」

「……下崎さん？」
「こっちの話」

三途は肩の荷が降りた気分だった。

「……でもまぁ、驚いたのは確かですけどね。ちょっと前に、自分の昔のこと楽しそうに語ってたのからは、今の話は想像も付きませんでしたから」
「へぇ……千夜が」

過去を他人に話した、という事実は三途に新たな驚愕を与えた。
ほんの少しの嫉妬心を含んで。

「……今の話聞いて、嫌にはならなかったの？」
「んなこと言ったら、とっくに男だったって話で嫌になってますよ」

どうやら、性別に関する壁の方が蒼助の中では問題らしい。
懐が大きいんだが、狭いんだが、微妙なところである。

「それに、過去どうこう言ったら、俺だってあいつに知られたくない自分ありますから」
「……そう」
「どうしようもなく腐ってた時期があるもんで。それを知られても平気かとか聞かれたら、ちょっと頷けねぇな」

千夜に比べたら、どうってことはない、とは三途は思わなかった。
後ろめたい過去に、程度や比較など付けていいものではない。
人にはそれぞれの過去の何処かに痛みが疼く傷跡がある。
それをどうこう評価をつける資格など、誰であろうと他者には持ち合わせられいない。

「曝される時が来たら、どうするの？」
「そんときゃ、今のマシになった素敵な俺でカバーする」

迷いの無い、言葉だった。
ああ、本当に降参だなぁ、と手も足も出ない気持ちになった。
不意に蒼助は席を立つ。

「それに、記憶があるとないとしても、やることに大差はねぇよ。あるとしたら……」
「……あるとしたら？」

「惚れた相手の過去を知るのが――――――俺一人か、二人一緒でかの違いだけだろ」

また明日、と後ろ手に手を振って蒼助は店内にベルの甲高い音を残して出て行く。
三途は呆然とした心境で、それを見送り、暫くして頬に手を当て、溜息。

「……すごい台詞。若さには敵わないなぁ」

しかも不覚にも、ちょっと惚れそうになった。

◆◆◆◆◆◆

日が暮れてとうとう暮れて、周囲が薄暗くなった。
玖珂蒼助は、下崎三途の店を出た後、帰途についていた。
昨日まで世話になっていた千夜のマンションではなく、自分のマンションの部屋にだ。
二日ぶりに帰る我が家と二日間暮らした場所との落差が気になるところだ。

「たった二日間で、人間じゃなくなるまでに状況が変わるとはなぁ……」

人でなくなる、と引き換えに追い求め続けた”澱”にようやく来るに至った。
そして、最終目的も五日間というチャンスをモノにすれば叶うときた。
失ったモノは大きかったかもしれない。
だが、蒼助に不思議と後悔はなかった。
もし後悔していたとしたら、何もせずにただ停滞することを受け入れてしまっていた場合だろう。
黒蘭の言ったような、脳を常温で溶かされる退屈と退廃の中で、生きながらに腐り死んでいたかもしれなかった。

「それこそ、昔の俺に戻るところだったな……」

勢いと目先のことだけに見ていた、否、何も見えておらず見ていなかった最低の人生の中の最悪の青い自分。
価値観が狂ってしまったのかもしれないが、あの頃と人でなくなった自分を比べると後者を迷わず選んだ。
少なくとも、目指すものは見えている今の自分を。

……とりあえず、明日からどうするかなだなぁ。

一回ごとに瀕死は免れないであろう地獄の鍛錬のことではない。
本日、わだかまりを生じさせたまま分かれてしまった千夜のことだ。
三途にああも格好付けて啖呵切ってみたもの、知れば知るほど攻略対象の難易度は増すばかりである事実は曲げようの無いのは確かだった。
まるで、使い古された漫画のような展開だ。
古きよきものと飽きずに愛用されているが、何も現実に降臨することはなかろうに。
しかし、いつまでも閉口しているわけにもいかない。

「……あれで、割と押しに弱いからな……粘れば幾らか崩せるんじゃ……――――ん？」

物思いに耽りながら歩いているうちに、蒼助は異変に気付く。
先程から人がやたらと自分を追い抜いていくのだ。
それも、何処か急いだ様子で。
興奮したように口にする一部の会話に耳を傾けてみると、

「おい、現場はあっちだよな」
「ああ。急がねぇと人だかりが出来て見えなくなっちまう」

何かを見に行くこと目的であることが伺えた。
しかし、目的となる対象が検討つかない。
この時期、祭りや催しなどないはずだ。
花見ももう出来ない。

ならば、一体彼らは何を見に行くのか。

だが、ふと気付く。

前を走る彼らとその先、その後の通行人が行く道が、蒼助も進む方向であることに。

「……まさか、な」

往く人往く人が向かう先が、一瞬予想として閃いたが即座に否定する。

そんなわけがない。

第一、理由が無い。

「考え過ぎだよ、俺」

自身に言い聞かせる。

既に急ぎ歩き、走り出している自分に。

否定の考えに反するように、本能が急げと身体を突き動かす。

疾走するごとに自宅への距離が縮まり、近づく。

同時に鼻が異様な臭気を感じ取る。

刺すような、焦げ臭さ。

嫌な予感が一層強くなり、足の速度も上がる。

そして、ようやく建物が見えてきた。

――――――が。

「――――――」

そこには、見慣れた建物がある――――はずだった。
しかし、今目の前に聳えるそれは、蒼助が知るものの面影はほとんど汲み取れない。

まず、真っ赤に彩られていた。
鮮やかな紅蓮にところどころ見える黒い部分は焦がされているものの残滓である。
赤はそれを朽ちさせようとより一層と艶やかに身を火照らせる。

言葉どおり、〝燃える〟ように。

「――――嘘だろ、オイ」

発言の否定は目の前の現実が言葉も無くおこなった。

◆◆◆◆◆◆

「――――終夜さん、終夜さん」

遠く耳に響く呼び声。
千夜はハッと身を振るわせた。

「あ、はい……」
「院長が検査が終わったと呼んでいます」

受付口から看護婦が顔を出して、待ち時間の終わりを告げている。
頭に僅かに纏わり付く霞が、待っているうちに寝付いてしまったことを理解させた。

疲れていたから、といえば理由には妥当である。
今日という一日の中で、本当にいろんなことがあったのだから。
それこそ、対処しきれないほどの多くのことが立て続けに。

「はあ……――――っっ」

立ち上がる際に、床で踏ん張った右足の膝が軋みを上げた。
悲鳴、と表せそうなその痛みは、ここで来るまでに他の箇所で何度か経験していた。
この痛みが、まっすぐ家に帰るはずだった千夜の予定を変更させた原因だった。
帰り道の途中で、片腕の肘が痛み出した。
何処かでぶつけたのか、と思ったがそんな心当たりも覚えもない。
しかし、腕の原因不明の痛みは不吉なほどに続く。
家に帰って何かの拍子で朱里の前で顔にそれを出してしまったら、きっと余計な心配をさせるだろう、と念の為に行き付けの医院に寄ることにした。

久遠寺医院。

院長である久遠寺黎乎（くおんじれいこ）と決して多くは無い霊的治療の術士たる看護士達によって運営されている――――その手専門のヤミ通りの治療所である。

術師として優れた精鋭揃いで、その医院の主である久遠寺女医は、最高位の使い手である――――が、やや倒錯した性癖を持ち合わせているのが難点な人物であった、

裏の住人でその名を知らない者はいないが、非常に患者を選り好みする。

老若男女関係なく、美しい者が大層好みという幅広い趣向を持ち合わせており、万が一お目に叶ったとしても、必然と『精神的な大切な何か』を引き換えにすることになる、と帰って来た者は虚ろに語るという。

今のところ、何も失わずに病院を出入りしている千夜は、その変態女医とあまりおおっぴらに親しい知人と答えたくは無いが、事実そうであった。

久遠寺黎乎は男の頃から千夜の顔を大層気に入っており、女となってからもそれは変わらず、茶でも飲んで顔を眺めさせてやれば、診察料はまけてくれもする。

おまけに只の変態ではなく、指折りの治療師、という何とも切り捨てるには惜しい部分に何度も世話になっており、なんだかんだでこの病院とはそれなりに長い付き合いが続いていた。

「……黎乎、入るぞ」

歩き付いた見慣れた扉を軽くノックし、開ける。

開（ひら）けた診療室に最初に見えたのは、椅子に腰掛け、こちらに背を向ける黎乎の白衣の背中だった。

その背中を見て、千夜は何処かいつもとは違う違和感を感じた。

正体がわからないまま、千夜は後ろ手にドアを閉めて室内に入った。

「どうだった、検査で何かおかしな点はあったか？」

問いながら、無意識に腕を摩った。

黎乎が行った検査とは、血液検査であった。

正確には、血液に含まれた霊質粒子の概念検査であり、特に外傷を負ったというわけではないと進言した千夜に、黎乎が下した対処であった。

「……」

「……黎乎、どうした？」

無言で返す女医に、やはり様子がおかしいことを確信する。

しかし、正当な返事は間もなくして再び返ってきた。

黎乎は背を向けたまま、

「……千夜、アンタ、今まで何をしていた？」

「……何をって？」

「自分の霊力なくしてから、何かしただろう？」

「……ああ」

「そうかい、じゃぁアンタ……何をしたんだい？」

答えるのに、迷いを少し要した。

しかし、いつもの黎乎とは違う、ただならぬ空気を発する目の前の相手に下手してはいけないような気がして、素直に答えることにした。

「……三途が作ってくれた霊薬を毎日、飲んでいた」

「……その霊薬には、三途は何を使っていた？」

「三途の血から摂取した血清を……」

「っ、やっぱりそうかっ！！」

ダァンッ、と業務机を力強く叩き、激昂が黎乎から放たれ、響く。
滅多に見ない相手の激怒した姿に千夜は呆気にとられた。

「……何で、一言アタシに相談しなかったんだ……」
「おい、黎乎……どうしたんだ、さっきから……」
「どうもこうもあったものかいっ！　アンタ、自分が今どんな状態になってるか、わかってるのかい！？　わかってないだろうが！」
「おい、落ち着けよ……それなら、わかるように説明してくれ」

と、言いながらも千夜もかつて見たこと無いまでに、黎乎の猛りように内心動揺していた。そして、黎乎にここまでさせる己の状態への不安も抱えていた。

「……そう、だね……ちっ、年甲斐も無く熱くなっちまったじゃないか。どうしてくれるんだい、ええ？」
「知るか。それより早く教えろ」
「……検査でわかったことだけどね……あんたが訴えた体の一部の痛みの原因は――――拒絶反応さ」
「拒絶、反応……？」

それだけでは、意味がわからなかった。

「アンタの概念属性は起こしている拒絶反応さ。己と対立する属性に向けてのね」
「何で、拒絶反応なんて……」
「アンタがそういうモンを摂取してるからに決まってるだろう……」
「……待て、三途の霊薬が原因だっていうのか？」

「それ以外にあるか……アイツもアイツだ、平和ボケにもほどがある……こんな基本的なミスにまだ気付いていないんなんて……」

「いや、ちょっと待て……あいつは、言ってたぞ。自分の中には赤の概念も含まれているけど、それは一緒に調合した霊水で効力を相殺しているから大丈夫だって……」

確かにそう言っていたのに、と食い下がってみたが、黎乎は溜息で返すばかりだ。

「……霊水、ね。確かに、混じりッ気ナシの超純水にして清浄で限りなく原色に近い、同属性の【青】たるそれならば、それ以下もしくは同等の力量の対立概念を抑えることだって出来るだろう、間違っちゃいないよ」

考えそのものはね、と付け足し、ここからが本番だと言わんばかりに彼女はこちらに視線を強くして、向けた。

「……純粋ってのは、どういう定義で成り立つもんだい？」

「……汚れていない、他に不純となりえるモノが含まれていないこと……か？」

「正解だ。純水は純粋であるが故に純水なんだ。では、調合の際に行う調整や添加ってのは……純粋を不純に転化させる要因になりえない、と言えるかい？」

「――――っ」

「……そうだ。霊水ってのは、調合すると本来の清浄な気質を保てなくなりその効果を失うが、宿る力そのものは残るから治療薬をつくるには問題ない。だが、自らの清浄な気質を以って他の効力を抑制するという元の効果を失わずに調合するなんてことは、不可能だ」

黎乎が言いたいことが、何なのかはもう理解できる。
三途は霊薬の製造に失敗していた。
千夜の概念属性は【白】である。
三途の中に含まれる【赤】の概念とは水と油も同様、混じり合うは有り得ない。
自身の中にある【白】と同列たる【青】の概念のみを含んだ霊力を譲渡しようと考えた策だったのだろうが、黎乎が言う言葉は正しいとしたら、

「……拒絶反応というものは、正確には俺にどういう影響を及ぼすものなんだ」
「概念とは、魂にも肉体にも、挙句には世界の根源たる力である霊質粒子にも影響する。世界の原則だ。この場合、身体の細胞一つ一つにも概念属性ってのは備えられている。そこに対立属性の概念が流れ込んできてみろ……まず、元の概念が乱される。そして概念の宿る身体の器官、筋肉、神経、脳の機能の支障に繋がる。肘や膝の関節で起きてるそれは、その影響の先兵だろうよ。いずれ……」

黎乎の言葉が途切れる。
先を言うのか、迷っているんだろう、
迷う理由は、考えなくても千夜には理解できた。

「いい、言え。ついでに、今後もそれでも霊薬を服用し続けたら……どうなる？」
「……どうなる、だと？　わざわざ言わせる気かい、このコは……」

皺の寄る眉間に人差し指を置き、はぁー、と長く、重く、深い溜息を付いた。

「率直に言おうか。最終的には脳、と言いたいがその前に呼吸器官類か、心臓にクる。有体に言えば、次はないと思え。医者としての判断から言えばやったら、
――――八割の確率でアンタは死ぬ」

◆◆◆◆◆◆

『緊急速報を御報せします。本日、五時頃。東京都渋谷区にある六階建てマンションから出火、建物全体の七割を全焼、約一時間後に鎮火しました。周囲への延焼にも及び、逃げ遅れた上階の住人が四人死亡。免れた住人も重軽傷の火傷を負いました。尚、出火原因は未だ不明とのことです。次に……』

「……」
「ねぇ、蒼助。帰るんじゃなかったの？」
「……」
「蒼助ったら」
「……はぁ」

テレビで己の身に降りかかった事態を見ながら、蒼助は明日を思い溜息をついた。

【七拾弐】　暮れる日曜日（後書き）

蒼助、家なき子になる。
千夜、死の宣告。
波紋を残してとりあえず、『転』がこれにて終了。
ようやく、起承転結の『結』が始まります。
次回は、一つ間置く感じでキャラトークでもやろうかと思案中。

とりあえず眠い。
二時間後には学校に行くのだが、ぶっちゃけ途中で寝てしまえばよかったと後悔してたり……ぐあぁ。

［七拾参］　いつかの夢（前書き）

二度と会うことのない人へ、問いかける

［七拾参］　いつかの夢

深夜も眠らない都市を一見できる高層ビル。
その頂上の、風荒ぶ途方も無い高みに立つ人影があった。
夜闇に溶け込みそうな長い黒髪が、照明に存在を明かされ、奔放な風にされるがままに弄ばれる。
持ち主の少女は好きにさせておき、自身は立ち位置から見渡せる広大な近代都市の夜の姿を静かに静観していた。

「奇妙な画ね。……夜の光とは、空から降り注ぐものであったはずなのに、いつの間にか地上から放たれるものになってしまったわ……」

降り注ぐものとは、月明りである。
しかし、今、都市と人に光を与えるのは科学という自然ではない力により作り出されたエレキテル。
人にとっては当然として受け入れられる光景であるに違いないが、古き時の世界の姿を知る過ぎ去れない者達の目にはそれは摂理に背いた”歪”な産物に過ぎなかった。

「これだけの光がを駆逐する都市でも、巣食う闇は尚深いだなんて……本当に、おかしな話」
「――――所詮、ヒトの手によって生み出された世界に背を向けた嘘偽りのモノです。同じ歪なモノとして逆に住処とされているのでしょう……まったく、何たる様」
「あら、おかえりなさい」

少女の背後の奥の影から現れた巨体の男は、只今戻りました、と一言断って隣に並ぶ。

「……何度見ても、この強すぎる醜悪な光は慣れることはできませぬな。まるで、作り手そのものの悪性を顕しているよう……」
「相変わらず頭の固いこと……違和感に慣れれば綺麗なものじゃない。闇の中でキラキラとして……」
「こんなもの、崇高なる天上の月に対する侮辱です」
足元にも及びませぬ、と街の光から顔を顰めながら、目を背ける。
「アンタの人間嫌いにも困ったものね……自分だって〝元は人間だった〟くせに」
「既に終わった、昔の話です……」
男――――上弦は己の過ぎた過去からも目を逸らすように目を閉じた。
そこに何があったか、彼がどういった経緯を以ってして今に至ったのかを知っているが故か、黒蘭はそれ以上言い募りはしなかった。
「……まぁ、アンタのいうことに一理あるわ。歪な光に溢れ満ちた此処は、魔なるモノどもには恰好の隠れ場所よね……あの蛙野郎にも」
「……二日前の一件以降、何も手出しはしておりませぬな」
「ええ。アレも、手下使ってやったんでしょうけど……今頃、ここから下々を眺めるような気分でいるんでしょうよ、高みの見物ってやつを」
「しかし、【奴】は一体何のつもりでマンションを……」
「私を見てぇ～ん、ってやつでしょ。あのコに対する挑発のつもりで彼に手を出そうとしたみたいだけど……留守にしていたのは想定外だったみたいね」
「小僧を狙ったわけでは……？」

「無いわね。奴はもう、眼中においてないわ……自信がつくだけの力がついたこということかしらね」

ふぅ、と一息。

黒蘭は強かに笑う。

「……ま、今に見ているがいいわ。目にモノを見せてやるようにしてみせるわ。上弦、彼はどう？　順調かしら？」

「……」

伺う言葉に、上弦の答えは無言であった。

黒蘭は、この己の言葉への対応に、不安というものを感じはしなかった。

今の彼の場合、それは寧ろ、

「……順調、みたいね」

「何故そう言えますか」

「だって、ムカつくんでしょ？　思った以上の成長ぶりに」

図星であったのか、上弦は厳しい顔を更に険しくした。

そして、苦々しく言葉を零し出す。

「……初日にして、死亡回数五十九であったのを、本日は終了までに十九回に減数。下崎殿の指導により、肉体再構成の為の霊力操作も下崎殿の補助なしで可能に。……濁す部分があるとすれば、結界の構成に手間取っているぐらいでございます……」

「なに残念そうにしてんのよ。主君のためなら、如何なる苦汁も飲むんじゃなかったの？」

「飲みますが、顔に出さないとは言っていませぬ。あの小僧、生意気にも私の腕を一度とはいえ傷つけるとは……明日をもって、”

遊ぶ”のは止めます」
「……大人げないわねぇ」

明日は一層苦しくなるだろう、と此処にはいない男を若干憐れに思い、一瞬で思考を切り替えた。

「ところで、千夜は？」
「昨夜と同じく今夜も……おいたわしや」
「ああ……またなの。……あのコもよくやるわね、”ヨソ”じゃちっとも眠れないのに」

付いた溜息は強風に掻き消された。

◆◆◆◆◆◆

「――――あなたは、弱くなった方が良いわね」

唐突に、しかも奇妙な発言。
それは、自分が今剥いてやったウサギの形に切られたリンゴを機嫌よく齧っていた口から飛び出たものだ。
一瞬その言葉に呆気に取られ、次に内に到来したのは不可解、という三文字で表せる戸惑いだった。
顔でそれは充分表れただろうが、目の前の人は平然としている。
私は真面目に本気だ、と伝えるかのように真顔を突きつけて、

「ねぇ、弱くなった方がいいわ」

「……ねぇ……って……あんた、また何わけのわからないこと言い出すんだ?」

「何ソレ、不愉快な言い様だわ。まるで私が奇言を日常茶飯事のごとく連呼している変人みたいに聞こえるじゃない」

「聞こえるとおりだ、奇言の源。今度は何だ、どんな言葉遊びだ」

そう言いながら、もう慣れたものだな、と言葉とは別のことを思う。

出会って最初の頃は、このいつも突然な目の前の人の脈絡ナシの自由気ままな発言に翻弄されたものの、今ではすんなり受けいれられるようになった。

しかし、対応が気に入らなかったのか、相手は無表情にムスッと眉間に皺を刻み、不機嫌を形作った。

「遊び? 私がいつ、そんなことをしたというの」

「いつもだろ。己の言動を振り返って、出来れば自覚してくれ。反省しろとは言わないから」

正確にはしないだろうから期待してない、とまでは言葉にしなかった。

そうなると修正不可能なまでにこの人物は臍を曲げるのが見えていたから。

「気に入らないわ。何でいつの間にか私が怒られる立場になっているのかしら。私は、貴方に助言をしたはずなのに、怒られている。おかしいわ。謝りなさい」

「……あんたの逆切れに関しての反論は置いておくとして、まず最初の言葉の意味を教えてくれないか。というより、教えてください……”お母さん”」

敬語に言い直しただけではない足りないだろう、と『切り札』を発動させる。

読みは当たったとおり、ぐぐっと『母親』は弱いところを付かれたように口を結び、

「……仕方ないわね。お母さんだもの、わからないことは子供に教えてあげなくてはならないわ。それがお母さんのだもの」

『お母さん』という単語を連呼しながら、照れたように頬を赤くしている。

何度かの経験で、やはりそう呼ばれるのは顔にあからさまに出たりはしないが嬉しいらしいということがここではっきりとわかった。むしろ、普段の淡白すぎる態度に比べればほんの少しの変化でも大きく違いは浮き彫りになる。

「お母さんは優しいから教えてあげるわ。でも、言葉通りよ。あなたは今後のためにも……何処かで弱くなった方がいい」

「……何でだ」

「――――あなたは、強いから。心も、力も」

それは利点ではないか、と反論が自然と出た。

だが、常識をもって頭っから否定という、目の前の非常識に対抗しよう意識を持つなど無駄であることは知っている。

だから、順を追って、ゆっくりと話を進めていこうと試みた。

「……当たり前だ。強くなりたくて、なったのだから」

「知ってるわ。あなたが弱いことを嫌っていることも」

「なら、何で……」

「ねぇ……人は自分一人で生きて行けると思う？」

唐突に今度は質問ときた。
言いだしっぺである以上、このペースは【彼女】のものである。
下手に乱すと再び臍を曲げて面倒なことになる。
それは嫌だ、と自分を押し殺し、【彼女】のペースに従う。

「……思う」
「残念。正解は、”出来ない”」
「……出来る」
「出来ないったら出来ないの。かくいう私も、昔は貴方と同じように思っていたけれど」

【彼女】は目を伏せた。
ここではない過去の何処かを見ているのだろう、と虚ろが漂う瞳で察することが出来た。

「でもね、一人で生きていくって思っていた以上に難しいことに気付いたのよ。最初は、周りには私以外の人がいっぱいいして、どう足掻いても一人きりになれないから思っていたけど、それが間違っていることに気付いたわ。周りに誰か別の人がいるということが、心のどこかで当たり前と感じているから、本当に独りきりにされてしまったら……きっと、寂しいという気持ちを無視できないって」
「そんなことは……」
「ないって、どうして言い切れるの？」

台詞を途中で、先取られ少し口ごもる。

「……俺は、平気だ」
「本当に？　もし、今私がこの場から突然いなくなったら……淋しくは、思ってくれないの？」
「……思わない。あんたに拾われる前に戻るだけ

だ」
「今、間があったわ」
「思わせぶってやっただけだ」
「本当にそうなら、もっとそっけなくして、即答するものよ」
「……っ」

しまった、と自分が失敗したと気づいた時には、目の前の仕掛け人は既にしてやったりと眠そうな目はそのままにニヤリと口端だけを上げて笑っている。
他人に優位に立たれるというのは、それだけで腹が立った。
こんなに風に簡単に他人に揚げ足をとられるようになってしまった自分にも。

「大人ぶっても、やっぱり子供ね。すぐ表に出る。でも、そういうところ――――お母さんは、すごく好き……あと、嬉しい」

伸びた手が頭の後ろにまわりこみ、軽く引かれる。
それだけで顔は【彼女】の豊満な胸の中にストン、と落ちた。
胸に抱きこまれる――――顔を突っ込んだ状態になる。
大抵の男は、ここで顔を真っ赤にして、所謂欲に走りかけたところを理性にしがみついて暴れるものなのだろう。
しかし、千夜にそんな衝動は無い。
むしろ湧き出るのは、安堵という穏やかな細波の立つ気持ちであった。

好き。
そう言われて、【彼女】が触れて、かつてない充実感が心を満たす。
渇いていた心に水を注がれた。少しずつ少しずつ。

そして、居座りの悪い違和感から安堵へ変わったこの感覚。
これが、心が充分に潤いに満たされた状態なのだろう。

「あなたの意志はあなたが使う刀みたいね。行く先を切り開く強い意志。そんなものを持つあなたを子供に持ったお母さんはとても幸せだわ……でもね、強いからこそなのよ。あなたは……弱くなった方がいい。折れた方がいい。自分で折ることが出来ないだろうから、誰かの手で折られた方がいい」

胸の中で、顔を顰めた。
折角いい気分だったところを、歓迎できない話ですっかり害された。
どうしてこの人は、自分が嫌なことを今回に限ってこんなに強く粘り強く話すのだろう。
そう思って、顔を胸から見上げる。
そうしたら、思いの外【彼女】は優しい笑みを湛えていて、不意打ちに怯みそのまま固まってしまう羽目になった。

「強さっていうのは、弱さを知らなければ手に入れられないもの。あなたは、だから強くなれた。自分が弱いという事実を、誰よりも受け止め理解していて許せなかったから。……でも、それではそこまでなのよ。一人では、どうしても限界がある」

視線を重ね合う【彼女】の目に翳りが過ぎった。
【彼女】自身がかつてその限界を知ったということを、それを苦く思い出しているのだと察した。

「一人じゃ強くなれないことはないけど、限界まで来たらもうそこまでなのよ。ぶつかった限界の壁は、一人では破れない。……それでも、強くなりたい。そうだとしたら、どうすればいいと思う？」

答えることが出来なかった。
かつてこれからは一人で強くなって一人で生きて行けるようにするのだ、と誓った時からそうした考えをずっと持ち続けてきた。
だから、一人でやることに限界があるなら、それ以外のどんな方法をとればいいのか、わかるわけがなかった。
困惑した心境が顔に出ていたのか、それとも勘の鋭い【彼女】は自然と察したのか、

「わからないわよね。それでいいの。一人で強くなった人は、わからないものだから。私も、そうだった……でも、今はもうわかってる」
「何が、わかったんだ……？」
「言ったはずよ。弱くなるの。誰かの手で、一度意志を折られて……また、最初のゼロからスタートするのよ。もう一度、強くなるために」
「……それではまた、限界に辿りつくだけだ」
「心配要らないわ。その時……今度は、一人じゃないもの。あなたの意志を……弱くしたその人と、二人で強くなるのだから。二人でなら、その壁を越えることができるから」
「俺を、弱くする相手と……」

その言葉が理解できずにいると、【彼女】はクスリと声を小さくたてた。

「おかしい、自分から強さを奪った相手とだなんて……と思ってるのね。でもね、一人で強くなった人が弱くなる時というのは、誰かを好きになって心を許す時なのよ」
「誰かを好きになると、弱くなるのか？」
「ええ、そうして得る安堵が……隙を生み、弱さを生む。だからと

言って、相手を突き放してはダメ。それじゃぁ、前と何も変わらないもの。ここで間違えてはいけないのは、自分一人でその人を守ろうとすることではなく――――いっしょに、強くなろうとすること」

「相手と、二人で？　……無理だ、どっちかがどうせ足手まといになる」

「……何かそういう覚えがあるの？」

余計なことを口走ってしまった、と焦り、何処か苦い口を閉ざす。

そして、思い出し、気付く。

二人でいたこと。

そういう誰かがいたこと。

それが、今の自分の始まりにキッカケであったということに。

「嫌な思い出なのね。ごめんなさい、思い出させて。……でも、聞いて」

「……俺は」

【彼女】の言葉が上手く耳に届かず、それを良い事に自分の気持ちを吐露した。

「……なりたくなかったから、一人で強くなろうとしたんだ」

「……」

「……なのに、あんたはその俺に……そんなことを、言うのか？」

「……言うわ」

【彼女】は笑みも消して、まっすぐに見透かすような眼差しを向けた。

見透かしているのだろう。

そして、その上で酷い肯定をしたという事実が、ショックだった。

「……どうして」

「一つ、あなたは大きな間違いを犯しているから」

「まち、がい……？」

「そう。あなたが……たった一度の失敗でダメだと決め付けていること。あなた以外の人は、その人だけじゃないのよ？　それこそ、この世界には溢れるほどの他がいる。出会いの無い人生はないって言うように、出会うことがないなんてないくらい他人がいる……でも、貴方の隣を歩ける人は一人しかいないから、その一人をこの世界から見つけ出すのは……難しいのよね、とても」

不意に、【彼女】の顔が落ちてくる。

旋毛あたりに落ちて、そこに埋まった。

「難しいけど、諦めちゃダメ。たった一度の失敗で、一人になろうと諦めるなんて、私は……お母さんはそんなの許さないわ。そんな風に弱くなるのは認めない、あなたが弱くなるのは……誰かを好きになる時だけよ」

いつの間にか制約がつくられているのにも気にならず、黙って【彼女】の話に耳を傾けた。

「私の子供は、魅力的だからたくさんの人が群がるでしょうね、きっと。でも……あなたは不器用で運が悪いだから……多くの人が過ぎ去るのだわ」

「……なら、どうしろと……」

「痛くても辛くても、待つしかないわ。私も、あなたほどじゃないけど……待った。辛いということを忘れたくなるほど絶望した。いつしか、自分が何を待っているかも忘れても……でも、待つしか

ない。世界でたった一人、自分の前を過ぎ去らない相手を」
「そこまでして……一体何になるんだ。そいつから、何が得られるっていうんだ」
「孤独の終わりよ。そして――――二人一緒になったからこそ、開かれる道を」

夢のような話だ、と思った。
途方も無く現実味の無い話に、正直もう付いていけなかった。
【彼女】は、黙っている自分に顔を一度見合わせ、

「そうしたいって気持ちにならないのなら、今はそうすることがお母さんを安心させる一番の親孝行だってことくらいに思っておいて。あとこれも。――――弱くなっていいのは、誰かを好きになるときだけ」
「……わかった」
「約束よ」

一人念を押して、また人形にするようにギュッと自分に腕を回す。
こうされるのも悪くは無い。
だが、力一杯抱きしめられるのは、される方は割と窮屈なのだ。
この状態を脱するために、口実をつくろうとそれを口にする。

「リンゴは……もう、いいのか」

皿の上になっていたウサギのリンゴはさっきのが最後だったらしく、もう空だ。
それに当人の【彼女】も言われて気付いたらしく、それを一瞥して、こちらを見た。

「今度は私が向いてあげる。お返し」

「……俺は、血まみれたリンゴは味的にも見た目的にも食べたくない」
「愛情がこもっている証よ。ありがたく食べなさい」
「血の味がする愛情なんて生々しいものはいらない」
「……」
「……」

牽制し合うように暫し睨み合うような見つめ合いが続き、

「……剥いたもん勝ち」
「あっこらっ、あんたはあんたで大人の癖にどうしてそんなに子供っぽいんだっっ」

あっさり抱擁をといて、ダッと走り出したのは【彼女】の方だった。
手先の面では自分の性格上の面よりも遙かに不器用な手が、リンゴを赤黒くしにいくのを阻止する為に、その後を追う。

子供っぽい大人と大人びていた自分。
二人で些細なつまらない口喧嘩を繰り広げて、それに幸せを感じていた。
ひそかに、思っていた。

この日常は、既に過ぎ去らない人を隣に得たからこそ、幸せに思えているのだ、と。

思いを裏切る未来が、【彼女】との時間の先に待ち構えているとも知らずに。

◆◆◆◆◆◆

思えば、【彼女】の言うとおり自分は大人びたつもりでいても子供だったのだ。

一度味わった絶望を、慰めるように与えられた希望があまりにも優しく、心地よくて、忘れてしまった。

二度と絶望しないように、誰も信じずに済むように、一人で生きていこうという志を、【彼女】との時間を前に崩した。

楽しくて。

温かくて。

――――そして、幸せだった。

愚かな子供は理由もなくただ思い込んだ。

続く、と。

そして、気付かなかった。

あの時の【彼女】の言葉の中に、自分は過ぎ去らない、という意を表すモノはなかったという点に。

無邪気な子供は夢は叶うと信じていた。

先の未来でも、自分は今と同じことを相も変わらず望み続けているのだ、と。

そして、今、あの時の子供は――――――

「……ねっむい」

夢見るどころか、夢によって不眠症とされてぼやいていた。

「……くそ、またほとんど眠れなかった」

ぐしゃり、と前髪を握り掻く。

嘔吐するような気分で深い溜息が、意識しなくてもどっと喉奥から溢れ出た。

途切れ途切れの短い眠りのおかげで、ひどく気分が悪い。

もはや横になっているのすら苦痛で、たまらず上半身を起こす。

そして、再びそこに溜息が口を突いて出た。

眠いという怠惰の感覚は嫌というほど抱えているのに、肉体はうんともすんともそれに応えようとしないのだ。

そして、頭部は鉄になってしまったかのように重く感じ、打ち鳴らされたようにグワングワンと響きが頭の中で停滞している。

「っ……黒蘭め、絶対遠くで見てるな」

しかめっ面を遙か遠くに離れた距離をもったビルの上か何処かでこちらの様子をニヤついた笑顔で優雅に眺めている姿を想像し、不機嫌の沸点は一層上がることとなった。

憤るままにベッドから降りて、スライドドアの前に立つ。

「……太陽が黄色く見える……はぁ」

ほぼ不眠のまま迎えた朝空は千夜の気分にひきずられることなく

清清しく晴れていた。
腹立ち紛れと眩しさに、力任せにカーテンを引っ張り、外光を遮断する。

「……ようやく、眠れたと思ったら懐かしの思い出の夢に邪魔されるとは、な……」

座り込みたいという衝動を抑え、ベッドに思い身体を引きずり戻り、スプリングの利いたその上に倒れこむ。
一度動いたのがよかったのか、横になれば少し良くなった。
天井を無言のまま見つめ、僅かな眠りの中で見た夢を思い出す。

「……弱くなった方がいい」

そう言われたのは、もう三年も前のことになる。
共にいた時間は、一年にも満たない僅かな一時でしかなかったのに、【彼女】のことは、その言葉と共に、こうして夢に反映するほどの深く自身の中に刻み込まれていた。

「……そうなるのは、誰かを好きになったときだけ、か」

それも、己の前を過ぎ去らないたった一人にだと言っていた。
千夜は思い出し、思ったそれらの言葉を嘲笑した。
馬鹿馬鹿しい、と。

「無理だよ、”お母さん”」

あの時、自分は孤独の終わりの中にいた。
あの時、自分は開かれた道を歩いていた。
それは何故なら、

「……過ぎ去らない人に過ぎ去られたら……どうしようもないじゃないか」

【彼女】の言うとおり、自分の前を何人もの人間が過ぎ去っていった。

陽気で子を持ちながら、自分と同じく血染めの道を歩いていた女殺し屋。

ヤクザの舎弟に身を落としながら、それでも純粋さを失わなかった激情家の酒飲み仲間。

凄惨な人生の中で、狂った飼い主に対する愛を信じた無邪気な娼婦。

そして、馴染めなかった日常という世界で、初めて異性として好きになった少女。

様々な多種多様の人間に出会い、別れた。

そんな繰り返しをした後に彼らを思い返しても、自分の中で出る結論はやはり変わりはしなかった。

追憶という動作をすれば真っ先に出る。

三年の年月が経とうとも記憶の瑞々しさと鮮明さは少しも衰えない。

知りえるはずのない”母親”という存在として記憶となって自身の中で佇む【彼女】だ。

【彼女】だけが、自分の隣を歩める誰かであったという事実。

そして、【彼女】が過ぎ去った時に自分の幸せも二度と触れえぬものとなった。

「……だから、この先あるのは……違うんだよ」

喉を絞るように出した声と共に、目を閉じる。

今の何かから目を逸らすように。

「……あいつは、違う」

二日前、自身が逃げるように家から立ち退った原因となった男の残影を脳裏から掻き消すように両手で目を覆い、否定を吐いた。

自身の心を揺さぶるもの全てを受け入れまいとするように。

十分後に否が応にも受け入れなければならないモノに備え、短い無想の時間に浸った。

［七拾参］　いつかの夢（後書き）

メリークリスマス。いやむしろ、メリークルシミマス（余計なことをなんとかクリスマスまでに更新が間に合いほっとしておりますよ。クリスマスという行事は実はこの本編においてとても重要な関係を持っています。
いや、物語そのものではなく、とある人物にです（誰だろうか

ところでこのイベントを終えると必然とやってくるのは年の暮れです。大晦日です。
天海は去年同様、寒い雪国の実家へ帰るのですよ。
正直、お年玉と豪華なおせち料理ぐらいしか楽しいことないんだが、仕方ない。決まりごとなのだ。車で五時間かけて行くにしてはメリットとデメリットが割りに合わねぇのだとしても。まぁ、今年は新幹線でとのことで正直安心しているがね。

そういうわけで、年が明けて帰ってくるまで当分更新できないのです。
あと一本くらいはアップする……したいのですが、出来なかったら来年また会いましょう。

ちなみに補足すると、今回から『終』の部分が始まっているのです。
千夜、家にいません。
その理由は次回に。
さいならー。

【七拾四】　変動の昼時

最近、己の周囲は目紛しく変わったと、久留美は思っていた。
現実では在り得ないような異常な経験を身に刻み込んだというのもある。
そうなる原因となった人物と友人関係を持ったのも然り。

そして、

「おい、久留美」

不遜な態度でぶっきらぼうにかかる声があった。
ああ、またか、と思う。
己を少なくとも自身に何か用があって、この男に声をかけられることはない。
過去のスクープの件の因縁から、二度目はないと言わんばかりに警戒されている。
久留美自身も、向こうも同じ事を思っているだろうが、この人物とはどうにも反りが合わない。
スクープのネタにでもならない限り、近づくことは滅多に無い。
しかし、最近それも『ある人物』を間に挟んで変化しつつあった。

「……何よ」
「アイツが何処に行ったか知らねぇか」

このやり取りも三度目になるな、と聞いた台詞に対してそんな感想が出た。
一昨日、そして昨日とも今と同じ質問をされていた。
アイツという三人称が誰を指しているかもいい加減考えなくても

わかる。
わかってはいるが、
「……うーん。アイツって言われても……どいつ様？」
茶化すようにしらばっくれてやると、そいつは苛立ちを隠そうともせず、
「てめぇと遊んでる暇はねぇ。知ってんのか、知らねぇのか。簡潔にイエスかノーで答えろ」
初日、そして昨日よりも声の凄みが増していた。
どうやら不機嫌指数は上がる一方であるようだ。
そのゲージが現在何処までなのかは、顔の凶悪さでなんとなく察することが出来る。
これ以上遊ぶと、あのスクープの時と同じようにマジで殴りかかられるかもしれない。
あの時は親友の早乙女昶が止めにかかったから良かったものの。
そろそろ潮時か、と遊び心に制止をかけ、
「……ノー。四時限目終わると同時に飛び出して行ったきり。こっちには帰ってきてないわよ」
「……そうかよ」
それだけ言うと何の未練も見せずに、男は踵を返すが、
「……」
ふと立ち止まる。

掃除用具のしまわれたロッカーの横で、拳を握ったかと思えば、

「――――っっ！」

殴った。

金属独特の殴打音が教室に響き、誰もがギョッとした目で一瞬振り返る。

当人はそんな視線も気にせず、荒く息を吐き出してそのまま乱暴にドアを閉めて教室を後にした。

あとに残ったのは、拳大の陥没が出来たロッカーと収まりゆく喧騒のみ――――かと思われた。

「……――――もう、行ったわよ」

不意に久留美が上げた声に何人かは訝しんだ。

久留美はロッカーに向けて声を放っていたからだ。

その答えは、すぐに明らかになる。

「……行ったか」

声と共に内側からロッカーの扉が開いた。

そこから出てきたのは、出て行った男が探していた探索の目標たる人物であった。

その人――――千夜は用心深くドアを凝視し、ようやく安堵したように力を抜いて頭を垂れた。

その光景を半目で見つめながら久留美は、

「本当に、何やってんの……あんた達」

二日間溜め込み続けた疑問を呆れた様子で吐き出した。

◆◆◆◆◆◆

すっかり憔悴して自分の席に戻り、机の上の顔を伏しながら千夜は思い返した。

こうなることとなった全ての始まりは、三日前の騒動の後の帰宅からである、と。

ドアを開ければ、黎乎に告げられた衝撃など彼方に吹っ飛んでしまうような更なる展開が出迎えた。

朱里がいつものように玄関まで駆けてくる、までは普通であった。問題はその後をついてきた”者”だった。

その姿を確認した後、何でお前が、と怒鳴り言及した。

自らの自宅に帰ると言っていたはずの玖珂蒼助は、その理由を言葉で示すまでも無くリビングで絶賛放送中となっていた、とあるマンションの火事沙汰を取り上げている夕方のニュースを見せた。

その現場は少なからず見覚えのある場所であった。

成り行きとはいえ、一度は訪れた蒼助の自宅のあるマンションであった。

んな馬鹿な、と唖然とする千夜の耳に付け足すように、当然世話になるぜ、と言葉が入った。

『実家があるだろう！』

『帰れるか、何で一人暮らししてると思ってんだ！　察しろ！』

『三途のところへ行け！』

『もう行ったわい！　そしたら泊まりは有料だとかぬかしやがったぞ、あの女っっ』

既に他の手は尽くしたと主張し、

『つーわけで泊めてくれ』

寧ろ泊めろと言わんばかりの、全然頼む側の態度とは思えない不遜な態度で請求した挙句の果てに、

『断るってんなら、玄関の前で、何で俺を捨てたんだぁぁっ！と夜中の間ドア叩き続けてやるから』

といった感じに脅しときた。

いつの間にか地位の優劣が逆転している中で、千夜は蒼助の要求を呑まざるえなくなり、同居生活は続行となった。

しかし、これが皮切りとなって事態はどんどん千夜にとって良く無い方向へと転んで行く。

『野菜嫌い』

『やぁー！　だからって朱里のお皿に乗せないでよ馬鹿ぁっ』

『悪ぃ悪ぃ。じゃぁ、お前の肉もらってやるよ』

『わーんっ、姉さぁぁん！』

『……姉さんのやるから泣くな』

蒼助の傲岸な振る舞いで騒がしくなった食卓のおかげで、その日千夜は野菜しか食べれなかった。

更に風呂では、

『やー、今日は本当いろいろあったぜぇ……こんな日は熱い風呂に入って何もかんも流しちまうに限るぜ』

『……構わんが、俺が入り終わった後にやるべきことだ

な』
『まーまー』
『とか言いながら後ろ手に鍵を閉めるな――っっ！』

トドメは夜中に眼が覚めたらいつの間にかベッドに潜り込まれていたという事態だ。
我慢が限界点に達した千夜が、実行に移した行動は、

『お前がどうしてもその奇行を治める気がないというのなら……』

俺が出て行く、と。
そう一方的に言い渡して家を飛び出したのは、もう二日前のことでホテル巡りは今日まで続いている。
そして、まともに寝ていない日々の真っ只中であった。
否。

眠れないのだ。

昔からの体質だった。
自分の臭いが染み付いた――己の領域として心身認めた空間でしか安心して寝付けない。獣じみた性分だと自分でも思うが、どうにも生来のものなのか、一向に直せなかった。
東京に上京したばかりの頃にも、不眠に悩まされたのが今では懐かしい。
学校で眠れなくても、せめて休息の時間を得れればいいと思っていたが、現実はそうは優しくも甘くもなかった。

学校では蒼助の追跡が待ち構えていた。
授業時間を除き、休み時間は完全に蒼助の目を掻い潜るために消費される。

日に日に自分を追う蒼助の目がギラギラと凶暴性を増していくのを、二日間の間に千夜は確信として得ていた。
捕まったらアウトだ、
そんな本能的な危機感に背中に押されながが、逃亡生活を続けていた。
その中、蒼助とはまともな会話はおろか挨拶すらもう随分交わしていない。

「……やはり、どう考えてもおかしい……何で俺が出て行って逃げているんだ。そもそも……」
「何ブツブツ呟いてんの？」
「……何でもない」

久留美の言葉に、無意識のうちに”素”で愚痴を漏らしていた口を閉ざすが、それでも溜息だけは抑えることが出来なかった。
千夜は己の中で溜まった許容量を越える不満と闘う最中に、それを観察の目で見ていた久留美によって、

「……突然、直球で聞くけど、アンタたちってさぁ」
「……何だ」

「――――――付き合ってるの？」

平然と投げ込まれた爆弾のおかげで、ストレスに悩む思考を吹き飛ばす羽目になった。

「……だ、れ、と、だ、れ、が……だ？」

人目のあることから怒鳴り散らしたいのを堪えるせいか、大分低い声が絞り出てきた。

そんな脅迫じみた千夜の態度に、久留美は動じるどころか遊び道具を見つけたように目を細めた。面白そうに、だ。

「アンタと蒼助に決まってんでしょ。まぁ～、休日明けてからというものの随分と関係が進んでいるようじゃない」

「あれをどう見て関係が進展した思えるんだっ！」

「待てよハニー、捕まえてごらんなさいダーリン……を全力疾走仕様にしたら、見えるわよぅ充分」

「そんな暢気なやりとりに私は命懸けの危機感を覚えたりはしないっ！」

「なぁに言ってんのよ。一つ屋根の下で一緒に暮らしてるなら危機感も何も……」

「――――――何？」

聞き逃せない言葉が久留美の口から出てきた気がした。

気のせいであれば、などと一瞬願ったが、

「あ、やばっ……」

しまった、という失敗を顔に丸出しにして口を押さえる久留美が千夜に確信を与えた。

サッと血の気が引いていくのを生々しく千夜は感じた。

身を引いた久留美の胸倉を衝動的に掴み、

「……おい、お前何故それを」

「え……マジなの？」

「――――っ！」

はめられた、と気づいた時には既に時遅しであった。

実に秀逸な演技を駆使しトラップ罠を仕掛けた張本人は、強かに

笑っていた。
ゾクリ、と嫌な予感が無視しようがないくらいに千夜の背中あたりで自身を主張する。
予想も許さない得体の知れない恐怖を沸き立たせる久留美は、
「ふっ……カモがウマイこと引っかかってくれたわよ――――――みんな」
「み……っ？」
意味を理解し終えるよりも周囲の変動の方が早かった。
久留美の掛け声の瞬間、教室に存在していた全ての生きとし生ける者が一斉に活動を開始した。
クラスメイトが一人残らず千夜にその視線を向けた。
集中するそれに対し怯んだことから隙が生まれ、
「さ、終夜さん」
「行こうか」
いつの間に背後に回ったのか、両脇の下から二人の女子生徒の腕が拘束として千夜の両肩の固定に入った。
あっという間の出来事に唖然とする暇もなく、
「食堂はどうする？」
「俺たち男子が先に行って占拠しておく。女子一同は終夜さんの護送に専念してくれ」
「了解。それじゃぁ、そっちは頼んだわよ。――――――さて」
出て行く男子一群を背に、久留美は女子一同に向かって高らかに宣言する。

「進級初の我らがDクラスの活動よ。どんな事であろうと、最初が肝心。失敗はどんな理由であろうと例外なく許されないわ。よって、一同協力して任務にのぞむのよ。
――――返事はー？」

イエス、イエス、と各人から挙手が上げるを満足げに見届け、

「OK。――――それじゃぁ……出撃！！」

――――意気揚々とした様子の２－Dの一同によって平穏な昼休みは、一部で姿を変えていく。
日常の中で起きる”非”日常的な変動に千夜は、

「な、何なんだこれはぁぁぁぁぁぁぁぁ――――っっ！！！」

当然、この包容し難い事態に抗議をあげたのだった。

［七拾四］　変動の昼時（後書き）

新年、あけましておめでとうございます。
今年はトイレ入っている間にカウントダウンを見逃し、年を越したことに十分過ぎて気づいたマヌケの天海です。
年の暮れも明けても、食って食っての日々が続く帰省期間でございます。
ちなみに何を食べたかというと、

・寿司（老舗のカウンターで。無論、高級）
・忘年会のご馳走（あまりの多さに翌日も食べる羽目に）
・料亭から取り寄せたと豪華おせち（伊勢海老乗っかってた。その他いろいろ凝った一品。しかも美味）
・年越し蕎麦（十二人前。しかもおせちをたらふく食った後である。死ぬ）
・外食でホテルの中華料理店（これがまた親父や叔父がたくさん頼むのである）

……。
太るな、というのが無理だ。
金持ちがデブる理由は金があるからであるという簡単な結論が叔父の体型で証明されている。
帰ったら、絶食だなぁ……（遠い目

正月話はこれぐらいにして。話を変えて新年に向けて何か言いましょうか。
とりあえず、今の連載である鮮血ノ月を今年こそ終わらせることですよね。目指せ四月完結。
去年もそんなこと言ってただろー、なんて聞こえませんよ私は。

それでは今年も鮮血ノ月をよろしくお願いします。

【七拾伍】　天女の置き土産

自らの教室で２－Ｄのクラスメイト達が動き出したほぼ同時刻に、蒼助はそんなことは露知らずで屋上にいた。
教室を出た後、追跡目標の千夜の捜索は一旦諦め、煮詰まった苛立ちを昇華すべく休息の場所を求めてここへ来たのだった。

金網の柵まで歩み寄り、背中を寄りかけて空を見た。
お世辞にも爽快とはいえない蒼助の心情に対するあてつけの如く四月の空は晴れ晴れとしていた。
気晴らしに、と見晴らしのいい場所へ来てみてが、溜まった鬱憤は晴れるどころか返って煽られるばかりな気がした。

ガシャンっと乱暴に少し浮かせた背中を金網にぶつける。
しかし、その荒い動作は蒼助の苛立ちを晴らすことは出来なかった。

「……今日で駄目なら、これで三日目か」

三日前、蒼助は少し悪ふざけが過ぎて千夜と拗れた。
その拗れが三日と続く千夜との仲違いに発展し、休みが明けて学校が始まっても千夜は蒼助に会話させる隙すら与えず、避け続ける。
埒の明かないこの追いかけっこに不満を溜めているのは千夜だけでなく、追う側の蒼助とて同じことだった。或いはそれ以上かもしれない。

もともと、蒼助は短気な性分である。
物事が順調に進展しなければ、すぐに苛立ち、それがわかりやすく顔に出る人種だ。

苛立ちとは人から冷静な判断力や精神を蝕む。
最初は己が悪いと思って謝ろうとしていた蒼助の思考は、次第に理不尽な怒りに変わり、それぐらいのことで何でここまで避けられなくきゃならんのだ、という逆ギレ思考に変貌を遂げていった。
そして、今は開き直り上等な具合とまでになっていた。

「ちっくしょ、あのアマ～……今日という今日は縛ってでも絶対にとっつかまえて家に連れ戻しちゃる」
「――――――ナニ麗らかな昼時に物騒なコト口走ってんだ？」

危険な眼差しで野望に燃える蒼助の耳に、聞き覚えのある声が響いた。
声の方を見やれば、屋上の出入り口の後ろから蒼助が知る人影が現れた。

「蔵間さん……？　何してんすか、そんなところで」
「昼ときたら俺には、コレだよ、こーれ」

と、言いながら歩み寄ってくる蔵間は、指先に挟んで見せびらかしてみせたのは先端から煙が立つ一本の煙草であった。
どうやら、一服中であったようだ。
再びそれを口に銜え直しながら、

「しっかし、お前のおかげでここはお前以外のヤツがほとんど”来なくなった”からなぁ。今じゃ、コレするには絶好の穴場だぜ。ありがとよー」
「……ンなことばっか言ってっから、教員の古株連中から睨まれんだぜぇ？」
「ハッ」

それがどうしたとばかりに、蔵間は声を立てて笑う。
この枠に嵌らない姿勢が、人の好意を集める。
蒼助も例外ではなかった。

そういえば、と思い出す。

この屋上で、入学して間もない頃に当時この場所を取り仕切っていた上級生達と争い、結果全員を病院送りした時も、庇ってくれたのは蔵間だった。
無論、最初はただただ驚いた。
国家機関の総帥たる恩師が、入学した先の高校で教師をしているなどと想像するわけもなかった。
学園の理事長と旧知の仲らしく、蒼助が入学する一年ほど前から雇ってもらっていたという。
奇妙な偶然の再会の後、己の差し伸べた手とも言える組織の辞めた蒼助に、蔵間は少しも態度を変えず接してきた。

『よぉ、またよろしく頼むぜ。ただし、学校じゃ先生だからちゃんと敬えよ?』

屈託なく笑う姿に、あの時、蒼助はまた救われた。
その時、ようやく、だった。
心の何処かで張っていた意地が溶けてなくなり、彼に対する敬意を認めたのは。
そうして、蔵間は『お節介な兄貴気取り』という認識から、蒼助にとって数少ない気の許せる大人として見れるようになっていった。
いつかこうなりたい、と男として羨望を向ける相手とも。

「いっつも言ってんだろ。睨みたきゃ睨ませときゃいいんだ。連中の言う”良い教師”ってのは、俺みたいな”悪い教師”がいなきゃ目立たねぇだろ？」
「くっ、違いねぇな」
銜えた煙草を一度大きく吸い、肺に溜めた煙を吐き出す蔵間。
「ふぅー……ところでよ」
「何だよ」
「最近お前、ウチの転校生相手に所帯持とうって話は本当か？」
所帯、という部分に蒼助はまずガクッと来た。
そして、一歩引きながら、
「な、何で知ってんだ！？」
「わからいでか。見かけるたんびにお前ら追っかけっこしてるんだから、気づくなって言う方が無理あるだろーよ」
記憶を手繰れば、確かに最近はそんなことばかりだった。
蔵間の手が、蒼助の収まりの付かないツンツン跳ねた髪をクシャクシャと掻いた。
「まぁ、季節もちょうど春で、お前にもそーゆーのがやってきたわけだ。俺は嬉しいぜ、下半身は風来坊だった弟分がようやく身を固める気になったんだからよ。がんばって、落としな」
「だぁっ、よせって。……それが出来たら苦労しねぇよ」
「あん？」
「なんでもねぇよ。……俺にも、一本くれ」
「教師に向かって……と言いたいところだが、今回は小言は無し

にしてやるよ。俺からの祝いだ。ほれよ」

気前よく渡されたそれに、差し出されたライターの火を掠める。

「くは。久々だぜぇ……」

久しく感じるその独特の不健康な感覚に身悶えする蒼助に、蔵間は目を丸くした。

「何だよ、ご無沙汰だったのか？　何でまた……」
「今、ちょっとゴタゴタしてるんで。買う暇も吸う暇もねぇ」
「仕事か？　煙草買いに出る暇もねぇくらい厄介なもんなのかぁ？」
「仕事じゃねぇけど……まぁ、厄介っちゃー……そうだわな」

溜息混じりの煙をブハーと吐き出す。

「三つくらい同時進行しなきゃなんねぇのよ、これが。しかもどれもかなりの難関モノでさ」
「そりゃ厄介だ」
「……そんで、そのうちの一つが他のと違ってちっとも進まねぇ。つーか、わかんねぇ」
「わかんねぇ？　何がだ？」
「……クイズ。調べようにも曖昧過ぎて何の資料で調べりゃいいかわからねぇし。考えたところで俺には検討もつかねぇ。かと言って、後回しにしようにも気になって仕方ねぇんだよ……くそ」

苦悶に顔を歪ませ、前髪を荒々しく掻く。
口にしたらまた思い出してしまった。

「……クイズねぇ……それってどんなだ？」

「由縁ある雑歌。これだけじゃ……」
「由縁ある、雑歌……――――――万葉集か？」
「はっ！？」

ポツリと、重要なことを呟いた蔵間を蒼助は思わず見入った。
蔵間はニッと笑い、

「万葉集、巻十六【由縁ある雑歌】。俺の担当教科、言ってみろよ」
「……今初めて、教師って人種を尊敬しましたっす」

散々悩んでいた問題をこうもあっさり解決されても微妙な気分だが、とまでは出ないように口を絞った。
ようやく、解決の糸口を掴みかけた蒼助はすかさず、

「で、それって何なんだ？」
「竹取物語の原型ともいうべき竹取説話が所載されている一巻のことさ。まぁ、原型云々には否定意見もあるんだけどよ」
「竹取物語って？」

その問いの瞬間、蔵間の表情が変わる。
落胆と呆れが混じったような表情であった。
半目を蒼助に向けたまま、

「お前……中学と高校で習う教材だぞ。つーか、俺、一年の時に教えたんじゃないですかね、居眠り常習犯」
「……あ、はは」

無論、覚えているわけがなかった。

「ったく、それでよく進級できたもんだなぁ……〟なよたけのか

ぐや姫”、つったらわかるだろうが」
「あ……かぐや姫。そうか……」
これが、黒蘭の出した問題と自分の疑問の答えなのか。
しかし、納得しかけたところで新たに疑問が蒼助の中で浮上する。
そうだというのなら、千夜の呪いがかぐや姫とどんな繋がりがあるというのだろう。
沈黙する蒼助を見て、蔵間はその様子をどう捉えたのか、
「……おい、まさか……かぐや姫がどんな話かも忘れたなんていうんじゃなかろうな」
「いや、まさか。えーと、じーさんが竹取りに行ったら、竹が光ってて、それを切ったら中が女の子が出てきて。それを持ち帰ってばーさんと育てると……紫の上計画？」
「……」
「じょ、冗談！　だからそんなカワイそうな子供を見るような悲壮な眼差しを俺に向けるなぁぁっ！」
冷たい視線に耐え切れず頭を抱えて絶叫する蒼助。
そんな出来の悪い教え子を捨て置いて、蔵間は話を進める。
「……まぁ、日本最古の物語と名高いこの竹取物語だが……なぁ、知ってるか？」
蹲ってガタガタ震えていた蒼助に蔵間は唐突に言い切った。
「――――この話、”実話”なんだぜ？」

◆◆◆◆◆◆

兄貴分の発言に蒼助は面食らった。
突然何を言い出すのだろう、と訝しみ、

「……なんか、辛いことでもあったのか？」
「言ったな、てめぇ後で覚えとけよ。……言っとくが、俺はマジな話してんだ。考えてもみろ、俺たちの世界は表の世間が有り得ないと否定する超常現象や怪奇が”有り”と定義されるナンデモござれな代物だぞ？　だったら、どう考えても作り話しか成りえないモノが本当にあった話としてあっても不思議なことは全くないだろうが」

妙な説得力がある蔵間の言葉に、考えを見直し、

「……じゃぁ、かぐや姫は本当にいたってのか？　月から地上に降りてきたってのも？」
「聞いた話に寄れば、多分な」

説得力があるときたら、今度は曖昧ときた。
拍子抜け、少々肩を落としながら、

「……どっちなんだよ」
「俺を責めるな。千年も前のことに起こったことに確証つけろなんて無茶な話だ。そもそもどんな実話だって時が過ぎちまえば昔話に

も言い伝えにもならざるえねぇものだぜ。微かな確証の素になるとしたら、お前んトコの【スサノオ】だろうが」

言われてみて、蒼助は気付いた。

実家にいるあのスキンヘッドも、伝承の中に存在する者であったのだ。

あまりに現代に馴染んでいたことと、その装っている外見のギャップから最近ではすっかりそのことを忘れてさえいた。

千年よりも遙か昔の日本神話のカミが現代にいるくらいなのだから、蔵間の言うとおり、幻想に満ち溢れた竹取物語が実在の話であってもおかしくないかもしれない。

そうして、蒼助の中で疑念は段々と薄れてゆき、

「……まぁ、そう考えるとアリかもしれねぇな」

「そう深く考えなくてもいいから、次行かせろよ。ここからが、面白いんだから」

「何だよ、面白いって」

「教師としては是非とも知ってほしい”正規の”竹取物語さ。実のところ、一般で知られている竹取物語ってのには一部脚色が入ってな」

「……脚色？」

「まぁ、グリム童話みたく年齢規制にひっかかるというよりは、一般人に受け入れやすいように一部を安易な形に置き換えたくらいなんだけどよ」

「……で？」

促すと、応えるように蔵間は先を続けた。

「元は発生がこちら側なだけに、かなり伝奇な話だったんだなこれが。一つは――――帝や男たちが、何故かぐや姫を求めたかについ

て、だな」
「絶世の美女だったから、じゃ」
「ここでまず違うのは、かぐや姫が天人であることが最初から知られていたという点だ。そして、それを知る男たちの目的もまた違っていた」
「……？」
「――――天女は奇跡を引き起こす力を持っていた。だから、時の権力者であった男たちは欲したんだ」

奇跡？と疑念混じりに呟けば、応えはすぐに返ってきた。

「まぁ、それも一種の異能だったらしいが……いや、異能なんて言葉で片付ける程度のレベルじゃねぇな。そのあたりは具体的に記されていないらしいが、神の御業と呼ばれるくらいだ。権力者どもには、涎ものだったんだろうよ……その奇跡とやらには、”不死”だの”天人の加護”だのを匂わされているしな」
「不死……加護……」
「その通りだとしたら、欲深い連中には魅力的な品だろ？」

煙を空に描きながら、

「話にもあるあの無理難題もそうだとしたら、納得がいくってもんだ。必死だっただろうな、道具にされる運命から逃れようと」

道具、という言葉に蒼助は己の心が過剰なまでに反応したのを感じた。

人から”道具”に貶められる。

数日前に盗み聞いた黒蘭の科白の中に、含まれていた言葉だ。

まさか、と蒼助の脳裏に確信の前兆のようなものが過ぎる。
だが、そう判断するにはまだ材料が足らない。

「まぁ、そんな時だ。月からの使者が来た。これ以上に無い、まさに天の救いなわけで。かぐや姫は月に帰っていきましたとさ……
……一つ、置き土産を残して」
「置き土産？」
「物語では、不死の薬と天女の羽衣とされているが……事実はモノではなかったらしい」
「モノじゃないなら、何だってんだ」

問いに対する反応はすぐには返らなかった。
不思議な沈黙が間として漂い、そして、

「――――――”呪い”だ」

――――カチ。

それを聴いた瞬間、まだまだ未完成なパズルが急激な速さで空いたスペースに次々とはめ込まれていく。

「かぐや姫が残していったのは、呪いだった。だが、それは権力者たちに向けてのものじゃなかった。……自分の【代用品（みがわり）】をつくる為のものだった」
「身代わり……って」
「地上に放ったその呪いは、この世界の何処か、誰か一人の女に憑

いてかぐや姫と同じ力を与えるもんなんだそうだ」
「何で……そんなもんを」
「わからねぇ。……後に残された育ての親であるじーさんばーさんに責任の追及がいくことを防ぐためか、それとも……自分と同じ苦しみを他の女どもにも与えてやりたかった性悪な考えなのか。どっちにしろ、かぐや姫はとんでもねぇ争いの火種と呪いを受けた身代わりの女に災難を残していきやがった……とさ」

言葉の途切れ。
どうやら話の終わりを示していたようだ。

「まぁ、これが竹取物語……本当のかぐや姫のお話だ。勉強になっただろ？」
「……実話ったって……大昔のことだろ。なんかピンとこねぇよ」
「ああ、俺もそう思ってた。こっからそのかぐや姫の奇跡っていう部分だけ抜粋して、一つの伝説になってんだよ。……かぐや姫の呪いを引き継ぐ女を手に入れた者には、覇権と神女の加護を約束される、ってな。女一人にどんだけスケール盛り込んでんだよって……」
「……思ってた、って？」

過去形なことが妙に引っかかった。
それではまるで、今は信じているというように聞こえたのだ。
蔵間は蒼助のその素朴な疑問に答えた。
まずは、前置きだった。

「……最近、な。ひょっとしたら、マジな話なんじゃねぇかなって思うようになったんだ。かぐや姫が実話だって話も、もしあったら出来過ぎな伝説も」
「はぁ？」

「まぁ、聞け。近頃、降魔庁で東京から妙な思念波を拾うようになったんだ」
「思念波って……魔性の、だよな？」
「多分な。正確に言えば正体不明だが。……わかることといえば、どっかで強い力を持った奴がいる。そいつが、毎日毎日街のどっかで同じ思念を飛ばしてやがる。
――――――”かぐや姫、何処におられる”ってな」
「――――――」
「他にもいろいろかなり肉欲的なポエムを拾ったりしているが、真昼間から口にしたくはねぇな。ちなみに、何故かこの渋谷区に集中している。おそらく一体、じゃねぇな……最初はそうだったかもしれねぇが日に日にどんどん増えている。まるで……情報が感染しているみたく拡大してやがるよ……ん？　どうした？」

心此処にあらず、という言葉を表すような様子で視線を虚空に漂わせている蒼助を、蔵間が訝しむように眉を顰めた。

「おい」
「あ……何すか？」
「何ボケッとしてやがる」
「……いや、何でも……」

蔵間の追及に蒼助が言葉を濁した時、チャイムの放送が流れ、響いた。
昼休みの終わりを告げるそれを聞き、

「鳴っちまった」

何気なく発した蒼助のその言葉がこの場の幕切れの合図となった。

「次は何だ？」
「古典……って、アンタの授業じゃねぇか」
「……あれ、そうだったか？」
「しっかりしろよ教師……」

そう言うなって、とばつが悪そうな苦笑いを浮かべつつ、

「お前こそ、俺の授業くらいちゃんと出ろよ」
「へいへい」

蔵間はそうしてしっかり釘を刺して、歩き出した。
それをちらり、と一瞥して蒼助は背を向けた、が――――

「なぁ、蒼助」

不意に蔵間の声が背にかかる。

「引っ張るようだけどよ……もしもこの、竹取物語が実話だとしたら……なんとも救いのねぇ話だよなぁ？」

何故、と問う前に蔵間が答えを放つ。

「本物は月の使者に助けられて故郷という逃げ場があった。けど、代用品の女には救いの手も無ければ、逃げ場もねぇんだからよ……」

バタン、と重苦しい音が響く。

蔵間が今度こそ去った音だ。
響いた後に残るのは、蔵間が蒼助の胸に打ち込んでいったもう一つの釘だ。

打ち込まれた釘は、じわりじわり、と沼に沈むように胸に深く刺し込まれていく。
鈍い痛みが徐々に効いてきた。

『代用品の女には救いの手も無ければ、逃げ場もねぇんだからよ……』

先程聞いた時よりも、重く響く蔵間の言葉。

「あの女……このことが言いたかったのか？」

謎かけの果てに辿りついた答えは、事実の突き付けだった。
黒蘭が謎かけを通して蒼助に教えたかったのは、呪いの正体だけではなかったのだ。

代用品（かずや）の運命と、それ対して蒼助自身に何が出来るか。
課せられた五日間という期限にどれだけのものが掛かっているか。
蒼助はそれを今、痛感した。

一人の女の存在が、これほどまでに重いと感じたの初めてのことだった。

◆◆◆◆◆◆

「――――御苦労様」

職員室に教材を取りに行き、教室に向かおうと階段の広場へきたところに、蔵間の背後から声が掛かった。

何の前触れも予兆もないそれに、蔵間は驚かなかった。

相手が誰かはすぐにわかった。

「……あんたか。つーか、後ろから現れるっていうシチュエーション好きだな、ほんとに」

「キャラに合ってるからいいでしょう？」

恥ずかしげも無く言ってくる相手に蔵間はそれ以上突っ込まなかった。

これまでの経験上で無駄な労働であるとわかりきっていた。

「で、わざわざ俺に労いの言葉をかけに珍しくいらっしゃったんですか？

――――”理事長”」

とってつけたような敬語を繰りながら、蔵間は背後の女を振り返った。

腰まで伸びた漆黒の髪と豊かな胸を強調した黒いスーツをまとうスラリと伸びる肢体。

そして際どいミニスカ。

絵に描いたような『若い女権力者に扮する存在』を見た。

「それもあるけど……たまには、自分の経営する学園に来ないと職務怠慢じゃない？」
「実際に仕事してるのは、あんたの右腕だろうが」
今頃、目の前の女が怠った書類と切磋琢磨で格闘している秘書の巨男に憐憫の情を送っていると、
「……貴方は何も言わないのね」
「はい？」
「……貴方の弟分を巻き込んでいること」
先方の言葉に対し、蔵間は一息おいて己の意思を返答した。
「あいつは自分から行ったんだろ？　巻き込まれる、なんて無様な事にならなかったんならいい。部外者である俺が水を挿すような無粋な真似はできねぇし、する気もねぇよ」
「あら、あまり大事にしていないのね」
「大事に思ってるぜ？　だが、必要以上に過保護になるのはタメにならねぇ……だろ？」
返した言葉に、相手はクスリと笑い、
「どっしり構えているわね。〝あいつ〟とは違って……」
暈して口にされた存在に、蔵間は眉をピクリと動かした。
僅かな反応の変化を見逃さなかったのか、『理事長』はわざとらしく溜息をついた。
「同じ保護者でもこっちは過保護丸出し反抗心丸出しよ。まぁ、イジリ甲斐があるから別に特に文句があるわけじゃないけど」

「……何なんだよ、じゃぁ」

これじゃぁ反抗もしたくなるはずだなぁ、と”六年前から姿形が己の中で停滞している”もう一人の保護者に同情した。

それと同時に、出来るだけ意識しないようにと胸の内に押し込め続けていたモノを再度意識してしまう。

いかんいかん、と再び押し込めようと悶々とするが、いややはり、と考えを切り替え、

「……なぁ、俺との”約束”、覚えてるか？」

「もちろん」

言っとくけど私はした約束には律儀よー？と含み笑う。

「あと二日で全てが決まるわ。その時、約束通り……教えてあげる。――――この東京の何処かにいる貴方の”元恋人”の居場所を」

「……ようやく、か」

言葉にし、尚一層事実を感慨深く感じた。

「ま、貴方も自分の弟分に期待していなさい」

それを最後に返事は返ってこなくなった。

気配も、もう無い。

学園内の自分の部屋に帰って、自分の仕事を押し付けた相手をからかい倒しているのか。それとも何処かで”通常の姿”に戻ってフラフラしているのか。

俺にはどちらでもいいことか、といなくなった相手のことはそこで思考から切り捨てた。

「あと二日か……」

呟けば記憶が目の裏で一気に駆け巡る。

あの女との約束が始まったのはいつのことだっただろう。

考え、思い出す。あれはもう四年も前のことだ、と。

『あの日』を境に姿を忽然と消していた者は唐突に自分の目の前に現れ、話を持ちかけた。

『ねぇ、取り引きをしましょう？　簡単よ。貴方はただ、沈黙していればいい。静観していればいい。あのコという存在から目を逸らし続け、無いモノと己に言い聞かせ続ける。私からの要求はただそれだけよ』

取り引きの天秤に『あの日』に永遠に失ってしまったかと思われた己の最愛の者が掛けられれば、頷かない理由はなかった。

自分は結局、権力者ではなく只の男だったんだな、と躊躇無く了承したあの日の自分を振り返り、蔵間は苦笑した。

やっとだ。

念願の想いは、あと一歩で叶う。

「頑張ってくれよ、蒼助」

奇しくもその鍵を握る立場となった己の弟分に対するエールを口にし、蔵間は一度は止めていた足で再び階段を上り出した。

［七拾伍］　天女の置き土産（後書き）

気付けば一ヶ月も停滞していたことに冷や汗と土下座したい衝動に駆られている天海です、どうも（青い顔

三学期始まって二週間でテストという正気とは思えない学校の予定に挑み、ようやく二ヶ月という休息を＆ａｍｐ；＃２５４４５；ぎ取りました。

これで時間は確保しました。

あとは私の根性次第ですね（遠い目

本編ではようやく伝奇要素を出せたかな、と自己満足な展開を持って来れました。

一応、この作品伝奇って銘打ってあるけど今まで大してそういう匂いはなかったのではないかと思っていましたのでようやく自分伝奇書いてる？という感じになってきてホッと一息。

何か知らないところで別の人の期待も背負わされている蒼助。

実は裏でこの件に一枚噛んでいた恭ちゃん。

更に何気に学園の理事長だった黒いゴスロリ子。

竹取物語の実話説と、千夜の呪いの実態。

いろいろ詰め込んでますねー、今回は。

謎が明かされたようで、更に謎を呼んでいますね。

そう簡単には伏線は明らかにならない、鮮血ノ月。

次回は謎の究明から離れて、連行された千夜と２－Ｄ一行のいる食堂です。

蒼助と蔵間も合流します。

かなりはっちゃけると思う。

それではー。

【七拾八】　逃走の打ち止め（前書き）

逃げる
逃げる
誰か退路を教えてくれ

［七拾六］　逃走の打ち止め

そこは暗く保たれていた。
電気は全て消され、カーテンも全て閉められた。光を完全に遮る仕様なのか、外の明るい光が一切漏れてこない。
その部屋の中心に身を置き、椅子に座る千夜は、周りに軽く四十を越える人の存在する気配をイヤというほど実感していた。
そして、闇に隠れて入るものの目の前にも一人。
置かれた状況に色々突っ込みたいと思いつつ、とりあえず、暗がりの中で手前に置かれているであろうモノに手をつけることにした。
手探りで掴んだ箸で肉を掴み齧り、味の染みた下の飯を口に運ぶ。
吾ながら器用なものだ、と黙って租借していると、

「いい加減、吐いたらどう？　ネタは上がってんのよ――――終夜千夜」

何故フルネームで呼ぶ、と声の方に顔を上げる。
同時に、千夜のいる場所にだけスポットライトが当たる。
食堂にそんな設備があるはずもなく、何処からか持ってきたのだろう。
雰囲気（ムード）にこだわる連中だな、と呆れ半分でまた一口――――手元のカツ丼を放り込む。

スポットライトが再び点灯し、明るい場所を一つ作る。
今度は椅子からテーブルに立ち上がった久留美の姿だった。

「玖珂蒼助の自宅マンションが火事になった。そのことは調べるまでもなく誰もに知れ渡っていること。ここからは私が個人で独自のルートから調べ上げたことよ」

「……」

一々反応を示すのも面倒で、千夜は食べながら耳を傾けるだけにすることとした。

何せ相手は相当この作った空気に酔っているのだから、何を言おうと一層気分を盛り上げさせるだけなのだ。

食べているカツ丼も、お決まりパターンを狙って出された代物であった。

「まずここは最初に――――――その後、蒼助はあんたの家に住み着いている。いわば、事実上は同棲中、と」

その瞬間に口に入れたカツ丼がひどくまずく感じ、千夜は顔を顰めた。

初球から大インパクトを狙ってきた。

周りのざわめきを聞き流しながら、

「一つ訂正しろ。”同棲”じゃない、”同居”だ」

「ははん、一緒に住んでいること自体は否定しない訳ね」

「ネタは上がってると自分で言っただろうが」

即ち、否定は意味をなさない。

厄介な状況下でこれ以上無駄な労働は御免被りたかった。

「ちなみにアンタ達、同居前からもう随分とヨロシクしてたみたいじゃないのよ」

「……は？」

「まさか、学校休んで江ノ島でデートしてたなんてねぇ～……」

「ぐっ」

寸でのところで噴き出すのだけは阻止した。
さすがに驚愕せざるえなかった。
あの日の、自分たち以外が知るはずの無い出来事を、部外者である人間が調べ上げることなど不可能であるはずだ。
そう、自分達以外が知るはずが――――

「……久留美、お前は仕入れたその情報源は……何処のどいつだ」
「何言ってんの。ジャーナリストが命とも言える情報源を明かすとでも……――――っっ！」

本気に殺気を込めて視線を放ってやると久留美は思わず口を噤み、少々の躊躇を間に挟んで、

「……じ、実のところ私が調べたってわけじゃないのよね。昨日の夜にパソコン開いたら、メールボックスに匿名で情報がビッシリと書き込まれた一通があったのよ」
「……その匿名は」
「【黒井ゴス子】さん」

聞いた瞬間に、千夜の手の中の割り箸がバキリと圧し潰されるように折れた。
脳裏を駆けたその情報源と思われる人物の憎たらしいニヤリ笑いに向けての殺意によるものだった。

「まぁ、何処で私のアドレス知ったのかどーかは引っかかるけど、情報は妙に真実味があったから今日試しに粉かけてみたら……ねぇ？」

まんまと地雷を踏んでしまった、という結果が今のこの状態であ

るらしい。

「で、どうなのよ。観念して全部ゲロする気になった？」

勝ち誇った笑みを浮かべて、胸を張る久留美。

言い逃れの出来ない証拠の品々を並べられては、こちらに逃げ道はもう無いと確信しきっているつもりらしい。

千夜はそれを鼻で笑う。

詰めが甘い、と。

こちらには最後の砦となりえる切り札が手のうちに残されている。

「……久留美、こういう言葉を知っているか」

「なによ」

「――――黙秘権」

はうわっ！と妙ちきりんな奇声をあげて、

「ひ、卑怯者ー！」

「お前のえげつない手段には及ばんよ」

はっはっは、と高笑い、千夜は空になった丼を横に追いやりつつ、

「御馳走さま。おいしかった。……代金は誰が？」

「お、俺っす！」

「御馳走になった。ありがとう」

「こ、光栄っすーー！」

何故か胸に丼を大事そうに抱き込んで周りの人だかりに戻って紛れ込む男子生徒。

消えたその奥で打撃音やら呻き声が聞こえて来たが、とりあえず

右から左に流して済ませる事にした。
気にかけるべき問題は周囲を固める人の気配が息苦しいことであり、これに対し、

「……なんかエビが食べたい」

適当に呟いてみる。
すると、

「エビ！　エビを御指名だ！」
「おばちゃーん、特上エビ天丼をぉぉ！」
「馬鹿やろぉっ！　丼もの続けてどーするよ！！　エビフライ定食だ、エビフライ！　デッカいそれを口一杯に頬張って苦しげな終夜さんが見てぇ！！」
「てめっ、本人の前何を下劣なこと口走ってやがる！！　でも、俺も見てぇぜ畜生！」
「だぁああっ、どきやがれ邪魔だ！　次の貢ぎ物を捧ぐのは俺だぁぁ！！」

男子のほぼ全員が我先にと食堂の受け付けカウンターへと走り馳せ参じて行く。
これで大分周囲がスッキリしたな、と千夜は己の対策が出した結果に満足げに一息ついた。
その様子に呆気に取られていた久留美は、少しして表情を『呆れ』としてはっきりと表し、

「……あんた、猫被るの止めたの？」
「かったるくてそんな労働する気になれるか。第一、この反応を見る限りじゃ……殆どの奴らはひょっとして気付いてたんじゃないか？」

試しに女子集団一部に視線で同意を求めてみる。
あはは、と女子達はそれぞれ苦笑いをし、

「気付いてたけど……」
「でも、別にねぇ？」
「寧ろこっちの方がカッコイイってゆーか、言う事無しってゆーか」

互いの顔を見合い、そして千夜を見る。
キャーっ、と何故か顔を赤らめてはしゃいでいた。
意味が分からない。

「まぁ、このクラスは全体的に異常に適応性が高い……”普通”から大分ズレた感性の持ち主ばかりだからな。多少個性が飛び抜けても、ここでは”普通”で済まされるから浮かなくて済むから気にするなよ」

と、背後から現れたのは先程走り抜けていった男子たちの中で唯一その場に踏みとどまった男子生徒であった。
振り返ってみた顔には、見覚えはあった。
が、

「……お前、誰だったかな」
「さり気に容赦ないな。……まぁ、まともに話すのもこれが初めてだから無理は無いか」

さしてショックを受けたという訳でもないと男は振る舞い、

「早乙女昶。あんたに熱を上げている奴とは腐れ縁の仲だよ」

そう言われて千夜はようやく目の前の人物に対する記憶を確かに捉えることが出来た。

見かけたのは僅かではあるが、記憶にあるのはあの男の傍らにいる場面(シーン)ばかりであった。

「……悪かったな、これで二度と忘れない」

返事の中で、千夜はさり気なく『早乙女昶』という男を観察した。

想像(イメージ)した等身大の蒼助と対比すると、まず外見に派手さはない。

同じ短髪でも金にすら見える薄い髪質に対し、黒。

背丈(たっぱ)は蒼助のそれとタメを張れるほどの長身。

がたいの良さは若干上回っており、見た目と雰囲気で判断する上での精神面では蒼助よりも理性的に見て取れた。

美形と形容出来る蒼助に比べ、早乙女昶は整ってはいるものの悪く言えばこれといった見栄えは無い。逆に良く言えば精悍なものだ。

二人並べば、どちらかといえば蒼助の引き立て役として第三者に印象付けるだろう。

しかし、それは二人でいればのことだ。

こうして個人として認識をしてみると、早乙女昶は充分なほどに存在感の満ち溢れる人間だった。

目つきの悪さや雰囲気から来る蒼助の刺々しい雰囲気とは何処か異なる威圧感を感じさせる。

柄が悪いわけでもなく険悪な気配もなく、そう思わせる点では蒼助よりも人としての器は大きく広いかもしれない、と千夜はそこまで考えて観察を止めた。

「それで、早乙女昶……何で、ここにいる」

「エライ変わりようだな本当に。ここまで反転すると、いっそ受け

入れるしかないな……」
「答えになってないぞ」

祀からは、言葉とは裏腹にさして驚いた様子は感じ取れない。
ひょっとしたら、蒼助という例外を除けば、真っ先に気付いていたのかもしれない、と千夜は内心で一人思った。

「悪い悪い。まぁ……俺も同じ穴の狢の一人だ。何だか俺の腐れ縁の相方が最近、随分忙しそうなもんだからな。気になるだろ？」
「なるほど……残念だ。少しはまともに話せる理性の持ち主かと思ったら、野次馬の一人だったとは」
「そう言うなよ。我がクラス……いや、我が学園一の節操無しが一人の女のケツを追っかけ回しているっていうんだから、俺たちに限らず学園中の誰もが気になってることだと思うぜ。俺たちは、その代表みたいなもんだ」
「単なる好奇心に随分立派な建前を付けたな……お前、大方あの男のストッパーみたいなものだろう。ぶん殴るなり何なりして止めてくれたら大いに助かるんだがな」
「さすがの俺でもあれは無理だ。今までに見ない暴走っぷりだ、ストッパーの方が壊れちまうよ」

拉致の明かない会話に、千夜は少々眩暈を感じ、こめかみを押さえた。

「あら、疲れた顔して。気付けにレバニラでも頼もうか？」
「いらん……レバーは嫌いだ」

後ろの方で「おい今の聞いたか、レバーが嫌いだってよっ！」とやや興奮気味の声が沸き上がったが、気にかける余裕は無かった。

「私の体調を気遣ってくれるなら、一秒でも早くこの場から開放してくれないか」
「それは却下」
「何か知りたいならアイツの口を割らせればいいだろう」
「あの暴走機関車に声かけても無視されるのがオチだもの。だから、あんたにこうして尋問してんでしょ」
「……」

あそんでやがる、とニヤニヤ笑う久留美を見て、青筋を浮かべる。

冗談ではない。
散々掻き乱されて、これ以上好きにさせてたまるか、と千夜はついに反抗心に火を灯した。

「さぁ、観念して私たちの暇つぶ……尋問に応じなさい！」
「うっさい。知るか。勝手に騒いでろ。私は寝るからな。起こしたら、その眼鏡を叩き割るからな――以上、オヤスミナサイ」

それだけ一気に捲し立てて千夜はテーブルの上に突っ伏した。
ストライキを表明しているつもりだ。

「あ、ちょ……って、本当に寝てるし」

久留美が耳を寄せれば、腕枕に突っ伏した下からは寝息が聞こえる。
演技でもなんでもなく、宣言どおりに行動を千夜は実行していた。

「のび太並だな。五秒も経っていないぞ」
「なんかホテル渡り歩いて寝床にしているらしいわよ。家に帰んないで」

「ホテル渡り……まぁ、原因は一つしか考えられないがな」
「本当……何してんだか……」
怖いもの見たさで千夜の旋毛を指先で突付く久留美に昶は、
「……で、明日もこれで行くのか？　さすがに連日でやるのはいろいろキツイんじゃないか？」
「そんなこと言ったって……この二人がいつまで現状維持するか次第なんだから仕方ないでしょ。やっぱり、”今の問題”に対して明らか諸悪の根源っぽい蒼助をふんじばってくるしかないかしら……」
呟いた時だった。
スポットライト以外の光の無い部屋に突如、彼らの背後で外部からの光が僅かに差し込む。
開いたスライドドアからであった。
「ただいーまー。恭ちゃん先生に言うてきたでー……って、なんやねんこの暗さ」
「あ、お帰り都築ちゃん。電気、つけてくれない？」
了承の返事代わりに七海は点灯という行動で返した。
部屋が一瞬にして通常の明るさを取り戻していく。
「恭ちゃん、なんて？」
「今回だけ見逃してくれるって。ただし、ツケとして課題いっぱい出すっちゅーてたで。ちゃっちゃと問題解決しろ、やと」
「……仏の顔も三度まで、とはいかないか、さすがの恭ちゃんでも」
溜息を吐き出す久留美を通り過ぎ、七海は寝ている千夜に興味を

示し歩み寄る。

「あー、ちーちゃん寝とんのか？　なんや、綺麗な顔しとるけど、寝顔はかわええなぁ」

「寝る前の物騒な言葉さえなかった頷いてあげるけどね……」

先程までこの場を外していたおかげで、ただ一人まだ眠れる美女の本性を知らないクラスメイトの言葉に相槌を打つ。

その時だった。

眠りについたはずの美女が目を覚まし、身を起こした。

「うわわっ！　ちーちゃんっ！？　どないし……」

「……来る」

ポツリとした呟きに近場の人間が、咄嗟には意味がわからず呆気にとられた。

千夜は周囲の反応を待たずに、食堂を出ようと出入り口に向けて走り出す。

「来るって何が……っ！　誰かその子捕まえて！」

逸早く何かを察した久留美の発令に二、三人の女子が反応し、片腕、腰、片足を捕えた。

「このっ……何を」

「もう観念しちゃいなさいよ。逃げてたって何も解決しないんだから」

「馬鹿ッ、捕まったら一巻の終わりだから逃げてるんだろうが！」

「こっちもいつまでも”庇って”られないんだから、いっそ終わり

にしちゃいなさいよ」
「してたまるかぁっ！　他人事だと思いやがってっっ」

思いのほか強い抑制力に千夜は一歩も前に進むことが出来ない。
そうして行く手を阻まれている合間にも、何としても回避したい展開がその担い手と共に迫ってくる気配を千夜はイヤというほど感じていた。

二日前から記憶が巻き戻し再生（リピート）される。
初日の第一レース、これはまだ普通だった。
しかし、第二、第三と逃走劇の回数が重なるたびに”鬼”の形相は険しくなっていった。
必死こいたそれから、何やら理不尽な怒りに染め上げられていく一方であった。
二日目となった昨日にはもう振り返ることができなかった。
何故か。決まってる。

――――――怖いからだ。

相手の殺気に呑まれるほどの恐怖を感じたのは久しかった。
しかし、本能はそれに対する判断力を失ってはいなかったのは幸いだった。

捕まったら終わりだ（あらゆる意味で）。
逃げ続けれなければならない。

「離せっ……っっ！」

幻聴か否か、足音が鼓膜を打った。
サッと血の気が一気に引いていく。

己にとってこの場に限らず何処にいても招かれざる客たる男の足が立てるそれが、着実に近づいてきている。
千夜の中で鳴り響く警報は最大音量となった。

そして、

「おい、お前ら食堂に立て篭もるって一体何して――――」

外から開いたドアの向こうから現れたのは、予想を外すことなく”鬼”であった。

その登場を以ってして、三日間続いた逃走劇は呆気なく幕を引くこととなった。

［七拾六］　逃走の打ち止め（後書き）

今回の七拾六話を書いている最中、自分の書いてるジャンルを見失いかけた。どうも、天海です。
前回伝奇書いてるー、と思えたのにこの始末。
ちなみに次回も前半こんな感じなんだが、どうするよ自分。
大きく分けてこの話は伝奇と恋愛の二大ジャンル。
割合的には五分五分を目標にしているのだが、どう見ても偏ってるよなー。むずい。

黒井ゴス子。隠す気ゼロだ。完全に遊んでいる黒蘭。
今の状態が少しでも動くきっかけになればいい、という気持ちが二割弱で、遊び心が八割強だったりする。

そして、久々の登場、昶＆七海。
実は今回は物語に絡んでこないのです。
七海は二章から。
昶は三章からを予定しています。

次回はついに蒼助と千夜が対面。
後半はちょっと展開が動く予兆まで行きたい。
それではー。

［七拾七］　両者の相対（前書き）

さて、どうしよう

［七拾七］　両者の相対

食堂にて、重苦しい空気が二つの存在から発生していた。

対するは千夜。
対するは蒼助。
テーブルを挟んで向かい合い座る二人。

今、学園を騒がしている中心人物達は、数分前に対面と言う名の終着を以て、状況に進展を迎えようとしている。
その周囲を取り囲むのは、意図していなかったとはいえ、結果的には二人に顔合わせの機会を与えるきっかけとなったクラスメイト達。
誰もが重苦しい緊迫感が張り詰めた空気の中で、沈黙の中で沈黙を守り、同じ視線の行き先の男女二人を、ずっと見つめる。

一方、その視線の先の双方は何か一つの動作さえもが沈黙を破るきっかけになると思わせる空気の中、依然と口を開く事も視線を交わらす事も無い。
沈黙と沈黙のぶつかり合い。そして、以下を持続、続行。
事態は、未だ微動だにしない。
傍観者と化した全員が焦れったさを感じながら、視線を交錯させる。

おい、どうすんだよ。
いやつーか、どうなるんだよこの先は。
にしても空気重た過ぎるだろコレ、通夜の方がまだ賑やかだぜ。
ねぇ、何で二人とも喋らないの？
そりゃこっちが聞きてぇよ。

てゆっか、いい加減なんか進展してもいいんじゃないの？
つまんないー。
だったら、教室帰ればいーじゃん、今からでも行けば課題免除かもよ？
嫌よ冗談でしょ、こんなまたとない修羅場見逃して、高校生活に悔いを残せっての？
何にしても早く何か起こせよ。
ハリーは――――

飛び交う視線トークの中で、その一人の男子生徒が痺れを切らして発し始めたやや危険を匂わせる英単語連続発信を始めた時、彼らの待ち望んだ『進展』は訪れた。

ドゴン、という鈍く大きな打撃音という形で。
音の発生源は彼らの意識の集中する場所からだった。
そこでは、テーブルに拳を浅く沈み込ませる蒼助と、身じろぎはしないが半目になった千夜の姿があった。
悪魔で動かない千夜とは対照的に、蒼助は拳を一度ぶるりと震わせ、

「お前等、無言でしゃべり場つくるなんざ無駄に器用な真似してんじゃねぇぇっ鬱陶しいぃ！！　散れやコラぁ、見せモンじゃねぇぞぉぉ―――っ！！」

視線の集中放射についにキレた蒼助の一息の怒号に、２－Ｄ一同は蜂の巣をつついたような勢いで一斉にその場から散った。

◆◆◆◆◆◆

食堂の人口密度は蒼助の一喝により、ごっそりとその濃度を減らした。

それによって無理に作られた静寂は自然なそれへと変化し、重さは軽減された。

傍観者たちは食堂から出て行ったが、外から漏れ込んでくる声といい、素直にその場を立ち去っていないだろう。多分、全員いる、と千夜は経験上とドアの向こうから感じる大多数の気配を統合して考え、確信づいた結論を出した。

「ったく、物好きどもめ」

悪態を口にして、落ち着きを取り戻した蒼助は再び椅子に腰を下ろす。

状況は周囲の余計なものがいないという相違点が加わっただけで、形は元に戻った。

再度、じんわりと互いの体から生み出される沈黙。

千夜は、目を伏せ視線を合わさず、口を閉ざし、両腕を組んで不動の態勢を保ち続けた。

この姿勢は、動かなければいい、という千夜の心の内の願望を表していた。

事態も。

自分も、相手も。

時間さえも含めた何かもの停滞を千夜は望んでいた。

目の前の男は自分という散々を煮え湯を呑まされた相手を前にして、何と言うのかは想像できた。

大方、出てくるのは逃げた自分に向けての叱責だろう。

二日間の様子を見ていれば、深く考えなくとも蒼助の中で蓄積された不満は相当なものであるはずとわかる。

しかし、それは悪魔で蒼助の自業自得が招いた結果の産物だ。

押し付けられて、受容できるものではない。

それが言葉として出てきたとして、自分はそれに反抗せずにはいられない。

そして、蒼助はそれを許さないだろう、と考えたところで千夜は既に順を追って出した結論をもう一度脳裏に思い浮かべ、確認した。

間違いなく口論では終わらない、と。

千夜が忍耐の糸を断ち切るか、蒼助が短気を起こすか。

いずれにせよ、そうなれば腕がモノを言う展開に転んでいくだろう。

駄目だ、と千夜は予測する未来を掻き消す気持ちで強く思った。

もう、そうなったら自分に分は無い。

“今の自分”には、だ。

千夜は、酷く苦々しい気分で二日前の久遠寺女医とのやり取りを思い返した。

◆◆◆◆◆◆

衝撃の宣告の後、久遠寺は「ちょっと待ってな」と一言残して、診察室を出て何処かへ行ってしまった。

残されて、一人となった間は精神が現実に追いつく時間となった。肘やら膝が時折僅かに軋みをあげる度に、その距離は縮まっていった。

そして、そんな緩やかな責め苦に終わりを告げたのは、始まりを告げた人物の帰還であった。

『待たせたね』

『何処へ？』

『薬品倉庫さ。これを取りに行っていた』

そう言って、久遠寺が白衣の懐から取り出したのは、手に収まる程度の小さな薬瓶。

目の前でちらつかされるその中には、白い液体が揺らめいていた。

『……それは？』

『アンタの中で溜まった毒素を浄化する……まぁ所謂、解毒剤みたいなもんさ』

飲みな、と手渡されたそれを凝視する。

三途のつくる無色透明な『えりくしるもどき』とも違い、常に服用していた歪なほど青色の霊薬とも違う白っぽさを少し見つめ、蓋を開けた。

くん、と臭いを嗅ぐが、予想の一つとして考えていた異臭はなく、無臭であった。

それによって警戒心が緩み、決心も固まったことで、いよいよ口をつけてみたが、

『――――ぐっ……っっ！？』

一口飲んで、その味に思わず咽せた。

苦い。

とてつもなく苦い。

ブラックのコーヒーは好きだ。あれには苦さに旨味がある。

だが、これはひたすら苦い。それだけだ。

そして、どろりとした粘りを持ったそれは喉をなかなか通らないと来たから、最悪だった。

吐き出したい、という気持ちを必死で堪えながら、口一杯に残る苦みを名残りにしてなんとか呑み下す。

しばし、口を押さえて沈黙。

そのままギッと目尻をきつく吊り上げて睨み上げた久遠寺の顔は、おもしろげにニヤニヤと笑みを漂わせていた。

『……くおんじ……何だ、コレは』

思わず声の音量もグンと下がる。

並の人間なら、サッと青ざめて相対したその場を逃げ出すほどに。

目の前の女医は生憎か幸いか、そんなタマではなかったが。

『白の概念を液状にしたモンさ。まぁ……正確にはその持ち主の体液だがね』

『たい、えき……？　血……じゃないだろ』

『うん。正確には、こっちの方の』

と、久遠寺が指差す。

下腹部――――その下の股間を。

『っっ――――おまっ……なんてものを飲ませて』
『何言ってんだ。それはナニはナニでも、そんじょそこらのナニじゃないありがたーい代物なんだぞ？　その昔、徳の高い坊主が、己の霊力を上げる為にイチモツ切り落として己の欲望を断とうとしたんだと。その前に、後の世で何かの役に立てば良いとその清らかな霊質を残しておこうと最後に一発ヌい……』
『やかましいっ、そんな逸話聞いたところでありがたみなんぞ湧くか！！』

聞いたところで、ますます呑んだモノを吐き出したくなった。
ただでさえ、まだ手元には残っているというのに。

『まぁ、さすがに原液で使用するにゃキツいものがあるから、霊薬として手が加えられてるから安心しな。必要以上に苦いのも、そのせいさ。生臭さを取るのに苦労したようだからねぇ……』

くくっ、とイヤらしい笑みを浮かべて笑う目の前の医者は本当に女なのかと、千夜は事実を疑いたくなった。

『だが、その効果は間違いなしだ。その四百年ものは、三途のそれとは訳が違うぞ。それ一つでお前の中の溜まった腫瘍じみた赤の概念を浄化出来る。それに免じて、全部飲め』

そう言われてはそれ以上歯向かうこともできず、苦々しく手元の残りを見つめ、不満を押し殺してのそれを一気に飲み干した。

『……けほっ、これは……副作用とかはないだろうな』
『副作用……ああ、この場合はある』
『何だとっ？』

これ以上何があるというんだ、と詰め寄ると、予想だにしない返答が返って来た。

『お前にそれを飲ましたのは、毒を解毒する為の”相殺”が目的だ。三途の霊薬の効果を一切合切取り除く為に、な。今飲んだのと、お前が今まで飲んで来た分が対等の効力を持つとする。……すると、互いがぶつかり合い、効果を打ち消し合う。結果として残るモノは何も無い……つまり、だ』

一息が合間に置かれ、一つの事実が告げられた。

『お前は、”只の人間”になる。力も、霊力も、なーんもないごく普通の女の身体のそれになるってわけだ』

聞いた瞬間、金槌を脳天に打ち下ろされた衝撃を覚えた。

◆◆◆◆◆◆

久遠寺の言うとおり、身体は軋むような痛みと引き換えにかつての身体能力と霊力を完全に失い、”普通”の人間のそれに堕ちた。

胡桃の握り潰しも出来なくなった。

軽々となんてことなく持てていた重量の荷物も今では無理だ。

認めたくない、と一点張りするには現実は現状を嫌という程思い知らせてくれた。

口にするのも腹立たしいか、今の自分は紛れもなく――――”只の無力な女”となってしまった。
それは千夜にとって恐ろしい事実である他にない。

だから逃げた。バレないうちに。

もし、目の前の男に知られでもしたら、言葉通り『一巻の終わり』だ。

押さえつけられても、それに抵抗する力が無い。
どれだけ無茶を押しつけられても、それを突っぱねることができない。
無力は力の前に屈するしかないのだから。
今、この場でも同じことだ。
仮に展開がそうなったらこの事実はあっさり露見し、千夜にとって最悪の事態へと転ぶ。
想像するだけでも、吐き気がする。
時間も何もかも止まればいいのに、と決してロマンティックなそれではない真逆な気分で切に願い、千夜は奥歯を強く噛みしめた。

しかし、

「――――――……おい」

千夜の命を切って捨てるかのように、場は蒼助の第一声によって長かった沈黙に終わりを告げた。
伏せた視界の隅で動く気配を感じ、身を強張らせる千夜。
そんな自分に、益々嫌気がさす。
忌わしい過去の自分が己の脳裏を過り、現在（いま）に被さろうとする。
目を背けるように視界を閉ざそうとした時、額に温もりが触れると同時に視界に陰りがさした。

「……？」

伏せた目をそこでようやく上げると、テーブルの向こうから身を乗り出して長く保ち続けた距離を少し縮めた蒼助がいた。

額に触れているのは、蒼助の自分に向けて伸ばしている手であった。

思考が上手く動かない千夜は、しばし呆然とする。

「お前、顔色悪いぞ。ちゃんと飯食って寝てたか？」

「……え、」

人は己の予想を裏切られ、あまりにも異なる展開を状況として迎えると、対処に時間がかかる。

千夜は、まさにその状態となっていた。

気遣われている。

てっきり、口を開くなり不満か叱咤を一方的に飛ばしてくると思っていた。

それが千夜の予測した展開だ。

しかし、それを目の前の男は裏切った。

あまりにも意外な形で。

「あーあ、眼の下クマ出来てんじゃん……。んで、飯は？」

「……さっきは、カツ丼食べた」

「けっ、俺たちゃお前がいない間はコンビニ弁当かファーストフード三昧だったってのに……ま、そんだけ豪快なもん食べれるんなら心配ないか」

悪態を吐いたかと思えば、すぐに安堵の言葉へと変わった。
何から何まで想像していたものとは違う反応が返ってくることに、千夜は調子が狂うばかりだった。

「ま、これならユキウサギの心配も無駄足で済むか」

不意に蒼助の口から出た妹の名前に千夜はハッとした。
思えば、彼女とともこの二日間一度も顔を合せていないままだ。
もう二日もあの明るい声を聞いていない、と考えると、ここにはいない妹の顔が自然と脳裏に思い描がれ、

「……朱里は」
「相変わらず元気だぜ。姉さん、姉さんって騒いでるかメシに文句言うかだけどな」

無理もない。
千夜は蒼助の言葉からその様子が簡単に想像できた。
慕ってくれているのは十分理解している。
そして、己が傍にいないと彼女は心細いばかりであるということも。
二日前、そんなことを忘れて家を出た。
その日に立て続けにいろいろな出来事が身に降りかかり、精神的に余裕を失くしていた千夜はたった一人の家族のことすら見えなくなっていた。
自然と俯く千夜の耳に、蒼助の言葉が入り込む。

「……心配ならいい加減帰ってこいよ」
「……」
「二日間ほぼ不眠はきついだろ。それ以上そのクマが濃くなったらどうすんだよ」

「……、っ何で」

答えるつもりは千夜にはなかった。

しかし、まるで決めつけるような言い方に違和感を覚えてのとっさの反応だった。

「ユキウサギから聞いた。つーか、夜になるとそればっかだったぜ。そんで、姉さんが帰ってくるかもしれないから寝ないーつってなかなか寝ようとしねぇから……ふぁ……っ」

言葉の途中、蒼助は大きく口を開いて欠伸をした。

何かを振り払うように軽く頭を振る。

その動作はまるで、

「……お前、寝ていないのか？」

問いに対し、蒼助は目尻を眠気の名残りで滲ませながら、

「お前が何処で何してるかわかんねぇのに、呑気に寝てられるかよ」

当然のように言ってのけた蒼助のその言葉を聞いて、千夜はその瞬間死にたくなった。

なんて、低俗、と己を恥じ、罵る。

一度は認めた男に対しその器を見測り損ねた上に、勝手な考えばかり重ねて貶めた自分がどうしようもなく汚く思えて仕方無く、思わず蒼助から目を背けた。

自分が考えていたことを知られたく無いという、という無意識の動作であった。

すまない、という本来なら正しい謝罪を呑み下し、代わりに吐いた言葉は、

「……安心しろ。さすがに今日は帰るつもりだ。外で逃げて、学校でも逃げてをこれ以上続けていたら俺の方がどうにかなってしまうからな……」

ふん、と鼻を鳴らして言い切った直後に、チラリとさりげなく蒼助の反応を盗み見た。

「――――そうか」

『喜』の感情を惜しげも無く晒し出したその満面の笑みに当てられ、千夜は言葉が喉で詰まるを感じた。

怒っているのかと思えば、ただ単に心配していたという言葉しか言わない。

帰ると意思表明したしただけでこんな態度が変わる。

何もかもが千夜の想像から大きくズレた光景が目の前にあった。

そして、今殺気まで胸に渦巻いていた蒼助への恐怖心は、欠片も残さず消えてなくなっていた。

――――あ、そういえば……。

気付いたことが、また一つと増える。

蒼助とこうして真っ当な形で顔を見合わせるのも二日ぶりなのだ。

その間、逃げる最中様子伺いにチラ見などしていたが、向き合い話し合うのも、ここでようやくであった。

――――何だろう、この感じ……。

消えた恐怖感の代わりに、漏れ落ちる雫のような【何か】が一滴一滴と胸の奥で溜まっていく。
落ちる毎に満たされていく感覚を、千夜は違和感とも心地よさとも判断出来ず。しばし忘我の境地に立たされた。

「……おい、なにボケッとしてんだよ」

その一声に現実に引き戻された千夜が見たのは、怪訝そうに己を見つめる蒼助であった。
そこでようやく自分がどんな状態でいたかを自覚した。

「っとに、大丈夫なのかよ」
「何でも無い。……少し、考え事をしていただけだ」
「考えるって、……何をだ？」
「……別に。お前には関係ないことだ」

咄嗟に吐いたのは嘘だった。
その背中を押したのは、後ろめたさではない。
自身ですら形を掴めていないこの【何か】を言い表す言葉が無いのだから、答えようが無かった。
仕方無い、と自分に言い聞かせるように、そう心の内（なか）で呟いていると、刺さるような視線を感じる。
見ると、蒼助が何やら疑心に満ちた目付きでこちらを睥睨していた。
少々つっけんどんな言い方をしたとはわかっていたが、疑うような視線を向けられる点はさっきの台詞の何処にあっただろうか、と千夜は目を瞬いた。

「まさか……口じゃ帰るとか言っといて、隙をついて逃げる作戦でも練ってたんじゃねぇだろうな、てめぇ」

「……だとしたら、的の前でぼんやりするようなわかやすい態度晒すわけあるか。帰ると言ったら、帰る。……だがな」

付け足す言葉に、千夜は強く力を込めて、

「……”アレ”は、もうするな。絶対に」

「……アレって？」

とぼけるな、と怒鳴りたくて仕方無い喉を宥め、理性を全力（フル）で働かせながら、今度ははっきりと具体的に言い表した。

「風呂およびベッドの中に入って来るな。……今日帰るのもこれが条件だからな」

意味が分からないと主張する蒼助の表情はそれだけの攻撃力を以て、千夜の精神面にその威力を発揮した。

その瞬間、ブチン、と千夜の頭の中でコンマ一秒で糸が切れる。

「――――何で？」

疲労と睡眠不足で大きく削減された残り少ない理性を使い果たした千夜は、身を乗り出し怒りのままに蒼助の胸ぐらを掴み、美麗な顔を般若の形相に変えて凄む。

「通常ならそんな戯れ言も聞き流せるだろうが……生憎、今は無理だぞ」

「何でさ」

「やかましい、諸悪の根源が。これ以上、俺の前で疑問系を口にするな」

完全に据わった目で殺気をぶつけられた蒼助は迫力負けし、口を閉ざした。

しかし、こういった状況に慣れているのか立ち直りは早かった。

「いや……何でそんなに怒ってんの？　なぁ」

「お前の脳味噌は蝿並の記憶力しかつまっとらんのか」

「そーじゃなくて……だから、何でそんなに気にしてんだよ」

先の見えない蒼助の言葉に千夜は苛立ちを募らせるが、

「前は抱きついても、一緒に寝ても……挙げ句の果てには、お互い裸で抱き合おうが、こっちが虚しくなるぐらい何とも反応し無かったじゃねぇかお前」

続いた言葉に、千夜は思わず思考を急停止させた。

ショックで活動を一時的に滞らせた思考回路が目の前の男の言った事実の真実味を明らかにするべく、過去の記憶を検索し始める。

・抱きついた。（全身隈無く触られても全く抵抗無し）

・一緒寝た。（しかも折り重なるように）

・裸で抱き合った。（不可抗力とはいえ、自分から）

嘘だ、と言葉を否定出来る要因を探す為に始めた作業は、皮肉なことに肯定の材料を多く拾い上げてしまった。

ぶあっと冷や汗が全身の毛穴から噴き出る。

「い、や……だ、だって……それは……っ」

不意打ちに大きく心が乱れ、口から出て来るのは構成し損ねた言葉の出来損ないばかりだ。

理由を探すことにのみ意識が集中しているせいであった。

理由。

理由ならあるはずだ。
あの時と今を比較して表れる相違点が、あるはずなのだ。

「……なぁ」

今まで黙っていた蒼助が不意に口を開いた。
その目は先程とは打って変わって、力を感じる視線を放っていた。

「ひょっとしてお前……意識、してくれてんのか？」
「なに、を」

「俺を。……”男”として、意識してんのかって話だよ」

「――――っ！」

危険信号が千夜の頭の中に中で弾ける様に響いた。
同時に、胸ぐらから手を離し身体が蒼助から距離を取ろうと動きかける。
しかし、それは千夜が離す前に手首を掴まれたことで妨げられてしまう。

「っ！　……はなっ」
「誤解があるようなら、先に言っとくけどな。俺は別にその後お前をどうこうしようとかいう魂胆はないぜ？　土曜の夜まで手ぇ出そうなんて、思っちゃいねぇよ。それが約束だしな」
「……じゃぁ、何であんなこと」
「あんなこと？　ただ、一緒に風呂に入る。ただ、一緒に寝る。単なるそれに何でお前はあんなに騒いで俺から距離とったんだ？」

蒼助の言っていることは無茶苦茶だが、一部理が適っている。
それまで何とも思っていなかったことは確かだ。
同じ男であったのだから別にどう思うことはない、と済ませることだって出来たはずだ。
それだというのに、自分は蒼助の行動に以前には無かった動揺を示した。

理由なら既に居座っている。
だが、それを認めたら。その存在を認識して受け入れしまっては自分の中で守り通さなければならないものが完全に崩れてしまう。
千夜は、それだけはダメだ、と唇を噛み締めた。

「だんまり、か。……そりゃ、俺の思ってるように解釈しちまっていいってことだよな？」
「……、違っ」
「なら、言えよ。お前の中にあるもん証明出来るのは、お前しかいねぇ。俺の間違いを正せるのも、お前だけだ」

先を促すが如く、手首を握る蒼助の手の力が強まる。
拒否権はない、と暗喩しているのを心が激しく乱れる最中、千夜は自然と察した。

「お、れ……は……」

やめろ、と口とは裏腹に心が爆ぜるような制止を叫ぶ。
その時――――

「ぐべぶっ」

ゴキン、という鈍い音と共に緊張感をなし崩す断末魔が間に入っ

た。　何かと思った矢先に拘束されていた手首から圧力が無くなり、放される。
　その次の瞬間、蒼助の身体はテーブルの上に被さる様に前倒しになった。
　ガタン、と何が勢いよく倒れる音。
　椅子にしては、些か響きが重い。

「……消化器？」

　これが蒼助の頭にぶつかったらしい、と状況の分析が千夜の中で為された。
　しかし、誰が、と自然と行き着く疑問を思った時、

『――――……一緒にお風呂だとぉ……』

　倒れる蒼助の向こう側、開かれたドアの奥から地の底から響くような声がいくつも重なるように響く。
　気のせいか、その奥では不穏な暗雲すら立ちこめている様に見える。

『――――……一緒のベッドで寝てるだとぉ……』

　再び響くと同時に、黒い何か――――人影がぞろりと蠢いた。
　人影――――外で待機していた男達の目はギラギラと澱んだ光を輝かせ、各々の全身から放出される瘴気は絡みもつれ合い、更なる澱みを生み出している。
　嫉妬と羨望が分泌した魔性の邪気にも匹敵するのではないかという混じり合い混沌とする邪悪な瘴気は、一人の男に向けてその牙を疼かせていた。

「玖珂ぁ……貴様というヤツは」
「年上年下選り取りみどりのとっかえひっかえならまだしも……」
「よりにもよって俺達の女神にまで手にかけようとは……」

怨嗟と恨みに満ちた声がどんよりと漂う。
誰も彼も目が完全にイっているのを千夜はその目で確認した。

「許さんっ……許さんぞ玖珂蒼助っ！！」
「お前みたいな節操無しがいるから、世の少子化が進むんだ！」
「そうだ！　去勢して恵まれない男達に少しでも分け前くれて、世の中に貢献しやがれこんチクショウがぁ！！」
「初めて会った時からテメェが憎かった！！」
「ぶっちゃけ羨ましいんじゃ、コラァ！！」
「これ以上好き勝手は我ら、２－Ｄ男子によって結成された終夜千夜にお近づきし隊が許さん！！」
「……下心前面に押し出して来たわね、ちょっとは隠しなさいよ」

ヒートアップする罵詈雑言の中に、最後の久留美のツッコミでもみくちゃになって消え、無視された。
彼らの乱入により助かったんだかそうじゃないんだか微妙な心境で、状況にどう対応すれば良いのか考える千夜の思考の作業を中断する出来事はすぐに起きた。
先程、ナントカ隊とやらの一人が放ったと思われる消化器の痛撃により、気絶していたはずの蒼助がムクリとその身体をテーブルの上から起こしたのだ。

「はっ、一人じゃ敵わねぇから徒党組んだってか？　そんで、俺をぶちのめしたらその後はみんなで仲良くコイツを手に入れてマワす

って？　そりゃ、見事な民主主義だな、人類皆平等ってやつだ」
「まわっ……」

真っ昼間から堂々ナニ抜かしてんだ、と怒鳴りかける千夜だったが、その隙も与えられないまま蒼助の言葉が続く。

「てめぇらもういっぺん叩き潰してやる。人の恋路を邪魔する奴は馬に蹴られて……痛い目見やがれ！！」
「……そこまで言ったなら言いきれよ、決まり悪い」

当然のことながら、外野の昶のツッコミも冷静な数少ない者達の同意を残して場の空気によって無視された。

「とりあえず、雁首揃えてテメェら今日の帰りまで保健室から出れねようにしてやる」
「減らず口を抜かすな！　全員揃った我々の力を侮るなよ……この前は無念にも地べたを這ったが、今こそ総力を挙げて貴様を弾劾して、終夜さんを毒牙から守ってみせる！　覚悟しろ、エロ河童ぁ！」
「世のモテない男どもを代表して今日という日を貴様の命日にしてくれるわぁぁぁ――――っっ！！」

その瞬間、双方の中で戦いのゴングが鳴り響き、乱闘が開始された。

鎖から解き放たれた獣の如く、一つの入口から怒濤の勢いで食堂に駆け込んできた男達は真っ直ぐ、或いは不意を討とうと死角を狙うなどして蒼助に一斉に飛びかかっていく。

一足早く次の展開を予測した千夜は非難し、その光景を傍観できるもう一つの出入り口付近にいた。

「あーあ、結局暴徒と化しちゃったわね」

「風呂のあたりから呻き出したところでアカンとは思っとったけど」

先程まで男子たちと同じ出入り口の方にいた久留美、七海を始めとした女子たちが乱闘を見物しようと千夜の傍らの出入り口から流れて入ってくる。

「ところで、もう一回ってどゆこと？」

「あんたいなかったの？　月曜日に終夜さん追っかけて戻ってきた玖珂くんに教室にいた男子達が詰め寄って、結局乱闘沙汰になってさー」

「それでも勝ったの、玖珂くんだったけどねー。私、おかげで二千円パーになっちゃったんだから」

「じゃぁ、私は玖珂くんに賭けよっかなぁ。そっちは？」

「うーん……今回は数多いし、さすがの玖珂くんでも多勢に無勢って感じじゃない？　だからもう一回、多勢の方に」

「ねぇ、お昼何にするー？」

「持って移動しながら食べれるように丼ものにしようかな」

どうやら昼食片手間に観戦するもとい賭博もどきをするつもりでいるらしい女子一同は、ぞろぞろと連なって食堂のカウンターへと向かっていく。

彼女たちの注意は完全に自分から逸れての前で起きている喧騒へと移った、とようやく肩の力を抜いた千夜は同時に溜息混じりに、

「……どういうクラスだ、ここは」

「見たまんまイカれたクラスさ」

不意と突く相槌は隣から来た。

振り向けば、そこには唯一あの乱戦の中に勇んでいなかった早乙女昶がそこに立っていた。

「……お前は、行かないのか？」
「冗談だろ。第一理由がない」
「じゃぁ、止めたらどうだ」
「無理だな。ああなったら、最後の一人になるまで止まらない」
「……随分と、信頼しているんだな」
「信頼というよりは、経験だな。どれだけ大勢と当たろうと一撃を喰らおうと、いつも最後に立っていたのは……あいつだった」

結果がわかりきっているから止めない。
そういった行動を当然のように取れるのは、それこそ過去の経験が築いた信頼ではないだろうか。
照れ隠しであえて素っ気無い言い方をしているのかもしれない。

付き合いが長い関係にもたらされるパターンは二つある。
信頼や依存を丸出しにする前者。
それらを表面上ひた隠しにする後者。

――――どう考えても、こいつらは……後者だな。

熟年夫婦系（タイプ）ってところか、とあまりに二人に似つかわしくない答えに千夜は笑いを堪えつつ、

「そうか……それで、お前は何でここにいる？　出来ればもうしばらくそっとしておいてくれないか？　お前の腐れ縁男のおかげで最近は家に帰えないから、ホテル巡りで疲れているんでね」
「いたたまれんばかりの話だが……俺には、あそこに加わる理由はなくても此処にいる理由（わけ）があるものでな」
「……手短に頼むよ」

そう答えると、昶は少し目を見開いた。
意外、と顔が言葉なく訴えている。

「あしらわれると思ったか？　そんな面倒なことはしない。……お前らみたいなのには、さっさと答えて気の済むようにさせてやるのが良策だ」
「……呑み込みが早くて助かる。理由は……まぁ、ウマイことチャンスが転がってきたからだ」

隣接する椅子に腰を下ろし、

「一度、あんたと腹を割って話したかったんだ。そのためには、今がまたとない絶好の機会だろう？」
「確かにな。……それで、腹を割って私と何を話したいと？」

めんどくさい心境を隠しもせずに態度に表しす千夜に、動じないのか昶は木に触った様子も気にすることもなく視線を一点に向けた。

「そうだな、いろいろあるが……強いて言えば」

その瞬間、場の空気が一気にピンと糸を張ったように鋭くなり、

「あそこにいる男について、とかな」

喧騒漂う食堂に、僅かな静寂の空間が発生した。

［七拾七］　両者の相対（後書き）

今回、ちょい更新遅れました。
理由はあります。

ＭＹパソがウイルスに犯られました（もしくは殺られた）。

エラー大量発生した時は本気で恐怖感じました。
親父殿がブツクサ文句垂れながら修理代ケチって直してくれましたから、なんとか全壊は免れましたが、心臓に悪かったですよ。
まだ買って三年しか経っていないのに、冗談じゃありませんマジで。
原因は愚妹がいろんなワケわからんサイトにアクセスしたり、ダウンロードしたりしていたことだとか。
友達のパソコンも最近ウイルスにやられておじゃんになったと聞いたばかりだったので、人事ではなかったなぁ、としみじみ感慨にふけりました。
パソコン騒動で唯一の救いは今回の更新分が消し飛ばなかったことですね。いや、マジ。

さて、しょっぱなからかなりカオスな七拾七話。
最近出張る２－Ｄ面々は学園きっての問題児クラスなのです。ちなみに上から数えて氷室、蒼助、久留美は学園ブラックリストのトップ３。
周囲は触らぬ神に祟りなし状態なので、ちょっとやそっとの騒動起

こしても周囲は「あぁ、またか……」と涙堪えて遠い目をするしかない。
こいつらは日常編では、まず必須キャラです。登場確率高いだろうな。

次回、昶と千夜の対話。
昶から見た蒼助、そしてその過去を語ってくれます。
目標は次の月曜日です。

【七拾八】　さよならの儀式

――――地味な人生を送りたい。

中学に入る前に、早乙女昶が心に固めた将来の夢だった。
初めて口にしたのは、一番下の兄が来るべき高校受験を控えて憂鬱としていたところを偶々通りかかった昶に「お前の将来の夢は何だ」と何気なく問われ、その答えとして返した時であった。
案の定、通常の小学六年生の抱くそれとは程遠い夢の欠片もないそれに兄はポカンとした後、大爆笑だった。
夢ぐらいもっとそれらしいのを抱けよ、とグリグリと頭を撫でつけられながら兄はそう言ったが、どうせなら叶いやすい夢を見た方が懸命ではないのか、とその時の昶は思っていた。

夢は見るものではなく、叶えるものだ、とよく聞く。
それに則れば、比較的に夢は叶いやすい方がいいでないか。
自分は高望みして人生に落とし穴を作らず、平穏な生活を送りたい。
たゆたゆと何事もなく過ぎていく日常をこれから先の未来に生きていきたい。
ちなみにその年の初詣で拝んだ願いもそれとなった。

そして中学に入学。
想いは変わらないままだった。
当たり障りのない学校生活を送っていこうと、決意していた。

しかし、新たな生活を迎えることで昶は思い知った。
人生という道は願いの大きさ関係なく、何かを望めば落とし穴は自然と出来上がってしまうものなのだ、と。

【彼】の出会い。
それが昶の望みが生んだ人生の落とし穴だった。

予想もしない場所から目の前に現れたたった一度の出会いの失敗により、昶は望んだ人生から大きく踏み外した。
落ちた穴は想像以上に深く、抜け出そうとしても抜け出せないものだった。
しかももがけばもがくほど引きずり込まれるタチの悪いヤツだ。

更にタチの悪いことに、その男と外れた道を進んでいくことが、楽しく感じるようにもなってきた。
そして、もがくことが無駄と知ってからは抵抗を止め、流されることにした。
高校への進学は、人生の修正のきっかけに成りえるはずだったのに、それも無駄にして【彼】と同じ高校へ進んだ。

最初は迷惑な存在でしかなかった【彼】に情が移ったのか、と問われれば否と昶は答えるだろう。
そういうことではない。
ただ、単純に興味がわいたのだ。

自由奔放に己を突き進める中で、『何か』を探し続ける男に。
そして、【彼】がそれを見つけられるかどうかに。

それまで正しい道を歩むを止めようと思った。
【彼】が探し物を見つけるその瞬間まで。

そして、その瞬間は――――――ついに来た。

だから、昶は前から決めていたことを実行しようと思った。

【彼】から離れて元の道を歩み出す前にしようと決めていたことを。

◆◆◆◆◆◆

昶は自動販売機の前に立っていた。

先程までいた食堂から少し離れて、されどそれ程距離が離れているわけではない微妙な場所に来ている。

――――さて、どうする。

自動販売機のメニューを見つめながら、チラリと盗み見たのは、連れ出してきた相手――――終夜千夜。

同時にこれから行うことを前にして彼女に対して持つ昶は、己の情報と関連性をあげてみる。

今年の新学期の初日に問題児クラスの１－Ｄ、もとい今となっては２－Ｄとなったそこに転入してきた女子生徒。

類まれ見る、まさに絶世の美少女と呼ぶに相応な女。

そういった意味では、ある意味問題児かもしれなく、放り込まれたのが自分のクラスであることに間違いはないと昶は感じていた。

しかし、しばらくしてそうではないと気づいたのは彼女の振る舞いと態度に対する違和感だった。

丁寧するぎる態度も、ほかのクラスメイトに対する対応も、何処かよそよそ過ぎるほどの馬鹿丁寧さなのだ。
それは言い表すなら――――仮面を被っているような。
そして、剥がれた今となっては、仮面の下の素顔は１８０度違う代物で、誰かがそれを見抜いて意図された形ではなかったとはいえ、やはり彼女が２－Ｄには入ってきたのは運命付けられたものだったのかもしれないと思える。

しかし、それだけなら昶にとってはどうでもいいことだった。
己には関わりのないこと、と済ますことが出来た。
興味も持たなかった。

問題は、この転校生が――――

――――しかし、まさか……あいつがなぁ。

昶が思い浮かべたのは、今頃暴徒と化したクラスメイト相手に乱闘を繰り広げているであろう、自分の親友と周囲から認識されている腐れ縁の男。
玖珂蒼助。
女に対して性的欲求しか抱かなかったその男は、今、恋をしているらしい。

目の前の、この女に。

「……何がいい？」
「結構だ。自分で買うから早く選べ」
「遠慮することはないぞ。これから話に付き合ってもらうんだ、飲み物くらい奢らせてくれ」
「……好きにしろ」

不満を隠そうとしない仏頂面のまま、千夜は歩みでてアイスコーヒーを選択すると、出来上がりとそれを持って同時に再び元の位置まで下がった。

少し前までとは偉い変わりようだな、と昶は妙な感心を抱いた。

それだけ今の千夜の振る舞いは、外面を取り繕うという無駄な足掻きとは一切無縁の切り捨てようであった。

己の選んだアイスティーを取り出しながら、昶はどう切り出すかを考えたが、

「……早乙女は……あいつとは、どのぐらいから一緒にいるんだ」

昶の意表をつくように、切り出しは千夜の方から来た。

これには少し驚いた。

同時に、自分の誘いに乗ったということは少なからず話題となる相手に無関心ではないという確信を昶に与えた。

――――そうでなくては困る。

内心でほくそえみながら、昶は開口を切る。

「……親同士は旧知の仲らしい。といっても、俺達自体は中学からの面識だ」

「それまで一度も引き合わされたりはしなかったのか？」

「こっちの業界は基本は同業者同士不干渉が鉄則だからな……あまり馴れ合うのは両家の周りがあまりよく思わないというか……まぁ、あんたもそうならわかるだろう？」

その同意の求めに、千夜は少々驚いたように目を開いた。

気づいていたのか、という心境が昶には手に取るように伝わった。

「ちなみに氷室雅明、朝倉渚、都築七海もこっち側だ。珍しいだろ、一箇所に五人も集まるなんて滅多に無いことだからな」

「……本当に変なところに放り込まれたらしいな」

頭痛げに額を押さえる千夜に、内心全くだなと同意する。

「まぁ、話を戻すが……俺があいつと出会ったのは中一に成り立ての頃だ。……だがまぁ、俺としては……あれは出会ったというよりも」

過去を振り返り、どうだっただろうと再確認してみるが、

「……遭遇、だな」

やはり答えは変わらなかった。

その表現に千夜は半目になった。

「……言い方ってものがあるだろう。何だ、場所は雪山か、密林か」

「まぁ、聞けって。その頃、俺は平和な中学生活を送ろうと密かに決意づいて入学したてでまだ慣れない環境に適応しようと日々を過ごしていた。まぁ、結構大変だった」

「……何でだ」

「俺の通っていた中学はそのあたりでも結構な悪評目立つところでな。ようは不良校だ、当然あからさまなワルもぞろぞろいた。さすがにリーゼントはいなかったがな」

もしかしたら一人くらいいるのではないか、と探してみたことも

あったりした。

「そんな前評判垂れ流しのところで平穏な学校生活を送りたいなんて結構な無謀な願望を胸に抱いて入学して半年くらい経った頃だった。教室に一人いても目をつけられるだけだからと昼休みはいつも外をフラフラ出歩いて時間を潰すんだ。そろそろその行動も習慣づいて来たところに……」

ふと昶の言葉が途切れる。

訝しげに表情を伺った千夜の目に映ったのは――――――なんともいえない表情をした昶だった。

何かを懐かしむようにも見える。

逆に何かを後悔しているようにもとれる。

眉間に寄った僅かな皺と虚ろな目がそのどちらともつかせなくしていた。

「……早乙女？」

「いや、悪かったな。思い出したら……なんかいろいろ込み上げて来た」

それが決して良いだけではないということは、聞くまでもないことだと千夜はあえて何も言及しないでおいた。

一体どんな出会い、もとい遭遇であったというのか、と昶の言葉を待った。

回想から戻ってきた昶は再び口を開いた。

「……治安の悪い学校だったから、実際何処にいようが危険であることには変わりなかったが、俺は運がよかったんだな。その時ま

では、一切面倒に巻き込まれずにのらりくらりと危険から免れていた」

「その時、までは……」

「そう。その時までは、だ。……俺があいつに遭った瞬間までは」

言うと同時に、昶は目を閉じた。

視界が閉ざされると同時に脳裏に思い浮かべた映像がより鮮明に映し出される。

人の通ることのない校舎裏。

そこで行われていた暴力劇。

倒れる上級生達。

そして、呻く肉と化した男達が地面に敷き詰められる中で、たった一人立つのは――――

「偶々、通りかかっちまったのさ。運悪く、な。……上級生グループ相手に大立ち回りした後の、当時の荒み走った蒼助の前に」

先程思い出した記憶の一部が今一度フラッシュする。

獣の目。

それは血であったのか。

それとも暴力の発散であったのか。

他者には知りえることのない“何か”を求めていたあの目と初めて邂逅した瞬間を、昶は一生忘れることが出来ないだろう。

あまりにも鮮烈過ぎる、その瞬間を。

「……王道体質なのか、あいつか」

「ん？」
「何でもない。続けるといい」
ぼそりと呟いた言葉をなかったことにしようとばかりに、千夜は紙コップのコーヒーをぐびりと飲み下した。
先を促された昶は、
「……まぁ、なんというか……そこから先は――――――間髪なしで、戦闘開始」
「は？」
何の脈絡もない展開に千夜は思わず呆気に取られた。
無理もないな、と昶は思いつつ、事実を肯定すべくその詳細を説明し出す。
「いっとくが、本当の話だぞ。出会いの第一声なんてなしで、いきなりあいつは俺を見るなり殴りかかってきやがった。こっちが何を言おうとまるで取り合いもしない。……いつの間にか殺す気で闘ってた」
「……それで」
「俺は肋骨二本。あいつは片腕を骨折。お互いその他打撲諸々で、一ヶ月入院、及び停学だ」
絶句、と名前がつく沈黙が千夜の方から流れてくるのを、昶は予想通り感じていた。
同時に理解してくれただろうと、確信も得る。
これが、出会いというよりも『遭遇』で間違いないということを。
「で、怪我も大まか回復して退院したその夜、同じく退院した蒼助が家に来た。

――――俺の部屋の窓ガラス割って」
「……不法侵入だろ、それ。……親は如何した」
「母親は倒れた。父親は……蒼助の名前を聞いて、しばらく黙り込んだかと思ったら母親抱えて何も言わず出て行った」
「ちょっと待て、そこで何でスルーなんだ！」
「俺もその場で突っ込みたかった。あとで聞いてその時に親同士知り合いなんだと知ってな。後日、親父に言われたんだ。
――――頑張れよ、と」

その溜息のように零されたたった一言は、父親が己の前例であると知るには十分な威力を持っていた。
そして、父親が友人であるというあの男の父親、或いは両親にどれだけの気苦労を舐めさせられたのかも。
災難ともいえるその男から逃れることができないことも、あの父親は己の経験を通して悟って己に対しそう言ったのだろう、と昶は少々恨みたい気持ちであの時の父親の心境を察した。

「……いや、結局……あいつがお前の家に押しかけてきた理由は？」
「遊びにいこう、と誘いにきたつもりだったらしい。――――中身は渋谷のチーム潰しだったが」
「何でだ」
「一戦やらしたあの後、俺はあいつの中でなんか認められたらしい。自分と対等に張り合えるヤツがいるとは思わなかった、と大喜びして俺を夜の渋谷に駆り出したぞ、あいつは」

その時だっただろうか、と昶は思い返す。
初めのあの瞬間を望けば、蒼助の顔をまともに見たのはその時は初めてだった。

遊び相手を見つけたと、喜ぶ子供のような笑顔。

第一印象とのあまりのギャップの差に呆気に取られるあまり、抵抗の意すら削がれて蒼助に誘われるがままに夜の街に駆け出して行ったのは、いつのことだっただろうか。

「それからというものの俺の日常は滅茶苦茶だ。毎晩毎晩、あいつが俺の家に来て、チーム潰し。昼間は学校で最初の一騒動で周りの不良から目をつけられるわ、帰りは叩き潰したチームの残党やら噂を聞いたヨソのチームに待ち伏せされたり……しまいには、渋谷のタイガー&ドラゴンとか妙なアダ名つけられてなぁ」

「気の毒な中学生活を送ったみたいだが……結局お前は何が言いたいんだ？」

「別に。ここまではただの挨拶……代わりみたいなものだ。深い意味はない」

「……帰ってもいいか」

飲み終わって空になった紙コップを握り潰しながら、溜息をつく千夜。

その様子からこの場を去りたくて仕方ないという心境が伺えた。

だが、それでは困る、と昶は本題を切り出すことにした。

「……率直に言おう。あいつをあまり弄ばないで欲しい。ようやく、本気になれたあいつを」

それを聞くと、千夜の目が不機嫌に細まった。

酷く冷めた様子で、

「大した世話女房ぶりだな……だが、それは親友の目を覚まさせることに使った方がいいんじゃないか？」

やはり、と予想していた結果に昶は少し気が滅入った。

こう言い出せば、態度を硬化させるのはわかっていた。
だが、ここで引くことは出来ない。

自分はずっと、この時を待っていたのだから。

「そういわないでやってくれないか。あいつはあれで……相当な一途だぞ」
「寝言はベッドの上で言ってくれないか？　発情相手が山ほどいるやつの何処が……」
「あいつには発情相手しかない。少なくとも、俺が見てきた中には……あんたみたいに、ケツを追い掛け回したりするようなやつはいなかった」

本当の話だ。
追い掛け回されて、うんざりする蒼助は散々見てきた。
だが、追い掛け回してうんざりされる姿は見たことがない。
そして、

「それにな……人の体調を気遣うあいつを見ることになるなんて。正直、想像もしていなかった」
「大袈裟だ。認識がある程度ある相手がそうなってたら、そんなの誰だって……」
「……俺の知るあいつは人を気遣うどころか、自分を気遣わせることだってさせない奴だ。風邪を引いても、連絡を寄越してそれだけで終わらせる。見舞いや世話なんて、させたりしない」

昶が己の経験を引き出すと、千夜はそれに対し目を見開いて、

「そんなはず……だって」
「あんたの前では、ともかく俺や他にはそうだった。家族だって例

外じゃなかった。あいつは滅多に他人に興味も持たないし、干渉しない。逆に、自分に対しての必要以上の干渉も嫌っている。……じゃなきゃ、俺もあいつの家庭事情を自分の父親から間接的に知ることはなかっただろうさ」

そこで一度止めて、昶は少しぬるくなったアイスティーを口に含んだ。

ここから先は少々長話になる。

「周りは俺を世話女房やら親友だとか思っているらしいが、お前らが考えているような気安い関係(もの)じゃない。あいつが認めているのは、俺自身じゃなくて……俺の、強さだ」

それを昶が知ったのは、知り合って三ヶ月ほど経って迎えた冬だった。

きっかけは些細な疑問だった。

蒼助は身体の何処かしらにいつも傷をつくっていた。

痣であったり、切り傷であったり。火傷もあった。

それは昶を連れて赴いた喧嘩の際に負った傷ではない、と気づいたのは疑問を持って少しした後だった。

そのうち気になって何度も尋ねても、「何でもない」の一点張りか、或いは問いそのものを無視されるばかりであった。

昶もその態度に自分から押してもこれ以上進展はない踏ん切りをつけ、蒼助の方からいつか明かしてくれるのを待つことに腰を落ち着かせた。

そうして、ある夜に、その発覚の瞬間は昶の元に訪れた。

夕飯を食べ終えた頃に蒼助から携帯に着信があった。

またいつもの誘いかと思って指定された場所に着てみれば、そこは潰れた街外れの廃工場であった。

人の気配のないそこに来て昶は異変に気づき、自分の知らないところで潰してきた連中の奇襲に遭ったのか、と予想を巡らせながら蒼助の姿を探した。

尤も、血だらけで壁に寄り掛かる蒼助は想像をはるかに超える負傷をこさえていたが。

「酷いもんだった。全身に打撲どころか火傷まであって、挙げ句に片腕折られて、指も二本やられて……不良のリンチというよりは、拷問に近い有様だったな」

「……ただの報復じゃなかったのか」

「連れて帰って事情聞こうにも寝た振りして一切口を割らなかった……代わりに口を割ったのは俺の父親だったがな」

いくら尋ねようと背向けてわざとらしいイビキに近い寝息を発するだけの蒼助を一旦放って、部屋を出ると父親が電話をしているところに通りかかった。

相手を尋ねると、返って来た答えは玖珂家の当主――――蒼助の父親であった。

用件は自分たちの方で渋谷に拠点を構えている霊能医の医院に連れて行って、一晩預かってくれとのことだった。

「何だそれは……友好関係があるとはいえ、一族の跡継ぎをヨソの組織の家に身柄を任せるなんてその当代は何を考えて」

「蒼助もそれを希望するだろうから、だとのことだったそうだ」

「……初めてのことじゃなかったのか？」

鋭く察した千夜の言葉に昶は頷くだけを反応して返した。

「傷の件もそれで説明がついた。一連の実行犯は――――」

言葉の後に間が出来た。

昶は思う。

この先を聞いて、この女はその事実をどう受け止め、あいつに何を思うだろうか。

それを知るべく、昶は溜め込んだ最後の一欠片を吐き出した。

知った時の己を振り返りながら。

「――――かつて玖珂の嫡男、であった男……蒼助の腹違いの兄だ」

【七拾八】　さよならの儀式（後書き）

ぶっちゃけ一週間後は高校卒業式だな、と正直実感わかねぇ天海っす。
それはともかく皆、天海は約束を守ったぞ！

今回は「昶、出会いの経緯と蒼助の家庭事情を語るの巻」です。
殴り合いから始まったボーイミーツボーイ。
ぶっちゃけコイツらの関係って何。
氷室と渚はお互いを理解し合った文字通りの『親友』。
蒼助と昶は『腐れ縁』。
少なくとも、昶にとってはそう。
親友、にはなれなかったんです。
その理由は次回でわかると思います。

しかし、毎回のことだが予定していたところまで書けない。
文字数が多くなるんだ、何故か。

［七拾九］　硝子の境界線

父さんから全てを聞かされた。
それは、本来なら当人であるあいつの口から聞くべき内容だった。
――――あいつの口から聞けると、思っていた話だった。

「――――」

明かりを消して暗くした部屋の奥のベッドで、出て行く前と変わらない背中を向けたまま蒼助は寝ていた。

一番上の兄に車を出してもらい、通いつけの病院には行った。
怪我は擦り傷程度のを除けば、骨折も火傷も目立つような打撲も院長直々に全て治された。
帰宅すると、何か食べるかという俺の問いにも答えず勝手にベッドに入ってそのまま動かなくなった。
向けられた背中が近寄るな、と訴えかけているように見えて、俺は自分の部屋であるそこを離れて居座った男を一人にしてやった。
ある程度の時間を置こうと、風呂に入るなり、テレビを見るなりして時間を潰した。
一時間ほど過ぎて、そろそろ寝ようと臨時ベッドとしてソファで就寝を決めた後、その前にもう一度俺は自分の部屋に足を向かわせた。
そして、見たのが然程変化のない光景だった。

「……寝たのか、蒼助」

問いに返事はなかった。
出来るだけ静かに、足音の目立たないように近づいて様子を見てみた。
動く気配のない身体に、後一歩のところまで歩みよって、ごく自然に発せられる寝息を耳にした。

「……んが」

鼻を鳴らすようなイビキと共に、寝返りをうって寝顔が露になった。
呑気なツラして寝てやがる。
ほんの少し前までズタボロになっていた人間とは到底思えない。

「……そうやって、いつも何もなかったみたいに寝て明日を迎えてたのか」

誰にも気付かれないように。
誰にも話そうとせず。
周囲が見て見ぬ振りをするのをいいことに、周囲から自分を隔離して。

俺でさえも、例外なく。

「……って、生まれたまま派かお前。別にいいけど、人んちでやるなよな……」

掛け布団の捲れたところから服を着ていない様子と、床に散らばった脱ぎ散らかされた血の付着した衣服を見て、思わず溜息が漏れ

た。
洗濯機に放り込んでおこう、と布の端を掴んだが、何故かその場を立ち去る気にはなれず、手を離してそのままベッドを背もたれに座り込んだ。

ゼロに限りなく近い距離感。
その僅かな狭間に隔てられたのは、硝子の板で引かれた境界線。

「そういえば、お前……自分の話、お袋さんのこと以外俺とはしなかったな」

いつ出来たか、の問題ではない。
おそらくこの壁は最初から存在していた。
俺が気づかなかっただけだ。

そして、ようやく気づいた。
どうして傍に置かれたのかも。
この男が俺の何を認めてのことだったのかも。

「落とし穴、か……俺にとって、そんなもんハタ迷惑でしかなかったはず、なんだがな」

気づけば、落とし穴の中を居心地よく感じるようになっていた。
悪くないかもしれない、と。

この男と俺は、通じえることがないとわかった後の今もなおも、だ。

「まったく、厄介なのに遭遇しちまったもんだな……本当に」

呑気に夢の中にいる男を傍らに、その時その夜ただずっと俺は考えていた。

血の繋がりはおろか、与えられる人の想いすらも拒絶し、何かを探し続ける男とのこれからを。

胸に落ちた諦めと捨てきれない未練の狭間で。

◆◆◆◆◆◆

「蒼助の父親はあいつの母親と出会う前には、既に既婚者だったんだ。子供もいた。その結婚相手ってのも、家の意向に沿ってのもので親父さん自体の意思は関係はなかったらしい。そこに、蒼助の母親との出会いがあって、運命的な恋に落ちた」

珍しいことではない。

一族の中心に生まれた者として、一族の繁栄と未来に繋がる婚姻を結ぶなんてカビの生えたような古い風習は表では廃れても、裏側では今も尚続いている。

全の為に一人の意志が押し潰されることも、当然とされている。

そんな中で、悪戯に巡って来た出会いに再び己の想いを燃え上がらせることも、過去に何度か前例として存在していた。

蒼助の父も、その例の列に並んだ。
しかし、彼はその上を行く驚異の行動を実行したのだ。

「本命を妾に据えて本妻と泥沼っていう展開は他にもあった。だが、親父さんはまさかの行動に出た」
「まさかの、行動……？」
「あんた、蒼助から母親の話を聞いたことはあるか？」
「……糊のようなお粥をつくる母親だとは聞いている」
「それは俺も初耳だ。……聞かされた中で、あいつは自分の母親をどう言い表していた？」
「……反対を押し切っての結婚だった、と」

心なしか、声が若干押さえてあった。
確かに、内容はあまり外で口にしてしまっていいことではない。
しかし、真相は更に公言しずらいものだ。

「確かにその通りだが、それだけじゃない。その反対というのも――――それまでの本妻と離縁して、他の女をその空いた場所に据える上での結婚だったからだ」
「――――っ！」

千夜の目が驚愕の色に揺れた。
父親から聞いた時の自分と同じ反応に、無理もないよな、と昶は苦笑した。

「当主の権限を振るってかなりの強行突破だったらしい。離婚についても本妻が納得なしで、な。その当時は、玖珂の当主が乱心した、とかなり騒がれたそうだ」

一族を束ねる者が、周りの反感も買うのも構わずそこまで己の意志を押し通した例は前代未聞だったと、父親は語った。

だが、その後こうも言った。

あいつは今、その報いを受けているのかもしれない、と。

「そして、蒼助が生まれると同時にその本妻の子も跡継ぎからは外された。……と言っても、そいつも霊力はからっきしで、実質云々では蒼助と大差なかったらしいがな」

「……その度重なる暴行とやらも、その私怨か」

「察しがよくて助かる。その通りだ。実力はなくてもプライドだけは果てしない男らしい。自分の母親と自身を追いやった母子に対する恨みは尽きることを知らない相当なものだ。そして、その恨みは直接的な原因となった蒼助へと注がれた。時々拉致しては部下や自分でリンチ……性根に見合ったちゃちな方法でぶつけるくらいの脳みそしかなかったみたいだがな」

「……当主は、何故」

押し殺した声が、何を言いたいのかは皆まで聞かずとも昶にはわかった。

「何もしなかったのか、か……”子供”である俺たち側には知ることも理解もできない親心、というやつもあるんじゃないか。一応はそいつも息子であることには変わりない。そもそも元を辿れば、自分の通したエゴがその男を追い詰め、恨みを生じさせることになった……当主はその負い目を無視して一方的に責めることができるほど非情な人間じゃなかった」

「……馬鹿な話だ」

ぐしゃり、と紙コップが込められた圧力により千夜の手の中で歪

められ潰れる。
表情にははっきりとは表れない憤りを千夜から確かに感じながら、
「……大事なものとそうでないものを割り切れない中途半端な感情が当主の行動を制限し、縛りになった。だがそれも……本人から助けを求められれば、簡単に吹っ切れただろう」
「……？　どういうことだ……それじゃぁ、あいつは」
「最初の時に助けを求めるどころか、手出しすら拒否したらしい。俺の問題だ、関係ない、と」
理解しがたい話だ。
目の前の表情がそう言いたげに目を見開かせているのに、ああそうだな、と昶は内心で頷き、
「元々、親父さんとの仲は良好とは言い難いものだったらしい。はっきりと悪いとも言えないが、よそよそしさが漂うような……で、収まっていたのは間繋ぎとしてお袋さんがいたからだったらしいが……その死後、蒼助は一気に親父さんと玖珂側の人間を突き放して距離を置く様になった」
「……どうしてだ」
問いに対して答える前に、昶は過去の場面を幾つか振り返った。
それらは全て一つの共通点を得ているものであった。
「……あいつが俺に話す身内の話は、いつだって母親のことだった」
「……？」
答えもせずに次の話題を切り出した昶の言動に、千夜は眉を顰めた。
気付いていながらも無視して、続ける。

「母親に受けたスパルタ修行とか。母親との十番勝負に惨敗とか。母親によくぶん投げられて意識が飛んだとか。母親に構ってもらえなくて抱きついた親父さんも鬱陶しいとぶん投げられたとか。……周囲にとって、自分にとっての母親の存在感を……あいつはよく俺に聞かせた。その時は俺は、結局コイツはマザコンなんだって話だよなー、くらいにしか汲んでなかったんだがな……後になって、それがあいつにとってどういうことを意味しているかに気付いた」

正確には、長きに渡って玖珂の家の補佐を努めて来た存在から聞いて確信したことだ。

かつて、本人が口を閉ざしていることを諦めきれずに玖珂の屋敷を訪れた際に、来訪に対応した望月という男が、昶の知るところにない蒼助の母親・美沙緒についてを知るところにした。

――――あの方は、ただ一人認めた家族であり、世界そのものだったのですよ。

サングラスの奥の表情の変化を欠片も見せずに言い切った言葉を、昶は大袈裟と笑うことは出来なかった。

そうするには、その響きはあまりにも――――自然と受け入れられてしまうものだったからだ。

「あいつは物心つく前から、霊力の低さで周りから散々な言われようで蔑まれていた。【蒼助】という存在の否定と拒絶……それは、味方である父親を始めとした一部の人間ですら例外じゃなかった」

「……わかるように説明してくれ」

味方であるのに例外ではない。

発言に矛盾が生じているのは承知だった。

しかし、含まれた事実はこれから矛盾を除き成立させるのだ。

「念願の恋愛成就の相手に親父さんは、ウザ苦しいと鬱陶しがられるくらいの執心ぶりだったらしい。いろいろあったが、当主の屋敷の住人にも認められていて、その存在は大きいものだった。……あいつは馬鹿だが、本能的なものは妙に鋭いやつだ。だから、気付いていた」

一呼吸の間を入れ、昶はその合間に整えた言葉を思い口を開き、

「自分は、母親がいる上で認められている存在だと。自分に向けられる愛情も、母親からのおこぼれなのだと。あいつは今も昔もそう受け止めている。……自分そのものを捉えようとしない人間を、あいつは家族として認めなかった。そして、皮肉にも……自分を遮る原因そのものである母親だけが、蒼助を蒼助としてその存在を受け止めることが出来るたった一人の……家族だった」

憎まれ口や恨み言ばかり叩いていても、そこにはいつも何処か親愛を昶は感じていた。

いつか越えてみる、という息巻いているのが自然と察することが出来た。

それは、今思えばそうすることで周囲に己の存在を認めさせるという蒼助なりの距離を縮めたいという想いそのものであったのだ。

しかし、その時はまだ昶は知らなかった。

蒼助の母親は中学に上がる直前に死んでいて、蒼助の世界はとっくに崩壊し、何もかも砕けてしまっていたことを。

「母親の死はあいつにとって世界の崩壊を意味していた。それと同時に、あいつはそこから自分以外の全てを閉め出しちまった。自分は一人、殻に覆われた世界で……失くした世界をもう一度建て直す欠片を探して、な。……欠片そのものが無くなったんだから、元に戻すことなんて出来ないのにも気付かないで」

出口のない迷宮のような世界。

そこで、あの男は見つかるはずのない探し物を永久に探し続けるしかなかった。

「降魔庁に入るってことになって、少しは希望が見えたかと思ったが……結局、それも駄目だった。氷室や朝倉に望みがあるんじゃないかと思ってたんだがな」

「……ここまで聞いておいて今更かもしれないが、早乙女」

しばらく沈黙して聞く耳を傾けていた千夜が、口を挟んだ。

「そろそろ言ってくれないか？　率直に、お前の本心を」

「……そうか。そうだな、”補強”に使う材料もそろそろネタ切れしてきたところだ。もう、いいだろう」

「補強……？」

怪訝そうに己の揶揄した言葉を繰り返す千夜に、その意味を僅かに匂わせてみる。

「今までの話がさ。俺の言葉が、少しでも大きくあんたの中に響くようにする……まぁ、拡声器みたいな役割がある」

「途中寒い台詞が入り混じったようだが、無視しておいてやる。とっとと聞かせてもらおうか」

俺も少し失敗したと思うからそうしてくれる助かる、と苦笑った。
そして、
「大層なことじゃない。ただ、あんたにはやってもらう必要があることを知ってもらうだけだ。――――”責任”、だ」
「責任、だと？」
「そうだ。俺は別によかったんだ。あいつが閉じこもったまま停滞し続けるのなら、腐れ縁のよしみで出来る範囲のことをしてやるつもりでいた。停滞し続けるのなら、な。だが、あいつは……もう動き出しちまった。閉じた世界から出ちまった」
実のところ、気づいたのは結構前の話だ。
あれは、始業式の日の朝。
その日の蒼助のおかしな行動には、それまでの自分のよく知る彼にはない何らかの”変化”を感じていた。
そして、その後学校に来て現れた転校生を前にした時に偶々盗み見た際も、そうだった。
それからして訪れた兆しを理解するのに時間はかからなかった。
考えた。
ついに来たこの瞬間に、自分は何をすればいいのか。
この世話のかかる腐れ縁の相手に自分が何をできるのか、と。
考えた。
考えた。
去る前に出来る最後の仕事とは、と。
その末に思いついたのは――――

「そのきっかけになったのは、あんただ。あんたが、あいつの殻をぶっ壊しちまったんだ。気づいてなかっただろうがな、事実には変わりない。その証拠に、あいつは殻の外で最初に見たあんたに夢中だ。あいつがああなったのはあんたが原因だ……だから」

だから、

「――――責任をとってくれ。あいつの、世界になってやってくれないか」

◆◆◆◆◆◆

首が痛い。

喉も痛い。

というよりも、頭と胴体の繋ぎ目はちゃんとついているだろうか。

「まさか、間髪なしにラリアットで来るとは……さすがに予想してなかっげほっ、がっふ……」

せいぜい平手、悪くて握り拳かと思って侮っていたのが敗因となった。

この苦しみを与えた張本人は、痛恨の一撃を喰らわせると罵倒すらせずに何処かへ行ってしまった。

しつこく首にまとわりつく痛みに咳き込みながらふいに思い出した

のは、望月という男が始業式の朝に出かける前に言っていた言葉だ。

「女は骨……だったか？　だとしたら望月さん、あれは……太すぎだ」

お前の女の好みってやつも親父さんに負けず劣らずだぞ、蒼助。

ここから少し離れた場所で、まだ喧騒治まる気配のない渦中にいるであろう男を昶は思った。

［七拾九］　硝子の境界線（後書き）

あとがき、の前に毎度恒例の天海の戯言いってみよー（深夜だからやはりテンションが少々おかしい模様だ
今回の更新はＷＯＷＯＷでやってた「ファイナル・デスティネーション」シリーズの三作目「ファイナル・デッドコースター」を観ながら書いてましたということでその感想。
結構有名なこのシリーズ、まともに観たのはこれが初めてだったんですが、前からあらすじは知っていました。
興味もって調べてみたら、生き残った前々主人公や前主人公も地味に死んでて、結局誰も死から逃れられていないんですね。容赦無く。
四作目が製作決定したらしいですが、次は冒頭どんなシチュだろか。
どうでもいいが、グロスプラッタなシーンでうとうとするのは止めてくれウチの両親。横でいちいちビビる私と対比すると、恐ろしくシュールな光景だよ。

それじゃ、案の定長くなったけどわかりきっていたことです（オイ
あとがきいきましょうか。
蒼助と昶。見えない硝子板で遮られた奇妙な親友関係。友情で通じることを諦め腐れ縁に甘んじた彼は、新たな世界へと駆け出した男を見送る。その背中を、自分では出来なかったことを出来る少女の元へ押し出して。
蒼助の事情もまた別の機会に全貌が明かされます。

あと一話でこの物語も八拾話。
壱佰話でどの地点にいるのかなぁ、と思いつつ、さいなら。寝ます。

【八拾】　目を逸らす理由

ダンっ、と室内に鈍い殴打の音が響く。

発生の場所は女子トイレの手洗い場だ。

私立なだけあって、その清潔さは公立やそこらのデパートのそれとは比べ物にならないくらい徹底されている。

異臭はおろかところどころに目立つ汚れは一切見当たらず、日々の清掃にも抜かりがないという清掃員の仕事ぶりを誇張していた。

そんな場所で、千夜は片手をつき、項垂れていた。

「くそっ……まともに話せるやつはいないのか、ここには！」

親友の後押し、と聞けばそれは感心なことだと思う。

だが、それも自分が関係していなければの話だ。

蒼助の抱える事情など自分には関係のない事である。

だいたいたかだが知り合って一ヶ月にもならない人間にそんな重大な話を聞かせるとは、あの男は一体何を考えているのか。

相手を選んだというのなら、見当違いも甚だし過ぎる。

「見る目に関しては類は友を呼ぶってことなのか、これは……いや、その前に」

思慮が浅かったことにおいては、自分も他人の事をいえないかもしれない。

あの男が『蒼助の親友』という時点で、そういったまともなことを期待していたのことが大間違いだったのだから。

――――あいつの世界になってやってくれないか。

脳裏に甦る今しがたの言葉に、出て来るのは鉛のような重さの溜息だ。

「無茶を言ってくれるな……何も知らないで」

思わず、振り返ってしまう。

何故こうなってしまったのか、と。

何もかもが自分の思う通りのそれからかけ離れてしまっている。

過去に思い描いていた現在とはかけはなれたそこに、自分は今、途方に暮れて＋尽くしているのだな、と疲れた思考で千夜は状況を分析した。

本当なら――――ここには、既に自分はいなかったはずだ。

神崎陵。

この学園で芽吹かせてしまった災厄たるその男を刈り取る。

事件の後も、ここに残った当初の理由はそれであった。

戦いの中で負った体調の乱れが整い次第、すぐに見つけ出してやるつもりだった。

後始末が済めばこの場所に留まる理由はない。

退学届でもなんでも提出して、姿を消す――――はずだった。

しかし、想定外の出来事の連続に襲われ、それら全てをなし崩されてしまった。

一つは自分自身が犯した決定的なミスだ。

もう一つは――――

「……いや、違う……な」

一人の男の顔を思い浮かべ、すぐさま否定し打ち消した。

あの男が原因であるのに違いはない。

だが、悪いのは自分だ。

蒼助を拒みきれない自分が、本当の悪因なのだ。

大事なところで決断しきれないばかりに、全てが狂ってこうなってしまったのではないか。

「……いつからだ」

いつから、自分は選択を間違い始めたのだろうか。

最初に間違えたのは、何処だ。

「……間違いだらけで、わからないな……」

己を茶化すように呟き、思う。

本当はわかっている。

最初の、決定的な間違いは――――――あの場所、あの時点だ。

だが、何かがそれを肯定することを拒絶し、受け付けない。

心か。

頭か。

或いは、その両方が。

どうしても、あの男を否定する事ができない。否定したくない。

何度も何度

も何度も。

離れていた眠れない二晩の間に繰り返した問答の末でもさえ、決着がつかなかった。

あの男と、

その出会いに、

間違いという烙印を押し付けて踏みにじることが出来ない。
どうしても。

悶々とする頭の中に、再び無意識のうちに木霊した昶の言葉が、頭痛のようにその効果を発した。

「……ダメ、だ………っ」

噛み締めた歯の隙間から零れた否定。
それは、脳裏に張り付いて離れない先程の言葉にか。
それとも胸の奥で高鳴る何かにか。
それを判断することさえ厭い、千夜は蛇口を捻り、溢れ出た水を掬って顔に浴びせた。

◆◆◆◆◆◆

「本人は自覚していないみたいだけど――――――――後ろめたいんでしょうね、きっと」
「……はぁ」

理事長室。
最高責任者の部屋なだけあって、快適につくられた空間に男と女が一人ずつ。
黒髪の悩ましいスタイルの女は黒皮の張られた立派な椅子に腰掛け、足を机に足を乗せて悠々と携帯型ゲームを。
大柄、と済ますにはやや規格外な体躯のオールバッグにセットされた白髪の男は眼鏡の奥に目に余裕など欠片宿さず、山のように詰まれた書類を相手にひたすら機械に勝るとも思えるスピードで手を酷使している。
両者対極的な行動に徹している中、突然呟いたのは女の方だった。
男の作業の片手間な生返事に不快に思った様子もなく、己は己でゲーム画面を見ながら構わず続けた。

「相手が真剣であれば真剣であるほど、それに煽られ真剣に考えてしまう。それでいろんなものを再確認して、気づいちゃったのね」
「……何に、でございますか？」
「自分が今まで積み重ねてきたことがどれだけ後ろめたいことか、よ」

ピタリ、と男の手が止まる。
目の前の上司の怠慢により溜まりに溜まった期限間近の書類を片

さなければならない、という最優先の事項すらも放って女の会話に、作業を傾かせた。

「ですが、それは……」

「仕方なかった、なんていうんじゃないわよ？　それは、千夜（あるじ）に対する無礼も同じことよ」

言葉を先取られ一度は押し黙ったが、男はすぐに言い募った。

「申し訳ございません。ですが……あの方は、今まで業を背負うことを生きることと同様に考えて、割り切って修羅の道を歩んでこられました。妥協に決して屈せず、真正面から受け止めてこられたではありませぬか……何故、今になって」

「……覚悟を持つ人間は、二通りに割れるわ。前者をあげれば――何も持たないからこそ持てる者。心を濁すものも惑わすものも存在しない。だからこそ、何も恐れずあらゆる災禍の中にさえ突き進める……千夜はここに該当するわね」

女の視線は手元のゲーム画面を釘づけたままだが、その目には映るそれではない何かを観ていた。

過去か。

そこにいる者か。

いずれにせよ、女はここにありながら心をここではない場所に飛ばしていた。

「後者は――譲れない大事な何かを抱え、その為ならあらゆることも厭わず恐れない者。……あのコが、今なろうとしている状態」

「黒蘭様……一恐れながらも、それと先程の話はどういう関係が……」

「あら……それは私が話し腰を折っているとでも言いたいワケ？」
「……」
「無言で肯定してんじゃないわよ。生意気ね、このっ」
ぽいっと投げたゲーム機が男の脳天にぶつかり、跳ねた。
その際に角にウマいこと旋毛の位置を抉られたためか、男はその地味な痛みに暫し悶えた。
その姿に少し気が晴れた女は、気を取り直すとばかりに机の引き出しから新たに別のゲーム機を取り出し、今度はパズルの落下ゲームを開始しながら、
「あのコの中で、今その覚悟の形が変わり始めている。いえ……変わるといよりは、まだ崩れる段階よね」
「……もう少し、わかりやすく説明していただけませぬでしょうか。前から言いたかったのですが……貴方、説明は些か理解に苦しむようにわざと回りくどく言っていませんか？」
「今更気付いたの？」
開き直り全開の呆れの返しに絶句する男に構わず、女は自分のペースを重視して、先を行く。
それを観て、男は目の奥から悔しさと共に込み上げて来るものをなけなしの意地と根性で塞き止める。
泣いたら負けだ、と。
呪文のようにそれを唱え、頭の中を満たそうとしたその時、女は何を思ったのか不意を打つように郷愁じみた声を流し出した。
「……ねぇ、覚えてるかしら。あのコが、一人である覚悟を持った日のこと。誰の手を借りずに、一人で立てる様になりたい、と言い出した日のこと……」

その瞬間、男の中で思考が一気に切り替わった。
先程までの恨みがましい気分があっさりなくなってしまったことには、男自身も溜息をついてしまうほどの単純さだと自覚している。
時折見せるこう言う一面が、男が完全にこの女を邪見に仕切れない原因だった。

そういう時、女が何を思ってそうなるかは決まっていた。
この人をからかうことだけが永い永い生を食い潰す暇つぶしとしているロクでもない女が、唯一自分以外を真剣に想うのはたった一人しかいない。
己が敬する人を、同じように、もしくはそれ以上に想っている。
ただそれだけの共通点が与える共感が、男にこうした損な扱いを甘んじさせてしまうのだった。

「忘れるはずが、ございません」

どうして忘れることが出来ようか。
言葉の裏にそう刻みながら、男は己の主の痛々しい記憶の一部を思い返す。

何もかもを失った幼い子供。
何を失ったかさえもわからない中で、少しずつその空白を埋めるように新たに何かを手に入れていこうとしていた矢先の悲劇。
それが子供に何もかもを捨てさせた。

それは、守るべく差し出された手だった。
それは、或いは共に歩いていた隣人だった。
或いは、己をいとう心でさえも。

「人が信じれなくなった……だったかしらね。馬鹿な子、初めてついたにしても出来が悪すぎる嘘だったわ……」

そんな嘲笑の中にも、労わりの欠片の存在を男は感じれた。

「でも、それからしばらくはそのチンケな嘘だけが味方だったわね。しかも、それがあのコの覚悟を固め、維持する最大の力にもなった……なんともいえない屈辱だったわ、あれは」

何度目かの己の汚点となった出来事だ、と男は苦いものをかみ締めるように口を絞った。

流暢な口調だが、それは目の前の女の方とて同じことであるとわかっていた。

大事に思われている。

その事実は上回ることのない至上の喜びとして受け入れるべきことであった。

だが、それは同時に何をさせてはくれないという苦々しい、もう一つの現実をも露見させた。

常に主は一人で道を突き進んでいた。

その隣には、誰も置かず。許さず。

男と女はその後ろを歩き、先を往くその背中を見つめながら後に続くしかなかった。

その後ろ姿は、立派であったと思う。

しかし、その背中は同時に主が独りであるという象徴でもあった。

見る度にそれがもどかしく。

どうしようもなく、歯痒かった。

そして、何よりも感じたのは己に対する無力感だった。

それはきっと、表面上見せはしないものの彼女も同じはずだ。

或いは己よりも遙かに強く、絶対的な力を誇る彼女の方がそれを痛感し、強く想っていたかもしれない。

「東京へきて、若干それも変わったけど、あのコの一人でいるという体勢を崩すには至らなかったわ。周りにも、出来なかった。あのコ自身も、それが出来なかった。その勇気が足らなかったからね……

……どっちにも」

千夜に惹かれる人間は今までにだっていた。

決して悪い意味だけではなく、正しい意味で千夜に近づきたいと想っていた者はいた。

しかし、誰も彼女のその姿勢を崩すことも崩させる事も出来なかった。

崩すに前に去らざるえなかった者もいた。

少女に突き放される事を恐れ、行動出来なかった者もいた。

今も尚、彼女の側に居続ける人間は後者だ。

前者は――――――悪意を以て惹かれた人間に呑み込まれ過ぎ去った者。

出会いに恵まれていても尚なのか。

それとも恵まれていないのか。

少女は、依然として一人で居続けることとなった。

「でも、それがここにきて――――――ようやく、崩れ始めた」

男の眉間が無意識のうちに皺寄る。

それを見てか、女は薄く笑った。

何が原因か、語らずと悟ったのだろうと意味を汲みつつ、己の言葉を続けた。

「生き方を変えるって、一言で言えるもんだけど中身はそんな簡単なものじゃないわ……場合によっては、それまでに生き方でつくったモノが次の生き方に足枷となって妨げになることだってあるんだからね。……特に、あのコは常人には受け入れ難いものを一つどころか三つ四つと引っさげてるのよ？　知られてもいいなんて、相手をホイホイ受け入れることなんて出来ると思う？」

「だから……なのでしょうか」

「それだけじゃないでしょうけどね」

かたん、とゲーム機を机上に置いた。

パズルが積み重なって行くゲーム画面から外された視線は、宙を越した何処かに放られていた。

「……一人で生きるのも、誰かと生きるのも難しい。楽に生きる事など出来やしないということをわかった上で……あのコはどう選択するか。こればっかりは、私たちが口出しする問題ではないわ。答えとは常に明かされることではなく、明かすもの。与えられるものではなく、見つけるもの。……出題者や横で聞いててわかった者が与えるのではなく、問われた本人が見つけるのよ」

「黒蘭さま……」

「私は信じるわよ？　私が見守り、守って来たコが、これからもそうするに値する者であると。あんたはどーする？」

「わ、私とてっっ」

「だったら、さっさとさっきから御留守中の手を動かしてくれなーい？　それ、全部今日の三時までに提出待ってもらってる書類なんだから」

「なっっ！？　何故貴方は毎度毎度ギリギリになって提出期限を明

かすのですか！！！」
「そりゃぁ……あんたを信じてるから？」
「何ですかその信憑性皆無の疑問系な返答は！！　わざとですかっ？　一体何処までがわざとなのですか！？
「紙面から目ぇ離して喚きながらも高速でペンを走らせるとか面白い光景を生み出してくれるあんたのイジリ甲斐を信じてるのはほんとだから早くやって。あと二時間もないわよぉ～」

ぬおおおっと若干泣きが入った唸り声をあげる男の神がかったスピードの動きとその奮闘ぶりを鑑賞しつつ、女は既に思考を別のものへと切り替えていた。
もう一人の、生き方の選択を迫られている男のことに。

「さて……どうするのかしらね」

彼は気づくことができるだろうか。
そして、全てを知った上でそれらを受け入れることができるだろうか。

己が見込み、大いに期待する男の為す『応え』がはっきりと読めない状態を、女はひどく楽しく感じて微笑った。

◆◆◆◆◆◆

ぴちょん。

幾筋と顔面を流れ、離れた一滴が洗面台を跳ねてか弱く音響いた。
何度も顔に水を浴びせた。その冷たさが滲みて、己の荒れる精神を鎮めるまで、何度も。
前髪が滴るのも構わず繰り返した結果、先程よりも頭の中で燻っていた熱は収まりをみせるようになった。

「……はぁ」

しかし、漏れる息はいまだ熱い気がした。
完全に落ち着きを取り戻した、とはいえない。
奥に奥に、と渦巻くモノを無理やり押し込めただけに過ぎなかった。

だが、それでいい、と千夜は満足していた。
まともに向き合うことだけは避けられれば、それさえ出来れば構わなかった。

「……どうするかな」

ふと思い浮かび、新たに対峙したのは今日の下校後だった。
蒼助にはつい、今日は帰ると言ってしまったが、ああなっては帰れるはずもない。

「……仕方無い、また暫くホテル巡……――――」

口にかけた言葉が、唐突に思考が停止すると同時に途切れる。
脳内の作業を滞らせた原因は、不意に浮かび上がった一つの疑問だった。

何故、そんなことをする必要が在るのか、と。

寧ろ帰るべき要素が溢れている。
家には自分の不在に不安を募らせて睡眠を削る妹が待っていて、自分の身体の為にもこれ以上の無理はよくない。
家に帰れば、蒼助がいるだろうが、危惧するようなことは無いと先程わかった。
正確な根拠はないが、あの男はきっと約束は守る。
いろいろ裏切られたが、それだけは信じてもいいと千夜は思う。

危険がなくなったにも関わらず、我が家に帰りたくない。
そう思うこの感情は一体何なのだろうか。

「何で……俺は、」

零れ落ちる答えを探す言葉を、脳裏を過る言葉が遮った。

――――意識してくれてるのか？

言葉が並んだ瞬間、頬で熱が一気に高まった。

「……っ、違う！」

荒々しい声色で否定を吐き、千夜は衝動的に頭を振った。
しかし、一度冷めたはずの熱は一向に収まりをみせない。
頭がおかしくなりそうだ。

ここにいてはいけない。
何処でもいい。

ここではない何処かへ行きたい。
あの男から離れたい。
後先など考える余裕は千夜にはもはや一切残されていなかった。
――――故に、気付けなかった。
「――――終夜千夜さん？」
背後からの声。
何処か刺々しい。
考えもしていなかった出来事に、千夜はハッとして振り返る。
そこには、見覚えの無い女が三人。
誰だ。
そう思いながらも、千夜は向こうの観察に入った。
念入りに施した化粧は女たちの顔を見事に美しく飾り立てて、大人びさせていた。
とても真面目といった感じではなく、遊んでいますと姿で語っている。
このやたらと発している上から目線で見ているような雰囲気からして、おそらく三人とも揃って上級生だろう。
観察を終え、千夜が自然と次に移ったのは疑問だった。
彼女らと面識はない。
そんな彼女らが自分に何の用で声をかけたのだろうか。
そもそも何故、名前を知っているのか。
疑問が積まれていく。

しかし、相反して解答の要素となりえるものは一切わからない。

「やっと、つかまえた。会えるのに二日もかかるなんて思わなかった」

「教室にいないと思ったら、こんなところにいたんだ。先輩として言わせてもらうと、サボり、良くないよー？」

女たちは状況を飲み込めない千夜に、軽口を放ってくる。

彼女らの開口に、千夜は思考の世界から我に返った。

疑問に気をとられて、千夜は向けられている視線に対し意識を向けるのが遅れた。

込められているもの。

どう感じ取っても決して友好的なものではないそれは、彼女達が内に秘めるこちらへの感情そのものであった。

「ねぇ、暇してんなら私たちにちょっと付き合ってくれない？」

己にかけられる言葉は、どれだけの毒を含んでいるのか。

考えるまでもなく、そして知る必要も無い。

今すべきことは探求ではなく、彼女たちとの関わりを回避することだ。

長年培われた危機的判断が、千夜にそう告げた。

疑念など持たず、従う。

今までそうしてきたように、千夜は今回もそれを選んだ。

女たちの言葉など聞こえなかったかのように、千夜は目を伏せてその横を何事もなく通り過ぎようと前へ出た。

――――しかし、千夜はここで重大なミスを犯していた。

ここまでにかなりの神経を削り、注意力の散漫した千夜は観察と対処に対する考慮を怠った。

女達の高圧的な雰囲気は、他者を従属させ、踏み躙ることを当然としてきた者であるから発するものであること。

そして、それらを当然としてきた彼らは自らが見下げる存在が従わないことを頑として良しとせず認めない。

故に、彼らは――――

「――――すかしてんじゃねぇよ、バーカ」

どんな挑発も無視して振り切るつもりでいた千夜を、予想を上回る出来事が襲った。

女達の横を通り過ぎようとした並んだ瞬間に、それは起こった。

「――――っっっ！！！？」

右腹部に炸裂するような衝撃。

思わず息が止まったその直後、自然と膝が床に落ちた。

次に後を追うように意識が堕ち始める。

完全に堕ちる寸前、ここで千夜は己の失態に気付いた。

征服者を気取る彼らは、己への他者の服従を絶対として妄信している。

故に、彼らは――――手段も選ばず、いかなる方法をも用いる、と。

しかし、後悔する時間は残されていなかった。

地面の上を身体が打つと同時に、千夜は意識を手放した。

［八拾］　目を逸らす理由（後書き）

復活、天海。
お騒がせしましたー。
約束していたゴールデンウィーク期間スタートですね。とりあえず、一話アップです。

中間パートでの奴らのことだが、マジで学園の経営者。資金は黒い方が巧妙な手口を行使して株でよその大企業潰したりして荒稼ぎしているが、書類とか細かいところは全部白い巨人さんが押し付けられている。
高速で死にそうな思いで黒が溜め込んだ大量の書類を毎回片付けているが、一枚一枚の字は超達筆。さりげに几帳面だからどんなにきつくてもそこは譲れないそうな。

終盤、なんか危険な匂いを残して終わりましたが。
王道的展開が待っていると予感した人、貴方はわかっていらっしゃるな。
ところで、ふと思ったのですが、ありきたりと王道の違いって何なんでしょうね。

それではまた明日。

「八拾壱」　失態の代償（前書き）

咎は誰に在るのか

【八拾壱】　失態の代償

「む、無念……っ」

やけに芝居がかった声と共に、最後の一人が床に倒れ込んだ。
その男の下には、少し前にいち早く伏した一人が。そして、その周りには同じように地面に敷かれるその他大勢の人間が、各々負傷を負って白目を剥いていた。
そして、その上に唯一立つ男は息が若干荒いものの傷一つ見当たらない。
呼吸をある程度整えたかと思えば、一度は緩めた表情を再びギッと強ばらせ、ある一方をぐりんと振り返った。
その視界が捉えた目標は呑気に丼を持って、エビ天にプリプリシャクシャクと齧り付いていた。

「……くぅぅぅるぅみぃぃぃぃ」

空気を鈍く震わす声色がこもる息と共に吐き出された。
力強く一歩踏みしめるたびに足下で潰れたヒキガエルのような呻きが上がるが、蒼助は無視して新たな標的に歩み寄る。
久留美がエビ天を丸々口に頬張った時には、その姿を見下ろせる位置まで接近してしまっていた。

「何、もう終わったの？　私お昼にしたばっか――――」
「知るかヴォケ」

久留美の言葉を一蹴し、ガッと襟首を掴んだと思えば、蒼助はそのまま久留美を軽々と宙に浮かせた。
突然、足が地面から離れた状態となった久留美を襲うのはニュー

トンの法則を無視したことによる重力の応酬だった。
ギリギリと襟首に締め付けられる喉元は酸素の通過を妨げる。
久留美の顔色は平常色から赤へ一転した。

「ぐ、ぇふ……ちょっ、いきなりっ……」
「そりゃぁ俺の台詞だわなぁオイ。教室行ってみりゃ誰もいねぇわ、担任は後で全員課題提出だとか抜かすわ、ようやくアイツを捕まえたかと思えば外野に邪魔されるわ……ほんと、どーゆーつもりなんだろうなぁ？」

きゅっと更の絞まる。
イカン、と久留美は一つの既視感（デジャビュ）を覚えた。

マジ切れしている。
あの時と同じだ。

息が詰まり顔が赤くなる一方で、内心サッと血の気が引く。

「ま、待ちなさっ……話を」
「おー、聞かせてもらおうじゃねぇか。俺を納得させられるような内容（モン）ならなぁ」

凄む言葉と同時に足先が地面が少し遠のく。
上昇と共に体に負荷が加算され、呼吸はより困難な状況に追い込まれる。
久留美の顔色は赤から青へ変化し、危険領域へ突入し始めた。

「ぐ……ぇ、っ」
「あー？　聞こえねぇな～？」

このドS野郎がっ！、と薄れ始める残された理性で久留美は言葉なく毒づいた。
いよいよ視界が白くなり始め、もうダメかと思われた時、

「このアホッ、オチてまうやろが！」

これ以上は危険と空気を読み、止めに入ったのは七海だった。
何処から持ってきたのか、ガムテープでがっちり固定された紙のハリセンのフルスイングは蒼助の頭部側面を思い切り直撃し、衝撃は脳を揺さぶった。
思い切った不意打ちは久留美を責め苦から開放させた。
咳き込む久留美の傍目で、蒼助は蹲って手加減なしで殴られた頭を抱える。

「ぐぉぉっ……な、七海ぃぃっっ」
「やかましい」

ねめつける蒼助に容赦なく今度は切るような垂直な一撃が、これまたスパンと気持ちのいい音をその脳天にて響かせた。
グハッと追撃に呻く蒼助に七海は得物たるハリセンを肩に担ぎ、

「ええから聞けや、スカタン。今回ばっかは久留美やのうて、あんたが悪いんやで」
「っ……ああ？　何でだよっ」
「そのまんまの意味や。あんたの不始末が諸悪の根源なんやからな」
「不始末って……どういう」
「――――――そのまんまの意味よっ！」

言葉を終わりを遮るように、まだ少し涙目の久留美が膝をついて腰より下の位置にある蒼助の脳天に振りかぶった踵を落とした。

トドメとなったその一撃に、蒼助は今度こそ悶絶に陥った。
思った以上に硬かった目標物に久留美も若干痛みを被った踵を押さえながらも、

「ったく、とっかえひっかえしてる割には女の扱いがなってないわよ。おかげで私たちが骨折ってんだから……」
「……だ、だから一体何だってんだ」

おそるべき耐性力の賜物か、重なる痛みの中でも蒼助は返事を疑問という形で返した。

「お前、学内のセフレ全員を切り捨てたんだってな」

噛み合わない応えを返したのは七海でも久留美でもない。
いつの間にか蒼助の傍にやってきた昶だった。

「何で、それを……」
「失敬するぞ」

驚く蒼助を無視して、昶は旧友の学ランの内ポケットに手を突っ込んだ。
何しやがる、と喚く蒼助に構わず取り出したのは携帯電話。
そのまま我が物顔でアドレス帳を開く。
そして、

「ああ、ほんとだ。しかし、綺麗さっぱり片付けたもんだな」

そこにあるはずの女たちの名前がこれでもかというくらいに綺麗になくなっていた。
さぞ迷いなく消去していたであろう姿が昶には安易に想像づいた。

「聞けよ！　何で、お前がそのこと知ってんだって！！」
「知らないのは、噂の渦中であるお前と終夜だけだぞ。あれだけ校舎を四六時中駆け回ってりゃ、誰の耳にだって知れ渡る。それに、お前……」
「――――目撃情報その一、月曜日の三時限後の校舎四階にて三年女子生徒と口論。興奮したように言い募る女子生徒をまともに相手にせず、そのまま立ち去る」
「……は？」

　昶と面していた蒼助は耳に届いた別の声が紡いだ先日の己の行動に、何を突然、と振り向いた。
　手帳片手にそこに書かれていることを読み上げたであろう久留美は、更に続ける。

「更に、同じような目撃情報、第二、第三……全部で十八よ。違うところといったら、相手の女くらいね。これ全部――――あんたのセフレでしょ？」
「だから、何だよ……もう手は切った、関係ねぇ」
「……関係ないって……そんな風に思ってるのはおめでたいあんただけよ、この馬鹿！！」
「誰が馬鹿だ、この出しゃばり女！」
「言ったまんまでしょ、この無駄撃ち男！」
「てめぇっ……！」
「何よ、ほんとのことでしょ！　その面下げて否定しようってわけ！？」

　神経のささくれ立った今の蒼助は通常よりも短気になっていた。
　これ以上の挑発は危険と判っているはずの久留美もこの場で限りは加減を忘れて煽りを立てた。

一触即発の空気が爆発寸前なのを逸早く察し、動いたのは、

「ちょっ……そこまでにしとき！　キレ過ぎやっ」

「蒼助、お前もだ」

取っ組み合いを始めそうな二人を背後から羽交い絞める。

自らの動きに抑制をかけられたおかげが、久留美と蒼助はそこで勢いを若干弱めた。

ふぅ、と昶は蒼助の後ろで溜息をつき、

「新條じゃないがな……今回はお前が悪いのは間違いないんだ」

「ああ？　だから、何でだって聞いてんだろが！」

「あのな……」

アドレス帳を開いた蒼助の携帯を本人に見せるようにしながら、昶は話を切り出した。

忘れかけていた驚愕が蒼助の中で甦る。

「みんな知ってるんだよ。新條がさっき言っただろ。あんだけ人目を憚らず別れ話切り出してりゃ、誰の耳にも広がるだろうさ」

「憚ったっつーの。俺はちゃんと、人気のない場所に呼び出して……」

「この学園に本当に人気がない場所があるわけないだろうが。いつ、どこで、人が聞き耳たててるかわからないようなところだぞ」

昶の言い分に、蒼助はぐっと詰まる。

無論、この学園内でそういった油断が命取りであるということは既に一年という時間の中で育んだ経験で熟知していた。

外で呼び出すなりなんなり他に安全な方法はあったことも確かだ。

しかし、今の蒼助には時間に余裕というものがない。

その為に手間を惜しんだがために、見事に失態を招いてしまったらしい。

「ちなみに、聞くが……お前、別れ話になんて言ったんだ？」

何処か諦めた感を含む昶の問いに、蒼助は突然何を聞くんだと言葉に迷う。

少し間をおいて、

「なんてって……別にたいしたこと言ってねぇよ」

「なら、そのたいしたことない台詞とやらを言ってみろ」

妙に力のある昶の言葉に押され、

「……”もうお前を抱く必要が無くなった。だから、俺とお前の関係はこれっきりだ”」

躊躇を拭いきれないまま言われるままに告げる。

すると、食堂の気温が一気に下がったような感覚が蒼助を襲った。絶対零度。空気はまさにそう当てはまるかのように、冷たくなっていた。

ハッと周りを見回せば、それぞれランチをとりながらこちらを遠巻きに眺めていた女子は冷たい眼差しを、そして気絶していたはずの男子までもが傷ついた体でふらりよろりとゾンビの如く甦ろうとしていた。

突き刺すような白い目が己に集中していることに対し、蒼助は真剣に意味がわからず戸惑った。

「お前……」

「な、何だよ。何かまずかったかよ」

「言うに事欠いてそれかいな……ありえへん。悪びれもなくそないに言われたら、あの人らやのうても……こら、キレるわぁ」

昶や七海までもが、どうしようもない人間を見る目で蒼助を見ていた。

孤立無援の渦中に置かれた蒼助は、ただ一人状況を理解出来なかった。

「……っとに、馬鹿じゃないのアンタは！！」

俯いていた久留美は、七海の拘束を振り払い蒼助に勢いのまま掴み掛かった。

「アンタのその雑な後始末のツケが誰に回ってると思ってんのよ！！　呑気にケツ追っかけ回してんじゃないわよ、この色ボケ頭っっ！！」

「あ、ああ……？」

唐突に怒り狂い出す久留美についてゆけず、蒼助は呆気にとられるばかりだった。

「落ち着け、新條」

「だっ……ごめん」

かかる昶の制止で、無理矢理胸の奥の熱い感情を押さえつけるかのように久留美は口にしかけた言葉を呑み下すと、代わりに装い程度に冷静さを表に引き出そうと心がける。

そして、やや冷静さを取り戻した目に蒼助を映し、

「……蒼助、プライド傷つけられた女ってね……怒りの矛先が

無茶苦茶なのよ。例えば、当人じゃなくて……当人の視線が向けられているその先の誰かとか、ね」

含みのある言葉に、蒼助は捉えどころのなかった話の中にようやく何かを見た気がした。

「……なんか、あったのか？」

「なかったら、今頃クラス総出で授業放棄なんてしてないわよ……はぁ」

ようやく話になってきたと溜め込んだものを吐き出すように溜息づいた。

「昨日、上級生の女三人がうちの教室に来て千夜を指名してきたわ。この場にいないとわかったら、居場所まで聞いてきた。去り際はご丁寧に憎憎しげに舌打ち残してね……で、その時いた早乙女くんが顔に覚えがあるって教えてくれたのよ……」

久留美の視線は僅かに動き、蒼助の背後の祠を示す。

振り返る蒼助に祠は、拘束を解き、

「……正確にはその中の一人に、だ。【志野智晶】、だったか。俺が名前は覚える程度にはお前とは長い方の奴だぞ、確か……覚えてるだろ？」

祠のいうように、他に比べれば幾分記憶にはある女だ。

蒼助とだけではなく、他にも何人か男と関係を持っている。

その一点集中しない執着心の薄さを気に入り、関係も長く続いていた。

彼女にとっては自分は関係持つ男の一人でしかないと思い、携帯

からアドレスと電話番号を抹消しただけで、直接話をつけにはいかなかった。志野智晶という女はそうした一人だった。

その彼女が、何故千夜に接触を図ろうとするのか。

意味がわからず理解に苦しむ蒼助の心境の察したのは、

「……何でって、顔だな」

向き合っていた昶だ。

「お前がその女をどう捉えていたか知らないが……その実質は違ったというだけだろ。現に、終夜を探してた時のあの女の顔は……まるで、般若みたいだったぜ」

「……。それで、何でお前らは？」

「お前の選ぶ女ってやつは、どいつもこいつも気の強い我の強い女ばっかりだからな。……何かあったら完全に巻き添えだろ、終夜は。それで久留美が作戦を提案して、ここにいる連中が賛同して協力してくれたってわけだ」

ナイスフォローだったろ、と呟いた言葉に蒼助は返す言葉などなかった。

「まぁ、さすがに連日で出来ることじゃないから今日でお前を捕まえて、話をつけさせるつもりだった。で、お前はまんまとこっちの手筈通りに動いた、と」

「……話をつけさせるって」

「あのコと、あんたの昔の女に対してにに決まってるでしょ！」

話の間に掻き分けるに割り込んだのは久留美だ。

眉尻をきりっと上げ、眉間に皺を寄せる久留美は蒼助を襟首を掴み、ぐっと引き寄せる。

「土下座なりリンチなりされなさいよ。ナニされたってあんたが悪いんだから、当然無抵抗に徹しなさいよね。――――あんたが踏みにじってるのは、それだけの償いが必要なものなんだから」

「何で、そんなこと」

「その女にっていうのが嫌なら、千夜に謝るつもりでしなさいよ。つーか、その女のとはどうでもいいのよ、実際は。私が腹立ってるのは、あのコに対する誠意が全然ぞんざいな上、いらん火の粉をあのコにひっ被せてることに対してよっっ！」

「っ……」

確実に痛い急所をついてくる久留美の言葉には、反論の余地がなく口を噤むしかない。

「言ったわよね……あのコを踏み躙るようなことしたら承知しないって……私、あんたにこの前言ったわよね……？」

低く落ちる声。

きつくなる眼差しはその持ち主の怒りを蒼助に嫌という程知らしめる。

かつて見た事のない久留美の激昂する姿に、蒼助は呆気にとられて反抗という意思を忘れた。

「くる……」

「――――と、に、か、くっ！！」

「ぐえっ！？」

いきなり絞めあげられ蒼助は呻くが、久留美は容赦しない。

「わかったら、とっととその女が来る前に自分から行きなさい！」

「ちょっ、くっ……しまっ」
「四の五の言ってんじゃないわよっ！　嫌とは言わせないわよ、こっちにはあんたの人生ブチ壊せるだけのネタこさえてんだから、それが嫌なら……」
その次の瞬間、突然久留美の表情から抜け落ちたかのように感情がスッと消えうせる。
蒼助は目の前の出来事に、今度は何だ、と反射的に身構えた。
が。
「……早乙女くん、あのコは？」
呟きのような問いは目の前の蒼助にではなく、真逆の背後――――祖に向けられていた。
そして、すぐさま振り向き、
「ねぇ、あのコは？　さっきまで一緒にいたわよね……いたじゃないっ」
「ああ、終夜ならここに近いトイレに行ったが……」
ラリアットの強襲の後、咳き込む中でそれでも見逃さずにおいた千夜の行方を告げたが、祖の言葉も途中で行き詰まるように勢いを落として止まる。
久留美と同じように、一瞬表情が失せたかと思えば、次に浮かび上がったのは苦渋が滲み出た表情だ。
そして、
「すまない、注意が足らなかった……」
彼女はまだ戻ってきていない。

時間はまだ不審が沸くほど過ぎていない。
だが、狙われている人間から目を離す、というのはこれ以上に無い致命的な失態（ミス）だった。
嫉妬に狂った鬼と化した女ほど、行動に見境が無い。
ましてや、志野千晶という女は真面目とは言い難いタイプだ。
授業をサボって嫉妬の対象を探し回っていたとしてもおかしくないだろう。
ひょっとしたら、外で二人で話していたところを見られていたかもしれない。
しかも、気配の有無は、あの時ばかりは周囲への注意が散漫していたが為にわからないのだ。
この代償は大きい。
昶が己の失敗がどれだけのものなのかを分析し終えた時――――――
「――――――蒼助っ！」
我に返って見た昶が見た蒼助は、既に背を向けて食堂から出て行くところだった。

◆◆◆◆◆◆

薄暗い。
浮かび上がった意識が確認したのは、まずはそれが最初だった。
そして、徐々に焦点が明確になりつつある視界で周囲を捉える。
ここは何処だろう、という疑問には、視界が得る情報が応えた。

並ぶ数台の跳び箱。
篭の中で積み重なる積み重なり入るバスケットボール。

特徴的にも程があるそれが場所を意図せずとも証明していた。

……体育用具倉庫、か？

だとすれば、この体の下の固く荒い布の感触はマットだろうか。
起き上がろうと身を動かした――――つもりだった。

「……っ」

思ったこと実行できなかった。
意識を取り戻した途端に、体が酷い倦怠感に苛まれる。
それは、痺れという形で襲ってきた。

「――――目覚め？　お姫様」

現状と前後の記憶がはっきりしない千夜の耳に、嘲るような声が響く。
持ち主を女、と認識し身動きの聞かない体を横たえたそのままに、

視線でその存在を追う。
気だるい眼を動かして漂わせた視線が見つけたのは、暗がりに佇む三人の女の影だった。
その刹那、何かが急接近する。

「――――っ！」

飛来した『何か』は、千夜の腹部の上を強く跳ねる。
叩く痛みに千夜は悲鳴はあげなかったものの、喉に息を詰まらせた。
軽く咳き込み、己の腹の上を跳ね上がった物体が地面の上を転がるのを凝視する。

バスケットボール。

突然の暴挙に、千夜はその発射元をきつく細めた眼差しで刺すように見つめた。

「あら、お気に召さなかったみたいね。〝猫〟は、ボール遊びが好きな生き物だと思っていたのに」

不思議そうに首を傾げながら笑う中央の女。
前へ一歩出て、暗がりでも若干わかるようになった顔は化粧に彩られ、実に綺麗な女としてその存在を演出しているが――――――
その笑みは、美しいはずなのに何処か歪んでいる。少なくとも千夜にはそう映って見えた。

そして、女の顔を見て、千夜は霞んだ記憶を明確に修復させる。

化粧室。

出ようとしたところに上級生の女三人。
通り過ぎようとしたところ、何かの衝撃。
暗転（ブラックアウト）。

一つ一つピースが嵌って埋まる空白、パズルの完成。
全てを思い出した。
恐らく気を失った後、この女たちによってこの体育用具倉庫に運ばれたのだろう。
最低限踏まえておくべきことを理解をすると、千夜は女の発言に中に混じっていた不可解な言葉に意識を向けた。

「……猫？」
「猫でしょう？　何が違うの？　――――――この」

泥棒猫。

紡いだ唇が、ぐちゃりと歪んだように見えた。

【八拾壱】　失態の代償（後書き）

再開したはいいものの、皆が休載中に鮮血ノ月を見限ってしまっていたらどうしようと授業中も不安に駆られていましたが、杞憂で済んで何より。
待たせたなー、皆。

終盤、いわゆるお決まりな体育用具倉庫。
可能性はいろいろあれど、鍵がかかっているはずなのに、何故か入れるという学園もの七不思議の一つ（七つ以上かもしれないがこのイベントは、転がり方次第で暗黒ルートと進展ルートに大きく分岐する恐ろしいものである。

……。

――――いいやぁぁぁっっ暗黒ぅはノォォ！（乱心

……ふぅ。一瞬想像してしまった最悪の結末に思わず心が千切れ飛びそうになりましたですよ。
私と蒼助の目が黒いうちはそっちに転ばせはしやせんぞ……たぶん（言い切れ

【八拾弐】　絶望の再現（前書き）

わかってなんかやるもんか

【八拾弐】　絶望の再現

「何だと……？」

泥棒猫、と不名誉な称号を突きつけられ、千夜は当然顔を顰めた。同時に目の前の女が何を言っているのか、不可解の念が一層と増す。

「やっだ、今更とぼけんの？」

「しらじらしー」

立ち位置的に女の取り巻きと思われる左右の女たちが嘲笑と軽蔑に満ちた言葉を吐き出し始める。

「みーんな、知ってんだから。あんたが玖珂くん取っちゃったって話」

「さいてー。綺麗な顔してるからって、何してもいいわけないでしょー」

玖珂。

蒼助の名前が出てきたところで、千夜は目の前の女たちが何の目的を持って近づいてきたのかを察した。

「お前達……お前は、あいつの……」

「千晶は玖珂くんの恋人よ。セフレじゃなくて、正真正銘のね」

友人であろう一人の言葉に、千夜は頭を金槌で殴られたような衝撃を覚えた。

「……こい、びと？」

目の前の女が蒼助の恋人。

言葉として表された事実は、千夜の思考が情報として処理するのに時間を要するものだった。

「うそ、あんたマジで知らなかったの？」

「自分が本命だとか思ってたわけ？　図々し過ぎぃ～」

ケラケラ、と笑い出す女二人の声も千夜の耳には入らなかった。

心ここにあらずの千夜の様子を、呆然の姿勢ととったのか、智晶と呼ばれた女はしなやかな歩みでその枠から外れて、両肘を支えに上半身を浮かせる千夜に近づく。

そして、その僅かずれたマットに己の片膝をついて、

「本当に、知らなかったのね。ごめんなさいね、〝いつもの遊び〟だと思ってたから放っておいたんだけど」

いつもの遊び。

その点は、事実なのだろう。

愛だの恋だのという事柄をそういう風に扱える男だということは、千夜も長いとは言い難い関わった僅かな時間の中で知っていた。

「彼、気が多いから目に留まるとすぐね……でも、いい加減にしておくように、私からちゃんと言っておくわ。今回は、これで許してあげる

――――――だから、もう二度と彼に近づかないでくれる？」

パン、と乾いた音が響く。

払うように手の甲で打たれた顔は勢いで、ぐらりと動いた。

その動きで乱れた前髪が千夜の表情を隠す。

「ふん」

自分のモノに手を出すな、と絶対の自信を以って牽制する様は、まさに揺るぎ無い地位に座る者の振る舞いだった。

反応を示さない千夜に、智晶は自分の言葉が十分な衝撃を与えたのだろう、と思いほくそえんだ。

その打ちひしがれた顔を見てやろうと、智晶は顎に指をかけて俯いた千夜の顔と引き上げた――――――が。

面した顔が放ったのは、想像を大きく裏切った台詞だった。

「――――――いい加減にするのは、お前の方だろう。身の程知らず」

そこに智晶が想像していたような絶望した表情は微塵も存在していなかった。

在るのは、不快を露にした貌(かお)。

詰られる側でいたはずの千夜は、今は逆に不遜さを湛えた表情で智晶を見下すように睨み付けていた。

己の想定を容赦なく切り捨てる展開に、智晶は言葉を失い戸惑った。

その僅かな隙も見逃さず、千夜は畳み掛けるように、

「あいつがお前のような女の男だと？　蒼助を侮辱しているのか」
「侮辱、ですって……？」
突きつけられた言葉を問うように繰り返す智晶を嘲笑い、千夜は続けた。
「わからないのなら、はっきり言ってやろうか。……お前のような、自分の程度の低さもわからないような女では――――玖珂蒼助には釣り合わない」
言い切った途端に、再び頬を弾けるような衝撃が襲う。
先程よりも力は強かった。
「黙りなさい！　何様のつもりよ！」
「……随分と取り乱すんだな？」
打たれた頬の熱さとじくじくと疼く痛みにも顔色一つ変えないまま、更に相手を翻弄するような口調で煽り立てる。
「お前は、確かにあいつの女なんだろう？　気まぐれにちょっかい出された程度でしかない泥棒猫の言うことに、どうしてそんなに気を荒立てるんだ？」
「っ……」
「どうした、反論すればいい。私の言っていることが、まったくの的外れなら……言い返せばいいだろう」
「――――っ！！」
言葉に代わりに見舞われたのは再び衝撃だった。

「……出来ないのか？」
「う、るさい……」
「ハッ……脆い自信だったな。滑稽にも程がある」
「うるさい……っ」
「私が黙ったところで――――――お前が無様、という事実は変わりはしない」

その瞬間、平手とは比べ物にならない強さの打撃によって、言葉の端まで言い切った千夜はマットの上に倒れこんだ。
口の中にじわり、と滲むのは鉄の味。
舌に染み込むそれが口内を切ったことを千夜に明確に認識させた。
拳で殴られたのだ、と理解して間もないまま首に圧迫がかかった。

「うるさいうるさいうるさいうるさいうるさいっ！！！！わかったような口を……よくもっっ！　あんたに何がわかるのよ、横から図々しく入り込んできたあんたに何がっ！！　私は、蒼助と一年も一緒にいるのよ！　彼に数え切れないくらい抱かれたし、彼が私以外のたくさんの女と関係があることも散々知っているわ！　でも、我慢してきた！！　彼を理解しようと、私も他の男と寝たりもしたわ！　鬱陶しくまとわりついたり、過剰に干渉する女を蒼助が嫌うのを、そうなったら簡単に切り捨てるのを知ってたから！！　だから、見限られないように他の男とも関係を持って距離を調節して……なのにっ……なのに、なのに何であんたみたいな奴が簡単にとっていくのよ！！　散々努力してた私は何だっていうのよっっ！！！」

先程までの余裕は何処かへ消え去ってしまったかのように、綺麗にセットした髪を振り乱し、智晶は目を血走らせて千夜に箍の外れた感情のままに凄む。
千夜に言葉によって、プライドを木っ端微塵にされた智晶にもは

や自制心は欠片もなく、胸とぐろを巻かせていた嫉妬はむき出しとなっていた。
自制を振り切った智晶は加減も何も無く千夜の首に両手をかけて、容赦なく絞めかかる。
長く伸ばされた爪が、首の肌肉に食い込み血を滲ませた。

「……っ知る、か……っ」

呼吸器官を強く圧迫され、呼吸もろくに出来ない中でも千夜は尚も己の姿勢を変えはしなかった。
これ以上の挑発と煽りは危険、と本能的には理解していた。
そもそも――――根本的に察していたのだ。

プライドの高い人間の虚勢を崩せば、相手がどんな変貌をするのかも経験上理解していたはずだった。
たった一回頬を叩かれるだけだった、あの時点で千夜は何もせず嵐が過ぎるのを辛抱強く待てばよかった。
今の状態では対抗する術を持たない千夜には、それが下手をすれば何をしでかすかわからない女達から己の身を守る最善の手段だった。

しかし、途中、理性を上回る『何か』が千夜に選択を誤らせた。

それは目の前の女が友人の口から己を『蒼助の恋人』と主張させた時だった。
一刻も見舞われた災難から抜け出したかった千夜に、その思考を切り替えさせる感情――――怒りが女に対して芽生えた。

「一年も、あった……なのに、お前は何をしていた」

嫌われたくなかったから、距離を持った。
好きだったから。

女は先程洗いざらいぶちまけたところで、仄めいていた揺らぎは一層高まった。

「理解しようとしただと……？　笑わせるなっ……」

そうして、理解できたというのか。
保った距離から、蒼助の何を理解できたというのか。

もし、この女が何か一つでも理解できたのなら、蒼助は自分に対し盲目になることなどなどなかったはずだ。
或いは出会いそのものすらなかったもしれない。
自分が現れるまでの一年もの月日の間に、この女はいくらでも足掻けたはずだ。
それを、リスクを恐れて何もせずに、保持した立ち位置でのうのうと胡坐をかいていた。

そんな女が、蒼助を自分のモノと語った。
蒼助という人間がこんな小物の手に収まる程度の器であると貶められたと揶揄されているように、千夜には感じとれた。
それが千夜にはたまらなく我慢し難く――――――許せなかった。

「私が言ったことが……事実と何が違うっ……お前が重ねてきたという努力なんぞ」

やめておけ、と警告が脳内に響く。
しかし、千夜はそれを無視した。

思考が尚も優先しようとする、一人の男の尊厳を守りたいという想いだけが千夜を突き動かし、そして――――

「――――途中から現れたハンデ持ちの女にも通じなかった程度の、無意味なものだっ……！」

「っ、っ、っ、っ――――――！！！！！」

智秋の顔がこれ以上にないくらいに引きつり、歪んだ。

千夜が踏み切ったのは、超えてはならない一線だった。

「黙んなさいよぉぉぉぉぉぉぉぉっっっ！！！！！」

衝動的に取り出されたスタンガンの放電する先端が、振り上げられて腹部に向かった。

◆◆◆◆◆◆

意識は霞みながらも、まだ維持できていた。
しかし、身体の方は出力強に上げたであろうスタンガンの電撃により、もはや立つどころか指一本すら動かせない。
一歩間違ったら、ショック死してもおかしくない程の電圧に設定された改造スタンガンの威力は、意識を一瞬飛ばすだけで気絶はしなかったものの、身体の機能を完全に麻痺させた。

……素人め、死んだらどうするつもりだったんだ。

加減を考慮しない諸悪の根源たる相手は、今は千夜から少し離れた場所に立って振り乱し荒れる息遣いのまま、何処かへ電話をかけて会話している。
その表情には、最初見た時の余裕や理性はもう見れない。

「どーすんのよ……キレちゃったわよ」
「どうするって……ああなったら、止めようがないじゃん。気の済むようにさせてやるしか……あーあ、馬鹿ねあのコ。余計なこと言うから」

ヒソヒソと話す友人二人はキレた智晶がこれから何をするつもりか、わかっている口ぶりで千夜と智晶を遠巻きに見ている。
千夜にも、これから何が起ころうとしているのかぼんやりとした意識下で察していた。

『それ』が、どれだけ身の毛もよだつことか。
理解出来ても、抵抗する術はもう失われている。

「……場所は、体育用具倉庫よ。人に見られないように……わかったわね？　それじゃぁ早くね……ふふっ」

通話を切ると、智晶は不気味な笑みをこぼす。

ぎょろり、と血走った目がマットの上で力なく横たわる千夜を向き、見下ろす。

「蒼助はきっと、あんたの潔癖なところが珍しかっただけなのよ。そうよ、じゃなきゃ……私があんたなんかに負けるわけがないもの。そうよ、きっとそう……ふふっ、ふ」

千夜の言葉は相当の効果を及ぼしたのか、智晶は何処か正気を失っている様子となっていた。

「今、五人呼んだわ……皆、相手があんたって聞いてらすっごい乗り気だったわよ……。他の男にめちゃくちゃのドロドロにされたあんたを見ても……蒼助はまだ興味も持つかしらねぇ……？」

知りたくも無い、と声に出来ない返事は千夜の胸内で響くだけに終わる。

グラグラと揺れる不安定な意識は、落ちることもはっきりとすることもない微妙なバランスで保たれていた。

いっそ、気を失ってしまった方がよかったかもしれない。

そうすれば、これから間もなくして訪れるであろう地獄のような責め苦もまだ耐えられただろうか。

……何をしているんだろうな、俺は。

この災難の大元の原因たる男のために、言わなくてもいいことを

言った。
守るべきは蒼助の尊厳ではなく、己の身であったはずなのに。
選択を誤ったばかりに、最悪の事態を甘んじてしまった。

今頃、食堂の連中は自分がいないことに気づいているだろうか。
ひょっとしたら、まだ乱闘は続いていてそれどころではないかもしれない。
だが、もし仮に気づいたところでこんなところに連れて来られていることなんて、向こうにはわかるわけがないだろう。

……あの男からあんな話を聞いた後だったから、か？

蒼助の生い立ち。
周りから存在そのものを踏みにじり続けられた過去。
閉ざされた世界。

打ち明けるべき相手を間違えた内容を、知らなかったらあんな風にはならなかったかもしれない。
あの後、心の中で苛立ちが燻っていたところにこの女が最悪のタイミングで絡んできたから。

世界を閉ざした蒼助を救えなかった周囲の人間に対する苛立ち。
どうにかできないかと試み、それが不可能と悟りながらもそれでも己に出来る役目を見出して果たそうとした昶はまだいい。
しかし、長く関わりがあったというのに、己のことしか考えず蒼助のことを知ろうとしなかった目の前の女の好き勝手な発言には我慢が出来なかった。
何故かはわからないが、女のあの発言の瞬間、何かわけのわからない衝動に駆られ思考が急激に熱に帯びて感情に制御が利かなくなった。

この女は、『資格』があるのにそれに気づかない。
少なくとも、自分以外の誰もが持っている最低限の『資格』を有していることにも気づかず、的外れな怒りをぶつけることしか頭にない。
最低限の条件すら満たしていない自分などに構う暇があったら、蒼助の目を覚まさせに出向けばいいというのに。
正しい意味で努力もせず、ただ当り散らすしか出来ない愚鈍な目の前の女がたまらなく苛立たしく感じたのだ。

……何で、だ？

何故、あんなにも。そして今も、あの女に対してこんなにも腹立たしいんだろうか。
胸が焼け焦げそうな感覚が消えてくれない。
これではまるで、

……俺は……あの女を、嫉妬（ねた）んでいるのか？

まさか、と否定しかけて――――止めた。
肯定の要素が思考を過ぎったからだ。

智晶という人間は、『女』として胸をはれる正真正銘の女だ。
それに比べて、自分はどうなのだろう。

男であった。
今は女として在る。
しかし、それも――――――不完全な状態。

蒼助は男。

傍にいれるのは当然、女だ。

どちらとはっきりと言い切ることもできない自分はそれに当てはまりはしない。

そんなこと知るはずもない智晶は智晶で、自分に嫉妬している。

あまりに滑稽で、思わず笑いそうになったがそんな力は生憎残っていなかった。

……こんな状況でこんなこと考えてるなんて。

どうやらあの女に負けず劣らず、自分も相当な具合でおかしくなりつつあるようだ。

千夜の思考が自虐じみた分析に至り出した時、『最悪』はついに到着した。

「おーっす。しつれぇい」

「うほっ、マジでやってるよ」

閉ざされていた鉄のスライドドアが外部から開かれ、光の差し込みと共に人の気配が入ってくる。

ややぼやけた視界がそれが複数の男たちであると辛うじて認識することが出来た。

口調からして素行の悪さが滲み出ており、何より誘いに乗ってここに来たところで良識ある思考をしているという希望については、もはや千夜は捨てていた。

「おぉっ、ほんとに本人じゃん。つーか、何か妙に元気なくね？」

「そうかしら。別に平気でしょ。その方がやりやすくていいじゃない」

「オイオイ、何したんだよ。うわ、口切れてんじゃん。カーワイソーに」

一人が千夜の顔を覗き込みながら、智晶のしていたことを見透かすようにからかい混じりに言った。

「ひゅぅ～、噂どおりの美人じゃねぇか。……マジでいいの？」
「好きにしていいわよ。その女に、人の男に手を出した報いをたっぷり思い知らせてやって……カメラは？」
「言われたどおり、写真部のかっぱらってきたぜ」

女の言葉に応えた男がカメラを片手に持って千夜に近づく。

「しっかり撮ってね。……二度と、学校に来れないようにしてるんだから」
「うわっ、おっかねぇ……って、俺一人ノケモノかよ！」
「しょうがねぇだろ。俺等が済んだら代わってやっから。それに、証拠取れりゃ次も出来んだからよぉ」

下卑た言葉に千夜は動かない身体を酷く呪わしく思った。

千夜の濁った意識にかつての忌まわしい記憶が反映する。

その瞬間、男達に被さる『あの男』の面影が薄くぼやけた視界に何故かはっきりと映り込むのに、千夜は身体の芯がスッと凍り付いていくのを感じた。

「――――――……っ」

動かないとわかっている身体に自然と力が入る。

逃げたい、と身体の奥に染み付いて忘れかけていた恐怖が蠢き出す。

「くぅ～、たまんねぇな。さっすが、玖珂が目ぇつけただけあるねぇ」

「なぁ、もうやっちまったのかなアイツ」

「ばっか、あの玖珂だぜ？　……あーでも、ひょっとしたらかもよ？」

「ひゃははっ、んなのやってみりゃすぐわかることじゃねぇか」

後ろから羽交い締めされ、胸を突き出す様な体勢になった千夜の身体を三つの手がまさぐる。

豊かな胸を掴むと、握られた力に苦痛の声を漏らしたのを都合良く解釈したのか、男達は興奮を高めた。

目の前の女が極上であることもあったが、相手は女を何くわぬ顔でとっかえひっかえ拾い捨てしているあの玖珂蒼助が執心している女なのだ。

男達にとって共通の気に入らないあの男が、自分たちに先を越されたのを知ってどんな顔をするのか。それを考えると、目の前の獲物を犯す楽しみは一層増した。

「じゃぁ、最初は俺な」

「あ？　四人でいっぺんにやりゃいいじゃねぇか」

「しょっぱなから無茶してどうすんだよ。そーゆーのは、あとの方でするんだよ」

「それもそうかもしれねぇけどよ……てめぇが最初なのは納得いかねぇんだって」

「こんなかじゃ、俺が一番テクあるからに決まってんだろ」

「うっわ、自意識カジョーすぎっ！」

「平等に行こうぜ、平等に。つーわけで、ジャンケン」

男達がくだらない言い争いに投入していく中、千夜は他人事のようにそれを諦観する。

珍しい光景ではない。

寧ろ、こんな人間は見慣れていた。

同じ人間を自分とは違うと卑下し、己が上であると傲慢にも主張して弱者を嬲るのを当然と遂行する。

過去に見た陵辱する者達の顔は、玩具で遊ぶ子供のようで酷く不気味だった。

子供はまだ理性の束縛が弱い。

だからその行動は本能的なものだ。

獣と同じように。

人と獣を隔てるのが理性だとしたら、それを除いてしまえば双方に大差はない。

人も、獣なのだ。

弱者を嬲り貪ることを本能とした本性を持つ最悪の獣。

そして、自分は今貪られようとしている。

千夜は己の置かれ状況に、思わず笑みが零れそうになった。

……情けない。

獣の世界で生き抜く為に、自分も獣となったはずなのにこの有様だ。

何のために堪えてきたのだろう。

何のために自分を痛めつけてきたのだろう。

何のために『　』を諦めたのだろう。

結局、自分はこんな風に元の位置まで引きずり落とされようとしている。

手に入れた強さも、その程度のものだったということなのか。

――――――誰かの手で、折られた方がいい。

脳裏に浮かんだ今は亡き人の遺した言葉。

酷い助言だ、と絶望に浸りかけた思考が言葉を深読みして更に沈む。

弱くなった方がいい、と言われた。

しかし、彼女が望んだのはこんな形ではなかった。

約束を果たすことは出来ないはずだったが、こんな風に約束を裏切ることにつもりもなかった。

けれど、抗う力はもはやない。

こんな時、他の者なら誰かに救いを求めるのだろう。

だが、無意味であることを知ってしまっている自分はどうすればいい。

他者に救いを求める言葉すら、とうの昔に捨ててしまった自分は。

勝負が決したのか、残念そうな男たちの中で一人勝利に酔う男が

再び千夜に触れてくる。
衣服を剥いて直に触れてくる指の、虫に這われるそれにも捉えられる感触が千夜を絶望の淵に追い詰めていく。

『あの男』が再び自分の目の前にいる。
脳裏に甦る過去の記憶に刻まれた惨劇が現実に覆いかぶさっていく。
惨劇の再来に、思考が煩く警笛を鳴らす。

早く、早く終われ。
事態が通り過ぎることを千夜はひたすら願う。
どうせ無駄なら救いなどいらない。

もし、この状況に僅かでも救いがあるとすれば、それは『あの時』と違い”救いになりえようとする者”がこの場にいないということだった。
与えられようとしている屈辱に耐える賞賛があるというのなら、それがせめてもの己に対する報いだと千夜は歯を食いしばる最中で思った。

「おい、後ろちゃんとしまってねぇぞ」

自分の順番が回ってくるのを待つ一人が背後で完全に閉まり切っていないスライドドアを指摘する。

「別にこれぐらい……」
「そんなこと言ってて、もし見つかった一巻の終わりだろが。いいからきちんと閉めとけよ」

しょーがねぇなぁ、と渋りつつカメラを持ってその最も近い場所

に立っていた男がドアの密閉にかかる。

「あ、ちょっと待って。私たちが出るから」

「あら、いいの？　ここで一緒に見ていけばいいのに」

智晶の言葉に友人二人は苦笑いで返し、

「いや……さすがに、ちょっと。私らは外で人が来ないように見張っとくから」

「そ、そうそう」

完全にキレている智晶に恐れをなしたのか、さすがに同じ女の陵辱される様子を見るのは気が引けるのか、女二人はこの場を離れたがる。

あとでこの悪事が露見した場合の身の保証の為だろう、と千夜は女たちの本音を見透かしながら、この場に充満する臭気としても感じれるような歪んだ空気に催される吐き気に耐えた。

「それじゃぁ、終わったらメールちょーだい」

「わかったわ。ほら、通してあげて」

カメラの男がスライドドアの隙間を広くして、人が通れるほどになったその間を友人二人は通り抜ける。

人目を気にしてか、すぐさま閉じようと再びスライドドアが動かされる。

徐々に狭まっていく隙間。失っていく外の光。

逃げ道が完全に閉ざされようするその光景を、千夜はやるせなく見つめていた。

閉じる、と思った光景が出来上がりかけた時だった。

それを崩す現象が千夜の目の前で起きたのは。

「――――――ぐぁっ！？　げっ……ぁ」

男の手からカメラがすり抜け、地面の上をガチャンと破滅的な音を鳴らして跳ねる。

カメラを放した手は、もう片方と共に自身の喉元に向かい、もがくように漂っていた。

その首には手が巻きついていた。

男のものではない、別の――――――スライドドアの隙間から生える手が。

相当な力がかかっているのか、男の表情は苦悶に満ちており、酸素を求め口を大きく開け、目を見開いていた。

最初、己の身に降りかかる予想もしなかった事態に驚いていたようだったが、少しして男は目に更なる驚愕の色を落とした。

「お、おまっ……なん、でっ」

僅か十数センチの隙間を凝視して、男は信じられないという心情を言葉に滲ませている

しかし、それはスライドドアの間近に立つ男にしかわからないことで、目を向けようが男の背中しか見えない他の者には男の身に何が起こっているかすらもわからない。
明らかに様子のおかしい仲間に一人が伺うような声をかけた。

「おい、一体何して……」
「――――――何で、ねぇ」

返ってきたのは、カメラの男の声ではなかった。
この場にいないはずの、人間の声。

響いたそれに、千夜は思わず息を呑んだ。
少し遅れて、智晶も同じように。

その次の瞬間、錆び付いていて男が両手で相当の力を入れなければ動かなかった鉄のスライドドアが勢いよく開いた。
男の首を掴む手とは別に、もう片方の手一つで。

よって、中にいる者達を混乱に突き落とす存在の姿が、その背後から浴びる日差しに明るみにされた。

「なっ……」

残った男たちもようやく何が起こっていたのか、そして誰がそれを起こしていたのを理解し、声を震わせた。
そして、誰もが”いるはずのない男”を同じような目と心境で捉えた。

どうして。

そんなはずがない、と。

彼らのそんな心情を嘲笑うかのように、〝彼〟はそれらの想いを跳ね除けるようにそこに在る。

「そうだな……。まぁ、とりあえず……愛の力だとでも、解釈しといてくれや」

茶化すような口調とは相反的に、視線は鋭く向ける先を刺すように見ていた。

左手をドアの縁に手をかけ、依然と男の手から首を手を離さない――玖珂蒼助は不敵に笑って彼らの前に立ちはだかった。

［八拾弐］　絶望の再現（後書き）

書いておきながら、何処何処のエロゲみたいな展開になってしまった感が否めない天海です。

蒼助が何で場所わかったのかは、きちんと理由があるのであとでわかりますので詳細は追々。

つーか、結構無茶してんな主人公。

別の案では、外から錠前で既に密閉されてしまって、その鍵を無理矢理引き千切るというパターンもあったんですが、気分によって没。

抱えている負い目に関していろいろ見えて来たと思います。

三途が言っていた、記憶の喪失。

黒蘭が前回言っていた、血生臭い過去。そして、その他諸々。

無論、それらもあるのだけれど、もっと深く根付いている根本的なものが今回チラリと見せてみましたが。

千夜は作中で、蒼助に一つ「嘘」をついています。

それこそが、千夜の最大の負い目に繋がるのです。

読み返して見ると、さりげに貼ってあるその伏線。

あなたは見つける事が出来るか。

それでは、ひょっとしたら明日が最後の連続更新になるかもしれないと冷や汗かきつつ、また明日。

［八拾参］　最優先対象（前書き）

自分よりも
何よりも
大切なモノがあるのです

［八拾参］　最優先対象

千夜も例外ではなかった。
先程抱いていた慰めにもならない希望を乞う願いは、それを遥かに上回る”奇跡”に近い蒼助の登場により消し飛び、ただ呆然として有り得ない出来事を受け入れられずにいた。
己の身体にまとわりつく男たちの不快な手すら忘れて、蒼助を見つめた。

「体育用具倉庫……ったく、ひねりがねぇなオイ」
「て……めぇ……はっ……はなしやがっ……」

依然と蒼助の拘束から開放されないでいた男が、調子を取り戻したのか敵意を剥きだして首を掴んで締め上げる手を引き剥がそうもがき呻く。
すると、男の抵抗意思を拍子抜けさせるかのように蒼助の手はあっさり男の首を放した。
一気に通りが良くなった器官に急激に流れ込む酸素に咳き込みつつ、男は自由の身となったことで敵意を行動に移そうと――――する前に、

「――――うっあ……！？」

首に圧迫がなくなったと一息ついた途端に、今度は頭部を掴まれる。
首にそうされたように、決して強く握りつぶすような力はなかった。

――――が、その意思とは関係なく、視界に壁が急激に迫った。

次の瞬間に、ぐしゃり、と拉げる音が男の顔と壁の間から生じる。
ぐりりと押し付ける壁はその衝突部分――――そこにめり込んだ男の顔面の下から僅かに罅が生やしていた。

「……チッ、加減が足りなかったか。まぁ、いいか……元から、ボロイし」

己が男の頭部を以って行った壁との衝突の際に誤算となった壁の破損に、蒼助はいたずらに失敗した子供のような顔でぼやいた。
痙攣を繰り返す男を僅か一瞬で再起不能に叩き落した光景を目の当たりにしたのをきっかけに、他の仲間はようやく我に返った。
彼らが何かを言い出すのを待たず、先手を取るように蒼助は悪魔で己を通す。

「……さて、てめぇらに言いたいことやりたいことは有り余るくらいだがよ。まずは、そいつを返してくれねぇ？
――――特に、そこのお前。手ぇどけろ。そのチチは俺んだ、先に触んじゃねぇ」

口元は笑っているが、目は決して同様ではなく、肉食獣のような凶暴な光を発して千夜の上にいる男を射抜いていた。
その視界に捉えられた男はその本物の殺気に一瞬怯んだが、向けられた言葉に混じっていた”とある点”に気づき、それを逆手にとろうと口を開いた。

「へ、へへっ……何だ、玖珂……お前、まだ手ぇ出してなかったのかよ」
「……まだ、とか言うじゃねぇ。これから、手ぇ出すんだよ――――いいから、とっとと退け。そこは俺専用の特等席だ」

男の売り言葉にも一切耳を貸さない蒼助は、不遜な態度を揺るがさないままに己の要求を通そうと歩みを踏み出す。
その行動は、蒼助の意識が千夜しか捉えておらず、その他は歯牙にもかけていないという今の蒼助を表していた。
が、

「そう……まだ、なの」

何者も押し退けて進もうとする勢いの蒼助の前に、立ちはだかる人間がいた。
智晶だ。
何か納得した様子の表情で、先程の驚愕をその奥に収めて蒼助と面する。

「何だ、最初からいってくれればよかったのに」
「智晶……」

想いを寄せる男に艶やかな笑みを見せる智晶に、相反する険しい表情で向き合う蒼助。
そんな蒼助の態度を、拗ねた子供のようなものと受け取った智晶は肩を竦め、

「そんな怖い顔しないで……だって、知らなかったの。こんな泥棒猫に貴方を取られるかと思って……私」
「智晶」

そこをどけ、と視線が物を言った。
しかし、智晶はそれを受け取り拒否と撥ね退ける
まるで、聞き分けのない子供の言い訳に耳を貸さない母親に扮す

るように。

「ねぇ、本当はちゃんとわかってるわ。今の貴方は、珍しい玩具ハマっているだけなのよ。今までとは、毛色の違う女に興味がわいているだけ。……わかってるから」

だからね、と女は全てを包み込むような微笑と共に告げる。

「こうしましょうよ、蒼助。今、ここで……気の済むまであの女を抱いちゃっていいわ。それで収まるなら、私は平気……許してあげる」

「……」

「私ったら、馬鹿ね。蒼助が他の女に本気になるわけないのに。いつもの気まぐれだって……わかってたのに」

クスクス、と苦笑いを発て、

「さぁ、早くやってしまって。そして、いつもの蒼助に戻って」

◆◆◆◆◆◆

身の毛も弥立つ智晶の発言に、千夜は凍りついた。

それまで、ただでさえ智晶の発する言葉の一つ一つが、確実に胸

に突き刺さっていた。

気まぐれ。

珍しい。

自分で今まで言ってきたことを、他人に言われると何故こうも苦しくなるのか。

事実であるはずなのに。

わかっていたはずなのに。

それを肯定されて、どうしてこんなにも胸が痛むのか、千夜にも理解できなかった。

蒼助が現れた時の、僅かに安堵と欣快の入り混じった驚愕は、女の信じられない申し出によって生じた不安に塗り重ねられてその下に覆い消された。

心臓の脈が乱れる中、智晶と合わせていた蒼助の視線が千夜に向けてズレる。

どくん、と心音が自分でもわかるほど大きく跳ね上がった。

無表情の蒼助の視線から、蒼助の考えていることが読むことができない。

脈拍の速度が上がり、緊迫感が募る。

「……後ろ」

「え？」

「閉めとけ。声が漏れると面倒だ」

淡々と智晶に言い渡した蒼助のその言葉が、千夜の中の何がを急速に落下させた。

底なしの絶望へ、一握りの希望が堕ちていく。

「……ええ、わかったわ。……ふふっ」

智晶は満悦の笑みで応え、言われたとおり大きく開いたスライドドアを再び閉めにかかる。

そして、今度こそ外と内側が隔絶された。

窓からの僅かなそれを除き光を殆ど失った薄暗い空間は、千夜の心境を現実に具現したようだ。

「んだよ、俺ら玖珂の後かよ。話が違うじゃねぇか、智晶ぃ」

「まぁ、取りやめってことじゃないなら俺はいいんだけど……加減してくれよぉ、玖珂ちゃ～ん。後に俺らが控えてんだから」

「激しすぎて壊しちゃやぁよ～？」

「つーか、お前らミツグはどーすんだよ。見ろよ、あいつ動いてねぇぞ？」

「別に死なねぇだろ。それよか、こっちだよ、コッチ」

一部が不満を漏らしているが、お開きというわけではないということをわかっているのか、男たちがからかうように囃し立てる。

蒼助はそんな声にも一切反応を示さず、羽交い絞めされて動きの取れない千夜の元へ、ただ歩みを進めた。

寸前で立ち止まり、あられもない姿の千夜を見下ろす。

「……そう、すけ」

ようやく出た声は酷く震えた。

精神の不安定さが滲み出ているのを嫌でも理解できた。

男たちの嬲り者にされることすら、諦観しようとしていた自分が酷く拒絶反応を示したがっている。

耐えようとしていた意識が、心が、悲鳴をあげる。

この男にだけは、”犯されたくない”、と。

もはやあらゆる裏切りを静観しようとしていた心は、目の前の裏切りだけは嫌だと叫んでいる。

ああ、そうか。

あまりにも今更過ぎる自覚が胸に降りてきた。

自分は、こんなにも――――――

「……そんな顔すんなよ。――――――すぐに終わっから」

きっと酷く情けない表情で見上げていたのだろう。蒼助が困ったように笑った。

これからしようとしている行為には、とても繋がらない歪みのない笑み。

すぐに、という言葉が自分が所詮蒼助にとってその程度で済まされてしまう存在だったのだ、という絶望の淵に千夜を突き落とした。

開いた手が、千夜に向けて伸ばされた。

千夜は、何も考えられなくなった真っ白な思考でそれをただ見つめ――――――

「――――っぐ、がぁっっ!?」

己を通り過ぎた手の平の先であがった悲鳴の認識に遅れをとった。

「……ぁ」

停止しかけた思考が再び起ち上がる。
そして、まず最初に今の悲鳴の出所を分析し出した。

悲鳴は、男のもの。
無論、千夜のものではなかった。

自分に伸びていたはずの手は何処へ？
少なくとも、千夜を通り過ぎていた。

――――――結論。

蒼助は、

「――――――てめぇ、聞こえなかったか？　退けっつったろうが」

殺気立った眼光で背後の男を串刺し、その手で男の顔を鷲掴んで

いた。

「うっ、ギ……、…っ」

「自分じゃねぇとか思ってたのかよ。穴開いてるだけか、その耳は。心広く寛大な俺が親切心働かせてもう一度だけ言ってやるよ。

――――――お前も、退きやがれ」

「ひ、ぎぃっ……っっ！！？」

千夜の頭の上からミシミシ、と音が降ってくる。

幻聴でも、誇張でもない。

蒼助の手がかける圧力によって、男の顔の骨があげている紛うことなき断末魔。

「……聞こえなかったみたいだな」

「がっ……わ、わかった！　は、離すか、ら……」

蒼助の言葉に不吉の前兆を感じ取った男は、己の危機を前に観念して応じた。

脇下から肩にかけての負荷と拘束感が、千夜から取り除かれる。

蒼助はそれを見て、満足そうに口端を吊り上げて手を――――――

「はい、よく出来まし――――――た」

「……ぐぅっ！？」

離すどころか一層強く掴み、更には男の顔を掲げるように持ち上げ、

「ひっ……ぁあぁあぁぁあぁあっ！」

まるで鞄を放り投げるように、少し離れた場所にいる仲間の一人

に放り投げた。
　無理な体勢から空中に浮いた男は、抵抗など出来るはずもなく叫びと共に投げられた勢いのままその方へと飛び、呆気に取られて避け損なった仲間と衝突。
　受け止めるマット代わりとなる羽目になった仲間は、六十キロ相当の重量を身構えることも出来ずにまともに食らい、そのかかる負荷に耐え切れるはずもなく男もろとも座っていた跳び箱から派手な音を伴って転げ落ちた。

「て、めぇ……何してやがんだコラぁっ！！」

　周囲が起こった出来事に唖然とする中、一番に我に返ったのは、千夜の上に跨って体を弄っていた男だった。
　憤るままに死角から横顔に向けて拳を振るう。
　振り向く反応も、間に合わないタイミングの一撃だった。

　否。

　気づいていながら、“振り向かなかった”。

「――――――」

　左頬に振り抜かれた拳はまともに入った。
　打った者にも、見ていた者にもわかることだった。
　蒼助の体は揺らいだ。
　男はそれをチャンスとばかりに追撃をもう片方の拳で、今度は脇腹に叩き込もうと放った。

「は、ははっ……調子に乗ってんじゃ……――――――っっ！！」

無防備な脇腹をめがけて放った二発目は男の狙い通り、そこへ吸い込まれた――――はずだった。
本来なら手応えを感じる瞬間に、男に与えられたのはそれは異なる異様な打ち応え。
実は一撃目にも微かに感じていたが、今度ははっきりとしていた。

「……お前、それ本気で打ってんの？」

鼻で笑う蒼助は、思い切り殴られたはずの頬を僅かに赤くしただけだった。
そして、脇腹では――――――

「っ、いつのまに」

男は違和感の正体に気づき、反射的に突き出していた拳を引く。
しかし、”男の拳を受け止めていた蒼助の手”はそれを許さなかった。

「このところ、お前らみたいのとは比べモノにならねぇような、重くてデカいのをおっかねぇおっさんから
”死ぬ程”喰らってるからな……もう、このくらいじゃ痛いなんて言ってらんねぇんだ」
「こ、このっ……離っ……っぅ！」

振り解こうともがいていた男の反抗心は、手首に急激にかかった負荷によって一瞬で萎えた。
ミシミシ、と徐々に手首の骨が徐々にその悲鳴を大きくする。
このままいけば確実に壊される。それはその末路に至る張本人である男自身が身に染みるほど理解出来たことだった。

反抗心ではなく、本能的なものに動かされ男は再び蒼助の手を振り払おうとするが、

「……ひっ」

「この手だよな、こいつの身体好き勝手触ってくれたのは……」

冷え切った蒼助の鋭い視線にあてられ、男は蛇に睨まれた蛙のように身を竦ませる。

「本当は、まずこの手首からブチ折って、指の一本一本二度と元のように動かせねぇくらい丁寧にへし折っちまいたいところだが、生憎俺はこんなところにあんまし長居していたくないねぇんだわ」

「――――――っあぁ！？」

一瞬の浮遊感の後、男は地面に叩きつけられた。

受け身の取り方も知らずまともに身体を打ち付けた男だったが、それで終わりではなかった。

「――――だから、大雑把で勘弁してくれよ」

尚も離されなかった手は、ようやく訪れた解放と共に地面に落ちた。

直後に下ろされた足に踏み砕かれることを代償に。

「うぎゃぁああ、ああ、ぁ、ああっ！！！！」

絶叫する男の手を最後に念入りに踏みにじり、喚く男の顔面を思い切り蹴りつける。

うげぶ、と奇妙な声を最後に男は意識を飛ばして動かなくなった。

「お、予想以上にイイ感じに入ったな。ラッキー。……さて」

蒼助の視線はこの場で立っている最後の一人へと向けられ、

「……今までの結果から選べよ。壁とキス。整形手術。全身のどっかを骨折。ちなみに、整形の方はアイアンクローとフルでキックのどっちかだから。

――――――どれがいい？」

「ひっ……う、わあああっ」

立ち直りに最も遅れた男は、それまでの仲間の凄惨な末路を目の当たりにしていたのをあって、募っていた恐怖心が限界に達した。

迷いもなく薄暗い倉庫から逃げていく男の姿を見ながら、

「……捨て台詞吐いてたら完璧な見事な撤退姿だなぁ、ありゃ。逃げちまったが……まぁ、いいか。わざわざ追っかけなくて、なるようにされるだろうし」

もはや倒れる男たちにも、逃げた男にも蒼助の興味は向けられていなかった。

その矛先は、ようやくただ一人に集中することとなる。

「……蒼助」

か細い声が埃臭い空間に僅かに木霊する。

出入り口を向いていた蒼助が振り返ると、そこには千夜がマットの上でぽつんと座って蒼助を呆然と見つめていた。

「ったく、ちょっと目ぇ離した隙に……すげぇ、変わりようだな」

軽口を叩いているが、千夜の今の姿に対する想いで胸が詰まりそうでいた。

力加減もなしに乱暴に引っ張られたのか、ブラウスはボタンが弾け飛び、下着とその下の胸の谷間が悩ましげに露にされている。

頭の後ろのポニーテールも、マットの上でもみ合ったせいなのかリボンが解けて長い髪が乱れてそのままになっていた。

ほんの少し前までの姿からは想像出来なかった有様に、蒼助は無意識のうちに顔が剣呑の色に帯びる。

もう少し痛めつけておこうか、と思ったが、今優先するべきはそれではないと理性によって踏み止まる。

「ほら、これ被っとけ。……歩けるか」

このままでは外へ連れてはいけないと、学ランを脱いで千夜の上に被せるが、

「……っ」

「……千夜？」

被せる際に触れた肩が小刻みに震えていた。

余程の恐怖心を感じてのことなのか、と蒼助はその線に考え着いたが、それだけはないということに気づく。

震えているだけではなく、息遣いも荒い。

顔色も悪く、額には汗がじっとりと滲んでいる。

「おい、大丈夫か……っ千夜！」

上半身が大きく揺れたかと思えばあっさり千夜は蒼助の胸にもた

れこんで来た。
受け止めた身体のあまりの力のなさに、蒼助は抵抗の際の疲労によるものではないと、驚愕の傍らで察した。
かつん、と踏みしめた足の裏で何か異物感と共に硬い音が発する。
無視するには意識を強く惹き付けるその感触に思わず、視線を下ろす。
踏んづけていたのは、床に放置されていたスタンガンだった。
どうしてこんなものが、という疑念はすぐに晴れる。

千夜の異常なまでの疲弊。
何故、スタンガンが千夜のすぐ足元に落ちていたのか。

それらを踏まえれば、答えに辿り着くのは簡単だった。

「……どうして」

動揺が濃く色出た声が蒼助と千夜の間に割って入るように響く。
男たちが倒されていく中、沈黙を続けて立ち尽くしていた智晶だ。

「どうして、その女にそこまでするの……？」
「智晶……お前、こいつに何を」
「だって、この女……否定したんだものっ、私の貴方への愛情を、無意味だなんて言ったのよ、そいつっっ！」

屈辱を思い出した智晶は、再燃するかのように興奮し声を荒げる。

「私が、私は、こんなに蒼助を愛してるのに……それを否定されて、黙ってられるわけないでしょ、そうでしょう！？」
「……」
「そんな女、ただの玩具じゃないっ……綺麗なだけの、愛でられ

る価値しかない人形みたいな女じゃないの……。ねぇ、しっかりして蒼助。そんな抱き人形にしかならないような女に入れ込むなんて、貴方らしくないじゃない……。お人形遊びがしたいなら別にそれでいいの、かまわないから……ここで遊ぶだけ遊び尽くして早く戻ってきて!?　早く、私のところに……ねぇ、貴方を本当にわかって、愛しているのは私なのよ!」

喚き散らす女の声を聞きながら、蒼助は思い返していた。
智晶と出会ったのは丁度一年前の今頃だった。
半ば感情に任せて見切り発車に降魔庁を辞めて、あらゆる目的を見失っていた時期。

本気にならない扱いやすい女と、思っていた。
しかし、当時の硝子玉と呼べてしまうまでに堕ちていた目で、この女を見極めきれるはずがなかった。
かつての己の失態がこんなことを招いてしまったのかと思うと、食堂での久留美の激昂が今になって痛く感じてくる蒼助だった。

「……チッ、久留美の奴の言うままっていうのは気にいらねぇが……」

何か呟きながら苦虫噛み潰すかのような苦々しい表情をしていたかと思えば、気持ち固まった様子で一息。
胸にもたれていた千夜の背中をポンポンと軽く叩き、

「悪い、ちょっと辛抱な」

負担にならないように、千夜の身体を出来るだけゆっくりと後ろのマットに倒し、横たえさせる。
焦点の危うい虚ろな眼差しで、それでも見上げてくる千夜に向け

て安心させるようにニッと笑うと、その傍から離れて智晶へと近づいていく。
その行動に、智晶は満悦の笑みを浮かべて、

「蒼助……」

蒼助が自分を選んだ、と蒼助の歩み寄りを智晶は当然のようにそう捉えた。
しかし、それも一瞬の至福だった。

「やっぱり、私を――――――」

言葉が唐突に途切れる。
それは立て続いて起きた変化に対する驚愕によるものだった。

「……なに、してるの？」

智晶は己の目、そして今起きている現実を疑った。
それは、それほどまでに彼女の想像を絶した光景だった。

彼女が誰よりもよく知る蒼助が、

――――――他人に膝をついて頭を下げているという見たこともない行動を、自分に向けてしているという信じがたい光景を。

「なにしてるのよ、蒼助！」

悲鳴のような、怒号のような叫びを智晶が蒼助に降らすが、蒼助は無言で体勢を維持した。

「どうしてっ……止めてよ、そんなの……蒼助、他人に頭なんて下げたことなかったじゃない！　うそ、そんなこと……蒼助らしくないっ……止めてってば！」
「――――悪かった」
智晶の言葉を無視するような、噛み合わない言葉が蒼助から発した。
「勝手な判断で決め付けて、関係を終わらせて悪かった。だから、ちゃんと言う」
「……なにを、言って」
「もう終わりにしようぜ。これを最後に、お前とはもう会わないし、二度と抱いたりしない。何もかも、一切これっきりにしたい――――他の連中と同じように」
他と同じ、という言葉に智晶は凍りついた。
「他の女にも……そんな風に……頭、下げたの？」
「下げてない。今、俺は適当に片付けてこんなことになったツケを払ってる。たまたまその相手がお前だっただけだ」
「偶々……？」
自分じゃなくても、この事態を引き起こした相手であったならそうしたというのか。
受け入れがたい事実の果てに、更なる真実に智晶は勘付いた。
「この女のため……なの？」
返答は無言で返ってきた。
それは肯定であるのだと考え、智晶は己の勘が正しいと知る。

自分に詫びるという形で、あの泥棒猫に謝っている、と。

「……っっ何で、何でなの！　こんな玩具のために、どうしてそんなことまでするのよ！？」

「――――――玩具じゃねぇ」

ダン、と地面で響いた、打撃。

叩きつけた拳には、言葉以上の否定の念がこもっていた。

「こいつのことを何も知らねぇくせに好き勝手なこと言うんじゃねぇ」

「何よ……あの女にそれ以外に何があるっていうのよ。……蒼助が、何を知っているっていうのよっっ」

「知らねぇよ、何も」

「……はぁ？」

何を言っているの、という顔で呆気にとられる智晶に、蒼助が膝を立たせて向き合う。

「知ってるなんて、胸を張って言えるほどまだろくに何も知らねぇ。まだまだ知らないこと尽くしだ。何で、こいつが好きなのかすらも……はっきりとはわからねぇ」

「じゃぁ、何で……」

「……それがわかりゃ、苦労してねぇんだよ」

自嘲するように呟き、

「――――――何で好きなのかはっきりわかる程度だったら、ここまでしねぇよ」

はっきりと恥ずかしげもなく言い放つその後ろで、千夜が目を見開いたが、蒼助は気づくこともなく前を向いたままでいる。

「知らないから知りたいんだ。知らないならこれから知るんだよ。今まで、そんなふうに考えたことも思ったもなかったがな……こいつに会うまで」

「……っ……」

智晶は、見たこともない蒼助のまっすぐな眼差しにどうしようもない絶望的な気分に陥った。

そして、そこ容赦なく蒼助は追い打ちをかける。

「まぁ、お前という女に対する俺の見極めが甘かったのは確かで、悪いのは俺なのは否定できねぇ事実だしな……だから、いいぜ。お前に譲る」

「……ゆずるって」

「振る権利。ここらにバシッと一発やれ。手加減はいらねぇから」

「っそうす」

「俺がお前に好きにさせてやれんのはこれくらいしかない。さっさと始末つけさせろ」

遠まわしを装っているにもかかわらず、蒼助の拒絶は強く響いた。

取り付くしまもない蒼助のそっけなさに智晶は泣き出しそうに顔

を歪め、

「いや、うそ……嘘よっ……どうしてそんなこと言うの？　……蒼助、私、わたし……は、こんなにも貴方を……何で、わかってくれないのっ……」

もはや一切の形振りを捨てて縋り付くように言い募る智晶。

だが、そんな弱った相手にも蒼助は容赦しなかった。

人には優先順位というものがある。

平等、と奇麗事でどれだけ表面上を飾ろうと、いざという時は全てをかなぐり捨て去って本音を曝け出してその為に奔放するのだから。

無論、蒼助とて例外ではない。

正直のところ、目の前の女を殺してしまう勢いで殴り、千夜が受けたような痛みと屈辱を味あわせてやりたかった。

だが、今回の元の発端はこの勘違い女ではなく、正しくは自分なのだ。

けじめはつけなければならない。

それこそ、己のプライドよりも優先すべき女の為に。

「さっさとしてくれねぇか。俺は一秒でも早くお前とオサラバしてぇんだがな。別にいいっていうんなら、俺からでもいいだぜ？　ただし、いいって了解した瞬間思い切りぶん殴ってやるから吹っ飛んで壁にウマい具合にぶつかって死なねぇよう足踏ん張っとけよ」

「なっ……」

「何驚いてやがる。当然だろ？　俺には、お前と違って迷う理由なんて思いあたらねぇんだからな」

お前に未練なんて欠片もない、と暗に突きつけている蒼助に、智晶の目が零れ落ちそうなくちに大きく見開いた。

「いや……一番ぶん殴ってやりてぇのは一年前の、節穴みたいな目でお前みたいな女を選んじまった俺自身だな。帰れるもんなら帰りてぇな、あの日に。

そしたら――――――お前みたいな鬱陶しいの、相手にしなかったんだがな」

「――――――っ、っっっ！！！！」

大きく何かが弾ける音が響いた。

「……っ……っ……っ……」

「……」

衝動に負け、ついに振りぬいた手を震わせる智晶は、崩れるように両膝を付いた。

左頬にはっきりと浮き上がる赤を湛えた顔を衝撃に傾けたまま、蒼助は頬を拭い、一言だけ――――

「くそっ、切れやがった」

別れの言葉ですらないそれに泣き出す智晶に背を向けて離れ、

「――――――待たせたな。行こうぜ」

横たわる千夜に、口の中で血が滲むのもかまわず笑う。

千夜はその笑顔と先程までの冷たい表情のギャップにあてられてどう応えればいいかわからなかった。

思考が展開に追いつくよりも早く、体を襲う浮遊感。
横抱きにされて、蒼助の腕の中にいると理解したのは、蒼助のこの言葉によってだった。

「こんな格好、嫌だろうがな……ちょっと我慢しろや」
「……ぁ」

変わらない荒い口調に、智晶に向けては含まれなかった優しさがじんわりと鼓膜に染み込むのを千夜は感じた。
すとん、と何かが胸に落ちる。
同時に、それによって張り詰めていた何かが緩み、意識もするりと解けるように落ちた。

「っ、おい！」

かくん、と力を失って上を仰いだ頭に驚き、蒼助が慌ててゆすって見ても閉じた目は開かない。
仕方ない、と完全に気絶してしまった千夜の頭を自分の胸にもたれさせ、この場から一秒でも早く離れようと出入り口に向かう。
その後ろで、ブツブツ何か呟いていた智晶が、不意に声を荒げた。

「……ゆるさない……許さないからっ！」

掻き毟ったせいで目に当てられないほど乱れた髪の隙間からもはや憎悪に満ち滾った目がギラギラと蒼助の背を睨みつける。
己を全てを否定された女は、愛情を憎しみへと反転させて、荒ぶる感情を吐きかけた。

「見てなさいよっ……あんたたちだけ幸せになんて、絶対させるもんか！　これで終わりになんて、させるもんかっっ！　……許

さないんだからっ……見てなさいよ、かならず……必ずあんたたちに地獄を見せてやるっっ！！」

復讐を煽り立てる女にもう振り向きもせず、蒼助は出入り口に立つ。

その時、

「あんた、シカトにも程があるでしょソレは」

立ち塞がるように現れたのは、蒼助の態度に呆れ返っている様子の久留美。

「あんなこと言ってるけど無視しちゃっていいワケ？」

「済んだ事にいつまでも構ってられるか。こっちはそれどころじゃねぇ」

こっち、と暗喩された腕の中の千夜を見て、久留美は暫し沈黙。

「……大丈夫なの？」

「間に合ったっていう意味でなら、ギリギリセーフってところだ」

それを聞いて久留美の表情から暗さが若干薄れ、ホッとしたように大きく息を吐いた。

そして、

「そ。……じゃ、さっさと保健室に連れて行ってあげて。あとは、こっちが何とかしとくから」

「は？」

「言っとくけど、一つ貸しってことだからね。タダじゃないわよ」

「だから、何のこと……」

「あー、もう……いいから行けっつーの！　ほらほらっ」

邪魔だとでも言うように急かす久留美の行動の意味は結局わからないまま、蒼助は晴れない気持ちのままその場を去った。

駆け足で離れていくその背中を見送りながら、久留美は大きく息を吸い込んで深呼吸を一つ行った。

そして、まるでそれが彼女の中のスイッチの切り替えとなったかのように、冷たい眼差しをその相貌に宿して後ろを振り向いた。

［八拾参］　最優先対象（後書き）

某馬鹿騒ぎ風にいうと、「玖珂蒼助は、主人公らしからぬ暴君ぶりを発揮する」な今回。
つか、最低だなうちの主人公。
いわゆる「ギャルゲー主人公枠」には絶対あてはまらないキャラにしようとした結果、主人公としても男としてもかなり酷い奴になってしまった（汗）
男としての最低度では他作品（お蔵入り中）の「ＢＦＴ」の狩谷九狼と並ぶかも。仮にこやつらが出会うことがあれば、さぞかし気が合うだろうて。うんいいね、そういうの面白そうだ。「ＢＦＴ」の復活の目処が立ったらブログの方でやるかもしれんです。

引っ張りますが、実際には蒼助は女をマジで殴りはしない。（九狼は殴る。好きな女のためなら躊躇すらしない）
つーのも、幼少からこいつの身近な女は強いのしかいなかった（母親とか従姉とか）。
可愛がられ（虐げられ？）た結果、無意識のうちにそんな風に教育されています。
まぁ、それも千夜が絡むと揺らぎますが。

久留美の様子が最後おかしかった雰囲気ですが、あちらもキレてます。
蒼助たちが去った後の場面も書こうと思いましたが、割愛ということに。
理由、なんか別にいっかな、と（オイ
詳細は後日わかりますので。

明日、うまくやれれば最後に一本は上げられると思います。

努力しまっす。

［八拾四］　砂の城（前書き）

崩れて落ちて、そして

［八拾四］　砂の城

月守学園は授業終了までの時間を、あと二十分と控えていた。
各教室、或いは校庭で、生徒たちが授業の終わりを告げるチャイムが鳴り響くのを、あと一分一秒と待ち遠しくしながら授業に身を入れる。

しかし、そんな最中。
教員棟の一階廊下にて、その停滞する沈黙を問答無用で破る騒々しい足音が駆け巡る。
勢い落とさない足音向かう先は――――

「――――おいっ保険医いるか！」
「ちょっと、ドアを蹴り開けな――――」

己の領域たる保健室にて、机について仕事に徹していた保険医の女は、荒々しい入室で仕事への集中と静かな一時を乱した来訪者に注意の言葉を放りかけた。

「蒼助……？　え、てゆーか……」

それ、何？

保険医が見遣った先にいたのは、両腕に女子生徒を抱えて必死こいた形相の常連だった。

彼女の穏やかな時間は、彼らの来訪と共にさりげなく終わりを告げた。

◆◆◆◆◆◆

「……で、このコを私に見て欲しいってことで、私の仕事邪魔しにきたわけ？」
「生徒診るのも仕事じゃねぇのか、コラ」
「――――たるい、めんどい。ぶっちゃけ、書類とか単純作業のほうが好きなのね」
「……何で、保険医なったんだよアンタ」

職業全否定を何食わぬ顔でやってのける目の前の女に脱力しつつも、そんなことにめげている場合ではなかった。

「いーから、見ろ。つか、お願いしますセンセイ」
「しょうがないわね、珍しく下手に出てるのが気分いいし……どれどれ」

何かが根本的に間違っていると蒼助は気づかないわけがなかったが、この際細かいことは捨て置くことにした。

「へぇ……これが噂の。遠くから何度か見たことあるけど……近くで見ると、益々綺麗な顔してるじゃない。目のつけところがアンタらしいというか、さすがというか」
「……観察じゃなくて診察してほしいんだけど」
「わかってるって……」

ベッドに横たえられた千夜をじっくり観察するように見ていた保険医は、シーツをめくり、

「って、オイ。何する気だ」

「診察よ、診察。シーツ被って服来た上で、何をどう見ろっていうのー？」

「服まで……」

「顔が腫れてる。口端もちょっと切れてる。リンチっていうのは、表面上に出てくるところよりも見えないところに酷くやることだからね。あんたも知ってるでしょ。……きちんと隅々に気を配っておかないと後々取り返しのつかないことになるのよ」

「……そうなのか」

「あんたみたく丈夫で頑丈なのはともかく、普通の人はね」

皮肉げに言うと、保険医はまずは服を着せたまま診察を始める。

「頭に損傷は……無し。鈍器とかで殴られはしなかったみたいね。顔の損傷は……若干有り。脈拍に以上は、無し。まぁ、見えるところといったらこれくらいね……後は、やっぱり脱がさないと――――蒼助」

「……何だよ」

「見んな、スケベ」

「なっ」

「どーせ、あとでモノにしたら好きなだけ剥いたり見たりし放題でしょ。とりあえず、今は保険医として女の子のプライバシーは守らないとね。ほらほら後ろ向いて」

渋々と言葉に従う蒼助の姿を確認し、保険医は弾け飛んだ上部分に少し顔をしかめつつ、その下の残ったボタンを外していく。

そして、ぺらりと上半身の全体が見えるようにブラウスを広げて

除けた。

「……蒼助」

出た声は、喉を押さえつけたように低かった。

「このコ、何されたって？」

「……スタンガンを」

「護身用具のスタンガンの電圧に殺傷力はないのに……こんなになるわけっ？」

荒げた保険医の声には、憤りを感じる。

見なさいよ、と先程とは正反対の台詞を口にしながら、保険医は立ち退く。

蒼助は、そこで露見された千夜の上半身を目の当たりにし、

「……っ」

右のわき腹に広がる夥しい火傷。

元の肌の白さが相まって、一層その痛々しさが際立つ有様だ。

その凄惨な光景に蒼助が言葉を失っている横で、保険医は顔をしかめながら、

「……もし、本当にスタンガンだったら……どっかで改造して電圧上げまくったのね。ここまでなるなら、熊だって一撃で倒せるわ。ったく、どうかしてるわそいつ……」

はぁ、とため息を一つつき、

「……蒼助、あんたこのコの家の電話番号わかる？」
「まぁ、一応……どうするんだよ」
「決まってるでしょ、保護者に迎えに来てもらうのよ！　これはもう、私の手じゃおえないわ……事情説明はあんたがしてよね、ぶん殴られる役割も。ちゃっちゃとそういうごたごた済ませて、早く病院に……」

蒼助の知る普段グータラな女が珍しく焦っているということは、よほどのことなのだろう。
保険医が電話機の置いてある向かおうと身を翻したその時、

「――――待って……下さい」

掠れた声と、進行を妨ぐ引力が保険医の行動を制する。
思わず振り返ると、薄らと目を開いて離れようとする保険医の白衣を掴む千夜の姿があった。

「……その必要は、ありません。このままに、しておいてくださ……い」
「何を、言っているの！？　あなた、自分の身体がどうなってると……」
「……わかってます。……〟だから〟、大丈夫です」
「……っ！」

保険医はその台詞に言葉を失くしたかのように、目を見開いた。
千夜は保険医の白衣の裾を掴んだまま、

「……あとで、かかりつけの医者のところに自分で行きますから……今は、ここで少し休ませてください。放課後までには……帰りますから」
「……」
半開きながらも強い眼差しで訴えかける千夜と保険医の視線は暫しの間合わさったままだった。
数秒のやりとりの後、保険医が何かを納得したように瞼を閉じる。
「……大丈夫、なのね？」
「……はい」
「……わかったわ」
「保険医っ！？　何言って……」
「――――蒼助、いいんだ」
保険医のまさかの決断に目を剥いた蒼助を、千夜が制止した。
「いいって……お前」
「……いいんだ。俺の無茶な要求を、その人は呑んでくれただけじゃないか」
酷く落ち着いた口調で、千夜は蒼助を宥めた。
蒼助からしてみれば、あんな目にあってそこまで落ち着かれているとどうすればいいかわからない。
「……顔」
「あ？」
「……口が、切れてる」

言われて手を当ててみると、殴られた際に切れた口端はまだ乾ききらず、潤いを若干残してあった。
だが、千夜も他人である蒼助のそれを気にしている場合ではない重傷を負っている。

「……ナニ言ってやがる。こんなんよりも、お前の方がひでぇじゃねぇか」
「……まぁ、な。スタンガン二回は、さすがにキツかった」

なんてことなく零した言葉に、蒼助は気づかぬうちに手を痛むほどに強く握っていた。

改造して威力の抑制の外れたスタンガンを二回も、この華奢な身体に打ち込んだという。
やはり殴っておくべきだったか、と蒼助が危うい思考に走っていると、

「……ごめん、な」
「……はぁ？」

唐突な謝罪に蒼助は一瞬意味がわからず、呆気にとられた。
どういう意味だ、と蒼助が尋ねる前に、千夜が独り言のようにポツリポツリと語り出す。

「本当は……もっと、穏便に事が済んだのに。俺が……余計なこと言わなければ」
「……何だよ、余計なことって」
「……余計なことだよ」

遠回しに深入りを拒否する返答だった。

そして、呟くように、

「俺なんかが……言う資格なんてないような、ことだ」

ごめん、とまた一言。

それを最後に千夜は目を閉じて、言葉も切らした。

眠るように意識を再び失った千夜に対し、蒼助は歯切れの悪さだけが募る。

「何だよ、ごめんって……何で、お前が謝んだよ」

その言葉に答える者は、既に眠りに落ちていた。

◆◆◆◆◆◆

「……あんた、好きなの？」

「何だ、突然」

仕切りを引いて出てきた矢先の問いかけ。

机について背を向ける保険医が投げたものだ。

目的部分が抜けていたが、その空白に何が入るのかは蒼助にとって考えるまでもなかった。

「……なぁに？　恥ずかしいの？　あんたほどの男が……」

「……何で、どいつもこいつも俺の周りの女は同じこと聞くかね」

苦虫噛み潰したその表情が、答えなのだと保険医は受け取った。

「ふーん、そうなの。それじゃぁ――――――」

――――止めときなさい。

一瞬で打ち消された微笑の代わりに真顔がそう告げた。

立て続けの突拍子の無い言葉に対し、蒼助は何を言われたのかわからなくなった。

「……冗談のつもりかソレ」

「冗談に聞こえたのなら、今度は本気と前置きをつけてもう一度言ってあげましょうか。

――――止めときなさい、蒼助。あんたに、あの娘は重過ぎる」

その直後、遮るようにバンっと殴りつけるような音が響く。

保険医の目と鼻の先に聳え立ち、手の平を机上に叩き付けた蒼助。

剣呑とした眼差しが威嚇するように真下の保険医を見下ろす。

「そういうワケのわかんねぇ説教じみた台詞は聞き飽きてんだけどなぁ……」

「言っとくけど、私はあんたの他の女たちみたいな嫉妬とかでこんなこと言ってるわけじゃないのよ。てゆっか、別にあんたが何処の馬の骨に熱を上げようと知ったこっちゃないし。何度か暇つぶしに寝た相手に、そこまでオチるほどの青さはとうの昔に卒業したわよ

ー」

常人なら怯む鋭い眼光にも、鼻であしらうような酷い言い様。

しかし、そこで話は蒼助の思わぬ方向へと転じた。

「……私はね、あんたのためじゃなくて、〝あの娘の為〟に言ってるのよ。さっきの台詞……言い方を変えれば――――――あんたじゃ、あの娘の抱えてる一物（ガン）を享受しきれない」

「ガン……？」

「……さっき、彼女……私の言葉に、〝だから、大丈夫〟って言ってたの聞いた？」

「……あ、ああ」

そんな不可解な台詞を、確か言っていた気がする。

「……〝だから〟っていうのは、なんかしらの理由があるから使う単語なのよ。意味、わかる？」

一呼吸置き、保険医はズバリと切り込むように告げた。

「彼女、あんな怪我を負うのは初めてじゃないのよ」

「……」

「ひょっとしたら、あれよりももっと酷いのを経験したこともあるのかもしれない。今、負ってるアレをそれよりも下としか見れないまでに、怪我に対する捉え方が麻痺してる」

それに、と保険医は付け足すように言葉を繋げる。

「身内にそれを知られるのを極端に拒んでたわよね。今までも、そうしてきたんでしょう。誰に知られることもなく、一人で痛みを抱

えてそれに耐えてやり過ごしてきたのよ。彼女は、そういう系統の破滅型なのよ。一度抱え込んだら、誰かに打ち明けることもできなくなり、その痛みはやがて膿んでデキモノになる。言い様じゃ、一種の心の病気とも呼べるかもしれないわね」

「知ったような口ぶりじゃねぇか」

「……知ってるって、言ったら？」

不意に保険医の表情がゆらりと揺らめく。

陽炎のような靄は翳りとなってそこに被さった。

「……喜美（きみ）？」

思わず蒼助は相手の名前を口にしてしまった。

それほどまでに、目の前の相手は先程までの不遜さは何処へ消えたのか、その姿が霞めるほどの儚さを漂わせていた。

「あんたが納得できるような話を聞かせてあげる。ふふ……どうしてこんなこと話さなきゃいけないんだか……でも、なんかそういう気分だし……いっか」

そう言いながら、保険医――――喜美はにっこりと蒼助に微笑んだ。

はっきり過ぎて、何処か歪にすら感じる笑顔。

表情をそのままに、喜美は衝撃的な言葉をさらりと世間話をするかのように、

「私、高校時代に同級生にレイプされたことあるの」

さも何でもないことのように、あっさりと告白する喜美に言葉を失う蒼助。

ふぅ、と椅子にもたれかかるように喜美は力を抜き、

「誰にも言えなかった。特に親には……私、両親が大好きだったから絶対に知られたくなかった。いつバレるかひやひやしてたら、そいつがそれに勘付いてそれを逆手にとって同じ事を延々と強要してきた。次第に仲間まで引き出してきて……当然、何度か当たった。孕んでは何度も一人薬でトイレに流して……結局、両親に気づかれて全部吐かされて、事実が全部表沙汰になるまで地獄のような日々は続いたわ。両親は、どうしてもっと早く話さなかったって泣きながら私を詰ったわ。……ねぇ、どうして言えると思う？　言ってしまったら、自分にとって何よりも大切なモノが壊れて失われるとわかっているのに……どうして、自分からそれを壊そうと思えるかしら」

語りかけは、いつの間にか吐き零すような独白に変わっていた。

瞳は遠くを映し、虚ろとなる。

「……まぁ、結局は……たくさん削られ、その上何よりも守りたかった両親とのごく普通の日常まで失くしちゃったわけね、私は。おかげで、引っ越した後も成人した後も……両親は私を腫れ物に触るような余所余所しい扱いを続け、今に至るわけ」

「……」

「私が何をいいたいかわかる？　蒼助。……あの娘にも、私と同じでどんな苦痛であろうとそれを耐えて守りたい、かけがえのないモノがあるのよ。私が、両親との関係を守りたかったように……。ねぇ、もし仮に……あんたが気づかず彼女が慰み者にされて、その事実を後で知ったら……何て言う？　きっと、言うわね。何で黙ってた、と」

否、と返すことはできなかった。
もし、そうなっていれば、喜美の言うとおりにしていただろう、と蒼助はその仮定の中の自分を思い浮かべてそう思った。

「……だから、止めておきなさい。あんたは不用意に彼女に触れれば傷つくのはあんた自身。そして、触れられて彼女もまた傷つく。通い合ったとしても……一緒にいても傷つくだけなのよ、あんたと彼女は」

経験者たる喜美は、諭すように再び同じことを蒼助に聞かせた。

自分はそうではなかったが、恋や愛はもっと甘ったるくていいのだ。
まだ若いこの時期に、苦さしかないようなモノをわざわざ選ぶ必要は無い。
そんなものはいずれ来るとしても、もっと先に延ばしてしまえばいい。

「だったら……あるのかよ。傷つかず……先に進める方法なんて」

問いに対し、喜美は椅子から立ち上がるという行動をとった。
視線も顔も合わさないという奇妙な向き合い。

「……先に進むっていうのは、何の？　……恋？　人生？」
「……どっちもだ」
「……どっちも、ね」

呟くと、一息。
そして、そのまま蒼助の横を通り過ぎる。

その際に、喜美は己の代わりのにとでもいうように【答え】を置いていく。

「……さぁね。そんな風に進めた試しがないからわからないわ。自分で考えてみて」

無責任な返答を残し、喜美は白衣を翻して保健室を出て行った。

◆◆◆◆◆◆

残された蒼助は髪をくしゃりと掻いて、少し所在無さげにそこに立ち尽くしたかと思えば、不意に足先を千夜の眠るベッドへ向けて動いた。

シャッと音をたてて、仕切りを引くとそこの住人の寝顔が露となる。

蒼助はそれを確認すると、立つ位置に椅子を引き寄せてそこに腰を落ち着かせた。

「……なぁ、ひでぇ話聞かされた」

瞼を閉じる千夜に向けて、届くはずのない言葉を声に乗せて投げかける。

「俺が触んなきゃ、お前は傷つかずに済むんだと」

一人で痛みを抱えて、それに耐えて生きてきた。

喜美が先程言っていた言葉だ。

蒼助が脳裏に甦るその言葉から、記憶を探り出す。
思い当たる節が無かったわけではない。

路地裏で蹲っている姿を見つけた夜。
或いは、黒蘭の提案を強く突っぱねたあの時。

一端探り始めると、ボロが出るように面白いほど発掘が進む。

気づいていなかったのか。
己に問い、蒼助は否と返す。
感じてはいたが、勝手な判断で杞憂だと思っていただけだ。
あの女はそんな弱い人間ではない、と。

馬鹿な話だ。
実際は、そうして自分の理想を押し付けて、千夜の本当の姿を見ていなかった。
怖かった。
千夜が――――――自分が認めた女が、かつての痛みに耐えることしか出来なかった忌まわしい弱い自分と同じ人間であると認めて、失望を得ることが。

だが、違うのだ。
味方がいなかったから一人で耐えるしかなかった自分とは違う。
千夜には心からその身を案じてくれる人間がいる。千夜もわかっているはずだ。

わかっていながら、千夜は一人で耐えることを選んだ。
三途や朱里、上弦や黒蘭という大切な人間に己の痛みを分け与え

ることよりも、自分一人で背負う込むことを。
頼れる人間がいるのにもかかわらず、その手をとらないことにどれだけの意志が必要るのだろうか。

今更気づいた。
弱いなどと、見当違いもいいところだ。
この女は本当に強い。
己の弱さに自覚を持った強さを持っている人間。
ほんの少しでも揺らげば、そのまま崩れ落ちて破滅してしまう紙一重の危うさ。

こんな華奢な体で、背負うには重過ぎるそれの重圧を持ちこたえてきた千夜。
楽にしてやりたい。
だが、それには――――――

「……何で、だよ」

大事にしたい。
弱音を吐ける場所になりたい。
けれど、そんな自分の行動は、千夜を傷つけるだけだという。

「何もしなくても、壊れちまうのは見えてるじゃねぇかっ……」

波打ち際に建てられた砂の城のように。
徐々に、そして確実に崩れて――――――最後には、消えてなくなる。

静観し、それを見届ける。
それも確かな、一つの楽にしてやれる方法。

間違いではないだろうが、

「……そんなの、納得できるわけねぇだろうがっ」

触れても傷つけて。

触れずとも壊れていく。

「どうすりゃいいんだよ……俺は――――」

「――――傷つければいいじゃない」

心の隙間に差し込むように響いた声に、一瞬蒼助は思考の活動を止めることとなった。

何故なら、本来この場で聞こえるはずのない者の声だったからだ。

思わず顔を上げ、声の聞こえる方を見た。

視線が向かったのはドア一枚が隔てる出入り口だ。

一度自覚すれば、確かにそこから気配の存在が伝わってくる。

「……こくら、ん？」

どうして学校に、と問いかけようとする蒼助を押しとどめるように、ドアの向こうの相手が先手を取る。

「お悩みのようね、坊や……自分が何をすればいいか、わかなくなった？」

「……わかんねぇよ」
「まだまだ、ダメね。あれぐらいの言葉で揺らいじゃうんじゃぁ。……まぁ、あの保険医さんの言うことも正しくはあるでしょうけどね」
「お前も……そう、思うのか？」
これでそうだと言われたら、本気でどうすればいいかわからなくなる、と不安になりつつも。黒蘭の真意を探る。
返答は、蒼助の不安を弄ぶようにはっきりとは返されない。
「……間違い、と否定する気はないわ。それまた、一つの結論の形よ」
「――――だったら、俺は一体っ」
「でも、貴方がそうする必要はない。そして、貴方がするべきことはそれではない」
肯定かと思えば、否定。
結局、黒蘭は何が言いたいのか。
蒼助は疑問に苛まれながら、黒蘭の言葉を理解するだけの冷静さを保つことに必死だった。
「何も出来ない、なんて考えはそれこそ見当違いいいところよ。貴方がすべきことは、最初から一つ……選択する必要もない、たった一つだけ」
「……たった、一つ？」
黒蘭の言うたった一つが見当もつかない蒼助は、勿体つけた口ぶりが痺れを切らすのを待った。
その果てに、待っていた回答は蒼助の苦悩を根底からひっくり返す代物だった。

「言ったでしょ？　――――――傷つけてしまいなさい。それこそ、木っ端微塵に砕いてしまえばいい」

「……はい？」

人が散々頭を悩ませていた問題に、あっさりゴーサインを出す黒蘭に蒼助は唖然とするしかなかった。

「……なぁ、マジでそろそろここらいい加減にしてくれよ。こっちは慣れない悩みに脳みそ酷使して精神病んじまいそうなんだ。つか、そんなことして何になるって……」

「千夜を楽にしてあげられる唯一の方法なのよ？」

溜息混じりにぼやいていた蒼助は、黒蘭のその言葉に沈黙に落ちた。

そして、

「……どういう意味だ」

「言葉どおり。傷つけて、壊すの。そのコを救いたいのなら、それしかない。貴方がそうするしかない。……とりあえず、その理由は後で教えてあげる。とりあえず、貴方は先に知らなくてはならないことがあるから、このまま黙って聞いて」

口調そのものは変わっていないはずなのに、紡ぐそれら言葉にはその前にはない”何か違うもの”を蒼助に感じさせた。

あいにくなことに、それを具体的に表せる言葉を蒼助は知識とし

て持っていなかった。
だが、足らないながらも当てはめるなら一つだけそれらしき言葉がある。

『真剣』。

今の黒蘭からは、通常を装いながらもそういった真っ直ぐな一本が入り込んだ雰囲気がドア越しでありながら伝わってくる。

「今から貴方に……”嘘”を、教えてあげる」
「嘘……？」

話がまったく見えない。

「そう、嘘よ。貴方に向けて使われている嘘。それがある限り、貴方はこれ以上先に進めない。だから、助けてあげる。もう壊れかけたあのコを完全に”折る”為に……貴方はこの嘘を暴かなくてはならないの。その為には、答えをここで知っておかなくてはね」
「嘘って……誰の」
「決まってるじゃない」

何を今更、と黒蘭が壁の向こうでクスリと笑ったような気がした。

「出会った時から続いている――――――千夜が貴方についた嘘のことよ」

［八拾四］　砂の城（後書き）

さりげに蒼助、保健室の先生とも関係を持っているというお約束までしちゃってたり。
実は、この先生も口じゃああ言ってるけど、蒼助が普通に好きです。
ただ、智晶よりもずっと大人で理性も敵っているので暴走なんて無様な真似はしない。
主人公らしくモテる蒼助。
……まぁ、最初だけだが（意味深

千夜の嘘。
何でしょうね。

［八拾伍］　不認知の潜伏（前書き）

いつ来るのか、と恐れ待ち構えていた
もう既に居座っていることにも気づかず

［八拾伍］　不認知の潜伏

ふわふわと安定しない千夜の意識を突つく声があった。

――――――みづきくん。

――――――ミヅキくん。

ふわふわと安定しない千夜の意識を突つく声があった。
煩わしいというよりも、くすぐったさに近い。
その刺激は弱くても確実に千夜を覚醒へと誘う。
そして、

「――――御月くん、御月くんってば！」

これ以上にないギリギリまで連れてこられたかと思ったその時、一際大きな呼び声により意識を引っ張り上げられて――――目が覚めた。
暗闇から切り替わった視界に突然入り込む光に痛みを覚えつつ、慣らすように瞬きを何度が繰り返し、瞼を上げる。
その直後に対面したのは、少女の顔のどアップだった。
目と鼻の先の距離間で、少女はムッと結んだ口を開いて、

「……起きた？」
「……起きた」

眠りの名残を感じさせるこちらの返事を聞くと、少女は屈めていた上半身を引いた。

「もう、購買で飲み物買って返って来たら寝てんだもん。待ってるって行ったのに」

不機嫌そうにむくれる少女をぼんやりと見つめながら、千夜は『ある違和感』に襲われていた。

「あれ……何で、いるんだ？」
「はぁ？」
「いや、だって……」
「寝ぼけてんの？」
「……寝ぼけて、いる？」

少女は鸚鵡返しに言葉を返す千夜に呆れ帰ったように鼻を鳴らす。

「い・い？　私が誰かわかる？」
「え……」
「わかる？　ほら、答えるっ」

唐突な質問を投球されて、戸惑う千夜に少女は強く先を促す。
逆らえない勢いに千夜は流されるようにして、

「……東原、詩菜」
「そうよ。私は【東原詩菜（ひがしはらしいな）】。じゃぁ、次。あなたの名前は？」

一体どういう状況なのか、と思いつつも千夜は問われたことに答えようと、

「……よす」

答えかけて、再び違和感が産み落とされた。
この名は問いに対し、正解と成り得る答えなのか、と。
僅かな溜めが考えを見直す時間となり、そして――――

「……御月、【御月千夜（みづきかずや）】、だ」

すると、少女は眉間に皺を寄せて不機嫌を露にした表情をくるりと百八十度反転させて、にっこり笑い、

「せーいかい。よく出来ました。そのなんかひっかかる間については言及無しにしてあげるっ。夢からの帰還おめでと、御月くん」

現実、という言葉に意識が反応を示す。
彼女が目の前にいるのが現実。
そうであるならば、先程までのことは、

……夢、か？

思い、行き着いてみると、その結論は異様にしっくりと馴染む。
周りの風景も限りなくホンモノだ。
屋上。覚えはある。あるに決まっている。

――――【俺が通っている学校】じゃないか。

違和感が消えていく。
心が完全なる確信を得たことによる現象だ。
あれは夢。
これは現実、と。

「あー、そうか。……夢かぁ……ははっ」
「なーに？　今度は笑い出して」

呆けていた状態から突然、笑いだした千夜に少女は怪訝そうに首を傾げる。

「……いや、ちょっと変な夢を見ていたんだ……ありえないって奴なんだけど……妙にリアルだったなぁ」

今さっきまで現実とそれとの区別がつかなくなるほどに。
そう言うと、少女――――詩菜は興味を抱いたらしく、

「へー、どんな夢？　何が変で、リアルなの？」
「……えー」
「渋るな、ケチ。減るもんじゃあるまいし」

俺は減る。大事な何かが減りそう。
心の中で主張しつつ、言え言えと催促してくる詩菜の粘り強さに負けて、千夜は観念した。

「……あー、笑うなよ？」
「うんうん」

頷く表情は笑顔。
笑うんだろうなー、とその後の反応に対する千夜の覚悟はこの時

点で大体固まりつつあった。
諦め半分投げやり半分の気分で千夜は言葉を放り出した。
「俺、女だった。しかもボンッキュッボンッ、のナイスバディ」
「――――ぷっ」
それみたことか、と腹を抱えて笑う詩菜を千夜はジト目で見つめる。
このまま、不貞寝してやろうかとだるい気分に浸っていると、
「ごめんごめん。寝ないでよー……だって、なんか想像したら全然違和感なかったから」
追い討ちをかけられているのだろうか。
しかも、それはトドメに充分値する攻撃力だ。
「……」
「あ、はは……あ、それで？　その時は私は、どうだった？　ひょっとして、男とかになってたりした？」
「……ん、詩菜は、――――」
言いかけて、思考の動きが何かに引っかかったように止まる。
夢の中で、目の前の少女はどうあったか。
じわじわと、染み出すように記憶が彼女に関することを吐き出す。
そして、
「……いなかったよ」
「え？」
「……詩菜は出てこなかったなー、出てくる奴ら皆知らない連中ばっかだったし。俺が女だったんだから、現実味は皆無な世界でさ

ー」
「何だ……」
つまらなそうに目を細める彼女を見ながら、これが現実でよかった、と心からの安堵を抱く。
何故なら夢の中で、酷く長く感じたあの夢の中、彼女は――――
「ま、いっか。そろそろ夢の話は止めて現実に戻ろうよ。――はい、飲み物」
千夜の思考を遮るように遙が目の前に紙パックのジュースと思われるものを差し出す。
受け取るが、
「……なぁ、詩菜さんよ」
「なに？」
「これ、ナニ？」
ジッと凝視するモノには表示がされていた。
『赤汁』と。
トマトジュースかと思ったが、表示されている構成成分を見る限り、その判断は愚直かつ無謀過ぎるだろう。
「この【赤いモノ】がいろいろっていうのは……」
パックに表示してある誇張文字のことだ。

「購買のオバサンが異様に進めてきたのよ、それ。その宣伝文句のいうとおりいろんな新鮮な【赤いモノ】のミックスジュースなんだって……んー、まぁちょっと冒険してみたくなってノリで買っちゃった」

それは違うことにしようよ、と視線でツッコミつつ表面は苦笑を保つ。

はたして、【赤いモノ】は全ては体内で吸収されても無事で済むものであるのか。

疑問に対し、自身の思考が『是』と答えを返してくれないことに千夜は不安を覚えた。

「ちなみにお前の真っ黒いパックのは？」

「【黒汁】。黒酢っぽい飲み物だって書いてあるよ」

「……」

もうそれ以上は何も聞かずに千夜は黙って付いていたストローを飲み口に挿した。

幸い、味はトマトジュースに近い味だった。

いろいろ奇奇怪怪な珍味ジュースは飲んできたが、ここまで来るといい加減彼女の買ってくる飲み物についてはもう悟りが開けそうだ。

「そういえばさ、昨日のＬＨＲで進路調査のことが出たんだけど」

黒い液体をストローで吸いながら隣で座る詩菜が唐突な話題を挙げる。

「あー、あったなそんなアンケートみたいなの」

「そー、それ。御月くんはなんて書いたの？」

問われた千夜は、その時自分が書いたことを思い出す。

「……未定、だったかな」

「ふーん。何か夢とかなかったの？」

「……ないな」

夢。将来の夢。進路。

改めて考えて、認識してみるとそれを考えて悩む自分がなんだか現実離れしている気がしてならなかった。

数ヶ月前までそんなものとは無縁の生活をしていた千夜にとっては、それこそ夢なのでは、と思えて仕方ない。

「ふーん……でも、まだ一年も先のこと今からやるなんてこの学校も気が早いねぇ」

「そうだな。……詩菜は、なんて書いたんだ？」

「ん、私は……とりあえず大学かな。とりあえず、ね……お祖母ちゃんたちにいつまでもお世話になっているわけにはいかないし、やっぱり将来は就職でもして早く自立しなきゃ……その為には高卒よりも大学に進学した方がいいだろうしね」

「ちゃんと、考えてるんだな」

「そーかな……皆、最初はなんとなくそんなものじゃない？　きっと、そのうち本命は決まるだろうから最初はなんとなく意味もなく無難な感じでさぁ」

そういうものなのか。それが『普通』というものなのか。

悠長な考え方に千夜は改めてギャップの大きさを感じた。

自分の生きていた『世界』ではその日その日の明日をどう生きるか、それ以上先のことに気を配る余裕すらなかったというのに。

この『世界』のでは十年や二十年先のことを考えたり悩んだりする猶予が充分にあるという。
『同じ世界』にあるはずなのに、異なる環境、異なる空気、異なる生き方。
そして、此処とは異なる場所で――光に相反する影の中で生きていた自分が本来なら存在しえないはずの光の中で、今こうして何事もなかったように振舞いながら生きている。
慣れ、とは恐ろしい。
最初は違和感や居心地の悪さを感じていたというのに、今となってはここにいるのが、この『世界』で生きているのが当然のように思えているのだから。
ここにはたくさんのモノが溢れている。
『普通』、『日常』、『退屈』、『学校』、『娯楽』。千夜には手に入らないはずだったものばかりが、今はもう目の前に当たり前の如く置かれている。

いつからそれが当たり前になったのか。
いつから違和感がなくなったのか。
考えて、隣に視線だけを向ける。

この少女――――東原詩菜と出会って、一緒にいるようになってからか。

何もかも自分とは対照的すぎる少女。
似通っている部分など何一つない。
自分が夜の月なら、彼女は昼間の太陽。
非日常そのものと日常そのもの。
異なるが故に、対極の磁石が惹かれあうように――――――愛しい、と千夜は感じていた。

「あ、そうだ」

千夜の考えているなど欠片も知る由もない詩菜は、突然何か良案を思いついたかのように声をあげた。

「特にやりたいことないないんなら大学進学考えてみれば？　その方が、いざ何かやりたいとか思ったとき選択の幅も広まるよ」

「大学、ねぇ……」

「あ、でも……両親いないんだったよね……妹さんのことも、あるし……」

そこで壁にぶつかってしまったように、詩菜の表情が沈みがちになっていく。

彼女が気にしていることは、すぐに千夜の思考が理解した。

金銭面の問題についてだろう。

千夜に両親がいないことは知っている。家に何度か上げている為、小学生の妹の存在も。

確かにこれが『普通』なら親なしの身では下の子供の将来も考えて養わなければならないので就職を考えるだろう。

しかし、幸い千夜には両親がいたならではの仮定よりも、遙かに金銭面の援助をしてくれる人間がいる。

偽造した戸籍上、そして事実上保護者である三途に頼めば、簡単に頷いてくれるだろう。そもそも学校に通うことを薦めたのもあの女だ。

「別に、大丈夫だと思うから……そうだな、大学な……それもアリかな」

「えっ！　じゃ、じゃぁ、私今度の日曜日に大学見学に行くんだけど……ど、どう一緒に！？」

思うように事が運んで興奮しているのだろう、ずずずい、と決定打の釘を打たんばかりに迫る勢いに思わず身を引きつつも、

「あ、ああ……行きたいな」

「っっ！」

おもしろいくらいあからさまに嬉しそうな笑顔を浮べる詩菜が、千夜はかわいいなぁと内心のろけた。

「よ、よかったー。一人じゃちょっと気が引けてたのよね」

そう言いながら、詩菜は以前よりは明らかに上がった勢いでズゴゴっと黒い飲み物を吸い上げて飲み干していく。

ぷふぁ、とストローから口を離すと、

「……いつまでも同じ道を歩けるわけじゃないのは、わかってるんだけどさ……でも、それでもやっぱり……寂しいよ、そーゆーのって」

「……」

「ずっと、今のままがいいな……無理だけど」

ねぇ、と詩菜は膝に顎を乗せて、

「……私達……これから先も一緒でいられるよね？」

一瞬、千夜はひやりと胸の奥が冷たく凍るような感覚に襲われた。

未来という安定のない不確定要素に、判断が鈍る。

……この未来（さき）も、ここに。

馴染めなかった場所には、もう馴染んでいる自分がいた。
ここに居ることは可能だ。望めば、ずっと立っていられる。
何故ならば、と千夜は虚空に向けていた視線を隣接する少女へ向ける。

「まるで、俺が一人何処かに行くみたいな言い方だな」
「べ、別にそういう意味じゃ……」
「じゃぁ、行っても良いのか？」
「だ、ダメ！」

あ、と顔上げての全否定の後に、我に返った詩菜は顔を沸騰寸前の如く真っ赤にして沈黙に伏した。
それがおかしくて思わず笑ってしまう。

「冗談だよ。どこにも行かないよ、詩菜といるのが一番なのに」
「……す、素面でそーゆーことさらっと言わないでよ！　聞いてるこっちが恥ずかしいじゃない、もう！」

そういう割には満更でもなさそうだ、とプイっと逸らした真っ赤な顔がややにやけているのを千夜は微笑ましげに眺める。

千夜と詩菜は微妙な――友人以上恋人未満の関係上にいる。
ほんの些細な事柄や力がかかれば簡単にどちらかに偏ってしまいそうな危うい均衡。
千夜は彼女が自分に好意を持っているのを知っている。
そして、千夜自身も彼女を想っていた。
それにも関わらずこのどっち足らずの中途半端な状態に甘んじる理由は、

……何でだろう。

それは千夜自身にもわからないでいた。
実は何度か思い余って想いを口にしかけたことはあった。
だが、その度に内側の何かに抑制され、至れず終わる。

……どうしてだろう。

言いたいはずなのに、言うなという歯止めがいつも引っかかる。
それがこのじれったい一歩引いた関係を続行させる原因であった。

「……まぁ、いいよな」
「へ？」

無意識に漏らした言葉に遙が首を傾げるのに対し、何でもないよ、と取り繕う。

焦る必要はない、大丈夫だ。
自分はこれからこの世界で生きていく。
その先には彼女が居る。
時間はこれからまだ有り余るほどある。
焦らなくても、いつかこの線を越える日は、きっと来る。

だから、今はまだ――――――

そこで、千夜の意識はぷつんと途切れた。

◆◆◆◆◆◆

一瞬の急落下にも似たブラックアウト。
その次に、再び切り開けた意識が捉えたのは、屋上から見えるはずの青空ではなく、無機質な白い天井だった。

夢。

腹部の熱を持った鈍い痛みが、それにいっそうはっきりとした輪郭を持たせた。

……どおりで、な。

そんなウマい話があるわけないんだ、と千夜は無いとは言い切れない落胆を抱えて、身体を起こそうとする。
『異変』に気づいたのは、そこでだった。

一人で寝るベッドの上とは、こんないにも窮屈だっただろうか、という違和感、
明らかに一人とは思えない感覚。

「……オイ」

“自分の隣”で寝息をたてる男に、千夜は思わず声が低くなった。

一人が寝るのに快適なスペースを一気に狭苦しくさせる男、玖珂蒼助は知ったことかといわんばかりに惰眠を貪っていた。

たとえどんな重傷を負うこととなっても、この男の看病だけは受けたくない。

千夜はどうでもいいことながらそう思った。

「普通、淵に頭を乗せて寝ても、何で乗り上がってくるかお前は……ぁ？」

再び身体を起こそうとして、体の右――――その腕が上がらないことに気づく。

視線をそこへ向かわすと、そこにある手は”別の手”に被せられて身動きできない状態になっていた。

呑気な寝顔とは打って変わって、眠っていながらも包むように握る蒼助の手にしっかりと千夜の手から離れない力が込められているのは、その受け手である千夜が一番わかることだった。

その手をしばらく見つけた後、蒼助の顔へとその視線を移す。

観察している内に、唇の端に切れて滲んだ血が僅かに固まっているのを発見する。

その一つの発見が、千夜を回想という行動に至らせた。

絶望の淵に落ちかけた自分を引き止めるべく現れた蒼助。

自分が犯した失態のツケと称して、プライドを押し潰して頭を下げた蒼助。

玩具じゃない、と否定した蒼助。

自分の何を知っていると問われて、何も知らない、と答えた蒼助。
だから知りたい、と付け加えた蒼助。

何で好きなのかわかる程度の想いじゃない。

最後に行き着いた台詞とそう言った背中が千夜の回想に終わりを告げる。

「わからないなら、止めておけばいいのに……」

そんな得体の知れないものに深く突っ込んだって、きっとろくなことにならない。
それが、この男にわからないはずがないのに、どうしてあんなことを言ったのか。

「あんな女に殴られてまで……」

完全に関連性を断たせようと、蒼助はそこまでした。
女はそれが自分のためだと言っていた。

「馬鹿」

そう思った女も。
そうだと肯定した蒼助も。

そして、

それに紛うことなき『喜び』を感じた自分自身も。
千夜は、何もかもを罵った。

「そこまでする必要のある女じゃないだろ、俺は……」

一丁前の女ですらない存在に、どうしてこの男はそこまで出来たのだろう。
どちらかにはっきりと偏ることすら出来ない自分に、何故。

「……っ」

触れる手が不思議と熱く感じ、引き抜こうとすると蒼助の手は意識がないにも拘らず、一向に力が緩まない。
まるで、出会ってから引きずり続ける自分たちの縁のようだ、と千夜は思い、ふと何かに引っかかる。

始まりは本当に、些細な僅か一瞬の逢瀬にも等しい一夜の邂逅だった。
だがあの後、本当に自分はこれきりで終わりだと思っていたのか、と疑念する。

違う。
心の何処かで、もう一度会いたいという想いを潜ませていた。
理由なんてない。

単純に――――――ただ、逢いたかったから。

「……あぁ、そうか」

そうだったのか、と何か諦めにも似た落ち着きが千夜の胸に落ちる。

最初から何一つ狂ってなどいなかったのだ。

わかってしまえば、認めてしまえば、こんなにも簡単に全てが結論づいていく。

そんな己の単純さに思わず笑みが千夜の唇から零れる。

何度も理由を考えた。

これがいわゆる腐れ縁なのか、というほどの幾度となく重なる拘わり。

望んだわけではない結果や道筋を行く羽目になっても、仕方ない甘んじてしまった裏で妥協とは正反対のもっと積極とした感情があった。

蒼助の告白が何かのスイッチとなったように、自分の中で何かが変わった。

この男に向ける感情自体は最初と同じであるはずだ。

変わっていない。

なら、今もある感情は最初に抱いていたものと同一であるということ。

それはすなわち――――――

「何だ、最初から決まってたんじゃないか……」

真実は、最初から自分の中にあった。

それを認めまいと、自分はずっと目を逸らし続けていただけだった。

何故なら、それは相手を最悪へと至らせる選択だったから。

二度と犯さないと決めた過ちとの再逢を許すことだったから。

「……なぁ、蒼助。やっぱり……俺には、お前がそこまでしてくれるほどの価値なんて、ないよ」

そうじゃないか、と一人呟く。

性別の揺らぎ一つで、かつての想いをまるで最初から存在しなかったも同然に『無』としてしまった自分に、誰かを想う資格などないのだから。

『……私達……これから先も一緒でいられるよね？』

かつて約束し、今となっては果たされなかった彼女の言葉が彼女の声で千夜の鼓膜に幻聴する。

その存在も想いも消え、記憶と夢にその残像と思い出のみとなった彼女が己を苛むようで、思わず目を閉じた。

まるで呪いのようだ、とかつては愛しく想った少女の言葉をそんな風に捉えるに堕ちた自分がどうしようもなく忌まわしかった。

残るもう一方の腕で抱きしめるように蹲り、ゴメン、と息を殺して呻いた。

［八拾伍］　不認知の潜伏（後書き）

千夜の過去の女、登場。
元カノがいるヒロインって何さ、とか言わないで……私も思ってるから（え
現時点でわかることといったら、ヒロインらしく好奇心旺盛だった、ということくらいですね。いずれ過去話とかで全貌が見せられると思いますので、今はまだこれくらいで。

そして、過去ではなく現在のヒロインにして元ヒーロー。
八拾伍話にしてようやく恋の自覚。長かった……（ほんとにな
想いそのものは最初からあった、という感じです。
しかし、千夜にはそれを簡単には認められない「負い目」がてんこもりなんですよ。じゃなかったら、作者も八拾伍話まで引っ張る事なんて苦労してないんですってマジで。

一人で生きていくならいくらでも背負えた。
しかし、誰かと生きていく事を決めた時、それらは一気に枷となって心と理性を戒める。
最近、千夜が自虐的になってるのもそのせい。
まぁ、元々とある理由で自分に自信が持てないコなのだがね。

……さて、読者諸君様。
話は唐突に変わるが、エロシーン投入の時が近いのだが、作者はどうすればいいのだろうか？（えぇ
このまま予定通りいくと、間違いなく十五禁になるんだが……。
とりあえず、背景はブラックだなぁ……（やる気はあるらしい

「八拾八」　相談の主張　（前書き）

それがもたらすのは、渇きか、潤いか
今はまだ――――

［八拾六］　相談の主張

「――――っっおぎゃあああああああ！！！！！！！！！？？？？」

日暮れ間近の時刻、久遠寺医院に取り上げた赤ん坊――――があげたには野太過ぎる絶叫が響き渡り、建物全体を震撼させた。

発生源は医院の中枢たる院長専用の診察室。

そこには、絶叫発生約三分前に来院した訪問者が部屋の主たる院長・久遠時女医と共にいるはずだった。

それが異変であると察した内部関係者は、現場にかけつけるべく各々の持ち場を離れようとしていた。

そして、その当の現場では、

「お、おまま、おまっ……な、何だぁ、それはっっ！？」

「……あー、うっせ。……どもるな喚くな」

来院者――――千夜は、最近距離で喰らった被害に耳を押さえつつ、

「……見ての通り、殴られたんだ。それだけだ」

「そ、それだけだとぉっ！？」

「あ、いや……実はこっちも。つか、本命だな」

べらり、と紺色のジャージを捲り、その『本命』を晒し出した。

「ぎっ」

「お前のくれた薬のおかげで治癒らないんだ。お前なら、綺麗さっぱり……」

「ぎゃあああああああああああああっ！！！」

第二の震災発生に千夜の言葉にかき消された。

火に油を注いでしまった、と己の失態を自覚したが時既に遅し、であった。

音波を発した後、久遠寺は突然俯いて勢いを失くした。

エネルギー切れか、と様子を無闇に近づかず己の立ち位置で千夜は様子を伺っていたが、

「……つ、だ」

「黎乎？」

「どぉこのどいつだぁぁっっ！　私の日々の目の保養対象を傷モンにしやがったタコはぁぁ！！？　機関銃、誰か機関銃持って来いぃぃ！！」

「どうでもいいから、早く治療……」

「殿中じゃああ、殿中ですぞぉおおおっ！」

殿中じゃねぇココお前の病院だろ、と突っ込む前に暴走状態に入った女医はそのまま暴れ馬のような勢いで自身の診察室を飛び出していってしまう。

止めようとして行く先を失った手を宙に漂わせながら、千夜はあの面食い女医のところにこんな状態で来たのが間違いだっただろうか、と後悔に浸る。

しかし、他に当てがないのだから仕方ない。

「すみませんね、終夜さま。院長、貴方の身体が大好きですから……」

「……事実に違いはないだろうが、その言い方は止めてくれないか

――――――って」

開けっ放しとなった部屋の出入り口からひょっこりと顔を出す看護婦の言い様に寒気を覚えたが、その一息後の瞬間に別の意味で新たなそれを感じた。

「……何ですか、その漫画みたいな特大の注射器は」

「最近じゃ、象に入れるくらいの量でないと収まってくれなくて……今回はそれよりちょっと多めですけれど」

「あ、いや……死にませんよね？」

「院長ですから」

少々お待ちください、となみなみと鎮静剤が入った巨大注射器を肩に悠々と担いで久遠寺女医が走り抜けていった廊下を進んでいく看護婦。

彼女の向かい先から喧騒と争う声が聞こえる。

おそらく、駆けつけた看護婦たちが女医を何処にあるとしれない機関銃をとりにいった女医を取り押さえにかかっているのだろう。

続いていた騒音が止んだのは、注射器を持った看護婦が視界から消えて二分後。

急激に訪れた静寂からしばらくして、

「お待たせいたしました」

変わらず笑顔の先程の看護婦が空になった注射器を右手に抱え、左手にぐったりとした

久遠寺女医をひきずって現れ、ようやく事態は収拾がついたのだった。

◆◆◆◆◆◆

「改造スタンガンで……一般人の手にそんな大層なシロモンが渡るなんざ、世の中物騒になっていくもんだね。ったく……」

「どんな時代もある程度物騒だ。別におかしいことはない……なんて、いうのがおかしな話だろうがな」

捲り上げたジャージの下の患部に当てられた手から”何か”が注がれる感覚に、目を細める。

復活した久遠寺が少しフラついているのを見てみぬ振りして。

「しっかし、おかしなことになったもんだ。お前がこんな怪我を……しかも相手は一般人の女だって？　何したんだい、お前さん」

「……かかる火の粉を避け切れなかっただけだ。俺が何かしたわけじゃない」

状況を悪化させたのは確かに俺だが、とまでは千夜は口にしなかった。

ここでも余計なことを口走って、これ以上面倒なことを起こすのはゴメンだった。

「そもそも、”こんな状態”じゃなければ……くそっ」

「その”こんな状態”を招いた本人が言うかねぇ……まぁ、あと一週間辛抱しな。昨日寺院に掛け合ってあるから」

一週間、という言葉が聞いた千夜にはとてつなく長く、そして重く感じた。

その間に、今日のような災難が降りかかるのかも知れないというのに。
気分が重くなるのを否めない中、
「ところで何でまたそんな女に喧嘩吹っかけられ……んん？」
素朴な疑問を口にしかけた久遠寺はそれを唐突に打ち切り、何かを気に留めた様子をみせた。
その際に、鼻がぴくりと震えた。
「ん……これは、珍しい」
「……何だ、一体」
突然、治療を止めて顔――――鼻を近づけて千夜の身体を嗅ぎ出す。
それは胸、首筋、腰、挙句こめかみあたりの髪など、あらゆる場所を行き来する。
触れるか触れないかのその接近に、千夜はたまらなくなって、
「……オイ、どういう了見で治療を止めて妙なことに没頭している」
「なぁ、お前さん」
皮肉に対し、かみ合わない声と発しつつ久遠寺はようやく離れたかと思えば、
「珍しいね。身体から男のニオイがプンプンしてるよ」
「なっ……」
にやり、と弱みを思わぬ拾い物をしたとでもいうように口端をつりあげる久遠寺の言葉に、驚きと嫌なものを感じ千夜は顔を引きつ

らせた。
それが久遠寺を調子に乗らせることになる。
「数は複数。しかし、その中で一際濃いのが一つ。……なるほど、この怪我は男絡みだね？」
「お前、どういう鼻してんだっ」
「大したもんだろー？　年の功さね」
「そんな経験の産物、ドブに捨ててしまえ！」
「おやおや、赤くなっちゃって……可愛いとこあるじゃないか」
これだから年配者はおそろしい、と千夜は歯噛みする。
一度弱みを見せると徹底してそこを突いてくるとんでもない生き物だ。
「数が複数なのは、大方その女がお前を辱めようと男どもに襲わせようとしたってところか。そして、その雑魚っぽいニオイの中に一つだけ飛び抜けてイイ男のニオイが存在を際だたさせているね。今のあんたじゃ到底対抗しきれない……よって、あんたは男に助けられた。ニオイが染み付いたのはその際に抱きかかえられた。――――と、ここまで推理してみたがどうだい？」
「……一応聞くが、お前その場にいたとかじゃないだろうな」
「いたら、あんたじゃなくて私がそいつらの上で踊ってやってたさ」
もはや癖の強いとかそういう問題ではなく妖怪じみてる。
ひょっとしたら、この女も人間であるという点以外では黒蘭とほとんど大差ないかもしれない、と目の前の本人が聞いたら一気に表情を暗転させそうなことを千夜が疲れた精神で気を遠くにやりながら考えていると、
「で、どうなんだい。お前さんの求愛者は」

「……何が」
「その女が躍起なって自分の下に繋ぎ止めておこうとするほどなんだろう？　さぞかしイイ男なんじゃないか、そいつは。お前も相変わらずの魔性っぷりだねぇ……」
「人を性悪女みたくいうんじゃねぇ。お前には関係ないだろ、余計な詮索は……」
するな、といいかけて千夜はふと言葉を途切らせた。
「……興味あるか？」
「あん？」
突然の千夜の態度の転向に、久遠寺は駄目かと話に見切りをつけて治療を再開しようとした手を思わず止めた。
「教えてやる。だから、お前もアドバイスをくれないか？」
「アドバイスぅ？」
立て続く突拍子もない台詞に久遠寺は素っ頓狂な声を上げた。
一体どういう風の吹き回しか、と驚きが勝った当初だったが、そこは持ち前の切り替えの早さもあってすぐに今の状況の面白さを理解し、
「ますます珍しいねぇ。こりゃ、明日は雨……いや、雹か？」
「……かもしれないな」
反発が返ってこないことに若干拍子抜けしたが、久遠寺の興味はその先へ向いていた為、然程気にかけなかった。
「久遠寺、俺は……今、知りたいことがある」

故に、その直後の言葉に対する衝撃は身構えによって軽減されることもなく久遠寺にぶつけられることになる――――。

「自分を好きだと言ってくれる人間に――――――」

「――――――？」

始まった言葉と同時に見合わせた視線に、久遠寺はそれが自分の予測していたものとは大きく異なることに気づいた。

そして、その全貌はすぐに明らかになる。

「――――――嫌われる方法を」

知っているなら、教えてくれ。頼む。

まっすぐ突きつけられているはずの視線は、それでいて不安定に揺らめいていた。

◆◆◆◆◆◆

「あら、院長。終夜さまは帰られたんですか？」

湯気の立ち上るティーカップを盆に乗せて、診察室の扉を開けた看護婦の目に入ったのは想定していた人物が一人かけた中の光景だった。

そこには、院長が一人、太陽が沈み始めた暮れの空を窓ガラス越しに見つめている姿のみで、来ていたはずの院長の特別応対者である来客はいなかった。

「おお、来生（きすぎ）。気が利くじゃないか」

「院長のセクハラ全開の言動に精神を疲労なされているに違いないと終夜さまに持ってきたのですが……そうですか、帰られたのですね」

「お前の上司を上司と思わんその態度はどうにかなんないのかい」

「看護婦は常に患者さんの味方ですから」

にっこりと天使の笑顔で跳ね除け、来生はドアを後ろ手で閉める。

「仕方ありません。不本意ですが、飲んでください。勿体無いから」

「……医者に優しい看護婦はこの病院にはいないのかねぇ。……ちなみに何で二つ？」

「こっちは最初から私のです」

あ、そ、と慣れたやりとりなのか、言葉ほど気にすることもない様子で久遠寺はコーヒーの入ったカップを受け取った。

過度に熱くもなくぬるくもない、飲むのに適温のそれに口をつけた。

「……青春の苦さってやつも、こんなもんなのかね」
「唐突ですね。どうかさなさったんですか、青春を当の昔に追い越した方が」
「現在真っ最中のやつがさっきまでここにいたさ。まぁ、あいつの苦さはこんなもんじゃないだろうがね」
「一体二人してどんな話をしていたんですか？」

椅子に腰掛けて同じものを飲む来生の言葉を鼻で笑い、

「決まってるだろ。年頃の連中の悩みといったら……恋の悩み以外に何がある？」
「まぁ、千夜さんがですか？　……それで、相手は」
「男さ。女でも、それはそれで面白いことになっただろうがね」
「ヨソ様の恋路を面白いだなんて言うものじゃありませんよ、院長。千夜さんも、院長に相談するなんて。……明らかな人選ミスを」
「失礼な女だね。誰にだって青春時代はあるに決まってるだろ。無論、私にもある」
「あまり興味がないのですが」

なにぃ、といきり立つのを無視しながら、話題の路線がズレないように、

「……ところで、なにを相談されたんですか？」
「……それさ、それ」
「はぁ？」

思い出したような素振りを見せると何故か溜息、という久遠寺にしては珍しい様子に来生はきょとんと軽く呆気に取られた。
久遠寺は気分を落ち着かせるために、コーヒーを一口啜り、

「……あたしゃ、長い経験の中でまさかあんな相談されるとは思わなかったよ。まだまだ生きてみなきゃ知らないこともあるんだねぇ」
「何ですか、また突然。一人で浸っていないで教えてくださいよ」
「……ふぅ」

一息つくと、久遠寺は茜色の外に視線を放った。
そのままで、

「……自分を好いている人間に嫌われる方法を教えてくれ」
「え……？」
「……そう言われたよ。恋愛沙汰だというから何だと期待りゃ、とんだ肩透かしさ」
「好かれるのではなく……嫌われる、ですか？」
「ああ……」
「ひょっとして言い寄られて困ってるから、というケースではないんですか？」
「いんや。……好きだから、離れて欲しいんだと」

矛盾した理由だ、と来生は片眉を歪ませる。
気持ちを察した久遠寺はその疑問に答えを与えようと続けた。

「女として出来損なった自分は相手の男に応えられるものが何もない。幸せになんてしてやれないから、早く目を覚まさせてやりたい……とか言ってたよ」
「ああ……そういうことですか」

その言葉に『納得できる要因』を知る来生は、あっさり頷いた。

「幸せにしてあげられない、なんて……千夜さんらしいですね。女の人って、だいたいは自分が幸せにしてもらうつもりでいるのに」
「そこで男らしくてどうするんだか。肝心なところで女々しいんじゃねぇ……」
「それで……院長はどうなさったんですか？」
ああ、と口にしかけたコーヒーカップを一旦押しとどめた久遠寺は、
「聞かれたからには答えたさ。質問自体は簡単極まりない。大抵の人間は受け止めがたいことを【爆弾】を抱えてるんだから、それを洗いざらい打ち明けちまえばいい、と」
「……”どれ”のことでしょうか」
「全部、だろう。中でも、”あの事”に関しては話さなかった話していないじゃなくて……”嘘”をついちまったらしい」
「……あの事って」
「今、問題にあがったろ。バレた時に、うっかり事実とは違うことを口走っちまったんだってさ」
そこで、沈黙が降りる。
久遠寺はそれを一息に、とカップの中に残ったコーヒーを一気に飲み干した。
その時、
「……無茶な話だと思うんですけどね」
「ん？」
「その相手の人が、千夜さんの抱えてる全部ごと千夜さんを受け止められる人だといいですね。記憶のことも、過去のことも。あの――”身体”のことも。千夜が悩んでることも何でもないって言ってのけて、安心して千夜さんが自分を任せてしまえるような……

…そんな人なら、全部が杞憂で済みますよね」
「……」
「……なんて、そんな海のように心の広い人……そうそういるものじゃ」
「――――――そうかい？」
今までの連ねた言葉を冗談で締め括ろうとした来生の耳に、届いたのは何故かさっきとは打って変わって明るい声だった。
「院長？」
「私は、ひょっとしたと思ってるけどね」
「またらしくないことを。エロい割には、現実主義のくせに」
「どんな理屈だ今のは……。現実主義は肯定するがね。だから、さ」
「……？」
ちょん、と指で己の鼻を示すようにつつく久遠寺の仕草に来生は怪訝な表情で応えた。
「私の鼻が太鼓判押してんのさ。覚えのあるニオイでね……もし、そうなら――――――アレはアタリだ」

鼻の頭に指をあてながら断言する久遠寺の顔は、憎らしいまでに自信に満ち溢れる笑みを湛えていた。

［八拾六］　相談の主張　（後書き）

次回、ついに千夜の嘘が明らかに（多分

［八拾七］　云いたいこと（前書き）

明日全てが嘘に消える

【八拾七】　云いたいこと

「――――本当にいいのかい？」

帰り際、赤く染まりかけた空に気を取られていた千夜は、耳に後ろからかかった声に我に返り振り返る。

診察室のドアを開けて、そこに立つのは久遠寺。

そこには珍しく純粋な真剣さのみが貼り付いていた。

「アドバイスをくれた人間が、今になってそういうことというか」

「若者の見切り発車を止めるのは、大人の仕事だからね……一応。もっと、肩の力を抜いたらどうだい？」

「……見切り発車じゃないさ」

目を閉じて、

「ずっと、決めていたことだ。ずっと、思ってた……それを実行するだけのことだ」

己に納得させるように、言い聞かせるように。

そんな言い様に、久遠寺はそれ以上何も言わなかった。

「……じゃぁな。アドバイス……ありがとう」

薄く赤らんだ廊下を歩き出す。

階段の踊り場まで来て、千夜は赤らんだ光を差し込ませる並列する窓を見た。

少しずつ、緋（あか）みの増していく夕刻の空。

これから少しずつ、僅かな時間を経て夜を迎える。

そんな緋色が、千夜に一つの記憶を呼び起こさせた。

それは、あの日。

学園に転入した最初の日の黄昏刻――――千夜の【願い】が叶った瞬間。

同じもののはずなのに、今はまるで違う光景に見えた。

――――もっと肩の力を抜いたらどうだい？

先程の久遠寺の言葉が何故か耳に残る。

何故、と考える千夜の脳裏に応えるような記憶の一片がひらり、と一枚の葉の如く流れ込んだ。

『もっと肩の力を抜いて、楽にしたらいいのに。世界は貴方が思っているよりも、貴方に全てを背負わせたがっていないのだから』

ああ、やっぱりあんたか、と千夜は思わず唇を噛んだ。

何故、本人がいなくなっても尚、彼女の口にした言葉はこんな風に残り続けるのか。

忘れてしまえないのは何故なのか。

「無理だって」

脳裏で微笑む彼女に向ける。

「そんなやり方、忘れた」

忘れてしまったのだから、このままで行くしかないだろう？

言葉にせず内にて響かせ、千夜は歩き出した。

引き止めるような彼女の言葉から振り切るように。

◆◆◆◆◆◆

二日離れていただけだというのに、目にした自宅の建物の光景は随分懐かしく見えた。

踏み出す一歩一歩が不思議と重い。

それが身体に疲労が原因ではないということは自分でも承知していた。

……しっかりしろ。

もう決めたのだ。

これ以上引き延ばせば、きっとなし崩しとなって手遅れになる。

方法は見つかった。

なら、それを実行せずにどうする。

躊躇に足をとられている自分に、それを振り切れと叱咤し、

「……よしっ」

キッとドアを睨み倒す勢いで視線を突き刺し、そのまま手をかけたドアを引いた。

そして、

「――――――ねえさぁぁぁんっっ！！！！」

直後に、叫びに近い呼び声と共に白いツーテールを靡かせて駆け込んできた朱里が強襲する。

まるでスタンバイしていたのではと思わせるほどのドアを開けるタイミングの合致したその行動に千夜は対応に遅れた。

感情任せの衝動的な行動なのか、全く勢いを衰えさせる様子なく、

「うわっ……！」

朱里がいくら小柄であろうと、今の千夜には一般的な女の力しかなくそれを緩和させることも出来ない。

当然勢いを受け止めきれるはずもなく、身体は後ろに倒れこむようなる。

そこへ開けかけたドアが支えのなくなったことで閉じかかる。

倒れかける千夜の身体はその隙間に挟まれる位置にあったのだが、

「おっと」

その後ろで防ぐ手が現れた。

倒れかけた体は何か壁のようなものが支えとなり、留まる。

「あぶねぇことしてんじゃねぇよ、ユキウサギ。お前の姉ちゃんがさらし首みたくなるところだったぞ」

すぐ耳元の声に、千夜は思わず唯一不便なく動く首を振り向かせた。

「……そ」

「うわぁぁん、姉さぁぁん！！」

呼びかけた名前と向けようとした意識はそんなことお構いなしの朱里の泣き叫ぶ声にかき消される。

「寂しかったよぉぉ！　安っぽいコンビニ弁当の味にはあきたよぉぉ！　姉さんの料理が恋しいよぉぉ！！」

「あ、ああ。ごめんな、もう出て行ったりしないから……」

腰にしがみついて今までの不満の一切をぶちまける朱里の頭を撫でつつ、千夜はさりげなくを装い蒼助との密着した状態から脱した。触れた際に一気に高まり乱れた鼓動が名残惜しげにも、徐々に戻っていく。

「おなかすいたぁ」

「はいはい」

腰に貼り付いて離れない朱里を引きずり、夕飯の支度のためにリビングへと進む。

背中に突き刺さる蒼助の視線に気づかない振りをしながら。

◆◆◆◆◆◆

実に平穏な晩の食卓だった、の一言に尽きる一時であった。
蒼助が朱里に嫌いな野菜を押し付けたり、肉を奪うといった光景はまさに三日前のそれをそのままテープで巻き戻しているようで、理不尽に泣く朱里を宥める千夜もまた同様だ。

ただ一つ、違うことがあるとすれば。
それは、夜が明ければこの光景が明日にはなくなるということ。
それを知るのは、そうなるように導く千夜のみだ。

「ねえさぁぁん！！」
「泣くな泣くな。姉さんのおかずやるから」

全くと言っていいほど同じ台詞を口にしている自分が、何だか笑ってしまいたくなるほど滑稽で、おかしかった。

そして、再確認した。
以前はなかった騒々しさにうんざりしつつも、この光景が在ること、そしてその中に在ることを――――今と同じように愛しく思っていたのだと。

◆◆◆◆◆◆

夕食を終え、食器も全て洗い終えてリビングに戻ってくると、ソ

ファでテレビを見ていたはずの朱里の様子が、最後に遠目から盗み見た時と違うことに気づいた。

「朱里？」

その姿は変わらず、ソファにもたれてテレビを見ているようだが、近づいてみて決定的に同じではない点があることがわかった。

「寝てしまったのか？」

問いは帰らないのも当然だった。
目を閉じて、寝息を立てている。

「困ったな、まだ風呂に入っていないのに……」

朱里、と肩をゆすって起こそうと試みると、

「いーじゃん。寝かしといてやれよ」

隣で朱里とテレビを見ていた蒼助が何のつもりか制した。

「言ったろ。お前がいない間、そいつロクに寝てなかったんだよ。……お前が帰ってきて、安心したんだろ」

よっこらせ、と口ずさみながら腰を上げたかと思えば、蒼助はその拍子に横にカクンと揺らいで倒れ掛かった朱里の身体を支えと同時にそのまま片腕で抱き上げた。
そして、

「それに……この方が、都合がいいだろ」

「……？」

一瞬蒼助が口にした言葉の意味を図りかねた千夜は、次に続いた言葉に驚愕に目を見開く。

「――――俺に、何か言いたいことあるんじゃねぇの？」

「っ！」

思わず顔を驚愕の感情を顔に出す千夜に、蒼助が苦笑する。

「驚くこたねぇだろ。帰ってきてから妙によそよそしい雰囲気をあれだけ見せ付けられりゃなぁ……」

そこまでだったのか、と己の失態に唖然とする千夜。

蒼助は朱里を寝室に運ぶべく背を剥け、そのまま、

「都合がいいに関しては、俺も同じだ。俺も、お前に言いたいことがある。文字通り、水入らずの二人でな」

一方的に告げるだけで、言葉の一部に反応し振り返った千夜を見ることもなく、蒼助は朱里の部屋へと歩いていった。

その背中を見つつ、千夜は蒼助の台詞の中にあった「言いたいこと」に対し、不可解という気持ちを胸に抱いた。

しかし、それも「終わりの刻」を間近に膨らむ別の感情によって上塗りされていった。

［八拾七］　云いたいこと（後書き）

宣言ならず。
ふっ、計画通りだ（死ね

次回は二本立てで更新を目論んでみたり。
いよいよ決戦。
千夜の思うが故の拒絶が幕を閉じさせるか。
それとも……。

【八拾八】　断ち切りたい想い（前書き）

望むのは、己の終焉。

【八拾八】　断ち切りたい想い

蒼助が戻ってくるのに、二分と時間は経たなかった。

「つぁ～……あのガキ、なんて寝相してやがる」

朱里の部屋のドアを乱暴に閉めて歩いてくる蒼助は、左頬を押さえて憎たらしげに呟いていた。

どうやら、ベッドに下ろした際に寝惚けた朱里に一撃もらったらしい、と千夜は解釈した。

「……ふぅ。――――――さて」

そのまま何気なく待たせ人の左隣に腰掛けた蒼助は、一息ついた次に何かを予感させる口ぶりをし、

「……っ！」

何の前触れもなく伸びた手は、千夜の左肩を掴んだ。

そのまま込もる力は押すという形で働いて――――

「あっ」

反射的に出た声というか細い抵抗は虚しく響いて終わるだけだった。

押し倒された。
その事実が千夜を一瞬の忘我から自我に引き戻し、

「っな、何を」
「何って……押し倒しただけだろ」
「だけ！？　お前っ……話があるってヤツはどうした！」
「もちろん、そっちもする。だけど、こっちが先」

そう言うなり、蒼助は平然と指先を服の中に忍ばせた。
服が捲れて肌が空気に触れる感覚と、指の感触に千夜の思考は一気に乱れを生じる。

「ば、馬鹿っ！　止めろっ！」
「暴れんな。見れないだろうが」
「見せてたまるか！！」
ハイネックを押し上げる蒼助の手を両手で押さえつけようとするが、蒼助の力は片腕だけで千夜の力を上回った。
力及ばず押し切られ、白い腹部が露になる。

「あっ……」

服の下で籠っていた熱がスッと冷める感覚に、千夜は思わず眼を瞑った。
同時に、顔に集まる羞恥の熱。

いとも簡単に組み伏せられた屈辱。
服を脱がされた羞恥心。
それら全てが熱となって千夜の頬を赤く染める。

どうして、とこの状況を作り上げた目の前の張本人に無言で問いつめたかった。

しかし、その相手は今、全くおかまいなしで千夜の顔ではなく外に晒されたその腹部に釘打ったように視線を止め、凝視していた。

「すっげぇ……」

驚いたように声を漏らす蒼助は、左の脇腹あたりに指を這わす。擦るようなその触れ方に千夜はゾクリと背中を震わせた。視界を閉ざしている事が、一層感覚を鋭くさせる。

そして、次に何をされるのか、と来るであろう侵攻に身を硬くする。

そんな受け身に徹するしかない自分の身を呪わしく思い、同時に唐突過ぎる展開を押し通す蒼助に対する失望感を募らせた。

そこに、

「綺麗に治ったんだな――――――――火傷」

「……は？」

千夜が閉じていた目を思わず見開いてしまう程のズレた発言を発した蒼助。

「あんだけ酷い火傷もあっという間に治っちまうんだな、お前の身体」

「火傷って……お前」

「何だよ」

俺別に何もおかしなこと言ってなくね？ときょとんとする蒼助に引き換え、千夜は顔から火が出たという言い回しをそのまま体現するように一層顔を真っ赤にした。

「お、お、おまっ……っ」

「何だ、期待しちゃってたわけ？」

ニヤリ、とここぞとばかりに突いてくる蒼助の言葉が昂ぶった感情を煽り立てる。

「なっ、なっっ」

「冗談だって、そんな怒るなよ。つか……俺、信用ねぇなー。あんなことがあった後で、出来る程鬼畜じゃねぇぞ」

溜息混じりの蒼助に反論を返そうと千夜は口を開いたが、

「何を言ってっ……だいだい、お前がこんな紛らわしい真似をするから……」

「だってさぁ、ストレートに脇腹見せて、なんて言ったところで見せてくれないだろ？」

「……っ」

言っていることは正論だが、そのまま呑み込むにも躊躇の拭えない返しに千夜は言葉が見つからないまま口をパクパクと動かすしかなかった。

「それに言ったろ。……条件満たすまで手ぇ出したりしねぇって」

「……」

邪気のない笑みに、今度こそ千夜は口を閉ざした。

「にしても、本当よかったぜ。最初見た時は保険医と一緒に絶句しちまったぜ、あの火傷には。こんな綺麗な真っ白い肌にあんなもんが残ったらかと思うと、気が気じゃねぇ」
「綺麗って……馬鹿なこと言うなよ。普通の女ならともかく、俺はそんなの言われてもちっとも嬉しくないぞ」
と、真顔で呆れて返すと、
「……馬鹿な事言ってんのはソッチ」
蒼助は、それよりも一層濃く、呆れるのはこっちの立場だと言わんばかりの半目で更に切り返した。
そして、どういう意味だ、と言おうとした千夜の意気を削ぐ行動へと出た。
「自分のカラダを鏡で見た事ねぇのか？　こんなスベスベして真っ白い女の肌と……」
比べられるシロモンお目にかかったことがねぇぜ、と頭を落としたかと思えば、その落ち先は千夜の腹部。
今は無い火傷を負った患部たる脇腹にチュッと音を立てて唇が落とされた。
「んなっ……な、何してっっ」
頭の上から降る制止の声など耳に入っていないように、蒼助は二度三度とわざとなのか音を立てながら口付ける。
その音に煽りを受けて、千夜は事態に思考を乱しながら、
「馬鹿っ！　止めろっ……ぁ」

ぬるり、と腰の曲線をなぞるように舐められ、思わず震えた。

「っ……蒼助！」

「あっはは。顔真っ赤ー。睨んでんのに、全然迫力ねぇの」

怒りの矛先の人間は、怯むどころか反応を楽しむ始末。

空回りの千夜は悔しさに歯噛みする。

しかし、その口元に蒼助の指が伸ばされ、

「ったく、あのクソ女……同じ女の顔に、こんな傷つけやがって」

「そう言われても、なんか複雑な気分なんだが……」

「ああ？　何でだよ、自慢の綺麗な面にこんな傷……ん？」

「別に誇りになんぞ思ったことは……何だ」

マジマジと傷を見つめてくる蒼助が、素朴な疑問を漏らす。

「……そういえば、何でそっちの傷だけ治ってねぇんだ？」

ギクリ、とさせる内容がきた。

何とか表に動揺を出さずに済んだが、それは千夜を内心で大いに焦らせた。

自分の身体がどういう危機を迎えているかを自分と久遠寺以外の人間は知らない。

思わぬ自分のミスに舌打ちつつ、

「……最近、どっかの誰かのおかげでよく寝ていないから調子が悪いんじゃないのか？

バテたり、調子を崩すとこういうことがよくあるんだ」

少し苦しかったか、と思えなくもないフォローを咄嗟に並べる。

「そうか……でも、治るんだよな？」
「ああ、そのうちな。……どうした？」
ふと、蒼助の表情に翳りを千夜が見つけた。
「あ、いや……あの、さ」
はっきりとしない口ぶりだが、千夜は目を合わせないその伏せた眼差しで何を言おうとしているのかを感づいた。
それと同時に、蒼助がようやく言葉の端を掴めた時、
「その……ごめ――――」
「謝るな」
「……は？」
ようやく切り出せた言葉を遮られ、蒼助は思わずポカンと呆気にとられた顔で、その下にいるそっぽ向いた千夜の不機嫌そうな表情を見た。
「傷に関しては別にお前に責任はない。俺が余計なことを口走らずに、穏便に済ませることに態度を押さえていれば起こらずに済んだことなんだ。だから、謝るな」
「……そのことなんだけどよ」
「――――あ？」
気遣っていた千夜が引っかかるほど、再度見た蒼助の顔には先程の翳りは何処へ消えたのかと思うほどの訝しげな様子が取って代っており、

「……保健室でも言ってた、その余計なことって何だよ」
「……」
その問いに、千夜は再び毛穴から冷や汗がぶわっと噴き出るのを感じた。
とてもじゃないが、言える内容ではない。
特に目の前の人間には、絶対に。
先程を上回る焦りに、千夜は今度はフォローを考えることはできなかった。
それだけの余裕すら吹き飛んでしまっていた。
「よ、余計なことだ」
「だから何だって」
「っっ、そうだと言ったらそうなんだ！　それ以外に答えようが無い！！」
「何で顔赤くなってんの？」
「――――なってないっっ！！」
声を完全に裏返らせて千夜は息切れするほど怒鳴った。
蒼助は何をそんなに取り乱しているのかわからず、きょとんと思考をハテナマークで埋め尽くすしかない。
千夜は息を整える中で、僅かに取り戻した冷静さで何とか話題を逸らそうと、
「……それより、お前。今までの女たちと手を切ったって話は……本当なのか？」
「あん？　何だよ、また突然」
「……倉庫で、あの女に言ってただろう。関係のあった女たちと……手を切った、と」

「聞こえてたのか？」
「聞こえてきたんだ……それで、本当なのか？」
「……ああ。そうだけど、それが」
どうした、と問いの形になる前に、
「何で……そんなこと、したんだ？」
「何でって」
「……どうして、俺なんだ？」
向けられた言葉に、場がシン、と静まるのを感じながらも千夜は続けた。
「俺一人に、切った女達の穴埋めをさせるつもりなら……期待するだけ無駄だぞ」
「……そんなつもりじゃねぇよ。何かに入れ込むからには、それまでの適当なやらかしに俺なりのケジメを付けないとならねぇと思った。アレは、それだけのことでしかねぇよ」
要約すると、千夜と、そしてそれまでの蒼助自身に対するケジメだということか。
自惚れているわけではないが、事実を受け止めるとそういうことになると千夜は結論づいた。
「……本題に入る前に、一つ聞いておきたい」
「何だよ」
すぅ、と息を吸い、千夜は胸に問えて留まる一つの疑問を吐き出す勢いをつけ、

「俺と他の女、お前の中で何が違うんだ？」

それを言葉という形にして、ずっと聞かせたかった相手に突きつけた。

直後に返事は返らず、蒼助は数秒ほど沈黙を保った。

答えられないのでは、という不安も芽生え始めた時、

「……初めて会った時のこと、覚えてるか？」

質問に対する答えとは捉え難いその一声に、千夜は当初何が始まったのかと蒼助の意図を読めなかった。

「俺は殺されかかったところをお前に助けられた。ビデオ返しにいった帰りっていうのは、ちとショックだったが……まぁ、俺にとってそん時のお前は地獄に仏……いや、女神も同然だったわけだ」

「一体、何が言い……」

「いいから、聞けって。いわばお前は命の恩人だったんだけど……別に、対して恩を感じてた訳じゃねぇんだ。変に正義感じみた行動だったら、寧ろ逆にそんな押し付けがましい責任で救われたかと思うと死にたくなってたわな。多分、お前はそんなんじゃなくて、偶々見かけたから通りがかりに気紛れで助けたんだろうけどよ……どうせ、一晩の偶然の出会いってやつですぐに忘れるもんだと、その程度だと――――思ってた」

その言葉に千夜は内心驚いていた。

薄情なその感情自体にではない。

『己と同じ事を蒼助もまた思っていたという点』に、だ。

蒼助の言う通り、正義感などそういう特別な感情に突き動かされたわけではなかった。
ただ、偶然通りかかったところに思考が動くよりも早く、身体が衝動的に動いただけだった。
ほんの気紛れと偶然が重なって、『救ける』という結果になった。
たったそれだけの、自分たちの始まり。

「でも、覚えてた。あんな意識が朦朧とした死ぬか死なないかのギリギリの境界の真っただ中で見た、お前の顔が次の日になってもはっきりと俺の記憶に焼き付いたままだった。何処の誰とわからない相手を、だぜ？　俺は、忘れちまってもしょうがねぇことを、忘れちまえといくらそう思っても――――忘れられなかった」

俺は、でなく俺も、だと、千夜は心の中で訂正した。
ひょっとしたら助からず死んでいたかもしれない相手のことを、千夜も夜が明けても忘れる事が出来なかった。

「寝たわけでも、大した会話もしなかったお前に……俺はどうしようもなく会いたかった。あー……女々しいとか思われても仕方ねぇこと言うけどよ……あの時、お前との一瞬繋がっただけの縁を、俺は切れて終わりにしたく無かったんだ」

縁、という言葉に千夜は再び共感らしきものを感じる。

「縁を例えて糸だっていうなら、俺はそいつでお前とずっと繋がっていたい。誰かとそうありたいと思ったのは、後にも先にもお前だけだ。だからさ、女とかそんな狭い範囲じゃなくて老若男女っつー範囲で、俺は……千夜？」

蒼助は言葉を中途半端に放り、手で顔を覆う千夜の様子のおかしさに気付く。

そして、呼びかけに対して返って来たのは、悲壮感のこもった呻きにも似た懇願だった。

「……ダメだ、そんなの」

「千夜？」

「ダメだ、そんな……俺なんか、の……脆過ぎる縁に縋るなんて」

情けない程弱々しい声が、千夜は自分のものだと信じられなかった。

けれど、事実なのだと受け止める。

絶望的なまでに、出会ったあの瞬間から自分たちは全く同じ想いでいた、と。

きっとこのまま全て何もかもを受け入れてしまえば、この事実はこれ以上になく幸せなことはないのだと思う。

けれど。

「何も、知らないから……何も知らないから、俺がそんな風に見えるだけなんだお前はっ」

胸がはりさけそう、とはこんな気分をいうのか、と千夜はぼんやりと思う。

それでも、ここで未練を切り捨てないと、本当に胸が張り裂ける事態を迎えるだけなのはわかっていた。

「蒼助……俺は、お前が思っているような人間じゃない。俺という

存在が、お前にどう見えていたのかは、俺にはわからない……だが、事実の俺とは違うのは間違いない」

「千夜」

「だって、お前は知らないじゃないか。お前は……俺の何を知っているんだ、蒼助。何も知らないだろう……当たり前だ、俺――――」

「――――抱え込んでいるものが全部人に言えるような代物じゃないから、ってか？」

口にするはずだった言葉が、先に出ていた。

あろうことか、己の声ではなくそれを打ち明ける相手の声で。

千夜はその予想だにしない出来事に思考を停止せざるえない衝撃に脳が揺れたような感覚に陥った。

そんな呼吸すら忘れて固まる千夜の上から、蒼助が身を引く。
ソファの背もたれに寄りかかるように体勢を直した蒼助は、視線をその向いた先に放りながら、

「お前の周りの連中、口が軽すぎだろ。あと、御節介も」
「そ……」
「で、どれだよ……お前の”負い目”って。記憶がないことか？　血生臭い前科歴か？」

それとも、と更に続く気配に千夜は全身の毛が総立ちするのを、その時感じた。

止めろ、とあれほど決心づいていた心が叫ぶ。
しかし、届くはずもない声に蒼助は耳を貸さず、無慈悲にもその先を――――

「――――お前が、元来の男でも女でもない身体だってことか？」

壊したかった世界。
壊さなければならなかった世界。

そう願ったその世界が存在するのに欠かせなかった男の手によって、それはいとも簡単に破砕を以って崩壊した。

【八拾八】　断ち切りたい想い（後書き）

更新が遅れました。
理由――――風邪で床についていました。

体調管理は日頃からきちんとしなければならないと学習。
というわけで、今度からは自然乾燥じゃなくてちゃんと髪をドライヤーで乾かすぞ（みんなやってるよ

話題を変えて本編へ。
千夜の嘘がについてですが、意味がよくわかんなかった人の為に、と小心者の天海が今一度説明します。

初期の方で、千夜は蒼助に「元は男」と言っていました。これが嘘。
蒼助が暴いたように、本当はどちらでもなく、性別転換体質は元々のものであるとのことです。
今まで散々元男元男（もとおと読むなよ）と引っ張ってきてこういうオチかよ、ですね。……本当はまだオチてませんが。

次回、嘘をついた裏に隠された千夜の痛切な想いが爆発。

［八拾九］　かつての露見（前書き）

それは、かつての暴れた記憶

［八拾九］　かつての露見

ここで、無粋ながらも少し昔話を挟むとしよう。
彼の、彼女の――――――かつての、暴かれた思い出を。

◆◆◆◆◆◆

出会って初めて迎えた夏。
ついに彼女にあのことがバレた。
自分の最後の砦ならぬ――――最後の秘密が。

彼女との同居生活にも慣れて、そこから生じた僅かな隙が命取りになった。
片方の状態をずっと維持することが出来ない。
だから、定期的に入れ替えるようにしていた。
彼女の前でも、最初の頃は警戒心を持って意識していた。
しかし、自分でも気付かない無意識のうちにその警戒心も徐々に氷のように溶けてきていたのだと思う。
そして、そんなことをしているうちについにやってしまった。

前夜、夕食の後にソファで居眠りしていたらそのままうっかり一夜を明かしてしまい、入り損ねた風呂に入った朝。
バスタオルを持っていくのを忘れたことに気付いた彼女が丁度シャワーを浴びて出て来たところに鉢合わせしたのが、言い逃れ無用の決定的瞬間となった。

どんな言及があるかと身構えていれば、

「で、何で海に？」

「ただの海じゃないわ。江ノ島よ」

「訂正いるのか、今の……それよりあんた、こんな日差しの中に出てきて平気なのか？　肌とか髪とか……」

「平気よ。ちゃんと、日焼け止めクリーム塗ってきたし、日除けに帽子も被ってるもの」

さんさんと照る日差し。

周囲に満ちるＢＧＭは波のたなびく音。

鼻腔を突き抜ける潮の匂いをまとった風は紛うことない海の潮風。

江ノ島海岸。

隣に佇む、白いワンピースに水色のリボンをあしらったストローハットを身に着けた、軽井沢のお嬢様スタイルの型にはまる彼女の要望に流されて行き着いた場所だった。

「しかし、何でまた海なんだ。しかも急に」

「愚問。夏といったら海じゃない。海に行かない夏なんて夏じゃないわ。あと理由は気分。」

「……。山は」

「虫、嫌い」

あっさり切り捨てて、彼女は目の前に広がる海を指差し、

「ほら、水面がキラキラして綺麗よ。知ってる？　あれはね、水面に太陽の光が反射してああなるのよ」

「へぇ。……って、このやりとり何回目だ。来てからここでずっと

眺めてるだけじゃないか。泳ぎに行かないのか」
「あんな大勢の人間が芋洗いみたいに泳いで滲み出た体液の入り混じった海に……入りたいの？」
「……」
もう少し言い方というものがあるだろうに。
とにかく、入る気はなくここで眺めるのが彼女の言う海で過ごす夏というものなのだろう、と無理矢理納得して状況を続行するに落ち着く。
互いに口を閉ざし、ボードウィークの段の上に腰を下ろして広がる空の青と海の青の重なりを見つめる。
言葉はなく、潮の音と離れた場所と時折通り過ぎる人の声だけがその場に存在する時間が流れる。
そんな最中、
「……なぁ、朝のことなんだが」
「そうね。だから、何？」
「何って……そりゃ」
「別に驚くことでもないでしょ」
「なっ」
聞き捨てならない言葉を吐いた彼女を思わず見る。
実に涼しい、偽る様子のない表情で彼女は変わらず海を見つめたまま、
「……だって、知ってたもの」
「はっ！？」
「春ぐらいからかしら。貴方、よく居眠りするようになったでしょ。そういう時、なんか身体が小っちゃくなったように見えるから何でかしらぁっと思って、ちょっと剥いてみたら……ねぇ」

両手で己の両胸を掴むようなジェスチャーをする彼女を見ながら、愕然とした。

「……うそ、だろ」
「ほんとよ。気が緩むと……変わっちゃうのね」
「……ああ」

信じられなかった。
今まで、そんなことが有り得るはずがなかった。
そもそも、そんなはずがなかったのだ。
人前で、転寝（うたたね）してしまうなんてこと自体が。

「……どうしたの、そんな暗い顔して。寝てる間に服を剥かれたのがそんなにショックだったの？」
「……気に、ならないのか？」
「――――どうして？」

気にする必要なんてあるの？
そう代弁する一言に千夜は思わず声を荒げた。

「どうしてってことはないだろう！　あんた、自分が見たものがどれだけ異常なのかわかって……」
「まぁ、確かに普通じゃないけど……それも一種の個性みたいなものでしょ？」
「こっ……！？」

言うに事欠いてそうきたか。
個性という枠で済まされて唖然としていると、彼女はこちらの取り乱しようがまったく理解できないという憮然とした態度で、

「自分のことに関してはやけに細かく気にするのね。そういう男らしくないこと考えてると、禿げるわよ？」
「これの何処が細かいことなんだ……何処が」
「細かいことよ。だって――――――男であろうと、女であろうと……かずやはかずやに違いないもの」

当然、と僅かな迷いも揺らぎもなく言ってのけられた言葉に、反論の言葉を失う。
あまりにもまっすぐに述べられた想い。
しかし、受け入れる側にはそのまっすぐさは受け止めるには鋭すぎた。

「……簡単に、言ってくれるな。俺にとっては、それで済むようなことじゃない」
「仕方ないでしょう。私にとっては、貴方の体質なんて大した問題じゃないんだもの」
「言いにくいことをさらっといいやがって……」

所詮他人事、という本音を隠そうともしないその堂々たる主張に、もはや文句どころか溜息しか出てこない。
予想外の脱力感に襲われていると、

「……このこと、他に知ってる人いるの？」
「あ？　……じいさんと一部の身内と、森のカミさまたちしか知らない。事実を知らない連中の前では、俺は男ということになっている。しかも、業界からはじいさんが山から拾ってきた本物の”鬼の子”って言われてるからな。……まぁ、そう思われてる方が都合がいいから別にいいが」
「都合？　どうして？」

「……男の方が楽だろう、この世界を生き抜くのには」

少し控えめな言い方にした。

事実は、それでも楽ではなかったが。

「……まぁ、そうよね。そういった世界で女で生きていくには、きついものがあるっていうのは……わかるわ」

「……ユキさん」

「かといって、その女々しさじゃ男として生きていくのに向いているかどうかも微妙なところ」

「おい、いらんこと付け足すな」

「いらなくない。本当のこと。男っていうものはもっと大胆に豪快に生きていくものよ。それに比べて……」

半目でチラリと横目に視線を流したかと思えば、

「……ハッ」

「何で、今鼻で笑った!?」

「笑止。自分のことでそんなにうじうじ悩んでるような貴方を男らしくだなんて。その失態、世の荒波を掻き分けて逞しく泳ぎ進む男一同の前で謝罪会見ものね」

そこまで言うか、とあんまりな言い様に本気で折れそうになった。

「……せめて、今回のことも他の二つみたく自分で打ち明けられてたらまだ名誉挽回の余地があったものを」

「嘘を言うな。強引に口を割らせたくせに」

「そうだったかしら。でも、だったらお母さんは何で今回はそうしなかったと思う?」

不意に、視線が厳しさを帯びる。

「……今度は、ちゃんと自分の口で言えるって、思ってたのよ？」

「……っ」

彼女が抱いた勝手な期待でしかないというのに、それを裏切り応えられなかったことに何故か胸が痛んだ。

「……いろんな面が欠けている、未完成な自分が嫌い？」

「……」

「……しょうがないコ」

彼女はそう呟いて立ち上がると、腰掛けていた段の上に上がり後ろに回った。

そして、後ろから抱き込むように腕を回してきた。

「……ユキ、さん？」

「ねぇ、人間って……カミさまたちが唯一手に入れられなかった凄いモノを持って生まれてきたのよ？」

何だと思う？と突然の質問に返答を求めてくる彼女の意図が読めず、千夜は問答に対する対応に遅ればせながら、

「……わからない」

「……カミさまは、所謂完璧と称される完成された存在ね。対して人間はそれどころか欠点だらけの不完全にもほどがある作りかけ。でもね、作りかけには完成されたものには出来ないたった一つのことがあるの。それは――――――完成へと近づくための進化」

「進化……」

「或いは、成長といってもいい。人間は年を取り、寿命も短い。お

まけに力も脆弱。生まれてくる誰しもが何処かに何かを欠かしている。。でも、短い人生の中で”成長する”というたった一つの授かった特別な力で欠けた部分を埋めていく。決して完成に到達することは出来ないけれど、停滞はせず一つの存在として先に進むことを許されている」

「……」

くす、と何がおかしいのか彼女は顎を乗せる肩で小さく笑い声をたて、

「面白い話じゃない。かつて、この世界は海とだだっ広い草原しかないも同然だったなんて正直信じられないわ。そう思わない？　それをここまで変えたのが、当時はそこを石槍持って駆け回るしか能のなかった人類なんですって。猿と大して差のなかった人間が少しずつ前進して、過去に生きた一人一人が歴史を積み上げる礎となって人類はここで進歩した。ねぇ、どうしてこんなにも進化し続けているのにも拘らず、人間って完成しないのかしら？　何でだと思う？」

「……満足、しないから」

「そうよ。人間は底なしに欲深い。私はこう思うの。人間っていうのはそういう生き物だから完成させてもらえなかったんだって。人間を生み出したこの世界はわかっていたのね。その尽きる事のない欲望は存在として完成させたところで満たされることはない、と。だから、代わりに進化させてあげることにしたのね。何もかもを中途半端にして、後は好きにしろって……これも一種の放任主義かしら、ね」

「……ユキさん、いい加減話が長いんだが」

結局は何がいいたいのか。

そう催促すると、話の腰を折られた彼女は少し不満げに鼻を鳴ら

したが、

「……貴方が気にするまでもなく、人間っていうものは元から不完全で欠点だらけなのよ。だから、自分が足りない者だなんて悩んだところどうにもならないわ。私も、悩んだところでこの髪も目も、人並みに黒くはならないもの」

「……長ったらしく前置きしておいて、それが言いたかっただけなのか？」

「まだ続きがあるの。話は最後まで聞きなさい」

二度目の腰折りに彼女は今度こそ不機嫌をはっきりと露にした。

「……完成されていないのなら、それはそれでいいことだと思わない？」

「どうして」

「この先、生きている限りいくらでも変わることも変えることも出来るのだもの。最初から完成されていたら、そこに嵌められて抜け出せないじゃない。私たちは、いずれ未完のまま終わりを迎えるけれど、それまでいくらでも形を変えることもができる。たとえば。貴方のその自虐的なところが少しはマシになることも十分ありえる、とか」

「……自虐とか言うな。本当のことを言っているだけだ。それに……人間はそう変われるものではない」

「変われるわ。だって人はカミさまじゃないもの」

根拠が見えないのに、彼女の言葉は自信に満ち溢れ、はっきりと響く。

「すぐには無理かもしれないけれど、ヒトとはそういう存在なのよ。時間はかかろうと、きっと……」

「……俺は」

ん？と小さな呟きを聞き捉えた彼女に、応えるように先を紡ぐ、

「……時間がかかるかもしれない。ひょっとしたら、人類が今のこの世界を築くに至るにかけた時間並に出来ないかも、しれない……けど」

「……この、チキンめ」

「なにぃっ！？」

誠意に応えようとする心を丸ごと圧縮機にかけて潰そうとするかのような、その容赦ない発言に思わずなけなしの誠意も海へ向こうへ吹き飛んだ。

「初っ端から自虐全開しなくてもいいわよ。じれったい……これで前置きに関してはもう貴方にとやかく言われる筋合いないわね」

「……話を腰を折るに関してもな」

うふふふ。

あはは。

互いに不気味までに単調に笑う。

しかし、

「……大丈夫よ」

ピタリ、と笑いを止めた彼女は打って変わった優しい声色で耳を撫でるように囁く。

「私の子供は、デキるコだから。そんなに心配しなくても、その内

何かのきっかけで変われるわ……そうでしょ？」
「……さぁな」
「お母さん、楽しみにしてるからね。貴方が、未完成な自分を好きになれる……そう変われるいつかを……」
日が沈みだしたら、波打ち際まで行きましょうか、と言って彼女は場所をそのままに再び海に見入った。
「……暑いんだが」
「離れたってどうせ汗かくんだから、大差ないわよ」
更に身体を押し付け、回す腕に力が込もる。
離れる気はない彼女は、わかりにくい甘え状態に入ったらしい。
こうなったら周囲の視線を集めようと気にも留めない彼女は、梃子でも言うことをきかないことはもう十分知った。
彼女の言う移動の時間まで、あと二時間はここで海をただ眺めるだけなのか、とそれまで自分の体力は持つかどうか心配になった。
「海、綺麗ね」
「……ああ」
淡々とした中に感じる楽しげな声に、そんなこともどうでもよくなり余計な力は抜くことにした。
「……かずや、あとね」
まだ何か続いていたのか、と返事はしないながらも耳は傾けた。
「……変わらないものなんて、ないかもしれないわ。何かが変わるものを見ているだけ、つられるように何かが変わっていくのよ……

自分でも気づかないうちに、ね。変わることのないはずのカミさまだって、そう。おかしいことなんて、ないのよ。だって――――世界そのものが、昔から常に変わっていっているのだから」

だから、自分も例外ではない、と言いたいのだろうか。
反論する気はもうなかった。
それを生み出す反感も、もはや微塵もない。
先程の会話の中で、胸には答えが導き出ていた。

それは、今の自分について考えた結果だった。
以前とは己は明らかに違っている、と。

一人で生きていくと決め、その道の上にいた自分。
だが、今はどうだ。
一人の自分の傍には、在るはずない隣人が確かに存在する。

「……変わってる、か」
「ん？　何か言った？」

何も、としらばっくれてそれ以上は何も言わなかった。
言えるはずもない。
そんなの癪ではないか。

あんたが俺の傍にいる時点で、十分変わってしまった――――なんて。

◆◆◆◆◆◆

夏の日の思い出。
海で交わされた会話。
何か特別なところもない、平凡のある夏のそんな出来事は、今も彼女の記憶に鮮明に刻まれている。
この記憶こそ、彼女の拒絶と変化への諦めの始まりだったのかもしれない。

変われると知った彼女は、この後その変化の機会たる存在を悲劇によって失うことになる。
再び一人になる彼女はその後、多くの人間と出会うもやはり一人となる運命だった。

そんな彼女が再び変化の機会に出会ったのは運命が与えた皮肉なのか。

さぁ、それでは本筋へと戻ろうか。

多くの悲劇の末、出会いと想いの重なり果ての喪失を何よりも恐れ殻の世界に閉じこもる彼女に、彼女と出会い殻を壊された彼はその遮りの向こうへ声を届かすことが出来るのかを見届ける為に。

［八拾九］　かつての露見（後書き）

昔一緒に海の行ったのは、元カノではなくこの人という話。

わかっていると思いますが、彼女はこの後しばらくして死にます。

そこから千夜の死に別れの連鎖が始まるんですね。

次回は前回の続きに戻ります。

【九拾】　彼女の望み　（前書き）

願うのは、ただ一つ
だから

【九拾】　彼女の望み

蒼助の放った言葉が衝撃を失くし、思考と心に馴染み始めた。
停止という縛りは解け、何かが内側でするりと解けるのを千夜は感じると、

「……どうして、それを」
「それは」
「いや、いい。……心当たりは嫌というほどある」

思い当たる心当たりは、一人しかいない。
今回の一件の提案者たる者が何を考えているかは千夜には見当もつかないが、まぁいいと怒りは沸かなかった。

求めた結末は、多少手順は異なりながらも手に入ったのだから。

「……そうか、知っていたのか」

声に力がこもらない。
欲しかったものは手に入ったのに、何故だろうか。
疑問を晴らす気にもなれず、ふらりと千夜はソファから立ち上がった。
そこから離れようとするが、その身体を何かに引きとめられる。

「待てよ」

後ろからだらりと下げた手首を掴む手があった。
振り返り確認するまでもなく、蒼助の手だ。

「……話なら済んだ」
「済んでねぇよ。まだ、お前の話を聞いてねぇ」
「……お前が先にしゃべってしまったじゃないか。俺には、もう話すことはない」
「千夜」
強調の聞いた声が、不意に名を呼んだ。
「何で、俺をそこまで拒絶すんだよ。自分の手が汚れてんのが、記憶がねぇのが……そんな身体してんのが後ろめたいとかいう理由なら……本気で、怒るぞ」
「……それも、ある」
ぐ、と掴む手に力がこもるのを感じる。
だが、それ以上のことはない。
それも、とまだ何かあるような口ぶりにそれを聞くのを待っているのだろう。
「……俺にはお前は必要ない」
「何を」
「今まで何があろうと一人で切り抜けられた。これからもそうしていくつもりだ。何故なら俺には、朱里が……守るべきものがある。だが、それで手一杯だ。俺にはもう、これ以上何も抱えられない……だから、お前は必要ない」
「だから、俺はっ」
憤る勢いにまかせて蒼助が立ち上がる気配を感じた。
そして、掴む手が振り向かせようとする。
千夜はそれを、

「……っ黙れ！」

振り返ると同時に手を振り払った。

無理やり引き剥がす痛みも全て無視して、蒼助の手が離れることを望んだ。

強い遮りに、面する蒼助は呆気にとられた表情となっていた。

理解できていないという証に、心と精神がささくれ立ち、苛立ちと歯がゆさが募る。

「それ、だよ。俺が……お前を必要（いら）ないと思う最大の理由は」

「……？」

一人だけ話に取り残された蒼助を引き入れるべく、千夜はまずは怒りを抑えた。

声を荒げたいと思う心を鎮め、最大の心がけで落ち着かせた声で、

「……お前は、俺を守るという。今も、そう言いかけたな……それが答えだ」

「……何で」

「……お前は、考えたことがあるか？」

守ると言われる側の気持ちを。

守るという行為が何を意味するかを。

そう口にした後、いや知っているはずがない、と己の中で身勝手にも独りよがりな否定を下す。

だが、事実であることには変わりないはずだ。

こんなことを考えたことなどあるはずがない。

目の前の男は、そういう思考も感情も今回が初めてだというのだから。

千夜はふと己に置き換えて思う。
自分もきっと、これが”初めてならば”素直に頷けただろう。
こんなにも躊躇することなく、受け入れることが出来ただろう。

だが、遅かった。
その行為と約束の果てにある残酷な事実を既に嫌というほど知ってしまった、今となっては手遅れだ。

「守るとは、相手に降りかかる脅威を……全て代わりに請け負うことだ。……だが、それだけじゃない。きっと、大体の人間が……このことに、気づいていない」

恐らく、多くがこの事実を欠いて守ると口にする。
だが、忘れてはならない。
誰か守る前に人はまず――――――

「自分を、守ること」
「……自分？」
「そうだ、災厄を被るのは相手だけじゃない。傍にいる人間だって、その配当される脅威を請け負うことになる。身近過ぎるあまりに、気づかないというやつだ……な」

その些細な見落としが、告げた者のその身を滅ぼす始まりとなる。

「人間という者が一人で出来ることは限られている。己の一人分という枠に収まる程度のことしか、な。その枠に収まりきらない……身の丈を超えたことを為そうとすれば、待っているのは身の破滅しかない。わかるか？　……守るとは、”そういうこと”だ」

一人が二人分――――許容範囲を超える何かを負えば、その身は耐え切れなくなる。
無理をした先にあるのは破滅。
そして、誓いは果たされないものへと変わる。

守る。
言葉として。
聞くだけなら。
それだけであれば、どれだけ綺麗な言葉だろうか。
無知な者には、これ以上に無く誇らしい言葉だ。

しかし、

「守る、なんて……そんな言葉、奇麗事だ」

汚らしく、醜い虚勢と虚飾をまとった、中身のない行為。
千夜には、そうとしか思えなかった。
そうであるという数々の事実を、見て知ってしまった身には、それ以外の何でもない。

「言う側が愉悦に浸るだけで、言われる側には不安と見えない未来しか与えられない。どいつもこいつもっ……皆、そうだっっ！」

感情の起伏がついに抑えきれず爆発する。
一度抑圧を失うと、それまで押し沈められていたモノがふつふつと底から沸騰したような動きに煽られて浮かび上がってくる。
ここにいない、既に過ぎ去ってしまった人間たちへの感情が、一気に表面へと顔を出し始める。

怒り。

哀しみ。

本来向けるべき対象を失い、やり場のなくなったそれら負の感情が、理不尽にも拘らず目の前の蒼助に牙を向く。

「弱いくせにっ……虚勢ばっかり張りやがって。俺が、いつ……助けてくれなんて……守って欲しいなんて言ったんだ！　言ってない、言ってないだろうそんなことっっ！」

吐き出す中で、甦るのは最期（いまわのきわ）に立たされた彼らが口にした共通の台詞。

――――――あんたを守りたかったんだ。

――――――ワタシ、あなたを守れた？

繰り返される言葉に、一度だって答えられたことはなかった。

何故なら、そこに怒りは存在せど、感謝の気持ちはなかった。

何も言ってくれなかったことへの。そして、力が及ばないことを上で決行した無茶の代償として生み出したその末路への。

「何が……あんたは強いから一人でも大丈夫、だ……そうだったのに……それが出来なくなったのは……誰のせいだと、思っているんだ」

喉の奥がきゅぅっと絞まり、声が上ずった。

目頭が熱い。

「守ってなんか、ほしくない……っ」

守ってくれなくていい。

「多くなんて、望まなかった……俺は、いつだって……」

いつだって、望んでいたのはたった一つのことだった。

だが、それだけがいつだって叶わない。

どうしてなのか。

それさえ約束してくれれば、守るのは自分がすればよかった。

こんな簡単な選択肢を、どうして彼らは誤ったのだろう。

どうして、自分の望みとは真逆の結果が待つ選択をしたのだろうか。

どうして。

どうして。

過ぎてしまったその時その場で、成し遂げたと満足げに笑む死に逝く彼らを前に、出来なかった糾弾の想いが、今になってようやく口から零れる。

「――――傍にいてくれればよかった……ただ、それだけだったのに」

彼らに、そして――――――『彼女』に向けた恨みと懇願の入り混じる吐露。

生きている時に、言うべきだった言葉。

今となっては、無意味な求め。

「たったこれだけのことも、叶わないなら……叶えてくれないなら……俺はもう、これ以上誰も必要ない！　もう、何も望まない！　だから、もう俺を揺さぶるな！　俺を……一人で生きていけなくしようと……するな」

掻き毟るように顔を手で覆い、叫ぶ。

無いもの強請りなんて、もうしない。したくない。

だから、手に入らないものを見せびらかすのはやめてほしい。

わかっているから。

絶対に、手に入ることも、それが叶うこともないのだということは――――――

「――――――やぁだね」

鼻で笑うように声に、一瞬千夜の頭が真っ白になる。

その不意をつくかの如く、顔に当てていた手を掴まれ強く引かれた。

「……っ」

抗う隙も無く、そのまま顔から飛び込んだのは蒼助の胸。

そのまま背中にもう片方の腕が回り固定。
腕の中に囚われる。

身動ぎしようとすれば、先手を遮るように強い力で締め付けられる。
苦痛には及ばないものの、息苦しさに息を呑んだ。

「ったく、散々当り散らしてくれやがって。しかも、ところどころ痛いところ付くし……。あー、まぁ……そろそろいいだろ？」
「……？」
「溜め込んでたもん吐き出してちったぁすっきりしただろ。こっから先は、しばらく俺のターンってことで」
「なに、を――――」

押し付けられて上手く喋れないのを逆手にとってか、聞こえていないように蒼助は構わず己の言葉を優先した。

「確かにお前の言ってることは正しいかもしれねぇ。人間なんてちっぽけな生き物にとっちゃぁ、守るなんて行為は身の程知らずなことなんだと思う……特に、守る相手よりも弱い奴がいうことほど中身がねぇっていうのは、な」

最後の部分が自虐の色に帯びていたように、千夜には聞こえた。
しかし、それを自ら掻き消すが如く、

「でもな、正しいからってそれをホイホイ納得出来ねぇことだって、世の中にはあるんだよ……死んだお前の大事なそいつらも、きっとそうだったんだ。わかりきっていても、それでも納得することで諦めるなんて出来なかったんだろ……。会ったことも、話したこともねぇ、たった今話しでチョロっと聞いただけの連中のことだが

よ……俺には、そいつらの気持ちがいやってほどわかる。……現に俺は、お前にいくら言われようと俺の弱さを認めて諦めることなんて……とてもじゃねぇが、できねぇよ」

その言葉に、千夜は口をキュッと結び、唇を噛んだ。

世の中には理屈を上回るものがある。

それは千夜とてわかっている。自身でも身に覚えはある。

だが、それをわかっていても、彼らの身勝手な行為を、そして蒼助の主張を甘んじて受け入れることは出来ない。

「そんなの……」

「だから、黙っとけ。俺の話はまだ終わっちゃいねぇ」

「んっ」

頭の後ろから胸に押し付けられて、遮られる。

強引な制止をして、蒼助は話を続けた。

「俺には、お前の望み……一つ叶えられて、一つ叶えられない」

最重要点を述べるように、強い口調ではっきりと告げる。

「まず……俺はお前がどんだけ嫌がろうとやっぱり守りたいって気持ちは変わらねぇ。言われなくても、簡単じゃねぇことはわかってる。第一、こんなことしようなんて思ったのが、お前が初めてだけに尚更だ。だけど……これこそが、理屈を超える感情ってやつだ。理性かなぐり捨ててでも、これだけは曲げられねぇ。他の奴らと同じように」

揺るぎ無い調子で並べられた言葉一つ一つに、当人たる蒼助の想いが編みこまれているように思えた。

それが、揺るがしようのない蒼助の信念となってしまったのが伺え、千夜にはそれが酷く残酷な台詞にしか捉えられなかった。

しかし、

「……だが、さっき言ったやつの方は、俺は大歓迎だ」
「……？」
「――――傍にいてほしいって、言っただろ？」
「っ！」

先程の無意識のうちの吐露を聞き拾っていたらしい。
だが、それは大きく矛盾している。

「死に急ぐやつに、そんなことできるはず……」
「やってみなきゃわかんねぇだろ。やる前からごたごた言ってたって、結果は出ねぇよ。それに……お忘れになってるかもしれませんが、俺は”もう人じゃない”んですぜ？」
「……蒼助」
「割と悪いことじゃねぇよな。特に、さっきのお前の言葉聞いたら一層そう思えてきたぜ。人間には、一人分相当のことしかできねぇっていうなら……まぁ、半分人間じゃねぇ俺には世界救うまでとはいかねぇが、もう一人分の厄介を背負うことくらい出来ると、思うぜ」
「……どうして」

あまりの理解不能な考えに、千夜は眩暈を覚えた。
あの時も、あの時も、そうだった。
死に瀕しても、命途切れるその刹那も、途切れた後も。

――――皆、安らかな様子で微笑っていた。

何の未練も、悔いもなかった、と。
何かを成し遂げた者の貌で。

理解できなかった。
自分を守り、生かしたことはそこまで誇りに出来ることだったのか。
理解できなかった。
己の人生を投げうるほどの価値を、どうして己に見出せたのかも。

わからない。
わからない。

そこまでして自分は、誰かに守られていい存在とは、思えないのに。

「わか、らない」

心で何度も反響する疑問は無意識のうちに口をついて出た。

「どうして、俺なんかを……そこまで」
「……んなもん、決まってるだろ。多分、他の連中も……細かいことといろいろあったかもしれねぇが、理由なんて単純にして一つだったと思うぜ……俺みたくな」

理由。
彼らが死に際に残した共通の言葉がある。

――――好き。

お前を好きだった、と。
懺悔のように言い遺していった。

「好きだぜ、千夜。理由なんて――――必要ないくらい」

思い出に被さるように、蒼助の想いを象る言葉が内側で響いた。

そうだ。
自分が彼らの死を、許せなかったのは。
その身勝手な行動が、許せなかったのは。

彼らが好きだったからだ。
それ以外に理由はない。

きっと、彼らは自分たちが考えたなりの応え方をしてくれたのだと思う。
例え、それが大きく間違った形だとしても――――それが、彼らの応えだったのだ。

「そんな、の……」

酷い。
少しも噛み合っていない上、報いも救いもない。
自分が望んだ応えで返してくれなければ、意味などないというのに。

「千夜。聞け。俺は奴らと気持ちは同じで、理解は出来る……だけど、同じようになる気はない」
「……何を」
「俺はお前を身を挺して守って死んで満足する気はねぇ。寧ろ、足

りねぇよ。俺はお前の傍にいたい。その死んだ連中みたく、お前の幸せだけを願って後に別の奴が後釜譲るなんざ考えるだけで、死んでも死にきれねぇ。俺は最近になって知ったが……相当独占欲ってやつが強い上、底無しに欲深いらしい。お前を幸せにするのも、お前の傍にいるのも俺でなきゃ我慢ならならねぇ。途中退場はなし。ずっと俺。他の男との幸せなんか、祈るどころ徹底的にぶち壊してやりたい。正直、そんな自分にドン引きだがこの際もうそんな細かいこたぁどうだっていい」

台詞の区切りと同時に、強い抱擁が緩まる。

身体の密着がないか、あるかのギリギリの距離感で蒼助の顔と向かい合う。

「あいにく、俺で打ち止めだ。俺は自慢じゃねぇが、呆れるぐらい生き汚ねぇ上しぶといから……余計な心配はするな。お前がいる限り、お前が望む限り、そして何より俺が望む限り……みっともなく生にしがみついてっから」

力強い笑み。

信じろ、と訴えていた。

不意に己の全てを預けてしまいたい衝動に駆られ、グラリと意識が揺れる。

誰も言ってくれなかった。

己への脅威を庇い死んでいった彼らも。

今も己の周りにいる者たちもそんなことは一度も言ってくれなかった。

三途も。

朱里も。
上弦も。
あの黒蘭さえも。

傍にいてはくれるが、ただの一度もそんな約束はしてくれなかった。
この前の三途の行動で、その真意ははっきりと明確なものとなった。
誰も彼もが、いつか自分の身に何らかの死の脅威が降りかかった時、その身代わりになる覚悟が出来ているのだ。

犠牲となって己の前から過ぎ去る覚悟を。

だから、初めてだった。
お前の為に『死ぬ』、とではなく。

――――――『生きる』といわれたのは。

更には自分自身の為でもあるという。
初めてだ。
こんなことは初めてだ。

例えようのない幸福感。
満ち足りた感覚。
好きだといわれたことすらもどうでもよくなるほどの、嬉しさ。

押し寄せる感情の波に、思考と理性が崩されていく。

「そう、すけ……」

抑えていた欲求が溢れ出す。

捧げたい。
目の前の男に何もかも捧げたい。
自分の願いを叶えてくれると言った蒼助に、代償を求めるのなら
何もかもくれてしまってもいいと思う。
欲しいというのなら、何でも持っていけばいい。

身体か。
心か。
所有権か。
いずれであろうと構わない。
全部というのならそれでもいい。

「――――千夜」

さらり、と髪を梳くように蒼助の片手が後頭部に回る。
既に腰に回っているもう一方の腕と同様に、固定、としてそこに留まる。
顔が近づく。

幸福の絶頂に、気を失いそうになる。
蒼助の吐息がかかるほど近づいたその瞬間、

――――脳裏に過ぎった残像が全てを吹き飛ばした。

「――――っ！！」

反射的に千夜は蒼助の胸に当てていた両腕を伸ばし、その身体と

強引に距離を持った。
突然の千夜の行動に、突っぱねられた蒼助は夢から起こされたように、

「って、オイ！　何だよ、この期に及んでまだ……千夜？」

不機嫌に急行落下した声は、不意に軽くなる。
現状を掴みきれないという心情が表していた。

「お前……何で――――――泣いてんだよ」

白くぼやけて見えない蒼助の言葉で、己の今の状態を認識した。

【九拾】　彼女の望み　（後書き）

最悪の寸止め。
どこまで焦らせば済むのか、私は。

次回こそ、決着。
そして一部のエロい皆さんお待ちかねのラブシーン一歩手前まで行きます（にやり

【九拾壱】　二人の重なり（前書き）

そろそろ孤独な彷徨を止めないか
ゆっくりでいい
ささやかな、一歩を

【九拾壱】　二人の重なり

惚れた女の秘密を知った。
しかも一つどころではなく、三つ。ひょっとしたらこの調子でいくとまだまだたくさん後が控えているのでは、と本能的な勘とやらが警告音を発している。

秘密、というのはその人間のアキレス腱みたいなものだ。
どんな強靭な信念や志を胸に秘める人間も、かの英雄のようにそこを突かれれば、大きな致命傷を負う。
秘密を暴くとは、そういうことだ。
かつて俺の秘密――――心の奥を容赦なく暴いた女はそう言って、更に続けた。

暴かれることは痛みを伴うかもしれないが、放っておいても膿んでいくだけで。
暴かれなければ、その苦しみから解放されることはない。
だから、暴いてほしい。
彼女が貴方に向けて隠し続けている秘密を、知った貴方が容赦なく暴いてやってほしい。

――――あのコを想うのなら、どうか傷つけてあげて。それが……。

たった一つ、彼女を救い楽にしてやれる術なのだ、と。

いつものポーカーフェイスに悲壮感と慈愛を滲ませて告げられた事を、俺は迷わず実行した。
正直迷いはしたが、自分の時を思い出し、それを振り切った。

見ないようにしていた自分の中のものと膿んだ疵と対峙した時の苦痛は壮絶なものだったが、それを乗り越えた今は不思議と以前より楽になった。
在った、という事実こそ消えないものの、それを踏まえて前に突き進むことは決して苦痛ではなくなった。

彼女にもそれを教えてやりたかった。
そろそろ歩き方を変えよう、と。

結果、予想通り彼女は大いに取り乱した。
どうやら俺とは別の用途で彼女の方も同じことを自分から切り出そうとしていたが、そうはさせるかと先手を打った。
ショックを受けたように硬直した様子はさすがに胸が痛んだが、そこは我慢。
そこから先は彼女のボロがそれこそボロボロこぼれ始めた。
そうして、今まで巧みに隠されていた――――大事な人間の身勝手に振り回され続け、傷ついた彼女の姿が見えた。

そこには、かつて同じように傷ついた俺の姿もちらついたが、やはり彼女は違った。
傷ついた自分を嘆かず、傷の痛みを足掻く意志に変えていた。
同じ間違いをもう繰り返したくないから、と更に自分を傷つけて、それまでとは別の道を歩もうとしていた。

それが破滅の下り坂とわかっていながらも。
それでも、行こうとする。

止めなければ、と彼女の痛み走る懇願の叫びすら跳ね除けて。
限界であろうにそれでも足を折らない崩れ落ちそうな彼女を抱きしめて。

もう一度好きだと言って。
俺が長年の望みを叶えると――――――傍にいる、と約束して。
腕の中から見上げてくる彼女の表情がたまらなくなって、キスをしようとした。

それで。
それで――――――

「……」
「うぇっ……ひっ…ぅ……っ」

ソファの上に座る俺。
しかし、その膝の上には彼女が跨っていた。
しかも俺の胸にすがって泣き通し、だ。

一体何だというのか。
まだ拒むのかと思ったら、急に泣き出された。

オイ。

――――――誰かこの状況を説明できる奴がいたら、手ぇあげろ。

◆◆◆◆◆

何でこんな展開に転んだのだろうか、と自身の胸から聞こえてくる彼女の嗚咽を聞きながら蒼助は現状に至るまでの経緯を振り返った。

雰囲気に流した勢いでキスしようとしたら、拒まれて突っ撥ねられた。

その矢先今度は泣き出し、縋り付かれた。

以下、現在進行中。

……さっぱりわからねぇ。

泣く、という相手の初めての行動に動揺し、されるがままにしていたらどうにも次に動かせなくなった。

宥めてみたが、全く聞く耳持たずでただ泣くばかりだ。

他にどうすることも思いつかず出来ずで、とりあえず千夜を抱きしめて泣かせている、のだが。

……嬉し泣き、ってわけではなさそうだしな。

かれこれ十五分もこの状態だ。

我慢も長くはきかない蒼助は、そろそろ動かない現在の状況にシビレがきていた。

尤も相手が千夜でなければ、とっくにその場に放置して逃げ去っていただろうが。

……って、いかんいかん。

他の女ならともかく、千夜にそんなことするわけには行かない。

ただでさえ、今は大事な瀬戸際だ。

これだけ大泣きするということは、きっと口を利くのすら億劫に

なるほど大事な琴線に触れてしまったのは間違いない。
とりあえず、暇を持て余す意識を何かに集中させようと、一番手近な千夜に向ける。

……やっぱり、腰ほせぇな。

出るところは出て引っ込んでいるとこは引っ込んでいる、と称するに相応しい括れだ。
歪みのないその部分の曲線に感心していて、ふと蒼助は気づく。

……よく考えてみると、いろいろと美味しい体勢じゃね？

自分の胸板に縋る千夜は、同時にその出た部分の胸をギュッと押し付けている。
何より、体勢だ。
この向かい合わせの体勢はオイシイ。

……ヤベ、勃ってきた……ってコラコラ！

空気を読め、と自身の下半身を叱咤した時だった。
腕の中の千夜の様子に、変化が現れる。

「……千夜？」

蒼助の胸に顔を押し付けて伏せていた千夜は、そこから僅かに身を離したのだ。
しかし、ようやく伺うことが出来た千夜の顔には変わらず涙が流れ伝い続けていた。
留めなく、と表すに相応しいほどおさまる様子無く。

「ごめん……もう、落ち着いたから」
「……何処が。こんなボロボロ泣きっぱなしで」
「……涙腺ぶっ壊れたのかもな」

泣きながら笑う。
口調も泣きが入っているというわけでもないので、本当にそうなのかもしれない。

「……本当に、泣くのなんて……久しぶりなんだ」
「どんぐらい？」
「……最後に泣いたのは、二年前ぐらいだと……思う」
「……二年」

それだけの間に何もなかったわけがないだろうに、それだけの月日の中で一度も泣かなかったというのか。

「……誰の手も借りずに、一人で立つと決めた時、まず泣くという行為を捨てたんだ。彼らが死んだ時も、哀しかったが泣かなかった。……いや、泣けなかった。知らない間に……我慢に我慢を重ねた結果、俺は泣けなくなっていたんだ。泣くことにかけた自制心が、いつの間にか度を過ぎて無意識の縛りになっていた」

でも、とまだ続き、

「……彼らと差があった、と……結論づけるのは気が引けるが、ある人が死んだ時……泣いたんだ」
「それが、二年前か？」
「ああ……尤も、彼らと出会ったのはそれ以降のことなんだが……その前に、たった一度だけ縛りも何もかもが弾け飛ぶくらい泣いた」

自分の中のダムが決壊するほどの哀しみだったのだろう、と蒼助は内心で察した。
それはあの写真の死んだ恋人のことなのか。
この場でそれを追求する勇気は、蒼助には無かった。
ただ、

「……そんぐらいのことがない限り泣かなかったのに、今泣いてるのは？」
「……」

問いかけると千夜は濡れた睫毛を伏せて俯いた。
返答の拒否に、蒼助は溜息を洩らす。
無理に聞こうとしても無駄なのは、パターンとしてそろそろわかり始めてきた。
ならば、

「……話せって。泣かれてる理由もわからなきゃ、俺がどう泣き止ましたらいいかわからねぇだろ？」

頬を流れる液体を拭うが、上から流れるそれは再び軌跡をつくる。
ならば、と指で目尻を拭った。
そして、もう片方を、

「っ……ん」

逸らそうとすると顔を手で押さえ、目尻に溜まる雫を舐めとる。
後から満ちようとするそれを更に軽く吸った。
塩分を含んだ千夜のそれが、不思議なことに甘く感じた。

「ほーら、言わないとずっとこうして……っ」

からかい半分本気半分で言いながら顔を見て、蒼助は固まった。
千夜の顔はどういうわけか、またくしゃりと歪んで泣きに入っていた。

「……優しく、するなぁ……っ」

そう言った声には再び涙が滲んでいた。
そして、

「そんな風にされたって、俺には返せるものないというのに……何で、そんなに優しくするんだぁぁっ！！」
「うぁおっ！？」

わぁぁ、と泣いたかと思えば、自分から胸に抱きついてきた。
思い切った行動に身体が揺さぶられる。同時に蒼助の理性も揺れる。

「お――――落ち着けマイスピリット、落ち着け落ち着け落ち着け落ち着け落ち着け……」

何処か危ない目で蒼助がそうしてブツブツと念仏のように唱え始めるその下では、

「どんなに優しくされたって……お前が俺を好きだと言ってくれても……俺が、こんなにもお前を好きでも……何の意味もなくなってしまうのにっ」
「何言って……って、今何つったっ！？」

うっかり聞き逃しそうになった部分を急いで台詞から抜粋し頭の中に留めて、蒼助は千夜に再度繰り返すように肩を掴んで迫る。

「……ぅそ、絶対言わないつもり……つもりだったの、に」

「言わないつもりって、てめぇ……まぁこの際細かいことはどうだっていい。……で、確かなんだな？」

自身の言い漏らした事実に、唖然とする千夜に念を押す。

今まで何となく流していたが、何に置いても何よりも重要なことだ。

「……俺のこと、好きなんだな？」

改めた質問に、千夜は一瞬苦しげに顔を歪めた。

喉に詰まった何かを呑み込むことも吐き出すこと出来ずにいる、そんな表情だ。

しかし、

「……っ、ああそうだよ！　俺はお前が好きだっ、文句をあるか！」

やけになったのか、吐き出すことを千夜は選んだ。

あるわけがないだろうに、という突っ込みすら忘れて蒼助はその言葉に聞き惚れた。

吐露は更に続く。

「気持ちそのものは出会いからあったんだ……でも、気づきたくなかった、直視したくなかった……そんな自分を認めることなんてできなかったっ。僅か一瞬の拘わりだと思ってたら、お前は再び俺の前に現れた。油断してたら、とんでもなく深いところまで踏み込

んで来やがって……気がついたら、最初は視界の端っこにちらつくだけだったモノが目と鼻の先にあって、目も逸らせないようになってて……っ」

煮詰まったように顔を顰めると、額を蒼助の胸に押し当てた。

「何でこんなことになったんだ……こんな風になるはずじゃなかったのにっ……俺がお前を好きになる要素なんて、何処にあったかもわからないのに……なのに、こんなっ。

ああ、くそっ……頭の中がゴチャゴチャで自分でも言ってることがワケわからない……消しゴムでも何でもいいから頭の中を全部真っ白にしてしまいたい気分だっ――――――んぁ、ぅ」

突然顎に手をかけられ、上を向かされた千夜は立て続けに襲った出来事に目を見開いたまま固まった。

塞ぐように合わさる唇。

伝わる感触と温さと、ゼロ距離にある顔で、それがどういう意味なのかを理解。

五秒ほどの時間経過の感覚の後、唇は離れたが顔は近いままで蒼助は吹きかけるように囁いた。

「……真っ白に、なっただろ？」

こくん、と真っ白になったまま呆けた様子で頷く千夜に、満足そうに「よし」と呟いた蒼助は頭を抱きこむようにその身体を抱きしめた。

宥めるようにポンポンと背中を摩りながら、

「そんじゃ、自分で逸らしておきながらなんだが……本題に帰ろうか。で、なんだって？　その意味がなくなるっていうのは、どういう意味だ？」
「っ……」
千夜が身体を強張らせるのを身体の触れた部分で感じる。
しかし、それでも突き詰めることにした。
「……言ってみろ。俺はエスパーじゃねぇんだ。お前の考えてることは言ってもらわなきゃ、わからない。言う前にごちゃごちゃ一人で考えて完結しないで、言っちまえよ……多分、もう何が来ようと大丈夫だろうから」
「……多分って」
「ああっ、いいから言えっての。俺の多分は、絶対だっ！　わかったな！？　わかったろ！？　わ・か・っ・た・なっっ！！？」
蒼助が段をつけて三度押しすると、千夜は返事代わりに腰に回す両腕を締めた。
わかった、という代弁なのだろうと勝手に蒼助は解釈した。
少しの沈黙が置かれる。
そして、
「……好きな女の子がいたんだ」
「ぁあっ！？」
思いもしない切り出しに思わず蒼助は声を荒げてしまった。
告白の矢先で、どうして昔の女の話を切り出す気になれんだこの女っ、と蒼助は分泌する空気に怒りを孕ませた。
「……をい。今カレの座に着く予定の男に元カノの話題を持ち出す

たぁ、どういう了見だー？　答え次第で急遽ルート変更で地獄の下り坂突っ走ってやるぞ、ああん？」
「な、何で怒ってるんだ……？」
「わからいでか、この鈍感オトコムスメがっ！！」

これは本気で路線を変更せざるえないかもしれない、と危険な思考に走り始めた蒼助の心中を本能的に察してか、千夜は焦った様子で弁解に出た。

「い、いいから聞けっ……お前が話せと言ったんだろうが」
「……もし、その女に未練があるから無理とかいう内容だったら、この場でその頭の中構造改革実行してやるから。泣こうが、喚こうが容赦なく」
「……」

地の底から響くような低いトーンで無機質に言われて、身の危険を感じた千夜は慎重に語りだす。

「……俺は、彼女が大事だった。何処が、とか言えるような安易なものじゃなくて……仕草一つ一つの何もかもが愛しくて仕方なかった。異性として好きになったのは、彼女が初めてだった。その時、俺は何よりも得がたい……かけがえのない大切なモノと大事な人を手に入れたと思って……幸せだった、本当に」

内容そのものは幸福に満ちているものなのに、それを紡ぐ口調は相反して暗く重い。
悲痛さすら感じ取れた。

「……と、思っていたんだ」
「……あ？」

途中が小さくて上手く聞き取れず、繰り返しを要求すると、

「……残ると、思っていたんだ。例え、相手を失ったとしても……いなくなった人間への想いだけは自分の中にまだ残るって……思っていたんだ。けれど、けれ……どっ」

声が震え、語尾が涙ぐんで潰れる。

胸に突っ伏していた頭がぐっと強く押し付け、

「……彼女が、いなくなって……起こった変化は、身体の状態が急激に女に偏っただけだったじゃなかった。……彼女に対して向けていた感情も、”なくなってしまった”んだ」

「なくなったって……」

「好意、愛情……そういったものが全部なくなった。忘れたとか、気持ちが冷めたとかそういうんじゃない……無くなったんだ。まるで、最初からそんなもの存在しなかったみたいに、跡形もなく……身体が急に女に変わっただけで」

思い返したのか千夜が両腕で自分の身体を掻き抱いた。

服越しに爪先が食い込むほどに、強く。

「薄情極まりないと思わないか……？　どんな人間だって、一度好きになった相手への気持ちをきれいさっぱり切り捨てて取り去ることはないはずだ……本人は気づかないかもしれない……だが、そこには僅かなりとも思い出と共に想いの残滓が残っているに違いない。けれど、俺にはそれすらない。……彼女と過ごした思い出はある……だが、それを想う感情がもう残っていないんだっ！　……代わりに、居座っているのは、何にも想えない彼女への罪悪感だけだ……」

保健室のベッドの上で見た夢を思い出す。
夢の中では、かつての自分は確かに彼女を想っていた。
なくしたはずの感情は確かに存在していた。
けれど、夢から覚めれば微塵も残さず消えていた。
それこそ、夢幻のごとく。

「どうしてこうなったかなんて、身体の状態の変化の原因すらわからないんだ。……また、なんらかの拍子に男の方に偏るかもしれない……その可能性がないとも言い切れない。もし、そうなったら……多分同じように、なる、だろう……な……」

「……」

「蒼助、お前が好きだと言っている人間は、こんな……何もかも先行きの見えない不安定な人間なんだぞ？　……お前が死んだら……あっさり気持ちがなくなるかもしれない、そんな奴なんだ……身体だって、この先ずっとこのままかどうかも……わからな――――」

言い切るのを遮るように、身体の密着とともに抱擁感が千夜に訪れた。
緩んでいた蒼助の腕は再び締まりを戻したのだ。
強すぎず、かといって弱くもない。
息苦しさどころか心地よさを感じる、包み込むような抱擁。
居座りの悪い例えようのない感覚に戸惑う千夜の頭上に、労わるような行為とは打って異なる蒼助の棘の生えた言葉が降る。

「……呆れて、口が塞がらない……っていうんかこーゆーのを。信じられねぇ、最後の最後に残った砦がそれかよ。そんな理由で俺は散々拒否られてたのか」

「そんなことって……っ」

「そんなことだろうが。少なくとも、俺にとっては」

はぁぁ、と蒼助はあからさまな溜息を吐いて、

「……まぁいいや。お前は俺が思っていた以上に可愛い女だってわかったし」

「かっ」

なんとでもないことをいうように蒼助の口からコロリと出た言葉に、千夜は思わず目を剥いて顔を上げた。

「なっ、何だそれは！　お、俺の何処が」

「全部。もう、たまらねぇっすよ」

「う、嘘だ！」

「本当」

「うっ」

「可愛いよ」

否定する前に割り込まれ、千夜は詰まった。

詰まったまま睨みつめていた既に赤い目尻にまた涙が滲んだ。

力が抜けるように、蒼助の胸に頭部が収まる。

蒼助は丸まった千夜の背中をあやすように撫でながら言葉をかけた。

「……悪かったな、そんな扱いして。なった身にはきついよな。死なれた上に何も遺んないなんて、さ。思い出なんて、そこにどんな感情があったかがわからなくなってちゃ、何の慰めにもならねぇよな。そこに俺を当てはめて考えてみたけどよ……やっぱ、俺もこえぇわ。もし、お前が死んで一緒に好きだった気持ちも消えちまったら」

「……」
「また、同じようになるのが怖いんだよな。俺が死んで、好きじゃなくなるのが……怖いって、思ってくれてるのか？」
「……ん」

胸に当たる頭がもぞりと動いて、頷いた。
はっきりと口にされるよりも明らかな答えに、蒼助は自身の胸が躍るのを感じる。

「ありがと、な。……けどな、一つだけ覚えておけよ」

蒼助はその瞬間、今までの人生で一番穏やかな気持ちの最中で告げた。

「お前は俺の”死ぬ理由”じゃない。――――――生きる理由だ」
「――――――っ」
「お前の中の俺への気持ちがなくならねぇように、せいぜいみっともなくてもしぶとく長生きしてやるぜ」

そういった後、何かの予兆を促すように、蒼助は千夜の旋毛に口付け、次にこめかみ、額、目元、と順を追って唇を落としていく。
催促のようなそれに、反応として千夜は顔を上げて少し高い位置で自分を見下ろす蒼助の顔を見た。

動いたのは蒼助だった。
それを察した千夜はごく自然に、当たり前のように目を閉じると同時に――――――重なった。

それは始まりからずっと同じ想いを抱えていたにも拘らず、噛み合わずに交差し損ね続けた二人がようやく重なった瞬間となった。

数秒ほどの僅かなその時間が、二人には時が止まったように長く感じるものであった。
どちらともなく離れたが、視線は合わせたまま、

「……いいのか。俺は、こんな身体で……不安定な存在で……それに、それと」

熱に浮かされたように顔を赤らめて視線を虚空へ彷徨わせていたところ、下方へわかるように逸らし、

「……やっぱり、可愛くないんだぞ」
「ああ、そうかい、そうですか。……いーんだよ、別に。俺がわかりゃ、それで」

あいにく万人に知れ渡らせたいという趣向はない。
寧ろ、自分一人だけが知っていること、と胸に秘めておきたい。
自分がそんな人間であることを、蒼助も今初めて知ったのだった。
だが、悪い気分ではなかった。

「身体のことも、気にすんな。……そういう点では、お互い様だろ」
「……そう、か」

応じるものの、その表情はお世辞にも明るいとは言い難い。
長年抱えていたコンプレックスを急に手放せ、という方が無理な話なのかもしれない、と自分の発言が少々迂闊であさはかなものだったと反省する。
そして、湿っぽい空気を盛り返すように、

「ま、大船に乗った気で俺にどーんと任せろ」
「大船……ね」
「って、オイ。何だそのイマイチ乗る気になれねぇとでも言いたげな態度は」
「わかってるじゃないか」

揚げ足をとるような皮肉じみた返しにいつもの調子を取り戻した吉兆を感じ、蒼助はようやく一息つくことができた。

「そういう可愛くないこと言われると……」
「……っあ」
「証明しなきゃ、男が廃るよなぁ……」

低くした声でそう言いながら、不意を打つように抱擁を強めた。片手は背に。もう片手は腰に置かれ、何かを予感させるような動きをそこでする。

「任せる気に、させてやろうか……今すぐ」

指先にひっかかった裾がその巧みな動きによって捲くれ、進入をあっさり許す。
肌で感じるその確かな感触に、千夜は息を呑み身を固くした。
胸で息を潜めるその様子に蒼助は、

「……なーんて、な」

先程までの耳の奥にドロリと流れ込むような低さは放り捨て、打って変わった明るい声で場の緊張した空気を掻き混ぜる。

捲くった服を元に正し、千夜の髪を梳くように撫でながらその顔に頬擦りをするように己のそれを寄せて、

「じょーだん。これ以上は、欲張りすぎだよな……お前の口から好きだって聞けて、ちゃんとしたキスまで出来たってのに、これ以上は贅沢すぎるよなぁ」

本音八分、抑えた下心二分の本心だった。

焦る事はない、という気持ちは間違いなくあった。

残された試練は自身次第のものであり、あとはそれをひたすら到達を期限までに目指していけばいい。

しかも、これで一層打ち込むことができる。

前途は明るくなった。

とりえあずのところ、現時点ではそれだけ十分だ。

「……よ」

耳元で千夜が何かを言ったが、か細い声は蒼助がはっきりと聞き取れるに至らなかった。

「千夜？」

何か言ったか、と問いかけると、千夜は蒼助の肩に額を置いた。

そして、繰り返し、今度は聞こえた台詞は、

「……シて、いいよ」

予想を瞬滅し、蒼助の思考回路を消し飛ばす核爆弾並みの威力を発揮した。

【九拾壱】　二人の重なり（後書き）

このまま寸止めを極めていこうか、と今回の分書いててふと思った天海でした。
そしていつかは寸止めの頂点に（笑）

九拾壱話にしてようやく、です。
時間かかりすぎだ、こいつら。
他の連中はまだ早い方でくっつくぞ。
それだけ想いってのは受粉するまでに育つのに時間がかかるということですかね。

次回は……いよいよです（ナニかは言うまいさよなら、健全。
こんにちは、発禁。
いずれ再び会うことを約束して、十五歳未満の読者さん。

名残惜しいですが、次回は新展開（ある意味な

【九拾弐】　彼女の独白

――――――シて、いいよ

一つの特大級の爆弾を解体し終えたかと思って安心していたら、息もつかせずまた新たな爆弾が投入された。
聞いた瞬間に蒼助は、その発言をそんな風に捉えた。
しかも今度はより複雑で難解だ。
どうすればいい、と恐慌（パニック）に陥りかけた思考を引きとめ、考える。

「……何だ、その顔は」
「え……と」

見上げる千夜の顔が不満と不機嫌に満ちている。
どうやら自らの反応が招いたのだと、蒼助は嫌な汗の噴き出しと共に察した。
これ以上の沈黙はまずい、と何か言わねばならないと思考をフル回転させる。

考えろ。
考えろ。

考えた。
そして、言った。
行動した。

「……何だ」
「いや、熱でもあるのかなぁー……って」

前髪を書き上げて額に手の平を当てると、長めの前髪がなくなったことではっきりと露になった顔が眉間に皺を寄せてより一層気分を害したのを主張していた。
蒼助は地雷を踏んでそこから動けない状態になった。

「……ない、よな」
「ああ……んなもん、無い」

答える声色は、鉛のように重く、鉄のように硬い。
蒼助の全身も動かすとギシギシと音が生じそうなほどに硬直していく。
まずい、
酷くまずい。
対処なんぞ考え付けそうにないほど、蒼助は焦った。

「……シて、いい……と、言った」

眉を顰めながら、顔を赤らめて千夜は問題の発言をもう一度繰り返した。
やっぱり可愛い、と一瞬和みかけた蒼助だったが、発言の内容がそうはさせじと襟首を掴んで引き止める。

「いや、していいって……」
「お前が俺に任せる気にさせる……と、言ったんだろうが」
「え、だからあれは冗談だって」
「――――――冗談？」

もう地に付くのではいうほどトーンが更にダウン。
蒼助は思わずヒッと喉を引きつらせそうになった。
今の千夜からはそれだけの威圧感が醸し出されていた。

「……いいから」
「っぃ！？」

胸倉を掴まれた。
と思ったら、力は蒼助の後ろへとかかり、

「どわっ」
「――――――黙って抱け」

押し倒された。
その蒼助の上で、告げた千夜が告げた台詞は男らしさに満ちて足りていることこの上ない。
そして、蒼助を見下ろす目は完全に据わっていた。
二転三転と移り変わる展開に、正直のところついていけなくなっていた。限界だ。

「おい、お前本気でどうした。泣きすぎて、どうかしちまったのかっ？」

どんな反応が返ってくるかも全く考えずに放った命取りな台詞に、千夜は意外な返事を返した。

「……そうだ。泣き過ぎて……俺はもう自制心まで壊れた」

鉄火面のように威圧感を湛えていた表情が、突然崩れた。

「それとも、俺がこんなことを言うのはそんなにおかしいか？　思っては、ダメなのか？」
「千夜……？」

イマイチ掴めない千夜の不安定な様子に、蒼助の困惑は深まっていく一方だった。

「昼間、あの女が俺に言った言葉を覚えているか……？」

唐突に切り出された話題に聞いた当初は、何を突然ときょとんとしたが、ナニを指し示しているかをすぐに察した。

「……玩具って言われたの、気にしてんのか？」

「……」

その重い表情で俯く様子が、昼間の智晶が吐き散らした散々な台詞の数々を蒼助の脳裏に反映させていく。

「あんなの気にしてんな。ただの……」

「……本当のことだ」

遮る声は酷く重く淀んでいたのに、蒼助は思わず言いかけた言葉を喉に詰まらせた。

「何も知らない人間のその場で考え付いた台詞とはいえ、正直ひやっとしたぞ。何もかも、その通りだったからな……」

「……おい」

自分の口から出た声がかなり低いという自覚はあった。

理由も出した自身がよくわかっていた。

それに伴った視線を受けて、千夜は困ったように小さく笑った。

「そう睨むな。俺は多くの人間と出会い別れを繰り返してきたが…

……お前みたいなやつはごく少数で、お前にみたいに言ってくれるまで傍にいてくれた人間は……もっと少なかったんだ」

どちらかといえば、と思い当たったように、

「あの女のような言い様をする人間の方が当たり前だった」

笑顔なのにどうしようもなく空っぽな表情で、千夜は読んだ本をつまらなかったと言い捨てるように淡々と告げた。

今怒鳴りつけたら掻き消えてしまうのではないか、という杞憂を抱いてしまうほどのその無機質な有様に、蒼助は何も言うなと己を制した。

黙って、千夜の吐露することに耳を傾けることにした。

「……そういう連中は、俺が反抗するような仕草や気配を発すると、なぜか物凄く怒り出す。どうして、なんて考えるまでもないさ。奴らには俺は人間としてではなく、自分の退屈を紛らわし欲求を満たす玩具としか映らないんだ。自分が強い、支配する側だと思い込んでる輩にとっては、玩具は玩具らしく弄ばれろって意見なんだろう……。尤も、俺が生きて来た世界には、そういった捕食者と被捕食者の二種類しかいなかっただけという話だが」

生きてきた世界とは、”澱”のことを示しているのだろう、と確認するまでもなく蒼助は黙って静かに察した。

澱。

裏側の更なる奥深き闇の満ちる領域。

そこがどんなものなのかは、迎えられ足を踏み入れて僅か数日にも満たない蒼助には想像もつかない。

だが、千夜が口にした二つの分類を表す言葉がそれがどれほどのものかを十分に表していた。

捕食者。被捕食者。
強者と弱者。
支配する側とされる側。

それだけが全ての律であるその世界で千夜は、どんな風に生きてきたのか。
少なくとも、彼女はそちら側と判断されながらも足掻いていたのだろう。死に物狂いに。
それだけは、わかった。

「別に気にしていなかった。思わせてやるだけならタダだった。それだけじゃ満足しないなら代償を払わせてやった。俺はお前の手におえる玩具じゃないだとわからせてやったまでだ。だが……実際に俺は、玩具だった。俺の身体は、ただ生きた人間を真似て作られた人形みたいなものだった……それと大差は、なかった」

千夜は蒼助の胸においていた手で、その間で遮るシャツを握り締めた。

「……女にも男にもなれる身体、と言えば聞こえはいいかもしれない。だが、真実は……男でも女でもないということだ。どちらにもなれない……見せ掛けばかりの姿を取り繕う肉体だ。形を作るだけなら、人形で十分だろう……どちらも形だけで中身のない俺はそれと同じだ。玩具と言われても、否定しようがない……だろう？」

同意を求めるような語りかけに蒼助は何も言わなかった。
千夜からまだそれが終わりではないという意思を感じたからだ。

「……蒼助。お前が俺に相応しくない、という意味で拒んでいたん

じゃないんだ。とんでもない話だ。相応しくないのは、俺の方だ。
一人前の確立した存在ですらない俺が、お前の傍になんて……って、お前が俺を見て触れるたびに……自分の出来損なった体が憎くてしなかった。昼間のあの女には、嫉妬した。真っ当な紛れもない女としてお前の傍にいれる資格を持ったあの女に、嫉妬して言わなくてもいいことを口走って煽る結果となった。……あの女だけじゃない、久留美や都築……クラスの女子たち……三途や、挙句の果てには朱里にまで……俺もその点ではあの女と変わりない、いやそれ以下かもしれない」

自嘲じみた笑み。
そこから一気に調子が乱れ始める。

「情けないと、思ってくれてもかまわない……自分でもわかってる。でも、いくら宥めても不安が消えてくれない。俺はお前の望むとおりの女であれるのか……お前を満たしてやれるのか、と……考えれば考えるほど、自分の欠けている部分に対する意識が強くなっていく……」

でも、と落ちていく気持ちを無理やり引き上げるように千夜は声を張った。

「……一緒に、いたい」

血を吐くような苦しげな表情で、言った。

「……お前の傍にいたいんだ。女として、お前に愛されたい……だが、それには俺は女としての自分を痛めつけすぎた。……だから」
「――――ストップ」

言葉と同時に手の平が口を覆い、遮った。
俯いていた顔が上がり、蒼助の視線を交わる。

暫しの沈黙が生じ、そして、

「やっぱ、壊れちまってんのかね……自虐ネタ超オンパレード。
よくも、まぁ……そんな続いたもんだ」
「……っぁ」

溜息混じりで述べた言葉に、千夜の瞳が揺れ動き、肩が震えた。
勢いに任せて自分が何を口走っていたのかを再確認したのだろう。
嘔吐するような弱音の雪崩。
必死で隠していた部分を洗いざらい見せてしまったのだ。
ショックなのも当然だ。

瞳は怯えの色に帯びていた。
己に対する失望を恐れる目だ。

そんな表情も出来るのか、と場違いながらも新鮮味を感じた。
捨てないで、と訴えているかのような目に、本当に自分は何も知らなかったのだな、と昼間の己の発言の真実味を再確認した。

出会った頃を考えると、こんな表情や態度をするなんて想像もしていなかった。

あの豪胆にして大胆な立ち振る舞い。
しかし、今ならわかる。
千夜はそうして己の弱音を押し潰して立ち続けていたのだ。
押し潰した弱音――――――本音が痛んで疼くのを堪えながら。

千夜は強い。
これはそれ故の反動なのだろう。
溜め込んだ弱さが、箍が外れたことで留めなく溢れ出している。
そして、箍を外させたのは――――――蒼助自身だった。

「……んな顔すんな。別に、がっかりなんてしてねぇよ」

馬鹿な。
するわけがない。

「お前が無敵超人だなんて、はなっから思ってねぇよ。強制もしない。……ずっと、お前が自分にしてきたことを、今更また言ったりなんてするかよ」

強さは弱さを伴ってこそ成立する。
弱さを押し込めるものが――――――強さなのだから。

「千夜、俺はお前が女であるようになんて望まねぇ。ただ、望むとしたら……俺は」

蒼助は一度そこで区切り、息を吸いそのまま胸に溜めた。
伝わるように、と込めるべきものをこれから言う言葉に込め、

「お前は……お前らしくあればいい、だ。忘れんなよ、俺はそんなお前に骨抜きになったんだからよ」
「……っでも」
「変わりたいなら、変われればいい。そこにお前の気持ちがあるっていうなら俺は何もいわねぇよ。……焦らなくていい、無理しなくていい。少しずつ……少しずつでいい、お前なりの速さで前へ進んでくれりゃ、俺は何もかまわねぇんだ」

だから、無理はするな、と念を押す。
もう、無理をしなくていいのだ、と。

「……っ、……蒼助、オレは」

絞るように目が細まる。
それはその奥からこみ上げてくるものを、今は未だだというように押さえているようだった。

「……変われるか、な……？」

確かめるような問いかけ。
変わりたい、とはっきりと願望に出来ないのは、いまだ千夜が不安定なのだろうと蒼助は察した。
不安を消したい。出来るかどうかもわからないことを願うことを恐れずにいられるようになりたい。そんな切望が込められた問いかけに、蒼助が返す答えは――――――返すべき答えは決まっていた。

「……こんな俺にだって出来たんだ――――――お前なら、わけねぇことだ」

返した言葉に対しその瞬間に何を思ったのか、見開いた千夜の瞳は一気に湧き出た水にのまれた。

「……むかし、同じようなことを言われたよ。お前なら、出来ると」

許容できる量を超えた水は水滴となり溢れる。
流れる涙をそのままにしながら、

「俺はこんな自分が嫌いだ。憎くすらある。他人とは違いすぎる自分が、誰だって他とは違うのは当然であることがわかっていても……それで、自分の未完成さを甘んじることは出来なかった。変わることが出来なかった……自分が、俺は嫌いで仕方なかった」

そこから、蒼助は黙って聞くことに徹した。

ただ、弱音を吐露しているだけではない、とわかっていた。

あえて口にして、千夜はそれと向き合おうとしている。

忌まわしさから押し潰してきたものを、乗り越える為に。

「でも、人間はもとから未完成だと……完成されることはないけれど、いくらでも変わることが出来る存在だって言われたことがある。そしてから、こんなことも言われた。いつか、そんな未完成な自分を好きになることも出来るって……だから、俺は……」

一度、止まる。

迷いを振り切るかのように、唇を一度かみ締める仕草を蒼助は見た。

そして、

「……もう、嫌うのを、責め続けるのを止めたい。そうしろ、といってくれた人にはもう見せることができなくなったけど……それでも、あの人と約束したから。ずっと、あの人がいなくなったことを理由に諦めていた約束を……無意味にしない為にも、俺自身の為にも……俺を好きだと言ってくれたお前の為にも。……俺は、未完成にも程があるこんな自分を……好きになりたい」

息を殺したかのような掠れた声で、付け加えられる。

「変わりたいんだっ……」

ずっと、願うことすら恐れていた言葉を吐き出したせいか、力尽きたように強くシャツを握っていた両手がするりとその力を失くす。

「……俺に抱いてほしいってのは、そういうことなのか？」

「……ああ」

一瞬、千夜はそれを頷くを躊躇した様子を見せたが、誤魔化そうとはせず俯いたまま小さく答えた。

しかし、その直後、

「――――――……なんて、な」

垂れ下がる前髪に覆い隠されていた顔が上がると、そこには笑顔。先程までの泣き顔も涙も、全て上から塗り固めてしまったような不自然な笑顔が湛えられていた。

「ははっ……何を言っているんだろうな、俺は。酷いこと、言ってるのに……」

固められた仮面の下から溢れ出る涙。

笑顔のまま、千夜は泣く。

「どうしようもない、な……自分の力じゃどうすればいいかわからないからって、お前を利用しようなんて、虫のいいこと……言って。……でも、俺……他にどうすればいいかなんて、わからな……い」

仮面が剥がれるように割れた。

見ている蒼助にそう思わせるように、千夜は再び泣き崩れた。

「ごめん、こんな卑怯な奴で……卑怯で、ずるいこと……言って……」

「……――――――――――んなこたぁ、ねぇさ」

肩に手を置く。

しかし、それは慰めの手ではなく、

「っ……――――――――ぁ」

蒼助の身体はむくりと起きたが、それにだけに留まらない。

置かれていた肩の手は、起きる上半身の動きに従い、力を込めて――――千夜を押し倒した。

無駄のない手際の良さとあっという間の形勢の逆転に、目を見開いて何が起こったのかと呆然とする千夜を見下ろしながら、

「その気持ちを更に利用して……耐え難いこの衝動に身ぃ任せちまおうって魂胆でいる俺に比べたら、カワイイもんだぜ」

「そ……」

何か言おうとする口を塞ぐ。

塞いだ奥で言葉にならず吐息に混じって消えるのを感じた。

唇だけ離し、額をくっつけたままゼロに近い距離で、

「……いいぜ、それで。俺は一向に構わない。……むしろ、そういうお願い事は大歓迎」

「……でも」

「お前がしようとしてることは、少なくとも俺がしてた卑怯なこととは根本的に違うから……安心しろ、お前は卑怯じゃない」

利用。
卑怯。
狡い。

そんな言葉が当てはまるのは千夜ではない。
千夜に出会うまでの、蒼助自身のことだった。
赴くままに欲望を女たちを用いて発散し、前へ進めないのを進む為の理由がないからだ、ととって付けて。
何一つ、千夜には似つかわしくない語群。
その言葉の意味もきっとわかっていない無垢な千夜。、
それに対して、自分はどうだろう、と蒼助は自嘲する。

「お前は、ずるくなんかねぇよ」

ずるいのは、自分だ。弱りきった彼女にとことん付け入ってしまえばいい、という考えにあっさり組してしまう、こんな自分自身だ。
泣きじゃくりながら訴える千夜を見ていてグッときていたなんてあたり、自分は本当に歪みきっているらしい。どうしようもなく。

それでも。
それでも、千夜が好きだという事実は歪んだ欲望が生み出した幻想ではない。
めちゃくちゃに汚したいという欲望と共に、何よりも大事にしてやりたいと思う純情だって存在していた。
五分五分で両者が存在する危うい均衡が、不思議と保たれ続けている。

「何やっても、中途半端だよな……ほんと」
「……なにが？」

「いや、こっちの話」

しょうのない話だ。

だが、中途半端には中途半端の意地がある。

自分なりに、優しくしていこうと思う。

精一杯、愛していこう、と思った。

「千夜はずるくなんかない。ずるいのは、お前のそういう気持ちわかってて付け入る俺だ。全部、俺のせいだ。そういうことにしちまえ」

「……」

卑怯上等、と蒼助はふてぶてしく内心でそう吐き出す。

それで目の前の存在が自分を傷つけずに済むなら、寧ろ蔑みの言葉は誇らしい勲章ですらあった。

「な？」

「……うん」

力が抜けたのか、口調が幼くなった。

無防備を感じさせるそれが、蒼助の欲望を抑えていた最後の命綱を断った。

抑制から開放された欲望は、宿主に行動を促す。

「んっ……」

降らした口付けに、千夜は抵抗なく受身をとった。

温さを伴った柔らかい触感が、蒼助の興奮を煽る。

キス、という行為でこんな風になるのは初めてだった。

今までただの行為の先に至るための手段としてしか捉えていなか

った蒼助には、女が強請りこだわる理由などさっぱりわからなかった。手っ取り早く欲を発散したい蒼助からしてみれば、焦らされるだけの余分ですらあった。

しかし、千夜はそんな蒼助の理念を覆した。

相手が千夜だというだけ自分がこんな風になるとは、と自身の単純さは正直ショックだったが、この際どうでもいいことだ。

もっともっと、と訴える本能に身を任せ、角度を変えるなど、啄むなど繰り返す。

「っ……ふ」

時折漏れる声が蒼助を満たすどころか飢えさせる。

足りない。

もっと、深く。

赴くままに重なりを強くし、奥へと――――――

「っん……――――――ぐむっ！？」

喘ぎは行動の進行と共に、突然と呻きに変わった。

力の抜けきっていた千夜の身体には、不必要なほどの力みが舞い戻る。

行為に夢中な蒼助は構うことなく、そのまま舌を奥へ進めようとした。

そして、その奥に潜んでいたものを捕らえたかと思ったその時、

「ん、むっ……っ、っ、っっうわあああああああっ！！！！」

ガッと、顎に手がかかったと同時に深く繋がっていたところを無理矢理引き剥がされる。
顎に食い込む程の力の入り様と、突然の千夜の行動に顔を顰める蒼助に息をつかせず――――――追撃が襲う。

「うがっっ！？」

顎を掴まれたまま、固定したその目標目掛けて繰り出された拳。
掌ではない。握り拳。
それが蒼助の顎を下から容赦も手加減もなく打ち上げた。

混乱しているとは思えないほど、的確かつ上手いこと入った痛恨の一撃だった。
直撃の瞬間、脳の揺れが蒼助の意識を一瞬にして奪うほどの。
そのまま仰け反った体は反転。
引っくり返って、ソファ上に倒れた。

「っはぁ、はぁ……ぁ」

荒い息遣いを繰り返しているうちに、千夜の思考が正常な機能を取り戻す。
そして、覆いかぶさっていたはずの蒼助が仰向けに倒れているのを直視して、自身が何をやらかしたのを理解する。

「あ、蒼助っ……だい、じょ」

言いかけて、止まる。
視界に入ったものはそれだけのものだった。
固まるには、十分だった。

「ダイジョーブぅ……？」

低い声。
先程までは意地悪げながらも優しかった声が、それとは似ても似つかないほどトーンを下げて千夜の鼓膜を打つ。
ゆらり、と起き上がる蒼助。
その目つき。形相。雰囲気。
どれをとっても、千夜に逃げたいという衝動を生ませる要素には違いなかった。

「ど、の、つ、ら」
「んぐっ」

身を引こうとした瞬間に、千夜の顎は先程蒼助にしたように一気に距離を詰めた蒼助が伸ばした手によって掴まれ、行動を阻止される。
そして、

「下げてそんなことといえるのかねぇぇ……この口は」
「――――――っっ」

人が怒っているのを見て、怖いと思ったのは千夜の人生至上でこれが初めてのことだった。
掴んだ顎をぐにぐにを弄びながら蒼助は、

「これは、アレか？　優しくされるよりも、酷くされるのがいいっ

てことが言いたかったのか？　ん？」

顔は笑っている。

しかし、案の定目は笑っていない。少しも。

言動と相まって、千夜の目には恐ろしく不気味に映った。

得体の知れない恐怖に襲われつつも、誤解をとかなくてはならない、と慌てて弁解を試みる。

「ま、待て。話を聞けっ！」

「……いいぜ、待ってやる。聞いてやる。――――で、終わったら犯す」

「待てというにっ！」

聞く耳なしな蒼助の対応に千夜は必死になった。

その様子で、どうやら本気でワケがあるらしい、とようやく少し冷静になってきた思考で判断した蒼助は、息を吐くと至近距離まで詰めていた間隔を少し開け、乗り上げていた身体を落ち着かせる。

胡坐をかいて座る蒼助を見て、とりあえずのところは抑えてくれたのを察し、千夜は一息ついた。

「で？」

早く言え、という意を含んだ促しに、千夜はやや尻込みしつつも、

「……あ……その、さっきの……は、何だ？」

「は？」

寧ろその質問こそ何なんだ、という気持ちで蒼助の思考が占められる。

まだ何もしていない。

敢てしたと含むなら、あれはキスだ。
まだ、キスしかしていない。
聞くまでもないこと。

「……何って……キスだろ」

それ以外の他に何だってんだ、と続けようとしたら、

「嘘をつくなっ！」

思いがけない言葉が返ってきた。
何処を如何して嘘をついたというのか、ときょとんと目を見開いた視線で問う。

「あ……ぅ」

とぼけているととったのか千夜は怒鳴り付けようと目尻を吊り上げたが、それも一瞬のことで、何故か顔を赤くして目を逸らしながら、

「と、途中から……変なこと、しただろうが」

だから変なことって何だ、と言いかけたところに蒼助の勘が閃く。
まさか、とジトリと嫌な汗が滲ませ、

「オイ……ディープキスってのとフレンチキスってどういう意味か知ってるか？　もしくは聞いたことあるか？」
「……ぇ、なんだって？」

ぱちくり。

そんな反応を見た蒼助は眩暈に襲われる。

ジーザス。
性の神様。
いるなら、迷えるこの若者の言葉に答えてくれ。

蒼助は胸いっぱいの不満と哀しみを声無き慟哭に変えた。

神よ。
これは俺に対する皮肉か何かなのか。

【九拾弐】　彼女の独白　（後書き）

ご無沙汰です。
気がつけば七月になっていたので、こりゃいかんと更新して参上いたしました、どーも天海です。

しばらくこちらのサイトには足を踏み入れてなかったのですが、久々にきてみればなにやら年齢制限云々で問題が挙がっている模様。
この鮮血もいずれは……というかそういう傾向目前ですので、無関係ではないようです。
天海は、１５禁程度に済まそうと考えてはいますが、悪魔で天海の感覚と価値観なので人様からどう見られるのかどうかというのを考慮すると、難しいです。

対策はあります。
１８禁シーンをまるまる一話と収め、隔離。その後、ノクターンにアップ。
もしくは、己の腕を信じてやることやるけど１５禁程度に表現だけは抑えてみせる。
１５禁。作者は、愛読書「終わりのクロニクル」のアレがそうだと思っているのですが、どうなんだろう（挿絵はともかく）

まぁ、何はともわれ書いてみます。
書いて検討した結果としてどちらかの選択となるでしょう。
エロを省く、という選択肢を取り入れられないあたり、自分という人間を再確認するこの頃……（遠い目

［九拾参］　価値観の相違　（前書き）

同じ事を考えているなんてのは、錯覚だ

【九拾参】　価値観の相違

「――――――蒼助、俺を縛れ」

「……は？」

何度目になるかわからない爆弾投下に、もはや神経は衝撃を感じることもなくなった。

◆◆◆◆◆◆

セックスにこんなに手間取ることなど、蒼助の過去の経験上になかった。

相手が既に既婚者であると、後になって露見された時もこんな風に躊躇したり翻弄されたりはしなかった。

ましてや、行為を目前して頭が痛いなどと思うことなんて。

「……よし、来いっ」

「……」

意気込んだ声に、不覚にも蒼助は一瞬意識が遠くに飛ばしかけた。
別の意味で解き放たれようとした意識の端っこを掴んで引き戻し、自分の真下の現実を再度直視する。

惚れた女。
愛しい、と初めて心の底から感じた存在。
この先を共に生きていくなら、もうこの女以外にありえないとまで思った。
その相手を、蒼助は念願の成就を描いたように組み敷いている。

しかし、

「……はぁ」

気づかれないように、蒼助は小さく息を吐いた。
何でこうなったんだっけな、とここに至るまでの経緯を思いだしながら――――。

◆◆◆◆◆◆

蒼助は怒りも発情も忘れて、ただ目の前の存在からぶつけられた衝撃に打ち震えた。
冗談だろ、と口走りそうな舌を巻き止め、別の言葉をクッションとして紡いだ。

「あのさ、念のために聞くが……保健体育は、習ったよな？」
「……？　……言っている事の意味がわからない」
「だぁから……セッ……っ……性交渉云々の内容は知ってるかって話だ」

何でわざわざ言い直したのかと、蒼助は後から来る気恥ずかしさに意味もなく首を後ろを掻きながら、反応を恐る恐る待つ。

「それくらい知っている。男が……その、女の……に」
「わかった、皆まで言うな」

無知ではないと証明しようとあからさまな発言に及ぼうとする千夜を押しとどめる。
顔を赤らめて無理に言おうとする千夜にもっと卑猥な言葉を口走らせたい――――なんて、考えたりはしなかった。無いったら、無い。

「そこまで、じゃないか……んじゃぁ……」
「さっきから一体どうしたんだ、蒼助」

先程から質問責めの置かれる自分の立場に疑問を抱いたのだろう。
千夜は心底わからない、という顔で蒼助に尋ねてきた。

「あのな……抱いて、なんてカワイイ誘い文句言われたところで据え膳いただこうとしたら、その相手がキスの一つ二つも知らんという衝撃発言ぶちまけられた男の心情になってみろ。……どうしてくれるよ、この複雑な男心」

萎えるというか、気が抜けたというか。
なんとも次の行動に移りにくい心境の真っ只中に、蒼助は一人孤

独に立ち尽くしている状態だ。

「……だから、キスぐらい知ってる。したこともある」

小馬鹿にされている、と蒼助の言動をそのように受け取った千夜はムスッと眉間に皺を寄せた。

同時に尖った唇を見た蒼助は、グッと勢いの落ちた何かが再び迫り上げてくるのを感じた。なんとも現金さだ。

「初級は、だろ。中級、上級の本格的なのはココを使うんだよ。ココを」

講義する様に舌をひらつかせると、千夜はあからさまに顔を歪めた。

「え……」

「おい、嫌そうな顔すんなコラ」

他人の舌が口の中に侵入する、と行為を改めて深々と解釈すると気持ちはわからなくもないが、こんなところで躓いていたらちっとも先に進めない。

だって、と蚊が鳴くような細い声で千夜が反論する。

「……きもち、わるい」

「……」

「きもちわるかった」

繰り返され、蒼助は少しへこみそうになった。

仮にも想いを交わした相手との行為を不快などと言われてはさすがに傷つく。

「……俺は、気持ちよかったんだけど」
「っ……」

拗ねるように告げると、伏せられていた千夜の目が見開く。
そして、ボッと火がついたように赤くなった。
それを見て、蒼助は少しだけ落ちかけた気分を上昇させた。

「しっかし、AVを頻繁に見てる奴がベロチューも知らないっていうのには、納得がいかねぇ。……お兄さん、怒らないからホントのこと言ってみ？」
「待て、何で俺が見てることを前提にしている。俺じゃない、借りてくるのも鑑賞するのも観賞するのも黒蘭の馬鹿だ。……返すのはいつも俺だが」
「……正直に言ってみ」
「……何回か、見た。不本意で強制的に」

長い間を置き、それでいて尚忌々しげに床へ吐き捨てるように千夜は白状した。
その様子からそれが余程不快な思い出となっているのは、聞くまでもなくわかることだった。
汚物を無理やり飲み下させられたような苦々しい表情に、蒼助はやや慎重な姿勢に入って事情聴取を進めようと試みる。

「なら、その中でシてたの見たんじゃねぇ？」
「……どの中でも、そんなことしてなかった」

その返答に、そんなにハードなイロモノばかり厳選していたのだろうか、と訝しむ。

そこへ、

「女が……」

「女が？」

「黒皮の露出の高い服着て、鞭とか蝋燭で拘束した男をいたぶって高笑いする女。始まりから終わりまで全部それだけ」

「……見た奴全部？」

「全部」

「あー、そ……わかった」

事情聴取を打ち切り、蒼助は嘆息する。

嫌がらせじみた悪戯の中に徹底した『教育』を仕込んだ黒蘭に。

性への嫌悪。

それは好奇心という誘惑を押さえつけ、持ち主に防衛本能を促す――――身につけるには最高の鎧だ。間違った性知識を植えつけ、尚それによって性行為への嫌悪感を抱かせればある種の予防にもなる。

『調教』という言葉が似合う所業だ、と蒼助は黒蘭の不敵かつ不穏な笑みを湛えるシルエットを脳裏に思い浮かべ、渇いた笑いを洩らす。

「……感謝すりゃいいんだか、恨むべきなんだか」

「蒼助？」

無意識の呟きを聞き拾った千夜の怪訝な視線が見上げてくるのに、何でもないと返す。

しかし、千夜は蒼助のその言葉をそのまま受け入れはしなかった。

「でも、蒼助……困ってる」

「ぇ……」
「ごめん……扱いにくくて」
俯く顔。
しまった、と内心で舌打ちした蒼助は、落ち込む千夜に弁解をしようと試みる。
だが、その前に、
「……でも、俺は……そういう風にしか思ってなかった。そんなものしかこの目で見てこなかった」
「……千夜？」
先程とは何かが違うその重い表情に、蒼助は思考を切り替えた。
顔に滲んでいるのは嫌悪感ともまた異なる、何かだ。
「……ここではひた隠しにされる歪みは、俺のいた場所では恥らうこともなく晒されていた。暴力も、蹂躙も、支配も。セックスも……その形の一つだった」
「……」
「こっちでは、それが愛の営みとしてする行為なんだって知って……最初すごく驚いた。理解不能だって」
それから、千夜は眉尻を下げて困ったように笑った。
「さっきは気持ち悪いなんて言ってごめんな。突然だったから驚いただけなんだ……」
だから、と千夜は縋るように細めた目で見上げながら、
「気遣わなくていい。好きにしていいから……お前はどうなった

ってあいつらとは……他のやつらとは違う。どんなに乱暴に扱ったって、無理を強いられても……蒼助は、違うと思うんだ」

そこで一度言葉は途切れる。

ソファに付けていた手を伸ばすと、蒼助の胸板に辿り着く。

続くように、こつりと額が押し付けられる。

「改めて言う……好きだ」

再び告げられる告白。捲くし立てるような先刻のそれとは異なる落ち着いた口調でかみ締めるような吐露に、蒼助は無意識のうちに呼吸を止めた。

「初めて会った時から好きだった。知れば知るほど、この気持ちはどんどん膨らんでいった。他人にどうこうされるのは嫌いだ。でも今は……それすらも受容していい。……蒼助……――――お前になら」

その言葉に、ぞくり、と身体の奥で何かが震える。

まるで性感帯を刺激されるような快感にも似た感覚に、蒼助は酒に酔ったような意識で恍惚の境地に立たされた。

「約束を、守ってるなら……何をしたっていいから」

「――――っ」

ごくり、と渇いた喉を口の中で溜まった唾液がどろりと下る。

渇感と欲望が入り混じった感覚に突き動かされそうな蒼助にとどめを刺すかの如く、千夜はゆるゆると顔を上げる。

泣いたせいで赤らんだ目には、名残りのような潤みが健在してい

た。
薄く開いた唇がやけに目に付く。
壮絶な色香を発する存在となった目下の千夜に、蒼助を戒める理性の鎖がいよいよ切れようとする。
「蒼助……」
胸に当てられた千夜の手が、タンクトップをキュッと掴んで握る。
何かを言おうとしている、という気配をそこから感じた蒼助は、腰に手を回したくて疼く手を何とか押し留め、堪える。
まっすぐに見つめて来る千夜の視線とかち合い、その瞳の奥で揺らめく光から目を離せなくなる。
その目の下で、動き出した唇が紡ぎ出したのは――――
「――――俺を、縛れ」

とりあえず「うん」と頷かない程度の理性が残っていて良かった
と、蒼助があとで思う事になる瞬間だった。

［九拾参］　価値観の相違　（後書き）

本当ならもっと長くなる予定で、しかもこれが背景ブラックの例の回になるはずだったのですが、ギュウギュウすぎて読む側に苦痛があるくらい長くなるみたいだったので短くなりました。
そんなわけで次回は何度目かの宣言がようやく果たされます。待たせました、皆さん（本当にな
とりあえずは次回のは１５禁。
表ではそれが限界であると悟りました。
終盤の方である本懐遂げる回は、とりあえず話を繋げる為に必要最低限の表現に抑えて、ノクターンの方で全力モードを別でアップしようと思います。もう、隠語とか直接表現とか音とかバンバン使うぜ（笑）

うまくいけば、明日の夜にはアップする予定です。

［九拾四］　発熱の対象（前書き）

わかっていた
それでも触れられずにはいられなかったのは、きっと――

【九拾四】　発熱の対象

思考を止めるのには十分な攻撃力を持っていた発言の直後、突然着ているハイネックを脱ぎ出した。

我に返って止めるよりも前に、千夜がそのハイネックを蒼助に押し付けて来て、

「これでやってくれ」

と、手錠をかけろとでもいうように両手を差し出してきた。

立て続けに襲う奇言と奇行になかなか正常な機能を取り戻さない思考回路で、なんとか己のすべき行動を弾き出し、その意図を問い出す。

返って来た返答は、また反射的に殴ってしまいそうだから、という至極可愛らしく健気なものだったが、千夜が自分なりに懸命に蒼助に応えようとした解決案は、寧ろ蒼助を貶める代物だった。

正常を取り戻した理性に従った蒼助は、その要求の却下を下したが、それでも千夜は強く食い下がった。

「お前をもう傷つけたくない……頼む」

悪魔で真剣な千夜に懇願され、蒼助はそれ以上強く拒否できなかった。

……いや、しろよ俺。妥協していい提案じゃねぇって。

少し前の折れてしまった自分にツッコむが、時は既に遅し。

結果として、グルグルに拘束された両手首を胸の下においた千夜が何やら鬼気迫る険しい顔で来いという姿勢になって、蒼助の下に

いる。

上半身は下着のみだというのに、色気を欠片も感じないと思う自分は間違っていないだろう、と蒼助は妙に冷静な思考で思った。

さっきまでのイイ雰囲気は何処へ飛んで消えてしまったのか。

……違う。なんか、違うだろ。

目の前の現実と比較すべく、蒼助は己の過去の経験を振り返った。

来てぇん、と誘われたことは何度かある。同じことが目の前で起きているのだろう。

だが、これはどうなのだ、と内心で異議を申し立てる。

少なくとも眉間に皺をびちり刻んで、来いと気合こもった声で言われたのは、これが初めての経験となるだろう。

……来いって言われても。

自分の下に敷かれた身体は、緊張していることが目で余るほど確認できる。

ガチガチに凝り固まった身体に、蒼助は正直のところどう手を出していいかわからず困っていた。

きつくしてくれ、と要望を受けた拘束はしっかりと役割を果たしており、千夜自身がどれだけ暴れようと外れないようにした（正直言われるがままにした自分も意外にノッているのではないかと思うと、尚のことやるせない）。

……さて、どうする。

一応、これは準備は整った状況なのだろう。

そうに違いはないのだと思う。

しかし、

……止めるか？

蒼助は完全に萎えていた。

言い換えれば、調子が完全に乱されしまった。

情事において譲れない点があるとすれば、主導権が自分の手にあるということ。これは絶対だった。

傍から見れば、これは条件が適っているという状況に思えるだろう。

しかし、実際は千夜の予想を上回る行動と発言によって、全く正反対のことになっている。おまけに何度も中断されて蒼助の勢いは落ちている。

やっぱりそう都合よくいかないよなぁ、と蒼助はやめようと思えば止めることができる。

しかし、そうしてしまうとまた別の問題が発生する。

身体にコンプレックスのある千夜は、拒否されれば傷つくだろう。

そもそも、今回のコレはそんな劣等感を解消してやる為の目的もあるのだ。

……やりにくい、か。

そう思った矢先に、ごめんと謝った千夜の顔が脳裏を過ぎり、慌てて心の中で呟いた想いを取り消す。

しかし、否定できない部分があるのもまた事実だった。

決して千夜が面倒なのではない。

問題は蒼助自身にもあった。

今まで、抱く時にも女を気遣ったことはない。

大事に思ったこともない。
表面上は多少そういう風を装って取り繕ったことはあるが、心の底の本性は真逆な状態にあった。
いつだって自分本位。思うがままに抱いていた。
そうしても大丈夫そうな女を選び、したいようにしていた。

だから正直、参っていた。
思った以上に千夜が抱いている傷が深刻で、彼女と自分は生きてきた軌跡とそうさせた世界はかけ離れていたと知った。

セックスを暴力と蹂躙として常識に思っていた千夜。
はたや蒼助は性欲の発散としてなんとも思わずに受け止めていた。

お互いに行為を本来の目的からはズレた歪んだ認識をしているが、なんの疑問を持たずに生きていた。いつかそれが問題となって立ちふさがることになるなんて思ってもいなかったというのに。

そして、ようやく気づいた。
いざ大事に抱きたいと思う相手を前にしても、そもそも自分はそんな風に扱う方法したこともなければ、知りもしない。
唯一幸いなのは、赴くがままに暴走するほど理性が失われていないことくらいか。

……まぁ、悪いことじゃないだろ。今までと違うってのは。

他とは違う。
それは相手が千夜であるからこそである、と。
これは、特別なことで、嬉しく思うべきことなのだろう。
そう思うと、らしくもなくたどたどしい今の気分も悪くない、と蒼助は感じた。

意識を改めて、蒼助は千夜の身体を眺めた。
衣服を脱いでブラジャーだけとなった上半身の露見した肌は、何処までも白かった。
その上に散らばる一部の黒い糸のような髪との組み合わせが、何処か扇情的な光景に仕立て上げている。

……白い肌と黒髪、なんかエロいかも。

髪が被さって見えない首筋に、引き込まれるように手を伸ばす。
はらり、と除けて隠れたそこに指を這わす。

「――――――っ」

その僅かな動きと共に千夜の身体に震えが起きる。
敏感な部分に触れたから当然――――――と、蒼助は受け止めなかった。
今までじっと見つめて離さなかった目がギュッと絞られてしまう。
唇は血が出るのはないかというほど強くかみ締められている。

違和感。蒼助の目には、それがほのめいて見えた。

「……ちっ」

舌打ちと共にそこから手を退かせて、蒼助は己のワイシャツに手をかけた。
ボタンを引きちぎるような荒々しい手つきで、それを乱暴に床の上に脱ぎ捨てると、

「……え、ぁ……蒼助、何を」

自らがそうしたはず千夜の両手首の拘束を解き始めた。
戸惑う千夜に構うことなく外し終えると、それを己の上着と同じように放り捨てる。
そして、両手首をひとまとめにして掴み、強く引いた。

「あっ」

意図せぬ蒼助の動きに対応できず、力の向く先に千夜の上半身は引き起こされた。
鼻先が蒼助の胸を掠るところまで近づくと、そのまま背中に手がまわり、押し付けられる。

「……ぇ？」

抱きすくめられた千夜は置かれた状況を理解できないと主張するように、小さく喘いだ。
冷静な蒼助の声がそれに答える。

「初心者がいきなり上級向けなプレイに飛び込むんじゃねぇよ。身の丈に合わせると、お前はこっからだ」
「何を言って……っ」

言いかける千夜を尻目に、蒼助は流れる黒髪の隙間を縫うように五指を滑り込ませてその項に触れる。
途端、

「……うぁっっ」

びくん、と身体が大きく震える。

先程よりあからさまに出た反応に、蒼助は溜息を吐いた。

「……ここまで来たら、もう言えよ」

「……」

「……触られるの、本当はダメなんだろ？」

問いに対し、息づまるような微かな呼吸の音。

それが返事代わりなのだと蒼助は解釈し、同時に確信を得た。

「こうしてるのも結構辛い？」

「……平気だ」

「ウソ。冷や汗、滲んでる」

額にかかった前髪に触れると、それは少し湿りに帯びていた。

胸に押し付けた頭部を固定し、宥めるようにチュッと旋毛に軽くキスを落とす。

「言って」

身体から少しだけ力が抜けたのを見計らってから放った促しに、千夜はひどく力のない声で紡ぎ出した。

「……これでも、昔よりはよくなったんだ。服越しでもダメだった、から」

「首が一番ダメなのか？」

「……ああ。あまり触られることのないところだから、忘れてた」

はぁ、と心底うんざりとした息を蒼助の腕の中で千夜は洩らした。

「信じられない。……何で、今更……こんな時に……っ、ごめん…

…蒼助」
「別に怒っちゃいねぇよ。ただ……まぁ」
理由を聞かせてくれたら嬉しいんだけどな、と質問を仄めかす。
千夜は胸に額を押し当てたまま、少し沈黙した。
返事が返ってこないことをだんまりを決め込んだか、と受け取り、
少し不安と寂しさを感じていると、
「……昔、絞められたんだ」
「絞められた？」
「こうやって、だよ」
わかりやすく伝えようとしたのか、千夜は自身のそれよりも一回りも太い蒼助の首に両手をかける真似をした。
そっと絡めるだけの緩い束縛を与えられた蒼助は顔を強張らせた。
千夜の青白いまでの細い首を見る。
このか細い首を絞めた輩がいたというのか、という憤りを胸に燃やして。
「顔、怖いぞ」
「……他人事みたいに言ってんじゃねぇよ」
そういうと、何がおかしいのか千夜がくすりと笑う。
「言いたくもなる。お前が自分のことみたいに怒った顔をするから」
「自分のことでも、こんな風におもわねぇよ」
「……ありがとう」
両手を蒼助の首から離し、千夜は視線を下げた。

「別に……殺されかけたってわけじゃない」
「意味わかんねぇぞ」
「……そそる、そうだ」
「あ？」

繋がっているのか微妙な会話に加速をかけるような千夜の台詞に、蒼助は頭上に疑問符を浮かべる心情で声を零す。

「……俺が苦しみ悶え、痛みにもがいて縋ろうとしてくる姿は……たまらない、と。昔、俺の首を絞めてきた男は笑いながら言ったよ。跪いて、許しを乞う姿を見せてみろ、なんて……三流悪党の陳腐な台詞をあとにつけてな」
「――――――」

聴いた瞬間に、蒼助は強制的に心を停止させた。
電源を切り、心を無にさせる。理性の関わらない、本能的な動きだった。
そうせざるなかった。
そうせずにはいられなかった。
でないと、この先を聞く上で抑えようにまでに昂ぶり荒れ狂うであろう自身の感情が、何をしでかすかわからなかったから。

「でもな……俺が怖かったのは、組み敷かれて首を絞められたことでも、生かさず殺さずの加減で与えられ続けた苦痛でもなかったんだよ。俺が怖かったのは……」
「……？」

言葉が一度途切れ、その続きを代弁するように伸ばされた手が、蒼助の頬に触れた。

「……手、だよ。……奴の手が、怖かった」
「それは……首を絞めてからじゃ」
言葉を最後まで聞くことも泣く、千夜の首が横に振られた。
そして、間違いを正す正解を口にする。
「……冷たかったんだ。人間の体温はこんなに温かいはずなのに……俺に跨って首を絞める男の手は、死人のそれにように……何処までも冷え切っていた。永遠を生きる中で、体温を失った神々よりも、冷たかった」
触れる先に温もりがあることを確かめるように、何度も蒼助の頬を千夜の指先が滑る。
「あれは……心の温度なんだと思う。よく言うだろ……手の冷たい人は、心が温かいとか。あれは大嘘だ。心の冷たい奴は、手だって冷たいんだ。それからしばらくは、酷かった。……誰に触れられるのも、我慢ならなかった。特に、ここは」
蒼助の頬から離れた指が、千夜の喉を爪先で掻いた。
「もう随分前のことなのに、まだあの感触消えてなかったなんて……な」
労わるような仕草で五指が首を包む。
何故か、その動作が蒼助の癇に障った。
千夜本人にとっては非常に不本意なことだろうが、まるで首にこびり付いて離れない見知らぬ過去の男の痕を愛でているように見えた。
強制的に停止させた感情が自動的に復旧する。

復活した感情が促した行動は、

「……千夜、こっち向け」

促すように、まずは首にあてていた手を掴み、そこから退かした。
突然の蒼助の行動に、千夜は僅かに目を見開いたが、それはこれから起こる出来事のほんの前触れにすぎなかった。

「ちゃんと、見ろ」
「っ……蒼助？」

顎に手をかけられて、半ば強引に上を向かされる千夜。
上げた視線の先にはやや硬くなった蒼助の顔。
かち合った目は、何を考えているか測りかねる眼差しを放っていた。

「ちゃんと、俺を見とけよ」

要求の意味が読めず、目を瞬かせていると、蒼助の顔がゆっくりと近づき始める。
それが何を意図しているのかを察した千夜は反射的に身を引こうとするが、顎から後頭部に回った手がそれを許さなかった。
近づくにつれて緊張が高まり、目が自然と視界を閉ざそうとする。

「閉じるな」

一度動きを止めた蒼助が強い口調で命じる。
びくん、と身体を小さく震わせ、千夜はとっさに固まった。
その言葉と声色に、逆らえない響きを感じたのだった。
それを見て、蒼助は満足げに口端を吊り上げ、

「良い子」
「――――――っ」

後頭部の手が撫でるようにクシャリと動くのを感じると同時に、千夜の目と鼻の先にあった蒼助の顔が急に降下した。
訪れるであろう感触を受け止めたのは、予想していた唇ではなく――――――先程、触れられた際に拒絶を覚えたはずの首だった。
触れるだけの接触。
しかし、蒼助の行動はそこからだった。

「……なにして……っ」

予想だにしなかった行動に千夜が抵抗をしようとしたが、手を掴んでいたもう一方の腕に腰を捕らえられ、首では触れる部分が薄く食むように啄まれる。
そのくすぐるようなささやかな刺激に、千夜は身動きとれない状態では身を竦ませるくらいの反応しかできなかった。
ちゅっ、ちゅっ、と。首に埋められた蒼助の頭が動くたびに柔らかい感触との接触が首にて起こる。
蒼助はしばらくの間、その白い肌の薄いながらも柔い触感との触れ合いと、そこに充満する千夜の匂いを楽しんだ。
どうすることできずにいる千夜は、その感触と首筋の蒼助の髪が当たってさわさわする感覚に唇をぎゅっと結んで耐えた。
しかし、そこで蒼助の行動に僅かな進展が起こる。

「……っ、んっ！」

思わず千夜は閉じた口から声が洩らした。
今度は唇が押し当てられていたところを吸われたのだ。

まるでひねられるような感覚。今まで一度とも経験したことはなかった。

「ん……ん……っ」

立て続けに襲う奇妙な感覚に、千夜は身を硬直させる。

さっき舌を入れるという同じく経験のないキスをしてきた蒼助は、お構いなしで首筋を吸い上げた。

千夜が知らないことを、蒼助は何でも知っている。落ちてくるそんな実感に、千夜は少し胸が苦しいと感じた。

「っぁ……っっ！」

次の瞬間、暗くなりかけた千夜の心中を塗り替えるような鋭い痛みが走る。

噛まれたのか、と千夜は一瞬思ったが刺さるような痛みとはまた違うものだった。

不可解に思っている千夜に理解する暇も与えずに、今度はぬるり、と湿ったものが痛みの上に塗り重なるように這った。

それは上へと這い上がり、首から顎へ、そして右頬にまでぬるりぬるりと移動した。

熱い、と感じて思わず固めを閉じたそれは、顔まで来てようやく蒼助の舌だとわかった。

目元まで来ると、ぴちゃ、と何処か粘着質な水音を立てて舌が離れる。

首筋から顔にかけてにぬるついた後味を残し、離れた舌は蒼助の口端をちろりと舐めてその口内に戻って行った。

その仕草は、千夜の目に蒼助を別人のように見せた。

決して離れたといえるとは言い難い、然程の距離のない体勢で二人は見つめ合って動かなかった。

千夜に関しては、放心に近い心境で”動けない”というのが正しかったが。

「……どうだった？」

「……ぇ」

顔を合わせて初めて蒼助が発した言葉に、千夜はそこでようやく我に返ったが、出たのは返事とは言えない恍けた声の漏れだった。

しかし、気にする事なく蒼助は再び尋ねる。

「……俺は、冷たかった？」

「っは！？」

問いに何が含まれているかを理解した途端、千夜は思わず大声をあげた。近い距離にいた蒼助は僅かに顔を顰めた。

からかっているのか、と抗議をあげることすら出来ず、絶句していると、

「……もう一回か？」

なんてとんでもないことを言い出す。

冗談じゃない、と千夜は大いに焦った。

「ま、まだ何も言ってないだろっっ！！」

「じゃぁ、返事」

早くしろよ、といつでも再開出来る体勢に入りながら蒼助は促した。

イニシアチブを完全に掌握された今、千夜に出来ることといったら蒼助の求める返事を口にすることくらいだった。

「……冷たくなんか、なかった。それどころか……」

熱かった、と感じたままを感想として口にする。

自分が何を口走っているかなど、この時点では千夜は深く考えていなかった。

それが、蒼助にとってどんな答えであったか。

蒼助がどんな反応を示すかさえも、全く想像が付いていなかった。

「――――――」

言葉を聴いた瞬間、蒼助はなんとも形容しがたい表情となった。

何故か赤くなったかと思ったら、堪えるように口を横一本の線を引いたようにギュッと結ばれた。そんな、どういう感情を表しているか理解しがたい表情だ。

「……っ」

そして、耐えかねたように千夜の肩に顔を伏せた。

素肌を曝け出したそこで熱の篭った息を吐かれて、千夜はびくりと身体を両肩を震わせる。

もう何がなんだかわからない。

そこに、

「……恥ずっ……あいつの言ったとおりかよ」

蒼助が肩で悔しげに何かを呟くのを、千夜は聞き拾った。

「……？」

「……ああっ」

何と言ったのだろう、と気にかけたところで、蒼助は唸り声を発して肩から顔をあげた。
同時に千夜を不自由にさせていた両腕も離し、ソファの布地の上に身体の支えとして突き立てた。
溜息を洩らし、互いの間に一定の空白を置く。

そして、

「……俺は、さ」

あと少しでも力が入れば潰れてしまうのではないというほど、低く押しこめられた声で蒼助は会話を切り出した。

「俺は……とある女に言わせれば、冷たい人間の部類に入るらしい」

突然の切り出しは、千夜の理解の範疇を超えていた。

「なんだ、突然……」
「いいから、聞けよ。……言われた時は、突拍子もない言いがかりとだと思ったが、時間が経つと自分でも思い当たる節が見えてきた……つか、そんなんばっかだ。まず、関係もった女には感情的なもんは何一つなくて、どいつも身体にしか興味なかった。気持ちいい穴持ってて、顔が良けりゃ誰であろうと構わなかった。ダチだって、他人より多少気にかけるかどうかの違いの認識程度だった。向こうがどんな問題抱えていようが知ったこっちゃなかったし、俺の問題に踏み入ってくるのも許せなかった。誰だろうと、必要以上に構うのも構われるのも虫唾が走る。家族だって、血が繋がってるだけの別の人間だ。他人にゃ、違いねぇ。俺は、そんな風に思う男だ」

自分が口にする言葉は、この場で言うべきことだった。
例え、それがここまで積み重ねたものを崩す可能性を大いに秘める爆弾だとしても。
蒼助は、それだけの危険を孕んだ内容をぶちまけているのだという自覚は当然あった。

目の前の想い人の傷を深く抉り出したことに対して、報いるつもりというわけではない。
ただ、知って欲しかった。
自分という人間を。

黒蘭に言われて、自分の人間の本質を知ったわけではない。
自分がそういう人間なのだということは、気づいていた。気づいてはいた。

ただ、どうも思うこともなかっただけだ。
だから、どうした、と。
人として、『情』というものに欠けすぎている。
それがどうした、と。

『情』に振り回されているみっともない愚かな人間を嫌というほど知っていたから。
『情』に振り回されるのはもうたくさんだったから。
自分はそんな人間にはなりたくなかった。
もう二度とそんなものに振り回されたくなかった。

自覚を持って、その本質に正しくあろうとしていたら、自分は随分酷い人間になってしまった。
黒蘭の言う心の冷たさ。

昔、触れる自分の手が冷たいと女に言われたことがある。
だろうな、と蒼助は今になって納得した。
女は蒼助の冷たい手を好きだと褒めたが、それが自分が他人に向ける感情そのものであると知ったらどうしただろうか。そう思うと、嘲笑しか覚えられない思い出だ。

しかし、

「けど、な」

出した声が少し震えていたのは自分でもわかった。
緊張している。
気張れよ、と蒼助は震え出しそう自分自身に檄を贈った。

「お前が、俺が触れたのが熱かったって言って……わかったんだ」
「なに、を？」

問われ、顔を見ようと思う。
今、どんな表情で見ているのか。既に軽蔑した冷たい能面のような表情で見ているのかもしれない。
人の顔を見ることを怖いを思うのは、初めてだ。
だが、見なくてはならない。
ここから先は、千夜の目を見て言わなければ意味のない言葉なのだから。

「……千夜」

伏せた目を合わせると、千夜の顔が見えた。
恐れていたような表情はまだそこにないが、反応に迷っているのだけはそこから汲める。

まだ、これからなのだと知る。
どんな結果が待っているのかを想像できる余裕は、今は一切ない。
ただ、伝える。
不安。猜疑心。恐れ。余計な思考は全て心から追い出し、たった一つの行動にのみ精神力を注ぎ込む。

「……お前だけ、なんだ。俺という冷たい人間が熱くなれるのは……この先、きっとお前だけなんだと思う。お前にゃ、もっと本当に心の温かい人間の方がいいのかもしれねぇ……その方が、本当はいいのかもしれねぇ。……俺は、そんな人間にゃ死んでもなれやしねぇかもしれねぇが……」

ここで、言葉に詰まった。
一番大事なところで言葉に迷った。
この気持ちを言い表す言葉を、蒼助はテンパりそうな思考で懸命に探す。
そして、

「……けど、な……」

しまった、とここで蒼助は焦る。
自身の言葉のボキャブラリーが足りないことに今になって気づいたのだ。
この沸騰して噴きこぼれてしまいそうなこの気持ちを表すに相当する言葉が見つからない。
ここまで来て何遣ってんだ、と蒼助は言葉になり損ねた破片をパクパクと零す。

「――――――蒼助」

呼びかけが耳に入ると共に、蒼助の左手がその自意識の意図しないところで動いた。

「かず……や？」

動かしていたのは千夜の手だった。

蒼助の左の手首を掴んだ千夜は、それを頬に持っていった。

男らしく節のある大きな蒼助の手は、千夜の頬からこめかみにかけてを包むように触れる。千夜は目を細めると、今度はそれを首へとするりと下ろさせる。

おい、と躊躇する蒼助の抵抗を自身の力でやや強引に捻じ伏せて首筋に触れさせた。

戸惑う蒼助に、しばし何かを調べるように沈黙していた千夜は、

「熱い、な」

「は……」

「こんなに熱い人間が、冷たいわけない」

お前は違うよ。

細まった目がいとおしげな形をとって、蒼助を見た。

その瞬間、プチン、と張り詰めていた糸が高い音をたてて切れるのを蒼助は聞いた。

そして、全てを投げた。

「ちげぇって」

首筋に置かされていた手を、五本の指に細くサラサラとした髪を縫いつけながらも後頭部に持って行き、抱える。

「言ったろ……俺が、熱くなるのは――――」

小さな頭を引き寄せながら、自分も身を寄せる。

そして、互いの吐息が唇に触れるまできたところで、飾ることを諦めた素材のままの言葉を口にした。

「――――お前だけだ」

こんな風に身体と心に熱を孕ませることが出来る人間は――――後にも先にもお前だけなんだ。

ようやく見つかった言葉は今となっては用済みのお役御免で。

熱の昂ぶる唇との間に挟まれて、溶けて消えてしまった。

【九拾四】　発熱の対象（後書き）

次回ももう一回15禁ターンです。
自分でも驚くくらい長くなったとです。

【九拾伍】　彼の約束

勢いのままに重ねた。
だが、理性はまだ残っていた。
同じ失敗は二度と踏まないために、残しておいた。

まずは、唇と唇が合わさるだけの、ライトキス。
触れ合わさった途端、蒼助は改めて自分とは違う柔らかい感触と薄い皮膚越しに伝わる体温に、ゾクリとした甘い痺れが背筋を走り抜けるのを感じた。
いきなり過ぎて目を閉じる間もなく固まってしまった千夜の初心な反応に、愛おしさを覚え、ゆっくりと丁寧に徹する。
しかし、焦燥感に似た熱情は滲ませたまま。近づけると反射的に閉じる瞼、目尻、そして丸やかな曲線を描く頬へと唇を押し付け、離れる際には啄む。
ん、と僅かに洩れる声には緊張は感じず、身体から無駄な力が抜けていることを教られる。
蒼助はその隙を逃さず、薄く開いた唇にもう一度口付ける。
今度は、先程よりも深く、被さるように。

「っ……んぅ」

呼吸の出入り口を塞がれたことにより苦しげな鼻声が零れたが、抵抗はしてこなかった。
そのまま舌を入れたくなったが、まだだ、と性急な己の一部分を抑える。
それよりも逃げられないようにその身体を確保していおくべきを優先し、腰をしっかりを抱きかかえた。

「っ……、……っ」

重ねてしばらくすると、千夜に抵抗の意識が見え始める。
不審に思ったが、その原因はすぐにわかった。
息継ぎが出来ていない。

「ん、ぅ―……っは、ぁ」

肺に温存させておいた酸素に限界がきたのか、抵抗が大きくなったところで一度開放してやった。
酸欠状態となった千夜は、くたりと蒼助の肩に額を置いて荒い気遣いを繰り返す。

「……息しろよ」
「口……っ、塞がれてるっていうのに……出来る、わけないだろっ」
「鼻があんだろ、鼻が」

頬を上気させ、涙目で睨んでくる千夜の鼻を摘む。

「んっ……」
「好きなときに息しろ……それでも、普通より息苦しいだろうけどな」

そう言いながら、千夜の前髪をかき上げて額に口付ける。
思考の隅で、キス一つにここまで手間をかけている自分に新鮮さと呆れを感じていた。

……やきが回ったな、俺も。

普通なら面倒くさいとばかり思う手間のかかるこの行為も、千夜

が絡めば何の抵抗もなくなってしまう。
千夜の呼吸の具合が整ってきたのを見計らい、再び口を塞いだ。
すると、助言した通りに千夜は鼻で呼吸をして、先程のような息苦しさを訴えることもなくなる。
問題が一つなくなったと判断し、次の段階へと踏もうと考える。

「んぅ……」

その前に確かめるように唇を吸ってみたところ、千夜は反応を示すが、そこから抵抗へと発展はなかった。
それを了承と自己中心的な解釈をすると、

「ん……」
「――――――っ」

ちろり、と舌を延ばし、閉じた千夜の唇をノックするようにつついた。
今度こそビクリと震えたが、やや強引に突き進むことに徹し、少し強く舌先を押し付ける。
何度か強弱をつけながら、千夜の抵抗意思が緩むのを待つ。

「……っ……」

千夜が息を呑むのを感じた瞬間に、唇の閉口が僅かに緩む。
すかさず蒼助は強引に舌を千夜の口内に押し込むように滑り込ませた。

「ふぅっ……！」

外部からの異物の侵入に、予想どおり千夜はおとなしく受容して

はくれなかった。
しかし、ここで引いてしまうわけにもいかなかった。
先程と同じことに走る前に、いつ暴れ出すかわからない自分よりもずっと脆くて華奢な身体を両腕で抱き込んで身動きを押さえる。
そして、侵入を本格的に開始させる。

「……んぁ……っ」

口内の歯列をなぞるように舐め、口蓋をなぞりながら奥へ逃げ込んでいるであろう千夜の舌を追う。
潜んでいたその存在を舌先で触れて確認すると、後頭部を掴んだ手で押さえて、より唇を押し付ける。
舌先が千夜のそれを捉え、

「んぅっ……！？」

ようやく絡めとることに成功した蒼助だったが、激しく反応した千夜に両肩を掴まれる。
その力の入りようは、爪先が食い込んで痛みほどだ。
だが、そこには予想外な点が入り込んでいた。

掴んでいるだけで、”引き離そう”とはしていない。

耐えている、という事実が拒絶の意思はないということを蒼助に報せる。
千夜なりの精一杯の応えなのだろう。
そう考えると、肩の痛みさえも蒼助の興奮を促進させる作用へと変換される。
寧ろ、もっと縋りつかせてやろうと、蒼助は本格的に千夜を蹂躙し始めた。

蒼助は、キスは行為の上で避けられない義務程度にしか思っていなかったが、技術はそれなりに積んでいた。昔、自分の筆下ろしの相手となった年上の従姉がキスを好んでいたので、そんな彼女の要求に応える為に洗練させることとなった。

女全般に共通することなのかは言い切れないが、彼女以降の関係を持った女も、キスを好んだので得て損はない経験となって残った。

今になって、その想いを最も強く実感した。

そして、過去の女たちに初めて感謝の意を向ける。

別に初めての相手が千夜であればよかった、なんて思わない。

仮に、自分が何も知らないままのあらゆる意味で純粋な青少年のままで今に至っていたら、きっとこの魅惑的な甘い唇を十分に堪能することは出来なかっただろう。

千夜の初めてのキスの相手が自分でないことが、少しもショックでないことがないわけではない。が、そんなものこれからいくらでも塗り替えが効く。

過去に他人が付けた痕なんて、塗りつぶしてやる。

「っぁ……」

蒼助は絡めとった千夜の舌を自分のものに合わせて、口内を掻き回した。

唾液と唾液が混ざり合い、ぐちゅり、と更に大きな水音をたてる。

自分の口の中で起きていることを報せるそれに千夜が羞恥心に顔を赤らめるのを見て、蒼助は後頭部の手を顎に移動させ、掴んで何度も何度も角度を変えて交わる。

上を向かせる形となると、注ぎ入れて溜まった唾液が千夜の口端から零れていく。

苦しげに細められていた千夜の目には、息苦しさだけではない何かによる潤みが帯びていた。

それを黙認した蒼助は、気だるい熱が自身の下半身に溜まってきていることに気づく。

まだキスだけで、だ。

こんなことは今までにない。

「んぁ……んー…っ！」

最後にきつく千夜の舌の根元を吸い上げて、唾液にあみれた千夜の口からようやく口を離した。

ちゅっ、と音を立てて舌先を結ぶ透明な糸が切れる。

千夜はようやく開放された口で思い切り息を吸い込んで、顎を掴まれたまま荒い息遣いを繰り返す。

拭うことを忘れられた口元から顎にかけて筋を描く水滴をぴちゃりと舐めとる。

惚けたように虚ろな眼差しで息をしていた千夜が、その舌の動きに口を噤んだ。

口端を啄むように口付けて離れると、蒼助はからかうように、

「……気持ち悪かったか？」

「っ……な、ぁ」

「さっきちょっとショックだったからなぁ……名誉挽回でがんばったんだけど」

で、どうよ？とシニカルな笑みを浮かべながら再度尋ねる。

掻き回すようなキスの後を追い立てるような質問にぐるぐるしているのだろう、千夜は顔を真っ赤にしてはくはくと声にならない空気を吐きながら口を動かすばかりだ。

欲情、とは程遠い表情だが、新鮮さが蒼助の気をよくさせる。
少なくとも、不快とは思われていないらしい、と。

「な、聞かせろよ。……どうだった？」

ちぅ、と頬を吸い付きながら強請ると、千夜は蒼助の顔がある方から目だけ逸らして、

「と、とりあえず……撤回する」

「何を」

「……き、気持ち悪い、は……撤回、する」

「……それが、感想？」

「ほ、他に言い表す言葉思いつかないんだっ！」

勘弁してくれ！と訴える千夜の必死な姿に免じて、とりあえずは満足しておくことにした。あくまで、〝この時点〟でのとりあえずであるが。

「ま、いいか。――――勝負はこっからだし」

「ぇ……あ、っ」

不意打つように、蒼助は再び千夜を愛で始める。
ちゅっちゅっ、と額から瞼、鼻、頬へと下りながら触れるだけのキスを降らす。
万遍なく顔全体に口付けると、顔から離れて首筋へと移動する。

「っ……ま、た」

「さっきもしたけど、ここ弱いよなぁお前」

「な、何言ってっっ」

「論より証拠」

遮るようにちゅく、と食むように口付けて軽く吸うと、千夜の身体は面白いくらいに跳ねた。おそらくここが千夜の性感帯なのだろうと、積み重ねた経験から来る蒼助自身の勘がそう囁く。大方、本人はそんなことわかるはずもなかっただろうが、だからこそ尚のことそこを他人に触れられるのを厭っていたのだろう。

そんなことを頭の片隅で考えながら、首筋の至る場所を吸い、腰に回していた手で背筋をつつぅっとなぞるようにさすってみる。

「んっ……ぁぁ」
「……こっちも、か」

発掘気分で焦らず敏感な部分を探し、少しずつ凝り固まった部分を解すように刺激していく。

「っぅ……蒼助」
「んー？」

髪を掻き除けて耳の根元あたりに舌を這わせていると、不意に名を呼ばれる。

「……いつまで、こんなっ……こと、してるんだ……？」
「……いつまでって」
「こんなことしてたってしょうがないだろ。……早く、すればいい」
「……は？」

思わず愛撫を止めてしまうほどの衝撃的な発言。
まさか千夜の口からそんな言葉が聞けるとは思わなかった。
しかし、再び違和感が蒼助の中で生じる。

千夜の発言の『何か』がおかしい、と。

「……すれば、いいって？」

恐る恐る確認するように、一度千夜と向き合って問いかけた。

蒼助の問いに、千夜は不思議そうな顔をする。

それを見た瞬間に、蒼助は嫌な予感を感じた。

「……お、お前が……よくわかってるだろ」

曖昧にぼやかして言う赤い顔を普段なら可愛いと思えただろうが、この瞬間だけはこの会話の異常さにそんな感情は掻き消された。

「……千夜」

「……何だ？」

「お前の知ってるセックスって……どんなの？」

こんなことを改めて聞いてどうするんだ、と自分で思わなかったわけではない。

だが、確かめておかなければならなかった。

歪な世界で歪なものしか見せられなかったであろうこの少女とこの先に進む上で、何をしていけないかを知り、何を正せばいいかをはっきりと見る為に。

「……俺は、またおかしなことを言ったのか？」

ようやく空気の変化を感じとったのか、千夜は表情を不安で塗り変えて俯いた。

まるで自分が悪いことをしたように思えた蒼助は、千夜の片頬を

包むように手の平をあてる。

「いや……違う。今になってこんなこと聞いた俺が悪いんだ……ごめんな」

傷つけるのはわかっていた。

ごめん、ともう一度内心で謝罪の言葉を呟き、やっぱり止めようと先程の考えを放棄しようとするが、

「……俺が見てきた中では、お前がしてくれたみたいなことはされてなかった」

諦めかけた矢先、目を伏せて千夜がポツポツと語り出した。

見てきた、と表現され、『されてきた』ではなくてホッとして間もなく、千夜の口から零れる落ちる事実に蒼助の安堵は霧散される。

「きっと、奴らは相手のことなんて気遣うどころか考えてもいなかったんだろう。自分さえよければそれいい、と相手の苦痛さえも自分の快楽の糧にして。いつだったか、情婦をしていた友人に聞いたんだ……辛くないのか、と。あとで聞かなければ良かった後悔したけどな」

「……なんて、言ったんだそいつは」

「……苦笑してた。そのあと、すごく疲れた笑顔で、言ったんだ。……犯されるのが好きなんだ、と言い聞かせなければ、あんな気持ち悪くて苦しいだけの行為は耐えられない……と」

蒼助は、言葉だけでもどれだけの苦心が詰まっているかわからないその告白に息を呑みながら、覗き込んだ伏せた目がここではない遠くを見ていることに気づいた。

「彼女は、友人は……殴られることで発情するように躾けられた女だった。幼い頃に、飼われて戸籍すらなく……”存在する”ことすら許されていなかった。逃げる術も、たとえ逃げたくても行き先もなくて……暴力も忌まわしい行為も受け入れるしかなく、て……」

「千夜」

「たとえ、相手が憎くても……抱く感情すら愛することに無理矢理すり替えなければ、生きていけなか」

「――――千夜」

遮るように少し強く呼んで、抱き締める形で引き寄せて――――口を塞いだ。

勢いづいて歯が当たらないように多少気にかけて覆ったその奥で残った言葉が呻き声となって発散されてしまったのを感じた後も、少しの間そのままでいた。

驚いていた彼女の目と身体から余計な力が抜けたのを見計らって、身体と身体の間に僅かな隙間をつくり、

「……やなこと思い出させてほんっとに悪かった。けどな、これだけは絶対に約束するからよく聞けよ」

ほとんど距離感のない近距離で向けられた蒼助の真摯な眼差しを受けて、千夜はわけもわからずこくん、と頷くしかなかった。

蒼助は、いっそ険しいと呼べるほど強張った相貌（かお）で、

「俺は……お前を大事にするぞ」

「……」

「お前の常識塗り替えるぐらい、大事にしてやる。今まで、大事にされなかったっていうのなら、俺がされなかった分も埋めるまでだ。今まで、他の奴らがしてやらなかったことを俺がしてやる。……も

う、いっそうざくてしょうがないくらい大事にするからな」

だから、

「だから、お前は……嫌なことを無理矢理捻じ曲げて受け入れなくていい。もう、そんなことしなくていい……俺はそんなこと絶対させない」

約束な、と額に触れるだけのキスをする。

手の甲は、考えなかったわけではないが――――――さすがに恥ずかしい、と蒼助は却下した。

「……二つ目、だな」

「ん？」

「約束。こんな短時間に二つもつくって……あまり多くつくるものじゃない」

「何で」

「少ないからこそ、約束は約束なんだ。それに……あんまりホイホイとされると、有り難味とか真実味が感じない……果たすのも大変だろ」

「果たすから別にいいだろ。お前との約束は――――――なんだろうが全部守る」

「……三つ目」

言ってる傍から、と苦言を呟いているが、逸らした目と赤らんだ頬は照れ隠しなのだということを教えてくれる。

いいな、ツンデレ。好みかも、と己を新たな嗜好を発見していると、

「……いっとくが、別に大事にしてくれなくてもいい」

「……はぁ？」

大事にされたくない、といわれたのだと己の中でやや強引に解釈した蒼助は、不可解な気分となった。

どういうことだろうか。

「……何言って……ひょっとして、お前そっち系……？　……いや、それはそれでイイかもしれねぇ」

「何を言っている」

黙っていては妙な解釈をされると察したのか、千夜は即座に弁解に乗り出す。

「お前は俺の望みを叶えてくれると言った。だったら、俺もお前も望みを出来る限り叶える。与えるばかり考えなくていい……俺だって、お前に応えたいんだ」

まっすぐな瞳が蒼助を射る。

そこには、ただただ純粋な好意のみが見えた。

蒼助のように欲望や若干なりともある私欲を孕んだものではない、無垢な想い。

ここに来て蒼助は、自分が見ているものが奇跡に近いものであることに気づいた。

残酷で無慈悲な世界で生きて、汚いものを嫌というほど見せられても、尚も濁らず綺麗なままの強い光を宿す眼。

初めて会った時と変わらない眼差しで、千夜は揺ぎ無い自身の想いを蒼助に伝えようと言葉を紡ぐ。

「お前の好きなようにしろ。お前なら構わない。俺の傍にいてくれ

ると言った蒼助になら……何をされたっていい」

頭をガンっと殴られたような衝撃と視界がぐらぐらと揺れるような錯覚を蒼助は覚えた。

それによって、理性という名の琴線が激しく上下左右にぶれる。

ダメだ。

もう限界だ。

「……お前」

はぁ――――、と俯いて、長く深い溜息をつく蒼助を不審に思った千夜が覗き込むように身を乗り出す。

自分が何を言ったのか理解していない様子をチラリと伺って、その天然タラシぶりに更に絶望的な気分に陥る。

「……可愛すぎるだろ」

「は？　――――――んっ、ぁ」

とぼける千夜の両肩をガシッと掴み引き寄せて口を塞ぐ。

抵抗の意思を示す前にそのまま今度は押し倒した。

大事にしてやれるだろうか、と自分の宣言に自信を失いながら。

【九拾伍】　彼の約束（後書き）

まだ続きます。
そろそろ弄ろうか、蒼助（笑）

【九拾六】　共有する感情　（前書き）

自分一人だなんて、傲慢

――――自惚れるな

【九拾六】　共有する感情

鼻がぶつからないようにうまく顔を重ね合わせ、唇と舌を貪る。
漏れる声すらも例外なく。

「んんっ……あ、ふぁ」

つたない鼻での呼吸を繰り返しながら、最初よりもやや荒々しい蒼助の舌技に応えようと自ら舌を差し出して来る。
いじらしい千夜の懸命さが蒼助の中でゆらゆらと灯っていた熱を煽り立てる。
自身から流れ込む唾液が、千夜の口に溜まってその臨界点を越えるタイミングを見計らった蒼助は、

「うっ……んぐっぅ！？」

舌での攻めを一旦止めたか思った矢先、千夜の唇に覆い被さり、空気の漏れすら一切許さず完全に塞ぐ。
口を密封された千夜は溜まった唾液の逃げ道を奪われ、目を白黒させた。

「ぐっ……んぅ――っ」

ソファの表面を千夜の爪先掻くたびに息苦しさの訴えが生まれる。
千夜のその様を見た蒼助は、より一層唇の押しつけを強くする。
そして、髪を加減した力で掴むと顎を上へと向けさせた。

「んっ……っ」

すぐ下の喉でゴクリ、という音を聞き届けると、蒼助はようやく口を解放した。

「えふっ……けほ、ぇっ……っ」

器官でつっかえたのか酸欠によるものなのか、千夜は酷く咽せて涙目となった。

咳き込む度に、身を僅かに曲げて浮く背中に手を滑り込ませて宥めるように擦る。

「ゴメンゴメン。ちょっと、調子に乗り過ぎちゃったわ」

「……っ、当たり前だ！」

涙が滲んで潤んだ目に睨まれてもちっとも怖く無いが、口にしたら臍を曲げられるのは目に見えた結果なので、思うだけにしておく。無論、「可愛い」とか「そそる」とかも無しだ。

「でもまぁ、どうだったかは聞かせてくれよ」

「……何を」

「俺の味」

「――――っ、っ馬鹿野郎！！」

そっぽむかれた。

失言とわかっていながらも、これはどうしても外せなかったのだ。

理性ではわかっていても、ついつい本能的な欲望に従ってしまうのが男心というものなのである。

蒼助に乗っかられているので、全体を動かせない千夜は腰を捻って俯せに近い状態となり、ソファに設置されていたクッションに顔を埋めてしまった。

すっか機嫌を損ねてしまった蒼助は、「悪かったってー」と、言葉を連ねながら肩を揺するが、

「……たばこ」

くぐもった声がクッションの隙間から、不意を打つ様に漏れ出したのを危機拾った蒼助は、最初は何を言われているのかわからなかった。

「……ん？」

「たばこ……吸っているのか？」

苦かった、と続いたところでようやく蒼助は己の失態に気付いた。

昼間に蔵間からもらった一本を確かに吸っていた。

今まで関係を持った女に文句を言われたこともなければ言わせたこともなかったので、その点を気にかけることはなかった。

千夜が煙草の臭いを好むなんてとても思えないし、現にここであえて口にしたということは気になったということだから。

「……あー、まぁな。……嫌か？　嫌なら止めるけど」

別に蒼助は煙草が中毒的なまでに服用しているわけでも好きというわけではない。それこそ、無くても生活に支障はない。時々口が寂しくなった際、或いは精神が荒んだ際息抜きに吸う程度で、ヘビースモーカーと呼ばれる類には入らないだろう。

千夜が嫌だというのなら、もう二度と吸わなくてもいい。それでようやく手に入れた千夜がそのままでいてくれるのなら、取るに足らない代償だ。

しかし、千夜の返答は蒼助の予想を覆す。

「……別に、止めることはない。吸いたければ、これからも吸えばいいじゃないか」

「え、でも……気になったんじゃ」

「少し、な。だが、それぐらいのことで蒼助を嫌いになったりはしない」

うっ、と蒼助は思わず身体が仰け反りそうになる。

飾り気のない千夜のストレートな発言は、どうしてこうも自分の胸を刺激するのか。

「……あんま、煽ってくれるなよ。あとで泣いても知らねぇぞ、俺ぁ」

「誰が泣くか」

気にするところそこかよ。

さっきまで涙腺崩壊同然だった千夜は、ムッとした表情で蒼助をクッションから顔を覗かせている。

「さっきだって、涙目だったくせに」

「あれはっ……っっ！」

反論の為に起き上がろうとした千夜の頭部を押さえつけて、そのままクッションの上に押し戻す。

「こっの……何を」

「煽ったのはお前だろ。それに……泣かないんだろ？　我慢しろよ」

「何言って……っぁ」

耳元で囁くと、髪を除けて現れたふるふるした柔らかな耳朶を舌で掬い、そのまま食むように口に含む。

擽ったそうに身を竦める千夜の身体の震えに合わせて離すと、耳の縁をなぞり、輪郭を知ろうとするかのように這わす。

「ふっ……ぅ」

堪えるように顔をクッションに押し付けて、小刻みに身体を震わす千夜。

自らのささやかな抵抗すら、蒼助の欲を煽る材料にしかならないことに気づいていない。

ますます調子付いた蒼助は耳朶の裏の陽に焼けることのない柔肌をチュウゥっと吸い上げて。裏側から耳の付け根に舌先を差し入れると、ぺろりと下から上へ舐め上げた。

「――――っ、っ」

「耳も弱いな」

ビクビクっと反応をする千夜にくくっと笑い声をたてて、今度は黒髪に隠された白い項へと移動する。

同じくほとんど日に当たらない場所であるそこは病的はまた違う、色香を孕んだ白さが称えられており、吸い寄せられるように啄んだ。

そこから下るようにちゅっちゅぅ、と労わるように口付けていく。

背筋を軌道上に伝っていると障害物にぶち当たる。

「っと、そういえばまだつけたまんまだったっけな」

「っ……あ」

くいっと、ホックの部分を人差し指に引っかける。

今となっては上半身が唯一まとう布。

最後の砦。それを崩せば、どうなるかは千夜にもわかっていることだった。

「いいか……？」

取りやめるならここが最後のチャンスだった。
蒼助の理性にとっても同じことが言えた。
最後の決断を委ねられた千夜は、少し沈黙を置いて、

「……最初から、言ってる」

不器用ながらのＧＯサイン。
どんな顔をしてそれを口にしたのか見れなかったことが、蒼助が唯一残念に思ったことだった。

「りょうか――――――い」

パチン、と儚い音を立てて崩れる砦。
取り払われた後に出てくるのは、遮るものが無くなった白い背中だ。
無駄な肉は一切ついていない歪みのなき背骨のラインが真ん中に引かれている。

綺麗だ、と改めても出る感想はそれに尽きる。
指先で触れる感触は、柔らかくも張りがある。

傷一つのない背中。
触れることを許されたと喜ぶべきところで、しかし、蒼助は疑問を生じさせた。

戦闘の際の千夜の身のこなし。
きっと、自分よりも遙かに過激な激戦に身を投じてきたからこそ得られた秀逸さ。
そんなものを無傷で手に入れることなど出来ないはずだ。
だが、触れる先の身体にはそういったイコールとして繋がりえる要素が見当たらない。

けれど、それは別の答えに繋がった。

『――――生まれつきの特異体質でな、自己治癒力が他の人間よりも高いんだ』

いつかの夜に、千夜の口から聞いた言葉。
あの時とは違う解釈と納得が、今は出来た。

そして、嘘をまた一つ見つけた。

遠いな、と蒼助は限りなく近くにいるはずの存在に対し、思う。
きっとこれで全ての嘘が暴かれたわけではない。
それこそ、あと幾つなどと数えることなど無駄に等しいほどまだ後に控えているだろう。

……焦るな。

ふつふつと沸き立つ焦燥感を押さえるべく、蒼助は自身を叱咤する。

焦ったところで何にもならないし、これ以上近づく事だって出来ない。

嘘にしろ、ただ欺いてその裏で嘲笑っていたわけではないはずだ。抱える欠陥を補うものが、千夜には嘘しかなかった。ただそれだけのことなのだ。

「千夜……」
「っ……、」

肩のところに口付けて、耳元でその小さな穴に注ぐように名前を口にする。
吐息に反応する敏感さに愛しさを覚えつつ、

「……ゆっくり、いこうな？」
「え、何て言……ん、ぅ」

彼女に聞き拾われず独り言に成り下がった言葉は、次の瞬間に合わせた口の中の熱で溶けてなくなってしまった。
ゆっくりいこう、ともう一度自分の中でのみ繰り返し、自己完結に浸る。

これから先、まだ見えない「嘘」は否が応にも目にしていくことになるだろう。
だから、一つ一つ拾っていこう。
そうすることで、一歩、また一歩と千夜に近づいていけるはずだから。

「ふぅ……っ……ん」

肩を押し返して再び身体を仰向けにさせる。
じゃれるような甘ったるいキスには抵抗がないのか、蒼助にされるがままに千夜は従った。
首に手を滑り込ませて、ゆっくりと撫でるように触れる。

「……、ぁ」

ぴくん、と僅かに、小さく震える身体。
擽ったそうに首を丸める仕草を見せる千夜の表情は、慣れない快感にただ打ち震えていただけのそれとは違っていた。

「……ち、ぃ」

一欠けらたりと聞き逃せない千夜の発言は、小さすぎてなんと言ったのか良く聞き取れなかった。
暫く動かないでいると、

「……きもち、い……もっと」

千夜は、首の側面部分覆うように触れている手に頬ずるように身動ぎし、もっと、と強請った。
その表情は、与えられる快楽を堪えるのはなく、若干ながらも受け入れ始めたことを示していた。
千夜のその反応に、蒼助は頭の中で何かがプツっと切れたような気がした。

「首、気持ちいいのか？」
「……っう、ん」

するりするり、と首を撫でると、千夜は驚くほど素直に頷いた。

ほんの少し前はトラウマの拠点であった場所であるのに、えらい変わりようだ。
その対応の変化が、蒼助に次の行動へと移る後押しへとなった。

「じゃぁ……――――――ここは？」
「ん……んぁっ！？」

手の移動に名残惜しそうにしていた千夜だったが、移動した先で触れられた場所に大きく身体を揺らした。
そこは、今となっては留め具が外されたブラジャーが被さるだけとなった胸部。

「……除けるぞ」
「え、ちょっ……ぁ」

確認の返答をもらうまでもなく、蒼助は行動を実行した。
上へと押し上げられ、そのたわわな二つの実りが零れ落ちる。

「なに恥ずかしがってんの。この前は自分で脱いでただろ」
「あの時は……っ、お前だってあんなに騒いでたくせに！　えらい違いようじゃないかっ……」
「……バッカ、言っただろうが。あんときゃ、精一杯イイコちゃんの皮被ってたんだよ」」

俺だって好きな子には良く思われたかったんだよ、と頬をチュゥっと吸う。

「でも、やっぱり素の自分を好きになってもらいたくなった。ただ好きというだけじゃ済まない……こんな風に組み敷いて掻き乱して貪ることばかり考える俺を」

「か……考え、てるのか？」
「夢に見るくらいには」
「み、見たのかっ？」

しかもお前のベッドで、なんてことまではさすがに言えなかった。
既に真っ赤になっている千夜が何をしでかすかわかったもんじゃない。

「まぁ、俺も男なんだよ。欲望とか性欲に忠実な部分だって、もちろんある。そういったところは、昼間の野郎連中とかお前の首絞めたクソ野郎とかと変わりねぇよ」

でもな、千夜、と蒼助は次いで出た声が酷く掠れていたことに気づいていながらも続けた。

「こんなこと言い晒しておきながら今更だけどよ……――――俺は、お前が好きだよ。お前が泣いたり悩んで我慢して苦しんでる姿を見てると、自分のことみたいに苦しくなる。お前と毎日笑って過ごしたい。別にこんなこと信じろなんていわない……信じなくてもから……だから」

両手をついて、密着していた体を離す。
片手を千夜の顔が良く見えるように、その前髪を出来るだけ優しい手つきで撫でるように掻きあげた。

「嫌いになって、くれるなよ……頼むから」

今、自分がどれだけ情けない顔をしているか、鏡で見てみたい。
人は誰かを好きになると弱くなると、何処か聞いた言葉の並びが脳裏に過ぎったが、違うと蒼助はその考えを否定した。

弱くなるんじゃない。
今まで見ないように目を逸らしてきた自分の弱い部分を、再確認しているだけだ。
一人でいる人間の『強さ』なんてものは、きっと自分への誤魔化しと虚勢で出来ているのだろう。
そう思う蒼助自身も、そのうちの一人に数えられる。
弱さを好む奴なんていないと誰もがわかっているから、だから、強くありたいと鎧をまとうのだ。
勢いあまってだが、蒼助は今それを外した状態にある。

無防備な自分を千夜はどう思うだろうか、と怯え混じった心境で千夜の目を見た――――――が、

「――――いっ、っ！？」

突然、千夜の両手が伸びたかと思えば、頭部両側の髪をわしゃっと目一杯掴まれた。
それも力加減のセーブなしで。
ギチギチ、と根元が悲鳴を上げて苦痛を訴える。

「あだだだだっ！　この、やめっ、若くして頭髪貧乏になったらどうすっ――――――」

抗議は続けられなくなった。
髪を引っ張る勢いで、引き上げられた顔の突出した部分に塞がれて。
触れるだけの口付けの後、千夜はカラカラに乾いていた蒼助の唇を舌で湿らせた。

僅かに離したゼロに近い距離で、きつい眼差しで千夜は叩きつけ

るように、

「この馬鹿が……さっきの俺の言葉を聞いてなかったのか。もう一度言うから聞け。

――――そんなことで、お前を嫌いになどなるもんか。それと……」

髪を引っ張られる痛みすら忘れて、次の瞬間に千夜の口から飛び出た言葉に思考が停止する。

「――――その感情が、お前だけのものだと……思い上がるな」

「――――――っ」

箍が外れる、とはこんな感覚をいうのだろう、と何処か他人事のように思いながら、蒼助は気がつけば千夜をソファに押し付けていた。

その反動でぷるんっと揺れる胸の両方を鷲掴みにした。

「あっぅ……！　いきなりっそん、なっ」

「うるせぇよ。とんでもねぇ殺し文句言いやがって……おかげで手加減できなくなったじゃねぇかっ」

「やっ……強く、つかっ……む、なぁ……っ」

手の中の胸は、今まで触れたどの女の胸よりも柔らかく、心地よい感触を蒼助の手に与えた。

千夜の抗議を無視して、蒼助はそのまま胸を揉みしだく。
手馴れた手つきで、苦痛ではなく快感を与える力加減で。

「はぁっ……ぅ」

自分の胸が弄ばれている様を見たくないのか、目をギュッと絞った千夜は首を捻ってクッションに顔を押し付けようとする。
そうはさせない。
蒼助はその様子に、嗜虐心をそそられ、逸らされた白い首筋に軽く歯を立てるように吸い付いた。

「ひっ……ぁ……そう、すけ」
「そっぽ向くなよ。気持ちいいだろ……？」

歯を立てたせいで赤くなった場所を舌でぬるりと舐め上げながら、わざと千夜の羞恥心を煽るような言葉をかける。
そして、注意を戻すべく淡い色の先端を親指の腹で押しつぶし、摘んだ。

「っっ……ぁ、ふ」

ビクビクっと小刻みに震え、与えられる快感から逃れようと、身を捩って上へと身体をずらそうとする。

「こぉら、逃げるな」

行く手を遮るように、一方の手はそのままにして、もう一方は下から抱き込むように肩を押さえることに行動を移行した。

「言いだしっぺが今になって……やっぱりイヤ、は無いだろ？」

「イヤ、とか……そうじゃなくて……なんか、よくわからないんだ」
「何がわからないって？」
「……あ……こういう感覚、初めてだから……苦痛じゃない、から……どう耐えたらいいか、わからない」
痛みなら、耐えられるということだろうか。
痛みなら慣れている。
慣れてしまうほど痛みを与えられ、受けてきた。
そういうことなのだろうか。
「耐える必要なんて、ねぇよ」
「えっ……ぁ」
耳元に助言を残すと、蒼助は顔の位置を下げ、
「――――思う存分、啼け」
ふくり、と浅く浮いた胸の先端部分に舌先を伸ばし、下から上に持ち上げるように舐め上げた。抉り出すような舌使いで強弱をつけながら刺激を与え続け、くっきりと浮き出たそこをちゅくり、と口に含んだ。
「ふっ、ぁあっ」
ちゅぅっと吸引され、蒼助の行動に唖然としていた千夜は予想を上回る感覚に、声を抑えられなかった。
「ん、イイ声。その調子その調子」

片方は口と舌で翻弄し、もう片方は開いている片手で揉み続ける。

「やっめ……は、あぁ」

「なぁ、さっきみたいに気持ちいいとか言ってくれると、俺もっと頑張っちゃうんだけどさー」

「い、うか……っ……馬鹿っ……しゃべ、るな、ぁっ」

「……あ、そ。じゃぁ――――言わせるまでだ」

左の胸に触れていた手が、不意に離れ、移動を始めた。

それは胸から腹、そして下腹部へとゆっくりと下っていく。

指先が臍の上まで来て、千夜はそれはようやくその意図と行き先を察した。

「……あ……」

漏れた短い理解の声は、明らかに今までとは色違いだった。

今から触れようとしている場所は、これまでと同様に千夜にとって未知の領域ではあるが、そこがどう扱われるかは知っている。知らない方が幸せという含み付きで。

消沈した声色に、蒼助の中で若干の理性が修復された。

それでもまだ欲望という本能の勢力の方が強いが、理性は劣勢ながらも働き、

「……止める？」

ふっ、と苦笑して尋ねる。

紅潮した色を称えた仏頂面で、早くしろ、という返答。

その強情さに、思わず呆れた。

「いいのか？　冗談抜きで、これが最後だぞ。多分、もう泣き叫ば

れても止められない」
「……お前、言ってることとやってることが噛みあってないぞ」
「あ？」

突然で、何のことを言われたのか、と蒼助はポカンとした。
半目になった千夜の視線が下に向いているので、それを辿ると――
――――

「……あ」

蒼助は己の下半身に行き着いた。
蒼助のそれは、千夜の両脚の間に入り込んでいて、密着するあまりに無意識のうちにその付け根部分と重なっていた。
しかも『そこ』は、頭とは違って理性などカケラも――――――

「……そんなに、溜まってたのか？」
「うるせーよ……。俺がどんだけ我慢したと思ってやがる」
「一月にも達していないだろうに、大袈裟な」
「……ぐっ」

その通りだった。
やるせなさに、思わず目を逸らした。

「でも……」
「ん？

今までの若干蔑むような視線がなくなったかと思い、視線を戻すと、千夜は目を伏せていて、

「これは……ちゃんと、求め、られていると……解釈しても、い

いのか？」

その台詞が耳に入り、脳に伝わった瞬間、蒼助はずくん、と身体の奥で熱が一気に高まるのを感じた。ついでに、下半身の熱も収まりがつかなくなる方へ加速し始めた。

「……そうだよ、悪いか。俺は、お前が抱きたくてたまんねぇんだよ」

「……っ」

途端、今までで最高潮に千夜の顔は真っ赤に茹で上がった。

自分との行為の最中でもなかった反応に、蒼助は少し複雑な気分になった。

「そ、それじゃ……改めて……よろしく、頼む」

妙にかしこまった台詞とふにゃりとした表情が、先程までつくり上げてきた空気をあっさりぶち壊してしまったが、蒼助は何故か面白くて、思わず笑った。

そして、千夜の調子に合わせるように、

「んじゃ、こちらこそ……喜んで」

茶化すように口にして、千夜に重ねるだけのキスを落とした。

角度を変えるたびに、少しずつ深くしていく一方で、片手は一度は中断した下半身への進行を再開する。

ズボンの留め具に指がかかろうとした。

その時――――――

二人の間で発生し始めた甘ったるい空気を濁すような機械音が流れ込む。

ソファとセットで設置された低めの丸いガラス板のテーブルに置かれた携帯電話から響く着信音。そして、携帯電話は――――――蒼助のものだ。

「……ダレダ、コロス」

「……さ、三途、じゃないのか？」

片言になった蒼助の機嫌の急行落下を察した千夜は、その身体から醸し出される尋常じゃない濃度の殺気を収拾つけるべく、比較的安全対象と思われる相手を予想にあげた。

「……下崎さん、か。そういや……あと五分で九時か」

鍛錬は学校の下校後の夕方と帰宅しての夕食後の夜の二回に分けて行っている。

約束の時間は確かに迫っていた。

いつもなら十分前には店に着いて待機しているものだから、今日の遅れを不審に思っての念入れの呼びかけなのだろう。

「……ばっくれるか？」

「……蒼助」

ボソリ、と呟いた言葉を聞き捨てなかった人間がいた。

千夜だ。

「だぁってよ、この状態で終わるのか？　終われるのか？　終わっちまっていいのか？　俺は終われねぇぞ、マジで。お前だって……」

「――――行け」

「……」

とりあえず、携帯電話の着信相手と内容の確認をすることにした。

何はともわれまずはそれ最優先だ。

「……ん、メールか。……？」

差出人不明。

見覚えのないメールアドレスのみがそこに掲示されている。

イタズラメールなのか、と疑ったが、蒼助はともかく画面を開いた。

しかし、

「……窓？」

メールの内容も不可解そのものだった。

書いてあることは、いたってシンプルかつ――――やはり不可解だ。

『首を捻って窓を見ろ』

一体何だというのか、と指定どおりの行動をする。

窓に向けて、首を捻った。

「――――――――――っっ！！！！！！」

息が止まる。
そんな驚愕に入り満ちた表情で、蒼助はそのまま凝固した。

「蒼助、三途はなんて……蒼助？　どうした、窓なんか見て」
「っっ……な、なんでもない！」
「……思いっきり何かあった顔で言われてもな」
「なんでもないったらなんでもねぇんだよ！！」
「……好きにしろ」

力一杯ムキになる相手に対抗する気力は先程の中で、千夜は使い果たしてしまっていた。

「……行くのか」
「……この上なく名残惜しいけど」

そうか、と千夜はその心情を顔に隠そうともせず露にする蒼助に苦笑し、

「がんばってくれ。……待ってるよ」
「……っ」

見送る姿勢で、最後に付け足した言葉の含みを鋭く察した蒼助は、溜まらなくなって半裸の千夜を思わず掻き抱いた。

「……土曜日の夜。俺、多分寝かせてやれねぇわ」
「それは……困る」
「いや、無理。……マジで、頑張るから」

「……ぁ、ん」

遅刻覚悟を腹に決め、残る三分は想いの成就の余韻に浸ることへ注ぎ込むことにした。

【九拾六】　共有する感情　（後書き）

……天海のいうR指定なんて、こんなもんですよ？
期待した人――――チキンで、ほんっとスマン。

次回から背景戻ります。

【九拾七】　過去の墓場（前書き）

消えても忘れない
忘れられない

【九拾七】　過去の墓場

夜の九時を二分ほど過ぎた時刻。

蒼助は、現在住み着くマンションにて稼動するエレベーターという名がつく動く密室の中にいた。

その密室は終点である地上――――――１Ｆを目指して下る。

四枚の内壁のうち一枚に背を任せて、到着を待つ蒼助の表情は何故か堅い。

彼は、先程幸せの絶頂に至った、はずだった。

それは予期せぬ水差しによって、本懐を遂げるまでには行かなかったが、想い人との成就は叶ったのだ。

しかし、蒼助の表情はそんな喜びを欠片も表していない。

まるで何かに耐えるようにぎゅっと唇を結び、目つきはいつに増しても悪い。

険悪な空気が狭い空間でその濃度を高めていくと共に、頭上の数字の表示は、５、４、と数を減らして、目的地点の近づきを報せる。

そして――――――

「……、」

エレベーターの動きが止まるのを、蒼助は身体で体感する。

悪魔で自動的に自分のペースで開くドアにもどかしさを感じつつも、僅かな停滞に耐えて、密室から外へ歩み出る。

高級マンションならではの広いエントランスを早足で通り抜けていく。

まずインターフォン前のガラス板の自動ドアを通り抜け、二枚目の外との仕切りとなるそこの前に立つ。

そして、そこから暗い夜に沈んだ外を見つめ――――探した。脳裏に描く相手を。

「――――っ」

エントランスと玄関を明るくする光が届く僅かな範囲内に、その姿が闇から現れた。

黒い衣装に身を包んだ少女は、いつもの微笑を湛えたまま「やほー」と口を動かして手を振っていた。

その姿に、ひくり、とこめかみを引きつらせた蒼助は喉から何かがこみ上げてくるのを感じた。

こみ上げるもの。それは――――

「こ、く、ら、ん……てめぇ、ぇっ」

憤りを開口し、蒼助は一枚の遮りがなくなると共に、

「――――KYにも程があるだろうが、この野郎ぉぉぉっ!!」

メールの主。

そして、窓を通して見たもの。

それらの共通の人物である黒蘭に溜め込んでいた不満を、時間帯も場所も考えずに全力で声帯を震わせてぶつけた。

対する黒蘭は、実に涼しげな態度のまま臆せず対応する。

「甘いわね。”AKY”――――あえて空気を読まない、よ」

「こ、の」

「大体、ルール違反したのはそっちよ？　親切にもわかりやすくイエローカード提示までして思い出させてあげた、慈悲深ーい私に……感謝は？」
「……っ、それは……つーか、待て……もし、仮にあの時……メール無視してあのまま続けてたら……」
「んん～？　そりゃぁ、ね」

中指と人差し指の間に挟んでいたイエローカードが、その二本のワンアクションで消えた。かと思えば、今度は二枚のカードがパッと入れ替わるように指の間に挟まっていた。
その色は、黄と赤。
それが提示する意味は――――

「……た、退場って」
「言っておくけど、本気だったからね？　私、約束破られるのは嫌いだから」

命拾いしたわねぇ～、と少しも崩すどころか歪み一つすらない完璧な笑みを向けられたが、その付け入る隙もなさが黒蘭の『本気』を物語っていた。
危なかった、と蒼助は急に活動速度を上げる心臓を宥めながら冷や汗をかいた。

「……ちなみにいつから見てたんだ？」
「何処からだと思うのかしら～？」

質問を質問で返され、あしらわれる。
こんな時に俊敏に働いたの勘は、『最初からだ』と蒼助に告げた。
ああ、そうだな、とその声に同意し、

「……どーせ止めるなら、いっそのこともっと早くやってほしかったんですがね」
「あら、御褒美をそんな風に言われるだなんて思わなかったわ」
「御褒美ぃ……？」
蛇の生殺しの間違いだろ、と口にしかけるが、
「そうよ。貴方は期待以上のことをしてくれた。だから、御褒美に少しそっとしておいたの。無理に迫ったわけじゃないし、あのコからの申し出だったしね」
「……俺、期待以上のことしてたの？」
「ええ」
どのへんが、と更に聞きにかかろうかと思ったが、何しろ相手は黒蘭であることを、蒼助は冷静になって思い出した。
聞いてはぐらかされるなら、事実をそのまま受け止めておくだけにしよう、と蒼助は踏みとどまる。
「……それじゃぁ、行きましょうか」
「あ？　……ああ、ってオイ」
いつの間にか終わったらしい話を全く引きずる様子なく歩き出す黒蘭。
しかし、歩みは何故か、
「待てよ。行くってどこにだよ。下崎さんのところに行くんじゃ……」
蒼助が全て言い終えるまでもなく、黒蘭は立ち止まった。

「あら、いらないの？　御褒美は、まだもう一つあるのに」
「はぁ？　……まだその話続いて」
「――――――見たくない？　あのコの過去をその目で」
「……っ」
胸に突き入るような問いに、蒼助は続けようとした言葉を見失う。
「結果を出せたコには御褒美をあげなきゃ。……見せてあげる、あのコの過去を」
――――――ついてきなさい。
魅惑的なその言葉に、蒼助の意識はすぐに貪欲な探究心に呑まれた。

◆◆◆◆◆◆

自分はこんな風に、何の疑いもなく他人の口車に乗る人間だっただろうか、と黒蘭の後をついて歩きながら蒼助は後になって湧いてくる若干の後悔と共に自己分析に浸っていた。

頭はよろしくない。それは自分でもよくわかっている。
だが、その分本能的な勘には冴えているとも思っている。
他人に必要以上の施しを受けない為にも、蒼助はそれに頼り、研ぎ澄ませる努力をしてきた。
そうして、誰であって最初の接触では疑うことから始めるようにした。
蒼助はそれを間違っているとも、悪いとも思っていない。
信用とは、そういうものを乗り越えて得たり与えたりするものだと考えている。
疑う中で、一瞬閃く勘。
蒼助はその左右によって対人関係を積み上げてきた。

なら、その実に頼もしい蒼助の勘は今、黒蘭に対してどう囁きをくれたのか。
実になんとも言い難い御告げだった。

信用はしてはいけない。
だが、信頼はしていい、という。

……どういうこった。

一体、自分の本能はどういう判断を目の前の存在に下したというのか。

信じて、『利用』してはいけない。
信じて、『頼る』のはいい。

この二つの言葉のニュアンスの微妙な違いからして、こういうことになるのだろうか。

……まぁ、確かに一理あるわな。

黒蘭。

この小さな少女の外見で、人の目を欺く得体の知れない大きな存在。

二桁、ひょっとしたら三桁ほどの年月を積んでいるかもしれないこの大いなる存在は、たかだか生きて二十年にも満たない自分なんてちっぽけな輩が利用しようなんて、明らかに己の分を越えている。

欠片でもそんな大それたことを考えたら、あっという間にボロ雑巾のように使い回されておしまいの未来が確定してしまうだろう。

しかし、頼るという選択には些か頷きかねるのだ。

理由なんて、単純明快――――――謎が多すぎる、に尽きる。

何を考えているかもわからない。

何故、千夜にそこまで手を尽くそうとするかもわからない。

挙げればいくらでも疑念はあがる。

それに対して、わかっていることはたった一つしかない。

黒蘭は、千夜を――――――想っている。

それも、蒼助と同じ形の感情で。

同類と称されて、本当にそういう共感意識が自分の中にあるかは、蒼助自身にもわからないことだったが、それだけは肯定であると告げる自分が内側の片隅にひっそりと居座っている。

……まぁ、信用できるとか信頼できるとか……考えてもしょう

がねぇことだけどよ。

結果と真実が何にせよ、今はこの女の掌の上で踊るしかないのだ。

なら、せいぜいこの女のいう期待以上とやらを実現するしかあるまい。

踊って踊って、踊り切る。

それ以外に、抗うことすら出来ないし、しない方がいい。

「――――着いたわ」

「あ？　……って、ここ……」

到着の報せによって、自分の世界から引き戻された蒼助は、黒蘭のいう目的地を視界一杯に映す、が――――

「……教、会？」

「そうよ。名前は聖・秋草教会」

そう称された到着場所は、確かに教会以外の何物でもない。

しかし、かなりの年月を積んでいるのかどうかしれないが、神聖さを感じるには少々寂れた建物だった。

敷地はそれなりに広いが、手入れがあまり行き届いていないことを表す雑草やら壁を這う蔦などが目立つ。

「……ボロイ、な」

「正直な感想だこと。そういってやらないで。一人で管理するには広すぎるもの」

「一人って……あ、待てよ」

勝手にスタスタと中へ入ってしまう黒蘭の後を蒼助は追う。

雑草に足をとられそうになりながらも、難なくさっさと前を行く

黒蘭と距離を詰めようと足を進める。
そして、出入り口たる大きな扉の前に来た時、

「……、ん？」

建物の中から何かの音が蒼助の耳に聞こえた。
それは、単に音と言い切ってしまうには単調ではなくて、それは

――――

「声、が……」

人が中にいることを証明する声。
それは何かを話すようなそれではなく、注意して耳を立てていると、

「……ここの管理者である修道女（シスター）が歌っているのよ」
「シスターが一人で……道理で寂れるはずだぜ」
「それだけじゃないんだけどね」
「ん？」
「いいから行きましょう。……彼女が歌っているうちの方が、彼らに会える可能性が高いから。さぁ、この建物の裏よ」

進行が再開した。

◆◆◆◆◆◆

蒼助は病院が嫌いだ。
特に大きな病院で、人――――患者の出入りが激しいところは。
あの施設は見方によっては、人が死を待つ場所。
そして、最も死が溜まりやすい。

そして、そこに並ぶもう一つの同位の場所がある。
蒼助は失念していた。
一応は日本における”和”に囲まれて育った蒼助にとって、縁遠かった為、教会にも形が違うとはいえ、”それ”はあるのだ。
教会も、病院と同じように――――そういう一面を持つ場所であった。

「うっわ……こりゃまた、大量」
「そりゃぁ、――――墓地だもの」

至極当たり前のことを応えとして返す黒蘭は、やや引き気味の蒼助と違い、少しも臆することなく目の前の”絶景”を傍観する。

立ち並ぶ数えるには些か気が遠くなる無数の墓標。
そして、同じように漂い、彷徨う同じ数だけの霊魂。或いは墓よりも多いかもしれない。

幽玄にして、幻想的な何処までも現実離れをした光景。
これに対して取れる反応は、恐怖におののくか、思わず見蕩れるかだ。
蒼助はどちらかと言えば、背筋が少し寒く、前者に偏る方だった。

「薄気味悪ぃな……くそっ」
「あら、そう？　ちょっと大きめの蛍が飛び交ってると思えば、なかなか風流を感じるけれどねぇ」

「そりゃ、どの季節の風流だよっ。……悪趣味め、これは幸せ気分の俺に対する嫌がらせかぁ？」
「御褒美だって言ったでしょ。……ほら、こっちよ」

そう言って、黒蘭は霊群の中を平然と突き進み墓地を行く。
あまりの数のそれに、さすがに気が引けながらも蒼助はその後に続いて、進む。

「しっかし、すげぇな……俺んちの墓地にだって、これだけの量は……」
「ここだから、よ。この時間帯には、普段は別の場所で屯する霊魂も誘われてやってくるの。いわば、彼らにとっては憩いの場所なのよ、この教会の墓地は」
「……なんか、特別なのかココ」
「特別……そうね。自分たちを分け隔てなく慰めてくれる歌姫がいるという点でいえば、紛れもなく特別な場所なんでしょうね」

呟く言葉はあまり自分にかかわりの無いことのようで、蒼助はあまり耳を貸さなかった。
他に意識を否が応にも引き付けるものが周囲のそこら中に漂っているからだ。
退魔師としての才能がないことに、唯一特として見出していたのは霊域に赴いてもあまり霊魂が見えないことだった。
それは退魔の業を誇りとする家に生まれた者として、大いに嘆くことであったが、蒼助はその点では助かっていた。
いくらそういう家に生まれ、或る程度の耐性をつけているとしても、やはりこの世ならざる存在を認識して目に映すのには幾分精神的にクるものがある。
神経の細い者は、己の運命に耐え切れず自ら命を絶ったという例だって、実のところは少なくないのだ。

結局のところ、才能だけあってもダメなのだろう。なかなか難しい話だ。

「なぁ、本当に何でこんなとこに……あいつの過去を見せるったってさぁ」

「はい、ストップ。――――ここのあたりよ」

「……ぁ？」

蒼助の愚痴などまるで聞いていなかった振る舞いで、黒蘭はその歩みを止めた。

しかし、墓地の中を通り抜けたわけではなく、まだその中に立っている。

「……それと、それと、……あと、それの大きいのと小さいのも……」

「……その墓が何だって？」

「これらは、過去が眠る墓よ。千夜の過去を抱き込んで眠る者たちの、墓標……」

「――――っ、それって」

ようやく気づいたか、と言わんばかりにクスリと黒蘭が蒼助に笑みを向けた。

「そうよ。彼らは貴方と同じく……千夜に惹かれ近づこうとした同類……そして、それが叶うことなく過ぎ去っていった者……千夜の中に傷痕だけを遺して、ここで永遠の眠りについた過去の人間達」

僅か数刻にも足らない少し前に見た、千夜の憤る姿が蒼助の脳裏で再生される。

揺さぶった際に、零れ落ちた過去の破片。
過去の千夜に関わった人間。
身を挺して千夜に望まれなかった守りとなった人間。
過ぎ去りながらも、存在した証を千夜の中に刻み込んで逝った人間。

それが、

「……一番右の大きいのと小さいのは、情報屋もかねていた殺し屋とその娘。その隣が、暴力団に飼われていた娼婦、その次はヤクザの舎弟。……どれもこれもマトモじゃないけど、千夜にとっては親しい友人に違いは無かった」
「……あ、」
「何？」
「……いや、何でも……ない」

昔の女の墓はないのか、と尋ねかけたが、一般人であったのならこんなところで世界の裏側を生きて朽ちた人間と並べて埋葬などされるはずがないという当然の考えに思い至り、蒼助は聞くまでもないことであるとその言葉を濁して飲み込んだ。

「……何で、死んだんだ？」
「それはさすがに私の口から語るには憚られる事柄だわ。……いずれ、彼らの口から聞きなさい……”死人に口なし”っていうけど、今の貴方にはこれも通じないでしょう」
「聞けって……――――！」

無茶苦茶言うな、とざっくばらんな黒蘭の対応に不満をもらしかけたところで、蒼助は息を詰まらせることで言葉を紡げなくなった。

「ああ、やっぱり……旨い具合に条件も揃ってちょうどいい頃合いだったわね。……見えるでしょう？　――――彼らの姿が」

言葉をなくす蒼助の前に、現れるのは――――――無造作に漂う中で、確かな意図を感じさせる動きで指定されたそれぞれの墓標を漂う四つの青白い霊魂。

じっ、とそれを直視していると、霊魂は蒼助の意識の集中が高まるにつれて、陽炎のような不安定な人の形をとった。

人影と呼べる程度であったそれは、徐々に性別やその個性を明確にするまでに至った。

大と小の二つの墓には、お互いに寄り添うようにしているパジャマ姿の小さな少女とその母親と思われる、やや目つきの鋭い女。

その隣には、白髪に赤目という常人離れした外見に、娼婦が持つ妖艶さの中に何処か不思議な無邪気さを感じさせる妙齢の女。

最後の一人は、紹介された生業を感じさせるいかにもな風体をした若い男だ。

不思議なことに、亡霊特有の不穏な雰囲気は汲み取れないが、背景が透けて見えるところはやはり幽霊であることには違いなかった。

彼らはこの来訪と、初めて目にする蒼助の存在に戸惑いを隠さず、説明を求める視線を黒蘭へと向けていた。

黒蘭は、そんな何一つ状況を理解していない彼らに微笑み、

「……吉報を伝えに来たのよ。この男がついに千夜のハートを射止めたものから、連れてきたの。ち・な・み・に……あの千夜に誘わせるなんて真似を自発的のさせたまでよ」

「……そこ、報告すべきポイントと違くない？」

こいつに見られてる中であんなことやこんなことしてたのか、と十数分前のあの行為を振り返ると別の意味で羞恥心が蒼助の中で沸いてくる。

亡霊たちの反応はというと――――多種多様だった。

ヤクザの男は明らかにショックを受けた様子で表情を強張らせた後、蒼助を仇を見るような目で睨みつけてくる。蒼助は、男の本能でこの亡霊にはいずれその経緯諸々をじっくり聞かせてもらねばなるまい、と察した。

朱里と同じくアルビノと思われる容姿の女は、男とは対照的に驚いた後に顔一杯に嬉しそうな笑みを湛え、はしゃいで両手を叩くなど子供のような反応を返す。祝われているというのがなんとなくわかるが、蒼助はなんともいえない気分になった。

親子の亡霊はというと、母親はニヤニヤ笑いながらも、子供の両耳をしっかりと塞いでいる。次に黒蘭の口からどんな教育に悪い言葉が出るものかわからないことへの対応なのだろう。これが一番まともな反応と思ってしまうあたり、大分毒されていると蒼助は改めて己を知る。

「なんだろうな……まるで、恋人の父親に娘さんを下さいと言いに来て当のしかめっ面の父親の横で興味津々のその他家族に突付かれてる気分、つーのか、こりゃ」

「そんなもんね。……それじゃぁ、行きましょうか」

「はぁっ？　今さっき来たばっか……」

「タイムリミットよ。そろそろ【歌】が終わるわ……彼らとは、また今度じっくり話して。もう少し鍛錬すれば、思念を聴き拾えるようになるから」

そういうと、黒蘭は本当に引き返すべく歩き出してしまう。

切り替えの早さに蒼助は己の行動を迷うが、墓地に一人置いていかれても困るので、

「……あー、っと……ま、またなっ」

とりあえず、また来ると宣言だけはしておき、その後を急いで追う。

ちらりと、横目で見た亡霊の一部（アルビノ女と子供）が手を振っているのを確認しつつ、黒蘭の背中に迫り、

「……おい、何だよ。タイムリミットって、つーか本当に何しに来たんだよっっ」

「……貴方ねぇ、怨霊とか生霊の強い思念を持った類じゃない……魂魄体でふよふよ漂うとかしかできないの一般人のただ亡霊に生前の姿をつくることなんて出来るだけの力があるわけないでしょー？」

「……そうなのか」

「……」

「……ほんと無知でごめんなさいだからその目は勘弁やめてーっ」

こんなんばっかだ、と黒蘭の哀れみ入った冷たい半目の視線に己の知識不足をそろそろ恨めしく思えてきた蒼助だった。

「……では、何で力のない彼らが人の形をとれるのか。それはねーーーーーー【歌】よ」

「歌？　歌って……まさか、さっきの」

「正解。ここの修道女（シスター）が紡ぐ歌には、霊的存在に非常に大きな効果・影響を与える力があるのよ。効果は色々だけど……ここであげるなら、【鎮魂】と【補助効果】かしら」

黒蘭は周囲の夥しい数の霊魂を見渡しながら、

「この場にいる霊魂から、邪気とか陰の気は感じないでしょう？
それはね、この歌が、現世に留まる限り彼らの魂に溜まっていくであろう穢れや負の念の残滓を清め、魂を鎮めているからよ。己の死、生きている人間から認識されないということから感じる孤独と孤立感……それだけでも負の念を蓄積してしまう不安定な彼らは、安定を求めてこの場所にくるのよ。この歌に載せられた、”おいで”っていう想いに誘われてね。それが、この歌が持つ【鎮魂】の効果よ」

「……それで、補助っていうのは……言葉通り？」

「そう。未練からその魂（み）を浄化することもできず、本来ならそぐわない現世に存在するだけで力を削って消え去ってしまう可能性を取り去る為に、この歌には現状維持させる霊力の上昇及び支援効果が相乗されているのよ。特に、ここに埋葬されて長いこと在る亡霊はああやって人の姿を保てるまでになれるってわけよ」

「……歌が流れている間限定、か？」

「もう、歌が終わる。次は日付が変わる頃ね……」

「真夜中かよ……よくやるぜ。奇特なイキモノだな、シスターってのは」

「品性ってやつが著しく欠けた現代においては、清らかな役職が奇特に成り下がるんだから世の中世知辛いわねぇ……」

クスクス、とおかしそうに笑い声を零す黒蘭の大分下にあるその頭上に、蒼助は問いを降らす。

「……で、俺への御褒美って言うのは警告だったわけ？」

「……どういう？」

「気ぃ抜いてるとああなっちゃっうわよっ、てか？」

「……半分、ね」

それは正解の領分だろうか、と蒼助が尋ねようとすると、

「……貴方は、何故ああなったと思う？」

「、あ？」

出鼻を挫かれた蒼助は唐突かつ一方的な問いに対し、返す返事を躓いた。

「……何故、彼らは死ぬ羽目になったと思う？」

「……弱かったとか、そういう単純な理由じゃなくて、別の何かがあるっていうのか？」

「――――」

「……う、わっ！？」

黒蘭はそこで、ふと足を止めた。

突然の停止に真後ろを歩いていた蒼助は小さな障害物を前につんのめった。

「あー、びっくりした……いきなり止ま」

「……相手の気持ちを確かめるのに、必要になるものは何かしら？」

「……今度は突然何だよ」

「い・い・か・ら」

グイっと顔を真上に仰いで、目で真剣な問いであると訴えてくるので、蒼助は答えなければならなくなった思い、

「……言葉、じゃないか？」

「ハズレ……でも、少し惜しいわ」

「……あ〝ー、ギブ」

早くも根を上げた蒼助に別段失望した様子はないが、一息ついて、

「――――正解は、勇気よ。言葉を紡ぐ……勇気」

勇気ときた、と拍子抜けした蒼助だったが、そんな気の抜けた状態でも容赦なく刺すような残酷な内容を黒蘭は語り出す。

「……言葉を、想いを……互いが紡ぐ勇気がなかったから。口にしてしまったら、壊してしまうかもしれない、失ってしまうかもしれないという不安……それ故に紡げなかった。そして、それ故に結局は失ってしまった……共に在る時間を。生きて傍にいる間に、一言でも……傍にいたいと、或いは傍にいていいかと疑問でもいいからそう言えていれば……今も千夜の傍にいたのは彼らのうちの誰かだったかもしれない」

あのね、と黒蘭は今度は諭すように続けた。

「言葉っていうのは、案外馬鹿にできないものなのよ。……言わなくても気持ちが通じているなんて、所詮は奇麗事なの。言わないと自分の気持ちがわからなくなるし、言ってもらわないと相手の気持ちもわからなくなる。そうしてまごまごしているうちに擦れ違い、やがて取り返しのつかない事態に見舞われて……望なくても別れが訪れるのよ」

「……あいつらは、言えなかったのか？」

「千夜もね。……どちらでもいいから、もし言えていたら……千夜は、彼らを救えたはずよ」

「……」

やはり、警告なのだろうか。

行いを間違ったが為に、彼らは命を落とした――――いわば、

悪例。
　過去の失敗を見せ、お前は間違えるな、と言われているとまでしか蒼助にはその意を汲めない。

「……わかってないわね」
「へ？」

　違うのか、と自分の考えを否定されて、もう何がなんだかの状態になった蒼助に、黒蘭は溜息を零しながら、

「……ここに貴方を連れてきたのはね……貴方が、あのコに言わせたからなのよ」
「言わせたって……っ」

　思い当たったという表情を見て、黒蘭は目を細めて笑う。

「……よく出来ました。さすがの私も、あそこまでやってくれるとは思ってなかったのよ？　だからこその御褒美だったわけ。……貴方は、過去の彼らよりも一歩先を抜きん出て、リードしたわ」
「それって……すげぇことのなのか？」
「他が出来なかったことを出来るというのは、そういうことよ」

　そうか、すごいことだったのか、とあの時言われて嬉しかった言葉の有り難味を改めて感じるテンション右上がりの蒼助。
　しかし、

「……あと一回できたら、完璧よ」
「ん？」
「あと一回。貴方と千夜の二人が、あと一回でもそれをちゃんと言えたら、本当の意味で一安心だっていうのよ」

「……何で？」

『傍にいたい』。

これはもうお互いに確認したことだ。

あと一回言えたら何がどう安心するのだろうか。

不可解過ぎる発言に対する説明はされないのかと思っていたら、

「私が言わなくても、いずれわかるわよ。……それが、如何なる状況下で行われるかで、どれだけ難しいかもね」

「……ふうん」

肝心なところははやり伏せてしまう気でいる、とわかったところで、蒼助は言及を諦めた。

「さて……そろそろ約束の時間を三十分くらいオーバーするけど」

「……」

「……ここから歩いて向ったら、更に十分強の追加……ヤバイ？」

「……超ヤバイ」

あまり考えないようにしていたことだが、そろそろ現実に帰らなければならないらしい。

デカくて無骨な図体に似合わない几帳面さを備えるあの大男は、時間にはうるさい。

だから、遅刻常習犯の習性を抑えて、らしくもなく十分前に到着をいつも心がけていたのだ。

一分一秒の遅れすら甘んじないだろうに、この多大なタイムロスをあの男はどう受け取るかなんぞ正直考えたくもない。

ひょっとしたら、ドアを開けたら、挨拶も言い訳も許さない剛拳が頭部を吹っ飛ばす勢いで向ってくるのではないだろうか。

この想定は多数決など意味がなくなるほど『是』の色が濃い。濃すぎる。

「そんな先のない未来に絶望するリストラ社員みたいな顔しなくても、ちゃんと助けてあげるから。おまけ、でね」

「それが一番御褒美っぽいよな……」

いまだ重い足取りで、蒼助は黒蘭と共に本来の目的地――――今となっては怒れる大魔神の待ちうける場所となったそこへ向かうことにした。

しかし、新たな意思を以って踏み出そうとた一歩に何か引っかかりを感じた。

「……あのさ」

「なぁに？　まだ何かあるの？」

「……あいつの縁つながりの亡霊っていうのは……あれで、全部なのか？」

「……何でまたそんなことを？」

「まぁ、気になっただけなんだけどさ……あいつの話の中には、時々いるんだよ」

「……誰が？」

「自分に色々教えてくれた人……まぁ、先生とか恩人みたいなのがさ、話にたまに出てくるんだよ。……もう、死んでるのはなんとなくわかったから……ひょっとしたら、あの墓地にいるんじゃないかって思ったんだけどよ……あの四人は、違うよなぁ？」

彼らは違う、と人目見た瞬間に蒼助は判断を下した。

千夜に救われ、助けられたかもしれない。

だが、逆は無かっただろう。助けたかったかもしれないが、皮肉なことに彼らが与えたのは哀しみと喪失だった。

「……ちゃんとわかってたのね。会いたかった？」

「そりゃ……まぁ、幽霊でもなんでも会えるもんなら会っときたいさ」

千夜に大きくかかったというのなら、と続けると、

「……あの一帯から、人目がつかないところに隔離された墓が一つあるわ」

「……何で、隔離？」

「……ゴタゴタとやかましいのが嫌いだったから、と千夜が頼み込んでまだ空いている離れた広いところに埋葬させてもらったのよ」

「死んだ人間にそこまで気を使うかよ……あいつらしいけど」

「それだけじゃないわ」

そこで打たれようとした終止符を蹴飛ばすような、響くような口調で黒蘭は歩みの停止と共に放った。

大事なことを付け足そうとしていると察し、蒼助は自然と足を止めた。

「……【彼女】は、特別だったのよ」

「特別？」

「そう、特別。……大仰に言うなら【彼女】という存在は――――――千夜の全ての始まりだったわ」

全ての始まり。

言うとおり、大仰な言い振る舞いだ。

だが、すんなりと受け入れられる。
その【彼女】とやらが話の中に現れ始めると、千夜は気づいていないだろうが遠くを見つめるような虚ろを目に宿す。
あれだけ過去を振り解こうと前を向いて歩く姿勢の人間が、その時だけは過去に縋りつきたそうな雰囲気を垣間見せるのだ。
【彼女】が、ただならぬ存在で、ただならぬ関係だったという事実もうっすらと見える。

「……その女が死んで、千夜は泣いたのか？」

過去にただ一度だけ、どうしようもなく泣いたという千夜の言葉を思い出しながら、問いかける。
返答は、

「ええ。泣いたわ。まるで……この世に生を授けた赤ん坊が最初に発する産声のような泣き声だったわ……」

面妖な言い方だ。
人が死んで泣くだけの行為を、そんな風に例えられると、不思議と神聖さを感じる。

「大仰しすぎね？」
「……泣き方を忘れかけていた人間が、四年ぶりに泣いたのだから別におかしくはないんじゃないかしら」
「……そりゃまた深刻な情報をポロリしてくれてどうも」

どうやら千夜を泣かせるところまで持っていくのは、相当な偉業に値するらしい。
自分が初めてではないのはそれほどショックではなかったが、あの中に既にふんぞりがえって居座る存在がいるというのは、少し、

否結構なジェラシーを感じる。

「……あー、なんか是が否でも会いたくなってきたぞ。……いつか、連れてってくれるか？」

「別にいいけど……でも、会えないわよ？」

「は？　何で……」

「他と違って、もういないのよ……何故か、ね。天寿をまとうするには、些か千夜への未練を遺し過ぎた彼らはこの地に己を縛り付けているのに対し、【彼女】はそうならなかった。……いろいろ気にかけることも残っていたでしょうに、割とあっさり放任主義に転身しちゃったのね」

「……成仏しちゃってるってことか？」

「そうなるわ」

話が決着すると、蒼助は己の中で【彼女】という女性への感情が変わりつつあることに気づく。

元々抱いていた興味と好奇心。それが無責任とも思える行動をとったその姿勢に対する怒りと、それにも関わらず千夜の奥底を陣取ることへの嫉妬へと変貌していく。

「わかりやすいわねぇ。男の嫉妬は醜いわよ」

「……うっせ」

そんなにわかりやすく顔に出ていただろうか。

どうにもならない黒い感情を抱えながら、蒼助は別れて然程たっていないにも関わらず、無性に千夜の顔が見たくなった。

【九拾七】　過去の墓場（後書き）

嫉妬マン・蒼助。

やつは、ゆくゆくは嫉妬魔人へと進化する生き物です（予定）

【九拾八】　胸に落ちるもの（前書き）

こうして無遠慮に触れられても、寛げる
その理由も、きっと

【九拾八】　胸に落ちるもの

生き方を決めて、それに相応する為に鍛え痛めつけた身体は、いつのまにか本当の意味で熟睡が出来なくなっていた。
だから――――――

「ねぇ、今日もソファで寝るの？」

共に暮らし始めて一ヶ月ほど経ったある夜に、彼女は俺の就寝の仕方に疑問を抱いたのか、そろそろ寝ようかという時になってそんな事を聞いてきた。
疑問の中にある言葉通り、そのつもりでいた。

「……まだ何か不満があるのか」

以前、壁に寄りかかって寝ようとして頭を蹴られた。
『私の家は、野宿でするような寝方をしなければ寝れないとでも言いたいの？』とかなんとか言いながら、据わった目つきで見下ろして足が追撃の準備をしていたので、仕方なく妥協案としてとりあえず”横になる寝方”はするという前提でソファを使用するようになった。
それでも完全に満足した様子ではなかったようだが、何も言わないでいてくれたからそれに甘んじていたのだが、

「……あれから何度も考えても、やっぱり出る答えは変わらなかったわ」
「そうか。……それであんたは、また同じ事を俺に言ってくれるのか？」
「言うわ。――――――ベッドで寝なさい」

「断る」

ぴりっとした空気が、彼女との間に発生したのを感じる。
出会ったばかりの頃、最初にこの話題で揉めた時と同じものだ。
あの時は俺の妥協で妥協させ、なんとか今日まで話を打ち切ったが、再び挙がってしまった今日はどうなるのだろうか。
そんな勝負の行方を思いながらも、当の相手との睨み合いを押し負けないようにと続けた。

「理解できないわ。大して差は無いと思ってるみたいだけど、ソファって正直固くて腰とか肩とか痛いのよ。昼寝程度の短時間ならともかく夜を通すと後遺症が残るのに、よく寝てられるわね」
「壁よりは遙かに柔らかい方だと思うがな、俺は」
「それはそもそも比較対象がおかしいわ。……大体、何でそこまでベッドを嫌がるの？」

そこから説明しなくてはならないのか、と千夜は少しだるくなった。
あの時と同様に「あんたには関係ない」と、拒絶してしまえばよかった。
しかし、一定の時間を共に過ごした今、依然は張り詰めていた琴線は気がつけば緩んでいた。

「ほら、お母さんに言ってみなさい」

お母さん。
その言葉を聴いて、なんてくだらない『関係』を結んでしまったのかと後悔が募る。
何もかもなげやりだった気分に任せてしまったのが失敗だった。
だが、既に済んでしまったことだ。後悔しても、どうにもならな

い。

「……別に、ベッドで寝るのが嫌いなわけじゃない」

「なら、どうして」

「何処で寝ようが変わらないからだ。もたれかかろうが、横になろうが……俺の眠りはどうしても浅い。そういう習性が身についているんだ」

近づく気配を感じることもなく眠り続けたのはいつが最後だったかなど、もう覚えていない。きっと、そのくらいなくなって久しいのだ。もしくは――――忘れたかったから、早々にその記憶を廃棄しただろう。

「それに、他人の匂いがついた場所では眠れない。ここに来たばかりの頃も……睡眠の平均時間は三十分あるか無いかだった」

「……」

顔を見ずに捲くし立てると、彼女は沈黙で対応してきた。

さすがにこれだけ言えば、付け入る隙はあるまいと今度こそ言い負かした気配を、俺は感じていた。

親切心から言っていることはわかっていた。

だが、些か強引さが目立つ彼女のそれにはどうにも素直に応じてやれる気にはなれない。

切り捨てた罪悪感が徐々に内側で染み出してきたのを感じ、俺自身がこの沈黙に根負けして折れてしまう前にソファの上に逃げ込もうと背を向けた。

が。

「落ち着かないから眠れない、とでも言いたいわけね……嘘つき、違うわ」

突然口を開いたかと思えば、出てきた言葉は実に遠慮のない攻撃的なものだった。

「――――怖いだけよ。貴方は、他人の領域（テリトリー）で独りきりでいるのが怖いだけ」

「っな……！」

無遠慮を通り越して、失言の範疇にまで及んだ明らかな行き過ぎた発言。

聞き捨てならずに思わず振り返ってしまったのが、ここでの俺の最大の敗因だった。

「いい加減にしろよ、アンタ！　何もかもわかったような顔しやがって……たった一ヶ月足らず一緒にいただけで俺の何をわかった気でいるんだっ！」

「大袈裟ね。別にそんなつもりはないわ。……でも、貴方は今振り返ったわ」

「だからどうした！」

「わかったことは一つあるのよ。貴方は言いがかりに対しては一切無視するわ。……けれど、本当に言いがかりだったらどうして無視しなかったの？」

「っっ……」

返す言葉が出てこなかった。

認めない、と心は叫んでいるのに、その想いを形にする言葉が見つからない。

それが真実だった。悔しいことに。

「ち、がう……」

苦し紛れな言葉を零して、情けなさが一層増した。

こんな女に翻弄されている自分が、どうしようもなく情けなくて失望を覚えた。

一番認めなくないのは、こんな風にあっさりと突き崩されている自分だった。

「……――――来なさい」

「……」

「……おいで、かずや」

「――――っ」

絆すような優しい口調。

出会った時、そう呼ぶからと一方的に定められた自分への呼び名。

この二つが合わさったことで、意固地になって固まろうとしていた部分があっさり溶解するのを己の内側で感じた。

視線を彼女に戻せば、何処かに向う姿勢でいて片手で来い来いと招くような仕草をしている。

反抗心も今さっき一緒になって溶けてしまった。

彼女の後に続く足取りを阻む感情は、もはやなかった。

彼女はリビングを出ると、廊下の突き当たりにある二階へ続く階段へと足をかけた。

その先には、彼女が使用している寝室があるのを俺は知っていたが、何も聞かずにとにかくその後についていく。

「入って」

部屋の前についてドアを開けると、彼女は俺に入室を促す。
言われるがままに足を踏み込み、彼女のテリトリーの中にその身を投じた。
無駄なものは一切無い、こざっぱりとした部屋。
ただ一つ、視界を大きく占める家具がある。
寝台（ベッド）だ。
そこにだけはこだわりを感じる、大きくて上質なベッド。
一人で寝るには、サイズが大きい気もした。

パタン、と静かに退路が閉じる音がして間もなく彼女が俺の横に並び――――そして過ぎた。
俺の前でベッドに歩み寄ると、スプリングの効いた音を鳴らしながら上に乗り上げて、

「……カモン」
「……」

レトロかつベタな『ベッドに誘う女』のポーズをとってみせた。
何かよくわからない白けた空気に諭された気がして、帰ろうと自然と身体が動こうとする。

「コラ」
「……何だ、ふざけているなら俺は戻るぞ」

後ろの服の端を掴んで留めようとする彼女に言うと、

「一緒に寝ましょう」
「……イ、やふぐぅっ！？」

律儀に言葉で応えずに振り払えばよかったのだ、と気づいたのは彼女の腕が首に引っ掛けられた直後だった。
強引な締め付けと共にベッドの上に引き倒される。

「っぐ……げほっ……なにす」
「いいからいいから」

苦しんでいる間にテキパキと俺の身体に掛け布団を被せて自身もその中にいそいそと潜りこむ。
普段は鼻をかむテッシュ箱を取りにいくのすら他人任せにするくせに、こんな時だけ異様に活発的になる上手際がいい。

「……オイ」
「……二人一緒なら、平気でしょ」
「……他人の匂いは嫌いだ」
「そろそろ少しは慣れたでしょ？　どうしてもダメなら……待つわ、あなたが私の匂いに慣れるまで」

辛抱強いのか、強情なのか。
いずれにせよ、彼女は俺を見放す気がないということだけは確かなことで、理解できた。

「……わかったよ」

結局、俺が折れるしかないという結果を迎える。
不思議だ。いつだって、彼女を振り払えない。
振り払えていたら、俺は最初からここにいなかっただろう。

「そうだわ。子守唄を歌ってあげる」
「……俺は子供じゃない」

「そんなことをいっているうちは子供よ」

もっとこっちに来て、と手招かれ、背中を丸めるように身を寄せる。

それ以上動かない俺に焦れたのか、彼女が自ら動いて密着する。

首筋に俺の顔が埋まるようにすると、自分は俺の頭に頬を付ける。

呼吸をすると彼女の匂いをまとった酸素が舞い込んだ。

その匂いに、何故か安堵と共に眠気を覚えた。

「ねーんねーん……」

頭の上で彼女が口ずさむ唄がふわふわと漂う。

ゆっくりと転がすような歌詞がするりするりと耳に入る。

初めて聞くはずなのに、何故か懐かしいと思った。

そんな感覚を覚えるのはそれだけではなかった。

彼女の匂いも。

彼女の唄う声も。

背中を撫でる手つきも。

服越しの温もりも。

それら全てに同じ感情を感じていた。

何故。

その疑問に対する解答を見つけられないまま、俺は彼女に眠りの中に落とされた。

◆◆◆◆◆◆

意識が落ちた一瞬の後、暗闇の中で再び意識が起きる。
そこで、今までが夢だったのだと千夜は認識した。
夢の中で眠ると同時に起きるなんて奇妙な感覚だと思いながら、千夜は体内時計が発する無音のベルに従って起床特有の怠さを宿す瞼を開こうと試みる。

「……ん、っ」

身じろぎして、いつもよりベッドが狭苦しいと感じた。
ここ暫くホテルで一人で広いベッドを使っていたせいだろうか。
しかし、それにしても朱里が潜り込んでいた時のそれよりも窮屈さが増しているように感じる。
それに加えて、身体の上に何かが乗っかっている。
これは一体なんだろう、という疑念と共に身動きの不自由さに不満に突き動かされ、その正体を知ろうと強引に視界を開く。

「……っ……？」

壁。そう思わせる堅くて厚みのあるものが鼻の先にあった。
黒くて薄い布の向こうには日に焼けた健康的な肌色が見えた。
それが人の肌であることにぼんやりと思い至り、ハッと我に返り動ける範囲が制限させた僅かな隙間で顔を上げると、

「……そ、うすけ？」

まだ起きる気配もなく寝付く蒼助の穏やかな寝顔が目に入った。
肩のあたりに乗っかっているのは、千夜の身体を抱き寄せる蒼助

の腕だった。

「……な、何で……」

予想だにしない光景と状況に動揺し、思わず千夜は蒼助から逃れるように身体を起こした。

蒼助を帰りを待たずに寝たのは覚えている。

とりあえず、鍵は開けておいたので帰って来れるだろうと踏んで、自分は寝不足を訴える身体の要求をあっさり呑んで久しぶりの己のベッドに潜り込んだのだ。

あんなことがあった後で、蒼助とどう接すればいいかわからなくてとった一時的な逃避行動だった。

それに比べ蒼助は気まずさとか気恥ずかしさといったものとは無縁の神経の持ち主なのか、全く気にしていないのか、こんな行動に出て来る。

「……パジャマで寝てよかった」

想いを交わした後で、そんな気遣いは今更無意味だろうに、と蒼助が起きていたら呆れただろうが、当人はいまだ眠りの坩堝に落ちている最中だ。

何を思う事も無く、千夜はなんとなく蒼助の顔を見つめた。

蒼助の薄く開いた口からは、規則正しい寝息が聴き取れる。

無意識のうちにそこを一点集中して見つめてしまっていた千夜は、昨日そこが自分の身体の至るところに触れたことや、何をされたかに関する記憶を鮮明に思い出し、

「――――っっ！！」

ボッと火がついたように身体が熱くなる。
蒼助が出て行った後にシャワーを浴びて流しても尚、まだ身体には蒼助の痕跡がこびり付いているような錯覚と、それに対する羞恥心が一層と高まっていく。

「……ん……」
「っ！」

今ままで微動だにせず、惰眠を貪っていた蒼助が突然身じろぐ。
眉が僅かに顰められ、先程まで肩にかかっていた手は何かを探すように蠢いていた。
その手が手探りで腰辺りに辿り着くと、くいっと弱いながらも力を込めるのをそこで感じた。

「……今」

何時だ、と机の上の目覚まし時計を見ると、二つの長短の針は五時半を示していた。
通常の起床時間よりも早く目を覚ましてしまったようだ。
あんな夢を見たせいか。
それとも、隣に当然の如く潜り込んでいる人物のせいか。
いずれにせよ、まだ活動の時間には至っていないという事実だけは確かだった。

「ん……かず……」

名前を呼ばれ、ドキリと身を竦ませた。
このまま放っておくと起きてしまうのではないか、という危惧にも似た焦りを千夜は覚えた。
咄嗟に元の位置に身体を滑り込ませて横たわると、蒼助の腕が腰

を抱くように回る。
胸に千夜の吐息が当たるまで密着すると、蒼助はようやく安心したのか再び落ち着いた寝息を繰り返し始めた。

「……抱き枕にされた」

ぽそりと呟いたが、それは不満ではなかった。
決して過度が力が込められているわけではなく、柔らかな抱擁は寧ろ心地がいい。
額を胸に押し付けると、一定の心音を聞こえ、それが蒼助という男が確かにここに存在していることを確信付けさせてくれて、胸の奥に深い安堵を生む。
ふと、先程の夢を思い出す。

「……ああ、だから」

懐かしい夢だった。
最近は、夢に【彼女】が異様に出張ってくる。
それが何故なのか、今ついに納得する理由を見つけた。

動きにくい中、なんとか顔を上げて頭の上にある男の顔を見た。
蒼助。
玖珂蒼助。

「お前の、せいか……」

よく考えてみれば、似ている。
あの時と。そして、彼女と。

もちろん、外見に似通うところなどありはしない。

しかし、無遠慮に踏み込まれて覚えた反発的な感情は同じものだった。

我が物顔で人の中にズカズカと上がり込んできて、それでいてこちらの不意を打つかのようなタイミングで優しくする。

ずるい奴。

ずるい奴らだ。

それなのに、一緒にいる時間は何にも代え難い温もりに満ちている。

「……温かい」

最初は、どちらかといえば先立って逝った彼らと同じ分類として見ていた。

何処へ行けばわからず、自分を道標と思い込み藁にも縋る気持ちで追いかけてきた者達。

しかし、自分は彼らを正しい道に導く光なのではなかった。蜘蛛の糸ですらなかった。

彼らを更なる深淵に誘い込み、堕とすだけの存在だったというのに。

何度目かの過ちを繰り返して理解して、せめて蒼助だけは絶対に助けたかった。

不幸か幸いか、澱に近い場所に生まれながらもそこに繋ぎ止める楔は緩く、彼はもっと明るい場所へ行ける可能性を持っていた。

自分と出会ってしまったことこそが本当の不幸で、それをわからせなければいけないと何度も拒絶した。

しかし、とんだ思い違いをしていたことに気づいた。

自分が考えていたよりもずっと、この男は強かった。
普通の人間が享受し切れるはずもない自身が抱える枷を知ろうと、少しも怯まなかった。

好きだと。
理由など無い、と言われた時――――――蒼助の後ろに【彼女】が見えた。

『酷い自虐。……でも、私は貴方が好きよ』

いつか言った、彼女のさりげない告白。
何故、という問いに【彼女】は酷くくだらないことを聞いたと言わんばかりに、

『馬鹿ね。……好きという感情は、正確な理由なんて付かないものなのよ』

いつか貴方にもわかるわ、きっと――――。
“母親”のような優しい目つきで、彼女は諭すように言ったのだ。

強い人だった。
一人で立てる人。
自分の手を引き、導く存在。

蒼助は――――――そんな【彼女】と同じ存在だった。

彼女のように細くも小さくも無い、ふしくれた男の手。
彼女のように柔らかく受け止めない、膨らみの無い厚く堅い胸板。
彼女のように、子供を寝付かせる子守唄は唄わない。

この男は、あの時失った『母の愛』を与えてはくれない。
そんなものは持っていないから。

では、何故自分はこの男は好きなのか。
失ったものを埋めてくれる同じものを持っていないこの男を、どうして好きになったのか。
何より、この男は【彼女】ではないのに。

「……そうか」

すとん、と胸に落ちるものがあった。
落ちてきたそれの名は、理解といった。

この理解は、もう遅かったのだろうか。
それとも、まだ間に合うのだろうか。

「蒼助……俺は」

眠る蒼助が問答に応えるわけがなかった。

だが、代弁するかのように、温もりと共に蒼助はそこに在り続けている。
それだけは紛いでもなんでもない、確かな事実だった。

【九拾八】　胸に落ちるもの（後書き）

死んでも尚出ばる、【彼女】さん。
千夜にとって他とは飛び抜けた存在だったから、これからもいろんなところでひょいひょい出て来ると思う。

次回、初夜（爆）の明けた朝の二人。

【九拾九】　成就の翌朝

ベッドの上、蒼助は魘されていた。
額には興奮による体温の上昇から油汗が滲み、表情を苦痛を噛み潰すかのように歪められている。

「や、め……ろっ……」

どーせやるならっ……、とギリギリ歯軋りが起こるその摩擦間から漏れたかと思えば、

「――――っっ俺にヤらせろぉぉぉぉぉっっ！！！」

異様に力の入った意味不明の絶叫と共に、蒼助は切羽詰った険しい顔つきで、ついに跳び起きた。
全力で肺に残留する限りの酸素を使いきった為か、直後の息を詰まらせ激しい呼吸困難に陥りながら、

「げほっ……ぐぇっふ……ぅ、……ゆ、夢か……？」

カーテンの退けられた窓から差し込む朝日と、自身がいる部屋の光景を確認して蒼助は、今こそが現実であることを呼吸調整の片手間で理解した。
ある程度息が整ってくると、大きく安堵の吐息を吐き出した。

「……よ、かったぁ……ん？　い、いや……よかったんだよ……よかった、んだよな……？」

何、この複雑な気持ち、と先程まで渦中にあった夢の内容に対する気持ちを抱え、葛藤に嵌る。

そこへ、

「――――――オイ」

「ぎゃぁぁっ！！　す、すみませんっ本当はちょっと見ていたかったなんて出来心で本心なんかじゃありません本当ですマジですって！！」

「……何を言っている？」

え、と耳に入り込んだ声に自我を取り戻す。

落ち着きを取り戻した状態で向き直ると、開いた扉の前には既に制服に着替えた千夜がいた。それも呆れた様子で。

「……絶叫が聞こえてきたかと思えば……寝ぼけていたのか。……悪い夢でも見たのか？」

「え、いや……まぁ、別に悪くはなかった……んじゃないか、と」

「……何故、目を合わせない。何故、泳がす」

「……あー、とりあえず謝らせてクダサイ。マジ、スミマセンでした」

とても朝から口に出来る内容ではない。

ここで口を割るわけにはいかなかった。

胡乱げ見つける千夜の視線が起きたばかりの精神と身体に非常に悪かったが、ここはジッと耐えるしかなかった。

「……まぁ、いい。朝飯がもう少ししたら出来る。早く着替えて来

い」
「あ、ああ……」
耐えは報われたのか、追求はそれ以上及ばず、千夜は元から用意していたであろう用件だけを告げてあっさりと引いた。
助かったはずなのに、その態度の素っ気無さは逆に蒼助に物足りなさを覚えさせた。
「あ、あれ……？」
昨日の出来事とその後日である今の態度。
イコールで結びつけるには、些か無理がある見えない落差を確かに感じた。
◆◆◆◆◆◆◆
昨日はあんなに可愛かったのに。
二流小説や漫画の中で使い古された台詞を、蒼助はその作中の男達と同じような心境で心の中でぼやいた。
「やっべ……ちょっと、調子に乗りすぎたとか？」
制服のズボンに足を通しながら、昨夜の最中の行いを振り返ってみる。
そうしてみると、確かに些かノリ過ぎたと言えなくもない気がした。

傷つけないように自分なりに精一杯理性を働かせたが、その制御下を欲望が逃れた瞬間も幾分あった。
千夜も、本気で嫌がってはいなかった――――と思う。思いたい。

「……演技、だったとか……だったり、し、て……――――ぐぁっっ」

試しに言ってみた自分の言葉に、蒼助はかなり傷ついた。
己の自爆行為から、蒼助の不安は加速する。

「……ちょっ、まて……夢って……何処までが、だっ？」

朝、人間は低血圧だの眠気の名残などによって、精神的な安定がとれない状態にある。
蒼助という男もまた例外ではなかった。
そして、そのゲージが振り切った時、

「――――――っっ！！」

いきり立った蒼助は上半身の着替えを済ませないまま、部屋を飛び出した。
向かう先は一つしかなかった。
不安に支配された蒼助は、一度落ち着くというコマンドはベッドの上に置き忘れてしまっていた。
荒々しい足踏みで踏み込んだリビング。
広いその空間にて混在するキッチンでは、千夜が朝食のソーセージをフライパンの上で踊らせていた。

「千夜っ！！」

「なんだ、早いな。これが焼けたら終わるから席、にっ……ぃ！？」

千夜の朝の掛け声は、予想だにしない切迫した表情と勢いで掴みかかってきた蒼助の手によって、大いに引き攣ることとなった。

しかし、そんな千夜の驚きも今の蒼助には全く入って来なかった。

「千夜っ、千夜ぁっ！　何処までだ、一体何処までが夢なんだ！？」

「ゆ、夢……？　お前、まだそんなこと……」

「いや、寧ろ何処からか。暴露大会か、お前がボロ泣きしたところか、キスしたところか、それともお前が誘い文句かましたところかっ！？」

「はっ、はぁっ！？　……お前っそれ以上っ……いや、とりあえずはまず落ち着け！　何が……」

「はっ！！　ってことは、首舐めたのも脱がしたのも胸揉んだり吸ったりしたんのも殺した文句も全部無しなのかっ！！？」

「落ちつ」

「だぁぁぁぁっっっ！！！！　嘘だろ！？　勘弁してくれよぉぉぉっ！！」

「……」

「くっそ、こうなったらもう一回最初から……」

戯言を走らせる蒼助は、気付かなかった。

痺れを切らした千夜が次の行動に移る為のその予兆の動きに。

肩を掴まれたまま、千夜の頭がぐらりと後ろに揺らめいた。

捲し立てられる内容についていけなくなったことによる意識の失神、なんて逃避に走るような柔な精神構造を千夜は持ち合わせていない。

千夜が選択した行動は至ってシンプルかつ、当初と変わっていなかった。

ただ、それを実現させる手段を変えた。それだけだ。

錯乱しまくった蒼助に対し、あくまで千夜は冷静に行動に移行する。

穏やかな朝に、要らぬ爆弾を持ち込んだ愚か者を鎮める、否、〝沈める〟為に。

狙いつけた目標に目掛けて――――想いっきり、打ち込んだ。

「っのぐぁ……っ、っ、っ！？」

頭突き。

衝撃と共に蒼助の視界を星が散った。

脳を横に揺れ動かされた蒼助は悶絶しながら、後ろに倒れ込んだ。

当然受け身などとれるわけもなく、追い打ちとばかりに床からもう一撃。

意識がオチなかったのは、蒼助の頑丈さ故の幸いだった。

「……落ち着いたか」

「……ハイ」

互いに切れた額で流血沙汰を起こしながら、そこでようやく朝に平穏を取り戻したのだった。

◆◆◆◆◆◆

額のど真ん中に四角い絆創膏を貼付けているのを長めの前髪の間から覗かせる千夜を見ながら、蒼助は物足りない感覚を依然と感じていた。

というよりは、先程の暴走によって態度が一層硬化してしまった気がする。実際、そうであるに違いないのだが。

「……あの、ドレッシング取って」

「ん」

差し出した手をスルーするようにドン、とその一歩手前に置かれる。

少し固まった後、蒼助は静々とそれを手にした。

……あーあ、俺何してんだホント。

個人差というものがあるのなら、成就して一夜明けた朝の態度の変化というものにもあるのだろう。

冷静に考えてみれば、世間一般の定義上の恋人同士のじゃれ合いを千夜がするわけがない。寧ろ、いざ比較してみると、想像すら出来ない。

振り返ると、求めていた空気は無い事は無かった。

自分の奇声を聞きつけてのこととはいえ、朝起こしに来てくれた。リビングに行けば、自分の為に朝食を用意していた。

ストイックな千夜は、あからさまな態度はなくても、ちゃんと行動で示してくれていたというのに。

……考えてみりゃ、全然イヤってわけじゃないし。

ねぇ、起きて。

頑張ったの、食べて。

脳裏に甦るのは、自身が身体の関係を持っていた女達の言葉。
思えば蒼助の望む割り切った関係を本当に受け入れた女は本当に一握りだった。
境界を見失い出過ぎた真似ばかりして、だんだんと不快が募っていった相手の方が多かった。
女達は自分が尽くす女であるとアピールして、だから愛せと言う。
馬鹿馬鹿しい。
押し付けがましいその行為に、どうして好感が持てるだろうか。
そもそも自分は一言もそんなことを望んでいるなど、言っていない。
尽くす代わりに愛を。
等価交換という駆け引きを根底にしているのなら、彼女らは身体と引き換えに金をもらう娼婦と何ら変わりない。
打算めいた行為に吐き気すら覚えていた自分。

なら、今は――――――

「オイっ蒼助、何をしている!?」
「えっ……ってぇ、うわっ！」

物思いに耽っている間も傾き続けていたドレッシングは取り分のサラダを盛った皿の中に並々と注がれており、その臨界点を越える寸前にまで達していた。
ビシャビシャどころか、どっぷりとドレッシングの海に沈んだレタスが僅かに顔を覗かせているばかりだ。

「……あー、あ……悪い、ちょっとボーっとしてた」

半分以上中身がなくなって手応えが一気に軽くなってしまったそれを置いて、フォークで汁の滴るレタスを拾い、口に押し込む。嫌

いな青臭さはなかったが、ひたすらしょっぱくて油っぽかった。
誤魔化すように苦笑を浮かべる蒼助をどうとったのか、千夜は、
「……野菜は嫌い、だったな。すまない、いつも習慣で出してしまった」
「……あ、いや別に」
「無理はしなくていい。昨日、自分で俺にそう言っただろう……俺も同じだ」
「……んー、でも野菜全般ダメってわけじゃないんだよ。ただ、昔セフレが朝飯つくってくれてた頃、馬鹿の一つ覚えみたいにどいつもこいつもトマトとレタス盛ったの出してさ。食わないとヒス起こされて揉めたりが散々で……ヤな思い出の一品というか、いつのかまにか嫌いになってた」
「……まぁ、それでは飽きるのも無理はないな。今日はいつもよりも時間がなかったこともあるから、妥協でこれを出してしまったんだが……そういうことなら、好きな要望を言ってくれ。食いやすいように作るから」
俺もこれはあまり好きじゃない、と言いながら、千夜は義務的に瑞々しいトマトを口に含んだ。
ぷちゅり、と一口サイズの真っ赤なそれが唇に包まれるのを見てしまった蒼助は、エロい、と口にした瞬間に全てを崩しかねない感想を抱きながら、口から思わず出たのは、
「……やっぱ、それでいいよ」
「……だから、無理は」
「いや、こっちの話」
でへ、と思わず笑み零す。

「何だ、一体。……きもちわるい」
「きっ……お前、ようやく成就して幸せに浸る恋人にそれはねぇだろ」
「こっ……」
意識していなかったのかしないようにしていたのか、千夜は蒼助の発した単語に一気に動揺を露にした。
それを目の当たりにした蒼助は、
……あれ、ひょっとして……。
自覚はしていなかったのだろうか。
あんなことにまでなった昨日の今日で。
「そんな心外だなんて顔しなくても……そりゃねぇぜー」
「別にそんなこと……」
「しかも昨日のことなんてなかったみたいに振舞うし……」
「あそこまでされて無かったことになんて出来るほど俺は寛大じゃない。つか待てふざけるなよ」
口調が荒れ出した。
ヤバイまた地雷踏んだか、と蒼助の頭からサっと血の気が引く。
完全に据わった目に睨まれて、蒼助は蛇に睨まれた蛙となった。
「……貴様、俺が何でこんな髪型でいるか当ててみろ」
「えっ……？」
こんな髪型、と言葉にして強調されて、蒼助はようやく気付いた。
いつもは邪魔にならないように一つに束ねられている髪が、着替えているにも関わらず流しっぱなしである。

家にいる間は、外と内での区切りであるかのように髪を下ろしている姿を見慣れ始めていたので、あまり気にならなかった。

「……あれ、何でポニテにしてないの？」

「……っっ！！」

眉間に皺がギュギュッと寄ると同時に、ダンっ！とテーブルの上にて打撃音が奏でられた。

ゴゴゴ、と、千夜の背後に黒い暗雲が立ちあがっていくのを蒼助は幻視した。

「何で、だと……？　諸悪の根源が、言うに事欠いてそれかっ！」

「え？　え？」

諸悪の根源と指された当の蒼助には、千夜の憤慨ぶりが全く理解できなかった。

「……”これ”に覚えがないとは言わせないぞ」

一昔前の時代劇の主役の台詞を匂わすような口ぶりをしながら、千夜は首筋を覆い隠す部分の髪を除けるようにかき上げて見せた。

見ろ、といわんばかりの仕草に促され、蒼助は身を乗り出してそこを覗き込んだ。

「……あ」

それらしきものを発見と共に、蒼助は思い至った覚えを声にして洩らす。

髪に隠れていた首筋のそこには、ぽつんと控えめながらも誇張された濃い色合いで存在する――――――俗でいう『虫さされの痕』が

あった。

「今朝、鏡と向き合った時の俺の気持ちがわかるか……？」
「……あー、そりゃすまんかった。発言撤回させてイタダキマス」

確かに、先程のあの発言は失言だったと蒼助は反省した。
朝起きたら隣に自分がいただけならまだしも、鏡で自分の身体に昨日の名残がありありとしている様を見たら、何も無かったなんて思えるわけもない。
さぞかし昨日蒼助がした行為や発言などが、脳裏に生々しくリピート再生されただろう。
こうして下ろしている分では見えないような場所にあるが、髪を上げたら完全に見えてしまうのは確かだった。

「……あーらら、結構はっきり残ったな。そんなに強く吸ったかな」
「付けた本人が他人事みたいに、よくもまぁ言えたもんだな」
「そんなつもりねぇよ。……ただ、なんか今わかった気がする」
「何がだ」
「……セフレにやたら痕つけたがる女が何人かいてさ。理由聞いたら、自分のものだっていう証だっていうんだよ」
「……それで」
「それ聞いてすぐに別れた」
「……」

呆れたのか半目になる千夜。

「そんな目ぇすんなって。……だってさ、気持ち悪いだろ。別に好きでもなんでもない利害一致しただけの関係の相手にそんなもん付けられたら、さ……」
「女の種類をちゃんと見分けられないお前が悪い」

「かもなぁ……でもあの時はわかりたくもなかった気持ちが、今になってわかった。
――――好きな奴に自分の痕がつくのってなんかいいよなぁって感じで」

ガタン、と椅子が煩く音を立てた。
遮るような物音と共に席を立った千夜だ。
俯いた顔がどんな表情をしているかは蒼助には見えなかった。

「……ご馳走様」
「って、お前まだ残ってる……」
「いらない。朝から不快な話ばかり聞かされて食欲なんぞ失せた。お前が責任とって食え。残すなよ」
「あ、オイっ」
「うるさい。さっさと食え」

堅い口調が会話を断ち切り、蒼助は二の句を継げなくなった。
小さく舌打ち、握り込んだフォークでソーセージを突く。

……またやっちまった。

昔、関係を持っていた女との話を持ってくるなど、非常識極まりないことに今になって気付いた。遅ぇよ馬鹿、と己をメタクソに罵る。
自分が浮かれすぎているだけだった。
蒼助にとっての関係の変化は、千夜にとっては断ち切るはずだった関係を延長及び持続させることになっただけだ。
温度差、というものに過去に不満を持たれたが、まさかそれが自分に降りかかることとなるとは蒼助は思いもしなかった。因果応報、という言葉が思わず過ぎる。

身体の経験を積んでばかりでもダメであったという結果がこれであるのか。

……なぁにやってんだ、俺は。

念願の成就の翌日にコレでは、先が思いやられるばかりだ。

不安が先立つ未来に、蒼助は縋るような視線を千夜の背に向けた。

「蒼助」

「へっ！？」

突然、名前を呼ばれた蒼助は悪戯がバレた子供のようにビクついた。

流しで行う後片付けを片手間に、顔だけこちらに傾けられた。

それが何の意図を以ってなのか見当つかない蒼助は、妙な緊張感を持って何を言い出すのかを身構えて待つ。

すると、

「……そういうことをする時は、一言言え」

「……了解」

可愛い恋人は、ひょっとしたら自分よりも遙かに懐の広い男前なのかもしれない。

不安はなくなったが、男としての危機感が蒼助の中に新たに居座った。

［九拾九］　成就の翌朝　（後書き）

いっそサブタイは「バカップルどもの朝」でも良かった気がする。
とりあえず、次回はついに１００話目！　壱百話未満で収まるなんて思ってた愚かな天海は何処に……。
ちなみに、最終回まであと何十話使うかまだ見えない（涙）

【壱百】　溜まる想い（前書き）

伝えたい言葉は、
昔からずっと心に溜まっている。

【壱百】　溜まる想い

物足りない、と感じていたその『もう一つの正体』に気付いたのは、蒼助が朝食を全てに腹に詰め終えて食器を千夜に渡した時だった。

「あ、そうだ……あいつは？」
「何だ」
「ユキウサギだよ、ユキウサギ。なんか足らねぇと思ってたら……そっか、あいつがいないんだよな。なぁ、あいつは？」

食事時になると何かと起こる揉め事がない。
あの小さな子供がいなければ成り立たない行為の有無は、自然とその相手の有無に繋がった。
喧しい存在だと思っていても、その存在に慣れてしまうとやはりいなければ何処か落ち着かなくなる。

「朱里なら、お前が寝ている間に学校へ行った。朝食は、三途のところで食べると言っていた」
「……へぇ。……って、何」

千夜が見返り際に放つ珍獣でも見るかのような視線に、蒼助は含みを感じた。

「……いや、普段あれだけいざこざを起こしていても、気にかけてくれるんだなって」
「まぁ、いるといないじゃ違うっつー話で……」

気恥ずかしそうに顔を逸らしてゴニョゴニョとはっきりとしない

蒼助を見て、千夜はクスリと微笑う。

「俺がいない間に随分仲良くなったみたいじゃないか」

「ばっ……そんなんじゃねぇよ。あいつと二人の間俺がどんだけ神経擦り減らしたか知らねぇくせにっ。あのガキ、お前が出て行ったの俺のせいだとか散々詰った挙句、風呂掃除から飯の調達まで全部俺にさせやがったんだぜ！？　拒否ろうとすると、こっちの弱みを黄門様の紋所ヨロシクで盾にしやがるわ、コンビニの飯は嫌だとか抜かしやがるわ……って、ナニ笑ってるんだよ」

思わず熱が入って鬱憤を語っているうちに千夜が、くすくすと笑い声を零していた。

悪い悪い、と笑い合間に謝罪を挟みながら、

「素直じゃないだけなんだよ。……我侭は、他人に甘える一番の表現だ。気を許していないと、出来ないことだよ。最初の頃の警戒心の剥き出した際の棘棘しい感じはなかっただろう？」

「……んー、まぁ……言われてみればそういう風でもあるような……無いような」

あれで態度が軟化したと認めるのは些かしこりが残るが、出会った当初は鼻についたあの棘棘しさが無くなったのは確かにその通りかもしれない。

「生意気なことばかり言うかもしれないが、悪いようにとらないでくれ。子供扱いに反抗してきても、な。……年相応の扱いを受けるのに慣れていないだけなんだ。子供は子供のうちに、ちゃんとそういう風に扱われて、子供らしく振舞えた方がいいから……遠慮なく子供扱いしてやってくれ」

そう語る千夜は限りなく妹を思う『姉』の顔をしていた。
表現が合っているか迷ったが、とりあえず今はそれで間違ってはいないだろう。

「……子供、ね」

千夜の台詞の中で幾度も繰り返された単語を感慨深げに蒼助は小さく呟いた。

そして、脳裏ではとある記憶が回想される。
昨夜の――――最愛の肉親の望みを精一杯演じ続ける大人びた子供とのやりとりを。

◆◆◆◆◆◆◆

深夜零時。日付変更の境となる時刻が、最近の蒼助の帰宅時刻だった。
その帰宅は多大な疲労が付き物となっていたが、今宵は格別だ。

店に着くと、予想通り怒れる魔神となって烈火をバックに背負った上弦が待ち構えていた。
黒蘭が緩やかな対応で軽減はしてくれたものの、鍛錬が始まってしまえばそんなものほとんど関係なかった。
感情によって戦闘力が向上するタイプなのだろう。怒りのゲージを溜め込んだ男の体力と持久力は、まさに底無しだった。

今夜はほぼ一方的に嬲られて終わった。内蔵がペースト状になるまで打撃を受け続け、動けなくなったら引き摺り回された。
肉体は修復されても、疲れだけは別であることを一つ覚えた。
これだけは鍛えて自身の体力を増強させる以外にどうにもならないらしい。

「……やべ、目ぇ霞んできた」

ガクガクの足を酷使してマンションまで来たところで、疲れは眠気に転換され始めた。
エレベーターに乗り込んで、ようやく一息つく。

「……ったく、ヒデェ目にあったぜ」

上弦はとにかく容赦無い。
元々の性分なのかもしれないが、そこに蒼助を嫌う感情が拍車をかけている。
一瞬の隙が、上弦にとって蒼助を肉の塊に変える十分な機会となる。
命が一つでは足りない鍛錬。
しかし、危険なそれは忘れかけていたことを思い出させてくれる。

「ハッ……つっても、昔と大して変わったことしてねぇか」

命懸けという点では、かつて受けた母親の鍛錬と大差はない。
永遠に失ったはずのあの最も生きていると感じた一時。
それに近しい感覚を味わえる上弦との殺し合いじみた鍛錬は、それを思えば決して悪くは無かった。
闘り合う相手が目の上のタンコブだとしても。

「……到着」

エレベーターの到着と共に、最後の力を振り絞って居候先の玄関を目指す。

「寝ちまったかな、あいつ……」

自分で先に寝てていい、と言っておきながらまだ起きていればいいなんてかなり勝手な期待を寄せる自分に、蒼助は苦笑いした。

到達した最終地点の扉の前に立ち、出かける前に交わした何気ない会話の一部を引っ張り出す。

先に寝るなら、鍵を開けておいて欲しい、と蒼助は言った。

もし、これが閉まっていたら――――

「……出来れば、後者で」

期待を力に変えてノブに手をかけた。

しかし、残念ながら解錠済みの手応えだった。

期待を打ち砕かれた蒼助は軽い失意と共にドアを開ける。

「返事ないのはわかってるけど、ただい――――」

「――――おかえり」

予想外の返事が蒼助の帰宅に応えた。

咄嗟にまさか、と一瞬だけ期待が再燃しかけたが、玄関の段の上にチョコンと座っている小さな存在を見て、それは脆く崩れた。

「……んだよ、お前かよ。ちょっと期待しちゃった俺の男心どうしてくれるよ」

「ばっかみたい」

情けなしの容赦無い切り捨て。

疲れていると慣れたこのムカつきも一塩ものだ。

「あーそうですね。……で、お子様は寝てるはずのこの時間まで起きてんのはそんな馬鹿な俺の姿でも見物する為だったか？」

「まさか。朱里、そんな暇人でも物好きでもないもん」

ツーン、とそっぽを向いてそんな口を叩く始末。

ただでさえ沸点の低い蒼助は、疲労によってあっという間に限界を迎えた。

かといって、怒鳴るわけにはいかない。寝ている千夜に悪いし、何より体力的にそんな余裕は残っていない。

よって、

「……そうかよ。そんじゃ、俺も夜更かしして子供の相手してるほど暇でも物好きでもないんでな……オヤスミ」

これ以上付き合ってられない、とばかりにさっさと睡眠欲に導かれるがままに、最近の寝床としているソファのあるリビングへと足を向ける。

千夜の匂いが名残りとして残っていれば、少しは気も晴れるだろう。

「ちょっと、待って」

「あぁ？」

この期に及んでまだ突っかかって来るつもりか、と声に明らかな不機嫌ぶりを露にして睨む。

相当凶悪な顔つきになっていたのか、朱里はさすがに身を震わせて怯んだが、

「……くんくん」

「……ナニしてんの」

チョコチョコと動き回って蒼助の身体に小さな鼻を寄せる朱里。

鼻をすんすん鳴らす音から、匂いを嗅いでいるのだと察し、

「……何なんだよ一体」

「ふんふん……鼻につく匂いはしない、と。お風呂は？」

「下崎さんとこのシャワー借りた……だから、何だよ」

鍛錬の後は、血と汗が混じり合って酷い異臭が全身にまとわりつく。

そんなものを漂わせたまま、夜道を歩けば血の臭いに誘われて魔性どもを引き寄せてしまう。

そんな面倒を避ける為に、蒼助は鍛錬後は念入りに身体を清めるようにしており、鍛錬の際に汚れたい衣服は全て処分してしまっている。

「……よし、合格」

「はぁ……」

パシ、と背中を軽い衝撃が叩いたかと思えば、満足するまで体臭チェックを済ませた朱里はそんなことを言う。

これでようやく子供の相手から解放されると一息つき、蒼助は再びリビングへと足を踏み出すが、

「ストップ」

「……」

ジージャンの裾をむんずと掴んで引き止める朱里に、いい加減にしろ、と怒鳴りつけてやりたい欲求を残された大人げを以て抑えながら、

「……今度は何だよ……俺ぁ明日も学校だし鍛錬も当然あるし、何より眠くて……」

「でしょ。だから――――ソファなんかよりずっとよく眠れるところを、朱里が蒼助に提供してあげる」

「あ？」

この家には、家主ある千夜とその家族である朱里の二人が使うベッド二つしかないはずだ。

客人など滅多に迎えないのか、予備の布団も置いていない。

だから、仕方無く間に合わせにソファを使わせてもらっていたはず、なのだが。

「こっち」

「……こっち、っておまっ……そっちは」

数歩歩いて朱里が手をかけた扉。

それは、

「お前の姉ちゃんの部屋だろ……」

「……」

朱里は蒼助の声などまるで聞こえていないかのように、閉ざされていた扉を開いて、その室内に入る。開けたままにしておくということは、入って来いとの代弁なのだろうか、と思っていると案の定

であった。

「……入って」

「……何のつもりだ？」

「……」

また無言だ。

薄暗くてもはっきりと目にわかる血のように赤い二つの瞳の放つ視線だけが、ジッと蒼助を見据えて、来いと訴えて来る。

「……っ……わかったよ」

真っ直ぐなその眼差しに千夜の面影を見た蒼助は、絆され折れた。

ついこの間はつい悪戯心で入り込んでいたが、成就による欲求の解放を黒蘭の釘刺しによって抑えられるといった始末に、どうにも躊躇が湧いた。

しかし、もうヤケクソとばかりにその一歩を思い切って、今となっては不可侵の聖域にも思えるその部屋に蒼助も踏み込む。

朱里の後ろに立ち、彼女が見据えるものと同じモノに視線を釘づけとなる。

こちらに背を向けて広いベッドの上ですやすやと安眠に浸り込む千夜だ。

「……パジャマ姿もたまらんな」

「……やっぱ、止めようかな」

蒼助の欲望さらけ出した素直な発言に、朱里は何かを迷うような言葉を嫌そうに歪めた顔で呟いた。

迷いを振り切るように頭を振ると、

「聞きなさい、蒼助……今から朱里があんたなんかには軽く百万年は早い上、身の程に合わないちょー頭が高い寝場所を譲ったげるっ」

ビッと刺す勢いで振り抜かれた人さし指がベッドの上の姉を指差した。

その行動の解釈に数秒を要した蒼助は、

「……オイオイ、いくら何でも今の俺に寝込み襲う体力は残ってないぞ」

「ちっがう、てゆーかある程度想定してたボケを律儀にかまさないでメンドクサイ！」

思わず荒げた甲高い朱里の怒鳴り声に、耳障りそうな呻きがベッドの上から発された。

ギクッと肩を震わせた朱里が咄嗟に口を押さえ、恐る恐る背後の千夜の様子を伺う。

観察対象は暫く身じろぎしたかと思えば、蒼助と朱里のいる側に向けて寝返りを打った。

ここで起きられるのは状況をどう説明かなどいろいろとまずい、と蒼助は緊張した心持ちで呼吸を潜める。腰あたりの位置にいる朱里も同じ心境であるのか、ピリピリとした空気で身を堅くしていた。

「う、ん……――――――」

その寝方に落ち着いたのか、再び一定の寝息が千夜の口から紡ぎ出され始める。

ホッと一息が両者から漏れ、力が抜けた。

「……いい？　一緒に寝るだけよ。胸はだけさせたり顔埋めたり、ズボン下ろして下まさぐるのもアウトだからねっ」

「お前そういうの絶対に姉貴の前で言ったりしてやんなよきっと泣くから。つーかマジで何がしたいんだよ。突飛過ぎて話が全く見えねぇんだけど」

「……別に、……ただ」

潤滑とは言い難い動きをしていた唇がそこで一度止まる。

一度堪えるように強く結ばされたかと思うと、

「……これをするのは、もう朱里よりも……蒼助の方がいいんだってわかったから。ただ、それだけのこと」

「オイオイ……」

そういわれても、やはりさっぱり意味がわからない。

「だからっ……朱里は、負けを認めたの！　蒼助は朱里に勝ったの！　朱里は未練たらしくなんかしないで、大好きな人の幸せを見守ることに決めたの！　そうだったら、そうなのっ」

「あのなぁ……落ち着けって。んなデカい声出してっとまた起きちまうぞ」

うぐ、と口を噤む朱里。

落ち着きを得ようとしてか、頭に上った血の熱を冷ますかのように頭を垂れて俯いた。

まもなくして、

「……蒼助は、この前……姉さんのベッドに入り込んだんでし

ょ？」
「あ、ああ……」
今度は過去の前科を引っ張り出して文句でも言うつもりなのか。
そう身構えていたが、次の出た朱里の言葉は蒼助の予想していたものとは違った。
「姉さん、どんな風に寝てたか見た？」
「はぁ？　……何で、そんなこと」
「答えて。見たんでしょ？」
冗談ではない、と声の堅さが語らずとも教えてくる。
はぐらかしていい様子ではないことを、蒼助はわけがわからないまま察し、
「……見た、けど……別に、普通に寝てたぞ？」
「……そう」
答えに対し、朱里は特に反応を見せなかった。
冷めた短い応えを返すと、くるり、と体を反転させ、
「あ、オイ……」
「じゃあ、見なよ……今ここで」
静かな歩みでベッドの上眠る千夜の傍に近づく。
そして、その小さな手がその上に被さる掛け布団に伸びたかと思えば、
「姉さんは――――――いつも、こんな風にして寝てるんだよ」

取り払われる覆い。
現れた中身は――――

「――――……っ」

両足を折り畳み、背中は身を屈めるように丸まっていた。
そして両腕は己の身を抱くかのように。

揺り籠の中で眠る赤ん坊というには、些か無防備さに欠けている。
卵だ。
卵の殻の中に閉じ篭るように眠る雛の姿に酷似して見えた。
或いは――――

「……一緒に暮らし始めた最初の頃はね、朱里を抱き締めて眠ってくれたの」

朱里が腰を下ろすと、キシリ、と軽量の付加にスプリングが小さく鳴いた。
傍らで眠る千夜を見つめる目に、蒼助は一瞬息を呑んだ。
目の前の子供は普段見せる無邪気さといった子供らしさを何処へやってしまったのか、それらに繋がる要素を一切取り去った達観した眼差しを紅の双眸に宿して、そこにいた。

「姉さん腕はとっても温かかった……それまで朱里は寒くて凍えそうな場所で一人ぼっちだったから……寒くても温まる方法なんてなかった。姉さんは腕の中で朱里に一人ぼっちじゃないんだって、もう大丈夫なんだって教えてくれてるんだって……そう、思ってたよ」

「思って、た？」

今は違うのか、と暗喩して繰り返してみると、

「……一年くらい経ったくらい、だったかな。学校にも慣れて、こっち側の世界にも馴染み始めて……そろそろ一人で寝れるようになろうって姉さんに言われてさー。でも、やっぱり寝付けなくて姉さんのベッドに潜り込もうとしたら……ね」

「……」

「その時これを見てね、気付いたの。寒い場所で凍えそうな想いをしていたのは、朱里だけじゃなくて姉さんもそうだったって。誰かの温もりに縋りたかったのは、姉さんの方だったの。……肝心の姉さんは、気付いていないけどね」

ずるいよね、と笑みを含んだ声が零れる。

そこに蒼助は微かに震えが生じているのを感じた。

「……一人で寝れるようにってなんて言って……姉さんは朱里が自分から離れても生きていけるようにしたがっていたの。朱里を日の当たる世界で生きていけるようにして、自分はまた一人だけで真っ暗なところに戻ろうとしていたの。ずるいよね……与えるだけ与えて……いつでもいなくなれるようにしてるの」

「……言えばいいじゃねぇか。お前がどうしたいかを、よ」

「何言ってんの……？　無理に決まってるじゃん……姉さんが頑固なの朱里がよく知ってるんだから……。姉さんは、朱里に子供は子供らしくして、無理しないで甘えていいんだって言うの……朱里は、早く大人になって姉さんの支えになりたいのに、そんなこというんだよ、姉さん」

「……っ」

つらつらと哀愁を漂わせて紡がれる語りを聞いていて、蒼助は通い合っていると思っていたこの姉妹は擦れ違い続けてきたことを理解した。

姉への思慕は、その対象の望みによって爪弾きにされてしまっている。

目の前のこれは、報われない愛というべきなのか。

「……蒼助は、姉さんを泣かせたでしょ？」

「えっ……あ、あれは……つか、お前起きてたのかっ」

「いいでしょ、別に。空気読んで寝た振りしてたんだから……ありがとう」

「は？」

どういう繋がりで礼を言われる展開になるのか。

「あんなふうに泣いてる姉さん、初めてだよ。朱里の前じゃ、どんなに辛くても哀しくても……平気、だなんて言って辛そうに笑うだけだったから」

「……そうかよ」

「ねえ、蒼助……こっち、来て」

手招く朱里の言葉に従い、蒼助は言われるがままにする。

「手、出して」

差し出した手を手に取ると、朱里はその手を自身の肩を抱く千夜の手に触れさせる。

ぴくん、と反応を見せたその手は、ぎこちない鈍った動きで変化を見せた。

肩から外れた手は、蒼助の指をキュッと握った。

「えへへ、可愛いよね……触れたら、ちゃんと握り返してくれるんだよ？　こうして、応えてくれるのに……」

「馬鹿じゃねぇの、コイツ……ってぇ！」

「馬鹿じゃない！　素直じゃないだけなのっ可愛いのっツンデレなのっ」

「そんでお前は姉馬鹿か……」

間髪なしで思いっきり叩かれた蒼助は、その反応速度に若干感心さえしてしながら、

「……で、お前は結局俺にどうしてほしいんだよ」

「言ったじゃん。……一緒に寝てあげて」

「いいのかよ。お前の特権だったんだろ」

「縋りつくなら、大きい体の方でしょ……包み込めるくらい」

だから朱里は早く大人になりたかったの、と朱里は済んだことを悔やむようにそう呟いて、ベッドから降りた。

出て行くのを感じさせる遠のく気配を背に感じながら、蒼助は振り向きもせず、

「……いいのか、お前はそれで」

「蒼助は願ったり叶ったりなんだから、そんなの別に関係ないでしょ……」

「俺はお前がいいのかを聞いてんだよ」

ひたひたと聞こえていた足音が止まる。

「……あんまよくない。てゆっか、ムカつく。でも……自分の我

を通したところで、相手と全く噛み合わなかったら……そんなの虚しいだけだもん。だから、朱里は……こうする。……これでいいの」

蒼助、と大きくはないものの強く響く声が朱里から投げられる。

「……ちゃんと気付かせてあげてね。姉さんも、温かいところにいてもいいって……生きていけるんだってこと。

――――――ヘマしたら、承知しないから」

脅し文句を口にしながら振り返った顔は、それでも信頼を滲ませた確かな笑みを浮かべていた。

◆◆◆◆◆◆

大人になりたいと、あの子供らしくない生意気な少女は言った。

そう背伸びさせるのは、姉への過度の思慕だというのなら、蒼助が彼女に譲られた役割を果たすことで、朱里も本来の子供の型に気に病むことなくはまることできる。

……子供らしく、か。

千夜が朱里に対してそう念を押して要求するのは、自分がそう出来なかっただろう。

親が子供にする押し付けがましい願望、と片付けてしまうには切ない内容だ。

互いが互いを確かに想い合っている。
それにも関わらず、その歯車は少しも噛み合っていない。

……両想いなのに、か。

言いたいことがあるなら、迷わず言ってしまえばいいのに、あの子供は何を怯えて口にするのことを迷っていたのだろうか。
本音を口にしてしまえば楽になることは確かなはずなのに。
そうすることを躊躇してしまうほどのデメリットがあるのか。

……くそ、またっ。

せっかくおさまった不安が胸の奥で再燃し、もやもやと不快な感覚を燻し出す。
座っている体勢がどうにも落ち着かなくなってきた蒼助は、見つめていた千夜の背中に思わず、

「……かーずや」
「なんだ？」

振り向いた顔。
コッチ見たな、と認識した瞬間に口をついて出る言葉があった。

「好きだ」
「……はっ！？」

何だ突然っ、とあっという間に顔をトマトのように赤く熟す千夜を見て、不快感は嘘のように消化される。
入れ替わるようにふつふつと湧き出てくる満足感に、気をよくし

た蒼助は「言ってみたくなっただけ」とあしらった。

たった一言でも我慢せずに言えば、共通の相手はこんなにもわかりやすい反応で応えてくれるのに。

我慢し続けるあの子供が、今頃逃げ込んだ喫茶店で店長に愚痴をぶちまけているのを思い浮かべながら、抱えるその気持ちを理解しかねる蒼助だった。

［壱百］　溜まる想い（後書き）

ついに壱百話ぁぁ！
これで完結が後についてくれば文句なしだったぜコンチクショー！！

蒼助は、まだ黒蘭に言われたことをわかっていません。おかげで後で泣きを見ることなるのですが、それはもうちょっとしたらの話です。
我慢してばっかだ、どいつもこつも。

五日ほど留守にします。
ちょっと山形に帰省。
去年言った妹から一言忠告。

妹「虫に耐えろ」

……。
……逃げちゃダメだ逃げちゃダメだ逃げ（以下略

【壱百壱】　魔女の祈り（前書き）

それはきっと、過ぎた過去から未来へと続いていく
変わることもなく

［壱百壱］　魔女の祈り

鼻をすする音。
しゃくり上がる音。
そして、飲み下す喉の音。

これら三つは、見事に重なり合い、三重奏となって耳に届く。
実に器用なことに。

「……あのねぇ、朱里ちゃん。……苦しい？」

目の前の傷ついた少女に、三途は己が出せる精一杯の優しさを詰め込んだ声色で声をかけた。
問いに対し、少女の答えは頷きによる『ＹＥＳ』だった。
だろうね、と呼吸困難寸前の高潮した顔を見ながら納得し、

「じゃぁ、どれか止めようか。
――――鼻をすするの、泣くの、ミルク飲むの……どれが出来そう？」
「……む〝り〟い」
「いや出来るよっ。……えっと、じゃぁ強制的にミルクを取ります」
「あっ」

両手で持っていたまだ中身の残るガラスコップを取り上げる。
何故苦しみの原因たる一つを取り去られて不満の声をあげるのかは、この際無視することした三途は、

「あー、ティッシュティッシュ……。上弦さん、ティッシュ箱はそっちに……」

「うむ。ほれ、これで鼻をかむといいぞ朱里。……ぐずっ」
「……ついでに貴方もお願いします」

朱里の後ろからその巨体をぬっと現した上弦は、涙と鼻水で顔をグショグショにした彼女にティッシュを箱ごと渡すが、そういう上弦の方も似たり寄ったりな惨状を顔の上で晒している最中だった。それもいい大人と分類される外見なだけに一層目に当てられないくらいの酷さで。

「ああ、朱里ちゃんったらそんな風にしたら顔に塗ってるだけだって。ほら、貸しごらん」

ヤケクソじみた手つきで、顔中に鼻水と涙が混ざった粘液を塗ったくらんばかりの朱里の手からクシャクシャになったティッシュを取り上げ、三途は口の周りにまで及んだそれを拭き取ってやる。

「……学校はどうするの？」
「行かない……今日は図書室で本を読む気分にもなれないもん」
「で、どーせ篭るならウチで篭るつもり？」
「……ダメ？」

普通の良識ある保護者なら、例えここでどれだけ縋るような上目遣いを向けられても、それを振り払って行かせるべきなのだろう。
自分はダメな方の保護者だなぁ、と己に実感と呆れを感じながら、三途は考えるよりも前に既に決定していた答えを返す。

「いいよ。千夜には内緒にしておくから」

あとで小学校に電話しなくちゃ、と行動事項を一つ記憶に書き込みながら、

「でも、そんな泣くほど悔しいなら意地でも同席して二人っきりの空気を邪魔でも割り込むでもしちゃえば、少しは気が晴れたんじゃ……」

「っ、朱里はっっ！　そんな女の腐ったのがするようなことしないもん！！」

「えっ……そ、そう」

「あえ、どうしたの？」

「いや……ちょっと昔の古傷が、ね」

私って腐ってたの……？、と過ぎ去ったかつてにあった己の行いを振り返り、三途は軽くへコんだ。

それに比べれば、目の前の小学生は何と雄雄しいことか。寧ろ、漢と呼ばせてもらいたいものだ。

「そりゃぁ、ちょっとはそういうことも考えたけど。……でも、そんなことしたってこっちの負けがひっくり返るわけでもないし、逆に負け犬の身の程を思い知るってゆーか」

「……うっ」

「しかも、それでお邪魔虫扱いとかされたりなんかしたら……もう再起不能になっちゃうよ」

「ううっ」

「ほらほら。今まさに再起不能が一人出来上がりそうだから、それくらいにしてあげなさい朱里」

朱里の悪意のない古い傷を抉る攻撃から三途を救ったのは意外なことに黒蘭だった。

珍しくまっとうな気の利かせ方に出た黒蘭までもがカウンターに座ってきて、場の収拾に買って出る。

「朱里は正しいことをしたわよ。自分を抑えることは大事なことよ。大人でもなかなか出来ないことをやってみせた朱里はすごいわ」
「ランラン……」
「偉いわね、朱里。とても立派よ」

さして背丈の変わらない白と黒の対照的な色をまとう二人が並ぶと、まるで画に描いたような姉妹に見える図となる。
にも関わらず、黒蘭は年の離れた姉がするような大人びた仕草で朱里の頭を撫でる。
ごく自然な振る舞いだが、見る者には違和感を感じさせる絶妙さだ。
撫で繰り回されているうちに、ぶり返すように朱里の赤い目に涙が溜まりだす。

「……ちょっと我慢したら、また姉さんに……甘えても、いいんだよ、ね？」
「当たり前よ。……これからも貴方達は家族であることに変わりないのだから。……上弦、一人でダバダバ垂れ流しているくらいなら、朱里とそっちで二人一緒に悔しさいろいろを分かち合いなさい」

ティッシュ箱を空にする勢いで鼻をかみつづけていた上弦は、バッと顔を上げると同じようにした朱里と視線をかち合わせた。

「……朱里ぃぃっっ！！」
「……おいちゃぁぁんっっ！！」

テレビでよく見る熱血ドラマな空気を爆発させながら、二人は抱き合い号泣した。
店内で発生したドラマな暑苦しい空気の中心を生暖かく見守っていた三途は、これに関しては『放置』を選択した。触らぬ神になん

とやら、だ。

その傍らで、注意を引くための意図を感じさせる呟きが三途の耳に入り込んでくる。

「……つまらないわねぇ」

「何ですか、藪から棒に」

黒蘭は先程まで朱里を慰めていた優しげな声色は一転し、悪戯に失敗して拗ねた悪童のような子供じみたことを言い出す始末だ。

コロコロとサイコロのように転がっては表になる目を気まぐれに変える。

黒蘭とは、そういう不確かで不安定な存在だと、三途は今も昔も思っている。

「だぁって、反応薄いんだものあんた。もうちょっと何かリアクションとってくれると期待して馬鹿丁寧に現場の状況を解説してやったっていうのにぃ」

「あの生々しさと肉っぽさ満載の官能小説みたいな語りは、そんなことを期待した上でのことだったんですか……。捏造しまくってんの見え見えですよ。妨害したって言ったくせに、何できっちり最後まで完遂しちゃってんですか、アレは」

「情報と記憶の境界線を見失ってパニくるあんたが見たかったから。……思ったよりも冷静だったから失敗に終わったけどね」

チッと舌打つ黒蘭。

とりあえず、自分が珍しく白星を手にしたということを理解すると、三途の気分は少し向上した。

「あなた、私を何だと思っているんですか。……錯乱なんかしま

せん。嫉妬とか悔しさとか、そういうのは少し前にクリア済みです。今は……ただ、嬉しいし、良かったねって思ってます……本当に」

「あーら、ちょっと昔は勝ち目がないの見え見えなのにズカズカ割って入ってくわ、恋敵に陰湿かつ見苦しさ満々の嫌がらせするわ、ズルズルあとに引きずるわで、腐乱臭を全身から焚きつけていた奴が言っていることとは思えない、あっさり仕立てな言葉じゃないの」

「ちょっとどころじゃない昔でしょうが！　しつこいですね……子供の頃をネチネチと……。そのネタの賞味期限はいつまで……」

「――――――で、実際本当のところはどうなのよ。……あんたの中で鉛みたく重たくなって沈んでるものは、ちょっとは軽くなったりした？」

半ば自分の台詞を強引に脇に除けるような斬り込みで、黒蘭が迫ってきた。

一瞬、息を詰まらせそうになりながらも、三途はそれに耐えた。

目の前の相手が核心以外を喋らせる気がないことを、言葉の遠慮のなさで察し、

「……それに関しては、ちっとも。というより……それは無いでしょう。これって結構今となっては大事なものなんですよ。……生きていくのに、安定感を得るには」

「あのコの傍にいるためにも、でしょ？　あんたって何てマゾ？」

適度にSっ気もありますよ、と答えながら、三途は己の中に出来て久しい”重み”の存在に意識を向けた。

胸の奥底の、深い場所に打ち込まれた楔のような異物。

千夜といると、一層その重量を増してその存在を三途自身に知らしめる。

苦しみを与えるだけだったはずのそれ。

しかし、気がつけばその感覚に安穏とした思いすら感じるようになっていた。
それが無いと不安さえ覚えるようになってしまっていた。

まるで、

「もう、麻薬みたいなものですかね……無いと、逆に落ち着かない」
「さしずめあんたは新手のヤクチューってこと？」
「ですねー。……だから、こればっかはもうどうしようもないんで……いい加減放って置いてくれませんか」

触れるな。
そう真意を含ませて三途は放ったが、黒蘭は相変わらず冷めた表情で三途を見もしない。
黒蘭はそうやって興味など一切無いような風体を装うくせに、こうして他人の心を見透かしているような口ぶりと言葉で、無情にも傷を抉るように触れてくる。
そこにはどんな目的や意図があるのかは、三途にはわからない。
ひょっとしたら、そんなものはありすらしないのかもしれないが、考えたところで三途には曖昧な解答を見出すことも出来ないことだけはなんとなくわかっていた。

「……そう。まぁ、いいわ……じゃぁ、この話題に関してはこれっきりしてあげる。あんたの好きにしてちょーだい」
「えっ」

意外な返しだった。
思わず聞いた己の耳を疑いながら、

「……どういう風の吹き回しですか。他人の嫌がる顔こそが三度のご飯よりも好物のあなたが……」
「……飽きた」
「……あ、き」

黒蘭が気だるげに放ったのは、脱力感を覚えてしまうほどのさっぱりした返答だった。
今度こそ、絶句した。
「これ以上私が引っ掻き回しても、それ以上の変化の見込みはないでしょうからね。つまんないじゃない。だから、もうこれっきりにしてあげる」

心底そう思っているかのように、黒蘭は非常につまらそうに言い捨てた。
その態度は、遊び飽きた玩具に対する子供のそれそのものだ。
この女にとって、三途の「事情」は弄る価値を失った玩具同然であるということだ。
そう受け取るしか無い。

「……はぁぁ」

そりゃどーも、と長くついた溜息の後にそれだけ付け加えることが、今の三途に精一杯の気力で出来たことだった。
これも元よりわかっていたことだ。
黒蘭という存在にとって、三途だけに限らず人間なんて生き物は、それこそ手の中で暇つぶしに転がす以外の使いようの無いビー玉のようなものだ。等しく無力である。
或いは、道端の石ころ。
気にかけられることもない存在。あっても無いも同然。

あり大抵の人間は、黒蘭には皆その程度の認識しか持たれない。
稀に拾われる石がある。不幸にも、という前置きが付くごく稀な異例。
拾われてしまった石に対して、言える事は――――同じく該当者である三途には一言しかない。

「そんなに新しい玩具に首っ丈ですか？」
「わかるぅ？」

態度がまた一転する。

「今、わかりました。気持ち悪いくらいニヤニヤしてますよ……で？」
「楽しいわよぉ～。彼、手応えもビンビンだし、反応も新鮮～」

これだけ聞くとなんだか卑猥な内容に聞こえるのは気のせいだろうか。
否、気のせいではないだろう。
何せ黒蘭なのだから。
会話の片手間に己の内なる思考でそう巡らせていると、

「それに……」
「それに？」
「彼とは共感を感じることが多くて……こういうのを意気投合とか、相性がいいっていうのでしょうね……。この感覚は、三人目だわ」
「貴方と意気投合できるのが他に二人もいたという時点で驚きなんですが……彼が、貴方と共感っていうのは……気のせいでしょう」
「わからないやつには、一生わからないわよん」

ふふん、と強かに笑う黒蘭に少しムカつきながら、三途は蒼助と黒蘭を頭の中に並べてみた。
三途には、どの角度から見ても二人の間に接点や共通する箇所は見出せない。
それとも黒蘭にしか見えないものでもあるのだろうか。
しかし、この様子から聞くまでも無く、黒蘭が蒼助をいたく気に入っているのが十分理解できる。
そのことに関して、三途が思うことはやはり一つだった。
「……気の毒に」
「それじゃぁ、その気の毒な若者に……あんたが思う今の気持ちは？」
「……彼に、ですか」
「あの男に何を思い、何を望むのか……あんたの気持ちは？」
「――――――……」
刹那、三途の思考は追憶へと走り出す。
走り着いた先。そこにいたのは、一つの少女だった。
幼い少女。何処にでもいる子供。ありふれた幸せに包まれていた。
彼女に抱いた最初の感情は、何であったかはもうはっきりと思い出せない。
劣等感だったかもしれない。
或いは嫉妬か。
いずれにせよ、自分には手には手に入らなかったものを当然のよ

うに思って持っている少女に、良い感情を向けていなかったのは確かだった。

しかし、彼女に触れられた時に、それは一転した。
彼女に向けていた羨望は、希望へとその形を変えた。
己には叶わなかった幸福を与えられた少女に、己が果たしえないであろう夢を見た。

ごく普通の人生の中で。
変わり映えの無い平穏な日々の中で。
誰にでも与えられるべき幸福を手にして欲しい。

そんな祈りにも似た夢を少女に託そうと思った。

幸せになって欲しい。
ただそれだけを、捨てたはずの祈りという行為にのせた。
そうなるように、自分は少女を守るという誓いと共に。

いつか。
そう遠く無いいつの日か、現れるであろう運命の相手のところに行くまで――――。

そう思っていた、かつて。
ならば、今は――――

「……同じです」
「同じ？」
「……ええ、同じです。今も昔も……私は、ずっと同じ事を思っています」
「……それは？」

「至ってシンプルな一言ですよ」

告げるべき対象が聞いたら、薄情者と言われかねないだろう、あっさりとした簡素な言葉だ。

いろいろ考えたが、結局は『これ』に落ち着いたのだったな、と懐かしく思いながら、

「――――――頑張れ、って」

この祈るような気持ちすら、あの頃と少しも変わっていないことを、三途は再確認した。

［壱百壱］　魔女の祈り（後書き）

八月中にもう一回更新するつもりが、いつのまにか九月に突入しちゃってたので、慌てて更新の今月第一投球です。

今回のこと三途はどう思ってたのかに重点を置きました。
いつかは来ると覚悟していたので、ショックではなかったようですが、嫁に行かれた父親気分で寂しさは感じています。
今回ちょっと書き出しましたが、三途は自分は幸せになりたいとは思っていないし、なれるとも思っていません。過去にいろいろありすぎて、自分自身の幸せはもう終わってしまっているとか無理矢理そういう自己完結をしてしまっています。
高い望みを抱けなくなっている三途。
自分の人生をいろいろ諦めていて、どんな終わりも抵抗無く受け入れてしまうでしょう、このままでは。

しかし、三途に関してはマジでいろいろ練り込みすぎたなぁ。不幸要素を。あと苛め過ぎた。
好きなキャラを苛めるこのクセ、本当どうにかならないかな、自分……。
これぞまさしく歪んだ愛（わざわざ言わんでも

【壱百弐】　イカサマ上等

「蒼助、そろそろ……って、オイ」

後片付けも終わって、いよいよ登校時刻も迫ったところで、千夜は行動を蒼助に持ちかけた。

しかし、キッチンにて振り向いた先に見たものは、

「……蒼助、行くぞ」
「あー」
「……そろそろ出ないと、遅刻する」
「おー」
「……」

いくら促そうと、返って来るのは気のない適当な返事ばかりだ。
行く気が無い。
そんな意思は、ソファの上で寝そべった体勢が言葉よりも明確に表していた。
しかも、テレビに視線をやったままこちらを見ようともしない。

「……っ、そ」
「なぁ」

怒鳴りつけてやろうとしたところで、声が重なり遮られる形となる。
重なった声は確認するまでも無く、背中越しに放たれた蒼助の声だった。

「本当に行くのか？」
「何を言って……」
今更な問いかけの意を汲み取れず、千夜は怪訝な気持ちを露にしたが、
「よく考えたらよぉ……昨日はイロイロまずいことやらかしちまったんだよなぁ」
「……あっ」
「……だよ、なぁ」
昨日の出来事のハッとして思わず零した千夜の言葉が、蒼助に己の行いがどういう傾向のものだったかを一層自覚させてしまったらしい。
溜息の音が、事態の深刻さを千夜に実感させる。
「……お前は、悪くないだろ」
「喧嘩っていうのは、手ぇ出しちゃったらどっちが先とか関係ねぇのよ」
「あれは、喧嘩じゃ……」
「教員どもから見たら、生徒同士のいざこざなんざどれもこれもみーんな喧嘩なんだって……」
騒動の渦中にいて、その中心となれば、後先など関係なく諸悪の根源としてもれなく処分の対象となる。
それを知らないわけではないが、千夜には今その常識を受容することは出来ない。
「お前は完全な被害者だから大丈夫だろうけど……オレは良くて停学と自宅謹慎……あーでも、今までのを通算にされると今回は

さすがに……」
「……」

その後に続く言葉は、聴かなくても千夜にはわかっていた。

「蔵間さ……先生は庇ってくれると思うけど、一人は顔面放送事故状態で、一人は片手バキバキにしちまったもんなぁ。……おまけに、あの人教員側に敵多いし……特に堀田のバーコードハゲあたりがなぁ」
「……すまない」
「あ？」

千夜が耐え切れず漏らした言葉に、蒼助がようやく身体を起こして顔を向ける。

「俺はあの時、自分のことしか見えていなかった。……周りのことなんて、まるで眼中にすらなくて……。情けない話だ……それでいたばかりに俺一人だけではあきたらず、お前まで……」
「――――千夜」

ずぶずぶと後悔の沼に沈みこんでいこうとする千夜を引き止めたのは、叱咤するように少し強い口調で呼びかけた蒼助だった。
気持ちと共に自然と俯いていた顔を上げると、ソファから身を起こした蒼助が、近寄りかけてそのまま立ち止まってしまったその立ち位置まで歩み寄って来る。

その距離が頭一つ低い千夜を上から見下ろせるくらいにまで縮まると、

「……っ」

むにゅ、と頬を摘まれる。
ぴりりとした僅かな痛みに顔を顰めた。
「……逆だろ、逆。それはお前じゃなくて、俺のことだろうが。何で、そういう発想になるかね……」
「……原因は俺だ。違いないだろう」
「俺も、だろ。いいか、俺の処理に問題があったから……そんで、いろいろ無神経すぎた。今までテキトーにやってきたツケなんだよ、コレは。仕方ないっつったら、そうなんだよきっと……」
「……仕方ないなんて、言うな」
よりにもよって、自分の嫌う言葉で片付けようとする蒼助に、千夜は頬を摘まれて喋りにくいのも構わず反論する。
仕方ない。この世の中に、本当にそうであることなどありはしないと千夜は思っている。
誰もがその言葉を、自分で決めた結果に納得が行かない気持ちの逃げ場にしているだけだ。
千夜はこの言葉が大嫌いだった。
今まで、自分であれこれ悩んで決めてことで積まれて出来た人生を、たった一つの言葉で片付けられようとしたらとてもじゃないが、例え相手が蒼助でも、もしそう言って来るとしたら我慢ならないだろう。
「……ん？　慰めてくれてんの？」
「別に……そんなんじゃ……」
否定を照れ隠しと解釈したのか蒼助は、
「だーいじょぶだって。学校に執着なんて別にねぇし、退学になる

にしても、そうなったら勉強しなくていいし仕事に集中出来るんだからこれといって悪いこたぁねぇって」

先程の気が重そうな態度とは一転して、能天気そのもので笑う。

強がりとして見るには、無理をしているような気配はない。

「お前……それこそ自分のことだろうが。何を悠長に……」

「元々昼の生活より夜の仕事の方が性に合ってんだよ。まぁ、やっぱり俺はこっち側のもんだったってことだろ。……ま、それでも強いて言うなら」

何かを付け足そうとすると同時に、ケラケラと笑っていた蒼助の顔に翳りが落ち、

「学校でお前と会えるのが、今日で最後ってあたりが……ちょっと惜しい」

頬を摘んでいた指が形を変え、指の腹で撫でるように擦る。

惜しい、という感情を表すように千夜には思えた。

そして、蒼助のいない学校を想像し、

「俺も……」

「ん？」

「……何でもない」

あまりにも理性を欠き過ぎている言動をしかけた千夜はすんでのところで我に返り、本能を押し留める。

一瞬、明日から校舎の何処に目をやろうと蒼助の姿はないのだと思ったら、たまらなくなったのだ。

そうまで思ってしまう今になって、あそこでいつも自分は無意識

のうちに蒼助の存在を探し、視界の隅に置くようにしていたのだということに千夜は気づいた。
ちらり、と上目遣いで視線をくれると、蒼助は千夜の心中など知らぬも当然とばかりにきょとんとしている。
それが何だか無性に腹が立ち、
「いっ……ぬあんあお」
「……うるさい、お返しだ」
あまり柔らかくない両側の頬肉を摘み取って拡げるように伸ばしながら、千夜は己の気も知る由もない男に馬鹿野郎、と悪態づいた。

◆◆◆◆◆◆

「――――――ああ、それな。実はなぁ……」
覚悟を胸に学校に着いて聞いた第一声は、これから死刑宣告を下すとは到底思えない軽さを以て発された。

◆◆◆◆◆◆

正直なところ乗らない気を奮い立たせて、蒼助は処分が仁王立ち

して待っているであろう学校へ行くことにした。
そうしたら、何故か今度は逆に「行かなくていい」などと言い出した千夜に驚かせられならも、共に登校に至った。
蒼助は自分の言った予想は、ほぼ当たるだろうという確信があった。
入学早々に問題を起こした蒼助は最初の頃はいろいろ派手をやらかしたが、一年の終わりくらいからはある程度落ち着き、おとなしくしていたつもりだ。
が、それで信用を取り戻そうなどむしの過ぎる話だった。
一度ついた汚名はなかなか取り下げてはもらえず、蔵間を除いた教員たちからはずっと目の仇とされてきた。
今回のことは、奴らにとって目の上のタンコブを排除する絶好の機会。
どいつもこいつもこぞって蒼助の退学に挙手するだろう。
さすがの蔵間も今回ばかりは庇い切れない。
そう、思っていたのだが――――

「……い、今なんつったんすか？」
「……」

隣で言葉をなくす千夜の分も含めて、蔵間に確認を問う。
職員室に入った途端、予想していた通りの室内に漂うピリピリとした険悪な空気に当てられた蒼助に対応してくれたのは何故かいつもどおり飄々とした蔵間だったが、

「いや、だからさ――――――退学なんざねぇんだって。停学も謹慎も無し無し。まぁつまりのところ……お前は、お咎めなしにな

った」

信じられない言葉が目の前の信頼する人物から述べられていることを認識するのに、蒼助には数秒の時間が必要だった。

「……はあっ!?　なにそれなにそれ!?　ちょっ……でえぇっ!?」

「まぁ、落ち着けや」

喜ぶべきことだが納得が行かないにもほどがある。

ひょっとすると、この職員室に充満する険悪な雰囲気はそのことが原因だというか。

説明してもらわねばならないことがたくさんだった。

混乱する蒼助に、蔵間はあくまで冷静に対応した。

「……無理もねぇよな。俺も、今回はさすがにダメかなぁって思ってたんだけどよ……まぁ、なんとかなっちゃいました」

「いやいやいやそれじゃ足りねぇって納得できる要素がねぇってっ!」

アバウトにもほどがある説明に蒼助は異議を唱えた。

「んなこと言ったってよぉ、あまりの超展開に俺も正直口開けて成り行きを見守る始末だったからなぁ……なぁ、なんつーの、これも一種の情報社会の形なんじゃねぇかなって」

「全くもって意味がワカリマセン……」

んー、と蔵間は頭を掻きながら、

「……とりあえず言えることは、だなぁ。――――――当分、退学よりもイヤなツケが待ってるから覚悟しとけよ」
「はぁ？」
「その他いろいろ詳しいこと知りたいなら、外で待ってる奴らに聞いてくれ。じゃ、な」
蔵間は半ば投げ遣りような形で話を打ち切り、蒼助と千夜に退室を促した。

◆◆◆◆◆◆

一体何だったというのか。
晴れない疑問と己の立ち位置を確認すら出来ないまま職員室を追い出された蒼助は、呆然とするしかなかった。
「これは……よかった、と喜ぶべきなんだろうか」
「……まぁ、そりゃそうなんだろうが」
実感がわかないのは千夜も同じらしい。
「……しっくりこねぇんだよなぁ、なんか」
「外で待ってる奴らに聞けと言っていたが……」
「――――――呼んだ？　お二人さん」
唐突に応える声が横から響く。
しかも、近い。

バッと反射的に振り返ると、そこには――――

「おっはよー。……予想通り二人で登校してやんの」

ニマニマと笑う久留美と付き添うようにその隣に立つ昶がいた。

「何でお前ら……いや待て、外で待ってる奴らって……」

「何だ、やっぱり覗いてたの気づいてたんだ。恭ちゃんめ」

「覗いてたのかよっ！」

「覗かずしてどうしろっていうのよ、その為にあんた達が来る前からあっちの角でスタンバってたのにっ」

「マジでどんな物好きだよ、てめぇはっ！」

本当にこの女は、どうして顔を合わせる度に自分の気を逆立てるようなことを仕出かして、したくもない口論を盛り立ててくれるのか。

顔を見てるだけでどんどん胸の奥で炎が燻り出し、胸焼けのような不快感が募る。

この女が気に食わない。出会った当初からそうだ。

理由は自分のプライベートをまんまとネタとして取り上げられたことだったか。

否、違う。

それはこの女の存在を知るキッカケになっただけに過ぎず、もっと根本的なところで――――

「……お前たち、どうして」

本格的に火がつきかけたところで、千夜の疑問の声が間に入った。

久留美たちの登場に、蒼助とはまた違う意味で驚いており、不可解に思っているのだとハッとして気づいた。

救出した直後に、気絶してしまった千夜はあの時に久留美が後からやってきたことを知らないのだ。

「……あのな、千夜」

「何でも何も、結局こいつの尻拭いしたのは私なんだから。あと、早乙女君も」

「尻拭い……？」

「気絶したあんた連れて自分はさっさと面倒なもん残して行っちゃったのよ、この男は。全く、なぁにが始末つけさせろよ……」

「ってオイ、あん時何処からいたんだっ」

あの最中にあの女に放った己の言葉を再現されて、蒼助はあの時久留美が妙に落ち着いていたことに対しての理由を悟る。

「さっさと行ってしまったお前を追いかけてたが、見失ってな。とりあえず、外に出たら逃げるように走ってた男を見つけた」

昶の言うそれがあの場で痛めつけ損ねた男であるとすぐに察した。

「あからさまに怪しかったから、とりあえず早乙女君にとっ捕まえてもらって拷……尋問して場所を案内させたのよ。ちょうどあんたが土下座してるところに居合わせて、とりあえあず出入り口の影で様子を見てたの」

「つまり、俺たちは一部始終は把握しているというわけだ」

気づかなかった。

あの時は、一刻も早く千夜の安否を確かめたくて周りに気を配るすら時間が勿体無かったのだから。

「全く、大変だったんだからねっあの後」
「お前が行けっていったんだろがっ」
「ええ、言ったわよ。あんたにやらせても事態の収拾つけるどころか悪化させて自分の首絞めるだけだってわかってたからね」
「ぐっ……」
「落ち着け、蒼助。今回ばかりは久留美のおかげで助かったっていうのは確かなんだ」

言い返せずブルブルと震える蒼助の肩を宥めるように叩きながら、昶までもがそんなことを言い出す。
どういうことだ、と説明を求めると、

「そうだな……壮大すぎて、何処から始めりゃいいんだか」
「なんだそりゃ……」

そんな大層なものじゃあるまい、と半目で疑念を込めた視線を昶に向ける。

「……まぁ、出だしは不安だったがな。お前がいなくなった後、喚き散らすあの三年の女をグーで顔をぶん殴って気絶させたあたりは」

いや、迅速な行動だったがなアレは。止める間もなかった、と感心するように思い出している昶。

「で、お前の罪状がひとつ増えたわけだが」
「俺になすりつげやがったのか！？」
「いいでしょ、既にやらかした分にちょっと上乗せなったくらいなんだから。結局、全部帳消しにしてやったんだから感謝しなさいよ」

微塵も悪びれた様子なく言う様が、また腹が立つ。

「……久留美がなんとかしてくれたのか？」

対照的に冷静に耳を傾けていたのであろう、千夜がそんなことを言う。

まさか、と蒼助は否定しかけるが、思考を落ち着かせてみると昶も久留美自身もそんな口ぶりをしているのに気づく。

「いやぁ、凄かったぞ。昨日の一連の活躍含めて今回の事件は短編映画が一本出来るんじゃないかと俺は思う」

「活躍ぅ……？」

大袈裟なという心情を隠しもせずに言い含めながら、久留美を見ると、

「あんたの相手があの女だったからっていうのも、今回の勝因ね。……つか、あんたって本当に顔とアッチの相性でしか女選んでなかったのね……とんでもないタマだったわよ、あのヒス女」

まずいものを食わされたような顔で、久留美は吐き捨てるかのように加害者側の諸悪の根源たる智晶について語る。

「面はまぁまぁいいけど、中身はサイッテーね。素行はロクなもんじゃないってのは、あんたのセフレだって時点で大体予想づいてたけど、探ってみたら想定の範疇を一っ跳びどころじゃないぶっ飛びようだったわ。知り合いの奴ら全部にあの女に関する情報を求めてみたら、ゴロゴロえげつない話が転がり込んできたわよ……」

そのえげつないない話とやらを思い出してしまったのか、久留美は顔を酷く嫌悪に満ちた表情にして歪める。

「代議士の親の権力に傘の下で好き勝手しまくり。おまけに自分の取り巻き使って女を襲わせてＡＶじみた非公認の乱交劇を撮影及び自宅鑑賞なんていう大層なご趣味の持ち主でね。……あんたのセフレの何人かもやられてるわ。大方、本妻気取りででしゃばる愛人を諌めてるご気分だったんでしょーよ」

「え、マジで……？」

「……何で顔を見なくなってるとかそういうので気づかないわけ？　気づいてもそういう態度のあたりは、あんたもいい勝負で最低よね」

白い目で見られても、「気の毒に」とぐらいしか思えない。

顔もいちいち覚えていないし、見なくなっても女の方の気が変わったのだと考えてそれ以上気にかけもしなかった。

久留美は薄情にもほどがあると言いたいのだろうが、そんなこと知ったことではない。

そういう人間なのだいうと自覚はあるし、この先で博愛主義に転向する気は毛頭ない。

ただ一つ気になるとしたら、智晶が今までの女たちに辿らせた末路に千夜を堕とそうとしたことだ。

「地面にビデオカメラが落ちてたから、千夜もコレクションの一つにでも加える気だったんでしょうね……或いはこれからも有効活用する為に……」

「止めろ、久留美」

言わなくてもいいことまで言おうとする久留美に、蒼助は制止する声を投げる。

久留美も喋りすぎたことを自覚したのか口を噤み、思わず千夜を

見た。
気まずそうな視線を受けた千夜は、特に気にした様子もないのを装い、
「……気にするな。済んだことだ」
「……そうね、もう済んだことよ」
「本当にそうかまだわからねぇだろ。今回のことはそうかもしれねぇが、また何かしてこねぇとはかぎらねぇじゃねぇか」
去り際に聞いた智晶の叫びが、今になって蘇る。
盲目とした愛情と執念に変えた時の女は、妄執に突き動かされる怪物になる。
その時は蒼助も標的になるだろうが――――真っ先に、そして徹底として狙われるのは恨みの元である千夜だろう。
そうなる前に、手遅れになる前に。
蒼助は己がすべきことに決断を下さなければならない。
そうとなると、今回は免除になった退学はいずれ自分で進呈しなければならなくなるかもしれなかった。
「……ああ、それに関しては大丈夫。もう、多分あの女のことは気にする必要も無いだろうから」
「はぁ？」
「……どういう意味だ」
おそらくは千夜と二人で共有しているであろう気がかりに対して、久留美がそんな心配をあしらうかのような発言をする。
しかも、発言者の久留美はそう信じて疑わない目をしていた。
「……まぁ、そこんとこの問題は踏まえてちゃんと手を打っておいたから」

「正直、俺もこんなに上手くいくとは思わなかったがな」

感慨深げに昶までもがそんなことを言う。

一体何だというのだろうか。

「何だよ。紛らわしい言い回しはいいから、はっきり言えって」

「あー、うん。じゃぁ、言うわ」

もう惜しむ様子もなく、久留美はあっさりと答えた。

「――――――志野智晶はもうこの学園にはいないわ」

数十分後、蒼助は先ほど蔵間が言っていた『イヤなツケ』が何であるかを否が応にも理解することなるのだった。

【壱百弐】　イカサマ上等（後書き）

ここらへんから久留美が出張ってくる予定。
久留美が何をしたのかは次回明かします。

［壱百参］　華麗なる暗躍

よもやこれまでか。

そんな追い詰められた気持ちを抱えて登校してから、既に昼まで時間が過ぎていた。

あの時考えていたものとは、今の自分の心境は大分違うものだと思う。

もし他人が見ることができれば、今は良い方に傾いていると判断する、だろう。

しかし、だ。

「……すけ、蒼助」

「っ、あ？」

「廊下で意識を飛ばすな。……周りが気味悪がってる」

名前を呼ぶのは、此度めでたく意中の相手から恋人（仮）に昇格した少女。

行き違う人間が遠巻き気味に壁側や窓側に寄り添って歩いて過ぎていく中、唯一として彼女だけは変わらず傍らで同じ方向を歩いている。

通常であれば、夢のような状況に気分もふわふわ浮き立つだろうが――――

「……授業中も、ずっとそれだったな。アレの何がそんなにショックだったんだ」

「お、お前っ……アレを聞いて何とも思わなかったのかよ！？」

「少なくともお前と同じことはな……」

ダメだ、わかっていない。

やはり一年間過ごしてあの人物を見知る自分と、転入してきて一ヶ月足らずのまだまだ学園に染まりきらない千夜とでは認識と危機感の度合いが違う。

蒼助は無理もないもないとわかってはいるが、この辛さを共有できないことがどうにももどかしくて仕方なかった。

「あ、あんなおっそろしい話を聞いて……普通は冷静じゃいられねぇんだよっ！」

蒼助は忘れない。

あの後、場所を移動して教室にて聞かされた知られざるあの女の暗躍を知ってしまった瞬間に、走った悪寒と身の毛のよだつ感覚を。

世の中には知らない方が幸せなこともあると何処ぞの人は言った。

その言葉の真実味をあの瞬間、蒼助は身をもってしまったのだった。

◆◆◆◆◆◆

久留美は武勇伝を語るかのような、実に意気揚々とした口調で得意げに事の顛末を語った。

「最初はカメラからデータを取り出して事の真相を明かす証拠として取り上げようかと思ってたんだけどね。幸い、壊れてたのは一部

の外装だけだったから問題ナッシングよ。でも、それじゃぁ今回だけの一時凌ぎにしかならないわけじゃない？　そ・こ・で、まずは知り合いの情報源みんなに呼びかけて、情報の提供を頼んだの。あまりの収穫ぶりに笑いこみ上げそうだったわ、本当。まぁ、こんだけでかでかと弱み晒してくれてんだからそこを突かないわけにはいかないでしょってことで、知り合いのハッカーに頼んで、志野智晶のパソコンに侵入してもらったわけよ。は？　何で、そんなことしたんだって？　馬鹿ね、聞いてなかったの？　例のコレクションつくるのに使う加工前の撮影データが保存されるからに決まってるでしょ。加工前だから、あの女本人もバンバン移りこんでたからかなりの上物の取引材料だったわ。ちなみに後始末のクラッキングもばっちり……って、何よ。取引材料って何のためのって……あのイカレ女の親との交渉のに決まってるでしょ。あーもう、うるさいわね何をそんなに騒ぐのよ、昔から子供の悪さは親に言いつけて責任とらせるのが条理でしょーが。危ないだろって……大丈夫よ、本人との交渉は直接会ってじゃなくて電話でやったから。私は火サスみたくそんな迂闊なことしないわよ。どんな心理戦が来るか結構構えてたけど、割とすんなりと話がとんとん拍子で進んだわ。娘はともかく親の方は汚い噂とかない人だったから、人としてはそれなりの人格者だったわよ。親としてはアレの育ちぶりを見る限りじゃダメダメみたいだけどね。そっからはまぁ例のデータと引き換えにこっちの要求を呑んでもらって、こっちが指定したファミレスであっちの秘書さんが代役でブツを引き取りにきたわ。一応、人目のある選んだ場所だったけど、念の為の早乙女くんに店の外で待機してもらってたけど」

　とんでもないことを何でもないことのようにつらつらと語る久留美に、蒼助だけではなく話を聞きに来た周囲のクラスメイトまでもが絶句した。

　それでも肝心なところを尋ね損ねまいと、条件とは何だ、と一番

気になる部分をつくと、

「もちろん、志野智晶のことよ。向こうも、それなりの親心で馬鹿娘を庇って来たけど、今回のことでそろそろ我慢の限界感じてたみたいでさぁ。どっか地方の田舎の矯正施設かなんかに隔離してくれないかって頼んだら体よく頷いてくれたわよ。朝の職員会議の時に秘書さんが来て、処分の前に向こうから直々に退学を申し出てくれたわよ」

よく途中で躓きもせずに、トントン拍子で事がうまく進んだものだ。

驚きを通り越して、もはや感心さえ芽生えてきていた。

――――最後に引っかかった疑問さえ口にして聞かなかったら。

「は？　何で、知ってるって……昨日の証拠品を持ってあんたの弁護しにあの場に行ったからに決まってるでしょ！　ん～、まぁ……諸悪の根源じゃないにしても騒ぎを起こすのに加担したには変わらないとかなんとかこの期に及んで古株連中の教員たちが無駄な足掻きするもんだから――――」

◆◆◆◆◆◆

――――想定内に入れてあらかじめ持ってきておいた、恭ちゃんを除く各教員のバレたら即、職と人望を失いかねないプライベートな秘密を写しこんだ写真を配って、脅迫してやったの。ばっかよ

ねぇ、変な意地張らなきゃもう少し明日にむけて前向きでいられたのにぃ～。

「――――なんて、言いやがったんだぞ！？　怖くねぇわけがねぇだろ、オイ！」

「……他人の不幸に怖気づくほど、危うい身に覚えがあるのか？」

「……」

ノーとはとてもじゃないが言えない悪事と思しきことを、その気は全くなしにやってきただけに千夜がジト目で放ったその質問は、思わず顔を背けてしまうほど痛かった。

「他人の弱みをかき集める久留美も随分な趣味を持っていると思うが、やましいこととしたお前が悪いんじゃないか。しかも今回はその趣味に首の皮繋げてもらったんだ、しばらくは何されても大目に見てやれ」

「くそ、暢気なこと言いやがって人の気も知らんくせに……そもそもあいつに借りをつくっちまう以上の人生の汚点はねぇってのに……これならいっそ退学の方が」

同情もしてくれない千夜の態度に、拗ねて思わず口走った心無い言葉だった。

しかし、

「……暢気なのはそっちだろうが」

聞こえた声の低さに、蒼助は己の耳をその一瞬疑う。

だが、確かに千夜の声だった。

その事実を強固するかの如く更に、

「人の気も知らないとはよく言えたもんだな、その口は」

先ほどよりもはっきりと強い口調で言いながら、千夜は歩みを速める。

怒っている。

顔を見なくても、怒りの矛先となった身として蒼助にはわかった。

何故突然、と蒼助は目の前の人物の怒れる背中に脈絡を見出せず、

「……あの、千夜さん？」

「何だ、まだいたのか。とっとと退学届でも出しに行けばいいものを」

「え、ちょ、何でっ」

酷く冷たい視線で罵詈雑言に等しい言葉を投げつけられた蒼助は、ますますわけがわからなくなった。

僅か数秒前まで、屋上で一緒に昼食を取ろうという話になって購買まで共に足を運ぼうとしていたのは蒼助の記憶違いか、

ありえないことを思わず思ってしまうほど、千夜の態度は大きく急変していた。

「おい、何怒ってんだよっ」

ずんずんとした勢いで前に進んでいく千夜を振り向かせようと、肩に手を伸ばすが寸でのところで、千夜がピタリと歩みを止めた。

ホッとしたが、くるりとこっちを向いた顔はそんな微々たる安堵を掻き消してしまうほど強張った表情だった。

「お前がっ……どれだけ今の状況を嘆こうと後悔してようと、知っ

たことか」

噛み砕くように抑圧された怒り漂う声が、俺はっ、と上ずり、

「――――それでも、俺はお前がここに残ると聞いて嬉しかったんだっっ！！　人の気も知らないのはお前だろうが、このスカタン野郎！！」

憤るあまりに公衆の場にいることすら忘れた千夜が、廊下に響き渡るほどの大音量で自らの想いと罵声を続けて叫んだ。

ぶつけられた蒼助は思考が止まるほどの声と内容の衝撃にガチっと固まる。

千夜は不満をぶつけて気が済んだのか、そのまま固まる蒼助を置いて先に行ってしまう。

後に残された蒼助を衝撃から立ち直らせたのは、偶然居合わせた周囲の人間のささめく声だ。

「何だ、今の……」

「あの二人って……ええー？」

「玖珂が所帯持ったってのは、本当だったのか」

「つか、今の台詞……」

「くぉぉ、言われてみてぇ」

周りの声に徐々に我を取り戻し始めた蒼助は、現状をはっきりと把握し直すと周囲を威嚇するように睥睨した。

げ、と脱兎の如く一斉に四散する野次馬。この奇人変人が集う学園に身を置くだけに、引き際の行動は実に迅速だ。

「……ったく、そういうのは二人の時にだなぁ……っ、待てよっ」
大分遠くに見えるようになった千夜の背中を、蒼助は慌てて追いかけた。

◆◆◆◆◆◆

「……何だ、それ」
一足先に己の取り分を買って屋上で待っていた蒼助は、千夜の手にある”モノ”を見て訝しげに目を細めた。
手には購買で買ったハムカツサンド。
そして――――――
「……え、と……赤汁？」
「何で、疑問系なんだよ。つか、エゲツねぇもん買ったなオイ」
こういうの好きなんか？と蒼助は手に取ってシゲシゲと赤い紙パックを眺める。
蒼助自身の缶の烏龍茶と並べると、その存在の異様さが一層際立つ気がした。
「別に……ここでも売っているんだなって目に付いたから」
「って、前にも飲んだことあるのかよ」

意外なチャレンジャー精神で挑んだのかと思った。

「俺が……というよりは、前の学校の購買ではこういう奇抜な飲み物ばかり売っていてな……あいつが、好奇心だか冒険気分でよく買ってきて」

「……あいつ？」

「……っ、いや……」

拾い上げた部分を指摘すると、千夜の目が揺らいだ。

瞬間、蒼助の中で直感が閃く。

「……これ、もらっていい？」

「――――え」

「ダメか？」

問いかけておきながら、なんて低い声を出しているのだろうと、蒼助は己の客観的な部分で見て呆れた。

しかし、迷いを見せる千夜の目を見て、黒い感情を一層増した。

「……いや、いい……やるよ。俺は、そっちを飲むから」

「……ああ」

「味はまともだから、安心しろ」

奇奇怪怪過ぎる赤い飲み物にそう安全圏の念を押して、千夜は壁を背に地面に腰を下ろした。

それに伴い、蒼助もその隣に腰を落とす。

感情に任せて奪ってしまった飲み物にストローを差し込んで、一瞬躊躇したが飲んでみると味は確かにトマトジュースを髣髴させるまともなものだった。

それでも、後ろの成分や原材料などは決して見ないようにしながが

ら出来るだけ早く飲み干してしまおうとぐんぐん吸い上げていると、

「……自分でも、未練たらしいとは思ったんだ」

「ん、ぁ？」

封を切って取り出したサンドイッチの一口目を飲み下した千夜が、突然口を開いたことに蒼助もストローから一度口を離した。

「多分、昨日夢を見たからだろう」

「夢？」

「……昔を、夢に見た。ここに来る前の、学校でのことを。……こんな風に、あいつと屋上で昼飯を食べて……それを飲んでいた」

先程から出る『あいつ』が誰を指しているのかは聞くまでもない。あの写真の女。かつての千夜の恋人のことだろう。

「何で、あんな夢を見たんだろう……な。……もう、何の感情を抱けない記憶なのに……思い出と呼ぶには思い入れのない記録のようなものなのに。……それでも、あんな夢を見たのはどうしてなんだろう……と。昨日の今日でそれを見つけて……つい」

「……で、良かったのかよ。そんな思い出の品を俺にくれちまって、さ」

思わず皮肉がこもった。

大人気ないのはわかってはいても。

「……いや、実は渡す時……思ったよりも躊躇がなかったんだ。そういうこと……なんだろうな」

と一人自己完結して、烏龍茶の蓋を開ける千夜。
しかし、その心中が全く伝わることのなかった蒼助は収拾がつくわけがなかった。

……オイオイ、勝手に終わるなよ。

そういう事とは一体何だ。
そもそも何でそんな話を持ち出してきたのか。

……いや、俺がつついたせいだけど。

触れられるのが嫌なら、適当に流せばよかったずだ。
なのに、どうしてわざわざ蒸し返してきた。

……まだ、怒ってんのか。

少し前にうっかり漏らした失言が、後を引いている。
考えているとおりなら、原因はそれしか思いつかない。
ということは、これは精神攻撃なのか。
もしそうなら、なんて陰湿な。そこまでさせるほど、自分は機嫌を損ねてしまったのか。

「――――別に、精神攻撃なんぞしてない。あんなことで、そこまで根に持つか」
「っだぁ……ぇ？」

ハッと我に返ると、千夜が呆れ返った表情で見ている。

「独り言が駄々漏れしてるぞ。何処で突っ込んでやろうか、タイミングに迷った」

「……ど、どのへんから」
「勝手終わるなよってあたりから」
最初から、ということになる。
蒼助は青くなったらいんだか赤くなったらいいかわからなくなった。
「……～～～っ」
「百面相なんてして、忙しいやつだな……まぁ、わざとじゃないわけでもなかったが」
「……へ？」
「試してみたんだ……自分を」
あむ、と千夜は間挟みにサンドイッチを食みながら、
「……あんな夢を見たものだから、確かめたくなったんだ……本当に、彼女への気持ちが欠片もなくなってしまったのか、と」
「それで……？」
「さっき、言っただろ。……思った以上に、あっさりお前に譲る気になった。……こうして記憶を振り返ってみても、そこへの思い入れや未練はやっぱり感じない」
ただ、寂しくはあるけどな、と千夜は翳の差した笑みを浮かべた。
それを見てしまい、もう半分ほど飲んでしまった珍妙な飲料を今更ながらも返そうか、と蒼助は悩むが、
「……千夜、これやっぱ……」
「いや、いい。全部飲み切ってくれ……そうしてもらった方が、俺の方も踏ん切りがつけられそうだ」
「……そうか」

想いも感情もなくなった記憶とは、どんなものなのだろうか。
それを忘れることもなく、ただ憶えていることしか出来ないのはどんな気分なのだろうか。
別の意味でいっそ忘れてしまいたい辛さがあるのかもしれない。

それを持たない蒼助には全く見当もつかない。
今の自分に出来ることは、この飲み物を処分してしまうことだけだ。
既にどうすることも出来ない事に対して、己なりに向き合い、対処しようとしている千夜にしてやれる唯一がこれとは正直情けないと思おうと。

「……にしても、コレ……味はトマトジュースに似ててマトモっちゃ、マトモだけどよ……何で出来てんのかな、本当」
「少なくとも、身体に取り込んでも問題はないモノだと思うがな。俺は、他に黒汁という黒酢っぽい味だという同じ系統のやつを見たことがあるが……そっちの方が気になった」
「つか、何一つ明確なもんがねぇよな……」

ここまで信用性のない飲み物に出会うことは滅多にないだろう。
だが、こうして千夜と他愛のない会話を弾ませるキッカケになったと思えば、それに免じてあまり気になりはしない。
今までの女達とは、本当に最低限の対応と受け流ししかしてこなかったものだから、本命を相手に何をどうすれば正しいのか蒼助にはわからなかった。
いかに適当に生きてきたかが、こういうところで明るみになられても困るものだ。

しかも、今朝から躓いてばかりだ。

長く手間のかかった結果、ようやく結んだ成就で大分気が抜けていたせいもあるだろうが、このままでは取り返しのつかないヘマをしかねない。

和やかな会話の中でも、蒼助は内心緊張の糸を人知れず張らせていた。

「――――ところで、一つ聞きたかったんだが」
「ん……何だよ」
「昨日言った……俺のこと……誰から聞いたんだ？」

う、と咄嗟に蒼助は返事に躊躇した。
まさかそれをここで聞かれるとは思ってもみなかった。
本当に、この女はいつどのタイミングで何をしでかすか全く読めない。

「あー……体質のことは、黒蘭で……あと、記憶のことに関しては……」

まずい、と喋り出してから下手を打ったことに気づいた。
このまま三途の名前を出してしまっていいのだろうか。
最近、三途には鍛錬において大変世話になっている。
一時は命を狙われもしたが、その穴は既に恩で十分埋め合わされた。
あの時彼女は千夜を思って、あえて憎まれ役になりかねないリスクを背負った上で個人のプライバシーも何もなくなるような秘密を蒼助に漏洩したのだろうが、ここで見捨てるような真似をするのは気が引けた。
が、

「……そっちは、三途か？」
「え、何で……」
「上弦はああ見えて口がかたい。三途には体質については全部を話していないが……記憶に関しては話したからな。まったく……思っていたより口が軽いな、あの魔女は」
聞く前から大方見当がついていたのか、千夜はすぐに察してしまった。
幸い、蒼助が予想していたほど機嫌を損ねた様子はない。
彼女にとっての問題は、残されたもう一つにあったのだから。
「……俺の過去は？」
「……」
たった今までの袖にもかけないような態度は一転し、声の勢いも落ちる。
千夜にとって、今となってはそれが一番の気負いになっているらしい。
蒼助はどう答えようかと、少しの沈黙を要した。
「……いや、それは誰に聞いたというわけでもなく……自主的に」
「え……」
「あー……だから、さ……――――結構前から気づいてた」
そう言うと、千夜がバッと思わずという勢いでこちらを見てきて、信じられないという表情でいる。
「い、いつ……何でっ」
「何でって……あんだけマジで殺すって勢いの殺気をぶつけら

れて、凄まれたり、威嚇されたりしたら……なんかヤバいこととしてたことくらいは勘付くって」
「……そんなに、してたか？」

覚えが薄いらしい千夜は考え込むように項垂れた。
こういうのもやった側は忘れてもやられた側はしっかり覚えているものなのだな、と妙な納得をする。

「……まぁ、最初がいつかつったら……あの時かな」
「あの時？」
「ほら、お前が初日に神崎のグループを教室に叩きのめしちまった時」

言いながら、蒼助はあの時の千夜を脳裏に描く。
あれから時間が経過したが、それでも尚はっきりと鮮明に思い出せる。

冷たく凍りついた瞳。
見据えた人間すらも凍てつかせかねないと思わせるほどだった。

「あの時さ……お前の言動と、立ち振る舞いが俺の知ってる人間と被ったんだよ」
「被った……？」

きょとん、とする千夜をチラリと見ながら蒼助は思う。
昨日は泣かせるまで容赦なく千夜の傷を、過去を抉り出してしま

った。
その甲斐あって、今がこうしてあるわけだが――――それでは、フェアじゃない。
決意を濁す迷いを振り切り、蒼助は決断に踏み切った。

「俺の、死んだ母親と」

千夜の目が見開くのは、見なくても手に取るように想像を描けた。

［壱百参］　華麗なる暗躍　（後書き）

大学生の夏休みも残り四分の一を切ったぁぁぁっ！！　ひぃぃ！！
いやだぁ、まだ終わりたくな（差し止め

まぁ、とりあえず今回の影の主役は久留美だったんだよーな話。
ヤバい友達フル活用したようです。
利益無しでは動かない人間であるはずの彼女は、今回動いたのは誰のためだったのか。
……なんて、言うまでもないことですが。

終盤、再びおふくろ登場。
つか本当にマザコンやね、ウチの主人公。ダメだ。
母親の影が頭からなくならない限り、こいつは一人前にはなれないだろう、と踏まえて書いてます。

［壱百四］　存在の相違（前書き）

いつか歩んで来た道を振り返ったとき
その時は――――

［壱百四］　存在の相違

――――――あれは、まだ小学生だった頃の出来事だ。

乱暴で手加減なし。

その上、子供であろうと容赦しない。

母親がそういった大人げないを恥じることもなく堂々と地でいく人間であると、その頃から蒼助は十分理解していた。

だが、それは驕りだった。

あの時の子供は、自分の目で見てきたものが全てであると信じていた。

それを覆されたのは、皮肉にも同じように己の目で見たモノによってだった。

親子関係に十年目を迎えようとしていたあの時――――――自分は初めて”己の母親という存在”を本当の意味で知った。

蒼助は、今もそう思っている。

◆◆◆◆◆◆

夏。

その日は特に暑かった。

いつもは真っ直ぐ家に帰るはずの帰路は、その日は少し違っていた。

帰れば、鍛錬とその指導者である母親が待っている。

夏だろうが冬だろうが、それは変わりない。

嫌だというわけではなかった。

寧ろ、学校でのかったるい勉強よりもずっと充実感を感じていたし、自分の目標に向けて走るのは辛く苦しくも、楽しかった。

だが、今に比べれば自分は当然のこととはいえ、幼かった。

身体だけではなく、心も子供であった。

遊び、という誘惑を完全に振り切れるような理性はなかったし、それほど周囲の人間に対して冷めてもいなかった。友達と遊びたいという年相応の欲求だってあった。

同級生が今日は何処で何をするかという相談の声を耳に入れて、羨ましいと思う気持ちは常々感じていた。

あの日は暑くて、何をするにも少しかったるく感じていて。

だからだ。

クラスメイトの誘いに乗っかってしまったのは。

あの頃はの自分は、普通の子供のいう「遊び」というものをあまり知らなかった。

ゲームセンターというものは知っていても、実際に経験したことはなかった。

怠惰と誘惑に負けて、そこにどんなリスクが待ち構えているかも知らずに行った。

初めて間近で見て触るゲーム機にすぐに夢中となった。
娯楽というものに縁遠い自分はあっさりと魅了されて、周囲が見えなくなった。
そして、その時は既に忘れていた。
『子供だけでゲームセンターに行ってはいけない』という学校の教師の警告を。
そして、その意味もその時は知らなかった。

今思えば、子供の頃の自分は本当に無知だった。
学校の登下校をを除いて過ごすのは玖珂の屋敷で、接するのは屋敷の中の人間だけ。
他人の悪意というものを既にその頃は知っていたが、それは悪魔で自分にそれを引き寄せる非や落ち度あるからのものであって。

知らなかった。
何の縁もない人間が、その瞬間に何の躊躇もなく向けてくる悪意なんてものも。
あっさりと保身の為に他人を切り捨てることが出来るなんてことも。

気づけば蒼助は数人の男子高校生に囲まれていた。
同時に、一緒に来たクラスメイトもいないことにもそこでようやく気づいた。

自分が大きな失敗をしたことにも。

無論、抵抗はした。
日頃散々母親に鍛え扱かれているのだ。多少の心得はあった。
しかし、多勢に無勢。
体格も力も違う相手に適うわけがなかった。
その日、卑怯な手段というものを皮肉にも身をもって知った。

高校生たちの目的は金だったが、自分から巻き上げたそれは既に半分以上使われた後に残った微々たるものだった。
そこで、彼らは蒼助が持っていた携帯電話で自宅に電話をかけた。
おそらく身代金めいたものを要求し、持ってこさせようとしたのだろう。

電話してから数分。
来たのは、自分の姿を確認するなり呆れた顔になる母親だった。
稽古をサボった上、こんなところで不良に捕まっているのだから無理もなかった。
情けなさと惨めさで、助けを乞う気力すら失われていた。

やってきた母親の予想外の若さと顔の良さに気が緩んだのか、余計なよからぬ考えを抱いたのか、一人がだらしなく顔を緩めて母親に近寄り要求した金をせびった。
瞬間的にその男が路地裏の壁に顔をめり込ませたところで戦闘開始となった。

決着は早かった。
多勢に無勢なんて言葉は常識縛られない母親には通じなかった。
寧ろ大勢相手に立ち回ることの方が経験豊富だったのか、実に慣れた手捌きであっという間に全員をのしてしまった。
呆然とする蒼助に母親は、

「どーだ、すげぇだろう」

胸を張って威張る様に脱力しかかると同時に空気も和んだような気がした――――――その時だった。

気絶していたと思っていた一人が、立ち上がった。
再び起き上がったその男の手には、折りたたみ式ナイフが握られていた。

「このクソ女ぁ……ぶっ殺してやるっっ」

そう喚く男の目はギラギラとしていて、子供であった自分を怯ませるには十分だった。
だが、その次の瞬間。

比べ物にならない寒気を感じた。
それは向かう男からではなく、

――――――背を向けた母親からだった。

思わず振り向こうとした時、母親は入れ違い前へ出た。
顔は見ることもないまま、背中を向けられてしまった蒼助はその後の母親がどんな顔をしていたのかはわからなかった。

だが、

「……殺す、ねぇ」

からかうような、笑いを含んだ声だった。
しかし、それは酷く笑い声とは程遠い――――――冷たさを感じた。

聞いたこともない母親のその声に、その時思わず凍りついてしまったのは今も覚えている。

不良は一瞬何を見たのか、怯えたように萎縮した。

しかし、半ばヤケになった男は絶叫で虚勢を張りながら、ナイフを振り上げて襲い掛かってきた。

迫ってくる追い詰められた人間の狂気じみた迫力に、あの時自分は思わず声を上げて悲鳴をあげた。

あの時は気づく余裕はなかったが、時が過ぎて振り返っている今ならわかる。

手にはナイフという鋭利な殺傷力を持った凶器。

母と自分は素手だ。

追い詰められているのは、自分たちであったはず。

なのに、あの男のあの時の行動は――――――追い詰められた末の捨て身の攻撃だった。

いつの間にか逆転していた立場。

しかし、あの時はそんなことに気づくわけもなくただ脅威に怯え、母親の後ろでパニックになっていた。

それも次の瞬間には治まった。

母親は己に目がけて袈裟がけに振り下ろされるその瞬間に相手の手にあったナイフに突き上げるように足を振り上げたのだ。

迷いのない真っ直ぐで的確な蹴りは見事にナイフを捉え、蹴飛ばした。

蹴り飛ばされたナイフはヒュンヒュンと旋回しながら、真上に高く上がった。

男が呆気に取られている間も、母親はまだ動いていた。

すかさず片腕が横に広げられて男の首にぶつけられた。
男がハッとした時には既に手遅れで、あっという間に身体を反転させられて首を片腕だけで締め上げられた。
それらはナイフが重力に服従して再び地上に降りてくるまでに行われ――――――最後は、落下してきたナイフまでもが母親の手に収まって行動は終了した。

終わった。
――――――そう、思っていた矢先のことだった。

「……っぐ！？　……ぇ、ぁっ……」

男は突然、大きく呻くと吐息のような声を途切れ途切れに発し出した。
ホッとしかけていたところに再び起こった不穏の気配に、思わずつられて息を詰まらせそうになった。

母親の様子がおかしい、とそこでようやく気づいた。
自分の知る母親なら、勝負がついたとわかれば相手がどれだけ吠えようがそ知らぬ顔で立ち去るだろう。
しかし、この時の母親は何かが違った。
だが、思えばこの時が始まりではなかったのだ。

不良が発したあの言葉。
母親から感じた寒気。
冷たい笑い声。
数分前から、もうおかしくなっていたのだ。
そのことに気づいた時、母親はあの瞬間から初めて言葉を発した。

「……なぁ、お前さっき何て言ったっけ？　アレ、すっげぇウケたからもう一回きかせてくんない？」
「……はなっ……か、は、……」
「殺す、だっけ。……アタシさぁ――――その言葉、大っきらいなんだよねぇ」
「ひ、ぐぅっ」
「特にお前みたいなのが言うのは、さ」

男がどれだけ呻こうと、あくまで母親の声は静かで平坦なままだった。
背中を向けられている為、やはり顔は見えない。
一人取り残された気分でも尚、母親の言葉は続いた。

「殺したこともないくせに、よく言えるよなぁ？　こんな、人を殺さなくてもすむような世界でのうのうと生かされ生きてて……人をどうやったら確実に殺せるかもしらねぇようなケツの青いクソガキが……軽々しく口にしてんじゃねぇよ、タコ」
「っ、……ご、め……っさぁ……っ」
「なぁ、お前は知らないだけで……ちゃぁんといるんだぜ？　飯食うのと同じ要領で人殺さねぇと生きていくことすら出来ねぇのとか、殺したくないなんて言ったら自分が死ぬしかないとかいうデッドオアアライブなふざけた選択肢とか。いけねぇなぁ。いけねぇよ。お前みたいにどーせこの先一度も本当の意味で手を汚すことねぇだろう世俗のガキが、”その言葉”を安くしちゃぁなぁ。それとな、こんなもん使わなくても人なんて割と簡単に殺せるんだぜ？　首の骨って、結構コツさえあればあっさり外す事も折ることも出来るし……そうしなくたって、ここんとこの喉仏ちょっと潰しかけりゃプッツリとイっちまえるんだ。おもしれぇだろ、なぁ？」
「っ……っ……っ……」

もはやガクガクと震えるだけとなった不良に、母親は尚も無感情な言葉を連ねた。

「……まぁ、口で言ったところでお前のカスカスなおミソじゃ理解なんぞできねぇか……じゃぁさ」

クルクルと母親の手で弄ばれいたナイフが不意に止まって、嫌な予感を感じた。

その感覚によって無意識に喉がキュッと絞まったのは、今でも憶えている。

「――――実践しようか。頭でわかんなくても、身体でなら嫌でもわかるだろう？」

見えなくなったナイフが何処に当てられているかはわからずとも、本能がダメだ、と叫んだ。

ビンビンと頭に鳴り響く警笛に理性が耐え切れなくなって、衝動的に叫びを放っていた。

「――――おふく……かあさんっ！！！！」

止めなければ、と。

縮こまった喉が痛くなるほどに、声を無理にでも張り上げて叫ん

でいた。

◆◆◆◆◆◆

沈黙。

気まずい空気が、すっかり自分たちの辺りに充満してしまっている。

自分でやっておきながら、と思いながら蒼助は、

「……んまぁ、こんなことがあったわけよ」

「……それで、どうなったんだ？」

「ん、一応未遂。そいつら放って家に帰った。……そノ後は、小遣いもらえなくなったけど」

おかげで中学に上がるまでゲームセンターには行くことがなかった。

遊ぶための金がないのだから。

「しかも、それからしばらく車で送り迎えだったんだぜ？　もう、いろんな意味で悪夢だったっての、アレは」

「……お前は」

茶化そうとしたが、千夜の重い声はそれを許してくれなかった。

確認の声が続く。

「お前は、自分の母親が……俺と同じだったと、本当に思っているのか？」
「……」
蒼助はその問いに非難の意を感じた。
いや、そうなのだろう。
何故自分の母親を信じてやらない、と。
「……本人から直接聞いたりはしなかった。それっぽい要因はそれきりだったしな」
「――――ならっ」
「でも、最近わかっちまったんだよ」
非難を強くしようとする千夜を遮る。
わかっている。
千夜が不器用で自分を卑下するが、優しい奴だ。
自分が母親をその隣に並べようとするのを否定したいのだろう。
他ならぬ、自分を想って。
だが、皮肉なことにこの事実を肯定させてしまったのは――――
「初日のあの騒動で……神崎がさ、地面に這いつくばって言っただろ。俺にぶっ殺してやるって。その時、お前があの野郎を殴り倒してキレてさ……その後、言った台詞がほとんどウチの母親のと同じだったんだよ」
――――殺したこともないくせに、よく言えるよなぁ？

あの時、そう言った際の見えなかった母親の顔。
千夜の時もやはり見えなかったが、あの寒気は同じものだった。
そう、きっと同じだったはずだ。

言葉を口にした時の顔も。
その感情も。

「……腹が立ったんだろ？」

何も知らないくせに、知った顔で何かを殺すなんて軽く言われたこと。
それがどれだけ重い行為であるかを知っていたから。

千夜は下唇をキュッと噛むと、そのまま俯いて、

「……ああ。あの時は……たまらく、苛立ったよ。そんなことしなくても、生きることを許されていることもわかっていないくせに、と」
「……そうか。だとしたら、おふくろも同じで……頭に血が上って高校生のガキ相手にあんなことやらかしたんだろうな」

思えば、自分は千夜に母親を重ねていた節があるかもしれない。
いや、僅かながらそうだったはずだ。

不遜ともいえる立ち振る舞い。
暴力にねじ伏せられることのない屈強な強い意思。
かつて永遠に失われた蒼助にとって他に並ぶことのないあの居心地の良さを、千夜の傍にいる時に自分は確かに感じていた。

母親は強い女だった。

そう思っていた。
それに違いはないのだろうが、完璧ではなかったことをあの日知った。
あの日以降、時折翳りのようなものを表情に見るようになった。
否。正確には、見逃さなくなったのだろう。
妄信で出来たフィルターのようなものが取れて、そこにあるものを正しく見れるようなったのだ。

……今更だが、そういえば俺って……何も知らねぇんだったな。

母親の存在は一族内ではかなり疎まれていた。
無茶苦茶な方法で本妻の座についたという点もあるだろうが、問題としてもう一つ――――――他所の一族の出であったということもあるらしい。
蒼助は、母親が元は何処の一族の者であったか知らない。
無論何度か生前に聞いたことはある。
だが、母親ははぐらかすだけで答えることは結局なかった。

昔、一族内の何人かの人間が何度か馬鹿の一つ覚えのように”ある陰口”を叩いていた。

――――穢れた一族の末端が、と。

退魔の世界にも家という組織に上下は存在する。
人口、或いは一族を維持させる為の権力と経済力。
それらによって、小さい大きい弱い強いの尾ひれが一族に付く。
穢れた、という言葉はそんなものを測りにして零したものではな

いだろう。
恐らく――――――

……そういうのを生業にしてる一族もいるってのは、聞いたことあるけど。

人に仇なす人外を相手に戦う異能の民であるとはいえ、人を相手にしないということはない。
無論、その対象は一般人ではない。
寧ろ同族――――一組織内の人間に向けて、だ。
古めかしい掟が存在しているカビ臭い世界だ。
権力争いを始めとした様々な陰謀も蠢いている。
そんな闇の中で暗躍し、汚れ役を背負う暗部を内包する一族も少なくは無い。
幸い、玖珂の一族には個々の思惑はあってもそういうものはない。

……だとすると、あのクソ親父も相当な無茶しやがったな。

退魔の一族は、それぞれ差はあれど課せられた業と使命がある故に、誇りとプライドは山よりも高い。
数ある武道系統の中でも剣神と呼ばれる玖珂も長く続いているだけに、それは果てしないものだ。
外部からの血を取り入れることはそれだけで、誇りを穢す行為だろう。
それだけではなく、穢れと罵るに相応する行いをしてきた衆の中にいた人間となったら――――――

……千夜も……そういう組織にいたのか？

否、と思うには見苦しい疑問だ。

「……すまない」
「――――あ？」
突然横から入って来た謝罪に声に、蒼助は物思いの世界から引き戻された。
顔を向けると、申し訳なさそうに顔を俯けた千夜がいた。
「お前に嫌なことを思い出させてしまった……」
「……はっ、いや、おふくろのことに関しては俺が勝手に……あー、そもそも俺が言いたいのはなぁ……」
気づけば、せっかく出した話題は本来の目的とは真逆の効果を発揮し、空気を悪くしてしまっていた。
蒼助は慌てて、
「……だから、俺は別にお前が過去に何していようが全然気にしないし、責めるなんてのも絶対にしない。……おふくろにも、そうだった。人間ってのが一人一人違うように、どう生きてきたか、それまでどんな人生だったかだって違うんだ。……それがあって、今のお前があるっていうなら俺は何だってかまわないさ」
「……」
出来るだけ多くの言葉を探した。
言葉なんぞその場しのぎにしかならないだろうが、それでも千夜の気負いが少しで減るのなら――――安堵させてやれるのなら、いくらだってくれてやりたかった。
ほんの少しでも自分のこの気持ちが伝わるのなら、と。
蒼助は、紛れもない自分の本音を形にできる言葉を模索し続け、

「……結果が出ちまった以上は、事実はどう言い繕っても変わらない。でも――――仕方なかったんだろ？」
「……しかた、ない？」
「お前が生きてきた世界はそうだったから……そうしないと生きていくことすら許されない場所だったから。……俺は知らないから、それがどんなだけのものかは想像もつかねぇが……でも、そうでもしないと」

「――――止めろ、蒼助」

強い響く制止。
それが表情をより険しく、より硬くした千夜から放たれたものであると認識するのに　数秒ほど時間を消費した。

拒絶。
千夜の態度はそれを如実と表しているものだったからだ。

そして、もう一つ含むものがそこにあった。
それは――――

「……仕方なかった、なんて……言うな。吐き気がする、その言葉」

まるで憎い相手に吐きかけるような低い声で、千夜は言った。

「確かに、あそこはやり方を選んでいられるような猶予や余裕のある場所ではなかった。だが、俺は……選んだんだ。自分で、手を汚して生きる道を選んだんだ。誰に強制されたわけではない……自分の意思で、だ！」

千夜は抑えきれない憤りに突き動かされるように、立ち上がると行動を歩みに変えて、蒼助の傍から離れていく。

「お前に悪気が無いのはわかっている。だが、その言葉だけは使わないでくれ。……俺が今まで歩んできた人生を、その言葉がたった一言で片付けて、それだけの価値しかなかったみたいにする。その先の終わりも往く意味も何もかも覚悟して、俺が決めて、俺が歩んできた人生だ……どんなものであっても、それに変わりはない。誰にどう言われようと、これは俺の一部だ。絶対に手放さないし、その存在を否定も拒否もしない。……一生向き合い、伴っていく……俺そのものだから」

行き止まった金網に手を掛け、握り締める。
風が吹いた。
千夜の降ろされた髪がされるがままに靡く。

意図されているわけがあるはずもないが、その背姿は全て計算されたように優美で、言葉を失うほどの凛々しさに満ち溢れていた。
綺麗だ、と飾り気ない単純な感想が蒼助の胸に落ちた。
同時に、その背中は美しさと共に孤高を描き、共存させていた。

それが、あの夜蒼助を救った背中だった。

「吐き気が、する……か」

白昼夢を見ているような気分でそれを見つめながら、蒼助は先程突っ撥ねられた己の言葉を脳裏に反響させた。

確かに、己の身一つで全ての責任と決断を背負ってきた千夜にと

って、この言葉はあまりにも酷で醜悪なモノだっただろう。
これは、逃避と諦観の象徴だ。
まるで千夜に当てはまるところのない、使いどころを間違えた言葉だった。

だが――――――蒼助は、母親を失ってからそんなものに縋り続けていた。

逃げていた。
拒否していた。
否定していた。
前へ進むことを。
それに伴う痛みと苦しみを。
負うべき責任も覚悟も、他人に押し付けて何もかも放り捨てていた。

心の何処かで、そんな状態からどうにか脱したいとは思っていた。
けれど、堕落の中の安楽が終わるのが怖かった。
微かな前進への望みは、そんな恐怖に怖気づいていつも止まっていた。

……そうか、だからか。

あの夜見た千夜を、明けた後もどうしても忘れることが出来なかった理由。
それは、千夜が自分の求めていたものを持っていたから。
憧れというべきか。それとも理想というべきか。

なんにせよ、千夜はずっと求めていたものをその身を以て蒼助に知らしめた。

……あー、なんかわかったかも。

何で千夜にあんなに惹かれたのか。
何で千夜を好きになったのか。

こんなにも違うのに、と思っていた。
だが、寧ろ――――だからこそ、なのだろう。

あまりに違い過ぎて、自分がどう足掻いてもとって代わることなど不可能に等しい。
対極的な位置に存在する者。

「……だから、だろ」

そうだ、と己にわからせるように繰り返し念を押す。
自分とはあまりにも違いすぎるから、惹かれた。
この忌まわしくて仕方なかった己という存在とはかけ離れていたからこそ、その存在に焦がれた。

誰かに言って欲しかった。
自分では言うことが出来ても、どうにもならないから。
誰かにこの在り方を否定してほしかった
自分では認めたところで、どう変えることも出来なかったから。

誰かにこの腕を引っ張って欲しかった。
自分では抜け出すことはおろかそんな勇気も無かったから。

だから、千夜に求めていた。
かつて母親がそうしてくれたように、引っ張って前に連れていっ

てくれることを――

「――――……蒼助？」

「……っ」

ハッと我に返ると、無心で見上げていた空を遮るように千夜の顔があった。

一度は離れた千夜は、いつの間にかこちらに戻ってきて目の前に立って蒼助を見下ろしていた。

「……どうした、突然黙ったかと思ったら……ボーっとして」

「あ、いや……」

「……気を、悪くしたか？」

気遣いを全否定された、と言ってもいい先程の千夜の言葉のことを言っているのだろう。

「そんなわけねぇだろ。お前が気に病んでねぇなら、それでいいさ。さっきみたいな調子でいけよ」

「……出来たら苦労しない。それに難しいんだ、いろいろ」

「……そうか」

安易にどうにかなるような問題ではない、ということだけは蒼助にもわかった。

蒼助がどう言葉を並べたところで解決しないということも。

……ちと、身の程知らずだったか。

自分のこともきちんと面倒見きれず、他人任せにしようとしていた人間が言うことなど『余計な口出し』の域を出ていないものだっ

ただろう。
言わなきゃ良かった、と己を恥じていたところに、
「……ありがとう」
「えっ」
「あの言葉の前に言ってくれた台詞は、嬉しかった……」
そう言いながら、千夜は微かに笑った。
落ちかけていた気分が現金なほどに上昇するのを感じた。
太陽を背にして逆光を受ける千夜の笑み。
満開には程遠い、咲きかけのような。
ここにきて、初めて千夜の笑顔を見た気がした。
見つめながら、蒼助は思う。
強く強く、生きてきたのだろう。
自分の中のたくさんの何かを削りながら。
もう、こんな風に微かにしか笑えなくなるほどに。
そんな千夜に、自分は何を望む。
それでも彼女に手を引いて導いてほしいと望むのか。
自問と共に脳裏に現れたのは、幼き日の自分。
母親の手なしでは、歩めなかった子供。
その姿は、少しして中学生の姿に変わる。
母親の手を失い、不貞腐れたようにイジけた目をした少年。
……ガキが。

脳裏の自分にそう吐き捨て、蒼助は手を伸ばした。
己を見下ろしながら立つ千夜に。

「えっ、ちょっ……」

腕を掴み、そのまま力任せに引いた。
強引な力に体勢と重心を崩された千夜は、そのまま蒼助のいる前へ倒れ込む。
膝を崩したところを蒼助は遠慮なく抱き込んだ。

「……何だ、一体」
「いいから」
「おい」
「……頼む」

少しだけ、と付け足すと、千夜は言葉で返してこなくなった。
代わりに浮いていた膝が地に付いて、体勢の安定を図った。
少し増した重みが、身を任せているのだと教える。

「少しだけ……だな」
「ああ」

腕を回すまではしてくれなくても、蒼助にはこれで十分だった。
千夜の髪からほんのりと香る匂いに、安堵すると同時に再び物思いに落ちる。

子供の頃の夢――――己の志にしようとしたモノ。
それは母親という存在へと己を近づけることだった。
振り返ってみて、それが少し違うことに気づいた。

越えるとも、同じようになりたいとも違う。
なりたかったのだ――――彼女という存在そのものに。

――――若は、美紗緒さんにそっくりね。

――――本当によく似ていらっしゃる。

昔から周りに言われてきた。
彼女の持っているモノから受けるオコボレの賛辞。
どれだけ言われようと少しも嬉しくなかった。
見かけだけであるのは、自分がよくわかっていたから。

彼らが本当に好きなのはいつだって母親の方だったから。
強かった人。
好き勝手に生きているようで、本当はいつも周囲に気を遣っていた人。
誰かを大事に思える人間だったからこそ、彼女は思われていた。
自分とは少しも似ていない。
似ても似つかない人。

蒼助は、そんな彼女になりたいとあの屋敷の中で望んでいた。
自分が欲しいものを全て持っていた彼女という存在に、焦がれていたのだ。

……ばぁか。

愚かしい願いを本気で叶えばいいと思っていた自分を蒼助は冷めた気分で罵った。
それが無いモノ強請りというやつで、そんなものは幻想に過ぎないと知ったのは母親が死んで少ししてのことだった。

結局、自分は自分でしかない。玖珂蒼助は、どれだけその存在を嫌おうと玖珂蒼助であることは変えようない事実だ。
それを思い知った時、自分が選んだのは己からの逃避と己への拒絶だった。
無茶な望みは叶わないのだと、全てをあきらめた。
失くした何かを探しているふりをして、歩みを止めてそこに留まり、動くのを止めた。

他人に望むばかりで、自分では何もしなかった男――――玖珂蒼助。
利己的で非人情で、与えてもらうことばかり考えている、この世の何よりも憎い存在。
どれだけ拒絶し、否定しようと変わるはずの無い存在。

けれど、それでも――――そんな存在にもたった一つ出来ることがあると、蒼助は知った。

過去を否定せず背負い、それでも前を往く女に出会って。

「……いい加減、頃合いってことだよな」
「ん……何か言ったか？」
「何も」

訝しむ千夜を抱く力を強めることで誤魔化す。
そして、思う。

誰かに何かを望むのはもう止めだ。
突き放して続けてきた前進という行為を再開しよう、と。

過去の自分が、嫌だ無駄だと叫ぼうが知ったことか。
足掻こうが喚こうが引きずって進んでやる。

誰かになることは出来なくても、前へ進むことはできる。

ここまでに随分時間がかかったが、それでも――――ようやく、
わかったのだから。

［壱百四］　存在の相違（後書き）

自分と違う考えを持っている相手に覚えるのは、本当に反発心だけだろうか、という話。
蒼助の場合は、自分が心底嫌いで、こうありたいとする在り方をしていた千夜に反発もなかったわけではないが、憧れ惹かれました。
磁石のＳ極とＮ極みたいなもんです。
補足すると、これは久留美嫌いの伏線です。
次回からしばらく久留美が出ばります。

【壱百伍】　彼女の衝動（前書き）

闇の中、儚いそれは。
小さく脆い。

――――今は、まだ。

【壱百伍】　彼女の衝動

昼時、屋上にいたのは一組のカップルだけではなかった。
一つ遅れてやってきていた『観察者』が、彼らを死角から見守っていた。

「……なんちゅーか、ここって壁薄くて音が響くから見なくてもなにしとんのかよぉわかるなぁ」
「階段上がって壁に耳を当てる必要もないな。というよりも、これ以上近づこうとしたら絶対バレる」
「せやなぁ」

呑気な会話がごく最小限に抑えられた小音量で交わされる。
会話の紡ぎ手は昶と七海だ。
屋上へと続く階段の一段目に腰を据えて、外から筒抜けの会話を肴に各々の昼食が進む。

「……なぁ、今更なんけども」
「何だ」
「今日って四月馬鹿ちゃうん？」
「だいぶ前に終わった。もうすぐ五月だ」
「……そうなんやけども」

なんか信じられへんやん、と七海はカニクリームパンに噛み付きながら告げる。

「ついこの間までフラフラしとったあいつが……やで？」
「人間なんてもんは、いつ何処でどんな風に気が変わるかわからない生き物だ。あいつも例外じゃなかったって話さ」

「そんなもんかなぁ……」

七海は納得できないとばかりに眉を顰め、モグモグと咀嚼する。

彼女の中の観察対象たる友人の印象は、とにかく女にだらしないというもの。

実際に、何度か『現場』に遭遇してしまい、非常に嫌なものを見せられたこともある。しかも、毎度違う女だった。

この男が本気になるとしたら一体どんな女だろう、と七海が考えていたのも随分前のことだ。

そして、今――――その疑問の答えがある。

「なぁ、妙なこと言おうとしとるのはわかっとるけど……ウチ、最近ほんまおかしいんや」

「何だ突然……どうおかしいって？」

「どうっちゅーかなぁ……自分でもよぉわからんのやけども……そのぉ、なんちゅーか」

うーん、と頭を捻るように傾けて、七海はまだはっきりと把握しきれていない様子で歯切れ悪くも心中に渦巻くモノの旨を口にした。

「なんか、胸焼けみたいなんがずっと続いとんねん。あ、微妙にちゃうかも。……チクチクこの辺りが……痛い、いや、疼く？　……なんやろなぁ、すっきりせんって言えばええんやろかなぁ」

「はっきりしないな。……ストレスでもたまってるのか？」

「あ、近い……あれ、でも何にや……？」

「こっちが聞きたいんだが」

ボケをかます七海に、昶は脱力づきながらも、

「……心当たりはないのか？　そういうのが、一層強まる時に特定の何かを意識しているとか」
「特定の……」
問いを聞くと、七海は突然考え込むように黙り込んだ。
何か思い至ったように一瞬目が見開いたが、その後更にのめりこむように沈黙を深くした。
「おい、どうした」
「……わからん。何でや？」
「都築？」
自問自答を繰り返す七海。
埒が明かないと判断した昶は、一度我に返させるべく肩を叩こうと手を上げた。
「つづ」
「……蒼助」
「なに？」
「あんなぁ……蒼助が、ちーちゃんとおる時なんや、ここんとこがいっちゃん痛くなんの。何でやろかぁ」
不思議そうにやり場のない視線を上方へ漂わす七海に対し、昶は何故かビシリと表情を強張らせた。
その様子の変化に、七海は気づくことも無く腕を組んで唸った。
「わからん……わかんのや」
「……まさか、ここまで鈍かったとは。しかも今になって……」
「ん？」
「いや、何でもない……気にするな。あと、それに関しては……多

分、あまり大したことじゃないと思うぞ。大方、今まで否が応にも腐れ縁づいて絡んできた奴が、急に離れていったもんだから今の状態に違和感を感じているだけだ」

「……寂しい、とか？」

「そうだろ」

そうやろか、と七海は完全に振り切れたまでとはいかないが、納得した様子を見せた。

昶はそれを見ると、肩を力が抜けるような一息をついた。

そして、心の中で一人心地にぼやいた。

本当に何で今更になって気づくんだ、と。

「あっ、ちゅーか、寂しいのは早乙女もやないんか？」

「はぁ？」

「世話女房はんは、自分の亭主が他の女のとこ行ってもうても悔しくも寂しくないんか？」

「亭主って」

嫌な呼び方するなよ、と昶はあからさまに嫌そうな顔をした。

「……ようやく一人立ちしてくれた子供に対する親の安心感はあるがな。いいだよ、これで。厄介な奴の世話を押し付けることも出来たしな。……それに、俺は夏から忙しくなるんだ……ちょうどいいタイミングだった」

「忙しゅうなるって……」

「――――後継者候補による次期当主選抜の儀」

その返事に、七海はハッとした反応と共に表情を変えた。

「そうか、辰上（たつがみ）の方じゃもうやりよるんやなぁ……」

「ああ。矢代はまだなのか？」
「……うん、とりあえずまだみたいや。……まぁ、やるとなったら一応報せは来ると思うけど」
「お前も候補の一人に数えられているんだよな？　来たら、どうする？」
「やれって言われるやろうけど……ウチは、イヤやなぁ。弓引くんは好きやけど、組織背負ってとなると……今までとはちごぉなってくるやろし」
「まぁな。当然、いろいろ面倒くさいしがらみが今まで以上に強く絡んでくるのは避けられないだろう」
「……当主……叔母はんは、好きにしたらええゆうてくれはってるし……まぁだ、一人身で年もヨソと比べると若い方やから選抜の儀もまだ無いと思う。せやから、まだあんまり深く考えとらん。……でも、どっちかっちゅーと……ウチは、弓だけ続けてたいなぁ」
「そうか……」
「もし、夏のそれに選ばれたら……どないなるん？」
「申し立てれば、卒業まで待ってもらえるだろうが……向こうは、中退を進めてくるだろうな」
「そういうんあるからやぁなんや、一族って。……まるで、こっちの都合も何も知らんって顔しよるからに……」

嫌気がさした表情をあからさまに見せる七海に対し、昶の反応は涼しいものだった。

「仕方ないだろ、それが組織というものだ。……俺たち個人は、所詮一つを構成する為のその部品でしかないんだよ」
「ヤな言い方やなぁ……」

昶の皮肉った言い様に、七海は苦笑いを零した。

「……ところで、朝倉は最近見ないな。今週の始めあたりから、ずっと欠席か？」

心なしか重くなった空気を一新するべく、昶は些か強引に話題の切り替えに入った。

新たな話の肴に選んだのはこのところ姿を見なくなったクラスメイトの消息についてだった。

「ああ、渚は……なんか、実家に帰るぅゆーてたで」

「実家？　青森の朝倉本家にか？」

「ちゃうって。伊勢の方やとゆっとったけど」

「伊勢神宮……確か、そこは母方の家だったか？」

「そうゆっとったかな……なんか普段ふざけとるけど、あいつもいろいろ複雑な事情抱えとんやなぁ」

新たな話題も暗く沈みかけていた。

業界がらみとなるとどうにも明るい方向には話が傾かないな、と二人が思ったかどうかは定かではない。

その時、

「――――何処触ってんだ、この馬鹿っ！！！」

壁伝いに空間に響く怒声。

突然の外部からの投球に、二人は揃って肩を竦ませた。

おそるおそる屋上に続く階段の上方に顔を上げて、

「……胸か、尻か？」

「あいつのことだから両方かもな。……どっち触ったにしろ雰囲気ブチ壊したに変わりないがな」
「今までやったら、そのまま次に持ち込めたかもしれんけどなぁ。……ちゅーか、あの二人実際どこまで行っとるんやろ。今、蒼助ってちーちゃんちに居候しとるし……」
「……あの反応を見るあたり本懐は遂げていないだろうな。だが、蒼助のことだ……途中までいくらか手は出していると思うが……」
「おー、さっすが元・世話女房やな。ちゃんと習性把握しとるやん」
「好きで理解出来るようになったわけじゃ……」

意図せずしてようやく話に盛り上がりが出始めたところに、彼らの隣で不穏な音が水を差すように鈍く響いた。

――――――グシャ。

何が潰れる音の直後、ビチャビチャっと液体が床の上を打つ音が続いた。

「……え、久留美？」

始まりから一言も発さないものだから今の今まで存在を忘れかけていた人物は、何故か口していたであろうイチゴミルクを握りつぶしていた。手加減も何もなしに圧力を受けた紙パックは見る影も無く拉げてしまい、中身は全て零れて床の上のぶちまけられていた。
久留美はというと、恐ろしいまでに無表情で自身の手がベタベタに汚れているにも関わらず何の反応も示さない。
いっそ不気味なまでに静かだった。
七海はおろか昶までもが、声をかけるのに躊躇を抱いた。

「……おい、どうしたんだ新條」

「……何でもない」
「何でもないって、いくらなんでも無理が……」
「ごめん、誘っといて悪いけど……先戻るわ。手も洗いたいし」
「あ、オイ……」

久留美は素っ気なくそれだけ言うと、そのままその場を去っていった。
残された昶と七海は、わけもわからずその背中を言葉も無く見送り、

「……なんや、突然」
「わからん」

ただ呆然と呟くだけだった。

◆◆◆◆◆◆

屋上手前の踊り場から去った久留美が向かったのは、そのすぐ下の五階のトイレの流しだった。
手にベタベタと感触と共にまとわりつく甘ったるくくどい匂いをどうにかする為に。

「……ったく、味はいいけど零すと匂いが厄介なのね」

ぼやきながら蛇口を捻る。
溢れ出る水の中に手を差し入れて洗い流すが、匂いはなかなか取

れない。
消臭スプレーでも持ち歩いていればよかった、と根気良く水を浴びせ続ける。

「……はぁ、何やってんだろ……私」

自嘲じみた呟きと共に、溜息を漏らす。
俯いた後に上げて見た自分の顔を見て、目の下に隈が濃く出ていることに気づく。
睡眠不足によるものだ。昨日はほとんど寝ていない。

「あーあ、ニキビも出来ちゃってる……帰ったらたっぷり寝ないと」

情報と交渉材料の収集。
交渉という危険な駆け引き。
加えて夜明けまで回収したカメラのデータの修正。

今回一番働いたのは間違いなく自分だろう、と久留美は自分を讃えた。

「……本当、よく働いたわよ私。……こんな、何の利益もないことにね」

いつになく自分が必死だった事実が、今になって自覚として久留美に訪れる。

己の手の平をふと見る。
昨日、この手は人を殴ったのだ。
理由は何だっただろう。

喚き散らしているのがあまりにも耳障りで我慢ならなかったからか。

……違う。

我慢ならなかったのは、別の理由がある。

あくまで己を正当化しようとするあの女に腹が煮え繰り返った。

怒りの矛先を見当違いな方向に向けて、理不尽に傷つけた――――『彼女』を。

……殴ったんだから、殴り返して当然よね。

今朝会った時に、千夜の口元についていた絆創膏が目に付いた。

何故か額にまで大きなそれがついていたのはわからないが。

「私、頑張ったのに……なのによ、あの二人ったら」

きっかけさえあればくっつくだろう、と思ってはいた。

蒼助は最初の頃から何かと千夜を意識していたようだし、千夜の方だってまんざらでもないようであった。

彼らが惹かれあっているのは、第三者視点から見れば明らかな事実だった。

今回の件は、良くも悪くも微妙な距離に変化を与え決定的なきっかけとなっただろう。

今日見た光景は、なるようなった結果そのものだ。

あれだけフルで動いた苦労は報われた。

――――なのに、

「なんか、釈然としない……」

呟いてから、七海の言葉が脳裏に蘇った。

七海自身は自覚していないが、彼女は蒼助に好意を持っている。

それに気づいているのは、自分と昶だけだろう。

当然、相手である蒼助も本人と同様に好意に気づいていない。友人となったら対象外になるのなら、まず間違いない。

失恋してようやくその秘めたる想いが彼女の中で存在を主張し始めたのだろうが、既に手遅れだ。だから、昶もあんなに焦っていた。大方、彼も千夜が現れなければ七海とくっつけばいいと思っていたのだろう。

しかし、それはならなかった。こうなったら、トコトン気づかせてはならない。寝てる赤子が起きてしまうと面倒なことにしかならないのは目に見えている。

……だからって、何で私まで。

ここがわからないのだ。

何故、自分まであの二人が一緒にいるところを見てこんな気分になっているのだろうか。

……まさか私まで……って、それは無いわね。

蒼助は――――無い。

ここまではっきりと断言出来ることは他に自分の中ではないとまで言える。

あの男は出会いから何故か気に食わない。それもずっとだ。

怨恨の類ではない。ただ、本当に気に食わないのだ。

理由を挙げると、性格から言動、素行までいろいろケチをつける

ことができる。
だが、それらはどれも漠然とした決定的とは言い難いもので、これといった原因は見つからない。
あの男に対する嫌悪感は、はっきりとしたものがわからない苛立ちも込みなのだろう。
だが、対象が蒼助でないとなると――――
「えっ、ちょっと……それって」
嘘でしょ、と久留美は思わず頭を振った。
「な、無い！　ナイナイ、絶対に無い！！」
「――――何が無いんだ？」
「ぎゃっっ！？」
突然、予期せぬ掛け声が出入り口の方から来て、思わず叫んでしまう。
思い切り動揺しながら振り向くと、
「か、千夜っ？　な、何で……」
「もうすぐ昼休みも終わるから教室に戻る前にトイレを済ませようと思って……そしたら、ヤケにデカい独り言をしている奴がいるなと思えばお前だったから声を掛けたんだが」
「え……」
外に聞こえるほどだったのか。
恥ずかしさと冷や汗を同時に感じる。
「なぁ、何が無いんだ？」

「へっ？」
「探し物なら手伝うぞ」
からかう様子はなく、真面目にそう聞いているらしい。
だが、勘違いしている久留美には好都合だった。
「何でもないわよ。別に何か失くしたわけじゃないから」
「……そうか。……だが、何か困ったことがあったら言ってくれ。俺に出来ることなら何でもするから」
「何よ、急に……」
千夜は何か含んだ様子もなく率直に答えた。
「お前には今回、助けられたからな。礼には足らないだろうが……出来ることなら報いとして返させてほしい」
「へ、へぇ……あんたは……彼氏と違ってちゃんと感謝してくれるのね」
「カレシ……？」
「ちょっ、アンタ……それはないでしょ」
そこはボケるとこじゃないだろう。それとも本気なのだろうか。
この反応を当人が見たら泣くかもしれないな、とここにはいない男を少しだけ気の毒に思う。
「……蒼助は？」
「先に教室に帰ってもらった」
「そ。……まぁ、女子トイレの傍で待っていられても困るもんね」
これといって理由は無いが、なんかイヤだ。
男にはわからない感覚だろうが。

「んと、まぁ……良かったじゃん」
「――――え」
「上手くいったんでしょ？」

途切れようとした話題を繋ごうと思っていたら、そんなことを口にしていた。
その瞬間、何故か胸が痛んだ。
七海が言っていたチクチクとは違う。ズキン、という擬音が嵌るはっきりと痛みだ。

無理やり無視しながら、千夜の反応を待つ。

「ああ、まぁな」

千夜の反応は意外と薄かった。
さっきといい今といい、こちらのからかう気が失せてしまうほどに素っ気無い。
惚気られたらそれはそれで腹が立つものだろうが、これだけ淡白だとまたしっくりしないものである。

……ひょっとして、私らが思ってるほど進展していないとか？

昶と七海がいろいろ勘繰っていたが、実際はどうなのだろう。
壁伝いに反響して聞こえてきた会話からはそれなりに甘いものを感じた。
過剰なスキンシップは千夜に通じていない初心な反応を考慮すると、身体の関係までは一晩で行きつけなかったともとれる。

……まさか、キスすらしてないってことは。

いくら本命相手だからといって、そこまで遠慮はしないだろう。
こういうのを下種の勘繰りというのだろうが、気になるものはなるのだから仕方ない。
人間の一種の性というものだ。

「……久留美？」
「え、なに」
「急に黙ってどうした」

どうやら考えに入りすぎて、随分長く沈黙していたらしい。
何でもない、と返そうかと思ったが、千夜相手ではさすがに二度目は通じないだろう。
どうしようかと対策を迷ったところに――――昼休み終了のチャイムの放送が流れた。

「……あ、行かなきゃ」
「そうだな」

出来るだけ自然を装って何とか話を逸らすことに成功した。
千夜が流されてくれたことにホッとした矢先、

「――――っ」

それは千夜がクルリと向きを変える際のことだった。
いつもと違って何故か降ろされていた長い髪が動きに合わせて、ふわりと浮いた。
その僅かな瞬間に見えたものを久留美は見逃さなかった。

「……ちょっと、失礼」

「久留美……？」

項にかかる髪を指先で退ける。

髪の隙間から見えたそこには――――赤黒い小さな斑点があった。

「……ここ、虫にでも刺されたの？」

「っっ！！」

問いかけて一秒にも満たずして、千夜は驚いたように久留美を振り向いた。

その顔は――――久留美が見たことも無い『女』の貌（かお）だった。

「な、なっ」

千夜は沸騰しそうなくらい顔を紅潮させ、首の後ろを押さえて金魚のように口をパクパクさせている。

こんなに動揺している千夜は、やはり見たことが無かった。

「……こ、これはっ……くそっ、あいつこんなところにまで」

ここにいない男に向けて怒りを向ける千夜。

その姿に、胸の疼きが増した。

……なんだ、やることしてんじゃん。

納得という感覚が胸に落ちてくる。

同時に奥底からボコリと何かが沸き立った。

ボコリ。
ボコリ。
ボコリ。
ボコリ。

気泡はどんどん発生して、沸騰を促していく。

……ずるい。

そう呟いたのは、内側で沸き立っては弾けていく気泡だ。
ドロリとした黒い泡が、久留美の抑圧していた不満を少しずつ解放していく。

……私、だって。

自分だって頑張った。
千夜の為にかなりの無茶をしたと思う。
蒼助は次に暴力沙汰を起こせば退学、というデメリットを振り切って身体を張った。
だが、それは自分だってそうだ。
犯罪めいたギリギリの行為に手を染めて、イチがバチかの賭け同然の行動に出たのだ。
怖くなかったわけがない。怖かったに決まってる。
けれど。けれど、怖気づいてしまうわけにはいかなかったから。

……何で、蒼助だけ？

ずるい、と口をついて出てきそうなくらい内側の不満が膨れ上が

る。

そして気が付けば、その臨界点は既に越えて口を開いていた。

「……ねぇ、千夜」

「ん？」

千夜はきょとんとした顔で受け答えた。

ちゃんと自分を見ている、という理解すると、それが最後の箍となっていた理性で出来た留め具をパチンと音を立てて外した。

「――――さっき、出来ることなら何でもしてくれるって言ったよね？」

◆◆◆◆◆◆

思えば、ここが己の運命の分かれ目だったのかもしれない。

それを彼女自身が知るのは――――悔やみ切れない後悔と未来の決断の狭間に立つ、もう少し先の話である。

【壱百伍】　彼女の衝動（後書き）

久留美チャンがおかしくなったようデス。
なんか新たな波乱の気配がしますね。
ちなみに、今度のは――――デカいです。

「壱百六」　と或る挿話　（前書き）

それは語られることのない、挿話

【壱百六】　と或る挿話

その日の授業終了後、２－Ｄの教室にて。

――――誰もが予想だにしなかったまさかの事態が勃発した。

後日その場に居合わせたそこの住人達は、口を揃えて語る。

その時の惨事を。

あんなテロは見たことがない、と。

◆◆◆◆◆◆

「――――――というわけで、あんたの彼女を今日と明日レンタルさせてもらうから」

今日も苦痛な授業（しごと）を終えた学生たちが、もう自由だぁ～な気分で楽しい下校タイムへ身を乗り出そうとした時だった。

偶然にもまだ誰一人教室を出ていなかった。

故に聞いてしまった。

信じられないその――――――――核爆弾にも匹敵するであろう発言を。

一瞬誰もが思考を停止し、動きを止めてしまった。

そして、強制終了した肉体を再起動させてガチガチと鈍く固い動きでその発言源を見遣った。
見ないでそのまま立ち去った方が利口であるのはわかっていたが、危険な匂いがぷんぷんしていてもこれはデカい祭りの起こる気配だった。逃げ出すなんて愚行もいいとこである。
そんな常人外れな志向を持ち合わせるあたりが彼らの２－Ｄたる由縁だった。

故に野次馬どもは見た。
その起爆地を。

「――――――あぁ？　何だって……？」

ひぃ、と周りが思わず一歩足を引くほどの低い声が教室に響く。
音量は大声には至らない並程度なのに。
周囲が緊張感を各自で張り巡らす合間にも、授業中とは比べ物にならない息苦しさが、教室内を満たしていく。

「幸せ気分浸りすぎて、耳腐ったかこの有頂天ヤロウ。あんたの女、ちょっと借りるっつってんのよ」
「てめぇこそ何ヌかしてんのかわかってんのか。空気読めてねぇにも程があるだろお邪魔虫」

これ見よがしにその男――――玖珂蒼助の恋人となった少女の腕に己の腕を絡ます久留美。
見せびらかすようなその姿勢に、完全に目を据わらせて額に青筋を浮かせている蒼助。
双方、背中に暗雲をモクモクと立ちこませているバックを背負っている。

――――なんだ、アレ。

一組のカップルとその間に入り込む悪女――――と呼ぶには、些か立ち位置と構図がおかしい光景だった。

周りが状況を読み切れずにいるにも拘らず、騒動の中心では話が進んで行く。

「大体、私が一人で勝手にこの話を進めたみたいな見方してない？　ちゃんと本人の了承もらったから、あんたにも断っておこう思ったのよ。一応」

「一応は余計だ！　つか待てっ、お前……そりゃ、どういうつもりだよっ」

蒼助の怒りの矛先が、どちらかというと当事者というより二人の揉め事に巻き込まれた感を匂わせていた千夜に向いた。

ゴクリ、と周りが思わず息をを呑むのも露知らず、千夜は一人だけ平常な様子を保ちながら、

「どういうつもりも何も……今回の礼に何か出来ることがあれば何でもすると言ったら……なぁ？」

「ええ、そうよ。今回の私の働きに対する報酬に――――この終夜千夜丸ごとレンタル一泊二日を請求するわ」

「俺の女をそこらのレンタルＤＶＤと一緒にするんじゃねぇぇっ！　！　そもそも泊まりなんて出来るか、明日も学校ある――――」

「――――ばぁか。明日は学園創立記念日で私ら休みよ」

「なっっ」

衝撃を受けたように言葉を詰まらせた蒼助は、咄嗟とは思えない俊敏な動きで周囲に確認の視線を飛ばす。

視線を受け取った人間全てが「うん」と頷く動作で応え、更に衝撃。

しかし、それでヘコたれるような柔な精神ではなかったのか、蒼助はすぐさま立ち直り、

「っ、だったら尚更ＧＯサイン出せるか！」

「あんた……今、自分が私にそんな口答えが出来る立場だと思ってんの？」

「うぐっ！」

「私、恩人。あんた、奴隷。――――この現状においてなんか違うとこあったら言ってみな」

一部ある気がしたが、そんな些細な抵抗はこの女には通じはしないだろう、と蒼助は口籠った。

癪ではあるか、蒼助は事実上久留美に救われたのは否定しようがなかった。

「だ、だからって個人のプライベート邪魔される謂れまではねぇ！」

「このプライベートキラーをつかまえて何を今更なことを」

「やかましいっ！！」

「……さっきから何でそんなに揉めているんだ？」

不毛な二人の言い争いの間に入ったのは、同じ場所に立っているにも拘らず一人だけ取り残されている千夜だった。

「何でって……大体お前も何でそんな話に頷きやがったんだよ！今からでも断れよ！」

「何でだ。別に良いじゃないか、これぐらい」

「別にって……」

事態にはいつのまにか修羅場へと発展していた。
しかし、千夜は切羽詰った表情で迫る恋人にも一人涼しい顔で、

「どうせ、お前は明日も三途のところに入り浸らなければならないのだろう。休日となったら、丸一日籠もることになるだろうな。……そうだ、いっそ帰ったら朱里と一緒に今日の夕飯あたりから明日俺が帰るまで三途のところに世話になればいい。三途の料理なら朱里も文句は言わないだろうし、わざわざ自宅を店をいちいち行き来する手間も省けるじゃないか」

「ばっ……そういうことじゃねぇっっ！　つか、こうなったからには丸一日なんてやってられるか！　アッチの方はちゃんと進歩して成果も出てきてるし、サボるわけにはいかねぇが午前中くらいは過ごす余裕はあるっての！　だから、俺に対してはそういう気遣いじゃなくてもっとこう……」

照れくさいのか興奮しすぎて舌が回らないのか、はっきりと核心的な発言までには至らないがギャラリーと化した２－Ｄの面々には何がいいのかが手に取るようにわかった。
出来立てほやほやのカップルである男女が成立してわずか二日目で得る休日というチャンス。
ここまで必死になっているということは、正直信じ難い話ではあるが、蒼助としてはまだ到達していない”領域”まで自分たちの関係を進展させたいのだろう。
何か蒼助個人の私用が入り込んでいるようだが、そこは自分は平気だと気遣ってくれるよりは逆に寧ろ『無理を言っているのはわかるが明日は一緒に過ごしたい』と言ってほしい。

第三者ですらところどころ会話から少々の事情の断片を聞き拾うだけで、ここまで理解し汲みとることが出来たのにも拘らず、当の

恋人は――――

「……一緒に過ごすとしても――――――何をするんだ？」

「は？　何って……」

「アレが終わるまで……多分、昨日の続きは出来ないんだぞ？　なのに、俺と一緒にいて他に何をするんだ？」

『――――――っっ！！？？』

何の躊躇もなくこんな発言を言いのたまった。

これは、言われた本人とその周囲に若干の違いはあるものの衝撃を走らせた。

「……お、まえ……俺を何だと思、っ……て」

強烈なパンチを真正面から食らったかのように仰け反った体勢からゆっくりと俯いた蒼助は、そのダメージを隠す余裕もなくただ打ち震える。

そして、

「……っ、そうかよ……じゃぁ勝手にしろ！」

「えっ……おい、そう――――」

ついに耐えかねた蒼助は自分の鞄を持って身を翻した。

突然の行動に驚いて引きとめようとする千夜の声にも耳を傾けることもなく、ドスドスと荒々しい足取りで教室の出入り口前に立つ

と止まったが、

「……っ――――ちくしょぉぉっっ、千夜の馬鹿野郎ぉぉぉぉーー!!!」

一瞬だけ振り向いて叫び、廊下を走り去っていった。

残された教室の人間だけは新たな衝撃的な出来事に、それぞれの目的も忘れてただ呆然と立ち尽くした。

そうさせるのは、去り際に吐き捨てていった負け犬の台詞ではない。

彼らは見たのだ。

一瞬だけこちらを向いた時の蒼助の顔を。

誰もが唖然とする中、久留美が一足早く立ち直り、

「……あんた、スゴいわね。あの蒼助を”泣かせる”なんて……」

「何で泣いてたんだろう、あいつ」

「……」

久留美は再び呆然の海へと蹴り落された。

次いで、始まったのは周囲からの拍手――――喝采だった。

あの――――女を泣かしてなんぼだった玖珂蒼助を泣かした。

過去に前例のない偉業である、と。

その日の放課後。

それは、一人の女子生徒によって学園に新たな伝説が生み出された瞬間として、目撃した２－Ｄ面々の記憶に深く刻まれるのだった。

◆◆◆◆◆◆

一方、なんとも情けない捨て台詞を吐いて走り去った蒼助の逃走先は――――何故か保健室だった。

「ちくしょぉ……千夜の馬鹿ヤロー……」

「はい、ここに来てもう二十回目ー」

手にしたメモ用紙に棒を一つ書き込んで、四つ目の『正』を完成させるのは保険室の主、冬木喜美だ。

当初こそは来客の泣きっ面に対し面白いものが見れたと面白がっていたが、いい加減鬱陶しく思えてきていた。

そして、来客――――蒼助は事務用イスの上で背もたれに向かい合い抱きつくという変則的着座姿勢で負け犬の背中を晒すこと十分経過を迎えようとしている。

「信じられねぇよ……俺がそれしか考えてねぇみてぇな言い方しやがって。……そりゃ、もちろんシたいし、まだ無理なのもわかってるっての……いくら何でも今までそればっかだったからって恋人同士ですることがそれしかないなんて思ってるわけねぇっての……っっ」

「ぶっっ……すっご。これぞ自業自得の画だわ」

「……笑い事じゃねぇよ」

「仕方ないでしょ～。あんたったら、読んで字の如くの有様なんだもの。まぁ、今までの女どもが今のあんた見て事情聞いたら、彼女は嫉妬の対象からココロの英雄に持ち上がるのは確かかね。イイこと

じゃない」
「ちっともヨくねぇっ！」

ギッと振り返って怒鳴り散らす蒼助。
しかし、その目は涙で滲んでいるが故に迫力がないので台無しであった。

恋人となった少女の他意も悪意もない発言は、相当に蒼助を傷つけ、本気でヘコませたようだ。

「ねぇ、泣きが入ってるところ悪いんだけど。
――――傍目から見てると、あんた本気で馬鹿らしいわ」
「うっせえな、こっちはスタートして間もないすれ違いに深刻に悩んでんだぞ！？」
「あのねぇ……それこそ私は昨日あんたの深刻な悩みに立ち会ってるんだけどねぇ」
「……そうだっけ？」
「そうよ、馬鹿。こんな馬鹿なことで惚気紛いな苦悩してんのが、どんだけ幸せで状況が向上したのかをいい加減自覚してちょーだいよ」
「……」

鎮まった。
青い縦線の列の幻覚が見えそうだった背中も、少し伸びた。

「……そう、なのか？」
「わかんないなら、はっきり言ってあげるわよ。
――――そうよ」

喜美の言葉に返事はなかった。

しかし、相変わらず向けられる背中の向こうから不意に言葉が発された。

「……お前が、今朝証言してくれたんだってな」

「は？」

「千夜があいつらに暴行受けた被害者側だって……お前が会議で言ってくれたって、久留美のヤツから聞いた」

「ああ、そのこと。まぁ、この件に関してちょっと知ってることを報告したってだけなんだけど……それで？」

「……」

「……そぉーすけぇ～？」

「チッ……ア、リ、ガ、ト、な！」

舌打ち混じりの礼。

だが、プライドの高い蒼助からは滅多に聞けない言葉だ。

顔が見えないのが残念ね、と喜美はその一点が欠けていることを惜しく思いながら、

「はいはい、どういたしましてー。……で、おまけとかないの？――――例の彼女との決着の経緯とか、ね」

「……やっぱ、そう来るかよ」

「行くわよトーゼン。昨日あれだけ言ってやったのに、何がどーなってそうなるんだか、呑気な悩みに浸ってて幸せそうにしてやがるしー？」

「……わーったよ」

ねぇ、と促す声に、蒼助は喜美が予想していたほど嫌がるような様子は見せなかった。

既に言われるのをわかっていたのか、それとも――――、と喜美の脳内の想定が終わるよりも早く蒼助は口を開いた。

「……まぁ、自分なりの答えが出たんだよ」
「答え？　……ああ、昨日のらしくないあの青臭い質問のね。何だ、自問自答してみたの？」
「……いや、なんつーか……無茶やった結果に乗じた経験からコロリと……」
「はぁー？」
「……いろいろ禁じ手を玉砕覚悟でやったんだよ、昨日。いやホント……どう転ぶかヒヤヒヤしたぜ、マジで」
「ナニしたのよ」
「それは黙秘だけど……泣かせたり、怒らせたり、放心させたり、泣かせたり、告白させたり、泣かせたり、押し倒されたり、押し倒し返したり、泣かせたり……息も付けねぇ勢いと展開を」

はぁー、と喜美は一息吐き

「……とりあえず、泣かせたのね結局。……私の忠告は総無視して」
「まあな。……でも、おかげでわかったんだよ。実感……したんだ」
「実感？」
「……傷つかずに前に進むなんて、そんなもんは甘っちょろくて都合のいい考えだって」

喜美に見えないところで、蒼助は達観した眼差しを何処ともなく向けながら、

「……俺はずっと止まってたからな。だから、楽な方法ばっか考えてたんだ。前に進む痛みっていうもんを忘れて……」
「わかってあんたは……何で”それ”を選んだの？」
「うん、まぁ……あー、笑うなよ？」

「笑わせてくれるようなことなわけ？　……まぁ、いいわ。言ってみなさいよ、このゆとり教育の副産物め」

僅かな沈黙が一息として互いの間に落とされた。
それが消え去ると同時に、蒼助は覚悟を決め、

「……それでもいいって思ったんだ。あいつとぶつかって得る痛みなら、寧ろ喜んで引き受けようと……って、オイ引くな引くなっ」

背中に受ける視線の温度の急激な低下を感じて、蒼助は思わず上半身を捻って振り返り叫んだ。
距離が離れたわけでもないのに、何故か距離感が増した錯覚を覚えた。

「……どうやら、あんたが本命に出会うとマゾに覚醒するって噂は本当のようだったみたいね。残念な事実だわ」
「なんかデジャヴが！　そのガセ情報の源流は昶か、昶の馬鹿野郎だな！？」

ざけんな、俺はドSだ！、とそこで言う必要はなかったと思われるカミングアウトを適当に聞き流しながら喜美は、ようやく己に向き直った蒼助に、

「まぁ、それは置いとくとして……本当にゾッコンなのねぇ」
「ゾッコンって、それ死語……」
「やかましいわよ、青春小僧に成り下がった分際で。……まぁ、こんなところで愚痴りに来るようじゃ、前途はまだまだ明るいばかりじゃないようだけどね」
「ぐぅっ……！」

かなり痛いところを突かれたのか、蒼助は呻きと共に苦い顔になった。

それを見て少し喜美は微笑ましげに笑った――――のように見えたのは、一瞬だった。

椅子から立ち上がり、ふと蒼助を見下ろしたかと思えば、椅子の上に座る蒼助の膝の上に片足を乗り上げ、

「……鬱憤晴らしついでに――――こっちもスッキリさせてあげましょうか？」

自然と背もたれに体重をかけることとなった蒼助は仰ぐように頭上の喜美を見た。

先程まで他人からしてみれば実にくだらない話に耽っていた顔とは、まるで別人ように冷めた表情を貼り付けて。

そして、それは喜美も同様だった。

生徒の愚痴の捌け口となっていた教員とは結びつかない――――『女』の顔となっていた。

「……遠慮しておくって言ったら？」

「本当にヤキが回ったみたいね……今まで誰と寝た云々で責められようがまるでそ知らしぬ顔してたあんたが、彼女に操立てするの？」

「……冗談だったら、笑えるか？」

「本気でもね。別に心配しなくても、あのイカレお嬢様みたいな考えは毛頭ないから。……単に、今の状態において利害の一致が適ってるんじゃないかって思っただけだから」

「利害の一致？」

怪訝な表情と言葉で問う蒼助に喜美は告げる。

「……私、今月一杯でこの学園辞めるのよ。ヨソに転勤とかじゃなくて、辞職でね」
「……そりゃ初耳だ」
「今朝申し出たからね……言っとくけど、別に昨日の件は関係ないから。前々から実家の両親と話し合ってたことで……ようやくケリがついたってだけよ」
「それで……こりゃ、どういう状況だ」

喜美の事情にも初めて聞かされる話にも、蒼助は眉一つ動かない。
それも全て承知の上であったかのように喜美は構わず続けた。

「まぁ、私にしてみればそれなりにあんたは長く続いた相手だし、何も言わずやらずでこのままサヨナラするのもなんかって思ってね……そんであんたはあんたで最近ご無沙汰名様子だから。……ほら、一致した」
「……」
「そんなイヤそうな顔しなくてもいいでしょ。別にあとで彼女に告げ口しようとか考えてないから。そんなつまらない女になり下がる気もない。……どーせ、去る女となら後腐れもなんもないんだから……いいでしょ？　最後に一回だけ」
「……――――なぁ、喜美」

何もする気が無いようにダラリと下がっていた腕が、片方だけ不意に持ち上がる。
その手は喜美の首筋にあてられた。

「やる気になった……って、わけじゃなさそうね」
「……俺の手は、どんな感じだ」
「……？」

曖昧過ぎる問いかけに、喜美は答えかねた。
それをすぐに察したのか、付け足す言葉が続く。
「……触った時の温度って、どんな感じ？」
「ああ、そういう……前から思ってたけど、あんた男のくせに冷え性よね。時々、ひやっと鳥肌立つくらい。首筋とか触られたりすると……」
「手の冷たいのココロが温かいなんて、ありゃ嘘だよなぁ。
――――だって、俺はこの手の温度のまんま人間だし」
遮るように唐突に告げられ、喜美は目を瞬かせる。
それがわかっていてもなお意図の読めない言葉を蒼助は続けた。
「ヤッた女全員に言われりゃ、ほぼ確定だと思うぜ。……俺は、こういう人間だ。俺自身の好き嫌い関係なくな……」
「そうね……私は嫌いじゃないけど。あんたのその容赦なく情を入れ込ませないところ」
「ああ、俺も自分のこういうところは嫌いじゃねぇよ。それを寛容してくれるお前もな」
蒼助は目の前の女に対し、思う。
そういえば、この女は数少ない自分との割り切った関係を受け入れた存在だった、と。
馴れ合いもなく、ただたゆたゆとぬるま湯のような時間を共有してきた共犯者。
嫌いではなかった。
だが、気づいてもいた。
この女も根本的なところでは――――――他の女たちと同じものを抱えていると。

だから、この唐突な行動も蒼助には理解できていた。
大人であるからか、辛辣な経験を重ねた上で得てしまった達観した理性故か、喜美は自分のその根底にあるものを上手く隠してきていた。情事を除けば。
そして、今も。

妙な悪足掻きではないのだろう。
彼女が自身につける彼女なりのケジメ――――だと蒼助は推測した。
きっと、最後だけは曝け出そうしているのだ。
今まで隠してきたものを。

『――――蒼助』

情事の際に垣間見えていたものが、今の喜美の眼の中にも見える。
気づいていた。
だが、無視し続けてきた。
自分たちは気づいてやる義理も何も無い関係で、それで終わらせるような煩わしい真似をする気は毛頭なかったから。

蒼助は喜美の眼を見ながら考えた。
馬鹿げた遊びに付き合わせてきた女に、最初で最後にしてやれることを。
最初で最後の――――――彼女を想って何をするかを。

考えた。
考えて――――決めた選択だった。

「……あいつは俺が触れると熱いって言った」

切り出した瞬間、喜美の眼の奥の熱が凍り付くのを見た。

蒼助は構わず続ける。

それは意図した通りのことに過ぎなかったのだから。

「昨日は、邪魔が入って最後までいけなかったがあいつに触ってる間……イカレそうなくらい頭も身体も熱くなるのが自分でもわかった。あんな風には童貞喪失した時ですらならなかった。あんな感覚、他じゃ味わえねぇ――――絶対な」

音の一つ一つに念を――――拒絶の念を込めながら、紡ぐ。

それは蒼助にとって、初めての己の我を通すためのものではない『拒絶』だった。

おそらく、同時に最後にもなる――――他人の為にと思ってする『拒絶』だ。

「――――あの感覚をお前で味わえるのか？」

「――――」

自分にも良心というものが存在するのだな、と蒼助は再確認していた。

本当に気まぐれに出てくるそれは、これからは唯一人の為に使われ、或いは唯一人の為に押し殺すことになるだろう。

その前に、それ以外の人間に一度だけ使うことにした。

こんな風に思ったのは、千夜の影響なのかもしれない。

目の前の強がる姿に、一瞬だけ恋人の姿が重なって見えてしまったのだ。

もうこれ以上傷つかせはしないと己に思わせた彼女が、また傷つこうとしていているように見えてしまった。

気づいて欲しかった。
こんな男にこれ以上望みの無い想いを抱く必要は無い。
本当に後腐れのない関係とするならば――――彼女はここで抱かれてはダメだ。

「……押しが、足りないわよ。そこははっきり断言しなさい」
「そうか？」
「そうよ。もっと、容赦ない切り捨てぶりで散々恨み買ってきたくせに……」

くすり、と笑う喜美は、蒼助のまわりくどい言葉の意図を全て理解した。
それがキツイ一言で叩ききられるよりも、ずっと胸に来る痛みとして彼女に突き刺さっていた。

「……最後の最後で優しくしないでよ……って言うところなんだろうけど、あんた歪み過ぎ。私が相手じゃなかった散々ヒス起こされて、下手すりゃ殺されるわよ？　本命の彼女さん相手にもそんな感じでいくわけ？」
「お前相手と一緒にすんな。もっとストレートに口説くに決まってるだろ」
「……想像してみたけど、気持ち悪いだけだわ」
「てめぇ……」

睨んでくる蒼助に怯む様子もなくゴメンと苦笑すると、喜美は静かに蒼助の膝の上から退いた。
背を向けて立ち、一息ついて、

「……拒まれて、こんなことというのはおかしいかもしれないけど…

……ありがとう」

まさか礼を言われるとは思わなかった蒼助は、眼を少し見張った。

「自分でもこれ以上馬鹿なことするなって思いはしたんだけど……

…まだまだ、ね。ガキっぽいところが抜けてなかったみたい……

案外被虐癖でもあるかしら」

「……お前は」

何か言いかけて一度止まる蒼助に、喜美は「ん？」と視線でその先を強請る。

それを受けて、気恥ずかしげに蒼助は続きを紡いだ。

「……イイ女なんだから、おとなしくしてりゃこの先もっと優しくしてマトモな男が食いついてくるって。だから……」

「自分を大事にして、自分みたいな酷い男は忘れろ……なんて、王道な台詞まで聞かせてくれるわけ？」

「……先に言っちまったじゃねぇか」

「あんたの口から聞きたくなかったからよ。言ったでしょ、押しが足りないって。……私のためとか……少しでもらしくないこと通すなら、酷い男らしくしなさいよ」

「……」

何も言えなくなった蒼助に、喜美は背中越しに問いを一つ投げる。

「……初めて会った時のこと、まだ覚えてる？」

「お前が前の学校でちょっかい出したけどうっかり本気させちまって、こっちに来てからも散々つきまとわれた挙句邪険に扱ったらキレた男子生徒に襲われてた時のことか？」

「……意外。きちんと憶えてるのね」

「お前、俺よりえげつねぇことやってたからなぁ」
「まーねぇ……あの頃はトラウマ全開入ってて、男子高生憎くさで食っては弄んでたから」

何処か追憶を目の前の光景に透かしてみるような眼差しを、喜美は首を捻って蒼助に移し、一瞥しながら呟く。

「……まさか、その憎い男子高生に助けられるとは思わなかった」
「……」

初めて会った時の喜美は、男に殴られ服を破られボロボロだった。優しくしてやる義理はないがだからといって女を殴る趣味もない蒼助には、己の行為は当然とばかりに好き勝手に喚き散らして暴虐ぶりを振るう男が偶然通りかかり見てしまったとはいえあまりにも見苦しくて、ついボコボコにしてしまったのだ。

「……まぁ、いろいろ勝手が違ったみたいだけど。まさか、ボコボコにするだけして襲われてた私をほったらかしにしてそのまま去っていっちゃうとはねぇ……」
「……若気の至りで、すんませんでした」

二度と会うことはない、と踏んでの行動だったが、まさか数日後にこの学園に保険医として赴任してくるとは、あの時は思ってもみなかった。

「今だから言えることだけど……実のところ、別に怒ってなかったのよね」
「は？　だってお前あの後こっちで再会して散々嫌味とか脅しとか……」
「大人になると、素直になれなくなるのよ。……不器用なやつは

より一層不器用になったりしてね……。あと、手段も選んでられなかった」

「手段って……何の為のだ？」

「……あんたって、そういうところで抜けてるわよね」

さっぱりわからんとばかりの顔をする蒼助に、喜美は溜息をついて呆れ返った。

そして、不意に薄く笑みを浮かべて蒼助を見た。

「……あんたがガキで年下でどれだけ酷い男だってわかってても、私にはあの時から素敵な白馬に乗った王子様だった。……あんまり、自分を嫌ってやるもんじゃないわよ。少なくとも、あの時……私はあんたにいろんな意味で救われてんだから……」

じゃぁね王子様、と再び背中を向けて、喜美は後ろ手を振って保健室を出て行く。

蒼助は引き止めなかった。

背中が声をかけるなと語って見えたから。

ぴしゃり、と静かに閉まるドアの音が――――ひとつの終わりを告げた。

それを聞いて、蒼助はこれで二つのことが確定したのを悟る。

五月まで保健室に立ち入れない。

そして、これでもう二度と彼女に会うことはないだろう、と。

そして二つ目。

この保健室に漂う何処か停滞感のある雰囲気が、実は気に入っていた。

喜美と知り合って以来、落ち着きたいと思うと赴くようになって

いた。
だが、今になって蒼助は気づいた。
この独特の空気は、喜美が醸し出していた彼女の雰囲気そのもの。
きっと自分は彼女に会いに来ていたのだ。
心地よい停滞の時間と空間を生む女に。

結局、自分たちはなんだったのだろう、と蒼助は今更なことを考え耽った。
悪友か。
共犯者か。

考えて、考えて。
そうしてわかるのは、やはり一つの感情の存在が確かにあったことだった。

『嫌いではなかった』

先程の喜美の言葉を脳裏に蘇らせながら、

「……俺もだ」

それが、この冷たい情の欠いた人間をそう評した女に対して抱いた想い。

きっと、それだけのだろう。
たったそれだけのことなのだ。

［壱百六］　と或る挿話　（後書き）

正直、後半大きく陣取る羽目となった保険医さんとの話は入れるかどうか迷いました。
しかし、話の展開でこの一章終わったら保険医という地位は『あの人』と入れ替わるからなぁ、ということで個人的にいつのまにか前任がいなくなってる!?なんて疑問を残してしまうのは忍びないので、結局こんな感じで載せることに。本当はもっと長く深くやりたかったが、そこまでやったらもう別の話っつーか保険医がヒロインになっちゃうから自粛。
名もなき脇キャラがいつの間にか名前まで持っちゃって……。さよなら、保険医。地元帰って、いい男の嫁にもらわれてくれ。

身体の相性と顔でしか女を評価しなかった蒼助にとって、ちょっと違う枠にいたと思う。
全くの感情移入がなかった他よりは想われていたんじゃねぇかなぁ。千夜いなかったら、多分七海か保険医とくっついてたか……といったらそうでもないんだ、実は。
もっともっと前に蒼助は手遅れになってるんです。

話し変わって次回。
蒼助サイドと久留美（千夜）サイドを同時進行でお送りする予定。
事件はリアルタイムで進行している（今更なネタだ

［壱百七］　日常の住処　（前書き）

招かれし其処は、日常の住処
ならば、招かれた己は――――招かれざるモノ

［壱百七］　日常の住処

「ここが私の部屋。さ、どうぞどうぞー入ってー」

階段を上った先、先導していた久留美がドアを開けて手招く。

初めて訪れた『友達の家』を落ち着き無くキョロキョロしていた千夜は引き寄せられるように扉の向こうの空間へ踏み込んだ。

一歩進んだのそこは見たことのない世界。

あまりゴロゴロと目立つようなモノは置いていないが、セッティングなどから感じる柔らかい印象。いわゆる『女の子の部屋』と呼べる背景がそこにあった。

それを築く部品は壁に本が敷き詰められた本棚が二つとその横の窓の前に置かれた机。もう一つの窓際にはベッドが居座っている。

そして、建築の際に作られたであろうクローゼット。

最低限のものしか置かれていないが、やはり千夜の部屋とは何処か違うのは先天的に女である久留美の部屋だからか。あまり過剰な女らしさがないあたりが久留美らしい、と千夜はそうも思えた。

千夜が食い入るように内装を見つめていると、久留美は照れ臭さと気まずさが入り混じった表情で苦く笑う。

「あはは……何も無い部屋だけど、まぁ寛いでてよ。私、飲み物とお菓子持ってくるから」

千夜を部屋に残して閉じるドア。

遠のく足音を聞きながら、千夜は部屋を見回した。

寛げ、と言われたがどうすればいいのだろうと悩む。

物心付いた頃から安らげる場所が限られたせいもあって、他人の

家では落ち着けない。
何か一人であることを忘れられるいい退屈しのぎはないか、と部屋を詮索し始める。

そこで目に付くのはやはりこの空間いその巨体を収めている二つの本棚だった。
両方にぎっしりと隙間無く敷き詰められた本。

種類もジャンルも様々のそれらを目で追っていく。
上段には参考書がずらりと並び、中段からその下にかけては参考書以上の巻数の漫画や小説がこれまたずらりと。
漫画は少年、少女、青年向けの漫画まで様々だった。
小説は、どれも表紙が可愛らしいキャラクターやイラストが描かれた、いわゆるライトノベルだった。

「これは……退屈はしなくて済みそうだな」

しかし現実主義者の割には意外なジャンルだな、と呟きながら気の向くままに目に留まりそうな本を探し始めた。

◆◆◆◆◆◆

ついにやってしまった、と久留美は台所で作業片手間に大きく息を吐いた。
同時にこれ以上に無い達成感に悦していた。

何に、と問われれば当然、

「初めて友達を家に呼んじゃった……」

それがどうした、とこの場に第三者がいればなんてことないと呆れただろうが、久留美にとってそんな安易で軽いことではないのだ。

『秘密殺し（プライベキラー）』とのあだ名を持つ久留美に当然、仲の良い友達などいなかった。

いたかもしれないが、それも二三歩退いた距離を保つ程度の存在だ。

家に呼びたいと考えたことなどなかった。

しかし彼女の中だけでの話、そーゆーことに憧れていなかったわけでもなかったりする。

クラスの女子の会話や漫画の中でしか見聞きしたことのない『お泊り』。

一緒の御飯食べて、寝る前のトーク、一緒の朝を迎えて。

一度はしてみたいと思っていた。

蒼助あたりの久留美を知る人間が聞いたらあまりの意外さに化物を見て慄くような反応を返すだろうが。

「ど、どうしよう……めちゃくちゃ緊張してきた」

あの場での訳のわからない衝動的な行動で、まさかの夢が実現がした。

念願の望みが叶ったはいいが、問題はこれから先に山ほど待ち受けている。

「お母さん今日のおかずどうするつもりなのかな……今日に限っては昨日の残り物出すのは止めてよね。あと手抜きも」

頼むからそれだけは、とおそらく買い物に行っているであろうこの場にいない母に切に願う。

我が家の中身が他人に知られるのだから、と。

「あと、風呂も念入りに洗わなきゃ……それと客用の敷布団ってどこにしまってあるんだっけ……」

実際やるとなると、しなければならないことはたくさんある。

皆、面倒な手間をかけているようだ。

その手間を惜しまない価値がこの『お泊り』にあるのだから仕方が無いが。

用意と下準備を一つ一つ思い返していると、

「あら、おかえり。ねぇ、玄関に知らない靴があったけど誰か……って、ちょっと久留美なにしてんのっ」

「え？　……ぁあっ！」

頃合いよく帰宅した母親の最後尾の言葉が咎めるようだったのを怪訝に思い手元を見たら、傾け続けていたせいで紙パックの中身であるオレンジジュースが絶え間なく注がれ続けていた。

その落下先のコップから溢れかえって周辺のテーブル一部とその下の床をオレンジ色に濡らしてしまっている。

「わ、わ、布巾布巾っ」

「全く何やってるのこのコったら……しっかり拭いときなさいよ？」

「はーい……」

中身が吐き出されてすっかり軽くなった紙パックを置いて、己に不覚を覚えつつ布巾でまずテーブルを拭う。

母親はそのままスルーの姿勢である。

己の不始末は己で片付ける。新條家の家訓だ。

「あ、そーだお母さん。今日の晩御飯はなに？」

「んー？　今日は鶏肉が安かったから油淋鶏（ユーリンチー）にしようかなって」

「……おかずとしてはまずまずね」

油淋鶏。日本語に直すと鶏の唐揚げのネギダレがけ。

我が家のおかずの中でも人気の一品であり、客に出しても恥ずかしくないものだとは、思う。

「あとは、昨日の煮物いっぱい残ってるから」

「だ、ダメっ！　残り物だけは絶対止めてっ！！」

恐れていた事態を招こうとする母を久留美はやや裏返った必死の声で制止をかける。

「あら何で？　アンタ煮物は一晩置いた方がオイシイって言っていつも食べてるじゃない」

「今日は別！！　今晩のオカズはウチの名誉がかかってるんだから、ダメ！」

「名誉って……アンタ、誰か呼んだの？」

「……友達が今日ウチに泊まるの。明日、ウチの学校は創立記念日で休みだからいいでしょ？」

「さっきの靴は……そういうことだったの。てゆーか、アンタ友達いたの？」

「真顔でそーゆー痛いトコ聞くなー！」

こーゆー無遠慮なところが自分に遺伝したから友達が出来ないのではないだろうか違うのだろうか、とやや責任転嫁であったり無かったりな事を考えつつそれを振り払い、

「とにかく残り物はダメだからね！　ちゃんと別のオカズ作ってよ！」

念を押すだけ押して久留美は盆に乗せたジュースとポテトチップスを手にして台所を飛び出した。

階段を慌しく上っていく娘の後ろ姿を見送りながら母親は、

「あのコのあんなにはしゃいでる姿を見るなんて……何年ぶりかしら」

少し驚いた顔をして、口元に母親の笑みを乗せた。

◆◆◆◆◆◆

「お待たせー……っておぎゃーっ！！」

意気揚々と部屋に戻った瞬間、女子高生らしからぬ悲鳴が久留美の口から勢い良く飛び出た。

リアクションの際に危うく手元のお盆をひっくり返し、オレンジ色の惨劇を再来させるところだった。

「ん、おかえり」

劈くような久留美の叫びも然程耳に入っていなかったのか、顔と目線は手に持っている『モノ』に向けたまま適当な返事を返す千夜。プルプルと震えながら久留美はその手にしているモノを指差した。

「な……に、読んでんの？」

「暇だったから本棚漁らせてもらった。五冊目だ」

と、平然とのたまう千夜の手から久留美は慌てて漫画をひったくる。

「っななななな、何してんのよ馬鹿ッ」

「は？」

「人んちで部屋漁るなんて……」

「他人のプライバシー漁ってるお前にだけは文句言われたくないぞ」

う、と痛いところを突かれ一瞬怯んだ隙に千夜は本棚から新たに一冊抜き取る。

「それにしても意外だな。ジャーナリスト志望と言うからには記事の切り抜きとか学園内で握った各人間の弱みなどをプロファイリングしているかと思ったんだが……資料よりも漫画と小説の方が多いとはどういうことだ？」

ニヤニヤと底意地の悪い笑みを浮かべている千夜から再びひったくる。

「うっさいわね！　いーじゃない、高校生なんだから趣味優先した

って！！」
「それでこの数か。さすが文系。読書が趣味とは期待を外さない」
と言ってまた新たに出す。
きりがない。久留美はもうどうでもよくなり隣に座り込む。
「何よ、そんなに珍しいもんじゃないでしょ」
「漫画とかあまり買う方じゃないんだ。たまに妹に強請られて買ってやるくらいしか家にはないんだ」
「ふーん……なんか自分で読まないの？」
「最近の漫画はあまり好きじゃないんだ。絵は上手いが、話に味がない」
「味がないなんてまた通な言い方ね……じゃぁ、昔のは好きなわけ？」
「ああ」
たとえば？と問いかけると千夜が返した言葉は、
「北〇の拳」
また極端なジャンルで来たな、と思いつつも何故か妙に千夜にマッチしていると久留美は感じた。
「知らないか？　胸に北斗七星の並びの七つの傷を持つ男の……」
「知ってるわよ！　誰もが知る名作なんだから！　決め台詞は“お前はもう死んでいる……”でしょ！？」
「おお、モノマネ上手いな。格好いいよなぁ、その台詞。一度言ってみたいんだが、俺がやると言う前にバラバラだからなぁ……」

何が、とは聞かない久留美。
ほのぼの（しているかどうかは置いておき）フレンドトークが血生臭くなってしまうのは御免だ。

「あ、これは何だ？　……表紙が普通に現代風で、恋愛もの……にしては、女の方の服が妙にボーイッシュで……髪も短いし胸が平たすぎるような」
「ダメ」
抜き出しかけたそれを己の手で押さえつけながら久留美は制止した。
しかも、物凄い力で。

「それだけはダメ。アンタ人生踏み外すわよ、それでもいいの？」

真顔で妙なことを問い詰められ、その迫力に思わず千夜は怯んだ。
よほど見られたくないものなのか、と何となく察してこれからのことを考えあまり無理強いして機嫌を損ねるのもまずいだろうと思い手を引いた。

久留美は内心ホッと一息だった。
読まれるわけにはいかない。

目覚めてしまうかもしれないから。

その問題の本を奥へ奥へ押し込みながら、近々処分しようと一つの決意を固めていた。

◆◆◆◆◆◆

「――――つーわけで、明日の暮れまでお世話になります」
「なっっ」

下校の帰路をそのまま喫茶店『W・G』に直結させ、入店早々に事情を打ち明けて要求を口した蒼助に異議を唱えたのは、会話の対象である店の主ではなかった。

「馬鹿っ！　何でそんな横暴指くわえて野放しにしちゃったのよぉー！」
「してねぇぇっ！　決定的に悪いのは、お前の姉貴じゃー！　つか、お前なんでこんなとこにいるんだよ」
「そんなことどーだっていいでしょ、ってゆーかこれこそあんたのせいだぁぁー！」

朱里と蒼助によって話が混雑に方向で弾んでいく。
これはいかん、と間に入ったのはいつの間にか会話から弾かれていた三途だ。

「落ち着きなよ、二人とも。……えっと、蒼助くん。千夜は友達の家に泊まりにいったんだっけ？」
「……ひっじょうに不本意だけどな」
「それは君のでしょ。……そういうことなら、私は構わないよ。朱里ちゃん、今日は私がご飯つくってあげるから」

三途は釈然としない様子のもう一人の人物に夕食を天秤にかけて交渉を持ちかける。
コンビニ弁当生活に対する不満は、朝から続く愚痴の中で既に聞いていた。

「むぅ……ビーフストロガノフで手を打ったげる」
「はいはい。手間のかかった料理が好きだよねぇサラダは何がいいかなぁ～」
「エビマヨサラダがいいっ！　エビとマヨたっぷりねっ」
「君そんなに細いのにどーして野菜嫌いでたんぱく質と高カロリーなもの好きなのかな……。それじゃぁ、買い物行く前にちょっと冷蔵庫の中身を見てきてくれる？　タマネギと赤ピーマン残ってるかどうか」

ラジャー！とそんなにコンビニ弁当が嫌だったのか、現金なまでに機嫌数値を上昇させた朱里は素直に三途の言葉に従った。
奥の扉の向こうに消えた朱里を見送ると、今度は蒼助が相手だった。

「……嬉しそうだな」
「え、顔に出てる？」

思ったこと口にした蒼助に振り返った三途は、確かに笑っていた。
常時として微笑を貼り付けているが、今浮かべている笑みは一層濃度が高いように蒼助には見えたのだ。

「嬉しい、か。……うん、嬉しいなぁ」
「うわ、デレデレだぞあんた」
「えー、だってぇ……」

眉が困ったようにハの字に歪むが、やはりどうしようにも笑みは止められないらしい。
蒼助は何がそんなに嬉しいのかと訝しみ、
「……なんで、そんなに嬉しいんだよ」
「いや、なんてゆーか……在りし日を知っている者の身としては、千夜が友達ちゃんと作ってしかもお泊りできるほどの仲を築けるようになるなんて……あ、ヤバっ泣けてきた」
「あんたの中でどれだけさびしんぼなんすか、あいつは」
蒼助の冷ややかな言葉にもめげず、三途は本気で滲ませた涙を袖で拭いながら、
「あのコは何でか周囲から一定の距離を置いて孤立したがるからなぁ……これをきっかけに学校にどんどん馴染んでくれれば……って、アレ」
ほややんと子供の将来を案じる母親のような心境で、明るい未来予想図を脳裏に描いていた三途はその思考作業を中断して、目の前の青年の様子が店に入ってきてから何かおかしいことに気づく。
先程の朱里との口喧嘩で渦巻かせた不機嫌を装う何処かで、覇気がイマイチ感じられない。
「何か……あったの？」
下手に刺激をしないように心がけて慎重にかけた言葉に、蒼助は何故か俯いた。
そして、頭をそのままに三途の両肩をがしぃっと掴む。

「うえっ？」

「……――――――聞いてくれるかっっ！？」

バッと勢いよく顔を上げた悔しさ満面でマジ泣きをする蒼助の凄まじい迫力に、成す術なく圧された三途はしきりにコクコクと頷くしかなかった。

三分後、戻ってきた朱里が見たのは、ドロドロとした空気を身体から分泌しながら、カウンターに座って三途に延々と愚痴る蒼助の姿だった。

［壱百七］　日常の住処　（後書き）

まさかの連日更新。
しかも明日も出来そう。
この調子で何処まで加速できるかが問題だ。

久留美のプロファイリング資料は、実は表紙カバーで偽装して漫画の中に紛れ込ませているという裏設定です。

【壱百八】　新條家の食卓

「ぅお～くぁ～さぁ～ん～っっ！！」

腹の底から響く恨みがましげな怨嗟の声が食卓の時間に響いた。

席に座る千夜の隣で久留美が椅子を引っくり返して立ち上がり、肩をいからせて目の前の母親をレンズ越しに睨みつけている。

恐ろしく低く押し潰された声が久留美の口から吐いて出される。

「あれほど言ったのに……」

「まったくこのコは……親の仇見るみたいな目で親を睨みつけるんじゃないの」

「うっさい。アンタなんか親じゃないこの嘘つき」

「いーじゃない。煮物はその家の味の顔なのよ？」

「だったら、今日は今日でつくればよかったじゃない！」

「やーよめんどくさい。誰がつくると思ってるのアンタ」

あーいえばこーいう。この巧みな会話術は間違いなく自分の親だと歯軋りしながら久留美は実感した。

反論を口の中で舌巻かせている娘を放って、母はその友人にして我が家の客人に完全に注意を移した。

「ゴメンなさいねぇ。こんな娘で……いつも迷惑かけてるでしょうに」

「いえ、いつもお世話になっています」
「そんな馬鹿な……って久留美、目で殺すを体現するような睨みで殺気立つのは止めなさい。生物学上では女の子でしょ、一応」
一応って何よ!?と喚く娘を無視して、
「無駄に見栄っ張りなウチの馬鹿娘はほっといて。さぁ、遠慮せず食べて食べて」
「はい、ご好意に甘えて――――いただきます」
と、まず千夜が伸ばした箸が取ったのは先程から久留美の怒りの素となっている問題の残り物。
味がしみていることを証明するかのように茶色くなった大根を一口サイズに切り、躊躇なく口に運ぶ。
数回の租借。飲み込んだ後に出た感想は、
「……あ、うまい」
感慨深く紡ぎ出された賛辞に母は喜びを表情一杯に露にした。
「あら、本当？　嬉しいわぁ、お世辞でもヨソの人様に誉めてもらうのって」
「お世辞じゃありませんよ。本当に、おいしいです。凄いですね、こんなによく味がしみているのに、煮崩れしていない。……ん、タコも柔らかいですし」
「コツがあるのよ。それにタコを柔らかく煮るには大根と一緒が良いのよ」
「へーそうなんですか。勉強になります」
「終夜さんは家で料理つくるの？」
「はい。うちは両親がいないので」

さらり、と告げられた新事実に母子揃って固まる。
食卓に衝撃を与えた張本人はなに食わぬ顔で気に入った煮物を口に放り込んでいる。
母は少し後ずさって久留美に耳打ちした。
「このコざっくりしてるわね。地雷踏んどいてなんだけど」
「まぁ……こーゆーそんじょそこらの女とはワケが違うコだから……あんま気ぃ使う必要ないって事でヨロシク」
やや投げやりに言って久留美は倒れた椅子を起こしてテーブルに着いた。
「お、この唐揚げも美味いな久留美。皮はパリパリで肉は柔らかくて……このタレもよく合うな」
「そ、そう？」
我が家の夕食に舌鼓を打ってご機嫌の千夜は見ていて悪い気はしなかった。
待ち望んだほんわりムードだったが、
「それにしても綺麗ねぇ終夜さんは。見てると隣のウチの娘が同じ生き物なのか疑っちゃうわ」
「悪かったわね……そう思うんならもう少し気合入れて産んでくれればよかったのに」
「入れたわよぉ？　まぁ、アンタも終夜さんに及ばずながら上々な出来具合になったわよ。後は、もう少しおしゃれしてくれればねぇ……知ってる？　このコ、眼鏡かけてるけど本当は裸眼でも全然イケるのよ。ちなみにかけてるソレ、伊達よ」
「え、そうなのか？」

少し驚いたように目を見開いて顔を千夜に向けられ、うっと怯む。
余計なことを、と母を睨んだが母は何処吹く風を装う有様。

彼女の言うとおり、実際久留美の視力は眼鏡をかけなければならないほど悪くない。
寧ろ、必要などない。本ばかり読んでいてよく落ちなかったものだと自分でも思う。

「何で眼鏡かけてるんだ？　邪魔じゃないのか？」

興味津々で尋ねてくる千夜の言葉が耳に痛い。
ちろりと視線をやった先では母が前の席でテーブルに肘を突いて実に楽しげにニヤニヤ笑っている。

実の母親に人生何度目かの殺意を抱いた瞬間だった。

「……あー、んと……聴きたい？」
「是非とも」

今のが何の為のタメだったのか察しろよ、と悪態をつきつつも、もうどうにも出来ないのは空気で理解していて、

「……眼鏡、かけてるやつって……頭良さそうじゃん」
「ああ、見た目はな」
「……私の理想の女性像って理知的な出来る系、なのよ……」
「……つまり、だから……ね……」

終わればこの羞恥心からも開放されるだろうか、と希望を僅かに抱き、そして、

「……まずは形から入ろうと思ったわけです、はい」

か細い声で言い切り、かの人の反応を待つ。

それは大した間もなく返ってきたが、

「――――――アホか」

「あはは、そーよねーっ」

半目で呆れ顔の千夜とケラケラ笑う母親。

もういいんですけどね……、と血の涙が流せそうだと頬が引き攣った半笑いしながら、拳を痛いくらい握り締めて耐えた。

そこへ、

「――――――たぁだいまぁー、久美子ー今日の夕飯なんだ、ゆーはーん」

玄関から聞こえてきたのは母・久美子の名前を呼ぶ能天気な男の声。

近づいてくる足音が止まったときに現れたのは顎にだらしなく無精ひげを生やした男――――――久留美の父だった。

記者である父が帰って来るのは大抵夜遅い。

仕事の進展が影響して朝帰りというのもある。

故に夕飯の時間に帰って来るなんていうのは非常に珍しいことだった。

「あら、貴方今日は早いのね」

「いやー、狙ってたネタがガセだってわかって速攻で撤退してきたんだ……ん？　そこの美人は誰だ？」

「久留美のお友達、だそうよ」

ぱちくり。
久美子の言葉を聞いた父の目はまさにそんな動きをした。
「久留美の？　母さん、この期に及んでそんなガセネタは勘弁し」
「――――――死ねぇぇぇっっ！！」
振り切った怒りのリミッターゲージに従って、久留美は迷いのないストレートを父に向けて放った。

◆◆◆◆◆◆

夕食を終えると、時間の経過は早いもので既に八時を過ぎていた。
「はー……極楽」
なんて爺臭いこと呟きながら湯船に浸かるのは久留美。
『風呂は心を洗う』と誰かが言っていたなぁなどと思いながら、ほっこりと緩んだ顔で安らぎに浸っていた。
溜まった疲れを湯の中に溶かしながら、疲れの原因となった数分前のことを振り返る。
「ったく、あの馬鹿親父……」
珍しく早く帰宅した父は美人の千夜を前にしてすっかり調子に乗っていつになくハイテンションだった挙句の果て、酒に入り始めたのだ。
それはもう酒癖の悪さに便乗したあられもない痴態醜態を散々振

りまいて、服まで脱ぎ出したほどに。
さすがに見かねた母がビール瓶で殴って強制終了させて先程ようやく静かになったところだ。

予定外のイレギュラーのおかげで我が家の覆い隠したい部分はすっかり千夜の前に明るみになってしまった。
そのせいで来た気疲れに押されて久留美はこうして風呂の中で気力の回復を養っている。

「い〜い湯だぁなぁ〜、バババン……い〜い湯ぅだなぁっと」

疲れを忘れたかのように思考回路も湯煎で溶かされたトロトロのチョコ状態になっていた。
その矢先――――

「――――久留美」
「っひゃ……うごぅっ！」

突然かけられた声に驚いた拍子に手摺に頭をぶつけ悶絶する久留美の呻き声に千夜の声が一瞬気遣うものへ変化する。

「おい、大丈夫か？」
「あー……つっ……だいじょーぶ……それより、どうしたの？」
「あ、いや……おばさんがパジャマを持っていってやれと」

あんの母は……、と客人に雑用を任せた己の母親を恨めしげに口の中で罵る。

「あ、ごめんねぇ。そこに置いといて」

「ああ」
「……あ、ちょっと。まだ行かないで」
半透けのガラスドア越しに見える人影が動きを止める。
久留美は一瞬の躊躇を振り切って、思い切った。
「あ、あのさっ……――――いっしょに、入らない？」
「え〝」
返って来た声はお世辞にも歓迎的ではなかった。
……え、てなんだよ、え、て。
反応に若干傷つきつつ、久留美はめげない。
「いいじゃない。女同士、裸の付き合いってやつよ」
「あ、いや……でも」
「うちの規則よ。郷に入ったら郷に従いなさいよ」
「……お前、友達連れてくるの初めてだって言ってなかったか？」
「うっ……いいから、聞きなさいよ！」
沈黙がドア一枚越しに伝わってくる。
間もなくして、何処か諦め入った返事が返ってきた。
「……わかったよ」
それからして、勝利に満悦する久留美の耳に布の擦れる音が届く。
音が止むと同時に、ドアが開いた。
入ってきた千夜の姿に思わず、久留美は思考の一切を急停止させた。

……な、ないすばでぃー。

衣服全てを脱いで曝け出された千夜の裸体は、久留美を絶句させるには充分な芸術品だった。

全体的にスラッとスリムだというのに、見事な腰から尻にかけての凹ライン。

太股のちょうどいい太さ。

そして何よりの目玉は。

……でかい。

胸部に実る形いい二つの果実。

女がこれを見て思うことといったら一つしかない。

……おいしそ……じゃなくて！

頭を振ってトチ狂った考えを振り払い、もう一度直視。

ああ、なんということだ。

「……贔屓よね、絶対」

「何がだ」

「……何でもない」

シャワーが流れる。

大量の雫が千夜の上に降り注ぐ。

その姿はなんとも扇情的で、見る者に背徳感を抱かせる。

……うわ、絵になるなぁ……。

気まずさに耐え切れず、久留美は目を逸らした。
「久留美、シャンプーってどれだ」
「……左から二番目。トリートメントならその左隣」
「ん、そうか」
ちらり、と視線をやる。
その先にはすっとゆがみのない一本線が通っているかのようなしなやかな背中。
日に焼けていない白い肌の上を水の珠がつるりと流れていく。
……綺麗だなぁ……それに比べて。
自分と見比べ、自虐的な気分にどっぷり浸る。
胸はそれなりにあると思うが、女らしさとして自分はどうなのだろう。
思えば、このがさつな性格と今までの行いのおかげで女扱いされた記憶が乏しい。
男から見ればこんな自分は「可愛く無い女」と分別されて当然の存在なのだろう。
……そりゃ、女のくせにとか女なんだからとか言われるのは腹立つけど……でも、ねぇ。
我ながらオトメな考えだとは思うが、せめてこの年頃一度くらいは青春じみた体験はしてみたいと夢は見ている。
せめてその欠片だけでも。
「私って女としてどうなんだろう……」
「何だ突然……」

「あんた見てて自信失くしたのよ！」

全く理解していない千夜を恨めしげに睨む。その際に再びその姿を直視してしまい、

……くぅっ、神様贔屓し過ぎじゃないのっ！？

白い肌。
艶やかな大和撫子的な長い黒髪。
色気。
どれも久留美にはないものばかりだ。
特に胸が。

「何をたわけたことを……」
「たわけたことぉですってぇ！？」

頭を洗い流しながら呆れ混じりで呟かれた言葉に、久留美は堪忍袋の緒をど真ん中でぶった切った。
理性を失い獣と化した久留美は、湯船から湯を引き摺って勢い良く立ち上がり、飛びかかった。
完全な不意打ちに千夜は為す術なくタイルの床に背中から倒れ込んだ。
頭を打ち付けなかったのがせめての幸いか。
否。今から起こる事を考えれば、そんなもの幸いにも成り得ないだろう。

「っ……こら、危ないだろ……げっ」

抗議を言いかけ、見上げた久留美を顔を見て千夜は言葉を失った。
ふーふー、と荒い息を吐くその目には理性を感じられない。

そこには久留美の姿をした一匹の獰猛な獣だった。
ちょっとでも身動きすれば噛みついて来そうな勢いの久留美の様子に、千夜は恐怖に身を固まらせた。

「そんなことを言うのは……」

久留美はぼそりと漏らし、

「このチチかぁぁぁぁぁぁぁぁ――――っっ！！」

もにゅり。

一度諸手を挙げるかのように上に掲げられた両手は、獣の顎が食いつくようにたわわに実る二つの果実をもぎ取らんばかりに掴んだ。

「……」
「……」

一瞬の静寂。
そして――――

「――――×○□△○×□っっ！！！？？」

千夜は声無き悲鳴をあげたが、久留美はそれには構わず更に手を動かす。

むにゅむにゅむにょにょにょ

「はぅっ！　あぁぁぁっ！？」

「……」

脳の神経を突き抜ける強烈な感覚に、千夜は身を捩らせるが、久留美は無言で手を動かし続ける。

まるでそれだけ別の生き物であるかのように錯覚してしまうほど、十本の指はピアニスト顔負けの指使いで柔肉に食い込む。

その度に、嬌声のような叫びがあがる。

……くぁー、なんなのこの柔らかさはっ！　つきたての餅か、このっ。

もにゅもにゅもにゅっ、ぐにゅにゅにゅぐにょ

「はぁんっ！　んぁぁっ……ひ、ぅ……く、る……やめ……」

やがて千夜の抵抗が弱まり、反面声に艶が出て来た。

しかし、久留美は手を止めない。

千夜の声を完全にシカトしている久留美は怒りは既に冷めていたが別のものへと移り変わっていた。

……あ、なんか楽しくなって来た。

このまま行ったらどうなるのかなぁ、と好奇心にノって加速する。

もみゅみゅみゅみゅみみみみみ

「ああっあ――――――っ!?　あ、ああ……はぅ」

かくして、もはや当初の目的は完全に忘れた久留美はそのまま突っ走った。

◆◆◆◆◆◆

ガタン、と音を立ててドアが横滑りに開いた。

三つ編みを解いて濡れた髪を肩にかけたタオルに垂らした久留美が立っていた。

その表情は何かを成し遂げた人間の顔だった。

迎えた母・久美子は何も言わずに冷えた牛乳の入ったビンを渡す。

「お疲れ」

「ん。……お父さんは？」

「あんたが出て来るちょっと前にトイレに駆け込んで行ったわ。股間押さえて」

はふぅ、と久美子は溜息をついた。

「あの人もまだ声だけで元気になれるのね。……ね、下に一人くらいなら今からでも間に合うかもしれないけど、どう？」

「……遠慮しとく」

何もかも解った上で的外れな発言をしているのだと思うと、酷く疲れてくる。

受け取ってしまっておいてなんだが、この牛乳も飲む気が進まない。

「終夜さんは？」

「あー、まだちょっと……出て来ないかも」

「あらあら。じゃあ、この牛乳はあっちにあげましょ」

ひょい、と久留美の手から牛乳瓶を取り上げてしまう。

冷蔵庫に戻そうと向かう母はそのまま、

「その技巧（テク）は父さん譲りねぇ～。母さんも昔はあんたつくる為に散々お父さんに……」

「聞きたく無いわよ、そんな誕生秘話！　ってゆーか、テクとか言うな！！」

こうして夜は深まっていった。

【壱百八】　新條家の食卓　（後書き）

ゴールドフィンガー久留美。そして、また異名が一つ。
風呂場のあれは……や、なんかもう本当スミマセン。

［壱百九］　欠陥の内包

深夜二時。
それは終夜千夜が己の体質を思い出して四時間が経過してのことだった。

「……失敗したな」

そうして一人心地で静かに呟いたのは、引っ張り出してもらった客用の布団一式を久留美の部屋に敷いて、共に就寝についたのは約四時間ほど前の十時頃のことだ。
布団に入って最初は、普段とは少し違うシチュエーションにおいての就寝状態に落ち着かないのか、久留美からの持ちかけで他愛ない談話に耽った。
何人かのクラスメイトや教員の秘密、一年の頃に２－Ｄで起こした騒動や、催しでの活躍などの千夜自身が知らないことを久留美は話してくれた。
それも続いたのは最初の三十分くらいで、眠気が訪れたのか久留美の口調に気だるさが混じり始めたところで話を打ち切り、互いに本格的に寝付こうとした。
しかしその一時間後、千夜は一人だけ目を覚ました。
そして、そこで今更ながら思い出したのだ。

ヨソでは眠れない、己の厄介な体質に。

「……ダメだ」

途切れ途切れのごく浅い睡眠を繰り返すこともう何度目にかになるが、身体はそれなりに疲れているにも関わらず、一向に眠りに落

ち着いてくれない。
このままではホテルで繰り返したあの不眠の再来だ。

「……仕方ない」

もはや落ち着かない体勢となった就寝体勢を一度解き、千夜は久留美を起こさないように物音を潜めることに心がけながら、部屋を出た。

廊下は室内と同じく動きを不自由とさせる暗さだったが、寧ろその方が元来”慣れている”ので足を取られるような不安や杞憂は千夜にはない。

向かう先は一階のキッチンだった。

水でも飲んで乾いた喉を潤せば、少しは気が休まるだろうという考えでの行動だ。

あまり音を立てないようにと、階段の軋みを最低限に抑える動きに徹しながら降りる。

しかし降り終わったと同時に、その配慮を無碍にするかのように勢いよく流れる水音が響いた。

「……あら、終夜さん」

音の発生源は、明かりがついて使用されていると思しきトイレ。

流れる音に次いで開くドアの軋みが鳴る。

開いたドアの向こうから現れたのは、寝衣姿（パジャマ）の久留美の母――――久美子だった。

夜中に出歩く千夜を不審がる様子もなく、ごく自然に声を掛けてくる。

「どうしたの。あなたもトイレ？」
「いえ……あの、喉が渇いたので水をもらおうと思って……」
「……寝付けなかった？」

言うまでも無く千夜の心中を見抜いた久美子は、ただ確かめるように聞いてくる、
千夜は懐に入り込まれるような感覚に少しうろたえながらも、

「……え、あ……はい。他人の家で寝るのは……あまり経験なくて……」
「いいのよ、そんな申し訳なさそうな顔しなくても。誰だって、ヨソで自分の家で寝るようにはいかないわよ。……そうだ」

ふと何かを思いついたように久美子は、両手を軽く叩くように胸の前で合わせる動作をした。
そして、

「ねぇ、終夜さん。どーせなら、水よりもずっといいもの飲ませてあげる。それで、眠れないのなら――――――」

――――おばさんとちょっとお話しましょうよ。

◆◆◆◆◆◆

一度は消灯されながらも、一時的に電気のついた居間。
そこでゆらりと漂うのは香り立ち昇るうっすらとした湯気。
それは二つのティーカップから立ちあがっていた。
一つは千夜の手に。もう一つは久美子の両手にある。

「んー、おいし。どう？　私が贔屓にしているブランドのなんだけど、なかなかでしょ？」

と、先程トイレにいったにもかかわらずグビグビと紅茶を麦茶のように飲み干し、もう一杯と次を自分のカップに注いでいく。
二十分もすればまたトイレに行くのだろうな、となんとなく予想し、自身も熱めのその液体を口に含み、喉に下す。

「はい。おいしいですね……好きですよ、この味」
「よかった。おかわりしたかったら言ってね。……あ、ミルク大丈夫？　ミルク大目のミルクティーにすると、おなかも膨れてぐっすり眠れるのよ……どう？」
「そうですか……じゃぁ、いただきます」

薦められた言葉に従い、テーブルの上に置かれていた牛乳パックを手にとり、透き通った赤みがかるブラウンに白いミルクと投入する。
引き換えに温度が低くなったが、それを想定して熱めにしてあったのか口に含むのに丁度よくなった。

腹の辺りが紅茶でほんのりと温かみを持った頃、久美子が不意に口を開いた。

「夕飯の時はごめんなさいねぇ。食卓の場にそぐわないものを危うくうちの人がお披露目しちゃうところだったわ。あの人もちょっと

興奮しちゃったのよ、なにしろ久留美がこんな美人を友達だなんて言って連れて来ちゃうもんだから。今日はああだったけど普段はもっと……とにかくごめんなさいねぇ」

夫に対するフォローが中断されたが、深く入らず流すことにした。

「こちらこそ……今日は急にお邪魔してしまって」

「いいのよぉ、むしろ大歓迎だったんだから。感動したわよ、あの子にもようやく友達が出来たかって。ほら、話に聞くとあの馬鹿娘ったら学校でやんちゃしてるらしいじゃない。もーそんなとこばっか父親に似ちゃって、こんな子誰がもらってくれるのかとか、将来は孤独死なんじゃないかとか親に気苦労ばっかさせて……おまけに誰に似たのか意地っ張りで素直じゃなくて天邪鬼だから人付き合いも下手だしね。それがとうとうやったか、て」

つらつらと娘の欠点をあげてはいるが、嬉しそうに笑う久美子に千夜は苦笑で返す。

「初めての友達があなたみたいな良い子でよかったわ。あんなので申し訳ないけど、これからもよろしくしてあげてね」

「……あの」

「んー？」

一拍の間を置いて、

「……せっかくのお言葉は光栄なんですが、私は最近転校してきて彼女との親交もまだ始めて間もないです。おばさんは、そんな人間に気に許しすぎて……」

「こーら」

言葉を遮ったのは、一つの動作だった。
久美子の人差し指が、嗜めるように千夜の額を軽く突く。
目を瞬かせる千夜に、
「おばさんは、これでも狙ったネタは逃さない凄腕記者の妻で、陰謀渦巻く組織内で真っ直ぐに自分を貫く刑事の姉なのよ。人を見る目も洞察力も平民のそれより洗練されるわよー。あ、一応、これ自慢ね」
ニコニコと愛想のいい笑みを浮かべているが、目は真っ直ぐに千夜を見つめていた。
「うちの娘も、そう。まだまだ未熟者だけど……こうして親の前に連れてきたってことはそういうことだと思うの。ちゃんと見て、ちゃんと判断して、あなただったのよ」
だから自信持って、とポンポンと前髪あたりを撫でるように叩かれる。
母親が子供にする優しい手付きは、千夜にふと懐かしい誰かの手を思い起こさせた。
「親がこんなことを言うのもなんだけど……久留美は結構アレで聡い子なのよ。人間の悪くて汚い部分に対しては特にね……だから、他人を見限ってるというか、興味が持てないというか」
「そんなことは……」
「そう思う？　あのコ、今まで一度もウチに友達とか言って誰かを連れてきたことないのに？」
聞かされて詰まる千夜に、久美子はテーブルの上に一度置いた紅茶を再度手にし、

「……昔は、普通の子供だったのよ。……友達は相変わらずいなかったけどね。親がこんなんでいいのかって育て方に迷いを抱くくらいそこらの子供と大差さない普通ぶりを発揮してたわ。親って贅沢なのね。何も特出したところなくても、すくすく元気に育ってくれればそれだけで産んだ甲斐があるってものなのに。……付け加えて、いざ突然何かに興味を示すと不安になるの」

言葉は一度そこで句点を打たれて、止まる。

呼吸を整えるように久美子は紅茶を含んで口内を潤した。

こくり、と喉が下す動きをすると、

「小学校の時……短い間だったけど、ちょっとおかしな時期があったのよあのコ」

「おかしな時期、ですか？」

「微妙な言い方だけど……それまでと打って変わる転機といったら、あの頃なのよね」

聞いてくれる？と一度確認するように視線を向けられる。

千夜は何も言わずに返事に代わりにその視線と向き合った。

それを了承と受け取った久美子は話を再開させる。

「……クリスマスが近かったから十二月だったかしらねぇ。今まで言いつけも守って、学校の帰りも寄り道しないでまっすぐに帰ってきてたのに、突然人が変わったみたいになったの」

「……言いつけも守らなくなって、帰りも遅くなったんですか？」

「そう。それも段々エスカレートするようになって……。夜中私たちが寝静まった頃に抜け出したりまでしてたみたいなのねぇ。その一時期叱ってばっかだったわ……もう、うちの子じゃありませんって言うと、あのこったらこっちから願い下げだーっなんて言うの

よ？」
「……夜中に抜け出してまで、久留美は何をしに行っていたんですか？」
その問いの答えは少しの思考の後に返って来た。
「……〝先生〟に会いに行ってたんですって」
「先生？」
ここにきて学校の先生を指しているというわけではなさそうだった。
「私も最初は変質者かなんかに懐いちゃったのかと思ってたんだけど……家を飛び出した時、すぐに戻ってきたのよ。なんかヘコんでるから理由聞いたら、その【先生】に親に心配かけるんなら悪い子とはもう会わないって怒られたんですって。まぁ、それから夜中に抜け出すようなことはなくなって、日が暮れる前には帰るようになったんだけど……やっぱり、心配だから学校が終わる頃を見計らって下校する久留美の後を尾行してみたのよ。で、行き着いたのはうちの近所の幡ヶ谷第三公園だったんだけど……予想外なことにその【先生】っていうのが随分若い人でね……結構飾り気のない服装してて髪も短かったからわかりにくかったけど、まだちょうど今の久留美とほとんど変わりないくらいの年頃の女の子だったわ」
「それで、おばさんはどうしたんですか」
「帰ったわ」
「……帰った、んですか？」
あまりにもあっさりと答えられて思わず聞き直す千夜の含みを悟ってか、

「まぁ、悪い人には見えなかったし。……ようやく憧れる対象を見つけて子供らしくはしゃいでるあのコ見てたら……無理に引き離すのも気が引けてね。かわいいもんよ、手品師を魔法使いだって本気で信じたりしてたんだから」

「手品師？」

「ええ、どうやらそれを習いに行ってたみたいなのよ」

「……久留美が、ですか」

口にするが千夜はあまり実感がわかなかった。

今の久留美を僅かながらも知る身としては、聞かされた話の中のかつての久留美はあまりにも遠い存在に思えた。

「意外？」

察した久美子の言葉に千夜は濁しつつも答えた。

「……意外というか……久留美にもそんな頃があったんだな……と」

「そうでもないわよ。ずっと、あの頃のまんまだもの」

「あの頃のまま？」

「久留美は、今もずっとあの魔法使いから離れられてないのよ。あの頃からずっと、ね」

含むような口ぶりに千夜は何かを感じた。

久美子はそれを隠す気はなかったようで、すぐにそれを明かす口を開いた。

「……クリスマスイブの日、久留美は日が暮れても帰って来なかったの。まさかって思って例の場所に行ったら、顔を真っ赤にして久留美がベンチで何かを待ってるみたいに座ってるのよ……冬の真

っ只中でいつまでもいたもんだからその後すぐに風邪引いたわ。私がいくら叱り付けても反省するどころかまるで聞こえてないみたいだったけど……何をしていたのか理由を聞いたら突然泣き出したの。ずっとうわごとみたいに、先生に置いてかれた、約束したのに連れてってくれなかったって」

「約束……って」

「魔法使いの弟子にしてくれるって。その日、一緒に行くって約束してたんですって」

「でも、その【先生】は……」

「連れて行かないでくれたわ。今ならわかる、いい人だったのね……ひょっとしたら、本当に魔法使いだったのかもしれない」

茶化すように明るい口調の真意ははっきりと見えなかった。

だが、それはすぐに露見した。

「だって、あのコを私たちに返してくれたけど……その心までは置いていってくれなかったんだから」

「……」

「あのコは心を連れて行かれて、あの頃いた場所に今も立ち止まってるの。おかしなこと言ってると思うけど、親の私にはわかるわ。それに私見ちゃったから」

何を見たのか、という疑問に答えは直後に付いた。

何処か寂しそうな笑みと共に。

「魔法使いといた時の久留美の顔……親の私たちだって見たことも無いような、楽しそうな顔してたの」

泣き出しそうな顔は、一瞬だけだった。
誤魔化すように紅茶を口にする際に伏せられた後、そこには元通りの表情で上塗りされていた。

「それからよ、久留美の”やんちゃ”が始まったのは。最初は、波留雄さんの真似ごとにでも目覚めたのかと思ったけど……違うわよね、アレは」
「違うんですか？」
「記者の真似事はあくまで手段でしかないのよ。あのコが追い求めるものに近い感覚を得るためのね。あのコにとって、魔法使いという非現実的な存在に出会った僅かな”非日常”は一時の夢の時間にはならなかったのね。きっと、過ごしてどの他の時間よりも……”現実”そのものだったのだと思うの」
「――――――」

無意識のうちに脳裏にフラッシュバックが起きた。
それは神崎の一件がひとまず落ち着いた後、さりげなく避け続けていた久留美と鉢合わせた際に受けた激情の場面だった。
それに伴って、あの時の台詞も鮮明に蘇る。

――――忘れてなんてやるもんですか、あの時起こった全部のこと欠片一つまで忘れないんだからっ！

仮面で突き放した自分に掴みかかってきた久留美。
誤魔化されたくない、と訴えながら彼女が何処か縋るような目をしていたのを思い出した。
思えばあそこまで過剰に拒否を示したのは、過去に『先生』と呼んで慕った魔法使いに置いて行かれたからであると納得がつく。
そして、何より自分という存在は彼女にとって――――

「どんどんエスカレートして、一般で裏ルートとか呼ばれるような領域まで踏み込んで関わっていく久留美を見て、止めようか、と何度も思ったのよ。でも、しなかったわ」

「どうしてですか」

「止められない、とわかっていたから。あのコにとっては、ひょっとしたら私たちの方が夢みたいな存在なのかもしれない。……ううん、本当はただ怖かったのだけなのよ。止めたとして、その時恐れていた考えを肯定されたりなんかしたら……耐えられないわ」

久美子の笑顔が歪むのを見て、千夜はそれ以上何も言えなくなった。

傍観していたことを無責任と責めることは出来ない。

親として子に否定されることは、身を裂かれるよりも辛いことであるのは本人たちと同等までいかなくてもある程度わかる。

家族とは不思議なものだ。

外見ではこれ以上に無く睦まじく団結しているように見えても、蓋を開ければ内情は酷く冷え切っていて正反対の悲惨な状態であることもある。

新條家は一概にそうは言い切れないものの、そのしこりを内包していた。

久美子の笑顔が歪むのを見て、千夜はそれ以上何も言えなくなった。

傍観していたことを無責任と責めることは出来ない。

親として子に否定されることは、身を裂かれるよりも辛いことであるのは本人たちと同等までいかなくてもある程度わかる。

この家の人たちは、血の繋がりも過ごした時間も長いのに、それでも家族として在るには何処か欠落している。

そう考えていた千夜の脳裏に浮かんだのは、自分とは容姿があまりにもかけ離れてしまっている妹と呼んで暮らす少女だった。
過ごした時間は二年という僅かなもの。
お互いそれまでの過程の間に記憶もあやふやのものとなっており、己にかけては完全な喪失状態に今も陥ったままだ。
過去における関わりと繋がりを確認し証明できるものは、自室の引き出しの置くにて眠るものたった一つだけ。

不確かな要素があまりにも多く、繋がりがあまりにも少ない自分が持っている家族という存在を改めて見直し、思わず笑みが零れた。
自嘲をという名がつく微笑だ。
自分とて人のことが言える立場では無いな、と。

「情けない親よね。このままじゃいずれどうしようもないことになるってわかってるのに、現状から一歩踏み出すことすら出来ないの。踏み出してしまったら、今度こそあのコは私たちの前からいなくなってしまうんじゃないかって……」
「おばさん……」
「でも、今日……動いた気がしたの」
「え？」

久美子の表情にかかっていた翳りが薄くなる。
何を思ったのか千夜に向けて新たに笑みを浮かべ、

「あなたが現れたから」
「……買いかぶりですよ」
「そんなはずないわ。だって、今日見ちゃったもの」
「……何を、見たんですか？」

ことり、と久美子は半分ほど減った紅茶のカップをテーブルの上に置きながら、

「あなたといる時、久留美は同じ顔をしていたわ。――――あの魔法使いさんと一緒にいた時に見た、何をしている時よりも楽しそうな顔を」

「――――――」

向けられるのは笑顔だった。飛びきり、と付くような。

それでいて、縋るようにも見えるような。

「きっと、あなたなら……いえ、あなたにしか出来ないのね。あのコにあんな顔をさせることが出来るあなたが、教えてあげてくれないかしら。自分を置いて何処かへ行ってしまった魔法使いを追いかけ続けるよりも、目の前の友達といることの方が大事なんだってことを。少しずつでいいから……気づかせてあげて。あの、日常に生まれたくせにそれを嫌って拒む偏屈娘に」

大事なものを、大事にしてきた宝物を託すかのように頼みかけてくる久美子の言葉に、千夜が覚えた感情は――――罪悪感だった。

言えばいい。

違う、と。

あなたは間違えている。勘違いしている、と。

あなたの娘は日常の中でようやくあなたが望んでいた平凡でごく当たり前のもの”に興味を見出せたのではない。

嘗てと同じように、日常に紛れていた”非日常”に再び遭遇してしまっただけだ。

そして、自分は”非日常”そのものであり、あなたが見たいつかの再来なのだ。

あなたが何よりも忌避していたものそのものであるのだ、と。

言えばいい。
言わなければならない。
言わなければならないのに。

「……」

口から漏れるのは言わなければならない言葉ではなく、沈黙という無音だった。
迷い、だった。
胸の内に置かれているものを絡めとって、出て行くことを阻む『迷い』が存在していた。

理性の警告を無視しようとする何かが己の中にある。
その何かは見てしまった。
向き合い、正面から目の前の女（ひと）の信じきった目を。

その目が何かの背中を押す。
抑えなければならない――――願望を。

「……あー、なんか重くなっちゃったわね。ごめんなさいね、今日会ったばっかのあなたにこんな親の気苦労聞かせて重苦しい頼みごとしちゃって」
「いえ……そんな」
「……でも、一個だけいいかしら。これだけ、本当に頼みたいの」
「何ですか？」

雁字搦めにされたような息苦しさから開放された千夜は、久美子の誤魔化しに感謝しながら先を促した。

「……あの馬鹿娘が危ないことしそうなったら、止めてあげてね。……お願い」
「……はい」
「ありがと。あ、あとついでといってはなんだけど……」
ちょっと待ってね、と唐突に久美子はソファから腰を上げた。
急に立ち上がった久美子は千夜をそのままにし、部屋の端に設置された本棚へと向かい、何かを引き出すとすぐに戻ってきた。
「お待たせ。――――はい」
と、差し出された一冊のノート。
少し端が黄ばみ折れていることからそれなりの年期が積まれていることが明察できた。
「……新條家…の、食卓？　何ですか、これは」
何処かの裏ワザ番組のような題名が黒ペンが書き刻まれていた。
「お料理ノート。我が家の門外不出の秘伝の書よー……と言っても、書いたの私だけど。これにはね、私が結婚してから書き続けたうちの家庭の味がきっちり記されているのよ。いつか久留美が何処かにお嫁に行く時にあげようかと思ってたんだけど……予定変更。あなたに貰って欲しいのよ」
「どうして……それは、久留美に」
「ああ、だーめよあのコは。ぶきっちょだもの。つくらせたら我が家の面汚しになるわ」
実の娘を容赦なく切り捨て、久美子はやや押し付けるように千夜

に渡す。

「ちょっとした保険みたいなものよ。この先、あの子を任せられるような人に渡そうって。……なんだか私が、直接あの子に教えてあげられる気がしないから」

「……え」

「まぁ、年取るとね。もしもって、言葉に弱くなるのよ。まぁ。長生きする気でいるからいらない心配だけど……おばさんを安心させるためと思って、お願い」

にこにこと微笑んでいるのに、その様は何故か必死なように見えた。

久美子の手は千夜のノートを持つ手に重なる。

きゅ、と握ぎる力は思いのほか強い。

胸の奥にひっかかるものがあったが、千夜は無視するように笑みで答えた。

「それじゃぁ……ありがたくいただきます」

ありがとう、と安心したと告げる笑みを千夜は後になって、何度も思い出すことになる。

取り返しの付かない後になって、何度も。

彼女――――久美子がこの僅か先で己の身に何が起こるか、その末路を知っていたのか。

それは今もこれから先も、千夜にわかる術はないことになるのだった。

［壱百九］　欠陥の内包　（後書き）

なんか立ってるフラグ。
とりあえずストック分はこれで終わり。
おかんは親としては藁にも縋る想いなのだろうけど、縋られた千夜は大変です。ただでさえいろいろ抱えるもんあるというのに。

気を許した相手と必死な相手には、嫌といえない我が家のヒロイン。
これからも他人事で苦労すると思う。

［壱百壱拾］　無二の異能

千夜が己の思慮不足を胸に眠れない夜と戦っていた頃。
同じく渋谷の一角の別の場所で、やはり日付変更線を引かれた時刻を越えたにも深夜にも関わらず眠りに落ちれない者が一人いた。

「……」

神経の統一。
視力も聴力も精神力も全てを一点に向ける。
かれこれ一時間をこの作業一つに告ぎこみ、指先一本すら動かせない状況が続いていた。
身体を動かさないとはいえ、疲労がないわけではない。
休めない体、磨り減る精神。
限界は目の前に来ていたが、目標はまだ遠い。
少しでも気を抜くと『コレ』は呆気なく形を崩すことになる。

瞬きもろくに出来ないまま、それでも作業に集中しようと持続に心がけていたが、

「――――――蒼助くん？」

横から不意を打つ声に、僅かに意識をとられた。
その一瞬が作業の中断の決め手となった。

「っ……あっ！」

哀しいまで予想通りの崩壊が成った。
一時間の維持の努力は蒼助の目の前で砂城のように崩れ去る。

しばし、呆然の体のまま固まった。

「……あ、ゴメン。こんな時間まで練習してるとは思わなかったから」

「いや、いいっす……どうせそろそろ限界だったから」

と、口では言いつつも、ショックは目で確認できるほど姿勢に現れていた。

その原因となった三途はそれを汲んでか、

「……休憩しなよ。まだ起きてるつもりなら、コーヒーでも入れようか？」

「……平気。水でいいっすよ」

邪魔されたこともあって、三途の気遣いに対し蒼助はやや険のある声で対応した。

三途はそれに気を悪くした様子もなく、応えてキッチンに向かって水道の蛇口を捻った。

渇きを自覚した蒼助の喉は、唾液を飲み下すのすら滞る有様であった。

「はい」

「……どうも」

水の溜められたコップを受け取り、次に一気に喉に通した。

潤滑の良くなった喉の具合に一息つき、コップを目前のテーブルに置いた。

そこに二秒程の間隔を置いた後に、

「結界、上手くつくれるようになった？」

「……一応、このテーブルを包める程度までには。でも、どうやっても動くのを止めて全部の意識こっちに向けてねぇと、すぐに解けちまう」

チッと舌打ち、肩を落とす蒼助。

「でも、一度も結界を展開させたこともないところから四日目でここまで出来るようになるのは結構な上達の早さだよ。まぁ、その年になるまで結界のつくり方を知らなかったってところにも驚いたけど」

「へっ。クソミソな霊力しかない奴にそんなもん教えてもしょうがないって思われてたもんでね」

「コラコラ、捻くれた言い方しないの」

嫌なところに触れられて完全にヘソを曲げた蒼助を、三途は宥めながら、

「それでも、君に指導をしてくれた人は君を良く見て良い判断を下したと思うよ。元々、君は術士型ではないようだし、かなり戦士としての才能が突出している。話を聞く限り、それに合わせて幼少時代は基礎体力と身体作りに徹底したのも、それを見抜いていたのことだったんだと思うよ」

「……そういや、そんなこと言ってたかも」

蒼助は思い返した。

指導者たる母親が生きていた頃の体力づくりの毎日を。

後になって、半ば疑っていた母親の言葉の真実味を痛感したことも。

「つまり俺は、どうしようもないくらい肉弾戦特化タイプってこと

か」
「そんながっかりしなくても。伸ばそうと思えば何処までも伸びることができるという点を考えれば、ある程度両立しているよりもイイことだよ。それにこっちの分は、上弦さんとの鍛錬で十分すぎるくらい取り戻せてるっていう話じゃない」
「……腕一本だけどな。つか、あのオッサンずるいだろ……渾身の不意打ちで捥ぎ取ってやったってのに、十秒そこそこで元通り生やしやがって」

しかもその直後に呆気とられているところを容赦なくヤられた。
ようやく勝ち取った一杯食わせてやった感は台無しに終わった。

「そうでもないよ。あの後出てきた上弦さん、すっごい悔しそうにしてたもの」
「はっ……なら、次はカシラ狙うか」

聞いた言葉で取り戻したようにしてやったりと笑う蒼助に、三途は不意に問いを向ける。
少しだけ方向性を変えて、

「ところでさ、ずっと思ってたんだけど……」
「何をすか」
「今まで、どうやって戦ってきたの？」

素朴な疑問をさりげなく口にするように、核心をついた内容を口にした。
顔を向け、合わせた視線の先の三途の目には純粋な答えを求める追求心だけが存在していた。
それは魔術師としての性（さが）からくる探究心でもあった。
しかし、それだけでない。

この疑問は、三途が出会った時から蒼助に対して抱えるもう一つの疑問に繋がっていた。

「結界はおろか霊装も使ったことないんだよね？　ということは、霊力を全く使ったことがないということになる。……なら、君は一体どうやって調伏を行ってきたの？」

霊力を全く用いず魔を伏させることなど、可能なのか。

謎を解明することが出来る当人を前に、今まで抑えてきた欲求を縛り付けていた三途の中の束縛は既に解かれていた。

問いに対し、蒼助はそれほど驚いた様子や拒絶を態度に表してはいなかった。

そもそも、そんなものは抱いていないとも取らせる反応であった。

蒼助は少し考えるように三途の追求の眼差しから目を逸らして、

「割と遠慮がないっすね、下崎さんって」

「これでも我慢してたんだけど。……ごめんね、魔術師ってこんなふうに無粋な生き物なもんでして」

「別にいいっすよ。他人には聞かれても話すなって、死んだおふくろには言われたからなんとなく秘密にしてましたけど。……こんなことになった今じゃ、話した方がいいかもしれねぇ」

「……それは、君と君のお母さんだけが知っている秘密なの？」

「まーな」

三途の目の追求の色が強くなる。

これでもう話さざるえなくなった、と蒼助はこれが約束を破るという行為であることを思い返し、若干の抵抗を今になって抱いたが、死人に了承を得ることは出来ないのだから構うことはないだろうと踏み切った。

「……八歳くらいの頃、霊なんてものは全く見えなかった俺に、突然妙なものが見え出したんだよ」
「妙なもの？」
「最初は生きてる人間にだった。気のせいかと思うくらい些細な見間違いだと思う程度にしか見えなかった。ただ、見かけるたびにどんどんはっきり見えるようになっていった」
「……何が、見えていたの？」

はっきりと口にされない部分に指摘を打つと、蒼助はそれを待っていたかのように前ぶりから本題へと移行する。

「……炎」
「ほのお？」
「ほら、ガスバーナーとかで出るあの青い炎あるだろ。あんな感じの青白い炎が、この腕とか腹とか身体のアチコチで燃えるように見えてたんだよ」
「人間の身体に、青白い炎が……ねぇ」
「で、そこから更にエスカレートして……霊体にも見えるようになったんですよ」
「霊体にも……あれ、どうしたの？」

突然、蒼助の顔が青くなった。
目は何処か遠くを見て、何かを思い出しているようだったが、

「……言いましたよね。俺、それまでいっぺんも霊が視えなかったんですよ。霊力ショボいもんだから、霊視の才能も底辺いってたもんで」
「ああうん。……でも、視えたんだよね？」
「あー、見えたよ……そいつ全身火ダルマだったけど」

「……それは、また」

どういう仕組みかはまだ不明だが、どうやら霊は全体が青白い炎に包まれて燃え盛っていたらしく、年端もいかない子供の精神にはかなりきつい代物だったようだ。

退魔の血族に生まれたとはいえ、それまで一度も霊的存在との接触が適わなかった時点の精神では免疫も慣れも何もあったではない。

さながら、一般人の心霊体験の恐怖そのものだっただろう。

三途は客観的に察しながら、気の毒に、と目の前の男に同情を抱いた。

「半泣きになりながら、母親のところの寝室に駆け込んでからが最悪だった。あのババア、事情聞く前に人の泣きっ面見てひとしきりただ笑いやがって……」

「……そこの方が君にはショックだったのかな」

寧ろ、ここが重要だとばかりに歯軋りする蒼助に『嫌な思い出』の本当の意味が三図には垣間見えた気がした。

きっとそうなのだろう、と本気で思い出に悔しそうにしている蒼助を見て、そんな確信を得た。

とりあえず落ち着いたのか蒼助は表情を若干緩めると、

「……まぁ、その後はちゃんと話聞いてくれたんですけどね。で、母親が言うには別に霊視に目覚めたとかいうんじゃなくて、先天的に目にだけ宿った異能の類いだっていうんですよ……確か、何とかの目って言ってたよーな……」

「……魔眼」

「あ、そうそう、それ……って、アレ、確か……」

最近どこかで聞いた単語だ、と蒼助はその覚えの先を見た。

三途はその考えを言わずともわかったかのように頷き、

「そうか。やっぱり、君も魔眼憑きだったんだね」

「やっぱりって……」

「この店にやってきて、私と初めて会った時のこと覚えてる？　目が熱くなったり、とか」

言われて蒼助はハッとした。

忘却の坩堝に落とされようとしていたあの痛むような一瞬の熱に見舞われた不可解な現象の記憶を、慌てて拾い上げ、

「あ、それ……」

「かくいう私も実はあの時そうなったよ。あれはね、魔眼憑き同士が接触した際に起こる共鳴なんだ。発動していない状態の魔眼憑きを見分ける唯一の方法でもある。……ただ、君の瞳にはこれといって特徴的な色彩が見れなかったから、今まで確信は持ててなかったんだけど……とりあえず、これで確定したよ」

「え、でも、何で……」

「あんな状況で話したものだから覚えてないか。魔眼はね、一部の上位のカミと異種との混血種……俗称・半妖にしか宿らない特別な異能なんだ。君は……かなりの特例らしいけど、一応該当するでしょ？」

あ、と蒼助は胸に納得を落とした。

「でも、君は更に特例みたいだね。一般……なんていうのも妙な感じだけど、魔眼の効能は精神に作用させる暗示めいたものが主流なんだ。中には、物理的な現象を起こす稀少な貴種も過去の前例として記録が残っているけど……蒼助くんのは」

「……そういう記録には無いんすか？」

「少なくとも私が目に通してきた文献、聞いてきた情報には無かったかな。……ごめん、話途中で遮っちゃって。続き、聞かせてくれる？」

「ああ、わかった……で、話聞いた母親が考え至ったあたりの推測だと……俺が見ていた青白い炎っていうのは、〝概念〟なんじゃねぇかって」

「概念？」

「試しに無機質な物体も見てみろって言われて見たら、やっぱり同じもんが所々に帯状に巻きつくみたいにあって。……母親が言うには、一見関係がないみたいだが一つだけ共通している点があるんだとさ」

「共通点……？」

「どれも全く別モノだけど……この世に存在している、ってところは同じだって言ってた。俺の目はそれを炎という形で模して視ているんだとかなんとか……言ってたよーな」

この奇妙な異能（ちから）には何やら理屈があるようだが完全に理解するには難しくて、微妙に曖昧な覚え方をしていたものだから、記憶が若干怪しくなってきていた。

だが、三途にはそれで十分だったようだ。

「なるほど……その線で行くと確かに理屈が通るかも」

「よくわかるよな……俺なんか最初何言ってんのかさっぱりで、わかるまでおふくろに何度も馬鹿にされて、やっとわかっても馬鹿にされてあーくそまた腹立って」

「まぁ落ち着いて。また脱線しちゃうよ。……ねぇ、理論上の推測だけでその能力を応用しようってことになったわけじゃないでしょ？　何か実証みたいなことしなかった？」

「……目ぇキラキラしてますよ、下崎さん」

「やー、魔術師なんてかこつけても実態はただの貪欲な探求者なん

で」

どうやら知識欲という欲望に突き進むことにしたらしい三途の新たな顔を見た気がしながらも、蒼助は問いに、もとい三途の欲求に応えるべく、

「結局、俺がいくら聞かされてもイマイチ呑み込めてないのがバレて、湯のみとナイフ手渡されたんだよ。……それで、試しにコレ刺してみろって」

「ナイフで湯のみを？」

「正確には、まとわついてる炎の帯をな。……そしたら――――燃えてなくなった」

「燃えたって……湯のみが？」

三途が驚くのも無理はなかった。

湯のみがそう簡単に燃え尽きるはずがない。

「ナイフがズブズブって入って、それを引き抜いたら炎が、こう……ブワーっ、と炎が水みてぇに噴出したかと思ったら……あっというまに湯のみが火ダルマになった」

「……それで、何か痕跡は」

「灰どころか焦げ痕一つ残らなかったぜ。おふくろの言うところに乗っとると――――”湯のみという存在”だけが綺麗さっぱりなくなったって始末になったわけだ」

思えばこの拾い物は蒼助にとって好機そのものとなったが、母親にとってもそうだっただろう。

誰にも話すな、と母親は言ったが、それから何年かして母親はこの世を去り、行き場のなくなって荒れていた蒼助の元へ蔵間が現れた。

あれは、偶然ではなかったのだと今となっては思う。
霊力がからきしと嘲られる蒼助の元へ、どうして国家組織の総帥がわざわざスカウトし訪れるというのか。
いくら両親とプライベートでの交流があるとはいえ、悪評に塗れた落ちこぼれを自分の組織に入れたがるだろうか。
蒼助の中での解答は『否』だった。
そんなわけがない。
蔵間から直接聞いたことも聞かされたこともないが、おそらく彼は知っていたのだと蒼助は推測していた。
興味を惹き付けるだけの特異点を蒼助が持ち合わせている、という情報を”何処”からか聞かされて。

きっと、あの時から考えてくれたのだと蒼助は思う。
もしもの時も、その先のことも――――――

「蒼助くん？」
「あ、すんません……で、まぁその後は実践でいろいろわかることもいろいろあったんすよ。たとえば、『水』とかには見えないとか、なのに術で発生する超現象は滅せるとか……ここんとこの違いがよくわからないんすけどね」
「うーん、それは確かにわからないね……――――――あ」

閃いた、と言わんばかりの顔で、三途は己の考えを述べる。

「ひょっとしたら、視える視えないに関しては蒼助くん自身の認識力と想像の許容範囲が影響してるんじゃないかな。後者について来るのは……自己暗示じみた意識の強まりってところか……」
「俺自身の意識が関わってるっていうのかよ？」
「前者については割とこれで簡単に片付くよ。水が燃えるとか……想像しにくいし、君も実際に試した時そういった固定観念を抱いて

いなかったとは言える？」

思い当たる節はないことはなく、はっきりと否定できるものではなかった。

少しずつ見え始める真相の形を更に明確にすべく、三途の推論は続く。

「とりあえず、前者に関しては使用者の常識としてとらえている観念の影響が出るんだね。燃える……というよりは、最初の湯のみのことを考慮すると、君の想像力では水そのものを”破壊”や”崩壊”の現象へ結びつけることが出来なかったから炎が視えなかったということじゃないかと思うんだ」

「……そうか、そう言われてみるとそんな気が」

「それで、後者のことだけど……まず実際にどんな術を滅せたのか教えてくれない？」

「……視覚に捉えられる霊力の塊とかだな。やっぱり、目に見えないとどうしようもないから、結界とかは無理だと思うよ」

「霊力の塊……これも前者に入ると思ったんだけど、可能なのか。となると、これも自己意識の問題かな。或いは、戦闘という状況も関っているのかもしれない。君は下手な小細工は無しで最前線で戦うタイプだ。急な攻撃に思考する暇もない危機的状況に陥ることもあるだろうし……その時はひたすらやるしかないってがむしゃらになっていない？」

「……とりあえず、出来ないなんて考える暇はないってのは当たってると思う」

「あとは、水よりは破壊を想像させる要素あるということかな……」

ブツブツと呟きながら考察に浸る三途は、完全に『考える人』の顔だ。

こういう時、下手に触れるとうっかり逆鱗に触りかねないので放っておくにこしたことないと蒼助は三途が落ち着くを待つことにした。

呑気なものだ、と三途の考察する様を見て所詮は他人事であるのだからそんな風に感心などできるのだろう、と蒼助は踏んだ。

実に嬉々として未知の異能を前に様々な推論などを並べてくれたが、正直どうでもよかった。

散々使いまわし、唯一の一芸としてきたこの異能を、実のところ蒼助はあまりあってよかったと思ったことはない。

本能的にわかっていたからだ。

自分が視ているもの、視てしまっているものは――――――本来なら決して視えてはならないモノであるということを。

視えてしまっているヤバさは霊とは比べものにならない危険度であることを。

それを視る時は、いつだってまるで剥き出しの心臓を見せられているような気分だった。

そこは突いて、切って、裂いてしまえば、それは簡単に滅(き)えてなくなるのだということを教える『それ』は、一種の誘惑をしかけてくるのだ。

『それ』が視えるということは、滅せるということの証明。

視えさえすれば、それが可能であるということの暗喩。

滅(け)せば滅(け)すほど、何かを失っていくのを感じていた。

一つの、気づいてはならない真実へと徐々に近づいていく気がしていた。

だから、己に霊力が確かに存在すると知ったあの時は、正直心底

ホッとした。
あの誘惑を視る必要はなくなる、と。

ふと蒼助の視界が何というわけでもなく、テーブルの上の空となったガラスのコップを捉える。
意図も何も無い、単なる何気ない無意識の動作だった。
それが――――――蒼助を驚愕の淵に落とす。

「……っ、！」

ガタン、と音を荒立てて立ち上がる蒼助の突発とした行動によって、三途はようやく己の思考世界から引き戻された。

「蒼助くん、どうしたの？」
「……ねぇ」
「え？」

三途の見据えた蒼助はテーブルに両手を付き、腰を折って見下ろすようにコップを凝視していた。
その両眼は途方も無い驚愕の色に揺れ、大きく見開いている。

その理由は、緊張に掠れた声で明かされた。

「――――視え、ない」

［壱百壱拾］　無二の異能　（後書き）

今回ほとんど蒼助の異能で話が出来上がってしまったという非常に退屈な出来になってしまった。
見えなくなった理由は次回で三途がまた憶測するのですが、こっちは見事不正解。
当分これに関しての事実は伏せておく予定。
本気で終盤まで使用もない。
最重要キーワードなだけに扱い辛いぜ、ちくしょう。

次回、イライラしてる蒼助をお送りいたします（何

［壱佰壱拾壱］　愛の矛盾（前書き）

ひとりでいたいと願ったのは

［壱佰壱拾壱］　愛の矛盾

凝視。
直視。
遠のいて。
近づいて。
更には、視一視もした。

けれども、いかなる形の『視る』を行おうと、

「視えねぇ……」

見つめる先の対象――――ガラスのコップ。
確かにそこにある。その存在を認識及び意識もしている。
『視る』為の条件は全て揃っているはずだった。
それだというのに――――己の目に写るはずの概念たる『炎』が見えない。

何故、と蒼助の脳内を疑問符が本能に促されて増産されていく。
処理しきれない大量のそれによって、思考はパンク寸前となった。

「……視えない……って、今言ってたやつが？」
「あ、ああ……」

応えながら、落ち着け、と軽度の錯乱寸前の己を静める。
疑問を放ったところで何の解決にも進展にもならない。
それよりも今は考えることが大事である、と蒼助は思い当たる節を記憶の中から探すことにした。
が、その前に一足先に答えを見つけたのは――――目の前の魔女

だった。

「ひょっとして、体質が変わったのが原因なんじゃ」

「えっ」

「君の身体はここ最近に変異した。最後に見たのは、いつ？」

「……あの騒動のちょっと前で……一週間前くらいだと思う」

苦い記憶が蘇る。

顔に出そうになるが、蒼助は勘繰られない為になんとか押さえ込んだ。

「……で、騒動の後である今は視えないんだね？」

「ああ」

念を押すような確認に蒼助が頷くと、三途は一つの答えを明確として捉えた。

「……と、なると……これは”異常”ではなくて、寧ろ”正常”なんじゃないのかな」

「どういうことだよ？」

「特異的な方法で、君は混血種という……この世界でいう歪な存在になった。どうしてそうなったかわからないけど、それまで君の中の人外的部分たる存在意識を抑えるべく、身体の中の霊力は抑圧の作用に一貫していた。そして、君はこの前の騒動で晴れて本来なら正しいはずの”身体”になったわけで……霊力も体内の霊脈を巡るようになった」

「……なにが言いたいんすか」

「いやね、君の魔眼はそれまでの霊力の抑圧作用によって生まれた副産物なんじゃないかと思うんだ、私は。魔眼そのものは凡例から逸脱した……基準から外れた存在だけに発生するものだ……言い

方はおかしいかもしれないけど……君は歪に更に歪を重ねた状態だった。それが、歪に変わりはないけれど、その存在として本来あるべき状態へとなったのだから……」

此処まで来て、ようやく話の本筋が蒼助にも見えてきた。

「……つまり、俺の中の霊力の働きが元に戻ったから……誤作動みたいなもんから発生していたアレがなくなったっていうことか？」

「そう。……私の推測では、そういうことになるんだけど」

「……なくなった、のか」

なくなった。

あの異能がなくなった。

繰り返し頭の中で反響させても、自分の事ながら不思議なことに他人事のように思えて、蒼助は現実味を感じることが出来なかった。

今さっきまでその話題で盛り上がっていたところだというのに、突然そんな急な展開を迎えてもそれを受理しろというのは些か無理がある。

「……蒼助くん。今まで使ってきた異能がなくなった残念だけど……その方が良かったと思うんだ。持っていると、いろいろとこれから先もっと周囲に知られたら……かなり厄介だった」

「厄介……？」

「……昔に比べて、最近ではこの国も魔術師の出入りが容易くなった。魔術師という人種は、研究者でもある。彼らは、未知があると知ればその解明をせずにはいられず、知識に対してはさっきも言ったとおり凄まじく貪欲な人間が大多数を占める。特に、日本は今まで他国を隔絶してきたこともあるせいか、未開の地である傾向が見て取れる。自他共に八百万の国と呼ばれるほど、幾多の神々の住ま

う土地だ……そんな情報に惹かれて己の研究対象を探索しに来る輩も少ないとは言い難い。……退魔師が魔術師を嫌う理由の一つがこういう遠慮なしで首を突っ込んでくる無粋なところなんだけど……君のソレは、まさしく狙うには恰好の獲物だ」

「……目ぇつけられたら実験台にでもされるんすか？」

「最悪の場合はね。よくて眼球を奪われるだけで済むか……いずれにせよ、厄介な騒動や不幸を呼び込むもとになったのは確かだよ」

「こえー話っすね……って、まさか思うけどあんたは」

「……あー、うん。さっきも言ったけど――――残念だね」

笑顔だ。

「……」

「そんな飼い主に裏切られた犬みたいな目してちょっとずつ後退しなくても。冗談だってば……私はそんな研究に人生かける気もそんな意気込みもないよ。非常に興味深くは思ったけどね」

安心させたいのか煽りたいのか微妙な弁解だと、蒼助は思いながら、

「まぁ、無くなったっていうなら別にそれで構わないんすけど。コンプレックスとも晴れてお別れして、念願のまともな霊力持てたし」

三途の言葉を訂正するなら、残念という部分だ。

気遣ってもらったところ悪いとは思うが、蒼助はその異能の喪失そのものを驚きはしたものの、残念だなんて思っていない。これっぽっちもだ。

視えないのが正しいのなら、それでいい。

成るべくして成ったというのなら、万々歳。

宿り主にすら無いものへの妥協たる代用品としてしか扱われなかった、哀れで恐ろしい己の異能。
さよならを挟むこともできなかった唐突な別れだったが、それもまた有りだと思う。

胸にひっかかる僅かなしこりは、そこに母親との思い出が詰まっていたからだろう。
だが、思い出は残った。
問題は無い。

「え、そうなの？」
「特別なものを持って嬉しがるのは、人それぞれでしょ。俺は、みんながごく当たり前みたいな顔して持ってる霊力（モノ）の方が羨ましくて欲しかったんで。自分が持ってなくて他人が持ってるもんが欲しくなるのは、大概みんな一緒っすよ」

無論、他人が羨ましがるものを自分は何とも思っていなくてその思いが理解出来ないことも然りだ。
自身が、三途の己の異能に対して宝物に目をキラキラ輝かせるような反応を見せたのが理解できなかったように、だ。

「ははっ、確かにそうかもね。……そう考えると、人間っていうのはどうしようもなく我侭な存在だよね」
「そっすね。人類みな平等なんて言葉、誰が考えたんだが」
「まぁ、人類なのは確かだよ。……で、そんな矛盾を孕んだ言葉を皮肉るってわけじゃないけど、一つ行為を平等にしようか」
「は？」
「君がこの店に来て探りに来た時と一緒だよ。せっかく練習してたところをジャマしたわけだし……何か聞きたいことがあったら遠慮なくどーぞ」

時間を無駄に消費させた侘びの代わりのつもりらしい、と蒼助は言葉に対してそう察した。
店において時刻を提示する壁にかかった頭上の時計見た。
随分長いこと話していたのか、時間は最後に時計を見たのを境から結界構成にかけた一時間を省いても三十分も経過していた。
現時刻は夜中の二時。
ゆるゆると来ている睡魔も相まって、もはやもう一度結界に手がけるほどの精神力は残っていない。

ここで会話を打ち切って寝る、という選択肢もあった。
だが、

「いいんすか？　ちなみにいくつまで」
「上限五回までは可。回数の指定は夜も遅いのでお互いの為にと考えて、大体こんなこれくらいかな、と」
「……りょーかい。つか、いいんすか？　言われたからにはプライバシーとか関係なしで遠慮なくいくぜ？」
「覚悟してますとも」

笑顔で承知と来た。
ならいいか、と蒼助は一方の選択肢を切り捨てる。
聞きたいことならある。それこそ、腐るほど。
知り合って間もないこの人物は、実は千夜に引けを取らぬほど謎が多い。

自分も随分変わった、とふと我に返り蒼助は思った。
他人には関わらず、関わらせないことを信条としていた人間が今は他人を知ろうとしている。
人はそうは簡単に変われず、変わるものではないと思っていたが、

今の己を客観的に本の少し前の己と見比べてみてそれも覆さずにはいられない。

変化に関わるのは一人の少女だった。

そして、目の前の女のことに立ち入ろうとするのも、少女が間違いなく関わっているから。

他人に対して貪欲になったわけではない。

他人を通した先に少女が見えるのなら、という条件付きの好奇心。

呆れるくらいの視野の狭さに、思わず笑いたくなる。

たかが一人の女にここまで今までの自分を崩して堕とせるものか、と。

それに何の抵抗も嫌悪も感じないというのだから、もうおしまいだ。

「……さ、何が聞きたい？」

気になることは多い。

それを向こうから良いというのだから、これは逃がすには大きい魚だ。

断る理由など、毛頭ない。

「……俺たちが泊まってるあの部屋って、前は千夜のもんだったのか？」

「ん。そうだよ。最初の頃の……三ヶ月くらいはウチで暮らしてた」

「わりと短いな」

「いやぁ、こんなお金ケチって魔術で八割を改造構築した建物だからさぁ……慣れればなんてことないんだけど、千夜は使いにくいことこの上ないと気に入らなかったみたいで。三ヶ月目にもう我慢ならーん！って、自分はここ出て一人で暮らせるどっか適当なアパートでも見つけるっていうし、朱里ちゃんは置いてっちゃやだーって

泣くし、住所は教えないっていうし……それならせめて私が買ったマンションにって話が収まったわけさ」

「あー……」

わかる気はした。

ここにずっと住めと言われたらさすがに自分だって嫌だ、と当時の千夜の気持ちにシンクロしたくなる蒼助だった。

それぐらい慣れなければ悪環境な建物なのだ。

「こんなので一つ……でいいの？」

「いいよ」

貴重な質問有効タイムに使うにはやや粗末な代物で勿体無いかもしれない。

だが、これでいい。

最初の一発目は――――次の本命の衝撃を緩和する為のものなのだから。

「じゃ、次の二つ目」

「うん、どうぞ」

何が来るかも知らないで、三途は微笑で第二弾を迎えようとしている。

少し悪い気もしたが、自分で言ったのだから責任はとってもらおう、と蒼助は胸に秘めた『本命』を口にする。

「じゃぁ、質問その二。――――あんたの負い目って何さ」

この際だ。
ずっと気になっていたことを聞かせてもらうことにしよう、と。

◆◆◆◆◆◆

想像以上だった。
明かされた真相も。
そこに込められた――――――考えと想いも。

「馬鹿げてやがるっ……！」

胸溜まった鬱憤を吐きながら、荒々しくドアを開ける。
夜中だろうが、知ったことではなかった。

だが、その騒音は先に眠っていたベッドの住人を起こした。

「そうすけ……？」
「……悪い、起こしたか」
「……へーき、途中から起きてたから」
「そうか。……じゃぁ、もう一回寝とけ。俺は明日休みだが、お前は学校だろ」

ベッドまで歩み寄り、出来るだけ横なっている朱里に衝撃を与えないようにゆっくりと腰かけた。

ポンポン、とツーテールを解いて広がる純白の髪の集い先である頭部を撫でてやる。
目を細めた朱里は、
「……あのこと、サンちゃんから聞いたんでしょ？」
「っ！」
どうしてそのことを、と蒼助は思わず身を捻って横たわる朱里を見た。
合わさった視線の先を辿った紅い眼は、半分閉じていたが、それでもまっすぐとぶれることなく蒼助を見つめていた。
ここは三途の魔術によって織り上げられた擬似空間の中。そこと一枚の壁で隔てられた外の店の方での会話が、どれだけ向こうで怒鳴りたてようと聞き取れることはおろか騒ぎすら感じることできないはずだ。
疑問を視線から感じたのか、朱里は言葉にされる前に答えを与えた。
「ゴメン。見てた……覗くつもりはなかったんだけど」
それが”言葉の通りの意味”であると、この時点では蒼助はそう受け取って処理した。
それよりも意識が向いたのは、
「……お前、知ってんのか？　下崎さんが……」
「うん。サンちゃんから直接聞いたわけじゃないけど――――――知ってるよ」
それは冷静で、とても静かな告白だった。
内容に対してあまりにも似つかわしくない落ち着きを含んだ、そ

れ。
付け足すように補足が続く。
「……私が見えるのは、”映像”だけだから……どんな経緯であんなことになったのかはわからないけど……多分、本当のことだよ」
「何言ってんだ……？」
「……ごめん、説明……明日かまた今度で、いい……？　……眠い」
酷い省きようだ。
だが、ここで文句を言ってもその間に寝てしまう気がした。
それでは困るので、蒼助は先に他に聞いておきたいことを優先することにした。
「千夜は、知ってんのか？」
「……知らないよ」
「お前……何とも思ってないのか？」
「……」
赤い眼は伏せられた。
それが答えとなるには、やや役不足であった。
しかし、明確な答えはちゃんとした言葉で返される。
「……驚いた。あと、納得はできた」
「納得？」
「サンちゃんが、姉さんにあれだけ尽くす理由。蒼助だって、そうでしょ？」
答えは「是」だ。
だが、ここにおける問題はそうではない。

「そういう意味じゃねぇ。……お前、これはお前らにとっちゃ……」
「恨みとか？　……そーゆーのを抱くのに、必要なものが朱里にはないから」
「必要なもの？」
「恨みを抱くには、奪われた物に対する執着や思い入れがいるよ。……朱里は、姉さんに迎えに来てもらうまでに、いろいろ忘れちゃってるから」
「――――お前、まさか」

まさか、と嫌な予感を感じた。
しかし、朱里の返事は、

「違うよ。物心つく頃には、朱里の傍にはもうお父さんはいなかったの。お母さんや姉さんのこととは違って、元から無いっていう意味」
「そうなのか？」
「言っとくけど、朱里はちゃんと覚えてるからね。いろいろ忘れてたのは、姉さんに会うまでの話。それからだんだん思い出して来たもん」
「……あ、そ」

素っ気なく答える一方で内心では安心していた。
さすがに姉妹揃ってときたら、どう対処すればいいのやらと危惧していたのだ。

「蒼助だったらどーする？　全く覚えてない親と……仮にそれを殺した姉さんがいるとするよ。蒼助は、どっちをとる？　恨んで仇を取る？　それとも、割り切って姉さんをとる？」
「……ああ、そうか」

数秒経て、蒼助は理解した。
それは問いという形をとった返事であった。

「恨むには良くして貰い過ぎたし、一緒にいる時間も楽しかった思い出も……ありすぎる、から」
「別にそれが悪いわけじゃねぇから、申し訳なさそうな顔していうことねぇだろ。……ただ、そうじゃなくてよ……あの人のあの考えは」
「ソレに関しては、朱里は何も言えない」
「何でだよ」
「同じ事を、思ってるから」
「――――っ！」

一度はおさまった憤りが蒼助の中で再燃する。
それを感じ取ったのか、

「何で、怒るの？　蒼助には関係ないのに……サンちゃんにもそれで怒ってたみたいだけど」

蒼助の様子に対して不可解と返す朱里。
しかし、それすら蒼助の怒りを煽る油となった。

「……何で、じゃねぇだろ……お前らの考えが気に喰わないからに決まってる」
「そんなの知らないよ。……朱里達の勝手じゃん」
「おまっ……」
「蒼助にはわからないよ。きっと、わからない……手を差し伸べられる側のことなんて」

否定を良しとしない拒絶の言葉が、朱里の小さな口の動きから紡

がれた。
　同時に、それは問いかけの始まりを担っていた。

「何もないってどんな感じだと思う？　生きる理由。生かされる理由。そこにいる理由。そこに置かされる理由。それは全部周りの都合で、自分の意思じゃない。そんなはものはなくて、必要ともされていない。朱里たちは……〝私〟たちは、そんな風に生きてきた。そんな風にしか生きていくことが出来なかった。もういない、〝あの人たち〟も……そうだった」

　そこから――――朱里という少女がまとう空気が一変した。
　乱れた髪が被さった顔が、彼女を別人のように見せる。
　眠そうに閉じかけている眼は、そこから全てを冷めたように見ていることを教える。
　仮面、と思わず内心で零した言葉に、蒼助は既視感，を覚えた。
　そんな言葉が浮かんだ相手が――――目の前の少女の姉であることを思い出す。
　こんなところに肉親を思わせる共通点を見つけることになるとは、と『繋がり』というものに対しての見方を蒼助は若干変えなければならないと知った。

　そして、目の前の存在はそんな蒼助の思考など気にもかけず口を開く。
　そこには先程までの――――今まで蒼助が見て知った『子供』はいない。
　ただ一人。
　小さくも、紛うことなき『澱の住人』が、少女がいた位置に入れ替わり横たわっていた。

「蒼助は、もう知ってるよね。あそこで眠っている人たちのこと」
「……昨日、会わせてもらった」
「……あの人たちもね、私たちと同じことを望んでいたんだよ。……誰かの為に生きていられるのは、すごく気持ちのいい事であると思っていて、それが出来ることを望んでいた。それは逆でも同じことが通ることなんだよ」
「逆……って、それは」
「サンちゃんが言ってたでしょ。――――誰かの為に、死にたい。あの人たちは結果としては実現させてしまったけど、それを心底願っていたわけじゃない……でも、私とサンちゃんはそう思ってる。心の底から、それこそ……死ぬほどそれを願っている」

馬鹿じゃないのか、と怒鳴りつけてやりたい衝動を理性で抑える。
話はまだ続く。
そうするのは、それからだ、と腹の中で荒れ狂うモノに言い宥めすかしていると、

「私たちは、一度全てを失って――――――何もなくなった自分という存在に【無価値】の烙印を捺された。わかる？　本当にも何もないんだよ。自分を大事にする気持ちも。その必要さえも。自分自身にすら見捨てられた存在……本当に、ただ生きているだけの死人とそう変わらない存在なんだよ。それに当てはまるのが私。そして、下崎三途……彼女もまた、私とは多少の違いはあれど同じ途を辿った……だからこそ、あんな言葉が本心から本気で言える」

紅い瞳に深い空虚を宿していた澱たる存在としての朱里に、不意に光が戻る。
語る内容にも、『光』が現れる。

「……姉さんは、そんな私に手を差し伸べてくれた。使うから持ち

出しに来たわけでもなく、来いと引っ張って連れて行くわけでもなく……ただ、私の意思で取らせる為の待つ手だった。誰もが切り捨てろと言い捨てた無価値の『朱里』という存在を必要としてくれた。人形には余計だって捨てさせられた名前を要ると呼んでくれたのも。人形には邪魔だって叩き割られた感情を要ると思い出せてくれたのも。そういった全部切り落としてきたものをまとった、必要らないものだらけの必要らない私を必要としてくれたのは……姉さんただ一人だった」

連々（つらつら）と詩を綴るように連ねられ、紡がれていく言葉を聞いていた蒼助の鼓膜では、少し前に聞いた三途の声とその台詞が同時に流れていた。

『罰を与えてくれればよかった。裁きでもよかった。咎め。非難。叱責。……何でも良かった、私の罪に対して何か与えてくれるのなら。けれど、私はそれすらも全て奪われた。それまで生きてきた理由。その果ての目的。それらを失って、代わりに背負わされた新たな生きる意味さえも……何もかも伐採されたあとには、意味も理由も目的もない……ただ生きているだけの屍になった空っぽな私だった。そんな私に、一度失くした全てをもう再び取り戻させてくれたのは……千夜だった』

積年の想いを語り紡ぐように言っていた三途。
それまでを語っていた目は明らかに虚ろだったのに、千夜が出てくると一気に光を取り戻していた。

光。
そういうことなのだろう、と蒼助は納得づいた。
千夜は彼女の紛うことなき『光』そのものであるということ。

暗闇の中の一条の光、などと表現が出来上がるような完全に一方的な依存関係が彼女たちと千夜の間に出来上がっている。

そう思っているのも無論”一方的”なのだろうが、と蒼助が内心にて結論に付け足しを加えていると、

「朱里という存在は姉さんなしでは成り立たない。だって、姉さんがそう言ってくれたから朱里には価値があるのだから。必要としてくれた姉さんがいなければ、朱里を誰が必要としてくれるの？　……姉さんがいなくなったら、私は、朱里は……また無価値に戻る。誰にも必要とされなくなる。意味もなく、理由もなく、ただ一緒に居ようと言って必要としてくれることもなくなって……そんな、の、嫌、いや、いやいやいやいやいやいやいやいやいやイヤイヤイヤイヤイヤイヤイヤイヤ嫌いやイヤイヤイヤイヤイヤイヤイヤイヤイヤイヤイヤイヤイヤイヤイヤ、いやあああああああアアアアアアア――――――っっ！！！！！」

理性の光が恐怖に呑み込まれるのを蒼助が見届けた次の瞬間に、朱里は狂わんばかりの拒絶の悲鳴と上げた。

無価値への出戻りへの恐怖と嫌悪。

それは朱里自身にとって、三途にとって己のうちの中の忌むべき部分なのだろう。

「っ、落ち着けっ」

「っぁ、はぁ……はぁ、はぁ、はぁ……」

頭を両手で掻くように抱えて、顔をベッドに押し付けて暴れる朱里を抱き込んだ蒼助は、荒れ狂っているであろう朱里の内側を鎮めるように、背中を上下に手を動かしながら摩る。

暫くもがくように腕の中で暴れていたものの、徐々に治まって行く。

不安定に陥る様は、普段の朱里という存在から想像もつかない。
否。これこそが、本来の彼女の姿なのかもしれない。平常を保たせる人物の不在が続いているせいでもあるだろう。
まるでドラッグ中毒者だな、と腕の中の存在の疲弊ぶりにそんな感想を抱く。

これは本当に、千夜がいないと生きれないという有様だった。

「……何で、ダメなの？」

まだ完全には整わない荒い息の中で、朱里は理解らないと呟く。

「どうして、そう思っちゃいけないの……私は姉さんがいなきゃ、生きていけないのに……私がいなくても、姉さんは生きていけるのに……。他に何も我が侭言わない……ただ、これだけは望みたい……生も死も……僅か一瞬で定まってしまう、こんな世界で生きているんだから……せめて意味のある死をしたい……誰かの為に死にたい……その相手が、自分の一番大切な人なら……本望なのに」

うわ言のように、己の願望を垂れ流す。
そんな朱里に、思わず言葉が漏れた。

「……わかってねぇな、お前」
「……わかってないのは……蒼助でしょ」

その反論を最後に、会話が途切れ沈黙が生まれる。
それがどれほど続いてか、腕の中の朱里から力というものを感じなくなったことを感じて、様子を覗いてみる。
精神的に疲弊したのか、眠っていた。

「……ったく、結局人の言う事聞きやしねぇかよ」

さっきまで発狂したように拒絶と拒否を繰り返していた口は、今は静かに寝息をたてている。

そこには澱の住人としても面影も先程の狂乱ぶりも、すっかり鳴りを潜めて見る影も無くなって――――ただの子供のような幼い寝顔だけが残された。

「こうして眠っておとなしくしてりゃ、それなりに可愛げがあるってのに……」

くたりと力のなくなった身体を放し、そのまま横になろうともせず。蒼助はベッドの上で胡座をかいた。

――――蒼助にはわからないよ。

『この気持ちは、蒼助くんにはわからないだろうね』

お前にはわからない、と彼女達は二人して同じ事を口にした。

彼女らは己の存在に『無価値』の烙印を押された者。

そして、一人の少女の差し伸べた手に失ったはずの『価値』を与えられたという。

誰かの為に、死ぬことを望む。

己の身を捧ぐという、人身御供じみた行為を。

「……わからねぇよ」

わからないと突き放した、今は眠る少女に同じ言葉を降らす。

わからないのは自分も同じだ、と。
その不可解の向かう先は彼女達の抱える想いではない。

その矛先は、

「わかってねぇくせに、そんな風に言いきれるお前らが……わからねぇよ」

価値を見出した当の相手が、その存在を失っても平気だと思っているその心が。
ただ自分たちだけが一方的に想っているだけだという考えが。

「俺よりずっと長くあいつといるくせに……何で、わからねぇんだ」

まさかこんな時に答えがわかるとは思わなかった疑問が、蒼助の中にあった。
それは二つ。

千夜が朱里を一人立ちさせようとしている事への理由に対して。
千夜が三途のところを出ようと一人暮らしを希望した理由に対して。

今、見えた。
千夜の行動の奥にある、その真意が。

「だから、なのか……千夜」

ここにはいない女に、蒼助は同意を求めた。

だから。
だから、彼女は――――――

「これも、ひでぇ話だな」

どれだけ大事に思おうと、いっそ哀しいまでに届いていない。
届く先を遮る隔ては、皮肉にも送り先にある相手を思う想いだ。
愛が、愛によって拒まれている。
確かに思い合っているのに、通じていない。
何て――――――矛盾だろうか。

故に、千夜は二人から離れようとしたのだろう。
自分が拾った命は、与えた全てを己に対して削り、消費しようとしている事に気付いたから。
一緒にいては、いずれ彼女らは一つの道を下る。
千夜が最も忌避する、最悪の結末へ続く一本道に。

「こんなことって、本当にあるんだな……」

相手の幸せを願って、相手を置いていくという展開をテレビや漫画で見ては、馬鹿か、と理解できないでいたかつてが今となっては懐かしく思える蒼助だった。
今はわかる気がした。

「そりゃ、やってられねぇわ……本当に」

昨夜の千夜の叫びが、一日過ぎたにも拘らず記憶の向こうから今も尚はっきりと蒼助には聞こえた。
或いは、より鮮明に。

それは知ってしまった、あの時の彼女の胸の奥の悲痛な想いが加わったからかもしれなかった。

［壱佰壱拾壱］　愛の矛盾（後書き）

三連休だというのに、全部バイト詰め……ｏｒｚ
結局一回しか更新出来なかったけど、せめての文字数多めです。

内容に関しては、千夜には他人を拒絶して一人にならなきゃならない理由はちゃんとあると書きたかったわけです。
こんなに追い詰められてたのですよ。千夜から見れば、やられる側にはたまったもんじゃねーってやつです。
黒蘭に己と同類といわれた蒼助にはわかるわけがない彼女らの人身御供願望心ですが、後々その奥にある本音も明かします。今のところではクライマックス間近あたりを予定。

次回は久留美パートです。乙女を予定（謎）

【壱百壱拾弐】　在りし人の残像（前書き）

留めようとする私を嘲笑うように
それは指の間から零れ落ちていく

【壱百壱拾弐】　在りし人の残像

夜。

そう、確かに夜の中に自分はいるのだと、久留美は理解していた。

だが、あたりは確かにそれを理解させる暗さがあるのに、何故か異様に明るい。

そうさせる光が、夜空にあった。

「――――――月？」

ふと見上げれば、そこには歪みのない円い満月。

それは自分が住む世界の外にあるものでいつもはもっと遠くに感じるのに、何故か近く、そして大きく見えた。

「白い、月……」

何故。

あの月は、紅くないのか。

己の『常識』から外れた、目の前に掲げられた白い月は、久留美に言葉には到底できない感動と神秘性を感じさせる。

正直、いつも見るあの『紅い月』は見かけるたびに気味が悪いと思っていた。

好きではなかった。

まるで血の色のように思えるからというのもある。

だが、それとは別にもう一つあった。自分でも説明できるほど明確な理由ではないが、何故かこっちが多くを占める気がしていた。

それを見るたびに感じていた。
いつも夜の空を我が物顔で掌握するあの月は、本物ではないのではないか、と。

「……綺麗」

無意識のうちにそんな賛辞が言葉となって漏れた。
白い。
だが、それは不健康な青白さとは全くの別物である。
何処までも研ぎ澄まされていて、いっそ銀色にすら見えた。
言葉にするなら――――

「白銀（しろがね）……って、いうのかな」

降り積もった雪に当てはめる言葉は、すんなりと嵌る気がした。
己の心にも。
久留美は、何故かこの月を知っているような気がしていた。
目にするのは初めてだ。
だが、知っている。
正確には、この月を彷彿させる――――誰かを。

しかしそこへ、思考が答えを導き出すよりも早くかかる声が、久留美の背中に当たった。

「――――よぉ、久留美」

聞き覚えのある声に、久留美が考えるよりも早く身体が動いた。
振り向いた先には、

「――――かず、や？」

それまで何もなかったはずの背後には、いつのまにか――――鉄塔。
周囲はそれ以外に何もない。
その鉄塔に登る、ただ一人を除いては。

「月が満ちる夜だな。しかも今夜の月は……紅くない。
――――知ってるか？　月は昔はいつもこんな風に白かったんだ」
「え、そうなの……って、じゃなくてあんた！」

あんまりにも自然な様子で話しかけてくるものだからあっさり流されそうになったが、そうはいかなかった。

「何してんのよ、そんなところで！」
「月見だよ。地上で見るよりもずっと、ここの眺めはいい。お前も来るか？」
「行けるか、馬鹿！　落ちたらどうすんのよ、早く降りて……」
「落ちないよ」

だって、俺はずっと前からこの上にいるんだから。

さも当然のように告げられた言葉に、久留美は硬直した。

「何言って……」

「久留美には……無理、だよなぁ。ごめんな、言ってみただけだから気にしないでくれ」
「……い、いいから降りてきなさいってば！　そんなところまで登れたんだから、降りる事だって……」
「無理だよ」
遮られた。
何で、と切り返すことができない。
告げられた『不可能』を模す言葉の意味を、誰よりも告げた本人がわかりきって口にしたように聞こえたからだ。
「できないんだよ、久留美」
そう繰り返して、千夜は笑った。
寂しそうに、困ったように。
まるで木に登ったはいいが、いざ降りるとなったらそれが出来ないでいるかのようだった。
「何、言ってんのよ……出来るで、しょ……？」
「……」
今度は、無言が返答だった。
それが久留美の心の波を大きく荒立てた。
「わ、わかった。行くわ、登ればいいんでしょ？　私もそっち行くから……ちょっと、待――――――」
「――――――ダメだ」
鉄塔に近づこうと駆け出しかけた久留美は、その一言で行動を制された。

怒鳴られたわけでもない。
泣かれたわけでもない。
響いた声に、これといった突出した感情は込もっていなかったはずなのに。

久留美はそこから一歩も動けなくなった。

「さっきは軽率なことを言った。お前はここに上がってくることは出来ない。いや、上がってきてはダメだ。――――絶対に」

絶対。
その完全なる拒絶が、一度は停止した久留美の思考に火をつけた。

「ダメって……勝手に決めないでよ、私だって本気出せばそれくらい……」
「――――上がったら、もう二度と降りれなくなるとしても？」

釘を刺すような言葉。
酷く落ち着きを払った口調と安定した音程の声。

それが、ただの虚仮威し（こけおどし）ではないことを久留美に直感させた。

「自分の意思で降りることは二度と出来ない。地上に戻ることが出来るとすれば……あとは落ちるしかない。この足を踏み外して、な」

それが、何を意味しているか。
悟った時の背筋の寒さに、久留美は思わず咽（のど）を鳴らした。
「……じゃ、ぁ……あんた、は？」
「俺は大丈夫だよ。……とりあえず、当面は」

「とりあえずって……」

言葉を濁す千夜に不安が一層煽られ、声が掠れる。

だが、

「まぁ、大丈夫さ。今までやってきたことを、今までどおりにこれから先もやっていくだけ……それだけのことだ」

「……一人で？」

無意識に出てきた言葉だった。

しかし、千夜の表情が僅か一瞬ながらも、変化した。

笑みが消え、無表情。閉ざされた唇はまるで耐えるかのように噛み締めている風に見えた。

それが、久留美が僅かな隙の合間で見て捉えた光景だった。

そして、返答はその一瞬の過ぎ去りと共に訪れた。

「ああ――――――独りでいくよ」

まるで塗り固められたような笑顔と共に。

その下で、本当は泣いているのではないかと思わせる程、不自然なほどに完璧という矛盾を孕んだ満面の笑みだった。

呆然とする久留美。

それをこの場が待つことなく、次の展開が起こる。

「……えっ」

急だった。
目の前の鉄塔が消えた。
そこにいたはずの千夜と共に。
空から眩いほどに昼間のような光を与えていた月さえも。

そして、世界は夜ではなくなった。
次に現れたのもやはり、『白銀』だった。

「――――っ、雪!?」

久留美はいつの間にか銀世界の中にいた。
あたりには降り積もった雪。その上を止む気配もなく散らり散らりと雪が降り続ける。

衝撃もまた、止まない。

『――――――久留美ちゃん』

また新たな声が響く。
それは、前の千夜とは比べ物にならない揺らぎを久留美に与えた。

久留美の記憶を大きく揺さぶるほどの。

「っっ!?」

息を呑んで、瞬きすら忘れるほどの停止。
それは、久留美の理解の時間となった。

「……どう、して」

疑問は止まない。
理由は見えない。

ただ、事実として声は再び久留美の名前を呼ぶ。
それに対して、たまらず久留美もまた、

「――――――先生っ！！」

声の主を呼び、辺りを見回す。
しかし、声はすれど姿は見えずと言わんばかりに、周囲の光景の中に求める人の姿は全く見ることが出来ない。

「先生！　先生ぇっ！！　どこ、どこにいるの！？」

己を呼ぶ名だけが響き、求めに応える姿はおろか言葉すらない。
まるでここは別の世界から声をかけられているようだった。

「……別の、世界」

心で感じたことを口にして、久留美は嫌な気分を覚えた。
それは思い出したくない記憶。
生きてきた中で、一番の幸福な記憶を汚す汚点。

周囲の雪。その降る様。
それは久留美にとって、かつて一つの出会いと別れを彩った――
――最高にして最悪の演出だった。

「あ、ぁ……っ」

それを思い出した久留美は、その光景から逃げるかのように目を閉ざし、

「――――、――――、――――っっっっ！！！」

何もかもを拒みたい衝動に襲われ、悲鳴をあげた。

そして、名を呼ぶ声は叫びとなり――――銀世界を内側から壊していった。

◆◆◆◆◆◆

身体の痙攣と共に、久留美の意識が跳ね上がった。

「……は、ぁっ！」

堰込むように大きく息を吐き出し、目を見開いたまま暫しの間呼吸が続く。

その間に状況の把握が行われる。

ベッドの上。

天井。
窓から差し込む朝日。
――――――自分の部屋。
そこまで理解し、久留美は己がどんな状況であるのかを知った。
そして、今までが何であったのかを。

「……夢……って、ベタベタ過ぎるでしょーこの台詞」

自分で思わず口にした台詞にお約束を感じて、脱力。
己のボキャブラリーにはもう少し自信があったのだが、咄嗟ではそうはいかないということを思い知るのだった。

「……やだ、汗かいてる」

ぺとり、とした前髪の張り付く感触が気持ち悪く、ぐしゃりと掻き上げた。
今は何時だろう。
疑問に突き動かされるままに、久留美は机の上の棚に常備設置している目覚まし時計を見た。

時刻は、

「……八時、ってぇぇぇぇぇ！？」

通常、久留美の起床時間は朝の七時。
というのも、寝起きの悪さは最悪である上、その直後からしばらくの行動が最悪（久美子談）であるので、本格的な活動にエンジンがかかるまでに十五分は要る。

結局、それからドタバタと忙しい動きが要求されることになるのだが、それ以上の早起きは久留美の限界を越えているので無理な話だった。

夢のせいとはいえ、妙に寝起きがいいはずだ。

いつもより一時間も長く寝こけてしまっていたのだから。

「……っちょっとお母さんたら、何で起こ、し……て……ぇ」

目覚まし時計だけでは起きないことを重々承知している母親は、いつも時計のやかましい音を合図にして久留美を起こしに来る。

今日に限って何で起こさなかった、という文句を胸に責任転嫁もいいところの怒りをここにはいない、一階にいるであろう母親の元へ行こうと意気込んでベッドから降りた。

だが、その時――――――気づく。

「……って、私って奴はぁぁぁ……もーっ！」

状況を再認識し、再び脱力した。

母親が起こしに来ない理由も――――――自分の部屋の床の上に敷かれた布団がある理由も。

今日は木曜。

そして――――学園はその創立記念日により休みだった。

「最悪だわ……昨日の蒼助と同等だなんて……なんて、屈辱っっ」

休日だというのに朝から何故自分はこんなにも一喜一憂しなければならないのか、と自問するが、行き着くのは自己嫌悪というわかりきっていた答えだった。

今ので大分精神が疲れた久留美は、いっそここで昨日からの記憶を振り返ってこれ以上の自爆に防止をかけることにした。

「……えっと、昨日は……確か千夜がうちで泊まって……それで――――」

振り返ったことは正解だった。

今の自分の足元にある布団が蛻の殻であることに気づくことが出来たのだから。

「あれ……千夜は？」

膝をつき、手を置いた。

布団から使用者の残した温もりは既に消えて、冷たい。大分前にここからいなくなったようだと久留美は推測した。

「まさか、学校に行った……わけないか」

先に起きて下に下りた、と当然といえる考えに行き着く。

だが、それとは久留美の中では捉えようのない不安が膨れ上がっていった。

千夜は本当にこの下にいるのだろうか、と。

疑問の直後、過ぎるのは今さっきまで見ていた夢だ。

『――――独りでいくよ』

夢であるにも関わらず、その光景は実際に見た現実を思い出すように、脳裏にて鮮明に再現された。

その瞬間、膨張し続けていた不安は限界を超えて弾けとんだ。

「――――っ！」

暴走する不安に突き動かされるがままに、久留美は部屋を飛び出した。

自分でも考えすぎだと自覚していた。

だが、そんなものはこの抑制から逃れた胸の中で荒れ狂うモノを前にしては何にもならなかった。

寝癖も格好にも一切気をやらず、久留美は階段を駆け下りようと、その一歩を踏む。

が。

「っ、あ、き、やぁぁぁぁぁっ！！？」

今日の己はとことん調子っぱずれしていることに対する自覚は、必要だった。

踏み外した階段を落ちながら、手遅れながらもそれに気づく久留美であった。

◆◆◆◆◆◆

割れた、としこたまぶつけた上に地上との着地部分であった己の

臀部があげる悲鳴からそんな感想が出た。
元から割れているだろうに、と一人ノリ突っ込みを内心で繰り出しながら、

「っつぁ～っっっっ！　こ、これが産む痛み……っ」
「――――ちょっと違うだろう。そこは産む瞬間だけで、本気で痛いのは腹の方らしいぞ」

訂正を為すその声の介入が、一人漫才に幕を下げた。
痛みすらもその瞬間は忘れて、久留美は顔を上げ、

「……千夜」
「凄い音がしたぞ。自分の家で何をしているんだお前は」

呆れ顔を貼り付けて見下ろして立っていた。
服は母親が久留美のところ箪笥から勝手に抜き取って貸したのか、見覚えのある柄のTシャツとズボンと着衣していた。
私服姿は初めてみるので、少し違和感があった。
だが、千夜は目の前にいる。
確かに――――いた。

「あんた……いたの？」
「随分な言い方だな。俺は借りられた身で、好き勝手は出来ないというのに」

皮肉混じりの返し。
そこに其処に込められた「何処にも行かない」という暗喩を感じ、今までの不安が嘘のように久留美の中から消えてなくなった。

「……って、一人で先に起きてたくせに」

「人様の家でいつまでもぐーたら寝てる方がどうかしてるだろ。一応、宿の主はお前の両親の方だからな。一晩の恩義を返す為に、何かするのは当然の礼儀というものではないかな？」
「……かたっくるしいわね、この二面性。もうウチに親たらしこんだわけ？」
思わず嫌味を返しながら、久留美は千夜を観察する目で視た。
現実の千夜は、とても夢でみたあの姿とは結び付きようのない不遜さを湛えていた。
だが、それが久留美の知る千夜なのだ。
いつもの千夜。
その存在の確認を終えても尚、何処か坐りの悪さが胸の内に残った。
「人聞きの悪い。視る目のあるお前の両親に失礼じゃないか」
「あんたよ、あんた！　……それより、何してたのよ」
「朝食の準備を手伝っていた。今は、ポストの新聞を取りに行ってきたところだ」
「……また客を使いパシらせて、あのババァは」
使えるものは何であろうと使う。
そういう母親であることは、娘である久留美自身がわかっていた。
「まぁ、いいさ。手伝いの暁には、また煮物を煮てくれるというし」
「は！？　昨日私があんなに言っても作んなかったくせに……！」
「残ってたからだろ」
「いや、そうだけど……」
「よその家に予約も何もなくやってきて食卓に割り込んだんだ。別

に普通だろ、それくらい」

平然と述べるその様に、次に口にする言葉が見えなくなる。
残り物を出された、と憤慨することも。
使い走りさせられたことに不満を抱く様子もなく。

「……あんたって、妙に物分かりいいわよね」
「そうか？」

そうよ、と強調は内心のみで響いた。
大人びるには理由がある。
そうなるに至るまでの経緯が。

言葉にしなかったのは、認めたくなかったかもしれない。
或いは、意識したくなかったのか。

目の前の少女と自分の存在の違いを――――。

「それより……大丈夫か？」
「……へいき」
「ほら」
「……」

目の前に差し出される、手。
久留美はそれに暫しの間見入った。

「久留美、どうした」
「え……いや、何でもない。ありがと」

動きを見せないことを怪訝に思った千夜の声によって、ようやく

久留美はその手をとった。
その手を握る己の手が、握り返される。
ただそれだけのことに、久留美は途方もない安堵を感じた。

ここに彼女がいる。
ただそれだけの事実に。

2004

［壱百壱拾弐］　在りし人の残像（後書き）

前回からサブタイの話数表示の文字数が半端なく幅取りがちな最近の鮮血ノ月。これ以上増えることはなかろうが、当初はちょっとびっくりしました天海です。

初っ端からドリーム全開の今回でしたが、久留美は予知能力者とかじゃないです。

夢はその人の心理状況を暗喩するとかなんとか聞きますが、そんな感じです。

前半の千夜は、久留美が千夜に対して抱いている無意識の距離感です。わかってるんです、違う存在なんだって。予感もしています。

後半は、かつてのトラウマそのものです。あと未練もタラッタラしてます。

何故、最近久留美がピックアップされているか疑問に思う人はいるかもしれないのでここで公言。

――――実は、こいつはこの一章における『準主役』です。

……いや本当、何でこんなことになったんだっけか（オイ

［壱百壱拾参］　思考の狭間

朝から食べる出来立ての煮物もオツなものかもしれない、と肉じゃがの煮崩れかかったジャガイモを口にしながら、食卓にて久留美はそんな感想を抱いた。

「……でも、肉が少ない」

「しょうがないでしょ、この前の使い残しを片付けただけなんだから。イチイチうるさい子よね、本当にあんたは。ジャガイモをたくさん食べるための料理なんだからこれぐらいがちょうどいいのよ、肉じゃがってのいうのは。

――――そう思わない？　終夜さん」

当事者たちにとっては、定例と化しているような気もしないわけではない難癖とそれに対する迎撃といったやり取りに引き込まれたのは、いつもはいるはずのない第三者。

そんな千夜もまたパクパクと薄茶色に染まったイモがゴロゴロと無造作に転がる器から、箸で積まんでは口に放り込んでいた。

品に関して気にする様子もない気の向くがままの動作を繰り返していた千夜は、最後に放り込んだそれを咀嚼した上で飲み下すと、

「そうですね。ジャガイモを安易にご飯のおかずにする為の料理という点では、私も同じ意見です」

「ほーら、ごらんなさい。頭に持ってきても所詮肉はオマケなのよ、オマケ！　作る側の苦労も知らない無知な小娘が口出ししようなんて十年早くてよっ！」

肉じゃが一つに何をそんなに勝ち誇るのか。

顎に手を添えて高笑う様はムカついたが、内容のくだらなさに気

づいてしまうと反論するのも無駄な労働な気がしたので久留美は反抗を止めて食事を再開した。

奇妙な構図だ、とその作業の合間に思う。

母親と自分はというのは常だ。ちなみに大抵朝この場に父親と居合わせることはない。

記者はネタという獲物に常に目を光らせなければならない。一家の団欒も犠牲にして。

久留美はそれに不満を持ったことなければ、然程気にしたこともなかった。

仕事に理解がある、というよりは、その必要はないと思っていたからだ。

ちなみに、この頃は朝食をとる際に母親とまともに会話を交わしたこともなかった。

単純に、話題がなかったからだ。

正しくは、食卓の話題として持ち出せる話題が。

久留美が普段していることは、人を貶める為の情報収集。

或いは、その目的そのものを行為としている。

それが真っ当なことなどと、どの口が言えるだろうか。

けれど、母親はきっとそれを知っている。

情報収集の際に度々会うあの口うるさいが良心のある叔父が、義姉である母親に告げ口をしないわけがない。

だが、母親は久留美に何も言わない。

咎めることも。

責めることも。

何も知らないように振舞って、久留美を野放しにする。

いかなる時間帯に出かける際にも、一言添えるだけだ。

朝も。
休日も。
夜遅くであっても。

ただ一言――――――『気をつけてね』、と。

いつからこうなったかすら、今の今まで考えることはなかった。
久留美にとって、この崩壊しかけた家庭環境は苦でも何でもなかっただからだろう。
何より、そう追い込んだのは他ならぬ久留美本人だった。
心は家庭を求めてはいなかった。
この心が求めていたのは――――――

「久留美」
「ふぇ？」
「肘、当たるぞ」
「え――――」

思わず動かした。
案の定当たった――――――その傍にあった味噌汁に。

「きゃぁぁぁっ！」
「あー、何してんのこの子は……」
「おばさん、布巾は」
「そうね。ああ、大変。急がないと――――――床が汚れるわ」
「そうですね。急がないと汚れてしまいます――――――床が」
「既に引っかぶった私はぁぁぁぁ！？」

まるで久留美など見えていないかのように後始末に取り掛かって

いた二人は、くるりと揃って振り向き、

『自業自得』

「何でいつの間にそんなにシンクロ率高くなってるのよ！？」

突っ込まずにはいられない理不尽さに噛み付く久留美は、まだ気づかない。

この瞬間、己の心に絶えず存在していた日常への疎みが僅かの間でも立ち退いていることに。

あれほど避けていた家庭の中に、自分が今いることに。

こんなにも賑やかな朝は久し振りであることに。

今日というこの日が生涯忘れざる記憶となることに。

今は、まだ――――気づくはずがなかった。

◆◆◆◆◆◆

久留美は今朝の夢を思った。

あの所詮は夢である、と済ますには意味深すぎる夢を。

夢を構成するパートは二つ。

前半の一つは意味不明。

後半は――――――身に覚えがあるどころの話ではない。

……何で、今更思い出したんだろう。

もう六年も前のことだ。

六年前に、遭遇した出会い。

偶然に偶然を重ねた――――『出遭い』だった。

……”思い出した”……は、違うかな。

思い出す程度の思い出だったら、自分は今こんな風に生きてはいなかっただろう。

思い出すわけがじゃない。

――――今までずっと、忘れたことなんてただ一度すらもなかったのだから。

……そうよ、だから。

だからこそ今の己がある。

日常を疎む己がある。

非日常を求め、焦がれる己がある。

全てはあの日々があったから、それらが存在する現在（いま）があるのだ。

「……【先生】」

口から漏れたのは、教員相手に呼ぶのとは思い入れの度合いが違う呼称だ。

本当に尊敬の念を込めて呼んでいた、ただ一人に対しての。

魔法使い。

あの日出会った非日常のそのもので、その欠片たる人。

……六年、か。

改めて認識した年月は決して短くはない。

同時に、それは未練を引きずり続けてきた時間を示す数であった。

捨てきれず、抱えて――――追いかけ続けてきた。

……客観的に視ると……『転げ落ちてる』っていうのかな。

あの日まで、自分は普通の子供だった。

年の割には冷めていて、何にも興味を示すことなかったという点を除けば。

今思えば、あの頃は毎日を退屈に思っていた。

ただ過ぎていく日々。

そこには感動も何もない。

その中で周りが楽しそうに振舞う理由が理解できなかった。

このまま何にも執着することもなく、年をとって大人になっていくのか、と子供らしからぬ諦めと達観を抱いていた。

可愛くない子供だな、と己の事ながら思い、久留美は苦笑する。

そんな子供が今は――――――

……裏の世界踏み込んで、他人の裏の顔やらプライベート引っ掻き回して情報収集なんて趣味を持ってる嫌われ者。

人間ってこうも変わるものなんだ、と比較してその落差に笑った。

出会い一つに振り回されて、こんな風に人間は簡単に落ちて変われる。変わってしまう。

あの日、約束を破られて置いていかれた子供は。
泣いて恨んで悔やんで悲しんで――――諦めきれず、追うことにした。
忘れることを拒んで、思い続けること選んだ。
目の前からいなくなっても、対象がこの世界に存在していることは確かであることに気づいた。
再び出会うには、この日常の中から抜け出さなければならないと理解した。

だから、考えた。
自分なりに日常からの脱出を思考した上で、手に取った手段。
他人の秘密は最も手っ取り早く危険へと近づける方法だった。それは父親の仕事からわかることだった。
そうして、六年。
その間にいろいろなものが己の手に収まった。
情報源。収集手段。人間の中身の薄っぺらさ。人間を破滅させる方法。その醜悪さ。他人からの疎遠。恨み。警戒。恐れ。

そういった不必要なものを手に入れることで、大分日常との距離は開いた。
けれど――――――目指すものへは近づけなかった。
それなりの危険と遭遇してきたと思う。
それでも、出会えない。

あの人に――――――非日常に、まだ出会えない。

夢の中で、何処にいるのと叫んだ。

2012

夢だけではない。きっと、現実でも常に叫んでいる。心の何処かで。

あの日、何処かへ去ってしまったあの人に向けて。

……そういや、最近なんかはもうマンネリ感があったんだっけ。

当初こそは、危険の中の非日常の実感にゾクゾクするような満ち足りるものを感じていたが、慣れというものは恐ろしい。

重ねるごとに満足感は薄れていき、逆に満ち足りなさだけが募っていった。

そして、海に来て浅瀬で遊んでいた子供が、飽きて奥へと歩を進めたくなるような欲求の増長。

しかし、それとは裏腹に欲求が晴らされることもなさければ、満たされることもなかった。

限界という壁にぶち当たった。

いくら藻掻けど、それ以上深くへ潜ることはできなかった。

そういえば、ちょうどそんな諦めと停滞に妥協しかけていた時期だった。

彼女――――――終夜千夜が目の前に現れたのは。

それはまるで、あの時の再来のように。

脳を揺さぶるような衝撃と、心臓を鷲掴みにされたような息詰まりを覚えたあの放課後の一瞬と共に。

まもなくして遭遇した、念願の非日常。

極限の死を前に覚えた恐怖の中に確かに存在していた満足感と興奮。

そこには、かつて経験した優しさも夢も希望に何もなかったが、紛いもなく日常と分断された別世界だった。

2013

最後のチャンスだと思った。
だから、与えた本人に奪われかけた時、必死で食らいついた。
あれだけむきになったのも、かつてのトラウマがあってのことだった。
もう、置いていかれたくない。

……今思い返すと、みっともないにも程があるけどね。

無我夢中とは恐ろしい精神状態だ。
我に返った後に募るやってしまった感はかなりクる。
だが、そういった結果として今があるわけで、

……結果オーライっていうのかしら。

今のところ、あれ以降は何のアクションもない。
猟奇事件は既に人々の記憶からも、久留美の記憶からも過去となって薄情なことに薄れようとしている。
例えそれが上辺だけだとしても、再び訪れた平和な日常。
非日常には及ばないものの、騒動にあふれる日々。
あの一件の後でわかった、千夜の他にも非日常の住人が溶け込んでいたという事実。

喜ばしくないはずの日常は、非日常に及ばないものの久留美自身に充実した日々を与えていた。
何故、とここで疑問を得る。
しかし、ソレに対する解答は思いのほか早く出た。

……私、前より日常（ここ）が嫌いじゃなくなってる……？

気づいたのはそれだけではなかった。
最近は先日のあの一件の特例を除いて、他人のプライベートの情報収集をしていない。
そもそもあの特例は何の為に動いたのだっただろうか。

……守る為。

己の利益や保身の為ではなく、他人を守る為に。
初めて――――日常を守る為に動いたのだ。
いつの間にか、ただ一人がいることを当然として受け入れていた日常を。

こてり、と久留美はテーブルの上に頭を置いた。
首の向きは横。
向く先は――――キッチンの傍らの出入り口から見える廊下。
久留美は見えない場所にいる千夜を視た。
着替えを持たずに来た彼女は今、母親の手によって出かける服のコーディネート中だ。
久留美は既に自分でそれなりの服を選んで済ませており、今は待つだけの身となっていた。

暇を持て余す久留美は、ただ思考の海を漂う。

……そういえば、何でだっただろ。

まだ解明しきれていないにも拘らず、新たな疑問の浮上。
それは、やはり己のした行為に対してだった。

……何で、千夜だったの？

事実として確認した非日常を抱える人間は、何も彼女一人だけではなかった。
もっと楽に付け入る人間はいたはずだ。
例えば、都築七海などは最も安易に近づくことが出来るガードの緩いタイプだった。
寧ろ出会って間もない面識も大してない相手を選ぶところに何の利点があったのだろうか。
そうした疑念を経て、まずは理由探しが始まる。

……助けてくれたから？

これに対し、出る答えは『否』だ。
あれはその場の展開によるものである。
はっきり言って拘るたびに久留美自身はロクな目にあっていない。
そもそも神崎に目をつけられたという点で、拘るのを止めるべきだった。
情報の力が通じないほどの脅威を奮う暴力という例も一概に存在するのは、久留美も承知していたし、認めていた。
いらぬ火の粉を被る前に、他の獲物を狙うべきだった。
結果、少々とは言い難い火傷を負うこととなったが、

……それでも、私はこうして千夜にこだわってる。

まだ彼女が非日常の人であると知る前だ。
危険だとわかっていたはずのなのに、自分は二度目の接触を千夜に図ろうとした。

……二度目？

違う、と違和感が修正を訴える。

そうだ、とすぐに記憶がソレに応え、

「……そっか、三度目よね」

出会った時を入れれば三度目だった。

千夜が転入してきた朝。

教室でクラスの人間の前で紹介される前に、久留美は千夜に会っていた。

二年生最初に蔵間のびっくりしている顔でも見てとってやろうと、廊下で階段の死角に隠れていたのだ。

意表をつく為に飛び出した時――――――そこに千夜はいた。

蔵間の隣で、彼に連れられていくところだった。

飛び出した瞬間は彼女の存在に気を取られて、シャッターを押すのを忘れた。

当初の目的をその瞬間は忘れてしまうほど、思わず見入った。

この世にはこんなに綺麗なものがあるのか、と。

顔立ちとか容姿という単純なものではなく。

まっすぐに自分を捉える眼の奥の光が、とてもとても――――――綺麗だったのだ。

あの時、自分がどんな気分だったか。

久留美は考え、曖昧さが抜けない答えを出した。

……トレジャーハンター。

あるかどうかもわからない秘宝を探して、試行錯誤した上でよう

やく宝を見つけ出した。

「……なんだそりゃ」

意味がわからない。
もっとわかりやすい例えはないものか。

また、考えた。

「……一目惚れ、とか……」

今度の応えは、ポッと泡のように水面に浮かび、弾けた。
パァン、と耐え切れないかのように。

「ってぇっ!?　ちょっ……タンマ!!」

ガバッとテーブルの上から頭部を起こし、頭を振る。
ふとした思い付きは、冷静になって客観視するととんでもない内容だった。

「ありえないっ……ていうか……ヤバイ、でしょソレは」

だって相手は今となっては彼氏持ち。
そもそも同姓。
うっそ、そのケあったんかい自分。

グルグルと久留美の脳内を混乱が渦巻く。
軽い恐慌状態に陥った久留美は、気持ちを落ち着けるべく冷蔵庫の前に立ち、麦茶を引っ張り出した。
コップに注いだ冷たい麦茶を一気に煽り、一息。

「……もう、駄目。考えすぎて、気持ち悪い」

物思いに耽るのはどちらかといえば好きだが、限度を超えるとすぐにこうなってしまう。

これから出かけるというのに、自分は何をしているのだろうか。

こんなことを一人で悶々と考えて。

脳みそが酸欠になるまで考えて。

――――千夜のことを、思っていた。

「……ギブ」

これ以上は本当にヤバいくらい、限界だった。

閉じた冷蔵庫の扉に、額を押し当てて突っ伏す。

思考活動の許容量の限界を超えた脳は、それでも一つの答えを最後に出した。

――――千夜が現れて、再び自分に変化が訪れている。

以前のあの時とも違う変化。

ひょっとしたら、それよりもずっと大きな変化。

自分が跡形もなく変わってしまうような――――。

2019

「――――ん？」

そこで、久留美の思考を中断させる事象が起きた。
携帯の着信メロディ。
ズボンのポケットの中で軽快に世にも奇妙な物語のテーマ曲を流すそれを取り出す。

誰だ、と確認するまでもなく咄嗟に出た久留美は、やはりその時点では気づいていなかった。

――――それが、今日の予定を大いに狂わす尖兵であることに。

2020

【壱百壱拾参】　思考の狭間（後書き）

久留美の一人悶々劇場が半分を占める今回。て、手抜きじゃないんだ！

ブログにて登場人物のプロフィールを更新中です。
一応、メインは大きく取り上げていきますが、まだ情報が小出しなキャラは後の方で何人かまとめて一回という感じで出していきます。
一部に少々ネタバレを含んでいきますのでー。

2021

【壱百壱拾四】　交わらない母娘　（前書き）

同じ想いを抱え、交わらない道を往く

2022

【壱百壱拾四】　交わらない母娘

五十三分。ほぼ一時間。
それが、千夜が着せ替え人形と化して過ごした総時間だった。
着替えにここまで時間を注ぎ込んだのは、初めて買ってきたブラジャーを全種つけた時だけだろう。五種類。一つつけるのに、五分はかかった。
そして、
「よっし、完成だわっ！」
こんな状況下に千夜を置いて、一人あくせくと動いていた久留美の母――――久美子は一時間の経過まであと七分弱となったところでようやく満足げに作業終了の声をあげた。
千夜はホッと肩の力を抜いた。
心底に。
「でーきた、出来た！　さ、鏡見てみて」
余程完成図が気に入ったのか、久美子は上機嫌で千夜を全身鏡の前に立たせる。
正面向いてそこに立つことになった千夜はその完成と直面することになった。
シンプルなデザインの黒のテラードジャケット。その下はコントラストをつくるような白いハイネック。そして、下半身には赤のチェック柄ボックスプリーツミニスカート。
これといって派手というわけでもなく、地味というよりは落ち着

いたという表現が当てはまるコーディネイトであった。

「終夜さんはこういうシンプルな感じでもちっとも地味にならないわね。素材が良いとどんな服も似合うからオバさん迷ったわぁ～」

「あの、良いんですか……服なんてお借りしてしまって」

「いいのよぉ。せっかくの休日のお出かけに制服なんて勿体無いわよ。高校生ってものはね、平日は慎ましく学業に励んで、休日には溜め込んだものを一気に開放しちゃわないと。だからオシャレしなきゃ。普段とは違うってことを意識するために」

「はぁ……」

なんとなく説得力を感じる内容だった。

尚も続く演説を聴きながら、千夜はチラリと目を別の方向へ移した。

辺りそこら中の床。その上には満遍なくとはいかなくてもポツポツと積もるように今まで着ては脱いでと放置されたそれまでの衣服がだらしなく落ちていた。

そして、その服の数と己の疲労感を頭の中で並べてみた。

着替えとはこんなに疲れるような作業だっただろうか、と。

……女というものは、これが普通なのか。

その気が知れないな、と千夜はその心中を理解りかねた。

疲れを伴ってまで着替えに手間をかけて、一体何の得があるというのだろうか。

女。自分の中のそういった半分は彼女らと同じように思うことがあるのか。

脳内で疑問を増やしていた千夜は、ふとある一点に視線を留めた。

それは床の上に散らばる衣服の中にある――――1枚のワンピー

スだった。
女性が着ることを一際アピールしている作りのそれに、千夜は何故か視線に釘を打たれてしまったように動かせなかった。

「……ん？　終夜さん？」

千夜の意識がこちらから逸れていることに気づいたのか、久美子は千夜の顔を覗き込みその視線の行き先を追った。
我に返った時は手遅れで、

「あらあら、やっぱりオンナノコはこういうポイのが好きなのかしら。言ってくれればいいのにー」
「いえ、そういうわけじゃ……その」
「んー？　なになに？」

追求を匂わす口調ではないが、言い逃れさせてくれる様子もない。あからさまに突っ撥ねることもできないから、こういう相手は苦手だった。
仕方なく、千夜は穏やかな尋問に屈し、

「……男っていうのは……そういう方が、好きなんでしょうか」
「どゆイミ？」
「女は女らしく……ああいう服を着ていた方が、男は喜ぶんですかね」
「……彼氏？」

察しの良さは娘以上だった。

「か、れし……まぁ、そうですよね。はい、そんな感じです」

久留美に言われた時もそうだったが、それはまだ慣れることが出来ない響きだった。
拒否反応ではない。
ただ、しっくり来ないだけだ。
急に女としての立場が強くなったからかもしれない。

だからこそ、こんなことが気になるようになったのだ。
女としての服装に。
それに対する『あの男』の意識に。

「私はあまり服にこだわりとか執着がないもので……でも、こういう服は自分で着るとあまり好きじゃないので。……でも、今更な感じなんですが……最近気になるんです。着ている服に対して、あいつに何と思われているのかどうかが」

最近というのは嘘だが、あとは本当だ。
他人にどういわれても気になることはなかった。
服なんてこだわる理由もなければ、興味も無かった。
身体が女に偏るようになってからも、それは変わらない。

けれど、ふと今になって――――

「……彼氏さんは何て言ってるの？」
「え」
「あなたにどんな風にして欲しいって」

どうしてほしい。
あの男は何と言っていただろう。

千夜が思考した瞬間に、過ったのは記憶からの反響によって響く

言葉だった。

――――お前はお前らしくあればいい。

「私は私らしく……」

「彼はそういったの？」

「……はい」

嬉しかったのだと、千夜は改めてその言葉に対して己がどう思ったのかを確認した。

だが、反面ではそれでいいのだろうかと、腑に落ちずにも思っていた。

気遣われただけで、本当のところでは蒼助の心は別の望みを抱いていたのではないか、と。

「――――じゃぁ、それでいいんじゃないかしら」

「は……？」

「だって、彼氏さんはそういってくれたんでしょ？　終夜さんは終夜さんのままがいいって。そういうこと言ってくれる人ってなかなかいないわよ？　人間って何処か夢見がちなところとか理想みたいなものがあるから、他人にそれを押しつけずにはいられないものなの。よくあるでしょ？　付き合ってみたら思っていたよりも違っていたとか言って拗れて別れちゃうって話。もちろん、彼氏さんにも実際の終夜さんとは違う終夜さん像があったと思うのよ。でも、それに食い違いがあると理解った上でそう言ったのなら……そのとおりにすればいいんじゃないかしら」

床に散らかした服を拾い畳みながらの久美子の言葉を聞きながら、

千夜は一昨日の夜の状景を浮かべ、どんな状況だったかを思い起こした。

みっともなく泣いて、弱音を吐き散らした自分。
蒼助の理想を崩したかもしれないあの一時。
あの時、蒼助はどんな顔をしていただろう。
失望していただろうか。
思い描いていたものとは違ったであろう己の姿に、拒絶を示しただろうか。

否。
彼はただ、何処までも己の弱音を受け止めて抱きしめて。

言ったのだ。
お前はお前らしく、と。
それを自分は望むのだと。

「……私は、それでいいんでしょうか」
「いいんじゃない？　誰だって、自然のままの方が素敵だと思うの。個性ってそういうものなんじゃないかしら」
「……」
「……まぁ、終夜さんにその気があるというのなら」

久美子は千夜の伏すような沈黙に対し、何を思ったのか化粧台の前に立って、

「えっと……確かここに……あ、あったあった」

引き出しの中を探り終えると、何かを取り出す。

すると、千夜を向いて、

「こっちおいで」

その手招きに対し、怪訝な様子を湛え言われるがままに歩み寄ると、椅子の上に座らせられる。

化粧台の鏡の前。

向かう合うのは、鏡の中の己の上半身だ。

その後ろで、腰を屈めた久美子も映り、

「じゃーん」

「……それは？」

久美子は、先程はなかったものを手にしていた。

それは髪留めだった。

銀色のバレッタ。一枚の羽根を象ったそれには、小さなターコイズが三粒ばかり埋め込まれていた。

両手で挟むように持ったそれが、引き出しから探り取ったものなのだろう。

「これはね、オバさんが若い頃に使っていたやつのよ。会社に入って初めてもらったお給料で買ったの。出来るだけ長持ちして、ちょっとお値段が張って、それでいて少しオシャレな感じなのを選んで――――コレ」

短くするようにしてからは使ってないけどね、と付け加えると、久美子は前を向いてほしいと言った。

「少しずっとしててね」

言葉の後に、千夜は髪の合間に滑り込む指の感触を感じた。
丁寧な、女性の手付き。

「昨日はポニーテールにしてたわね。いつもそうなの？」
「……邪魔にならないように」
「そう。じゃぁ、邪魔にならないことを考慮して、今日は少し変えてみましょ」

顔を横に流れる髪を丁寧な手付きでスイスイと掻き上げては、後ろに持っていく。
他人の髪を弄り慣れている。
千夜にそう思わせるゆったりと着実に、作業が進む。

「……ひょっとして、久留美のあの三つ編みも……いつも久美子さんが？」
「んー、まあね。あのコぶきっちょだから。朝ギリギリに起きてきてご飯せかせか食べている間にやれっていうのよ。全く……言うだけなら簡単よねぇ？」

ブツブツと紡がれる言葉そのものは文句だが、まんざらでもないのだと千夜は察する。
距離の開いた娘との数少ない交流。
こんな風に言うのは、甘えられる嬉しさを他人に話す際の照れ隠しであるが故なのか。

不器用なのだな、と千夜は心中で思い、

「いいんですか。これは本当なら久留美に……」
「でしょうね。でも駄目よ」

どうして、と問うと、

「だって、買って来た服も全部オシャレなんて興味ないってってつっぱねられちゃうし。今更、髪飾りなんて……ねぇ？」

軽い口調。

それでも千夜をハッとさせるには十分だった。

自分が着ている服も、床の上の無数の服も。

それらが本来は誰に贈られるはずだったものなのか。

それが何故、久美子のクローゼットにしまわれていたのか。

そして、このバレットも――――。

「あの馬鹿娘も好きな人が出来れば、ちょっとは変わるかしらねぇ」

独り言のような問いかけに、千夜は応えなかった。

◆◆◆◆◆◆

着替えはようやく終わり、久留美がいるであろうリビングへ久美子と足を運ぶと、

「あーもう、わかったっ！　わかったわよ……午前中だけだからね？　……それじゃぁ、今からそっち向かうから」

当の待たせていた相手は、携帯を片手に何か話し込んでいた。

それはちょうど良く、千夜と久美子の合流と共に切られ、

「あ、千夜。悪いんだけ、ど……」

「ん？　どうした？」

振られかけた話は途切れた。

出迎える体勢で向き直った久留美の顔は、何故か千夜の姿を確認するなり強張った。

「……その服……って」

「あ、これは……」

「――――――どう？　似合う？　お母さん、センスあるでしょー」

気まずい空気の中を、強引に混ぜ返すように久美子は間に入ってきた。

千夜の両肩に手を置き、後ろから寄り添うように立つと、

「だ～れも着てくれなかった服がこんなにフル活用。服も幸せよね、こんな風に着こなしてもらえて。……ねぇ～？」

明らかな含みのある言葉。

どう取っても完全な挑発だった。

間に挟まれた千夜は、気まずさを一層高めながら久留美を見た。

「……っ、そうね。似合ってるじゃん、千夜。良ければ、それあげるわよ？　……どっかのお節介なオバさんが、頼んでもないのに勝手に買って来ては着ろ着ろうるさく押し付けてくるだけだったし」

「オイ、くる……」

「ですって、終夜さん。久留美もああ言ってることだし、帰りはあの中から好きなの持って言ったら？」

「く、久美子さ……」

気が付けば、二人の言い合いに挟まれていた。
千夜は、己をネットとして球の打ち合いのようなやりとりを始めてしまった元凶たる久美子を振り向いた。
その際に、その後頭部が久留美に向けて露になり、

「――――――っ、そのバレッタ……」

千夜の髪留めを役を担うそれを見つけると、久留美の顔は険しさを増した。
げ、と千夜が己の踏んだ地雷の威力に内心舌打つ傍で、

「ん？　どーかした？　久留美も似合ってるわよ。あんたが買って来たそのボーダー柄のカットソーとデニムパンツ」

そ知らぬ顔で微笑うのは、この状況を作り出した策士だった。
久留美は母親のポーカーフェイスから忌々しそうに顔を歪めると、目を逸らし、

「……別にっ！　千夜、行く前にちょっとトイレ行って来る」

憤慨を滲ませる足取りで千夜と久美子の横を通り過ぎて、出て行った。
妙な緊張感はなくなったが、後味の悪さだけはしっかりとその場に残して。

「……久美子さん」
「あはは、ごめんねぇ」

ジトリと半目で怨みごもった視線を向けると、久美子は両の掌を合わせて謝った。

「何で、あんなこと……」

「んー……そんなつもりはなかったのよ的な気持ちとは裏腹に口がつらつら～っと……普段の溜まってたものを」

「……鬱憤溜まりかねて、ですか」

「終夜さんったら、話がわかる～」

自分がわかったところでどうしようもなかろうに、と千夜は肩の力を抜くと共に溜息を吐き出した。

その様子に、

「……怒った？　あなたをダシに使ったこと……」

「別に怒ってはいません。ただ、少し呆れています」

「素直じゃない人間は子供の時も大人になっても変わらないってことじゃないかしらねぇ」

「……それでも、ダメですよ。ちゃんと言わないと」

本当に言いたいことは、あんなことではなかっただろうに。

そう無音でぼやきながら、千夜は久留美の表情を思い出す。

自分の身につけるものを目にするのは、初めてではなかった様子だった。

それもそうだ。

元々、これらは娘である久留美に贈られたものだったのだから。

ショックだったのだと思う。

いらない、と突っ撥ねておきながらも、それをあっさりと自分以外の人間に着させてしまうとは思いもしなかったのではないだろうか。

第三者視点でしか見えないものはあるのだと、千夜はここにきて実感した。
当人たちには見えていないものは、千夜には見えていた。

久美子が思っているよりも、久留美は離れていない。
久留美が思っているよりも、久美子は蔑ろにしていない。
寧ろ、互いが互いに相手を思い、求めてすらいる。

それであるにも拘らず――――彼女らは平行線を行く。
すれ違い、相手の思いに対し見当違いの認識を受信している。

両者の状態を見えている者としては、それがなんとも歯がゆい。
千夜はそこにかつての己の姿を見た。

そして――――

「いつでも言えることです。――――だから、早く言わないと駄目ですよ」

その気にさえなれば、いつでも口に出来る。
そう思っていた頃が自分にもあった。
いつか、いつか、とそうやって先延ばしにして、

「……でないと、いつでも言えなくなります。言えなくなって、後悔します――――私と母のように」
「終夜さん……」

母親を出すと、久美子の表情に変化が表れた。
そういえば、昨日の食卓で両親の喪失を話していた。
嘘はついていない。少なくとも、『母親』のことに関しては。

「私も貴方がたと同じことを思っていました。そして、手遅れという結果を迎えて、今の私がいます。余計なお世話かもしれませんが、貴方たちはそうはならないでください。お互いがまだ、傍にいるうちは大丈夫です。だから、今のうちに出来るだけ早く言ってくださいね」

かつての自分たちに似た親子を目の前にして、千夜は己の奥で根付く悔恨による痛みに苦笑という顰めを表情に出しながら、

「……まだ、間に合ううちに」

願った。

もう二度と叶わない、自分たちのようにはならないで欲しい、と。

まだ手遅れではないもう一つの親子に対して。

［壱百壱拾四］　交わらない母娘　（後書き）

最近寒くなってきましたが、一応元気です。
そして、やっとこさ更新。
次回のそのまた先で、ようやっとデート（？）スタートのなのですが、この展開でよいものかと若干迷いアリ。いや、理性と欲望という意味で（笑）
もう、最近着々とお姫様の階段を上っていらっしゃる千夜を久々に暴れさせたくてしょうがなくて。
今回見る限り振り回されているこの頃をどうにか挽回させてやりたい。

つーわけで、次々回は千夜のターンだ！
次回に言うべきことだろとかいうツッコミなんてこの際気にしないぞ、天海は。

【壱百壱拾伍】　自他の否定（前書き）

理解は有り得ない
必要も無い、と

【壱百壱拾伍】　自他の否定

空間があった。四面を全てコンクリートの壁で構成された至ってシンプルの髄を極めるばかりの部屋だった。
そこには二つの存在がある。
一つは白髪の巨男。厳しき顔は普段それに更に険しさを増して、もう片方の存在を見据えていた。
そして、その片足は――――何故か血塗れていた。

「っ、おっさ、ん……さぁ……」
「何だ」
「もうちっと……マシな起こしか、た……なかったん？」
「無いな」

即答かよ。
その気はないとばかりの言い切りに殺意を芽生えさせつつも、蒼助は無視するには強烈過ぎる激痛の発生源に気を遣った。
二の腕から先が千切れてなくなっていた。
その千切れた断面からはダクダクと赤黒い血が流出し、地面を汚す。

「ひでぇよ、オッさん。俺ぁ昨日の二時過ぎまでずっと一人鍛錬してたっていうのに、九時ぐらいまで寝こけてたからって何だよこの扱い。いきなり寝室から寝てる人間引っ張り出して着いたら足で腕を踏み千切るなんてよ」
「騒音。痛み。眠りの中にいる者はいずれにせよ不快感によって目を覚ます。それに倣って手を打ったまでのことだ」
「じゃぁ、俺はこの先あんたに起こされるたびに代償に腕一本が必要ってか……笑えねぇぜそのジョーク」

「ジョークではない。世俗の小童どもの薄汚い言葉に則れば――――本気と書いてマジだ」

いっそう性質が悪いじゃねぇか、と蒼助は会話の続行を切り捨てる。

寝不足を言い訳にベッドへ戻らせてもらえないのは、元より十分承知の上だった。

幸いというべきなのかは微妙だが、眠気は痛みと衝撃的な出来事が降りかかったことで、見えないどこかで飛んでいってしまった。

腹を括ろう、と決め込んだ蒼助は、

「わーった……わかったから、あと三十秒だけ俺に時間をよこせや」

要求に対し上弦は、ふん、と鼻音と共に腕を組んで、仁王立ち。

罷り通ったのだと理解した蒼助は時間が来る前にするべきことをしようと、座り込む己の傍らで出来上がった血溜まりの中に力なく横たわる――――かつての体の一部を見た。

ラッキーだった。

いつものように千々の肉片に変えられてしまうところのそれは、今回は原型を保っていた。

これならば、と蒼助は意気込んで、

「――――――」

意識の集中と共に腕の断面が熱を持ち出す。

顔を顰めながらも、それが現段階では上手くいっている証拠であることを知っている蒼助は尚も集中を高める。

血液と共に循環路を失った霊力が断面に篭っている。それによって傷ついた細胞の活性化が起きているのだ。

息を吹き返す細胞。まずは第一段階クリア。
第二段階としてイメージ。己の織り上げたいものを脳裏に固定するための。
ちらり、と血の気のなくなった腕を視界の端に移す。それにまだ繋がっていた頃の結構の良いそれのイメージを被せる。
イメージの固定の完了。

そして、蒼助は必然と起きるであろう激痛を覚悟の上で損傷した腕を一気に力を込めて力ませた。

「――――――っ、っ」

痛いのか。
熱いのか。
それらの苦痛の類たる感覚を歯を食いしばって耐える。

それも一瞬で、蒼助は血と共に己の霊力が噴き出る気配を感じて脳裏のイメージにひたすら意識をしがみつかせた。

すると、

――――――ズチュンッ！

生々しい粘着質な水音を立てて、断面から突き出るように生えるものがあった。
それは――――――骨だ。
白い身に血に塗ったそれは生まれたての胎児を彷彿させる。
しかしそれも僅かな時間の中のお披露目に終わった。まるで隠すかのようにビュルルッと無数の筋のようなものが細い触手のように後を追って生え、骨を芯とするように幾重にも巻きつく。

そしてそれは肉の固まりとなり、やがて腕の形をとり、その先の手の形も形成していき――――

「……は」

神経や筋肉が剥き出し腕の上を浮き上がるように現れた皮膚に覆われたところで、蒼助は一息を吐きだした。

作業の終了――――腕の『再生』を終えたことへの安堵だった。

「……ほう。もう己の意思で再生をやってのけるようになったか。小憎たらしい」

「いつまでもその度に気絶してるわけにもいかねぇからな。時間が勿体ねぇ」

「ふん、良い心だけだ。こちらも暇を持て余すことがなくなって助かる」

ギュッギュッと己の手の動かして感覚と調子を確かめていると、上弦から殺気と闘気が一気に噴き出るのを感じた。

戦闘開始の前兆であった。

だが、

「……なぁ、ちょっと一個聞いて答えてくんねぇ？」

「戦いを始める前に言葉を挟むとは無粋な輩よ。……何だ」

文句を言いつつも聞いてはくれるらしい。

真面目なのか寛容なのかイマイチ断定できない男である、というのがここ数日で蒼助が上弦に抱いている認識だった。

だが、今はそれにつけ込むことにした。

「……アンタは、――――――誰かの為に死にたいって思ったことあるか？」

昨夜が胸に蟠りとして残る疑問をぶつけられた上弦の反応は、まずはその脈絡の無い唐突な質問への唖然だった。

◆◆◆◆◆◆

一つの疑問は戦闘態勢を解き、状況を変えた。

向かい合っていたはずの蒼助と上弦は、いつの間にか横一列に並び座っていた。

そして空間に施された術式はまだ発動していなかったせいで元の質素な空間は、いつのまにか――――何故か竹林と化していた。

自分ではない、と蒼助は確信していた。

となると――――答えは一つしかない。

「……オッさんってカミさまだけど、成り上がりなんだっけ？」

「それが如何した」

蒼助は真顔で聞いた。

「……神格上がりする前、パンダかなんかだったのか？」

「あれほど頭を吹っ飛ばしても貴様の脳細胞はちっとも増えんのか！！」

叱咤が飛んだが、拳は飛んでこなかった。
一度オフになると、短気なように見えて割と我慢強い男であるという見解も、最近得たものだった。

「……落ち着いた空間を求めた結果、こうなった。閑静とした風景といえばこれだと思ったのだ……それに、中国の武道の探求者とはこういったところで精神の統一をはかるというではないか」
「あんたこの現代が嫌いみたいだけど、十分現代にかぶれてるぜマジで」

その知識の出所は香港映画あたりか。
無断で金を遣ってＤＶＤを借りてくるのは、黒蘭だけではないらしい。

「ま、まぁよいであろう。それより、先程の問いかけだがな……」

上弦は面倒見の良い男だった。
悪く言えば、苦労性。
嫌っている相手の相談もこうして跳ね除けないあたり、きっとずっと奥に根付いているある種の反射的なものなのだろう。

……潜在的なオカンってところか。

上弦という存在に対する追加事項候補を脳裏に控えさせつつ、蒼助は上弦の言葉に耳を傾ける。

「見に覚えはあるかと問いかけたのなら……ある。嘗ては、そう思って生きていた。それが当然のことと己が心に定めてな」
「……かつてってことは、今はどうなんだよ」

「……三途と朱里と……何かあったのか？」

噛みあわない会話が発生した。

逸らすつもりはない、とわかったので、とりあえず己の問いは置いておくことにした。

「……まぁ、それに関して……いろいろ」

「貴様にはわからぬだろうな。あれらのあの気持ちは」

「――――っ」

まただ。

昨夜の不快の発言の出現に、蒼助は己の顔が不機嫌に強張るのを感じた。

そんな蒼助の不快感を感じ取ったのか、

「そう悪くとるな。わからないことが悪いと言っているわけではない……わからなくていいのだ、あんなもの」

「んなこと言われたって……それで納得がいくもんでもねぇだろ」

「確かに。本人たちの満足や納得で済む問題でもあるまい……しかし、他者にいくら否定されたからといって曲げることも出来ぬのだよ。己の間違いは己が気づくまで納得がいかぬものであるのだからな」

「……オッさんは、気づいたってことか？」

かつてそうだった、と上弦は先程言った。

ならば、少なくとも今は違うということだ。

その転機が、己の間違いへ気づいたことだとすれば、話は繋がると蒼助は脳裏で考えを組んだ。

沈黙。

肯定とも否定ともいえないそれが三十秒ほど続いて、蒼助が焦れ始めた時、

「――――今より遥か遠き日、私は人であった。そして、人として持っていた私の全てを……奪われた」

それは、とても楽しい思い出を語り出すとは思えない、苦汁を吐き出すような声色の重さだった。

眼差しは遠く、まるで独り言をただポツリポツリと漏らし始めるかのように。

蒼助の存在など、無いかのように。

上弦は語り始めた。

「小僧。貴様にはあるまいよ。全てを奪われることなど。お前はあると言おうと、私は否定しよう。お前は知るまいよ。本当の意味で、何もかも奪われ、壊されることなど。己の価値観で己を語るな。他者から見れば、お前はまだ全てを失っていないのだ。全ては、な」

見透かすような口ぶりだ。

心ではなく、蒼助という存在を。

否定しようにも、蒼助にはそれを成させる言葉が見つからない。

本能は察し、理解する。

目の前の男は、そうなのである、と。

全てを失くしたことのある存在であると。

「生きていることに何の意味すら感じなくなるほど、私は絶望した。憎しみも悔恨も、あろうとなかろうと……どうでもいいと。生かさ

れたことを惜しく思うほどに。そんなあらゆる生に対する理由を失くし、在るべくして無き存在となった私を……と或るカミが見咎めた」

「……黒蘭？」

「否。あの方にも、縁ある御方ではあるがな。……私は、そのカミによって救われた。いらぬ命なら己が引き受けよう、と私に己の眷属とするための神格上げを行った」

そして、私は不老不死のカミとなった。

そこまで蒼助は聞き、浮かんだ言葉を疑問の形にし、

「……死にたかったのに、そんなことされてよかったのか？」

「死にたかった、か。……違うな、小僧。私は死を望んでいたわけではない。……生も死も……己の判断でどうにかしようという気も起きなかった。どうでもよかったのだよ、全てが。絶望とは、流れに身を任せるのに躊躇をなくすことであるのだからな。……故に、誰かにそれを見咎められ、拾われるのは……絶望の淵にいる者にはこの上ない救いなのだ。不要と呼ばれることにまだ残る心は、その否定を求める。それはもう己自身では出来ない。だからこそ、他人に求めるのだよ。他人に不要を否定され、必要と認められることで、その絶望から救われるのだ」

不要。

それは蒼助にも見に覚えのあることだった。

それは他人から主にぶつけられる否定だが、己の心でいくら拒もうと断固としてそれを否定し返す理由がない。

かつて、周囲から不要と言われ続けた自身が、絶望せずに済んだのはどうしてであったのかを蒼助は考えた。

その末、思い至ったのは母親だった。そして、続いて父親と屋敷

の人間達。
　不要という否定に対し、否定で迎え撃った者達。
　自分ではどうにも出来ないことを出来た者達。
そこまで思考を進め、気づいた。

「ああ、なるほどな……他人にしか見えない部分は自分じゃ否定も肯定もできねぇもんな」
「そうだ。己が他人に見えていない部分を振りかざして否定し返そうと、それは他人には見えない上理解されない。かといって、他人に見える部分の否定を否定しようとしても、己には見えないのだからできるはずもない。そういったこととなると己自身と他人は対等ではなくなるのだから不思議なものだ」
「……で、目には目、歯には歯って原理が通じるわけだな」
「そうだ。……貴様、ここにて急に脳細胞の分裂を起こすか」
「うるせぇな。……まぁ、何だ……結局、あんたらは他人に否定され自分ではどうにも言い返せなくて、途方にくれていたところを他人に言い返してもらって救われたってところか？」
「簡素にまとめればそういうことになる」

　上弦のその締めの言葉を区切りに、話は本筋に戻り、

「……カミへと昇華した私が、そのカミに心酔するのに時間はそうかからなかった。一度死んだ身は、彼の為に死ぬことを恐れず、当然の如くそれを望んだ。今度こそは不要として切り捨てられるのではなく、必要として死を求められることを。それが本望であった。そして、何より恐れた。死を恐れるあまりに望まぬ死を主が迎え、再び絶望に落とされることを」

　彼女らと同じだ。
　必要とされるなら喜んで死の中に身を投じる、といった彼女らと。

だが、上弦は今は違うと言った。

おそらくここからなのだろう、と蒼助は身構えた。

彼がその破滅的な自己犠牲陶酔の考えから抜け出せた理由を聞き逃さないように。

「しかし、彼が与えたのは己に尽くすことを命じる命令ではなかった。彼が私に与えたのは……己の最も大切なものを守る役目だった。それが主の望みだというのなら、私は断る理由などないとその役目に徹した。ならば、その役目を果たす為に命を惜しまなければいい事と……だが」

それが、蒼助が待っていた転機だった。

「いつしか、私は死ぬのが惜しいと想いを心の何処かで芽生えさせていた。あれほど必要とされる死を望んでいたのにも拘らず、気が付けばそれを拒む想いを抱いていたのだ。考えた。その理由を。……そして、気づいた。己が腕に抱えているものを見て。

――――それを、役割の為に死を投じることを惜しむほど大事に思うようになっていることに。死ぬ為に生きるのではなく、生きてそれの行き先を見守るために生きたいと」

大事な存在に捧げる意味ある死の為に生きるのではなく、大事な存在の傍で生きたいから生きる。

それが、

「……今のあんたがそうだって？」

「……己を生かすことを前提で他人を生かすことを目的に戦う。それは酷く困難で、身の程知らずの願望だったかもしれぬ。だが、カミとなろうとも、心は願望を生むのだということを認めてからは、

迷いはなくなった。そうなれば、選ぶような他の望みなどないのだから、それを取ることに躊躇はなかった。幸い、よく考えてみればそれほど難しいわけでもないことに気づいた。なにせ、私は不老不死となった身であった……生き残らず死ぬ方が難しいことに何故最初に気づかなかったのか」

はは、と笑う顔は厳つさ満面だというのに、子供のように屈託のない無邪気さが存在していた。

全てを投げ打つほどの絶望を味わった後でも、こんな風に笑うことができる。

目の前の上弦の笑みはそれを証明していた。

「あの娘たちは、おそらく気づくところまでは来ている。だが、まだそれを認めることが出来ないのだろう。喪うかもしれないという、恐れに阻まれて」

笑みを消し、気持ちがわかるとばかりに上弦は同情を滲ませた言葉を漏らす。

眼は己がまだその地点にいた頃を思い出しているのか、遠くを見ていた。

「……わかんねぇな。ゴチャゴチャ小難しく悩んでないでヤリてぇことをヤりゃぁいいのによ……」

「わからぬ、か。まぁ、それも当然といえば当然なのかもしれん……おそらく、逆立ちしようとお前には一生理解の出来ない想いだろうな」

「はぁ？　そこまで言うんなら根拠を……」

「根拠も何も貴様はそういう性質であろうが」

馬鹿馬鹿しい、とでも言うかのように、溜息を付きながら、

「――――貴様という男は、他人の為に死のうなど決して想わないだろう」

まるで決め付けるかのような口ぶりだった。
だが、その言葉に対し拒絶感はない。
寧ろ、

「……そうかもな」
「そうなのだ。それが貴様だ」

曖昧すらも許さない後押し。
なるほど、と蒼助は納得を得る。

この男もまた気づいているのか。
朱里や三途が言った意味だけではなくもう一つの――――或いは、それこそ真の意味でその感情を理解不能と言い切る理由に。

あの女しか気づいていないと思っていた部分に。

「ヒトの枠を外れて長き時を生きていると、人間の本質が視ているだけ見えてくるようになる。出会ってまもないところは同じでも私は彼女らと違い……貴様のそれが見えた」
「……千夜は」
「見えていないだろう。あの方は己に好意を向ける人間には口では何と言おうと甘いところがある。それだけで相手のあらゆる部分に寛容になってしまう。だが、それでいい。汚い部分を探り出すのは私や黒蘭さまが引き受けるのだから」

「まんま過保護の発言だな」
「なんとでも言え。甘やかしたくても甘えてもらえない私が出来ることといえば、この程度のことしかないのだ」
嘆息のような吐息が上弦から漏れる。
しかし、次の瞬間、キリッと表情が引き締まり、
「玖珂蒼助。……私は、貴様が嫌いだ。かつて私が受けた絶望の放ち手たる人間の本質を表すかのようなその身勝手で利己的な有り様……正直虫唾が走ってたまらん」
それは心底から言っていることが、蒼助には嫌というほどわかった。
けれど言葉は、だが、と続き、
「……黒蘭さまは貴様を選んだ。それがどういう意味なのかも理解している。姫さまを救えるのは、私が嫌う人間の本質を宿した者である、と。だからこそ、貴様を選んだのである、と。私の望みは……皮肉にも憎い貴様が叶えるのであろうことも」
すう、と息を吸う動作と共に上弦は地から腰を浮かせ、
「……だから、私は貴様を強くしよう。貴様を、私が居座りたかった役割にふさわしいだけの存在にする為に。私は私の望みの為に」
千夜の為に、といわないあたりが蒼助の心に好感を沸かす。
ここが三途や朱里との違いなのだろう。
あの時感じた不快感を、今は感じなかった。
「……すっかり興が削がれたな。もういい、午前は……貴様の好きにするといい。私の鍛錬は午後から始めさせてもらう」

上弦はそう言うなり、背を向けて蒼助の傍を離れた。
歩みの先には、空間を出る意思と共に出現する空間の歪みがあった。
本当に鍛錬は午後に移すつもりでいるらしい。
願ってもないことだが、蒼助を遠くなりつつあるその背中に言いたいことがあった。
問いという形を成す言葉を。

「なぁ、――――――あんた、ロリコン？」

出口まで二、三歩というところだった巨体は豪快にズッコケた。
目撃し、ああこれは楽しいかもしれない、と思っていると、

「何を言うか貴様！！　雰囲気ぶち壊しではないかこの馬鹿者がっ！！」
「なに剥きになってんだよ。……ひょっとしてマジなわけ？」
「いきなり色魔呼ばわりされてスルー出来る輩が何処にいるか！！」

心外だとばかりに声を荒げる上弦は、一度静まり、

「……貴様は、愛情そのものをその身に知ったことすら最近だったか。何だ、この既視感は。大昔にこんな質問を受けてこんなリアクションをやった気が……」
「どうでもいいよ。つか、実際のところはどーなんよ？」

ニヤニヤと答えを待つ蒼助に、上弦は再び溜め息づいた。
今日の中で一番深く、重く。

「……よく聞け、この無知が。情が男女のそれのみと思うな。家族の情、或いは友人の情……細かく分ければ様々な形があるのだ。私の男としての情は、かつての妻唯一人に捧げている」

「じゃぁ……」

「……私は、ただ――――――幸せになっていただきたいのだ」

蒼助の次ぐ言葉よりも速く、先手として出された言葉。

単純かつ捻りの無い台詞は、故に大きく歪み無く蒼助の耳に響いた。

「幸せ。それを得る権利と資格は、誰にも平等にある。たとえ如何なる罪を犯そうと、たとえどれだけ道を踏み外そうと……全てにその主張を認められることさえ望まねば、如何なるものにもそれを手にすることを望む権利と資格はあるのだ。故に……故に私は思い、望む。……あの方に、幸せになっていただきたいと。出会った時より、今も……この先も。それを阻むものがあるのなら、あの方が過去に行ってきたこと故にそれを否定するものがあるのなら……手段は考慮せぬ」

長く連ねられるが、そこには偽りも誤魔化しもないことは蒼助にも理解できた。

それが切望と呼ぶに相応しい想いであることも。

「小僧、一つ言っておこう。貴様には、私がかつて味わい……そして、朱里や三途が抱える想いを理解することは出来ない。だがな……そもそも、その必要が無いのだ。理解などしなくていい。その醜悪な人間の本質たる有り様を保て。己の思うがままに生きろ。いいか、忘れるな。たとえ世界に否定されようと……貴様の在るがままを肯定し、受け入れ……その胸で泣いた女(ひと)がいることを。―

――忘れるな、玖珂蒼助」

――在るがままに生きろ。

蒼助の胸に打ち込むかのように言葉を放ち、上弦は再び背を向けた。

今度こそ、振り向くことなく空間の歪みの中に消える。

残された蒼助に、『忘れるな』という言いつけだけを置いて。

【壱百壱拾伍】　自他の否定（後書き）

今回は二本立てです。
この後が短めなので。

【壱百壱拾六】　嘘になる前に（前書き）

繋いだこの手を、離さない

［壱百壱拾六］　嘘になる前に

日常嫌いの久留美にも、それに関する密かな憧れがある。

例えば、『友達』を家に招くこと。

或いはその逆。

全てあげるとなれば十数を超える願望があるが、いずれにせよそれは『友達』のいない久留美には叶えられない願いだった。

そして、だからこその憧れという形をとっていた。

最近になって、思いもよらぬ出会いから叶うはずも無い願いは一つ成就した。

それに乗じて久留美は、もう一つの憧れも実現させようと目論んだ。

『友達』とお出かけ。もしくはショッピング。

正直、一人で服を買うにしろ休日を謳歌するにしろ――――ツマラナイのだ。

そうして、いつのまにか休日にすることといえば、浮かれた馬鹿どものボロを撒き散らす姿を情報収集する。それだけとなっていた。

枯れ過ぎ、と母が言うのにも頷ける。

とても女子高生の過ごす休日ではない。

だが――――――今日からそんな枯れた青春とはお別れだ。

生まれて初めての友達と過ごす休日。

買い物をして。

少しオシャレな店で外食。
道行く人間が相手を伴う姿を羨ましげに見つめて、一人で人ゴミの中を歩くのではない。
未知の体験に胸躍らせていた久留美だったが、
――――――それは、一本の電話によって狂いを生じることとなった。

◆◆◆◆◆◆

「――――午前中に急な用が入った？」
家を出てまだ十数メートルとない場所で、久留美が進行片手間にそう打ち明けると千夜は予想外に少し驚いた表情をした。
無理もない、と申し訳なく思いながら、
「うん。あんたが着替えている間に……ちょっと、飛び入りでね」
「ふーん……で？」
どうするんだ、という言葉がギュッと凝縮された問いかけに久留美は行き詰った。
とりあえず、決断は後回しにして外に出たのだ。
家でこのことを打ち明けて、これ以上母親に首を突っ込まれてかき回されるのは御免だった。

「……とりあえず、行くって言ったから行かなきゃならないんだけど」

半ば強制とも言えない要求だったが為に、断ることは出来なかった。

無視すればとんでもなく痛い目を見るのも予測済み。

けれど、

「……そうか。では、また今度だな」

「えっ」

「行かなければならない用事なんだろう？」

「そう、だけど……」

「別に怒っていない。急な用事なら仕方ないからな。そんな顔しなくても、今日の分はまた何処かで付き合うよ」

歩みを止め、久留美は思わず千夜の顔を見た。

見つめた先、不快や怒りという気配はなく、ただ寛容深い笑みだけが存在する。

予定を重複させたことを怒っていない、というのは本当らしい。

今日取り潰してしまう分は、また久留美の好きな時に付き合うとも言っている。

それでもいい――――――はずなのに。

「行き先は？」

「……し、渋谷道玄坂。従姉がやってる店があって……今日は、午前中……どうしても、人手が足りないからって……」

「そうか。渋谷駅に着くまでは一緒だな」

千夜のマンションも久留美の行く先と同じ渋谷区渋谷にある。
途中までは一緒だ。途中までは。

「ゴメン……こんなはずじゃなかったんだけど」
「久留美？」

直後、ハッと我に返る。
内心で呟いたつもりだった言葉が、無意識のうちに口から漏れていた。
信じられない、と羞恥心が一気にリミッターを振り切る。
あ、あ、と言葉にならない声だけが意味もなく開いた口から零れ落ちて、

「……気にしてないよ」
「……」
「変な奴だな。いやでも、また”明日”も会うのに……」
言葉を聴いて、久留美は己の思考が停まるのを感じた。

明日も会う。
明日も会える。

――――『明日』も。

僅か一日の先の未来を指し示す言葉が、久留美の古い記憶を抉り出した。

『――――さよなら。また、明日』

別れと明日への約束が重複していた『彼女』の言葉。

今思えば、それがとても不安定で大きな矛盾を孕んでいることは明白だ。
いつでも自分の傍からいなくなるつもりでいた。
それでも行けば、自分を待っていたかのようにそこにいたのは、気まぐれだったのだろうと思う。
『彼女』の言う『明日』はいつ嘘に消えてしまってもおかしくなかったというのに、自分はそれに気づかず無邪気に信じてその日の眠りについていた。

そして、あのクリスマスの夜に知った。
もう『彼女』の手を掴んで引き止めることすら出来ない手遅れの状況で。

「行こう、久留美。俺はいいが、遅刻したらお前が困るだろ」
千夜が進行の歩みを再開する。
よって、僅か一歩の距離が久留美と千夜の間に出来た。
ただ、それだけのこと。

それが、久留美の衝動を突き動かした。

「――――っ、待って!!」

二歩目を妨げるかのように、千夜の手首を掴んだ。
それを自覚として感じたのは、驚いて振り向いた千夜の顔を見た後だった。

「……久留美?」
「……ぇ、と……」

咄嗟の行動とはこのことだった。
後先なんて考えていたわけがない。

けれど、この手が掴んだ理由だけは、唯一理解出来ていた。
だから――――

「っ、やっぱり行く」
「だから、今」
「違う！　今日、遊びに行く！」
「……え、でも……」
「午前中だけだって取り付けだから。だから……午後から、遊ぼうよ」
「けど、それじゃぁ半日も無い……」
「それでもいい！　今日が良いの！　今日ったら、今日っ！」

子供か、と何処かで客観視する己の一部分が久留美を咽い、呆れる。
だが、久留美はあえて無視した。

知ったことか。
ただ、後悔だけはしたくない。
あの時と同じように、手遅れを迎えることだけは避けたかった。

だから、手が動いた。
まだ、この手が届く距離のうちに、捕まえなければ、と。

「……今日が、いい」

気が付けば、泣きそうになっていた。
俯き、泣くものかと涙腺に力を込めた。

そうしたら、今度が喉に泣きが回ってきた。

「……っ」

今、千夜がどんな顔をしているのか見る勇気がなくて、顔があげられない。

失望。

呆れ。

嫌気。

久留美の想像は前向きなイメージを浮かべはしなかった。

こんなふうに、自分ですら自分に呆れているのだから、それを客観視できる立場にいる千夜ときたらそれは比べ物にならないだろう。

そう思って、今度こそ泣きを抑えられなくなりそうに――――

「――――しょうがないな」

なりかけたところを、声が差し押さえるように割り込んだ。

呆れを模している言葉に反して、そうは聞こえない優しい声に、久留美は思わず顔を上げた。幸い、まだ泣いてはいなかった。

そして、見上げた千夜の顔は、

「……千夜」

「今日の夕方までは、俺はお前のものだからな。好きにするといい、お前のしたいように。……付いていっても構わないなら」

まわりくどい「いいよ」という返事。

少なくとも、久留美はそう解釈した。

目の前にある少し困った笑みを見て、そう解釈することした。

もし、あの人の手を掴むことが出来ていたら、同じようにこんな笑みを浮かべて立ち止まってくれたのだろうか、と思いながら。

◆◆◆◆◆◆

「――――――おかえりなさいませ、お嬢様」

単体ではなく、複数の重なりで響く。
目的地のドアを開けての第一声。

そう出てくるとわかっていた言葉を聴いて、今更ながら久留美はグラッと脳が揺れる気分となった。

「……久留美」
「……」

さて、まず何処から説明しようか、と思いながらこれから並べる言葉を検索し始める。

そして、今度こそ千夜の顔は見れなかった。
見れるわけが無いのだった。

［壱百壱拾六］　嘘になる前に（後書き）

二本立て宣言、成る。
今後、忙しくなる予定なのでここらでポンポンあげておかんとなぁ、ということから。
何でコンコミとプロゼミが同じ日にあるんだ（泣）

久留美の連れてきた目的地がどんな場所かは大体想像がつくだろうが、微妙に捻ってみた。最初、ストレートに出しちまおうかと思ったが、さすがに理性が拒否ったので断念。あのノリは、無理。
上弦については、ブログにアップしたプロフィールで軽く過去のネタバレがあるのでそちらをご覧に。

［壱百壱拾七］　賛辞の向かう先（前書き）

降り注ぐ祝福が誰が為

［壱百壱拾七］　賛辞の向かう先

「――――メイドレストラン？」

今しがた言った己の台詞を繰り返す千夜に、久留美は頷き、

「そ。従姉が自分でつくった自営業。まぁ、メイド喫茶のパクリとでも思ってくれるとわかりやすいと思うけど」

「――――コラぁっそこ！　誤解されるような省略は止めてなさい！」

説明を簡略させようとした久留美の目論見を阻止するが如く、店内の奥からツカツカと歩いてくる妙齢の女性がいた。

無論、格好は――――メイドのそれだ。

久留美には今や見慣れた姿となった従姉である。

「似たようなもんじゃん、香奈枝ねぇ」

「断じて、ち・が・うっ！　もう……くーちゃんったら、一年も助っ人やっててまぁだわかってないのねっ」

「ちょっ……友達の前でそのあだ名はっ」

ごく自然にあまり知られたくない呼び名を平然と口にする従姉に殺意募らせながら、咄嗟に隣に注意を向けたが、

「こちらが例の従姉さんか？　――――くーちゃん」

「淀み無い対応だなぁっ！？」

手遅れだった。

「あら、くーちゃん。この美人さんは？　――――新しい奴隷？」
「立て続けに爆弾誤爆させるな、このエアクラッシャー！　あんた、私のこと圧政政治家かなんかと思ってるわけ！？」
「どうも、初めまして。終夜千夜といいます。恩に着せてこの女に昨日から自由を奪われている身です」
「新條香奈枝です。こちらこそよろしくー。大変ねぇ、くーちゃん一度目をつけたら骨の髄までしゃぶり尽くすまで解放してくれないわよぉ」
「あはは、それは恐ろしい」
「……あんたら、打ち合わせでもしてたの？」

若干恐れ混じりの久留美の問いは無視され、店の主兼従姉は曰く『誤解』とやらを解くべく自ら説明を始める。

「うちはね、どこぞの電気街に巣食う不埒なセクハラ事業とは全然別物なのよ。変に媚びは売らないし、妙ちきりんな設定も無し。売りは『健全かつ癒しを提供する奉仕』を掲げてまーす」
「健全と癒し……？」
「えーと、例えば……ちょっと、待ってて！」

待機を言い残して、香奈枝は再び店の奥へと戻っていく。
他のメイドに扮した店員たちも接待や運搬など、それぞれの作業へと行動を移していく。
そのままの状態を保つのは、久留美と千夜だけとなった。

「……で？　結局のところ、どういう店なんだ？」
「だから言ったじゃん。ウェイトレスをメイドにすり替えただけの、ただのレストランとそう変わったところなんて無いわよ。あえて言うなら、一般人向け及び対象は男女混同ってところかしらね」
「……一般人向け？」

久留美が問いに答える前に、『答えそのもの』が忙しい動きで戻ってきた。

「見て見て、これがうちの制服よっ」

ほらほら、と息を撒かせながらヒラヒラと千夜に見せる制服。

しかし、それはどう見ても、

「……メイド服ですが」

「もう、よく見て！　色合いも白黒で清楚なイメージだし、スカートもロング。露出は極限控えて、変わりにレースとかで細かいデザインに凝ったのよ」

「ああ、そういえば。確かに……テレビで見る感じのある意味サービス心こもったヤツとは大分違いますね」

「そうなのよ！　私はアレに対してはいろいろ言いたいことがあるけど、あの胸も太股も見せまくりなデザインが一番許せないの！　大体、皆メイドの存在意義を履き違えているわ！　メイドは使用人なのよ！？　いわゆる他者への無償の奉仕者！！」

「いや、多分それなりの給料もらっているはずだから無償では……」

訂正は当然の如く無視される。

久留美はそれを確認して、悟る。

始まるな、という嫌な予感を。

「メイドが現代に蘇ったって聞いた時は、飛び跳ねて喜んだわ。でも、実際行ったら何なのアレはっ！？　ペラッペラのキャラと媚と露出っ！　ある意味衝撃だったわ、下品でね！　私は思ったの、これは間違ってると！　だから……」

「――――はいはーい。その反抗心でこんな店つくれた香奈枝ねえはスゴいスゴーい。でも、開店まで十分切ったから準備の最終チェック済ませてね。あーいそがし。私も着替えてスタンバイしなきゃー」

強引なシャットアウト。

そうでもしないと、この従姉のメイド語りは終わりを見せず延々と場所も時間も場合も選ばず続くのだ。

悪い人ではないのに残念な人だ、と改めて己の従姉という存在に嘆きながら、チラリと千夜を一瞥。

ポカン、としていた。

無理もなく、当然といえる反応だった。

やっぱり連れてくるんじゃなかったかなぁ、と思っていた矢先、久留美はふと千夜の視線をかち合った。

千夜は久留美に何を見たのか――――少しどうすればいいかわからないように、笑った。

久留美はそれこそどうすればいいかわからなくなり、香奈枝を引っ張って店の奥に逃げ込むしかなかった。

◆◆◆◆◆◆

「――――おかえりなさいませ、お嬢様。御用があればわたくしめに何なりと申し付けくださいまし」

「……久留美？」

店が開店して、少しずつ外からの人間が入ってくるようになった頃、久留美は千夜の前に再び姿を現した。

――――その姿を一新させて。

「へっへん、どうよぉ？　なかなか様になってたでしょ？　これでもここの助っ人ととして一年目は経歴持ってんのよ」

「勤務中に私語丸出しじゃぁ、客にまだまだなんじゃないか？」

「いーのよ、どうせ今日はあんたに付きっきりなんだから」

そうか？と向けられる半目を久留美は無視して、

「それよか、後ろで未練がましく視線飛ばしてくる店長の方が職務怠慢だと思うけどね」

「……まあな」

久留美の言うとおり、背後の一メートル先には、席の影からジト～と久留美と千夜を凝視してくる香奈枝の姿があった。

何故か、泣きはらした目で、

「……ねぇ、くーちゃ～ん。一時間だけでも彼女に」

「だ・め」

「着てみてくれるだけもいいからぁ」

「……今年の二月三日午後八時二十四分十三秒に香奈枝ねぇが何処で誰と何していたか、叔父さんに話してもいいならね」

「だから、何で知ってるのーっ！？」

くーちゃんの鬼畜ぅーっ！と泣き叫びながら、厨房に走り去っていく香奈枝の姿を久留美は千夜と見送りながら、

「ねぇ、あれで今年で二十四でいい大人なのよ。信じられる？」
「大人気ない大人を結構知ってるから、信じる」
「……あんたも大変ねぇ」

真顔で応えるので、真実味を感じる。
久留美は引いてきたワゴンに手を置きながら、

「では、お嬢様。ご用件は何かございでしょうか？」
「それは？」
「ドリンク一式。客の目の前で全部作業するのが、この店の方式なんだって」
「お世話されている感が増すな」
「それが狙い。わかってるわねぇ」
「俺も、喫茶店でバイトしているからな。目の前でやると客の信用性も上がるとか聞かされたんだ」
「へぇ……」

初めて聞く話に久留美は興味を惹かれた。
しかし、今は仮にも勤務中だ。
表面上でも仕事をこなさなくてはならない。

「ゴホン……何か御飲みになりますか？」
「何がオススメだ？」
「えっと……僭越ながら、わたくしめは紅茶をお勧めいたします。いかがなさいますか？」
「ああ、そうする。種類は何がある？」
「ここにはアールグレイ、アッサム、ダージリン、オレンジペコーがございます。ここにあるもの以外に御希望があるのでしたら、ご用意致しますが」

「いや、結構。……では、ダージリンを」
「かしこまりました」
注文を了承する中で、久留美はここで噴き出しそうになるのを堪えた。
自分たちが主人と使用人のやり取りをしていることが、何故か妙に面白おかしく感じてしまったのだ。
そして、それと伴ってふと浮き上がった感情がもう一つ。
楽しい、という。
誰かといて楽しいと思う。
それが己にとっていつ以来のことであるか、久留美は手を動かしながら考えた。
自覚すら覚束なくなるほど、そんな想いに満たされていた過去があった。
ようやく実感したのは、その相手がいなくなってからの空虚を得た時だった。
あれ以来、久留美は何をしても楽しいと感じなくなった。
学校にいても。
家にいても。
家族といても。
旧友といても。
一つの趣味のようなものとして、見出した他人の秘密を暴くという危険を孕んだ行為に感じる興奮すら、久留美には刹那的なものにしかならなかった。
けれど、永遠に続けばいいと思ったことは無い。
あの行為はそれでいい。
どう持ち上げても、あの奇跡のような時間に代わりには成りえることはないことを、久留美は悟っていた。

……でも、これは？

今感じている感情は、間違いなくかつて感じた代わりのないはずのそれだ。
しかも、

……失う前に、自覚している。

あの時と何が違うのだろう。
何がそうさせるのだろう。
そうさせる何かが、あるはずなのに――――久留美には、それがわからない。

……違うけど、何が？

去っていった『魔法使い』と。
今の目の前の千夜。
どちらも久留美の焦がれる非日常から日常にやってきた存在だ。
同じであるのに、何かが違う。

……存在が？　それとも……。

自身の向ける意識がか、と考えがそこまで行き着いた時、久留美を物思いから引き戻す声が呼んだ。

「久留美」
「えっ、なに？」
「――――紅茶が」

千夜の視線が久留美から離れ、少し落ちる。
そこは、
「へ、って、あつぅぅぅぅぅ――――っっ！」
いつの間にかカップから射程を逸れて、支える手の指先に熱々の紅茶を注ぐティーポットだった。

◆◆◆◆◆◆

「おまちどう」
「敬語崩れてるぞ」
「……察しなさいよ」
火傷はすぐに水で冷やした事と、熱湯と呼ぶほど熱くない紅茶を淹れるのに適温だったおかげで、ほんのり指先が赤くなるだけで済んだ。
それでも、久留美には痛みとして残り、不機嫌の要因となっていた。
「大体、何でもっと危機感持って言ってくれないわけ？　あんまり自然体だから、全然わからなかったわよ」
「十秒近く注いでいたのに、気づかない方がどうかしているだろう。指先の危機に全く気取れないくらい、何を考えていたんだか」
「……っ」

あんたのことよ、なんて言えるはずもない。
久留美には押し黙る以外返答の手段が残されていなかった。
そうしている間に、淹れ直された紅茶に口をつける千夜。
それを久留美がちろりと盗み見ていると、

「……うん。うまいよ」
「え……そぉ？」

皮肉か文句かが飛ぶかという久留美の予想を裏切る千夜の言葉に、思わず気が抜ける。

「紅茶はあまり飲まないんだが……なんだか好きになれそうだ」
「いつもは何飲んでんの？　コーヒー派？」
「そういうわけじゃないが、淹れてくれる人間……バイト先の店主が徹底としたコーヒー派でな。喫茶店のくせに、絶対に紅茶は出さないし自分でも飲まないんだ」
「え、じゃぁ紅茶出せって言われたら……」
「……一応、丁重に対応してるよ。――――ヨソの店でいくらでも、と玄関を開けて」
「……丁重を装った最悪の対応だと思うけど」

さすがは千夜のバイト先だ、という感想が久留美の中で出された。
類は友を呼ぶ。ことわざというのもあながちバカに出来ない、とも。

「まぁ、昔一度自分で淹れてみたこともあるんだが……最悪だ。飲むならうまいのを淹れようと高い葉っぱを買ったのに」
「バカね。紅茶にだっていろいろ種類があるんだから。葉っぱの量はもちろん温度も大事だし、種類によって味も全然違うんだから」
「以来、気が向いて飲みたくなったら、ティーパックで淹れている。

便利で、味もそれなりに飲めるからなアレは」

「でーもっ！　やっぱり自分で選別して淹れたやつには及ばないわよ。そりゃ、淹れる前にポットを温めるとかいろいろ手間かかるけど、紅茶に愛を向けるならそれくらいどうってことないっていうのは当然で……」

「ははっ、こだわるなぁ……オバさんもそんなこと言ってたぞ？」

親子だなお前ら、という笑いを含んだ言葉に、少し複雑な気分になる。

元々この語りも母親に聞かされて、気づけば己のものとしていたものだ。

あれは高校受験真っ最中の時期だったか。

既に危ない趣味をものとしていて、それによって家族との距離が開いていた。

まだ得た趣味に新鮮味を感じていた当時、それにガンガンに熱を入れたいという願望に運悪く重なるように迎えた受験。

他の事はそっちのけで没頭したかったが、それでは両親とて黙っていない。

だから、完全に遮られないように適度に勉強をした。

さすがに中卒はいろいろまずいだろうという気持ちと、高校という中学生にとっては未知の上層部に対する興味も十分にあったからだ。

出来れば「いかにもやっています感」をわかりやすく表現したかったので、夜中に勉強するようにしていた。

目論見は成功した。干渉もいわゆる受験を向かえた家庭で繰り返される程度のもので、過剰なそれも不審も向けられなかった。

ただし、代償となったのは睡眠時間とそれを求める欲求だった。

夜通しというわけではないが、その時間帯をある程度起きて勉強

しなければならなかった。
当然、身体に訪れる睡魔はそれを阻む。
眠気覚ましにカフェインをとろうと思って、手を出したのが紅茶だった。
だが、失敗した。それこそ千夜のように、紅茶の淹れ方を当時はろくに知らなかった久留美が初めて自分で淹れたそれの味ときたら思い出したくもない酷さだった。
そこを偶然起きてきた母親に見つかり、見兼ねられて――――

……耳にタコが出来そうなくらい聞かされたっけ。

思えば、それが中学時代に母親と一番交流した思い出だ。
指導する母親にただ相槌を打つだけだったが、最も長く接した夜。

そうして、幼い頃は母親に淹れてもらっていた紅茶は、久留美にとって自分で淹れるものとなったのだ。
離れかけていた自分たちを、紅茶はあの時点ではまだ繋いでいてくれたのかもしれない。
けれど、それも――――断ち切ってしまった。

「……ってゆーか、言ってたって……何で？」
「あ……」

失態を踏んだ、というその瞬間に表れた千夜の表情を久留美は見逃さず、

「……なにそれ。いつ聞いたのよ」
「えっと……」
「んー？」

じとーっと凝視を続けると、千夜は耐えかねたように、顔を久留美から背けて観念を示した。
ひどく言いたくなさそうに、
「……俺はヨソの領域（テリトリー）では寝付けないんだ」
「は？」
「……だから、偶々起きてきたお前の母さんに見られて……落ち着くようにミルクティー飲ませてもらったんだ」
「いや、そこは別に良いけど……え？」
久留美は目を丸くした。
テリトリーなんて微妙に格好よく表現しているが、つまりは、
……か、可愛いじゃないのっ！
見れば、羞恥を煽られたのか千夜の頬はほんのり赤らんでいた。
それが更に久留美の胸を――――キュン、とさせた。
……なんか、イイ。この普段のアレとのアンバランスさが。
不覚にも萌えてしまった。
ふと見えた千夜の意外な一面に。
千夜はニヤニヤする久留美を睨み、
「……オイ、絶対に記事にするなよ」
「どうしよっかなぁ～」
優位に立てていることが、久留美を思わず調子に乗らせる。
とりあえず、記事にする気はない。

だが、

「やったら、十倍にして返すからな。お前の秘密は既にお前の母親からのタレこみで掌握済みだ」

「な、なんですとぉ！？」

「疑うならここで一つあげてやろう。

――――三歳。お前は遊んでいたビー玉を鼻に」

「ぎゃぁぁっ！　ストップストぉぉぉぉップ！」

親と親類しか知らない己の恥を真っ黒い笑みと共に公言しようとした千夜に、慌てて降参を提示。

……前言撤回！

可愛くなんかねぇ、と久留美は先程の己の感想を取り潰した。

「メイドさん、おかわり」

「っ、かしこまりましたぁっ！」

実にイイ笑顔となった千夜に反して久留美は、仏頂面で対応した。あっという間の下克上の終わりだった。

「……ところで、店長は本当にお前の従姉なのか？」

「何よ突然」

「性質（タイプ）が真逆にも程があると思ってな。あれは見かけではなく、本質的なものだ」

「……嫌味か、このヤロウ」

「純粋な感想さ」

それは、今まで腐るほど言われてきた類の言葉だ。

いろいろ問題児的な要素が目立つ久留美に反し、こうなるまでの香奈枝は、

「……まぁ、あの人は元々聞き分けのいい子供として親戚の間でも優等生の筆頭だったから。おかげで私が悪い例でよく引き合いに出されたわ」

「だろうなぁ」

「納得すんな。……まぁ、無理もないけどね。香奈枝ねぇは、頭も良くて何やっても要領よくて、親にも逆らわなかったし……いろいろ厄介なクセのある人間が出てくるうちの家系からは、珍しいマトモな人間だと思われて……いたんだけどね」

「どうして、こんな状態に？」

「……優等生だったけど、これといって趣味のない人だったのよね。前は」

久留美にはあって香奈枝にはない唯一のもの――――それが趣味だった。

妙なことに、それが香奈枝には酷く羨ましく思えたらしい。

「優等生って周りは褒めてくれるけど、正直それを落とさないためにずっと気を張っていなきゃいけないから、苦しかったんだって。しかも、少しも楽しくない。だから、本当に楽しそうに趣味に没頭してる私が羨ましいって……昔、言われた」

それは無いモノ強請りだ、と人のことは言えないとはいえ、そう思っていた。

それでも仲は悪くなかった。

良い、と己の中で表現しないのは、香奈枝に一方的に家に押しかけられるやらまとわりつかれるやらだったからだ。

形で見るなら、普通は逆ではないだろうか、と今更ながら思う。

「で、今に至る経緯の発端が……中二の頃だったかなぁ。まぁ、もはや恒例となって学校から帰ると大学帰りの香奈枝ねぇが私の部屋で漫画読んでてさぁ。もう突っ込みも文句も諦めて好きにさせて私が仕入れたネタを記事にするために原稿にまとめてたら、肩こりがキたわけね。そしたら、近くの香奈枝ねぇが目に入って、どうせただで居座らせておくくらいなら有効活用しようと思って、肩もみ頼んだのよ」

「それで？」

「いや、思いの外上手くてね。初めてだっていうから驚いたけど。……終わった後に、ありがとう気持ちよかったよ、と言うとね」

久留美は、一度そこで言葉を止めた。

思い出したのだ。

彼女がこんな風に行き着いてしまったそもそものスタート地点と、それを後押ししたのは自分であるのだということを。

「……久留美、どうした」

「……犬」

「いぬ？」

「いや……褒めたら、飼い犬みたいに尻尾振る勢いで喜んでさ。んで、他人の世話して役立つのに快感を覚える新たな自分を発見。趣味から飛んで将来はそういう仕事につきたいとまで発展して……大学を自主退学するわ、向こうの両親卒倒だわ、親戚大騒ぎだわ……ふとしたキッカケでこの超展開よ？」

「……そりゃまた」

「今思えば私、押しちゃいけないスイッチ押しちゃったわよねぇ……」

考えていると、いろいろな人たちに申し訳ないことをしたという

思いが浮かび上がってきた。
無論、当人たる香奈枝にも。
しかし、久留美のそんな心境に割り込むように、

「まぁ、いいんじゃないか？　大勢の人間に否定されても、誰か一人くらい理解がいれば」
「……ん、まぁ……いないよかは、ね」
「久留美と……さっきの話の中に出てきた人とか」
「私は別に面白い展開になったからそれはそれでと思っただけ……って、え」

待て、と久留美の思考と言葉が停まる。
聞き逃せない部分が後半にあった。

「……さっきの話のって……」
「ん？　恋人のことだろう」
「はっ……何でわかるの！？　ってか、根拠はっっ」
「……午後九時近くに一緒にいて、両親に知られたらいろいろマズい相手といったら……そんな感じかなっと」

思わず口が開いた。開いて閉じられなくなりそうだ。
なんて、アバウト。
だが、当たっている。

「……マズイも何も、激マズなのよね。何せ、高校時代の担任だったから。十三も年上で、しかも妻子持ち」
「教師とはまた……」
「どこの少女漫画かっての。まぁ、泥沼じゃないよ？　向こうの夫婦仲も香奈枝ねぇと知り合う前から冷え切っていたらしいから、遊ばれているってわけじゃないみたい。子供が成人したら一緒になろ

うって……いかにもって背景だけどね」

けれど、両者が本気であることは久留美も知っていた。

向こうの男も、久留美に関係が知れた時に接触してきた際に己の思いの旨を聞かせてくれた。

あとで切れる時にいざこざが起きないように、自分から懐柔するつもりでいるのかと思っていたが、そうでもなかった。

相手の男は一見冷めているようだったが、香奈枝のこととなるとその雰囲気を一変させた。香奈枝に出会った自分は変わった、とまるで恋に落ちた少年のような初初しさを浮き彫りにさせて、彼女の恋人は久留美にその経緯やら過程やらを話した。

秘密の関係なのに第三者にそんなに話して良いのかよ、と思ったが、狡猾とは程遠い単純で純朴な人間であることはそこから理解できた。

どうしてそんなにまでして好きなのか、とその時は男に聞いた。

男は照れくさそうに言った。

わからない、と。

ふざけてんのか、と白けかかったが、その後に続きがあった。

理由がわからないから、わからないそれをわかりたくて傍にいたいんだと思う、と。

きっとずっとわからないだろうけどね、と苦笑いと共に付け加えて。

口約束から四年が経とうとしているが、相変わらず密会は続いているらしい。

どうせ一瞬の熱だと思っていたが、久留美の予想を裏切って彼らは熱を上げたままだ。

他人のプライベートを探り出すようになってからというものの、久留美は人間関係の軽薄さや絆といわれるものの脆さを嫌というほど見てきた。

だから、彼らの言う『愛』とやらも理解出来なかった。

何の保証も無く、寧ろ代償ばかりが大きい関係にある互いをそこまで信じられる彼らそのものが、理解出来ずにいる。

人の気持ちは揺れ動きやすく、そして多感だ。

それは、絶対と銘打てるほど純情なものではない。

そして、誰にも相手のそれは見透かすことが出来ない。

そんな久留美の冷めた認識を否定するかのように、香奈枝とその恋人は何処までも見せる事の出来ない気持ちを抱えた自分たちを何処までも信じている。

それは捻くれた見方をすれば、

……あてつけ。

信じたのに、裏切られた自分に対して。

だからかもしれない。

香奈枝たちのことを認められないのは、きっとそのせいだ。

彼女たちと同じくらい自分も相手を信じていたのに相手はそうは思っていなくて、あっさりと久留美の傍から離れて消えてしまった。

嫉妬。

同じ思いを抱いて、夢破れた者にとって彼らは妬みの対象だ。

或いは、果てを知る者としての憐憫の――――

「どうして、楽な道を蹴って茨道みたいなところ歩きたがるのかな……あの人たちは」

「何だ急に」
「……だってさ、たとえ辛いことに挑んで一緒に何かを得ようとしたって……仮に得たところでその後に相手から気持ちが離れたり置いていかれたりしたら、それまでの苦労も水の泡。何のメリットが残るっていうのよ。当人たちは盛り上がっていれれば、それでいいだろうけど……見てる側からすれば危なっかしいだけよ」
「……」
我に返ったのは、既に喋るだけ喋った後だった。
一気に噴き出す冷や汗を感じながら久留美が見たのは、無表情に黙り込む千夜の姿。
……わ、私何言って……。
口が勝手に、と馬鹿な言い訳しかつかない始末だ。
物思いの独白に耽るばかりに現実との境を見失っていたのか。
「ぁ、えっと……今のは、な」
「――――どうしても、欲しいものがあるからじゃないか？」
沈黙していた矢先の言葉。
千夜の発言に、久留美は話を白紙に戻すのも忘れて首を捻った。
「……欲しい、もの？」
「楽な道にはそれがない。あの人とその恋人が求めるものは、お前の言う茨道の向こう側にあるんだろう。どうして欲しいもので、それを手に入れるにはその道を苦難を享受し、乗り越えなければならない。……それを覚悟して、そっちの道を選んだんだろうな」
「で、でも……保障なんてないのよ？　どっちかが耐えられなくなって、嫌になるかもしれないじゃないっ……乗り越えたと思ったら、

まだ別の苦難が待っているかもしれないのに……それに、仮に欲しいものが手に入ったところで……その先も相手の気持ちが変わらないなんてわからないわ……」

何をむきになっているのだろう、と己の冷静な部分が思う。

彼らを肯定する千夜に、否定をぶつけて。

千夜まで自分が認められないあの二人の肩を持つのが許せないからなのか。

それとも――――千夜の肯定をもっと聞きたいからなのか。

己が何をしたくてこんなにも必死に攻撃しているのかわからない。

だが、一度火蓋を切った口は、内から出てくるものを抑えるべく閉じることは出来なかった。

「人間は残酷な生き物よ。昨日今日まで一緒にいて笑っていた相手を、そんなの嘘だって平気な顔して突きつけて……あっさり置いて何処かへ行ってしまえるのよ？　そんな奴等が交わす約束なんて紙切れみたいなもの……」

「……なら、凄い人だな。お前の従姉と恋人は」

「……は？」

「そんな紙切れみたいなものとわかっているものを、それでも信じることが出来るんだから」

そこから千夜の返答が始まる。

「……お前の言う事は決して間違っていないよ。人間は感情に左右される残酷な生き物だ。俺もそれは……理解している」

「……じゃぁ、何で」

「無論、これは当人たちも理解しているだろうな」

「え……」

思いも寄らぬ千夜の台詞に、久留美は反論の言葉を見失う。

「お前が思っているほど、あの人たちは夢見がちな子供ではないと思うぞ。誰がどう見たって……良い年をした大人だ。本人たちがそれをわからないはずがないだろう。特に、従姉さんの方は……ここまでにソレを思い知っているはずだ」

言っている意味はわかった。

従姉はお人よしであれど――――頭の良い人だ。

己のしている事がどういうことなのか、わからないはずがない。

選ぶことが利口ではないことも。

それに己を通すことが困難であることも。

わからないはずがない。物事の道理がわかる人であるのに――――

――それでも彼女は、

「ただ何も見ようともしないでする一点張りとは違う。……何もかも理解したうえで、それでも信じることは……とても難しいことだよ。もう、従姉さんたちはどれくらいになるんだ？」

「よ、四年になるんじゃないかしら……」

「そうか……もう、四年も。強い人だな、お前の従姉とその相手は。……揺らいだこともあるだろうに、何度も」

「――――――、……っ？」

何か言おうと、口を開いた時。

久留美はここから少し離れた場所にて不穏な気配を匂わす声を聞き拾った。

見遣ると、その方向の先では嫌な予感を忠実に描いた光景を視界が捉える。

香奈枝が店員と共に冷やかし目的の客の対応をしている。

たまにあることだ。

この店はその手の目的には格好の的だから。

ここだけに限ったことではない。

接客業には、こういうことは付き物であり、それに耐えられなければこの先をやっていくことなどできない。

香奈枝も店をつくってからはそれを重々承知しているだろうし、もう慣れているはずだ。

少なくとも久留美はそう思って――――いた。

「――――」

だが、久留美は見た。

ここに来て、香奈枝の顔を初めて直視した。

見覚えのある表情があった。

それは、大学を辞めてきたという報せを本人の来訪と共に受けた夜。

親に家を追い出されたから暫くお世話になるね、と一時の急な同居人と化した時に、見た顔だ。

困ったように眉が歪んだ、少し無理をしている笑み。

新條香奈枝。

周りを見向きもせずまっしぐらに走れる人ではない。

逃避のように周りを目を背けてしまうような臆病者ではない。

だから、周りから受けた叱咤や罵倒という類の否定を受け止めて、揺れて。

それでも倒れまいとする時の、歯を食いしばって耐えるような笑み。

……そっか。

そうだったのね、と今更ながら久留美は気づいた、
見たことはないが、恋人との件が関わった時もこんな表情をしているのだろう。

辛ければ止めてしまえばいいのに。
苦しいなら泣いて座り込んでしまえばいいのに。

見ていると、対応相手である男性客二人組の片割れが新しく一つ嘲りをぶつける。
香奈枝の表情が僅かに震えたのを久留美は捉えた。
けれど、それでも彼女は耐えるように笑う。
泣けば、屈したことになるとわかっているからか。

「――――……自分のやりたいことをやりたいと素直に動ける人間っていうのは、見ていて気持ちがいいな。そう思わないか、久留美」

言葉の後、立つ気配を傍で感じ、視線を戻すと、

「……自分勝手とか、無鉄砲とか……悪く言われたりもするが、それが出来る人は凄い奴だと俺は思うよ。困難が付き物であるそういった行為に堂々と立ち向かえる人間には、理性という皮を被った臆病風に吹かれて震えるだけに人間なんか足元にも及ばない」

千夜は席から立ち、そこから出て、

「会っても間もないが――――良い従姉を持ったな、久留美」

何故か飲みかけの紅茶を手に持って、問題の発生地へと歩いていく。

どうするつもりなのか、久留美の脳裏にはすぐに的中率の高い予想が巡ったが、今はどうでもよかった。

ただ、久留美は香奈枝と千夜を見比べた。

そして、香奈枝に対して一つの感情が芽生えた。

同時に一つの記憶が瞼の裏に閃いた。

――――いいなぁ、くーちゃん。羨ましいー。

趣味を持つ己にかつて向けられた香奈枝の言葉。

今は別の意味で、こっちの台詞だ、と記憶の中の香奈枝にぼやいた。

千夜の賛辞の向く先である、あの時とは立場が逆転してしまったその人に。

［壱百壱拾七］　賛辞の向かう先（後書き）

思いのほか久留美の従姉の話を盛り込んでしまった。
またか。保険医の二の舞だー。

とりあえず、今に久留美との対比を明確に現せるキャラとして登場。
いつのまにか久留美が停滞して、いつの間にか香奈枝の方が羨まれる立場になっていたという対比。
もう一人の停滞者。
抜け出すきっかけとなりえるものは、目の前にあるというのにまだ気づかない。

【壱百壱拾八】　嫌悪と自覚の果て　（前書き）

知りたくも無かった、己という存在

【壱百壱拾八】　嫌悪と自覚の果て

「くーちゃん、今度の奴隷さんは強いのね。とっても」
「……だから、奴隷違う」

悪気は無い、というあたりが天然の悪いところだなと、久留美はげんなりと肩を落とした。
それでも手の中の洗い途中の食器は落とさず、

「でも、大丈夫かしら……相手は二人だったし」
「そんなの、するだけ余計な心配だって。それより、早く食器拭いてよ。私、この洗い物終わったら行くんだからね」
「なーんだ。何だかんだで心配なんじゃないの～」
「だから必要ないってば。あいつには、不良グループ面々に白目剥かせたり胃液ゲロゲロ吐かせてヒィヒィ言わせるのなんか朝飯ならぬ昼飯前なのよ！」
「ええー……」
「ええじゃないわ。大体見たでしょ、紅茶ぶっかけるくだりから地面に叩き伏せて意識奪うまでのところは誰より至近距離で」
「……うん。ゴチンッどころじゃないすっごい音が聞こえた」

知っている。離れていた久留美にもそれは十分に聞こえたのだから。

思い返しても、実に手際のいいとしか言えない無駄の無い仕事ぶりだった。
いきなり紅茶をぶっかけられた迷惑客二人は当然の如くキレた。
しかし、彼らに完全に戦闘態勢に入らせることすら許さず、千夜

の行動は早かった。

……柔術まで使えるのかい、あいつは。

テレビで何度か見たことがある。

だが、それよりも遙かに千夜の技は切れがあり、そして無駄がなかった。

熟練された動きに翻弄されるがままに、腕を掴まれた一人の顔がまず冷たい床とコンニチハをした。

僅かの一瞬のことに、久留美を除いた誰もが千夜に対して抱いていた印象を覆され、唖然蒼然。

そんなことをしている間にもう一人も床への求愛者と化した。

乱闘沙汰にも喧嘩にも発展しないまま終わった消火作業を終えると、千夜は、

『――――お騒がせしました』

大の男二人を昏倒させたとは思えない後とは思えないようなさわやかな笑顔を残して、店を出て行った。両手に男二人を引っ掛けて。

あの後、数秒程店内の時間が止まったのだった。

そして、その騒動から既に二時間が経過していた。

「くーちゃんたら……やっとマトモっぽいの連れてきたと思ったのに」

「今の香奈枝ねぇにマトモどうこうについて言われたくないわよ……」

「何でー？」

「……鏡の中の自分に相談してみれば」

きょとん顔の香奈枝を無視し、最後の一枚の水を切る。
久留美は宣言通りに作業を終わらせると、

「じゃ、後は頑張ってね」
「はいはーい。今日はありがとうね、くーちゃん。……あと、あのコにも代わりにお礼言っといてね」
「はぁ？」

香奈枝のそれは意外な反応だった。
実際は助けるためだったとはいえ、店内で暴れられたのだ。
経営者としては、謝ってすませばよかったことを掻き回されてしまったのだからはっきり言えば余計なことと思っているのではないかと、久留美は考えていた。

「何で、意外そうな反応するの？」
「……一応、店で暴れられたわけじゃん」
「でも、備品は一つの壊れていないし、一分も続かなかったじゃない？　被害ゼロで済んだんだから何処で怒ればいいの？」
「まぁ、そうだけど……」

言われていれば確かにそうだ、と久留美は納得。
そもそもあれは喧嘩と呼ぶには些かおかしな話だ。

あえて言うなら、掃除。
ゴミ掃除みたいなものだったと考えると違和感がない。

「手間のかかる粗大ゴミをもっと手っ取り早い方法でかたしてもらったってところ、か」
「くーちゃん、そんな身も蓋も無い。どーして、そんなに卑屈なのかしら……」

「……余計なお世話」

そういうあんたもどうしてポロリと人が気にしているところを刺激出来るのか、と口から出してしまいたい言葉を久留美は抑えた。

久留美は出てきてしまいそうな言葉ごと唾を呑み込んだ。

だが、再び喉から這い上がってきて、

「あんな風に人を容赦なく叩きのめすような女……怖くないの？」

「くーちゃんったら、また……」

「あいつ本当、乱暴者でさ。転校初日で、いきなり不良に絡まれたと思ったらその放課後には逆に半殺しにしちゃったのよ？　外見とのギャップが違いすぎておもしろそうだったから近づいてみたけど、一緒にいたら面倒事ばっかでさ。ネタに困らないからいいかなって思ったけど、書いたらどんな目に合わされるかわからないからそれも出来ないし……私もとんでもないのに拘っちゃったわよ……今日だって、きっとロクなことにならないとわかってたけど、連れてこないと何されるかわからな……」

「――――くーちゃん」

沈静な声。

けれど、そこには叱咤の念が確かに宿っていた。

「……っ」

ばつが悪そうに顔を歪めて口を噤むと、

「……ねぇ、くーちゃん。……くーちゃん、やっと友達出来たのね」

「……なによそれ」

「そうなんでしょ？　だって、くーちゃん……――――今まで、誰かのことこんな風に気にかけたことも、私に話してくれたこともな

かったじゃない」
「……」
ボケッとしているようで、この従姉は妙に鋭く察しが良い。
そして、今回もそれは例外じゃなかったようで、
「ちろっと見ちゃった。くーちゃん、あの人と話してる時……久々に良い顔してたじゃない。んー、でもあそこまで楽しそうにしてるのは初めてだったかなー」
「……そう見えたの？」
「うん。中学の時に見てた記事書いている時のアレよりも全然楽しそうだったわ」
だからね、と香奈枝はそこから諭すように、
「……一緒にいて楽しい人は……友達は、大事にしなきゃ駄目よ？」
「……」
どうやって、と問い訊ねたい衝動に襲われたが、そんなことを香奈枝に聞いたところで答えは出ないことはわかっていた。
既にソレは久留美自身の中で自問として顕れ、対する回答も出ていた。
不可能。出来ない、と。
どうすればそれが出来るか知らない。
こんなことは初めてで。
自分は子供の時の悪い部分を捨てきれずに成長してしまって。
抱いていた気持ちは、自分で思っていたものとは違っていた。

何もかもが、自分の想像とは全く異なるものだった。

「……あ」

何故かこのメイド服にはポケットがついている。
そこに入れておいた携帯電話が震動した。
誰なのかは確認する前から何となく見通せて、だからこそ内心は急ぎ走った。

「……下」
「ん？　あの人？」
「うん……近くのマックにいるって」
「良かった。何とかなったみたいね」

無事であることに安堵する香奈枝と同じ気持ちだ。
だが、久留美はそれを口にすることは無く、

「……じゃぁ、行くね。今日の御駄賃、ちゃんと後でもらうからね」
「くーちゃんったら強欲ー。……それじゃぁ、宜しく言っておいてね」

ん、と一応の返事を返して、久留美は更衣室へと足を運ぶ。
その前に一度留まり、

「……ねぇ……最近、”あの人”とはどうなってる？」
「え？　……この前も会ったけど」
「順調？」
「うん、特に変わったことはないけど……」
「そう……良かったね」

相変わらずの茨道は、それでも前進は止まらずに済んでいるようだ。
恋人との話題を引き出されたこともあってか、心なし顔がほんのり赤らんだ香奈枝に久留美は思わず、
「……あのさ、妻子持ちとか担任とかいろいろ余計なもん背負い込んでる男に手ぇ出すなんて、香奈枝ねぇはつくづく物好きとか蓼喰う虫も好き好きとか散々思っては呆れてたんだけど」
「ええっ突然なんで急所を攻撃っ！？」
「――――……私も人のこと言えないみたい」
「え？」
香奈枝の怪訝な顔を無視して、久留美は停止を解く。
あれだけ理解出来なかったこの女と同じ状況に気がつけば首を突っ込んで、抜けなくなってしまった自分に、途方も無い呆れを抱きながら。
更には、それが香奈枝よりも更に悪質なものであることに。
相手は女。
そして、他人のもの。
しかも明らかに怪しくて、得体が知れない。
そんな悪条件の極みが該当する相手に自分は――――

◆◆◆◆◆◆

待たせている相手はすぐに見つかった。
店に入ってパッと視界が捉えて、そこへ視線がまっしぐらに走って一点集中した。

その己の反応速度に、ああもう駄目だ、と絶望感を抱いた。

「お、久留美。こっちだ、こっちー」

今気づいたのか、千夜は席から出入り口付近に立つ久留美に手を振る。

まるで、店を出る直前までのあの騒動など知りもしなければありもしなかったと言わんばかりの様子であった。

あの粗大ゴミどもの行方はどうなったのか気にしながら、久留美は千夜の元まで歩み寄っていく。

途中見かける千夜に向かう熱視線の出元に、不快を抱かせられながらも。

「……やっほ。一時間ぶり。……変わりないようで何よりね」
「当たり前だ。〝あれぐらい〟でどうにかなると思うか」
「まさか。……とりあえず、あの客は何処でどうしたわけ？」
「ああ、さすがに投げられた衝撃程度では復活も早くてな。……まぁ、とりあえず骨を折らずに済ませた」

それ以外でどういう結果で済ませたのか。

「でも、やるなら徹底的にやったんでしょうね？　根に持たれて嫌がらせに日々なんてことになったら、あんたのしたこと只の余計なお世話なんだからね？」
「だろうな。だから――――――折らなかったが、脱臼はさせた。両者に片腕片足ずつ。二ヶ月はうまく嵌らないように抜いて入れてを

二、三回付きでな」

なんてこと無さそうに言ってのける。

「って、もう何か食ってるし」

「ついさっき買った。お前も何か買ってきたらどうだ？」

「ええっ……お昼食べるなら、ココ出てもっとどっかイイところで食べれば……」

「いいよ、面倒くさい。そもそもただでさえあんまり外食は好きじゃないんだ。最近、料理店って問題ばっか起こしているし……もし、トイレ行った手を洗わないでそのまま料理していたらなんて考えるだけでゾッとする」

「……そこにあるハンバーガーとポテトは」

「大丈夫。作ってるところ会計から見てたから」

もう、昼時はテコでも移動する気がないというのを理解し、千夜の座る向かいの椅子に手を掛け、

「……わかったわよ」

「おい、買いに行かないのか？」

「今、あの列に並べって？　それこそ面倒くさい。だから、あんたのポテトをもらうわ」

「……足りないぞ」

「あとで映画見る時に、ポップコーンでも買えばいいじゃないの」

何だこれは、と憎まれ口ばかり叩く様を客観視してくる己の一部が、呆れた言葉を投げかけてくる。

それを聞き逃さず、わかっているわよっ、とそんな自分にヤケクソ気味に久留美は言い返した。

ふやけたポテトをグニュグニュと噛み締めながら、

……好きな子をイジめたくなる小学生か、私は。

だが、その気持ちは今の久留美には理解できた。

己というものを知った、今ならば――――

「いやー、ハンバーガーというのも馬鹿にできないよな。最初見た時は、幼稚園児の紙粘土細工かよって怒り芽生えたが……考えてみれば、変にいじくったりせず素材を生かしてる点では、客に見えないキッチンで何やってるかわかったもんじゃない普通の料理店よりは断然好きだな、今となっては」

「そこまで言うか……何で、そんなにまで外食が嫌なわけぇ？べっつに、良いじゃない。面倒な作る過程は金払えばやってくれて、待ってれば美味しく食べれるんだから」

「さすが、作ってもらうことを当然と生きてきたゆとり娘が言うと常識のように感じるな」

「……喧嘩売ってんのか、あんた」

そう怒るなよ、と久留美の睥睨をさらりと流しながら千夜は、

「悪いことなんかじゃないさ。寧ろ、幸せなことだ。出来るだけ長くそうしてもらうといい……忘れたくても忘れられないくらい、出来るだけ長く……な」

まるで先駆者のような言葉を口にした。

そして、羨むようにも。

それが、昨日の食卓で母親の地雷踏みによって露見した、両親の不在の事実を久留美に記憶から呼び起こさせた。

「……あの、さ。あんた、家族って……」
「妹がいる。可愛いぞ」
その一言が、千夜が天涯孤独ではないことを久留美に教えた。
踏み込みへの躊躇を軽くし、
「へぇ、いくつなの？」
「小学五年生だ」
「生意気盛りの年じゃないの」
「まぁな。人見知りが激しいから、他人に対しては攻撃的なところが頭が痛い」
「はねっかえりってワケ？　あんたの妹っていっちゃらしい気がするけどね」
笑いながら、違うでしょ、と久留美は内心で冷静に呟いた。
会話の中で笑う己に向けて。
自分が聞きたいのは、妹のことではない。
自分が見たいのは、妹のことを自慢げに話す千夜ではない。
もっと、もっと奥に――――。
そんな欲求に突き動かされて、知らず知らずのうちに久留美はそれに沿った道をゆき、
「あんたさ、料理好きなの？」
「何だ、突然」
「んー？　だって、昨日といい朝といい、うちの母親と随分料理に関する話で盛り上がってたみたいだからさぁ……」
問いに対し、千夜は少し考えるように溜めた。

「そうかな……まぁ、嫌いじゃないな。自分でつくったものは、気負う必要も無いし、自分で好きなもの食える。……自分さえ努力すれば、味も成果も上がる。……あと」

付け足す際に表情は、僅かに笑みが滲み、

「……自分がしたことを、誰かに喜んでもらえるのが……嬉しいと覚えたことだから、かな」

伏せられた視線がふいに遠くを向いた。

そこに自分がいないと知った久留美は、急に呼吸が苦しくなった。

「……料理って、自分の母親に教わったの？」

「……いや、自分で覚えた。俺の母親はお前のとは違って、そっちの腕はからっきしだったよ。だからというのもあるな。俺がつくらないと……俺はともかく、母親はあまり丈夫ではなかったから。ちゃんとしたもの食わせていないと、いつ何処で不調きたすかわかったもんじゃなかったんでな……」

ハンバーガーを一口齧り、租借。

一息つくようなその間は、呑み込みと同時に終わり、

「……最初は面倒くさかったが、だんだんやりがいを感じてきた。それは俺にとって、自分には他にも出来ることがあると気づく……きっかけになった。……それで――――」

「千夜」

終止の杭を打ち込み、久留美は立ち上がった。

千夜から奪ったポテトはまだ少し残っていたが、そんなことはど

うでもよかった。

「……そろそろ行かない？　映画のチケットも買わなきゃいけないし」

「え、でもまだ食べ終わってな」

「いーじゃん。映画館でポップコーン奢るから」

――――早くして。

――――お願いだから。

久留美は内心で吐くように訴えた。

言ってはならない言葉の群が胸の内で出せと暴れまわって、どうにかなりそうだ。

何故だろう。

千夜のことを知りたいと思って、彼女の話を聞いていたのに。

こんなにも腹立たしく、苛立ちばかりが募る。

望みに応えて、己を見せる彼女に怒りすら抱いてしまう。

――――だが、理由ならもう見つかっている。

既に自分はそれを理解もしている。

己を見せる際、彼女は自分に向かって語っているのではない。

千夜自身が己の過去を振り返っているだけだ。

久留美を見ていない。

相対しているにもかかわらず、完全に眼中に入れていない。

それが――――――これ以上続けさせることすら許せないほど耐え難く、腹立たしかった。

『友達は、大事にしなきゃ駄目よ』

聞いてそれ程経っていない香奈枝の台詞が、まだ鮮明に耳に残っている。

そんなこと、わかっている。

頭では、わかっているのに。

「……あ、久留美。そういえば、お前の従姉さん……何か言ってたか？」

ほら、またそうやって。

自分が目の前にいるのに、如何して他の人間に関心を向けるのか。

ぐるり、と臓腑のあたりに巣食う何かが蠢くのを久留美が感じると同時に、

「……迷惑だって」

「……」

「仕事上仕方ないことだから、ああいうのは慣れてるんだって。だから、下手に出ていれば済むことだったのに……あんたが、しゃしゃり出たから……店の評判落ちるかもしれないって……」

「――――そうか」

千夜の声に、久留美は逸らしていた目を向けた。

映る千夜は、笑っていた。

一見違和感のない完璧な笑顔。

けれど、

「悪いことをしたな。……多分、もう行かないと思うから。代わりに今度謝っておいてくれるか？」
「……怒ったの？」
「いや――――――次も行って、また同じ光景を見たら……間違いなく同じことやらかすだろうからな」

性分なんだ、と付け足して、千夜は久留美の傍を過ぎ、前を行く。
その後に久留美の中に落ちてきたのは、嘘をついた事実とソレに対する激しい嫌悪だった。

嘘だ。
香奈枝は文句どころか感謝すらしていたのに。
自分は、何故あんな嘘をついたのだろう。

……そんなの、自分がよくわかってるはずでしょ？

自問に対し、言葉が返せない。
千夜と香奈枝を二度と拘らせたくないと思った。
その願望に従い、久留美は嘘をついた。

……最悪だわ、香奈枝ねぇ。

忠告を無視した上、利用までしたここにはいない相手に、久留美は懺悔する気分で語りかける。

大事にしろと言われた。
きっと、出来たのではないかと思う。
相手が自分のもので。
自分だけを見てほしいという無茶な要求を呑んでくれるような関係の存在ならば。

だが、意中の相手は全部の枠から外れてしまっている。

絶対に自分のものにはならない相手に、どうして優しくしてやれるだろう。

自分には一切利益のない行為に、報われない行為に、身を削れるような人間ではない自分が、どうして。

……でも何より最悪なのは。

自分がこんな人間だということ。

自分が何よりも嫌う――――他人を自分の感情で振り回して、自分のしたことで影響を受けてくれるなら傷ついた顔すら歓ぶ、ウザくて迷惑な人間。

あらゆるタイプの中で、並ぶものがないほど嫌っていた人間が、自分そのものだったということ。

「――――本当に、最悪」

そのまま自己嫌悪の穴に落ちて動けなくなった久留美が歩みを再開したのは、後ろが不在であることに気づいた千夜が戻ってきてからだった。

◆◆◆◆◆◆

蒼助の体は震えていた。

温度変化云々ではない。

感情の衝動によってである。

「や、やったっ……！」

絞り出した声には必要以上の力が込もった。

まだ緊張が抜け切っていないのだ。

ひょっとしたら次の瞬間には、この達成感を崩す『崩壊』が起きるかもしれないという不安が促す緊張。

試しに十秒停止。

そして定めた時間制限が過ぎたのを見計らうと、

「センセー！　やったぜ、ついに出来たぁぁっ！！」

「んー？　どれどれ……」

カウンターの向こう側でコップを磨いていた三途が、布巾とコップを置いてそこから出て来る。

蒼助の居座る席へとやってきた三途が、机上で出来上がる『ソレ』をまじまじと観察視を数秒ほど行い、

「……もう意識の集中は……してないね」

「おうっ！」

「……結界、ちゃんと意識から”独立”しているね」

「おおっ！」

「……」

うん、と納得づくように頷いた三途は次の瞬間、

「――――よく出来ました。これで結界はクリアだね」

いよっしゃぁぁっと溜めかねた達成感を爆発させる蒼助にパチパチと拍手しながら、

「ところで、さっきの……」

「あ？」

「センセイって……？」

蒼助がさり気なく口にした言葉を聞き拾った三途は、どういう意図なのかを蒼助に問う。

口にした言葉にさして特別な意味は無かったのだが、と思いながらも蒼助は質問に対して答える言葉を考えた。

「……いや、いつまでも苗字にさん付けもどうかと思って……そもそも俺、敬語苦手なんすっよね……」

「……ははっ、らしいよね」

「納得されるのもなんか複雑なんすけど……んで、まぁ……多分これから長い付き合いになると思いますからここらで態度も一新させようと思って」

「それで……センセイ、か」

「……ダメですかね？　これからいろいろ教わることもあるだろうし……と思ってしっくり来るんじゃないかと思ったんすけど」

いや、そうじゃないよ、と三途は否定を示し、

「……ちょっと、懐かしくなっただけ」

「懐かしく？」
「うん」
三途は不快は欠片も無い表情で、眼を細め、
「……昔、そう呼んで懐いてくれた子がいたのを思い出してね」
過ぎた遠い日を想う笑みを浮かべた。

【壱百壱拾八】　嫌悪と自覚の果て　（後書き）

今回の話のポイントを挙げてみる。

・久留美の株が下だり気味。
・って、アレお前かよ三途。
・はしゃぐ蒼助。読者に指摘されたが、お前呑気すぎじゃね？
・千夜、自分不器用ですから発言。

次あたりから次回予告でもやろうかと思います。
そろそろ日常も傾き始めるので。

【壱百壱拾九】　領域侵害要求　（前書き）

私を見てくれますか

【壱百壱拾九】　領域侵害要求

そういえば、と気づいた一つの事実に意識が向いた時、

「……上弦さん、戻ってこないね」

「え……？」

まるで蒼助の考えに重ねが蹴るようなタイミング。

たった今、蒼助が抱いたそれに”似通った”ことを疑問として一足先に口にしたのは、三途だった。

「蒼助くんが部屋から出てくる前に出てきて、ちょっと出かけてくるって行ったきりなんだよね」

「え、そうなんすか？」

てっきり店内の何処かにいると踏んでいた蒼助は、予想外に少し声を上ずった。

「多分、黒蘭と何処かにいると思うけどね」

「黒蘭と……」

重なった。

黒蘭を今日は一度も見かけていないという事実という、蒼助が今しがた気づいたことに。

「……他にいろいろあるからあまり気にしてなかったけどよ。あの二人の関係もよくわかんねぇんだよな」

「あー……それは私もかなぁ」

それは蒼助にとって、意外をいく発覚となった。
少なくとも蒼助よりは遙かに拘りも深いであろう三途もわからないというのだから。

「……まぁ見てる分でわかるのは、男女のそれじゃないってことと」
「そりゃまぁな」

もし、そうだとしたら相当コアな関係だ。
主従関係に見えなくも無いが、上弦の発言からそれは違うことが既にわかっている。

「……間を繋ぐ存在あっての関係だってこと」
「間を繋ぐ存在……」
「上弦さんの見てる方は涙が出そうな忍耐力が続くのも……一重にそれがあるからじゃないかなって私は思っているんだけど」
「……そうか」
「あ、一応店は閉めておくけど、上弦さんが帰って来るまでここで留守番頼んでもいいかな？　今晩のおかず買いに行かなきゃならないから。今日、食べていくよね？」
「ああ……別にかまわねぇけど」

それじゃぁよろしくね、と了解を得た三途はそのまま店を出た。
財布は既に準備済みだったところを見ると、この結果を見据えていた上での申し出だったらしい。

一人となった蒼助に、話し相手がいなくなった。
鍛錬の時間も未だと控え、そうして完全な暇を手にすることとなり、

「……暇、だな」

事実をなんとなく口にすると、より一層その気分が高まった。
それを失くそうと、さっき達成した結界をより安定させるべく訓練を積もうかと思いもしたが、

「間を繋ぐ存在……か」

そう呟き、思い浮かべたのは――――千夜。
それ以外に三途の意図して述べた言葉に当てはまる存在は、蒼助には思いつかない。
そして、多分正解だ。
根拠も何も無い穴だらけの核心だが――――それ以外にあるだろうか。

……オイオイ接着剤かなんかかよ、あいつは。

だが、冗談めいた考えに不思議と違和感はない。
寧ろ、

……いや、そうかも……な。

思えば黒蘭、上弦に限らず皆そうではないだろうか。
朱里も。
三途も。

千夜という存在無しでは関係など持つことはなかったのではないか。
そして、蒼助自身も。

……考えてみりゃ、こんなこと無かったよなぁ。

一ヶ月足らずで随分多くと知り合った。
これまでの人生で一族以外で、名前を覚えるに至った他者は昶や蔵間を始めとして十人も行かない。
それなのに、今度はどうだ。
たった半月程度で五人は行った。

こんなことは、今まで無い。

……何処見ても、あいつばっか見える。

朱里と話していても。
三途と話していても。
上弦と話していても。
黒蘭と話していても。

全部――――千夜という存在越しに相手が見える。

……病んでるのか、俺は。

自嘲気味にぼやいたが、実際に己が行っていることは正気の沙汰ではないのは事実だ。

「そういや、どうしてっかな……あいつ」

気に喰わない同級生に一日借りられてしまっている千夜。
今頃、何処を連れ回されているのだろうか。

「妙なとこ連れてってねぇだろうな、あのヤロウ」

二度と借りなんぞつくるものか。
あとで様子見のメールでも打っておこうと決心し――――数秒後、

「……会いてぇな、ちくしょう」

人恋しい気持ち、というのだろうか。
そういった感情の経験の浅い蒼助には、何処か曖昧な判断しか下せない。
誰かがいないだけ物足りなさを得る。
そういった心の安定の欠乏を、蒼助は母親が死んだ時以来感じたことはなかった。

それを思い出し始めたのは、修行期間が始まると同時に起きたいざこざで千夜と別離していた時間の際だった。
それからというものの、一人でいるとその感覚の到来が必ずと起こる。
そして、そういった心の不安定さは千夜の不在だけが原因ではなく、

「……言われるままにあのオッサンと殺し合いじみた鍛錬して、センセーと結界の構成の練習して……」

その合間に千夜を追いかけて校舎中を駆け回って。
女との始末にヘマしたおかげで千夜を危険な目に合わせて。救けて。
突き放される前に暴いて。怒らせて。泣かせて。好きだと言わせて――――――

眼が回るような変化と共に時間は過ぎて、気がつけば、

「……明日が本番」

気分は、一夜漬けで期末テストに挑もうしているようなそれだ。
直前まで何もしなかったわけではない。
それこそ血を吐くような想いをした。
ほぼ二つ以上のことを同時進行しなければならないそのスケジュールは、相当なハードなものだった。

スタート地点の時よりは、成長している。少なくとも。
まだ走り始める前だったあの時よりは、この手に得たものはあると確信している。
けれど。
けれども――――

不安は少しも揺らがず、蒼助の胸のうちでとぐろを巻いて居座ったままだ。
それもそのはず。
何故なら、

「試験ったって……何するんだよ？」

とはいえ、内容はわかっている。
四日前――――日曜日に、黒蘭によって見せられた霊剣。
黒染めのそれに使い手として認められることだと言われた。
だが、どうすればいいかは聞いていない。

聞く間もなく始まった鍛錬の中で、その見えない試験方法は蒼助

の中で不安として燻り続けていた。
本人に直接聞けば問題ない――――わけが無い。

「……聞いてすんなり答える奴じゃねぇし」

きっとはぐらかされる。
そして、絶対に本番まで答えないだろう。
そういう奴だ。

「……あ゛ー、くそっ！」

ガリガリと痒くもない頭をいてもたってもいられなくなって両手で掻き毟り、蒼助はそのまま振り下ろすようにテーブルに突っ伏した。
額でゴチン、と鈍痛が響いたが、寧ろそれで少しでも気を紛らわせればいいと思いながら、

「……早く帰ってこねぇかな、ホント」

千夜、と。

祈るように、蒼助は低く唸った。

◆◆◆◆◆◆

上映が終わると同時に出てくると、同時刻に同じく上映終了した空間から出てきた人が波を作っていた。

「平日なのに、意外と人がいるもんだな」

「あれは、あんな中の半数はサボりね」

「かもなー」

他愛無い会話を交わしながら、押し寄せる波の中に入り込む。逸れない程度にその流れに乗りながら進み、

「……てゆーか、アレ面白かったけど……三部構成だったのね。あんなところで終わるから監督ったら映画舐めすぎとか思っちゃったわ」

「ああ。まさか、旅の仲間が分散するところで終わるとは思ってなかった。二部はいつぐらいに公開になるんだろうな」

「現在誠意製作中ってところでしょ。来年よね、どう見積もっても」

それまでファンは待ってくれるかが問題だな、と久留美は三部構成のネックに関して分析しながら、

「あんたは、アレどうだった？」

「ん？　普通に面白かったと思うが。注ぎ込んだ費用に見合う出来だったんじゃないかと」

「その点に関しては同感」

たかが娯楽に土地が買えるどころではない莫大な金を注ぎ込めるのだから、人間とはトコトン享楽主義をいく生き物だ。

呆れるが、そんなことを考える他所で久留美も同じ分類の中の人間であるという自覚はあった。

そうでなければ――――――隣にいるこの相手と、こうしているこ

となんてないだろう。

「あ、ゴミ捨ててくる。それも寄越せ」
「え、あ……うん。……じゃ、お願い」

近くにゴミ入れがないことを確認すると、千夜はそれを探しに久留美から遠ざかる。
その際、硬質な衝突音が足元で響いたのを久留美は聴いた。

「ん……え、ちょっ……千夜っ」

咄嗟にそれを拾い上げ千夜の背に声を投げるが、それも空しく遠のいていった。
落ちた『ソレ』を手に、一人残された久留美は、

「……携帯電話なんて、落としてんじゃないわよ……もう」

ジャケットのポケットから零れ落ちるのを見た。
人波の中を揉み合っているうちに押し上げられたのだろう。
とりあえず、落ちた衝撃で何処か壊れていないかを確認しようとした時、

「っ、！」

振動した。
着信の知らせだった。
表示がメールであることを久留美に教える。

そして、その相手は――――――

「――――っ」

蒼助。

その事実が中身の確認への躊躇を久留美から奪い去る。

罪悪感の存在は無視され、手は携帯を開いてメールの内容に辿りつくまで淀みなく動いた。

そして、指先はメールの中身を暴くまで行き着き、

「……」

内容はシンプルなものだった。

何時に帰って来るか。

夕飯は何処かで食べよう、など。

至って特別なものはない。

けれど――――久留美には手の届かない特別なものに感じた。

同時に湧き上がったのは、激しい嫉妬心だった。

どうして、という疑問の形をとった嫉妬。

何故、蒼助なのか。

何故、あの男だけがそんなにも千夜に深く立ち入ることが出来るのだろうか。

自分だって千夜の本性が露見するあの場に居合わせた。

スタート地点は同じはずなのに、気づけばあの男と自分はこんなに差がついている。

何処で――――何処で出遅れてしまったのか。

「……どうして、邪魔するのよ」

どうせ今日が終われば、またこのメールの主の下に千夜は戻る。
明日からは、また蒼助のモノになる。
けれど、今日は自分といると彼女は言った。
そう望んだ久留美の願いをきいてくれた。

なのに。
なのに。

どうして――――

「邪魔、しないで」

気づけば指先は――――メールの削除に動いていた。

◆◆◆◆◆◆

メールの痕跡を残らず消し去った。
それらの行為を全て完了した後に、抑えていた罪悪感が疼く痛みとなって胸に滲み始めた。

何をしているんだろう、という今更の後ろめたさ。

千夜のプライバシーを勝手に侵害したということよりも、自分の仕出かしたことへの空しさだけが久留美の心中を満たす。

閉じられた機体の中には、もう蒼助のメールは残っていない。

これで千夜との時間は守られた。

けれど――――少しも満足できない自分がいた。

「……今日、だけ」

では、明日にならどうなるのだろう。

明日の自分たちは、一体どうしているのだろう。

見えない明日に向けて、不安がもくもくと立ち込めていく。

明日は今日の振り替えで、土曜日でも学校がある。

心配などする必要はなく、明日はそこで会えるのだ。

だが、思わず想像してしまった。

明日の教室に、千夜の姿がない光景を。

「――――久留美！」

久留美の思考の世界に、割り入るように声が響いた。

ハッと我に返った久留美の目には、周りの人間は完全に排除された状態で駆けて来る千夜の姿だけが映った。

自分に向かって。

それが久留美の荒れる心の波を少しだけ鎮める。

「待たせたな。ゴミ入れがなかなか見つからなくて結構遠くまで行

く羽目になって」
「そ、そう……あ、ほら……コレ」
「携帯？　何でお前が」
「……ポリバケツ探しに行く時、あんたが落としたのよ。気をつけなさいよ」
「ああ、悪かったな。ありがとう」

気づかない。気づくはずもない。
千夜の姿が視界にないのを確認してから、消したのだから。

手渡す瞬間に、罪悪感が一層胸の奥から突き出てきたが、久留美はその苦悩を表情に出さないように耐えた。
だが、千夜の顔を見ることだけは、どうしても出来なかった。

切り替えなくては、と一つ息をつき、

「……さって、これから何処いこっか。ゲームセンターとか、この辺りで服とか見てくとか……遊園地なんかもいいかもね。時間はまだあるし、私はどっからでもいいけど、あんたはどうした――――」
「久留美」

遮断するような響きを持って呼ばれ、久留美は言葉を思わず止めた。
すぐ目の前の外へと進めようとしていた歩みを止めて、

「……な、なに？」

まさか、と嫌な予感が過ぎった。
見られていなかった思っていたのは自分だけに過ぎず、久留美の愚行を千夜は死角にてしっかり見ていたのではないか、と。

額が嫌な汗で濡れた。

だが、

「……お前に、ずっと言わなければならなかったことがある。ずっと、言い損ねていた……あの時こと」

え、と久留美は眼を見開いて首だけ振り向いた。

己の予想とは違う内容である兆しへの安堵を抱きながら。

顔だけ向き合い、見た千夜は、

「……あの時、巻き込んで悪かった。それを、ずっとお前に謝りたかった」

本当にすまなかった、と千夜もまた目を逸らして口にした。

何故今になって、と久留美は複雑な心境でその謝罪について思う。

確かに自分はあれには巻き込まれた形で拘ることになった。

あれは千夜の巻き添えも同然。

その点については否定も弁護もしない。

けれど、

「……なら、教えてよ」

謝罪は求めていない。

もうそこに踏み込まずに済むように、遠ざけられることも望んでいない。

ただ――――恐らくは、蒼助に許したように。
自分にもそれを許して欲しい。
千夜の中に、入っていくことを。

「――――――あんたのこと。教えて」

だから、久留美は自ずと紡ぎ、明かした。
自らが求めていることを。

正面から向き合って。
真っ直ぐに要求を突きつける。

千夜はそれに驚いたように眼を瞼を瞬かせたが、やがて久留美の意図を呑み込むように一度その視界を閉ざす。
そして、再び視界を切り開くと、同時に笑みを刻んで、

「――――ダメに決まってんだろ、ボケ」

容赦も手加減もなしに、ぶった斬った。

［壱百壱拾九］　領域侵害要求　（後書き）

最後の千夜の切り捨て御免な台詞を見て、久留美の行動にいい加減イライラしていたところをスカッとした人がどれぐらいいるが気になるところ。作者ももれなくその一人であるが（オイ

ちょいとおイタをし過ぎな久留美にそろそろ歯止めをかけなくては。

次回、平穏の崩壊開始。

【壱百弐拾】　領域侵害拒否　（前書き）

さよならと泣いて
また逢えたらと
私は朽ち果てかけた希望を抱く

【壱百弐拾】　領域侵害拒否

あまりにも切り替わり過ぎではないかと思わずにはいられない、手厳しい返事だった。
それに久留美は一瞬唖然とし、そして、
「な、なによそれっ！　ふざけてんのっ……！？」
立ち直って早々、当然の如く反撃の態勢へと切り替えた。
しかし、そんなことなど袖にも掛けないように、
「それはこっちの台詞だ。何の為に、謝ったと思ってるんだ」
「何でって……」
「わからないなんて、聞かせないでくれよ？」
警告のように告げられたその言葉に、久留美は思わず口を噤んだ。
どうしてこんな空気になったのか、と振り返っている暇はなかった。
とにかく考え、十秒に至るかそうでないかの寸前のところで沈黙を絶ち、
「……何ソレ」
先程と同じ台詞が口をついて出た。
だが、それを押し出した衝撃と怒りは比べ物にならないまでに膨らんでいた。
千夜の突きつける理不尽さに対して。

「……ねぇ、それって……ちょっと、違うんじゃないの？」

声が震えているのを久留美は自ずと理解していた。
だが、そうせずにはいられない。
内で煮詰まる怒りが今にも噴き上げてきそうだった。
けれど、

「……違わない。少なくとも、俺――――終夜千夜の意思はこうだ」

目の前の人物は真っ直ぐと突きつける。
久留美の苦労も辛抱も知ったことではないとばかりに、己の意思を曝け出して。

……あ、そう。

プツン、と久留美の中で琴線が儚く切れる。
理性も。我慢も。

――――限界であった。

それを己が認めた瞬間に、久留美は既に感情のままに動くことへの躊躇を消した。

「っっ、いい加減にしてよ!!　あんたが私に謝って、何が終わるって言うのよ!!」

求めていないものを与えられ、自分たちの関係がそれで終わると考えているのだろうか。
そんなわけがない。

そんなことで済ませる気はない。

「私、私は言ったわよね!?　無かったことにしないでって、言ったわよねぇっ!?」

「言われた。確かに聞いた。――――――だが、断る」

久留美の感情の訴えに対し、千夜は何処までも冷静な拒否を返す。

その迷いも微塵もない言い切りに、久留美は絶句していると、

「なぁ……久留美。お前はどうして俺にこだわるんだ?」

「は……?」

どんな追撃が来るのかと脅えていた久留美は、その問いかけに拍子抜けした。

呆ける久留美に千夜は、ああ、と失敗したように、

「すまない、言葉が足りなかった。……新條久留美、お前は……"俺という存在の何が惜しくて"……あの時俺を引き止めたんだ?」

あの時、という言葉に記憶は一気に思考は追憶へ走らせる。

千夜の言う『あの時』。

それは、

……私が廊下で詰め寄った時。

久留美は思い出を振り返り、考えた。

あの時の自分はどうしてあんなにも必死で、この人を引き止めておこうとしていたのだろうか、と。

今考えれば、それは単純な答えが既に目の前に置かれている。
新條久留美は、そんな単純な答えに突き動かされてあんな行動に出たのだ。

いつ人が来るかもわからない廊下で。
理性も何も吹っ飛ばして。
感情を走らせて。
まるで自分を捨てようとする男に追いすがる女のように。

置いていかないで、と。

「……っ」

そんな自分を再度見つめ直して、久留美は羞恥に顔を歪めた。
時間の経過を経て見る過去は、時に本人には見るに耐え難いものになる。

けれど、答えは一つしかない。
あの時の自分は間違いなく――――――

――――言うの？

唐突に、決意をかき乱すかのように割り込む声。
それは覚えのあるもの。
気のせいと無視するには、確かに聴き捉えてしまった。

――――それ、言っちゃっていいの？

途端。
久留美の中の追憶の作業が急激に進んだ。
記憶は本人の意思を無視して、無意識のうちに更に遡る。
戻り、戻り、そして行き着いたのは――――

見覚えのある光景。
白い雪が降る無人の公園。

静かなそこに、ただ一人取り残されたように立つのは、幼い小学生。
しかし、確かな面影を宿して存在するそれは、見紛うことなどあるはずのない。

『新條久留美が、最も忌み嫌う新條久留美』だった。

幼い久留美は哂っていた。
今の久留美を嘲るように。
過去の失態を剣のように振りかざして、

――――その本音をぶつける気でいるの？　昔、そうやって失敗したくせに。

クスクス、という嗤い声が、フラッシュバックを導く。

そこには別の久留美が無邪気に笑い、誰かと何かを約束していた。
彼女はそれが果たされると疑っていない。
そして、彼女には見えていなかった。
その約束を仄めかす度に、相手はいつもすまなそうに苦笑いしていたのを。

気づかなかった。
見もしなかった。
幼く狭すぎたその視野を絶対と疑わなかったその愚かな子供は、いざ約束の時となって何を見る羽目になっただろうか。

『センセイ、弟子って家族に入るかな？』
『んー、どうかなぁ』
『でも、センセイのセンセイは？　センセイは、その人のこと家族だって思ってなかったの？』
『……ううん、思っていたし、思っているよ……ずっと』
『じゃぁ、わたしがセンセイの弟子になったら、センセイの家族に

なるんだね！』

そう言い出した時、『彼女』は少し驚いたように眼を見開いた。
きっと喜んでもらえると、疑いもせず、その子供は確かこう言ったのだ。

『センセイ！　わたし、センセイの弟子になって、センセイの家族になりたい！　そしたら、センセイはもう一人ぼっちじゃなくなるよねっ』

『……久留美ちゃんには、もう家族がいるじゃない。私に着いてきちゃったら、心配するよ』

『平気だよ！　早めに嫁にやっちゃったようなもんだって、気にしないよウチの親！』

私はセンセイの方が大事だもん！

そう思い切ったのは、どれだけ自分が真剣なのかを伝える為だった。
それが、逆効果であったかなんて知りもせずに、

『……ダメだよ、そんなこと言っちゃ』

『センセイ？』

『家族に関して、そんな軽がるしく言っちゃぁダメだよ……それはきっと、君が――――』

哀しそうに苦笑いをして、『彼女』は何と言っていただろうか。
きっとそこで『彼女』は決めてしまったのだ。
自分を連れてはいくまい、と。

彼女自身が焦がれていたものを久留美に押し付けて、一人で行く

ことを。

――――ねぇ、言うの？　本当に言うの？

傷を抉るように突いてくる声。

かつての失態の象徴は、揺れ動く久留美を面白おかしそうに笑いながら、

――――いい加減、気づきなよ。

本音をぶつければいいってもんじゃないってことをさぁ。

「わ、わた、私は――――」

掠れた声が、それでもまとわりつく忌まわしい声を振り切ろうと絞り出る。

が。

前に立ち塞がるように、約束を果たされなかった場所で一人泣く己の姿が過ぎった。

ひ、と息を呑み、頭が白く染め上げられる。

くすり。

嗤うもう一人の久留美が、グワッと口を開けて久留美を呑み込ん

だ。

◆◆◆◆◆◆

数秒の呼吸の休止。
それが思考の切り替えのスイッチとなった。
同じ過ちを二度も犯してたまるものか、と。

そう思考が打ち出した途端、過去の自分は脳裏から消え去った。
それは、久留美にこれから返す返答こそが正しいのだという自信を付けさせた。

「――――……私、昔魔法使いにあったことがあるの。手品師とかそういうんじゃなくて、正真正銘の魔法使いに」
「……」

あの時の自分は子供だったのだ。
ただ言われたことを鵜呑みにするしかない、疑うことすら知らなかった無垢という愚かさしか持っていなかった。
だが、今は違う。

ただ時間だけを食って今に至ったわけではない。
駆け引きという武器を手に入れた。
もう、あの時の自分とは――――違う。

「その人は、趣味も何にも持たないただ日々を食い潰すだけだった

私に、非日常を教えてくれたわ。その時は、本気でその魔法使いに憧れて、弟子になろうと思ってたくらい本気でのめり込んだわ。……結局、その断られちゃったけどね」

自らの過去の失態を話し、恥を晒している羞恥を感じながらもそれに耐え、

「でも、私は夢を見ていたんだって、全部忘れようだなんて思わなかったわ。だって、それは……私の中で、それまでの何よりも現実だったから」

「お前にとって、その魔法使いと出会って過ごした非日常の方が、家族といた日常よりも現実的だったと……？」

「そうよ！　生きることに、ゾクゾクして、楽しくて、わくわくして……それって、そういうことでしょっ？」

心が躍り、興奮を得る。

それは生きていることを実感する瞬間以外のなにものでもない。

「私にとって、非日常は生きていると思える世界なの。私は、ここじゃ生きている実感を味わえない。だから、人のプライベートを荒らしもしたし、危ないことにだって首を突っ込むわ。生きていると、私自身が理解する為に」

呼吸して動くだけが生きている証なわけがない。

それが本人が実感を得て、初めて証明になる。

生きているとはそういうことだ。

「けどね、そんなの所詮紛い物だった。それで誤魔化し誤魔化しで、自分を満足させてきただけだったのよ。もう潮時かなって、心の何処かで思ってた……そんな時、現れたのはあんただったわ」

衝撃的だった。
心が吹き飛ぶほどに。
それだけのショックを、自分に与えたのは千夜。
「諦めようとしてたのに、あんたはもう手には届くはずも無いと思っていた非日常を連れて私の前に現れた。ねぇ、巻き込んで、目の前で見せびらかすだけ見せびらかして……それで、もう拘るなっていうのはズルいんじゃないの？」
「ズルい……？」
「そうよ。卑怯よ……私が欲しかったものをこれ見よがしにしておいて！　私を一度は受け入れておいて！！」
理不尽ともいえる糾弾だ。
だが、相手に反論も許さずに立て続けに口走るのは効果的だ。
己の言いたいことを言えないままでいるうちに、ふっかけられると大抵の人間は意志を揺らがせてどんどん防御と体勢を崩していく。
千夜にだって例外ではない。そういう一面があることは知っている。
だから、弱いところを突いて、体制を崩して。
要求を突きつける。
お前にはそうしなければならない、と。
「……つまり、お前は……私が現れなかったら、あの時拒んでいれば……諦められたのか？」
不意に、静かな問いが来る。
揺らぎは表面上には見て取れないが、千夜ならそれを隠すことだ

って容易だ。
よって久留美は己が優位であることを信じて、答えた。

「ええ、そうよ。あんたが現れなければ、私は諦められたわ！　だから、あんたには……」

「――――そうか。では、私は今度こそお前の前から消えるとしよう。お前が諦められるように」

返されたその言葉。
その意味を理解するのには、一度思考回路の電源を落す必要があった。

「ぇ？」
「ここでお別れだ。多分、もう会うことはない。学校でも。この街の何処であろうと。
――――さよならだ、新條久留美」

一方的。
それこそ、先程の久留美のように反論すら許さず。
いつの間にか情勢の優劣が逆転している。

復興した思考は何処で手順を間違えたかを探り、見つけ、そこで逆手を取られたことを久留美に知らせる。
同時に、久留美の敗北も。

「……あ、ぁ……」

千夜は既に久留美を見向きもしないで背を向けて歩き出している。
錯覚ではなく、本当に距離が開こうとしている。

今度は、立ち止まる気配は――――無い。

「――――っ、っ、待ちなさいよっっ！！」

駆け引きなど脳から吹き飛ばす勢いで、久留美は呼び止めを叫びに乗せた。
それだけではダメだと思って、身も乗り出して、遠のきつつあるその手を掴んだ。

千夜はそこでようやく立ち止まった。
出かけの際と違うのは、それが久留美という他意によってという点だった。
証拠に、千夜は振り向きはしない。
背中が拒絶を語っていた。

待ってくれたのではなく、拒絶を自分が跳ね除けて無理に繋ぎとめているだけに過ぎないのだという事実を痛感しながらも、

「……”ソレ”を通すっていうんなら、別に良いわよ」

良くない。
けど、

「私はあんたに敗けた。あんたは勝った。だから、あんたの好きにすれば良い」

嫌。
駄目。
でも、
「……だけど、せめて……せめてっ……敗者（わたし）に納得のいくような説明をしなさいよっ」
それは足掻きだった。
敗北を決したのではなく、その一歩手前にいると悪足掻く久留美自身の意地。
諦めない、まだ逆転の機はあるかもしれないという醜悪な縋り。
そこまでわかっていながらも、久留美は捕らえた手を放さなかった。放せなかった。
疲れてもいないのに、呼吸が苦しい。
胸が、痛かった。
「……お前が、気づきもせずに求めるからさ」
「……？」
視線は依然と久留美を向くことはなく、背中越しに答えが放られる。
『求める』の言葉に続く言葉はわかる。
だが、『気づかない』とは。久留美は己が何に気づいていないかは理解しかねた。
「……私が、何に気づいていないって？」
「お前にとって日常こそが生きる場所であるということに、だ」
返答に対して、覚えたのは拒否感だった。

「なにを……さっき言ったの、聞いてなかったわけ？」
「聞いていた。で、思った。――――わかってないな、と」
「だからっ……何をっ！！」

さっきから一人叫んだり喚いたりしてばかりだということにきは気づいていた。
周りの視線もさっきからずっと集中しっぱなしだ。
だが、どうでもいい。
引っ込んでろクソ外野ども。どっか行け。行けったら。

「自分が生きているのに、興奮とかは必要ないと思うんだ。心が躍らなくても、人間は生きていける」
「違うわっ！　心臓は動いてても心が何に対しても動かないなんて、そんなのは……死人が動いてるだけとなんら変わりないじゃないっ！」
「そうじゃない。そういう意味じゃ……なんと言えばいいのか」

言いたいことを説明へ変換するのにてこずっているらしく、千夜は掴まれていない手の指先で頬を掻き、

「まぁ、あれだな。お前が望むほど、極端に生きていると感じなくても……人間は立派に生きていけるということだ」
「答えになってないわよ。……あと、イミわかんないし」
「わかろうとしていないからだろう」
「理解しようとしてるわよっ！　でも、あんたの言ってることさっぱりわかんないわっ」
「してないだろ。……ほら。そうやって、拒否で返す」
「……っっ」

戦況が覆るどころかビクともしない。
反論も出来ず、久留美が唇を噛み締めていると、
「……理解出来ないといえば、俺もお前のことは言えないな。なぁ、わからないんだ……久留美」
「……え？」
「――――お前がどうして、そんなにも日常を嫌うか」
俺にはソレが理解出来ない、と溜息交じりにぼやき、
「……何もかも奪い去るような波はない。心をかき乱されるような予想外的な要素もない。誰かが退屈と評する日常。……だが、俺はそれでいいんだと思う。俺は、それが欲しかった」
独白めいたものの中に、ちらついた千夜の願望。
それを聞き逃さなかった久留美は、信じられない想いで眼を見開いた。
「……一定のゆったりとした小波が続く海面。その上に浮かんで、俺はただ時間だけが過ぎていく穏やかさを感じていたい。揉まれるような荒波を望むお前とは対照的だな、これは」
まるで皮肉を押し固めたような言葉。
久留美には、何故かそう聞こえた。
「昨日、お前に家に招き入れられてから……一層強く思うようになった。俺は、きっと……日常（ここ）が好きなのだと思う。お前が非日常を求めるように……求めているんだ、日常を。だから、わからない。お前が、ここを嫌うことが」

そこまで言われ、閉口を堪えきれなくなった久留美は限界を振り切り、

「だからっ、だから……言ったでしょっ！？　私はそんな生ぬるいもの飽き飽きしているのよっ！　何の刺激もない、ここは……脳みそが溶けそうな退屈しか転がってない。だから、私は……」

「それは、久留美……お前の」

――――――持っている人間としての傲慢な言い分でしかない。

返された言葉が、久留美の脳に一つの場面のリフレインを起す。

『それは、君が持っているから言える我が侭だよ』

まるで怒りたいを我慢しているかのような歪な苦笑い。

過去の映像が、そのまま現実の千夜に重なる。

見えない千夜の表情があの時見たものと同じ表情を浮かべているという久留美の想像のように。

「難しいかもしれないが、もっとちゃんと向き合うべきだ」

『もっと、大事にしなきゃ駄目だよ』

「失って、どうにもならなくなって、途方も無い後悔をしてからじゃ遅いんだ」

『手遅れになってら、どれだけ泣いてももうどうにもならないんだからね』

記憶のリフレインと千夜の言葉が重奏する。

それは重ねがけるような久留美への否定だった。

もうこれ以上、聞きたくなかった。

だが、たとえ耳を塞いでも、内側の声は止むことはないから無意味だ。

煩い。

どいつもこいつも。

……なんで、あんたまでセンセイと同じ事を……。

待ってくれたのに。

置いていかないでくれたのに。

なのに。

なのに。

どうして――――――

「当たり前のように、帰る家がある。当たり前のように、産んで、育て、帰りを迎える両親がいる。当たり前のように、それらと過ごす時間を許されている。

――――当たり前。それはとても幸福で、満たされている証だ。

だから、久留美……お前は特別なことを求める必要は……」

「――――――わかったような口きかないでよっっ！！」

たまらず、久留美は怒鳴りたて、その先を遮った。

教えを諭すような言葉が、とても精神を逆撫でたのだ。
言葉が止んだのを皮切りに、久留美の中で堪えていたものが堰を切ったかのように腹の底から押し上げて、口から溢れ始める。

「……あんた、何様なわけ……？　自分の考えが絶対正しいみたいな言い方して……人のこと否定するだけの権利があんたにあるとでも思ってんの！？」
「久留美、そうじゃな……」
「うっさいわね黙りなさいよ今は私が喋ってんのよっ！　あんただけ今まで散々喋ってたでしょ！」

何も聞きたくない。
ただ、もう何もかも全部吐き出してしまいたい。
久留美はその衝動に身を任せた。

「あんたにっ……わかるもんか！　あんたにだって、わからないわよっ……私の気持ちなんて、わかるわけないわよ！　私の欲しいものを当然のように持っているあんたには……絶対に、わかるわけがーーーー」
「なら、答えは簡単なことだよ。久留美」

悪魔で冷静な声が、煙のように捲くし立てられる久留美の喧騒を割るように響いた。
そして、

「ーーーー俺が理解出来ないなら、お前に非日常を理解することは出来ない」

その一言がトドメだった。
久留美で止めようの無いほどに荒れ狂っていた感情は、その一撃で木っ端微塵に砕かれた。何かに吹っ切れた時のそれに近い、あっという間の感覚だった。

それによる、一瞬の内なる場所での静寂の訪れ。
その僅かな間にて、久留美の中で――――――何かがグルリと”裏返った”。

あれほど強く掴んでいた久留美の手は、するりと縄が解けるように千夜の手から落ちる。
久留美の生む静寂と無反応が、皮肉にもようやく千夜を振り向かせた。

「……確かに、俺はお前の手には届かないものを持っている。だが、お前が俺の手には届かないものを持っているのも間違いないんだ。だから――――」
「――――わかった」

淡白な了承の言葉。
だが、自分の口から出たその言葉が、当の久留美には表現しきれないほどの粘着質さとおどろおどろしさを持っていることが感じ取れ、理解できた。

胸の奥で巻いているとぐろがかつてない唸り声をあげていた。

その存在を十分に膨らませて、肥え太っていた。
おかしい。
最後にその存在を認識した時からそれほど時間の経過はないというのに。

だが、久留美には理由がわかっていた。

暗い感情。
先程受けた衝撃が、産んだそれを存分に食らって一気に大きく育ったのだ。
育ちに育った蛇のように内でその肢体をとぐろ巻いているものは、もはや久留美の手に余る存在となって内に君臨していた。

獣は吼(な)く。
久留美の口はそれを代弁する。

「……わかった、もうわかった。あんたが、私をそこまで振り払いたいって誠意は十分伝わった。無理言って御免。ウザかったよね。しつこかったよね。……いい加減うんざりしてたわよね」
「……」

返事は無い。
その無言は、肯定であり否定する言葉はないという表われであると単純化した久留美の思考は、深読みをせずそう処理した。
ならば、と久留美はまた一つ振り切る。

もう遠慮する必要は無い。
迷いもいらない。

獣がその裂けた口を開き始めた。

「……じゃぁ、さ……最後に、一個だけ私の頼み聞いてくれない？　無茶なことじゃないから……」
「……ああ、何だ久留美」
その応答が、久留美の中の火蓋を切った。
そして、
「――――消えて。あんたの顔なんか二度と見たくない」
もっと怒鳴り立てて出るかと思った己の言葉は、思ったよりもずっと静かな口調でするりと出てきた。
ただ、喉を通って出てきたそれは酷く冷たいように感じた。
「ああ、わかった。了解だよ、久留美」
返事に、伏せていた顔を思わず上げた。
そうして千夜は、久留美の投げてぶつけた言葉に、悲しむことも、苛立つ事も、怒ることも、当然の態度として表情に表してはいなかった。
ただ、出て行く誰かを送り出すように、
「――――さよなら。元気でな」

ただ、振り返ることも立ち止まることも許さない微笑を久留美に向けていた。

あ、と声を震わし、更には足も震えた。

途方も無い絶望感だった。

結局、あれだけしてもこの相手を一つも傷つけることは出来なかったということ。

自分の痕はこの人の中には残らず、残すことすら甘んじてはもらえなかったということ。

それらを理解したその瞬間。

バタン、と扉が目の前で閉まる音を久留美は幻聴した。

閉め出されてしまった久留美には、千夜の前から走り去る以外の行動が思いつかなった。

［壱百弐拾］　領域侵害拒否　（後書き）

もう、アレですね。
久留美はもし蒼助が失敗したらこんな感じに拒まれていたという再現担当です。今のところ。
みんなー、何が悪かったと思うかね？
作者的には四つくらい答えアリ。

【壱百弐拾壱】　行き場無き想念（前書き）

震えるほどに
あの時のまま

［壱百弐拾壱］　行き場無き想念

三時過ぎ。

間食時に数えられる時刻、久留美は自分の地元に戻ってきていた。

渋谷区幡ヶ谷。

家には帰らず、駅からのその帰路の途中にある幡ヶ谷第三公園に留まっていた。

公園の敷地の半分ほどを陣取る、公園そのもののシンボルである水遊び場が特徴とされており、夏場は親に連れられた子供たちに占拠される。

しかし、まだ時期を迎えないそこは、水も冷たく気温も肌を晒すには低いため、その人口もごく僅かだ。

そうなるのは、親が子供に風邪を引く、まだ早いと咎めるからであって、子供たちには水への好奇心が絶えておらず、隙あらば靴を履いたまま足を踏み入れようとしている。

それを目論んだ一人の子供がバランスを崩して倒れこみ、全身を水浸しにしてしまったのに親が悲鳴を上げる様子を久留美は、ベンチから見ていた。

「……ばぁか」

子供ほっといて井戸端話なんてしてっからだっての、と遠巻きに眺めて悪態づく。

その一事件から興味を失った久留美は、視線の対象を噴き出る噴出場へ変えて何を思うわけでもなく無意識に見つめ出す。

その意図のこもらない動作は、嫌でも物思いを起させる。

……私、何でこんなところにいるんだっけ。

時間は思った以上にせっかちで、ここに来て一時間が経っている。
その一時間前、久留美は渋谷道玄坂にいた。
従姉の店を訪れ、手伝わされ、その後は映画を見た。
一人ではなかった。
一緒に――――

……でも今は、一人だ。

ふとしたキッカケで状況が一転してしまった。
自分が先だったか、相手が先だったかは記憶があやふやだった。
ただ、本当に一言でそれまでの穏やかな雰囲気が消えてしまい、

……何よ、元気でって……。

――――サヨナラ、ゲンキデナ。

さして経過していないためかまだ新鮮な記憶が、脳の中で反映及び反響。
蘇るのは、かつて受けたことの無いタイプの拒絶。
激情とは程遠い穏やかさ。
まるで、また明日ね、と言うかのように――――彼女は、今生のお別れを告げた。

口調は落ち着いていた。

だからといって、冷たく突き放すようでもなかった。

けれど、それは。

今まで久留美が聞いてきた拒絶の中で、追随を許さない徹底さを感じた。

わけもわからず閉め出され、扉を閉められた。

理解り合いたいという要望すら一方的に切り捨てられてしまった。

……そういえば、”あの時”も似たようなもんだったかな。

一方的に断ち切られた。

その点を踏まえると、今回も同じ結果になった。

あの時とは違い、危機感を既に覚えていたのにも拘らず。

あの時とは違い、抗う余地があったのにも拘らず。

結果は同じ。

久留美は、また一人に戻った。

「世の中、そんなもんってこと……かも」

はぁ、と無造作に溜息を付く。

努力すれば報われるとは限らないということ。

どんなに努力を重ねようと、登れない山はある。

努力で成り上がった人間の影には、同じようにしたにも拘らず認められなかった人間は腐るほど存在するだろう。成り上がるには何かが足りなかった。努力だけでは穴埋めできない何かを抱えた次席たち。

自分は多分そこに位置する人間だろう。

成りえなかったのは、自分が日常の人間だったから。
はなっから不合格的要素を抱えて無謀な挑戦をしていたに過ぎない愚かな人間。

それを二度目の失敗で、やっと思い知った。
それだけのこと。

「それだけの……こと」

思ったことを口にした。
途端、何故か目が熱くなった。

……え、うそっ。

慌てて上を向いた。
しかし、目の奥から来るモノは構うことなく込み上げてきて、

「ちょっ、や」

出る、と思った瞬間、それはポコリと噴出すと、頬を流れた。

「……あ、――――――」

出てくるまでは熱かったそれは、大気に触れるとすぐに冷めてしまった。
首筋までくると、背筋にブルリとくるほど冷たくなっていた。

そして、それは久留美にまた一つ思い出させた。

クリスマスの夜。
久留美は、ここで待っていたのだ。
魔法使いを、この場所で――――――このベンチに座って。
約束が果たされるのを信じて。

手がかじかみ、頬が真っ赤になるまで待っても、それは果たされなかった。
久留美は心配して怒った母親に連れ戻され、散々怒られた。
そして、その晩風邪をひいた。
喉もやられて高熱にうなされながら、ベッドの上で己の状況を振り返った。

どうして、まだここにいるのだろう、と。
途端に涙が出たのだ。
そこで久留美はようやく置いていかれた事実を理解した。
絶望感と共に泣き喚いた。
どうしたことかと母親が動揺するのも構わず、泣いたのだ。

これは、あの時と同じだ。
最初の一滴で理解し、次に絶叫をあげて泣き出す。
既に前兆が起きた後、来るのは当然、

「う、ぁ……っ」

口を押さえる。
こんなところで声を上げて泣くなんてみっともない、というまだ残るなけなしの自制心が身体を動かした。
この理性もいつまで保つかはわからない。
でも、それでも――――――ここで、泣いてしまいたかった。

「うぇっ……」

喉がしゃくりあげる。

駄目だ、もう泣く。

そう思った時、

「っ、！」

突然、太股で振動が生まれた。

一瞬何もかも吹っ飛ぶ勢いで、驚き来るところまで来ていた涙が引っ込んだ。

正体はポケットの中の携帯電話だった。

メールに対してはマナーモードを設定している。

無視して泣こうかと思ったが、泣きは今の横槍ですっかり奥に引っ込んでしまった。

「……誰よ」

知り合いに、返事を待たなければならない手間を踏むメールなんて方法を使う人間はいない。

ただのチェーンメールか迷惑メールだろうか、と当然の考えが過ぎるが、実際に確認しないことには事実はわからない。

たかがメールにそこまで気をやり迷っているのも馬鹿らしくなった久留美は、苛立たしげに太股のポケットを探り、引き抜いた。

開いてみたところ、まず名前ではなくＵＲＬが代わりに表示されている。

アドレス帳の中には登録されていないことは明白であるそのメー

ルの件名は、「先日はどーも」と書かれている。
何のことだ、と更に先に進め、内容に行き着く。
謎のメールの相手の正体には、その先で判明に至った。

『こんにちは、黒井ゴス子です。
朗報はお役に立てましたか？』

あ、と久留美は軽く目を見張った。
三日前、久留美に千夜の情報を送りつけてきた謎の人物。
あの時はパソコンを通してだったが、今度は携帯電話。
……この人、一体どこで私のアドレス仕入れてんのよ。
しかも、よりにもよってこのタイミングで。
返事にどう応えるか、迷った。
……とりあえず、ここは安直に。

『はい、とても役に立ちましたよ。
ありがとうございました。』

単純な返事と礼のみを打ち込んで、送信。

そして、返事は五秒と待たず来た。

「はや……」

随分使い込んでいるのか、かなりの早打ちだ。

久留美は相手への謎をますます深めた。

『終夜千夜とはその後どうですか？

お友達にはなれましたか？』

返事の内容は、それを則りながらも返事ではなく新たな問いだった。

しかも、今の久留美にはこの上なくタイミングの悪い類の質問だ。

「……っ」

思わず携帯電話を握る手に力を込めてしまう。

わかってやっているということは当然であっても、今はこの上ない地雷だった。

返事に迷う。

そもそもこの人物は何者なのだろうか。

当初から付きまとう謎でありながらも、久留美は貴重な情報源としてあまり深くその点には触れないようにしていた。

だが、今となっては関係ない。

……会って、みたい……な。

様々なタイミングが重なっての一つの願望だった。

謎に満ちたこの相手を人目直接見てみたい。
そして、誰でも良いからこの胸のやりきれなさを聞いて欲しい。
一人でいると悶々としてしまうが、家に帰ってもどうにもならない。
誰でも構わない。
いっそ、よく知らない他人がいい。

たとえ、それが胸に渦巻く靄つきの原因たる存在に縁あるかもしれない人間であるとしても。

気持ちが固まり、返事を打つ。
しかし、それは当然質問に対する返答などではなく、

『よければ、今から会えませんか？

そのことについて相談したいことがあります。』

返答を餌にして誘いをかける内容を送る。
どう出るだろうか、と待つ数秒の時間は落ち着かなかった。

そして、返信が来た。
心臓を大きく一跳ねさせながら、久留美はメールの中身を開いた。

『いいですよ。

何処で会いましょうか？』

◆◆◆◆◆◆

最後のやり取りから十数分が経過した頃だった。
三十分は待つことになろうと踏んでいた久留美の予想を裏切る早さで、その人物は久留美の前に姿を現した。

「――――――」

公園の出入り口をまだかまだかと見つめていた久留美は、その姿を捉えた。
その瞬間の次に取った行動は、息を呑むという驚きの感情に促されたものだった。

待ち人と思われるその視線の先の相手は、妙齢の女性だった。
そして、遠目でもはっきりとわかるほどの見目麗しい美人だった。
腰まで伸びる長い黒髪。黒目。
大人の身体のラインを浮き彫りにする黒いフォーマルスーツに、黒いハイヒール。
何かも黒尽くめの装いのその人は、モデル顔負けのしなやかな動きと振る舞いで久留美の方へ歩み寄ってくる。

一瞬で魅せられた久留美は言葉もなく、それを呆然と見つめた。
そうしているうちに、女性は久留美の目の前までやって来て、

「――――新條久留美さん？」

指定した公園にてベンチで待っている、と言っただけだったのに、彼女は質問という形をとりながらも確かな自信を持って聞いてくる。

下手な女優やモデルなど横に並べるのさえおこがましいであろうその美貌の人の問いに、久留美は言葉もなく、ただコクコクと頷いた。

美女はそこで花咲くように笑い、

「……そう、直接会うのは初めてよね。――――初めまして、新條久留美さん。黒井ゴス子です」

「え、本名？」

「まさか。でも、貴方が会いたいと呼び出したのは【黒井ゴス子】でしょう？」

にこやかでありながら、初対面特有の壁を感じさせる言動だった。つまりは、本名を名乗るつもりもないし、教える気もないということだ。

最初が肝心とばかりに譲らない一線を黒井ゴス子は引いてきた。軽いジャブのようなそれに、呆けていた久留美も気を引きしめる。

「……初めまして。えっと……私はハンドルネームじゃないんですけど、そのままでいいです」

「じゃぁ、私はゴス子で。隣、いいかしら？」

どうぞ、と久留美は一人で真ん中を占拠していたベンチの上で、身体を左にずらした。

腰を座る様さえ優美なゴス子は、片足を組んで腰を押し付けた。

華も恥らう麗しの美女と貧相な眼鏡少女。
どんな光景だろうか、とこのアンバランスな構図を客観的に見てみたくなった。

「で、何から話しましょうか。とりあえず、世間話でもしてみる？」

茶化すようなゴス子に、会話を促された久留美は、そこに潜む真意を探る。

「しますか？」
「ん～？　貴方がしたいなら構わないけどね」

掴みどころがない。
まるで水を掴もうとしている気分だった。
まわりぐどい誘いは無駄だと知った久留美は、気分を切り替えた。

「……何処で、私のアドレスを知ったんですか？」
「パソコンは自力で。携帯電話のは、事前に千夜の携帯からこっそりね。便利ね、赤外線通信って」

千夜の、と聞いて久留美の中で次の質問を決まった。

「ゴス子さんは、千夜とどういう関係で？」
「関係、ね……」

まるで待っていたかのように、勿体ぶった口ぶりだ。
焦れながらも、久留美は耐える。

「……姉、みたいなものよ」

「みたいなもの？」
「まぁ、親戚とでも解釈して頂戴」
中途半端な返答だった。
だが、姉そのものではないという言動に対してはなんとなく真実味を感じた。
千夜は、妹の話はしても姉の話は一切持ち出さなかった。

「どうして、私にあんな情報流したんですか？」
「ちょっと手を加えたかったの。……貴方も見てたんじゃない？」
「何を、ですか……？」
「学校でもあの二人はイタチゴッコしてたんじゃない？」
あの二人、と聞いて思い至るのは人物は決まっていた。
ちらついた話の糸口を、久留美は見逃さなかった。

「ひょっとして……私、ダシに使われたんですか？」
「あら、鋭い」
聞いた久留美が拍子抜けするほど、ゴス子はあっさりと観念した。
つまりは、久留美は拗れている男女二人の橋渡しの役目を負う人間として、白羽の矢を立てられたのだ。
現に久留美はゴス子の思うがままに、いくつかの事情が重なった結果として思惑を行動に移した。
多く人間の行動の顛末として描かれたと思っていたあのハッピーエンドは、実際のところはこの最初の一人によって投じられた一石で全てが決まっていたのかもしれない。
そんな気がしてきた。

……なんか、すっごい人。

完全に一つの柱が折れてしまった気分だった。
千夜を相手に敗れた後の久留美には、この熟練した駆け引きの転が手との遭遇はある発覚の決定打となった。
自分は所詮、雑魚だという自覚の。

……もう、真っ当に生きた方がいいのかも。

勘が鈍った何らかの専門家はもう先が無いと同じだ。
鈍りを振り切る自信も失った。

一つ溜息をつき、気持ちに区切りをつけて、

「……私のことは、千夜から聞いた話で判断したんですか？」
「いいえ。千夜は私にそういう話はしないの。聞くまでもなく貴方は学校を突き抜けるくらいの評判の人物だったから」
「……そう、ですか」

ほんの少しの期待を込めての問いだった。
話していないのは彼女に限らないだろう。
きっと、千夜は誰にも話さなかったにちがいない。
切り捨てる予定だった人間のことなど、話すほど気にかけていたわけがない。

「……そういえば、その評判ではわからなかったことがあるわね」
「え……」
「話を少し戻しましょうか。最初のほうにしたものと同じ質問を私はあなたにしていなかったわ。私ばかり答えていては釣り合わないわよねぇ？」

今度は私の番だ。だから、答えろ。
言葉数の多いゴス子の台詞は簡略化すると、久留美にはそう汲み取れた。

「何ですか？」
「貴方が私に持ちかけた二番目の質問よ。
――――――貴方は、千夜とどういった関係なのかしら？」
「――――、――っ」

傷口を容赦なく抉られるような痛みを胸に感じたのは、錯覚ではなかったはずだ。
今日のことを知らないゴス子に悪意はなかろうとも、今の久留美には間違いなく痛恨の一撃だった。

久留美は何とか表情には出ないように、詰まった息を無理やり飲み下し、

「た、ただの……クラスメイトですよ？」
「でも、そう呼ぶには親密なようじゃない」
「親密なんて……学校で会ったらちょっと話すだけの仲ですよ？」
「あら、そうなの？　おかしいわね、私……昨日あの子の妹からは――――――”友達の家に泊まりにいってる”って聞いていたのだけれど」
「っ、？」

不意に逃げ道が埋め立てられた。
先程から感じていた違和感と、久留美はここでようやくまともに相対する。

……何、これ。

おかしい。

普通の話しているのに、違和感を感じること自体が間違っている。

非日常にこだわるあまりに、自分は普通の会話すら出来なくなってしまったというのだろうか。

……違う。

久留美は思わずゴス子を見た。

目が合う。

「どうしたの？」

こちらを伺いながら、微笑むゴス子。

だが、その笑顔に、一瞬だが。

――――千夜の面影が過ぎった。

それが姿かたちの無い違和感の具現の瞬間だった。

「っっ……！！」

久留美は思わずベンチから立ち上がった。

そして、ゴス子から距離を置くように一歩足を引いた。

何故、そんな風に思っていたのか。

何故、こんな簡単なことに気づかなかったのか。

千夜という非日常に当たり前のように接するようになっておきな

がら。

……そうよ、この人は。

相手に対する対応を自分は間違えていた。
この相手にどうして普通の対応が正しいなどと判断したのか。
だが、気づいた。
既に時遅しとしても。

この女性は、確かに千夜の知り合いだと言った。
嘘をついている風ではない。
彼女は本当のことを言っている。

だが――――そこをそのまま聞き入れたことが最大のミスだった。

『千夜の知り合い』であること。
それは即ち――――――

「……あらあら、今頃気づいたの？」

クスクスっと強張る久留美を嗤い、ゴス子こと――――――非日常の住人は言う。

「まぁ座りなさいな、新條久留美。私を招いたのは、貴方なのよ？」

そうして久留美に打ち付けられたのは、『今更逃げることは許さない』という裏づけがなされた釘だった。

［壱百弐拾壱］　行き場無き想念（後書き）

プロットの冒頭部分で八千字ってどういうことだろう（汗
全部書ききったら私の中の平均文字数（８０００～９０００字）を軽く越えるので区切りました。

はい、やっとこさゴス子さん登場。
何をたくらむのやら。

【壱百弐拾弐】　非日常再逢

――――――お座りなさいな。

逃がすつもりなど欠片もない相手の言葉をかけられ、久留美は鎖で足を拘束されたようにその場から動けなくなった。

ここにいてはいけない。
一刻も早く去るべきである。
この人物の目の前から。

だが、迷いという釘が深く打ち込まれて外れない。
もし、背中を向けたら。
逃げることを許さないこの女は自分に何をするだろうか。

先を予想できない恐怖。
予想など無意味であるという直感。
それらが久留美に停滞という状態を維持させ、離さない。

「……」

呼吸と瞬きだけが許された空間で、久留美は紡ぐ言葉すら考えることもできず、その場に立ち尽くした。
そんな状況下に置かれた久留美は、次第に五感を見失っていく。
ゴクリ、と溜まった唾液すら飲み下せず。
額に滲む汗の濡れた感触すら感じることが出来ない。

時間さえも止まって――――

「ねぇ、ちょっと。座んないの？」
「……へ、ぇ？」

長い沈黙を破ったのは、命令でも強制が込もっているわけでもない非日常の女の声だった。
軽い調子の掛け言葉に、久留美から身体の強張りがスルリと抜けてしまう。

「なにを緊張してるか大体予想つくけど……心配しなくても、貴方が考えているようなやましいことは何一つ当たっていないわよ」
「何を根拠に……そんなこと信じろって」
「あーのねぇ……」

ゴス子は額に手を当て、呆れた口調で、

「……呼び出したのは貴方。私は貴方に相談にのってほしいと呼ばれて出向いたの。私はメールで返事をもらえればよかったのに、貴方は私に会いたいと要求してきた。ねぇ、貴方の勘繰っているような点が少しでも臭うようなものが今言った中から見つかる？」
「う〝……」

痛いところを突かれ、言葉を詰まらす久留美をおかしそうに笑いながら流し目をくれて、

「まぁ、座りなさい。立ったままでも座ったままでも何も変わらないわよ」
「……逃げられないことに変わりないって？」
「この場で貴方の危惧するようなことは起こりはしないってこと」

悪魔で他意は無いと主張してくる。

そして更に、

「第一、そんなことをする理由が私には無いもの」

「……千夜から聞いているんでしょ？」

「こっちの世界を知ったことについて？　そんな気でいるのは貴方だけだから気にすることはないわよ」

「私だけ？」

「自分で思っているほど貴方はこちらを知らない。それが事実。こちら側である私から見た見解よ。だからこそ……千夜は、手遅れにならないうちに貴方を拒絶したのだしね」

不意を討つように出てきた名前に、久留美の心臓が跳ね上がる。

「どうして、知って……」

「壁に耳あり、障子に目あり。こっちはそういう世界なのよ。それも理解できていないうちでは、貴方は何も知らないも同然よ」

ほぼ一方的な言い分であるにも拘らず、久留美の反抗心は少しも奮えやしない。

千夜に徹底的にやりこめられたショックのせいか。

それともゴス子の言い分が適っているせいか。

いずれにしろ、それに対して迎え撃つ言葉を久留美は持っていなかった。

「……じゃぁ、私と千夜に何があったかも、知ってるの？」

「おおまかには。貴方たちがどんな会話をしたかまでは知らないけど」

それならば、何を相談したくて呼び出したかも、彼女には検討が

ついているということと判断してもいいのだろうか。
疑問と迷いを胸に、久留美はゴス子から一度目を逸らし、そうしてもう一度見た。

「座りなさい。立ったままでは疲れるでしょう？」

優しい声色で紡がれたゴス子の言葉に、久留美の心が揺らぐ。
胡散臭い存在が何を言おうが全部胡散臭くなるだけなのに、気がつけば久留美はもうそんなことはどうでもよくなりかけていた。

そもそも彼女をここに呼んだのは、紛れも無い自分だった。
彼女が何を思ってそれに応じたのかは知らない。
応じた裏で何を企んでいるのかも知らない。
そもそも本当にそんなをことを今もこうして考えているのかどうかも、久留美には知りえないことだ。

ただ、そんな久留美にもわかることが一つだけある。
それは、

「……話、聞いてくれるの？」

理性という束縛の目を掻い潜って、自然と口から漏れた問いかけ。
垂らされた一筋の糸に縋るような罪人のような心持ちだった。
当初の呼び出した用件を再度確認するかのように問う。

ゴス子は、そんな小さく細い問いを聞き逃さなかった。

「ええ、どうぞ。まずは、貴方の中に溜まったものをすべて吐き終えるまで聞いてあげる。相談はその後でちゃんと応じるから……ね？」

ポンポン、と先程まで久留美が座っていた場所をはたく。
招いた人間を、奇妙な形だが招くように。

「……はい」

そう頷いた時には、久留美は既に警戒心などくだらない粗末なものとしてかなぐり捨てていた。

◆◆◆◆◆◆

全て話した。
何もかも。

千夜とのことも。
己の過去の話も、
己の想いも。

今日生まれた想いも、積年の間に積もり続けた想いも。
新條久留美という人間が持っている感情全てを用いて表現し、言葉にして外に吐き出した。

ゴス子の声など途中から聞こえなくなるほど夢中になって、その行為に没頭した。

溜まって溜まって濁りに濁った恨み辛みは、いい加減体内に押し込めておくのがきつくなっていたのも知れない。
溜め込まれていたそれは、濁流のような勢いで久留美の口から押し出されていった。

息継ぎも二の次で、とにかく喋った。
喋って喋って。
当然苦しくなったが、それすらお構いなしでブチまけた。

「――――――っっ……げほっ、えふっ……」

そして、ついに渇いた喉にて酸素が突っかかり、咳き込むことになった。
長い長い懺悔のような久留美の語りは、ここでようやく途絶えた。

「あーあ、大丈夫？」
「へ、平気……っ」
「もっと落ち着いてゆっくり話せばよかったのに……」
「自分でも、そのつもりだったんだけど……」

自覚がなかっただけで、限界が来ていた。
もし、彼女が聞いてくれなかったら、何処でどんな風に爆発していたか想像も出来ない。

「……でも、ちょっと……すっきりしたから、良い」
「そう」

走ってもいないのに大きく乱れた呼吸を整えると、仕上げとばかりに大きく息を吸い込んだ。

「……ふぅ――――――」

肩から力を抜くように息を吐いて、項垂れる。

胸のもやつきがなくなったわけではないが、それでも状態は向上した。

「……結局ね、今回のことは私に与えられたなけなしのチャンスじゃなくて、もう諦めろって言うトドメだったのよ。私には手の届かない世界だって、分別をいい加減弁えろって話だったの……きっと、あいつもそう言いたかったんだわ。……ははっ、回りくどい言い方しないではっきり言えっての」

あんなに怒鳴っても叫んでも、少しも呼吸を乱さないで冷静にあしらったくせに。

それなら、もっとストレートに言って欲しかった。

そうであったなら、きっと、もっと――――――簡単に割り切れたというのに。

「詰めが甘いわよ、あいつ……未練なんて、残せないくらい……もっと手酷く言い切ってくれればよかったのに」

「あらあら、結構Mなのね。手酷くしてほしいなんて」

「あー……案外そうなのかも」

そう言われても仕方ない。

だが、中途半端な対応よりも全力でぶつかられた方がよかった。

それこそ完全燃焼というものだ。

ひょっとしたら、今よりかは幾分マシな気分だったかもしれない。

「もっと酷い振り方して欲しかったかな。いっそ、何も言わずに応答すら拒んでいなくなっちゃうとか……そういうの」

「そうなの？」
「……わかん、ない」

もう何だって良い。
全て終わってしまった今となっては、何を考えて振り返っても無駄なのだから。

「っ、……もういいの。今回のことでいろいろ思い知ったし……そろそろ未練がましく子供の頃の夢を引きずるのも止める。愚痴ったら、気も晴れたし……。明日になれば、全部元通りになる。あいつと会う前に戻るだけ。あいつがいなくても生きて来れた。それまでの日常なんだから……問題なんて、ないもんね」

ただ、日々が元の形に還るだけ。
それだけのことだ。
当たり前だったものが帰って来る。
たった、それだけの――――――

「話は粗方聞かせてもらったけど――――――解せないわね」

見切りをつけようとした思考を歯止めとしてかかる言葉は、それまでただ話しに耳を傾けるだけに徹していた隣接の存在から降ってきた。

「え……？」
「貴方は駆け引きに負けたといったわね。……そもそも、あの子を相手に駆け引きなどする必要が、何処あったのかしら？」

そこが皮切りだった。
今まで聞く体勢を維持していた反動のように、疑問の発露が猛攻し始める。

「何故、本音を言わなかったの？　何を恐れて言わなかったの？」
「……ぁ」
「他にもあるわ。大体、本当にあなたは非日常なんて求めていたのかしら。それが望みだったのかしら？」

ねぇ、とゴス子が顔を傾け、久留美に直視を向ける。
それに射抜かれた久留美は思わず表情を凍らせた。

「――――あなたの本当の望みって、何？」

突き合わせた相手は、もはや懺悔の聞き手ではなかった。
内に秘められたものを容赦なく暴く冒涜者が、知らずのうちに入れ替わったかのようにいつの間にかそこにいた。

「あ……え、と……」

あまりの変貌ぶりに、久留美は言葉を失くした。
怯えにも似た口ごもりを見せる久留美に、ゴス子は、

「……急に畳み掛けすぎたわね。だって、貴方が自分を誤魔化して勝手に終わらせようとするんだもの。これくらい言わないと止まってくれないと思って」
「……私が、誤魔化してる……？　何言って……」
「私を呼んだのはそれが目的だったんでしょ？　まだ諦めきれない

自分を諦めさせる為に……そのために私を呼んで、諦めきれない想いを外に出す場をつくり、私という外からかける是非の存在を用いて……貴方は諦めきれない自分に誤魔化しをかけたかった」

「ち、ちがっ……私はっ、ただ誰かに聞いて欲しかっただけで……」

「――――ほら、発見。……誰かに聞いてもらった。やり場のない想いを外へ発散したその満足感で、あなたは自分の納得の行かない部分に強引な収拾をつけようとしていた」

弁解は慈悲も無く切り捨てられた。

抵抗も反抗も許さない一方的な弾圧。

一種の言葉の暴力を前に、久留美は成す術などなかった。

出てくるのは、情けないほどの、

「っっ――――……だ、ったら、……他に私にどうしろっていうのよ」

負け惜しみ。

遠吠え。

いずれにしろ敗者の紡ぐ醜くく脆弱な虚勢だった。

「私の声はあいつに届かなくて。拒絶されて。納得も満足も出来なかった想いは……外に出して誤魔化す意外にどうしよう出来ないじゃないっ……」

収まったはずの熱い液体が再びこみ上げてくる。

惨めで、情けなくて、ただ吠えるしか出来ない自分に対する途方も無い失望と無力感。

否定に畳み掛けるように更に否定。

それがもう耐えがたく、いい加減誰かに肯定してほしかっただけだ。

「いつまでも、ここで止まっているわけにも行かないから……終わったことを振り切って前に行かないといけないから……だから、私は……」

「無駄よ。仮に進んだとして、そう思っているのは貴方だけ。貴方が誤魔化して目を逸らした過去は、決してなくならない。未練は残り続ける。そして、貴方を縛り続ける。それこそ、死ぬまで一生ね。過去から逃げようとして次を望むことを――――――前へ進むとは言わない」

「――――――っ、っ」

「現在は自ずと過ぎ、未来は貴方が望まずとも来る。けれど、貴方は進めない。そこに留まって、蹲いて、同じ事を繰り返す。この先何を望もうと、何一つ望むものを手に入れることはない。どれだけ時が過ぎても貴方は、そもそも望みを叶える術を知らない。望みを叶えることもないまま生きる人間に、どんな望みであろうとそれは叶えられないのだから」

完全な否定に、今度こそ久留美は泣いた。

もう泣く以外に行動が残されていなかった。

折られた上で、踏み砕かれた。

留めなく溢れる生ぬるい涙を頬へ垂れ流しながら、全てを閉ざして追い出し、

「じゃぁ……どうすればいいの？」

全てを否定した相手に問う。

何を言おうと否定するのなら、この相手は正しい答えを知っている。

もはやそれを乞う以外に、久留美は何も思いつけなかった。

「まぁ、とりあえずこれで涙拭いて。拭きながら聞いて頂戴」
「……」
差し出された四つ折で畳まれたハンカチを受け取り、押し当てる。質の良さがわかる薄くも柔らかい感触の生地に、涙がぐいぐい吸い込まれていく。
「……とりあえず、反省会ね」
「はん、せ……い？」
「そ。失敗したら何が悪かったか物事を振り返って検討する。失敗は成功のもとってこういうやり取りあっての言葉でしょ」
「……でも、今更そんなことしたって」
「事態が覆るかどうかはこの際置いておきなさい。貴方が求めているのは、何処で何を間違えてこうなったかの”納得”でしょ？　前へ進みたいなら、逃げてはダメ」
「……」
ゴス子の掌が、慰めるように久留美の背中を撫でる。
たった今、自分を責め立てるように言及してきた相手にそうされるのは、何処か奇妙な感覚だった。
「ゴス子さんって……優しいんだか、そうじゃないんだか」
「あら、私は優しいわよ？　いつまでもくだらない駄々を捏ねない、聞き分けのいいコにはね」
「……すんません」
優しいかそうでないかで一括りするには危険な相手であるということだけは、今わかった。
「まぁ、これでようやく御所望の”相談”が出来るわね」

「……え」
「貴方がメールで寄越してきたんでしょ。全く、ここまで来るのに思った以上に手がかかったわ」
ああ、それとね、と彼女はふと思い出したように、
「お互い腹を割って話すわけだし、本名を明かすわ。私、黒蘭っていうの。黒い蘭と書いて【黒蘭】。
――――さぁ、始めましょうか。理解と納得の追求を」
一つの始まりを告げるその人。
ただ聞くだけだった聞き手でもなく。
暴いて辱める冒涜者でもない。
目の前にいるのは、自分が求めたはずの確かな相談者。
久留美は、ここでようやく目の前の人物――――黒蘭という女性と正面から向き合えた気がした。
理解らない人だ、と久留美は黒蘭に対して感想を抱いた。
ただ、恐怖を感じる不明さではない。
そして、何故か。
この難解さに、あるはずのない懐かしささえ覚えていた。

【壱百弐拾弐】　非日常再逢　（後書き）

黒蘭に相談とは命知らずな。
多少の弄りは覚悟しなければなー。

［壱百弐拾参］　相談の場（前書き）

確かな答えが得られるわけではない
それは己で得るものである故に

［壱百弐拾参］　相談の場

「じゃぁ、まず一つ目の――――――何故、駆け引きを選んだのか。これの理由を聞かせてもらいましょうか」

開始を告げるゴス子――――――こと黒蘭の手には、缶コーヒー。長話には水分が必要だ、と言われて久留美が近くの自販機で買ってきたものだ。

補足すると、久留美の手には同じく缶のオレンジジュースだ。

「……前に、似たような状況には本音で挑んで……玉砕したから」

「魔法使いに約束を破られた件ね？」

そう、と頷いて、

「同じことになると思ったのよ。二度も同じところで躓きたくなかった。同じ間違いは犯したくなかった……だから、私は」

「はい、アウトー」

「――――――はっ？」

流れに乗るようなダメだし発言に、久留美は仰天した。

まだ始めたばかりだというのに、と。

「初っ端から二つも地雷踏んでる。警戒心高めて挑んでそれじゃ、世話ないわね」

「じ、地雷……って、どこらへんが」

「自分で考えなさいよ」

「相談は――っ！？」

ぞんざいな対応に抗議をあげる久留美に、はふぅ、と黒蘭は呆れるように目を細め、

「やぁね。なんたら教育の世代っていうの？　世間じゃ叩かれまくってるけど、これじゃ仕方ないわよねぇ。自分で物事考えて判断したり決めたりすることも出来ない子供ばっか繁殖させちゃって……人に言われてはいそうですと頷いてるようじゃ、ロクな大人にならないわよ。本当に」

「何で突然ガチで説教!?　路線ズレてないっ？」

「言い逃れは見苦しいわよ、子供。ともかく、結論を導き出すのは、貴方の役目。私はヒントを出してバックアップするだけ。出来る子と評価して欲しけりゃ、やるだけのことちゃんとやりなさいダメ世代の申し子」

「……いえっさー」

果たして自分のＨＰは最後まで持つのだろうか。

相手のスパルタ要素が垣間見えたことで、早くも危惧を覚える久留美だった。

「まず、気になる点はやっぱりここね。どうして駆け引きなんてしたのか、よ」

「だから……それは」

「まだ、私が話しているのよ。無駄口叩かない」

「スイマセンでした、軍曹―っっ！」

「却下。低くても大佐よ。軍曹ごときじゃ満足なんてできなくてよ？」

迂闊に口も挟めないと来て、久留美は既に閉口状態だった。

「……だぁから、魔法使いに本音でぶつかったって完敗したからっ

て、なんだっていうの？　それでどうして千夜には駆け引きなんてする必要があるの？」
「……し、失敗したからには同じ手段は使わない方がいいに決まって……」
「そういうのは、貴方は千夜に本音でぶつかった失敗したことがあるから言っているの？」
「そりゃそうに決まって――――――」

不意に言葉が詰まる。
これを肯定するのには、何かが引っかかる。

それは、喉の奥でつっかえる魚の骨のような、

「あ、れ……？」

おかしい、と久留美は違和感に探りを入れる。
自身は、何か根本的なところで大きな間違いをおかしている。

そこへ、思考する久留美を置いて独り言のように呟く黒蘭の声が流れ込み、

「千夜は何事にも平等で対応する人間よ。本音でぶつかれば、本音で応える。逆に駆け引きを求められれば、駆け引きで。で、貴方は何を引き出そうとしたのだったかしら？」

「――――――、っ」

骨が、喉を下った。
目を見開く久留美に、黒蘭は、

「……ようやくわかったようね、ダメな子。過去のトラウマの一件はかなりショックが大きかったようだけど……引きずり、こだわったのはネックだったわね。あのコが非日常という事項がついていたことが余計にそれを際立たせちゃったみたいね。
でもね、――――わかるでしょ？」

問われ、久留美は頷いた。
ここに来てようやく理解することになるとは、と久留美の胸に苦いものが滲む。

わかる。
過ぎてしまった今になって、久留美はようやく真実を目に出来た。

「私……馬鹿すぎる。……千夜、は……センセイじゃ、なかったのに」

確かに非日常という共通点を照らし合わせて二人を見ていた。
だが、違うのだ。
それ以外は千夜と『センセイ』は全く違う人間だ。
そうではないというのなら、それは久留美の勝手な見解でしかない。

考えることも、意思も、全くの別物で。
魔法使いに裏切られたからといって、千夜が同じ事をするという根拠は何処にも――――無かったというのに。

「本音は本音でしか引き出せないというのに、貴方はそれに気づかないで怖気づいたんじゃなくて？　言ったところでどうにもならないでしょうけど、魔法使いの件に関しては貴方は悪くないわよ。そいつは貴方から逃げた。最初から結果が見えていたくせに、貴方を

突き放せず中途半端に気を許したそいつが悪いわ。でも……今回は皮肉にも、貴方が同じ事をしてしまった。己の本心から逃げるという、ね」

言われている通りだった。

あの場で、本音は既に自分の中にあった。

だが、いらぬところで過去のトラウマを思い出し、自分は怖気づいた。

あの時幻聴した『あの日の自分』の声は、理性という臆病な部分の歯止めだったのだ。

結果、自分は――――――

「……これで疑問は、四つのうち二つが消化。で、後に残る二つが私として本命なんだけど……」

「……本命？」

黒蘭が次に持ち出したそれは、久留美が落ち込む気分を無理やりにでも引き上げなければならない発言だった。

「あなたは非日常へ来ることを拒まれて落ち込んでいたのか……そもそも貴方の望みは本当に非日常そのものなのか。ねぇ、もう一度聞くわよ。

――――貴方の本当の望みは何？」

最も揺らがせた問いが、再び久留美に降ってかかる。

「……何って、私は……行きたいから」

「何故？　何処かに行きたいというからには、それに伴う理由があるわ。貴方は、何故そこに行きたいの？」

「だって、私はそこがいいから……こっちには無いモノが、そこにあって……だから、だから」
「……こっちには無いモノって、何かしら」
「……」

どういうわけか、その問いに対して出てくるものが無い。
どうして、と空洞の喉を押さえる。

「……まだ、どっかで意地がこびり付いているみたいね。まー、素直じゃないこと」
「よ、余計なお世話よっ」

素直じゃない上天邪鬼だというのは、親からも折り紙付きの承認済み。
しかし、人に言われて気にしないわけではない。
決してそんな自分が好きではないからだ。

むくれる久留美を見て黒蘭は何を思ったのか、ふと笑い、

「気を張る必要は無いわよ。聞かれて困るような相手はいないし」
「……うわ、まさにその相手がそ知らぬ顔で堂々と言いおったよ」
「あら、失礼ね。私がこんな面白いことを吹聴すると？」
「一部怪しいトコ漏れてるしっ！」

胡散臭い、という揺ぎ無い不断の事項が久留美の脳内事項に追加された。

「言って、認めた方がスッキリするわよぉー？　溜め込んだ期間が長い分、出したらきっと気持ちいいわよ？」
「……わざとそういう言い方してるの？」

「まぁまぁ、そこは置いといて。……じゃぁ、もっとストレートに聞きましょう。
――――――貴方は、二人の何処に惹かれたの？　本人そのもの？　それとも、二人がまとう非日常に？」

逃れようも言い訳も出来ない二択の選択肢が突きつけられる。
ずるい質問だったが、それでも久留美は二つのうち正しいものを選ぶために思考作業を始める。

センセイ、と呼び慕った魔法使いを思い返した。
切欠は彼女の起こした『魔法』だった。
酷く興奮して、興味が沸いて。
彼女との交流はそうして始まったのだ。
どちらが先だったかは、よくわからない。

なら、千夜はどうだっただろうと、と思考を切り替える。

「……――――――」

思わず手で目を覆う。
目にも当てられない己のくだらない意地から逸らす為に。

こんなものの為に、とっくに見えているはずだった『答え』は霞んでよく見えずにいたのかと思うと情けなくて泣けてきそうだった。

「……だって、あの人たちはそっちにいるのが当然の人たちだったから」

口にしなくてもわかる当然の事実だった。
一緒にいると錯覚してしまうこともあったが、彼女たちは間違い

なく『非日常』の世界の住人で。
何かしら理由があるから『日常』にいる。
それも束の間の一時という猶予付きで。

「ここにはずっと居てくれないって、それが出来ないって……わかってた。だから、私は……」

そうだ。
ここが、起源（はじまり）だった。
幼く、安直で、愚直なまでの想いは、それなりに考えて答えを導き出したのだ。

あの人がここに居れないのなら、自分がそっちに行けばいいのだ、と。

「だから、非日常が欲しかった……。そうしたら、離れていかないって思ったの。……でも」

ダメだった。
それでも、ダメだと言われた。

「何で……それでも、ダメなの？」

たまらなくなり、久留美は衝動的に訴えかける。
目の前の黒蘭にではなく、ここにはいない者達へ向けて。
両手で掻き毟るように頭部を掴んで顔を伏す久留美を悲観の海から引き上げたのは、黒蘭の否定とも肯定ともつかない中立的な言葉だった。

「別に、ダメってことはないでしょうけどねぇ」

「じゃぁ、何でっ……」
「まぁ、落ち着いて」
中途半端なフォローは、返って久留美の神経を逆撫でしただけだった。
しかし、それを失態と捉える様子もなく黒蘭は、
「……自分から歩み寄ろうというのは、なかなか懸命な考えよ。だけど、彼女たちはそれを望まなかったわけだから……ね」
「何で……」
「貴方に【夢】を見たんでしょうね」
「……夢？」
そう、と黒蘭は頷き、
「貴方の場合は、目的と手段の混合による錯覚だったけど、彼女たちは確かな想いで貴方に夢を見たのよ。自分たちでは絶対に手に入れることが出来ない日常を、そこに生まれて生きることを許された貴方に……ね」
「そんなのが、夢なんて言えるの……？」
「十人十色よ。みんなが違う夢を持つのよ。十人居て、十人のうち共通の夢を持つ人間は半分もいないのも当然。意思とはそういうもの。個性とはそのためのもの。……息もつかさせない目まぐるしい出来事に追われて、遠い先に想いを馳せる暇もなかった人間が、安息を欲して日常を羨むことを……夢と呼ぶのはおかしなことかしら？」
「……」
夢を呼ぶにはありふれたことだ。
そう思えるのは、ありふれている場所にいて、そう感じてきた久

留美だからこそ言えることだ。
千夜が言った、「傲慢な言い分」という言葉が今になって理解できた。
怒りに駆られて口走った言葉が、どれだけ軽薄であったことも。

「自分たちの夢を持っている貴方が羨ましく、時に妬んだかもしれない。嫉妬に走って貴方を引きずり込んで、人生を滅茶苦茶にすることだって出来たわ。でも、そうしなかったのは、何故だと思う？」
「そんなの……邪魔だとか、目ざわりとか……そう、いう……」
「――――……本当に、そう思うの？」

念を押すように、問われた久留美は口を噤む。

「……どうでもいい存在だった、となんて思うのは、貴方が貴方自身に過小評価を下しているだけよ。相手の考えることなんて、わかるわけがないから無理もないかもしれないけどね。……でもね、人間とは、感情とは、とても複雑なものなのよ。どういうわけか、大切したい人間であればあるほど、ソレに対してうまく立ち回れない。それどころかとんでもないヘマすら出る始末。……貴方にも、そういう覚えはない？」
「……っ」

急所ともいえる場所を突かれ、久留美は思わず顔を伏せた。

「相手の良いようにしてあげたいと考えながら、現実はなかなかそうは上手くいかない。ふとした拍子で心と頭の……考えと想いが噛みあわなくなって、気がついたら心にも無い言葉で相手を傷つけていたり……ままならないわね」

そう、何もかもがままならない。

本当に告げたかった想いは、ちっぽけなプライドと怖気によって遮られた。
望んだ結末は遠のき、受け入れ難い結果だけが今の久留美の元に残された。
何一つ、思い通りにならなかった。

核心といえる場所を容赦なく刺激してくる黒蘭の言葉が、とても耳に痛い。
そして、その痛みは心にも及んだ。

唇を噛み締めて、それでも断罪を受ける罪人ような気分でそれに耳を傾け続けていたが、

「けど、どうでもいい相手を扱うのは簡単。大して考える必要も無く、ただテキトーにあしらえば良い。一番いいのは、無視ね。相手にしなければ、そのうち寄って来なくなる。……ところで、貴方はどうだったのかしら？」
「えっ」

ふと問いかけへと言葉は変容し、

「貴方の自己評価とあのコの評価は……はたして本当に同じものだったのかしらね？」
「――――――――」

その刹那。
久留美の脳内にて、記憶のフラッシュバックが起きる。
現れるいくつかのそれは、全て久留美自身が千夜を呼び止めるシーンだった。

時間の経過の異なる記憶の一ページ一ページであるが、その中には確かな共通するものが存在していた。

どのシーンにおいても呼び止める自分に対して、彼女は――――

「……っ、あ、ぁ」

あの廊下で自分が引きとめた時、何故彼女は振り払わなかったのか。

拒もうと思えば拒めたはずだった。

いや、と久留美は場面をシャッフルさせる。

そんなところを振り返らずとも自分は既にもっと明確な事実を知っているはずだった。

それよりも、ずっと、もっと目新しい記憶として。

そして、

――――しょうがないな。

それは、出かけ先のこと。

衝動的な訴え。

対して彼女は困ったような笑みで、そう言って。

妥協のようだが、それでも掴んだ手は振り払われず。

そうして、彼女は――――呼べば止まってくれた。

それは間違いなく、本音で訴えた久留美への『応え』だった。

千夜は――――ちゃんと応えていたのだ。

それを理解した途端、久留美は喉がキュゥっと絞まるのを感じた。

「……そんな」

実際はどうだったのかはわからない。

だが、自分の悲観が単なる被害妄想でしかなかったということを知り、久留美は途方も無い後悔を頭から浴びさせられた気分になった。

思い描いていた事実とは違うものを、久留美は問答の果てに見つけてしまった。

そして、不意に泣きたくなった。

嬉しいのか。

哀しいのか。

希望なのか。

絶望なのか。

どちらともつかない、或いはそれら全てが入り混じった混沌とした感情が久留美の中で爆発した。

飛沫が飛び散るその拍子に、嗚咽と共に涙腺が決壊した。

「あ――――――――っ、っ」

欲しかった。

千夜の中に、自分の居場所が欲しかった。

けれど、欲しかったものはとっくに手に入っていた。
ただ、自分がそれに気づかなかっただけだった。
気づかずに、一人で空回りばかりしていた。

「馬鹿、みた……い」

拒まれて、逆上して。
それがどういう意味を持っていたのかも考えずに。
見放されて当然だった。
こんな自分勝手な人間は、あんな風に見送られても文句のつけようない。

「本当にねぇ」
「っ……とことん容赦ないわね」
「本人の意見に同意しているだけだもーん。……で、どうするの？」
「……どう、するって」
「納得できる事実は露見した。ここから先は、選択。
――――諦めるか、まだ諦めないか」

聴いた瞬間のそれは、久留美には選択とはとれない響きだった。

「……それ、選択肢なんかじゃないでしょ」

たった今、定められたばかりではないか、と久留美は黒蘭の言葉を訂正しようとする。
だが、

「いいえ、まだ貴方には選ぶ権利が残っている。どれを選ぶかの自

由もね」
「どうして……諦めなくても……出来ることなんて、何も」
「あるわよ。貴方には、彼女たちの望みを叶えることが出来るわ」
「……望み？」
「貴方の手は非日常を掴むことは出来ないけど、日常が収まっている。彼女たちは、それにも拘らずそれを大事にしない貴方に嘆いた。……なら、どうすればいいかなんてすぐにわかるわよね？」
「……」

千夜の言葉が蘇る。
不遇な扱いばかりしている日常ともっと向き合うべきだ、と。
それはかつて魔法使いにも言われた言葉と似た内容だった。
そして、今は黒蘭に、それが己に諦めずにして出来ることであると言われている。

「……でも、それは……諦めろって言っているようなものじゃない！」
「どうして？」
「千夜を……センセイを……私の中で無かったことにして、日常に埋もれていけってことじゃないの。何が違うのよ……諦めても、諦めなくても……結果は、同じじゃない」
「……確かに、どちらを選ぼうと取るべき手段は一つね」
「……っ」

暴いた事実を肯定され、久留美はまた目が熱くなるのを感じた。
しかし、まだ話は終わっていなかった。

「でも、行き着く結末は一つじゃないわ」
「……どういう意味？」

言っていることが矛盾している。
そう言い含めて久留美は黒蘭を見た。
問う視線に応えるように黒蘭は、

「微妙なニュアンスの違いがあるのよ。諦める。それは千夜も非日常も全て諦めるということ。諦めない。これにおいても非日常は諦めざるえないけど……ただ、肝心なものは諦めずに済むということ」

その部分に何が入るのかはすぐにわかった。
だが、矛盾が訂正されたようには見えない。

「……だから、それは矛盾してるって」
「あら、どうして？　非日常を諦めたからといって、千夜まで切り捨てる必要はないわ。そもそも千夜とは何処で出会ったの？　貴方たちの関係は何処で築かれていったの？」
「……え、そりゃぁ……――――」

言いかけた瞬間、『それ』はふとした拍子に落ちてきた。

「あ」
「……わかるわよね？　過去にしろ、今にしろ……貴方は、非日常に踏み込むには至らなかった。だからこそ……だからこそ」
「……だから、こそ……」

出会えた。
自分と彼女たちは、ここで。
日常という世界で。

自分が非日常に出会ったのではない。

寧ろこの世界では異分子である彼女たちこそが――――――自分と出会ったのだ。

自分という日常に。

彼女は日常が好きだと言った。

手に入らないそれに焦がれる想いを、大事に胸に抱いていた。

だからこそ、自分たちの関係は成り立っていた。

「……何だ……そうだったんだ」

長い間、一つの問題を全く見当違いな方式で解いていたような錯覚がようやく晴れた。

これが正解だというのなら、自分は、

「……なんて、馬鹿なのかしら。本当に馬鹿ね……私」

あの人たちが何故こんな平凡な人間と拘り続けていてくれたのか。

それは、彼女らの望みを、自分が知らずのうちに叶えていたから。

だから――――

「……そっか。そういえば、思い出も……全部、日常（ここ）で積み上げたものだったっけ」

「そう。その理由はわかる？」

「……うん」

他でもない自分が居たからだ。

彼女たちの求めてやまない日常の一部である自分。

きっと、彼女たちは――――――

「自惚れて、いいのかな……」
「立ち直れるって言うのなら、多少はいいんじゃない？　そういうのを踏まえると、馬鹿に出来たもんじゃないわねぇ、自信過剰って」
「……もう、持ち上げてんだか下げてんだかわかりにくいこと言わないでよ」

六年もかけてようやく正解を導き出せた。
だが、だからといって久留美の気は完全には晴れなかった。
何故なら、

「……でも、もう遅いよ」
「……あんな別れ方をしたから、って？」
「……酷いこと言った。勢いに任せて、散々罵倒した。普通なら、完全に決別状態よ……今更、なんて言えばいいのよ」

自分だって一生顔を合わせたくなるような台詞をバラ撒いた。
吐き捨てた言葉一つ一つが、今になって久留美の中で生々しく反響し出す。

「後の祭りって、やつよね。手遅れになって……こんなこと、検討しても……無駄だったのよ」
「――――何処が？」

沈みかける久留美を引き止めたのは、今までとは何かが異なる声色をもって吐かれた黒蘭の声だった。
ハッと黒蘭を見ると、

「手遅れって、本当にそうなったことがない人間が言う台詞なのよね。或いは、それゆえにその意味は理解していないか」
「……理解、していないって……」

「もっと徹底的に問い詰めてみて……そこに行き着く最悪の事態って何かしらね。たとえば、そう……恋人同士にとって手遅れってどういう事態を意味すると思う？」
「……わ、別れる……とか」
「もっと、問い詰めて。意志の擦れ違い、距離が開くなんてものではなく……極限の別れとは何かしら？」

極限の別れを数秒間黙考し、久留美が出した答えは、

「……どちらかの、死？」
「せーかい。手遅れ、よね？　相手が自分の目の前ではなく、この世界からいなくなってしまっては足掻きようも無くなるというもの。これが、そうなのよ。だから、こうでもならない限り、いくらでも手のうちようはあるというわけ」
「極端……過ぎない？」
「事実よ。そうでもない限り、手遅れなんていう奴は甘ったれか根性なし。或いは、その程度の想いってことね。……残念、貴方もそこで止まるような愚図だっただなんて」
「なっ……違うっ！！」

思わず、久留美は立ち上がった。

「わ、わたっ……私だって……そうじゃないんだったら、足掻きたいわよ！　でも、そんな保障が何処にあるかわかんないじゃない！　保証の無いことに不安を思っちゃいけないのっ！？　無茶言わないでよ、誰だって怖いに決まってるじゃない！　皆が迷わずそんな風に後先考えずに生きれるわけないでしょ！！　ダメだったら、とか……本当にコレで正しいのか、とか……考えて立ち止まっちゃうわよ！　だって、絶対に何が正しくて間違っているかなんて……教えてもらわなきゃわかんないんだからぁっっ！！」

散弾銃のような勢いで射出される不安という想念。
出すだけ出した後、残るのは思い切った自分への客観意識だった。

「あ……ぅ」

またやらかした、という実感に嫌な汗が滲む。
人生思い切りが大事だと自分に言い聞かせて生きてきたつもりだった。
だが、やはりその後の羞恥心とやってしまった感だけはどれだけ回を重ねようとなくなりはしないのだろう。

奇妙な沈黙の中で、久留美が一人脂汗を分泌していると、

「……別にいいのよ、正しいか間違っているかなんて」
「へ……」
「それを追求したら、答えを出すのに一生を使ったって足りない。そんなことはどうだっていいのよ。大事なのは、――――――貴方が、どうしたいかではなくて？」
「……どう、したいか」

言葉を繰り返す久留美に、黒蘭は頷くような仕草をし、

「正邪、正否あるいは成否……迷いになるようならそんなもの捨ててしまえばいい。貴方が欲して、求めている……その衝動の妨げになるのなら、ね。今が貴方にとってかけがえのない瞬間であり、重要な選択肢の前に立たされる瞬間だというのなら……貴方が思考の中心に置いておくべきなのは、正しいかそうでないかではない。他人の目から見た判断でもない。……貴方が、貴方自身が……どうしたいか」

「……そうすれば、少しは楽になるってこと？」
「まさか。……でも、それが一番貴方の避けたい後悔を回避出来る手段だとは思うけどね」
「私の避けたい後悔……」
呟き、その言葉について思考する。
何を避けたいと思っているのか、と。
「かと言って……どんな選択の果てにも、全く後悔は無いというのは無いものだけどね。でも、たとえ後悔が待っていようと……それを受容してでも選び取りたいやつを取る方が、自分としては納得できそうじゃない？」
「……自分だけ、納得したって……」
「周りも納得してくれなきゃ嫌って？　贅沢ねぇ……それこそ、無いモノ強請りというか……」
その声色が、若干嘲るような響きを持っているように聞こえた。
しかし、久留美がそれを確かめる間もなく黒蘭もまたその席を立ち、
「……まぁ、悩みなさいな若人。吐き気をもよおすまで苦しんで、神経痛むまで悩んで……どんなに失敗して挫けても、立ち上がって、這い上がって。生きているうちはそれら全部がまだまだ手遅れにならないのだから。そう、だから……今わかったことを踏まえて、もう一度考えてみなさい。諦めるのか、まだ望むのか。……貴方なりの折り合いとやらを見つけて、答えを導き出してみることね」
台詞の終わりと共に黒蘭の足が一歩踏み出され、距離が開く。それに逢瀬の終結を感じた久留美は、去られる前に最後の問いを放つ。
一つ。

一つだけまだ聞きたいことがあった。

「わ、私はっ！」

「何？」

「……わ、たしは……このままでいいの？」

返事は返らない。

曖昧すぎた言葉では意味も汲んでもらえないことを数秒で察した久留美は、言葉に手を加えて再び放出する。

「……私は、多分……周りの迷惑を全く省みないで、自分本位でいろいろ選んできた。それがよくないことだって、わかってた。でも……私って人間は……あんまし、良くない人間だと思う。……私、このままでもいいの？　悩んで、苦しんで……そうして、今までどおり……他人を二の次にして、自分勝手な考えを突き通してもいいの？　……あんたの言ってることって、そういうこと……よね」

きっと自分は、善良な人間ではない。

お世辞にもそんな型には当てはまらないだろう。

だからこそ、直視しないできた。

自分という人間は、そういった自分が一番嫌う人間そのものであったからこそ。

だが、黒蘭の言うことはそんな今の久留美の在り方を肯定しているような意味としてとれた。

本当にそれでいいのか。

目の前の人物はその答えを知っているような気がして、久留美は問わずにはいられなかった。

沈黙の持続と共に募る緊張と共に、久留美は返事を待った。
そして、振り向きの動作が沈黙の終わりを告げ、

「んー……私は、好きだけどねぇ。感情で動く人間って」

肯定とまではいかないが、否定ともとれない言葉。
少なくとも好意的ではあるのは言葉からは聞いてとれた。
しかし、

「……ただ、もう一つだけアドバイス。大事だから、覚えておいてね」

その瞬間、黒蘭を取り巻く空気が僅かに変動する。
久留美はそれを読み取ったが、深くは意識しなかった。
ただ、黒蘭の言うアドバイスとやらを聞き逃さない為に、意識はそこに一点集中してしまっていた。

「――――自分が決めて、自分が選ぶこと。それはどんなことであろうと、どんな結果を迎えようと……そうするというのなら、後に来るもの全てを背負うのは、貴方自身。責任も、後悔も……他の誰でもない、貴方が受け止めるのよ。責任転嫁は、厳禁。……たとえ、何があろうとね」

さして特別なことではない、と久留美は黒蘭の言葉を捉えた。
だが、寧ろ至極当たり前のことが、久留美には不釣合いなほどに重く感じてとれた。

「さて……それじゃぁ、相談終了。どうするかは、貴方次第ということで。……影ながら応援しているわよ。貴方が、貴方にとって最良の選択と結果を得られることを」

ひらり、と手を振り、黒蘭は軽やかに去っていった。
再び一人となった久留美は、相対している間にて始終付きまとっていた奇妙な緊張感からの開放と共に、息を吐き、肩の力を抜いた。腰を元ベンチの上に落ち着けて、背中をズルリと後ろにもたれさせた。
天を仰ぐ。
ふと気がつけば、青かった空は淡い橙に色づき始めていた。

久留美は、少し前をおさらいするように振り返った。
時間の経過すら忘れて、話し込んだ。
不満、不安。それら全てを吐き出して。
叱咤され、気付かなかった間違いなどを一つ一つ見直していった。
間違いは少しずつ正され、隠されていた真実が見えてきた。
そうした結果として、残ったものは何であったかを探る。

「……諦めるか、諦めないか」

言葉にしてみて、久留美はここでも気付いた。

「……何だ、やっぱりこれって選択肢なんかじゃないじゃん」

最初から選ぶと決めた道は一つだった。だから、他に並ぶものなどない。
ただ、それを選ぶことに根拠も成否も見出せないことから怖気づいていた。
だが、言われた。
大事なのは、

「私が、どうしたいか……」

思っても、すぐには踏み切れない自身に苛立つ。
しかし、たくさん悩んでいいと言われたのを思い出し、

「……なら、もう少し頑張れそう」

不安がないわけではない。
寧ろ、多すぎるくらいだ。
けれど、それを前にしても折れない気持ちがずっと最初からあったことに、さっき気付いたのだ。

「……まだ、諦めたくない」

今度は、意地もプライドも体面も全て放り出して。
自分の気持ちと、とことん向き合おう。

そう、決めた。

［壱百弐拾参］　相談の場（後書き）

黒蘭はかなり大事なことを最後に言い残していますが、ここで気付かないとあとで大変なことになります。

【壱百弐拾四】　此処より彼方で

久留美が黒を纏った非日常との逢瀬を終えた頃。
現場である第三幡ヶ谷公園からやや離れた場所――――第一幡ヶ谷公園には、とある男がいた。

「はぁー……ガキは元気だねぇ」

遊具にて無邪気に遊び狂う子供たちを眺めながら、ベンチに腰掛けるその男は煙草を噴かしていた。
周りからは時折その存在をマイナスの意味で気にかけられる。
無精髭とサングラスに、清潔とは言い難い身なりの中年。
浮浪者、と判断されても仕方ない風体の男は、普段はそこには無い異分子。故に子供を連れてやってきている公園の常連たる母親たちの警戒対象として、ここに来てからというもの注目の視線を痛いほどに向けられていた。

「ったく、ヤな世の中だねぇ……ミステリアスと不審の分別もつかねぇのかよ最近の奥様方は……あー、ヤダヤダ」
「――――無理ないでしょ、どうみても不審者だもの」
「ぐふっっ！？」

愚痴を零した直後。
煙草の煙を肺に溜め込む作業の途中を割るように、背後からの横槍が入った。
この予想だにしない出来事に、当然の如く驚いた拍子に咽ることとなった。

「……っぐぇっえ、……げぇほっ、げ、ぇっ……」

「いい気味ね。勝手に移動した罰が当たったのよ――――志摩」

してやったりの笑みでその背後から移動して、男の隣に回りこむのは――――少女。

黒髪に黒のゴスロリの華奢な少女は、煙に器官を掻き乱されて完全に咽せ込んだ状態から抜けられなくなった男を尻目にふわりと裾を靡かせてベンチの上に腰を降ろした。

「ぐっ、ふっ……し、死ぬかと思った」

「そういう台詞が自然と出てくるうちは大丈夫よー」

「……どんな根拠だよ加害者さんよ」

はぁはぁ、と肺に残留している煙を残らず出そうと深呼吸を繰り返し、

「……視るもんは見たからな。あれ以上、あの場に留まる理由もなかったし……いたくもなかったんだよ」

「そう。なら、聞かせてもらいましょうか。数々の悲劇を覗き見てきた預言者殿を、煙草十本以上の煙を以てしても燻らせられなかった後味の悪さを刻んだ――――新條久留美の未来とやらを」

志摩の足元に散らばる十数本の煙草の吸殻を見ながらの黒蘭の言葉に、志摩は今ある手元の煙草もポイっと指先で弾き捨て、

「……その前に」

はぁ、と志摩の項垂れた首が溜息を吐き、体勢はそのままにして、

「……さっきよりも視線の熱さが増してる気がするんだがなぁ」

「そうなの？　確かに視線が熱いわね。……何故かしら？」

「……その台詞、何処まで本気なんだ？」

浮浪者ルックの男と、後から沸いて出たゴスロリ少女。

年齢的にもジャンルとしても、傍から見ればとてつもなく異様（カオス）な組み合わせであった。

より混沌とする不審ぶりに、周囲の注意は一層集中するのも無理はなかった。

「ねぇ、ふと思ったんだけど」

「聞きたくねぇけど、何だ」

「ここで――――オジサン、今日も遊んだらお金くれるんだよね？　でも、あの玩具は使っちゃいやだなぁ、だっておっきすぎて痛かったもーん――――とか言ったら楽しいことになると思わない？」

「ヤメロ、似非少女！　つか、もう出てるじゃねぇか……ってああ今まさにあそこの奥様が確信づいた険しい顔つきで携帯で１１０番押そうとしてるぞコラ！　おい、教えるもん教えて欲しかったらなんとかしやがれぇぇっ！！」

ガクガク、と黒蘭の両肩を掴み揺さぶるが、逆にソレが拍車をかけていることに志摩本人は興奮状態に陥っているため気付かなかった。

奥さん早く！と公園仲間と思われる別の母親が通報を急き出して、志摩がいよいよ本格的に焦り出すと、

「もう、しょうがないわねぇ～……」

などと言いながら、しっかり愉快そうに笑いつつ黒蘭は片手の指先をある形に作る。

そして、それをパチンっと鳴らした。

その瞬間、周囲の様子が変わる。

今まで穴が開くほど集中していた周囲の意識が突然霧散する。
通報しようしていた奥さんも訝しげに携帯を見つめて、何故それを手にしているのか分からない様子でそれを元の場所にしまった。
それだけではなく、誰もかれもが先程までの警戒が嘘のように、志摩たちの存在など目に入らないようで。

「あー、楽しかった」
「お前だけなっ！　つーかよ、最初から結界はって人払いしときゃ……」
「だってつまらないでしょ」
「それもお前だけだ！　……あー、マジ嫌な汗かいたぜ」

滲んだ額の汗を拭いながら、志摩は真顔でそうぼやいた。

「……で、どうなの？」
「……あー、うん。すっげぇ凄絶……正直、見てていたたまれなくなるような光景は久し振りだった。これでも吸ってねぇと鬱る」

そういって、また一本を懐から取り出しライターで火をつけようとする。

「……っち、オイル切れちまった」
「使い捨てのそれで、それだけ吸えばねぇ。はい、どーぞ」

ライターの燃料切れに舌打つ志摩の口に挟まった煙草に、突然灯が灯る。

「お、サンキュ。しっかし、いつ見ても便利だなぁ……時々うらやましいぜ、お前さんらが」
「何言ってんの。世界のお告げを賜る神聖なる未来予知の一族が」
「あんたが言うと皮肉にしか聞こえねぇよ……ぷはっ」

ぐっと吸い込んで肺に溜めておいた煙を吐き出す。
そしてもう一度、煙草の煙の取り込みと廃棄の作業を一つ置き、

「……ヴィジョンは、はっきり見えた。霞み一つかかっていなかった。……ありゃぁ、限りなく近いうちに実現するぞ。……明日、いや……今日だな。今日の……日が暮れた後あたり」
「そこまではっきりわかったの？」
「いや、周りが暗かったからな。多分、時間帯は夜か……夕暮れだ」
「他には？」
「……こいつには関してはちょっとびっくりしたぞ、さすがに」
「あら、何かしら？」
「……あー」

興味を示す黒蘭に、志摩は言葉を濁す。
これを聞かせ、知ったら目の前の存在はどんな反応を返すだろうか。
この黒きカミを唯一揺さぶることが可能であろうモノ。
自分が見た事実を知った時、黒蘭はどうするだろうか。
下手をすると、寝ぼけたことを抜かすなと笑いながら腕を切り落とされるかもしれない。
或いは、最悪の場合として、聞かなかったことにしようと殺されるというのもある。

黒蘭という存在に対して、期待なんてものは淡かろうか過大なものだろうが、そんなものはするだけ無駄であると知っている志摩は、

次の行動を考えるにあたって迷いに迷った。

「早く言いなさいよ、じれったいわね。あんまり待たせると、結界解いてさっきの台詞よりももっと凄い台詞を泣き叫んでブタ箱にぶち込むわよ」

「だぁぁぁっ！」

迷う権利すら奪われた志摩は、腹を括った。

「っ、わかった、言うから。……あのな、居たんだよ。あのコが」

「……誰が」

「――――お前の宝物が、だ。新條久留美の迎える惨劇の中に……居たんだ」

沈黙。

やっちまった、と思いながら志摩は生きている心地を失った。

◆◆◆◆◆◆

自分の人生の終わりを、この瞬間に志摩はかつてないほど感じていた。

首が飛ぶんだろうか。

それとも一つずつ四肢をもがれて、内臓をかき回されてじわじわと。

第三の選択肢として「見逃してもらう」はないだろう、と踏み、志摩はせめて楽がいいと切実な思いを抱いてその瞬間をガチガチに身体を強張らせて待った。

「……ねぇ」

「うぎゃあああああっやっぱ無理だ理不尽だ命だけは勘弁――――っっ！！」

「……はぁ？」

「ぇ、？」

ピタリと止まって、志摩は黒蘭を改めて見た。

それは八つ当たりのような殺害宣告を下す冷ややかな笑顔ではなく、志摩の狂乱交じりの発言を理解できないとばかりに呆れかえる顔だった。

「なぁに、勝手な想像膨らませて喚き出すの。……ひょっとして、あのコのこともそれで話すの躊躇してたわけ？」

「……いや、だってよ」

「別に、〝死んでいた〟わけじゃないんでしょ？　どーなの」

「あ、ああ……まぁその通りなんだが」

「そう。良かった……なら、いいわ」

それだけで黒蘭の応答と反応は終了した。

しっくり来ないその態度に、志摩は思わず踏み込んだ。

「……オイオイ、結構不吉な朗報だと思うぞ今のは。お前の嬢ちゃんはチラッとしか見えなかったが……血まみれだったんだぜ？」

「……私にとって不吉となりえるのは……その先にある極限の到達地点よ。さっきも新條久留美に言った台詞……また言わせる気？」

「……手遅れとなるとは、死のみ……か。守備範囲広ぇな」
「あら……貴方も十分承知の上でしょうに。――――ねぇ？」

志摩はその意味深げな問いかけの意図を察し、しかし、応えはしなかった。
心臓に近い奥の部分を無粋に触れられたような感覚は、志摩に僅かな苛立ちの存在を感じさせる。
それを吸い込んだ煙草の臭いで誤魔化しながら、

「……なぁ、疑問に思うところがあるんだが」
「何かしら？」
「あの女の子――――新條久留美を巻き込む理由ってのは、何だ」
「……まずは貴方の見解を聞かせてもらおうかしら」
「……あのコ、一般人だよな？」
「ええ、そうよ。異能も何も無い、お決まりの秘められた力とやらも無い……只の人間よ。――――現時点では、ね」

わざとらしく置かれた次への布石。
志摩はわかっていながら、それに足を引っ掛けた。

「……ひょっとすると、俺の見た未来はお前はあのコにちょっかいかけたせいで決まっちまったもんだったのか」
「――――ハズレ。私が何かしてもしなくても……彼女の未来は貴方の視たものと定まっていたわ。その未来は、既に彼女が選んだ選択の結果よ」
「……よくわからんなぁ」

答えを得たはずが疑問を増やしただけな気がした。
志摩は、ここまでのことを思考する。
まず、今回の新條久留美に関する自分の拘りから始めた。

今日の午前中、突然かかった黒蘭の呼び出し。
何の用かと思えば、要求はこうだった。

――――とある少女の未来を視て欲しい、と。

どういう意図か全く読めない要求ではあったが、わざわざ口にするということは何かあるのであろうと志摩は応じた。というよりは、何を言われようと拒否権はないというのも大きかった。

指定された公園で、遠くから見つからないように、という制限付きで行動を開始した。
黒蘭に言われたとおりに、姿を確認されないような距離の場所で隠れて様子を伺っていた。
例の学園外では珍しい成人姿の黒蘭と会話する少女。
一見する限りごく普通の少女であり、そして先程得た通りに事実も普通の人間だった。
しかし、いくら視ても何も起こることもなく、こんなことをして何の意味があるのだろうか、と己の行動に対する疑念を膨らましていく一方だった。

『ソレ』が、志摩に訪れるまでは。

「ちと、質問を変えるぜ。……新條久留美は、一体何者なんだ？」
「一般ピーポー。あえて付け加えるなら、千夜の友人」
「ほー。……じゃ、あんたとは？」
「……そぉねぇ」

周囲の空気がじわりと微細な変化を生むのを感じた。
ビンゴ、と志摩は手応えを実感。

「……ふるーい、『友人』……だった、かしらね。当人は、もう覚えていないでしょうけど」
「へぇ、あんたのか。……つか、あんたにダチがいたことに驚くべきポイントか、ここ」
「私はそう思っていたわよ。ええ……敬意を表して、ね」
志摩はここで『新條久留美』の情報を整理する。
一般人。
普通の人間。
終夜千夜の友人。
凄惨な未来。
黒蘭の旧友。
これらの事項を統合すると、最後の事項によって――――――ある意味で、ただの人間ないことは明確となった。
「……なぁ、本当のところ今回のは何だったんだ？　……結局、何がしたかったんだか俺にゃぁ見当もつかねぇんだがよ、黒蘭さんや。とりあえず、今回のこれがあんたの目的にどんだけ関係するかは教えてくれよ」
「んー、お昼のいいともに某大御所が出るか出ないかくらいの影響はあるかしらねぇ」
「番組の成立を左右のレベル！？　……いや待て、とてもあのコがそういう風には見えねぇんだが」
「だって冗談だもの」
「……」
脱力感と投げやり感が志摩を襲った。

「まぁ、今回ばかりはあまり目的云々というよりも……昔の【約束】を果たしたまでというか」
「……約束？」
「そ、旧い友人との旧い約束。……向こうは当然覚えていないだろうけど、私は覚えていた。だから、実行」
「……何を約束したんだ？」
「それは、女同士の……――――ひ・み・つ」

黙秘権が発動した。
こうなったからには、多分どの角度から聞いても口を割ることはない。

「おいおい、そりゃないぜ」
「……ふふっ、知りたい？」
「止めとくよ。女同士の秘め事に男が首つっこむなんざ無粋だろ」
「あら、ありがとう。貴方のそういう見かけによらずジェントルなところ、結構好きよ」
「見かけによらずは余計だっつーの。……まぁ、代わりに一個聞かせてくれ」
「何かしら？」

ふう、と煙草の煙を一吐き。
そして、

「――――あのコを、見逃してやることは出来なかったのか？」
「……怒ってる？」

問われ、そうなのかと志摩は自問した。
しかし、それは否だった。

「……いや、そうじゃねぇよ。第一、俺が視て決定したようなもんだ。今更、どうこう偉そうなことも言えねぇし……だからといって、何もできねぇ。それが、星詠みってヤツだからな」

人は【星詠み】をこう呼ぶ。

世界の意志を預かる者――――預言者と。

世間は未来予知を全能と評価するが、志摩からすれば失笑しか返せない。

未来が視える。

視せられる。

だが、――――”それだけ”で、何が全能だと言うのか。

「俺は……聴いて、視るだけの……それ以外何も出来ない無能な人間だ。抗う術も、覆す力も持たない。無力な傍観者だ。未来に否を想ったところで、ソレを変えてやることも出来ない。聞くだけなら、まだ良かった。だが、視えちまった……こうなれば忠告も警告も、もはや意味をなさない」

志摩の異能は、未来を感知する類。

それは、世界と同調し、星から未来の可能性を聴き拾うこと。

悪魔で可能性である時点では、回避することも出来る。

忠告、警告――――相手に僅か一言でも吹き込めば、また別の新たな可能性も生まれて、迎える未来も変わる。

しかし。

“もう一つ”はそうはいかない。

未来視。――――それは、志摩の意志に従わない自動的な異能だ。

いかなるタイミングで、どのような時に訪れるかわからない。

突然、脳内を駆け巡る現在ではない何かの場面（ヴィジョン）。
それは決定された未来の断片。
これが視えてしまうと、もう全ての足掻きは無駄であり、無意味となる。
足掻きは全て決定された未来への布石となり、その人間はただそれに向かう以外許されない。

「俺の視るヴィジョンは、その人間の行動によって生まれた可能性の収束されたもの。世界の演算によって叩き出された人という数式の答え。……数学における答えが一つしかないように……その答えが出されちまえば、それ以外の答えは全て誤答。正解――――未来とは認められない」
「いわば、貴方は解答用紙を見せられているようなものよね」
「まさにな。……決められた未来に足掻くってのは、その正解とは別の答えがこの問題にはあるはずだって馬鹿な発言をしているのと変わりねぇ。……そんで、そんなわけがねぇんだって気付くのは、その未来が現実となる時……さ」
「なんかそんな風に言われると、貴方の異能ってカンニングと差して変わらないように思えてくるわ」
「……ははっ、違いねぇよ。その通りさ。……ズルして、知らなくてもいいこと知っちまう、後の祭りな能力さ」

笑ってはいるが、声のトーンが落ちていた。
微妙に掠れが混じるそれは、まるで自らを嘲笑っているような響きだった。
黒蘭はそれをどうとったのか、

「……まぁ、そう責任を感じなくてもいいのよ？　大体、貴方は結果を視ただけ……貴方が決めたわけではないのだからね」

「……わかってるさ。若い時よかマシになったと思うが、コイツ無しじゃまぁだ踏ん切りがつけられねぇ……俺もまだまだだな」

口から外した一度煙草を少し見つめる志摩。

しかし、すぐにそれはまた唇に挟まった。

「星詠みとして修行が足らないって？　いいのよ、それで。一族の奴らがそれを要求したからって鵜呑みにしなくても、結構。寧ろ、ソレで行きなさい。だからこそ、貴方を引き入れたのだからね」

「……そういや、あんたはウチの一族嫌いだったっけな。停滞と鬱屈をつまらないと評するあんたには、確かに目障りだろうがな……」

「そして、その中で高い能力を誇りながらも、星詠みならぬ態度と姿勢で変わり者扱いされるのは貴方。……懐かしいわねぇ、若かりしあの頃はまぁだ今よりもずっと感情的で暑苦しくて……可愛かったわよ？」

「薄ら寒いこと言うなよ……うわ、見ろよホラ。結構周りポカポカしてんのに、俺の腕鳥肌立ってやがる」

「本当ね。やぁね――――――そんなに毛深くなっちゃって」

「ほっとけ！」

密かに気にしているところを指摘され、微妙に傷ついた志摩は八つ当たりのように短くなった煙草を叩き捨て、新たに一本を取り出す。

黒蘭はその先端に火をつけてやると同時に、

「……まぁ、慰めというわけじゃないけど。未来の視た貴方に、責任は無い。未来を定めたのは、その人間の行動と意思。……更に言えば――――――その未来は当人に”望まれたもの”であるのだから」

「――――――っ、は？」

志摩は、思わず煙草を指先から落しかける。
聞き逃せない発言に、一瞬己の耳を疑った。

「……今、すげぇありえねぇようなポロリ発言が聞こえた気がするが。幻聴？」
「そう判断するなら、耳鼻科ではなく、精神科に行くべきね。――――ほ、ん、と」
「……今の発言、うっかりとかじゃなくて意図的にだっつーのなら、ちゃんと説明つくんだろうな？」
「ふふっ……お望みとあらば」

曝された新たな疑問。
志摩は、それにこれまでの全ての疑問の収束されているように思えた。
確信という浅慮な判断を下してしまえるほどの何かを、そこに感じずに入られなかった。

そして、己の視た未来を知らずとも、そこに何が秘められているかを全て知るであろう存在の語りに耳を委ねた。

「教えてあげるわ。未来を予見する貴方とは対極の位置にある――――遠い日の過去に何が行われたのかを」

◆◆◆◆◆◆

気がつけば、陽が傾いていた。
千夜は路上で歩みを不意に止めて、赤みを深めていく空を見上げた。

「……今、何時だ？」

足を止め、ポケットから携帯を取り出す。
画面の時間表示部分を見ると、そこには五時三十分の数字。
最後に時間を確認してから三時間ほど経過していた。

同時にそれは、当ても無く歩き始めてから過ぎた時間でもあった。

「……いい加減、飽きたな」

ポツリと呟き、千夜は前進を再開する。
今度は当てがあるという前提をつけて。

十メートルほど歩いたところで、千夜は建物と建物に空白を置く狭間が左側にあることに気付いた。
それを生む両建物は飲食店であるらしく、裏口が設けられており、決して広いとはいえないものの人が悠々と歩けるだけ余裕のあるスペースがあると見受けられた。

「――――……」

数秒でそれの確認と思考処理を済ませる。
そして、足先は――――光の届かないそこへと向いた。

◆◆◆◆◆◆

行き止まりを示す壁の前で、千夜はその歩みを止めた。
光は殆ど差し込まない、薄暗さに満ちた路地裏。
人気はない。千夜自身を除いて。

そのはず――――だった。

「――――根性のあるヤツだな。二、三時間もひたすら歩いて付き合わせたら……嫌になって今日は諦めてくれると思っていたんだが」

独り言と片付けるには大きく響く声。
それもその筈。
その言葉は、他者へ投げかけられた言葉だった。

「わざわざこうして場を設けてやったんだ……――――いい加減、コソコソしないで相対しようぜ」

背後のもう一人の存在に言いながら、千夜は振り向いた。

【壱百弐拾四】　此処より彼方で（後書き）

続きは明日、更新します。

【壱百弐拾伍】　過去の詮索者

闇から陽の差すほうへと投げ放った言葉。
刹那の空白が置かれる。

そして呼びかけに対する答えは、その空白の消滅と共に緊張感の欠けた陽気な声色で返ってきた。

「――――――やー、いつから気づいてたのさ」

奥にいる千夜には既に遠くにある、入ってきた路地裏と外の境。
そこに、応えた人物がひょっこりと姿を見せた。
外と内の境界線の上に立つのは、恐らく今までずっと付きまとっていた気配と同一の存在。
外見だけで判断すると――――――それは、少年の姿をしていた。
ジーンズとパーカー。顔は帽子を深くかぶっているせいで見えない。

「……お前、俺が一人になる前からずっと張り付いてたな……とでも言えば、わかるだろう？」
「うわ、凄いね。じゃぁ、最初から？」
「どうでもいい。俺が聞きたいのは一つ――――――何の用だ」

刃物のように研がれた鋭く真っ直ぐな問いに、少年は怯む様子もなく、

「言わなくてもわかるでしょ」
「微妙に答えになっていないが」
「だよねぇ」

神経を逆撫ですることを目的としているが如く、のらりくらりとした応答。
わざとか。それとも天然か。
……いや、前者だよなぁ。

後者に対してはその極限の立つ存在を知っている。
それ故の判断水準により、千夜は相手に対してそれを意図的なものであると判断した。

「……お前、何者だ？」
「君がそれを言うかなー。……まぁ、いいか。一応、君にも正当性のある質問ではあるよねぇ」

そういって、少年は境界線の上かた一歩踏み出した。
同時に、

「――――――っ！」

路地裏に、一つの異変が生じた。
目には見えない、確認できない変化。
それを確認することができるのは、ほかの五感のいずれでもない。

身体の奥に根付いた六つ目の超感覚だ。

……結界か。

先手を打たれた。
しかし、これにより相手の目的の一部が発覚する。
……逃がすつもりはないらしいな。
面倒だ、と心底げんなりとした気分で思う。
路地裏でくだらない鬼ごっこは終わらせてやろうと思ったのが、間違いだった。
あのまま振り切れないのを電車に乗って、三途の店まで直行してしまえばよかった。
あの店は自分のような一部例外を除けば、外部の者は招かれなければ入れない。
自然に追跡は断ち切れただろう。
……妙な意地が災いになったな、くそっ。
千夜が独り後悔を募らせている間にも、少年は最初の一歩からずっと止まらず、距離を縮め続けていた。
間合いを詰められる。
危険なことだが、それによってわかることもあった。
少年、という判断は若干変更の余地があったのだ。
近くで見ると、遠くの初見よりも体つきは出来上がっているように思えた。
蒼助に比べたら全くもって華奢に違いはないが、それでもただ細いだけではない。
……術者系か。それとも、身軽さと俊敏さに特化した接近戦タイプか。

しかし、そこで断定はしない。
見た目だけで判断するのは、命を危険に曝すタブーだ。
相手の潜在能力や実態は戦ってみないことにはわからないものである。
経験上の知識として、千夜はそれを踏まえて、あくまで判断を仮定とした。

「……声聴いても……わかるわけないか。あんまり接点なかったし、普段はこういう格好でもないし。……でも、顔見たらさすがにわかるんじゃない？」

足を止め、少年は深く被った帽子を脱ぐ仕草を見せた。
キャップの前方のつばを掴み、

「――――”お久しぶり”。終夜千夜さん」

露見した顔に、千夜は目を見開いた。

◆◆◆◆◆◆

帽子が齎した変化は、まず髪だった。
まとめて帽子の中に収めていたと思われる髪は、想像に反して長かった。
女性のそれのように手入れされているように、美しく黒々とした髪は束縛を取り払った後は、清々するようにバサリと持ち主の背中や肩にしな垂れかかる。

「……お前は、」
「覚えてる？」

『普段』はカチューシャで後ろにやっているであろう前髪が、帽子を取り去った後も目元を隠すように被っていた。
それを仕上げとばかりに手で後ろに掻き上げ――――――ようやく顔が披露された。

「――――朝倉、渚」
「せーかい。これで”お前、誰だっけ”とか言われたら、ショックで立ち直れなくなってたよぉー」

クルクル、と指に引っ掛けたキャップを弄びながら、少年――――朝倉渚はホッとしたように笑った。
ソレに対して、千夜は胡散臭い笑顔だと辛辣な評価を内心にて下す。
己の知るある種のタイプであると、ソレを見て朝倉渚を分類分けしながら、

「それは、良かった。もう少し時間が空いていたら忘れるところだった。だが、休日の暇に他人の尾行する趣味があるというその特徴で、もう忘れられないから安心しろ」
「ちょっ、俺なんかエラい人格評価されそうになってる！？」
「ハイハイ。で、何の用？」
「弁解すらスルー！？」

あしらわれる渚は、そこでジトリとした目つきになり、

「なんか、随分な変わりようじゃん。俺、間違えてよく似た別人を

尾行しちゃったとかオチじゃないよね」
「……そういうことにして帰ってくれないか？」

これは名案だと、千夜は思った。
しかし、さすがにそうは問屋が卸さなかった。

「無し無し」
「……だよなぁ。わかったよ……何が目的なんだ？」
「それはこっちの台詞でもある。――――君は何者？」

全然噛みあってない、と思いながらもツッコミは控えて、

「……お前もご存知だと思うが」
「いやいや。――――君は、終夜千夜さんじゃないよね？　……
…というか、大体さ」

――――そんな人間はこの世にいないもの。

渚が突きつけられた言葉に、千夜の顔の筋肉が動きを止める。
表情を落としてしまったかのように、そこには停滞した無のそれだけが残った。

「……ふーん。で、お前……いや――――――お前たちは何を知ったんだ？」
「たち？」
「お前一人じゃないだろう？　……まぁ、実際に動いたのは殆どお前だろうがな。

――――動けない、相棒の代わりに」

その一点の指摘で、渚の表情も変化する。
この程度の指摘で動揺が出てくるようでは、と千夜はクッと嘲笑を零し、

「そんなに動揺するな。大体見当がつく。……朝倉と土御門は長い友好関係を持つ家同士だ。自然と思いつくもんだ」
「……そこまでわかっているんなら、遠慮なくネタバレするよ。俺と、あいつがここ数日何をしていたか」
「……実家に帰省していたという話はデマか？」
「それは本当。学校に顔を出さなかったのはそれだけじゃないってことさ」

その点に関しては、千夜もどうでもよかった。
気になるのは、これから話されるであろうその先。
朝倉渚と、その相棒――――――土御門雅明が何処まで自分のことに首を突っ込んできたか、であった。

「それで、お前たちは何処まで辿り着けたんだ？　……聞かせて

くれよ、答え合わせだ」
「……まずは君の経歴から探りをいれてみた。……びっくりするくらい、真っ黒だったけどね」

つまりは、何一つ事実とは異なる結果であったということ。

「まぁ、まず戸籍登録のところでドカン！だったよ。……書かれている出身地とか、通っていた小学校や中学校、高校。わざわざ足運んで、在学記録も見てきたよ？　……まぁ、結果はさっき言ったとおり。――――ひとりの人間の存在不成立がなったわけだ」
「そうか。……当然だが」
「よくもまぁあんな穴だらけの経歴で、表に居れたよね。油断しすぎじゃない？」
「……そうだな」

短く返すと、渚は僅かにいぶかしむような歪みを表情に見せた。
秘密を暴かれたにもかかわらず、千夜は動揺どころか少しも態度に変化を見せない。
それどころか、こうなることが前もってわかっていたかのようにさえ見える。

「随分冷静だね。ひょっとして、俺たちの行動……バレてたとか？」
「いや。今、初めて知った。……だが、まぁ……遅かれ早かれこうなるんじゃないかとは予想していた」
「……穴だらけの履歴は、まさかわざと？」
「わざとといえばそうだがな……別に誰かに調べさせるためじゃない。あの学園に長居するつもりはなかった……気が変わったら二、三ヶ月くらいで姿を消すつもりでいたから。それだけだ。……と、こんなことはどうでもいい。そろそろ本題に入ったらどうだ？

まさか他人の粗探しが目的ではあるまい？」
「……君の目的は何？」
「質問に対して質問は行儀が悪いぞ。それに、前置きが足らん。答え合わせにならんだろうが」
今度ははっきりと顔を歪め、一度冷静になるためなのか、渚は目を閉じて呼吸の動作を一つ置いた。
そして、
「そもそも俺たちが君に目をつけたのは……綻びが生じ始めたタイミングに気がついたからだった」
「タイミング……？」
「おかしくなり始めたのは、神崎が魔性に堕ちたところだと……俺たちは最初思っていた。だけど、もっとよく考えてみれば……それにも何かしらキッカケがあったはずなんだよ」
「……何が言いたい」
思った以上に低い声が出てしまったと自覚したのは、渚が気まずげに目を逸らしたのを見てからだった。
その態度には躊躇の色が見えた。
千夜は、不意に苦笑いが出そうになった。
ここに来て言おうとしていることがどんなものかについて気付いたらしい渚。
その性根は、完全なる非情さがまだ根付いていないのだろう。
若さか。
それとも、少なくともこの男には確固たる決意がないからなのか。
いずれにせよ、ここを踏み切れないようなら――――
「……お前の言いたいことを代わりに代弁してやろうか。つまり、

お前はこう言いたいわけだ。奴は、停学期間に魔性になった。その原因となったのは、俺だ。まぁ、あの馬鹿は単に性欲突っ走らせて見当違いな方向として俺に向かってきただけなんだがな。

――――しかし、これはそのまま捉えていいのだろうか、とお前らは通り過ぎずそこで踏み止まった」

ここで千夜は止まった。

全て自分の口から語ることはしない。

晒すのではなく、暴いてもらわねば意味がないのだから、と。

さぁ、言えよ。

お膳立てはしてやったぞ。

視線で先を促すように訴え、千夜は相手の動きを待った。

「……最初はふとした疑問だった。こじつけもいいところだった。だが、考えて踏み込めば踏み込むほどに君の不審な行動が浮き彫りになった」

「ほー、どんな？」

「……君は、神崎の校内襲撃の際……どうして、校内にいたの？」

「新條久留美に記事に載せるインタビューを頼まれた。図書室で待ち合わせていたんだよ」

「……本当は？」

「本当さ。当初はな。……あの、昼休みの一件で変わることとなったがな」

告げると、渚の表情に追及の色が濃くなる。

「やっぱり……君は偶然ではなく、目的があってあの場に居合わせていたと判断してもいいんだね？」

「ああ、ついでこれも遠慮なく含むといい。――――――俺は、お前たちと同じく神崎に接触する為に残っていたと」

沈黙が降りる。

一つの区切りとして、渚に次へと踏み込ませる助走となった。

「……ここまでは、君を調査するのに至らせた疑惑。けれど、本命はここから」

「言ってみろ」

「――――――私立明陵学園。君が、転校前に通っていた学校だよね？」

「何故、聞く」

「【終夜千夜】はいなかったからね」

「では、お前はそこで何を見つけたんだ？」

「……そこに終夜千夜という人間の在学記録は無かった。ただ、代わりに同じお名前を持つ――――男子生徒を見つけた」

「――――」

心臓に突き刺さるような痛み。

顔を歪めないように徹しながら、その先の言葉に身構えた。

「その男子生徒は既に在学していなかった。三ヶ月前に転校したと記述されていたよ――――――その学園で起きた、とある事件の直後にね」

渚はパーカーの腹部に取り付けられたポケットに手をつっこみ、何かを取り出した。

それは一枚の紙――――――何かを写した写真だった。

そして、そこに映り込んでいたのは、

「この先に触れる前に、確認をしておきたい。問うよ、自称【終夜千夜】さん」

千夜は、目を逸らさずソレを視た。
逸らす事は忌むべき逃避だった。

向き合わなければならなかった。
今度こそ、日常と決別する為に。

「――――【御月千夜】。性別に関しては、君が答えてくれないとどうにもならないから置いておくけど……これは、君だよね？」

千夜は、肯定すべく目の前に曝された過去の己を直視した。

【壱百弐拾伍】　過去の詮索者　（後書き）

年越しまでにあと一回は更新したいですね。

【壱百弐拾六】　平行線の相対

――――――御月千夜。

その名を、夢ではなく現実で肉声によって呼ばれるのは、随分久しいことだと感じた。

「君、だよね？」

再度来る確認の問い。

千夜が返す答えは決まっていた。

「……ああ」

「だからといって、本名でもないよね？　君の顔の一つ……ということにでもしておくべきかな」

「好きにしろ」

「しっかし、凄いね。パッと見ただけじゃぁ、同一人物だと認めるのは難しかった。何せ、どういうわけだか面影はあるけど外見はもちろん性別が違ったからね……ちなみに、どっちなの？」

「企業秘密。いろいろ面倒な事情が絡んでるんでな、スルーしてくれ。俺もお前の女装云々には触れる気は無いんだからな」

「ふーん……まぁ、いいけど」

了承の気配を感じ、千夜は一つ手間が省けたと小さく息を吐いた。

感じた通り、渚はそこ離れて先へと話を転がす。

「調べてみたら、その学校は三ヶ月前に不良生徒とその一味のグループが校内に立て篭もって占拠するって結構大きな事件が起きたらしい。その後、無事に多数の怪我人と元凶の生徒たちの退学で事が

収まった……と、表向きにはそういう話になっている」
「表向き……ね」
「……ああ、そうさ。その学校には――――――降魔庁の処理がかかっていた」
「処理、とは？」
「校内には、降魔庁が一般人に事が露見するほどの甚大な被害を出してしまった際に使用する記憶操作の暗示用の霊符が貼られていた。時間がかなり経っているせいで自然消滅しかかってるところだったから、あと少し遅かったら見逃すところだったよ」

千夜も、耳にしたことはある。
世俗の人間に、こちら側を垣間見られることは珍しいことではない。
日常と非日常は常に隣り合わせ。互いがいつ何らかの拍子に接触及び干渉を起してもなんら不思議なことはない。
そして、日常の人間が誤って、或いは不可抗力で非日常に拘ってしまった際には――――【処理】を必要とされる。
日常と非日常に境が無かった時代は当に過ぎた今となっては、壁の崩壊を招く要因は潰さなければならない。
魔性との戦いを人々から隠す為の【結界】と共に、退魔師には最低限必要とされる――――――【記憶処理】は、その為にある。
手順は三段階ある。
まずは部分的な『消去』。そして、次にぽっかりと開いた空白部分を押しつぶすように前後の記憶の『接続』。最後には、どうしても残る違和感に対して意識が向かないようにする『暗示』だ。
これら三つの作業によって、【記憶処理】という精神操作は成り立つ。
そして、降魔庁は広範囲にそれを施す為に特殊な霊符を用いる。
記憶操作を施した上で、その関連者たちが日常的に行き通う建物や場所に霊符を設置しておき、その領域下で過ごすことで補助的な

効果を対象に促す。
霊符は自らが持つ効力を発揮し終えると自然消滅する。
その頃には、対象からは完全に違和感も全て取り去られ、完璧な修整が成る。

あの学園に施された処置は、被害に合わせて長い期間をもって行われていたらしい。
そして、それがそろそろ完了するという手前で、渚に痕跡を発見された――――ということだろう。

「俺達は、この学園で起きた事件と……今回の神崎の手による連続猟奇殺人事は大きな共通点があるんじゃないかと思っている」
「何を根拠に、そう思うんだ？」
「……降魔庁は、どうして未然に防げなかったんだろうね」
「……」

既にある推測を渚が語り出す。
語り口たる僅かな片鱗に、千夜は表情を僅かに変化をみせる。

「さすがにもう辞めた身だし資料を直接漁れなかったけど……その学園で何があったかは大体見当がつくよ。……一つの学園全体に被害を及ぼすほどの事件。降魔庁はどうしてそうなる前に事前の処置や対処を行わなかったんだろう。俺達は、これをこう解釈した。しなかったんじゃない……出来なかったんだ。
何故なら――――気付けなかったから」

話はそこから一気に加速を描き出す。

「降魔庁の探知機能にひっかからなかった……そうだとしたら、この事件と今回の件はまるで同じだ。探知から逃れられる同じ……も

しくは酷似した同種の害敵が潜んでいたという可能性は十分汲める。そして、その事件を……降魔庁は、ある事件と同様に隠蔽した。これで二つの事件が共通であるという可能性は更に高まる。そして、トドメが――――君だ」

渚は矛先を再び千夜に定め、

「三ヶ月前の事件に何らかの関与をしていたと思われ、そして今回も……。君が、加害者か被害者か、ただ巻き込まれただけの傍観者か……どの立ち位置にいるかはわからないが……けれど、真相に関する何か知っている……そうだろう？」

問いに対し、千夜はそこでようやく沈黙してから初めて言葉を発した。

ハッと短い笑い声という前置きをして、

「……随分、遠回しな聞き方に徹しているな。今更遠慮なんてしても白々しいだけだぞ？　俺が当事者であると既に踏んでいるから、ここに来たくせに」

「質問の答えになっていないんだけど」

嘲弄には一切喰いつかず、渚は揺るぐことなく追求の姿勢を固定する。

千夜は少し感心し、それに免じて答えを放った。

「……ああ、すまなかった。だが、その前に一つ訂正させてくれ」

「何をだい？」

「降魔庁の隠蔽についてさ。お前の元勤め先が隠蔽した事件はそいつと二十年前の事件だけじゃない。

――――その間にもう一つある」

「っ、何だって……」

渚がここでついに揺らいだ。

認知しない事実だったが故か。

「……そいつが現れたのは、三年前。降魔庁の特殊斑によって処理された。その時も勿論今回のように、若手の所属退魔師の目からは隠された。そいつらは、地方の仕事に飛ばされ、処理が済むまで東京からは遠ざけられたからな。討伐対象だけではなく、時間すらも敵に回して大忙しさ。……ところで、お前。あそこにはいつから所属していたんだ？」

「に、二年くらい、前から……」

「そうか。なら、知らなくて当然か……一年もあれば、何事もなかったように隠蔽作業も済むだろうな。……あそこの総帥の手にかかれば」

「いや、え、ちょっ……ちょっと、待てよ！」

何かに耐えかねたように渚が声を荒げて、制止を挙げた。

「何で……そんなところまで知ってるんだ。君は、一体何処まで……ってゆーか、何で二十年前の関連についても」

「ああ、それに関しては俺も最近知ったばかりだ。ああ、そうか……お前たちか、俺の友人のところに【あいつ】を差し向けたのは」

「あいつって、蒼」

「さっきから質問乱発だな。……いい加減、一つに絞ってくれないか？　これでは、俺も答える側としては困る」

「……っ、じゃぁ訊くよ。君は、明陵学園の事件……当事者としてどんなポジションで拘っていて……何を知っているんだ」

スタート地点に戻っただけだった。

だが、他がとりあえず放りされたおかげで、簡潔で答えやすくなったのもまた事実で、

「……傍観者は論外。そして、少なくとも俺は……被害者を名乗れない。そんな資格は……断じて有り得ない」

被害者。

口にするだけで吐き気がしそうだった。

「まるで、自分が全て悪いとでも……言いたげだね」

「はっ……いい勘をしてるじゃないか。……そうだな、確かにそうだ。俺が、あの場所にいたから……あの事件は起きたんだからな。ついでに答えると、今回の事件も……俺が来なければ起こらなかっただろう」

「それは、どういうこと？」

「……どうやら、俺は奴らに好かれるらしい」

「――――真面目に答えろよ！」

渚の声色から冷静さがかき飛ぶ。

どうやら完全に切れたらしい。

思った以上に気が短いのか。

……動けないとはいえ、寄越した人材間違えてるだろうに。

これ以上挑発して、話もろくに理解出来ないようになられても面倒だ、と千夜は言われたとおり真面目に話すことにした。

はぁ、と肩と溜息を落し、

「それに関してはそうとしか言えん。本当の理由がわかれば、こっちも苦労しない。奴ら、どういうわけか何処にいようとすぐに居場

所を嗅ぎ付けては、ちょっかいを出してくる。……そして、今回は神崎が奴らの良い橋渡しになったというところか」

「それじゃぁ、神崎陵は……君に近づく為の依代に」

「いや、そうとも限らない。仮に、選抜するのに”俺に拘った痕跡のある人間である”という条件があるとすれば、あの男に限らず、他の誰かだったかもしれない。まぁ、それが事実なのかはわからんが……幸い、ひたすら欲望の強い人間で取り入りやすい神崎が優先的に選ばれた。扱いやすそうな頭してそうだから、さぞかし体よく丸め込まれただろうに」

「う、うーん、それは言えてるかも……」

意外なところで賛成を得た。

言葉をまともに聴ける程度には冷静さを取り戻したことに対して、千夜は一息つく。

それもあまり意味は成さないだろうが、と思いながら、

「……さて、終着点だな。話はいつの間にか、お前らの目的地点まで来た。……俺に関する話はここでいい加減打ち切りにして……今度は、俺の質問に答えろよ」

自身の中の切り替えとして、一呼吸を置き、

「――――お前ら、俺に何の用で来たんだ？」

今度こそちゃんと答えろよ、と念を押して問いを放つ。

逃れようの無いように、真っ直ぐと見据えて。

「……君が、知っているのならと……聞きに来たんだ。……俺たちが知らないことを」

「あの化け物についてか？　ご苦労なことをしているな。もう終わ

ったことに、いつまでもしがみついていたところで何の意味があるというんだか」

「終わったこと？」

「ああ、そうだよ。終わった。……今回の元凶たる神崎陵が死んだことでな。俺に聞く？　訊いたところで何が成るんだ？　今更掘り返したところで、出てくるのは終わったという事実だけ……」

「――――――見くびるなよ」

まだ続くはずだった言葉を、強い響きが遮った。

それは、今まで翻弄されるがままだった渚の口から放たれたものだった。

そして、口元には何故か――――――笑み。

「まだ、終わってなんかいない。そんなはずがない。だって……元凶は生きているんだから」

「お前……」

「既に確認済みだ。神崎陵……そう呼ばれていたモノは生きている」

「確認した……？」

「五日前の日曜日。玖珂蒼助のマンションが何者の放火によって焼失した。……俺は、その時はまだ東京を離れていたから気付かなかったけど……動けない代わりに見過ごさなかった相棒はしっかり捉えておいてくれたよ」

「あいつのマンションの……？　それが、奴の仕業だと……？」

「現場に赴いて残留思念をバッチリ確認したからね。間違いないさ」

衝撃。

さっさと追い返す為に、目の前の人間に与えるはずだったものを食らったのは、千夜の方だった。
そして、その未知の情報は千夜を大きく揺さ振った。
日曜日。
その日は多くの事柄が休むことなく起こった。更に、千夜が久遠寺医院で中和剤を飲まされた日だ。
服用したその副作用として、完全に霊力を失った。
それ故に、神崎の気配が強まったであろう瞬間を捉え損ねてしまったのだ。

……俺は、また失うところだったのか？

幸い、蒼助は生きている。
生きている――――――だが、もしも何か一つでもズレていたら。
仮定を思った瞬間、服の下で千夜の腕の表面が粟立った。
寒気。悪寒。恐怖。
あったかもしれない喪失に対して、千夜はこれ以上に無くそれを感じずにいられなかった。
ひょっとしたら、何も気付かずに理由のわからない後悔を抱えることになっていたかもしれないと思うと、不可抗力とはいえその隙を甘んじることは、とてもじゃないが出来ない。

……面倒なもんに張り付かれたと思ったが、とんだ拾いものだったか。

千夜は衝撃から立ち直る作業の片手間で、渚に対して認識を僅かだけ変えながら、

「……何だ、思ったよりやるじゃないか。鼻が利くという意味では」

「それって……褒めてもらえてるのかな？」
「好きに解釈してくれ。……そうか、もう動いてたんだなあのクソ蛙が」
汚物を吐くように顔をあからさまに顰め、千夜は吐き捨てた。
そこへ渚から不意に言葉がかかる。
「……凄まじい二面性だね。蒼助くん……七海ちゃんに対してといい、セフレといい……つくづく女を見る目がないよねぇ」
「それは確かだと思うが……お前は少し誤解してるぞ？」
「……？」
「別に、表を裏とかでこういう面を使い分けているわけじゃぁない。……自然と出てくるだけなんだ――――嫌いなモノに対して」
ここで千夜は初めて渚に対して、押し込めていた悪意を曝す。
空気の微妙な悪化に渚が眉を顰めるのを見ながら、千夜はそれを振るう。
「俺はな、調子付いた馬鹿が嫌いなんだ。よくホラー映画とかでもあるじゃないか。好奇心なんて、その場限りの浮ついた感情に踊らされて曰く付きの屋敷やら廃墟やらに探検にしに行く主人公たち。……正直、何度見ても馬鹿としか思えないな。スリルやら刺激なんてものに惑わされて、自分たちの幸せを棒に振る。多分、あって当然と思っているからんだろうな……自分たちは大丈夫だなんて、根拠も無く思っているんだろうな」
ここまでは、千夜は笑いながら口にしていた。
そして、笑みに――――毒が滲み出す
「――――見ていて、たまらなく苛々する。……お前らは同じだ。

だから、わかりやすい態度で接している……鬱陶しくて仕方ないんでな」
「なっ」
「ああいった映画のレトロな結末は知ってるだろ？　自分たちの想像以上の恐怖に呑みこまれて……悲惨な最期を迎える。なぁ……そこから作った人間のメッセージを感じないか？　下手な好奇心は、必ず災いとなって降りかかり……身を滅ぼすと」
「……、ふざけるなっ！　一緒になんかされてたまるかっっ！！」

跳ね返すような渚の反発。
しかし、千夜は失笑で更に打ち返す。

「――――同じだよ、馬鹿。……少なくとも、映画の中の恐怖と同種である俺から見れば……お前らは、あの主人公たちと同じなんだよ。立場も、迎える結末も」
「馬鹿にしてっ……」
「そうにしか見えないから仕方ないだろうが。……ところで、もういい加減痺れ切れてきたから、俺の疑問に対する予想を言ってみるが――――――お前ら、俺を囮にして神崎を誘い出そうという魂胆か？」
「っっ！」

明らかな動揺。もはや、誤魔化すことも出来ないまでの露見だった。
千夜は驚愕する渚に、諭すように言う。

「何だ当たりか……何、そう驚くことじゃない。別に心を読んだとかじゃないぞ？　ただ、お前らをそういう考えに至らせる要素を……多分、あの土壇場で見てただろうからな。
――――本能と闘争意識むき出しになった神崎……いや、奴の

ダミーは、目の前の格好の獲物を素通りして俺に向かってきた。明らかな何らかの他意と目的があっての行動であると……そう読んだんだろう？」

「……」

その沈黙は肯定であるとして、千夜は当然のように受け取った。

「全く……なかなか狡いことを考えてくれるじゃないか。お前らにとって、俺は……良くて協力者……悪くてせいぜい奴を釣り上げるための餌か……。お前ら、神崎に負けず劣らずなかなかエゲツないなぁ」

「っ、雅明を悪く言うな」

「ふぅん、発案者はあの土御門の跡取りか。お前もなかなか苦労させられているな……こんな使い走りまでさせられて」

挑発だった。

渚の頭に血の巡りを良くさせ、感情に走らせる。

理性というブレーキを失えば失うほど、口もまた心と同様に緩む。

思惑は外れることなく、効果を発揮した。

「余計なお世話だっ……好きでやってるんだよ！　……っ……あいつは、本来ならこんな手段とったりしない。誰かを囮とか、使い捨てみたいに扱ったりしないんだ！　……そのあいつが……君をそういう風に扱うと判断したんだ。……あんたが、自分の思っている奴だとしたら……手段を選ぶ必要はないって言ったんだ」

「……で、お前は金魚のふんヨロシクで頷いたというわけか。お前……相棒だっていうなら、止めてやれよ……ヤバイってわかってんだろ？」

「……言って止まるようなやつなら、俺はここまで付き合ったり

しない。
……ここには、いない」
ペースを完全に乱され、焦燥の中に落ちていたはずの渚がふと――
――微笑った。
それは、苦笑いようにも見え、或るいは自嘲しているようでもあった。
そんな渚の姿に千夜は僅かに心を動かし、
「金魚のふんは訂正しよう。……ただ、お前らがまとめて馬鹿なのは変わりないが」
「どうとでも。……その点では、多分俺は馬鹿だから」
使われているのではなく、自分の意思でこうしている。
そうだというのなら、確かに救いようの無い馬鹿だな、と千夜は決して貶す意味ではなく、只そう思った。
そして、少し羨望すら芽生えた。
後先など考えず、ただ相手を信じることが出来るそのひたむきさに対して。
「見抜かれているっていうのなら、こっちから切り出す必要がなくなったけど……それでも、一応訊くよ。……協力してくれない？」
「……今までの話を聞いた上で尚もそう出れるんだから、大した図太さだよな」
「そりゃ、どうも。……そもそも君が招いた災厄だというのなら、君にはそれをどうにかするという責任があるはずだ」
「言われるまでもない。……だが、お前らがそれを口にするのは、単なるこじ付けだ。そこに、お前らが加わる必要性は全くといって無い……――――俺の友人が、あいつに言っていたがな」

引き出した記憶に乗って、千夜は言葉を研ぐ。

「お前らはボランティアだ、協力だと飾って【こちら側】に踏み込んで来ようとしているが……【こちら側】からすれば、ただ迷惑なだけだ。いいか、親切なんてやつは相手が困っていなければ単なるの押し売りだ。……俺はまさに今そんな気分で、大変気疲れしている。――――わかったら、帰れ。じゃなきゃ、俺が帰る」

一方的な打ち切りによる、長い相対の終わりだった。
これ以上居ても意味は無い。
ただ平行線が二本引かれていくだけ。

くだらないやり取りには付き合いきれないとばかりに、千夜は了承も何も無く佇む姿勢を解き、歩き出した。
向かうは出口――――この相対の場からの脱出口だった
歩けば、通過上にいる渚が近づく。
だが、構うことも無く――――通り過ぎようとした。

「――――待ちなよ」

投石のような声だった。
そして、それは千夜が静めた水面に波紋という変動を起す。
千夜はそれに足を止めた。

動いたのは、場の空気だけではないとわかっていたからだ。

「……一応、聞いたからね。それじゃぁ――――ここから先の相対

は、そういった問答は無用ってことで」
「代わりに、それで相対しようってか……物騒なことだ」
「穏便な手段が好みでないようだからね」

千夜は背中に予想と同じ武装の気配を感じた。
ちらり、と視線を送れば、渚の構えるその手には――――短刀。
戦巫女が用いる霊剣の一つであると知識と合致する。

「……で、俺を打ち負かして了承させたいのか？　それとも、生きてさえいれば吊るして食いつくのを待つだけでもいい……どっちだ？」
「君はどっちがお好み？　……俺はどっちでもいいよ」
「――――ハッ、どっちがいいかぁ？」

思わず千夜は噴き出した。
これだから、と相手への嘲弄の念を耐えかねて。

「あー……そうかいそうかい。……穏便な手段が好みではないのは、お前たちもか。
ったく、とんだマゾヒストに遭遇してしまったものだよ……」
「余裕だね。言っておくけど、手加減はしないよ……俺は、動けないあいつの分も背負って君に挑む」
「……ああ、そうしてくれ。”俺も”、その気でいる」

千夜は振り向いた。
首だけをダラリと後ろに傾けて、

「――――かかってこい、箱入りども。ここにはいない相棒の分とやらも含めて……捻りついでにブチ折ってやる」

蛇が鎌首を持ち上げる時とは、こんな気分なのだろうか。

冷えていく頭の片隅で何気なく思うが、すぐに消した。

否、”消された”。

久々に覚えた、苛立ちにも似た感情と感覚の間のような何か。

獲物の喉元を食い破りたいと吠えるような――――凶暴な衝動によって。

【壱百弐拾六】　平行線の相対（後書き）

今年最後の更新だー！
それじゃぁ、皆さん良いお年を。

【壱百弐拾七】　存在への執着

それは、まるで蓋を切ったボトルのように溢れ出した。
もはや抑えようもなくなったかの如く。

少なくとも、渚にはそう感じた。

「――――――っっ！」

全身が、一気に総毛立った。
目の前の存在から放たれた殺気は、ビリビリと服の上からでも肌を刺激してくる。

見誤ったか、と渚は己の判断に間違いを感じた。
そして、親友の算段にも誤算の存在を見た。

自分が――――――自分達が思っていたよりも、【澱】はずっと深くて得体の知れないものだったのだと、今になって確信に至った。

「どうした？」

目の前のモノは、クスッと嗤う。
まるで見た目そのものである少女のように。
けれど、渚にはとてもそうは思えなかった。

「……来ないのか？」

誘い。
乗るのか、と自己に問うが、本能の答えは――――――――『ＮＯ』だった。

未知の相手に、下手に踏み込むなど愚行も等しい。

相手の動き。
攻撃手段。
それ一連の対策。

最低でもこの三つが自分の手札として揃わないうちは、一人で攻め手に出るのは危険だ。

ましてや相手は――――――人だ。

退魔師は、その名の通りの意味として魔に対して存在する。
よって、戦闘技術もそれに対応するべく出来ている。

反面、通常では有り得ないケースとして対人戦闘技術には乏しい。
レベルの高い魔性に対する対応が遅れるのも、一つの共通した理由がある。

それは、知性。

コレが有ると無いで、対処の難易度は大きく違ってくる。
こちらに動きに対して、対策を練ることも、咄嗟の臨時応変も可能。

そうなると、ただ我武者羅に突っ込めば返り討ちの展開も十分有り得ることになる。

そして、人もまた――――――そういった意味では、異能のみでは対処し難い相手なのだ。

……だからこそ、より高い能力を持つ魔性には複数で取り掛かるのが基本なんだ。

現代において、降魔庁が組織内で定めたチーム制度もそれに基づいている。

対処の効率が上がる反面、単独での対処に弱い。

昔に比べて、魔と同様に退魔師が弱体化しているといわれる由縁でもあった。

……これじゃ、一人じゃ何も出来ないのと同じだ。

焦りは禁物。

だが、渚はもどかしかった。

そして、今この場に相棒が居ないことがたまらなく心細かった。

……そういえば、考えるのはいつだってマサに任せっきりだったもんなぁ。

彼に比べればずっと劣る思考で小難しい作戦を練るよりも、彼の考えたことをそのまま実行することを選んだ。

身に合った選択だと思ったのに、今になってこんな時に後悔するとは思いもしなかった。

……さて、対人間っていうのは実は初めてなんだけど。

どうしようかな、と渚は千夜の動向を観る。

一見したところ、武装はしていない。

素手で武器を持った相手を迎えるつもりでいるのか。

そして、それどころか千夜は構えすらもとっていない。

……舐められてんだろうなぁ、きっと。

十中八九当たっているだろう。

何しろ、先に来いと匂わす台詞を既にもらっている。

だが、これは好機（チャンス）でもある。

相手が自分を見くびっているのなら、隙も何処かで出るはずだ。

……ソロデビュー、いきなりハードなのと当たっちゃったけど。

頑張るから見ててよ、マサ。

ここにはいない。

けれど、離れた場所で帰りを待っている相棒の期待を裏切るつもりはない。

……一緒に行くと、決めたんだ。

何処にだって。

何処であろうと。

そこに彼が行くなら、自分も――――と。

「……全身から警戒心が剥き出しになっている。……いい心がけだ。そうだ、隙など一切見せるな……一秒足らずのそれが、俺にはお前を殺すのに十分なターンとなりえるからな」

精神攻撃、だろうか。

張り詰めた神経を更に引き伸ばそうとする言葉。

揺らぐな、と渚は己を律し、

「……っ」

額の脂汗が気持ち悪い。

だが、それに意識を向けるだけの余裕はまだあると知って安堵。

互いが臨戦状態に入ってから、今だ不動が続く。

だが、渚は決して自分から動くことはしないと決めていた。

たとえ何を言われようと、相手が先手を打つのを待つ、と。

それが、雅明を無くして自分に出来る――――唯一の策として。

「我、動かず……か。だが、いつまでのそうされていると……こっちはいい加減、焦れるな」

千夜の言動に、渚は動の気配を感じた。

来るか、と気を張る。

「来ないなら、俺から行こうか。さっさと終わらせて帰るとしよう」

千夜が完全攻撃態勢に入った。

来い、と如何なる方面からの攻撃も受容できるように気を張り巡

らす。

そして、千夜が踏み出したその一歩が開戦の合図と――――――

「……なんて、な」

――――――ならなかった。

千夜の全身から昇っていた殺気が、一気に緩むのに渚は目を見張った。

「、は？」

「やっぱり面倒くさい。何が哀しくて、こんな場所でやり合わなきゃならないんだ……。

――――――止めた、帰る」

渚は、警戒も何もかも忘れて愕然とした。

千夜は気の抜けた目で、本気で言っている。

クシャリと前髪を捏ねながら、

「……ちなみに、結界は訳あって俺には効かないんで。……それ

じゃ」

「えっ、ちょっ……」

完全に相手のペースで事が進んでいる。

そうはさせじと、

「……こ、の…待てよっまだ終わって……」

「――――――終わったさ」

終わっていない、と否定の言葉を言いかけた渚は最後まで言い切ることを放棄した。

止めようと動いたのは言葉だけではなく、体も伴って動いていたはずだった。

だが、現に動いたのは前者だけだった。

そう身体は、

「……っな」

一歩を踏み出したはずの足は、依然と元の立ち位置の上にあった。

動いていない。

否。

動けない。

「……言っただろう？　――――――”終らせて”、帰る、と」

再び見遣れば、千夜は笑っていた。
それは、勝者の誇る笑みだった。

◆◆◆◆◆◆

突如発生した己の身に起こった異常。
冷静さなど消し飛び、渚は完全に混乱状態に陥っていた。

……いつだっ！？

一体、いつ行われたのか。
千夜は武装どころか術式の詠唱の気配、そして霊力具現の波紋すら起していなかった。
いわば、無防備。非武装。

その状態でいかにして自分を”こんな状態”に追い込んだのか。

「……くっそ……なんだよ、これっ」

一体どうなっているんだ、と動かない首で視線だけを飛ばし、己の体をその周囲を見回す。

そして――――

「っ、これは？」

視線が止まったのは――――影。渚自身の影。
そこは、まだ外の陽の光が差し込む場所。故に薄暗い場所でも影が生じていた。
その影には、
「……針？」
黒い針のような何かが、影越しに地面に突き刺さっている。
「影に……？　……っ！」
「――――そいつは俺の髪だよ」
答えを放り込む声に、渚は己の影から千夜へと注意を移した。
見れば、確信めいた笑みを浮かべており、
「――――髪と神。……表わす字は違えど、発音が同じくするが故か……髪という物質は、霊力の通しが良く、伸ばせばそこに霊力が貯まる。だから、昔の人間はこんな説を立てた。髪には、神が宿ると……いや、宿せると言うべきか」
千夜は徐に前髪を一本引き抜いた。
だらりと力なく垂れるそれを、渚に見せるようにかざし、
「……髪を伸ばして霊力を貯蔵するのは、知っているな？　体内に霊力を溜め込むには個々の保有量の限界がある……だから、肉体に直結する部位である髪に溜め込むことで総合的な保有量を増加させる。神巫（かんなぎ）の多くが髪を伸ばしている理由だったな、これは」
「だったら、何だって言うんだ」
「……髪にはこういう使い方もあるってことだ」

その瞬間、地面を向いていた髪の先端が渚に向いた。

否。

何かが芯として通ったかのように――――――立ったのだ。

渚はその光景を見て、目を見開く。

「髪がっ……」

「別におかしいことじゃない。霊力の通りがいいということは、霊媒としての応用性もこれにはあるというだけだ。まぁ、やり方は身体強化の応用……といったところか。霊力を芯として流し込み、外を更にコーティング。それよって、髪は針のように硬化を起こす。だから、特にこれといって種も仕掛けもない……髪自体には」

「髪に、霊力操作を……っ？」

事実は、渚を驚愕の心境に叩き落した。

髪を媒体に霊力操作。

ありえないとは言わない。

だが、不可能だ。

今までふと考えるに至った人間はいたかもしれないが、すぐに捨てただろう。

当たり前だ。

何故なら、髪は媒体とするには脆すぎる。

髪に霊力を貯蔵とするというのも、それは肉体と直結した状態であり、更には幾重にも束になっていてこそ一つの倉庫のように扱えるのだ。

その一本一本に霊力を通す霊脈は存在する。
だが、髪の中の霊脈だ。それがどれだけ細く、どれだけ繊細に出来ているかなど想像するまでもなく見当がつく。
流し込んだとしても、負荷が内の霊脈の耐久性を超えてしまえば、物質として髪は耐え切れず内側から弾け飛んでしまう。
外側をコーティングするのは、それを防ぐための作用なのだろうが、
……肝心の成功の決め手は、ソレじゃない。
成功の仮定を組み立てる机上の空想でもない。
そこで立てられた理論でもない。
全てを行う当人の――――技量だ。
それに全てが掛かっている。
……単純な作業ほど、難しいって言うけど。
大掛かりな術式は、術者の制御にかかっているかといえば実は一概にそうでもない。
そういったものについては、いくつかの補助的な仕掛けを施さなければならない場合もあり、それを敵に気付かれて阻止される危険性ゆえの使い勝手の難しさなのだ。
逆に千夜がやってみせたように、全てが自分の技量に委ねられる単純な操作の方が、実質を問われるということもある。
……つーか、いつのまに飛ばしたんだよっ！
ずっと警戒して、絶えず行動に目を向けていたというのに。

何処かで何気なさを装った仕草を笠に着せて、行動を起こすことを許してしまったのか。

……っ、あの時か？

唐突な発言と共に、千夜が髪に触れた瞬間。
あの僅かな刹那に生じたのは――――――間違いなく隙だった。

そんなものが、この場の形勢を一瞬で決めてしまった。
覆しようが無いほどに。

「……俺をっ……殺すの、か？」
「……その台詞は、期待されていると受けとってもいいのか？」

皮肉るように言う千夜。
しかし、

「だとしたら……悪いが、ゴメンだね。お前らにそこまでして止めてやる義理は無い。その硬直状態は日が暮れて、影の位置が移動すれば自然と解ける。まぁ、その頃には俺もお前らの目が届かない場所にしけこんでいるだろうがな」

じゃぁ、そういうことで、と千夜は一方的に切り上げて背を向ける。
完全に勝者のペースだった。

「……っ、待て！　こんな……卑怯じゃないか！！」

瞬間、何かが一瞬の間に渚の頬を掠めた。

その一部分の髪を舞い上げるほどの勢い。
そして、ちくりとした痛みと共に頬が何かで濡れるような感覚を覚えた。

「……卑怯、か。確かに……そうだな。俺がした真似はそういうものだ」

背を向けていたはずの千夜は、こちらを振り向いた体勢でいた。
振り向く際に、何かを投げつけたような姿勢。
そして、振り抜いたような形で止まる腕――――その先の手には先程まであった【髪】がない。

渚は、動けない状態で己の頬で起きていること臭いで知った。
鉄のような臭い。
それは――――血。

さっき頬を掠めたのは、千夜が投げつけた【髪】だった。

「……だが、お前ら……【澱】とはそういうところだぞ？」

視線を合わせた千夜の目は、かつてないほどに冷たく澄んでいた。

非情。無情。冷酷。冷徹。冷静。
あらゆる冷え切った情によって鋭く光るその眼光は、渚を戦慄に突き落とした。

「まったくお前ら……どういう心構えで【こっち】に来る腹積もり

でいたんだ？　正々堂々なんて言葉が【こっち】で通じるなんて思っていたのか？　……本当に、何処まで俺を呆れさせれば気が済むんだか……」

渇いた笑い。

しかし、そこから想像も出来ないほどの憎しみに似たおどろおどろしい感情を、渚は感じた。

それを感じ取ったのは、神巫としての感性か。それとも、人としての本能か。

「……だから、箱入りだというんだ。所詮お前らは……正当性や常識が通じる箱庭の中で育てられた世間知らずに過ぎないんだよ。箱の中には、箱の中なりの不便さや理不尽が存在しているとしてもな……。篭の中の鳥が、決して外では長生きできないのと同じように……お前らもこっちに来れば、大して保ちはしないだろう」

「何を、根拠に……」

「卑怯を責め立てる時点で、失格だ。【こっち】じゃ、そんな良い分は笑いの種にしかならない。……そんな薄っぺらい紙のような言葉には、何の意味もない」

「……っっ」

容赦ない切り捨てに、渚は二の句を継げなかった。

少なからず、当たっていた。

単なる悔し紛れに出てきた、負け惜しみから出た言葉だった。

「……相棒にも伝えておけ。

――――――何の為に、あの時生かしてやったと思っているんだ、と」

「……は？」

渚は耳を疑う。

今の言い分では、まるで――――

「あんた、一体……」

反抗心も、敗北感も全てが疑問符の下に埋まる。

しかし、疑問が口に出るよりも先に、千夜は既に渚から興味をなくしたように背を向けてしまった。

◆◆◆◆◆◆

酷く、気分が悪かった。

胸に何かがとぐろ巻く感覚。

それは、久しく感じるものだった。

欠乏感。

虚無感。

少し前まで伴侶のように付きまとい、絶えなく有り続けたモノ。

だが、不思議と随分と長く留守にしていたような気がした。

しかし、それも帰って来た。
先程行われた過去の暴きと、

……こいつのおかげで。

背後の相対者を体面したうちに感じた、劣等感。
在り方の相違。
生きてきた過程の相違。
無知と、識った側。

面と向かっているだけで、負の感情が内側に溜まっていった。
かつて、自分を構成するのに欠かせなかった感情。

……最近、忘れかけていたからか。

束の間の“嘘”が、いつの間にか馴染んで来ていた。
“嘘”で作り上げられた両手足。
それを本物のように思い始めていた。

……俺は、いつの間にか【終夜千夜】として在るようになっていたのか。

終夜千夜という――――――嘘に、成りきっていた。

……現金なものだ。

少し前までは、【御月千夜】に未練を持っていたくせに、と自身を嗤う。
何がその未練を薄め、【終夜千夜】への執着を強めたのか。

考え、脳裏を過ぎるのは――――――ここにはいない人間だ。

……会いたい、な。

急激に起こる波のような欲求。

ここにはないものを、千夜の心は激しく求めていた。

思えば、この場を切り抜くことが出来たのも頭の中で描く男のおかげであった。

一昨日の夜に、交わることを目的として触れ合った。

本格的なところまで到達はしなかったが、精神が昂ぶった状態で触れ合うだけでも多少の効果があったらしい。

感応法。

予期せずとも、霊力を欠いていた千夜はその呪法を則ったことで、多少の霊力が回復したのだ。

そう考えると、余計会いたくなった。

……早く帰ろう。

ここにいると、自分が保てなくなりそうだった。

【終夜千夜】という己を。

現実逃避、という言葉が思考を過ぎり、自嘲する。

今の自分の心境は、間違いなくそれに該当する状態だった。

だが、それでも。

……俺は、【終夜千夜】で……いたいんだな。

実感が滲む。

じわじわと染み出る願望が、足先を外へと急かす。

心が。

身体が。

【終夜千夜】という存在を作り上げる一人の男を求めて。

「……っ」

つられて、少し前の【日常】の喪失を不意に思い出す。

最後の瞬間の顔が記憶に焼きついていた。

それが時折として、胸に痛みを生むようになっていた。

これで、己の【日常】は今度こそ幕を引く。

だが、それでも【終夜千夜】は続いていく。

――――続けていくのだ。

……あいつに、言わないとな。

自分が学校を辞めるといったら、あの男はどうするだろうか。

昨日の朝の会話どおりにするのか。

思い出し、不謹慎とはいえ少し胸が温かみを取り戻す。

「ちょっ、オイ結界が……」

渚が外へ出ようとする千夜に、それを妨げるものの存在を主張する。

だが、関係ないと千夜は無視した。

己の霊装【夜叉姫】の加護は、いかなる術式の効果であろうと全て無効とする。

よって、己に結界による封じ込めなど通じない。

経験と相棒への信頼をもって、誰よりもそれを既知していた。

足は、既に主の意思よりも先を行くように進む。

向かう先にいるであろう、不思議な安寧を与える男の元を求めて。

そして、踏み出した一歩が、外と内の境界線となっている結界に触れる。

「――――――――――っ！」

触れた瞬間。

信頼と確信の外側から全てが、一瞬にして覆された。

［壱百弐拾七］　存在への執着（後書き）

皆様、お久しぶりです。
テスト期間とはいえ、一ヶ月以上の放置……ご迷惑をおかけいたしましたー。

テスト地獄を這い上がり、大学生のなっがい春休みを手にしたわけですが……。

今、別の話が書きたくて仕方ない。

あー、悪い癖が。悪いクセがーっ。
しかも王道ファンタジーだなんて、書いたの何年前だと思ってやがるんだ自分。設定もまだ未完成なくせに、馬鹿なこと考えやがって……。
サモン○イトとかから影響が……畜生め。

現在、チマチマ設定つくってます。
我慢しきれなくなったら連載増やすかも。
あー、ダメだとわかっていながらも、鮮血じゃないフォルダをクリックしてしまうー。

【壱百弐拾八】　残酷に愛す（前書き）

全て、飲み込み始めた

【壱百弐拾八】　残酷に愛す

一秒にも満たない僅かな刹那の間に感じた、本来ならあるはずのない悪寒。
それは、千夜を反射的にその場から距離を取るという行動に至らせた。
瞬発力にて行った浅い跳躍を終えた直後、千夜は己の額に浮かんだ湿りに気づく。

それが珠になって浮かぶのも無視して、顔を歪めた。

「っ、くそ……どっから嗅ぎ付けてきやがるっ」
「……な、にっ……これ」

背後からの渚の詰まった声に、千夜は即座に振り向き、

「結界との接続を切れ！　呑み込まれるぞっ！！」
「でも、そんなこと、したら……」
「っ、――――夜叉姫！」

説明している暇はなかった。
一刻の猶予もない。
統合した結果が、千夜の行動を一つに定めた。

「あの男と結界の接続を断て！」
『――――御意』

了承の返事が、その証であるかのように強く空間に響いた。
続けて千夜は渚の元へ駆け、

「なに、を」
「心配するな。楽にしてやるだけだ」

交差の瞬間にそう告げて、千夜は身を低くかがめた。
その際に、影に触れた指は何を引き抜くような形をとり、腕は振り抜かれる。

直後、渚の身体は糸が切れた操り人形のようにその脚を折り、膝を地につけた。

「あ……っ」
「”髪”は抜いた。もう自由……と言ってやりたいところだが、瘴気にあてられたその身体じゃしばらく動けないだろうな」

神巫は霊能者の中でも、霊的資質に富んだ人間だ。その反面、霊気や陰気の影響を受けやすく、脆い。

「そこでじっとしていろ。時間が経てば、帰る分には差し支えはないはずだ」
「……それより、今のは……」
「そうだな。まずは……おめでとう、と言ってやるべきか？」
「は……？」

微細な動きには支障はない程度の被害なのか、渚は首を振り向かせて千夜を見上げた。
それに対し、千夜は一切に対応する様子はなく、ただ正面を向くままに、

「言って聞かせるよりも、楽な展開にはなった。……しかし、お前との再会は、どう思っても半分ぐらい喜ばしく感じないな。――――――神崎陵」

呼びかけは、光の射さない奥の闇へと吸い込まれた。

そして、

「――――――く」

闇から返されたもの。

それは、小さな吐息。

コポリと気泡が水面に浮いて消えるようなそれは、笑みから生じたと千夜に理解させた。

闇の中に『それ』は、笑ったのだ、と。

「……ひでぇなぁ……俺は、嬉しくて心臓が中から弾けそうだっていうのによぉ……」

「構わないがこっちまで飛ばすなよ。風呂に三回は入らなければならなくなる」

皮肉を返した後、千夜は放った言葉の先にある闇が蠢くのを見た。
奥に広がる闇がぐにょりと動き、何かの形を取り出す。

果てに出来たのは――――――――人の『形』だった。

「あれは……？」
「……神崎だろう」

慄く渚に、答えをくれてやる。
もっとも、あそこにいるのは思念だけだろうが、と千夜は心中で付け足した。

「……完成への準備は整った……わけではないようだな」
「ああ……。だが、もう少しだ……もう少しで、俺は……”完璧な俺”に成る。お前を迎えにいくのも、もうすぐだ。今日は、それを知らせに来た」

それを聞き、千夜は内心で大きく舌打った。

避けなければならなかった局面へと近づいている。
そして、それはもはや避けられない。

最悪の事態になる前に見つけ出して、始末しなければなかった。
だが、気配は巧みに隠されて、それは阻まれた。
加えて、自分は霊力まで喪失するという事態に陥った。

全てが神崎の良い様に事が運んでいる。
苦いものを感じずにはいられない。

だが、己の内にあるその事実は相手にとって付け込ませる隙でしかない。
千夜はそれらを押さえ込み、強気の仮面で覆い隠した。

「それは楽しみだ。お前のいう”完璧なお前”を粉砕してやるのが、待ち遠しい。……だが、一つ頂けないな。ここまでの貴重な時間を割いて……お前は人の目の届かないところで随分と遊んでいたようじゃないか」
「自分のことにかまけて、自分の女のことをほったらかして置くような男じゃないぜ、俺ぁ……。……ちゃんと、見てなくちゃなぁ……」

ずっと、見られていた。

背筋がざわつく感覚と、相手の意のままにさせていたという事実。
それらが、千夜の神経をざらりと逆撫でて、煽る。

荒波の立ち始める不穏の気配を押さえながら、千夜は一つの確認を口にする。

「……玖珂蒼助の自宅を放火したのは、お前の仕業か？」
「んん？　……ああ、あれか。そうさ……俺の駒を使ってな。あ

のゴミが、あんまりお前に馴れ馴れしくくっつきやがるからよぉ……。警告のつもりだったんだが、うまくいけばそのまま燃えちまえばよかったなぁ。ったく、……無駄に悪運の強い奴だなぁ、オイ」

警告。あわよくばそのまま消すつもりでやったこと。

この男の一人に対して向けた悪意は、そうして関係のない人間の命を灰に変えた。

諸悪の根源たる神崎の中には、死んだ住民の「運が悪かった」という簡潔な収まりとなって済まされているようだ。

他意なき悪意。

無邪気から来るそれとは違う――――――――価値観の狂った、真の凶気。

この世に在るだけで、平穏と秩序を乱す存在となった凶々しい存在を千夜は直視した。

射るように、砥いだ眼差しを向けて。

「……おお、それだっ、その目。……何だよ、まだ全然イケるんじゃねぇか」

神崎はうろたえるどころか、歓喜の様子を見せる。

「……ああ、やっぱりお前はイイ女だ。その目だ……たまらねぇ。……その他人をモノとしか思ってねぇ、ナイフみてぇな物騒な目……いいよ、最高だぁ」

濁った歓笑が、人型を模した闇から響く。

「……随分と、ディープな好かれようじゃん」
「羨ましいなら、代わってやるぞ」
「ははっ……是非とも遠慮したいね」

背後の渚との会話はすぐさま中断となった。

笑いが止み、神崎の様子が一転したことによって。

「――――だが、俺にはわかるぞ。お前の心が、本来のあるべきところからズレていっているのがなぁ……」
「知ったような口をきくじゃないか。……俺が何処にあるかどうかなど、俺自身が決めることだ」
「は、は……”本音”を言いやがったなぁ」
「なに？」

まるで弱点を掴んだとばかりに、神崎の態度が急に優勢とばかりに強気に変わる。

「気づいていないなら、教えてやるよ。お前は――――日常（そっち）に行きたがってんだよ。あの、薄暗ぇもん抱き込んでいるもんには眩しくて羨ましくて仕方ねぇ場所になぁ」
「……」
「否定しねぇ、ってことは気づいてるみてぇだなぁ……どっちにしろ、俺が言いたいことは変わりねぇがなぁ――――」

一息程度の短い沈黙。
終わるとともに、

「――――無ぅ理だなぁ。諦めな。……泣こうが、喚こうが……お前はそっちには行けねぇよ。わかってんだろ、お前は……」

「――――――いい加減軽口を叩くな、〝若造〟」

己の口から声が響くと同時。
後ろで、渚は引き攣ったのを千夜は感じた。
向かい合う神崎も口を閉ざしていた。

それが自分の発した声が成したことであると理解し、千夜は苦笑した。
表面上は神崎への嗤笑として。

「少しばかり〝そっち〟に馴染んだぐらいで、賢者を気取って警告か？　……若輩者が、調子に乗るなよ」

気づいていない――――わけがない。
言われずとも、わかっている。
警告も忠告も必要ない。そんなものを与えられるまでもない。

「泣く？　喚く？　寝ぼけているのはどっちだ、薄ら馬鹿が。……それが無意味で、無駄であることなど、俺はもう当の昔に知っている」

他人なんかが見てわかる程度で、理解したつもりでいるのか。

笑わせてくれる。

その事実は、誰よりも――――――

「わかったような口をきくな、神崎陵。お前に言われるよりも、誰に言われるよりも、俺は俺自身のことをわかっているんだよ……俺は――――」

ずっと、

「――――死ぬまで、世界の淀んだ奥底に溜まる……〝澱〟の住人だ。否定も肯定も関係なく……な」

わかっている。

その事実だけが変わらず在り続けることも、厭というほどに。

突き付ける。

わかっていないのは、お前の方である、と。

「言っておくが、お前は澱の中から俺と対面していると思ったら大間違いだぞ。俺たちは互いの異なる線の上で相対しているわけじゃない。そもそもそれで相対が成り立つわけがない。だから、相対する俺たちは同じ線の上に立っているということになる。理解している者とそうじゃない者の間に生じる境界線に阻まれているがな。だが、お前は理解する。認識は同一となり、境界線は消える。……そして、俺が何処にいるか。そうなると真実は見えてくるな」

人と違う世界を手に入れて鼻を高くしている男に、千夜は全てを取り去って真実を見せつける。

「お前は、まだ日常の中にいる。だからこそ、俺はお前に会いに行く。日常（ここ）が嫌だというのお前を、望みどおり連れて行ってやる。俺とお前の本来あるべき場所………紛うことなき、この世界の澱にな。ああ、それこそ……”泣こうが、喚こうが”……必ず」

先程言われた”煽り”を添えてやる。
返るものはすぐには来ない。
怒り。
反攻。
挑発に対して表すと予想していたものは、今のところ闇の中の神崎からは見て取れない。
ただ、得体のしれない沈黙だけが続き、

「――――く、は」

それは吹き出しによって破られた。
更に、後を追う哄笑に飲み込まれ、
「ひ、は、はははははははははははははハははははははははははっはははハははははははははははははハははははははははははははははははははははははははははははははははははははははハははハははははははははっ、ハハっ――――――」

空間を支配する狂笑。

渚はただ唖然とし。

千夜は揺らぐことなく己を保つ。

闇から聞こえる独奏は、誰に咎められることもない。

束縛なき狂気の雄叫び。

止める者はいないが故に、終わりが見えない――――――と思われたが、

「は、……ああ、そうかい」

不意に奏者自身により、聴く者の正気を揺さぶる狂声は止んだ。

ひとしきり笑い終えた神崎は、

「驚いたな。俺ぁ、お前はシビアで現実主義だと思っていたよ。……夢想家だったたぁ、意外だなぁ」

「俺は、記憶を夢に見ることをあっても、理想を夢には見ない。……それに俺は、出来ない事とやらない事は無闇に口にしたりはしない」

「大した自信だ……可愛い見栄だぜぇ。お前のそういう手のかかるところが、たまらなくそそるんだ……調教のしがいがあるってもんだ」

下衆が、と罵りを内心で吐いた時。

神崎の様子が、僅かに変わった。

何故か、出る声色が落胆の色に滲み、

「だがなぁ……お前は気づいていねぇよ。自分が、毒に冒されていることに……」
「……戯言を」
「外からしか見えねぇこともあるんだよ。……自分の視点や感覚がわからねぇことがなぁ」

外から、という言葉が千夜の心を躓かせた。
否定しようにも、それは己には見えない場所から見えるもの。
是非がつけらないそれに対して無闇に反応を示せば、神崎を付け上がらせるだけだ。

心中の黙考により生まれた沈黙が、神崎に語りを許すことなり、

「ああ、千夜。……俺は、辛かったぞ。もどかしかったぞ。動けない間に、お前がこの微温湯の毒に染められていくザマを見ているしかなかった時間は……。お前の価値をわからねぇクソな連中が、間違った道へお前を誘惑しやがる。……耐えられない衝動で、俺はお前を守るために刺客を送りもしたが、無駄だった。あの野郎は……運がいいだけじゃなく、ワケのわからねぇ妙な【何か】が傍にいやがる。……この、俺が……ビビッてそれ以上何もしようとは思えなくなるような、何かにぃ……」

黒蘭、と脳裏に浮かぶ人物がその相手であると、千夜は即座に理解した。

この一件の裏に関して、黒蘭は気づいていた。
しかし、自分の耳には一切そのことを伝えなかった。

……全て引き受けてくれていたのか。

今一番失いたくない、守りたいものを、自分の代わりに。

千夜は、胸の内がすぅっと軽くなるのを感じた。
空いた場所に埋まるのは、安堵というふわりとした軽量の想念。
そして、蒼助のことに関しては、これ大丈夫であるという確信。

……あの気まぐれを、こんな風に頼もしく感じるようになるとはな。

帰れたら、やらなければならないことが出来た。
あいつに礼を言うような日が来るとはな、と癪に思いながら、

「ああ、そうだな。そいつは……なかなか気難しい奴だが、力量は確かだ。それ以上しつこくすると、遠慮なく消しにかかってくるぞ」
「ああん？　お前の知り合いなのかぁ……」
「……”俺の選んだ男”をいたく気に入ったらしい。お気に入りの玩具に手出しをするような奴には、昔から手厳しいぞ……あいつは。当てつけや八つ当たりの的なら、ほかを探せ」
「――――お前の、選んだ男だぁ……？」

声のトーンが一気に急降下した。
そこから神崎の拒絶と憤りを感じ、千夜は口端を吊り上げた。

大きな勘違いをしたまま暴走するこの愚か者に、もう一度言ってやろう、と。
この世の全てが、お前の思うままに動くことは決してありえない。
一人の女すら、思い通りにできないお前なんぞに、と。

「そうだ、あいつは、玖珂蒼助は――――――俺の男だ。俺が想い、

俺が選んだ、俺を好きにできる唯一人の男。俺の身体、心を支配できるのは……お前なんかじゃない」

そんなかけがえのない存在を、お前などには奪わせはしない。

断固たる拒絶を神崎に放った。

「……それがわからず、受け入れられないというのなら、俺はお前を消し去ってでも俺の意志を立たせて……――――っ？」

更に追撃しようと張り上げた声は、途中で絶えた。

向かう先の敵の様子の変化に、思わず声は喉元で止まったのだ。

そして、その変化というのは、

「く、は、ははは……やっぱり、か……やっぱりそうじゃねぇかぁ……」

何故か愉快そうな声色。そして、笑い声。

そこに何が含まれてそれを生むのかが理解できず、不明さが千夜の不快感を煽り立てた。

千夜が何か聞き質す前に、神崎は笑いながら、

「笑わせてくれるじゃねぇかよ……なぁにが、死ぬまで澱の住人だ。しっかり毒されていることにも気付かねぇくせによぉっ！」

嘲笑を伴った言葉は続く。

「俺が正しかったんだ。俺は間違っていなかったんだ。千夜ぁ、俺の可愛い千夜ぁ……哀れなお前にもう一度教えてやるよぉ……正しい俺が、本当のことを教えてやるよぉ」

己の前についた所有代名詞が、千夜の怒号の火蓋を切る。

しかし、それが放たれるのを許さず神崎は、

「……可哀想に、もう自分のご主人様が誰なのかすら判断できなくなっちまってるのか」

だがな、と言葉を接ぎ、

「愛情深い俺はそんなお前を見捨てはしねぇ……。大丈夫だ、安心しろ。たとえ錆びちまおうが、お前はまたそこから砥ぎ直せる。あの触れたら腕を持っていっちまいそうな切れ味を取り戻せるさぁ……。その為には、お前にまとわりつく臭ぇ塵を取り除かねぇといけねぇ……いけねぇなぁ」

「っ、蒼助に手を出そうというのなら無駄だと……」

「……ああ、わかってるさ。――――お前を惑わせているのは、あいつじゃねぇみたいだしなぁ」

そんなことは心得ている。

そう匂わす言葉が何故か千夜の思考に引っかかった。

「な、に……？」

「俺も最初は玖珂がそうだとばかり思っていたさ。……だが、考えてみりゃそいつはちとおかしな話だ。あのゴミ虫は落ちこぼれとはいえ、〝こっち〟寄りの人間だ。……そんなやつが、お前を日常

に縛りつけてふやかせている程の要因であるわけがねぇ……。それに気づいたのは、玖珂のマンションを燃やした後だった。玖珂にはもう手が出せねぇとなって、他にお前の目を覚まさせるのに使えそうな生贄はいねぇかと俺は考えた。……そこで、ようやっと気づいたさ。玖珂にばかり気ぃとられていたばかりに見逃していた。

――――――日常を這って蠢く猛毒を持った蟲をなぁ」

吐き捨てられたその毒づきの言葉の中に存在するのは――――――誰なのか。

思考する千夜の脳裏を、数刻前に見た泣き顔が過ぎった。

◆◆◆◆◆◆

言葉の中で引き出された相手が誰であるかを思い当たった瞬間。死角からの不意打ちされたような感覚だった。

故にその感情を隠しきれなかった表情に、神崎を宿す闇は、何を見透かしたようににやりと笑ったような気がした。

「き、さまっ……まさか！」

「オイオイ、どうしたよ。……俺はまだ名前を出してねぇってのにそんなに慌てて」

「黙れっ。……神崎、お前久留美に何をっ」
「……久留美、かぁ。あの毒蟲は、そこまでお前に猛毒を撒き散らしてやがるのかよ……嬲られてももがくしかできねぇ、小虫がぁ」
「何を、したと……訊いているっっ！」
内で溜め込まれ凝固した感情が塊となって、放たれた空間に拡張し、響いた。
冷静さは、既に失われていた。
形成の優位の行方など二の次となり、その意識はただひたすら一つの事柄にのみ一点集中を成していた。
久留美。
新條久留美に向けて。
「かかか……まぁだ、何もしてねぇよ。あの女には、な。しかし、想像以上に重症だな……。冷静さを欠いてまで、あんな虫に気を遣るのかよ……。分不相応な願望をお前に押し付けて、拒まれて逆にお前を罵るようなやつに、何でまぁそこまで……」
「俺の感情だ。……誰をどう想おうが、俺の勝手だ。お前なんぞにどうこう言われる筋合いはない」
「馬鹿が、あるに決まってんだろう。……俺のモノだからなぁ」
傲慢きわまりない神崎の言葉に、冷静を失った千夜の理性は簡単にぶれる。
一度崩れた精神の体勢は、持ち直してもこんなにも脆くなる。
だから、なんとしても維持しなければならなかった。
そんなことは十分に承知していたはずだった。
けれども、出来なかった。

……日常に毒された、か。

目の前の下衆が言った戯言が、今は妙に信憑性を感じさせる。

千夜は思う。

あの時、本当は久留美を受け入れてしまいたかったのではないか、と。

自分のことを教えろという久留美の言葉に従って、彼女に知ってほしい、と。

本心では、久留美を一緒に連れて行きたかったのではないか、と。

彼女は手放したくなどなかった、と。

確かな決意を以って突き放したはずなのに――――――自分は今、こんなにも不安定に揺れている。

……何を、馬鹿なことをっ！

現に今、もっと早く距離を置かなかったからこんな事態に見舞われているというのに。

久留美を巻き込む危険性を招いてしまったというのに。

それでも尚、自分はそんな温い考えを捨てきれないというのか。

そうして千夜が己に恥じている合間にも、

「こりゃぁ、決定的だなぁ。……安心したぜ。これで……骨折り損にならずに済むみたいだぁ」

「――――――――なんだ、と？」

冷や汗が首筋あたりで浮かびあがる。
それを感じながら、同時に悪寒。

言葉が意味する中身は、まるで――――

「あの女には、まだ手を出してねぇのは本当だ。だが、あいつは今……帰宅途中だったか？　だったら、びっくりするだろうなぁ。……家に着いたら、”置いてある”俺のお礼を見てよぉ……かかっ」

その目論見が既に久留美に向けて仕掛けられている。
神崎の言葉が、完全な確定を促した。

「っ、貴様、一体何を」
「……なぁに、その場その場の手合いものを使った即席もんさ。昼間……お前がちょうどこんなふうに薄暗い路地裏に二匹放置してっただろうが。……お前からの贈り物は、ちゃぁんと……リサイクルさせてもらったぜぇ？」

昼間。
二匹。
路地裏。

三つのキーワードが導き出した記憶は、

「……お前、あの二人を」
「ああ……あいつらちょうどイイ感じにお前に恨みを持ってたからなぁ。……わざわざ材料を探す手間が省けたぜぇ。なかなか素質の

ある連中だったからなぁ……今頃、俺の期待以上の”コト”をしてくれてるだろうさぁ……ハ、ハハ」

今頃、あの家で。

台詞の中で、その一部分だけが耳の中で異様に長く響いた。

神崎の言うとおりに事が進んでいるのなら、今あの新條家では――

――――

「喜べ、千夜……これでお前を惑わすものは――――――」

響き続けた耳障りな音が、突然途絶えた。

「……あ？」

神崎の疑念の発声に、顔を上げる。

そして、気がつく。

自分が何かを投射したように腕を振りかぶった体勢にあること。

自分の手から、一度は引き抜いた”髪”がなくなっていること。

無意識のうちに、神崎に目がけて投げつけていた。

一通りの己の状態を認識し終えて、

「……さっきから、千夜千夜と……」

ぐっと、〝髪〟を投げた手を握るように閉じる。

「――――――気安く呼ぶな」

ギュリ、と握る手に込められた力。
力を凝縮するようなそれとは、対照的に、

「カ――――――」

神崎の顔を模るように浮き出る闇に突き刺さった一本の〝髪〟から、光が爆ぜた。

〝髪〟に込められていた霊力はあっという間に膨張すると破裂し閃光と成った。
その瞬間、それは空間から一切の闇を消し去った。
一瞬の無音の後、轟音がそれ以外を呑み込むように、結界内を響き渡る。

粉塵が舞い上がり、千夜に降りかかるが、動じず受ける。
閉じることもない双眸は、ただきつく細められて土煙の向こうの爆発地点を見据えていた。

鼻腔に不快な違和感を与える煙幕はおさまり出し、奥がようやく開ける。

そこには、闇が何事もなかったように広がっていた。
しかし、先程までとは決定的に違うものがあった。

神崎の気配。
それがなくなった。
わざわざ出向いた目的である用事が済んだから、なのだろう。

犯行予告。
それも、実行直前のギリギリに。
何もかも確信犯の行動だった。

実現すれば、いかなる結果が生まれるか。
今と何がどう変わるか。

目的は何であるのか。
八つ当たり。
挑発。
見せしめ。

どの意図が正しいのかはわからない。
だが、一つだけ確かなことはある。

「……お前の、思い通りにさせて……たまるかっ！」

激情を吐き捨て、千夜はスカートのポケットに手を突っ込んだ。
さして広くないそのスペースに置かれた携帯電話を掴み出し、数字を打ち出す。
久留美の携帯番号だ。

メールアドレスの交換を申し込まれた時は、正直面倒くささが先

立って億劫だったが、今となっては幸いだ。

「……っ」

緊急事態に先急ぐ心が指先に影響してか、番号を打ち間違えてしまった。

そもそも履歴から引き出せばいい、と気付く羽目になった。

思った以上に、自分が動揺していることを思い知る。

焦るな。

そう言い聞かせながら、今度こそ打ち終えて回線を繋ぐ。

……頼む、出てくれ。

神崎は、「帰宅途中」と口にしていた。

まだ目論見は完全には成されていない、とその可能性は無いとは言い切れなかった。

新條久留美は、まだ家に着いていないかもしれない。

そこには千夜自身の願望も入り込んでいるのは否定できない。

だが、諦めるにはまだ早くもあるはずだ。

……頼む、から。

大きく脈打つ心臓の音が携帯の電子音に重なる。

最悪の事態を脳裏に描きながら、相手が電話にまだ出れる状態であることを胸が焼けそうな思いで祈った。

そして、

『――――――――も、もしもし？』

声。

久留美の声。

それを耳にした瞬間、締め付けられるように苦しかった心臓が、緊迫感から開放される。

「っ、久留美か！？　俺だ、千夜だ！」

『わ、わかってるわよ。着信表示されるんだから……』

電話越しでもわかる、向こうの異常の皆無。

察した精神が、ゆるりと落ち着き始める。

『急に、どうしたのよ。……まさか、あんたからかけてくるとは思わなかった、けど』

機械越しに伝わる久留美の声には戸惑いの色が滲んでいた。

あんな別れ方をした。

無理もないとは思うが、今はそんな場合ではない。

「久留美、今どこにいるっ」

『な、何よ急に……』

「何処だ！」

急いた問答に久留美を置いて、千夜は質問を優先した。

強い口調に久留美も押され負けしたのか、

『……――――――――何処って、もう家の前まで来てんだけど』

最悪の事態は、あと数歩の距離まで迫っていた。

【壱百弐拾八】　残酷に愛す（後書き）

最後のところで、「このダボ（バカ）がぁぁー！」と叫びたくなった或いは叫んだ読者さまはここまで連絡してください（何処

ある意味期待を裏切らなかった久留美。

よくやったと思うよ。

千夜、冷や汗がぶわっと出ただろうだけど。

［壱百弐拾九］　時の狭間（前書き）

あのころと、いまと、未来のこと

［壱百弐拾九］　時の狭間

帰ろう、と思い至ったのは、見上げた空が赤を通り過ぎて今度は青になり始めていた頃になってからだった。
そう思うまでに迷いはあったが、視界の片隅で子供がまだ帰りたくないと母親に駄々をこねていたのに気がついて、それは振り切れた。

空がどんどん紺に色づいていく様を見上げながら、久留美は帰り道を歩いた。
頭の上で起きている変化が、もうすぐ夜が来ることを意味していることと考え、

「……世界が、切り換わる」

昼から、夜へ。
日常が眠り、非日常が目を覚ます。

夕刻。
それは両者の狭間。

毎日のように迎えていたそれをこんな風に深く考えたことは、今までなかった。

当たり前、と。
そんな風にしか思わないこの時間を、千夜はどんな風に受け止めて、何を感じていたのだろうか。

……きっと私とは、違う。

夢から覚める瞬間。
少なくとも、彼女はそんな風に思っていたかもしれない。
現実。或いは当然。

きっと、彼女はそういった概念を抱いたりはしなかったはずだ。

……生きてきた世界が、違うから。

思い、虚しくなる。
この先、どう足掻いたって自分と千夜は全てを共有することは出来ない。
物事への想いも。
価値観も。

そんな相手に執着することに、意味などあるのだろうか。

……報われなくてもいい……なんて、思えるわけないでしょ。

人は誰だって、何かをしたらその報いがほしい。
そう思うのが当然だ。
そこに何か得られるものがあると思うから、それが重労働であろうと何であろうとしてみせようとすることもある。

「……どうしろっていうのよ」

思わず口にして、

「いや、そうじゃない。……どうするか、よね」

直後に訂正する。

今自分が抱える問題は、そう表現するのが正しいのだ。

自分で考えて、選ばなければならない。

だからこそ、悩んでいるわけだが。

「うーん……ようは、コレがいけないわけよ。得が無いというマイナス思考。……何が、あればいいのよ。私に対する得が」

自分の思考基準から損得を省くのは、まず無理だ。少なくとも突然には。

ならば、そこはあえて譲らず、

「物事には何であろうと利益ってものがあるはずよ。大きさにもよるだろうけど……えーい、なんかあるはずよ何か」

出て来い、と頭を小突いてみる。

「……あるでしょ。……あるはずなんだから」

そうでなくては、困る。

選びたい道は最初から決まっている。

そして、自分は、

「……そうじゃないと、私は前へ進めないのよ」

懇願のように吐いた、その時――――――

「っ！！」

腰の下で振動が起きた。
ポケットにしまわれた携帯電話からだった。

「……こんな時に、一体だ――――――」

着信表示を目にした瞬間に思考が途絶える。
理解には、その停止が必要だった。

終夜千夜。
まさかの相手からだった。
しかもメールではなく、電話だ。

「うそ……」

有り得ない。
現実に対して出たのは、否定だった。
それだけのことを彼女にしたはずだった。

なのに。
なのに、今。

「……ああ、もう」

嘆息が漏れた。
電話の向こうの相手にではない。

こんなにも単純な――――――自分自身に対してだ。

……あるじゃん、見返り。

こんなことで気づくなんて。
こんなことにも気づかなかったなんて。

なんて。
なんて、情けない奴。

「……結局、なんだっていいのよ」

どんな方法であろうと。
得るものの形が何であろうと。

欲しいものに、変わりないのだから。

「……私は、あんたにいてほしいのよ」

場所なんか何処だっていい。
自分がいるところであるなら、何処だってかまわない。

いなくならないでほしい。
帰ってきてほしい。
望んでいたものも、得るべきものも――――――ただ、それだけだったのだ。

「……千夜」

振動が鳴り続けている携帯電話。
出なければ、と二つ折りのそれを開く手が震える。

選択は定まった。
あとは、決定ボタンを押すだけだ。
耳にあて、内でうるさく響く心臓の音にやましいと抑止を命じながら、
「……も、もしもし？」
それでも震えてしまった声には目を瞑る。
そして、一秒と間は開かず、
『っ、久留美か！？　俺だ、千夜だ！』
機械を通して響く、千夜の声。
現金な久留美の心臓が一気に高鳴った。
「わ、わかってるわよ。着信表示されてるんだから……」
って、こんなところでいらん棘を突き出さんでも、と久留美は後の祭りで思った。
何か言わなくてはと手探りで言葉を探し、
「急に、どうしたのよ。……まさか、あんたからかけてくるとは思わなかった、けど」
あんなことを言った自分を、まだ名前で呼んでくれるとは思わなかった。
またか、と久留美は内心で舌打つ。
建前の下に本音を仕込んだって伝わない。

そう教えられたばかりなのに。

そんな久留美の心境など、電話の向こうの千夜にはわかるわけもなく、

『久留美、今どこにいるっ』

「な、何よ急に」

『何処だ！』

久留美はここにきてようやく千夜の様子がおかしいことに気づいた。

その口調と声量からは、焦りが生み出されている。

何故、と疑問を抱きながらも、

「……何処って、もう家の前まで来てんだけど」

言いながら見遣るのは、僅か三メートル程度もない距離まで近づいた我が家。

急げば遠く感じることもあるが、それとなく歩いているといつの間にか直前まできていることもあるのだから感覚とは不思議だ。

この場合は、後者。

思い悩んでいるうちに家の方から近づいてきたみたいな気分でさえある。

「あ、あのさ……、千夜？」

電話の向こうから伝わるのは、沈黙。

言葉はなく、詰まるような小さな息遣いだけが聞こえる。

どうしたというのか、と久留美が再度声をかけようとした時、

『っ、聞いてくれ。……いや、頼む。家には、――ザザッ――っ、――――な』

久留美は眉を顰めた。

突然生じた雑音が、千夜の言葉の伝達を阻んだのだ。

「――――は――――ザザッ――――ザッ――――！」

度重なる雑音が波のように覆いかぶさって、千夜の声を飲み込んでしまった。

この場所の電波が悪いのか、それも向こうがなのか。

久留美はとんだ邪魔者に苛立ちながら、

「もしもし、千夜？　あんた、今どこに――――はぁっ！？」

言いかけた言葉は文句へと様変わりした。

通話が切れたのだ。

何でよ、と勢いあまって電話を睥睨する。

しかし、それはすぐに驚きの開きへと一転する。

「――――電源が、落ちてる」

◆◆◆◆◆◆

通話が切れてしまった瞬間、千夜は携帯を確認することもなく察した。

結界が発動したのだ、と。

「あの、クソ蛙っ……！！」

結界。世界の中に別の世界を作る術式。
外と内を生み、外からの干渉の一切を断つ。

通話という電波の繋がりが切られた。
それは結界の発生を意味していた。
或いは久留美が結界内に踏み込んでしまったか、だ。

どの道、もうこちらから、この場所で――――――久留美を救う手段は無い。

「っ、まだだっ」

浸かりかけた絶望からもがき出た千夜は、背後を振り返る。
状況から置いてかれていた渚がそこに座り込んでいた。
突然、己へ注意を向けられた渚は驚いたように身を竦ませた。

「おい……」
「え、と……何？　つか、今どんな状況……」
「お前、新條久留美と接したことは？」
「……へ？」

何を突然という渚の反応。
千夜は、そんな躊躇に付き合う時間はないとばかりに歩み寄り、

「いいから答えろ！　お前は新條久留美となんらかの接触をしたことはあるか！？　会話だろうが、名前を呼んだ呼ばれた程度だろうが……一度でもいい、無いのか！？」

激昂。
渚は、己との対話では一度として揺るぎもしなかった千夜のその感情的な様子に驚き、言葉を失った。

昼間、新條久留美とは親しげに行動していたのを見た。
どんな関係かは知らないが、あのクラスメイトはいつの間にこの人物の中に踏み込んでいたのだろうか。

胸倉を掴まれて迫られる中、千夜の勢いに渚は気が引けながらも、

「……あ、あるよ。少なくとも、一度くらいなら」

是の返答を聞くと、千夜はあっけなく渚を開放した。
そして、空を見た。

紺色に色づいた空。陽はまもなく沈む。
時間が無い。

「……一応、一言断っておく」
「え？」
「人からモノを借りる時には、そうするのが礼儀というものだ」
空から下がった視線は、渚をまっすぐに据えられる。
「朝倉渚――――――――――お前の【影】を貸してもらうぞ」
この瞬間、千夜は翻弄やあしらいという意を除いて、ようやく渚という存在とまともに向き合った。

◆◆◆◆◆◆

「事実として本人が望んだとしても……それを当の本人が覚えていないんじゃ意味ねえんじゃねぇのかい？」
公園。
昼間はこぞって屯していた親子達は、日暮れと共にそれぞれの帰路につき、今はいない。
その中で、志摩のみはそこに変わらずいた。

己の座るベンチの隣接者を変えて。

「……約束の放棄とは、記憶しているか忘却に帰しているかではない。当事者たちの中のいずれかが、破り捨てるかなのだ」

「はっ。つまりは、覚えていようかいまいが関係ないってか。なかなか、容赦ねぇじゃねぇか。――――上弦さん」

がっしりとした筋肉を纏った身体でベンチに腰を下ろす男に、志摩はサングラスの下で視線を横流しにした。

目の前の巨躯がやってきたのは、黒蘭が去ってしばらくしてからだった。

自らの意思でやってきたのか。それとも黒蘭の指示か。

どっちが有力であるとすれば後者ではあるだろう、と志摩は自己判断した。

”コト”　の経緯を知った自分の鬱憤を受ける相手として。

「もうすぐ払われる”悲願の対価”で、あの女の子は何を得るんだったっけか……」

「……今も昔も、望もうとも得ることが出来なかったモノだ。何を売り渡して、失おうとも構わないと言い切ってしまえるほどの……まさしく”悲願”だ」

「”悲願”、ねぇ……」

何を成そうとも遂げたい悲壮な願いを意味する言葉。

何をしてでもというからには、無傷ではすまないことは必至の条件。

「その達成のために、あの子は失う。俺が見たヴィジョンは、それを意味している……と」
「ああ」
「これって、昔のツケを今になって払わなきゃならなくなってるだけなんじゃねぇかなぁ……。――――前世で世界と結んだ契約なんてよぉ……なぁ、オイ」

昼間、黒蘭から聞いた話から得た新たな知識。
新條久留美に関する全て。
今までまったく聴かされることの無かった内容。

どうして触れようとしなかったのか。
理由を尋ねると、黒蘭は言った。

「……知らせておく必要はなかった、か。それって、ただの小娘一人ぐらい別に大して必要ないことだったからなんじゃねぇのか？」
「それは違う。あの娘の決意を聞き、その頼みを引き受けた時から……あの方は、頼みを成すと決めていた。言わなかったのはな……確信がなかったからだ、志摩よ」
「確信？」
「あの娘だけは、運命の輪の外にいた。偶然それに触れただけの、凡庸で自由な魂だった。……それ故に、再び逢える保障はなかった」
「……十八年前の【新條】は、まったくの想定外なのか？」
「そうだ。あの娘の姓を聴いた時は、まさかと思った。……だが、関係あるまい。なにしろ、四百年前では村娘に姓などなかったからな」

そりゃそうだな、と今と昔の違いの浮上に、志摩は上弦の意見に同意した。

「よほど濃い宿縁、もしくはその存在そのものが特殊であるか。……そうでもない限り、時代を越えてもう一度なんて……あるわけねぇよなぁ」

「……あの娘にはどちらもなかった。一代限りの邂逅……本来なら人と人の出会いは、それが普通だ。あの娘は……それを認められなかったのだろう」

「それを引きずって対価を払わなきゃならねぇのか。……後世には、とんだ迷惑な置き土産だなぁ」

「そうかもしれぬ。いや、そうだろう。……止めてやらず、利用しようとする我らの言うことではないだろうがな」

悔いが滲む上弦の言葉に、彼が率先して取り入れたわけではないと考察できる。

決定打を押したのは、当然黒蘭だろう。

だが、結局同意した。

最も優先すべき存在のために、一人の少女の平穏を切り捨てたことには変わりない。

「なぁ。……本当に必要なことなのか。……あのお嬢ちゃんを引きずり込むことは」

「わからぬ」

「はぁ？」

明らかに非難を滲ませた声を荒げる志摩に、上弦は無理もないと一息つき、

「……私には、わからぬのだよ。それが正しいのかなど。……だが、あの方はこう言う。何かに変化をもたらすのに最も簡単な方法とは、

それまでになかった”部外者（イレギュラー）”の存在を投じることなのだ、と。運命の輪を壊すとまでいかなくとも、外から与えられる影響で何かが変えられるかもしれない、と。……あの娘が”此方”に来るということは、外からの干渉を意味する」

「つまりは、生贄か。……何もかも忘れてゼロから再スタートした魂を、お前らは逃がしてやらないんだな？」

「……逢えなければ、あの方は逃がしただろう」

ん？と志摩は、上弦の零した言葉に眉を顰めた。

「……本当に、ノーマークだったのか？」

「ああ。あの方が、【彼ら】をあの学園に集うように手引きしたのは、お前も知っているだろう。……その手引きした中に、あの娘は入っておらん。気づいたのは、姫様をあの学園に招いてしばらくしてからだった。顔も名も違うゆえ、私には今でも確信できぬがな」

「……黒蘭にはあるんだな、確信。まぁ、あいつは原色者だからな。……その気になれば、魂を透視することも出来るか。……で、見つからなかったら見逃してやるつもりだったっつーのは、どういう腹積もりだぁ？」

「裏も何もない。……あの娘が今代に間に合わなかったら……或いは、逢うことがなければ……それまでの縁だったと忘れるつもりでいたという。約束ごと、な」

呑み込め、と言われてもなかなか出来ない言い分だった。

あのねちっこい黒蘭が、そんなにあっさりと駒を捨てるだろうか。現に使いまわされている身として志摩は、信じがたい話だと思った。

「悪ぃが、信じるにはハードルが高ぇって。そうだとしたら、新條

久留美はあってもなくてもいい駒ってことになる。……わけがわかんねぇぞ」

どうでもいい駒を手に入れるために、キング或いは王将をとんでもない危険に曝す羽目になるかもしれないというのに。

黒蘭の考えがわからない。いつものことだが、今は特にだ。

困惑する志摩に、上弦は落ち着かせるように、

「先刻申したであろう。……あの娘は必要だ。少なくとも黒蘭様はそう考えている。だが、我らが操っては意味がないのだ。あの方の持ち駒には意思がある。あの方は、駒に命令は下さん。ただ、期待を寄せる。さぁ、お前はどうする――――と」

「期待か……いつも、最後はそれだな」

始まりの頃から付きまとう疑問が、志摩の中にはあった。

あの、この世の全てを知り尽くしていると思わせる不敵で狡猾で大胆なカミは――――――何故、策を練ろうとしないのか。

実は、出来ないのか。

それは無い、という結論が笑えるくらい早く出た。

「わからねぇ。何だって、いつも回りくどいことしやがるんだ。人間なんざ、あいつにとっちゃ操り人形も同然だろう。いくらでも雁字搦めにして、好き放題に動かせるじゃねぇか。それが何だって……」

「……うむ」

突然難しい表情で黙る上弦。

苦悩。眉間の深い皺は、彼の内を取り巻く感情を表していた。
何だよ、と志摩が黙りこくった上弦に声をかけても、

「……聞いても信じられんだろう。今は、聞かずにおけ」
「なんじゃそりゃ」
「コレこそ信じられぬだろうからな。……まぁ、いずれ何処かで話してやる」

強引に打ち切られ、志摩はしっくり来ない気分に陥りながらも、

「……じゃぁ、話は戻すがよ。結局は、全部が黒蘭の期待だっていうのか？　……あの女の子をたどる道も」
「……そうだ。あの方の期待にあの娘が応えた結果だ。……自力で姫様に出会ったことも、姫様を求めたことも、その想いに従って選んだ道も。奇しくもあの娘は――――”かつての己”が課した【条件】を忘れているにも拘らず乗り越えてしまった」
「忘れていたはずなのに、か。……魂に染み付いた執念に突き動かされたのか？」
「そうかも、しれぬ」

魂に染み付いた執念。
人はそれを未練と呼ぶことがある。

自身が何かを望もうとして遺した未練に突き動かされたあの魂は、それで得る悲劇をどう受け止めるのだろうか。そもそも受け止められるのか。

「……やりきれねぇな」

かつて望み、今は望むわけがない喪失。
あの魂は、何を得るために失うことを【世界】と約束したのか。

「あんな喪失から……何を得ようっていうんだよ」

口から出た無意識の問い。
それは新條久留美へか。
それとも黒蘭へか。

もしくは両者だったかもしれない。

だが、同じくこの場にいない者達へは届くことはなく、志摩のそれはただ独白となって空気になじんで消えた。

【壱百弐拾九】　時の狭間（後書き）

次回、惨劇。
そして鬱モード発動。
詳しいあとがきはブログにて。ネタバレも込みになるかもしれぬ。

【壱百参拾】　覚めない悪夢（前書き）

終わらない。
終わってくれない。
それこそが――――悪夢の証。

［壱百参拾］　覚めない悪夢

「……このっ……このっ！！」

ぺちぺち。

久留美の指先が、連続運動として携帯電話のボタンを叩く。

突然として電源が落ちた携帯電話は、どんなに起動させようとしても息一つ吹き返しはしなかった。

「なんなのよ、もう。……結構長く使ってるけど、まだまだイケるでしょー？　ねぇ、ちょっと」

バシバシと機体そのものを叩いてもみる。

しかし、うんともすんとも言わないという変わりない結果が返されるだけだった。

「んー……思い返してみると、結構落としたりしたかもしんないわね。水につけちゃったこともあるし……むしろ、ここまで耐久性を維持し続けてきたことを誉めてやるべきなのかしら……？」

わかったわ安らかに眠れ、と拝むとポケットにしまう。

「しょうがないか。……またあとで」

幸い、家には本体と共に子機もあり、連絡網という最終手段が残されている。

焦る必要は、

「だ、大丈夫よね……」

己の名前を呼んだあの声を思い出し、自身に言って聞かせる。

大丈夫。

大丈夫よ、と。

「……よしっ」

とりあえずは家に入ろう。

そして、

「……崩壊した我が家の建て直し。まずはここからよね」

虫のいい話だ、と自分でもそう思わずに入られないのだから世話がない。

だが、

……このままでいいわけがない。

自分勝手が過ぎた。

天邪鬼のような性分とはいえ、大事なものをぞんざいに扱ってきた。

心配もかけてきた。

そうして自分がしてきたこと全てをひっくるめた【現実】。

それから逃げてきたあの時から続く今まで。

……もう、終わらせなきゃ……ね。

長い長い勘違いに付き合わせてしまった女（ひと）のことを、玄関の扉越しに想う。

酷いことばかり吐き捨て、ろくに見返らないでいた。

「まず、謝って……それから」

何かしてあげたい。

今まで与えてくれようとした手を振り払い続けた侘びに、今度は自分が母親に対して。

……紅茶、入れてあげようかな。

習った日から自分で淹れ続けている。

紅茶の入れ方。

母が与えようとした中で、唯一拒まず受け取ったモノだった。

買ってきてくれる服は全て拒んだ。

母が築こうとした『普通の親子関係』も拒んだ。

拒んだ時の母が、どんな顔をしていたかは覚えていない。わからない。

自分の行為も結果にすら目を逸らした。

日常から逃げていれば、少しは近づけるのではないかと馬鹿なことを考えていた。

自分の居場所から離れれば、あの日々が帰ってくるのではないか、

と。

「……長い間、迷惑ばっかかけてたね」

大事じゃないわけがなかったのに。

頭と心のどこかではちゃんとわかっていたはずだった。

悪いのは、現実を受け止め切れなかった心。

認められなかった自分。

恨みと盲目的な執念で、本当の望みを見失ってしまった。

そんなどうしようもない自分を、それでも母はずっと――――

「六年もかかっちゃったけど……でも、やっとわかったから」

遠回りに遠回りを重ねたけれども。

それでも、自分が何処にいるのが正しくて。何をするのが正しいのか。

ようやく、答えらしきものを見つけることが出来た。

ここで彼女を待つ。彼女の帰る場所になる。彼女が、彼女のいた場所を帰るところとせずに済むように。

こんな簡単な答えに気づくのに、納得するのに、随分な時間と手間を注ぎこんでしまったものだ。

「……ごめん、ね」

漏れる言葉は、こんなところで零すものではない。

母親の前で、きちんと頭を下げて告げなければならない。そういうものだった。

約六年分のツケを払う時が、これから始まる。
うまくいくと、不安がないわけじゃない。許してもらえると、はっきり確信しているわけじゃない。
……でも、やらなきゃ。
自分のやらなければならないこと。
そして、やりたいことでもある。
「紅茶一杯じゃ、安すぎるだろうけどね……」
それでも。
同じぐらい、もしくはそれ以上の時間をかけてでも――――元に戻していこう。
思考はそこで区切りと打たれ、久留美は一息つき、
「――――それじゃぁ、第一歩……行くわよ」
たかが一歩。
だが、たくさんの始まりを詰め込んだ重い足踏みだ。
前へ進むための――――――大事な。
妙な緊張感を伴いながら、久留美はドアノブをじっと見つめた後、手を伸ばした。
ドアノブを握り、引く。

そして、一歩と共に帰宅の言葉を言いかけた。

「た、ただい――――――」

途端、久留美を迎えたのは返事代わりにとでもいうかのような――――『違和感』だった。

◆◆◆◆◆◆

急に体が湿っぽくなった、というのが、久留美が最初に察した異常だった。

冷や汗だ。

額や首筋だけではなく、ドアノブを握っている手もそうでない手にも。

そして、背中がスッと寒くなった。

凍るように。

「……っ」

パッと、思わずドアノブから手を離す。

そのせいでドアが閉まった。久留美は、それでビクッと身を震わ

した。

そこからしばらく動けなくなり、立ち尽くす。

心臓の動く速さが、何故か普通のそれより上がっていると感じ、

「……何で、電気ついていないの？」

誰もいないのか、と考えたのは一瞬だった。

鍵は開いていた。しっかり者の母は、出かける際には鍵を閉める。

ほんのちょっとそこまでの距離だとしても、必ず。

そして、

「靴……は、あるわよね」

母の靴。

そして、――――父の靴もある。

「お父さん……もう、帰ってきてるんだ」

遅くなるか、早いか。父の帰宅時間は、仕事上このどちらかに分かれる。

前者は別に珍しいことではない。いつもいつもネタが掴めるわけではない。一日家にいる時だってある。

だが、問題は父親が早く帰ってきていることではない。

どうして家の明かりがついていないのか。

そして、加えてさっきから無視できない――――――

「なに……このニオイ」

臭い。

そう思わせる何かが、先ほどから鼻腔を刺激している。

それは、奥から漂っている。

奥で――――――何かが、ここまで流れ込むような強い異臭を発している。

……何で、こんなに静かなの？

久留美がふと気づいたのは、ソレだった。

家の中が、何故こんなに静かなのか。

人がいる家が――――――如何して、こんなにも。

生きている気配がないのだろうか。

「っ！　……今、何を」

考えてはならないことを思ってしまった。

ダメ、と久留美は頭を振った。あってはならない、そんなこと。

考えてはダメだ。

行かなければ。

行って、否定を証明しなければ。

そんなことはあるはずない、と。

足はそれをするべく歩行を再開する。

靴を脱いで、玄関に上がった途端、心臓が痛いくらい高鳴った。

まるで、ダメだと叫んでいるようだ。

うるさい。私は行くんだ、と制止の痛みを振り切り、前進。

暗い。

光につながるものが、今の家の中には一切ないのだから当然だ。

長年暮らして家の構図を理解していなければ、そこの先にある階段の出っ張りに足の小指をぶつけて悶絶してしまうところだ。

昔それで爪を割ったことを思い出しながら、ゆっくりと慎重に進む。

が。

「っぇ、きゃっ……！」

不意打ちかつ、予想外。

足が、床を滑った。

正確には、床の上にある『何か』に。

咄嗟の反射的な動きで、二階へ続く階段によって一度途切れる壁の曲がり角に手を引っ掛けたおかげで転倒は免れた。

ふぬぅっと、腹筋と腕の力でなんとか体勢を整える。

……な、なにコレ……濡れてる？

壁に両手をやりながら、足を床の表面に押し付ける。ぬるり、とした感触と何かが染みる感覚が靴下越しに伝わる。

水にしては、何かおかしい。

そう思って久留美は腰を屈めて、『何か』の上に指先を滑らせた。

指に感じるそれは、やはり何処か粘着質さを持っていた。

それを己の顔に近づけ、

「……っ！」

空間に漂う異臭と同一のそれが鼻を突き抜けた。それも一層濃く。

それの付着した指先を凝視する。

暗いため、色彩判断は殆ど出来ない。

だが、その液体がとても濃い色をしているくらいは久留美にもわかった。

そして、わかったのはそれだけではなく、

……コレ……奥に、続いて。

足元の『何か』は、家の奥――――――リビングとキッチンへ引き摺るように延びていた。

更に、

「……？」

足元と続く先を見比べているうちに、もう一つ気づくことがあった。

久留美は、再び指を床へと滑らせる。

何かを探るように、何度か一部の上を行き来させ、

「……傷」

ぬるついたモノの下には、床の一定の平坦さを乱すいくつかの傷があった。

方向はバラバラ。

長さや大きさも均一ではない。

そして、深さも同じく。

これはまるで、

……引っ掻き、傷？

そうだ、と確信を思った時だった。

リビングで――――――物音が聞こえたのは。

「っ！」

久留美は、身体を震わせた。
同時に心臓も跳ねた。

……今、音が。

思った矢先、また同じ音が響く。

ゴン。
ゴン。
ゴン。
ゴン。
ゴン。

ゴン――――――と。

一定の間隔で響き続ける何かをぶつける音。
それは、久留美にリビングで何かが起きているという事実を察するに結びつけた。

だが、

……『何か』って？

どうして、親がいると自分は考えないのか。
そこには、『自分の両親以外』がいると考えているのか。

「……そんな、わけが」

無い、と言い切ったが、その語尾の声は小さく微弱だった。
ギュッと唇を噛んだ久留美は、

……そんなわけがないっ！

さっきから自分は何を馬鹿なことばかり考えているのだろうか。
どうかしている。

第一、理由がない。根拠がない。
”そうなる要因”が、見当たらない。

「い、かなきゃ」

無意識に出た言葉と共に、足が一歩を踏んだ。
その瞬間に、こめかみがツキンと鋭く痛む。

「確かめなきゃ」

ダメだ、と痛みが叫ぶ。

……何がダメなのよ。

見てはいけないものなんか、この先にはない。あるはずがないというのに。

行って、確かめなければならない。
違うと証明しなければならない。この否定が正しい、と。

……だって、そうでないと。

玄関先で決めたこと。
これから自分がしていくこと。しなければならないこと。

それら全部をどうすれば――――

「そんな、ことは……無いったら！」

リビングと廊下を遮る一枚の仕切りであるドア。
普段はキッチリ閉まっているはずのそれが、〝少し開いている〟という不自然も無視して、久留美はそれを押そうと手を伸ばす。

止めろ。
ダメだ。
開けてはダメだ。
見ては――――――

「うるさいっっ――――――――！！」

痛みとして響く頭の中の制止を振り切るように、思い切り押し開けた。
それで全てが終わると思った。

鳴り止まない警笛のような痛みも。
このいくら振り払おうとしても、消えやしない不安も。

全部、終わって――――――

◆◆◆◆◆◆

部屋の中は廊下と同様に暗かった。光がないため、殆ど視界は役に立たない。

だが、そこで【何か】が動いている。
そう思わせる人影が、ぼんやりと辺りの闇よりも濃く浮かびがっていた。

音がした。
それが動く音と、廊下にまで聞こえていた何かがぶつかる音。

それらに混じって、さらにもう一つ加わる。
耳を澄まさなければ聞き逃してしまいそうな鈍く微細なもの。

だが、それは――――――水音だった。

ぬちゃ。

びちっ。
ぐちゅ。
ぴちゃっ。
ぐちゃ。

何処か粘り気を含んでいるそれは、一度気づくと絶えず響く。
蠢く影の動きに合わせて。

「――――――」

目が慣れてきたせいか、暗闇の中が少しずつ見通せるようになってきた。
それは影の詳細も浮かび上がらせていく。

蠢いている【それ】は、背を丸めて頭部を何かに埋めていた。
小刻みに動く【それ】が顔を埋めるものを見る。

最初に見えたのは――――――足だ。二本の足。

……足、って？

誰のだ。
そもそも、【あれ】は何をしているのだろう。

知ろうとする思考によって、足が一歩前へ出る。
その際に爪先が、何かを蹴った。
痛い、と感じる程にならないささやかな衝撃に、久留美はその障

害物を見下ろす。

バックだ。

そこからはみ出ているのは――――――カメラ。

『お父さんって、毎日こんな重くてデカいカメラ持ち歩いてるの？』

『ああ。だけど、遠くからでもよく映るんだこれが』

『隣のビルから見える女優の着替えとか？』

『ああ、もちろんって何を言わせてんの久留美さんっ！？』

安かった割に性能はいい、と言って父は愛用していた。大事にしていた。

それがどうして、こんな風に放り出されているのか。

よく見ると、レンズが割れていた。一大事だ。

記者としては抜け目ないくせに、なぜか抜けている部分もしっかりあるあの父はついにやっちまったのか、と持ち主を探した。

いない。

何処にもいない。

仕事以外じゃ四六時中締りのない面で、ヘラヘラと視界に身を置く父が――――いない。

「い、や……ぅ、そ……」

さっきから視界にチラつくものは、違う。

だって。

だって、あの人は――――――■■でなんかいない。

だから、違う。

あそこで、腹を貪られているアレは違う。

動くたびに壁に頭をぶつけているアレは違う。

アレは、父は、■■でなんか――――――

「――――――ぁ」

影の動きが、一瞬止まった。

一定の動きをただ続けるだけだった【ソレ】は、丸めていた体を今度は反るように伸ばして、

「っひ……」

こちらを見た。

血走った目。

突き刺すために尖った歯。

そして、それを生やす口元は、鼻から下という領域に渡って真っ赤に染まっていた。

……それ、誰の？

思考が分析対象としたのは、向き合った対象そのものではなかった。

その口についた赤は、何だ。
その赤は、何から付着したものなのか。
どうして付着しているのか。

誰の■なのか。

「あ、ぁ……っぁ」

一歩、一歩と足がひとりでに後退していく。
現実を受け入れられない本能が、その意思のままに身体を動かす。

現実が遠ざかるように。
そんなことは無駄とわかっていても。

「……っ」

肩が出入り口の角にぶつかり、久留美はその拍子にバランスを崩した。
元々身体は理解していた。心を置いて、本能と共に。
力をなくしてギリギリの維持を保っていた膝は、ガクリと床の上に落ちた。
何の緩和もなく打ちつけた尻は痛かったが、久留美はそれを感じる余裕などなかった。

【ソレ】は、久留美に対して注意を完全に移した様子で動き出し

ていた。
それまで夢中になって縋り付いていたモノなど放って、久留美の方へ。

そして、見えてしまった。
今まで久留美の視界から遮っていた【ソレ】が、そこから退いたことで。

■■となった、父の姿が。

「――――――――っあ、ぁ、あ、ぁ、ぁ、あああっ！！」

久留美は啼くように叫びながら、立たない足を引きずって後ろへと引いた。
背が壁にぶつかり、行き止まる。
後ろには逃げ場が無いと理解するのに幾度がもがいた後、久留美は横へと這いずった。

「ぁ、あ、っぁ」

誰か。
誰か。
誰か。

久留美は、この夢から覚ましてくれる誰かを求めた。

「おかあ、さんっ」

朝、いつも最初に見る人。
夢を見ていたら、起こしてくれるのはいつだって母だった。

久留美は母を求めた。
両手で床を引っ掻き回しながら、家の奥へともがき進んだ。
四つんばいになって這い進む久留美は、中でリビングと繋がっているキッチンの前まできた。
やはり、そこもドアが開いていた。
しかし、久留美は気にかける余裕はなく、

「っは、おか、ぁさ――――――」

――――――ゆえに、待っていた悪夢の続きを目の当たりにした。

夢の終わりを告げる人はなく、ただ覚めない夢の続きだけが絶望を伴って、そこあった。

「――――――、」

母はこちらを見ていた。
目には光がなく虚ろ。それでも、目を大きく見開いていた。
仰向けに倒れたまま、久留美を見ていた。

否。

母は、もう久留美のことは見えていなかった。見ていなかった。
何故なら母の命は、食われてしまっていたからだ。
腹の臓腑を貪り喰らう化け物に。
父と、同じように。

そこにあるのは――――――かつては母であった、今はただの肉塊。

「……ぁ」

くたり、と久留美は全身から力が抜けるのを感じた。
絶望に促された脱力という現象だった。

縋るもの。救いを求めるもの。逃げ場となるもの。
それら全てが、もう無いのだから。

「……どう、して」

何で、こんなことになっているのか。
やっと認められたのに。
やっとそこにあることに意味があるのだと理解できたのに。

どうして、無くなってしまったのか。

「……どうして」

ようやく前へ進めると、思ったのに。
過去から先へ踏み出せると、思ったのに。

どうして、求めたら今度は無くなってしまうのか。

「……どうしてっ！」

問いに答える生者は、この場には久留美以外にいない。
答えは返らない。

ただ、危機はじわりじわりと迫っていた。
両親に降りかかった危機が、久留美にも――――――もう目前だった。

「……あ」

気配に首を向ければ、真っ赤に染まった目が久留美を見下ろしていた。
赤黒く染まった口はだらしなく開き、はぁ、はぁ、と血生臭い荒い息が出入りしている。

死。
先駆となった二つの死を、何よりも身近な存在を以って目の当たりにした久留美は、その概念をあらゆる感覚で感じた。

「……あ、ぁ……」

身体が動かない。
脅威の放つ恐怖に当てられて、腰が抜けるどころか指一本すら動かない。
身体が恐怖に屈していた。
心はまだ抵抗を捨てきれていないのにもかかわらず。
折れない久留美の心は、恐怖に無防備のまま曝し出される結果となり、
「……い、や……っぁ」
死にたくない。
生きる目的を喪失したという現実を目の当たりにしても、久留美はまだ死を受け入れることは出来なかった。
ここまで追い詰められてもなお、久留美を生に執着させ、しがみつかせる何かが残っていた。
……死にたくない、だって……私、まだ。
脳内での言葉は続かず、代わりに浮かんだのは一人の人間の顔だった。
それは、父でも母親でも、かつて自分を置いていった魔法使いと称した『先生』でもなく――――――――

「――――――その血生臭い面を、即刻俺の友人から退かせ腐れ野郎」

在るはずない声が響き、同時に目の前に迫っていたはずの死の具現者は、瞬きの間に無数の肉片となって弾け飛んだ。

飛び散る肉片と黒い血が久留美に降りかかるが、そんなことは気にならなかった。

その意識は、目の前で起きた現象よりも、今この場で聞こえた声にのみ集中していた。

恐怖に固まった身体は僅かに緩み、堅い動きで背後を振り向いた。

崩れかかった体勢からの苦しい捻りだったが、久留美にはどうでもいいことだった。

ただ、響いた声が幻聴ではないことを確かめることを優先し、

「か、ずや……」

顔が見えない。
顔が見たい。

力が入らない身体を起こそうと試みる。
しかし、被さるように影の方が先に降りてきて、

「……無事か、久留美」

膝を屈して、近づく顔。
ようやく見えた顔は、暗い中でも不思議とよく見えた。

「っ、千夜！」

瞬間、久留美は支えとなっていた腕を千夜に向けて放ち、しがみついた。

「かずや、かずやっ……かずやぁ」

死に満ちたこの場に現れた己以外の生者に、久留美は泣きながら縋る。
凍りつきかけていた感情は一気に開放され、反動して溢れたのは涙だった。
緩みきった口からは、馬鹿の一つ覚えみたいに一つの名前以外出

てきやしない。

それだけの存在だった。

この闇と死で出来た空間において、千夜という存在は唯一つの光だった。

「うえ……っ、えぇ……ん」

「……久留美。――――――」

不意に千夜が零した言葉に、泣くことを止められないながらも顔を上げた。

ごめんな、と言った千夜を。

「何で……謝る、の？」

「……なんでもないよ。意味なんて、ない。……忘れていい。ただ――――」

一つ頼みがある、と続いた言葉に、久留美は益々疑念を増幅させた。

千夜は苦しそうに笑みをつくりながら、

「――――俺を許すな。何があっても、絶対に」

降る言葉を久留美は理解できなかった。

そして、夢から覚めたと思ったこの瞬間すら――――――覚めない悪夢の続きであるということも。

［壱百参拾］　覚めない悪夢（後書き）

次回、アンチ久留美派のボルテージが最高潮の予感。悪い意味で、ですけど。

次で一応区切りがつきます。そして、その次からはようやく最終日。少年の想いも少女の想いも、全てはその日がエピローグとなる。行く道を探し求めて彷徨い続けた魂たちの一つの終着点です。

とりあえず、次は一気に詰め込むので長い悪寒。更新は、一週間くらいでカタをつけられればいいなぁ……。

【壱百参拾壱】　ヒトの定義

「――――――あ、降ってきやがった」

外に出ると同時という絶妙なタイミングに、蒼助を舌打った。
狙っているのではないか、とすら思える。

「え、ほんと？　……危なかったね」

その後ろにいた三途は、店の中から身を乗り出してその事実を確認した。
夕刻を越えて夜に入り込んだ世界に、雨が降り出していた。

「うーん……結構強いね」
「あー……センセ、悪ぃんだけど傘貸してくんね？」
「いいよ。ちょっと、待ってて」

そういって、三途は傘を取りに店の奥へと一旦消えた。
蒼助は、待つ間に暗い空を見上げながら、

「……どんどん強くなってんな。こいつが帰るのを渋ってくれたおかげで助かった……つーのかね」

背中に背負った”重み”に首を捻る。
すっかり夢見心地で眠る朱里である。

三途によって振舞われた豪勢な夕飯をしこたま食い貪った後、食ってすぐ寝たら牛になるなんぞ知ったことかとばかりにソファで横

になって寝てしまった。
　慣れているのか三途は少々小言を述べただけで後は好きにさせていた。
　日常茶飯事だというのなら、よくこんな軽量を維持できるものだ、と蒼助は呆れを通り越して感心すらしてしまった。

「……むぅ、おなかいっぱいれす」
「あー、そうだろうとも」

　あれだけかっくらっとけばな、と寝言に対し相槌を打っておく。

　すると、

「……ねぇさん」
「……」

　考えないようにしていたことをわざわざ掘り返すようなこと言うなよ、と蒼助は苦く思う。結局のところ考えていることは同じ、ということなのか。

「携帯……って、今とれねぇし」

　両手はあいにくと塞がっていた。
　この状態を脱するには、駅について背中のお荷物を起こすまで我慢するしかない。
　はぁ、と蒼助はなんとも手は塞がっているにも拘らず、手持ち無沙汰な気分で溜息を吐き出した。

　昼間に千夜へ送ったメールに対する返信は、あれからまだ無い。
　だが、何かあった、と考えるにはまだ早いだろう。

「……大方久留美にとっつかまってんだろうが……何してんのかね」

そして、自分はというと――――――

そう考えが移りかけたところに、ちょうど三途が戻ってきた。

「――――お待たせ。いつだったか千夜がそのまま置いていっちゃったのがあったから、これ使うついで持って帰ってあげて」

「あ、どうも」

「待って、朱里ちゃん背負ったままじゃ出来ないでしょ」

実に行き渡った気遣いを働かせる三途は、ワンタッチ式の傘はすみやかに開き、

「はい、どうぞ」

「……」

差し出された傘に対し、蒼助は手を伸ばす気配をみせない。

三途を見つめたまま動かないという不動を続けるその様子に、

「蒼助くん？　……どうしたの？　朱里ちゃん背負って帰るのが大変なら、やっぱりここで起こし……」

「……いや、そうじゃなくて」

ふい、と視線を逸らしながら、蒼助は言いにくそうに口をまごつかせる。

そして、ようやく言葉を見つけたのか、

「……なんとなく、変わったなぁって……ふと思って」
「ん？」
「なんか、最近感じるんだよ。以前と自分と今の自分の……違いっていうか、ギャップっていうか……そーゆーのを」
「そりゃまた青臭い話題だね。……どうしてそう思うの？」
青臭いなどとあしらう割には聞いてくれるつもりらしい。
聞き手上手なのは年を積んだ成果なのか、と脳裏で失礼なことを考えながら、
「いろいろ込みで……前の自分じゃ到底想像できねぇことになってる。ほら、今なんかどういうわけかガキおぶってるし……。大袈裟に言うと……今自分にあるモノ全部が、前には絶対に有り得なかったモノだっつーか」
子供はどちらかといえば嫌いで。
人との深いかかわりも不要と思う方で。
「まぁ、取るに足らねぇ些細なことなんだけどよ……なんつーか、ちょっと前まで俺は死ぬまでこんな感じで変わらねぇもんだと思ってたもんだからさ……」
「それで……その変化に君が感じてることって？」
「……いや、なんだろうかなって」
「わからないの？」
「……ああ」
言葉に対して是と返した蒼助の内心は、実際のところも本当にそうとしか言えない状態だった。
この変化に対して自分の思っているもの。感情。反応。

蒼助は自身のことでありながらも、それがはっきりと掴めずにいた。

嫌悪や喜びというはっきりとした感情が示されない。

「別に嫌でも呆れてもいねぇんだけど……なんか、もやもやっと違和感みてぇのが喉の奥に魚の骨みたくつっかかってて……」

「……うーん、君が魚の骨を喉につっかえたことがあるかどうかはまたの機会に聞かせてもらうとして」

はっきりとしない物言いの中に、三途はそれでも何かを見出した様子で、

「その違和感の正体は……変化と君の心の”ズレ”だよ」

「……ズレ？」

「そう。今、君という存在の中には無意識のうちに起こっている変化がある。でもまぁ、それは無意識が故に意識されないから……君自身の心は奇妙な違和感として感じているんだろうね」

「……もうちょっと、わかりやすくしてくんね？」

三途は不快に思う素振りもなく、苦笑を伴わせながら、

「成長しているってこと。……精神的に、ね」

「はぁー？」

言葉としてはわかりやすくなったが、意味はますますわからない。

三途の言っていることと、「違和感」というものに結びつきを見出すことは蒼助には難しかった。

「……まぁ、なんというのかな。自分の成長ってやつは、自分自身の自覚を伴う必要がないわけでね……それは身体も心も一緒なんだ

よ。……違和感か。確かに、成長って変化を捉えるとしたそう思うのが妥当ってところか」
「納得してないで説明してくれよ」
ふむふむ、と分析に入ってる三途に、置いていかれる前にと蒼助は突っ込んだ。
「ああ、ごめんね。……簡単にいうと、君の感じる違和感というやつは……今慣れないことをしているから生じているんだよ。君が言ったように、以前の自分ではありえないということを……ね」
「だから……それが何だっていうんだよ」
「それが、君が前よりも人として成長している証ってことさ」
「……何でそうなる」
「じゃ、てっとりばやく私の自己分析を言うね。以前の君は、どちらかといえば独りよがりな節があって、自分の周りをあまり良く見ていなかったんじゃないかな。そして、周りの干渉も拒絶しがちで逆も然り……」
「……」
喉から否定はこみ上げてこない。
だからといって、肯定を口にするのも何処か妙な気分だ。
故に中立的な無言をとった蒼助は、結果的にはその言葉を受け入れた。
「……でも、こうして君と関わるようになってから、新たにわかったこともあるよ。君は……人として成長しつつある」
「結局それか……。何でそう思うんだよ、センセ」
「ハハッ……実はさっきの自己分析は、たった今考えて並べた即席ものでね。今の君とは、真逆のことを述べてみただけなんだよ。君は、今あるものが以前にはなかったと言ったからね。……あてず

っぽだったかな？」

「……いや、当たってるよ。あんたの……言った通りだ」

だからこそ、否定しなかった。

ただ、肯定するには自分の心が並べられたそれらの未熟さを容認出来ていなかった。

蒼助は、降りしきる雨が跳ねるコンクリートの地面を視線のやり場にしながら、

「……別に、あのまんまでも良かったんだよ。俺の人生こんなもんだって割り切って腐って生きてても……誰がなんといおうと、俺の世界での俺が決めた生き方だからさ」

でも、と蒼助は過去から今に意識を移し、

「今はどういうわけか、あんなことになって、こんなことになって……こんな感じになっちまったわけだ。別にケチつけるとか……文句言いたいわけじゃねぇんだ……ただ」

今のこの状況を拒否するわけではない。

決して嫌なわけではない。

だが、

「……今の俺の姿を認めて受け入れちまったら……それまでの俺はどうなるんだろうって……」

今を認めたら、それまでは過去になる。

そして、過去はいずれ――――――忘れ去られていく。

だとしたら、今までの自分は一体なんだったというのか。
脱ぎ捨てられていくだけの薄っぺらい皮だったなのか。
確かに、今までの自分を好ましく思うこともなかった。寧ろ、反吐が出る思いで変えられない自分という存在を忌々しく見つめていた部分もあった。

けれども、ここで切り捨ててしまったら――――自分のこれまでは、何の価値もなかったということになるのではないか。

過去の自分を切り捨てることへの躊躇。
それが――――蒼助の抱く違和感の正体であった。

「自分でも大袈裟に考え過ぎだって……わかっちゃいるんだけど……」
「……でも、やっぱり気にせずにはいられないか。……意外と繊細だね」
「いがいって……いや、そうかも。俺もこんな女々しい部分があったなんて思わなかった」
「今まで知らなかった自分も見つけた、と……。なかなかの急成長だね」
「茶化すなよ」
「茶化してなんかいないよ。……とりあえず、君の不安を取り除くために年上として助言しようか」

頼もしい言葉だ。
だが、直後にやって来たのは――――

「大丈夫。――――心配しなくても、人間はそう簡単に変われる生き物じゃないよ」

ずる、と背中の朱里を落としそうになった。

「そ、それ……さっきまでの話、全否定じゃねぇか」

「そうだね。でも、これもあってさっきの話も成り立つんだよ」

ずり落ちそうな朱里を抱えなおす蒼助の傍らで、三途は話を続けた。

「人間はそうは変わらない、或いは変われると……よく聞くけどさ。どっちが間違っているじゃなくて、どっちも正しいっていうのが正解なんじゃないかなって私は思うんだ」

「どっちもって……それじゃ、矛盾しちまってんじゃ」

「その通り。……でも、それが人間だよ」

「……は？」

答えになっているとは思えない返答に、蒼助は顔を顰めた。

「愛憎。生死。正気と狂気。矛盾した二つの命題が表裏一体として一つの答えとなる要素を人間はたくさん持ち合わせている。……それは、人間そのものが二律背反を提示する存在であることを意味しているんじゃないかと私は思う」

「……難しい話ですかね、それ」

「そうでもないよ。まぁ、ようはだね……人間は矛盾した生き物だと言いたいわけだよ」

「……変われるけど、変わらない存在ってことすか？」

「そうだね。……三つ子の魂百までって言葉があるでしょ？　人間は、持って生まれた性質は死ぬまで変わらない。これは本当だと思うよ。……でも、人間が変わらない生き物っていうのはバツだね。だって、人間は成長する生き物です」

「……どっちだよ」

強くなる雨の具合を考慮しても、そろそろ結論を率直に述べてほしい頃合だった。

「人間の成長って言うのは、不変たる部分を土台にして、外から得た影響を積み上げていくことで成り立っているんだよ。ロボットみたいに部品をそっくり換えるような変化じゃなくて、元の何かに新たしい何かを付け足していく……。これが、成長という変化の実態だね」

「それが、人間が変わらないけど変われるって話の証明か？」

「そう。今の君が不安に思っていることの解消にもなると思う。……君は、過去の自分の無価値化が怖いんだよね？」

「怖くは……まぁ、しっくり来ないというか」

「言い方が悪かったね、ごめん。……でも、わかったでしょ？　過去の君は無価値になんかならないよ。用済みどころか、これからも重要な部分だよ」

「……土台、だからか」

「そう。今とこれからの新しい君の土台だよ。本質無しで人間って存在は成り立ちはしないよ。逆に……過去を恐れて拒絶し、自分の本質を見失う人間ってやつほど、哀れで滑稽なものはないさ。……君は、今もそうして過去の存在をちゃんと意識に留めていた。間違っていないよ」

誉められているのだろうが、対する蒼助は複雑な気持ちだった。

何故なら、無意味になることを恐れたとはいえ本質を丸出しにした過去の自分は決して誉めれた存在ではない。そして、断じて好きでも大事にも思えない。

振り払えない憐憫と嫌悪の対象。

どう計算しても、叩き出される答えはこの程度だ。

「でも……俺は、俺の本質ってやつぁ好きにはなれねぇよ。ただ、嫌でも目に付くんだよ」

「それはみんな一緒さ。……自分を心底好きな人間っていないと思うよ。自分に対する好きと甘いは微妙にニュアンスが違って……誰もが無意識に自分を嫌悪して、己の外の住人である他人に惹かれるんじゃないかな」

達観とした三途の意見は、今度は蒼助の中にすんなりとおさまった。

だが、どうすればいいというのか、と反発も生じた。

「君は意識しているだけ、その傾向が強いようだけど……足りない自分に腹が立つなら、これからどんどん新しいものを取り入れていくといいよ。足りない部分を埋めるんだ」

「……出来たら、苦労は」

「もうしてるじゃない。……自分でさっき言ってたでしょ」

「……」

黙りこむ蒼助に、三途は後付けるように言葉を添えた。

「成長にも良し悪しはつくけど……今の君は、良い方向に向かってると思うよ？」

蒼助の背中で、その要素の一つとなるであろう温もりが、またもぞりと身動ぎした。

◆◆◆◆◆◆

何処で何を間違えたのだろう。
歩みながら、千夜は思った。

礼拝堂。
しばらく訪れていなかったそこは、今は無人だった。
了解を得ようと思ったが、いないものは仕方ないと勝手にお邪魔させてもらった。

カツンカツン、と歩を進めるごとに鳴る足音が、高い天井を備えた広大な空間にはよく響く。酷く空虚な気分にさせる響きだった。
千夜は進む通りの左右に並べられた長椅子の列のうち――――――右側の一番前のそこの手前に腰掛けた。

俯くと鼻先から雫が落ちる。
雨に打たれた身体は、頭から足先までびっしゃりと濡れていた。
テラードジャケットは水をたっぷり吸って、今は重く感じる。

「まぁ、どの道もうダメか……血も吸ってるしな」

袖口から滴り落ちる雨水が、僅かに赤みを持っているのを見つめ、諦め心地に呟いた。
濡れた衣服や下着が素肌に張り付くのは気持ち悪いが、それも仕方ないことと割り切る。

「……雨、強くなる一方だなぁ」

建物の外から聞こえる雨音は、中に入ってから一際強くなったように聞こえる。
何もかも洗い流しそうな勢いだ。

「……いっそ全部――――」

口にしかけて、続きは苦笑で滲ませた。
都合のいいことを吐きかけた己への嘲笑だった。

大地を洗い落とすこの自然現象にだって――――人の罪は流せやしない。

くっ、と笑い声が漏れたそのタイミングに重なるように、

「――――誰か、いるんですか？」

背後の出入り口の扉が開く少し錆び付を伴った音。
そして、僅かに遅れて続いた少女の声。

しばらく聞いていなかったが、覚えている。
この礼拝堂――――――及び教会の管理者だ。

「あ、俺だ。俺ー」
「……え、と」

振り向かず手だけ振って自己主張してみたが、相手の理解は追いつかない様子だ。
千夜は今の自分の姿が普段とは少し違うのを思い出し、

「よぉ、――――みちる」

振り向いた顔で、相手がようやくわかったようで、

「か、かずやさんっ」

突然の来訪者に驚きの声を上げた。

しかも、

「きゃぁっ！」

転倒。
駆け寄ろうとして、千夜がつくった所々にある水たまりで足を滑らしたらしい。

「大丈夫か？　……濡れた床に足を滑らせて転ぶのもお前くらいだと思うが」

「……す、すみませっ……え、濡れて？」

奥まで点々と続いている水跡を見て、そして近づいてくる千夜を見て、

「び、びしょぬれじゃないですかっ！　どうしてっ……出かける前には傘を持たなきゃダメですよ！」

「今日みたいな晴天に予知できるか」

「私、タオル持ってきますからっ」

思い立ったらすぐに行動を起こす。

少女は、そういった感情に実直な人間だった。

しかし、

「きゃうっ」

それに体が付いていけない。

「同じところでそう何度も転べるのもお前くらいだよ……。……その前に、一つ頼みをきいてくれないか」

「いたたっ……え、何ですか？」

とりあえず立ち上がるのを諦めて聞くことに徹することにしたのか、少女はぺたりと足をつけて聞く体勢に切り替わった。

相変わらず犬みたいなやつだな、と一つ一つの行動に集中して入れ込むその真面目さに千夜ははにかんだ。

「――――今夜、泊めてくれないか？」

「えっ……でも」

「ちょっと、揉めてな……今日は家に帰れないんだ」
「……喧嘩、したんですか？」
「まぁ、な。三途のところだと、すぐに居場所がわかるし……今夜は、ちょっと一人で考えたいことがあるんだ。いいか？」
千夜の突然の申し出に、少女は呆気にとられたが、
「はぁ、私は構いませんけど……」
「そうか、助かるよ。今日一晩でいい……明日の朝にはいないだろうが、気にするなよ」
「え、何か用事でも……？」
「ああ、ちょっとな……」
やらなきゃいけないことがあって忙しいんだ、と千夜は答え、そこで会話を打ち切り、
「ほら、手を貸してやるから立て。その下濡れているだろ。尻が冷えると身体に悪いらしいぞ」
「ええっそうなんですか！？」
いや事実か知らんけどとにかく立てよ、と少女の手を引き起こす。
「あぅ……お尻濡れちゃいました」
「だから言っただろうに……。ほら、裏に行って着替えにいくぞ。昔いた頃に使っていた服がまだあるなら貸して……」
進行と共に紡いでいた言葉は不意に止まった。
袖につっかえるような抵抗がかかり、千夜の歩みを阻んだのだ。

「みちる……どうした？」

袖を摘むようにして、弱く掴む少女は、ただ黙って千夜を見つめた後、

「あの、――――――大丈夫、ですか？」

「――――、――」

問われた言葉に、表情の時間が止まるのを千夜は感じた。

わずか一瞬の変化を、少女は見逃さず捉えたのか、そうでないのか、

「私、見当違いなこと言っているのかもしれません……けど、なんだか今の千夜さんちょっと……」

「みちる。――――夕飯は？」

「……ぇ？」

全く脈絡のない問いに、少女はポカンと目を丸くした。

それが無意識の優勢の明け渡しとなり、

「おおかたお前のことだから、今日もこのあたりにようやく夕飯の準備にありついて、やり忘れたことがないか作る片手間でこっちに来たんだろう。料理は片手間でするなとあれほど言ったのに、お前はまったく聞いてくれていなかったみたいだな……」

「あ、えっと……すみません。気になっちゃって、つい」

「まさかと思うが、味噌汁を火にかけたままにしてきてないだろうな……？」

「……っ！」

返答も返さずに少女は礼拝堂から走り出た。

踵を返す瞬間の血相を抱えた表情だけで、事実の是非は透かして見ることができた。

「わかりやすさも相変わらずだな……」

苦笑とも微笑とも捉えにくい笑みをこぼしながら、その後を追おうと足を一歩踏み出す。

パシャ、と軽く鳴った水音に一旦動きを止め、振り返る。

背を向けたその後ろには、点々と出来る小さな水溜り。

じっと見なければわからないが、その水は――――――ほのかに紅い。

「……どうせ明日にはバレるだろうが」

それでもいい。

これが彼女の目に触れる前に出て行こう、と明日の予定の第一を決める。

千夜はそれを見つめながら、不意に幻視を感じた。

赤く滲んだ足跡は、千夜がそれまで歩んできた道を模しているように見えたのだ。

人の血と肉と――――――死で築かれた過去を。

ピチョン、とまた一滴落ちる。

袖から一定の間隔で落ちる仄かに赤い雫を眺め、

「……人は、変われる……か」

いつか言われた言葉。

どれだけ時間が経とうと忘れられず、残り続けている教え。

それは、変われないと言った自分の諦めを真っ向から否定した。
生きている限りいくらでも変われる。
変わらないものなんてない、と。

嘘ではなかったと思う。
きっと彼女は本気で真剣だった。
それが出来ると信じて、だからあんなことをしたのだ。

だが、

「……あんたも、知らなかったんだろうな」

この世の全てを識ったような顔をしたあの賢者は、信じた先に望んだ道はあると、強く信じていた。
しかし、彼女にとって、自分という存在は未知のイレギュラーだっただろう。
彼女の経験では乗り越えられない困難の固まりだった。

それを知らず、彼女は信じていた。
自分が変われる、と。

「……ごめん、やっぱり無理みたい……なんだ」

信じたかった。
信じてくれた彼女を。

信じたかった。
彼女が信じてくれた自分を。

けれど、けれども。
もう自分には見えてしまった。

「――――――ダメ、なんだ」

彼女の言葉を嘘にしてしまう自分の行く末とその事実。
それが――――――目を閉じるようと逸らそうと、拒むことが出来ない距離にあることに。

【壱百参拾壱】　ヒトの定義（後書き）

同じ雨が降っていて、同じことについて考えて。
けれど、違う場所で、互いに違う答えに行き着いた二人。

次回は、新キャラ登場。蒼助もようやく事態を把握することになります。そして、平穏崩壊の全貌が誰の目にもわかるように明らかに。

【壱百参拾弐】　惨劇の後日

「――――ねぇ、新條さん。……ここ最近なんかおかしくありませんか？」

今日の昼間に逮捕したスリ常習犯。
被害届けから三日がかりで取り押さえた犯人の事情聴取を終えた。

それから十数分が経過した、夜に突入した時刻のことだった。
現在、己が指導係として面倒を見ている新米刑事が話題を切り出したのは。

「……世の中がおかしいのは、最近に始まったことじゃねぇと思うがな」
「先輩個人の皮肉った世間への見解を聞いているんじゃありませんって。この署内でのことですよ」

署内に設けられた廊下の片隅にある休憩所。
自販機とソファが二台ずつというささやかな設備が署内のいくつかの場所に構えられている。
彼――――【新條】とその後輩は、その一つにて束の間の休息

に浸っていた。

「何だよ、もったいぶらないではっきり言ってくれ。若いお前と違って、四十過ぎた中年はここらで睡眠とっとかないと身体が持たないんだ」

「スリとの三十分持久走に耐え抜いた中年のねちっこさでもうちょっと粘って話を聞いてくださいよ。というわけで、ねちっこい先輩……質問です」

「……何だ、目上を労わる気のない後輩。手短に頼むぜ」

縦長のソファのスペースに身を横たえて、丸ごと陣取った体勢のまま、向かいのソファに腰掛ける後輩にとりあえず応えてやることにした。つまらないことだったら、強引に打ち切って仮眠に突入する心構えをしつつ。

「少し前まで署内で持ちきりだった……ほら、渋谷での殺人事件。謎の猟奇殺人事件だって、散々ニュースでも取り上げられたやつ」

「あー、あったね。犯人は未だ捜索中、と。……で、お前がわざわざ俺の仮眠を妨げてまでおかしいって主張するのは、その事件のどういうところに関連してるんだ？」

「……その時期くらいから、なんか妙な連中がここを出入りするようになってませんか？」

「妙な連中？　……本庁の連中じゃ、ねぇのか？」

「最初はそう思ったんですけど、その本庁の連中となんか争ってるところとか見かけたんで……ありゃ、違うと思うんですよ」

「ふーん。それで、お前は何だと思うよ？」

「だから質問するんですよ。新條さんは知りませんか？

――――――あの喪服みたいな黒スーツを着た連中のこと」

ああ、やっぱりそれか。
最後に倒置法で付け足された言葉の部分で、後輩が何を勘繰っているかを【新條】はすぐに理解した。
本庁の人間と争っていたという点で匂ったものがおかげで明確に直感できた。

「……あー、お前この世界は入ってどんぐらいになるんだっけ」
「半年ですよ」
「そうか。じゃぁ、しょうがねぇな。連中のことに関してなんか、まだ微塵も知識として持ち合わせちゃいねぇよなぁ……」

どっこらせ、と【新條】は上半身を起こし、振り払いきれない眠気に頭を振りながら、

「ほら、教えてやるからそのコーヒーよこせ。講義代だ」
「自分で買ってくださいよ。すぐ隣に自販機あるんですから」
「財布、ディスクに置いてきちまった。……情報料と思って、ソレよこしな」
「……俺が口をつけたところは避けてくださいね」

言われんでもするがな、と渋々と差し出された紙コップに入ったコーヒーを受け取る。
一口啜り、口の中に広がる無糖の苦味に目が覚める感覚を覚えながら、

「……【降魔庁】だよ」
「……ご、うま？」

初めて聞くであろう単語に予想通りの反応を示す後輩の姿を確認

し、

「国家に属する秘密機関。俺たち警察とも違う、また別の治安組織。……情報、活動内容、何のための創られたかさえもわからない。全貌は一切明かされていない……いわゆる謎の集団組織ってとこだな」

「何ですか、その絵に描いたような胡散臭い組織像は……」

「胡散臭い組織なんだからしょうがないだろ」

そんな身も蓋も無いことを、と開いた口が塞がらない様子の後輩。だが、事実を口にしているだけだった。

「で、その胡散臭い組織の連中は何で本庁からの当たりが厳しいんですか？」

「胡散臭いから」

「それはもういいです」

「本当だって。……普段何してるか一切わからないやつらが、一方的に管轄内に踏み込んできたんだ。本庁の連中にとっちゃ、こいつら突然やってきて何様のつもりだって話だろうが。お前が見たのも、大方事件の資料やら調査情報やらを掻っ攫いに着たところを難癖つけられている場面だったんだろうよ」

「結局、全く相手にされていませんでしたけど」

「埒が明かないからな。それに、向こうにはそういうことをしていい権利がある。しかも、何言われようと聞かれようと答える必要もない、と」

「ついつい野次馬根性出してしまって最後まで見ていたら、自分が火の粉被りましたよ。完全に八つ当たりでした……」

「そりゃ災難だったな……」

どうやら、体のいいストレスの捌け口として散々嫌味やらをぶつ

けられたらしい。

「それにしても……名前ぐらいしかロクに何もわからない組織ですか。そんな秘密主義な連中が、どうしてあの事件に関与してくるんですかね……」

「さぁな……」

話は終わりとばかりに、【新條】は半分ほど残っていたコーヒーを一気に煽って、空の器となった紙コップをゴミ箱に放り込むと、再び横になる。

瞼を閉じて寝たフリを装い、己の思考世界に飛び込んで彼が思ったのは後輩との間で挟んだ話題の種だった。

降魔庁。

この存在をまともに直視するのは、何年ぶりのことだろうか。

……そうか、やっぱりこの件も……。

渋谷区にて起きた話題騒然となった猟奇殺人事件。

無差別に、連続として、捜査を混乱させるような愉快犯的で無残残忍を極める犯行。

この一連の事件における最初の発端となる現場は、【新條】の所属する代々木警察署の管轄域である代々木公園であった。

通報を受けて向かった担当刑事たちを出迎えたのは――――狂宴の跡だった。

精液塗れの虚ろな女。

食いつばまれたような食い残しの男。

二対の死体は、その前夜にどんな惨劇があったかを容易に想像させ、何人かを嘔吐させた。現場に立ち合わせた一人である【新條】も、その日は肉や魚を一切口に出来なかった。

血と精液の汚臭に満ちる常軌を逸した現場に、正気じゃない、と誰もが漏らした。

同僚たちが慄く中で、【新條】もまた戦慄めいた感覚に身体が震えた。

他とは、一線を引いた別の意味で。

……まさか、な。

あの時、現場の目の当たりにした瞬間に、【新條】の脳裏には追憶のフラッシュバックが瞬く間もなく起きた。

シャッターを切るようなそれよりも早く、そして細かく。

押し込めていた忌まわしさと懐かしさに彩られた記憶は、箍が外れたかのように奥底から噴き上げた。

その開放感はまもなくして――――全身を総毛立たせる悪寒へと変わった。

……そんなはずが、ない。

終わったはずだ。
六年前に、全ては終わったはずだ、と。

【新條】は、それを伝えに現れた【彼女】との最後の逢瀬を思い出した。
同時に、離別も伴った六年前の再会を。

『――――――さよなら。多分、これで本当に最後だから』

最後。
【彼女】と。そして、非日常との拘わり。
もう自分の二度と現れないと約束することで、彼女は自分を日常へと還した。

逃がされた。
救われた。
それで、終わったのだと思っていた。

……俺だけ、だったのか？

そんな風になっていたのは、あくまで自分の中でのみで。
自分に被害がこれ以上及ぶまいとした【彼女】が、まだ終わっていない渦中から自分を外へと逃がしただけなのか。

しかし、と【新條】は沸々と沸きだした危惧を鎮める要素をやや

無理やり持ち出す。

あの狂気の連続殺人事件は、突然、ぷつりと途絶えた。
四日間に立て続けに起きた死の連鎖が唐突に。

それから不気味なまでに続く沈黙。
【新條】は、それを降魔庁が事態の処理に動いているからだと考えていた。
そもそも表であるこちら側に発見されたことが既におかしい。
その手に関する情報や事件そのものが世間に露見する前に、事前に処理することが彼らの最善であり当然であるはずなのだから。

……なんであれ、あれ以降何も無い。どうにかなったんだろ。

こちらで何も無いということは、あちらの対応が適っているということだ。
どうして出遅れたかは知れないが、終わりよければそれでいい。

「……あ、新條さん。雨降ってますよ。昼間っから取調室に篭り切っていて全然気づきませんでしたが」

それを知らせたのは、陽がとっくに暮れて夜に浸った外の様子を窓から見ていた後輩の言葉だ。

「あー……置き傘してねぇのに。くそ……」

ここで仮眠を取ったら今日の仕事は切り上げて帰ろうかと思って

いたところを、外から聞こえる雨音に、【新條】は予定の変更を強いられ舌打った。

「自分は傘があるのでもうここらで帰ろうと思いますが、新條さんは……」

「その傘を俺のところに置いてってくれたら帰ろうと思う」

「……それじゃ、お疲れサマでした」

無視してソファから立ち上がる後輩に薄情さを感じつつも、それを見送る一瞥をくれて、【新條】はひとまず外の様子に収まりがつくまで眠ることにした。

しかし、ようやく得ようとした安息を奪う足音は、無情にも【新條】のもとへ忙しさをまとって近づいてきた。

「――――おい、新條!!　そこにいるな、新條ぉっ!!」

んぁ、とその声に落ちかけた意識を寸前で引き上げられた【新條】は、痙攣と共にソファの上を跳び起きた。

そうして起き上がった先――――向かいの廊下からは、よく知る同僚の刑事二人が駆け寄ってくるのが見える。

「……あー、何だよ。これから仮眠だっつーのに……」

「馬鹿、そんなこと言ってる場合か。〝殺し〟だ」

「……っち、何処のどいつだよこんな時に」

眠りにたゆたいかけた若干ダルい身体を、ソファから離しつつ悪態を吐く。

「……それで、現場は？　車出すなら運転は頼むぜ、寝起きの運転で事故りたくなったら」

「……」

返事の代わりに、違和感の込もった沈黙が返ってきた。

目敏くそのささやかな異変を察した【新條】は、

「……どうした？」

「……新條、お前」

「何だよ」

切り出しを迷う口ぶりの同僚の様子にじれったさを込めた促しを出す。

すると、隣で同じように渋っていたもう一人の刑事が開口を切った。

「……お前、幡ヶ谷に親戚とかいたか？」

「はぁ？」

突然何を言い出すのか、と【新條】は目を見張ったが、言葉の中の一部はある記憶を引き出すには十分のキーワードとなった。

「いや、兄貴とその家族が住んでいるが……何なんだ、一体」

【新條】の本能は、既に嫌な予感を捕らえていた。

しかし、まさかという躊躇と疑心が思い切った踏み出しを抑えた。
それを無力化するように同僚は、
「さっき、通報がきた。――――――幡ヶ谷一丁目の……新條宅で人が死んでいる、と」
睡魔のまどろみを残す思考を一掃する言葉を放った。

◆◆◆◆◆◆

首の付け根が痛い。
そう感じたのは、蒼助が我に返った瞬間だった。
バッと身を乗り出して一拍の空白で、蒼助が理解したのは自分が寝ていたということ。

そして、次いで思ったのは、その場所としていたのがリビングでありソファであるということ。座ったまま、いつの間にか寝ていた。

その後続く自覚は、現時刻が朝の七時前であること。

そして――――――

「……帰って、きてねぇ……よな」

念のため、立ち上がり玄関まで歩いた。

そこに靴が増えた様子は無い。

更に、念には念を入れて寝室も覗く。しかし、本来の使用者の代わりに潜り込んだその妹が寝息を立てている姿のみであった。

脱力感と失意、そしてここにあるべきものがないことへの不満を違和感を混雑させながら、蒼助は元の場所へと収まった。

ドカリ、と腰をソファの弾力に任せ、一息。

「……何処にいやがるんだ、あいつ」

帰ってきても、家に待ち人はいなかった。

それは日付変更時刻をまわっても、それは変わらなかった。

一緒に粘っていた朱里が先にダウンして、それを寝室に運んだ後も蒼助は待ち続けた。携帯電話にも何度もかけた。しかし、一度も通じることは無く、連絡はとれなかった。

こうなれば維持でも待ち続けようと、夜通し起きていることを覚悟してソファを陣取って一人待ち続けた。が、やはり身体は知らずと途中で限界を迎えて気が付けば外はすっかり明るくなっていたというのが事の顛末だ。

途中で根性負けしてしまったことに関しては、苦虫噛み潰す思いだが、せめて起きたらそこに待ち人である彼女がいればいくらかマシな具合になっただろう。
けれども、それも叶わなかった。

テーブルの上に放置していた己の携帯電話が目に入り、捨てきれない希望を抱いてそれを手に取り、開く。
それもまた、虚しく散る。

「……っ」

半ば叩きつけるようにソファの上に放り、掻き毟るように髪を混ぜる。

落ち着かない。
いてもたってもいられない。

そうした満たされない何かが、眠りに落ちてしまう前より遙かに蒼助の中で増長していた。
水では潤せない渇いた感覚。

情けない、と今の自分に出るのはそんな蔑みばかりだ。
一人いないくらいで、こんなにも自分を保てなくなるなど。
心の何処かに今も残るかつての自分の残滓が、客観の位置に立って嘲笑っている。

腹立たしいが、否定は出来ない。
抗えない事実が確かに内側に居座っていた。

「ああくそっ、女か俺は……！」

鬱陶しいみっともないと見下げてきた女たちと同じではないか、と蒼助は自己嫌悪の渦の中に巻かれてしまいそうだった。
どうにかなりそうで、そうなっては困るとテレビの電源を付ける。それで解決とまではいかないが、気を紛らわす程度にはなるはずだ、と。

「つっても、この時間帯はどのチャンネルでもニュースか……つまん」

吐きかけた悪態は突然途切れた。
不自然にブツリと言葉を中途半端に切ったのは、チャンネルを変えようとした寸前に流れた一つのニュースだった。

『――――――昨夜、東京都渋谷区幡ヶ谷一丁目にて建つ一軒家にて、何者かに惨殺された遺体が発見されました。警察の調べにより遺体は、家主の新條波留夫氏（４５）、妻の新條久美子さん（４２）のものあると判断されました。なお、唯一の生存を確認された娘の新條久留美さん（１６）は、すぐさま病院に搬送され、現在意識不明の状態で――――――』

【壱百参拾弐】　惨劇の後日（後書き）

もう一本っ！！

［壱百参拾参］　虚像の追跡

土曜日。
休日であるのその日だが、学園に生徒は登校していた。
昨年度をもって学園を離れる教員たちを送る離任式が催されるためだ。
よって、振り替えとして休み明けとなるはずの月曜日が休日となる。

しかし、その日は、予定されていた離任式など吹き飛ぶような騒然とした空気が学園全体に流れていた。

「今朝のニュース見た？」
「死体、バラバラだったってー……こわぁ」
「久留美は……？」
「無事だって。……病院に搬送されたらしいけど」
「じゃぁ、やっぱり見たのかな？　……犯人を」
「唯一の目撃者を消しに犯人は再び現るってやつ……あるかな？」
「なんていうか、久留美も案外願い叶ってかもね……ほら、あいつ危ないこと好きだったじゃん」
「ちょっと、よしなよ」
「だってさぁ……」

教室を行き交う言葉は全てが同じというわけではなかった。

身近で起きた事件に畏怖する声。
クラスメイトに対する同情の声。

所詮他人事と面白半分に囃し立てる声。

その三種が混ざり、三重奏として喧騒を成していた。

「……クラスメイトの不幸にも、この反応か。人間ってやつは、情深いんだか薄情なんだか……時々わからなくなるな」

蒼助の傍の窓に寄りかかる昶が、語りかけるような独白を呟いた。

「ただの、クラスメイトだろ。そんなもんだろ、人間なんて……」

「シビアな感想だな。都築なんか、この陰口を聴いてられなくてさっき出ていったぞ」

「お優しいことで何よりじゃねぇか。久留美も喜ぶだろうよ」

どうでもいいとばかりに言い捨て、蒼助は手に握り締める携帯電話に意識を向けた。

開いた画面の変化を、待っていた。

そして、

「……っ」

受信拒否。

これで、十回目だった。

これまで千夜の携帯に送信したメールは、全て等しく跳ね除けられている。

一つ返される度に、蒼助の中で不安と縋る気持ちが増幅していく。

千夜の不在と所在不明。

そして、昨夜に起きた新條久留美の自宅での惨劇。
そこに関連性が無い、と考えを切り捨てるには、些か無理がある。

電話も繋がらなかった。
既に携帯そのものが使用不可能な状態にあるのか。
それとも、携帯の持ち主が使えない状態にあるのか。

どちらにしろ、蒼助の緊張の糸を緩ませる可能性にはなりえない。

「どうした、さっきからケータイばっかり気にして」
「……別に」

誰かに話したところで、何にもならない。
三途には、朱里が連絡を入れているだろう。

しかし、その三途からも今はまだ何の情報も舞い込んで来ない。

誰も何も掴めない。
まるで、煙のように姿を消した千夜。

たった一日姿を見ないだけで、こんなにも認識が危うくなる存在。

こんなにも強く想い続けているのに、気を抜けば記憶からも存在を失くしてしまいそうな気がした。

「おい、本当にどうした。顔色が……」
「何でも、ねぇって……」

うるさい。
あいつから意識を逸らさせようとするな。

気遣う昶の声すら、今はどうしようもなく煩わしい。
ブスブスと燻るように苛立ち始めた矢先、

「――――――蒼助くん」

背後。
呼びかけと共に、肩を掴む手を感じた。
ここ暫く聴いていなかった人間の――――――

「……朝倉？」

振り向くよりも早く、昶がその名を口にした。

◆◆◆◆◆◆

無人の屋上。

ちょっと話がある、としばらくぶりに見た渚が、場所を変えようと蒼助を連れてきた場所だ。

もうすぐ体育館で離任式が始まるが、そんなことは気にかからなかった。

人に聞かれたくないことなのか、渚は来る途中まで一言も言葉を発しなかった。蒼助はそんな渚の後に続き、黙って従った。

只事ではないことを、本能で察していたが故に。

「……ここらで、いいかな」

少なくとも、この時間帯に人はやってこないであろう場所。

そう踏んだのか、渚はようやく止まった。

「……なんだよ、話って」

普段の茶化しや戯れは一切挟まず、蒼助はストレートに内容を欲した。

対して渚は、まるで蒼助の心境を既に予知していたかのように、

「終夜さんは、昨日……君のところに帰ったかい？」

いきなり核心をついた。

驚愕。

違和感。

受けた衝撃が生んだ蒼助の感情は、その二つだった。

どうして、知っているのか。

あのいざこざの際に、渚は不在だった。
表情に全部描いてあるとでも言いたげに、渚は蒼助の内心をそのまま口にした。

「……デキちゃった報告は、七海ちゃんから。結構長めに詳しく経緯を話しくれマシタ」

一部の疑問は晴れた。
だが、本題はそこじゃない。

「そうじゃ、ねぇよ……お前」

渚の口ぶりは、まるで千夜が昨日帰ってこなかったことを前提にしているようだ。

いや、そもそも――――――

「何を、知ってんだ……？」

千夜の不在。
そして、新條久留美の身に起きた惨劇。
それらに関して、何かを知っている。
そう思わせる何かが、渚から匂っているように蒼助は感じた。

問いに対し、渚は一度視線を蒼助から逸らした。
それによって生まれる一瞬の沈黙。
一拍として置かれたそれの終わりと共に、

「……実は、さ。実家での用事を済ませてこっちに帰ってきた後……マサの頼みで、俺は【とある人物】を丸一日尾行していたんだ」
「……と、あるって……まさか」
話の流れを汲んで思い当たる人間は、一人しかいなかった。
「終夜千夜……と、名乗っている人物を追ってたよ。彼女は、この都市(まち)を取り巻く異常の正体に辿り着く鍵だって……マサが、言ってたから」
「鍵って……てめぇら、何を根拠に」
「俺たちよりも距離を縮めた君なら……彼女が何なのか、わかっているはずだろう？」
お前も知っているはずだ。その言葉に蒼助は抵抗を抑えつけられる。
「……確かに、あいつは”澱”の……あっち側の住人だ。けど、あの事件に関わったのは偶然……」
「――――本人は、そうじゃないって言ってたけど？」
「っ、お前……」
尾行だけではなく、接触もした。
言葉を解釈すれば、そういうことになる。
「調べたんだよ、彼女のこと。……いや、今となっては”どちら”で言い表せばいいんだか」
「――――……っ！」
「戸籍は全部偽造だった。今の名前はもちろん、ここに来る以前の高校で使っていた名前も嘘。……いないんだよ、終夜千夜なんて

人間は。この世には、存在しない」

この場にいない少女の存在の不安定さを、容赦なく畳み掛ける衝撃だった。

◆◆◆◆◆◆

幼少期の記憶がない。

それを聴いた時から、千夜という存在に陽炎のようなものを感じるようになっていた。

過去が無い。

それは人として大きな欠損だ。どれだけ忌み嫌うようなものでもそれが個人の歴史となり、先の礎になる。

だが、千夜にはそれが無い。

十年という大きな穴を抱えたまま、どんな想いで歩んできたのだろう。

自信に満ちた姿は、前に進む意志のみで織り上げられていたのだと知った。

過去が無く、性別が無い。

人として当然のことと授かるものを、記憶の始まりの際には全て失っていた。

一度赤ん坊同然の状態に戻ったところから築いた――――――無くした分の半分程度にしか届かない記憶（かこ）すら、人にはおおっぴらに言えないような仄暗いもの。

生きるために犠牲として結果だ。

だが、それを盾としない誇り高さ。目を逸らさない意志の強さ。

だからこそ、千夜はあれほどまでに自分を拒んだ。

そして、だからこそ――――――千夜への愛しさが募った。

黒蘭から聴いたことは、【そうだったという事実】のみ。

千夜がどういった経緯でそうなったのか。

千夜はどんな心情を抱いていたのか。

事実の中身に関して、黒蘭は何一つ語らなかった。

それを誰から聞くべきが正しいのか、語らずとも暗喩されていた。

いつか千夜自身の口から、千夜の意志を以って。

すぐでなくとも、いくら時間を掛けても。

全て打ち明けられるまでに強くなったら、きっとそれは叶う。

そう思っていた、というのに――――――

「マサのところに調査結果を報告しに来た時に、彼女のことを話さなかったのは……君も知らなかったからか？」

「……」

「まぁ、今となってはどっちでもいいけどね。ただ、彼女は間違いなくあの化け物に大きく関わっているのは確かだ」
「……あいつが、話したのか？」
搾り出した己の声に肯定無く、しかしそれ同然の言葉が渚から続いた。
「ひょっとしたら、君が話を聞いたという魔術師よりも深い拘わりを持っているかもしれないよ。三年前……そして、ここに来る三ヶ月前に起きた――――――今回と同じ事件の当事者だろうからね」
「……何だとっ！？」
蒼助は己の耳を疑った。
三年前。三ヶ月前。
前者はともかく、三ヶ月前とは千夜がこの月守学園に来る少し前――――まだ以前の学校にいた頃。
そして、身体の異変が起き始めた時期だ。
「彼女がここに来る前にいた明稜学園は、三ヶ月前に生徒の立て篭もりによる騒動があった。その直後、御月千夜という男子生徒が退学している。ほら、これが……」
渚がスカートのポケットから取り出したのは――――――写真だ。
差し出してくる写真を見て、蒼助は凍りついた。
その姿を見るのは、初めてではなかった。
千夜の部屋の机の引き出しにしまわれていたアルバムの中に、【

それ】はいた。

紛いも無く、男の姿の千夜だった。

「どっちが本当なのかは置いておいて……それは間違いなく、君の恋人だ。本人の肯定ももらっている。あの学園内で起きた事件の裏についてもね」

「……裏、だと？」

「生徒の立て篭もりっていうのは、表向き。事実としてあったのは、完全にこっち向きの事件さ。しかも、降魔庁の処理付き」

「ちょっと待て、三ヶ月前だろ？　そんな話、聞いたこと……」

「それを言うなら、俺たちが追っている二十年前のこともだ。……降魔庁の黒くなっていくばかりだね」

二十年前を始めに十四年続いた悪夢。

そして、更には近年のうちに起きた二つの事件。

降魔庁がそこまで執拗に隠したがる理由は何なのか。

そして、そこにどうして千夜が拘わっているのか。

「その様子だと……本当に、何も知らなかったんだね」

哀れむような渚の声が決定打だった。

自然と顔が俯く形になる。

自分がいかに蚊帳の外に置かれていたか。

何も知らずに時間だけを消費していたか。

そして、それは今も続いていることを蒼助は思い知った。

「……なら、多分これもそうだと思うから言うけど。
――――――神崎陵は生きているよ」
「っ！」
「しかも……俺たちが戦ったアレは、【偽者】だってさ。本物は、この都市の何処かでその様を高みの見物していたってことに……なるね」

神崎は死んだ、と千夜から聞かれた夜。
それで全てが終わったとは思ってはいなかった。
だが、それすらもまだ終わっていなかったというのか。

「この前の君のところの火事の件も、神崎の仕業だ。……今朝の、新條さんの件も」
「何でっ……一般人の久留美がどうして」
「……共通点なら、あるだろ？」

知っているくせに、とでも言いたげな促しだ。
見据えられると同時に、蒼助はズクンッと心臓を揺さぶるほどの重い何かが内側に居座わり込む衝撃を感じた。

共通点。そこに当てはまる人物の残像だ。

「……千夜が、そうだっていうのか？」
「そうだよ。君も、新條久留美も……――――――彼女が関わったから狙われたんだ」

その言葉を聞いた途端、意識から何かが吹き飛んだ。

せめて、『が』ではなく『に』であったら、まだ踏みとどまれた

かもしれない。

それがトぶ寸前に思ったことだった。

だが、もう遅い。

目の前の友人は、発射スイッチを押してしまった。

抑止も制止にもならなくなった理性が客観的視点でそう思う中、

野放しとなった本能は身体にＧＯサインを連打し、

「――――っ、ふぶ」

従って振りかぶった腕は、その狙いを外すことなく渚の頬を横殴りした。

噴き出すような呻きと共に衝撃の向きへ崩れかける。

しかし、それを許さず蒼助は胸倉を掴んで引き戻した。本来あった位置を過ぎて引き上げられる形になるまで。

タッパのある蒼助よりも身長の低い渚は、因って胸から吊り上げられるような形になった。

「い、きなり……過ぎる、ん……じゃない？　つか、速、す……っっ」

戯言は締め上げて黙らせた。

この期に及んで不要な言葉は聞きたくない。欲しいのは、そんなものじゃない。

「……あいつは、何処だ」

「しら、ない」
「会ったんだろ？　その後、どうした。それぐらいはわかるだろ」
「……」
「ほら、言えよ。触られたら痛まねぇはずがない過去をザクザク堀まくった女を、そのあとどうしたかを……よ」

地面から浮きかけた身体をガクガクと揺さぶる。
苦しそうな渚の顔など、見えていても気にはならなかった。
それどころか凶暴な部分にエンジンがかかり始める。

それほど前ではない頃、一度は戦線を共にした仲間というべき人間だ。
だが、そんな値札は今の蒼助を抑える鎖にはならない。
そして、その事実は同時に理解も促した。

結局、【コレ】はその程度の存在だったのだ。
三途が言っていた言葉を思い出す。少し前、彼女に殺される間際に言われた言葉だ。

一番とそれ以下の数字。
どちらか一方を取ることを迫られれば、どちらか。
考えることなど、馬鹿らしい。躊躇もいらない簡単な問題だった。

今となっては、三途のあの時の選択には賛辞を送る。殺されかけた身でありながら、その決断に好意すら持てる。
来るまでの人生で培った判断基準なのだろう。経験と反省を重ね、そうすることにしたのだろう。

だが、自分は違う。蒼助は、確かな実感を手に感じつつ思った。
友人も仲間もそれなりに大事だった。

そのはずだった。

しかし、己の世界は確立してしまった。

何処に立って、何を見て、何を中心に動けばいいかを理解し、納得してしまった。

「――――――言えっつってんだよ」

声は自分でも聞いたことは無いほど冷静を超えて冷徹なまでに冷えていた。

今まで憤ると、あれほど声を荒げていたのに。これでは、あの気の合わない誰かさんのようだ。

これが、自分の憤怒なのか。

本当に臨界点に達した時、こんなにも冷静に容赦を見失うのか。

友人を、こんな風に感慨も無く痛めつけようと思うようになるのか。

渚はまだ吐かない。

こんなことをしている場合ではないというのに。必要なことを聞いて、早く行かなければならないのに。

締め上げるだけ足らないのなら、直接首を絞めてやろうか。

喉を潰さねぇように気ぃつけないとな、と思考は確実性と酷薄を追求していく。

その時。

「っ……わかっ、た……話すっ……か、ら」

観念した、と渚がパシパシと襟元を締め上げる手を叩く。
危うい一線を越える前に、理性が僅かに重さを取り戻した。
従って蒼助が圧していた手を離すと、渚の身体はどさりとその場に崩れ落ちた。

「げほっ、げ、ふっ……っ」

酸素補給に取り込む空気を喉につっかえ、咳き込む。
前屈みに両手をついて、乱された息を整える渚を待った。

「は、ぁ……はぁ……。……彼女に接触した目的は二つ。彼女が何者なのかを確かめること……そして――――神崎に対する共闘を持ちかけに」
「……共闘？」
「彼女は神崎の生存を既に認知していて……おそらく単独で追っていたはずだ。しかも、神崎の方も理由は不明だけど彼女に異常なまでの執着を向けている。だから……」
「……つまり、囮に使おうとしたってことか。神崎を誘き出すために」

無言。
肯定であると察した蒼助はもう一発殴りたいと疼く拳を宥める。
まだだ、と。まだ聞きたいことは残っている。

「……その皮肉った解釈は彼女にも言われたよ。……それが事実で

あることには変わりないから、反論はしないけどね」
「それで……あいつはどう答えた？」
まさか、応じたのか。
そうだというのなら、行方を眩ませること至る理由は何なのか。
まず最初に疑念は、次の瞬間に渚によって晴らされる。
「こっぴどく振られたよ。こっちの協力要請をボランティアのつもりかって、ね。交渉は決裂……ただで帰れるわけなんてなかったから、交戦に持ち込んだ」
「……」
渚がいて、千夜がいない。
目の前の現実に、一度は切れて結び直された理性が再び引き千切らんばかりに張りつめていく。
本能が促す引く力を抑えるべく、蒼助は拳を握り締めた。掌に爪の食い込む痛みが、なんとか相殺の効果を生んでいた。
「結果は……惨敗の二乗ってところかな。俺の。……実力面でも精神面でもボコボコにされちゃった」
張り詰めていた琴線が緩むと同時に、蒼助は小さく一息吐いて力を抜いた。
しかし、それも一瞬のことだった。
「だけど、その負けは無駄にはならなかった。その直後だよ。……【あいつ】は現れたのは」
「……神崎」

「実際に接触して、彼女に言われた罵詈雑言が……全部事実だって、実感させられた。あいつは……ヤバいよ。実体じゃなかったけど……それだけでも、あの迫力満点だった偽者とはまるで桁違いだ。結界を侵食された時、あいつの瘴気が身体に流れ込んで来て……」

最後の方で、声が小さくなっていった。

それだけではなく、見れば地に付いた手が小刻みに震えている。

その【侵食】とやらを受けた恐怖が、一夜明けた後も離れず残っているのか。

「その場に居合わせてわかったけど……あいつの終夜千夜に対する執着は狂気の沙汰だ。あいつのイタイ妄想の中では、彼女の御主人様ってことになってる。……よくわからないけど、彼女が”澱”の住人であることに異常なまでにこだわっている。その本来の在り方をぶれさせる存在として、当初は君が狙われていた……けど、昨日それが一変した」

「……どういうことだ」

「標的を変えたんだ。やつの中で、【自分の女】を日常に浸らせて毒している人間は、君ではないという考えに変化が現れた。……それが、今朝の有様さ」

「……久留美が、駆逐する標的になったのか？」

「昨日の行動がきっかけとなったのか、それとも前から君の次点に位置されていたのか……どっちにしろ、神崎は終夜千夜に悪影響を与える存在として、新條久留美を排除対象に定めた。そして、新條家が襲われた」

「……その場に、久留美はいなかったのか？」

一昨日から久留美と千夜は行動を共にしている。

だが、昨日久留美が襲われたのは自宅で家族と共にだ。

「遠くから様子は見てただけから、どういう理由があったかは知らないけど……途中でなんか仲違いしたみたいで、二人は昼間別れたんだ。けど、終夜千夜が無事を確認するために電話をかけた時は、まだ家にはついていなかったみたいだ。……彼女は、家への到着を防ぐ為に、新條さんのもとへ向かった。……間に合った、というべきかは、なんともって感じだけど」

「あいつは久留美の家に行ったんだな？　久留美が生き残ったのは……」

「そういう意味では、無事に間に合ったんだろうね。……多分」

だが、惨劇を防ぐという意味では間に合わなかった。

その後日である今日は、それを意味していた。

「……俺が知っていることと、予測できるのはここまで。彼女は一人で新條さんの家へ向かった。俺は……瘴気にヤられて暫く動けなくなって、途中リタイア。そのあと、彼女が何処へ行ったかは……知らないよ」

「……本当、なんだな？」

「本当、だよ」

両手をつく位置を後ろに下げ、顔を上げる渚。

見上げる視線をかち合い、しばしそのままになった。

「……わかった」

零した一言が、沈黙の幕となった。

蒼助は座り込む渚に背を向け、出口へ向かうが、

「何処に行くの？」
「……あいつを探しに行く」
「当ても無いのに？　……しかも、君に大事なことをたくさん隠して……たくさん嘘をついていた相手だよ」

渚の言葉に、一度足を止めた。
振り向かないまま、

「……だから何だ。他人の口から聞いて済ませて納得しろって？……俺は、あいつの口からまだ何も聞いていない。だから、聞きに行く。……何かおかしいかよ」
「おかしいっていったらおかしい、かな。……というか、変わったね。以前の君は、面倒なことはお金でも付いてこなきゃ仕事だって請けなかった」

言われなくてもわかっている。
それが、今じゃ自分から全速力で飛び込もうとしている始末だ。
それも超ド級の災厄に。

どうかしている。
だが、どうだっていい。

吐き捨てるように思い、蒼助は前進を再開しようとする。
その前に、

「……ねぇ、行く前に一個訂正させてよ」

何だ、と口にはせず、進行の停止で示す。

それを聞く体勢ととったのか渚は、

「さっき、君の恋人が全部悪いみたいな言い方をして……ごめんね」

「……」

「彼女は、君にも拒絶した？」

「……ああ。散々こっち来んなってな。おかげでオトすのに、苦労した」

そうなんだ、と背後の渚が苦笑した気配を感じる。

「本性剥き出しの状態で対峙した時は、詰るわ侮るわ小馬鹿にするわで腹立ちまくりだったけど……今思うと、悪いヒトじゃないよね。あのヒト」

なんか似てるし。

そうして独白のような言葉は、ぽつりぽつりと続き、

「……【生きる】のが下手なだけなんだな、きっと。なんとかしてやんなよ、蒼助くん」

「さっきから、何言ってんだかわかんねぇが……」

理解をする気はないとばかりに、溜息。

そして、この場で口にする最後の言葉を紡いだ。

「言われんでもするっての」

言葉に対し、渚がどんな表情を返したかも確認せず、蒼助は今度こそ屋上を後にした。

振り返る気も、ここにこれ以上留まる気も毛頭ない。
心を占め、突き動かす存在は、ただ一人だった。

◆◆◆◆◆◆

慌しい様子で帰ってきた蒼助を、驚いた様子で出迎えたのは留守を頼んで置いた朱里だった。

「蒼助？」

ただいまの挨拶もなしに朱里を通り過ぎ、寝室に飛び込むなり制服を脱ぎ出す。
無視された朱里は、取り付く島も無くただその様子を何か言いたげに傍観する。

制服を全て放り捨て、私服へと着替えた蒼助は、ジャケットに腕を通したところでようやく、

「朱里」
「ぇっ……」

もう一度声を掛けようとしたところを先手を打たれた朱里は、出鼻を挫かれたことにより小さく悲鳴のような声を漏らした。
【お前】や【ユキウサギ】ではなく、初めて名前を呼ばれたことによる驚きも大きかった。

蒼助はジャケットを身にまとうと、帰宅してから初めて朱里に向き合う。

「これからちょっくらお前の姉ちゃん探しに行ってくる。なんかあったら、連絡入れるからお前は家で待ってろよ」
「……」
「腹減ったら、下崎さんのところ行け。ついでに、そのまんまそこで姉ちゃん待っとけ」

蒼助は膝を折り、朱里の目線に合わせた。
腰までしかない朱里との目線は、座り込んだ体勢でようやく一致し、

「……必ず、連れ戻してくるから。イイコにしてろよ」

ポン、と朱里の頭を撫でる。
細く白い長髪は、いつものツーテールにはなっておらず、地面に下っている。
その姿に、蒼助はここにはいない人間を重ねて見たのを最後にして、立ち上がる。

「じゃ、行ってくるわ」

握り締める手には、鍵。あの火事の後、唯一無事だった蒼助の単車のものだ。
朱里を背に置いて、家を出ようとする。

そこに、

「そ……蒼助っ！」

張り上げられた引き止める声に、蒼助は振り返った。
振り向かれた朱里は、何かを言い籠もるように「あ、ぅ、え、と」と言葉の成り損ないを零し、目を泳がせる。

「き……気を、つけて……ね」

一瞬、目を丸くする蒼助。
それは、了解を表すように笑みとして細まり、

「行ってくる」

再度言い直して、蒼助は玄関のドアの開閉音が響く間を縫うように出て行った。
数分前にように再び一人になった朱里は、蒼助が出て行く姿を見送った後、項垂れて溜息を一つ漏らした。
きゅ、と下唇を噛むと、顔を上げてソファとテレビの間に置かれたテーブルの前に立つ。
その上にある携帯電話を手に取った。
徐に画面を開くと、つるんとした爪がつくひとさし指をある意図を持って動かした。

開いたのは、履歴。

そこから選び取り――――――

「……もしもし、私だよ。――――――――姉さん」

［壱百参拾参］　虚像の追跡（後書き）

お久しぶりです。
一ヶ月も放置した不届きものです。
プロットが予想以上に苦痛で、進行速度がドン亀状態になってしまいました。出来上がっても薄いあの達成感のなさときたら……（溜息）

新キャラ、久留美叔父。久留美が嫌いな人はこっちを気に入るのではないかと予想中。中身正反対なので。

蒼助暴走。プロットじゃここまで過激じゃなかったのに。傍から見たら婦女暴行。大変だ。

密通者・朱里。多少懐いたとはいえ、優先順位は不動。詰めが甘いぜ、蒼助。

次回はちょっと中心を外れて、外部からの視点として久留美叔父のターン。あの偉い人も出てきます。

［壱百参拾四］　外側の視点（1）

「――――新條久留美さんですか？　５０２室でございますが、只今面会謝絶となっておりますので、入室は控えていただきます」

【姪】が運び込まれたという病院に訪れ、部屋を聞いて帰ってきた返事に【新條】――――――【新條亜樹斗（しんじょうあきと）】は面食らった。

面会謝絶。

身内であると最初に言ったはずだったのにも関わらず、そう返された。

「あの……ここは完全看護なんですか？」

「お控え願いします」

噛み合わない返しに、亜樹斗は舌を巻いた。

相手との間には会話を遮る【壁】がある。

それを感じ、察した亜樹斗は観念し、

「……わかりました。どうも、ありがとうございました」

「申し訳ございません」

くるり、と背を向けて、歩きながら亜樹斗は溜息をこぼした。

やっぱりそういうことなのかねぇ――――――と。

さてどうする。

待合席に腰を下ろして、亜樹斗は次の行動について考える。
その片手間に、周りをぐるりと見回した。

周りの患者や見舞い客、来院者は、それぞれが各々の行動に勤しんでいる。
入院患者同士の会話。
何かを患って診察を待つ者。
一見として誰もが穏やかな様子で、亜樹斗の周囲を取り巻く背景となっていた。

誰も知らず、気づいていないのだろうか。
昨夜起き、今朝の食卓にニュースとして報道された猟奇殺人事件を生き残った少女が、この病院に搬送されたことなど。

『どんな事件が起きようと、所詮テレビで流されることなんて他人事なのよね。実際に事件の起きた現場で生々しい現実見てる叔父さんとしては、たまったもんじゃないわねぇ』

まったくだよ、とかつて姪の言葉にその場で返した相槌を、この場で再び思う。
皮肉にも、脳裏の言葉の主が己の台詞どおりに片付けられる渦中に陥り、そうなって思うことになるとは、あの時は想像もしていなかった。

「たまったもんじゃ、ねぇ……」

手で両手を覆って呟いた声は、誰の耳にも聞き留められることは

ない。
一種の非情な現実は、仕事の中で慣れたと思っていた亜樹斗の心に、それでもズシリと重くのしかかった。

その時、

「――――アキ、叔父さん？」

疑念を含んだ声は、己の目の前からかけられた。
声に覚えがあると感じた耳に従って、亜樹斗は手を退かして顔を上げた。
そこには、もう一人の自分の姪――――新條香奈枝の姿があった。

◆◆◆◆◆◆

この姪――――香奈枝と最後に顔をあわせたのは、彼女が大学を退学する寸前の時だった。小さい頃は構ってやったりしたが、中学、

高校と成長していくにつれて父親である長兄の熱心な教育方針が影響してか、優等生タイプとなって成長していき、たまに会っても昔のようには接することが無くなった。
最後に会った時、何故か「私、無償の奉仕者になるの！」とわけのわからない報告をしに来て、その後長兄が倒れたことを知った。

「……しばらくぶりだな」
「はい、ご無沙汰しています」
「アレ以来、新年会にも忘年会の集まりにも来なくなったからなぁ……。兄貴……親父さんとは、その後どうなんだ？」
「……今朝の、ことで……電話をもらいました」
「……そうか」

食い違って以来、噛み合わないままだった親子を結びつかせたのは、互いの共通間で起きた惨劇。
本来あるべき和解のきっかけとは、程遠い。

「仕事は、大丈夫なのか？」
「夕方までには帰ります。それまではって、チーフに任せてきました。少しでも……くーちゃんの様子を確認したくて」
「面会謝絶だと。ここは、完全看護だから……世話もいらないとさ」
「そう、ですか……」

隣に腰掛ける香奈枝の腕には、来る途中で買ってきたであろう花束が抱えられていた。
しかし、送り手を見失った今は、その鮮やかな色も若干褪せているように亜樹斗には見えた。

「……」

気まずい。
約二年ぶりの久々の逢瀬。
話題になるものが無いわけではないが、この場に出すにふさわしいことがどうかはわからない。
というより、この場は盛り上がる空気ではない。
だからといって、このまま何もないままでは気まずさは増していくだけ。

いっそ帰るか、と亜樹斗が最終手段を講じようと考えた時、

「……私、昨日くーちゃんに会ったんです」
「っ、昨日？」

突然、香奈枝は懺悔のように衝撃をこの場に零した。

「……バイトの子が、急なキャンセルを当日に言い渡してきて……それで、くーちゃんに助っ人をお願いしたんです。友達と出かける予定だからイヤだって、断られたんですけど……どうしてもって無理言って午前中だけ出てもらったんです」

そしたら、とそこから僅かに声に張りが出て、

「くーちゃん、そのお友達を連れてきたんです。……すっごく綺麗な子で、ユーモアのある面白い子で……新しい奴隷さんなの？とか、思わずからかっちゃったんですけど……本当に、友達だったんだと思います。くーちゃんは憎まれ口叩いてたけど……あの子、素直じゃないから。だって、あんなに楽しそうにしてるとこ……見たことなかった」
「……」
「な、のに……っ……どうして、こんな……っ理不尽なことが、

あるんですか……っ」

声に涙が滲む。

やがて、言葉はただの嗚咽に変わった。

どうしようもない沈黙に、亜樹斗は逃亡という最終手段すら絶たれた。

泣き出した女を置いて一人だけ帰れるほど、新條亜樹斗という男はロクデナシではなかった。

とんだ拷問だ、と己の左から聞こえてくる泣き声に左耳を苛まれるのをそれでも耐える。

「どうして、くーちゃんなんですかっ……どうし、て……。……いたずらが過ぎる子だったけど……困った趣味を持ってたけど……こんな目に合わなきゃならないような、悪いことなんか……していないのにっ！」

「……そうだな」

いたずらが過ぎる点は、否めなかった。

だが、普通の少女だった。何処か大人びた冷めた一面を持ち合わせていたが、自分というものがまだ安定しない時期ゆえに実の親とすれ違うなど、何処にでもいるありふれた年頃の娘に違いは無かった。

それが亜樹斗の姪――――新條久留美という少女だった。

そして、殺された両親も同様だった。

父親は、亜樹斗自身の実の兄だ。次男という立場から要領の良さが目立つ男で、それゆえか柔軟な姿勢と思考を持つ男だった。刑事になりたいのだと己の将来を打ち明けた時、いい顔をしなかった両親と猛反対した長兄を前に竦んだ亜樹斗を、唯一味方となって弁護

してくれて、行って来いとこの道に背中を押し出した。
母親は、しっかり者だったが柔らかい思考を夫と共通させる義姉だった。結局、親の反対を振り切る勢いで刑事という仕事に就いて家も出た亜樹斗が、慣れない新生活に生活バランスを崩させる得なくなったところを見かねて何度も夕飯に招いてくれた。

他人を茶化すのが三度の飯よりも好き、という困った面もあったが、何処にでもある普通の家庭だった。普通の家族だった。普通の親子だった。

しかし、今はもう無い。
昨日までは確かに存在していたであろうものは、今日という日には存在していない。
在るのは、【壊れてしまった】という事実と、この病院の何処かに保護されているはずの、生き残ったその片割れだけだ。

「……とりあえず、こんなところで愚痴をこぼしあってもしょうがいないだろ。一旦帰れ。面会できるようになったら、お前のところに真っ先に行くように頼んどくから」
「おじ、さん……は？」
「俺は暇つぶしにもうちょっと、な。今回の事件で、署が騒がしくってよ……いると邪魔になるって忙しい連中に睨まれるんでな」
「……担当に、就かせてもらえなかったんですか？」

何処か縋るような言葉に、亜樹斗はその意図がどういったものなのかを理解するのに時間はいらなかった。

可愛がっていた従妹の無念を晴らしたくとも、自分ではそれは正当化してもらえない。何より無力である。
だからこそ、その権利を許された存在である刑事の亜樹斗に犯人

の逮捕と裁きを託そうと思っていた。そんなところだろう。

「……本庁に持ってかれちまったよ。ひょっとしたら、少し前まで渋谷で連発してた猟奇殺人と共通かもしれないっていうんでな。デカい事件は、所轄には任せておけんとさ」

「あの、事件に……？」

さっと青ざめる香奈枝の反応に、無理もないと思う。

彼女にとっても他人事であったことが、身近の人間に降りかかった可能性があるのだ。ニュースを見ているのなら、それがどれだけ残虐な殺された方をしていたかを耳にしているはずだ。

「ニュースで散々騒いでいましたけど……まさか、本当に？」

「……多分な。これぐらいしてくれよ。これ以上は情報漏洩になるから」

「ぁっ……すみません」

ハッとした表情は、すぐに気落ちしたそれへと沈むように変わった。

謝ることではなかった。

寧ろ、謝るのは自分の方だと、亜樹斗は口にはしないが内心にその想いを満たした。

無念を託すことすら、許してやれないのだから。

「まぁ、しかし……本庁が総動員してかかってるんだ。この事件は、解決する。きっと」

「……そう、ですよね」

言葉を紡ぐ傍らで、しょうもない気休めだな、と自分の言葉選び

のセンスのなさを失望した。
だが、これ以外に思いつかない。
己以上に何をできないことを定義付けられた姪を、慰めてやれる言葉は。

「それじゃぁ……失礼します」
「ああ」

一礼して去っていく香奈枝の後ろ姿を亜樹斗は見送る。
次に会うのは、通夜か葬式の時だろう。
その時までに事件が何処まで進んでいるかは、見当もつかないが。
ただ無心にその背中が小さくなっていく様を見つめていた亜樹斗の脳裏に、不意に浮かび上がる言葉があった。

「……理不尽、か」

先程、香奈枝が連ね零した言葉の中の一部として出てきた言葉だ。
香奈枝自身には、今回の事件はどうして自分の従妹が巻き込まれなければならなかったのか、と納得し難い部分が大きいのだろう。
無差別なら誰だってよかったはずだ。
なのに、どうして久留美を選んだのか――――と。

香奈枝の言い分は正しい。
悲劇をこうむった際には、誰もが思うことだ。
これも一つの正論の形である。

だが、思い起こすのはそれを否定した人間の言葉だった。
そんな奇異な人間に亜樹斗はかつて出会った。

確かアレは、香奈枝と同じことを自分が言った時だ。
香奈枝と同じように、自身のことではなく他人の不幸に対し憤ったのだ。

その時の相手の反応は、忘れるはずも無い。
まさかの返しだった。

『理不尽？　何が、理不尽ですって？　貴方は知らないのね。――――この世に、理不尽なことなんて何一つ無いのに』

こちらを嘲るようだった。
或いは、諭していたのかもしれない。
どちらにしろ、【彼女】は自分の言葉を否定した。

『ある意味では、平等ですらあるのよ。貴方は、どうして私だけがこんな目に合わなきゃならない、と――――言ったわね。別に、たいした理由はないのよ。道端で落ちている百円玉を拾うのは誰かってくらいのことなの。ふとしたきっかけで、それが偶々私だっただけ。何かの拍子で私ではない誰かが、私の立場にたって同じ目にあっていたかもしれない。世の中に、【絶対】なんてない。そんなものは、存在しない。必然もない。私でなければならなかった、なんて……決定的なものは無いのよ。そんな何時何処で何が誰に起こるかわからない不確定で不安定な世界で、私は生きているの。……だ

から、私は私を悲観しない。そんな必要は無い。……貴方が、私を哀れむ必要も無い』

他人からの慰めを、あれ程シビアに容赦なく徹底的に切り捨てた台詞は、己の人生の中でもう巡り会うことはないだろう。

しかし、【彼女】は間違いなく、誰よりも【被害者】だった。
悲劇ぶっているなどという嫌味の類が付け入る隙も無いほどに。

あの時は、彼女の言い分が理解できず、ただ呆然とするだけだった。
拘わるにつれて、己の中で増していく【彼女】という存在を知るまでは。

……君は、強かった。

悲観は自分への甘えだと言わんばかりに、【彼女】は自分を省みることの無い女性だった。
君にはそれぐらい許されてもいいのに、とそんな【彼女】から目を離せなくなっていったのはいつかの自分だ。

しかし、と思う。
【彼女】の言い分は、実際のところ正しかった。
だが、その現実を受け入れることができるのは、僅かというほどにも届かない少数だ。

……誰もかれもが、君のように強いわけじゃない。

比べるようなことではないが、こうしてあの時の【彼女】と似たような状況が出来上がっていると、無意識に隣に並べてしまう。

……あー、まただ。

【彼女】を思いだすのは、いつでも何かと比較する時に決まっている。

この年まで一人身なのもそれが原因だ。

紹介、或いは出会う女に対して引き出すのは、記憶の中の【彼女】だ。

どんな女と出会おうとも。

誰もが賛辞するような極上の女を眺めても。

親戚から紹介で、見合いをしても。

【彼女】には劣る。

そう感じるのは、亜樹斗の心だった。

……こんなこと、考えている場合じゃないっつーのに。

肉親が死に、姪が地獄を見た。

こんな状況で、過去の未練に浸っている自分は、とんでもなく不謹慎だろう。

己の姪と【彼女】を無意識のうちに比較していた思考を、馬鹿なことを考えているんじゃないと叱咤して打ち切る。
さてどうする、と無理矢理切り替えようとしたところ、

「っ、？」

突然ロビーで響くランボーのテーマ曲。
ズボンのポケットの中で、着信を知らせる亜樹斗の携帯電話だった。
げ、と慌ててズボンから抜き取ろうとするが、焦りが単純な行動を手間取らせる。

その合間にも突き刺さる周囲の責める意を含んだ視線。
四方八方から受けた亜樹斗は不意に合った一つの視線に、一気に体温が下がるのを錯覚した。

視線の主は、先程対応した受付の看護婦。
彼女は笑顔だった。
完璧な笑顔。しかし、何故か首筋がピリピリする。
何も言わない。しかし、それが無言の威圧感であることを本能が察する。

先が立たなかった亜樹斗の予定は、強制的に決まる。

「しっ……失礼っ！」

そして、風になった。

◆◆◆◆◆◆

ひとまず病院を出た。

安全領域に入ったか、と自動ドアを通り抜けて、玄関の外で止まり一息。

そして、鳴り続ける携帯電話を開き、

「……はい、新條です」

『もしもし、牧原です。先輩、随分長かったですね』

「ったりめぇだ……てめぇ、病院にいくって直前に言ったの忘れたのかオイ」

『ああ、そういえば……。すみません、失念していました』

ほとんど反省した様子は感じない。

棒読みにも程がある声色は、亜樹斗の文句よりも早く己の用件を先手として打ち、

『先輩。侘びに忠告しますので、許してください。……しばらくこっちに帰ってこない方がいいですよ』
「あ？」
それは一体どんな忠告なのか。
答えはすぐに返ってきた。
『あいつらが来たんです』
「……あいつら？」
『昨日話した話題の連中ですよ。――――――降魔庁です』
明確に定めたその言葉に、新條は一瞬思考が止まった。
『やって来るなり、こっちで採集した昨日の事件の資料全部持っていっちゃったんですよ。本庁の連中の抗議や文句は総無視です。おかげで、署は荒れて空気最悪な状態なんですよ。今帰ってくると意味も無く格好の憂さ晴らしの的にされますから、しばらくそっちの方で暇潰しでもしていた方が身のためで……』
後輩・牧原の声は途中で聞こえなくなった。
降魔庁。
その名称が、異常な速度で亜樹斗の思考を占めていく。
降魔庁が、今回の事件に介入してきた。
その事実が提示することは、二つ。
この事件は、やはり彼らの管轄内であるということ。
そして、もう一つ。
普段、隠密行動に徹する彼らが表に出てくるという【異常事態】。

二つの事項確認を終えた亜樹斗は、心臓が信じられないくらい大きく速く脈打っているのに気づいた。

動揺。
驚愕。
緊張。
三つの要素が、亜樹斗の心臓の脈拍を大いに乱す。

まさかという杞憂で済まないのでは、という予感。
否。予感は、既に更なる発展を遂げようとする予兆すら見せている。

『――――先輩……新條先輩。聞いてるんですか？』
「っ、ぁ？　……ああ、悪い」

ハッと我に返った亜樹斗は、後輩との回線がまだ繋がっていたことに気づいた。

『……姪御さんは、どうでしたか？』
「……いや、会えなかった。面会謝絶でな」
『そうですか。……しっかり、してくださいよ。ボケるには、早すぎますよ』

気遣っているつもりなのだろう。
だが、最後の一言が余計だ。

「どーも、アリガトよ。……そんじゃ、ご忠告に甘えてしばらくこっちの方をブラブラしてくから、そっちでなんかあったらまた連絡い――――――」

『……新條さん？　どうし――――』

向こうの声は突然途絶えた。
原因は、亜樹斗の携帯電話の充電切れを起こしたのだ。
ここ最近、充電に使う暇も気にすることすらなかったためだ。
だが、亜樹斗の言葉が途切れたのは携帯電話のせいではなかった。

目が乾き始めた。
しかし、見開いたままの目は一点を釘付けにしたまま閉じることも逸らすことも無い。

「――――……ん？　あんたは……」

目の前に向かう合う二人のうち一人が、亜樹斗に覚えのあるような反応を見せた。
亜樹斗には無い。

だが、彼らが身に付ける衣服で、彼らが何者なのかをすぐに理解することはできた。

――――黒いスーツ服。
後輩は、これを喪服のようだと言っていたのを亜樹斗は思い出し、感心した。
なかなかいい勘をしている。きっと、彼はこの仕事に向いている

だろう。

何故なら、少なくとも亜樹斗にとって、その黒ずくめの制服は不吉の象徴だった。

なにせ今だに街で黒い服を見かけると、反射的にビクつく癖が直っていない。

「ご、うま……」

降魔庁。

十八年前のあの日。

同じ衣服を着た者に付けられた腹部の傷跡が、服の下で久しく疼いた。

［壱百参拾四］　外側の視点（1）　（後書き）

外側の人・新條叔父のターンはあと二回くらい。
その後は久留美のターンです。コラコラ、トバせとか言わないで頼むから（懇願）
そこでようやく蒼助のターンです。いや、千夜か？

とりあえず、皆さんには落ちるとこまで落ちてもらう予定。
暗くて鬱な感じに。もう、とにかく後ろ向きに。
別に変な方向性に走っちゃってるわけではありませんのであしからず。

［壱百参拾伍］　外側の視点（2）

パチン。

頭の中で、トラウマのスイッチの入る音が聞こえたのは幻聴ではない。

黒い服。それは、十八年前に負った心と身体の傷を疼かせるキーアイテムだ。

それだけなら、まだ良かった。

黒い服だけなら、まだしも。

だが、今は――――――

「っ、っ、っ……っ」

いかん、と意識が己の状態がどうなっているかを確認する。

足が、手が――――――というか全身が震えていた。

無理も無い。

何故なら――――――どういう因果か、二度とお目にかかることなどなかったはずのトラウマの【元凶】が目の前にいるのだから。

「……あー、と……なんだっけ、な」

「総帥。彼は代々木警察署に所属する刑事、新條亜樹斗です。被害

者【新條久留美】の叔父であり、殺害された【新條波留夫】の実弟にあたる人物です。今朝、資料でお見せしたはずですが」

「あ、そういえば。特徴の無い面だから覚えにくいんだよな……」

何か失敬なことを言われた気がするが、そんなことを気にするほどの精神の余裕は亜樹斗にはなかった。

目の前の二人は若い男女だ。

だが、【あそこ】に年齢など関係ない。

所属する資格は、全員に共通するたった一つの【才能】だけでいいのだ。

異能という――――――常識の枠を取り外された力さえ、持ち合わせていれば。

「っぁ、……ぁ」

ダメだ。

どうにかなりそうだ。

自身で自覚していたよりも、トラウマは深刻な傷として残っていたらしい。

まさかの最悪の形で思い知ることとなった亜樹斗は、緊張と焦燥でガチガチに凝固した思考を無理矢理稼動させて、ようやく一つの打開策を産み落とす。

「ここにいるのは……姪っ子の見舞いに来たってところか。警察には、捜査に関する干渉

の差し押さえ出したしなぁ」

髪の長い男の方が何か言っている。

しかし、亜樹斗にそれを理解する余裕は無い。

昔の【古傷】が先程からずっと疼きっぱなしだ。

この場にあることを、心身共に全力拒否しているのだろう。

目の前にいる彼らは否が応にも存在を意識するしかなく、身体は恐怖に当てられて古江が止まらない。

このままでは、本気で気が狂いそうだ。

「……い、だ」

「ぅん？」

そうして我慢の限界に達し、ついに、

「ひっ、人違いだぁあああああああああああっ！！！」

ブチン、という理性の切断音と共に、亜樹斗は逃亡のスタートを切った。

無謀だった。

だが、身体は既に言うことを聞かず、逃げの体勢に入っていた。

体当たりするように男と女の間を突っ切り、そのまま全力疾走に突入した。

幸い上手くよけた為彼らにぶつかることはなかったが、

「――――”待てよ、新條亜樹斗”」

背後で男が焦りも怒気も含まず、無感情に口にした制止の声。
それが響いた途端、

「っ、――――――」

身体が、【待った】。
まるで、馬鹿正直に男の言葉に従うように。

「ぁ、あ……？」

何をした、と問おうにも首を後ろに向けることもできない。
指先、舌先すら何一つ。

自身の身に起きた異常に、目を白黒させる亜樹斗のその後ろで、

「……総帥。一般人に【言霊】を執行するのは……」
「普通に言ったって止まらねぇんだから、仕方ないだろ。まぁ、向こうさんはこれで言葉が理解できないほどパニくるような柔な精神じゃ――――――ねぇよなぁ？」

最後は、己へ向けられたものだと理解できた時点で、男の言うとおり亜樹斗にはまだ言葉を理解する程度の猶予はあった。
寧ろ、身に起きた出来事が亜樹斗を取り巻いていた恐怖を不思議と和らげるという結果となったのだ。

「とりあえず、あんたには用は無い。危害を加える気はねぇから安心しろ。今から言う言葉を聴いてくれたら、その縛りも解いてやるから。だから、そのまま聞け」

これは危害に入らんのか、という突っ込みは身動きの取れない身体では諦めるしかなかった。

だが、背後から敵意や悪意という不穏な空気は感じない。

だからといって気が抜けるわけではない。過去にやられたことがことなのだから。

是非もないこの状態では、相手の言うとおりにするしかなく、

「……なっ、ん……だ？」

「実は、俺たちはあんたの姪っ子に用があってここに来たんだ。あんたのことは事件の資料で知っていたが、ここで鉢合わせたのは想定外だ。……だがまぁ、これもなんかの縁ということでだな……」

胡散臭い言葉が連ねていく中で、それを断ち切ったのはその後に続いた――――――

「いっしょにどうだ？　調査ついでに会わせてやるよ――――――あんたの、姪に」

◆◆◆◆◆◆

【それ】に気づいたのは、受付を通り過ぎる際だった。

「おい、受付……」

「あー、いらんいらん。だって、この病院はうちの管理下にあるやつだし」

「……」

通り過ぎていく彼らに、看護婦は視線すら向けることは無い。

ついていく亜樹斗にすら、だ。

黙認しているというよりも、まるで、存在そのものに気づいていないかのようだ。

「そもそも、”視えてない”んだ。んなもんにイチイチ確認とるなんざ、手間だからな」

「み、えて……」

あ、と思うと同時に訪れたのは一瞬の追憶。

そこから拾うのは、記憶と共に刻まれた経験だ。

昔、同じような会話をした――――――という。

「……実際、どちらに属するかは関係ない。決定打となるのは、当人の意識とその順応力。たとえ、生まれた世界がそうであっても、そこに馴染み生きることへ抵抗があったり、存在する自意識が薄け

れば、その世界においてその存在は異物として扱われる。……そういうこと、だよな」

受付を通り過ぎ、廊下に入って間もなくしたところで呟いた言葉に、前方で歩いていた男が立ち止まった。そして、後方の亜樹斗に向けて上半身を捻り、

「へぇ、なかなか話せるじゃねぇかあんた。誰に教わったんだ？」

「……」

「……まぁ、別にいいがな。そうだ、その通り……ただ、違うのは双方の【世界】では異物への扱いが違うということだ」

「……日常（こっち）では、異物は常識の外側。つまり、あるはずのないものとして扱われる。存在しないはずの何かが、そう思っている側に認識されることは……ない」

「正解。逆に……非日常（こっち）では、異物は確かに異物であることに変わりないが、無視はされない。……そっちと違って生死に無事は付かないがな」

「日常の人間にとっては、異界ともいえる非日常（そっち）は【常識という結界】の外。常識の守りは、外には届かないから……か」

ひゅぅ、と男は軽く口笛を吹き、

「……誰だか知らんが、そういうのを一般人にもわかるように説明しておいてくれたことを感謝しておくとするか。更に……それに則ると、あんたは俺たちのそういう気配に呑まれている。だから、常識には認識されなかったのさ」

「……そう、だったな」

なんだかお浚いのようだな、と感じる心は、亜樹斗に異なる点を違和感で訴える。

相手が、【彼女】ではない、と。

「にしても……」

「……あ？」

男の見る目が何故か細められる。

それは、眼差しに込められた意を汲んで考えると、

「……なんで、そんな距離とって歩くんだよ。ここまで面倒くさいから突っ込まなかったけど、あんま離れると気づかれるんだぜ？」

呆れ、という感情を向けてくる男に言われた指摘。

事実であった。

しかも、目測する限りでも五メートルは開いている。

「……あー」

無意識ではない。

寧ろ、意識していたからこそこれほどの距離は開いているのだ。

言い淀む亜樹斗の様子を察しよく汲んだのか、男は、

「そんなにこの制服が怖いか。……世話かけたちまったなぁ。すまんね」

その言葉が、玄関前では流してしまった言葉を亜樹斗の脳裏に再度降りさせた。

「……あんた、総帥だって言ってたよな？」

「ああ。名乗るのが遅れたが……俺が、国家退魔機関【降魔庁】の現・総帥の蔵間恭一だ。以後、よろしく」

この縁の延長は、正直なところ是として頷けるものではなかった。

「……現・総帥って……」

「あんたをとんでもない目に合わせたキチガイ野郎の息子だよ。安心しな、アレはもうくたばってるから」

「――――総帥っ！」

隣を歩いていた部下と思わしき女が、大きく声を上げて蔵間という男に目を剥いた。

玄関先での蔵間の誘いにも驚く素振りを見せていたが、今度のものは異議を唱えているように見える。

当然の反応だろう。

この男がしていることは、組織の機密漏洩に他ならない。

しかし、部下の叱責にも大したことなさそうにして蔵間は、

「そう目くじらたてるなよ。この男には、あのクソナルシストの生死の確認を知る権利がある」

「しかし、一般人にそのような機密を……」

「これぐらい別になんてことねぇよ。……なぁ？」

向けられた視線に、亜樹斗は心臓を鷲掴みにされるような緊張感を感じた。

同意を求めるその眼差しは、声なくしても語りかけてくる。

お前は、もっと深いところまで知っているだろう、と。

自分という存在を見透かしているような目に、亜樹斗はかつて散々味わったイヤな気分というものを久々に掘り起こされたと感じた。

味あわせた存在は、二人。

一人は狂人。

もう一人は――――――

「……まぁ、とりあえずそのトラウマの元凶たる原点はもういねぇから……ひとまず安心しといてくれ」

「……ご親切にどうも」

とりあえず、亜樹斗の中で一つ決定したことがある。

この若き総帥もまた、まともな精神であること以外は大した根性悪であるのは同じということ。

そのことに対して、出来ればこれっきりの縁を願いたいという気持ちだった。

「着きました。ここです」

「はいよ」

着いた、と前方の蔵間たちが足を止めた場所を見て、亜樹斗は、

「……は？」

目を見張った。
たっぷりとした沈黙は躊躇の時間だった。
冗談何かなのだろう、という希望としての。

「……ここって……そこ、ただの【壁】……」
「そこにいちゃ視えねぇよ。ここ立ってみな」

招くように手を振る蔵間の提案に、それこそ亜樹斗は戸惑った。
何のための距離だったと思っているのか。
しかし、久留美に会うにはその導きを受けるしかない。

背に腹は換えられない。
苦渋の決断を下し、

「……わかった」

距離を縮めるべく、歩みを進める。
出来るだけ、彼らの制服を視界に入れないように目を逸らしながら。

蔵間の隣に立った際には、やはり脂汗と脈拍の異常は起き始めたが、

「……え」

目に映ったものに、それらを意識から外すことになった。
目の前。亜樹斗の視界が捉えたのは、

「……何で」

扉だ。

部屋と部屋の間の間隔として取られていた【壁】には、確かに扉があった。

無理して割り込んだ様子もなく、まるで最初からあったかのように。

ポカン、とする亜樹斗に理解を促す言葉はすぐさま隣から注がれる。

「結界さ。幻術も織り交ぜている特殊なタイプのな。こうして正面の向いて立つ場所以外は、全て死角になるようにしてるから、普通の人間はまず気づかない」

「何で、そんなもんをわざわざ」

「隠すためさ。あんたの姪を」

何で、と問う言葉が出るよりも早く、蔵間はドアノブを回した。

奥へ開く扉の向こうに――――――部屋が広がる。

そこには、

「入りな」

誘う言葉を聞き逃しそうになるほど、その光景は亜樹斗の思考を錆び付かせた。

一人のためだけに使われるであろう個室には、ベッドとその脇に

棚が一台。
そして、ベッドには一人の少女が寝かされていた。
「……くる、み」
呟いた言葉は、風が吹けば掻き消されそうなほどに儚い。そんな自覚を捉えるのは、亜樹斗の思考の何処かでまだ稼動する微かな理性だった。
よく見慣れていたはずの長い三つ編みは、今は見る影もなく解かれてシーツの上に広がっている。知的要素なの、と常に掛けていた伊達眼鏡もない。うっすらと開いた瞼の下の目は虚無そのもの。呼吸で息づく胸の微かな上下がなければ、人形と見違えたかもしれない。
だが、道理としては仕方ないことではないだろうか。
目の前にいる少女は、亜樹斗自身が良く知る破天荒な姪ではない。
両親を惨殺される陰惨な事件から、ただ孤独と共に一人遺された年端もいなかない少女だった。
「眠っているのか？」
「いえ、意識はあるようです。ただ、担当医師の話によると……肉体的損害はなかったようですが、精神的なものが」
「……両親を殺されたことによる過度なショックで……自閉状態真っ最中ってところか」
「いかがなさいますか」
「いや、逆に好都合だ。予定通りやってくれ」
「了解です」

己を置いて進む二人の会話に亜樹斗が気づいたのは、部下の女が久留美に近づいた時だった。

「っ、おい」

「落ち着け。調べるだけだ」

「調べるって……何を」

「決まっている。あんたの姪は、今回の事件の唯一の生き証人であり……目撃者でもある可能性があるんだからな」

「だからって……あんな状態の人間をどうするっていうんだっ」

「どうもしない。ただ、頭の中を覗かせてもらうだけだ」

「……頭の、中を……？」

不可解なことを口にする蔵間を不審の目つきで睨む間に、部下はベッドの上に寝かされている久留美のすぐ傍に立っていた。

その手が久留美に伸びるのを見て止めに入ろうと動き出す亜樹斗。

しかし、

「――――――【接触感応能力（サイコメトリー）】だ。頭かっさばくわけじゃねぇから、大人しくしてくれよ」

またしても蔵間の口から出た言葉によって、制される。

「サイコ……？」

「限定特化型異能の一つ。世間で言うところの――――――【超能力】ってやつだな」

超能力。

それを耳にした瞬間、亜樹斗の脳裏を過ぎる一瞬の記憶。

『――――うさんくさい言い方をすれば、超能力っていうんですって』

蔵間のそれに被さるように、記憶の中の【彼女】の言葉が亜樹斗の脳内に反響した。

「細かく分けるとまたいろいろあるんだが……こいつの場合は、物や記録をデータとして読み取ることが出来る。その異能（ちから）を使って、口の利けないあんたの姪から手かがりを引き出そうって腹積もりで俺たちは来たんだよ」

「……そう、か」

身を乗り出そうしていた身体を後退させ、亜樹斗は蔵間と隣接する位置に留まる。

その様子に、部下は安心して作業にかかれると思ったのか、安堵のように一息。

そして、二人に背を向けて、久留美の額に手を置くと目を閉じた。

「精神集中するかしないかで拾い落とすもんらしいから、あまり騒がないでくれよ」

「……わかった」

よし、と蔵間が満足げに頷いた矢先、

「そんじゃ、暇潰しになんか話そうぜ」

「……さっき、自分で」

「別に騒ぐわけじゃない。デカい声出して喚かなきゃ、向こうには聞こえねぇよ」

前言撤回もいいところの主張だ。しかし、それが正しいか悪いかなど、実情を知らない亜樹斗ははっきりと否定はできない。
ここは、好きにさせようと受け流すことを選択し、

「話す……って、俺とあんたで一体何を会話の肴にしようっていうんだ？」
「あるだろう。それこそ――――――目の前に」

顎で指し示した先には、記憶を探らされている久留美。
その意図に何が暗示されているのかを、亜樹斗はすぐに直感した。

「……さっきから妙に饒舌じゃないか。あんたらの組織は……所轄や本庁の人間には、相当つれなくしていると聞いているんだけどな」
「そりゃ、あんたが相手だからさ」
「……」
「オイオイ、深読みすんなよ。俺は、健全な性癖だぞー」

そういう意味じゃねぇよ、と言いたかったが、否定は相手にからかいの種を与えるだけであると己を抑え、

「……俺と他の何が違うって？」
「今更しらばっくれる意味なんてねぇと思うんだがね」
「どうとでも言え。俺は、もう……可能な限りあんたらと【そっちの世界】には関わりたくないんだ」

溜息と共に、吐き捨てる。
心の底から汲み上げた本音である。

「……それが、あんたを逃がしてくれた奴の……あんたに対して向

けた最後の願いだからか？」
「……」
「まぁ、いいけど。……ただ、さ」
つい、と横流しされた視線に亜樹斗は背筋を硬直させた。
まるで貫くように鋭いそれに。
「一度逃げられたくらいで、安心するのは早いぜ？　現にあんたは今……姪の不幸を通してこっち側に近づいちまってるんだからな」
突きつけられる現実に、亜樹斗は目を剥いた。
否定は出ない。出せない。
こちらの拒絶という壁をものともせずに突き抜けて、突きつけられた言葉は、拒否も受容も許さないほどに、ただ無慈悲に、一方的に突き刺さる。
胸に刺さった棘のような言葉を引き抜くこともできず、亜樹斗は黙するしかなかった。
「おい、どうだ。なんかわかったか？」
亜樹斗の沈黙の合間に、蔵間は意識を部下へと向けていた。
通常の音量よりもやや大きく発されている声は、精神集中している彼女の意識にも届くようにと配慮しているためだった。
「……精神的プロテクトが強くて、全ては読み取れません。おそらく、精神に受けたショックのせいだと思われます」
「読み取れた部分だけでいい。言え」
「しかし……」

ここでは、さすがに部下が粘った。
いくら何でも度を超している、と。

しかも相手は、一般人というだけではなく刑事。
あちこちで好き放題に捜査資料を掻っ攫っては、部外者立ち入り禁止を一点張りにしている降魔庁は、表の警察関連者にとっては根掘り葉掘りしたくて仕方ない不審者も同然の存在である。
いわば、降魔庁にとって頭の上を飛び回るやかましい蝿である世俗の組織枠に嵌る人間に、迂闊に重要機密を漏らして当たりかまわず言いふらされては困るというもの。

手に取るように、亜樹斗には部下の女の心中と言いたいことがわかった。
さすがにもうダメだろう、と亜樹斗は静かに部屋からの退出の申請を試みようとした時、

「――――――お前も、しつこいな」

突然、部屋の重力が変化した。
そんな錯覚が降りかかった。

ずどん、と突然身体に圧しかかる重力の強度が増した。
隣に立つ蔵間恭一の一声によって。

「うちの組織が秘密主義なのは、百も承知だ。お前なんぞに言われんでもわかってる。俺を誰だと思ってる？　誰だと思って、従っている？」
「……も、もうしわけ」
「あん？　何で謝るんだ？　お前は自分が間違ったこと言っているとわかっていながら、わざわざ言わんでもいいことを声にして俺に吹っかけたのか？」
「ぇ、……ぁ」
「いや、悪い。この場合、俺が悪いな……どう見ても。お前が言っていることは至極真っ当なことだ。正しいのは、お前だよ。ごめんな、物分りの悪い上司で」

途中から急に声が軽くなった。
だが、それが終わりではないのは、相変わらず続く威圧感で理性と本能は共に理解していた。

亜樹斗は、そんな重力付加を間近で感じながらも部下の方を見た。
戸惑っている。この若き統率者がこのような状態なるのを目にしたのは始めてなのだろう。
この【経験】に関する先達として、ここでホッとして気を抜いてはダメだ、と教えてやりたかった。

ここまではあくまで前振り。
ここからなのだ、と。

「……上に立つってのは、実際不便だなぁ。偉くなると自由に動いちゃいけねぇっていうんだから。どういう原理だろうな？」

「そ……それは、秀でた人間が司令塔となり、その下にいる人間をより良い方向に導くためです」
「ん、そうなの？　あ、何だ……お前わかってんじゃん」
その直後、一瞬の空白が開いた。
刹那と呼べる一秒にも到底足らない僅かな隙間。
来る、と経験を刻んだ本能が警鐘を鳴らす。
亜樹斗は、部下の女を見捨てて、自分一人だけでも身構えた。
そして、その時は――――――来た。
「――――――だったら、お前のいう秀でた俺の言うことに従え。違うのか、オイ」

声に圧力が舞い戻る。
寧ろ、倍増していた。もちろん、理由は――――――ここがフルターボをかける重要ポイントだからだ。

「もう一度言うぞ。んなこたぁ、言われんでもわかってる。わかっている上で、俺はそう判断したんだ。俺がそうする、と。俺が上にいる理由ってのは、俺の足元にいるお前らを導くためなんだろう？　わかってる。わかってるんだよ。なら、黙って導かれろ。俺の法（ルール）に従って――――――」

独裁者そのものの物言い。
それに対し、絶望に色づいた諦めを、亜樹斗は感じていた。

容姿を見ても、そうだとは気づかなかった。
しかし、似ていないな、と感じたつつも、それも段々薄まっていった。

部屋に入る前にあの視線を受けたあたりから、なんとなくこの第一印象は早々に切り捨てるべきあると考えに移ろい始めていた。

ああ納得、と亜樹斗は蔵間恭一という男に対しての認識を定めた。

過去の人物は、３６０度――――――あらゆる角度から見て評価されても、好意なんてものは抱かれるはずのない存在だった。

息子と称するこの男も、廊下で聞いた台詞を聞く限り、大勢の意見に対して右に同じと賛同していただろう。

だが、と一つ残念な事実を亜樹斗は呑み下す。

似ていないと見えて、息子もそれを心底願おうとも。

この男は――――――

「――――――黙って、いうこと聞け」

腐りきった外道と外見を除けば、父にそっくりの――――――独裁者だった。

――――――帰りたい。

姪には悪いと思いつつも、それが亜樹斗の本音だった。

［壱百参拾伍］　外側の視点（２）　（後書き）

蔵間、実は結構な暴君であることが発覚。
上に立つって大変なんですよ。保身に走る無能が多いから。そんな場合とちゃうのに。

次回で久留美叔父パートの終わり。

【壱百参拾六】　外側の視点（3）

「――――――新條久留美は、現場に残っていた残留思念から汲み取った記録と同じく、やはり両親の襲撃・殺害後に帰宅したようです」

結局、調査結果は亜樹斗という部外者を残したまま語られることとなった。

部下はもはや何も言わない。正確には、許されない。

独裁者としての一面を以って、権力と上下関係というものを全面に押し切ってきた最高権力者がいる。

次はないと思え。

そう伝えるのには、言葉もアイコンタクトも要らない。

何もなしに相手に本能的に悟らせた蔵間は、何事もなかったように今は穏やかな様子。既に好青年の皮を被り直している。

普段隠しているだけに敵に回すと奇人狂人モード丸出しだった父親以上に危ない奴かもしれない、と亜樹斗は静かに警戒を高めた。

「現場で拾った不確定要素に関する情報は？」

「はっ。……まず、元凶たる屍鬼の存在を確認。数は二体です」

屍鬼、と出た言葉の中にさりげなく置かれた一単語に、亜樹斗の【古傷】が微かに疼いた。

あの頃に負った【古傷】は、あの頃に拘わった非日常的な事柄を耳にすると痛むようになっていた。後遺症といえば、そのとおりだろう。

屍鬼。

脳裏に反復させた言葉はそのまま、形を成す。

人間の形をした化け物。

背中が薄ら寒くなるような赤く濁った目は、【彼女】の澄んでいたそれとはまた違う意味で忘れるに忘れられない。

あの怪物との遭遇が、亜樹斗に未知の異常世界に踏み込んでしまったという事実を知らしめたのだから。

「ふーん。それじゃぁ、これでホシの特定が出来たわけだ」

「それだけではありません」

「ほぉ？」

「如何せん完璧とは言い難くありますが……新條久留美の生存の証明が成り立ちました」

うん？と亜樹斗は部下の女が続けた言葉に突っかかりを感じた。

今、何かおかしなことを言わなかったか、と。

「……あのー、ちょっと失礼」

「んー？　何かね、立会人Ａさん」

呼ばれた呼称に言いたいことはあったが、切り捨てて、

「……今、何かわけのわからない発言が聞こえたんだが？」

「屍鬼のことか？　まさか、こっちに踏み込んでおきながら知らね

ぇとか言うんじゃ」
「いや、そうじゃなくて……」
言いよどむ理由がある。
こちらの聞き間違い、或いは捉え違いであれば無駄口を挟んだだけである。
いらぬ口を叩いたと、その後の空気が怖い。
蔵間はともかく、姪の傍に立つ部下の方の冷たい視線も含めて。
「ああ、気になったか？　――――あんたの姪が生きていることがおかしいってことが」
迷っていたら、蔵間がストレートに亜樹斗の言い分を言い切った。
しかも、肯定と共に。
「……どういう意味だ」
「そう怖い顔するなよ。別に悪い意味じゃない。単純に結果論だ。……普通に考えたら、新條久留美があの惨劇から生き残るのは――――むしろ、異常なんだ」
あの頃であれば、理性よりも本能が勝って殴りかかっていたかもしれない。
人間が年を取る事には意味があるのだな、と場違いな実感を得ながらも、亜樹斗は思考した。
久留美が生き残ったことが異常とは。
奇跡的と片付けるのは、無理があるのが現実。
ひょっとすると、彼らは――――

「……おたくは、何を調べているんだ？」
「……」
問いに対し、蔵間は何故か口端を吊り上げて笑った。
意味深だ。
「……この件に対するアプローチの方針を、変えるかどうかのターニングポイントをさ」
「まぎらわしい。はっきり言えよ」
「はいよ。とりあえず、新條久留美から引き上げようとしているのは……この異常を引き起こした原因だ」
大して改善された気がしないが、幾分理解は追いつく。
おそらく久留美個人の記憶という記録から、その異常の発端というものを見つけようというのだろう。
事件のたった一人の証人となる人間は、リアルタイムでその惨劇を体感していた。
個人の視界は小さくも、それでも生きる証拠を残しているはず。
何かを見ていたはず。
「とりあえず、あんたに確認作業させてやるよ。……聞けよ？　あんたの姪は、昨日の夜……どうしようもない絶望的状況にいたんだ。飢えた獣が四匹もいる檻の中に放り込まれたんだ。力も武器もないかよわいオンナノコが、どうやってそんなところで自分の命を守れると思う？」
「……そりゃ、確かに無――――――」
里、と最後のパーツは出てこない。

現れた新たな疑念が踏み潰して、先に出た。

「……待て、今……四人って言ったか？」

「数え方が間違ってるぜ？」

「どうでもいいっ！　おい、さっきあんたの部下は……”二体”と言っただろうが。何で増えてんだ」

「……ああ、何だ」

己を見つめる蔵間の目に、呆れの色が滲むのを亜樹斗は捉えた。

しかも、「やっぱり」という強調のオマケすらついて見える。

「忘れてんじゃんか。だから言ったのに……」

「何をだよっ！」

「――――屍鬼の連鎖サイクル。あんた、覚えてるか？」

連鎖、という言葉に亜樹斗は記憶を引き起こさせられる。

「……食った人間の屍鬼化」

「よしよし。そこから説明させられるなんてゴメンだったぜー。……そう、あんたの兄夫婦は屍鬼に食われた以上屍鬼化する。そして、案の定なった」

「だが、屍鬼化したら……」

「倒されたら、消滅する。だが、不完全なら別だ。……遺体を検死してみたら、判明した。もっとも……魂は持ってかれちまったみたいだけどな」

魂は、【親】ところへ収集された。

ギリギリのところでヒトとして、死ねたかもしれない。

だが、再び――――今度は完全なる怪物として復活させられる。

彼らがそうなる。
想像するだけでも、吐き気がした。

「……さて、ここまでで何かおかしいと思わないか？」
「、あ……？」

おかしなところ、と言われて思考。
思い当たるところは――――――とりあえず、無い。

「……おかしい、って、いうと」
「あるだろぉー？　あんたの姪っ子が、こうしてかろうじて生きていることを当然と証明するのには……なくてはならないものって何だよ？」

これ以上のヒントはなしだぜ、と念を押され、亜樹斗はそこからは自分で思考しなければならなくなった。

事件の最中、久留美は絶体絶命だった。
四体の屍鬼。しかもそのうち二体は彼女自身の両親。
化け物となったとはいえ、久留美に両親だったものへ立ち向かうことができただろうか。

可能性と考えても、あるか無いかでは無論――――――否だ。
亜樹斗にだって、きっと無理だ。

それを考慮しなくても、相手は人間の手に余る存在。現代における科学器具は武器として意味を成さず、銃すら効かない。
世俗という――――――退魔の業を背負う者たちの庇護下にある箱庭でぬくぬくと育った自分たち無能の人間には立ち向かう術はなく、彼らを前にしては皆等しく【餌】なのだ。

それが、亜樹斗が十八年前に訪れた一つの出会いから知ることとなった真実だった。

もはや亜樹斗には、久留美が生き残ったことへの疑問を抱くのに躊躇は無かった。

既に無知ではなく、あちら側の知識を多少なりとも持ち合わせているためだ。

よくも悪くも、亜樹斗は刑事としての本能をこれまでに育んでいた。

真実を求める探究心は、その瞬間彼を人間ではなく、『刑事』という別の生き物に変えてしまう。

【彼女】が今の自分を見たら、どう思うだろうか。

向いていないわね、と皮肉りながらも何処か褒めているようでもあったあの少女は。

罪悪感を象るように現れた【彼女】の残影は、すぐに打ち消えた。

己の記憶の中で留まる【彼女】と違い、自分は変わらずにいられなかった。

過去の存在となった【彼女】のようになれない。

自分は、過去(むかし)を立ち去り未来(さき)を迎え続けて――――――現在(いま)にいるのだから。

頭の中で再生される【彼女】の声を振り切り、亜樹斗は思考作業を続けた。

そして、その瞬間は不意に訪れた。

まるで道端の石に躓くように。

「……あ」

まず納得という形だった。

そして、それは疑問へと発展し、

「……そうだ、何で久留美は……」

「だよなぁ。文字通り四面楚歌だったはずの新條久留美には、生き残る術はなかった。なかったはずなのに――――――どうして、両親はバラバラにされてんだろうな？」

「ひょっとすると……その元凶の屍鬼二体も？」

「さて、ね。……どうなんだ？」

蔵間の視線と共に、亜樹斗は部下を見た。

二つの注目を受けた部下は、動じることも無く、

「……ジャミング領域に入る直前、彼女の目の前で切り刻まれています。それも、一瞬で」

「その執行者は？」

「彼女が視界に映す瞬間に、ジャミングが始まりました。あいにく、その姿を確認することは……」

「そうか。残念だな」

蔵間はさして残念そうな様子は見せずに頷いて、

「……まぁ、というわけだ」

言葉を再び亜樹斗に向ける。

「生き残った、はちょっと違うだろ？　正確には――――助けられたんだ。惨劇に介入した何者かによって」
「……あんたらは、そいつを」
「たった今、本格的に捜索対象に繰り上げさ。現場で検出された、第三の痕跡でな。……なぜか残留霊力の質が薄くて、その場でその存在を特定するには証拠不十分だった。そいつは、間違いなくもう一人の事件の目撃者だ。いや、ひょっとしたら……誰よりも重要参考人になるかもしれねぇな」
「どういうことだ？」
「どう考えたっておかしいだろ。何だってこいつはこの場に居合わせたんだ？　偶然？　まさか。こいつは、ここで何かが起こると断定的に予知していたはずだ。そうでない限り、この場を突き止めることなんぞ出来るわけがない。なにしろ、ウチでも感知できなかったんだからな」

世間に事件が表沙汰になっているのは、裏の手回しが遅れたから。
そして、気づく点はもう一つ。

「……この件も、例の連続猟奇殺人の」
「同一犯だ。今回は結果として間接的になったとはいえ、大本は間違いなく……な」

それに、と続いた言葉の先は、

「なんか、クサいんだよな。……今までの被害者は野外で襲撃を受けていた。それも、殺され方も今回は違う。猟奇的って点では同じだがな。……だが、それまで通り魔同然のやり方と違って、今回は自宅で襲われた。それも一家で、だ。更には、実行には駒を使って。手段、状況を考えると……今回は何かが違う。これまでの単なる領土拡大を狙った狩り……と片付けるには、些か浅慮過ぎる」

「……通り魔じゃ、ないってのか？」
「家の中狙う通り魔が何処にいるんだよ。通りがかりを襲うから、通り魔っつーんだろ？　……知ってるよな？　アパートから一軒家にかけて、東京の有人の建築物には、一つ残らず、【中から招かない限り、魔を進入させない術式】が仕掛けられている。わざわざ手間なことしなくても、外にはエサがわんさかいるんだ。どうして、わざわざ屋内にいる人間を狙う必要があった？」

それもそうだった。
猟奇の言葉に惑わされ、肝心なところを見落としていた。

『どうして、くーちゃんなんですかっ』

それは、久留美でなければ――――――あの一家でなければならない理由があったから。
偶然ではないというのなら、そういうことになる。

「……しかも、これまでの一連の連続事件には奇妙な点が付いて回ってる」
「奇妙な……？」
「魔性はな……普通は、俺たちには見つかりたくないんだよ。言わば、俺たちは奴らの天敵。手駒の屍鬼を増やすにしても、死体は食い残さない。だから、俺たちの管轄するものは表沙汰の事件として世間に漏れることは滅多にない。しかし、この一連の場合はまるで……」

――――――世間にわざわざ見せ付けている。

続く言葉は、亜樹斗にも想像できた。

「……挑戦状、みたいなものか」

口にするのも吐き気がするような言葉だ。

「或いは、自己顕示だな。降魔庁か……それとも、特定の誰かにか」

「誰かって……一体」

「わかりゃ、苦労しねぇよ……つっても、候補が上がっちまったがな」

それが久留美を助けたという人物であることは、聞かずとも察せた。

「……それじゃぁ、久留美は……っ、俺の姪は」

「巻き込まれたんだろうな。……何か、厄介なイザコザに知ってか知らずの内に」

他が助からず、久留美が助かった。

その分け目は『偶然』か『必然』であるか。

久留美は後者だった。

何かの拍子でこの事件の中核に触れてしまったのだ。

故に巻き込まれ、そして助かった。

コトの中心にあるもう一方の存在によって、迫る危機を感知されたから。

「一体……今、この東京（まち）で……何が起こっているんだ？」

「それも、このコを助けた奴に聞けばわかる……かもしれねぇな」

その時、

「――――お話しのところ申し訳ありませんが、総帥」

控えめに上がったのは、部下の声だ。

まさか懲りずにまた、と亜樹斗は冷や汗が出そうになったが、

「……先程の報告に、少々……付け足しが」

「ん？」

見れば、部下は再び久留美の額に手を置いていた。

蔵間と亜樹斗の会話をしている最中にも、彼女は調査を進めていたらしい。

地道な作業は、どうやら実りを見せたようで、

「……調査中、気になった箇所があったので念入りに見ていたのですが……プロテクトによるジャミングが混じり始めたところで、この少女が何かを繰り返し叫んでいます。呼びかけているようなので名前だと思われますが……」

その言葉に、亜樹斗は目の色を変えた。

それは蔵間の同様であった。

「聞き取れたか？」

「はい。なんとか」

言ってみろ、という蔵間の言葉に促され、

「――――……【かずや】。……総帥の推測にある【第三者】

を指していると思われます」

部下はその名を口にした。

◆◆◆◆◆◆

事件発生時にその場にいたという人物の名前を聞いて、蔵間は撤収を宣言した。

ここではこれ以上の収穫はないと判断した、とのことだった。

調査は蔵間のその言葉で切り上げとなり、自然と退室へと移行した。

よって、亜樹斗も共に病室を出て行くことを余儀なくされた。

彼らの退室は、同時に亜樹斗にもそれを意味する。

ベッドで横たわる久留美を最後に一度見て、亜樹斗は蔵間たちと共に病室を出た。

受付前まで戻ると、蔵間は部下に本部への報告を言付け、そこから別行動を匂わす言動をしていた。

その中で、何故か「学校」という言葉が出てきたので思わず聞く

と、

「ん？　俺、副業で高校の教師してんのよ」

耳を疑うことはこれまで何度もあったが、これほど自分の耳が使い物にならない粗悪品なのではないかと思いつめたのは久しぶりだった。

なんでまたそんなことを、と呟けば、

「上には上がいるんだよ。たかが組織一つのトップくらいじゃ、胡坐かいていられねぇのさ」

謙遜というよりは皮肉っているようだった。

話によると、今日は当直で放課後の教室点検などの役割を果たさなければならないという。世間で騒がれている猟奇事件を警察の手から取り上げ、一切を取り仕切らなければならないというのに、だ。

「俺の上にいる奴は、約束に厳しいやつでな。サボったら後が怖い」

少なくとも、この国の真の最高権力者に地位にいる存在にどんな上がいるというのか。

口にしかけたその言葉は寸でのところで飲み下して、臓腑に戻した。

無意識の好奇心で、【彼女】の労力を無駄にするのだけは避けたい。

「じゃぁ、俺はいくが……あんたも気をつけろよ」

「は？」

「言っただろ。――――――姪にばっか気をとられていると、そのうち足を掬われるぜ」

不吉な一言を残して、蔵間恭一は去っていった。
去り際に残していくというシチュエーションが、より縁起でもなさを強調させている。

ほしくもない不安を置き土産に残された亜樹斗は、移動するあてもないので一人その場に残った。
仕方ないので、彼らが来るまでいた定位置――――待合席に再び腰を下ろした。

……もう四時半か。とんでもねぇ三十分を過ごしたな。

過ごした時間も、過ごしたい相手も、その際に入手した情報もとんでもない。
あまりにも異常を濃縮した時間の中で、常識に関する平衡感覚がおかしくなりそうだった。しかも、あれだけ濃い時間が、たった三十分程度のものだったというギャップ。

その僅か三十分によって形成された――――昨日のスリ常習犯を追っていた時にすらなかった気疲れに、亜樹斗はどっかり圧し掛かられている。

そういえば、最初のところで自分の資料がどうとか言っていた。
きっと自宅の電話番号や住所も押さえられているだろう。
これっきりの拘わりにしたい、という自分の切望は天に届くだろうか。

己の行く先を悶々と考え込む亜樹斗だったが、その思考内容はふとした表紙に切り替えられる。

それは、

「……かずや……か」

久留美の命を救った人物。

同時に、この一連の事件に大きく関わっている重要参考人。

そして、久留美が狙われた――――――原因、なのかもしれない。

……名前からして、やっぱり……【男】なのか。

思えば、最近の久留美の様子はおかしかったといえばそうかもしれない。

妙な言い方だが、この世間を騒がす猟奇事件騒動の中で、それを担当して携わっていた自身に対する接触があまりにも少なかった。

久留美は、【危険（アブノーマル）】な匂いがするモノをこよなく好んでいる。むしろ、愛しているといっても過言ではなかった。兄の血なのか、平穏（ノーマル）とはかけ離れた不穏の気配を追い求める性を持ち合わせているという、普通の高校生と呼ぶにはいささかズレた変わり者だった。

そんな姪の周りには、幸いにも一般職業とは言いがたい特殊な業種に付く身内、親戚が自分や彼女の今は亡き父を始めとして豊富に存在していた。きっかけや付け入る箇所はいくらでもあり、よって彼女はかなり危ない道を幾度なく潜り抜けた戦歴を持つ兵となった。

刑事という職業を【危険】への最前線と捉えているらしかった久留美は、特に亜樹斗に懐いてきた。刑事のクセにスレてない馬鹿正直なところも好きよ、と彼女は内面に対する喜んでいいかよくわからない好感度も付け足していたが。

非日常に飢える久留美が、ひょっこり現れては最近起きた事件で面白そうなやつはないのかと不謹慎なことを聞いてくるのが亜樹斗の日常茶飯事の一つだった。

時折、兄を流出源に仕入れてきた弱みを片手に強引に聞き出そうとしてくる時もあったが、物事はフェアに進めるまっとうな一面も持ち合わせる久留美は、料金代わりに己が持ち合わせている情報を提供してくれた。

叔父と姪。そして、刑事と情報やという奇妙な表裏の関係も築いてきた少女を、亜樹斗自身も不思議と愛着を持っていた。可愛げの有無では、間違いなく無い方だった。

だが、亜樹斗はそんな姪を気に入っていた。

はっきり言えば、羨ましかったのかもしれない。自分とは正反対の人間性を持つ久留美という人間が。

知的（インテリジェンス）という意味ではともかく、狡猾（ワイズ）という意味では間違いなく賢い人間だった。

人生に利益や得を招くには、そういう形振り構わない一面はまず必要だろう。言うまでもなく、それを欠いて得に満ちたとは言い難い――――間違いなく貧乏クジばかりを引いてきた亜樹斗には、一般的にはあまり好意的な意味はない理工さを持つ久留美が何故か羨ましかった。

どんな形であれ、知り合いには損な人生よりも得な人生を送ってもらいたい。

羨望を嫉妬に変えるには、亜樹斗という人間は己の人間性を割り切ってしまっていたため、無理だった。

自分には叶わない人生を大成する可能性が身近な人間にあるというのなら、やってみせてほしい。試合には介入できない観客としてせめて応援したい。亜樹斗が久留美に対して抱いたのは、そんな気持ちだった。

しかし、その矢先でこんな顛末だ。

……なんで、また……お前まで……。

まさか久留美にまで、同じような転機が巡ってくるとは。想像できるわけがなかった。

だが、と思う。

……お前は俺と違う。なら、わかったはずだ。

【それ】に遭遇した場合、どう対応すればよかったか。何が、正しい行動か。

亜樹斗にはわからなかった。わかっていながらもそれが本当に正しいのかわからず【間違えた】のだ。

久留美は頭のいい娘だ。本能的に、【それ】が触れてはならないものである、と感じたままに理解できたはずだ。好奇心のままに生きていたが、引き際と身の安全の確保は考慮できる人間だった。だからこそ、今まで何か取り返しの付かない事態を一つも被ることなくのらりくらりと無事に生きて来られたのだ。

……引き際を、見誤ったのか？

理性を上回る何かが――――――感情が、久留美自身の判断を鈍らせたのか。

相手に対し、そこまでの感情を抱いたのか。

――――――かつての己のように。

その存在に惹かれて。
感情のままに動いて。
気が付けば異常事態に巻き込まれていて。
引き返せば間に合うところを、相手を見てそれを迷って。
引き返せ、と言う相手のことがどうしても放っておけず、不正な判断を下して。

違うところは結局のところとして至った箇所だ。
亜樹斗は死に掛けたが、失ったものは特になかった。
久留美は命こそ助かったが、失ったものは大きかった。

この結末の分け目となったのは、やはり――――――

「……はぁ」

溜息と共に思考は中断された。
考えても仕方ないことであると、思考回路の片隅で傍観していた達観的部分が急に出ずばったのだ。
それもそうである、とその意見に賛同し、亜樹斗は考えるのをやめた。

署に戻る。
ここにいても向こうにいても、無為な時間を過ごすしかないのは同じだが、ここにいると気分が自然と滅入る。
ひょっとしたら、何か他の事件を回されるかもしれない。何かに没頭してこの件から意識を逸らしたいという願望に応えてくれる可能性は、少なくともある。

「……その前に」

くるり、と奥に続く――――――玄関とは真逆の廊下を見遣る。

久留美の様子を人目見たい。

変化や回復などの期待などできるわけが、それでも姪が生きている姿を確認したかった。

その後に署へ帰ろう、と予定を決め込んだところで、亜樹斗はようやく待合席から腰を上げた。

その際、ちらりと受付口の看護婦を一瞥し、一度は断られたことを思う。

面会謝絶と突っぱねた自分が蔵間たちと奥へ行っても気づかなかったということは、あの看護婦は一般人だろう。

おそらく、上司から久留美の部屋に行こうとする者はとりあえず追い返せとだけ伝えられているのだと思われる。

このまま自分一人奥へ進んでも、不審な動きとして捉えられて差し止めをくらったりしないだろうか。

不安要素の発生に、亜樹斗が行動に踏み切れずにいると、タイミングよく受付の前に来院者が立った。

しめた、とばかりに亜樹斗はその影に隠れて看護婦の注意の範疇に入る前に、廊下へとさりげなく進む。

しかし、その先で亜樹斗の進行を阻んだのは――――――背後からではなく、前方から来る【モノ】だった。

◆◆◆◆◆◆

病院内で走るのは、厳禁。

そんな言われなくても知っている常識など思考から吹き飛ばず勢いで、その瞬間、亜樹斗は疾走した。

この状況における最優先の【対象】を追って。

向かうは出入り口――――病院の玄関だ。

【対象】は、今まさに出入り口の役割を果たす自動ドアを通過して病院の外へと出るところだった。

待て、と意思を声にする暇はなかった。

とっさの反応で形にできたのは、自動ドアの向こうに消えかかった背中を追うという行動のみで――――――

「っっ――――――！」

走り出す亜樹斗を注意する声は幸い聞こえなかった。

待合席・受付から玄関はそれほど遠いところになく、走るという

行為を咎められるほどの距離ではなかった。
仮に聞こえたとしても、亜樹斗にはどうでもいいことだった。
そんなもの無視して走るだろう。

そう、関係ない。
この場で亜樹斗にとって重要なのは、一つなのだから。

「――――っ、は」

自動ドアの開くまでの僅かな時間のロスにも歯噛みしつつ、亜樹斗は病院の外へ駆け出て【対象】の姿を探した。
しかし、いくら視界を駆使しても【対象】の姿は影すら捉えられない。
見失った、と亜樹斗が事実を受け入れるのにさして時間は要らなかった。

来た時の青空は朱色に染め変えられ、日の暮れる前兆を示していた。
褪せた日差しに染められた周囲もそれに応えるように仄かに朱い。
その景色の中に、【対象】――――あの【少女】はいない。

そんな馬鹿な。
諦めきれない心が事実を否定するように吐き出す疑念。
呆気にとられて行動が遅れたとはいえ、【少女】との距離はさしてなかった。
そう、僅か数秒ほどの距離間と遅れだった。

その間に見失うなど有り得ない。
普通ならば、有り得な――――

……”普通”？

思ってから、それが酷く意味のない言葉であることを思い出す。

彼ら――――蔵間や、おそらくあの【少女】のような澱にそんなもの通じはしない。そうして失念していたことを思い出すと、同時に亜樹斗は落ち着きを徐々に取り戻していく。そして、思考するだけの落ち着きが戻った亜樹斗は、回想する。

僅か数分足らず遡った先に――――【少女】との遭遇の瞬間を。

久留美の病室に向かおうとした亜樹斗の正面からやってきた【少女】に対して、抱いた印象は外見的な判断による単純なものだった。

久留美と同じくらいの年と思われるのに、まったく似ても似つかないほど本当の意味で大人びていた。そして、四十を間もなく迎えようとしている亜樹斗ですら見惚れてしまうほど綺麗な顔立ちだった。

同じ十代の女の子でもこうも違うのか。やっぱ神様いるんだなどう考えても贔屓だろ、と思ったことといえばそんなことぐらいだった。

何事もなく【少女】とすれ違おうとした瞬間だった。

全身の肌が総毛立つような既視感に襲われたのは。

それは蔵間と鉢合わせた時に感じたものと同等。つまりは、【あちら側】の気配。

しかし、それだけではなかった。それだけなら、亜樹斗もこうし

て追いはしなかった。むしろ、それだけなら亜樹斗は知らぬふりをしていただろう。

ただ、【少女】からはそうさせないものを感じたのだ。

すれ違う僅か一瞬に何故か駆け巡った【二つの人間の顔】によって。

一つは嘲笑を浮かべていた。
そこに込もる他意に気づかなければ完璧な愛想笑い。
今思い出しても、いけ好かない笑み。

もう一つは、ただ無表情。
その奥でどれだけの感情が押し込まれていたかを知ったのは、随分あとの話。
いつ思い出しても、胸が苦しくさせる抑圧の貌(かお)。

二人の人間。
男と女。
まったく異なる表情と性質を持ち合わせていた一対。

十八年前。
ひょんなことからとんでもない騒動に巻き込まれた。
拘わった時間は短かった。
だが、それまで生きてきた人生の中で、最も必死になった時期だ。

そこには、いい思い出ばかりとは程遠く、どちらかといえば間逆な感情ばかりが詰まっている。

けれども。

最も――――新條亜樹斗という人間が『生きて』いた記憶がそこにはある。

そんな過ぎた時代を象徴する――――二人の人間だ。

あの【少女】の気配を間近で感じた瞬間に、【彼ら】が突然記憶から引き出されたのだ。

そして、被さった。あの【少女】自身に。

……ようするに、俺は。

結論を出すと、亜樹斗は【少女】に【彼ら】を見たのだ。

しかし、それは亜樹斗にとって答えとはならず、新たな疑問でしかなかった。

……だから、何だっていうんだ。

追いかける理由になるか否かでは――――否だ。

とっさに行動を起こさせた理由にはならない。

感情。

あの行動の起爆となった『感情』は何だっただろう。

思った先で、待っていた答えは――――。

……ああ。そうか、俺は……。

『それ』は、ここに来るまでの亜樹斗の行動全てを一括りにする締めとなった。

『それ』とは――――――未練。

過去に対する未練。

【彼ら】への。そして、【澱】へと向けられる未練だ。

あの【少女】を追いかけたのも。

降魔庁、そして蔵間と拘わりを拒まなかったのも。

根底では、彼らとの接触を望んでいたからだ。

「……納得だよ、久留美」

亜樹斗は、離れた場所にいる姪に対する同意を声にした。

わかったのだ。

彼女が判断を誤った理由が。

「俺も……か」

危機的状況で、命がけの瞬間を。

その中で、誰かと共にいる楽しさを。

記憶と心に直接刻み込まれる『生』の実感というものを、知ってしまえばもう知らなかった頃には戻れない。

久留美も同じだったのだろう。

なんらかの形で拘わり、それを知ってしまった。

理性の警告を無視して、本能のままに求めて――――――。

「わかって、いた。……ただ、それでも」

あの日。

別れを告げに来た【彼女】を去る背を追っていたら、まだ戻ることができただろうか。

自分とは異なる結果を生んだ久留美を、亜樹斗は不謹慎にもうらやましく思った。

それは、彼が病室から久留美が消えたことを知ることになる一時間前のことだった。

［壱百参拾六］　外側の視点（３）　（後書き）

性格とか気質は間逆でも、同じものに接触して同じことを感じた叔父と姪。
久留美は、突き進んでしまった結果として失った。
亜樹斗は、途中で止めてしまった結果として、別の意味で失った。

普通の人間にとって、デッドオアアライブな世界は夢を描くだけで実際はゴメンだろうけど、この二人にとっては違った様子。理性が弱いのか、それとも遭遇したモノの魅力が強かったのか。

ちなみに書いている間、作者も何が目的で亜樹斗視点をやっているのかわからなくなりました。いや、降魔庁の動きと二部の臭いを漂わせたかったっていうのが本当なんですがね。

ちなみに【少女】は千夜です。
彼女が何処を訪れていたのかは……言わずと知れているでしょうが。
次は久留美です。かなりカオスな状況です（ぇ

【壱百参拾七】　暗黒の淵

――――――雪。

そう認識し、鼻に触れたと思えば、スッと肌に馴染んで消えた。

「……」

見上げた白い空から、それは次々と降っていた。

否――――――降り続けている。

見渡す一面は、既に白い高原と化している。

しかし、いくら降り積もろうと白は白。何の変化もない。

更には不思議なことに、どれだけ降ろうと地面に積もる降雪量が増える様子はない。

まるで――――――時間が止まっているようだ。

真っ白な白い世界に、ベンチが一つ。

そこに、たった一人で座るのが――――――久留美だった。

見せ掛けだけの動きを見せる停滞した白い世界には、久留美一人だけが存在していた。

ここは何処なのかは、久留美自身にもわからなかった。
何故、ここにいるのかも。

あまつさえ、久留美自身は気づいていないが、

――――――久留美は、自身のことさえわからなくなり始めていた。

ここに来るまでのこと。
何故、ここに至ることになったか。
それらを含め、自身の情報が彼女の中から消えつつあった。

思い出そうとすれば、頭の中で「止めろ」と言わんばかりに頭痛が響く。
久留美は、警告音に素直に従った。
考えてはダメだ。
本能的なその思いが、久留美に「考える」のを止めさせていた。

そして、異変は起きた。
「思考」を捨てた久留美の中で、代わりに動き出したのは『忘却』という消去作業が始まった。

それは、徐々にという緩やかなスピードだが、確実――――――『久留美』を消し去り始めていた。
証拠に、久留美は『久留美』であることすらわからなくなり始めている。

それが由々しきことだったが、久留美は気づかない。
否、気づいていたが無視していた。それを、良しとしていた。

このまま消えても構わない、と。

考えることを捨てた久留美だが、無意識という思考を必要しない形でその思念だけが残っていた。
それもまた、少しずつ形を変えていく。悪化という経過を以って。

消えていい。
消えて――――――しまいたい。

受容は願望へと。
そして、消去のスピードもそれに伴って速さを増す。

『久留美』の消失が、約束された未来となり、それがまもなく訪れるであろう。
予定が確定へと移ろうとした――――――その時だった。

「――――――あんた、まだ此処にいたんだ」

誰にもいないはずの白い空間に、声。
幻聴かと、久留美が聞き流そうとした瞬間、再度響く。
そして、今度は無視させないとばかりに、

「無視するな、馬鹿娘」

さくり、と雪を踏む足音。
それは人の存在を証明し、肯定するものだった。

久留美は、いつのまにか閉じていた瞼を開ける。
開けた視界に、あるのは、

「――――――――は？」

もう随分使われていなかった喉が、思わず声を生んだ。
驚愕をたっぷり含んだ言葉を。

久留美は見た。
それにより、その内側で止まりかけ、なくなりかけていたものが一気に動き出し、戻ってくる。
捨てたはずの思考は、急遽活動を再開。
消え去りかけていた自我は再生し、形を取り戻していく。
こんな急激な復旧工事が起きているのは、目の前の存在のせいだった。
何故なら、目の前の存在は――――――『それ』は、
「やっと見たわね」
ふん、と皮肉げに笑う――――――『顔』。
久留美は、それをよく知っていた。
当たり前だ。
久留美自身の顔なのだから。

目の前の存在――――――久留美の姿を象る者は、久留美の驚愕をそれがどうしたとばかりに何ともないように受け止めて立ちはだかった。

◆◆◆◆◆◆

「あー、ちょっと退いて。ズレて、隣あけて」
「え？　ぁ……ど、うぞ」

手をひらつかせて、行動を促すふてぶてしい態度に、普段の久留美であれば反抗しただろう。
しかし、本調子ではない上、目の前の奇妙な存在に圧倒されてしまっているため言われるがまま動くだけだった。
どっこいせ、と腰を下ろした『それ』は、

「ったく、いつまで時間かけてんのよ。状況整理なんてもう済んでんだから、さっさとあっちに帰りなさいっての。あんたがここでグズグズしているうちに、もうすぐ丸一日たっちゃうんだからね」

ギロリ。
そんな擬音がつくのではと思うほどの鋭い視線が、久留美に突き

刺さる。

『それ』――――――『女』から来る睨みと言葉の意味がわからず、困惑する。

「こんなところに閉じ籠っていても、何も変わりやしないわよ。……【契約】は、とっくに完遂しちゃってるんだからね」

「け、いや……く？」

口にした後、久留美は心臓がぶるり、と震えるのを感じた。

何故か、目の前の『女』が発した『契約』という言葉が、久留美には良くないものであると思えたのだ。

思い出してはならない――――触れてはならない何かを浮き彫りにさせてしまうような気がした。

「なに、とぼけて……――――――ああ、そう。……だから、いつまで経ってもこんなところに居座り続けていたわけね」

久留美の僅かな動揺から、『女』は何かを悟った表情を険しくした。

隠そうともしない侮蔑に歪めて。

「ねぇ、私が何であんたの姿借りてるかわかる？　別にいいでしょ？　……今、使っていないんだから」

「……つか、――――――っ！？」

ハッと眼を見開く。

久留美は気づいた。

一人の時は知る術もなく、『女』と同じ体勢で視線を交わすまできづかなったことに。

己の視線を放つ場所が、いつもよりも低い位置にあることに。

違和感に促されるがままに、久留美は己の身体を見回した。

掌。

足。

顔。

髪。

違う。何かが違う。

一心不乱に己の身体を触る久留美を、『女』は醒めた眼差しで見つめ、

「そんなに気になるんなら、足元見てみなさいよ。確認したこと全部が見れるから」

顎をしゃくって促す『女』の言葉を怪訝に思いつつ、言うとおりにする。

すると、

「――――――――――っっ！！」

先ほどまで陰り一つない雪原だった足場は、いつの間にかない。

代わりにあったのは、水。

地平線まで広がる水面だった。

「な、に……っ？」

「深層世界ってのいうは、自由自在らしくね。本人次第で、いくらでもどんな情景も映し出せるのよ。さっきまではあんただけだったから、ああなってたの。ま、私が出てきたからいろんなもの交じり合ってこんな感じ」

『女』の言葉など、久留美の耳にはまるで入ってこなかった。

何故なら、久留美は他に意識を分ける余裕もないほどの驚きに支配されていた。

そこに映る己の姿に。

「こ……”子供”？」

「年は十を迎えたくらいかしらね。まぁ、放っておいたら赤ん坊まで戻っちゃっていただろうけど」

「一体、ナニが」

「あんたが、自己放棄に走ったからでしょ。【新條久留美】そのものを丸ごと捨てようとしたから、よ」

「あんた、何わけわかんないこと……」

「オツムまで退化したわけ？　……しょうもない奴」

吐き捨てるように出た貶しに、久留美はカッと眼を見開いて『女』を睥睨する。

しかし、それにうろたえる様子はまるでなく、

「……なによ、その眼？　負け犬がいくら睨みをきかせようと痛くも痒くもないわよ」

「まけい、ぬっ？」

「そうよ。敵はおろか自分から逃げたやつがなんか、負け犬の極みよ。そうじゃないっていうんなら……」

一瞬、『女』の手が伸びた。

その矢先に、久留美は己の身体がぐいっと強い力で動かされるのを感知した。

その直後、『女』の顔は眼と鼻の先までに距離を縮めた。

「……コレ、返すわ」

「――――――――――っ」

『女』の眼を見た瞬間、久留美は背筋を駆け上がる何かに身震いした。

警告音が再度響くのを聞いた。

久留美は、『女』から離れようとしたが、そうはさせないと胸倉を掴む手がビクとも動かさなかった。

「はなっ……」

「この姿と一緒に拾ったのよ。……感謝しなさいよ？」

「いや、……やめっ」

「――――――ダ、メ」

完全に怯えきった久留美に、冷酷な断言が降りかかる。
据わった『女』の眼が、久留美を逃がすまいと捉え、

「あんたは、逃がさない。絶対に。忘れたっていうなら――――――
――思い出させてやる」

――――――――――あんたの犯した、間違いを。

［壱百参拾七］　暗黒の淵　（後書き）

お久しぶりです。無事に脱稿できたので、帰還しました。あと一週間も引っ込んでたら、あやうく一ヶ月もあけるところでした。

せっかく連載再開して久留美パートっていうのは、なんか申し訳ないんですが……ひょっとしたら結構スカッとするターンかもしれません。

作中、突然出てきた新キャラ（？）ですが、こいつが皆さんが久留美に対して溜め込んでいたフラストレーションを一気に発散してくれるんじゃないかと思います。まぁ、こいつが何者かどうかは……パートの最後になんとなくわかるんじゃないかと思います。蒼助の例を見ているのなら、なんとなくね。

【壱百参拾八】　回想世界

見据えられた眼。
見据えたその奥。

僅かなズレもなくかち合ってしまった瞬間に、久留美は『女』の眼から逃れることも逸らすことでも出来なくなった。

『女』の眼の奥は、暗い。
まるで虚空のように何もなく、ただ闇が落ちているだけだった。
だが、徐々に見えてくるものがあった。

少しずつ。
少しずつ。

そこには、何かの映像が見え出した。
茶色く褪せたそれに、段々と色が付き出す。
砂が混じる荒い画質から、しっかりと安定を得ていく。

そして、一瞬それが強く反射を放ち、目の前が真っ白になったと感じた瞬間。

「――――――は……っ！」

目の覚めるような感覚。
一瞬の呼吸を停止と共に、全身が痙攣した。

ぶわっと吹き出る汗を感じながら、

「――――――久留美」

すぐ傍で、声。
それは安堵を伴った心地よさを含んでいた。

……私、知っている。

この声――――――この人を、知っている。

瞬く間に駆け巡る限定的な記憶。
顔を上げた瞬間には、そこに誰がいるかは既にわかっていた。

「か、ずや」

己の意思よりも先に、口がひとりでに動いた。
違和感と驚きを抱く久留美の耳に、

『――――――――何を驚いているの。これはあんたの記憶の中よ』

あの女――――――久留美の姿を模った『女』の声が響いた。
耳にというよりも、頭に響いたといった方が正しいかもしれない。
どちらにしろ、ここにはいないはずの女の声が聞こえた。

『あんたは今、既に始まりから終わりまで筋書きが決まった【過去】の一部を、当時のあんた自身を通して再体験しているのよ。……だから、あんたはその筋書き通りに動かされるわ』

言葉が響く中で、そのとおりに久留美の身体は久留美の意思によってではなく、既に決められた行動をこなしていく。
涙が促す感情もないのに流れ出し、身体は勝手に震える。
そして、

「……無事か、久留美」
「っ、千夜！」

しがみついて泣きじゃくる。
死に際となる瞬間に思い浮かんだ未練の対象に救われた感動と、途方もなく輝く希望の光に縋りつきたい思いで一杯だった。

そうだ。
あの時、自分は死に掛けた。殺されかけた。

だが、そうはならなかった。

この人が、千夜が――――――助けてくれたからだ。
だから生きている。

しかし、疑問がそこで終わることはなかった。
だったら何故、自分は心を閉ざして現実から逃避し、『女』のいう【深層世界】に閉じこもる羽目になるのか、と。
そもそも、何でこんなことになったのか、と。

そこへ、疑問に割りいるように、

「……久留美。――――――ごめんな」

千夜が紡いだ謝罪の言葉。
その時、記憶の中の筋書きと久留美が一瞬重なり、

「何で……謝る、の？」
「……なんでもないよ。意味なんて、ない。……忘れていい」

しがみついていた体勢から見上げようとした動きを遮るように、千夜は久留美の身体に腕を回して、抱いた。
そして、死角に顔を伏せたまま、

「ただ、――――――俺を許すな。何があっても、絶対に」

呟いたそれは、小さくもしかと響く。
拒絶とも、懺悔ともとれる言葉だった。

決められた行動以外何一つ許されない久留美が、唯一例外として出来るのは、胸のうちで疑問を膨らますことだけだ。

不意に、千夜によって密着していた身体を強く寄せられ、

「……怖ければ、目を閉じていろ」

「え……――――――っ！」

目を瞬かせた後、前方から感じた気配に視線を向ける。

その次の瞬間、久留美は顔を恐怖に引き攣らせた。

リビングの入り口から顔を除かせる、赤い双眸。

飢えた獣の目が、久留美と千夜を食い入るように見ていた。

「し、き……」

「そうだ。……すまない、俺の不注意だ」

だが、と続き、

「――――――すぐに終わる」

頼もしさと安堵を与える絶対の自信が、その言葉から汲み取れた。

けれども何故だろうか。

何故、自分はこんなにも胸騒ぎを感じているのだろうか。

怯え、という感覚に近い。

しかし、一体『何』に怯えているというのか。

思考はそこで中断される。

獣は、久留美を待たずに牙を剥いたのだ。

真っ赤に染まった口が、裂けんばかりに大きく開いて突進してくる。

「っひ、……！」

「俺から離れるな」

言われずとも身体は千夜にしがみ付く。

この場で絶対の信頼を置ける唯一の存在に。

千夜は、応えるように片腕で久留美の身体をしっかり抱いた。

そして、

「――――――千変万化弐之式【狂弦糸】」

千夜は腕を後ろに引いた。

掲げるように高く位置を上げると、手は何かを掻くように五指を折り曲げ、

「俺と拘わったばかりに……運が悪かったな。だが――――――散れ」

腕を振り抜いた。

だが、あの時の作業じみた余裕が、今はない。

バタバタ、と床に落ちる肉片は、まるで獣に引き裂かれたように粗雑な切り分けをされていた。

恐怖の対象が、今は無力な肉の破片に変わったのを見届けると、

「……お、かぁ……さん」

千夜の腕から逃れ、久留美の身体は血の海に横たわる母の身体へとおぼつかない足取りで向かう。

すぐ傍まで寄ると、力の抜けきった足は役目を終えたように折れた。

座り込んだまま、母の顔に触れる。

まだ温かい。

けれど、徐々にそれも失われつつあることを指先が教えた。

「……久留美」

背後に千夜が経つ気配を感じた。

「……おねがい、なんとかして」

「……無理だ」

「私の怪我、治したときみたいに……」

「……死人を生き返らせることは、出来ない」

「死んでな、い。……死んでなんか……だって、まだこんなに温かいのに」

「わかって、いるんだろう……？」

「わからないわよっ！　なにも、かも……わからないわよぉっっ！！」

何で、こんなことになったのか。

記憶の中の自分の疑念と、久留美は同じ思いを重ねた。

「久留美……そこから離れろ」
「いやよ……手を離したら、母さんが……冷たくなっちゃう」
「じきに”目を覚ます”。……離れるんだ、久留美」
「……？」

目を覚ます、と千夜は確かに言った。

その不可解な発言に気をとられ、久留美は千夜の顔を見た。

「……さっき、お前の父親が目覚めかけた。……その後に襲われたというのなら……もうすぐだ」
「な、に……言って」

がり、と床を掻く音が、久留美の意識に割って入る。

それは――――

「う、そ……」

見上げていた視線を恐る恐る下げる。
そこに、あるのは【動く指】。
冷たい床に上に力なく伸ばされた指が、今はもがくように床を掻いていた。

「――――ぁ」

血の気の色の失せた唇から、掠れた声が発された。

幻聴ではない。

確かに母の口から出たものだった。

「え……あ、あ……っ」

「――――――久留美」

抵抗のない身体は、あっさりと千夜によって後ろへ引き下げられた。

慄く視線を蠢く死体に釘付けとされた久留美の耳元に、

「……赦さなくていい」

「え？」

「……憎んでもいい」

振り向きたい、と自由のきかない体を無理にでも動かしたかった。

しかし、それは本来の筋書きからは外れている行動であるためか、まったく意のままにならない。

千夜。

千夜、顔が見たい。

決まったことしか起こらないこの記憶（せかい）の中で、久留美の望みが叶うことはなかった。

そして、ただ一方的にかつて起こったことを思い出せ、と突きつけられる。

「だから――――――」

しかし、偶然にも久留美の望みに応える動作が用意されていた。
首が僅かに上へと傾く。

真上にあるのは、見たいと願った千夜の顔。

笑っていた。
小さく、不恰好な微笑（えがお）がそこにあった。

初めて見る顔だった。

初めて――――――

……初めて？

そう感じる理由を、久留美は思考の片隅で探った。

本来なら【記憶の筋書きに無い行動】だったということか。

『――――――”さーびす”、よ。今の、忘れんじゃないわよ？』

あの女の声だ。
だが、そんなことも些細なこととして思考の隅に掃けて、ただ目の前のものに魅入る。

ああ、こんな風に笑うのか。
それにしても、なんて寂しそうな笑みなのだろう。

なんて――――――

僅かな自由の時間。
規格外の瞬間。

それは、振り下ろされた千夜の腕によって終わりを告げる。

グシャ。

それは――――――肉が千切れ、潰れる音だった。

［壱百参拾八］　回想世界（後書き）

あんまり長いと（作者が）ダレるので、この辺りは短めに区切っています。一応、どんなに短くても３０００字はノルマとしていますが。

何がグシャっとなったのかは、次回。

【壱百参拾九】　過去の罪業

――――――バシャッ。

濁った水音の後、その正体の欠片らしきものが久留美の顔に跳ねた。

頬に伝う感覚は、何処かドロリと重たい。

「――――――――ぇ？」

視線を下ろす。

動く母の死体があった、そこへ。

その瞬間、久留美の呼吸は止まった。

「っ、っ――――――――！！」

死体は、そこにあった。

だが、無い。

何かが足らない。

そこにある屍が自分の母親であると確かに知らしめていたはずの

モノが、無い。

頭部が――――――

「ぁ、あっっ、――――――――」

叫ぶ瞬間、追いかけるように次の衝撃が捲くし立てるように起こる。

空気を切り裂くような音と気配を感じた一息の後、首のない身体はその形をなくした。

飛び散ったのだ、と理解したのは、それから三拍後だった。

台所が大きく抉られたような五本の傷跡を刻まれている。

そして、床には、四肢も胴体もバラバラに切り裂かれて出来た数十の肉と共に千切れ飛んだ衣服の残骸である無数の布切れ。

それが、久留美の視界に残る――――――全てだった。

白いペンキが、脳みそにぶちまけられたような感覚に陥った。

全てが白く染まる。何もかも。

「ぁ、――――――――」

すとん、と下半身――――――否、全身からありとあらゆる力が失せた。思考する力も、立つ力も。目の前のことを、受け入れる力す

ら。

出てくるのは、

「……どうし、て」

起きたこと、そして起こした者への――――――疑念だ。

「どうして……」

「眼が開けば、屍鬼化が完成するところだった。この場の一時凌ぎとはいえ、肉体を完全に破壊すれば甦らせずに済む」

問い先から、淡々とした答えが返ってきた。

必要事項だけを述べた。ただそれだけの、応答。

違う。

そんなことが聞きたいんじゃない。

「そう、じゃな……い」

震える喉から言葉を搾り出す。

べっとりとした母の脳漿が頬に付着していることを、気持ち悪いと感じる心を押しつぶして、

「……どうして、〝殺し〟たの……？」

「殺したんじゃない。もう、死んでいた」

死んでいた。

その言葉に、ハッと思考が夢から覚める。
そうして久留美の脳内で事態の収拾が測られる。
母は死んでいた。そして、父も同様に。

先ほど千夜が言っていた言葉を思い出す。
さっき父親が目覚めかけた、と。

言葉からその先を導き出すのは、簡単だった。

だが、そうしなければ代わりに何が訪れていただろう。
失ったものを取り戻すことはできただろうか。
自分の元に、両親は帰っただろうか。

それがわからぬほど、久留美の思考回路はまだ排他的状態に陥っていなかった。

失ったものへの無意味な未練を切り捨てて、千夜が選んだのは久留美自身の命だった。
死者ではなく、生きている久留美を助けた。

久留美を。

「――――――そうじゃないって、言ってるでしょ！！」

恍惚に浸りかけた久留美の意識を引き戻したのは、他ならぬ久留美自身の声だった。

久留美にして、久留美にあらぬ――――――記憶の中の、筋書きとしてセッティングされた台詞によって、今の久留美は己と過去の記憶との食い違いに気づかされた。

何だ、これは。

何を言っているんだ。

「……何が違うんだ。それは、もうお前の両親じゃない。学校でも見ただろう。死んだ人間は、生き返りはしない。これは、もう形を残しただけの怪物だ。殺さなければ、殺されていた。……他に理由は、いるのか？」

まるで作業のように説明事項を述べられた言葉。

だが、それは記憶における――――――【久留美】を納得させるには至らないものであると、久留美は同調して感じ取った。

「どうし、てよ……。どうして、そんなに簡単に殺せるのよ。昨日まで……あんなに仲良く話して……今朝だって……なのに、どうして――――――そんなに簡単に切り捨てられるのよっっ！」

応えはない。

千夜は、ただ黙って久留美を見つめるだけだった。

そこに感情はない。否、まるで原型も留めないまでに押し殺している。

久留美には、それが見えていた。

だが、俯く【久留美】には見えてない。

【久留美】の視点を借りているために【久留美】の見えないものは見えないはずだった。

しかし、自分と記憶との間で生じている齟齬によるものか、久留美は久留美で別の視点を持てるようになっていた。

「……何で、何も言わないのよ」

「……」

「言いなさいよっ！」

息づく人間が二人だけの空間に、【久留美】の張り上げた声だけが虚しく響く。

だが、聞かなくともわかることだった。

生きている人間を助けるために、死んだ人間への未練を割り切ることが、間違った選択だろうか。

そして、本当に千夜が【簡単に切り捨てた】と思っているのか。

けれども、久留美の言葉は、【久留美】には届かない。

当然だ。

そんな歯がゆい気持ちを他所に、

「……じゃぁ、もし……もしも――――――私が、同じようになったら……どうするの？」

零した言葉に久留美は、目を見開いた。

叶うなら、今すぐにでもその馬鹿な口を引き裂いてしまいたい、と殺意まで芽生えた。

酷にも程のある言葉だった。
応える側の気持ちを考えれば、そんな言葉出てくるはずがない。
『……いっぱしになに憤ってんだか。……もともとはあんたの台詞でしょ？』
『女』の嘲笑うような言葉に、久留美は強い拒否反応を示した。
違う。
私じゃない。
こんなの――――――知らない。
『じゃぁ、見て聞きな。あんたがこれからやらかすところを』
『女』の声はそれが最後となった。
ただ、返答を待つ沈黙だけが残る。
何かが爆発する寸前のような、不気味な静けさ。
この沈黙が終わることが、怖い。
絶えず続けばいい、と願った久留美の思いを無下にするように――
――――その終わりは訪れた。
「……そうだな」
静かに零された一声。

「……死んだ時点で、もうお前じゃないというのなら――――――――殺すよ」

パリン――――――――と。

久留美は、【久留美】から何かが砕け散る儚い音を聞いた気がした。

事実、壊れたのだ。それまで押さえ込んでいたものを囲っていたものが。

【久留美】の中で張り詰めていた何かが、もはや留めること叶わないまでに。

ぞくり、と久留美は得体の知れない震えを覚えた。

嫌な予感、という名のつく感覚を。

「……なによ、それ……何なのよ、あんた……。一体なんだって言うのよっ！！　……人に、偉そうなこと言って……日常を押し付けて……そしたら、今度は壊して奪って……帰る場所も無くして、私をどうしたいっていうのよっっ！？」

溢れる激情は、抑圧をなくした今はなるがままだった。

抑えたくない。

抑えられない。

拒否と促進が入り混じり、【久留美】の中はゴチャゴチャになっていく。

……やめて。

意識に走る痛みはない。

だが、心が強く反応している。

畳み掛けるような勢いで、この先で起こることへの拒否を。

「あんたのせいで……なんのかんも、なくな……って――――――」

嗚咽を含みながら漏れていた言葉が、不意に止まった。

そして、何かを確信づいたように淡白な一言が落ちる。

そうよ、と。

「……あんたさえ……あんたさえ現れなければ……ずっと続いたのにっ！」

馬鹿、と思わず久留美は叫んだ。

言ってはいけない。

その先は、

「退屈でも……日常に、平穏に浸り続けていられていたのにっ！

こんな風に、日常を無くして死ぬほど後悔することもなかったのにっっ！　……何もかも、あんたが来てからおかしくなった！　あんたさえいなければ……誰も何も失わずに済んだのよぉぉぉっ！！」

やめろ。

「あんたが……」

やめて。

「あんたがーーーーーーーー死ねばよかったのにっっっ！！」

ーーーーーーーーーーーーーーーーっっ！

声無き慟哭を、久留美は胸が張りさけんばかりに叫んだ。

◆◆◆◆◆◆

「――――――はっ、ぁっ！」

耐え難い苦痛にも似た心が訴える拒絶反応が、久留美を『女』から距離を取らせようとする。

突っぱねるように押し出した両手は、『女』を退かすことは出来なかったが、久留美をベンチから転げ落とした。

「っは、……ぁ……あ、ぁ……」

頭を掻き毟り、水面に突っ伏する。

上半身はガタガタと震えが止まらない。

全身を取り巻く忌まわしさ、恐怖、嫌悪、後悔、拒否感。

それらを取り除こうと久留美は一面に水が張る足場をのた打ち回った。

「あ、あああああああっ、ぁ、あああああっ！！」

絶叫。

やり場も正体もわからない想いの旨だった。

泣きじゃくりながら、久留美は叫び続けた。

最悪の失態。
己の行いを忘却したこと。
全てが、久留美には耐え難い苦痛となって襲い掛かる。
久留美は、後悔と嘆きの海に溺れそうだった。
だが、
「……まぁ、助けてくれた相手に向かって潔いまでに責任転嫁しちゃったもんね。呆れて言葉も無いって言うか、いっそ拍手したくなっちゃうわ」
久留美を見下ろして立つのは、罪に苛まれる者への救いの主ではなかった。
絶望の淵に立たされた久留美に、更に追い討ちをかける。
たっぷりと毒が染み込んだ言葉に、久留美は大きく震えた。
「……わかってる？　アレがそうなるように手引きしたのは……あいつでもなければ、コソコソ悪巧みしていた奴でもない……【あんた自身の意思】なのよ？」
「……ち、がう」
張り上げて掠れた声が、顔が上がると共に紡ぎ出された。
「あんな、の……望んでなかった。わた、し……私が望んだのは……日常にあいつの居場所を……つくって、あげたかった……だけなのに」
「微妙に嘘ぶっこいてんじゃないわよ。あいつのために日常に居場所を……？　違うでしょうが。――――――あんたが、日常も非日常

も手に入れるため、でしょ？　こんなところまで責任転嫁なわけね……いい根性しているじゃない」

『女』は弁解を鼻で笑い、一蹴した。

「甘ったれた考えね。どっちも欲しいだなんて欲張るから、【本当に大事なもの】まで手放す羽目になったっていうのに」

「……どういう……意味よ」

「わかんないの？　なら、わかるように教えてやるわ。

――――――諸悪の根源は、あんただってことよ」

予想の範疇を飛び越えた言葉に、久留美は目を見開いた。

「わ、たし……？」

この『女』は何を言っているんだ。

鳩が豆鉄砲を食ったような顔して、言葉が受け入れ難いこと示す久留美に、

「あんたが【契約】の条件を満たしたから、前約束どおりに執行されたのよ」

「契約って……さっきから、何なのよソレ。一体……何の契約なのよ！」

「――――――奉納儀式【悲願】。魂の底から想う望みを、己が持つモノを代償として差し出すことで、叶えてもらえる願掛けよ」

望み。

代償。

悲願。

全てが、久留美を混乱の坩堝へと誘うキーワードとなった。

「あんたは、日常を代償として【世界】に差し出して、異能を……【あいつの傍に立つ権利】を手に入れたのよ」

「日常……？」

「この場合は、日常を象徴するものね……言わなくてもわかるでしょう？」

瞬間、過ぎる二つの『顔』。

もはや二度と離れないものとしてこびりついた――――――あの惨劇の映像の中から飛び出してきた二人の人間の残像だ。

「……なに、よ……知らないわよっ……契約なんか、私はしてないっ！」

「まぁ、当然ね。その点は間違いない。契約そのものを取り付けたのは――――――私だもの」

思考を麻痺させるには十分な言葉だった。

「……な、に……？」

「契約を結んだのは、私よ。私も、諸悪の根源っていえるわね」

いけしゃぁしゃぁと『女』は告げた。

「…っ、に……よ、ソレ……あんたのせいで……」

「捻りも無く私に来たわね。……でもね、私はあくまで【契約を結んだだけ】よ。……あくまで実行されなきゃ、何の意味も無い形ばかりの口約束を交わしただけ」

今にも飛びかかってきそうな久留美に対し、『女』は欠片も怯みもしなければ、動じた様子も見せない。
己に咎はまるでないと言わんばかりに、ふてぶてしい態度は未だ健在のままだ。

「……実際に決めて、実行に出たのはあんたよ。どんなにフェアに審査して割合ふっても責任はお互いに五分五分ってところじゃない？」
「わけわかんないこと……言ってんじゃないわよぉぉっ！！」

目の前の『女』が、自分が事の発端であると打ち明けたことで、久留美の怒りとやり場の無い後悔は自然と方向を定めた。
追い詰められた久留美の思考は、感情を『女』へぶつけることを選択した。

蹲っていた久留美は、女に飛びかかるように立ち上がった。

「――――――いいから話を聞け、馬鹿」

しかし、『女』はそれを見越していたかのように先に動いていた。
ガッと首を掴み、牽制するように力がこもる。
久留美はもがくが、びくともしなければ、外すことも出来ない。
ここで久留美は、己が今子供で、相手がそれよりも大人な身体を持っているという体格差があることを思い出す。

「私に腹立てるのも恨むのも結構だけど……あんたの責任まで押し付けるのは止めてくれる？　というより……いい加減理解してほしいのよね。自分が何をしたのか、何がこの結果を招いたのか……理解したうえで、自分がこの後どうすべきなのかをさぁ」

「……わたし、は……なにも、して……な」
「したから言ってんのよ。往生際の悪いやつね、ったく」
絞められた喉からようやく搾り出した弁明は、情け容赦なく踏み潰された。
「言っとくけどね……あの惨劇の起動ボタンを押したのはあんたなんだからね？　言ったでしょ。私は事の発端だけど、あくまで土台をつくっただけなのよ。それを知らずのうちにそこから上を積み上げて、契約を【完全なもの】にさせたのはあんたなのよ……新條久留美」
「だ、から……わか、らっ……な、いって……」
「あんたは選んだでしょ。あいつを」
「……？」
何故、そこで千夜なのか。
疑問を込めた視線を送ると、
「なにも契約（こと）は強制的に運んだわけじゃない。あんたには、ちゃんと選択肢があったのよ。このまま、あんたはあんたに用意された日常を歩み続けるっていうもう一つの選択肢がね。……けれど、あんたはそれを蹴ってまであいつの手をとった。【あの時点】で、あのままあいつに振り切られていれば……契約は白紙に還るはずだったんだけどね」
「……あの、時点……」
『女』が何処を明確として指しているかはわからない。
しかし、『女』の言うことは正しかった。
去りゆく千夜を追いたいと駆り立てられた。そして、事実追いか

けた。

「契約の執行条件として、取り付けておいたのよ。あんたが、もし……出会えたとしても、道を交えたいと自らの意思で選択しなければ契約は破棄。望めば、即執行……そして、代価を奉納するってね。……あんたは選び、契約は執行され……代価である贄は奉納された。――――――さて、ここで問題」

『女』の眼は、射抜くように細まった。

「結局、こんなことになるように転ばしたのは……誰なのかしら？」

問うような言葉とは対極的に、視線は決め付けんばかりに久留美を刺し貫く。

「私が……二人を――――――殺したって……言うの？」

「わかってるじゃない」

「――――――違うっ！」

受け入れかけたところ、久留美は弾けるように反発した。

「……違う、違う、違うっ！　私じゃない、殺したのは……殺したの、は――――――」

ガチ、と額を強く小突かれる。

指や拳では及ばない硬さを感じた。

押し付けられていた【それ】は少しだけ離され、その正体を明かす。

何処か、現代のそれとは異なる形をした拳銃だった。

「……これと同じよ」

「ぇ……？」

「これは、実際に自分の手を汚さずに相手を殺せる便利な道具よ。……引き金を引くだけで、勝手にこの丸っこい弾が飛び出て……相手は死ぬ」

銃口は久留美から標準を外し、もう一方の手の平にはいつの間にか二発の銃弾が乗せられていた。

二つの弾。

そこにどんな意味が導入されているか、じわじわと理解を追った。

屍鬼。

そして、千夜。

「自分では手を下さずに済む。……自分は、引き金を引けばいい。ただ、それだけだもの」

「……」

「あんたの意思を汲んで、【世界】は命運を動かした。動かされた命運は、二つ。堕ちた人の成れの果てと、奇しくもあんたを守るべく参じた人間だった。あんたが殺した、奪ったと……行為を直接行った奴らは、あんたの望みを実現するために動かされたに過ぎない。単なる動力だったのよ。あんたの望みの為に支払う代価をつくるための、ね」

ここまで聞いて、否定の意思は既に瀕死だった。

久留美は手を下していない。

だが、久留美が促したのだ。

久留美の意思が、選択が――――――――彼らを殺したのだ、と。

「……そ、んな」

虚勢も維持も残っておらず、久留美は呆然と事実に打ちひしがれる。

全てが、自分がほしいと願ったせいだというのか。
手に入らないものがあるという事実に対し、みっともなく駄々を捏ねたから。

「理解、した……わね？」
「……ん、で」
「あん？」

まだ何かあるのか、と『女』の眉が不快そうに釣り上がる。

「何で……私、は……ただ……ただ、あいつに……こっちに来て……ほしかった、だけ……なのに」

ただ、それだけを思ってのことだった。
それが――――どうしようもない惨劇を招くなんて、どうして予想できただろう。

「……詰めも考えも甘いわね。甘いにも程がある」

縋るような久留美の言葉を、『女』は容赦なくぶった切りにした。

「……あんたは、結局のところあいつを”わかっていなかった”のよ。あいつを見て知って……あんたと同じことしようと考えた人間なんて、今まで腐るほどいたに決まってるでしょ。それでもあいつは【あそこ】にいた。……意味は、わかるでしょ？」

先達者の存在。

考えたことはなかったかついて是か否かでは――――――否だ。

わかっていた。

自分は多くいた中の一人でしかないことに。

あの男のようにはなれないことだって、とっくに理解していた。

彼女が手をとった男のように、一つ抜きん出た『特別』な場所には立たせてはもらえないのだ、と。

だが、諦められなかった。

だから足掻いた。

足掻いて、足掻いて――――――そして、この顛末。始末。終末。結末。

「……もう、いい」

結果として、己の手に残ったものは何であるかを考え、久留美は溜息のように呟いた。

残ったのは、悲劇。そして、結果だ。

手に入らなかったという――――――虚しさと自業自得で出来た屑

鉄のようなオワリ。

「もう、なんだっていい……わかったわよ。結局、私は余計なことばかりして一人で空回っていた……そして、全部がほしいとのたまった挙句の果てが……これよ」

――――――全てなくなった。

新條久留美という人間を支えていたものは、全て砕かれてしまった。

他ならぬ――――――新條久留美によって。

「どうでもいい……もう、どうでもいいわよ。……何もかもなくなっちゃった……新條久留美は、からっぽだもの」

「……で、帰らないの？」

「……帰って、何が残ってるのよ。……あるとしたら、何もないって結果だけよ。そんなのいらない。ここにいても、向こうにいても私の手の平の上には何もないって言うのなら……ここにいるわ。さっきみたいに……私が、消えてなくなるまで」

「……そう」

何かに見切りをつけるかのように呟いた一言と共に、久留美の首を捕らえたままの『女』の手に力込もる。

それは、先ほどのような威嚇のような加減のきいたものではない。

力は留まることなく強くなっていく。

虚ろな久留美の眼に、『女』の顔が映った。

『女』は、嗜虐ともとれる凶暴さを濃く滲ませていた。

「じゃぁ、頂戴よ」

「……何を」
「新條久留美を」
「……残り滓もらってどうするのよ」
「あんたにとってはそうでも、私にとってはまだまだ使い道があるの。……私なら、もっとうまくやれるわ」
「……」

嘲る言葉は続く。

「あんた、とんだ期待ハズレだったわ。……自分の尻も自分で拭えないなんてね。そんなにここにいたいっていうのなら……好きにすれば？　考えれみれば、その方が好都合かもしれ……いいえ、そうねきっと。あんた、いても役に立たないし」

ふんっとこれ見よがしに笑う。

「……とっとと舞台から降りなさいよ、出来損ない。あんた程度が今までやってこれた役……私みたいな代役でも十分立ち回れるわ」

もう、お前は要らない。

憤るべきところだろう。
反論すべきところだろう。

久留美は、容赦なく切れ味を持った暗喩をその言葉の中に見た。

だが、

「……好きに、すれば」

だらしなく口から零れ落ちたのは、久留美の中に溜まりつつある怠惰を表す意思だった。

「勝手に、引き摺り下ろしなさいよ……私は、もう……どうでもいいわ」

普通なら、きっと掴みかかって殴っていた。
けれど、どうだろう。

何も感じない。
そのとおりだと受け入れてしまう、今の自分がある。

これが、新條久留美だっただろうか。
新條久留美とは、何であっただろうか。

白い靄がかかったような思考の中、久留美はふと気がつく。
答えは既に出ていた。
先程自分で言ったばかりだった。

新條久留美は、もう『カラッポ』なのだ――――――と。

妙な納得を己の中に見出し、久留美は口を閉じた。

【こんなもの】が欲しいというのなら、くれてやる。
好きにすればいい。
この『女』が何をしたいかは知らないが、どうでもいい。何かできるものなら、やってみればいい。
自分には関係ない。もう、関係ない。

濃くなる頭の靄によって、思考が再び薄まっていく。
自己放棄をしたからだろう。また、少しずつ無に帰ろうとしているのだ。

だが、どうでもいい。
どうでもいい。

どうでも――――――

「……どうでもいい……だぁ？」

唸る声。

『女』のものだ。

何故か不機嫌さが滲んでいることが怪訝な点だった。

しかし、それにも興味をさして引くもなく、久留美は無に落ちようとした。

が。

「あんたが良くてもこっちがよくないじゃぁ、すっとこどっこいがあああああああああああああ――――――――!!」

さすがにスルーできずに、我に返った途端に襲う顔面右側面への衝撃。

その目まぐるしい出来事の瞬間、久留美が理解できたのは一つきりだ。

パーではなく、グーだった。

［壱百参拾九］　過去の罪業（後書き）

カマしましたね。
無理も無いと思います。戦国という厳しい時代を生き抜いた彼女には、現代っ子の甘ったれた根性はさぞかし胸糞の悪いものでしょう。

まぁ、彼女としては奮起させようとしたらちっとも手ごたえないもんだから焦ってもいるんでしょうが。

次回で、久留美ターンは一区切り。

６／２６
予定よりも次の更新分が早くあがりそうなので、予告しておきます。
次の更新は６／３０です。

［壱百四拾］　足掻きの意志

その瞬間は、久留美に不思議な気分を与えた。

叩かれた――――否、殴られたのだ。

不快。怒り。

不の感情がない。

それらよりも必ず感じるべきである痛みが、その一撃にはなかった。

かなり強く殴られたはずだった。

本来なら、歯の一本も折れても仕方ない威力であったはずだ。

だが、受けた衝撃は痛みとは何処か異なる類だった。

思考を取り巻いていた靄が吹き飛び、心に重くのしかかっていた何か重みも砕けてしまった――――己を遮り阻む邪魔なものが、一切取り払われたような感覚だけが残っている。

先程陥った呆然とはまた、今のそれは種を違えている。

その原因となるものは、とりあえずのところ一つしか見当たらない。

「……ったく、そこは打ったら響くもんでしょうが。なまじ家族に

恵まれると、こうも根性なしになるなんて……どんな時代になっても、世の中ってままならないわねっもう」

『女』は毒づいている。

その様子に、先程までの掴みどころのない雰囲気はない。

久留美の姿形に適合した気の強さとヅケヅケとものを言う口ぶりを発露している。まるで、自分を見ているような気分陥った。

否、そう断言するには少々無理を含有していた。

今の手の早さ考慮すると――――――久留美よりも、上だ。

……なんなの、一体。

久留美は、『女』の態度の急変振りに困惑していた。

そして、これが呆然となる原因であった。

「消えればいい」と先程まで言っていた者が、今度はそんな久留美に腹を立てて殴った。

付いていけない展開に対する疑問。

それが、呆然の正体であった。

「……もう、やめた！　……全部理解させて、納得させた上で送り返そうと思ってたけど……そんなまどるっこしいこと付き合い切れないっつーのっ！！」

何か自分の中での大きな予定変更を決定した様子の『女』は、ギ

ロリと久留美を見下ろして、

「聞け、この馬鹿オンナ」

『女』は殴られた際によろけて、そのまま座り込んだ体勢にあった久留美の胸倉を引っ掴んで、ぐいっと立たせる。

そして、腰を折って顔をグイッと近づけた。

「……とりあえず、今までの総まとめで説明して【帰す】わ。あとは自分で勝手に納得して、なんとかしなさい。生ぬるい時代をグダグダ好き放題生きて来れた甘ちゃんに、親切に根気よく理解を促そうとするほど私は優しくは無いんだから」

『女』はがさつさを滲ませた言い分を言うだけ言って、その本来の性分のなりを潜ませると真剣な眼差しで久留美を釘刺す。

「……時間が無い。私と接触していても、あんたは存在が危ぶまれる。本来、私らはこうして面と面を突き合わせることなんてあっていいわけじゃないからね。……正直のところ、あんたには消えてもらっちゃ困るのよ」

「……さっき」

「人間の根底が変わらないっていうなら、絶対に剥きになって歯向かってくると思ったからね……てんで、期待はずれだったけど」

やれやれ、と『女』は言いたげに息を吐いた。

わけがわからない。

「……一回しか言わない説明しないからね。あんたは、もう普通の人間じゃない。世界に【悲願】の【代償】としてあんたの【日常】を売っ払って、【非日常】で生きる権利と力を手に入れた」

「……売り……日常？」
「正確には、あんたの中の日常性を象徴するモノよ」

日常の象徴。
思い、そして浮き出てくるのは己の家庭。
ソレを構成する――――――家族。

「……違う、私はあの人たちを売ってなんか」
「あんたは終夜千夜を選んだじゃない」
「違う、違うっ！　私は日常を選んだわっ！」
「嘘つけ、あんたは何も無くさずに全部を得ようっていう腹積もりだったでしょうが。……そうは問屋が卸さないっていうのよ。餌ケチって大物釣れるなんて甘い話が転がってくるわけないでしょ。……ましてや、あいつが相手じゃ……餌箱ごと放り込んでも足らないわよ」
「……足ら、ない？」

両親を失くしても、自分はまだ何か奪われなければならないというのか。
久留美はその言葉に、戦々恐々とした。

「ええ、そうよ。もっとも、今のあんたには【あんた自身】しか残っていないけどね。でも、ここで渋ったら全部おじゃんよ。だから……早く帰りなさい。そうしないと、手遅れになる。……あんた、本当に何もかも失うわよ」

帰る、とは――――――現実へ戻るということだろう。
そこで待っているのは、逃れようの無い『喪失』した事実。
そして、

「……いや、帰りたくない」
「……」
「帰れるわけない……だって、私……」
現実には、千夜がいる。
自分の罵詈雑言を受けた後、千夜が静かにその場を立ち去っていった。
あの後何処へ行ってしまったのだろう。
まだ、月守学園にいるだろうか。
そもそも東京にいるだろうか。
いても見つけられるだろうか。
否、それよりも――――――
「今更、どんな顔して……あいつに会えば……。許して、なんて……くれるわけ」
「――――――そうじゃないでしょうが」
決め付けるような否定が放たれた。
あまりにも躊躇のない言葉に、久留美は思わず言葉を止めた。
「許されることが、あんたの望みだったの？　……あんたが、何もかも犠牲にしてまで欲しかったものは……そんなものだったわけ？　違うでしょうが。そうじゃないでしょうが」
突き詰めるようなキツイ口調だが、それでも何故か諭しているよ

うに聞こえる。
矢継ぎ早にただ言いたいことを吐いているのではなく、久留美に理解を促すことを意識していると感じた。

「……あんたは、本当にもう何もないわけ？　だったら、何でさっきから未練がましくぼやいているのよ」

未練――――？
言葉の中に混じった言葉に、久留美は己を顧みた。

帰りたくないのは、何故か。
それは、千夜に会いたくないからだ。会えないからだ。

今更、どんな顔をして会えばいいのだろうか。
会ったらなんて言われるだろう。
顔を合わせてくれなかったどうしよう。そうなったら、自分はどうなるだろう。

きっと、絶対に壊れてしまう。
そうしたら今度こそ本当に、何も――――――

「……――――――ぁ」

突っかかりが取れたかのように、声がぽとりと落ちる。
どうして、気づいてしまったのか。
気づかなければ、きっと蹲いたままでいられただろうに。

真正面から気持ちを向き合わずに済んだだろうに。

「……っ、でも、でも……もう、どうしようも」

「ないわけ、ない。あんたは、生きている。それだけで十分まだ余地はあるわよ。愚図のクセに、愚図なりに根性あるじゃない」

『女』は意地悪そうに笑う。

だが、嘲弄や見下すような雰囲気は無い。

初めて『女』が、普通に笑っていた。

それが自分の顔であるというのは、久留美には些か奇妙かつ複雑な気分だったが。

「……本当に、どうしようもないっていうのは……私みたいなのを言うのよ」

不意に『女』が、それまでとは何処か異なる重い口調で言葉を漏らした。

表情も翳りに帯びている。

「自分を失敗を棚に上げて……ツケも責任も全部押し付けた上、あんたに八つ当たりしてるんだからね」

胸倉にかかっていた負荷がなくなる。『女』は手を離し、今度はちゃんと腕を掴んで久留美を立たせた。

幼い容姿のままの久留美の背中に手を回して、ポンポンと撫でる。

「……あんたは、まだ大丈夫。だから、早く行きな。あんたは……まだ手が届く距離よ。走れば、間に合う」

不意に、見上げて見ていたその眼が、ここではない遠くを見るように虚ろになった。

「……私は、もう駄目。……届かない。あいつは、もう……遠くに行っちゃったから」

「……？」

『女』は、既に自分の世界から久留美を弾き出して、己のある部分に記憶浸っていた。

「……どうして、追いかけなかったんだろう。あの時……走っていれば、間に合ったかもしれないのに……どうして、どうして……」

ブツブツとしきりに呟く『女』は一見すると、正気を失っているようだった。

だが、久留美にはそれがつい先程までの自分自身に見えた。

そして、気づく。

この『女』こそが、本当に失ってしまっているのだと。

だからこそ、『女』は自分に対してあれほど怒ったのだろう。

だからこそ、『女』はこうして自分を奮起させているのだろう。

諦めてしまった先に何が待つかを、『女』自身が誰よりも知っているから。

「……好き、だったのに」

ポツリと漏れた言葉に、久留美は目を見張った。

「……すき、だった……のに」

拭いきれない後悔。

零しても尽きない懺悔。

それは、『女』にとって全てとも感じられるような、哀しくも虚しい告白だった。

「……行きな」

「……ぇっ」

突然、それまでとはガラリと変化を遂げた――――――というよりは、変貌するまでのハキハキとした口調が命じた。

「あんたの一番の後悔を、返上してこい」

「……あんた、一体」

何なの、と続いたところで、『女』は再び笑った。

自嘲を滲ませた苦笑いだった。

「亡霊よ。……生きていた頃の後悔を死んだ後も引きずって……

…あんたに遺した、傍迷惑な亡霊」

亡霊。

そのなんとも寂しい響きを含んだ言葉は、不思議と胸にしっくり

馴染んだ。

その時だった。

『女』が一歩後ろに下がったと思った矢先、胸を軽く突くような力を感じたのは。

「あ……っ」

僅かな力を受けただけのはず身体が、あっさりと重心を乱して後ろへ倒れていく。

その最中、咄嗟に久留美は『女』を見た。

「元気でね。――――――さよなら」

傾いていく視界で、女は笑っていた。

二度目の邂逅はない、と言わしめるばかりに。

そして、まるでエールを送っているようだった。

◆◆◆◆◆

一瞬の落ちる感覚。

久留美は、跳ねるように覚醒した。

「――――――――――っ、ぁは！」

地面に叩きつけられるような錯覚と共に、久留美は目を見開いた。

そのまま、暫し呆然と荒い呼吸を繰り返す。

「……はぁ、……あ……は……あ、ぁ……っ」

額に汗がじわりと吹き出た。

それを皮切りに、全身の毛穴から汗が潮噴く。

じんわりとした不快感が、久留美に生の現実の実感を与える。

「……」

視界には、無機質な部屋の間取りと、窓から見える焼けた空。

部屋を見回した印象として、ここは病院であるという推測が立った。

そして、時刻は夕方。まもなく日が暮れるところだ。

久留美は、ぼんやりと朱色に燃える空を見た。

「……、……っあ！」

その瞬間、久留美の脳裏を映像が目まぐるしく駆け巡る。
おさらいとでもいうのか、大量の場面が恐ろしい勢いで久留美の脳を走駆する。
瞬く映像が混乱を招き、久留美は思わず頭を抱え込んだ。

「……あ、ぁ、あああああああっ！」

悶え苦しむ時間は、僅か三十秒にも満たなかった。
あっという間に、置いてきた記憶が久留美に収納された。

久留美は、放心したように目を見開いたまま天井を仰いで固まった。

「……ぁ」

身体から、また何かが滲み出た。
今度は毛穴からではなく、両目からだった。
とぷり、と溜まり、伝う。

理解が終了したことによる出来事だった。

今の久留美には、拒絶して隔離しておいた記憶が全て収められている。
惨劇の中で何を失ったのか。
惨劇の中で何を間違えたのか。
惨劇の中で何を得たのか。

そして、加えてあの深層世界での出来事。

「……帰って、きたの……ね」

流れる涙をそのままに、久留美は己の現状を口にした。
逃れようの無い己の確かな現実。

帰ってきた時点で、逃避は終わった。
動かなければならない。動かざる得ないのだ。

意思とは裏腹に身体は酷く重くだるい。腕も、足も。
それでもなんとか首だけは動かす。

「……っ」

室内の間取りを確かめる中で、ふと眼に入った棚で視線の移動は止まった。

棚の上に、何かある。
意識が、視界からのその情報を処理する。

この空間にて興味対象として最優先となったそれに近づくべく、久留美はだるさを無視して半ば無理に体を起こした。

足を地に付ける感覚に、久しいという妙な気分を覚えた。

それを踏み越え、久留美は寝ていたベッドの傍ら設置されている棚へと近づいた。
花が挿された花瓶と共に置かれた『何か』は、久留美の覚えのある形をとっていた。

「……これは」

羽根を模ったバレッタ。
母親のモノだ。
そして、今は――――――形見となった遺品。

「どうして、こんなところに……」

疑問を思った矢先、

「――――――――――っ」

割り込むように展開する記憶があった。
それが――――――最後に、これを身に着けていた人物に関する情報だった。

「千夜っ……」

バレッタを思わず手に取り、胸に抱く。

彼女がここにきた。
そして、これをここに置いていった。

それが意味すること――――――

「……何で、よぉ」

声にまで涙が滲む。
ずるり、と久留美は崩れ落ちるように膝を床に着いた。

「……何か一言くらい、言ってから……いなくなりなさいよぉ……」

手の中にあるものは、久留美と千夜の最後の繋がりだった。
だが、それは千夜の手中にあるうちならばの話だ。

今、ここにある。
久留美の元へ戻ってきた。
ソレが意味することは、たった一つだ。

千夜は――――久留美との別れを済ませた。
そして、おそらくはもう二度と――――

「何でよっ……恨み言の一つや二つ……書き残していけばいいじゃないっ！　一発でも殴っていけば……いいじゃないのよっ！」

あの時と同じだ。
違うのは、何か残したか否かだ。

だが、そんなことはどうでもいい。
別れが逃れようが無くとも、それでも欲しかったものがあった。

「……何で、皆……”さよなら”も言わないままいなくなるのよぉ……っ」

さよなら。

せめて、その一言だけでも残してくれたら――――きっと、別れを受け入れることが出来たのに。

わぁ、と久留美は泣いた。
何処へ行けばいいかわからなくなった迷子のように。
追いかけるべきだった背中は、今は何処を見てもありはしない。
置いていかれてしまった。
もう、どうすればいいかわからない。
「もう……いやぁ……！」
全てを受け入れて立ち上がるには厳しすぎる条件に、久留美は叫ぶように音をあげた。
そのまま、叩きつけるように何もない左の拳を床に振り下ろし、そのまま泣き伏せる。
荒れ狂う感情に任せ、吼えるように泣き声をあげようとした。
「――――――――なんだぁ……おいていかれちまったのかお前」

その瞬間。

寒気のする声が、ねっとりと流れ込んできた。

扉の開く音に、久留美は顔を上げた。

「――――――連れて行ってやろうかぁ？」

徐々に開いていく、その扉の向こうには――――――

［壱百四拾］　足掻きの意志（後書き）

久留美パートはとりあえず一旦終了です。
次はようやくメイン二人のパートです。

さて、自サイトでの再アップもそろそろ残すところ五十話分くらいになりました。そうなると自然とあのＲ１５指定部分もあげざるえなくなるのですが……あれはアップします。間違いなく。

しかし、こっちの方でもまだ至っていない完全Ｒ指定部分はどうするかということに。全年齢対象のネットランキングに登録しているもんですからおおっぴらに載せるわけにはいかないんですよね。いろいろ考えて出した結果が、ａｂｏｕｔに書いてあるのであっちを覗いてくれている方は目を通しておいてください。

［壱百四拾壱］　黄昏の待合

空の紅潮が達する頃。
蒼助は、宮下公園にいた。

千夜との出会いの場所。
闇雲に単車を走らせた果てに行き着いた先だった。

確証は無かった。
期待も無かった。
ただそこには、想像通りの光景があるだけという虚しさが待っていた。

蒼助は、虚無感を抱えたままそこに立ち尽くした。
もう、動くことはできなかった。

疲れや諦めではない。
動こうと思えば動ける。
諦める気は更々ない。

だが、走り出して気づいた。
ただ闇雲駆け続けていても、まったくと言っていいほど埒が明かないのだ。

気が付けば、日が暮れようとしている。
このままでは動いても動かずとも時間はただ無駄に過ぎていく。
走れば走るほど見当違いな方向へ走り、千夜との距離が開いていくような気さえした。

「……っくそ」

焦りだけが募る一方で、打開策は見えない。
前にも後ろにも引けない状況が、蒼助をその場に縛り付ける。

「――――――――こんばんは、おニイちゃん」

傍で聞こえた幼い声に、蒼助は我に返る。

「今日の夕焼けは綺麗だね」
「……」

己の傍らを一瞥した先には、いつの間に現れたのか一人の子供がいた。
背中にはランドセル。両手には、サッカーボールが抱えられている。
顔には無邪気な笑顔が――――――”貼り付いて”いる。

「まるで血塗れだね……ふふっ」
「……おい」

子供らしからぬ含み笑いを零す子供に、蒼助は冷ややかな眼差しを放る。

それはとても幼子に向けるものではない――――――殺意に近い敵意が宿っていた。

「……獲物にするなら、他を当たれ。俺じゃ、てめぇの腹は満たせねぇぞ」

「……ははっ、何だ。バレちゃったのか」

悪びれた様子もなく笑う様は、見たままどおりの「らしさ」だ。

だが、違う。

子供ではない――――――魔性だ。

日が暮れだした。

魔性が出現し出す時間帯である。

活動時間に入り始めているのだから、外がまだ完全に暮れていない状態で現れてもおかしくはない。

「この【形】は、けっこう”評判がいい”んだけどね。……夜になって近づいても迷子だと思って簡単にだまされてくれるし」

「そりゃまた脳みそ煮えた連中が多いことで……で、俺をそういうのとくくって見たと？」

頷いたら、この場で頭を吹き飛ばしてやろうと思っていた。

だが、

「……いやぁ、そういうんじゃないよ」

蒼助の予想とは裏腹に、魔性の反応は実に冷め切ったものだった。

思わず見た表情からは、憂いめいたものが滲んでいた。

軽く蒼助は目を見張った。

経験上、そして記憶の中には、魔性がそんな表情を浮かべているものなどありはしなかったからだ。

人間くささ。

本来の道から外れると同時に失ったはずのものを、目の前の魔性は感じさせる。

「……気分じゃなくてね。まぁ、おニイちゃんが普通の人でも退魔師でもどっちでもよかったんだ。その気ならここで滅ぼしてくれても構わないよ。……そうじゃないなら、一緒にこのまま見物しないかい？　……東京最後の日の夕陽を」

「――――――は？」

「……不思議なものだね。もう何十年も前に【人間】を捨ててしまったはずなのに……いざ終末となるとこんな愁嘆とした気持ちになるなんて。それとも……【終わり】に対して抱くものは、人間も魔性も同じってことなのかな？」

魔性の言葉は突飛なものだった。

終わり。終末。

東京最後の日。

何を言っているのか、さっぱり理解が追いつかない。

「おかげで食欲も沸かなくてね……。他の連中は、最後だからこそ

食い意地はっているのもいるけど……僕は、満たしても意味の無い食欲をどうにかするよりも……最後くらいは普段はしないことをしてみようと思ってね」

「おい、さっきから何を……」

「……何だ、おニイちゃんもなの？」

蒼助の様子で、自分の話をまったく理解していないことを汲み取ったと思しき魔性は、呆れたように半目を向けた。

「こんなんじゃ、やっぱり今度こそこの街はダメになんだね。……いよいよだなぁ」

「っ、お前ふざけてっと……」

「――――――ふざけてなんていないさ、若造」

声色が微妙に低くなる。

だが、雰囲気はがらりと変わった。

子供の外見にはそぐわない老獪な臭いが漂うようになった。

「……これでも【この道】は長くてね。長生きの秘訣は、過ぎた野望を持ちすぎないことさ。おかげで大した力も勢力も持っていないが、ひっそりと長く生きながえてきたよ」

「……それでその格好か」

「これは、割と最近だよ。習慣として、半年に一度は姿を取り替えるようにしているんだ、〝おニイちゃん〟」

わざらしく強調が効いた呼び名に、うんざりとした気分が沸く――――が、

「……終わりって、何だよ」

「……言葉どおりさ。この街は、もうすぐ終わる。もうすぐ……そう、今夜だね」

何かを悟りきった様子で、魔性は呟くように告げた。

「……まぁ、おかしなことではないんだよ。”二十年”生きながらえた……実際のところはそれぐらいのことなんだよ」

「――――――二十年……！？」

「……二十年前に死に絶えるはずだった街がなんとか延命され続け……十七年持ちこたえたところ、いよいよかと思ったらまたなんとか三年……そして、今度こそもうどうしようもないと来ている。来るべき時が、来たのさヒトの子」

「来るべき時……だぁ？」

「この東京が喰われる時だよ。……人間も、魔性も。あらゆるものが、今宵【孵るモノ】に蝕まれ、侵され、奪われ、呑まれ――――――朽ちる」

魔性は、絶望を映す眼で謳う。

「可愛そうに。きっと、知らない奴は知らないまま死ぬ」

魔性は、希望を見つけられない眼で嘯く。

「可愛そうに。きっと、知っている奴は恐怖に怯えて死ぬ」

知っている者も知らない者も、みんな死ぬ。

そう紡いだところで、

「……でも、一番可哀相なのは……たった一人だけ死なせてもらえない【お姫様】だ」

溜息と共に、誰と知れない者たちにではなく、ただ一人の特定の者へ言葉を吐き出し始めた。

「彼女は死なせてもらえない。奴の暴走する欲望と支配欲を満たすためにずっと生かされる。犯される。暴かれる。貪られる。……この世界そのものが、終わる時まで」

「……おひめ、さま？」

「僕らの間で広まっている噂の、さ。……奴は――――――【かぐや姫】と言っている」

不確定を明確とさせたその言葉を耳にして、蒼助は硬直した。

「毎夜、奴は何処かで飽きもせず卑猥なポエムを発していた。だが、昨夜はちょっと違った。奴の妄想は、どうやら今夜現実となるらしい。……穢れたカミが生まれ、気高き神姫は犯され……東京は、一夜にして穢れで滅ぶ」

予言者めいた口ぶりで魔性が蒼助に語った。

そこへ、

「――――――っ！」

蒼助は、ズボンのポケットの奥で携帯電話が震えるのを感じた。

今日初めての着信だ。

その瞬間、蒼助は魔性を己の世界から排除し、ポケットの中の震えにのみ全意識を捧げた。

自分でも驚くほど素早くそれを取り出す。

そして――――――

「今度こそ、東京はダメだ。なにせ、もう窮地を救える人間がここにはいない」

既に聞こえていない蒼助に、魔性はそう零した。

◆◆◆◆◆◆

緋の色染まる廊下。
まるで、血染めの道のように思えた。

だが、まだ気が早い。
それの上を歩むのは、もう少し先であり、それはまだここにはないのだから。

「……失礼します」

到着として立ち止まったのは、職員室前の扉だった。
手荷物を持つ左手とは対を成す方で、それを引き開けた。

一見して、無人――――――かと思われたが、

「はい、どうぞ……って、何だお前か」

姿を捕らえるよりも先に、声がした。

ガラリと気配が希薄な空間に、それでも人がいることを知った千夜はその相手を探した。

その人物は、己の死角――――――真横の右の方向にいた。

「……蔵間、先生」

「よう、終夜千夜。遅刻にしても随分遅過ぎるんじゃないか？　ちなみに、今日は離任式なので、午前で授業は終わりでーす」

「……なるほど」

今日が木曜日の休日の振り替えとして授業が開かれるのは知っていたが、そんな催しがあるのは知らなかった。というより、興味が無かった。

「教員もみんな帰ったようですね。それで、蔵間先生は……」

「この休み入る前に提出させた課題を確認中」

「自宅に持ち帰ればよろしかったのでは」

「狭い自分の家でやるよりも、誰もいない広々とした職員室を貸し切ってやった方が、気分がいい」

「……そうですか」

今度は蔵間が問い番であるという空気の変化を、千夜は察した。

「で、お前は？」

「机の上に置いていこうと思っていました。けれど、本人がいたの

なら話は別です。今、渡します」

手に持っていたものを、差し出す。
それは、薄っぺらい紙を三度ほど折りたたんだものだった。

「……退学届、ねぇ」
「本日をもって、この学園を退学させてもらいます」
「一昨日の件は、解決したと言ったはずなんだが」
「あれとは異なる個人的な理由と諸事情による希望です」

一方的に理由を押し付けると、その退学届けの用紙も同様に渡した。

「……はいよ、そんじゃ預かっときますかね」
「お願いします」

失礼します、と千夜は背を向けた。
室内と同様の緋色に染まるその背に、

「新條久留美が、病院から消えたそうだ」
「――――――」

ピタリ、と動きが止まる。
蔵間がその間に連続的に言葉を投げつける。

「……結界が汚染されていたってよ。犯人は確定だな。奴としては、まだ駒として使えると見ていたらしい」
「……生きて返すから、その後は頼む」
「奴の居所は見当が付いているのかよ？」
「……白々しい質問だな。他はともかく、あんたは知っているだろ

うが」
「教えたところで、うちじゃどうにもならん。奴の先手必勝だよ。……場所が、悪過ぎる」
「……確かに、な。そう思って放置していたのは、俺も一緒だから……文句は言わない」
「それでも、行くのか？」
「誰かがやらねばならない。でなきゃ、今夜東京が終わる」
「何度も終わりかけては助かってるけどな。……また、救ってくれるか？」
「これで最後だがな。それに、あの時のやつは俺だけの手柄じゃない。……十三課の連中は元気か？」

蔵間の言葉によって引き出された記憶が、無意識のうちに千夜に言わせた問いだった。

「元気だよ。……下手するとそれも今日までかもしれないけどな」
「見くびるなよ。……霊力を失い落ちぶれようと番外だろうと、俺は真神の戦鬼だ。喰うと決めた獲物は喰い残さないし、喰い逃がしもしない。そして、明日は来る。今日で俺が終わろうとも、必ずな」
「……ナリが変わっても、相変わらずだな。いや、むしろ磨きがかかったか？」
「あんたも相変わらず性悪だ。……あいつと付き合っていると悪化していく一方だぞ」
「その分長生きできるもんだ。人がいいことはイコールで早死にする。お前みたいにな」
「短く終わるが、たくさん得るものがあった。問題はない。むしろ、良い結果だ」

向けられた背中から動く気配を感じた蔵間は、

「……このまま行くのか？」
「別れを告げる相手がまだ二人残っている。それを済ませてからだ。……ここで、一人終わらせる」
「……よりにもよって、俺の大事な弟分をなぁ。ったく、やるなら徹底的にやってから行けよ……？」
「……ああ」

蔵間には見えない角度で唇を噛み締めた後、

「後は追わせない。死人になる人間への未練も引きずらせない。……あいつとは、ここで一切終わりだ」

断つように強く言い切ると同時――――――千夜と蔵間は、カタンと閉じた一枚の扉に隔たれた。

◆◆◆◆◆◆

蒼助はバイクを駆り、疾走していた。
周りなどほとんど見えていなかった。
ただ、目指す場所だけがその視野の限りとなった。

少し前に携帯電話に届いた――――――メールによって。

目指すは、月守学園。

千夜を探す為に去った場所に、今また戻ろうとしている。

何故なら――――――

『月守学園にいます。

２－Ｄで待っています。

終夜千夜

』

内容にはそうあったからだ。

居場所。そして、意図。

全てが短く簡潔な文章の中に記されていた。

何か考える余地や躊躇は無かった。

至る場所への最短の近道を見つけた蒼助は、余計な思考や詮索は捨ててただ「走る」という選択をとった。

他にも交通手段はあるはずだった。

単車を駆るよりも早く着ける方法が。

しかし、単一化した蒼助の思考回路は既にろくに動かない。

まるで支配されたように、一つのことだけを追い、叩き出す。

――――――急げ、と。

途中で人を撥ねたりしなかったのは奇跡だった。
それほどに今の蒼助は無茶苦茶の状態であった。
一人の人物に、元の状態を僅かとも留めないほどに内側をかき回されている。

もはや治めようの無い焦燥と昂ぶり。
止まってしまえば、その瞬間に中から爆発してしまいそうだった。

「――――――っ」

学園の校門は閉まっている。
当然といえば、当然のことだった。
授業は午前のみであり、午後も一、二時間を特別行事に使用する程度のことで今日という開校日が特別に設けられたのだ。

「……ちっ、こんな時に」

ここで蒼助の思考は一旦冷静さを取り戻し始めた。
生ぬるく冷めた思考が思ったのは、疑問だった。

千夜は本当にここにいるのか、と。
そもそもあのメールは千夜が送ったものなのだろうか。
誰かが彼女を語って何らかの目的で自分を誘き出すために――――
――

疑惑が拍車がかかりそうになったところで、蒼助はソレを振り払

うように頭を振った。

疑ったところで仕方ない。

どの道、今の自分にはこれ以外に手がかりがないのだから。

蒼助はそうして己の疑心に区切りをつけて、閉ざされた学園内へ入ることを決めた。

「……裏口は……っつっても、どうせ閉まってるだろうしな」

完全に日が暮れる――――――六時を回る前ならば学園警備システムの動き出しさないはずだ。

蒼助は、目の前の門を睨むように見据え、

「……いっちょやるか」

ちょうど今は人通りが少ない。

やるなら、今だった。

「学校の校門を飛び越えるなんて、ドラマぐらいだと思ってたけどな」

苦笑い。

それでも、本気の目で次の瞬間には行動した。

◆◆◆◆◆◆

霊力による身体強化。
戦士型や術士型問わず、退魔師の基礎的な術式だった。

それすら出来ずに馬鹿にされ悔しく歯噛みした過去の日々が嘘のように、蒼助は今はそれを易々とこなしていた。

背丈の二倍はある門を、十三ある階段も、あっさり一っ跳び出来てしまう。
一週間前の自分は目を丸くして、夢だと思うだろう。

だが、夢ではない。
自分は変わった。

目的を見失ったままおちこぼれのレッテルを甘んじていた怠惰なロクデナシは、もういない。今あるのは、目的を見定めそこへと馳せ参じようとする男だけだ。

たった一度の跳躍で一つ階段を跳び越え、二度目で廊下へと出た。
二手に分かれた道の右の方を見遣れば、緋色の染まる回廊が続いている。
右から数えて左の方へ２－Ｄの教室がある。

すぐさま向き直り、蒼助は駆け出した。
息切れはない。だが、心臓の動きは激しい。

待ちに待った瞬間が近いからだ。

彼女はいるだろうか。

いたとして、何を話せばいい。何から聞けばいいだろうか。

駆ける中でいろいろ考え、最終的に行き着いた結論は、彼女の存在をしかと目で確かめることだった。他はそれからだ。

走っているはずなのに、己と周囲の動きは酷くゆっくりに見えた。感じた。

しかし、それも蒼助の麻痺した感覚に振り回されない現実には関係ないことだった。

終わりはすぐだった。

「――――――かずやっ！」

ガッとドアの取っ手に五指を差し入れて、掴むように引く。

同時に求める相手の名も叫んだ。

そして、

「――――――何だ。本当に来たのか」

酷く明るい声がそれに答え、出迎えた。

【壱百四拾壱】　黄昏の待合（後書き）

やっと、二人の再会。

【壱百四拾弐】　夕暮れの教室

紅く彩られた教室。
黄昏色に染まった千夜。

それらが視界を満たした瞬間、蒼助は既視感を受信した。

覚えがあるはずだった。
転入初日、千夜と『再会』したシチュエーションとまったく同じ状態なのだから。

しかし、思考回路の片隅で、「否」と応える自分がいた。
あの時と『まったく同じ』ではない、と。

その小さな蒼助は、嫌な予感を覚えていた。
どうしても受け入れたくない現実の接近を感じて、やかましく喚いている。
なんとかしろマズいぞ、と。

「……正直、来てくれるとは思っていなかったんだがな」

蒼助を我へと返したのは、千夜が呟いた言葉だった。
自我を取り戻した蒼助は千夜を見た。

改めて確認する相手は、ちょうど向かいの窓一枚の隔ての先にある夕陽と向かい合うように立ち、こちらとは背中が対面していた。
ただ、顔はこちらに傾けられていた。

しかし、夕陽の光が影を差してしまっていてよく見えない。

確かにわかるのは、服装くらいだろうか。

格好は至ってシンプルだった。

紺のタンクトップ。グレイのスラックス。その上に被せているのは、膝下まであるロングコートだ。

黒のコートは緋に染まることなく、己の意地は揺るがないことを見せ付けるかのようにそのままだった。

蒼助は、その風体から静かに感じとった。

まるで――――――これから戦場に赴くようだ、と。

そんな縁起でもない予想を急いで思考の隅っこに寄せて、

「……何で、だよ」

いろいろ聞きたい事は頭の中にたくさんあったのに、全て候補から外されて出てきたのは別の質問を問う言葉だった。

すると、千夜は少し困ったように笑った――――――ように見えた。

「だって……もう聞いているんだろう？」

肝心なところを全て省いたその確認の言葉が何を暗喩しているのか、少し考えて答えに行き着いた。

「……それは」

「まぁ、あいつらがしたことを責めてはやるなよ。付き合いのあるお前の身を案じてのこともあったのさ。……第一、俺は確かに怪しすぎる。やつらの言い分が正しい」

「無理だ。もう、殴っちまった」

「……ま、いいんじゃないか。俺もプライド傷つけてしまった

から、人のこと言えない立場だしな」

しょうがないよ、と後付けすると、

「あいつらから聞いたことは、本当だよ。……名前も経歴も全部嘘。【終夜千夜】なんて人間は、いない。ここに来る前に名乗っていた【御月千夜】も、な」

本人からの決定打。

事前に覚悟をしていても、現実は蒼助の思う以上にズシリとのしかかった。

しかし、

「……ただ、一つだけあいつらが言っていたことの中で不正解がある」

「なに……？」

「【千夜】という人間は、いた。それは確かに実在の人物――――だった」

過去形。

何を意味するかは、一つしかない。

「……三途や朱里と出会うよりも前に、僅かだが一緒に暮らした女がいた。家族として、な。その時に呼ばれていた名なんだ。【千夜】というのは、その女の死んだ子供の名前だったんだと。気に入ったからそのままもらったんだ」

「……」

「この流れからいくと、次は本当の名前を明かすところだが……ここも、まぁある意味お決まりな話でな。……ベタなことに【無い】

んだよ。コードネームみたいなものはあったが、本名かと聞かれると答えにはならんだろうしな」

くるり、と千夜はようやく蒼助を向いた。

ようやく見えたその表情は穏やかな体を保ち、されどその奥に何か潜んでいるか全く悟らせない。

鉄壁の表情を貼り付けて、千夜は蒼助と真正面を切って相対する。

「他にもいろいろ聞いているんだろう？　俺が前に学校をいられなくなったのはこの体質のせいだけじゃないとか。神崎の生存も。俺はお前に大事なことをたくさん黙っていた。……俺が、この件にもっと深いところで拘わって――――――」

「――――――もういいっ！」

蒼助の叫びにより、話を中断となる。

千夜は無理に続けようとはせず、会話のイニシアチブは蒼助に委ねられた。

蒼助は、一度渇いた唇を噛んで湿らせ、

「……お前が、何処の誰だって構わない。本当の名前が何だろうと、無かろうと別にいい。【本物の千夜】が死んでいようが……俺はどうだっていい」

「どうだってよくはないだろう……？」

振り払いきれない雑念を言葉にした千夜の声に絡めとられそうに

なるが、それを振り切るように声を強くし、

「っ、――――――お前は終夜千夜だ」

「何を言って」

「終夜千夜だろうがっ！　少なくとも、俺が出会ったのも、俺が好きだ惚れたとのたまったのも。……この学園で、この教室で……当たり前のように学校生活を送っていたのも……お前だろうが――――【終夜千夜】！」

「――――――」

千夜の表情から笑みが消えた。

能面のような凝固した貌。

しかし、何らかの変化を投じることが出来たのは確かだと手応えを感じた。

「名前が嘘でも、過去が嘘でも……それだけは嘘じゃねぇだろう！　今が嘘だって言うのなら、これから本物になればいい……この先、ずっと終夜千夜であり続ければいい。……嘘ってのは、事実がどうとかじゃねぇだろ。お前が、心からそうありたいかそうじゃないかだろう！」

「……蒼助」

「嘘だって、ずっとつき続ければ……貫き通せばいつかは本当になる。お前だって、そうだ。ずっと、ずっと……【終夜千夜】でいればいいんだよ……っ！」

言い切った後、ここまでくるのに走りぬけた疲労も積んで襲い掛かってきた。

緊張は治まっていないが、それまで溜め込んでいたものも一緒に

吐き出してしまったせいか、少しだけ肩の荷が下りたような気がした。

蒼助は呼吸と調子を整える中で、千夜を見た。

何かを考えるように千夜は目を閉じていた。

そして、沈黙が一分ほどに達しようとした時、

「――――――ふっ」

微かな一笑。

苦笑いとも失笑ともとれない。

困惑する蒼助に理由を弁解することも無く、千夜は笑みを乗せたまま唇を動かす。

「……お前なら、そう言ってくれるんじゃないかと……思っていたよ」

「あ？」

「前に、お前と同じようなことを言った人がいた。……俺に、【千夜】という名を与えた女のことさ。俺が死人の名前などいらないと言ったら、今のお前が言った台詞みたいなことを言ったよ。もっと偉そうだったけどな」

千夜は長い前髪を無造作に掻き上げ、

「……ちっとも似ていないのに……何故か、時々被る。だが、理由に関しては……わかった気がする」

くしゃり、と掻く手が髪を握ると同時にその答えが打ち明けられる。

「――――――お前は……あの人と同じなんだな」

懐かしさと哀しさが入り交ざった声色だった。

「……今こうして考えてみれば、似てるところは結構多いんだよな。俺の【砦】をあっさり看破していくところとか。理解できやしないのに、受け入れるところとか。わざわざ俺を選ぶ節穴っぷりとか。……俺に近づくたびに、お前があの人に近づいていって」

千夜は、蒼助を見た。
じっと見つめる。

しかし、その刹那、

「――――――きっと、最後はぴったり重なるんだろうな」

その視線は、遠くを見つめる眼差しとなった。
ここではない場所を見つめ、ここではない時間を想う眼だ。

それを洞察した蒼助は、無性に胸を掻き毟りたくなった。

「あんな価値観が常人のそれから３６０度も反転した物好きは、人生で一人出会うのも稀なはずなんだが……俺には、つくづく妙な類が寄って来るんだな」

お前もなんだな、と己への確認のように呟くと、視線がまっすぐに蒼助へと放たれ、

「……なら、俺から離れてくれ。あの人のようになる前に」

ついに直接口から出た拒絶に、蒼助はとうとう我慢できなくなる。

「――――――っいい加減にしろよ！」

一刀両断せんとばかりに強い語調で千夜に咎めを示す。

前進を要請し続けていた両足は、願い叶ったりと進み出し、

「用件が一方的過ぎてちっともわけがわかんねぇんだよっ……大体だなぁ」

「……来るな」

「っ……その台詞も、言うなら言うで……」

ぐいっと伸ばした腕で、千夜の右肩を掴み、

「――――――【俺】をちゃんと見て言えっ！！」

「……っ」

急激な接近が、千夜の目を見開かせる。

蒼助の言い分どおりとなった瞬間だったが、

「……」

それも言葉どおり瞬間という僅かな時間にしか及ばず、再び目を伏せた。

その変化を見た蒼助は、やはり、と思う。

様子がおかしい。
ここに来るまでの言動も同様であり、先日の夜に見せた取り乱した姿ともまた違う。
あの時にはあった揺さぶりをかける場所が、今の千夜には無い。
何かを決め込んでいるようだが、その全貌が蒼助には全く掴めない。

蒼助の言葉も、千夜に反応を起こさせてもその胸のうちにあるであろう『何か』にまでは届いていないのだろう。

「……六年」

俯いた顔から不意を打つように零れた言葉は、年月の数えだった。

「……何だ？」
「――――俺が、俺を探し続けて。俺が、俺を考え続けて。……俺が生きてみて……六年が経ち、六年分の記憶が出来上がった」

ただごとではない年月であるということは理解できた。
記憶の無い彼女にあるのは、たったそれだけの記憶。

六年。
今、この瞬間までの彼女の持つ時間――――彼女の全て。

「……昔、俺に決定的な死が訪れる瞬間があった。そして、俺はそれを待つばかりだった」

語り出した千夜の言葉に、いつも力はない。

ただ淡々と語る。
あの夜の感情的なものとはまったく対極の形で、己のことを。

「……それに対して抵抗はなかった。理由も必要も意志も意味もなかった。生きているという実感はなかったし、死ぬという実感もなかった。まるで他人事のようにしか受け取れなかった俺には両者の判別などつかなかった。想像もできなかった。……当たり前のことかもしれない。自分の過去のこともわからない人間に、現在はわからない。そんな奴に未来なんて想像できるわけがなかったんだから」

過去も現在もない人間に、未来を想像する――――創造する力は無い。
そう言っているのだろうか。

「……だから、俺は本当ならもっと早く死んでいるはずだった。過去も現在も未来も……何もわからないまま死ぬ……はずだった。死んでいたはずなんだ。……けれど」

過去を語る口は、そこで方向転換を見せた。

「……通りすがったお節介が、そこに介入してきた。俺の死は、そこで歪曲することになった」
「わいきょ……？」
「歪められたのさ。そいつは、俺にこう言った。今夜は月が綺麗ね、と……」
「……」
「言葉どおり、その夜は月が綺麗だった。真っ白な月。銀にさえ見える白銀。俺が初めて見て知った……月という存在だった。……

だから、かもしれない」

千夜は、ふと呟いた。

当時ではなく後になって気づいたような口ぶりで。

「……俺は、満足していたんだ。何も知らない俺が、たった一つ知ったものが……あまりに美しく尊くて……こんなにも素晴らしいものはきっと他に無いだろう。だから、もう終わりでいいんじゃないか、と……思ったんだ」

だが、と続き、

「通りすがりは言った。俺の満足に余計な延長を促す言葉を。……そんなに気に入ったなら、ここで終わるべきではないのではないか、と。もっと見たくはないか……と。その時だった。俺が、俺の持つ記憶において初めて何かを望んだのは。欲を覚えたのは。……そして、一緒に来ないかという言葉に……俺は乗っかったんだ」

千夜は、そこで突然笑みを零した。

それが自嘲であると蒼助に感知させたのは、すぐ後に出た台詞だった。

「……思えば、既にそこで俺は取り返しのつかない大きな間違いを犯していたんだ。あの時、差し伸べられた手をとるべきではなかった。手をとった先にある【生】へ興味を持つべきではなかった。……あそこで、朽ち果てるべきだったんだ」

「っ、オイ！」

「だってそうじゃないか、蒼助。もし、そうしていれば……俺は俺の【正体】を知ることなく死ねていれたかもしれないんだから」

「……しょう、たい……だと？」

まさか記憶が戻ったのか。
驚愕と仄かな期待に、蒼助は目を見開いた。
しかし、千夜の語る事実は予想をあっさりと裏切る。
「理解するのに、六年かかった。俺は……俺を知るのに記憶なんて必要なかったんだ。……ただ生きてみて……自分に触れる時間を得てみて……あの時はわからなかったことが昨日やっとわかったんだ」
不意を付くように千夜が後ろへと身を引く。
無意識のうちに力を緩めていた手は肩からあっさり外れてしまう。
「……わかってしまえば簡単だった。俺の前から人がいなくなるのは……当然のことだったんだよ。奪われていたんじゃない。失っていたんじゃない。……本当は」
距離を取ったことで、千夜の顔が見える。
そこには、歪んだ笑みがあった。
苦いものを口に含みながら、無理に笑っているような――――。
「俺が、喰らっていたんだ」

笑みから零れた言葉に、蒼助は一瞬耳から通じて入ってきた情報を理解しかねた。

【壱百四拾弐】　夕暮れの教室（後書き）

大分間が開きましたが、ようやく更新。
この勢いに拍車がかかるのは次回ですかね。
次回、暴走機関車・千夜。

ブレーキは？
……あー、壊れているようですが。

［壱百四拾参］　世界にさよなら

「喰う……って……」

掠れた疑問めいた言葉に、

「そのままの意味だ。かえってわかりにくかったならもっと率直に言おう。……俺が、死なせたんだ」

もはや誤魔化しのきかない直球が放たれた。

だが、とそれでも蒼助は納得しなかった。

千夜は言っていた。

かつて死んだ連中は、千夜を守って死んだのだ、と。

それがどうして「喰らう」という表現へと繋がるというのか。

そんな疑念に囚われる蒼助を我に戻すのは、

「……俺は昔から、両極端な人間を引き寄せていた」

「……？」

「出会いはいつも二つ。良い者と悪い者。好意と悪意。俺を拠り所に望むものと俺を支配することを望むもの。双対を為す二者が俺の前に現れる。……俺が選び、求め、受け入れるのは……いつだって決まっていた。だが、そうして得る結末もいつも同じだった」

ギュリ、と収縮する音が握り締められた千夜の掌の中から漏れる。

「……俺は好意を受け入れ、悪意を拒む。そうすると、悪意は好意

を排除して俺を手中に収めようとする。それを知った好意はおさまるところを知らない悪意の欲望へと立ち向かう。……それが勝ち目のない戦いだとわかっていても。そして、俺がそれを知った時には……いつも」

言葉をつむいでいた唇がキュッと絞まる。

苦いものを噛み締めるように。

「……理不尽だと思っていた。汚い世界で純粋さを保ち続ける奴は、弱いというだけで駆逐されなければならないのか、と。そんな理不尽な世界からどうして守ってやれなかった、と。やりきれなくて、俺は勝ち残ったつもりでいる悪意も屠った。そうして、俺だけが残る。俺だけが……いつも」

「千夜……」

守って欲しくない、と叫んだ二日前の千夜の姿が、目の前の千夜に被ったように蒼助には見えた。

守るという行為の向かう先を間違えたが故に起きた悲劇。それは千夜の心に濃く影を射す記憶となったというのは、蒼助にも既知のものとなっていた。

しかし、

「……だが、俺は勘違いしていたんだよ」

不意に呟かれた言葉に、蒼助は目を瞬いた。

「奪われた、と……今まで何故そんな風に考えられていたんだろうな。俺が、そうなるように促していたというのに……」

「……？」

「思えば俺と出会うまで、誰もが荒んでいても周囲とのバランスがとれていたと思う。たとえ行き着く先が破滅だとしても。……そう、俺が現れるまでは」
「……おまえ、何を」
「ある情報屋の女は、俺が持ちかけた依頼にかかわったせいで死んだ。ある娼婦は、俺と交友していることを飼い主の暴力団の頭に勘付かれて、俺を庇って殺された。あるヤクザの舎弟は、所属する事務所の組長が俺を愛人にしようと目論んでいるのを知り、手を引かせようとして殺された。……全て、俺が彼らに関与したことで起きたことだ」

最後の下りを聞いたところで、蒼助は嫌な予感というものを感じた。
千夜が何を言おうとしているかわかった気がしたのだ。
そして、あの言葉にどう繋がるのかも。

食い入るように見つける蒼助の視線を受け止める千夜は、

「……言っただろう。喰らった、と」
「っ、ちょっと待て！」

受け入れ難い事実を肯定する千夜を思わず制止した。

「そんなのただのこじ付けだ！　お前がそうなることを計算してやったことじゃねぇだろうがっ！　その時その時の奴らの思惑が絡んで生まれた結果だ！　お前は何も悪くなんかねぇっ！！」
「……嘘をつくなよ、蒼助」
「馬鹿野郎、嘘なんか……」
「――――――気遣うなら、思って感じたことを受け止めてくれ」

不意をつくように微笑んでくる千夜に、蒼助は口を噤んだ。

見透かされている。

そう感じた蒼助は、反論はおろか何も言えなくなった。

「確かに俺自身は何も手を下していない。……だが、奴らの行動の原因にはなった。これだけは言い逃れも言い訳もできない核心だ。食い合った餌のうち残った方を俺が喰う。……一方を喰ったその餌は、肥えて上等に仕上がっているところをな。こんなところだろう」

千夜の表情から笑みが消える。

「これが、俺の正体なんだよ。俺は……俺こそが、人を喰って生きながらえる【鬼】だったんだよ。自分の生を繋ぐために他人を生餌していた。……何で気づかなかったんだろうな。いつも、俺じゃない誰かが死んで、俺だけが無事だった。……今まで、どうして気付かなかったのかな」

だが、と千夜が呟いた言葉に蒼助は戦慄した。

次に何が飛び出るか、本能が予知したのだ。

「もう終わりだ。もう、たくさんだ。……他人の命を貪り食ってまで生き長らえるのは、もう……耐えられない」

苦悩と哀愁に塗れた言葉が零れ出た瞬間、蒼助が考えるよりも早く両腕が動いた。

距離をほぼゼロに詰め、揺さぶるように千夜の両肩を掴む。

「馬鹿なこと言ってんじゃねぇっ！　どうしちまったんだ……」

「どうも、しない」
「してるだろうがっ！！」
声を荒げようとも、千夜は蒼助の顔を見ようとはしない。
「……久留美に言われた。お前が死ねばよかった……と」
「っ、――――――」
蒼助は、頭の中で久留美を殴り飛ばすイメージを描いた。
知らずのうちに千夜の肩を掴み指にも力が入る。
「あいつは正しいよ。そのとおりなんだ。……どうして、俺がいつも無事に生き残るのか。死ぬべきなのは、俺なのに……」
「違うっ！　誰かから好かれて想われる人間が、死ななきゃいけない人間なわけねぇだろ！！」
過去の遺人たちに死を招いてしまったのは事実かもしれない。
だが、その言葉だけは肯定も流すことも出来なかった。
それだけは、断じて。
「死んだ方がいい人間を守ってわざわざ死にたがる人間なんかいるのかよっ！　なぁっ！？」
「……だったら」
頭と共にダラリと下を向いていた腕が、呟きと共に動作の兆候を見せた。
次の瞬間、それは予想だにしない早さで動き、
「だったら――――――俺は何処へ行けばいいっ！？」

蒼助の胸倉を掴み、激情を煮えたぎらせた顔を迫らせる。
服の下の皮膚に爪を引っ掛けることすら厭わない粗暴な千夜の暴挙に、蒼助は己の勢いを忘れて呆気にとられた。

「俺は俺の意志に関係なく、傍に誰かを置けば相手の人生を喰らい尽くす……っ。危機が迫れば盾にして、害となるなら殺す。どんなにその展開を拒んでもそうなるっ！！　そんなふうに生きるのはもうたくさんで……そうなるぐらいなら独りでいた方が良かったのに……今更、もう独りで生きていくことなんかできないっ！　人の温もりに慣れた心は、もうそんな孤独には耐え切れない！　そこには俺の望むものは無いっ……」

目にするのは、二度目の激昂だった。
鬱憤を吐き散らすかのような様は、二日前も見た姿だった。だが、あの時よりも激しいように見える。縋りつくように自分の服を握り締めているせいだからだろうか、と蒼助は思った。

それとも――――――

「誰かと共にある道を選んでも……結局は失ってまた独りになるっ！　……俺には、この二つの道しかないというのに……どちらも塞がっている。俺には、もう壊して道を切り開く力すらない……これ以上、どうやって前へ進めというんだっ……！」

己の衣服を握り締める手が震えていることに、蒼助は気付いた。
目下の千夜が、まるで迷子のように思えた。

何処へ行けばわからなくて、涙はなくとも泣いているようだ。

「お前を独りになんか……させるかよっ」

そんな千夜を前にして傍観に甘んじることなど出来ず、自らの胸倉を掴む千夜の手首を逆に掴み、もう一方の腕はその背中に回し、

「もう忘れたのかよっ。……俺は、お前の為に死にたいから傍にいるんじゃねぇって言ったじゃねぇか！　……傍にいてほしいんならいくらでもいてやるっつっただろ」

掻き抱いて、宥めるように耳元で言葉を注ぐ。

前日とは比にならないほどのその弱りように、蒼助も焦りを感じずにいられなかった。

今の千夜は、まるで陽炎のようだ。

確かにそこにあるのに、近づけば揺らめいて霞む。

蒼助の恐れを体現するかのように。

抱きしめたのは千夜を落ち着かせるためではなく、自分が安堵を得るためだった。

腕にその存在をしかと感じないと、不安でどうにかなりそうだった。

「力がないって言うなら、俺がお前の【力】になる。道がないっていうなら、俺が切り開いてやる。俺が……俺が」

千夜を、そして自分を安心させられる言葉を探す。

どんな言葉が、確固たる鎖と化して人を繋ぎとめられるか。

そして、

「……俺が、守る。何があろうと、お前を……守るから」

出会ってから、千夜が揺らめくたびに思っていた想いを出すに至った。

募っていくばかりだった想いを凝縮させた言葉を。

腕の中で、千夜の手の力が緩むのを感じた。

力を抜いた意味を、蒼助が解釈しようとした時、

「……？」

服を握り締める力は無くなった。

しかし、代わりに訪れたのは、己の胸を押す手の平の力だった。

強くは無い。

されど、その軽い衝撃は蒼助の不意を付いた。

抱擁は解かれ、しかし手首は蒼助の手中に収めさせたまま、

「……普通、そんなことを言われたら……身を委ねてキスでも強請るべきなんだろうけど……な」

千夜は済まなそうに笑みを含めて言う。

その次の瞬間。

「――――――――っ、っっ！！」

蒼助は、【二重】の衝撃に目を見開いた。
肉体的に。
精神的に。
それは、同時に蒼助に襲い掛かった。

千夜が左手を振り払ったと思った矢先、その手は振りかぶる体勢へと変えて今度は蒼助を襲ったのだ。
顔の右側面を襲った硬く重い衝撃は、完膚なきまでに不意打ちとなった。
対処の余地も入り込ませなかった一撃は蒼助の身体からバランスを奪う。
大きく傾いた体を踏みとどまらせるべく、咄嗟に蒼助は左足で安定を取り戻そうとする。

しかし、千夜の追撃の方が容赦なく上を行った。

「くっ、――――――!?」

受けたダメージで眩む右目で千夜を捉える。
殴打の勢いのままに身体を向きを変えた千夜は今度は右脚を振りかぶっていた。

蒼助の脳内にて警笛が鳴る。
回避。防御。
いずれの手段に出るべきだった。

だが、蒼助の身体は竦んでしまう。

千夜の目を見たのだ。
真っ直ぐに己を見据える目を。

冷たく透き通った眼光。
氷。或いは、研ぎ澄まされた氷柱の反射光か。

そして、そこには確かな殺気が込もっていた。
見る者を射て貫く鋭い殺意が。

思わず蒼助は思考をフリーズさせてしまった。
最初の頃に見た威嚇なんて代物ではない。
本気で自分を殺す気であるのだと、思い知らせる拒絶の眼差し。

先程受けた打撃よりも遥かに痛烈に蒼助の精神を傷つける。

一瞬して蒼助を呑み込み、戦意喪失に堕とした殺意の持ち主は止めることなく用意していた追撃を放った。
乱れない曲線を描きながら迫った爪先は、鋭く蒼助の胸に突き刺さる。

「――――――っっ!!」

直撃の瞬間、肺が外部から強烈に圧迫され、蒼助は呻きすら上げられなかった。
無防備の身体は衝撃を受け止めることも受け流すこともできず、突き抜ける勢いのままに吹き飛んだ。

衝撃に踊らされるしかない身体は、背後にある机の海に身を投じた。

荒々しい倒壊音を耳に遠く感じながら、意識が一瞬だけ飛ぶ。
しかし、背中や胸を中心に軋み上げる全身の痛みにすぐに引き戻された。

「っ、……つ……ぐ」

器物に損壊はないものの、蒼助の負った負担は大きかった。
背中を始めとして全身を強か打ちつけたため、起き上がることは困難だった。
中心で感じる激痛は、蹴りを喰らった際に肋骨が一本イったのだろう。

蒼助は体中から発される激痛に苛まれながらも立とうとする。
背もたれとなっている倒れた机を支えにそれを成そうとするが、思うように腕に力は入らない。関節部分が熱い。損傷はそこにも来たしていた。

「……弱い」

朦朧とする蒼助の意識をはっきりと正気づけたのは、一つの呟きだった。
千夜だ。

進行の障害となる机を乱暴に足で蹴飛ばしながら、蒼助の元へ歩み寄ってくる。
眼差しは以前と冷ややかなまま、

「その程度で……守るなんて、どうして言えたんだ」

クスリ、と笑う。
それは嘲りであるに違いないが、そこに込もるものはそれだけではないような気がした。

千夜は、蒼助を目下に見下ろせる距離まで近づいて、

「言っておくが……今の俺は、本来の五分の一程度も力を出していないぞ。自分自身の霊力は欠損している。だから三途の霊薬を摂取することで、ギリギリ戦える状態を保ち続けている。それに比べ、お前は俺の比にはならない力を今は持っている。ハンディキャップは十分すぎるほどにあるというのに……何だそのザマは」

振り上げた足は、蒼助の背もたれとなる机を蹴った。

「……っ」

「……俺如きにもそんな有様になるような奴に命なんて預けられるか」

冷たく突き放す言葉が、否応(いやおう)なく蒼助に現実を噛み締めさせる。

手も足も出なかった。

それどころか相手の殺気に怖気づいた。

あれほど上弦相手に殺し合いじみた鍛錬をしていたにも関わらず、だ。

蒼助の中で築き上げてきていたと思っていたものが、崩れていく。

「……弱いな。本当に……弱い」

千夜の唇で繰り返されるその言葉。

傷に塩を塗りこむように、蒼助を侵食する。

「……弱いくせに、俺を助けようなんて思うな」

叱責が、まるで懇願に聞こえる。

思わず顔をあげる。

見上げた先には、言葉とは裏腹の泣きそうな笑顔があった。

自分が千夜にそんな顔をさせている。

自分の弱さが。無力が。

動かない体が、そして己自身が、この上なく恨めしい。

口の中で滲む血をたまらなく苦く感じながら呑みこむ。

「蒼助……俺の人生は、思い返せば後悔ばかりだったよ。これまで喰ってきた誰かの魂と後悔で出来ている」

顔の横から足が退けられる。

千夜は膝を折って、蒼助の胸へと身を寄せ、

「……せめて……たった一つくらいは……後悔せずにすませたいことがあるんだ」

両肩にそれぞれ手を添えるように置いて、浅い抱擁を成す。

そして、右肩に顔を埋め、

「――――お前を失いたくない」

己の死角から漏れた言葉に、蒼助は眼を見開いた。

そんな蒼助の反応を知ってか知らずか、千夜の言葉は続く。

「失わずに、終わりたい。……頼む、俺を解放（はな）してくれ。この後悔に塗れた……【俺の世界】から」

その哀しい訴えは、蒼助を【夢】から醒まさせた。
己が強くなったという幻覚から。
己が変わり始めていたという幻想から。

自分という存在は、この女の安寧にはなれない。
喪失の恐れから守ることも出来ない。その強さも無い。

「っ……」

事実を拒否する心が、跳ね除けたいという己が、寄り添う千夜の身体を抱きしめてしまいたいと叫ぶ。千夜の訴えなど無視して、このままきつく抱きしめて閉じ込めてしまえばいい、と。
しかし、腕は動かない。無事である方の腕も、動かせなくは無いはずの方も。
焦る心とは裏腹に、ピクリとも――――動かないのだ。

まるで、心よりも先に身体が理解してしまったかのように。

「……さっきは、ありがとう。……説得力はなかったが……嬉しかった」

肉体と精神の葛藤の合間に、千夜が動き出した。
温もりが遠ざかる。
向けられる背中が歩みと共に小さくなる。

動け、とダメージから立ち直っていない身体に命令を下す。
身体は所有者の意志など関係なくストライキを決め込んでいた。
心と身体がバラバラだった。

「っ、かず……や！」

「……」

呼びかけに応じたのか、千夜は一度蒼助を振り向いた。
けれど、それも一瞬の停止だった。
すぐに歩行は再開し、千夜は出入り口付近まで来ると、

「今日はきっと……死ぬには、良い日なんだろう」

微かに笑い、蒼助を緋色の教室に一人残して――――――消えた。

［壱百四拾参］　世界にさよなら（後書き）

止めるどころか、折れてしまった蒼助。
これで千夜の暴走は加速。もはや止められないものとなりました。

もし、蒼助が千夜の攻撃を防ぐか避けるかして、弱体化した千夜よりも上回って見せていたら違った展開があったかもしれないが、それじゃバッドか。エロゲ的な意味で。「あーっ！」なことに。
どの道蒼助ごときでは、千夜の戦闘能力を上回ることは出来ないでしょう。生きてきた世界と生きるためにしてきた努力が桁違いすぎる。

次回、冒頭は「黒蘭が見ている」。
奇妙な姉妹の間で明かされる秘密。偽りであっても、過ごしてきた日々と慕った想いだけは嘘じゃない。

【壱百四拾四】　愛されたエゴイスト

黄昏が燃える空の下。
女は、見ていた。

屋上から見下ろせる学園の絶景を。
そこに入り込む一人の少女の姿を。

校舎から出てきたその人影を見て、

「……やっぱり、ダメだったわね」

落胆を提示する言葉が、淡々と赤い唇から漏れた。
壁に靡く髪を緩く押さえつけ、

「まぁ、ああなっては坊やでも何を言おうと止められるとは思っていなかったけれどね」

金網に身を傾けて、口元には笑み。
しかし、そこから零れる言葉は、

「……わかってはいても、心臓に悪い光景ね」

何処か渇いていた。
視線は、絶えず少女の後姿に釘付けられている。
その眼差しは虚ろを孕んでいて、

「さて……どうしましょ」

くるりと反転して、焼ける天上を見上げて呟いた。

◆◆◆◆◆◆

久遠寺医院は、その日早々に営業を切り上げていた。
原因は、責任者である院長の気まぐれだった。
何があったのか、院長はすこぶる不機嫌だった。

治療に関しても、診断に関しても、この小さな医院では院長の手一つで行われるものであり、彼女の意志が医院の意志だった。
勤務する看護婦たちは訝しみながらも、院長の命令に従いいつもよりも早くに勤務から上がって帰宅していた。

側近である一人の看護婦を除いて。

「……朱里ちゃん」

医院にただ一人残留する看護婦――――来生は、待合席に座る白髪の少女に声をかけた。
少女は食い入るように玄関を見つめて動かない。
その姿はまるで飼い主の帰りを待つ犬のようにも見えて、来生は不謹慎とわかりながらも苦笑してしまった。

「お姉さん、遅いですね」
「……」
「……お腹すきませんか？　お菓子食べます？」
「……いい」

ようやく返ってきた返事も、素っ気無いものだった。
嘆息し、来生は少女の気を引くのを諦め、見守る立場に甘んじることにした。

少女は、まるで人形のようだった。
容姿は元より、雰囲気そのものが希薄となっていた。
いつもは、姉が傍にいる時はあれほど活発で小生意気な振る舞いが嘘のようだ。
しかし、来生にとってそれは初めて見るものでも、動揺するものでもなかった。

これが、この少女の本来の姿なのだから。
この、人として壊れてしまった姿こそが。

もう二年になるのですね、と来生は懐かしく思う。
初めてこの医院にやってきた時、本当に【空っぽ】であった、と。

人ではない扱いと待遇によって、少女は壊れる寸前であった。
危うくのところで彼女の『姉』に位置する人間が少女の前に現れ、救い出さねば本当に手遅れになるところだった。

心に負った傷は大きい。
それでも、その傷を癒すようにあの『姉』が少女に己自身を与え、少しずつ欠けたものを埋めていった。

二年の月日は、無駄ではなかった。少女の世界は、彼女で満たされることで何とか復興されたのだ。
空虚そのものであった表情には、喜怒哀楽が吹き込まれ、振る舞いにも人間らしさが纏われるようになった。

しかし、それは一つの危惧を副産物として産み落とした。

少女の世界を支えるのは、たった一人の人間。
人間不信の病を抱える少女は、自分の深い部分には『姉』以外の誰一人と受け入れない。
『姉』が全てだった。

だが、『姉』を失えば――――その世界がどうなるかは考えるまでもなく明白だった。

壊れた人間は多く見てきた。
そうした経験を積むことで、来生は人間とは生きているうちに必然として何処か壊れる生き物なのだろうという考えに至った。
自分でも気付かないうちに。或いは、他人にもわかりにくいように。
自分もきっと例外ではないだろう。

そして――――――『彼女』も。

「――――――っ、ぁ」

物思いに耽っていた来生は、少女がふと漏らした声によって我に返った。
その声には、感情が宿っていたことを理解する。
それが何を意味するのかも。

人気の薄い空間に、静かに響くのは玄関の開閉を報せる鈍い音。

「……姉さん」

少女の声が、それを為した人間の正体を確定させる。

扉の向こうから現れたのは、来生自身もよく知る人物だった。

終夜千夜と、今はそう名乗っている者。

少女の『姉』。少女の『世界』。少女の『全て』。

「悪い、遅くなった。……待ったか？」

千夜は、後ろ手に扉を閉めて朱里へと歩み寄る。

だが、その歩みが距離を縮めるよりも朱里の方が早かった。

突進するように駆け出す朱里。

それを腰の辺りで受け止める千夜。

「姉さんっ姉さんっ……！」

「……」

全身をこすり付けんばかりに密着する朱里を疎む様子もなく、千夜はその小柄な身体を抱きしめてやっていた。離れている間に身体からすり抜けて行ってしまった人間味を取り戻そうとしている人形に、持ち主がそれを与えようとしている。

「……蒼助とお別れしてきたよ」

びくり、と朱里の身体が震えた。

「しばらくは……ここでお世話になりなさい。三途のところに行くのなら、少し経ってからがいい。あいつが落ち着くまでは……」
「……うん」
力のない返事に、千夜は気付かないフリをしている。
普段の彼女であればありえないことだ。
それだけ、覚悟の意志は固いということだろうか。
「朱里……お前が最後だ」
「……」
「だが、その前にお前には伝えておかなきゃならないことがあるんだ」
向き合って話したいのか、千夜は朱里の肩に手を置いて一旦身を離そうとする。
しかし、朱里はそれを拒むように千夜の腰に噛り付いている。
別れが避けられないのなら、と一分一秒の離別すら惜しいのだろう。
朱里のその気持ちを察したらしく、千夜は諦めた様子で朱里の肩から手を離し、もう一度背中に回した。
「……ずっと、お前に嘘をついていた」
嘘。
千夜が無数と身に纏うものだ。
奇妙な話だが、彼女の抱える『嘘』だけは責められる謂れのない正当なものではないかと来生は思っていた。
真実を持たない彼女には、嘘は必要不可欠なものである。

そうでなければ、その存在は保てない。
何もない人間が生きて在り続けるには、偽りであろうとも何かしら事柄を得るしかないのだから。

嘘で足りない部分を補い、自分を作り出した千夜。

彼女は、誰も彼もに嘘をついている。
そして、それは妹である少女にも例外ではなかった。

「俺は……本物の千夜じゃないんだ」

千夜。
確か初めてこの医院に連れられて来た時、彼女にその名はなかった。

「……お前の本当の姉は、俺じゃない。そして、本物はもういない」
「……」
「俺はお前の母親に救われた。彼女に、死んだお前の姉の名前をもらったんだ」

朱里の反応は、ない。
姉と信じていた人間の腕の中で、ただ沈黙に伏している。
それでも千夜は続ける。

「……この名前と一緒に、お前のことを任された。【千夜】に迎えに行かせると約束して置いて来てしまった子供がいる、と……彼女は俺に言い遺した」

次いで出るのは、

「騙し続けて……縛り続けて済まなかった。お前に、こんな偽者を姉などと呼ばせて続けて……」

二年の時を経て明かした事実と、欺き続いたことへの謝罪。

衝撃的な話だ。

信じてきたものが、全て嘘であった。

残酷なこの真実を朱里はどう受け止めるのだろう。そもそも受け止められるだろうか。既に崩壊しかかった朱里の世界は。

心苦しい光景を来生は、苦く見つめた。

「……ダメ、なの？」

謝罪の後に発生した沈黙を払ったのは、朱里の疑念の言葉だった。

何処か許しを乞うような。

「姉さんが、私の姉さんじゃ……ダメなの？」

「朱里……？」

「朱里は……私は、ぁ……」

きゅっと腰に回して掴んでいた部分を握る強さが増す。

自分の想いを搾り出すかの如く。

「楽しい感情も、嬉しい感情も……全部姉さんからもらったし……姉さんといて手に入れたもん。毎日死にそうなくらい苦しくて人形みたく生きている方が良いって考え方を捨てることができたのも、姉さんがいたからだし……一緒に過ごした二年が今までもこれからも一番大事で幸せだったのも……姉さんが、私の姉さんだったからだよ」

朱里が何を伝えたいのか。
外から見れば理解は簡単だった。

来生にはわかった。
千夜が二年間抱え続けてきた『嘘』など、少女にとっては些細なことだったのだ、と。
少女にとって、何にも替え難い真実はずっと確固たるものだった、と。

「本当でもそうじゃなくても……どっちだっていいよぉ……っ」
「あか」
「私の姉さんは、姉さんがいいっ……」

これだけは譲れない、と言わんばかりの強い言葉だった。

朱里は、間違っている。だが、正しいのも事実だ。
彼女は偽者だ。それはどうしようもない。
されど、過ごした日々も事実であることには違いない。

いつのことだったか、かつて朱里の口から零れた言葉を来生は思う。
家族のことはほとんど覚えていない。劣悪な環境から己を救い出した張本人である千夜が自分の姉であるかの確信と呼べるような記憶をもちあわせていないのだ、と。
ならどうして一緒にいることを選んだのかと聞いた時、彼女はなんと答えただろうかと思考し、思い出す。

私がそれを望むから――――――と。
それが、来生が初めて眼にした朱里の『人間』らしい姿と言葉だった。

そして、それは現在の光景に重なる。

「ねえさんが……いい、のぉ」

「……」

「ねえ、さ――――――」

千夜の腕に力がこもった。

宥めるように浅かった抱擁が、朱里のしがみ付くそれに対して掻き抱く深いものへと変わる。強く。強く。

「――――――ありがとう」

喜びに満ちた声。

しかし、揺るぎように無い別れの意思を意味する言葉と感じたのは己だけはないはずだ、と来生は朱里を注視した。

「……っ、ぁ……うぇ、ぇ……」

ダムが決壊した。

堪えきれずに泣き出した朱里に、千夜は今の己に泣き止ます資格などないと承知しているのか何もしない。慰めも、宥めもしない。

ただ黙って受け止めている。

自分の行為と決意が大切な人間を哀しませていることを。

それでも。

それでも緩まないのか。おさまらないのか。

彼女を掻きたてる死の衝動は。

「ごめん……なさ、い」
「どうした……朱里が謝る必要はないぞ？」
「……ごめ、ん……なさ……っ」

何故謝るのか。
またしても、その理由は来生には理解できた。

しかし、それを教えようとはせず来生は黙して、見届け続けた。
泣き声と抱擁によって描かれる――――――家族の離別を。

抱きしめてあげたいと言っていた朱里の腕は、やはりしがみつくことしかできない様を。

◆◆◆◆◆◆

窓越しに緋の世界が薄く藍に変わろうとしていくことが確認できる。
千夜が去ってからの時間の経過を知らしめる。
蒼助は、乱された机の海の中に埋もれたまま動けずにいた。
否。動かなかった。

折れた肋骨は既にくっついていた。
輝の入った腕の骨も。
千夜から受けた身体のダメージは、完全に回復していた。
けれども、蒼助はその場で指一本動かさないままだった。
天井を力ない眼で見つめて微動だにしない。

動かない。
動けない。
動きたくない。

からっぽになった心は、不動とのみ命令を下す。
身体はそれに従うかのように、重くなって沈黙している。

「……今、何時だ？」

ポツリと呟いた言葉は酷く渇いていた。
そこに言葉通りに事実を追求する意志は感じられない。
ふと片手を持ち上げて、広げた掌を見つめる。

何もない。
何も――――――

「……なん、で」

伸ばさなかった。
掴まなかった。
止めなかった。

空の掌に問いかけようとも、返事は返らない。
ただそこには虚無のみが存在するだけだった。
握りつぶすように閉じて、蒼助は重い腰を上げる。

地に付いた足は何故かふわふわとした感覚で、何処と無く不安定に感じた。
そこから思い出すのは、いつぞやの黒蘭の言葉だ。
世界の確立――――――だっただろうか。

「……また、壊れちまった」

く、と笑みと共に出たのは、己の現状。
この感覚を、蒼助は知っていた。
沼に嵌ったかのようなこれは、ひどく馴染み深いものだ。

ここは、『壊れた世界』の中だ。
希望も未来も何もない。
過去と現在の瓦礫が残るのみ。

同じだ。
母親の訃報を聞かされた日に、感じたあの絶望感と――――――同じ。

そして、あの日自分を取り巻いた衝動もまた、

「――――――っっ！！」

くそったれ、という罵倒は出す前に口の中でグシャグシャに噛み砕いて、衝動に押されて振り上げた足はその先の机を蹴り上げた。
金属の耳障りな音によって苛立ちを焚きつけられて、蒼助は無我

夢中に周りの障害物に当り散らす。手で持ち上げた椅子を力一杯床に叩きつけ、机は原型を失うまで蹴り付けた。

「っ、はぁ……は、……」

内側に溜まる熱は、動けば動くほど高まる。かといって動きを止めても滞るだけだ。何をしようと微塵も冷まる様子もない熱に、意識は浮かされていく。

何から何まであの時と一緒だ。

自分は何一つ変わっていなかったことを思い知らされる。そう考えると、熱が二三度上がった気がした。

「――――、……」

視界の端に一瞬過ぎったものに、蒼助は俯かせていた顔をバッと上げた。

振り向いた先には、窓ガラス。

いつの間にか完全に陽は落ちていた。夜を映す窓ガラスは鏡には及ばすともそれに近しい効果を持つようになっていた。

そして、その一枚に映るのは――――――蒼助の顔だった。

ガラスに映りこんだ己の顔を見て、蒼助は凍りついた。

そこにいるのは、母を失った時の自分だ。

何処までも腐っていくしかない死人のような人間。

見るに耐え難い――――――かつての自分が、そこに。

気のせいか、ガラスの平面世界の中でそいつが嗤ったように見えた。

ホラ、見ロ。

結局オ前ハ何一ツ変ワルコトナンテ出来ナインダ。

惚レタ女ヲ守ルナンテ大層ナコトハモッテノ外。

所詮オ前ハコウシテ腐ッテ死ンデイクノガお似合イナノサ。

ケケッ、ケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケ
ケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケ
ケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケ
ケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケ
ケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケ
ケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケ
ケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケ
ケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケ
ケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケ
ケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケケ
ケケケケケケケケケケケケケケケ―――――――――

「――――――っ、っ！！」

熱が一気に膨れ上がり、弾けた。

理性も何もかもを吹き飛ばしたその瞬間、蒼助は腕を振り上げた。
拳が鏡の中の男に向かって唸る。
黙れ、という蒼助の憤怒の黙示と共に。

「――――――ほい、ストップ」

その行使は、何者かの抑止によって阻まれた。
同時にかけられた声が自分の良く知るものであると自覚したのは、その人物を眼で確認した後だった。

「……くら、ま……？」
「さん、が足らん。つか、さすがに窓ガラスは勘弁な。机や椅子は誤魔化せるが、ガラスはちと手間だしな？」

蔵間恭一。
今日一日現れなかった担任が、そこにいた。

それが、どうして今ここにいるのか。
何故、このタイミングに。

これではまるで、

「……ははっ。こりゃぁ、驚いたな。今のお前、初めて会った時と同じ顔してるぞ？　……魂半分持ってかれちまったみたいなツラだよ」

「……っ……」

図星を付かれ、掴まれている腕を煩わしげに振り払う。
蔵間はそれに気分を害した様子は無い。

それどころか、

「そんなにまでなるくらいあいつにのめり込んでいたのか……。あいつも相変わらずの凄まじい魔性っぷりだなホント」

何を言われようとも無視して、何でもねぇよと塞ぎこんでこの場を立ち去ろうと思っていた蒼助の心を、その言葉は捕らえて離さなかった。

「……何で、あんた」

まるで彼女のことをよく知っているような口ぶりをした張本人は、すげぇなこれ、と周りに散乱する壊れた椅子や机をしげしげと眺めていた。
しかし、ぽとり、と落ちた蒼助の呟きは彼の手に拾われ、

「んー……まぁ、ちょっとした拘わりと面識があるくらいだ。

――――三年前、降魔(うち)庁があいつを東京に呼び寄せたっつー程度のな」

［壱百四拾四］　愛されたエゴイスト（後書き）

サブタイのエゴイストは千夜のこと。千夜だけじゃないけど。いやもう皆か？（どっちやねん

作中の『千夜』は偽者で、本物は実はとっくの昔に死んでいるということがちょっと前から明らかになっていますが、その自称偽者の『千夜』も記憶喪失という状態にあるのだから信憑性は微妙な状態にあります。

ちなみに、実は作中で別れのシーンを割愛されてしまっている（ぇっ）三途は千夜の言う本物が死んでいることを知っています。だからこそ、偽者千夜が目の前に現れたときはそれはそれは眼鏡割らんばかりに驚いたという。ちなみに本物の性別は女です。なのに、現れた『千夜』は当初は男だったので、三途は大パニックのあまりにその場で勢いあまってズボン引きずり落とした、というエピソードを確か何処かで書いた気がします。

現在、真実を確固たる物として把握しているのは黒蘭と上弦、そして彼らに関わる一部の人間のみです。志摩や黎乎女医はなんとなく自主的に察しているが、あえて追及はしないという中立の姿勢。聞いても絶対に口を割らんと知っているからでしょう。

三途は完全に蚊帳の外に置かれているため、蒼助たちとほぼ同じ立ち位置にいるのですが、彼女は彼女しか持たない情報があるので、若者どもより多少認識が違います。ひょっとしたら、というくらいには。

とりあえず、現時点では今の千夜は偽者ということで。あれだけ堂々とした存在でありながら、それは全て生きていく上で作り上げていた虚像でしかなかったというのが実態。得ては失って、を繰り返し続けていた千夜は今だゼロのまま。折れてる場合じゃないとい

うのに、蒼助ときたらもう……。

……ああ、しかし夜中は加減がきかねぇな、ネタバレとか。タイピングはとまらねぇ。

【壱百四拾伍】　遺される儀悔

――――――――冷たい。

それは降り注ぐ雨でもなく。
肌に纏う涼気でもなく。

身を寄せる傍らの存在の――――温度が。

「コージッ……」
「……すまね、ぇ」

呼びかけに対して返ってきたのは、謝罪。
謝るな、と叱咤しても同じものが返ってくる。

すまない、と己が肩を貸す怪我人は、ずっと謝り続けていた。

――――――迷惑をかけた。

――――俺は、あんたを守りたかったのにこのザマだなんて。

――――面倒かけてすまない。

今まで並べられたそういった言葉は、全て叩き落した。

そんな言葉はいらない。欲しくない。

「すま、ね……っげふ」

「……もういい、喋るな」

視界の端を染めた真新しい赤を確認して、危険信号が立つ。

肩に抱えて引きずる男は、既に大量の血を排出してしまっている。

もはやほんのささやかな言葉の吐露さえ体力の浪費に繋がる。

それに加えて雨だ。弱った体に対して最悪極まる環境が、今の自分たちに置かれた状況だった。『影』を使って移動すればなんとか避けられるかもしれないが、亜空間における移動はこの男には負担だ。命の危機に瀕した状態では尚更のこと使えない。

運もツキも。

人の命運に関わる全ての要素が、この男を見放していた。

己のかけがえの無い友を。

「くそっ……！」

不可視の招かれざる『客』の気配を撥ね退けるように悪態づく。

ふざけるな。
俺はまだ見放したりなんかしない。
こいつはまだお前が連れて行く相手じゃない。
こいつは、まだ俺と――――――

「……かずやさ、ん」

耳元で弱弱しく響いた声に、我を思い出す。
口を吐き出した血で真っ赤に染めた男が、俯いたまま己を呼んでいた。
その顔に血の気は無く、既に死人の蒼白としたものへと限りなく近いものにあった。

そして、男はそれを理解しているかのように、

「俺は……死ぬんだ、な」
「――――――、！」

咄嗟に返そうとした否定は、喉に支えた。
男は、俺が受け入れられない事実を既に甘受して、突きつけてくる。

「っ、諦めるな」
「あんたでも……治せなかっ、た……じゃないか」
「だから、俺に教えた医者のところに連れて行く。変態で両刀の人間としてはかなり問題持ちだが、最高の医者だ。……料金はセクハラだがな」
「……なんだ、それ」

渇いた笑いが漏れる。
力の無さに顔を歪めながらも、その意識を奮い立たせるべく千夜は語りかけた。

「安心しろ。お前が色眼鏡に適わなかったら、俺が引き受けてやる。お前は、治ったら俺に一発殴られろ」
「すげぇ、サービス……」
「そうだな……それならいっそ出血サービスにまで持ち上げてやる」

いつかの酒の場での話題を思い出す。
男がふざけ半分に持ちかけてきた――――

「――――無事に助かって、治ったら……一緒に高校に行こう」
「――――――――」

それは、年相応と呼ぶには少々老けた彼の外見を裏切る実年齢を明かされた時でもあった。中学を中退して、暴力団の舎弟に身を落としたという事情の吐露と共に。
酒に酔った勢いによる、かつての若さに任せた行動の後悔から出ただけのものだったのかもしれない。
だが、それがこの男にとっての心残りであるというのなら。それが、この男の生に繋ぐ鎖となるのなら何でも構わなかった。

「前に話したの、覚えているだろう？　戸籍なんて偽造すればいい。知り合いに聞いたら、私立あたりは金を積めば案外すんなり入り込めるらしいぞ？　……お前の話を聞いたら、興味がわいてな。いろいろ調べてみたんだ」
「……か、ず」
「ブレザーと学ラン、どっちがいい？　そこでやることは同じだというのに、学校ごとにいろいろ種類があって目移りする。一緒に選

んでくれよ、コージ」

震えそうな声を、自分で出来うる限り精一杯明るく持ち上げる。

少しでも、男の目を迫る死から遠ざけるために。

少しでも。

少しでも。

「……かず、や……さ」

「なんなら、俺はお前がほざいた妄想どおりに女子制服でいってやろうか？　お前がしゃんとするなら、着てやっても……」

だから。

だから。

お願いだ。

頼むから。

何だってするから。

俺を、俺を――――――

「俺……幸せ、だ……」

「死に体で……何を言ってるんだ、馬鹿」

「屑みてぇな……人生の中で、あんたみたいな……キラキラした人に、出会えて……大事なもんだって、選んで……もら、えたんだ。これが、幸せじゃなくて……何がそうなんだか……俺、に…は、わからねぇ……よ」

「ハッ、もっと欲を持てよ。ったく、世話が焼ける。だからお前はヤクザなんか向いてないと言ってやってたっていうのに……」

もっと早く連れ出してやればよかったのか。
それとも、無駄であると割り切って傍から離れるべきだったか。
いずれにせよ、もっと早く決断すればよかったのだ。
全ては俺の優柔不断が招いたことだった。

迷い、踏み切れず。
どっちつかずな態度でいたから、こんな最悪の事態を――――。

「……生きろ。生きる欲を……持てっ！　こんなところで満足してはダメだ……お前は、こんなところで死んでいい人間なんかじゃ……ない！」

死ぬな。
死ぬな。

――――死なないで。

意地も、虚勢も、全てを取っ払って懇願したい気持ちだった。
置いていかないで、捨てないで、と。

この男は、俺が救いだったという。

それを嬉しく思うどころか、馬鹿が、と詰ってやりたい。
お前だけがそうだと思っているのか。
俺だって、お前が――――救いだったというのに。

「……俺……あんたに、会えて……良かった、よ」

既に意識が遠くなりゆく男に、懇願は届かず意味は為していなかった。
不意にこちらを見上げた。
しかし、そこに光はなく焦点が合っていない。
もう何も映らない目で、男は俺を焼き付けんばかりに見つめ、

「……おれ、は……あん、た……が――――――」

言葉は続かなかった。首をもたげるために、残る力を全て注いでしまったかのように男の首は静かに下を向いた。

そして、二度と動くことは無かった。

「――――――、――――」

抱える身体は一切力が無くて重いに違いないはずなのに、不思議と軽く感じた。
それは、この存在に確かな重みを与えていたものが失われたからである――――と理解が追いつくのは、そう間もない。

じわり、と己の内側で何かが滲むような感覚を覚えた。
疼くような痛みと共に、それはじくじくと広がっていく。
またか、とその感覚を受け入れる。

初めてではない。
繰り返された悲劇と、決まって訪れるこの鈍い痛み。

また置いていかれた。捨てられた。

無責任にも己に傷痕を刻みつけ、生かされたことを思い知らせて。

彼もまた――――――俺から離れていってしまった。

「――――――……」

涙は出ない。

泣き声も嗚咽も、喉から這い上がる気配はない。

ただ、やり場の無い怒りと喪失感だけが、身体を打ちつける冷たい雨でも冷える様子はなく、熱のように篭もり内側を滞っていった。

◆◆◆◆◆◆

水の中から浮上するような感覚が、目覚めのそれとなった。

「――――――」

横たわるままベッドの上から見た窓の外は、暗い。
夕刻からの眠りは、それほど長くは無かったはずだ。
時計を見れば、七時半を回るところであることを二本の長さを違える針が表示していた。

睡眠時間はせいぜい二時間にも及ばない。
だが、ちょうどいい頃合だった。
眠らなければ身体はバランスを欠いていく一方だが、深く長い眠りは逆に身体を疲れさせる。後に用事などを控えている場合は、あまり長くも深くも得てはいけない。一度染み付いた眠気で、精神と身体が鈍るのだ。
もっとも、そういった泥に嵌まるような眠りは長いこと経験していない。

しかしそうして気をつけた浅い眠りは、さして千夜を癒すことはなかった。
何故なら、夢を見てしまった。
浅い水面下の眠りは、たいてい夢へと繋がる。

己が先程まで見ていた『夢』を思い返す。

「っ、――――――」

苦いものを噛み締めるかのように口を結び、目を閉じた。
顎の力によってかち合った奥歯が軋む音を口の中で聞く。

掻くように視界に被さる前髪を梳き上げて、千夜はベッドから身を起こした。

◆◆◆◆◆◆

暗がりのリビング。

しん、と静まったその空間にはヒタヒタと千夜の素足の踏む足音しか響かない。

電気をつけようともせず、無人のそこへ踏み込んだ千夜は、そのままソファの上でどかっと身を躍らせた。

放り出した身体が沈み込む感覚の後、一息。全身から力を全て抜き出すように。

後ろにもたれかかり、天井を見上げた。

「ここも、見納めだな……」

おそらく二度と帰ることはない。

足を踏み入れることも。

――――絶対に。

「……おい」

不意に漏れた声は、不満と不機嫌に彩られていた。
それは、独り言ではなく、投げつける相手を見据えた言葉だった。

きつめに絞られた視線が向かうのは、千夜自身の足元。
正確には――――行儀悪く開かれた股の間に、だ。

そこから、

「――――今晩ハァ」
「……」

両脚の間から――――ニョキっと人の頭が飛び出ていた。

悲鳴をあげても文句はない光景だった。
しかし、千夜は呆れたように睥睨するのみの冷ややかな反応しか返さない。

何故ならば、

「なに、してる？　――――黒蘭」
「お目覚めドッキリ企画。ちょいホラー仕立てでお送りしておりまぁす～」

ヒラヒラと片手を茶化すように動かす様には、既にホラーなど風味も残っていない。

「……退けよ」

「んもう、つれない。人がせっかく寝起きに刺激を提供してあげて……うむむー」

謂れの無い不満を漏らす頭部を、千夜は両脚で挟んで圧迫してやる。

が、すぐにその間にある異物感はなくなり、

「なにすんのよぉー」

股の間の存在は、いつの間にか背後に回って首に腕を絡ませていた。

「今更お前に刺激なんぞ感じるか」

「あらん。せっかく、ホラー映画見て演出を研究したのに」

「……あの借りた覚えのないレンタルＤＶＤは、やっぱりお前か。しかも散々延滞させやがって……」

「だって、忘れてたんだも～ん」

悪びれた様子はカケラもない。

既によく見知った反応だった。

黒蘭という存在は――――――出会ってから、ずっとこの調子の一点張りだった。

出会ったあの日から、ずっと――――――

「……何も言わないのか」
「ん～？」

何を言い含めた問いなのかわかっているだろうに、黒蘭は知らぬ素振りで濁す。
わざわざ言わせたいのだろうか。

「……お前は、変わらないな」
「そりゃぁ、カミさまだもの」

そうじゃない、と内心で否定し、

「お前は、何があろうと……ずっとそんな感じだったと思って、な」
「どんな感じかしら？」

言われて、考えてみる。

黒蘭は、何も言わない。
自分が何をしようとも、咎めることも呆れもしない。
そして、何もしない。

ただ――――――

「何時でも何処でも……俺の周囲をふよふよ埃のように舞ってやがる」
「もう、失敬な言い様ね」

唇を尖らせて不服そうにしているが、それだけだ。

昔、こんなぞんざいな態度で接しているところに居合わせた者には、冷や汗の滲んだ青い顔を向けられたものだった。

だが、それでも黒蘭は笑うだけだった。

微笑。

振り返ってみれば、黒蘭の表情といえばそればかりだった。

否。

それしか――――――知らない。

「胡散臭い笑い顔を常備して、ふわふわふわふわ……」

「今度は、風船呼ばわり？」

「風船は人の揚げ足とったり、小憎たらしい台詞を吐いたりしないだろう」

「でも、ただの風船と違って退屈しないでしょう？」

「ふん……限度ってもんがあるだろうが」

退屈。

そういえば、ここまでそんな言葉とは縁遠い人生を送ってきた。

そう、全ては――――――

「……なぁ、一つ聞いておきたい」

「あら、何かしら？」

「どうして――――――あの時、俺を助けたんだ」

それは、六年間ずっと胸に留めて閉じ込めていた疑問。

この六年という年月は、全てこのカミが投じた一石なくして有り得ない。

気まぐれ――――――だったのだと、自身ではそう結論付けていた。

自分の何を気に入り、面白いと思ったかは知れないが、この空虚な存在はあの場で死なすには惜しいと思わせたのだろう。

一柱のカミの悪戯により、生きながらえた。

だが、それも今夜限りだ。

腐れ縁のように続いたこのカミとの仲も、ここで終わることになる。

だから、だろう。

深いとも浅いとも言いがたい関係を続けてきた相手に、最後にどうしても聞きたくなった。

今の己の――――起源となった存在に、あの時何を思ってこの命を拾い上げたのか。

「……齢ウン百年生きて退屈を持て余すカミ様にとってみれば、こんなセミみたいな存在を拾ってみたことになんか大した理由はないだろうが……まぁ、死ぬ前に聞いておきたいことだった。いい機会だから教えてくれよ」

そして、同時にこれが最後の機会でもあるのだから。

言葉の裏にそう言い含めて、反応を待った。

「……月が、綺麗だったから――――じゃ、ダメかしら？」

「何だ……特に理由も無いのか？」

黒蘭ならなくもない返答だ、と思う反面、何処と無くショックを感じている部分もあった。癪なことに。

しかし、

「理由を聞かれたから、答えたんだけどん？　……私ね、好きなの。白い月」
「……ああ、知っている」
胡散臭い笑顔がポーカーフェイスである黒蘭には、たまにそれでいてもわかりやすくご機嫌な時がある。
それは、普段は紅い月が――――稀に白く浮かび上がる夜だった。
黒蘭に拾われた夜も、その白い月が出ていたが――――
「白い月はね……私に、幸いを運ぶから」
「幸い？」
「そう。あの真っ白な月が照らす夜は、何かしらいつも私にとってイイコトが起きるのよ。あの夜も……ね」
首に回されている腕に、少し力がこもる。
閉じるように密着を強くし、
「イイもの、見付けた」
「……そんなに珍しいものだったか、俺は？」
皮肉るように千夜は笑い、
「……悪いな。お前の退屈しのぎ……もう、してやれんよ」
「……」
「今夜が、俺の――――ゴールだ」
ゴール、と自分で無意識のうちに懐かしい響きを放っていた。

六年前の、出会ったあの夜に――――――黒蘭は言ったのだ。

『――――――貴方のゴールは、他のところにあるかもしれないわよ？　一緒に探してあげるから来なさいな』

言葉と共に伸ばされたのは、今は抱擁に使われている手の片割れだった。

その腕は大胆に絡みついているが、そこに束縛する力は無い。こちらが身じろぎしてすれば簡単に振りほどけてしまうだろう。

己の対する黒蘭の態度そのもののようだ。

このカミが、はっきりと己に何か行動を示したことがあったといえば――――――あの時の、あの手を差し出したことぐらいだ。

以来、のらりくらりと己の傍を漂う。

そして、それを心底疎んじることもなく甘んじていた。

ずっと。ずっと。

「今から向かうところが……貴方が見つけたゴール、なのね？」

「ああ」

「……ここで、満足？」

「随分歩いたと思う。そして、随分……行き会った」

そして――――――失った。

知らなかったこと。

知りたくも無かったこと。

あの時、潰えていれば絶対に得ることが無かったものが、今はあ

る。

全てが黒蘭の手から始まった。

他者との出会い、連鎖する悲劇も。

このカミは、己の辿る道を全て見越した上で生かすことにしたのか。

全ては、この永遠という退屈を持て余す存在を楽しませるための茶番だったのか。

弄ばれたのかもしれない、と考えに行き着いても、不思議と怒りは沸かなかった。

過ぎたことと切って捨てるには、出会った彼らは大きい存在であったはずなのに。

「――――――ぁ」

疑問は、違和感へと繋がった。

だが、それは更に『答え』にも直結していた。

長いこと引きずっていた一連の――――――謎が、解けた気がした。

「……くっ……は、ははは」

笑みが、思わず声に出た。

内側から何かがこそげ落ちていく感覚と同時に、何かが居座る。

揺らぎを許さない、重みのようなものが。

そうか、と落胆なのか仄い歓喜だかわからない納得が湧く。

「……千夜？」
「黒蘭……俺は、どうやらどの道ダメらしい」
行き着いた答えに拒否感はない。
しっくりするのは当然とさえ思える。
そうだ、この身は、この存在は元より、
「……所詮、俺は……ガラクタだってことだな」
「何を言っているの？」
「今……ずっと、付きまとっていた違和感と……疑問の正体がようやくわかったんだ」
今までどうして気付かなかったのか。
否、気付きたくなったのだ。
皮肉にも、新たな環境へと踏み込んで、『それ』をふとした拍子でさえ意識せざるえなくなった。
現在を感じる際に、どうしても必要になるもの――――――それは、過去。
そして、振り返る時、
「もう……思い出せないんだよ、黒蘭」
「何を……？」
「何もかも、だ。俺を守って死んだ連中のことも、俺と関わって死んだあの娘のことも」
先程の夢を思う。
しかし、意志による要求とは裏腹に、脳には靄がかかったように残像しか反映されない。

夢ではなく、今度は思い出を思う。
思い、そして――――――

「……ゼロには、何をかけても……ゼロってことなのかな」
「まさか、坊やのことまで忘れたっていうんじゃないでしょうね？」
「――――――」

心臓を直接握られたような揺さぶりと共に、体中の血液の温度が下がったような気がした。しかし、咄嗟に思った先で――――――今しがた持ち出された男の顔はまだそこにいた。
投影された表情は、出会ってから得られた最高の笑みを浮かべるものだった。

恍惚とした何かが胸に滲む。
もう、彼らの顔――――――そして『あの人』の顔はどうしたって思い出せないのに、彼はまだ己の中でしっかりと形を留めて残っていた。蒼助だけではない。朱里、三途、久留美もだ。
それは、この手から確かに失ったけれども――――――本当の意味で失っていないからだと思った。

もう記憶の断片と化してしまった彼らも、こうなることが出来たはずだったのに。
手遅れになる前に、離れるか、何処かへ逃がして見送ってやるべきだった。

けれど、それは既に過ぎたことだ。どうしようもない。
そして、そんな風にしか死んだ彼らを感じて捉えられなくなった自分が憎らしく、疎ましい。

「いや、まだだ」
「……そう」
「だが、いずれゼロになる。いい加減、学習しているよ」

一時の慰めに甘んじてしまえば、己は今度こそダメになるだろう。
本当に『あの時』に戻ってしまう。
何もなかった最初の時に。

変わっていない。
あの時もそうだった。死ぬことは恐ろしくない。
だが、今は一つだけ違う。

あの時は知る由も無かった――――――喪うという恐怖を知ってしまっていた。

「今度こそ、俺は……間違えない」

間違えず、守ってみせる。
残してみせる。自分という空の器に、この自己の存在を証明するかけがえのない人たちを。

だから、自分はもう――――

「終わりにする。俺のゴールは、目前だ」

身を沈めていたソファから腰を浮かせる。
同時に、絡み付いていた黒蘭の二本の細い腕が解ける。
するり、と殆ど抵抗無く離れる様に、何故か胸が軋む。ほんの少し。されど、確かな鈍痛として。

止めないのか。
つまらないから寄せ、とは言わないのか。
そう問いたくなる自分がいた。

馬鹿な思考をしていることにすぐさま気付き、揉みくちゃして放り捨てる。
止めないのは、それだけの価値もないということだ。
このカミを満足させるだけの存在ではなくなった。
そして、もういいという許可でもあるのだろう。

思い返せば、無理を強いられた記憶は無い。一度たりとも。
それを匂わせた言動は幾度と無くあったが、それでも黒蘭はこちらの意志をねじ伏せてまで何かを強制したことはなかった。

誘われた時も、そうだった。
こちらの意志次第の選択肢を目の前に並べて、選ばせた。
だから、今度も同じことなのだ。

そして、自分は選んだ。
少なくとも、あの時とは違う選択肢を。

「……もう、行くの？」
「ああ」
「居場所は、見当ついているの？」
「随分前にな。両生類の割には頭が回るようでな……厄介なところに拠点を置きやがった。おかげで、そうやすやす手が出せなかった」

己のポテンシャルが急落している状態では、勝てる見込みは薄かった。
回復するまで、或いはどうにか打開策を打ち出すまでは、と先延

ばしにしていた。
その甘い考えが、不要な惨劇を生むことになるなど想像もしていなかった少し前までの自分が今はどうしようもなく憎らしい。直接的な原因となった神崎以上に。

仮眠をとる前に用意をしていた黒いコートを羽織る。
学校という日常生活の場に踏み込む前によく来ていたものだ。
夜を歩く際に、常備していた――――懐かしい一着。

「……一つ、感想を聞かせて頂戴よ」

既に交わす言葉など尽きたかと思っていた相手は、不意に背中に言葉を投げてきた。

「――――――楽しかった？」

ぽーん、と投げられたのは簡潔なたった一言。
そんな一見些細な問いかけは、千夜の心を大きく揺さぶった。
目の前がぶれる錯覚さえ覚えるほどに。

ああ全く、おとなしく見送ってくれるのかと思えば。

どうやらこの退屈虫は、骨の髄までしゃぶりつくさねば気が済まないらしい。

ならば、と千夜はその喧嘩を買うことにした。

この女の期待を最後くらいは裏切ってやろうと思った。
胸のうちにあるこのやり場のない未練の掃き溜めにしてやろう、と。

何一つ面白いものなど無い――――――酷くつまらない告白を。

「ああ――――――楽しかったよ。楽しかった、さ。……特に……俺は、この生活が好きだった。普通の学園生活が楽しかった。……普通の高校生、終夜千夜でいるのが――――――好きだった」

――――――『終夜千夜』。

その名でいた期間は、今まで使ってきた偽名の中でも最も短い。
ほんの一ヶ月にも足らない使用期間であったのにも関わらず、何故か一番捨てるのが惜しいと感じていた。

その前に使っていた『御月千夜』でも、同じものを同じように感じて同じ生活をしていたはずなのに、湧き出る感傷の濃度が全くといっていいほど違う。

身構えだって同じだったはずだ。
浸り過ぎないように気をつけて、弁えることを忘れないようにしていた。

なのに、何なのだろう。
同じ役割を果たしていたはずの偽名だというのに、こうも執着の

度合いが違う。

他と同じように、『御月千夜』が既に記憶から薄れてしまっているからか。

そして、『終夜千夜』はまだくっきりと形を残しているからなのか。

不意に、脳を掠める記憶があった。それは、とても真新しいもの。

更に、耳には残響が、

『――――――ずっと、終夜千夜でいればいい！』

あの夕暮れの教室に置いてきた男の台詞が、甦る。

放たれた言葉に覚えた感情は、歓喜。

その理由は、今ははっきりと――――――わかる。

「……終夜千夜で、いたかったよ」

たった四文字で表せるこの名前に、偽名以上の何かを望んでいたのだ。

探し続けていた何かになることを。

［壱百四拾伍］　遺される儀悔　（後書き）

ここにもまた一つのただならぬ関係。
下手に肉体的な繋がりがあるよりも濃ゆいかもしれない二人。
もう一人のキーマン・黒蘭。この二人の因縁がどういったものかも、この物語において追いかける重要な謎の一つということで。

それにしても更新まで随分と時間がかかってしまった……。それもこれもラッキードッグが面白すぎるからいけないんだっ！！（作者は大真面目のようだ）

【壱百四拾六】　負け犬どもの這い上がり物語（1）

静かな夜だ。

上弦を独り心地に思い、

「――――――静か、だな」

呟いた。

上空漂う彼の言葉を拾うものは誰一人といるわけがなく、零した独り言は風に吹かれて掻き消えた。

静かだ、と改めて思う。

常時隣接して存在する『彼女』がいないと、より一層そう感じずにはいられない。

普段は神経を疲れさせるだけでしかないあの言葉遊びも、今ばかりは欲しいと思っている自分に上弦は気付いていた。

「この静けさ……しばらくぶり、か」

正確に言えば――――――決して、この夜は静寂ではない。

東京という中枢都市は日が暮れても人間が多く出回る。それらが芋洗いのように擦れ合い混ざる『音』は聞こえず気付かない者にはなんら問題はないが、そうではない者の耳には酷く煩わしい。

だが、今夜のそれは何処か物足りない。長年悩まされている煩わしさは、軽減されているように人外の超越した鼓膜は感じている。

この違和感に、覚えはある。

そして、理由もまた――――――既にわかっていた。

「……今宵は、一層赤らんでいることだ」

エレキテルの光をそこかしこから放つ夜の都市から目を離し、視線はそのまま上へと持ち上げられる。

止まったその先には、同じ空にいようとも尚も変わらず遠くにある月だった。

歪みなく丸く線を描く満月は、今夜も紅い。否、一際濃いように見える。

「血濡れ……まさしく、鮮血」

鮮やかな紅（あか）は毒々しいまでに――――――血の色だ。

ジッと見ていると、心を自然と不安定に傾けていく。

内側を擦るような苛立ちが湧き立つのだ。

何故なら、まるで、

「――――――見下ろすモノを嘲笑っているよう、って？」

背後から聞こえた声に、上弦は肩を震わせた。

それはもうわかりやすく、ギクリ、と。

「こ、黒蘭さまっ！　いつの間に……」

「血塗れ、のあたりから。だいじょーぶ。……心のポエムは語り始めしか聞いてないから」

口にしていないのに何故わかったのか。

それを言葉にしては思うツボであることは理解できていても、気

にはなった。
大人しく無心で待っていればよかった、と己のうかつさに後悔を滲ませるが、
「……まぁ、なんにしても……静かねぇ」
何気なく呟く黒蘭の様子に、すぐさま思考を切り替える。
「魔性ども、ねぐらに引っ込んでる。……これは、いよいよってところね」
「……孵化は、いつの頃合になりましょうか」
「この分じゃ日付も越えられないわよ、きっと。……溜まりに溜まってるから、噴出したら一瞬よ。それこそ、瘴気の原爆がここを全部飲み込むわ……人も、魔性も」
人は気付いていないだろうが、魔性は気付いている。同じく外れた者としてその予兆をヒシヒシを感じているのだろう。だからこそ、その『爆発』に怯えてナリを潜めて、夜に躍り出てこないのだ。
人外は皆、終わりの気配を感じ取っている。
だからこそ、この奇妙な静けさだ。
「ああ、今夜はやけに紅いわね……負け犬どもを嗤っているようだわ」
「……それは、あんまりでは」
「事実じゃないの。……坊やは、ヤケ酒。お嬢ちゃんは、泣き寝入り。唯一のイイ大人は、塞ぎこんで……フォロー入れられるなら入れてみなさい」
「……」

返事代わりに出たのは、溜息だった。
現状に対して、そして――――黒蘭に対して。

「殉死願望二人は、無自覚。坊やは勘違い……敗因はこんなところね。まぁ、なるようになった……わね」
「……まるで、こうなることをわかっていた……ように見受けられますが」
「それだけ難易度が高い壁に挑んでいるのよ。……もとより、望みは薄い。私たちのしていることっていうのは……結構無謀なのよ？」
「おっしゃるとおり、ですが……」

それでは、我らが今までしてきたことは一体何だったというのですか、という言葉はギリギリ喉の奥で留められている。
黒蘭の纏う空気がいつもよりも若干張り詰めているのが、肌と理性で感じ取れた。下手に勢いに任せて当り散らした際には、想像を絶する八つ当たりの逆襲が待っているのは経験上わかっていること。そんな場合ではないことも、わかっていた。

更に、一つ気にかかる点が上弦を抑えていた。

黒蘭に焦りが無い。
その飄々とし態度には、いつもよりも若干乱れはあるもののどうしようもない局面で保てるものではない。
過去に一度だけ目にしたことがあるその時と比べても、これがそうであるとは思えない。

自分たちはどうしようもなく追い詰められているはずだった。
けれども、黒蘭は、

「……”まともな駒”じゃ、勝てないのはわかっていたわ。勝負に勝つためには、真っ向から挑めばいいってものじゃないのよ。試合放棄した二人はともかく……坊やはどれだけ全力でぶつかっても実質を欠いていたからね。力負けは当然の結果だわ。並べた言葉がどれだけ立派でも説得力がないんじゃねぇ……」

痛いところをヅケヅケと突いて回る黒蘭の口調には、危機的状況を匂わす焦燥といったものを一切嗅ぎ取れない。

今の言葉に乗っとるなら、『勝負』はまだ終わっていないとでも言いたげである。

「……どうなさるおつもりで……？」

「今までどおり。何もしないわ。……駒には自主的に動いてもらうの。知ってるでしょ？」

含みに何が込められているかは、聞かずともわかった。

無言で肯定を示す。

「……手持ちの駒は、既に使い切ったのでは？」

「あんたにそう見えるのなら、大丈夫かもね。……確かに、真正面からぶつける駒はもうないけど……【切り札】は、まだ生きてるわ」

「切り、札……？」

はっきりと明示されているようで捉えどころの無い言葉に、上弦は怪訝な表情を黒蘭に向ける。

黒蘭は、そんな上弦の疑問を向ける眼差しなど気にもかけず、

「……ねぇ、真正面から戦っても勝てない相手に勝つにはどうすれ

ばいいと思う？」

脈絡のない質問を飛ばす始末。

ここで己を優先すれば、「私は、質問しているんだけどね」と冷たい眼差しで拒否されるのがオチであるのも経験上の話だ。

パターンを踏んだ上で、上弦は質問に対して思考することを選び、

「……手段の選択を……捨てることでございますか」

「あら、上弦にしてはイイとこ突いてるじゃない」

返答は的中はせずとも、的は外さなかったようだ。

ホッと胸を撫で下ろす横で、

「明確には、”不意打ち”ね。それもピンポイントをバッチリ狙ったやつ。本人も気付けないような弱点は必ず存在する。そこを、無意識だろうが偶然だろうが突いてしまえばいい。脆いところを強く触れられれば、案外すんなりオチるものよ。人の決意や意志も同じこと。……だって、人間だもの」

さすが、そうして数多く人間をオトした者の言い分には説得力があるというものだった。それを傍らで見届けてきた者としては、特にそう感じずにはいられない。

「それは、貴方ではなく【切り札】にやらせる……と？」

「ええ、もちろん。そうじゃなきゃ、不意打ちにはならないじゃない」

うっすらと不敵な笑みが口元に滲み、濃くなっていく。

「私はせいぜい――――”期待”させてもらうわ」

◆◆◆◆◆◆

「別にさ、今回が十四年続いた悪夢の再来とか……そういう大層なもんじゃないんだぜ？」

揺らめく意識に、蔵間のおどけた風な言葉が届く。

口にしたアルコール独特の苦味が舌に刺激を与えたが、さほど気にせず喉に下す。

これが高いブランデーの味か、と淡白な感想を胸のうちに零しながら、隣で店内に流れるＢＧＭの中で混じるように紡がれる言葉に、蒼助はなんとなく耳を傾けた。

「実際は六年どころか……三年と保っちゃいないんだ。本物の再発は三年前。そん時は、こっそり降魔庁で処理した」

三年前、というキーワードは、今日という日に耳にして真新しい記憶だった。

しかし、さして蒼助の意識を揺さぶるだけの力は無い。

手の中で弄ぶグラスの中に入ったブランデーを見つめながら、蒼助は己の現状の経緯を振り返った。

気がつけば、教室を出て蔵間と共に外にいた。

そのまま彼が行く後ろをついて歩き、そうしているうちにここに連れてこられた。

地下にひっそりと構えていた小さなバー。とても騒げるほどの広さもないシケた店だと、若い蒼助には見受けられた。それを渋いとか雰囲気が良いと感じるには、まだ歳が足りなかった。

蔵間の行き着けの隠れバーであるというそこで、こうして注文もしていないのに酒を飲まされている。多分、奢ってくれるのだろう、となんとなく自己解釈しながら。

そして、飲み始めると突然、蔵間は重要機密であろう内容を酒の肴にして語り始めた。

突っ込むところだろうが、蒼助にはそんな気力もやる気もなかった。

放って置かれているのをいいことに、蔵間の緩い口は閉まる気配を一向に見せないまま、

「――――その時、うちの処理班一課から十三課までがそれぞれ外部や自分らの伝から助っ人を呼び寄せた。その助っ人の中に――――”あいつ”もいた」

意識が、揺れた。

己の現金さに、蒼助は知らずのうちに嘲笑(わら)っていた。

何故ついてきたのか。今、思い出した。

教室にフラリと現れた蔵間が垂らした『餌』に自分はまんまと喰らいついてしまったのだ。そう、『千夜』にまつわる話に――――だ。

あんな風に切り捨てられたというのに、それでも反応してしまう自分に嫌気が差す。

潮時だというのに、そこから離れられない自分の未練がましさに。

「あん時は、まだ十三歳くらいで……しかも、男だったからな。転入生だって任された時は驚いたぜ。そんでもって、どういうわけかお前と……なんて、な。まったく、数奇な縁が巡ってくるもんだよなぁ……？」

と、蔵間は話の合間に挟んで酒を一口流す。

一呼吸整えるようなその動作の後、

「……で、そんなお前はこんなところで俺と酒とか飲んじゃってるわけだがよ」

その声色は、何かに上塗りされていくかのように変わり始めた。

今までの陽気な口調は、そこから、

「一応、言っとくが――――――――あいつ、このまま行ったら……間違いなく死ぬぞ」

不穏を告げる警告者のそれへと変わる。

心臓に針を突き刺すような痛みを齎す言葉に、蒼助の意識は嫌でも蔵間へと向けさせられる。正確には、彼の告げた中にあった――

――最悪の未来を匂わす部分へ。

「三年前の時のように霊力も心身も万全の状態で挑めば、もしものことも無かっただろうよ。何だ、ありゃ……どこもかしこもガタガタじゃねぇか。それこそ、もしものことは……ねぇよ。運が良くて、相打ち……悪くて」

止めろ。

その先を遮る意志は言葉にするよりも行動にする方が早かった。

ダン、と叩きつけるようにカウンターのテーブルに置いた音で、蔵間の言葉は途中停止した。

穏やかな空間を震わす騒音に店主（マスター）は驚いてグラスを拭く手を一瞬止めたが、すぐに何事も無かったように作業を再開した。

そして、蔵間は、

「……そんな風になるくらいだったら、何で行かせたんだよ。ついこの間までのあの猛烈な突進ぶりはどうしたってんだぁ？」

溜息を多く混ぜ合わせた言葉が問う。

思い、返す言葉として口から吐き出したのは、

「……思い、知ったんだよ」

「あぁ？」

「……俺ってやつは、何一つ変われていなかったことを……思い知ったんだよ」

そこからは栓を切って溢れるような衝動に駆られた。

聞かせる必要の無いことが、腹で煮えくり返って、喉までこみ上

げてきた。

これは、鬱憤なのだろう。

彼女にではなく、自分への――――――

「……あんた、知ってるだろ。俺が……俺を嫌いだってこと」

「そうだっけか？」

「ああ……大嫌いだ」

怨み言を吐くかのように肯定する。

その泥のような言葉に付け足す声が続き、

「まぁ、それ以上に他人に興味がねぇんだよな」

「……ああ」

その通りだ、と酔いに揺らされるように頷く。

「自分以外に何を大事にしたらいいかなんてわからなかったし……そんなもん、ありもしなかった」

でも、と声の調子が僅かに上がり、

「やっと、出来たんだよ……自分よりも大事にしたいものが。昔みたいに強くなりたいって思った。そいつのためなら、何だって出来るように……なんだって、無茶叶えてやれるように……ってさ」

「……」

「そんで、結構がんばったんだぜ……？　自分でも、他人からも……変わってきてるって思えて、思われて……このまま行けば、ひょっとしたらって……すげぇワクワクして……」

だが、それは――――――

「けど、さっき……思い知ったんだよ。俺は、何一つ変われちゃいなかった。これっぽっちも強くなんかなれちゃいなかった。あいつに……安心して身を任せてやれるもん何一つ……俺は、手に入れていなかった」

握り締めていたグラスを離し、掌を仰向けにして見つめる。
変わらぬ己の手を、酷く軽く感じた。

「……俺の”死なない”は、あいつを信じさせてやれなかったんだよ。だから、あいつは行っちまった」

握り締めた手ごたえの無さに泣きたくなる。
爪が食い込み痛んだが、それが何だというのか。

「俺と違って……あいつは、めんどくせぇもんをたくさん背負い込んでいて……そんなもん捨てて楽になりゃぁいいのに、大事に抱え込んでさ……。正直、馬鹿だなぁって思って……なんとかしてやりたかった。ちょっとでも楽にしてやれるように……なんか、してやりたかった」

別れ際の千夜の言葉を思い出す。
縋りつくように両肩を掴まれて、顔が見えない角度で告げられた懇願を。

「……あいつは、俺に出来ることがあるとしたら……手を離すことだって言ったんだ。だから、俺は……」

絶望と失望に追い詰められた思考に、その言葉はトドメとなって

突き刺さった。
そうしたら、身体はどうにも動かなくなった。
どうすればいいかわからなくなって――――わからなくなった末に、千夜の言葉を聞き入れてしまった。

「それで、そんな風になってるってか。……その割には、随分と未練タラタラみたいだがなぁ」

未練。
ああ、そうだ。
せめてそれが残らなくては、今までが無意味になる。
千夜と出会いが無意味になる。何もかも、全て。

この未練は、彼女の足跡だ。
ここにはもういなくとも、彼女がいた証だ。

千夜がいたことを覚えていること。
自分に許されたたった一つ。

「しょうがねぇじゃん……いきなり全部ひっくるめてそう簡単に……割り切れねぇよ」

明日になったら、割り切れるだろうか。
彼女の存在も。
自分の未練も。
終わったこととして――――思い出として片付けることが出来るだろうか。

なら、少しでもその時に浸れるように、

「……本当は、引き留めたかったよ。足ブチ折られようと、腕曲げられようと……食いついてでも」

全部吐き出してしまいたい。
臓物も血も全部何もかも。

少しでも身を軽くして、明日を迎えられるように。
千夜がいない――――――明日を受け入れられるように。

「でも、俺じゃダメなんだよ。……俺じゃ、あいつを救えねぇ。助けたくても、留めておきたくても……それが出来る力が、ねぇんだよっ――――――――!!」

最後の方は悲鳴に近かった。
情けなくうわずった後、蒼助は前髪を掻き毟るように掴んで俯いた。

蔵間は、それを何も言わずに見届けた。
何を思ったのか細めた眼には、冷ややかな光が灯っていたが蒼助は気付かなかった。
興味が尽きたかのように蒼助から視線を外し、話を聞く間に中身を飲み干していたグラスを店主（マスター）に突き出した。

「おかわり」

常連客の注文を快く承った店主は、解けてしまった氷を一度捨てて、もう一度注ぎなおしていく。
ピィン、と氷の軋む一杯を受け取った蔵間は、それを口に含むかと思えば、

「――――――さっきから何を寝ぼけたこと垂れ流してんだよ。目ぇ覚ませ、ど阿呆」

くるりと飲み口を引っくり返して、遠慮も躊躇も無く蒼助の脳天に注いだ。

［壱百四拾六］　負け犬どもの這い上がり物語（1）（後書き）

ど阿呆、の時何故か過ぎる某グリーンリバーさん。る、流〇くん！？
でも、蔵間先生のイメージボイスはＭ木Ｓ一朗さんなんだけどねー。
台詞書いている時とかは脳内いつも流れてるぜー（痛笑）

しかし、サブタイ（汗）

［壱百四拾七］　負け犬どもの這い上がり物語（2）

ほろ酔いは一瞬で冷めた。
突然、キンキンに冷えた酒を頭にぶっかけられたということもある。

だが、それ以上に精神を揺さぶったのは――――――

「いろいろクダ巻いてたがよ……ようはフラれたってことだろ？お前はあいつから見れば、弱くて、頼りなくて、口ほどにもねぇヘナチョコ野郎だった。だから、捨てられた。そんでその負け惜しみを俺相手にグチグチネチネチ吐き連ねているって有様だ」

さっきまでただ相槌を打つ程度の言葉しか返さなかった男。
それが、今は何故か突然脈絡もなく酒で頭をびしょ濡れにしたかと思えば、自分を糾弾するように言葉を勢いよく紡いでいる。

ポカン、と口を半開きにして唖然とした蒼助は、現状を処理するのに時間を要した。

しかし、この状況の原因たる男――――――蔵間は、それを待たない。

「はっ、くだらねぇな。つーか、よくよく考えてみりゃ、お前はただ単にてめぇのプライドと自信をこっぴどく傷つけられて怖じ気づいちまっただけじゃねぇか。昔から妙にプライドと態度だけはデカかったもんなぁ、お前は。手を離してほしいと言われたから、離し

た？　いいや、違うね。お前は――――――自分から離したんだよ」

不本意な台詞が出てきたことで、蒼助はようやく我に返り始めた。

自分から、あの手を離した――――と。

蔵間は、今確かにそう言ったのだ。

「……これ以上つながっていて、てめぇ自身が再起不能どころか修復不能のボロボロにされるのが怖くて、お前は自分から手を引いたんだろうが。何せ、全部否定されちまったんだ。これ以上自分の何に自信が持てるんだって話だな。自分と意見、考えが異なる相手からお前は逃げ出しちまったんだよ、蒼助。

……はっ、つまるところお前は――――――立派な負け犬ってわけだ」

黙れよ。

あんたに何がわかる。

それが反論となって言葉に出る前、そして琴線が弾けとんだという自覚が訪れるよりも早く蔵間の胸倉を掴んだ。

が。

「――――――伏せろ、【玖珂蒼助】。頭（ず）が高ぇんだよ」

冷静に、沈着とした調子で紡ぎ出された言葉。

強い口調ではないというのに、妙な圧迫感を感じた。

普段は呼び捨ての己の名が姓名で呼ばれたことで、蒼助は気付いた。
それがただの命令ではないことに。
発動する。
そこまで考えた時には、既に体が”従っていた”。

「――――っが、あ……っ！！」

体にかかる強制力を感じたと同時に、蒼助は不可視の力によって突き倒されていた。
傍目から見れば、自分からカウンターテーブルに頭を打ち付けたようにしか見えないような――――そんな形で。

脳が横にシェイクされた。
人為的に起きた激しい視界のぶれに、蒼助は一瞬だけ意識を飛ばした。
しかし、復活に時間は重病と必要ない。

沈下しない熱によって一層煽られて目の前の相手に挑みかかろうと意志は動くが、

「――――――固定」
「っ、な、ぁ……！？」

テーブルの上から起こそうとした頭部が、接着剤で貼り付けられたが如く密着した。
ガッチリ、と右頬から右側面の頭部にかけて。

「おー、なんか懐かしい光景じゃねぇか。初めて会った時のこと思い出すぜ」
「……あ、ん……時は、”おすわり”……だっ、た……けどな、ぁっ！」

忘れもしない。
初対面の人間相手に犬扱いされたことなど、忘れたくても忘れられようか。

そして、今度は『伏せ』と来た。
本当に自分の周りにはロクな大人がいない。
そんな中でも、この男は自分が同姓として『憧れ』を抱く相手である。
これが自分としては比較的マシな大人であるのだから、ますます始末が悪い。

ちらり、とカウンターのすぐ向こうにいる店主を見る。
目の前で荒事など見えていないかのように静かにグラスを拭いている。
ああ、本当にロクな大人がいない。

「何だ、減らず口叩くくらいの元気は残ってるんじゃねぇか」

口元は笑っているが、目は依然と鋭い眼光を光らせている。
それに疑問を感じる程度の理性は戻ってきた蒼助は、訝しげに眉を顰めた。

怒っている。或いは、苛立っているのか。
だが、何故だ。

「……なぁ、蒼助ぇ」

一方で、蔵間はそんな蒼助の心中など露知らずのまま己を通す。
そして、その進行の過程で振ってきたのは、

「お前、何で俺が降魔庁に誘ったと思う？　考えたこと、あるか？」
「……は？」

蒼助を混乱の境へと追い込まんとする蔵間の不可解な言動。
思考は高まる熱を掻き乱されて、いい加減オーバーヒートしそうだった。
そんなぐらぐらに煮上がった脳で蒼助は、

「……おふくろ、だろ……？」

一昨日の夜に交わした三途との会話で見出した考えを、口にしていた。

「最近、気付いた。いや、前からおかしな話だと……ずっと思ってたけど、さ。……あんた、おふくろに相談されてたんじゃねぇのか……俺のこと。それと……」
「それと？」
「……俺の【眼】のことも、聞かされたんだろ？」

無反応。
蒼助は、それを肯定と受け取った。

いくら珍しく、貴重価値のある異能を持っているとしても、それは玖珂の家では何の意味もない。
玖珂という一族は、良くも悪くもまっとうな退魔の血族なのだ。

必要とされるのは、霊力と剣神の一族としての剣の才能。不要なオマケは、むしろ足枷にしかならない。

たとえ蒼助が曲がりなりにも当主の嫡子であろうと、必要不可欠な要素を欠損しているのであれば、一族のお荷物として容赦は無く切り捨てられる。昔、父親やその一部の理解者たちがそれをどうにかしようとして、従姉の迦織との婚約話が結ばれたこともあった。

だが、それも一族における蒼助の立場を安全なものとして揺るぎ無きものとするには、穴がある対処だった。

父親たちが懸命に頭を捻る傍らで、あの母親は全く別の対処を進めようとしていたのだろう。そして、それは蒼助自身が秘めていた異能の発覚によってその決断を確固たるものとした。

「……降魔庁は、何か一芸でも秀でてりゃ所属資格がある。……あんたは、あの日……話で聞かされた俺の……見極めにきたんだろ……？」

母親は、一体どんな風に話し聞かせていたのか。少なくとも、国家組織の総帥の興味を引かせるべくいろいろと誇大化させて話しただろう。

そして、結果は――――彼女の目論見どおりになったというところか。

「……正解は三割くらいってところかな、その回答は」

コトリ、と空のグラスをカウンターに置きながら蔵間は、

「相談は受けた。けど、当人からは規定年齢になったら自分が推薦出すからって予告もらっただけだ。あくまで、おふくろさんが関与する部分の所属云々に関しては」

「……どういう、意味だよ」
「お前をスカウトしたのは、俺の意志であり俺の判断だってことだよ。なにせ、推薦状を送る前に美紗緒さんはあんなことになっちまったからな。予告は無効だ」
でもって、と蔵間は素早く入れ直されたグラスを受け取り、それを一度煽ると、
「俺はというと……その時聞かされた美紗緒さん曰く【何処に伸びるかわからねぇ雑草みたいな息子】っていうのが妙にインパクトに残った。それで、一度は目を通しておこうと思って仕事の息抜きくらいの気分でお前の家に遊びに言ったんだよ。親父さんに会うって口実でな……そしたら――――」
投げなりに放られていた視線が、蒼助をまっすぐに見据える。
その視線に、蒼助はかつて出会った日の感覚を錯覚した。
「……スケベは父親。ツラは母親。本質（なかみ）は……どこの天邪鬼と入れ替えられたかしれねぇ捻くれたガキに遭遇したわけだ」
「……何で、どいつもこいつも【遭遇】って表現するかな」
昔を思い出すたびに腐れ縁の友人も口にするその単語に、げんなりと不満を漏らす。
「まぁ、期待外れず美紗緒さんの言うとおりだったけどな。面白そうな奴だとも……こりゃぁダメだな、とも……」
意味深な後半の台詞に、蒼助は瞬いた。
「……あの人はわかっていたぜ？　お前が玖珂じゃ生きていけねぇ

っていうのは。そいつは、別にお前の霊力の問題のせいってわけでも、自分ら親子の微妙な立場のせいってわけでもなく……そういう器じゃねぇってことで――――だ」

「ああ……？」

「俺は一目見た瞬間、なるほどなぁって思ったけどな。こいつは、一族とかそういう集団の中じゃ生きてねぇだろうなぁ……とよ。これでも、並よか多くの人間を目にしてきたつもりだから、そういう見極めには自信があるぜぇ？　お、れ」

その後、蒼助の顔をまじまじと見つめ、何故か嘆息。

「……いやしかし、何であの両親からお前が生まれたのか本気で意味不明だな。親父さんはスケベで馬鹿だが良い人だし……お袋さんはお袋さんで、あんな振る舞いけど根は世話好きの常識人だっていうのによ」

後半に関しては一部聞き流せないものがあったが、蒼助はここにきて堪えていたものを開放する。

「……さっきから、何が言いてぇんだよ……っ」

なにやら長い長い前置きが続いている。

そんな気がした。

「さっき言っただろ。――――目ぇ覚ませよ」

蔵間の目が再び引き締まるように細められた。

射抜くように鋭い眼差しと不可解な言葉に打ち伏せられて、蒼助は言葉を失った。

「変われるとか、他人のために何かするとか……似合わねぇことしようとしてんじゃねぇよ」
「似合わ、ない……？」
「そうだよ」

問い返す言葉すら、蔵間はバッサリと切り捨てた。
呆ける蒼助に更なる追撃を被せていく。

「……お前は、他人のことなんかちっとも考えねぇし、周りがどんな思いで見ているかも気付くどころか気にもしねぇ超自己中野郎だろうが。降魔庁も勝手に辞めちまいやがったくせに、今更なにを惚れた女なんかの為にその姿勢崩しちまうんだよ？」

酷い言われようだ。
だが、否定は出来ない。

蔵間の言う『玖珂蒼助』は、間違いなく自分自身だった。
他人のことを気遣ったりなどせず、周囲の気遣いさえも煩わしく思う。果てにはこの恩人の好意すら無下にした。

本当に自分勝手な男だ。
それを好きな女を前にして、今更な行為をしていると思う。

けれども――――――

「逃げるなよ、蒼助。ここで逃げたら……正真正銘の負け犬になっちまうぞ」
「……俺、負け犬じゃねぇのかよ」
「俺は、負け犬に酒奢ったりしねぇし、構ってやったりしねぇよ」
「ひでぇ」

思わず笑った拍子に、貼り付いていた顔がテーブルの上から離れた。言霊はいつのまにか解かれていたが、もう蔵間に殴りかかろうとする苛立ちや怒りはなかった。

ただ、代わりに何か別の感情が湧き水のように小さく噴き始めていた。

「なんか勘違いしてるみたいだから、言っておくぞ。――――人間は、変わらねぇよ」

それは、打ち砕けた蒼助の想いを更に細かく踏み砕く言葉だった。

蒼助はそれを黙って聞き入れる。

その続きを、不思議と冷静な状態を保つ思考で待ち構えた。

「変われねぇんだよ。死ぬまでその事実と……【自分】と向き合い続けなければならないんだ。たとえ、一生そんな自分が好きになれなくてもな……」

他人事ではない響きだ。

誰よりも蔵間自身がそれを感じて理解しているからだろうか。

その疑問を言葉にはせず、蒼助は耳を傾け続けた。

「……んな考えてもしょうがねぇようなつまんねぇことで悩んで悔やんでる場合じゃねぇだろ。てめぇがやりたいことは、そんなことじゃねぇだろうが。逃がした魚を追っかけたくって仕方ねぇんだろ、違うか？」

「……」

「てめぇが掴みかけたもんは、みみっちぃ見栄と臆病風にかまけて取り逃がしていいもんだったのかよ？」

弱いところを容赦なくどつく蔵間の言葉。
痛い。だが、不快ではなかった。
求めていたのだろうか、と奥歯を噛み締めながら蒼助は己に問う。
今の自分が間違っていることを誰かに指摘してほしかったのか、と。
だとしたら、自分は本当にどうしようもない臆病者だ。
ここまで来て尚もまだ誰かに背中を押して貰わなければならないとは。

「答えろよ、蒼助。……お前の本当の望みは、何だ」

ピンポイント直撃。
ど真ん中を貫く必殺の一撃。
ラスボスだって、こんな強烈なのを喰らったらグラッとくるはずだ。
中ボスにすら届かない小物など、一発ＫＯ瞬殺だ。

「俺は……」

望みなど、最初から一つしかない。
出会った時も。
初めて経験する厄介な感情を自覚した時も。
あの存在を遠くに感じてもどかしくて仕方なかった時も。
身体に巣食う何かによって闇の中に落とされた時。
突き放されたあの時だって――――――己の望みは同じ形だった。

「……俺は、変われねぇのか」
「ああ」
「俺は、逃げているのかよ」
「ああ」

まんべんなく返る肯定に、蒼助は思わず笑みを零した。
組んだ腕に顔半分をうつ伏せて、残る半分に苦笑を滲ませる。

「……でもよ、本質（これ）を認めちまったら……この一線越えちまったら、もう取り返しがつかなくなる」
「何だよ、まさか今まで無自覚だったのか？」

呆れたように声をやや大袈裟に誇張させる蔵間に、

「知ってたよ。ただ、認められなかった」

誰だって自分の嫌な部分は、好きじゃない。嫌なものからは目を背けるだろう。
蒼助にとって己の本質はまさしくそれに該当するもので、真っ向から向き合うべきものではなかった。

恐ろしい、と畏怖さえ抱いていた忌々しいものだ。

「……戻れなくなっちまう」

そう思って、決して意識して触れようとはしなかった。
なのに、

「でも、何でだろうな……今は、この線を越えちまいたくてしょ

うがねぇと思う自分がいるんだよ。線の向こう側にいきたくて、仕方ねぇんだ」

「それが……お前の答えかよ？」

「……止めねぇの？　絶対押しちゃヤバいスイッチだぜ？」

どんな愚問だ、と言いながら内側で呆れる自分を感じる。

止めてほしいなどいう気持ちは、カケラもないくせに。

「その目前まで引きずってきておいて、するかよ今更。……止めてほしいか？」

「一応。……でも、止めてくれないっていうなら――――――」

もう限界だ。

ここで止めてくれないのなら、もう自分は、

「――――――もう、行くわ」

首に巻かれた手綱を振り切るような感覚か。或いは、ガラスを叩き割るようなそれか。

立ち上がる瞬間に、己の中において長いこと居座っていたモノの消失を蒼助は感じ取った。

同時に、もう戻れないとのだと悟る。

越えてはならない一線を、たった今をもって踏み越えたのだから。

自分の中を何かが浸食していく。染み渡るように、広がっていく。

存在を膨張させていくものは、確かに自分が忌み嫌っていたものであるはずなのに、この開放感に似た実感は心地よい。とても。

「……酒くせぇ」

頭部に満遍なく降り注ぎ、染みたアルコールの匂いが恍惚感を煽る。
質がいいだけに濃密な香りが鼻腔をくすぐり、蒼助の脳を酔わす。
「水くれよ……」
その言葉が傍観者であった己にかけられたものであると理解した店主は、素早く要求に応えた。クセなのか、律儀に氷まで入れてグラス一杯の水を差し出す。
俯いたまま伸ばした手で受け取った蒼助は、それを、
「――――――っ」
脳天から浴びせた。
より湿りと質量を増す髪は、ぺっとりと顔や首筋に張り付く。
「……は、っ」
吐息のように零れた笑い声と共に、口端を吊り上げる。
それを目撃してしまった店主が驚いたように息を呑むのを無視して、
「……あんた、ひでぇことしてくれたな」
「あん？」
「これで、もう……あいつのこと逃がしてやれねぇじゃねぇか」
「顔と言動が一致してねぇぞ。つか、人のせいにするんじゃねぇよ」
「しゃあねぇだろ。……これが、【俺】だ」
「まぁ最悪。……行くのか？」
「ああ、逃がした魚を捕まえに行って来る」

ちょっとそこまで出かけてくる、とでも言うような軽い口調だったが、言葉には芯が通った力強さがあった。
それを察した蔵間は、息づくように笑い、
「なら、とっとと行けや。俺ぁ、これから役目終わったついでにここでゆっくり飲むんだからよ」
「……つーことは、やっぱりか」
半目を向けられた蔵間は、何だよ、と眉を顰めた。
「……あんたも、かよ？」
「はて、な」
「……白々しいっつーの。大体タイミングよすぎんだよ、あの教室あたりのくだりが。……事実上一国の支配者が、あんな怪しいもんに肩入れしちまっていいのかよ」
「馬鹿野郎。たかが一国の支配者程度があんな化け物に逆えるかよ」
これから向かう先へいるであろう存在の得体の知れなさは、一体何処まで増すのだろうか。道を踏み外した先は、とんでもない獣道であることを今更ながら再確認した。
「……一体何を餌に釣られたんだよ、あんた」
「そいつは、秘密だ。答えは……お前が大事なもんをとっ捕まえた時にわかると思うぜ」
脅しなどに屈するイメージは、蒼助には想像もつかない男。
自信に満ち溢れる姿は、まさしく人の上に立つ器だと思っていた。
そんな男を手駒として釣り上げるほどの餌とは、一体なんであっ

たというのか。

ひっかかるものにはなったが、ここにこれ以上留まる理由にはなりえなかった。

蒼助は見切りをつけて、立ち上がる。

行かなければならない、と心は既にここにはなかった。

「……個人的に、一つ忠告しておく」

背を向けたそこから、蔵間がまるで独り言のように言葉を投げかけてくる。

何か思わせぶるようなその口ぶりに思わず足を止めた隙に、

「これは俺の経験を踏まえての話だがよ。……他人が他人の為に考えたことなんて、絶対に他人のためにはならねぇんだよ。逆にいらんことになって相手を貶めることにだってなりえる」

「……」

「……まぁ、冷静に考えてみりゃ当然といえば当然だよな。何が自分のためになるかなんざ、自分にしかわからねぇんだ結局は。それは、相手にとっても同じだってことだよ。そう考えると……わからないもんを決めつけたりわかろうとするよか、お前みたく自分のしたいこと優先して実行した方が正しいのかもしれねぇぜ」

「励ましてくれてるつもりなのか、それ？」

「皮肉ってんだよ、馬鹿。……お前が、羨ましいってな」

蒼助を思わず振り向かせる言葉だった。

驚きを隠せないまま蔵間を見れば、そこにはいつもの余裕を構えたものとは異なる微笑があった。

言葉が嘘ではない、と明示するように。

「俺の時も……それがわかっていればなんか違ったのかもな」

「くら――――」

「止まるなよ、蒼助。この舞台の主役はお前らだ。遠慮せずにガンガン暴れてやれ。バックアップは裏方の仕事だ。面倒なところはこっちに任せて、お前はやることやってこい」

ほら、さっさと行け、と蔵間は追い払うように手をひらつかせる。

その少々ぞんざいなエールと見送りを受けて、蒼助は再び店の玄関に向いた。

もう振り返ることはなく、その扉に手をかけた。

◆◆◆◆◆◆

外に出ると同時に生温い風がビュゥっと一吹きした。

しかし、吹き付けた瞬間冷たく感じたと同時に、今の自分の状態を思い出す。

「……そういえば、頭ずぶ濡れだったんだな俺」

肩までびっしょりと濡れた己の有様を顧みて、口から思わず苦笑が零れた。

「ま、歩いてるうちに渇くだろ」

ガシガシと湿る髪を掻き、前を遮る煩わしい前髪を掻き上げる。
見通しの良くなった視界がまず捉えたのは、

「――――――」

薄気味悪いほどに真っ赤に濡れた月だった。
不思議と不快感が湧き上がる。
今まで意識したことはなかった天上の飾りに、何故こうも居座りの悪いものを感じるのか。

不意に、夕刻に遭遇した魔性の言葉が脳裏に過ぎる。

「……東京最後の夜に……紅い月、か」

あの不吉な言葉を増長させるように紅くほのめく姿は、絵になる。
終わりを予感させるように。

「……終わらせねぇよ」

この街も。
そして、千夜も。

そう込めて呟いた言葉は、それが自分にとって分不相応な大層な代物であることを思い、

……あんたの言うとおりだ。俺はヒーローにはなれねぇよ。

使命感も慈愛なんてものは持ち合わせていない。
他人なんかどうでもいい。
あるのは、自愛だけだ。

己の欲望のままに動く心。それしかない。

……可哀相な奴だよ、お前は。

こんな欲深い男に目を付けられた。
出会う人間に愛され尽くされた彼女にとってそれが不幸でなくて、何がそうであるのか。

そんなことは、これから不幸に貶める自分には思う資格などない。

「……とりあえず、あそこだな」

歩む足には、確かな目的地があった。
千夜を探すよりも先に行かなければならない場所がある。

まずは、向かおう。
彼女を連れ戻す力を与えてくれるであろう存在が待つそこへ。

［壱百四拾七］　負け犬どもの這い上がり物語（2）（後書き）

本当は、この回には「自我の覚醒」とかいうサブタイがつくはずだったんですが、前回からの繋いでいくということでボツに。しかし、忘れないでほしいのはこの回の真のサブタイは「野獣の覚醒」だということですわ（笑）

蔵間先生の弱みとはいわずもがな例の元恋人ですね。彼は舞台の上から降りましたが、その恋人はまだ舞台上の役者のままです。誰のことかは大体予想ついていると思いますが……。

【壱百四拾八】　負け犬どもの這い上がり物語（3）

守る。
この言葉はいつだってたった一人のために口にしていた。
無論、行為そのものもたった一人のためのものだった。

己には無縁だと思っていたこの言葉を口にするようになったのは、いつも不安に目を揺らす幼い少女に安堵を与えたかったからだった。
決して少女に優しくはない世界。いっそ無慈悲ともいえた。あまりの救いのなさに、他人のことながら絶望感を覚えたものだ。
脆く小さなその存在を絡めとろうと蠢く世界から守ってあげたかった。永遠と言わずとも、確かな安穏と呼べる時間を僅かでも捧げたかった。何かに怯えることなく、ただの子供のように無邪気に笑えるように。

大丈夫、誰にも傷つけさせないから、と念を押して、同じ何度も言葉を重ねた。
言い続けることで真実味が増すならと、何度でも。

けれど、少女から返るものはいつも期待を満たすものではなく、

『――――――いい加減目を覚ませ。俺は、【お前の千夜】じゃない』

不安げな表情を哀しげに歪める。
ただ、それだけだった。

今も昔も。

それだけは、変わらなかった。

◆◆◆◆◆◆◆

その違和感は、ドアノブの手応えからだった。

「――――――開いた？」

辿り着いた当初は、ＷＧの玄関の仕掛けを思い出して声をかけたが返事がなく、いきなり先を塞がれて苦悶したものの、ダメモトでドアノブを捻ったのだ。

しかし、予想していた浮遊感はなく、ドアは難なく開いた。

結界が解除されていた。

その事実に、蒼助は直感的に嫌なものを感じた。

しかし、躊躇している場合でもなくそのままドアを全開して店内

へと踏み込む。

「……センセ？」

名前を再度呼びながら、明かりが一切ついていない空間を数歩進み、

「……センセ、だよな？」

奥の方の席にて、蹲るように座る人影を見つけた。
暗闇に慣れた視界が、それが誰であるかを明確化し、

「……千夜なら、ここにはいないよ」

テーブルに伏せていた上半身がゆるりと起きると、背を向けたままそう言葉を放った。

「……来たのか」
「夕方に、ね」

自分との別れの後か、その前か。
いずれにせよ、千夜はここに決別を下しに現れたのだろう。
ひょっとしたら、三途から連絡が一切来なかったのは、この有様のせいなのだろうか。
蒼助は憶測を思考しながら、歩みを進めるが、

「……なに、するの？」
「奥の部屋。【試験】は、そこでやるって黒蘭のやつは言ってたからよ」
「……見ていないよ」

「瞬間移動なんてチートが使えるやつだぜ？　どうせ、不法侵入やらかしているに決まってるって」
「行って、どうするの……？」
「あ？　試験に合格して、晴れてあの馬鹿を連れ戻しに――――」

「――――やめて」

暗闇の中、僅かに浮かび出た背中が遮りの言葉を放った。
何処か縋るような響きを持った拒否は、芋ずるように続く。

「……もう、いいんだよ……蒼助くん」
「何がいいんだよ」
「あのコは、誰かに強制されたわけじゃなくて……自分の意志で選んだんだ。

――――だから、もう放っておいてあげて」

耳を疑うような言葉に、蒼助は少しばかり目を見開いた。
疼くように拳が震える。
けれど、そこにある衝動を押さえつけ、

「……センセ」
「もう、開放してあげようよ。あのコ……疲れたんだって。身も心も削って……何度も血を吐くような思いをして……。あのコは、私たちが思っているよりずっと辛く苦しい思いをして険しい道を歩いてきたんだ。もう十分だよ……十分なんだよ、蒼助くん。あのコが、これ以上苦しむ必要なんか……ないんだ。そんなことあっちゃ……

いけないんだ」

語りかけは途中からただの独白へと変わっていく。

「……どうして、だろうね。誰もが……たくさんの人間が笑って生きること許されている時代なのに……どうして、あのコだけ……。人を、殺したからかな？　そうして誰かを踏み越えて道を歩んでいたから……？　だったら……だったら、そうなる前は何だったんだ。何もしていなかったのに……普通に生きることができたはずのあの頃だって……いつもいつも、どうして……あのコだけが……っ！」

そして、最後は叫びとなり、そこが区切りだった。

尋常ではない消沈ぶりに蒼助は声をかけるタイミングを見出せない。

今の三途には、昨日までの穏やかさは見当たらない。

見ているこちらが痛み入るほどに悲痛を滲ませるその様は、それまで時折見せていた翳りとは比べ物にはならない。

口から次々と流れ出る恨み言のような言葉は、積年の代物であることを感じさせる。

この女にとって、千夜が切り出してきた決別は身を切られるような壮絶な苦痛であったのだろう。普段はなりを潜めている内側の脆くボロボロの部分をこうして恥も外聞もなく曝け出してしまうほどに。

千夜はそれだけ大きな存在だったのだろう。

それを欠いてしまった今、彼女はこの有様だ。

その気持ちが同等かはわからないが、蒼助もまた少し前まで同じ状態に落ち込んでいた。少なからず、気持ちに共感はある。

だが、だからこそ――――――

「もうどうしても無理だっていうのなら……せめて、楽にしてあげたいんだ。あのコが、楽になれると考えた方法だというのなら……私は。だから、もう――――――」

「――――――さっきからごたごた寝言ばっか並べ立ててんじゃねぇよ」

許せない。認めない。

押し付けられた結末に甘んじようとしているその姿勢が。

「あんた、本当にそれでいいと思ってんのかよ」

そんなわけがない。

そうだというのなら、どうしてそんなにも未練たらしく言葉を連ねているのか。

反応のない三途に、蒼助は勝負を買ったかのように口端を釣り上げた。

「いいのか？　死にたくても死ねなかったあんたが死ぬために必要なもんを、こんなことでなくしちまってもよ」

「――――――え」
「一昨日の夜、あんた俺に言ったよな？　自分は一度死んだ身だから、今更命は惜しくなんかないって。……あいつのために使えるなら本望だって。
――――それ、ちょっと違うだろ？」
「違うって……なに、が」
こちらの反撃に持ち出した材料は予想とは違っていたのか、そもそも反撃そのものを想定していなかったのか、三途の声には戸惑いが滲んでいる。
最初に得た手応えに、蒼助は己の行為に見込みを見た。
そうでなくては困る。
蒼助は、『探り』から本格に攻め入る体勢に入り、
「死にたがりのあんたが、唯一死ぬ理由になりえるあいつをここで見逃しちまっていいのかよ。俺は、自殺願望者の思考とか気持ちとか一生理解できないしたくねぇけどな……あんたにとって、あいつは自殺するための理由みたいなもんだろう？　いいのかよ。踏み台なしじゃ死ねないんだろう、あんた」
「……違う」
「違う？　何が違うんだよ。【誰かのため】っていうのは、【誰かのせい】にするってことだろう。自分の死に意味を持たせたいあんたには、格好の獲物だったのになあいつは」
「ちが、う……っ」
「それとも【予備】が残っているから、別に大したことじゃねぇのか？　まぁ、朱里（あいつ）なら傷の舐め合いってことであんたのこと慰めてくれるかもな。何より、自分の大事な人間が大事に思っていたやつだし、贅沢言わずに妥協さえすりゃなんてことねえよな？」
「やめて、私は、そんな……」

「偽善（イイコ）ぶるなよ、センセ。……ひょっとすると、今のこの状況はあんたにとってこれ以上にない都合のいい展開なんじゃねぇか？　あいつはあいつの望みどおり死ねて、あんたはあんたで代わりがいるから望みはまだ叶う。だから、あんたは……」

「――――――、――――――！」

先を遮るような殴打音。

騒ぎ立て倒れる椅子と共に、

「――――――わかったようなこと言わないで……っ！！」

三途は床に突き立てるように立ち上がり、同時に両手をテーブルの上に叩きつけた。

ここにきて強く放たれた言葉は、ようやく聞けた力のある意志のこもった声だった。

「君に、何がわかるっていうんだっ！　私が、私がどんな思いであのコの傍にいたかわかるのかっ！？」

「わかんねぇよ。……そんでもって、あんたもわかってねぇ」

「わかってるよ！　私だって……私だって千夜とずっと一緒にいたかった……ずっと、一緒にいたかったよ！　ずっと続けばいいと、何を引き換えにしてもいいくらい思ったよ！　でも、私には……私は、先のことを考えずにただそれだけを信じて願い続けることなんてできない。そんな風に、信じ続ける勇気なんか持てない……！　君みたいに、何とかなるとただひたむきに信じて前を進むことは……何も恐れずにいることは、できないんだよ。自分のために、誰かを廃人同然にしてまで縛り付けておく勇気なんて……もう……っ」

怒りに満ちていた感情は、滲み出た涙で押し殺された。

連なる言葉をただ聴くに徹していた蒼助は、それを区切りと見据

え、

「……だから、言ってんだろ。あんたは、わかっちゃいないんだ。何も」

どいつもこいつも、何でそうなのか。

自分の本当の望みなんて自分が一番わかっているはずなのに。

それを認められず、見えないフリをする。怖気と臆病で作り上げた【偽物】の願望で誤魔化す。

自分に嘘をつき続けて何が得られる。

我慢し続けて何に成し遂げられる。

そんなもの、いざ失った時、手遅れになった時に傷から湧き出す後悔が大きく噴き上げるだけだ。

欲しいのは、嘘の果ての代償ではない。

あんただってそうだろう？

そうやって口じゃ奇麗事ばっか並べ立ててるあんたって、本当は――――――

「あいつは、そんな奴なのかよ。簡単に自分の人生をあきらめちまうような……そんな弱い奴なのかよ」

「……だっ……て」

「今まで、血反吐吐くような目にあっても前進し続けてきたんだろ？　誰かに助け求めりゃいいのに、自分でどうにかしようと無茶すること選んできたんだろ？　そこまでしてきて、どうして今になって諦められるんだよ。死んだ方がマシだって思いまでした奴が、今更死にたいと本気で思ってるなんて、どうして信じるんだよ！！」

いつだって逃げ出せたはずだ。
だが、自分の為に死にたいと願い続ける相手を千夜は見捨てなかった。
馬鹿な奴らだ、と悪態つきながら、それでもその手を離さなかった。

不安で仕方なかったはずだ。
いつ繋ぎとめている手を振り解いて、死が渦巻く闇の中へ身を放り投げてしまうか気が気ではなかっただろう。
喪失の恐怖と隣り合わせで、自分の願いなど聞き入れず聞こえないふりを続ける愚か者どもを支え続けた。

あの時、千夜は【何か】に呑まれていた。
相対していた自分をはっきり知覚できていたかさえも、今は怪しく思える。
奥の奥に押し留めて、無理矢理蓋をしてしまいこんでいたものが何かの拍子に溢れ出て暴走しているようだ。本人では止めようがないほどに。

己を見失っているのなら、止めなければならない。
その為にはまず、目の前の人間の目を覚まさせなければならない。

「……マジで、今まであいつの何を見てきたんだよ。あいつが、賢そうな顔してすっげぇ馬鹿なのは、俺よりもあんたの方がずっとよく知ってるはずだろ!?　救いようのねぇ馬鹿だから、あんなベタベタに甘やかして世話焼いてきたんだろっ、ほっとけなかったんだろ!?」

捨て猫や根無し草に、むず痒くなるような温もりを与えたからに

は最後まで面倒をみてやれというのだ。拒絶されたくらいで、自分のものをそう簡単に諦めるなど愚の骨頂だ。

「あんたも、今更なんだよ！！　俺を殺してでも守ろうとしようとした大事なもんをどうしてここにきて諦められちまうんだよ！　物わかりのいい大人ぶってんじゃねぇよ！　怖気付いて自分をごまかそうとするな、下崎三途！！」

散々守る相手の言い分など聞く耳持たずに、自分のエゴを主張し続けたのだ。

だったら、その自己（エゴ）を最後まで――――

「あんたは……あんたが、守ろうとしたもんは……結局何だったんだよっ！」

「っ、わたし、は――――」

「――――この痴れ者が。そのように責め立てて女を泣かすやつがあるか」

二人の空間にて行われていた問答に割り込む、存在しないはずの第三者の声に我に返ったのは同時だった。

「……上弦、さん」

暗闇の店内という空間にて新たに存在を認められた者の名を僅かに掠れた声色で明示したのは、三途だった。

上弦は、蒼助が向かうはずだった店の奥に続く扉からその姿を現していた。

三途の言葉に応えることはなく、蒼助の方を見て溜息を吐く。

「表がやかましいと思えば、やはり貴様か小僧。……私の話を聞いていなかったのか、馬鹿者め。人の世話になどかまけている場合か」

「……」

「来い。黒蘭さまが首を長くしてお待ちしておられるぞ」

「……わかった」

三途を睨むように一瞥し、蒼助は止めて大分経った歩みを再開する。

押しのけるようにズカズカと入り口の向こうへ踏み込んでいく。

上弦はそれを見届けると、

「……私は、説教じみたことを述べる気はない」

伝う涙を拭いもせずそのままにする放心状態の三途に、上弦は諭すような口調で語りかけた。

「だが、経験者として言わせてもらえるのなら……自分がもっともなしたいことを選べ、三途。他人の是非は関係ない。お前の心が指し示す、答えをな」

先人としての知恵を授け、上弦はそれ以上三途に構いはしなかっ

た。

未熟な蒼助の叱咤であっても、少なくとも目は既に覚めているはずだった。

それなら、後は誰も口を挟むべきではない。

決めるのは、三途自身だ。

他の誰でもなく、己の意志で何をするかを決断させるしかない。

上弦は、かつての己と同じ穴に嵌まっている存在へ健闘を祈り、蒼助の後を追う。

願わくばあの時の自分と同じ途を辿れれば幸い、と思いながら。

扉を閉める際に、彼女が唇を強く噛み締めるのを視界の端に見た気がした。

［壱百四拾八］　負け犬どもの這い上がり物語（3）（後書き）

長いこと間が開きましたが更新です。
新作の設定づくりに夢中になっていたらいつの間にか新学期迎えていましたよ。
ちなみに、それが連載増やすなら今一番有力候補です。
珍しくファンタジー要素が薄いです。いや、ありえねぇと言う意味では一番ファンタジーかもしれないが（笑）

次の更新はすでに出来上がっているので、来週あたりにでも。
学校の授業設定は前半期がんばったおかげか大分薄く出来ました。
地獄の就活までの半年をせいぜい楽しもうと思います（遠い目）

【壱百四拾九】　負け犬どもの這い上がり物語（4）

黒い空が広がっている。
天気が悪いのか、今夜は星が一つと見えない。
ただ、代わりに、

「……今夜の夜風は、良くないな」
『左様でございますか』
「ああ。多分――――月が、紅いからだろう」

風が、妙に生暖かい。
夜闇の中で吹き曝すそれに、まるで闇に纏わりつかれているような不快感を覚える。

「見晴らしのいいところを選んだつもりだったが……失敗だったかな」

それは、まだ骨組みの状態の建設物。
いずれは高層ビルとなるであろう今はまだ鉄筋の城の頂点にいた。
東京の一角を一望できるその場所には地上よりも強い風が吹いている。

「どうだ、夜叉姫。場所は、特定できそうか？」
『いえ。まだ、この周辺に【入り口】の出現の気配は……残念ながら』
「そうか。……焦れるな」

足場としてギリギリ役目を果たす鉄の一本橋の上に千夜は腰を下ろす。

気長に待つという姿勢の顕れだった。

「しかし、まぁ……よりにもよって、【隔離世（かくりよ）】に目をつけるなんざ……入れ知恵とはいえ両生類が頭を働かせたもんだ」

――――――『隔離世』。

彼岸の三次元のうち【幽世】に肖（あやか）った人工の幽界。

空間発生型の結界によって構成される異次元にまで達した巨大な亜空間。東京を彷徨い迷える霊魂の類を収納する役目を持ったもう一つの東京と呼んでも過言ではない、この世には存在しない場所だ。

その異界への入り口は、区ごとに一つずつ存在し、一定の時間ごとに場所を転々と移動する。その動く入り口の移転場所は、管理する降魔庁の人間しか把握していない。

千夜が待っているのは、その移転場所が夜叉姫の測定範囲内に現れる瞬間だった。

「……影で殺しまくってるかと思ってたが、本当に俺への当てつけ分しか殺ってなかったわけか。確かに、【隔離世】には腐るほど屍鬼の【原料】が溢れかえっているからな」

特に、【隔離世】にて収納された霊魂には、未練や怨みごとを抱え込む怨霊に分類されるものだ。屍鬼をつくるには極上の素材の宝庫。更には、敵の領地（テリトリー）と化したその場所には降魔庁も迂闊に手は出せない。徹底されたその策は見事な効果を発揮した。

「万全の状態なら、それでも問題はなかったんだが……な」

霊力を損失した状態で、挑めば結果は見えていた。

だから、時期尚早と少しでも己の状態が回復するのを待った。

だが、

「……ったく、知らん間に要らんこと覚えちまった」

昔は、そんな躊躇は抱かなかった。

久遠寺の診断を告げられた時だって、同じだった。

死、という影の存在が己の取り巻いていることを教えられた時に、覚えたのは間違いなく恐怖だった。

死への恐怖から沸く躊躇は、戦いにおいては踏み込みを甘くし、隙を生む。命取りになりかねない。

「本当に、要らんことを……覚えた」

もっと恐ろしいことを、散々思い知ったはずだったのに。

『――――――主様』

忘我の浸りに割り入った夜叉姫の声に、千夜は我へと返った。

『我が測定範囲に出現いたしました。いかがなさいますか』

「ん、ああ……ここからの距離は？」

『およそ十メートル先の路上にて確認いたしました』

「よし、それじゃぁ行くか。十分きっかりで移動しちまうらしいからな」

柱に手をかけ、腰を上げる。

そこから踏み出そうとした際、

『……主様。出陣を前にしての御無礼をお許しください』
「ん？　どうした、夜叉姫」
『この戦の後、主様は命を絶えられるのでしょう？』
「……ああ、十中八九な」
ほぼ間違いなく、生きて現世に帰ってくることはないだろう。
『ならば、この夜叉の願いを一つだけ聞いていただけませぬでしょうか？』
「……言ってみろ」
『――――そのお命が絶えられる前に、夜叉に自壊を命じて下さいませ』
突然の告白に、千夜は目を張った。
「……何を言っている？」
『ただの道具如きが主に物乞うなど、弁えるべき行為であることは承知のこと。けれども、主様……』
ここには無い。
けれども、確かに繋がり、存在する愛刀は懇願した。
『夜叉は、もう二度と主様に置いて逝かれたくはないのです』
「――――」
言葉を失った一瞬、千夜の思考は過去を巡った。
まだ忘れていない記憶が、そこにはあった。
この鬼の名を持つ刀と出会った時のことだ。

黒塗りの武器が並ぶ中の奥に、ひっそりと埃を被っていた白塗りの長刀。
薄汚れたそれはまるで眠っているようだった。
ようやく触れることが出来る武器に出会えたことにまず安堵した。

――――――彼女、【夜叉姫】というのよ。

食い入るように見つめる自分を楽しげに眺めていた黒蘭が教えた名。
何故懐かしいと感じたのかはわからない。
触れる重みがしっくりと馴染む理由も。

――――――呼んでみたら？

呼べば、応えてくれるだろうか。
緊張に震えた声で、その名を初めて呼んだ。
応えるように白く光り輝いた瞬間は、今も瞼の裏に焼きついている。

『ああ、主さまっ！　……帰ってきてくださったのですね！！』

後で聞かされた話があった。
この白い霊装は、かつて使い手を失って以来自身に誰一人触れる

ことを許さなかったのである、と。
無理に触れようとすれば、指先を裂くほどに強く拒絶したらしい。
霊装としては最上級の力を誇る。けれども使えねばただのガラクタであるとして蔵に放置されていたとのことだ。

一途な思慕。それが武器としての存在意義を揺るがすことであっても、頑として曲げないその愚直な志を千夜は気に入った。
馬鹿は好きだ。
まっすぐ伸びるその志は、美しいと思う。

己をかつての主と間違えるほどに記憶を朧げにしても待ち続けたその刀を相棒とすることにした。
思えば、この刀を失くしても今の自分はありえなかった。
ここまで来ることは、出来なかっただろう。

一身に尽くしてくれるこの相棒にも、自分は嘘をついていた。
生きるために騙して利用し続けてしまったこの一途な鬼姫に、相応とは言わずともしてやれることは――――――やはり、一つしかないのだろう。

「……わかった」
『お許しいただけますか？』
「ああ。……一緒に、逝ってくれるか？」
『夜叉はそれを望みます』

迷いの無い言葉に、千夜は苦笑を浮かべた。
心が少し軽くなった。

最期まで自分の傍にいてくれるという存在。
それは、千夜が欲しても手に入らなかったものだった。

「……ありがとう」

これで自分は無敵だ。

ハッピーエンドが決められた物語の中で、お姫さまを迎えに行く王子だって、ここまで晴れ晴れとした気分ではないはずだ。

あとは、

「それじゃぁ、こいつを飲んで……最後の一仕上げだな」

コートのうらポケットから取り出したのは、赤黒い液体が中で揺れる小さなガラス瓶だった。三途によって製薬された『血清』である。

既に一本は使用している。念には念を入れて二本目を飲用しようと思っていた。

たとえあとで来る副作用の発現が早まるとしても、使用できる霊力は多いに越したことは無い。

ましてや、もはや躊躇する【理由】など無いのだ。

千夜は、一度それを振るようにして中身を揺らめかす。

「……こいつも、これで飲み納めだな」

過去何度も味わったなんとも言いがたい味を思い浮かべつつ、千夜は蓋を開けた。

そして、そのまま飲み口に唇を寄せると一気に煽る。

「……っ……」

口の中に苦味ともえぐみとも言えない味わいが広がる。
何度となく舌が感じる鉄のようなそれは、まさしく血を彷彿させる。
えずきそうになるのを堪えて、全て飲み下す。後味の最悪さに目を瞑り、
「……まっずいな、本当に」
退路を完全に断ったことを確認するように、悪態づいた。

◆◆◆◆◆◆

上弦が扉を閉めてこちらへ歩いてくるのを確認すると、蒼助は止めていた進行を再開させた。
目的地である最奥の部屋まで続く長い廊下。とことん元の建物の設計を無視した魔術の産物は、進む者に到達まで少々手間を強いる。
それは気が遠くなるとは言い難いすぐに果てを知る道だけれど、ここで沈黙が生じるだけの時間があるというのなら、蒼助はそれを省いて交わしておきたい言葉があった。
「……あんた、手加減してたのか？」

「何がだ」
「鍛錬だよ、鍛錬。……最初からずっとやり過ぎないように加減してたって本当かよ？」
返答は、一瞬の間の後だった。
「……何故、そう思った？」
「強くなったな俺……とか自画自賛してたら、夕方に千夜にボコボコにされちまった。嫌でも自分が成長してねぇってわかるっつーの」
「……姫様は、お優しい方だからな」
上弦としては、嘘で塗り固めるよりも事実をまっすぐに突きつけることこそが『優しさ』であるという認識らしい。
そいつは随分不器用な優しさだ、と皮肉る気持ちになると同時に、その不器用な人間を思う。そして、その不恰好な優しさに一時とはいえ甘んじてしまったのは他ならぬ自分であることも苦く再確認する。
「……こういっては元もこうもない話だが、人が強くなるには素質だけではなく、それだけの時間と忍耐が必要不可欠なのだ」
何処か気まずげに切り出された話に、蒼助はなんとなく内容を予想しつつも耳を傾けた。
「たった五日の期間で、あの方の満足する領域まで到達しようなど無理のある話。なぜならば、あの方は仮に到達したところで満足することなどないのだからな」
「だったら何であんなこと言い出したんだよ。……時間稼ぎか？」
頑なに他人の助力を拒む千夜が、完全に付け入る隙を塞ぐ前に、

とでも考えたのだろうか。

「……待っていたのだ」

質問に対して肝心の部分を欠いた返答に、蒼助は顔を顰めた。

何を待っていたというのか、と沈黙に促しを含ませると、

「鍛錬はあくまでついでに過ぎぬ。あの方は……この期間に全てが動き出すことを待っていた」

「動き……？」

「この五日間において、賭けは確かに行われていたのだよ。姫様とはもちろん……姫様を取り巻くあらゆる全てと。貴様も含めて、な」

「そいつは壮大だな」

茶化すように言えば、睥睨が返る。

本人は至って真剣な話であることをわからせたいのだろう。

上弦は顔を前へ戻しながら、

「実に無茶が過ぎる……不利な勝負だった。何か一つでも欠ければ、黒蘭さまの敗北は決まってしまう。あらゆる点で失敗は許されなかった。……たとえば、今こうして貴様が来ていなければ全てが台無しになるところだったのだぞ」

「それじゃぁ馳せ参じた俺に感謝してもらわねぇと」

「馬鹿者が。あの方の敗北は貴様の敗北に繋がるというのに、戯けた事を抜かすな」

諫めているのか呆れているのかどっちつかずな態度の後、

「振り返れば冷や汗をかき通しだった気がするが……貴様は、あの方の望んだとおり……否、それ以上に期待に応えた。姫様と出会

い、澱へと踏み込み、そして姫様の御心をも手に入れた。……本来ならここで褒めてやるべきなのだろう」

「じゃぁ、褒めてよ」

「断る。煽てて調子に乗って登った木から落ちられては困るのでな」

ふん、と素っ気無くする。

だが、見えない顔が笑っているようにも感じたのは気のせいだろうか。

ふと、物思いの時間が訪れる。

知り合ってたった五日の相手――――しかも、初日は自分を芋虫状態にした――――とこんな会話を交わしている今の自分に、再び認識が変わる。

自分は強くはなれていなかった。

けれども、何も得られなかったわけではなかった。

人は変われない。

蔵間は確かにそう言った。

今なら、その言葉を正しく捉えられている気がした。

人は変われる。

人は変われない。

どちらの言い分も、【全て】ではないというのなら――――

「あとは……あとに残る二つ。一つは、貴様が黒蘭様の試練を乗り越え、【資格】を手に入れること。そして……」

いつの間にか、扉の目前にまで近づいていた。

歩みは、その先を行っていた上弦の停止と共に無意識のうちに止まっていた。

「……そして？」
「……」
「……」
「……」

やけに長い沈黙だ。
勿体ぶっているというには、長すぎる。加えて不自然だ。

まさか、と蒼助は思い至った考えを、目を半分にまで細めながら、

「……知らないのかよ」
「うぐっ」

痛いところを突かれたかのように飛び出た呻き声が決定打となった。
やはり寡黙な振る舞いと気難しそうな態度とは裏腹に、存外わかりやすい男だった。

「……あんた、一応側近のクセして……」
「し、仕方ないであろうっ……誰であろうと【秘密】一点張りでおられる。決して本心は他者に明かさぬのだ……ただ一人を除いてな」
「……ただ一人、ね」

それが誰なのか。
該当する人間が脳裏にぼんやりと浮かび上がるが、蒼助はすぐにそれを打ち消した。

「それじゃ、解答は直接本人に聞きに行くとするかね」

前へ立つ上弦を通り過ぎ、蒼助は僅か一メートル程度の距離の先にある扉へと近づく。

しかし、

「待て」

この期に及んでというタイミングで呼び止めがかかる。

誰と思考するまでも無く、その主は上弦だ。

後ろから襟首を掴まれたような気分で蒼助は振り向いた。

「何だよ。空気読めよオッサン……ここは、もう何も言わずに」

「見送るべき、だろうな。寸前まで迷った。だが……あえて申す。

――――しばし待て。手間は取らせぬ」

止められた時点で十分手間となっているというのに、と蒼助は苦虫噛み潰したような顔を浮かべた。

決して良い予感は感じないまま、蒼助は背後の上弦へと向き直った。

いわゆる王道として一発食らうのだろうか。

掻っ攫う相手がこの場にいない状態で、それはまだ早いのではないか。

しかし、振り返った先の光景は蒼助の想像とはかけ離れたものだった。

「……何してんの」

目を見張ってから言葉が出るまで数秒かかった。

まさかの光景とは、今自分の【足元に】あるものだろう蒼助は心内で断言した。

床に両膝を付き、同じく両の手の平を押し付けて、頭を垂れ下げる上弦。

唐突に土下座の体勢を取るその見えない思惑に対し、蒼助の理解は追いつかない。

「おい、おっさ」

「――――――救ってくれ」

戸惑う蒼助の台詞を打ち消し廊下に響いたのは、顔を上げずに紡がれた上弦の懇願の言葉だった。

呆気の姿勢の持続を強いられた蒼助に、その言葉は弾丸のように降り注ぐ。

「あの方を、姫さまを救ってくれ！　もう十分なのだ……あの娘は、もう十分に味わった！　骨肉を断たれるような痛みも、奪われた後に残る喪失の虚無も！」

叫びに乗せられた懇願は、尚も続く。

「……なのに、何故だ。あの娘には、何一つ……報いも、救いも、

与えられぬっ！　過ぎ去った者、今ある者……その中に、彼女の幸せを望む者は……確かにおるというのに！」

何故、とやり場の無い怒りをぶちまける姿が、先程の三途と重なって見えた。

だが、三途ほど錯乱した様子はないのにも拘わらず、上弦の方がより切迫しているように思える。

それが、立つ場所の違い、そして目にしてきたものの違いであることだと気付く。

「……なにもせぬまま、このまま逝かせてやれば……生きている間が地獄に等しかったあの娘は、確かに楽になれるかもしれぬ。だが……そんなものは救いではない！」

上弦は、途中滲ませた僅かな迷いを振り払うように、強く断じ、

「死ぬことで報われることなどあるはずがないのだ。……仮に、あったとしても……そんな慰めは要らぬ！　あの娘に、そんな救いや報いなど……要らぬのだ！」

死による救い。

少し前まではそれが彼女の望みとして自分の想いも重ねようとしていたことを思いだす。

きっと、そのまま聞かされていれば自分は酷く動揺し揺らいだだろう。

だが、今はそれを正面から受け止められる。

そうだな、とそこにこそ想いを重ねることが出来る。

蔵間は他者が他者へ願う幸せなど、押し付けに過ぎないと言っていた。
その通りだ。本人の幸せなど、正しいものがあるとしたら本人が思うこと以外の何物でもないのだから。
上弦もそれを承知しているのだろうか。
承知の上で土下座までして千夜の幸せを訴えているのか。

「頼む、救って差し上げてくれ！　あの哀れなまでにひたむきで、強くも弱き娘を……救ってくれ！」

最後に声が激しく震えた。
泣いているのだろうか、と思った矢先押し殺すような呻きが続いた。
言葉が噛み潰されて残骸が漏れるのみの沈黙の間、蒼助は思考する。
これは要求だ。
是なり、否なり返すのが礼儀である。

「……普通なら、”任せてくださいお父さん！”……とか返すのが王道なんだろうけどな」
「……」

反応を汲むべくそれとなく漏らした呟きを、寡黙な態度で流すように何かも返さない。
己の返事を見越してのことだということか。
それなら、遠慮は要らないだろう。

「悪いな。……その頼みはきけねぇよ」

わかっているのだろう。

「……俺は、あいつを救いたくてこの先に行くんじゃねぇんだ」

この内にある想いは、そんな崇高なものはない。

ましてや純情なものでもない。

「俺は、俺の望みを貫きたい。あいつがそれを邪魔しやがるから、連れ戻しに行く。それだけだ」

たったそれだけのこと。

物語に出てくる薄幸のうら若き乙女を救おうとする慈悲深く正義感溢れる騎士のような誉れ高い精神などカケラも持ち合わせていない。

ただの意地だ。

男としての醜い独占欲と支配欲に塗れた純愛とは懸け離れた情念が、今の自分を突き動かす唯一の動力なのだから。

「――――――ふっ」

それまで曝していた激情を吹き飛ばすかのような一息が上弦の方から吹き出た。

ゆっくりと上げた顔には、

「……痴れ者めが。とっとと行けぃ」

己の願いを袖で振り払われた者のそれとはかけ離れた不敵な笑み

が湛えられていた。
まるで今の答えこそ自分の求めたものであった、というように。
それを受け止め、背中を押されているのだと確信した蒼助は、

「そんじゃ、行って来る」

歪なエールを背に受け、扉へと向き合った。

［壱百四拾九］　負け犬どもの這い上がり物語（４）（後書き）

あれよあれよという間に予告していた期間を過ぎて、新たな週になってしまった。
ニコニコで見つけた大番長のプレイ動画が面白すぎて作業が思いっきりとどこおってます、はい。キャラの多さと濃さが尋常じゃない。凄まじく素晴らしいゲームだよ本当。
とりあえず、この新作を書きたい衝動が静まることを願います。来年就活始まるんだから、そんな場合じゃねぇというのに。どんなに伸ばしても就活までにはなんとかしたいこの作品。

［壱百伍拾］　隔離世の王国

踏み出した一歩が敷いたのは、砂の感触だった。
飛び込んだ際の勢いが、暫しその上を滑らせる。

「……、と」

きゅっと足首を捻って滑り止めを試みれば、それは容易く終わる。
巻き上がる砂塵が、鼻腔をくすぐる。
それに対して不快そうに鼻をひくつかせた千夜は、

「……これは、想像以上の【異界】だな」

感慨深そうに、辺りを見回す。

霧がかった視界には、どれもこれもが朧にしか映らない。
ただ、よく目を凝らせばそのフィルターの向こうに見えるものがある。
まるで砂場に突き刺した棒にように傾いて立つビルが無数。その向こうには、また別の建物らしきものが見える。

「これ全部が元は向こうにあったもの……だったか」

隔離世を構成するのは、廃ビルや廃工場などといったかつては現世にあったものである。霊魂は、人の気配が離れ、けれど人の思念が染み付いたままとなった建物に定着する習性がある。その習性を逆手に取り、取り壊すよりも再利用しようという案により隔離世の設立が発足されたのだという。
無限空間であるここには、質量の限界というものはない。それこ

そ現代とはかけ離れた時代のおそろしく旧弊したものまで放り込まれているという話だ。
そして、建物以上にここに入り浸る霊魂の数はその万倍を上回る。
この人工の異界は、降魔庁の特別訓練施設としても扱われている一面があり、月に一度鍛錬を兼ねて各課ごとに「掃除」も行われる。

あの総帥はここで起きている異変に気付いていた。
おそらく、今月の事件の調査を優先させてここの掃除は後回しにさせている。

「……ありがたいというべき、なのか……これは」

何処からか、吼えるような唸り声が聞こえてくる。
徐々に近づいてくる気配。

「っち、――――――」

それは、降る様に灰色の上空から。
敵意と害意の固まりの接近を感じ取る。

「……夜叉姫っ！」
『御意』

剥かれた牙に対して、千夜は指一本動かさず不可視の相棒にただ促すだけだった。
了解の意志の直後、それは被弾する。
しかし、あと一歩という直前にて何かに弾かれて終わった。

目には見えない不可視の壁。
夜叉姫の【加護】である。

「……一人入ったくらいでもう反応返してきやがるか。これは、一定の場所に長居は無用かな」

死者の世界ともいえる場所に生者の存在は寧ろ異質であり、異常とみなすのが正しい。

その変化に対して『住人』たちは過敏だ。

余計な戦闘を引き起こす羽目になる前に、急がねばならない。

『主様。この奥の方に、凄まじい瘴気が』

口に出すまでも無く主の意向を察した夜叉姫が、サポートを買って出る。

声に出さず了解し、その意志は進行をもって表明した。

◆◆◆◆◆◆

行けども行けども廃墟が続く。

この世の終わりを体現したかのような、常人を絶望に追い込むには十分すぎる光景だ。

生きている人間は、自分一人しかない。
たった一人きりの世界。

昔は、そうなることが恐ろしくて仕方なかった。
どうせ滅びるなら一人だけ助かるのではなく、周囲の大切な人たちと共に滅びたいと思っていた。

そして、もしそれすら叶わないなら――――

「……あれ、か」

灰のような砂をどれほど踏みしめ、いくつの廃墟を通り過ぎたか。
異様な存在感を持つ建物が、進む前方で視野に入り込む。

そこに確かにあるのに、何処か幻のように朧げで、虚無を感じる他の廃墟とは異なる。
寧ろ、霞がかっていてもなお不気味な悪寒をもって存在感を主張している。

踏み込むごとに、霞は薄くなっていく。
だが、同時に悪寒も強くなる。

「っ、――――――！」

一瞬だった。
まだ距離があったはずのそれが、こちらとの距離をゼロにしたのは。

「……これは」

いつのまにか、その”中”にいた。
気付けばあたりには、煤けた発電所やガスホルダー、タンクなどといったそれらしき設備に囲むように物も言わず佇んでいる。
視野が収める限りの光景には、似たようなものがちらほら見える。

「……工場、か？」
『主様。どうやら、ここは廃止された工場を寄せ集めた地帯ようです』
「地帯……ということは、ここら一帯だけではなく向こうもか？」
『そのようにございます。しかし、これは自然になった形ではなく、なんらかの力によってそれぞれが意図的に密集させられているようですが……』
「……なるほど」

ここに放り込まれる建物は、なんらかの弾みで”いわく”がついて魑魅魍魎の巣になったか、長く使われ続けて人間の想念が付き、霊魂を惹きつけ易くなったかの経緯を持つ。どの建物も、数に差はあれ全て等しく霊魂の住処となっている。
霊魂はより強い霊気によって引き寄せられる。それと同じように、強い霊気を宿す建物が他のものを引き寄せてこの集合地帯を作り上げた。
そして、ここはその中心たる――――――神崎の巣。

「いや、やつに言わせれば……【王国】といったところか」

なんて滑稽な響きだ。本人の目の前で思い切り笑い飛ばしてやりたい。

「行こうか」

この世の全ては己の意のままになると勘違いしたこの王国の主に。
抱いたその夢想に。
終わりを突きつけてやるために。

◆◆◆◆◆◆

多くの工場を寄せ集めて出来たこの地帯は、常人なら迷い続け、果てるであろう迷宮のような複雑なつくりをしている。しかも、歩くたびにその構造は変化しているようだ。
迷い込んだ者をいたぶるような仕組みは、実に主の嗜好を如実のままに顕している。

「蛙のやかましさと蛇のしつこさ……更に、蜘蛛のねちっこさか……。つくづくゲテモノだな、あの野郎は」

陰湿かつサディスティックな仕組みをこの迷宮に組み込んだ男に、侮蔑を吐く。
出口の無い迷宮。
それは、迷い込んだ者を弄ぶだけが目的でつくられしもの。
だが、そんなもの千夜にとっては無意味だ。

出口など必要ない。
求めているのは、それとは真逆の位置にあるものだ。

「……だが、お遊びに付き合うのはこれくらいでカンベンしてもらおうか」

立ち止まり目を閉じる。
千夜はここになく、されどある者へと語りかける。

「やれ（・・）、夜叉姫」

瞬間、空気を裂くように甲高い音がキィンと響く。
耳鳴りとも感じられるようなその微かな響きの直後、閉ざした視界を再び開く。

「ご開帳」

そこには、彷徨い続ける中で見慣れた工場の光景はない。
真新しく現れた無数の工場と倉庫の集まり。
それは一つの一際大きな建物を核としてその周囲に広がっている。
それは傍から見れば、まるで、城を中心に出来た城下町のようにさえ見える。

否、そうなのだろう。
ここが。これこそが、あの男がこの世界で築いた【王国】なのだろう。

……こいつは重症だな……手の施しようが無い。

くくっと笑い、息を吐く。

あの男の【王】への執着は、ここまでのものだったとは正直思っていなかった。

子供が絵本の御伽噺に抱いた憧れをそのまま描いたような光景に対し、千夜は少々神崎という男への印象を変えざるえなかった。

邪気と欲望に満ちていると思っていたが、これではまるで子供だ。

無邪気な子供の願望。あの悪意を模したような男の中で、根底に敷かれていたものがこんなものだったとは恐れ入る話だ。

子供の頃の夢。それが男にとっては他者の上に立ち、その足下にいる者を支配する【王】になることだったのだろう。夢。子供のうちは、夢想と呼べる可愛らしいそれは、成長という過程にて薄れて消える。だが、神崎はそうではなかった。子供の夢を欲望へと昇華させてしまったのだ。

あれは、今、子供の頃の夢を叶えようとしている。

それは叶えられるのだ、と何者かに唆されて。

理性という縛りから解き放たれて、それまで幾分は抑えられていたであろう本能を暴走させて。

「神崎、陵……」

教えてやらねばなるまい。

欲望のままに動いた者の末路を。

思いしらせてやらねばなるまい。

その欲望のために何を糧にしたのかを。

どんな夢にも、所詮は夢であるなら果てがある。

それをわからず、拒み、受け入れられないのなら、

……俺が、お前の夢の終わりだ。神崎陵。

まっすぐ開けた一本道。
それは、招くように千夜を神崎の【城】へと導こうとある。

左右それぞれに町並みを模すかのように立ち並ぶ廃工場や倉庫からは、風のざわめきのような怨嗟の唸りが幾重にも重なって聞こえてくる。
千夜は誘うように叩き付けるようにも聞こえるそれらを無視し、先へ進む。

目指すは、ただ一つ。靄のような霧で黒く浮かび上がるのみの神崎の【城】のみだった。

無心のまま歩み続けると、霧は徐々に薄くなっていく。
そして、霧の向こうの【城】も、ついにその姿を現した。

「これが、お前の【城】か……」

聳えるは、今まで見てきたものの中でも格別な規模と大きさを誇る廃工場。
あちらこちら錆付いているが、それぞれの設備を繋ぐ錆付いたパイプが織り交って出来上がる複雑な構造は、歪な幻想を醸し出す。
その城内に踏み込むと、柵のように天上を覆うパイプ越しに細切れとなった霧で曇った灰色の空が見えた。
見つめていて、ふと『永遠』という言葉が浮かぶ。
時が止まったようにさえ思えるこの退廃感は、それに繋がるものを感じさせる。

己が永遠に君臨し、支配し続ける王国。
それを追求したのが、まさしくここであるのだろう。

「永遠、か……」

口にした言葉が、酷くおぞましいものに思えた。
酷くまずい後味のようなものを口内に残して、千夜は奥に見える建物へと近づく。

周りの赤土色の錆が目立つそれに対し、まだ白い。
その精練さが、周囲から浮いていて逆に不気味な違和感を覚えさせる。
だが、踏む込むことへの躊躇を優先させるには取るに足らない。

あそこだ。
あそこに、いる。

「ようやくだな。……随分と焦らせてくれたものだ」

歩みが重なるに連れて。距離が縮まるに連れて。
己の内側が、研ぎ澄まされていく。
思考から余計な雑念が取り払われる。あらゆる状況に正確な判断を下すための機能として性能をあげるために。

これから火蓋を切る戦いに、全力で身を投じる下準備として。

◆◆◆◆◆◆

カツン、という硬質な足音は、それまで踏んでいた砂の大地の終りを教えた。

建物の中は、闇が溜まっている。
常闇の漆黒は濃く、その奥を見透かすことを視覚に許さない。
僅かに白く浮かび上がるのは、建物を内部から支える幾数本の支柱のみだ。

建物の正面において、門の大きさにくり貫いたように開いていた穴をくぐった千夜は、その闇を目前にして一度止まった。
表情に怯えや恐怖を匂わすものは微塵とない。
けれど無のそこに他の感情も見えず、相対する者にその心中を探ることも察することも許さないようであった。

その停滞も数秒で進行へと切り替わる。
数歩の歩みが床を鳴らしたところで、背後の穴に異変が起きた。

「――――、――――」

穴が収縮するようになくなった。
一瞬のことだった。

退路を断たれた。

それが、誰によって成されたのか。
それが、己にとって何を意味するのか。

考えずとも至る答えは一つしかなく、一人しかいない。

「……神崎、神崎陵。そこに……いるな？」

己の圧倒的劣勢の下に置かれても、千夜は事実を受け止めるのみ反応しか返さない。

声色も表情も動揺で揺れ動かさない千夜の呼びかけに、

「――――――ああ、いるとも。いるに決まってるだろう？」

声は闇の向こうから放たれ、千夜に届いた。

その瞬間、周囲の闇が薄まり出す。

濃度を下げるかのように己の掌すら捉えられないほどに濃かったそれは、薄暗い程度の通常の屋内のそれと同等になるまで薄まった。

その変化は、千夜の視界に大いに貢献した。

空間の広さがどの程度のものさえわからなかったそれまでと違い、全てを明確に捉えるまでには届かずとも、内部がどうなっているかはわかるようになった。

だが、千夜が見据えるのは、一方のみ。

ただ正面の、その奥を――――――そこにいる者を。

「……神崎、なのか？」

距離はだいぶ開いている。

だが、千夜の視力は、遠く離れた奥。そこに高く積まれて出来た材木の山の上に立つ人影をとらえることは出来た。

その顔も。

「しばらく見ない間に、随分と様変わりしたようだな……」

「……くくくっ……驚いたかぁ？」

笑う神崎の顔は、千夜の記憶にある見知ったそれとは違う。

全くの別人の顔が、神崎の声で喋っていた。

「親と顔は選べないって奴だよなぁ……。まぁ、それも昔の話だ」

「出来のいいのを拾ったようだな……。作ったのか？」

「いや？　食ったやつらの中から良さそうなのを選んだ。……どうだ？　手当たり次第選別してやった中じゃ一番だったやつだがよぉ……」

整った顔立ち。

それは、誰かと似ていた。

「……最悪だ。センスだけはどうにもならなかったようだな」

「そうかぁ……？　お前の好みって奴を重視したんだがなぁ……」

悪意に満ちた笑みが、その両手と共に表情に広がる。

「ようこそ。――――――俺の王国（せかい）へ」

出迎えの動作で、ばさり、と纏うローブがマントのようにはためいた。

仰々しく飾り立てたその振る舞いは、まさしく王様気取りでいることを知らしめる。

否、気取りではなく本気なのだろう。

そして、少なくともここでは神崎は王なのだ。

この異空間は、腹立たしくも神崎のテリトリーであり支配下にある。

「ここに来るまでに見てきただろう？　どうだった？」

「……」

「最初はなんてへんぴな場所に来ちまったんだと思ったが……住めば都たぁこのことだ。ここの連中も始めこそは俺に歯向かってきたが、今じゃ可愛いもんだ。やつらは、あんな状態になっても……いや、あんな状態になったからこそ強者というものを理解し、どう相対すべきかをわかってやがるよ」

千夜は沈黙を保ったまま、神崎を見つめる。

憤る様子も、不快も、その視線には込められていない。

ただ、自賛に浸る神崎という存在を静観する。

「もう俺を馬鹿にするやつなんかいない。誰にも俺を見下させなんか出来やしない。俺は王になったんだ。俺は……全てをひれ伏せる力を手に入れたんだ！！」

恍惚と酔いしれる神崎の謳いは続く。

「喜べ。そして、感涙を流して噛み締めろ。お前は、その俺の女になる資格を持つ唯一の存在として選ばれた。この国の母……この世に永遠に君臨する俺の妻になるんだ。お前は俺の傍らで、この【外】を取り込んで発展していく俺の国の姿を目にすることが出来るんだ。……どうだ、黙っていないで感想を聞かせてくれ」

独白から問いかけへと変じた言葉に対し、千夜は目を細めた。

そして、吐息を一つ落とし、

「……そうだな。この感想を言葉にするなら、一つしか思い浮かばん。

――――――馬鹿か、お前」

反撃の火蓋を切って落とした。

「予想以上の馬鹿っぷりだな。大人しく黙っていてやった時間が、無駄な浪費以外の何物でもないじゃないか。……あと、一つ訂正だ」

半目から放たれていた視線に鋭さが加わる。

「……お前の国の発展などない。ここで、俺に潰される。完膚なきまでに」

くっ、と口端を吊り上げて、

「先手はお前にくれてやる。だから、さっさと何か手を打てよ」

千夜が放つ不遜な挑発。
ここで、千夜が認識するどおりの感崎なら、舐められていることに腹を立てて抑えながらも怒りに動かされるだろう。
だが、
「……く」
神崎の顔が歪む。
しかし、それは憤怒の色ではない。
歓喜。
なんとも嬉しそうに、笑った。
まるで、了承の言葉など最初から望んでいなかったかのように。
その暴言こそ、己の期待を満たす上等の返事であったとでも言うように。
「……イイぜぇ。そうだ、それでいい。それが、いい――――っ！！」
高らかに響く声で、その周囲の空気が振動する。
そして、その振動に感応するかのように、建物の中で大きな”胎動”が脈打った。
空気に馴染んでいた瘴気が浮き立ち、宙で身を捩るように蠢く。
そして、それは――――――あちらこちらで”形”を取り始めた。
闇から生まれるように、屍鬼が次々と出現していく。

「いいぞ、千夜！　イイコだっ！　ヒャハハハハハハッ――――」

哄笑が相乗効果と成しているかのように、屍鬼は絶えることなく増える。

水のように湧き出るそれらは、獰猛な本能を渦中にいるただ一人の獲物へと向けて、唸り威嚇を放つ。

「その調子だ！　ノってきた、ノって来たぜぇ……。そんなすかした顔して大層な殺気ぶっ放ちやがって……やっぱり最高だよ、お前は！　なんてイカした愛情表現だよ！　ハッ……ちくしょう、たまらねぇ……身体が疼いて仕方ねぇよ千夜ぁ。ああっ……俺は、今っ……俺はお前を……」

身悶えするようにくの字に身体を折り、ビクビクと痙攣させる。

その震えが止まると同時にバッと顔を上げ、

「犯(あい)してやりてぇ」

ぎょろり、と目が飛び出んばかりに開く。

露になるその眼球は血走っていた。

「辱(だきし)めてやりてぇ」

ぐぱっと開いた口から、飢えを訴えるかのように唾液が伝う。

「だが、まだだ。……まぁだ、足りねぇよぉ。だから、そいつらは愛するお前への贈りモノだ。完璧な俺に必要なのは、完璧なお前だ。そうでなきゃ、意味がねぇ。その化物どもを倒して、自分を取り戻せ。そして、俺のところまで来い。……そうしたら、好きなだけ相

手をしてやるよぉ」

話している間にも、屍鬼は増え続けていた。
既に完全に千夜を完全包囲するほどにその数は出来上がっており、無数の欲望の視線と意識が千夜一人に向けられている。

対して、千夜は眉一つ動かさず、神崎を見据えている。
己の状況が見えないほどに神崎を凝視しているというわけでも、己の圧倒的劣勢さに押されて神崎を悔しさから睨んでいるというわけでもない。

そして、

「おい、どうした……武器を構えろよ。連中、そろそろ痺れを切らすぜ」

周りには目もくれないまま、無防備を解かない千夜。
それは、陶酔状態に近しい神崎の目から見ても、この状況においては不審であるとわかることだった。

「……必要ない」
「ああ？」
「それよりも、口上はもう十分か？」
「口上だと……？」
「無駄口を叩くのには、もう満足したかと聞いているんだよ」

そこで千夜はようやく表情に変化を見せた。
ニヤリ、と不敵に笑う。
だが、目だけは鋭利な光を宿している。

「まぁ、関係ないけどな。お前の言葉なんかこれを逃がしたらまともに聞ける機会なんぞもうないだろうから、残り少ない仏心とやらを消費して耳を貸してやっていたのに……。顔云々以前にその空気読めなさが女との縁の無さの原因じゃないのか？」

黙っていた分も一緒くたにしたかのように矢継ぎ早に繰り出される言葉には、絶対的不利の状況下にいる者とは思えない余裕を感じる。

虚勢か。

それとも沈黙の間に形勢を逆転させる策を練っていたのか。

神崎は、表情からは伺えない千夜の内心を見透かそうと凝視する。

そんな神崎を嘲笑うかのように、

「おしゃべりの時間は終わりだ。……さっさとそこから降りて来いよ」

千夜が一歩を踏む。

その瞬間、その身体から――――――大きな隙が生まれ出た。

「ハッ、馬鹿がっ！　そいつらを片付けるまでお預けだと言っただろうがよっ！！」

嘲りが飛ぶと同時、包囲網のうち何体かが威嚇から攻撃の態勢へ移行した。

人よりも獣に近くなった彼らの動きは、同じく獣のそれに等しい。

人間離れした瞬発力で群れの中から飛び出した。

飛びかかった屍鬼は四体。

前方以外、上空を含めた四方からの一斉攻撃は、回避という手段を許さない。

「贅沢を言うなよ。――――――まぁ、しかし」

確かめるように呟いたのは、四体の怪物の凶刃がほぼ同時に降りかかる瞬間だった。

そして、千夜の右腕が無造作に振り上げられたのも。

その刹那。

それぞれ異なる方向から向かった屍鬼は、

「――――――そんなに言うなら、お望みどおりにしてやるよ」

続いた一度の旋回。

微妙な捻りを加えた乱れない動き。

舞うような、”それだけ”の動作の後。

四方全ての屍鬼が――――――その肢体を四散させた。

その空中分解は、四肢が裂かれたというレベルではない。

文字の通り――――――バラバラになった。

屍鬼はその一瞬の出来事を理解する間もなく、地面に落ち、黒ずんだ土塊のようになって消えた。

だが、消えるまでの地面に落ちている間、それら残骸の痕跡は共通したものを残していた。

まるで引き裂かれたかのような乱雑な切り口であったこと。

そう、まるで――――

「――――すぐ行ってやるから……念仏唱えとけ」

言いながら、千夜は右腕を下ろした。

まるで鉤爪を模すように、五本の指を強張らせて。

［壱百伍拾］　隔離世の王国（後書き）

気付いたが、どうやら戦闘シーンは苦手分野らしい。ファンタジー書いているのにだよっ……！？

次回なんかそれしかないというのに、どうするんだか自分。根性？。

それしかないのか（手札を見る。どうするよ俺？

補足するところがあるとしたら、神崎の【今】の顔は、蒼助をオマージュしているらしい。どうやら、劣等感には憧れも含まれていた様子。本人は断固として認めないだろうけども。人の嫌がることは進んでやりましょうっていったところですかね（意味は二つあると思うのです

このぐらいの挑発では、簡単に冷静さを失わないでしょうけど、千夜は既に正気じゃなかったり。正気だったら、こんな圧倒的に不利な相手の陣地に突っ込んだりしませんしね。神風特攻隊と化した千夜。……果たして久留美のことを覚えているだろうか（オイ

【壱百伍拾壱】　絶対包囲網

――――――『鬼の爪』。

確か、自分にこの技を教えた人間は、そう称した。

通常、退魔師が基礎的な霊力操作として、全身の運動神経を向上させる霊力の練り上げによる【強化】。

それを、部分的に行うもの――――といえば簡潔な話だが、それは明確な詳細ではない。

正しくは、全身の強化に加えた――――部分的な【硬化】である。

その教えを授与される際に、硬化だけでは駄目なのか、と聞いていた。

質問は悪いことではない。悪いのは、わかったつもりで済ませて、わからないままで終えることだ。

それを良き行動として受け取ったのか、教え手たる存在は責めることも失望することなく淡々と解答した。

『――――狩りをする獣が特化されているのは、その爪だと思うか？』

解答ではなく、意味深な質問だったと思い出す。

質問に質問で返すな、と言われている普段を考えると複雑な反抗心が芽生えたが、この後に答えが控えていることを考えて、大人しく自分で思考し、答えた。

否、と。

『そうだ。獣は、そのしなやかな筋肉があってこそ、牙も爪も獲物の脅威となる。この技も、それと同じことが通じるのだ。わかるか？』

問われたあの時、己なりの結論を出したのだ。

爪も牙も道具。

それらは使えなければ意味が無い。

すなわち、全身の強化は、道具を使える状態となるため――――――獣の戦法をモノとするための下ごしらえ。

だが、その理解の後に一つの疑問を覚えた。

強くなりたい、という申し出に答えた彼は、何故この方法を教えることを選んだのか。

武器の使い方ではなく、このような方法を教えるのか。

『何故……か。お前は、強くなりたいと言っただろう』

頷き、肯定した。

『……ならば、まず――――――人であるという理念を捨てろ』

それが、答えだった。

◆◆◆◆◆◆

……まさか、最後の最後という時に原点に還る羽目になるとはな。

肉をもぎ取る感覚。

仮初の身体を与えられた屍鬼相手といえ、その殺す感覚に違いは無い。

目の前の切り裂いた屍鬼が、それを実感させる。

だが、それに気を取られている暇は無い。

背後に、二体の気配。

千夜は、振り返り様に腕を振りぬいた。

高速による空気を切り裂きと同時に軌道が生まれ、その余波が斬撃へと昇華する。

五指のいずれも届かなくとも、それが二体を食んだ。

胴が裂かれて上と下が分かたれる。
が、それを確認することなく新たな敵意と向かい合う。

「――――っ」

しかし、それを隙と見た別の一体が、死角となる方向から飛び出してきた。
このまま向かいの屍鬼を倒しても、その直後に来るであろう一体の攻撃は躱せない。

思考し、判断する猶予は一瞬。
その一瞬で、千夜は対処を打ち出し、

「っち――――――!」

前進の体勢を無理矢理後方へと戻し、重心をそのまま傾けて僅かに後退。
衝突するはずだった向かいの攻撃は空を切り、そこへ障害となったもう一体が鉢合わせとなる。

千夜は腕を振り上げた。
狙いは、目の前にちょうどまとまった二体。

一撃で屠る。
それを意図し、

「――――――弾けろっ!」

それは敵への手向けの言葉ではなく、『命令』だった。

そして、相手も目の前の二体の屍鬼ではない。

腕を振るう。

硬化された指先はかすりもしない微妙な距離があるにも拘わらず。

だが、それでいいのだ。

硬化によって霊力をまとった手で触れたかったのは、屍鬼ではなく――――その周囲に漂う霊質粒子だ。

霊質粒子に、意志はない。

そして、外部からの干渉に影響されやすい。

つまり、『破裂』という意志、そして霊力をまとった手で触れて伝達すれば――――それらはあっさり従う。

命令は霊質粒子に”炸裂”した。

叩きつけられた命令によって無数の霊質粒子が弾け、爆発を生む。

そして、それが更に誘爆を引き起こした。

二体の屍鬼は、その大規模な爆発に呑みこまれた。

その被害を被る前に、千夜はそこから一線引いた場所まで跳び退いていた。

「――――ハァ、っ……は、ぁ」

矢継ぎ早に襲い来る屍鬼を相手にろく息継ぎを出来ていなかった代償が、ここで来た。

だが、気を緩めることはない。

周囲は、依然と四方を埋め尽くす勢いの屍鬼が襲撃の機会を伺っている。

千夜は一層気を張りつめ、その観察に防衛線を敷いた。

「……どうした、まだ”三十分しか”たっていないぜ？　息上がってるじゃねぇか」

下卑た声が、嘲弄するのが聞こえる。

三十分。

その間、千夜は息をつく間もなく神崎の屍鬼からの猛攻に対し防戦を続けていた。

数では圧倒的に勝る屍鬼は、加えて疲労を知らない。

そして、痛みも知らない。

人間であれば、致命的な弱点となるこれらは屍鬼にとって寧ろ最大の強みとなる。

痛みによる怯みや躊躇は期待できず、完全に破壊しなければならない。

だが、それでも足らない。

彼らには”集団”となることで、無敵となりえる”武器”があるのだから。

「……ん？　おかしいなぁ、こりゃ。……あんだけ殺られているつーのに、俺の屍鬼たちはちっとも減ってねぇみたいだぜ？」

ニヤニヤと確信めいた笑みを浮かべるその顔を潰しにいけないこの距離間が、歯痒かった。肉体と共にフル回転させ続けて疲労した思考には、無視できない程度には癇に障る。

殺しても殺しても、それは【殺した】という事実へは繋がらない。それが、屍鬼という敵を相手にする障害（ネック）だ。

復活を手伝う親玉がいる限り、屍鬼は完全に倒せない。

そんな相手に、交戦を続けることなど――――はっきり言ってしまえば、無意味なのだ。

それを理解できず、受容できず、それでも挑めばどうなるのか。数の暴力が叩き出す計算の答えは一つしかない。

「しかし、まぁ……武器は出さねぇっつーから、何を腑抜けたことを抜かすかと思ったが……そんなことまで出来るのか。いいじゃねぇか……全くもってお前というやつは、俺を飽きさせない」

「……光栄だな。褒め言葉として頂戴しておくぞ」

言葉を交える中、倒した分だけ気配が増える。

”補給”が行われたのだ。

また、スタート地点に戻された。

「安心しろ。俺は言葉しかやらないなんて安い男じゃねぇ。その貢献に免じて、ご褒美をやろうじゃないか」

「……褒美？」

「ああ、そうだ。……そいつらを退けてやる。堂々と相対しようぜ」

己の兵を退ける。

それは、攻守共にその姿勢を解くこと意味する。

まったくの無防備になるも同然だ。

「……どういうつもりだ」

「何もねぇよ。これ以上お前をいたぶる必要はない。……そうだろう？」

それは、優しい声色だった。

神崎という男からは想像もできなかったその態度。

だが、千夜は眉を顰めるだけだった。

「お前が落ちぶれていないことは、今の戦いぶりで確認させてもらったしなぁ。これ以上こんなこと続けても無意味ってもんだろうよ」

「ほぉー。……で、何が言いたいんだ？　生憎お前とは以心伝心できるほど心の距離は近くないのでな。わかるように教えてくれ」

呼吸が整いつつあるものの、額に汗を滲ませ疲労は軽減されていないことを明らかとしている千夜は、それでも強気の姿勢を崩さない。

それは神崎には虚勢として映り、己の優位性を一際強く確信づかせる。

気分が向上したのか、神崎は憎まれ口を叩く千夜が気に障った様

子もなく答える。

「……強がるなよ。お前だって本当はわかってるだろう？　認められなかっただろうが……もう、認めざるえないってことをよぉ……？」

「お前の勝ちは揺るがない……そう言いたいのか」

「なんだよ、やっぱりわかってたんじゃねぇかっ！　……そうとも。見ろよ、その俺の下僕（しもべ）たちの数を。そいつらは、戦闘力そのものはお前には圧倒的に劣るだろうさ。だが、倒されても死なないという最高の武器の前には、お前がいくら強かろうがそれこそ無意味。……無意味だろう、”最初から勝ち負けが決まっている勝負”なんてなぁ……」

勝敗がどちらに傾いているか。

それはいうまでもない。

状況を受け入れられているのなら、それがわからないはずがない。

「それで？　お前の言う……負けが決している俺は、勝利を掴んで離さないお前にどうしろというんだ？」

「理解ってるじゃねぇか。……ただ、ちと足りねぇな」

「……」

「焦らすなよ。……だが、まぁいい」

にぃ、と神崎は両の口端を吊り上げた。

開かれた口の奥で赤い舌が踊る。

「――――――絶対服従だ。誓えよ。平伏せよ。跪けよ。この俺に……

…屈服するんだっ！」

声に、わずかな震えが加わる。
歓喜による興奮が込み上げてくるがためか。

この瞬間は、神崎にとって待ち望んだ時だった。
何者も超越した力ある者となり、それと同等に望み執着した女を掌握する。

この二つは神崎の何にも替え難い悲願であった。

「ふん、もう勝った気でいるのか？」
「勝っているんだよ！　違うのか、んんぅっ！？」
「この屍鬼の数が、お前の強さであると？」
「……違うっていうのかよぉぉぉっ！？」

興奮のあまりに声量を加減する箍が外れている神崎は、己の勝利を、千夜の敗北を信じて止まない。

だが、

「――――――――なら、大したこと無いな。お前の得た力というヤツは」

声を張り上げたわけではないのに、それはよく響いた。
その凛とした響きは、言葉を虚勢とは程遠く感じさせる。

声高く主張し、己を誇張しても得られない自我が、そこで確立していた。

疲労し、劣勢という逆境に置かれたはずの千夜によって。

「……七十六か。存外少ないな。建物という仕切りがあるせいで多く見えただけか」

ふん、と鼻を鳴らす。

「お前がマメに注ぎ足してくれるおかげで、数を確認するのに三十分もかかってしまった。まぁ、そのおかげで”明確な数”がわかったから卑怯などと咎めはしないさ」

顔を上げた千夜は、確信づいた何かで表情を彩って、

「……しかし、随分と少ない。前にやりあったヤツは、百はいっていたというのに。ここが個々のポテンシャルで開く格差というやつなんだろうな」

「なにが、言いたいんだぁ……？」

「もう言った。聞こえなかったのか？　――――――お前なんぞ、大したことないって言ったんだよ。いくら燃料がありあまっていても、一回に出せる限度がコレじゃなぁ……」

神崎は笑みを消した。

消して――――――再び、点火した。

「……ああ、そうだなぁ。そうか……ただ、闇雲にそいつらを相手

にしていたわけじゃなかったってのか。確かにな。その通りだ。……七十六。俺は、いくら踏ん張ってもそこから先には行けねぇ。……認めたくねぇことにな」

己の欠点を指摘され、それでも神崎は怒りも焦りも見せない。否。そんなものありはしない、と振る舞っているのではない。

それは、

「だが、それは俺の勝利を曲げる欠点にもならねぇ。俺の屍鬼を上回る数で当たってこられたら駄目だったかもしれねぇ……だが、お前は一人だ。いくら倒しても甦る七十六の屍鬼相手にお前が何度挑もうと結果は同じだっ！」

「そうだな。……”倒そうなんて考えて、挑めば”……な」

神崎が己の不動の勝因を酔いしれるように告げる神崎の言葉に、千夜は何故か笑みで返した。

「だったら――――――倒さなくともいい。とどのつまりは、”そういうこと”だろう」

当たり前のことを述べる千夜に、ここで神崎は初めて不可解を思う表情となった。

「……何を言ってやがる？」

「別に。……ああ、それとさっきの話はナシだ。こいつは退けなくていい。

――――お前が来なくとも、俺が行く。こいつらを”退けて”な」

不敵に笑みながら、千夜は己が状況において不可能の行為を宣言した。

神崎はそれを重々承知の態で受け止め、跳ね返す。

「退ける……か。そいつらを無視して俺のところへ突き進んでくるってか？　はっ……馬鹿か、オイっ！？　そんなことすりゃ、そいつらは一斉にお前を……」

「――――そうならないようにするって言ってんだよ」

想定を突きつけ、手の内を見透かそうとする神崎の言葉を叩き切ると、千夜は動いた。

それは――――些細な動作だった。

右手を上げたのだ。

頭の上に。

天に。

否、先には灰色の空を空間から隠す天井がある真上に向けて。

神崎は、思わず目で追った。

「千変万化参之式――――――【飛燕】」

「――――――っ、なに」

静かに呟く千夜と喉を引き攣らせる神崎の図は一つの対比を表す。

それを導き出したのは、

「なん、だと……っ」

神崎が見たのは、

「――――――堕ちろ、千刃鶴」

鳥だった。
無数の白い鳥が天井で物を言わずにたゆたっている。
否、千夜の言葉から神崎はその一瞬の初見にてそう錯覚したのだ。

鳥ではない。
それは――――――剣だ。
大小種類をそれぞれ疎(まば)らに異なえど、それらは剣だった。

同じであることは、一つ。
全てが等しく、その切っ先を直下へ向けていること。

”真下”へ。

「っ、っ、ぉ、お前らあああああああっ、散れ、散れえええええええっ――――――――――!!」

断末魔のような叫びが命じる。

しかし、

「遅い」

その足掻きを一蹴する千夜の言葉が、剣の浮遊状態に終りを告げる。

ガクン、と落下の気配を見せた直後。

千の刃が無数の銀光と化して降り出した。

［壱百伍拾壱］　絶対包囲網（後書き）

なんか週間少年雑誌のような区切りになりましたが、次回に続く。
戦闘シーンというやつはひたすら無言にその描写を書き連ねても面白くないと思うので、ところどころ会話とか台詞を入れたいのですが、なかなかバランスが難しいところですね。
とりあえず、今回は必殺技のネーミングセンスがいろいろアカンという不思議発見が収穫ですかね。

とりあえず、今後の予定としては年が暮れるまでにはあと三回くらいは更新したいものです（溜息）

【壱百伍拾弐】　二匹の獣

それは、まるで墓標だった。

地面に真っ直ぐに突き立てられた、数えるのも馬鹿馬鹿しくなるような無数に等しい剣の総立ち。

戦場にて散った戦士たちの眠りを示しているように見えなくも無い。

だが、その切っ先が突き刺しているのは地面ではない。

呻き声を発する人間――――――ではなく、屍鬼。

「……屍鬼っていうのは、”頭を落とすか叩き潰さない限り、その場しのぎでも倒せない”っていうのが【復活】よりマシでも難点だけどな」

呟く千夜は、己が描き出したその『絶景』を何の感慨もなさそうに見つめる。

半径一メートルもない距離の先では、四方を埋め尽くす屍鬼がいる。

それは変わりない。

だが、一つ違うのは、

「……それが、まさか”利点”になるとは思わなかった。いい勉強になった」

どれもこれもが威嚇も臨戦態勢もなく、ただ蝉のように地面に這い蹲っている。

そして、その肢体には剣が突き立てられていた。

大振りなものに胴体を串刺しにされているもの。手足という動作の役割を担う箇所を小物なもので縫いとめられているものもある。

呻き、手足をもがくように動かすものいれば、敵意を変わらず千夜へ向けて、牙をむき出しているものもいる。

しかし、余程深く突き刺さっているのか、肉体を貫通して地面にまで刃を食い込ませている剣は多くあるうち一本たりとも外れる気配はない。

その光景は、磔にされているか、或いは昆虫の標本のような滑稽なものにも見える。

「……っ、くそ……くそっ……何で」

「その様子じゃ、魂魄体に戻らないと己の手では施しようの無いらしいな。その点では、賭けは俺の勝つということか」

己の手駒を無力化された神崎は、焦れるように凝視している。

何故なら、

「嘘だろっ……”一匹も殺してない”のか!?　あんな、あんな攻撃でっ！」

神崎は見たのだ。

天井で浮遊していた大量の刀剣が、雨のように降り注ぐ様を。

それこそ、目の前には剣山のような有様がある。

縫う隙間すらないように容赦なく落ちてきた大量の刃は、屍鬼たちを飲み込んだ。

だが、それでも生きている。

降り積もった刃の犠牲となった屍鬼は、一体残らず生きている。

獲物に等しく降り注いだ刃は、それでも”肝心の部分”――――弱点である『頭部』を見逃したのだ。

「……馬鹿な……あれだけの剣をっ……全部トドメは刺さないように当てたっていうのかよ……っ！？」

「間違っても殺すな、と命令したからな」

千夜は唯一攻撃範囲から逃れた己の立ち位置である足場から、進み出た。

急く様子は無く、ゆったりとした歩み。

それは、途中で縫い付けられた屍鬼を踏み越えつつ、神崎へと向かう。

ゆっくりと。

けれど、決して止まる意志はないことを剣呑な眼差しで訴えながら。

神崎の余裕はそこで一気に崩壊した。

「……っ、と……止めろ、止めろおおおおっっ！！」

狂ったように叫ぶ神崎の声に応える動きがあった。
それは、包囲群の中でも後方に控えていたこともあって、天井の低い壁際の方へ退避したおかげで難を逃れた僅かな生き残りだった。
その数はもう十にも届かない極少数。
それが、神崎に残された戦力だった。

「来る、な……来るんじゃねぇえええええっ！！」

叫びを代弁するように、一体の屍鬼が飛びかかる。
千夜はそれに対しても一切注意を逸らさない。

だが、

「つれないことを言うなよ」

からかうような言葉と同時に襲う五指の凶刃は、次の瞬間に”何処からともなく現れた剣”によって届かず終わる。屍鬼は、弓のように放たれたその勢いを受けたまま壁へと逆戻りし、串刺しとなった。

後に続く者たちも、獲物を直前にして現れる刀剣を前に、先人の後に続くだけだった。
歩むごとに両端の壁に突き立てられていく標本が増えていく中でも、千夜の目的は一つだった。

そして、神崎の最後の戦力が、壁の標本たちと並んだ時、千夜の足も止まった。

僅か五メートルほど先までに、その間合いは縮まった。

「……燃料がいくらあってもスペックがそれじゃぁ、半分も有利に生かせない。宝の持ち腐れもいいところだな……神崎」
「……う、ぎ……っ」
「降りて来いよ。別にそこにいてもいいが……”何も出来ない”だろう？」

神崎が屈辱に大きく顔を歪めた。
何も出来ない。
少なくとも、自らを戦闘に駆り出すことは可能だ。
だが、その程度である。

何も出来ない、と千夜が評したのは、こうなった今では神崎自身の戦闘能力はたかが知れているからであった。
僅かに自身に余力を残していても、ほぼ全力で投入した屍鬼という戦力を失った神崎はほぼ無力に等しい。仮に相手がただの人間であれば、軍配は神崎にあがっただろう。

しかし、それはならなかった。

神崎は既に手足をもがれたも同然。
少なくとも、千夜という戦闘の専門家（プロフェッショナル）を前に、力に溺れて己自身が強くなったと過信して疑わなかった素人（アマチュア）の神崎に勝ち目はない。

「俺を、殺すのか……？」
「ああ」
「俺の夢を、奪う……のか？」
「ああ」
「見逃して……くれないのか？」
「――――ああ。そうだ」

高いところにある神崎との視線の交じり合いは、言葉が途切れても続いた。
慄くように顔を引き攣らせる神崎は、一瞬の表情の欠落の後、

「……くひ」

何故か笑った。
心底嬉しそうに。

「は、はっ……そうか、俺を……殺すのか。はは、は……ははははははっ！」

力を奪われ、無力化された神崎は、楽しそうだった。
愉快。そう言わんばかりに声を張り上げて笑う。

ついさっきまで形勢逆転の事態にうろたえていた姿は、そこにはない。
笑う様は、まるで――――――

「いいよ、上等だっ！　上等だよ、お前！」

上等。
その言葉に、千夜は目を細めた。
不可解という意味を込めて。

「ああ、やっぱりだ……。お前は、そういうのが一番いい。その目に戻るのを俺はずっと待っていたんだっ！！　なぁ覚えているか、千夜……俺たちが出会った日のことを」

「走馬灯すら一人で巡れないのかお前は。……出来れば、記憶も出来事そのものも抹消してしまいたいがそれがどうした」

「……あの時、お前は……俺に言ったな？　……殺す、と」

「そうだったかな……。今思えば、あの後……裏できっちり完殺しておくべきだった。過去に戻れるなら間違いなくそうするだろうな」

済んでしまったことは仕方ない、と千夜はさして興味なさげに言葉を吐いた。

そんな千夜とは対照的に、

「……俺は、覚えているぞ。あの時の……お前の目を。ちょうど、そんな感じだった。……獣のような、獰猛な目をしていた」

うっとりと蕩けそうな表情で独白する。

「ゾクゾクした。こんなやつがいるのか、と……腰が抜けそうになった。たまらなくなって思わず、俺ぁ……勃起しちまったんだよ。だが、場違いでも異常でもなんでもない……男として……オスとして、それは当然の反応だ！　自分に相応しいメスを見つけたんだ……興奮しなきゃ不能か気狂いだ！　歓喜と興奮が入り混じって……喉が渇いてどうしようもなくお前がほしくなったっ！」

告白だった。

まるで狂言のように謳い紡がれた言葉は、荒い息と共に吐き出されていく。

「……なぁ、お前……そうなんだろう？」

「何がだ」
「――――人殺し、なんだろう？」
千夜の顔から表情が消える。
そこに、人間らしさというものが一切なくなり、無地の一面となる。
そして、能面のようにつるりと表情の落ちたそこは、
「だから、どうした？」
無感情のままに、返す言葉を落とした。
神崎は、告白に頷いてもらえたかのように笑みを濃くした。
「やぁっぱりかぁ……。お前のぶつけて来る殺気は、玖珂や氷室の奴が向けてくる甘っちょろいやつとは全く違う……別格だ」
「……」
「お前は、わかっているんだろ？　この世の真理が……弱肉強食だってことを。だからだ……そんなお前に俺は惹きつけられたんだ……ようやく、理想の女に……俺と同じ考えを持つ、獣に巡り会えたんだってな」
「弱肉強食……か。自分のキャラをよく理解した主張をお持ちのようで何よりだ。……で、もういいか？　降りてこないなら……」
待ちくたびれたかのように零し、右手を準備運動のように鳴らす。
しかし、神崎はその攻撃態勢を前にしても怯む様子は無く、今だ己の演説に酔っていた。

「……だがっ！　お前は、今自分を見失っている。俺と会った時のお前は、もっと獣の目をしていた。今よりもずっと鋭く、今よりももっと飢えた目をしていた。……お前は、獣だ。俺以上の！　……俺を、更なる高みへと連れていくんだ」

「息詰まり過ぎて脳ミソ窒息してんのか？　……俺は、お前を殺すと言ったはずだ。高みなんぞ行かせない。お前は、ここで終わりだ」

「くくっ……だから言ってるだろぉ。……お前は本当の自分を見失っている。そうだろ？　俺たちは、本来なら同類として理解し合えるはずなんだからよぉ」

尚もくどく続く言葉に、千夜は眉を顰めた。

不快感ではなく、不信感によってだ。

これは、単に延命の時間稼ぎを意図しているのか。

しかし、それにしては話題が一向にズレる気配がない。

それとも、これは何かの口上なのか。

何か手の内を明かす前の――――――

「言いたいことは、それだけか……」

「……ああ。言いたいことは……な。――――――オイ」

呼びかけの放られた向きが自分ではない。

千夜が感じた違和感より理解した直後、

「――――――」

その呼びかけの向きを見つけた。
千夜は、絶望と安堵の入り交ざった表情をもって、被っていた能面を落とした。

動揺。
相手に隙を一切見せないことを維持してきた千夜の姿勢が崩れたことに、神崎はしたり顔となる。

「何うろたえてんだよ。……なぁ、千夜……言ったとおりだろう？」

神崎の嘲弄も聞こえていないかのように、千夜は一点を凝視していた。

覚束ない足取りで、ゆっくりと前へ出てくる人影。
ひたり、ひたり、と微かな足音を立てる足元は素足だった。
服装は、”夕方に会いに行った際に見たまま”の質素な寝巻（パジャマ）。

僅か数刻前の出来事だった。
見間違えるはずも無い。

「……くるみ」

名指しに対し、虚ろな眼差しが声も無く応えた。

［壱百伍拾弐］　二匹の獣（後書き）

とりあえず、お前は不能ではなくとも間違いなくキチ〇イだよ神崎くん。

プロットのところでは試験真っ最中の主人公くん、こちらではご無沙汰ですね。

ちなみにまだしばらく出番はない（マジ

こういうもどかしさが出るのは、プロットの段取りが悪いのか天海の腕が悪いのかどちらなのか（どちらも根本的な理由は一つじゃないか

【壱百伍拾参】　悪意への叛旗（前書き）

失うのか
取り戻すのか

［壱百伍拾参］　悪意への叛旗

今まで気配すらなかった存在は、闇の奥から姿を現した。
山積みにされた木材の裏に隠れていたのか。
それとも、
「……生きて、いるのか？」
投げかけられた問いの含みを感じ取ったのか、神崎は気持ちよさげに笑みながら、
「そいつは屍鬼じゃねぇよ。……生きてなきゃ、意味ねぇだろ？」
返しに含みを持たせる神崎に、千夜は注意を移した。
それは、ただ言葉に引かれただけではなく、神崎が始めて動いたからだった。
決して動こうとしなかったその高い足場から、神崎はそれまでが嘘にように何の躊躇も惜しみもなく飛び降りた。
派手な着地音もなく静かに降り下った神崎は、立ち尽くす久留美に近づいた。
「……この女、お前に置いてかれたって泣いてたんでなぁ。可哀想に思ったんで、わざわざこの俺が直々に連れてきてやったんだよ」
「……」
「なかなか見れねぇ光景だよなぁ。うるせぇ女だとばかり思っていたが、黙ってこうしてみてりゃぁ、なかなか……」
「――――――触るな」

「……ああん？」

顔を近づけ、輪郭をなぞっていた神崎は、制止の声の方を見た。
険しく顔を歪め、剣呑に目を吊り上げた千夜がいた。

「薄汚い手で、そいつに触るんじゃない」
「……薄汚い、ねぇ」

神崎は面白いことを聞いたように、舌の上で抜粋部分を転がした。

「……俺の手が薄汚いっていうのなら、お前はどうなんだよ？　……人殺し」
「――――――っ」

急所への攻撃に、千夜は返す言葉を見失った。
怪我人をいたぶるような嗜虐的な笑みを浮かべ、神崎は尚も嘲笑う。

「……そら見ろ。さっきまでのイイ目はどうした」
「っ、黙れ」
「こいつのせいか？　……だから、言ってるだろ。お前はまだ本調子じゃねぇんだよ。……こんなゴミ屑を前にして動揺するようじゃなぁ」
「お前……っ」

殺気に満ちた視線を受けても神崎は少しも応えた様子無く受け流していた。
寧ろ、それこそ望んでいたとばかりに快く受けているようだった。

「俺の言うとおりだっただろう？　……じゃなきゃ、どうしてそん

なに動揺してる？　何で、そんな不安定な殺気飛ばしてる？　お前の中で毒が回っているのさ。この女を前にして、ナカで巣食っている平和で生ヌルくて明るい世界への未練がグルグル頭の中駆け巡ってお前を掻き乱してるのさ」

「……久留美に、何をした」

神崎の言葉などどうでもいいとばかりに跳ね除けて、千夜は問い詰める。

「ちょっと遊んでやったさ。……なに、大した事じゃねぇ。こいつ、親を殺された恨みよりもお前への未練を優先しようとしやがってたからよぉ……ちょいと言葉責めしてやったんだ。イくまでなかなか手こずらせてくれたが……なかなか可愛かったぜ？　こいつの泣き叫ぶ姿はよぉ……」

心底楽しそうに述べられる言葉に、千夜は奥歯を強く噛み締めた。

「……何のために、そこまでそいつを巻き込む。久留美が、お前に何をした……神崎っ！」

「……決まっているだろう？　こいつはお前を穢す。お前を、俺の理想から貶める。こいつには、落とし前をつけてもらわきゃならねぇ」

「落とし前……だと」

声を低める千夜に対し、神崎は声を高らかにして、

「殺せ」

「――――――」

「そのための生贄だ。この女を殺せよ、千夜」

目を開く千夜に、神崎は追い討ちをかける。

「……玖珂を捨てて俺のところに来たまでは上出来だ。後は、お前が自分を取り戻すために獲物の味を思い出すだけだ。肉の味を、思い出せ。この女の命を蹂躙し、貪り尽くせ。そうして、お前はようやく……本来の姿に戻れる」

「ふざけるなよ、神崎……っ！」

「ふざけるかよ。……なぁ、そうだろう？」

虚ろな久留美に語りかける神崎は、何処からともなく手にしていたナイフをその手に握らせるように固定しながら、

「……ほら、見えるか？　あいつだよ。お前の両親を細切れ肉にしやがったのは。あの時お前はどう感じた？　助けてくれた恩か？　違うだろ」

「……ぁ」

「お前の両親は助けられた。助かるはずだった。死なずに済んだはずなんだ。……なのに、あいつはどうした？」

「……ぅ、あ……ぁ」

「忘れちまったのか？　忘れていいのか？　忘れられるのか？　……よく見ろ、あいつは何だ？　あいつはお前に何をした？　お前から何を奪った？」

「……っ」

空虚の眼に、何かが宿った。

灯火のように揺らめいた仄かな暗闇。

それは最初だけで、どんどんその濃度を高め、

「……殺した」

「何を？」

そして、

「――――私の、家族を……あいつがっ！！」

血の気の無い唇が、はっきりとそう発言した。
無の表情には、憎悪という名の極彩が滲み出ていた。

憤怒。
嫌悪。
鬱屈。
焦燥。
絶望。

あらゆる劣情が織り交ぜられ、憎悪が織り上げられていた。
それが、久留美の感情の全てであることを示している。

神崎は、思惑通りに言ったことを喜ぶように口端の笑みを強くし、

「……そうだ、そのとおりだ。イイコだ。……それで、お前はあいつをどうしたいんだ？」
「……殺す。殺す。殺して。殺したい。殺し――――――」

爛々と目を血走らせ、一心に千夜を見つける久留美は、うわ言のように殺意を口走る。

「……そうか。いいだろう。俺が手助けしてやる。ほら、こいつをやるよ」

握らせているナイフの存在を久留美に気付かせるために、手の甲をピタピタと叩く。

形だけの握る手に、力がこもった。

「……復讐の時だ。お前の憎い相手は眼の前にいる。親の無念を晴らすこれ以上に無いチャンスだぜ？　違うか？」

「……っ！」

鼻息を荒くする久留美を見て、けしかけるのは十分ととったのか、

「……行きな」

促すように、久留美を押し出した。

背中を押された勢いの名残で、数歩前へ進む久留美は、それがなくなると止まった。

足取りは変わらず不安定のままだった。

だが、眼差しとナイフを握る手だけは違った。

確かな殺意をたっぷり染み込ませた視線を放つ双眸と、皮膚が破れるほどナイフを強く握り締めた手だけは。

両者の向かう先は、千夜一人に絞られていた。

「……久留美」

零すように口にされた名前にも、反応は無い。

ただ、飢えにも見た焦燥を宿した眼差しが、殺意と共に千夜に向けられる。

「……俺を殺すのか」

答えは無い。

「俺が、憎いか」

答えは無い。

「俺を……殺したくて仕方ないんだな？」

答えは、無い。
ただ視線だけが全てを肯定し、言葉なくとも語っていた。

答えるまでも無い、と。

千夜は、何かに区切りをつけるように目を閉じた。
数拍にも満たない僅かな閉眼の後、

「……そうか」

開いた眼には躊躇や動揺は一切残っていなかった。
代わりにあるのは、強い眼光。何かを堅く決意した者の目だった。

覚悟。
千夜に目に宿るそれは、一つの揺ぎ無い意志の塊だった。

二つの固い意志のぶつかり合いは、視線を介して実行された。
どちらも譲る様子なく、逸らすこともなく。

ただ、互いが互いの存在だけを見つめていた。

「……なら、一撃だけ。一撃だけ許してやる」

千夜は右手を前へ差し出し、人差し指を立てた。

「チャンスは一度だ。好きなところを狙え。……先手はお前のものだ」

先手。
それを譲るのは、相手に優位性を明け渡すこと意味する。

だが、この場において、この対立において――――――そんなものは意味が無いに等しかった。

本当に残酷を極める絶望とは、ほんの少しの希望が垂らされたものだ。
この希望を掴もうと必死になり、藁にも縋る気持ちでそれに全てを託す。

そんな蜘蛛の糸が切れた時、人が得る失望と喪失とはどれほどのものかは計り知れない。

千夜の行う行為とは、それに値するものだった。
観戦者と化していた神崎は、その行為の意図をどうとったのか、酷く楽しげに、嬉しげに笑う。まるで、この相対がどう転び、どのような結末を迎えるかを予知しているかのように、優越感に浸った様子で。

誰が圧倒的な優位性を持ち、誰に勝敗が傾くかが決められているも同然の組み合わせ。

予想する結末は、神崎にとってこの上なく理想的なものだった。

観戦者一人と、対戦者二人の場は、暫しの膠着状態が続いた。

が、

「……来いよ」

沈黙を破る千夜の投石が、冷戦に終りを告げた。

絶えず睥睨を続けていた久留美の目が、大きく開いた。

そして、

「ぅ、あああ……ーーーーーーーーっっ！！！」

絶叫をあげながら、威嚇から特攻へ移った。

両手で握り締めたナイフの先端は、突進と共に千夜へと向かう。
距離は三メートルにも満たない極短の疾走だった。

千夜には迎撃の様子は無い。
そして、防御や回避も同様だった。

無防備。
ただ、向かってくる久留美を見つめている。
そこある感情は計り知れず、見透かすこともできない。
無表情であることは、無感情であることなのか。
姿勢は非武装でも、精神面におけるガードは鉄壁であった。
二、三秒にも満たない。されど、一瞬と呼ぶほどの刹那でもない
この間に、千夜は一歩も動かなかった。久留美の目を見つめていた。

そして――――

「甘い」

切っ先が胸に触れるかの瞬間、触れるように手首を掴んで静止させた。

視線は、久留美の目に固定したまま。

ナイフを掴んでいる手首を握って、刺し込む際の勢いを補強しているにも拘わらず、久留美のナイフはそれ以上先へと進まない。

千夜の片手が、久留美の全てともいえる渾身の一撃を捻じ伏せていた。

希望を摘み取る絶望の手は、抗うように突き進めようとする久留美の意志すら叩き伏せるように力を込める。

「……っ、この、この、このこのこのこのこのこのこのこのぉぉ……っ！！」

「……心臓か」

千夜は、久留美の標的の名を静かに呟き、

「わかりやす過ぎて、駄目だ。……確実に殺せるだろうが、それを真正面から突っ込んで成功させるのは……不意でもつかない限り不

可能だ」

何処までも冷静に分析し、解説を述べる。

とても殺されかかった者とは思えない沈着さで。

千夜の目は穏やかだった。

表情は無くとも、瞳は虚無ではなく静寂を住まわせている。

それを見ていた神崎は、得体の知れない違和感を感じた。

そんな外野で起きている反応など千夜は見えていないのか、それも承知の上なのか、

「……久留美、それでなくても相手が憎くて殺したいと思ったら……心臓は駄目だ。あっけなさ過ぎる」

己の命を狙う相手に、千夜は教えを説く。

「じっくり苦しませるようにしなければ。例えば――――」

抑止されていた久留美のナイフがその切っ先をずらす。

久留美自身の意図ではなく、その手首を掴む千夜の手によるものだった。

その先端は、胸から下へ。

徐々に下げられ、不意に止まる。

そこは、

「――――内臓を抉るように脇腹を刺す。刺殺で狙う場所で言えば、簡単でベストな選択肢だ」

引き入れるように迎えられたナイフが収まる場所となった。

◆◆◆◆◆◆

ずぷり、と沈み込むように皮を破り、内臓を切り開く感触。
それが己を刺し貫いた事実であると共に、千夜はもう一つ抱きしめなければならないものがあった。

そして、両手を伸ばした。
自ら招いたナイフはそのままに。

久留美を。
久留美の体に両腕をまわして、引き寄せた。

「……つかまえた」

息づくような小さな呟きに、抱きしめた体がビクリ、と震えた。

そうして、体がガタガタと痙攣するように小刻みに振動を始める。
震えが拒絶ではないことを、千夜は耳元で聞こえる嗚咽で気付いていた。
即ち、それが示すのは、
「……無事か、久留美」
「……っ」
反応として、大きく震えた。
その際に久留美の手に握られたままのナイフも僅かに動き、内臓を掻き回すことになる。
「……っ、結構効くな。誰かにここを傷つけさせるのは、久々だからかな」
「……な、んで」
「何でって……その質問はいくらなんでもないんじゃないか」
何を問いかけているのかを理解した上なのか、茶化すように返答を曖昧に濁す。
「……こうなっても仕方ないと思った。だから、だ」
「だからって……っ！」
「それに久留美は、あの時もっと痛かっただろう？」
千夜には見えない死角で、久留美の目が凍りつく。
「……お前に対しては償いきれないほどのひどいことをした。……償いに足るとは思わないが……迎えにきた。――――――帰るぞ、

久留美」
「――――、――――」

答えは無かった。
ただ、顔を肩口に押し付け、抱擁に包まれるがまま、久留美は嗚咽を零す。

そんな久留美から了解や了承を得ようと言葉を続けることなく、千夜もまた腕の中の存在から温もりが絶えず失われていないことを確認するように、抱擁を解かなかった。

「――――――っっっっっ、ざけんなぁあああああああああああああっ！！！！！！」

ささやかな安息を破ったのは、神崎の怒号だった。
怒りと苛立ち。そして、裏切られた者の目をして、二人から少し離れた距離から、

「何だ、何なんだよそりゃぁっ！！　てめぇ、何考えてやがるっ！！　俺が、この俺がせっかく整えてやっていうのに……台無しにしてくれやがったなっ！！？？」
「……俺が久留美を殺せば、目が覚める……とかいう寸法だったわけか」

千夜は、久留美が神崎の声に怯えているのを見て、振り向かせないように後頭部に手を添えながら神崎と向き合う。

「お前は……俺が蒼助を捨てて、後は久留美も俺自身の手で片をつけてしまえば、お前の望むような姿になると思ったわけだ。そうなったら、お前の王国にも興味を示して、お前への愛に目覚める……なんて、本気で考えていたのか？」

腹部に重傷を負う者のする口調とは思えないほど、明瞭にして流暢であった。

それは、神崎に思わず怯ませるほど虚勢とは程遠い確かな威勢だった。

「……正直しんどいから、手短に答えるぞ。これ以上失わないために、わざわざお前なんぞを心中相手に選んだんだ。ここまで来て、間違ってたまるか阿呆」

「んだとぉ……」

「俺は言っただろう。言ったはずだ。……頭ごなしに力づくで人を押さえつけようとしても、決してなにも手に入らない。何故か？答は簡単だ。……足掻くからだよ」

千夜は言葉どおり、押さえつけようとする神崎に、抵抗の眼差しをもって足掻きを示した。

「……押さえつけられれば押さえつけられるほど、人は己の意志を高め反旗を翻す。俺はお前が気に入らない。もっと明確にすると、嫌いの前に大が幾つ付いても足らないくらいだ。……聞け、神崎。ここまでだよ。ここから先は、もうおまえの好きにはさせない。手加減も容赦もかけてはやらない。憐れみも情けもお前には持ち合わ

せていない」
「千夜……」
久留美の声も無視し、千夜は仕上げとばかりに声を高らかに張った。
「俺は、世界が己の思うように動かない事実を知っている。だから、それを突きつけて思い知らせてやろう。……この世界は、お前の思うようにはならないと！」
千夜は久留美の身体に対する抱擁を「抱え込む」というより強固なものへと替えた。
そして、じりじりと後退する。
その行為に対し、神崎は糾弾を飛ばす。
「逃げる気か、てめぇえええええええっ！？」
「人聞きの悪いことを言うな。戦略的撤退と言え。……戻ってきてやるから、それまでせいぜい断末魔のマスターベーションでもしていろ」
それだけ言い捨てると、千夜は抱擁を片手にのみ残し、解いた手を肩よりも高いところまで上げた。
掲げた手では、親指と中指を擦り合わせる動作が行われ、
――――――パチン
小さな音が弾けた。

その瞬間、

「――――――なんだっ」

「――――――――っ！？」

白光だ。

闇を満たす空間に目も眩む閃光が、その場における闇と光の勢力の形勢逆転を顕現させた。

それは、視界を持つ者たちのそれと闇を駆逐する。

「……久留美」

「え、ぁ」

「しっかり掴まっていろ。絶対に俺から離れるな」

言葉の意味を理解するに追いつかないが、久留美は不可解な事態に怯えて無意識のうちにその要求に応えた。

その時だった。

「じゃあな、神崎。――――――また、〝後で〟な」

ずぷ、と沈むような鈍い落下の感覚。

久留美は咄嗟に薄く目を開けて、その異変の場所――――――足元を見た。

しかし。

その直後、久留美の視界は闇一色となった。

［壱百伍拾参］　悪意への叛旗（後書き）

明朝と言っておきながら、寝坊してギリギリ早朝更新となってしまいました。すいやせーんっ！（ジャンピング土下座

ようやく、神崎戦序盤が終わりました。
同時に神崎を生還フラグを残したまま倒せるチャンスを千夜は失ったわけですが、久留美を見殺しにしてでもその方法を取るようでは、もうそれは千夜じゃないのであしからず。

久留美はどんな状態であったかというと、意識はあった。
ただ操られていたかというと微妙。悪意や殺意は、実は彼女自身がちゃんと持っていたもので、千夜に置いていかれてチロチロ見え隠れしているところを神崎の手によって引っ張り出されていました。いわゆるヤンデレ状態なの……か？（いまいち定義はわからないが好意や愛情が報われないと転じて憎悪や嫌悪へ歪むことなどざらじゃないってことかなぁ。しかし、そんな狂気に走りかけていた久留美もまさか千夜が自分から刺されに来るとは思っていなかったのか、呆然＆正気に返ったわけです。

あと、何で完全にお人形さんみたくならなかったのかについては本編で説明されるはずなので、また後日。

しかし、今年もいよいよ一週間を切りました。
とりあえずマジで就活が始まるまでには一章を終わらせてこの作品に区切りをつけよう。マジでね。

［壱百伍拾四］　欲しかった真実（前書き）

たとえ間違っていても

［壱百伍拾四］　欲しかった真実

身体の感覚が無い。

呼吸をしている感覚。
目を開けている感覚。
声を出している感覚。
腕を動かしている感覚。

およそ五感の全てが機能しているか、自分ではわからなかった。

感じない。
何も感じないのだ。

こうなってからどれほど時間が経ったかさえも。
何故、こうなったかさえも。

……ここは、何処？

理由が原因はわからない。
だが、その直前のことだけは寸前で捉えることができた。

……確か、足元が。

沈んだのだ。
それこそ、沼や泥濘（ぬかるみ）に足を踏み込んでしまったときの感触だった。

それを感じ、何が起こっているのか確認しようとした中で、事態は起きた。
何も見えない。
何も聞こえない。
何も感じない。

何も、わからない。

果たして自分は生きているのか。
それさえも久留美の中で実感が消えようとしたその時、

「――――――――っ、！」

浮遊感。
否、重圧感だ。
失われ、忘れかけていたモノが全て肉体に元に戻ってくる。
その重みだ。

奇妙なその感覚に喫驚してすぐに、最後に遅れてきた感覚が変わる世界と共に訪れる。

明るい。
直感的にそう感じた刹那、

「……きゃっ」

久留美の身体は、地面へと放り出された。
どさり、という軽い衝撃と共に舞い上がった砂と埃が相まって久留美の鼻と呼吸器官に侵入する。

「っげほ、っぐぇ……ふ……――――――っう」

たまらず咽(むせ)ていたが、そこに横槍を入れるように吐き気が襲いかかる。
更に眩暈(めまい)まで。

不快の三重奏によって、久留美はしばらく蹲ったまま動けなかった。
咳はすぐに治まったが、酒で悪酔いしたような感覚はしばらく抜けなかった。

「……はぁ、っ……は……」

ようやく眩暈だけでも一足先に治まったところで、久留美はようやく現状把握へと行動を移せるようになった。

「……ここ、は……？」

周りを見渡す。
光は無い。少なくとも神崎といた時よりも闇は薄いようだが、それでも薄暗い程度のそれは変わらず存在し、空間を支配していた。
工場ではない。
思考が経験という記録データと照らし合わせて、それらしき情報を打ち出す。

それから判断するに、ここは、

「アパートの……部屋？」

部屋はそれほど広くない。

そして、仕切りや間取りを見る限り、それは人が生活ことを意図して設計されたつくりであることはわかる。

そうであると理解するのに時間を要したのは、そこに生活感がないからだった。

ガラン、と何も置かれていない殺風景な様は、引越し前のモデルルームを彷彿とさせる。

身体を見回せば、服はあちこち埃だらけだった。

両手は汚れていない部分を探す方が難しい。

「……っ、千夜」

幾分の余裕と均衡を得た意識は、ようやくすぐ傍らで倒れている存在に気付いた。

仰向けに倒れ、目を閉じて動かないその姿を目にして、内臓がスゥッと冷えていく。

「千夜……千夜っ！！」

久留美は身体を揺すり、声を上げてその名を何度も呼び続けた。

すると、

「……っ、う……久留、美……か？」

気絶していたのだろう。

瞼が僅かに痙攣した後、ゆっくりと開いた瞳が久留美を映す。

安堵。

しかし、それを顕す言葉は口から出なかった。

代わりに飛び出したのは、同時に生じた別の感情だった。

「……何で、避けなかったのよ」

「……」

「何で、助けたのよ……っ！　どうして、こんな……こんな逆恨み馬鹿に刺されたりなんかしたのよっ！？」

怒りだった。

非常に理不尽なものだったが、それでも久留美にはそれを抑えることはできなかった。

現状に対する激情。

それは、久留美ではなく千夜が深手を負ったこと。

そして、更には久留美が望み、図ったものとは異なる結果となった現在へもそれは向いていた。

「侘びのつもりなの？　馬鹿じゃないの、私なんかほっとけばっ……」

「――――――久留美」

止まらなかったはずの勢いは、鶴の一声であっさりと停止した。

その声は、ビクッと久留美を怯ませ、一気にその熱を下げた。

怒鳴ったわけじゃない。

寧ろ、静かだった。穏やかだった。

いっそ異様なほどに。

千夜は、久留美に対し優しかった。

「……話を、聞いてくれないか？　泣いたままで……いいから」

「――――――っ！」

指摘されて、久留美は己の頬が濡れていることを知った。

汚れているにも拘わらず、服の袖で拭う。

しかし、それでも決壊したダムは濁流を止めない。

神崎の支配下にいた時の反動なのか。

それとも、目の前の事実がそうさせるのか。

だが、理由など久留美にはどうでもいいことだった。

どうしてもこの涙を止めたい。

自分には泣く資格などないから。

だが、

「……いいから、久留美。怖かっただろう？」

「……ちがっ……そうじゃなくて……」

「何だっていい。出るものは出るんだから……放っておけ。……だから、俺の話を聞いてくれよ。こんな時に……こんなことを言うのもなんだが。……きっと、俺の声も俺の言葉も……もう聞きたくないかもしれない。でも……聞いてくれ。……これが、最後になる

かも……しれないから」

最後。

その言葉が、今はこの上なく怖い。

そんな言葉を優しく口にした千夜を、久留美は仇敵のように睨んだ。

涙を絶やすことなく、双眸を濡らしたまま。

千夜は、それを聞く体勢と判断したのか、一度力を抜くように大きく息を吸った。

深い呼吸が前置きとなり、

「……俺たちは……多分、最初から……始めからずっと、間違えていたんだ思う」

「まち……がい？」

久留美の反復に対し、千夜は「ああ」と頷いた。

「……あの時、お前が俺にインタビューを持ちかけてきたことも、俺がそれを受けてしまったことも……もう一度持ちかけて、それをまた受けたことも。……白紙に戻そうとしてそれを拒否したお前を受け入れてしまったことも。……ああ、やっぱりだな」

千夜は、何かを確認したように低く笑い声を立てた。

「最初を躓くと……ずっと引っかかりっぱなしだ」

「……」

「……それで、どうしようか考えているうちに……このままでも

いいんじゃないかと……思えてきちゃっていたんだよな。そしたら……こんな、有様だ」

久留美は顔を歪めた。

千夜はそれを見ても、何となしに続ける。

「小さな間違いは、たくさん積み上がって……どうにもならない大きな間違いになってしまった。……最初が肝心って、本当なんだな」

「……だったら、何で」

それまで黙って聞いていた久留美は、そこで耐えかねたように切羽詰った様子で口を開いた。

「――――あのまま私を殺さなかったのよっ！！」

それは自ら望んで吐き出した言葉であったというのに、久留美の胸は告白の瞬間にきつく痛みを持った。

自虐の言葉であった。

だが、この言葉と対極となる結果が、久留美の最後の本望だった。

手に入らないのなら、相手に何かを残したかった。

何も遺していってくれないのなら、遺したかった。

連れて行ってくれないのなら、傷つけたかった。

身体の自由が、暴走した殺意と憎悪に支配されている最中でも、千夜を殺せるとは思えなかった。

ただ、それでも遺せるものはあると思ったのだ。
そして、同時に自分の中にも遺るはずだった。

殺したという事実を相手に。
殺されたという事実を自分に。

絶対にして不動。
どんな強い想いすら霞むほど、消えない事実（こと）。

代償が命であっても、それでも構わなかった。
なりふりなど気にかけられないところまで、久留美自身は来てしまっていたのだから。

なのに、千夜はそうしなかった。
それすら叶えてくれず、今――――――

「昨日だってそうよ！　私があんたにとって間違いだっていうのなら、あのままなかったことにしちゃえばよかったじゃない！　あんたの人生の汚点だっていうのなら……どうして……どうしてっ！」
「――――――それは、無い」

自分の言葉を遮った否定の意味を、久留美は理解できなかった。
間違っていた、とさっき言ったばかりの相手の更なる否定の言葉が。

「……絶対に、無い。そうじゃ……ない」
「何よ。何が違うって言うのよ……。だったら……何だって言うのよっ！」

苛立ちをぶつけるように久留美は、答えを求めた。
千夜はすぐにそれに応えようとしなかった。
僅かな沈黙を置いた後、千夜が口にした言葉も久留美が求める答えとは異なる内容のものだった。

「……答える前に、ちょっと抜いてくれないか」
「は……？」
「コ、レ」

指差したのは、腹部に刺さったままのナイフ。
深く刺さったそれは、既に柄しか見えず、刃は全て埋まっていた。
抜いたらどうなるのか。
想像し、久留美は要求に拒否感を覚えた。

しかし、千夜は、

「……頼む。抜かないと……いつまでたっても傷が塞がらない」
「……治る、の？」
「そうじゃないなら、わざわざ刺されたりしないよ。……お前には悪いが、俺は”まだ死ぬわけにはいかない”んだ。……だから、抜いてくれ。俺じゃ、力が入らない」
「……わかったわ」

死ぬわけには行かないという目的が、うっすらと久留美には見えた。
故に、久留美は千夜の言うことを信用することにした。

言われたとおり、腹から突き出ているようにも見える柄の部分を持つ。

躊躇しながらもそこを抜くことを意識して、動かしてみる。

「……っ……」

千夜の顔が苦痛に歪む。

それを目にした久留美は、一気に迷いを溢れさせる。

しかし、それを千夜が咎める。

「……駄目だ。余計な気を遣わず、一気に抜け」

それが正しいのかわからなかった。

しかし、他に何が正しいのかもわからない。

迷った。

迷い、そして――――――

「……――――――――っ、っ！」

悲鳴はなかった。

ただ、綺麗に並ぶ白に赤が滲んだ上下の歯がきつく食いしばられた。

ずるり、と抜けた刃は真っ赤だった。

千夜の血。

自分が刺した傷から零れたもの。

己が仕出かした事を見つめ、久留美は望んだはずのことが今は恐ろしくて仕方なかった。

腹部から溢れ出た血が、地面に広がる。
しかし、水溜りは少ししてその規模の拡大を止めた。

「……血が、止まった？」
「皮膚が塞がったのさ。……さすがに、中身はしばらくかかるだろうがな」

事情を語る千夜の額には、脂汗が滲んでいた。
呼吸も荒く、乱れている。

胸が絶えず大きく上下し続ける中、千夜は、

「……それじゃぁ、さっきの続きしようか」
「いいよ。……もういい。……いいから！」
「駄目だ。聞いてくれ」

強い口調は、頑として譲らない。
そして、久留美は折れた。

「……出会いは、間違いだった。そのまま関わってしまったことも」

耳を塞ぎたい、と久留美は強く思った。
しかし、

「……それでも、俺にとって――――――【お前】は間違いなんかじゃないんだ」

続いた言葉は、そんな久留美の防壁をあっさり看破した。

「全部なかったことになんかしたくない。苦しくても、痛くても……間違っていても。お前と出会ってからあったことを……なくしてしまうのは、イヤだ」

これは都合のいい夢なのだろうか。

それとも、幻聴か。

いずれにせよ、これは現実なのだろうか。

拒絶された。

ずっと、全部、突っぱねられてきた。

なのに、今――――彼女は何と言っているのだろうか。

「間違っていたかもしれない。正しくなかったかもしれない。でも……俺は……一生、忘れたくない。お前と出会ったこと、お前からもらった思い出も……お前をなくすことで、なかったことになんかしたくないんだ」

そこまで言い切ると、千夜は一呼吸をついた。

ただそれだけを言いたくて、息継ぎにも詰めていたのだろう。

そして、補給を終えると、

「……なにも、くれてやれなくてゴメン。本当なら、お前に殺されてやるのがせめてものことなんだろうけど……まだ、やらなきゃならないことがあるから無しな。……それに」

「それに……何よ」

「お前は……俺なんかで汚れてほしくなかったんだ」

この期に及んで、何を言い出すのかと思えば。

久留美は、場違いとはわかっていても呆れるしかなかった。

「なに……言ってんのよ、馬鹿。……こんな、ヨゴレなんか……今更何しようとこれ以上汚れようがないわよ」

千夜は笑い話を聞いた風に苦笑した。

「そんなわけあるか。お前は俺の友達なんだぞ？　俺は、これでもえり好みが激しい上、綺麗なものが好きなんだ」

「あんた、見る目なさ過ぎ……」

「失敬だな。お前に言われたくない」

「何でよ」

「俺なんかに、変な意地張って拘わり続けるから」

久留美は、首を振った。

髪が乱れ、涙が飛び散るのも構わず、

「あんた、すごく綺麗よ。あんまり綺麗で……手が届かなくて、悔しかった。届かないってわかっていても諦められなかった。……あんたを見てると、月を見てる気分だった」

久留美は、父親と母親を失う前夜に見た夢を思い返す。

そして、あれはこんな己の心境を暗示していたのだと気づいた。

「……ごめんなさい」

「どうして……謝るんだ？」

「やっと……わかったの。全部……何もかも、私の勝手な思い込みだったんだって。……手を伸ばしても届かないなんて、一人で勝手に思って……やんなくてもいいことばっかりしてた……」

こんなに近くにいて、当たり前のように手を伸ばしてよかったのだ。

つまらない拘りを捨てられなかったせいで、彼女を勝手に遠くに感じていただけだった。

勝手に一人で焦って。

勝手に飢えていた。

距離を作っていたのは、自分の方だった。

彼女の気持ちをわかろうともせずに、どうしてわかってくれないのかと駄々を捏ねて喚き散らしていた。

彼女は、確かに久留美という存在の居場所を内側（なか）につくってくれていたというのに。

否。

千夜だけではない。

あの黒蘭という女が言っていたことが正しければ、きっと『彼女』も――――――

「ごめん……ごめん、なさい……ぃ……」

やっと、わかった。

こんなところまで来て、ようやく理解できた。

かつての魔法使いが、何を思って自分を置いていったのかも。

千夜の言葉を聞いて、ようやく――――――正しく理解(わか)れた気がした。

◆◆◆◆◆◆

表面上は繕った患部に手をやりながら、千夜は己の体内で行われているはずの修復作業の様子を感じようと試みる。

……まずい、な。

遅い。

再生速度が、思っていたよりも下回る。

やはり、『夜叉姫』の使用した後に、『影』の移動。

霊力の消費の激しさは、この治癒の速度で察することが出来た。

……いや、予定通りか。

久留美が神崎の下にいるのはわかっていた。そして、駒として何らかの有効活用をするつもりで何かされることも想定の範囲内だった。

たとえ、神崎を追い詰められても、久留美という弱点が敵の手の内にある限り、トドメを刺すまでには至れないだろう、と。

……久留美は助けた。

ここまで”順調”に進んだ。

あとは、神崎だ。

……俺に身体に副作用が出始める前に。

久留美をここから帰還させ、神崎と今度こそ決着をつける。

残る霊力は、決して多くは無い。少なくとも、先程のように召喚される屍鬼を全て足止めすることはもう出来ない。

仮に出来たとしても、肝心の神崎にトドメを刺すだけの力は残らないだろう。

それでは、意味がない。

……そうだ。だから、”コレ”しかない。

確認するように、千夜はこの隔離世に来る前に己の武器と交わした『約束』を思い返した。

――――――そのお命が絶えられる前に、夜叉に自壊を命じて下さ

いませ。

”互いの願い”を同時に叶えられる術が、幸い千夜にはあった。

残った霊力を全て注ぎ、夜叉姫に自壊を兼ねた”暴走”を命じる。

なけなしの霊力は夜叉姫によって何倍にも膨張し、神崎を逃がすことなく呑み込み、塵一つ残さず消滅させることが出来るだろう。

……こういうの、なんていうんだっけ。

いつだったか、朱里と日曜日の朝に見た子供向け番組のナントカ（名前忘れた）戦隊とかいう特撮もので、登場人物の一人が自らの身も顧みず敵ごと自滅する光景が浮かぶ。

……自爆技……じゃなくて、捨て身の攻撃だったかな。

あやふやな記憶と己がこれから実行しようと考えている行為を重ねながら、千夜がふと移ろい考えたのは、己と同じ行為に甘んじた者のことだった。

テレビの中で、自分のかけがえの無い者たちのために死んだあのキャラクターも、目前とした瞬間に抱いた気分とはこんななんとも言い表せないものだったのだろうか、と。

閉じた瞼の裏で問うように思った後、千夜は目を開いた。

その瞳に、濁りは一切無かった。

［壱百伍拾四］　欲しかった真実（後書き）

宣言ならず（土下座）

とりあえず、これから年明けまで寝ずに更新分書こうかと思います。頑張れば、元旦中には更新できる……はず！（若干の間が不安を煽る

拒絶じゃない千夜の言葉を聞けて、久留美はこれでようやく落ち着けました。……久留美はね（ここ大事

こっからが大変。さぁ、気張れよ久留美。今まで散々かき回したんだ。今度はお前がどうしようもない状態になった千夜を止める番だ。

今夜は、長いよ。

［壱百伍拾伍］　悲痛の叫び（前書き）

伝えたい言葉があった
もう届かないけれど、それでも、と

【壱百伍拾伍】　悲痛の叫び

止めどない泣くという衝動に突き動かされるがままだった久留美は、傍らで起きた動く気配に、思わず手を退けて顔を上げた。

「……千夜？」

力なく横たわっていた千夜が上半身を起こしていた。

長い前髪が表情を遮るせいで、そこから感情や心情を読み取ることは出来ない。

両腕で身体を支え起こす千夜は、

「……久留美。〝アレ〟、持ってるのか？」

「へ？」

何のことだかさっぱりわからないと至極当然の反応を返す。

それでも尚、千夜は、

「ポケットの中、探ってみてくれ。……多分、あるから」

「何言って……てゆか、何があるっていうのよ」

「いいから」

有無も言わさずの後押しをされ、久留美はズボンについた左右両方のサイドポケットを上から触れてみた。

「……ぇ」

確かな異物感が、右のそこから感じ取れた。
手を突っ込み、その異物を取り出す。

異物の正体は――――――

「……これって、お母さんの……」

羽根の形を象ったバレッタ。

見間違えるはずがない。
これに対して向けた感情は、一つや二つではなかったのだから。

「どうして……ポケットに」

気絶するまで手にしていたことは覚えている。
だが、ポケットに入れた覚えはないし、攫われる時に自然と手から離れないはずがなかったというのに。

「……お前のものだからだよ」
「え……？」
「それはお前のものだ。……俺がいくら手元に置こうとしても、いつの間にか手を離れている。部屋にいれば、知らずと玄関先に落ちていることもあった。……理由はすぐにわかった。お前のところへ行きたがっているのだと。だから……俺は、夕方にお前のところまでそれを置きに行ったんだ。そうか……ちゃんと、お前のずっと張り付いていたのか」
「……私のじゃない。お母さんのよ」
「お前の母さんが、自分がいなくなったら所有者をお前と望んでいた。なら、それはお前のものだよ。――――――……【憑喪神】って

知ってるか？」
「つく……？」
「大事に扱われ続けたモノには、森羅万象の加護が顕れ……そこからカミが生じることがあるそうだ。多分、その前兆なんだろうな。……カミが生まれるまでの時間ほどには至らずとも、大切にされたという事実が……持ち主を守る有象無象の意志を生んだんだ。いや……ひょっとしたら、お前の母さんが……想い続けたからかもしれない」

母親が持ち出されたことで、久留美は話題に食いつきを見せた。

「お母さんが、何を……想ったって？」
「……お前を、だ。お前を、ずっと……何年も。いつか、渡せる日が来るように……と。そのバレッタには、お前の母親が込め続けたお前への想いが詰まっている。だから、それはお前を守る。……神崎の呪詛を軽減したように」
「……っ？？？？！」

久留美は、寄せるように胸にバレッタを抱いた。
無意識が導いた行為は、本当に求めたモノを手にする事は出来ない。
わかっていた。だからこそ、久留美はそれを強く、大切に包むように両手で抱いた。

千夜は、それを見つめながら告げる。

「……向こうに帰っても、絶対にそれを手放すなよ。病院につくまでは、両手で持っていた方がいい。とにかく、ずっと持っていろ」

息むように呻きながら、立ち上がる。

その姿に久留美は、ハッとしたように目を開きながら、

「ちょっ……寝てなくて大丈夫なのっ！？」

「痛いさ。寝ていても起きていても変わりなく。なら、起きてやることをやってしまうに限るだろう」

「そういう問題じゃ――――――」

ヒュン、と風を切る音。

言葉を切り落とした遮断音と共に、千夜の手にはいつの間にか白い武装があった。

既に振りかぶられた体勢が、その刀を振るったのだと教える。

しかし、それは一見として真空を切ったに過ぎない。

少なくとも、視界が映す事実はそうだ。

だが、千夜は、

「久留美。……こっちへ来い」

手招きは、自分の側まで来いと言っている。

久留美は有無を言わさない雰囲気に引きずられるように、腰を上げた。

そろりそろり、と足をずるように動かして、千夜の隣に立つ。

「……――――――っ、あ！」

空間の歪み。

壁に穴が出来ているように見えたが、違う。

”空間に穴が出来ている”のだ。

人間一人がそのままくぐれそうなアーチ状の歪みが、ジジッと映像のブレが生むような雑音を立てて顕現する。

まじまじとそれを見つめる久留美に、千夜は、

「……出口ってこうやってつくるもんだから、入るより楽なんだ。ここを通れば、すぐ外だ。さっき影の中に潜った時よりは違和感も軽いはずだから、調子を崩したりもしないだろう。……帰ったら、病院へまっすぐ行くんだ。外は夜だから魔性がうろついているだろうが……お前の心を奴の障気から守り続けように、お守りがこの先もお前を危険から守り続ける。いいか、絶対に片時も離すんじゃないぞ」

「……わかった。わかったわよ」

くどいほどに繰り返される言葉には、たっぷりと注がれた安否の念を感じる。

だが、気にかかる点が、久留美にそれを安易に受け入れさせない。

「……あんたは、どうするの？」

失言とわかっていながらあえて口にする気分だった。

反応が怖い、とこれほどまでに思った瞬間はないだろう。久留美は、この一瞬をそう感じた。

千夜の顔は、見れなかった。

ただ、『出口』という見当違いなところを見つめたまま、返答を待った。

「言っただろう」

重くは無い。
だが、決して軽々しいわけでもない。
避けることも、跳ね除けることも選択させない。
受け止めるしかない重みを持った言葉だった。

「――――――やらなきゃいけないことが、あるんだ」

ああ、そうなのだろう。
ただその言い方には誤りがあるのではないか。

久留美は、思った。直感した。

それでも、その直感を拒否するように、

「……無茶よっ！　……そんな、そんな……フラフラな状態で、勝ち目なんてあるの？　無いでしょ、ねぇっ！」
「わからない」
「ウソ！　……わかってるくせにっ」

指摘し、非難を上げても、

「……けれど、これは俺の義務だから。勝てなくても、終わらせなきゃいけない」

千夜は淡々と自分のこれからについて理由を述べるだけだった。
久留美が可能不可能について糾弾したところで、変わらない。
変わらないのだろう。

その意志は。

「――――――――、っ！」

突然だった。

動悸が。脈拍が。急速に活動を激しくし出したのだ。

焦燥。

恐怖。

困惑。

怒り。

突如、胸の中を渦巻き出したこの感情は、いずれに値するのか。

ひょっとしたら全てなのかもしれない。

だが、その正否よりもわけがわからないのは――――――

「……時間が経つと出口は消える。だから、早く行けよ」

言葉の終わりは、千夜の動作に繋がった。

久留美の隣からその気配は遠のく。

驚いて首を向ければ、千夜は玄関へと歩いていく。

何処へいくかは、明白だった。

「あいつのところに……行くの？」

「いや、待つ。多分、結構遠くまで逃げてきたから……奴に来てもらうとするよ。つか、来るだろうな。それなら、俺がわざわざ長い

距離を歩いていくより、あいつから”にじり寄ってきて”もらう方が体力面でも精神面でもリスクが少なくて助かる」

ここから外の偵察をしようと思って、と言い捨て、千夜は後ろ手で手を振った。

別れの挨拶のつもりらしい。

そう思った矢先、

「……久留美、最後に一つ頼みがある」

『――――――頼みを聞いてくれ』

どくん、と鼓動が一際大きくその音色を刻む。

今、聞こえたのは幻聴なのか。

だが、千夜の言葉に被って、もう一つ声が聞こえた。間違いなく、聞こえたのだ。

「俺を許さないでくれ」

今度は、千夜の声しか聞こえない。

けれども、この感情は何だ。さっきから、何だというのか。

沸き立つ不安は、本当に自分のものなのか。

だとしたら、この何処かで他人事のように捉えているような感覚は何なのだろう。

何だか自分が自分ではないようだ。

いや、正確にはそれもこの状態を言い表すには相応しくない。

自分という存在の中に、”自分とよく似た別の誰かの感情”が流れ込み、乱雑に掻き混ぜられたまま溶け切っていないような。

そんな奇妙な気分だった。

自分が自分なのか。それとも、こう思っている自分は、自分の中に感じる誰かなのか。

これも、神崎に仕込まれた何かの罠なのか。

湧き上がり、とぐろを巻く感情は千夜に向いている。それは、先程までの状態と一緒。

しかし、これは殺意や破壊衝動とは違う。

形容し難い何らかの感情。

その正体不明の情念に久留美が戸惑う中、

「……あ、やっぱり一つ追加していいか？」

なに、と言う前に千夜は矢継ぎ早に要求を繋げた。

「生きろよ。奪っておきながら、こんなこと言える立場じゃないのはわかってるけど……でも、これからも生きていてほしい。失って欠けた部分を埋められないことはわかっている。その寂しさと孤独を紛らわせるほどの幸福を得るまでは辛いだろうが……。

――――――それでも、お前には……いつかまた幸せだと言って笑ってほしいから」

『――――――――生きろ、くいな』

その瞬間、久留美の全てが止まる。
感情や思考を生むそれを始めとした何もかもが、その機能を停止した。

それは決して長くない停滞時間だった。
作業の怠りは、すぐさま再起動することで取り戻せる程度のものだった。

そして、復興の瞬間。

「――――――――」

久留美の身体は、動いた。
正体の見えない感情に指導権を握られて。

否。久留美は同意したのだ。
全力の肯定を以ってして。

行動は、向かう。
既に言うことはないと語り遠のく千夜の背中に。

伸ばした手が届く瞬間、久留美はふと気付いた。

――――違和感が消え、得体の知れない感情はいつの間にか【自分のもの】になっていることに。

◆◆◆◆◆◆

「――――――――ぇ、どわっあ、あっ！？」

衝突の瞬間、腰の上で完全無欠の不意打ちに間の抜けた声が上がる。

しかし、久留美の身体は勢いを止むことなく前進の力をそのまま千夜にぶつけた。

タックルをかまされた千夜の身体は、

「ぶっ……！」

前倒しとなった。転倒直後の呻き声は、おそらく顔から突っ込んだのだろう。

「ってぇ……く、るみ……いきなりなにす」

「――――――あんたってのは……どうして……」

腰の抱きついたまま千夜を敷くように倒れ込んだ体勢で、久留美は低く唸る。

はぁ？と千夜が訝しんだ。

そして、

「……どうして、”いつも”そうなのよっっ！」

久留美から激しい憤りが放たれ、爆発した。

「あんたの自己満足だっていうのは知ってるわよ！　何か見返りがほしくて、私みたいな”無能の村娘”を助けたんじゃないっていうのも、哀れみとか同情でもなかったってのもわかってるわよ！」

「むら……？　おい、くる」

「あんたが、どんな薬でも治せない身勝手でどうしようもないお人良しだってことなんか……いやというほど思い知ってんのよ！　私は、あんたのそういうところが……嫌気がさすほど好きでしょうがなかったんだから！！」

怒涛の勢いに、千夜の制止も呑み込まれるしかない。

この場の勢いは、圧倒的に久留美へと傾いていた。

「……捨てるくらいなら、あの時見捨ててほしかったなんて……そんなみみっちい済んだことを言いたいわけじゃないのよ。そんなことが許せないんじゃない……。私が許せないのは……自分がいなく

ても大丈夫だなんて言ったあんたの手を離した……私っていうあんた以上の大馬鹿野郎よ！」

腰に押し付けるように顔を伏せ、巻きつくように抱く腕は、言葉に込もる力と共に自然とその力を強めた。

駄目だ。

離してはいけない。

”あの時”のように、今度こそ離してはいけない。

そうだ。手を離すべきではなかった。

自分を見ていながら自分を映していないことに絶望しても、それでも離すべきではなかったのに。自分では救えないのだ、と諦めるのはなかったのに。

「あんたを恨んでいるわけでも、許せないわけでもない。……でも、死ぬのは許せない。それだけは絶対に――――――許さない！！」

声を張っているせいで、喉がヒリヒリしてきた。

だが、それが何だ。

あの時言えずじまいだったことを、今ここで言わなくていつ言えばいいというのか。

「拾ったやつに、拾われたやつの気持ちなんてわかりゃしないでしょうけどね……私は、あんたに助けてもらった時に……行く場所もいる場所もなくなって一緒に来るかって言われて……あんたについていくって決めたんだから！　何処までも、いつまでも、よ！」

なのに、

「なのに……あんたは責任放棄上等で私を置いて逝きやがりくさって……あの後、私がどんだけ後味悪い余生送ったと思ってるわけぇ!?」

「久留美……さっきから、一体どうし」

「うっさい、仏の顔も三度までなんて甘いこと言わないわよ。二度も見逃してやるなんてこともね！　あんたがいつまでもそういうつもりなら、こっちだって受けてたとうじゃないのよ！　目には目、歯には歯……身勝手には身勝手よ！　あんたがどんだけ死にたいなんて思っていようが知ったことじゃないわ。逆に、本当は死にたくないと思っていようがいまいが同じことよ！　なんと思っていようが、私はあんたを死なせてなんてやらないんだから!!」

渾身の叫びとばかりに叩きつけた訴えが、千夜の身体を突き抜けた。

そして、互いに呆然という不動の時間が訪れる。

殆ど息継ぎなしで怒鳴り通しだった久留美は、ここに来てどっと押し寄せる脱力感に自分の疲労を知らされる。

伏していた顔を上げ、久留美は両手を地面について、千夜を見た。

その目は、何処か焦点があっていない。

千夜は、正気ではないのか、と疑う。

だが、

「……そりゃ、私はさぁ……あんたと違って、全然使えないよ。団子作るしか……能のない、出来損ないの……死に損ないだよ。でも……そんな出来損ないを拾ったのは、あんたじゃない。死に損な

いにしたのも……あんたじゃないかぁ……。私が、死んだら……悲しいって……言ったじゃない。……私だって、そうだったんだから……死んだら悲しいって、言ってくれた人が……死んで……悲しかったんだから」

息を切らせながら、熱に浮かされるように。うわ言のように。
正気と錯乱の境目にあるような状態で、尚も言い募る。

「文句があったって……知らないんだからね。私みたいなろくでもないのを助けたりするから悪いんだぁ……。だからぁ……だから、私は……あんたが死ぬなんて絶対許してやらないんだからなぁっ……」

目は潤みを持ち出す。
表面を覆うだけでは抑えられなくなったそれは、目尻へ溜まり、決壊と共に零れ落ちる。

「……死なないでよぉ。……死なないで……死なないでぇ」

千夜は、子供のように駄々を捏ねて泣き出した久留美を、腰を捻って見つめた。
久留美はその動きに気付くこともなく、

「死んじゃ……やだあああああっ！」

わぁわぁと声を上げて泣き喚く久留美。
手のつけようが無いとはこの事としか言いようが無いほどに。

そんな久留美に乗っかられたままの千夜は、心情を読み取れない表情で暫しその様を凝視していた。

そして、何かを思ったのか、

「だから……泣くなって。わかったから」

片手を伸ばし、

「……もう行かないか――――――」

撫でようとしたのか、前かがみになった頭部に届きそうだった。

しかし、突如それは力を失い、目的地をすり抜けて――――落ちた。

「……ぇ」

目の前を何かが通り過ぎた気配に、久留美はそこで我に返った。

そして、見た。

「……千夜？」

横たわる姿に、生気を全く感じない千夜を。

［壱百伍拾伍］　悲痛の叫び（後書き）

今年度初の更新でした。
久留美がえらいことになってます。雑な読み方をしてここが最初に開いた回だった人はびっくり。ここまで真面目に読んできた人もびっくり。作者も読み直してプロット練り直そうかと思ったよ（オイオイ

本編に補足をつけますと、久留美さんは自閉中に記憶を継承して【彼女】と合一したものだから、今回のアレはまだ馴染みきっていないので最初に違和感を覚えたのですね。それで、千夜が記憶の中にある台詞に近しいことを言ってシチュエーションも似通っていたから久留美の意識が【彼女】寄りになったんです。ぶちまけた文句は全て【彼女】が死ぬ間際まで言えずじまいで時代越しに溜め込んでいたものです。そんな【彼女】の未練は久留美の人格形成に潜在的な影響を多大に与えているわけでして……千夜に運命感じちゃったのもそこに一理ある。

ひとまず千夜が強制終了したことで、引き止めることに成功したわけですが……まだまだこれからだよ（プロット確認しながら

［壱百伍拾六］　死の衝動（前書き）

粉々に砕けてしまうくらいの

【壱百伍拾六】　死の衝動

路地裏。
雪が降る寒空の下。

身体は血塗れで薄汚れていた。

地面に敷いた白い雪はほんのりと赤らんで、踏み敷いたせいで泥がついている。
その上にいる自分の上に、穢れを知らない新たな雪が舞う。

ここまで知覚して、千夜は気付いた。

これは、『夢』なのだと。

自分にとって夢とは、記憶を見直すものであって行為。
それ以外の夢を知らない。
幻想に浸る類も。
未来を望む類も。

そんなものは、視たことが無い。
己に許したこともなかった。

……そうか。

再生されている記憶という名のこの夢が、何であるかを千夜は知っていた。

様々な過ぎ去った過去を夢に視てきていたが、ここにきてついに『これ』まで視ることになるとは――――――

……いや、〝今〟だからだ。

これは、己にとって『もう一つの原点』とも言える過去。

原点回帰として向かうに等しい記憶だ。

……走馬灯には、まだ早い気がするが。

見る暇があるかどうかも怪しい末路が待っているのだから、構わないかもしれない。

……えっと、この後どうなるんだっけ。

そう思って、直後に落胆した。

思い出そうとした行為そのものに。
それを平然とやろうとした自分自身に。
そんなことする必要すらない、大事なモノであったはずなのに。

……もう、ダメなのかも……な。

身体のガタだけではなく、アタマの方にまでキているらしい。
彼女の『顔』だけではなく、記憶そのものにまでその『症状』を来たしている。

これではきっと、他の者らの記憶は思い出すことすら出来ないかもしれない。

……いや、でも……まだダメだ。

これが最後でもいい。
最後なら、せめてきちんと思い出して視ておかなければ――――――

「――――――ねぇ、貴方……迷子なの？」

目を閉じて、強く追憶を思った直後だった。

出会いの第一声となったその一言が、全てを引き出す。

そして――――――――

◆◆◆◆◆◆

目を開けて、視界に映ったのは薄暗い闇。

それが、目に映るものが夢ではないことをしっとりと教えてくれた。

……なんだ、これからだったのに。

最後の最後で見れずじまいになったことで、落胆と肩透かしを喰う。

しかし、一拍置いてそれはあまり関係なかったかもしれないと思い直す。

目が覚めれば、全て忘れてしまう。
現実に戻れば、どんな夢を見て何を思ったかさえも何一つ思い出せない。
自宅で最後に視た夢がそうであったように。
自分という存在は、そこまで来てしまっているのだから。
千夜は、僅かに残る未練にそう言い聞かせて自身を納得させた。
「――――――――うぇっ……ふ、ぅ……ぅぅっ」
泣き声が、目覚めたばかりの千夜の意識に割って入る。
何処から聞こえるのか、と視界を働かせ、
「……久留美？」
「――――っ！？」
久留美は、うつ伏せに倒れていた千夜の背中に顔を突っ伏して、被さるような体勢で泣いていた。
呼びかけに、一瞬硬直したかと思えば、バッと顔を上げて、
「……か、ずや？」
「そんなところで……何しているんだ？」
付着した埃と砂で出来た汚れに、涙が合わさってクシャクシャになった顔が強張る。
あ、失敗した、と思ったときは遅かった。
「――――――何してる、じゃないでしょぉぉぉがあああああっ

！！」

腹の底から出していることが、イヤというほどに伝わってくる気迫のこもった怒号が部屋中に響く。

周りで獲物の品定めをしていた死霊が、恐れ慄いて引っ込んだのが見えた。

凄いな、と場違いな賞賛を抱く。

「こっちはあんたが急に動かなくなって死んじゃったかと思って、本気で怖かったんだからねっ！！　あんたが気絶している間、周りに何かおっかないのいるし、あんた動かないしで気が気じゃなかったらねっ！！　それから、それから……」

怒涛の勢いで捲くし立てていた久留美は、急に詰まるように苦しそうな顔をして、

「……うぐっ」

睨んでいた目に、再び涙がたっぷりと溜まる。

ボロボロと落ちると同時に、

「うわぁぁーん……生きてるよぉぉー」

泣き声と共に、安堵を口にした。

死んだかもしれない人間と、二人。

それも、周りにはいつ襲い掛かってくるかはわからない生者に飢えた死霊たちが屯している状態で、たった一人で意識を保ち続けていた久留美に与えられた責め苦は計り知れない。呼吸をしているかどうかを確かめる余裕だってなかっただろう。

「……俺は、どのくらい気絶していたんだ？」
「……ん、わかんないけど……多分、十分そこそこだと思う」
意識の無い時間は、自分で思うよりも長かったと千夜は知った。
「すまない。……迷惑、かけたな」
労わりの意を込めて言葉をかけて、身体を起こそうと身を捩るが、
「……久留美、退いてくれ」
「イヤっ！」
動きを見せた途端、久留美はしがみつく様に千夜の上に被さっていた。
意味がわからない。
「……何で？」
「離したらまた行こうとするくせに」
「……しないよ」
「うそ」
「それ止めたから」
「嘘よ」
「本当だって」
「いーやー」
埒が明かない。
離す離さないの応答から、話の路線を少し変えてみようと試み、
「……じゃぁ、離さなくていいからあの壁まで連れていってくれ。

それなら、いいだろ？」

返事は、少し時間を置いた。
そうして久留美は、ちらり、と一瞥して、

「……わかった」

一瞬何処か怪訝そうな表情を浮かべた後、久留美は千夜をひっくり返し、後ろから左右の脇の下に腕を通した。引きずるようにして、後退しながら共に壁へと寄っていく。

何で、こんなことをしているのか。
地面を滑らされる間、千夜は今のされるがままの自分を客観的に見た。

久留美の抵抗を振り払い、そのまま出て行くことは出来たはずだった。
だが、あえて久留美の抵抗に屈した。

ここまでの自分の行動が、千夜には己の事ながら理解できなかった。
こんなはずではなかったのに。
そんなつもりではなかったのに。

何故か、と原因を突き詰めてみる。
自然とそれは己自身へと向かう。

――――――そうして、わかったことは一つだった。

「……到着」

ぽつり、と落とされた呟きに、我に返る。
ふとした瞑想の間に、すぐ傍には壁が来ていた。
久留美は自ら退いてそこに人間一人分の僅かな隙間を残し、隣に座り込んだ。

「……」

久留美が退いた後の隙間を埋めるように腰を引き、千夜は壁にもたれかかった。
自然と、そこから沈黙が生まれる。

互いに口を開くことなく、その中を漂う。
気まずい、というほど不自然な空気ではなかった。

だが、久留美にとってはそうではなかったらしく、

「……ほ、本当に行かないの？」

言葉が固い。
まだ警戒態勢は解いていなかったのか、と千夜は踏んで、

「さっきから言っているじゃないか」
「……いや、そうだけど……」

腑に落ちない、と顔に有り有りと描いてある。
わかりやすいな、と口元を緩めて、

「……ああ。行かない。……もう、治まったみたいだから。大丈夫だ」

ふ、ふぅん、と久留美は引っかかりを感じたようだったが、そこで一旦沈黙した。

しかし、それを千夜は破った。

「さっきは、すまない。あと……ありがとう」

「ぇぇっ？　……え？　え？」

びくん、と過剰とも思える反応。もはや、ビビリの範疇にまで達している。

「な、なにが……？」

「いや、俺……多分さっきまで〝ぶっ壊れて〟ただろうからさ。迷惑かけたことに関して、ごめん。止めてくれたことに関して、ありがとうって意味」

「……全く意味わかんないわよ」

むしろ現在進行形で壊れっぱなしなんじゃ、と失礼な言葉が後に続いた。

何だささっきまで泣き崩れていた割にタフじゃないか、とムッとしながらも、

「なんと説明すればいいのかな……俺自身もあんまり自覚がないし……」

「いやほんと、何の話をしてるのよ……」

すっかり置いてけぼりを食らったような顔をしてぼやく久留美に、

「あー……周りの奴ら曰く、俺って何でもかんでも我慢し過ぎらしい。痛みに関しても、ストレスに関しても。いろいろためこんだまま生きているから――――――ひょんなことで、突然おかしくなるんだと」

他人事のように告げる。

久留美は、何かを呑みこんだように目を見開き、

「……それって、つまり――――――」

◆◆◆◆◆◆

扉を開ければ、そこは幻想世界だった。

一歩足を踏み入れると、くしゃり、と儚い感触。見渡す一面が、白い蓮に埋め尽くされていた。通常、蓮は花一つに対し葉の量は圧倒的なはずだが、これはそのバランスを崩壊させていた。葉が殆ど見えないまでに、白い花が足元と視界を覆い尽くす。

そして、ちらほらと白い花弁が舞う。

現実離れした世界。

ここが、三途の空間術式を施されたある意味の人工的な世界であ

ると知っていても、溜息をつかずにはいられない。

しかし、そんな気分から脱することを強いる者がいた。

「――――そのまま入ってきても大丈夫よ？　その下、水が張ってるけど沈んだりしないから」

声の主は、黒蘭だ。

何処にいると視界を巡らそうとしたが、その相手は先手を打つように突如現れた。

真正面の向こう。真っ直ぐ歩けば、容易く近づけるところにいた。

白い世界に反する黒い存在。

凄まじく、そして美しい対比だった。

世界で孤立するその存在は、背を向けて動かない。

ここまで来い、という雰囲気と先ほどの台詞から意味を察し、蒼助は純白の世界に招き入れられることにした。

歩いてみると、黒蘭の言うとおり蓮が生息するために必要な水の感触があるが、足元が池というわけではないようだ。かといって、地面のように硬いわけでもなく、薄い膜が張られている上を歩くようなフワフワとした不安定な手応えだった。

完全に入り込むと、出入り口からはわからなかった天上が見えた。

夜空。

そして――――――白い月だ。

思わず黒蘭を見た。

この空間術式が読み取って実現させる世界観は、先人の黒蘭のもの以外の何物でもない。

なら、この白い月を飾ることを望んだことも黒蘭。
蒼助は、千夜と出会った夜にコレを一度だけ目にした。
そして、

……そうか、こいつかっ！

別れ際の会話で、千夜が言っていた『通りすがりのお節介』という空白の枠の中に埋まる者が誰なのか。
今この瞬間が、答えを指し示した気がした。

「……ねぇ、坊や」

疑問が晴れたかと思った矢先、黒蘭は背中越しに声をかけてきた。
ハッとした蒼助は何を言い出すのかと気を引き締めるが、

「――――――【死の衝動】って、感じたことある？」

その一瞬、引き締まるところを飛び越えて固まった。
唐突過ぎる問いの内容は、身構えも意味のないものとするほどに難解すぎたのだ。
それでも、蒼助はなんとか硬直状態から立ち直り、

「……ここは、〝よくきたわね、待っていたわよ〟ってくると思ってたこの期待……どうしてくれるよ」
「あらあら、意外と保守的ね。伝統に囚われていると、時代に置いていかれてしまうわよ坊や」
「……で、何だって？」
「んもう、ノリが悪いわねぇ……」

ノッてこない態度に溜息をつかれようが、蒼助には知ったことではない。

ただし、それが――――――〝目の前でのこと〟であればだったが。

「――――――どわっ！」

耳に生温かい息を感じたかと思いきや、視界から黒蘭は消えていた。

代わりに、首周りにはありえないはずの二本の腕がまとわりついていた。

「死にたいって、猛烈に思ったことはないかって聞いたのよ。何もかもどうでもよくなって、ただひたすらに……死だけを求めたことはない？」

表情は、見えない。

だが、口調や声色は冗談めいているものの、問いには不思議と真剣味が帯びているように感じれた。

蒼助は、黙考のために沈黙を産み落とす。

そして、沈黙が産んだ答えは、

「……ねぇな」
「でしょうね」

わかっていたとばかりに、黒蘭が蒼助の言葉を強く肯定する。むしろ、断固たるものとして誇張しているようでもあった。

「一生懸命生きている人間にある現象だからね。なんとなく生きるだけの坊やには、縁遠いものよねぇ」

さりげに酷い言い様だった。
しかし、否定できる材料は持ち合わせていなかった。

「……嫌味かよ」

ぼやいてみるが、顔が見えないのは黒蘭も一緒であることといいことに相手にされることはなかった。

「よくあることよ。……がむしゃらに生きてきて、何らかの出来事で己の中の何かが崩壊した際に、ふと訪れる破滅への焦がれ。順風満帆な人生の中で、とんでもない挫折を踏んだ拍子にヤバいスイッチが入っちゃったりしてね。生への執着が強ければ強いほど、その陰で死への衝動も育っているの。……そう人間って反動がすごいのよ。暴走したら、それはそれは……厄介なものでね……」

あまりに感慨深く言うので、それが特定の誰かを当てはめているのだとすぐにわかった。

「それ……あいつのことを言ってんのか？」
「８５点」

「……１００点満点での評価だろうな、オイ」
「今のは、あくまでそういう”枠”があるって話よ。……無論、あの子もその枠内の人間だけど……その中でも、少し屈折してるわ」
「どういう意味だよ」
「……あの子の人生が順風満帆なんて呼べるものであったら、もっと楽に物事が進んだのでしょうけどね」

蒼助は、それ追求しなかった。
その全貌を語らせずとも、察することが出来た。

千夜が積み重ねてきた挫折。
それは、あの墓場の亡霊との邂逅を果たした後の今ならば想像がつく。

「まぁ、今の話との共通点は……”反動”って部分ね。あの子の場合は、我慢した分から来るってやつだけれども」
「我慢？」
「挫折に直面しても、折れないのよ。ぐっと堪えて……前へ進むの。痛みも傷も、癒やす間もなく。今までずっとそれを繰り返してきたの。……何度も何度もね。だから、一層たちが悪いのよ。堪え続けた痛みに耐えきれなくなって、折れてしまった時は。止めようとした貴方には、わかるわよね。――――この意味」

黒蘭に促され、蒼助は夕刻の出来事を思い返した。
苦味が心中に広がり、込み上げる。
それを押し戻すように飲み下しながら、続く黒蘭の話に集中する。

「――――――光が強ければ、闇も濃くなる。人の心もそう……
片方だけでは成り立たない。聖人君子なんて、人の理想と幻想の中でしか存在しえない泡沫（うたかた）なのよ」

一見電波じみている発言は、実のところかなり的を射ている。
そして、蒼助の傷の患部を抉るものだった。

知っていた。
わかっていた。
わかっているつもりだった。
眩しいばかりに光る千夜が時折見せる陰りから、それを察しているつもりでいた。

けれども、千夜の抱える闇は、予想など遙かに上回るほどにずっと深かった。

あの夕暮れの教室で、蒼助はそれを知った。
目の当たりにして、怯んでしまった。

恐れてしまった。

そして、千夜の手を――――――。

「……と、いっても……あの子の厄介さはそこんところ”だけ”じゃなくてねぇ」

新たな投下が、蒼助の後悔に浸る時間を強引に奪っていった。

［壱百伍拾六］　死の衝動（後書き）

久々過ぎる主人公。
ただでさえ、正規ではなく黒蘭により引き立てられたイレギュラー的主人公だというのに（なら、正規の主人公は誰か？　多分みんな知ってます。
そんな彼は、一章を終えててめぇの過去メインの番外編終えたら出番激減。ヤバす。

黒蘭が言っているのは、自殺衝動のこと。サブタイの死の衝動を指します。
最後に言っているとおり、千夜さんを止めるには一筋縄ではいかないのです。

［壱百伍拾七］　壊れるペルソナ（前書き）

忘れかけていた
彼女という存在を
それこそが別の存在だと

［壱百伍拾七］　壊れるペルソナ

信じられない、と久留美は現状において怒りを覚えた。
否、明確にその対象を絞れば、それは目の前の人間に限定する。
先程までと打って違うにもほどがある１８０度逆転した態度を見せる女に。

「――――――自分でも何でそうなっちゃうかなぁって感じだよ、今の今までの行動を振り返ると。まったく、暴走機関車おそるべしって感じだよなっ」

おそるべしじゃねぇ、と久留美は叫びかけたが無理矢理飲み込んだ。
しかし、アハハ、と暢気に笑う女への苛立ちは隠しきれず、口端と目尻が引き攣るのを感じる。
しばらく久留美は、やり場のない怒りを何処に向かわせればいいのかと扱いに四苦八苦していたが、それも呆れという脱力感に変換された。全くもって無駄でしかないからだ。悪気やその気のない相手に怒っても、相手に求める反省は得られないのだ。

「……つまり……正気だったら、あんたの知り合いとか仲間とかそういうのに手ぇ貸してもらって、もっとうまくことを運べたかもしれないのよね？」

千夜曰く【暴走状態】でなかったら、単独で勝機の薄い相手に挑もうなどという無謀な行動に出ることはなかった。

どうすれば勝利を確実にもぎ取れるかを思考して、他の人間を頼ることも出来た。

もっと他に、それも上等な手段はあったのではないか。

少なくとも自分に刺されず、かつ自分を殺さずに神崎を倒す方法が、単独行動という制限さえなければいくらでもあったのではないか。

久留美は、それらの意味を込めた言葉を発した後、それが自分の都合のいい言い分であり、なおかつ自分が言える筋ではないことに気付いた。

自分が千夜を責めるのはお門違いだ。そして、千夜が自分に責められるのも同じ。

一つの嫌悪が、次の事柄に嫌悪を芽生えさせる。

悪循環ともいえる連鎖反応が、久留美の中で始まろうとした時、

「――――それは……ない、かな」

久留美の外側で、それを断つ力を持った呟きが落とされた。

否定。

千夜は確かにそういったのだ、と久留美の中で落ちかけていたところ、急激に立ち上げられた思考回路がそう判断を下した。

「もう少し慎重に手段を選べたくらいの違いだ。正気でも、俺は一人で来ることを選んでいたよ……きっと」

信じられない言葉を、千夜は更に投下した。

それは久留美の内部に驚愕という爆発を起こす。

「……何でよ」

「タイミングは最悪でな。あいつには、俺以外の奴はまともに太刀打ちできないんだ。この都市（まち）には、”俺しかいない”。……下手に数を集めても死人が増えるだけだ」

「でも、あんただってそんな状態じゃない。……私の、せいで」

控えめに、されど除去することは出来ない確か事実を後付けした。

「気にするなよ。傷を負ったのが、俺でよかった。もう血は止まったから、あとは傷がふさがるまでじっとしていれば大丈夫だから」

安堵の言葉。

しかし、それは何処か異常を孕んでいるように聞こえた。

否、気のせいではない。

何気ない口調で、彼女は常識とは程遠い言葉を口にした。

確信が徐々に心を侵食し、硬くしていく。

「こんな奴のそばにいるのは気味が悪いだろうが、もう少し我慢してくれ」

そんな久留美の内心の変化を見透かすような言葉に、久留美は咄嗟に我に返り、

「違うわよ、馬鹿……そんなこと、どうだっていいわよ」

「どうだってよくはないと思うが。……やっぱり、変わってるなお前」

「あんたにだけは言われたくないってば」

異常な状況下において、他愛無い会話を交わす自分たちは、異常なのか正常なのか。

その判断すら危うくなってきたところで、久留美の中では先程感じた畏怖にも似た違和感はどうでもよくなっていた。

既に形すら保てなくなっているものを切り捨て、久留美は一拍の呼吸を置いた。

そして、問う。

「……傷がふさがったら、その後どうするつもりなの？」

「とりあえず、さっきやろうとした通りにやるさ。ここで待機して……神崎を仕留める」

予想したとおりの返答だった。

「それで、私は……」

「いくらお守りがお前を守っていても、限度がある。ここは生身の人間が長くいられる場所じゃない。だから、今度こそ……」

わかっている。

その後に、何が続くのか。

だから、

「――――それで？」

久留美は、千夜の言葉を遮った。

己の言葉を踏み敷いて現れた問いに、千夜は目を丸くする。

最低限の口数で成形された問いは、そこに内包された中身を不明瞭なものとしていた。
見えない真意に千夜が戸惑ったのは当然だった。
それを承知の上で、久留美は言葉を重ねた。

「その後は……？」

問いかけは沈黙に呑まれた。
打ち返ってこない言葉。不安を胸に、それでも久留美は待った。
すると、

「その後って何だ？」

カッと目が熱くなった。
わかってるくせに、と口から飛び出しかけた言葉を噛み潰して、

「……神崎を片づけた後のことよ！」

しらばっくれる千夜に声を荒げて突きつけた。
しかし、その直後の沈黙に心臓がスッと冷えた。

「何で、黙るのよ……」

沈黙は続いた。
こちらの不安を知っていてわざと煽っているのではないかと思うほどに、ただ千夜は黙っていた。熱を感じない冷静さを一定させた眼差しを、何も言わずに向けてくるのみだ。

怖くなった。
次に千夜が口を開いた瞬間に、そこから何が飛び出てくるのか。

想像するのも億劫になるほどに、恐ろしくなった。

「……帰ろうよ。一緒に」

たまらなくなって、思わず縋る声が出た。

そんな自分を恥じる余裕も無い。

縋る自分は、紛れない本心であることを久留美はあっさりと認めた。

もう、なんだっていい。

「あんたじゃなくても、いいんでしょ？　こんなこと、他にも任せられる人がいるんでしょ？　……こんな……ボロボロになってまであんたが戦わなくたって、本当は……大丈夫なんでしょ？」

問いかけた全ての問いに求めた答えは決まっていた。

否定して欲しい。

小馬鹿にしてもいい。

当たり前のことを聞くなよ、となんでもないように返してほしい。

「大丈夫だって……言ってよ」

一縷の希望を込めて、最後の問いを放つ。

「……仮に、俺がお前とここを出て戻れば……神崎も追ってくる」

これすらも沈黙に埋もれるのか、と思った矢先の言葉だった。

しかし、それは希望には繋がっていなかった。

「そうなれば、東京は終わる」

現実味のない、突飛な話である。
そう笑うことが出来ればよかった。

だが、感情は凍りついた。

「事態は、結構来るところまで来ている。あれだけ肥えていたんじゃ、どの道……孵化するだろうな。倒すなら一刻を争う。……もしここで孵化しなくても、俺たちを追ってあいつが外で孵化したらアウト。倒す前にここで孵化してもアウト。……だが、お前が出ることはできる。あいつの狙いは、俺だ。俺がここに残りさえすれば、お前を追うことはないはずだ」

千夜は、自分がなにを言っているのかわかっているのだろうか。

考えて、愚問であると久留美は己の思考に対して下す。
わかっているのだ。
自分などよりも、誰よりも。
わかっていて、言っている。

わかっていて――――――他人事のように言っているのだ。

「――――――久留美、さよならをしようか」

◆◆◆◆◆◆

厄介なところは一つだけではない、という黒蘭の発言に蒼助は訝しんだ。

「正気を失っているのなら、正気を取り戻してやればいい。結構イチかバチかになるけどね。……まぁ、ポンコツテレビを叩いて直す程度の単純さに、ちょっとコツがいるみたいなことをしてやりゃいいのよ」

なにやら紛らわしい上まわりくどい言い回しだが、つまり――――――

「……荒療治か」

「いっえーす。――――――正気を失っているなら、ね」

後付けが、何かよくない違和感を抱かせる。

「……正気で凶行をやってのける人間っていうのは、それぐらいじゃすまないから……厄介極まるのよね」

案の定、黒蘭は不吉な呟きが後に続いた。

◆◆◆◆◆◆

掌がくぐもった声を読み取る。
己が塞いだ口は、おそらくこう発したのだ。

離せよ、と。

「……離したら、あんた勝手に言ってさっさと終わらせる気でしょうが。そうはさせないんだからね」

さよならをしよう、と言った次の瞬間、咄嗟に己の手が動いたのだ。
考えるよりも先に身体が動くという、反射的な行動だった。

最初はされるがままであった千夜も、手の領域が鼻にまで及んでいるため呼吸が出来ず、いよいよ苦しくなってきたところで抵抗を表し出した。
最終的には、千夜が無理矢理ひっぺ剥がして、

「ぷはっ……そんなことしないよ」
「……」
「睨むなって。こういうのは、相互交換しなきゃ意味がないだろ。……だから、ちゃんとお前から受け取ってから行くよ」

久留美は、顔を渋く歪めた。

「……私、言わないわよ」

低く唸った後、それだけでは足らなくて、

「あ、あんた……さっきあんなこと言ってたけど、まだ正気戻ってないんじゃないの？　ほんと、この後に及んでふざけるのもいい加減に……」

「――――――あれ、な。……ごめん、ちょっと訂正する」

「……は？」

途中で入ってきた横槍に久留美は目を瞬かせた。

「暴走していたと思うよ。自制がきかないくらいに。……でも、それだけだ」

それだけ聞いただけでは、意味を汲みかねる言葉だった。

理解に時間はかかったが、

「……それって、最初から正気だったってこと？」

「多分な。そうだって自覚したのは、こうして冷静になってからだったけど」

くくっと、千夜は何がおかしいのか小さく笑い声を立てて、

「鈍い鈍い、と散々言われてきたけど……本当だったんだな」

思わず唖然としてしまうほどに、千夜の口ぶりは他人事を語るそ

れだった。
そんな風に聞こえている自分の方がおかしいのではないか、と久留美が思うほどに。

一瞬の間に、久留美は千夜の言葉を反復させる。何度も何度も。
繰り返した行為は、納得いう形で答えを生んだ。

そうなのだ、と。
彼女は、本当に己自身のことを――――――

「久留美。ひょっとしたらお前は……あの時の言葉に、責任とか罪悪感を感じているのか？」

略された内容や、隠された部分が何であるかはすぐに察せた。
他ならぬ久留美自身が言った言葉だ。そして、久留美自身も苛み続ける言葉だ。

お前が死ねばよかった、と。
つい言ってしまったでは片付けよう無い失態だ。

「……あの時、お前がどんな状態だったかは察しているつもりだ。本気じゃなかったというのも。何処かに怒りをぶつけずにはいられなかったというのも」

顔に出ていたのか、千夜は労わるような言葉をかけてくる。

しかし、後についてきた言葉が、それをぶち壊しにした。

「だがな……お前に言われたからこんなことをしているわけじゃない」

「……ぇ？」

話が妙な方向に傾いた。
そんな揺らぎを久留美は感じ、嫌な予感が思考を掠める。

「じゃぁ、どうして……」

口にしてからハッとする。
この促しが齎すだろう言葉が、どんなものであるか。
悪寒のようなものが、遅れを取りながらも現れた。

もう遅い、と嗤うように。

そう。
――――――もう、遅かった。

「……久留美。俺は、な……ずっと、生きたいと思って生きてきた」

告白のようだ、と感じた。
しかし、次の出る言葉でそれが違うのだと知る。

「――――――ただ、それと同じくらい何処かで死にたいと思って

……生きていたよ」

互いの距離は遠く無いのだとわかって、初めてわかることがあることに久留美は気付いた。

それでも尚、結局のところ自分は何も理解していなかったのだと。

彼女のことを、何一つ正しく見えていなかった、と。

［壱百伍拾七］　壊れるペルソナ（後書き）

また一週間開いてしまいました（ガクッ
そんなこんなでまたテスト期間やら課題やらがドッと……。
お、俺は負けるわけには……。

サブタイのペルソナとは、「仮面」です。どこぞの人気ゲームのスタンドめいたアレのことではありません（言わずともわかるって

突き放すために千夜が仮面を外し、まだ虚像を千夜と信じる久留美がようやく千夜の中に踏み込む。互いが核心に触れ合うために、隔てていた仮面が壊れる……という意味合いです。
蒼助ですら怯んでしまった闇に対して、今度は久留美が向き合うんですが……久留美如きがなんとかできるのかって思った人、手ぇ上げてみてください（遠慮せずにどうぞ

実は全然そんな風に見えていないでしょうが、久留美は既に昔の酷評受けまくりだったダメな久留美ではなく、おニューな久留美になっているのですよ。
まぁ、自覚と気合が足らないので全然表に出てきていないからわからないのも当然ですが。……しかし、前世と合一して代価を払ったことは小さくはないことのはず。作者が土壇場で変な路線変換起こさない限り大丈夫……だと思う（オイ

さて、テスト期間にガッツリハマッて身動き取れなくなる前に、ちゃっちゃと書き進めなくてはっ。

【壱百伍拾八】　壊れぬ心（前書き）

憎しみも
後悔も
何もかも投げ捨てて手に取った最後は、

忘れたくないという切なる願望

［壱百伍拾八］　壊れぬ心

生きたい。
けれど、死にたい。

傍目完全なる矛盾を引き起こしている千夜の相反する願望は、久留美にはまったくといっていいほど内部（なか）で溶け込みはしない。

全くもって理解し難い。
死にたいけれど、死ぬのが怖い。あるいは逆の場合であっても、それらはまだ理解できそうな範疇にある。

ようは、行為を貫徹する度胸が無いということなのだ。
義務や使命のような感覚として捉えていて、まだそれに心が付いていけていない部分があるということ。自殺未遂を何度も起こしている人間の心境などが、そういうものだろう。

しかし、千夜のそれは何処か一線を逸している。
何かが、違う。

だが、その何かとは何なのか。

「……何処かで楽になりたかった。前を向いて歩き続ける中で、何処で楽になれるのだろう、と考えていた」

ほとと、と雫のように落ちる呟きは、あらぬ方向を向いてのものだった。
久留美に対する告白ではなく、どちらかといえば独白のように思えた。

「正直……こんな死に方でも不満はないんだ。俺は、それだけの報いを受けることはしてきた。その覚悟も出来ていたし、今も変わらない」

でも、とそれまでとは反する事実を告げるための前置きを口にしたにも拘わらず、声には変わらず抑揚のないまま続き、

「……生きていればそれを躊躇してしまうようなことにも遭うし、死ぬわけにはいかなくなる理由も出来る。それが頑張れる理由にもなるんだが……同時に、ひどく疲れが増すことにもなる」

疲れる。

溜息のように千夜の口から零れた言葉が、酷く現実味のないものに聞こえ、感じた。

止まったら死んでしまうのではないかとさえ思っていた相手から、そんな言葉が出るなど夢にも見ていなかった。

夢。

否、あの夢で現れた彼女は――――――本当にそうだっただろうか。

「冗談とかじゃなくて、俺がいないとダメだっていう人間がいて。そいつは俺が死ぬくらいなら自分は喜んで死ねるとか言う。そいつらを叱咤したり宥めてると、今度は空気を読めない読まないの厄介ごとがガラ空きの背中を狙って突っ込んでくる。手段や品を変えてと尽きないそれを何度来ようとも撃退してたら、今度は原因不明の体調不良だ。……運命とやらにも嫌われてるとなると、いい加減ゲンナリしてくるってもんだろう」

まるで蟻地獄のようだ、と溜息をつく千夜の横で久留美は感想を持った。

もがけばもがくこと、足元の砂は崩れ落ちていく。
蟻はそれに気付くことなく、捕食者の元へと引きずり込まれていく。

そんな憐れで滑稽なものと、この人が同じだなんて信じられなかった。

「ここからが最悪だ。……俺の調子が悪いと知ると、死にたがりの馬鹿どもがこぞって前へ出てくる。それこそ死ぬが本望といわんばかりに、な。……たまったもんじゃないよ、久留美。俺が……何が一番嫌で怖くて足掻いているか、連中わかっていてやるんだ」

くっ、と鬱屈とした笑みが吹き出る。

屈託なく笑みと歪み無い笑みを浮かべる人だと思っていた。
けれども、こんな風に笑ったりするのか。

衝撃が、未知の事実が、久留美の中で少しずつ積みあがっていく。

これは、誰だ。
目の前で鬱屈とした空気を放つこの人は、一体誰なのだろう。

こんなの知らない。
知らない。

「……それでも、手を離せなかった。掴んでいても離してもどの道死ぬのならって思ったことが無いわけじゃない。だが……それでも諦めてしまうことで終わるのが……怖かったんだ」

千夜は、何もない手の平を見つめて言った。

何もない。それが意味していることは、今しがた口にした言葉とは間逆のことだった。

手を離したのか。

何故。どうして。

疑念を込めた視線を送っていると、気付いたのかそうでないのか、千夜が発した言葉は、

「……だから、お前の言葉は救いだった」

「え」

独白から不意を打つように語りかけへ転じた。

その内容に、久留美は一瞬自分の耳を疑った。

「足掻くことに疲れながらも、それでも止めることのできない俺にとって……あの言葉はトドメだった。拒否しようのない解放感を与えてくれたよ。お前は悪くないという優しい嘘よりも、お前のせいという容赦ない真実をつきつけてくれたお前には、感謝すらしている。――――――ありがとう」

皮肉のつもりなのか。

それとも、遠まわしの怨み言なのか。

しかし、千夜から向けられた視線とかち合い、そのいずれでもないことを知る。

本気で、本当なのだ、と。

「――――――なにバカなこと言ってるのよ！」

耐え切れず、思わず声を荒げた。

ワッと吼えるように言ったのにも拘わらず、千夜は微動だにしなかったことが腹立たしくて、勢いづいたまま、

「そんなことで感謝されたってうれしくないわよ！　そんな感謝の言葉聞きたくないわよ！　……何で……何で否定しないのよ！」

「そんなことする必要ないだろう」

「しなさいよ、馬鹿っ！！　これまで頑張って来れたんでしょ。自分でなによりもその事実を実感していても……それでも受け止めて耐えてきたんでしょ！？　私なんかの言葉で……私なんかの感情に屈しないでよ。屈しちゃダメよ！　……あの言葉だったら、取り下げるわ！　あんなのその場限りの嘘っぱちだから……本当に悪いのはあんたじゃないのっ……悪いのは……」

他にもないか、と言葉を募ろうと思考する。

しかし、

「――――――久留美」

割り入る声が、それを中断させる。

あ、と思った時は既に遅かった。

意識が必然と千夜に向かい、千夜の”思惑どおり”になる。

「久留美。言っただろう」

もう一度名を呼び、固定するような口ぶりを置く。

「俺は、もう疲れたんだ……」

あらゆる全てを寄せ付けず、受けない言葉だった。

足場が崩れる。

そんな失墜の感覚が、久留美を一気に呑み込んだ。

じわっと目が熱くなり、ポロリと落ちる。

俯き、久留美は葉を噛み締めた。何も言えない、何もない口の中を締め上げることでしかこの悔しさを堪えることが出来ないのだ。

沈められ黙する久留美を見て、千夜は何を思ったのか。

それは、直視を解いた久留美にはわからなかった。

しかし、それを知らせる言葉が降る。

「泣くなって。……こんな人殺しには無用だ」

さりげなく、されどそれが逆に強調となって浮き出たキーワードに、久留美はゆるゆると顔を上げた。

ぱっちりと目を見開いて、名残の水滴による潤みを残したまま、千夜を見た。

「……二桁越えたところで、数えるのは止めた。ある時は呼吸するように殺した。ある程度の信頼を得てから殺したこともある。どうしようもないだろう？　でも、生きていたかったから、切り捨てた。たくさん。たくさん。俺が死んでも、それは泣いてもらう価値のないちっぽけな喪失だ」

「ただの人殺しが死ぬだけだから、気に止むことはないって……というの？」

「お前の両親も殺した。なおのこと止める理由は無いじゃないか」

双眸をギュッと歪め、久留美はすぅっと息を吸う。

何か言葉を吐きかける動作であると思ったのか、千夜は気を緩めたように見えた。

罵倒か。

放棄か。

いずれかを自分が吐き散らすと思っているのだろう。

だが――――――

「……ってた、わよ」

「なに？」

上ずりすぎて掠れてしまった言葉を、聞き逃して済まさず千夜が復唱を求めた。

そして、久留美は今度こそ、と。

「――――――最初っから知ってたわよ、馬鹿ぁっ！！」

わかっているようで全然わかっていない愚か者に、目一杯声を張った。

◆◆◆◆◆◆

「……は？」

幾分かの間を開けて、半開きの口から出た声は表情と共に間抜けそのものだった。

それこそ、今までの重くシリアスな空気を台無しにしてしまうほどの。

その反応を見て、久留美は盛大に溜息をついてやりたくなった。

本気なのか。本気の本気で、わかっていなかったのか。

胸の奥底からジワジワと怒りがこみ上げてくる。

自分は千夜のことを結局何一つわかっていなかった。

だが、それは千夜も同じことだった。
みくびられたものだ。

「だから……知ってたんだってば。あんたが、世間様が言うところの……そういう物騒なやつだってことは。……なんとなく、わかってたわよ」
「最初、から……って……本当なのか？」
「あんたこそ、それマジで言ってんの？　……変なところで鈍感よね」

呆けた表情に演技の色は見れない。
素で驚いているようだ。

「……大体ねぇ、外面のあんただけを知っているのならともかく私はあんたの本性しっかり見てるのよ？　初日に大の男を数人即半殺しにして、背中越しにヤバそうな殺気迸らせていたら誰だってあんたがカタギだなんて考えは捨てるわよ。まぁ……その時はひょっとしたらってくらいの考えだったけど」

千夜は信じられないという面持ちで、

「……気づいていたなら、どうして俺に関わったんだ」

今更そんなこと聞かないでよ、と久留美は出そうになった言葉を噛んで飲み込む。
しばし、ふと考えた。
今のこのよくわからない空気は、流れを変える最後のチャンスなのかもしれない。

こくり、と千夜に気付かれないように小さく息を呑んだ。

「……あの時は、好奇心だったわ。言ったでしょ、そういう非日常的な物が、私は欲しかったの。あんたの言うとおりよ。私は……私の欲求を満たすためにあんたに近づいたわ」

一度、そこで止める。

その先を言おうと思うが、顔が急激に熱を持ったのだ。

羞恥。

恥も外聞もなしに内側を曝け出す行為には、あの時にはなかったそれが伴う。

けれど、これしかない。

もう自分にはこれしかないのだ。

久留美は、腹を括った。

「でもね、私が……あんたが人殺しだって実際に聞かされても、あんたが想像していたみたいな反応や態度を返さないのは……あんたを、知っているから」

向かい合った視線の先で、千夜のそれが揺らぐ。

よし、と己の行動に芽が出る可能性を見出した久留美は、

「あんたは私を助けてくれた。命も救ってくれた。あんたのしてきたことは、確かに蔑まれる行為だわ。だけど、あんたは蔑まれる存在じゃない」

「知ったようなことを言うな」

「そうね。……あんたが、どんな目にあってなにを思ってきたかなんて私は知らない。けれど、そういう手段をとらざるえなかったこ

と……そうでもしなきゃここにいなかったってことくらいなら……
……想像はつくわ」

けどね、と久留美は語調を強くした。

「疲れたなんて……甘ったれたこと言ってんじゃないわよ。自分でそうするって決めたんでしょ？　そうやってでも生きていくんだって、選んだんでしょ？　後戻り出来ない道を往くんなら、ずっと歩きなさいよ。ゴールなんて決めないで、ずっとずっと！」

続けざまに叫ぶ。

「ひどいことを言ってるのは、わかってるわ。けど、私はあんたに生きていてほしいの。人殺しでもなんでもいいから、これからもそうしていかなきゃならなくても……私はあんたにここに居続けてほしいのよ！　誰かの許しが欲しいなら、私が許すから！　誰かがあんたを責めるならどんな理由も恨みも私が否定するから……だからっ」

ぶわっと無意識のうちにまた涙腺から雫が溢れ出す。
ああ、さっきから泣いてばかりだ。
ダメだ。止まらない。
もう自分は壊れてしまったのか。

でも、それでいいかもしれない。
かまいやしない。
肝心なことを言いたくても邪魔をする妙な意地は存在しない。
そんなものなくていい。

今ただ、何処が壊れてしまおうとも――――――

「……やっぱり、正気に戻るんじゃなかったな」
「えっ……」
俯いた顔から、渇いた笑いと共に呟きが落ちる。
久留美は冷水をかけられたようにブルっと背筋を振るわせた。
俯くそれは、スッと久留美へと向けられる。
「あのまま暴走していれば、こんなにも言ってもらえていても……
……それでも、聞く耳持たずにお前の前を去っただろうから」
穏やかな言葉とは裏腹に、その表情は揺ぎ無い意志を湛えていた。
久留美は息を呑んで、呼吸を止めた。
涙もその瞬間だけは止まった。
◆◆◆◆◆◆
突き刺さった部分から染みていく絶望のゆるやかな速度と共に、

久留美は理解していく。
言葉の類云々の問題ではなかったのだ。
千夜の意志がブレなかった理由は、そんな問題にあるのではない。

ただ、届いていないのだ。
どんな言葉も、そこに込めた想いも。

慰めも労わりも叱咤も何もかも。

千夜には、届かない。

……どうしよう。

本当に壊れてしまいそうだ。
けれど、そんな場合ではない。
ここで久留美まで諦めてしまっては、手のつけようがなくなる。

千夜にとって自分以上の存在は他にいるだろう。
だが、ここには自分しかいない。
自分が彼女を止めるしかないのだ。

ここで自分が止めなければ、後が無い。

しかし、考えに集中するには余裕が足らないし、時間にもそれほど猶予がない。
千夜に特攻の意志が途絶えていないというのなら、あの状態に再び戻るのも時間の問題かもしれない。

……ちゃんと本音で向き合っているのに……これじゃぁ、意味がないっ！

何を語ろうと打ち明けようと、そんなものは聞き入れてもらえなければ何の意味もなさないのだ。

耳を塞いで拒む相手にどうやって話を聞かせればいいというのか。

……だったら。

久留美は、ぐっと腹に力を込めた。

震えそうな身体を押さえ込むように息む。

最後の賭けだ。

文字通り、”命がけ”の――――――。

◆◆◆◆◆◆

両手を付いて、うなだれるように顔を伏していた久留美は、不意

を打つタイミングを図ってそのスタート切った。

「……わかった」

緊張を声に滲ませてはいけない。

出来るだけ自然を装い、力のないそれを演出する。

相手は正気ではないとはいえ馬鹿ではない。

一瞬の気の乱れがこちらの意図を悟らせる。

あくまで危うさを醸し出さなければならない。

……ダメね。

次の手を踏むのに迷い躊躇して動きを鈍らせる己の身体を実感し、

久留美は考えを変えた。

演技ではダメだ。

”その気”でいかなければ太刀打ちできまい。

「――――――」

久留美は、少しだけ思い浸る。

己の中で泉のように溜まった絶望の中で。

すると――――――身体は嘘のように迷いを忘れた。

「……久留美？」

「――――――そんなに死にたいなら、好きにしなさいよ」

声は自然と力なく出た。
そして、その後に次いだ起立の振る舞いも。

ふらり、と何処か不審な揺らめきを見せながら立ち上がる久留美に対して、千夜が訝しげに視線を送っているのをチラリと捉えた。
うまく絡めとれたようだが、ここからが本番だ。

「あんたの命だもの……あんたの好きなように使って終わらせればいいわ」

けどね、と小さく継続の予兆を口にし、

「……私も私の好きにするからね」

そう言い切った直後に、一気に動いた。
千夜が目を見開くが、反応は若干遅れた。

久留美はそれを勝機とし、持ちうる瞬発力を全てその一瞬に注ぐ気で駆けた。

目指したのは、手を伸ばすのでは少し遠い程度の距離間にある――――ナイフだ。

「久留美っ！？」

叫びの瞬間と共に、久留美はそれを両手で掬い上げた。
それを両手でしっかり握る。
そして、刃を向けた。

己の首筋に。

決して広くない空間で、二人の緊迫感に満ちた濃密な時間が始まった瞬間だった。

「……何を、しているんだ」

「……」

久留美は答えず、ただ睨むように視線で迎え撃つ。

互いに不動が十数拍ほど続く。

しかし、次の一拍で千夜が立ち上がる気配を見せた。

「来ないで」

久留美はすかさず制止を飛ばすが、それに然程効力がないことはわかっえいた。

「……来たら、舌噛む」

「ナイフじゃないのかよ……」

「叩き落とされた後の保険よ。あんたにナイフとられても、それくらいの手段はまだ残ってるって言いたいわけ」

にやり、と口端だけの笑みを浮かべると、千夜の表情が険しくなる。

「……やめろ」

「いやよ」

千夜の言葉を叩き落し、久留美はその後に己の言葉を続けた。

「……帰ったって、私には何にも残っていない。親もいないし、あんたが死んだら友達だって居なくなる。……せいぜいマスコミのネタにされるか、一生悲劇のヒロインのレッテルがつきまとうかよね……」

「……っ」

「どんなに夜が明けて、朝が来ても……全部なかったことにはならないのなら……いっそ、ここで終わりたいわ」

言いながら、久留美は溜息をつきたくなった。

悲痛に歪む自身の表情に、千夜は気付いているだろうか。

それを、どうして自分のために浮かべられないのか。

その矛先を、そんな簡単に他人に向けられるのか。

「なんて顔してんのよ、バカ」

「……どうして」

どうして――――――。

それを、聞くのか。

ありのままぶつけてやりたい衝動に駆られるが、今は堪えなければならない。

久留美は、喉元から這い上がってきたそれを半ば強引に飲み下し、全く異なる返答を舌の上に乗せた。

「……理由は、あんたと同じよ」

……さぁ、こっちを見ろ。

……私を見ろ。

久留美は、己の意図すらこの瞬間には放り捨てた。
今この時に必要なのは、嘘を真実に化かすこと。

成功するか否かは、賭けだ。
これ以上になく危険な賭けにぶちこむ代価は、己のこの命一つ。
久留美には、それしかない。

言葉が届かないのなら、嫌でも聞かせてやるしかない。
そのためには、動揺させ、自我を揺さぶる必要がある。
この命が、その琴線に触れることが出来るほどの価値を千夜に対して持ちえているのか。

それが、賭けだった。

「――――――疲れた」

勝負の瞬間（とき）だった。
久留美は、添えていた刃に力を込めた。

［壱百伍拾八］　壊れぬ心（後書き）

またもや一ヶ月も停滞してしまいましたが、なんとか更新です。
サブタイは前回のとで一対となるような表現を目指しました。
千夜の仮面に対し、久留美の心です。仮面の下の千夜の闇に心折られた人間が三人ほどいましたが、久留美はそれまでに食らったダメージのおかげか屈服せずに済んだのでまだイケます。さりげに精神面のポテンシャルが上がってるんですね実は。

次回で隔離世サイドは一旦場面切り替えで、現世のメンバーの方へ。
長かったなぁ……。

【壱百伍拾九】　ありのままのエゴ（前書き）

願っていることは、非常に自分勝手極まりない事で

【壱百伍拾九】　ありのままのエゴ

押し付けた刃が、肌の弾力に食い込む。
柔い抵抗を突き破ろうと更に力を入れれば、薄皮を破る。

そして、そのごく浅い切り口に沿い久留美は刃を滑らそうとした。

刹那。

「――――――くぅるみいいいいいいいいいいいいいいいっっ！！！！！」

絶叫か。
咆哮か。

爆発するようなその発声は、久留美の集中をブレさせた。
魂を揺さぶるような感情の叫び。
言葉どおりに、それは久留美の意識を揺さぶりたてた。

ビリビリ、と肌に感じるほどのそれに、久留美は一瞬だけ集中を途切らせてしまった。

その僅かな空白が隙を生む。

「――――っ、ひ」

千夜が腕を振るった気がした。
錯覚かと疑わしい動作。しかし、何かが久留美に飛来する。
それが腕を掠めた瞬間、チクリと痛みが走る。

精神状態は、恐慌（パニック）へと一気に傾きかける。
持ちこたえようとしたが、既に手遅れだった。

「ぁくっ、きゃっ！！」

千夜が飛び込んできた勢いに、身体はそのまま圧されて転倒した。
さすがというべきか、すかさずナイフを持つ腕は首筋から引き離れて、一番に地面に叩きつけられた。
後に続いて打ち付けられた背中の痛みに目尻が潤んだが、そんなことにかまけている場合ではなかった。

呻きを一度噛んだ後に開いた口に、

「――――――う゛っ！？」

指が二本。
喉奥を突く勢いで侵入してきた。

しかし、その意図は喉奥への侵略ではなく、咥内の”命綱”を押さえるべく動いた。

先手を取られたのだ、と察した久留美は、

「っぐ、ぅ……ふがっ」
「――――――――、っ！」

噛み付いてやった。
グイッと立てた歯は、皮を突き破って肉に食い込むまでそう時間はかからなかった。

血の味がする。
口の中が鉄臭いが、そんなことはどうでもいい。
指を噛み千切る覚悟で久留美は抵抗し続けた。
押さえつけられたナイフを持つ手も、諦めはしなかった。

けれども、千夜も一歩も引きはしない。
押さえつける力は恐ろしく強く、久留美の抗いはどんなに粘ろうとも一向に押し返すことはできない。
なのに、

「……くれ」
「んっ、ぐぅ、う」
「やめて、くれ……頼むから」

懇願する声色は、掻き消えそうなまでに弱弱しい。
それでも搾り出すように吐き出されるそれは、久留美の抵抗の意志を削ぐには十分の威力を持っていた。

何かが砕け、力が自然と抜けた。
押さえつける力にあれほどもがき足掻いていた腕は、自分でも驚くほどにあっさり大人しくなった。

けれど、感情だけは治まりきらない。

寧ろ、より一層荒れている。

……ああ、本当に。

……なんだってこいつは、こんなにもっ。

たまらなくなって、久留美は噛み締めていた指を開放するようにそこの圧力を取り除いた。それでも退かない指を振り払うように顔を逸らして、遅れてやってきたえづきに咳き込む。

「げっ……えふっ……、っ……ぇっ……」

目尻に湿りを感じるのは、生理的な衝動だけが理由ではない。今だ己の上に跨ったままの存在を感じ、久留美はまだ調子が整っていないのも構わず声をあげた。

「……あん、た……何で」

続けるには酸素が足らず、区切って一度大きく吸い込み、

「――――そこまでして死ぬなっていうのよっ！　どうして、他人のことにそこまで必死になれるのよ。……どうしてっ……その半分でも自分のこと大事にできないのよ！！」

一気に捲くし立てたため、また酸素が足らなくなった。

言い切った後、また咳き込む羽目になった。

その間を縫うように、

「……それの、何が悪い」

今までと、何かが異なる反応だった。

腰を捻ってうつ伏せてかけていた体勢から、久留美は両肘を立ててておそるおそる千夜の方へと向き直る。

先刻とは逆転した形勢から、千夜の顔を覗き見たいと思う。しかし、乱れた髪が表情を覆い隠しており、様子はその下から発される声色で確認するしかない。

「内側に何も持たない者が他に気にかけることが出来るモノなんて……外側にしかないじゃないか」

「なに、言ってるの……？」

「他人を気にかけてることは悪いことなのか？　俺は、俺以外を大切にするしかないというのに……どうして否定するんだ」

今までとは様子が違う。

ただし、様子がおかしいことには変わりなかった。

けれども、それは想定済みの危惧すべき事態とも違う気がした。

好転したとはとても言えないが、悪化したとも判断し難い。

一体何が起きているのか。

自分が彼女から何を引き出してしまったのか。

どう扱えばわからないこの状態を、下手に刺激することは出来ず、久留美は様子を伺うように息を潜めた。

「……なぁ、久留美。――――――自分のことを何一つ知らずわからずの人間が、己のを知るにはどうすればいいと思う？　どんな瞬間が、己を感じる時だと思う？」

ポツリ、ポツリ、と雫のように落ちてくる問いかけに、久留美は耳を疑った。
耳にした言葉を解釈した頭では、既に答えは出ている。
しかし、それが意味する事ことは――――――

「……他人と関わりと持つ時だ。俺は、他人と触れ合って……ようやく自分の姿が保てるんだ」

驚愕から立ち直れない久留美に、千夜は言葉を紡ぎ続ける。

「記憶がなくとも、名前がなくとも……過去がなくとも。自分という存在がわかるのは、自分じゃない誰かがいるからなんだ。それでも、誰かが自分を大事にしてくれるからなんだ。……自分がされて嬉しかったことを、誰かに同じことをして返すことは間違っているのか？」

そこまで聞いて、久留美はようやく再起の兆しとして口を開いた。

「……記憶喪失って……。嘘でしょ、だって……名前は」
「……」

その沈黙が、肯定であると久留美は直感した。
そして、久留美が次いで何か言おうとすると、

「……俺は、自分が死ぬのは怖くない」

牽制するように千夜が呟いた。
静かだが、決して些細なことではない内容に久留美は凍りついた。

「置いていかれることに比べれば、ちっとも怖くない」

瞬間的な冷凍が解ける途中、久留美は後に続いた言葉を聞き逃がさなかった。

「……温もりを存分に与えられて満たされた後に、一人に戻される方がずっと怖い」

既視感。

他人事として切り離せない痛み。

久留美は、それを感じた。

そう、今となっては目を背けたくても出来ない、してはならない己の身にある事実は、痛いほどに共感を覚えさせる。

ひょっとしたら、あの時に得た『痛み』は自分だけのものではなく、千夜の方が自分などよりもずっと酷い苦痛を感じていたのかもしれない。

顔が見えない状態が、あの時と重なる。

同じなのか。同じ表情を、今も浮かべているのか。

痛みを叫びに変えることもなく、一人胸の内で耐える表情を。

「……かず、」

無理な体勢から片手を伸ばそうと試みた。

しかし、その手は、顔を隠す前髪に触れようとしたところで止まる。

撫でようとした。泣くのを堪える幼い子供にするように。

そんなことしたことないけれど、目の前の彼女にはそうしてあげ

たくなった。
でないと、これ以上刺激したら壊れてしまうと思った。

実際、彼女はもうボロボロだ。
心も身体も。
いつからこうだったのだろうか。

あの夜からか。
それとも出会うよりもずっと前からなのか。
ずっと。ずっとずっと。
気付かれないように取り繕い続けていたのか。

こうでもしないと、膿んだ傷口を見せてくれなかった。
こうでもしなかったら、膿んだそこを何もせず腐らせてしまったのだろうか。

「……っ……」

あと少しで、触れる。
指先と千夜の距離はそれほどに近く、無きに等しい。

だが、それを厭い、躊躇する自分が存在していた。

……そうするのは、正しいことなの？

大切なものは大事にしなきゃダメだ、と言った人がいた。
それを聞いた時は素直にそうすることも、言われた言葉に含まれた事実を認めることもできなかった。
けれど、今は違う。
千夜が大事で、自分のかけがえの無い存在であることは、もう間

違いない。

けれど。

けれども。

……それは、ダメ。

歯を食いしばるように、優しい言葉を紡ごうとする唇を噤む。

それを咀嚼して作り変え、新たな形として口にしたのは、

「……だから、あんたは……置いていかれる前に置いていこうっていうの？」

冷えた声色のそれに、千夜の肩が震えた。

ビクッと、まるで子供が悪さをして隠していたそれを暴かれた時のように。

「自分がやられて辛くて恨めしくて……今度は、自分が同じ事をしてやろうって？」

「……違う」

本当にそうだと言いたいなら間を作るな、と毒づきつつ、

「何が違うっていうのよ。現に、やられたことを、他人にもやりかえしてやろうとしているじゃない」

「俺はっ……」

何かを言い募ろうとする千夜を見て、嗜虐心のような過激な波が出来始める。

最低だわ、と思いながらも、それは自身では止められないそうに

ない。

何故なら、それは久留美の心が放つ衝動で、

「違うって、なに？　――――――結局はそういうことでしょ！　あんたが死んだら、置いていかれる人間っていうのはどうやったって出るわ。あんたは……今まで散々そういうことされたから、また同じことになる前に他の奴らよりも先に手を打とうとしている……何が違うっていうのよ！」

「違う……っ！！」

引き絞るような、掠れた否定が張り上げられた。

それは怒鳴ると呼べるほど強い響きではなかったが、込められた感情は実際の声量以上に激しいものと感じた。

それに圧された久留美が退くと、千夜は変わらず俯き加減のまま、独白めいた言葉を漏らし始めた。

「だって……俺には、もうわかっているんだ」

「……なにを、よ」

「そこにいるだけで、誰かに関わっただけで……良からぬことを招く。俺が本来受けるべきだった災厄は、俺以外の誰かに降りかかるようになっている。……あいつらは、俺を助けようとしたら死んだんじゃない。……俺が、俺という存在が……そう仕向けたんだ。俺が殺したも……同然だ」

何だ、それは。この期に及んでふざけているのか。

はっきりしない理由が、久留美の怒りにガソリンとなって降り注ぐ。

というか、あいつらって誰だこの野郎。

「そんなのっ……こじつけよ！　あんたが原因でそんな結果になったとしても……あんたが、それを望んだわけじゃないんでしょ！？」

「はっ……俺の意志で左右できるのなら、まだいい方だ。……それすら、関係なく俺は俺以外の人間を殺して生き延びているんだ」

千夜は虚しげに笑い、

「……現に俺は、お前のことだって危うく殺すところだった。そもそも……俺が、おまえの前に現れさえしなければ……お前は何も失うこともなかった。そうだろう？」

その指摘に対して、否定は喉から飛び出さなかった。

それは、事実だ。

事実だけれども、

「……でも、生きているわ」

「このままじゃ、殺される」

「死なないわよ」

「――――――止めろっ！」

もうそんな言葉は聞きたくない、と千夜はごねるように言うと、両耳を手で塞いだ。

自閉に入ったと思しきその体勢に、久留美は半目を向けた。子供かお前は、と。

「……根拠じゃないけど、理由はあるんだから聞きなさいよ」

「嫌だ」

「……聞けよ」

「嫌だ」
「……別に、良いけど。でも、言うから」
嫌だ、と返る言葉を「はいそーですか」と受けながら、久留美は千夜の下から這い出た。
肘が、腰が、痛い。
顔を顰め、まとわり付いた埃や砂を慰め程度に払う。
「……その前に、ちょっといい？」
「い――――――」
了承代わりの拒絶を全て聞くこともなく、久留美は千夜の胸倉を掴んだ。
「――――――――いい加減、私を見なさいよっ！！　……いつまで過去の人間をフィルターにして私と相対する気なのよ、あんたは！」
溜め込んでいた怒りを一気にぶちまける勢いで、一気に発声した。
千夜の首がかくん、と揺れて、ずっと俯いていた顔が上がる。
黒髪の隙間から見える双眸は何処かキョトンとしている。
酷く無防備な表情に向けて、
「よく知らないけど、あんたの大事だった人たちは死んだ。そりゃ、確かに間違いないだろうけど……何で、私まで死ぬことになってるのよ！　そりゃ死にそうな目には何度もあったけど、生きてるわ

よ！　生きてるでしょ！？」

ガクガク、と揺さぶる。

乱暴な扱いを受ける中で、我へと返ったのか千夜が何かを言おうとする気配を見せた。

しかし、久留美のターンはまだ終わっていなかった。

「言っとくけどっ！　私をそいつら死人の列に並べんのは即刻止めなさいよね。……この先、絶対にありえないんだからっ」

宣言めいた台詞に、千夜の表情が強張る。

不快感を表す際のそれと思わせる顔で、低く押し殺した声を落とす。

「どうして、そんなことが言える」

はっきりとした声色と音調。そこには、吹けばゆらゆらと揺れるような不安定さはなく、確かな意志の存在を感じる。暫くぶりに聞くような錯覚さえ覚えた。

久留美は、僅かに緊張を孕んだ。

本能が感じたのだ。ここが正念場である、と。

久留美は、一呼吸を挟み、過剰な熱は追い出した。

けれど、完全に冷まない。思考を打算に逃げさせないため、最低限の熱は温存した。

ここから先の、この重要な箇所において必要なのは、理論よりも感情論なのだと判断したから。

そして、もう一度呼吸する。

肺に溜め込むように多めに吸い込んだそれで、

「そいつらと私は、違う。多分、肝心なところを決定的に」

啖呵を切った。

然程大きな声を出したわけではないが、それでもはっきりと一つ一つの音を潰さないように念入りに音量を分配することに気をつけた。

「たった今聞いた話の中の人間のことに知ったような口を聞いてるって思ってもいいわよ。でも、確かだと思うわ。私とそいつらは違う。だって、私は……」

新條久留美という人間は、

「……そんなふうに、優しくないもの」

物憂げな告白。

千夜の瞳が小さく見開き、揺れたが、久留美はあいにくなことに一瞬のそれを見逃した。

「さっきあんたを助けようとしてそいつらは死んだって言ったわよね……？　そういう状況下で、自分か他人かの二択を迫られて……あんたを選んで、自分を切り捨てたってことよね」

推測を確認するように口にしていく久留美は、千夜の顔が苦しげに歪むのを見た。

それを肯定と受け取って、言葉を更に重ねた。

「そいつらは、多分……あんたが何によりも大事だったのよ。一番だったの。絶対になくしちゃいけないものだった……そう、自分の命以上に」

見たことも会ったこともない亡き者たちを、少ない情報で思い描いた。

顔も知らない。

声も聞いて事がない。

死んでしまったのなら、どんな人たちだったのかも知る術はない。

彼らが実際に千夜にどんな感情を持っていたのかなんて、わかるはずもない。

けれど、少ない情報の中のたった一つの事実が、久留美を確信めいたものへと導く。

「……友達、だったのよね？」

「少なくとも、俺はそう思っていた」

じゃぁ、あっちはそれ以上だったかもね、と妙なところで鈍い目の前の相対者を見て内心にて零す。

「ねぇ。……そいつらは、優しかったのよ。優しくて……この先現れるかもしれない誰かに、自分の大切な物を譲れるくらい……強くて心の広い人間だったのよ」

見ず知らずの人間に随分聞いて知ったような口を聞いているのはわかっている。

けれど、結果として残った事実、そして今ある全てがそうであると肯定している気がしたのだ。

もういない彼らは、きっとそうであった、と。

「けど、私は違う」

ほぼ捏造かもしれない想像をもとに、美化も何もないけれど。
それでも、彼らと自分は似ても似つけない存在であると思う。

何故なら、

「私はそんな立派な人間じゃない。そんな風に無欲に、潔くなんてなれない」

自分よりも大切な他人が出来るとは、幸せなことなのだ。
そして、そのための死んだ彼らは、きっと幸せだったのだろう。

だが、久留美はそこに幸せを見出せなかった。

「……私、強欲なのよ。あれも欲しいし、これも欲しいって……何でもかんでも欲しくなる。たとえば、あんたと自分の命のどっちか助けてやるって選択が目の前にあっても……どっちもってそいつに殴りかかるわね。……だって、どっちかじゃ満足できないもの」

どっちか一つを選ぶ方が利口だと思うし、欲を張るのは身の破滅だと思う。
しかし、彼らは破滅を選んだ。選ぶことは利口であったのではないのか。

利口ではなかった。
何故なら、彼らは自分を選ばなかった。

自らの保身に走るべきその瞬間に、彼らが優先したのは自分ではない存在。

愚かだ。

多くの意味で、彼らは愚かだと思う。

何故、自分を選ばなかったのか。

何故、千夜だけが助かればそれでいいと満足したのか。

何故、千夜を置いていったのか。

何故、置いていかれる千夜の気持ちを考えなかったのか。

何故。何故。何故。何故。何故――――――

「そう、違うのよ。自分の命を引き換えにして、あんたの命の保障をとろうとなんて思わない。あんたを危険な目に合わせてでも、最後はどっちも手に入れることを選ぶわ。……ひどい奴でしょ。臆病者で、ずるくて……他人を傷つけても自分の望みが一番なの。私は……そんな、ちっぽけでしょうもない人間……なのよ」

口にしているうちに、気分が自虐的になっていく。

だが、本当のことだ。受け入れなければならない。逃げてはいけない。

薄汚い人間として、これから彼女に酷い行為を強いるのだから。

そう決めたのだから。

「あんたが生きていることが苦しくて、傷つくしかなくて……そんな辛い目にあったって聞いても、そんなの知ったことじゃないの。……だって、私には関係ないもの。私は、あんたのために死ぬなんて……まっぴらごめんなんだから。私は……そんなこと絶対にした

くないんだから」

他人を想う気持ちとは綺麗なのだと思う。

そして、それを感じて孕む心もまた綺麗なのだと。

彼らにはそんな綺麗な部分があった。

けれど、自分はどうだ。

灰色どころか真っ黒だ。こんなにも。こんなにも、自分のことばかり考えている。自分のことしか考えられない煤けた心なのだ。

「苦しい辛いなんて言われたって、知らないわよ……。疲れたっていわれても知らないんだから！　それでも……私は、自分の望みが大事なの。私は死にたくない。あんたを生かしたい。……あんたと、生きていたい」

相手が助かればそれでいいなんて、その薄皮を一枚剥がせばエゴに満ちた戯言だ。

どうしたって、相手へ向ける思いなんてエゴに変わりはない。ならば、いっそ抜き身のままぶつけてしまえばいい。取り繕って誤魔化しても、中身は変わりないのだから。

「……あんたが人殺しでも、記憶喪失でも……私は、あんたがいいのっ……終夜千夜がいいのよ！　私はっ……――――私の人生はっ、もうあんたがいなきゃ一つも成り立たないのよっっ！！」

叫びきった後、己が言い放った言葉の実感が遅れてやってきた。

ああ、もう完全にプロポーズの域だな、と。しかもセンスは皆無だ。

でも、構うことは無い。
それでもいいと思っている。
この人に、自分の人生をくれてやってもいい、と。

だが、口に出してはいけない。
それに傾いてはいけない。
人生を他人に放り投げてしまうなんて行為は、この人が最も望まないことだから。

それでも。
自分の人生をこの人のために使いたい。
この人の傍で生きるために使いたい。
そう思うくらいならいいだろう。だって、それは――――――自分のためなのだから。

奥で溜め込んでいたものを全て吐き出した後の気分は、様々な開放感に満たされていた。

叫び、怒鳴り続けたことと引き換えに得た呼吸の乱れに、肩を軽く上下させながら沈黙に浸る。
これでも何の反応も変化もなかったら、と久留美が抱くよりも先に、

「お前……そういう口説き文句は男に言えって言っただろ」

呆れたような口調。
けれど、

「……どうしろっていうんだよ」

零れた言葉には、明らかに困惑が混じっていた。

「俺は、もう一人じゃ立てないんだよ……」

顔が見えていなければ、泣いているのではないか、と思うほどにその声には悲痛な響きが宿っていた。

しかし、そこに光る水滴はない。

どれだけ顔が歪められていても、だ。

「もう、立っていられない。……力が、ない。あと何か一つでもなくしたら……俺は……二度と立ち上がれなくなる」

まるで死に体のような弱弱しい声だった。

それは、切実なまでに限界という事実を確証させる。

こんなになるまで誰にも手を借りず、一人で立ち続けていたのか。

馬鹿なヤツ。

本当に、馬鹿なやつだ。

久留美は大きく嘆息を吐く。

そして、両手を――――――

「だったら、私が立たせる」

千夜の両肩へ置いた。

心なしか小さく見える彼女の肩をしっかり掴み、逃がさないように。

「私が、力になるわ」
「……」
反応はない。
だが、構わず久留美は続ける。
「一人で何でもかんでもこなそうとするから、たまったもんが後にキてそうなるのよ。一人でできることなんて、たかが知れてるんだから……」
抱きしめようか、と当初は思った。
けれど、それは無意味だ。千夜はきっと自分には縋らない。
その想定は、案の定だった。
目の前の人は自分の言葉に戸惑いを見せている。
「無茶言うなよ……死ぬ気か」
無茶。死ぬ。
全くもってその通りだと思う。
しかし、
「うっさい。一人じゃ無理だなんて言ってるやつが何言ってんのよ。確かにあんたの言うとおり、私は戦力としちゃゼロどころかマイナス。仮に、あいつに特攻したところで犬死以外の何物でもないわ。……でもね」
千夜を見つめる。
言葉が信用させるまでに足らずとも、せめてこの意志だけは伝え

られるように。

「……いい？　ここに脳味噌が二つあるってことは、可能性が広がるのよ。私は諦めないわよ。あんたが相打ちする以外であいつを倒せる方法。二人で帰る方法。……絶対考え出してみせるんだから」

一見すれば、酷く前向きで希望に満ちた言葉だった。

しかし、口にする当人である久留美自身はこれに込められた真意を自覚していた。

自分が考えるのは、窮地から脱する術ではない。

むしろ、彼女を更なる地獄へと叩き落すものなのだ、と。

生きることへ疲れている千夜に安楽を許さず、次の苦しみへの一歩を歩ませると言っているのだ。もう走りたくないという相手を無理矢理立ち上がらせる。そういった自分本位な考えが基づいているのだ。自分一人で走るだけならともかく、その隣を相手が一緒に走っていなくては嫌だという、エゴイズムそのもの。

だが、もうエゴイストでも構わなかった。

優しい人間にはなれない。なりたくない。

そんな人間が彼女をここまで追い詰めてしまうのなら、自分は酷い人間でいい。

優しさをもって彼女に嘆きを運ぶくらい人間になるくらいなら、生に縛り付ける酷い人間であろう、と。

「イヤとかダメとか聞かないからね。言ったでしょ、私は自分の望みが叶うことが一番なのよ。……何をしてでも、あんたを連れて帰

るわ」

何か言おうと唇を振るわせた彼女を遮るように、久留美は力強く断言を放った。

［壱百伍拾九］　ありのままのエゴ（後書き）

久々に長い一話になりました。最近ある忙しさも手伝って少々遅れましたが、これにて一旦隔離世サイドは区切り。次は、いよいよ蒼助のターン。

久留美、さりげに記憶喪失の件をスルー。今はそんな場合じゃないというのもありますが、こういうのって気にするのは当人であって周囲にはやはり所詮他人事なのですよ。だから、蒼助といい久留美といい出会ったばかりの人間はあんまり気にしないのでしょう。消えた過去の中にかかわりのある三途や朱里はそうはいかないでしょうが。

しかし、今回ので久留美はフルボッコのフラグを自ら立てました。天海の小説はある意味男女平等。性別関係なく容赦なくいきますヨ。ガンバレ久留美。

【壱百六拾】　己が為の不屈（前書き）

全ては己へ費やすため
愛することも
憎むことも
求めることも

己を捧げることさえも

【壱百六拾】　己が為の不屈

不吉な呟きを漏らした黒蘭に、蒼助は追求を向けようとした。
しかし、どういう意味だ、と問いたてる言葉を放つよりも早く、黒蘭の移行が先手を打った。

「――――――まぁ、と・り・あ・え・ず。それはそれとして、こっちはこっちで本題に入りましょうか？」
「をい」

いくらなんでも無理矢理過ぎる切り替えだろ、それは。
今まで幾度となく強引な打ち切りを断行されて、それに甘んじてきたが、ここまで話に引きずりこんでおいてはそれは無いだろう。

蒼助は、内心で組み立てた不満を声にして再度形にしようとしたが、

「ええー、続けたいのぉ？　坊やにとっては、もう済んだことなのに。終わったことを未練たらしくいつまでも引きずるなんて私好きじゃなーい」
「始めたのはお前だろぉがっ！」
「ええ、そう。だから終わらせる権利も私にある。……違って？」

残念ながらイニチアチブは黒蘭の手の中にあった。
二の句も告げなくなった蒼助に為す術はない。

ぐっと詰まる蒼助をからかうように笑い、

「脱線しちゃったままじゃ困るのは坊やなんじゃない？　貴方、こ

こに来た目的はなんだったか覚えてるかしら」
「……っ、わーってるよ」
「お利口さんね」

子供のような扱い関しては、既に諦めがついており、癇には障るものの一々不満を表立たせ用途は思わなかった。事実、蒼助など幼いのは容姿だけの黒蘭にとっては、若輩者はおろか赤ん坊のようなものに違いはないのだ。

「さて――――――試験内容だけど……至って簡単」

黒蘭は、くるりと身を翻し、背中を向けた。
スローな旋回によってふわりとドレスの裾が浮き上がる。

幼い姿に似つかわしくない、老獪さが潜んだ伺いきれない表情が背中越しに向けられる。

「……。私は、あなたに一つだけ問うわ。あなたがそれに答えること。それが、あなたの試験よ」
「質問……それだけか？」
「ええ、それだけ」

簡単でしょ？と首を傾ける黒蘭に、蒼助は寧ろ困惑した。
質問への応答。それも一つだけ。
一体何が来るのかと、脱線中も完全には緊張を抜け切れなかった蒼助にはどうにもしっくり来ない。

「それじゃぁ、質問タイーム。ねぇ、玖珂蒼助――――――」

名前で呼ばれた。
先程までの子供をあやすような遊びの入ったそれではない、真の通った声で。

両の二の腕に鳥肌が立つ。
背筋をゾワッと何かが走った。
空気が一塗りで変わる瞬間を、蒼助は全身で感じた。

黒蘭を見た。
目が離せない。
否、離してはいけない。

それがこの『舞台』の上での、この瞬間の自分に与えられた役目であるのだから。

千夜に出会って以来、もう他のどんな女であろうとも心の琴線が揺れることは無いだろう、と思っていた。

思って、いた。

「――――――、――――」

呼吸を忘れるほど魅入るのは、あの劇的な夜を数えて二度目だった。

本来なら建物の一室であるはずの場所で、風が吹いた。
白い花弁がそれに攫われ、宙へと踊り出る。

その中に佇む一点の漆黒の存在。
黒塗りの糸束が白いそれらの中で、いやに目に付く。

絶妙なコントラスト。数では勝る白に彩りに劣りもせず、対等に存在感を発する。

否。この目が捉えているものが勝敗を意味するなら、勝るのは寧ろ――――――

「この先、何があっても……後悔しない覚悟はある？」

偽りの月光に照らされたその黒は、まさしくこの舞台の主役に相応しい艶やかな存在感を君臨させていた。

◆◆◆◆◆◆

流れるように、それは言葉を糸のように紡ぐ。

「――――――健やかなる時も、病める時も。いかなる者と敵として相対する時も。いかなる苦難が訪れようとも。……貴方は、それらを含めたあらゆる物事と事態を受け入れることができる……その覚

悟は、ある？」

ある種の誓いの言葉にも似たそれに、蒼助は少々の沈黙を間に置いて、

「……試験っていうのは、娘を取られる父親を安心させてやることなのか？」

「ふふ、そうねぇ」

否定でもなく肯定でもない。

薄く笑み、その読めない表情を貼り付けたまま、

「……言い得て妙な言い方ね。ただ、あながち外れていないかも。……私は自分の大切な者を託すために、貴方を見極めなければならないのだから」

「見極めるって、なにを？」

「言ったでしょ？　覚悟はあるかって……。私は、貴方の覚悟がどれほどのものなのかを知りたいの。私の望むものに届いているかどうか……」

そこまで誘導されて、蒼助はその先にあるものに行き着く。

「お前の期待に、か」

「御明察。出だしは好調ね」

パチパチ、と小さく響く拍手を受けるが、そこで一息ついている場合ではない。

試験は既に始まっている。

制限時間が設けられているというわけではないが、現実問題を踏まえると悠長としている時間は全くない。

ガンガン突き進まなければ、事態に好転はおろか進歩の芽も出ないだろう、と蒼助は意気込み、

「覚悟っていうけどよ……つまりは、今の俺が認識している程度じゃ足らないってことだよな？　お前は、俺に何を覚悟させたいんだ？」

重ねがけ、深く掘り進むような問いかけに、黒蘭は感心したように眉を顰めた。

「……勘が良くなったわね。余計な重荷を随分と削ぎ落としてきたようだわ」

「そうかよ」

ええ、と黒蘭は機嫌良さげに笑みを深くした。

「……ねぇ、貴方はこの試験に合格したら……千夜を助けにいくのね？」

「……ああ」

「どうして？」

突きつけられた言葉に僅かに揺れる。

まさか、こんなところで今更そんな風に言われるとは思わなかったのだ。

「ねぇ、どうして？」

一拍の緊張の後、蒼助の繰り返された言葉の含みに気付いた。

ここが、第一関門なのである、と。

「……その前に訂正させてくれよ」
「あら、何を？」
「――――――助けにいくんじゃない。俺は、あいつを連れ戻しにいくだけだ」
「同じことだと思うけど？」
「違う」
切り捨てるように蒼助はその言葉を制した。
「……あいつがたとえ……イヤだと言っても関係ない。あいつが危ないからいくんじゃない。俺があいつを失いたくないから、行くんだ」
「ふうん。その心は……如何なるものなのかしら？」
「あいつのためじゃない。俺のためだ。……この俺のエゴを満たすために、俺はあいつを……あいつの意志を犠牲にしたっていいって感じだ」
酷い台詞は割りとすんなりと出てきた。
以前であれば、出した直後に自己嫌悪が滲み出てくるはずだった。訪れないその感覚を思い、己の中の変化に感慨を感じる暇はなく、
「……あいつが死にたくて仕方なくたって関係ない。俺は……」
「――――――それは、ここが地獄だとしても？」
唐突に開かれた口から飛び出た物騒な言葉に、蒼助は半強制的に言葉を切らざるえなくなった。
瞬く目に映した黒蘭は、薄皮のような笑みを貼り付けたまま、
「冗談でも比喩でもなく……閻魔や羅刹がいなくとも、ここは地獄

になるわよ。少なくとも、千夜にとってはなによりの」

最後の強調部分が、蒼助の心の琴線を強く引き絞っていく。

同時に、黒蘭の笑みも何処か険しさを混じらせているように見えてくる。

「こういう言葉が嫌いなのだけれども……あの子にとって、【死】は安寧であり救いになるのかもしれない。そして、【生きること】こそ……至上の苦しみ」

絶望的な言葉を紡ぎながら、黒蘭は目をスイっと逸らす。

何処を見ているのか、何処か虚ろなそれを宙で泳がし、溜息と思わせる吐息を一つ。

「あの子は……綺麗すぎるのよ。生きていくにはこの世界は汚くて……そして、あまりにも残酷で無情かつ非情だった」

「……」

「正確には、これまでもあの子は地獄で生きてきた。そして、貴方は……これからもあの子にそれを強いるつもりでいる……と？」

――――千夜を生かすって、そういう意味よ？

黒蘭が声を用いずそう言ったように聞こえた。

最後の逢瀬でのやり取りと、千夜の顔がフラッシュバックのように脳裏を点滅した。

ズシリ、と重く伸しかかる現実を、胸の内に確かに感じた。

わかってはいた。

しかし、こうして改めて自覚へと導かれて、自分は無意識のうちにその事実と距離をおいていたのだと蒼助は思い知らされた。

「……考えてみれば、死んだ彼らは……あの子の危うさを無意識の内に関知していて……あの子が楽になるチャンスを、自分の身をもって摘んでいたのでしょうね。それは、己にとって何よりの不幸であり、最悪の苦痛であったから」

「それであいつが不幸になることもわかっていて、か？　――――ハッ！　……自己犠牲ってのは、全く大したお綺麗事だよな」

「あら、手厳しいこと」

亡者を手酷くあしらう蒼助に、黒蘭は非難も窘めもしなかった。

「……でも、それは結果論なのよ。彼らは気付かなかった。己の行為が相手の幸せに繋がると、自分の幸せは相手の幸せに結びつくと疑わなかった。……気付いたのは、死んでからか。それとも、その最期（いまわのきわ）にか。……いずれであろうと、彼らは手遅れになってから気付いた。そうして、彼らは……はからずともあの子に最悪の不幸と苦痛を残した」

一つの悲劇を語り終えた黒蘭は、今度はその中心にある悲劇の主人公へと視点を移していく。

「……あの子にとって、愛されることは幸福であること以上に……無二の不幸。生きている限り、愛される。そして、その愛は相手のあらゆるものを犠牲にして発揮される。最終的には命すらも薪木にして燃やし尽くす。そして、あの子は愛を失う。何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も……」

聞き手である蒼助は思う。

まるで、

「……まるで、呪われているようね」

同調か。或いは、黒蘭が予期して合わせたのか。

心内で思った考えを、黒蘭は諳うように告げた。

「いいえ、呪われているのよ。……あの子の人生は、愛と呪いと血と死で織りあげられている。だとしたら、かぐや姫が残した代用品の呪いよりもタチが悪い。或いは、これこそ……本当の呪いの形なのかもしれない」

黒蘭は、視線を蒼助へと戻し、

「――――――それでも……貴方は、あの子を求めるの？　あの子をこの世に縛り付けるの？」

容赦ない言葉を突きつけ、是非を問いかける。

黒の中にあるまっすぐと射るような光が、蒼助に突き刺さる。

圧されながらも、蒼助は己の中の答えを確かに捉えて持ちこたえ、

「……それでも、だ」

搾り出した傲慢な一言を踏み台にし、

「……ただな」

「ただ……なに？」

「……俺は嫉妬深いみたいなんだ」

場違いの呑気な台詞を口にする蒼助に、黒蘭は興味なさそうに、されど急かすこともなく対応する。

「あら、そうなの？」

「みたいなんだよなぁ。……相当重症だと思う。だから、その呪いってやつは……なんか癇に障る」

「何が、どんな感じに？」

「……全部だよ」

蒼助は笑って答えた。

陰惨かつ凄絶な感情に塗れた表情で。

「……老若男女。あいつの気を引くやつらは、誰であろうと気に食わない。どんな理由があろうと、な。俺は、あいつとの間に入ろうとするなら、何であろうと許さねぇ。……それが、呪いだっていうのなら――――――」

それこそ、呪うような低い響きを以って、

「――――――そんなもん、俺がぶっ壊してやる」

その停滞に対し、一つの革命を起こす宣言を放った。

黒蘭はそれを読めない無の表情で受け止める。

少しばかりの沈黙を置いて、

「大きく出たわね。……あなた、それが本当に出来ると思ってる？」

すぐさま鋭い返しに出た。

「最初が重要だから言っておくけど……――――――あの呪いは、具体的な解呪の方法はないの」

それは一つの絶望を証明した。

しかし、

「それぐらいは、見当ついてるっての。あれば、とっくにお前がどうにかしているだろうしなぁ」

「ええ、もちろん。……この場にこんな状況も設けていないでしょうしね」

黒蘭ですらどうにも出来ない。

それを蒼助如きが解決してやろうなどと、身の程知らずにも程がある。

そんなことは、十分承知だった。

だが、それでも。

「……つまりロクな対策もなく、事態の好転も期待できないのよ。精々こうしてあの子の盾を用意する程度が関の山。おまけに、街には信憑性なんてあるかどうか怪しいのにあの子の噂が流れている。……この諍いは、終わりがないに等しいわ。それでも、貴方は引くというの？　……この、あらゆる災厄を被る貧乏くじを」

黒蘭が突きつける現実は、そんな蒼助に情け容赦ない。

知ったことか、と払い除けることは出来ない。

だからと言って、受け止めるにも重過ぎる。

どうしようもない、とはこんな事態に使う言葉なのだと蒼助は実感した。

「正直言うと、貴方はもう十分なくらい役不足よ。だから、あの子は貴方を突き放した。わかるわよね？　さっきも言葉は立派だけど、説得力がないのよ。言葉を信じさせるための裏付け……実力がまったく釣り合っていない」

そんな蒼助の心境を既に把握していた上で、黒蘭は追撃緩和する要素は欠片も含めずに直撃させていく。

蒼助は、目の前の残酷なカミ様を前にして、

「ああ、わかってる。――――――……だから、だ」

それでも折れない自分を、己の中に識った。

母の死を前に、折れてしまった時とは違うことを。

母親が遺した言葉を思い出す。

ずっともう果たせないのだと悔いてきた言葉を。

志を持て。

いかなる悪党になろうとも、それが持って貫き通せたなら、世界が認めずとも自分は認める、と。

その独自の理論が目の前にいるカミ様に通じるかはわからない。

しかし、自分にはもうこれしかない。

誇れるものは、失ったと思い込み続けた数年を経て、ようやく手に入れたこの志しかないのだ。

「……俺には、力がない。……以前（むかし）は、それでも別にいいって思ってた。必死になることなんて何一つなかったし、あっても諦められただろうからな。……けど、今はそういうわけにもいかねぇ」

悩み、悔やんで、諦められなかった。

そして、今ここにいる。

「こんなにも力が欲しいと……喉から手が出そうなくらいに思っている」

思わず握りしめた手の中には爪が食い込む痛みしかない。

それが、己の欠いた部分への意識を強調させた。

力がない。

その圧倒的な事実に、これほどまでに苦い思いをしたことは過去にない。

おちこぼれとしての運命の下に生まれたことを自覚した時も。

一族内の人間に詰られ、貶された時も。

己にとってかけがえのないモノを、この手に繋ぎとめて置けない現実に直面しているこの時に比べれば、いつかのそれら全ては及びもつかない些細なことだった。

認めたくないことに、ありし日の神崎という男があれだけ『力』

というものに執着した理由が、今なら共感できる。
それがなければ、何も出来ない。
己が既に持つものを守ることも、失うまいと足掻くことも。
どれだけ欲しても手に入らないものも出来てしまう。
世の中は奇麗事だけじゃ罷り通らない。無力というだけで決してしまう事もモノもある。

それを知った。知っている。

だから――――――

「……力を寄越せよ、カミさま。欲しけりゃ――――――――俺のすべてをくれてやる」

捧げるため。
手にするため。

蒼助は、その右手を目前へと差し出した。

◆◆◆◆◆◆

蒼助にとって、その瞬間のそれは全力投球の渾身の一撃だった。
解き放った後の開放感を徐々に緊張が埋めていく中、蒼助は沈黙を構える黒蘭の反応を待った。

ジッと睨むように、黒蘭の無の表情を見つめた。

そして、何もないとしか言いようの無いそこに――――――ふと、微笑が咲いた。

それを真正面から見た蒼助は、禁忌に触れたような気分になった。
常時得体の知れない微笑を絶やさない黒蘭。
しかし、こんな風に自然に笑う姿は出会って短い期間であるけどもなかった。

不覚にも見惚れた。
しかも、これで二度目。
なんだかわからないが、千夜に無償に謝りたくなった。何故かはわからないけども。

蒼助が一人でグルグルしていると、

「……っぷ」

空気の破裂音。
噴き出したのだ。

そして、それは、黒蘭のすぼめた赤い唇から発されたものだった。

「っんくく……あっは、ははははははははははは……っ」

大笑い。

大口を開けて、大声で。

爆発するような笑声を上げ出した。

唖然とする蒼助を暫し放置して、黒蘭は腹を押さえて転げまわる勢いで笑っていた。

蒼助が置いてけぼりをくったような表情でそれを傍観してどれほど経ってか、

「……はぁー……キザな台詞ぅ」

目尻に涙まで溜め込んで、ひとしきり笑いを発し終えた黒蘭が出した一声に、蒼助はようやく我に返り、

「なっ……な、ぁっ」

「ちょっと冷静になってもう一度復唱してみなさいよ」

「うっせぇよ！　そんなにボキャブラリー多くねぇんだよっ、ほっとけ！」

「えらっそうに言うことじゃないでしょうに……ふふっ」

出来うる精一杯を大爆笑であしらわれたのだと自覚した蒼助の頬は、隠し切れない羞恥心が滲んで赤らんでいる。

黒蘭は、それを肴に名残を口の中でくくっと租借し、

「……いいの？　あの子についていくのは、なかなかハードよ。苦労するわよ……とっても」
「そこにわざわざ倒置法を使うんだから……そりゃ、よっぽどなんだろうなぁ」
「まぁね」

厄介さと扱いの難易度はお墨付き、ということだった。
蒼助は一息をつき、

「百も承知」
「残念ながら、それ以上かもね」

互いに何となく笑みを交わし、

「……」

黒蘭は、ふと目線を下げた。
引き下げた先には、蒼助が差し伸べたままの姿勢で留まる手がある。
そこに手を伸ばし、

「……貴方の意志は受け取ったわ……と、言いたいところだけど」

握手を組むのではなく、下から掬うように掴む。
そして、その上からもう一方を添えるように置いて、手の平をそっと撫でた。

くすぐったい柔らかな愛撫に、蒼助は目を瞬かせ、

「……だけど？」
「この手を受け取る前に、もう一つ聞いてもらうわ」
「また質問か？　さっき一つだって……」
「いいえ、質問じゃない。……貴方は、聞くだけでいいのよ」
掬う手に、少しだけ力がこもる。
それが、まるで懇願のように感じた。
「大事なことだから、前もって聞いておいてほしいのよ。……そして、覚えておいて欲しい。決して、この先何があろうと……忘れないで」
「黒蘭……？」
黒蘭はその呼びかけに応えるように目線を合わせ、
「……私は、この先……貴方たちに疑われるようなことを、たくさんしでかすと思うの」
「……なにトンデモ発言してくれてんだよ、お前」
「予告無しでいきなり本番迎えるよりマシでしょ？　まぁ、覚悟しておきなさいな」
諸悪の根源は、まるで他人事のように笑う。
「そうなった時、信じろとは言わない。警戒も疑惑も持つのは自由よ。……むしろ、思ったら真っ先にそうしなさい。信じることと同時に、疑うことも同じくらい大事だもの」
「……」
「私は、貴方にはまだまだ言えないたくさんの秘密を抱えているし、まだまだそれを明かす気はない。ひょっとしたら、私はこれからあなたの前に立ちふさがるどんな敵よりも厄介な存在になるかもしれ

ないわね」
「……お前なぁ」
内容の割には口調が軽くてリアクションに困るだろ、とぼやこうとしたが、
「ここ数百年、馬鹿以外には疑われっぱなしなの。まぁ、私も嘘つきっとおしだからおあいこなんだけどね。貴方が私を何処でいつどのように疑おうとも文句は言わないわ。貴方の知りたい真実があれば、どのタイミングでも私を疑えばいい。……ただし、答えてあげるかどうかはその時によるけどね」
「無茶苦茶言いやがって。……で、話戻すけど俺に聞いて欲しいことってナニ？」
「脱線修正、感謝。……疑っていいって言っておいて早々で悪いんだけど、一個だけ除外してほしいことがあるの」
「……へぇ」
「あなたの中で、この先……私が、どのような位置づけになろうとも、これから私が貴方に告げることだけは……どうか疑わないで欲しいのよ」
その口調に、先程のような内容に不釣合いな軽量さはない。
緩やかではあるが、聞く心に確かな重みを与える。
「……それは、お前が明らかなクロだという場面においてもか？」
「ええ。……この事実は、それだけ大事なものだと踏まえてもらえるとありがたいわ」
その言葉を皮切りに、
「……、おい」

黒蘭が両手で蒼助の手首を包み込むように握り、引き寄せた。
突くように広げた掌を、そのまま胸へと押し付けさせられ――――

「――――私は……」

冷たかったそこが、ほんのりと熱を持ち出すのを感じさせられた。

【壱百六拾】　己が為の不屈（後書き）

今回において言えることは、ただ一つです。

作者「実は……」
読者「何だ」
作者「ここまで黒蘭はすっげぇ黒幕臭ぱねぇやつだったけど、その正体は裏ヒロインだったんだよぉぉぉぉぉぉー！！」
読者「な、なんだってぇぇー！？」

……続きはＷｅｂで。（正しくは活動報告で

【壱百六拾壱】　愛に狂う者（前書き）

もう、とっくに手遅れ
病院だって門前払いレベルなくらいな重病患者

【壱百六拾壱】　愛に狂う者

他人の惚気を、こんな気持ちで聞いたことはなかった。

こんな――――――心穏やかな気分で。

「――――――私は、あの子を愛している」

自分の胸に手を当てさせて、その対象へ愛を紡ぐ輩も前代未聞だと思う。

しかもその対象は自分ではないのだ。

傍目から見て、これほど珍妙で滑稽な光景は他に無いだろう。

なのに、

「誰よりも、何よりも……愛している。愚かしさも賢しさも。優しさ故の残酷さも。それが例え私ではない何かであろうと、誰かであろうと……あの子が愛するものなら、私もそれに愛しさを感じる。あの子が私を愛することも、憎むことさえなくても……私はあの子を愛している」

詩の朗読でもしているのかとさえ錯覚してしまうような囁きに、蒼助は頭がクラクラしそうだった。

利き腕の先――――――胸に当てたままの掌からは柔らかく温い感触。

そこにある温もりが意味することを蒼助は知っていた。

自分たちの心は冷たい。

心臓は動いていても、そこに温もりは宿っていない。

唯一そこが熱を持つ時とは――――――

「耳を通して心に響く声が好き。貫くような眼差しが好き。艶やかで滑らかな髪が好き。真っ白な肌が好き。スッと伸びた背姿が好き。……笑顔が、好き」

紡ぐたびに鼓動はリズムカルに脈を刻む。

まるで人間のように。

「私はあの子を失えない。失うなんてあってはならない。何だって出来るわ。そのためなら、運命がこの手に余るものであろうとも廻してみせる。ああ、素晴らしいわ！　なんて素晴らしいのかしら！　……今こうして、あの子を想うだけで私の中が一杯に満たされる。あの子でいっぱい……いっぱいだわっ！」

ぐい、と押し付けが強くなった。黒蘭は、聞いて聞いて、という言葉代わりにそうして訴えかけてくる。同時に顔が近づき、距離が一層縮まった。

見開いたその瞳の奥を間近で見ることとなり、蒼助はそこに爛々と何かが光を放っている何かを見つけた。

「――――――」

感情に制御が利かないのか、蒼助がそれに目を奪われている合間にも留めても溢れんばかりに語り続けていた。

そのブレーキの利かない様は、得体の知れない存在とばかりに捉えていたモノが、今は姿形どおりの幼い子供のように見えさせた。無邪気。無垢。そんな言葉を黒蘭に当てはめようとしている自分を自覚し、我ながらいよいよ常軌を逸し始めていると蒼助はそんな己を思った。

しかし、本当に常軌を逸しているのは、目の前の――――――そして、

「ああでも、何でも出来るといっておいて何だけど、一つだけ出来ないことがあるわねぇ」

「へぇ……カミさまにも出来ないことがあるんだな」

我ながら白々しく出た言葉だと思う。

何故なら、答えは知っている。

「意地悪ね。さっき貴方が言ったじゃない」

「そうだっけか」

「貴方の口からそれが聞けて、あの子には及ばないけれど嬉しかったのよ？」

「奇遇だな。……実は、俺もだ」

嬉しかった。

それは間違いなく、自分の――――蒼助という男自身の感情でもあった。

尋常ではない様子で想い人への愛を語る様に、異常を感じると同時に共感を覚えた。

この女は、狂人ならぬ狂神だ。

それに同調することとが意味することとは、

「……狂ってやがる」

自分も。

この女も。

「狂ってる？　――――大いに結構っ！　愛に狂う根性もない意気地なしにこの舞台に上がる資格はなくってよ？」

「安心しろ。出会い頭から狂いっぱなしだ。腹を括ってここにいるんだからな」

わかってるわよ、と黒蘭は密着を緩めた。

僅かな距離が生じ、先程までの恋人のようなゼロの距離感は消える。

「純愛と狂愛なんて紙一重の差なのよ。違いなんて、ほんの少しバランスを崩して生じるひずみ程度しかないのよ」

「……ひずみっていうのは？」

「己の狂気に怯え、耐え切れなくなる。そうなったらあっという間に飲み込まれる。愛を狂わせた負け犬の出来上がりってやつよ」

黒蘭は、異様に冷たく言い捨てると、

「もう一度、問うわ。――――――――覚悟はできているかしら？」

何に、とはもはや問わなかった。

「貴方と千夜は一見近くて、実はもっとも遠いところにその身を置いているのよ。私と同類で、そしてここにいることの意味をわかっているのなら……この理由だって、わかるわよね？」

彼女が自分の下にいない。
そして、自分がここにいる。
それら二つの現実が、蒼助を答えへと手を引いた。

博愛主義の千夜。
至上主義の自分。
他人のために命をかけられる者と自分のためにしか動けない者。

両極端に立つ自分たちは、決して同じ位置に立ち並ぶことなど叶わない。
理解り合うことなど到底なしえない距離間に自分と彼女はいる。

そんな相手を追いかけ、傍に置くことへの――――――覚悟。
愛に狂っても、愛を狂わせない――――――覚悟。
そして、何があっても――――――

「……俺も一個聞いていいか？」
「いいわ。何かしら？」
「――――――お前は、どうなんだよ」

投げられた球を打ち返すのではなく、受け止めてもう一度投げてみた。

黒蘭は、それに一瞬呆気に取られたように固まって、

「……それが、貴方の答えと受け取ってもいいのかしら」

「ああ。……これが俺の返事だ」

肯定に黒蘭は笑った。そして、蒼助も。

「……後悔はしない？」

「するさ。――――あとでいくらでも。今、後悔せずに済むなら」

そうでもしなければ、後で後悔することさえ出来なくなる。

千夜を生かしたことに後悔するかどうかはわからない。だが、その未来さえ失って後悔するのだけは嫌だった。

「……理解できなくても、お前はあいつの傍に居続けたんだろ？

そんで、理解できなくてもあいつがいなくなるのは嫌なんだろ？

……そういうことだよな、同類」

自分は――――自分たちは、いつか理解できるかもしれないという希望のもとに彼女の存在を望んでいるわけではない。

時間を経た果てに理解できないであろう存在であるからこそ、彼女が愛しい。境界線上で対極の位置にて向き合うからこそ、惹かれてやまない。

「……おかげで、一つどうしてもわからなかったことがわかったぜ」

それは、数日前のある場面で問われた言葉。

何故、彼女なのか。

何故、好きなのか。

「あいつは俺とは違う。何もかも。考え方だって、人の見方だって違う。俺は男で、あいつは……あー、一応女で。性別も当然違う。同じ部分とか、気の合う部分を見つける方が難しい。……ひょっとしたら、そんなものないのかもしれねぇ。あいつは、俺にとって一生すれ違いっぱなしの、ハマりっこない見当違いのパズルのピースみたいなもんかもしれない。……でもな」

けれど、ともう一度胸の内で繰り返し、

「だから、俺はあいつが好きなんだと思う」

先に並べた土台の上に、ストンと乗せる。

本命たるそれは、揺ぎ無い直立を完成させ、根付いた。

「俺とはまるっきり違う。だから、気になるし惹かれる。……あー……えっと、だからだなぁ」

「無理に言葉を重ねなくてもいいわよ」

言い募ろうにも言葉が続かない蒼助に、黒蘭は微笑ましいものを見るような目で笑い、

「言いたいことは十分伝わったから。……そういうことでしょ？」

「ああ、そういうことだ」

以心伝心というのかは知れないが、それに近しい相互理解を交わ

し、

「ええ、そうね。まったくそのとおりだわ。対極と呼べるほどの絶望的な違い。違いすぎて……交わることも、溶け合うことも出来ないのに。それでも、惹かれて欲して……あれが決して手に入らないモノであると思い知れば思い知るほど……諦めは遠のく。なにをしたって一つになれなくても……手放せない」

黒蘭の言葉は、同時に蒼助の気持ちの代弁ともなった。

「んふふっ……これで、貴方も仲間入りね」

「重病患者の、か？」

「ええ、ご愁傷様」

労りなど微塵も感じない、心底嬉しそうな声色だった。

そして、

「合格よ、坊や」

それは、『試験』の終了を告げ、その合否を後に次げた。

「それでは、ここに宣誓を」

一本一本が滑らかに伸びる指を備え付けた手が、差し出される。

まるで慈悲深い女神が罪人へ向ける救いの手のようだった。

その実態は、似ても似つかないモノであるとしても、それは少な

からず蒼助にとっては近しい意味合いを持っていた。

「これより、私たちは同じ夢を抱き、同じ未来を見据える者として……手を取り合う」

「同じ未来……」

「そう、私たちが目指すのはハッピーエンドよ。あの子を失わずに得る未来。……あの子を失わない未来」

そして、それは同時に千夜自身は捨てようとしている未来でもあった。

言い含められているであろうそれを見出し、蒼助は言葉なく受け入れた。

「……誓って」

黒い悪魔のようなカミが、囁く。

「共にあること……共に歩むこと……共に、同じ者を想い続けることを」

神父のように、生涯の誓いへの促しを――――――こちらへ伸ばす手に乗せて。

この手をとれば、誓いが完成する。

契約という正体を持つ誓いが。

同時に、それを結ばれれば一生解けない楔となり、この身に打ち込まれる。

そして、楔は――――――呪いとなるだろう。

逃れることはおろか、死ぬことすら許さない不断の縛呪に。

「――――ああ、誓うぜ」

蒼助は、その呪いに手を伸ばした。

触らぬ神に祟りなし。知ったことか、とその手を強く掴んだ。

それでも、祟られようともこの手に掴みたいものがあるのだから、と。

「確かに聞いたわよ。それじゃぁ、始めましょう……契約の執行を」

宣言と共に、黒蘭は身を押し出すように蒼助の懐へ飛び込んだ。

軽い衝撃が腹部と胸の境あたりに来る。

背中か、或いは胸に来るかと思った両手の感触は、首へと至り、

「――――――――」

引き上げ、押し付けられるものに口を塞がれた。

ぐいっと引き下げられる引力に首が少し悲鳴をあげたが、そんなものよりももっと衝撃的なものに蒼助は直面していた。

浸るように閉じる黒蘭の眼が、まさしくすぐ目の前にある。

その直後に開いたそれは、楽しげに笑うと、密着を解いた。

「……なんか、前にもこんなことがあった気がするぜ」

「却下。その感想ツマンナイ」

「……。お前とこういうことするのって、心臓に悪い」

「浮気してるみたいで？」

「……そんな枠に収まりきるタマかよ、てめぇ」

ぼやいてみたが、効果なんて期待していなかった。
次いでこの体勢とここまでくだりに意識を向けて、
「……なんか、こっちの方が結婚式みてぇ」
「なぁんだ、面白いこといえるじゃない。……そうねぇ。確かに、お互い別の相手への愛を誓う結婚式ほど奇妙なものはないわね……ふふふ」
「ごもっともな話だが、ふふふじゃねぇっての。……つか、ひょっとして今のも狙ってやったのか？」
「ん～、惜しい。誓いのキスっていうのは、あながち外れてないけれど……どっちかというと餞別って意味合いの方が強かったかも」
「餞別って……」
問い返すと黒蘭は笑みで返した。
そして、悪意など欠片もないと言わんばかりに、告げた。
「これから――――ちょっと痛い思いしてもらうから」
予告。
しかも――――待ったなしの。
「は――――――――ぁ？」
放とうとした疑念の言葉は途中襲った衝撃によって断裂した。
衝撃というよりは違和感――――それよりも異物感というべき

か。

その拠点たる己の胸を見下ろそうと視線を下げる。

いつの間にか首に回っていた黒蘭の手が解かれていることに気付くよりも先に、そこに【突き刺さるもの】を目にする。

黒い刀身。

それは、出血も起こさずただ無言のままに蒼助の胸にその身を納めている。

「さつ、じん……き」

「名前、覚えててくれたのね。……良かったわねぇ？」

黒蘭は、手元にある己の身丈に不相応の大ぶりの黒い剣に語りかけた。

そんな光景が、近くにあるはずなのに遠く感じる。

遠のいていく。

意識が。

目の前のものが。

全てが。

自分が気絶しようとしていることに気付いたのは、既に落ちかけているところであり、どうしようもないところであった。

そこへ、

「言葉での誓いは、これでおしまい。今度は――――――体で誓って？」

断崖絶壁にて、片手で持ちこたえる人間のそれを笑顔で踏みつけるがごとし。

実に軽いノリで、途絶えそうな蒼助の意識にトドメを刺す黒蘭の声が響いた。

◆◆◆◆◆◆

上弦と蒼助が店の奥へと移動してからも、しばし三途は動けずにいた。

あれだけ言われても。

忠告を残されても。

折られ意気地を欠いた心は、再び立ち上がるのに尚も時間を要した。

暗闇の店内に、再び一人残されてどれほど経ったか。
ふと湧き出た思いに突き動かされ、ノロノロと移動を開始した。

行き着いたのは、己の部屋だった。
そこには、三途の心が求めていたものがある。

「……」

部屋の明かりを点けることもなく、その奥へと進む。
窓の無い部屋の最奥に取り付けられた作業机。その引き出しに手を伸ばす。
軽い手応えと共に、その中身が露となる。

そこは、ただ一つのためだけに用意した居場所。
何にも踏み込ませない過去の聖域であった。

ただ一枚の――――過去を写した写真のための。

「ひさし、ぶり……ですね……」

表面を仰向けに置いたそれに、写るのは一つの家族。
父親と、生まれて間もない赤ん坊を抱いた母親。後者の顔は、マジックで黒く塗りつぶされている。更には、ありし日の三途自身も彼らの中に混じって写っている。

そして――――

「……」

見据えた【そこ】を指でなぞる。
指先にあるのは、写真の中で膝を折る自分の隣で、ぎこちなく笑う子供。
視線を捉えて離さないその子供から、三途は一度目を閉じることで振り切る。

「……貴方を……こうしてまともに見据えるのは、ここにしまって以来ですね」

切り替えた視線の先には、父親とおぼしき男だ。
その顔立ちは、先程まで視線の対象であった子供と似通っている。
『彼女』とも。

特別な男――――――だった。
良く悪くも、この男なしで下崎三途という人間は存在しえなかった。
そして、今はもういない。この世の何処にも。

あるのは、時を止めた残像のみ。
そして、三途はそれに縋りに来たのだ。

「……少し、話を聞いてください」

写真から返事は返ることはないのは承知だった。
けれども、この胸の内のものを誰かに、何処かに吐き出さなければ自分はどうにかなってしまいそうだった。

「……私は、貴方の言うとおりにやってきました。貴方がいなくなってからも……貴方が最初にあの子を守れと言った時からずっと」

もう八年になる。
彼に引き合わせられて出会ったあの日から、もうそんなに経った。

感傷に浸りながら、

「でも、貴方の言うとおりに死ながらいつも不思議に思っていたんです。貴方に言いつけられたことは、いつしか私の意志そのものに変わりました。……疑問が付きまとい始めたのはそれからです」

定めていた視線は、自然とずれていく。
やはりこの写真を見ると、どうしても目を離せないのだ。

この子供から。

「……私は私の意志で正しいと思ったことをしているはずでした。大切なものを守ろうとすることは、間違ってなどいない……そう思っていたんですがね」

それなのに、

「そんな私を、まるで否定するように……いつだって、あの子は悲しそうに私を見ていたんです。安心させたかったのに、あの子は不安そうでした……」

作り笑いが下手な子供だった。
笑いたくても笑えない。心配させないように不安を隠そうとして、無理にでも笑みを浮かべようとする不器用な子供。
それなら、感情のままに泣いてくれればいいのに、子供は自らのために泣くことを許しもしなかった。

可愛げのない、可愛そうな子供。
子供なのに、その枠にはまることのない出来ない子。

子供を取り巻く世界が、あるべき姿であることを許さなかったが故に出来上がってしまった歪んだ子供。

「私には、わかりませんでした。どうすれば、あの子が安心して心から笑ってくれるか。他に何か方法があるのかも。……でも、違うんです。」

違った。
わからないという自分。

それは、

「……本当は、わかっていたんです。私の何が、あの子の顔を曇らせるのか。あの子が何を望んでいたのかも。……でも、認めるわけにはいかなかった。受け入れるわけにはいかなかった。だって……それは」

自分の望みに反することだった。
認めてしまったら、受け入れてしまったら――――――自らの存在意義を否定することになるから。

三途は、それまで動かしていた口を閉ざし、己のエゴを噛み締めた。
そうエゴだ。
この子供の望みを知っていながら、それに見て見ぬふりをした。
その上で、図々しくもどうして笑ってくれないのか、などと嘯いたのだ。

誤魔化して、嘘をついて。
なんて卑怯で卑しい性分であることか。

「……今日、ついにあの子に真っ正面から突きつけられてしまいました。私が間違っていることを。そんなことは望んでいないって。……それで、とうとう見捨てられてしまいました」

最後の言葉は、異様に響いた気がした。
自分の内側で。

「死なせに行かせてしまいました。止めたけど……相手にされませんでしたよ。そりゃそうですよね……自分を苦しめる相手のいうことなんて、聞いていられないでしょう」

苦しめていたのだろう。
それでも、『彼女』は傍にいてくれた。
己を苦しめて苛む自分の傍に、ずっと。

どんな気持ちで、こんな自分の傍を離れないでいてくれたのだろう。

「……貴方が生きて、ここにいたら……きっと殺されてしまうでしょう。……でも、本当は……少し、ホッとしたんです。あの子に振り払われて……楽になったと……感じたんです」

そう、嘘じゃない。
『彼女』が、自分に背を向けて店を出て行った後、玄関の扉の閉じた瞬間に感じた開放感は、気のせいなどではなかった。

あろうことか、自分はあの時――――――安心したのだ。
『彼女』が、いなくなるという事実に。

何故、とその理由を探求すると、向かう先は己の過去だった。

「あの子を守ることに徹して、突き詰めて突き詰めて……行くところまで行き着いたあの時。……私は、信じていたんです。心に決めたたった一つを貫き通せば、必ず報われるはずだって」

結果として、自分はどうなっただろう。

「……私は報われませんでした。間違っていたから、ですかね。そして、今回も……正しいと思い込んでいた間違いを貫き通した結果が、このザマです」

間違っていたから、望まぬ結果を得たのか。
その是非は、今の己を見ればわかる。

安堵の正体は、知っている。

「私は……ダメな、大人です。物事の正否で、自分の気持ちを誤魔化すような卑怯な人間です。私は……あの子が失った日々を……全てを思い出して私を罰する日が永遠に来なくなることを、喜んだんです。……怖かったんです。……自分で課しておきながら……その日が来ることが」

『彼女』と過ごす日々は、執行猶予だった。いつか自分が何をしたのを知られ、『彼女』が処刑人として立ちはだかる時が来るまでの偽りの安穏（やすらぎ）。

おろかにも、自分はそれが終わることを恐れて、『彼女』を行かせた。
拒絶されたことをさもそうであるかのように理由にして。
そんな自分に、正しい間違っていると問うこと自体が、大きな間違いだったのだ。
どちらであれ、自分の損得を優先する自分に、そんなものは意味をなさない。
それに気付くのに、六年は長すぎた。
「……私は、結局……何がしたかったんでしょうね」
問いかけたところで返事はない。答えも与えてはくれない。
自らで見つけなければならないというのに、自分は何を期待していたのだろうか。
過去を振り返れば、答えが見つかる気がしたのだ。
過去を写したこの写真が、答えへと導いてくれるのではないか、と。
そんなわけがあるはずがないというのに。
三途の脳裏を、ふと先刻やってきた青年との会話が過ぎる。
自分と同じように切り捨てられた男は、尚も諦めず彼女を追いかけるべく、そのために必要な何かを得るべくやってきた。
自分が止めておけというのを聞く耳持つどころか、逆に怒鳴りつけてきた。
――――――あんたが守ろうとしたもんは、何だったんだ。

男の追求が、耳の奥で苛むように響く。

「……そんなの、私が知りた――――――」

耳に奥にこびりついていた残響が、突然広がっていく。

それは、男との会話の際に自分が何を口にしたかを鮮明に浮かび上げていく。

あの時、自分はなんと言い返していたのか。

確か――――――

「――――――ぁ」

その記憶に触れると同時、何故か涙が零れた。

泣いたばかりで緩んだ涙腺からは、後を追うように次々と雫が溢れる。

何故自分は泣くのか。

虚しいのか。

哀しいのか。

否――――――これは、

「……はは っ」

呆れと嬉しさが、混じった感情。

まったく、なんてことだろう。

「……私は、本当に……ダメな大人だっ！」

自嘲めいた言葉と共に、三途は引き出しを閉じた。

流れる涙を擦るように指で拭う。

そして、その逆の手を――――――別の引き出しにかけた。

［壱百六拾壱］　愛に狂う者（後書き）

難産な回でした。途中のプロットを全部捨てて、まさかのアドリブでいくことになるとは……（冷や汗
なんとか目的地に着地できましたが、危ないので真似しちゃダメですよ。下手すると一生懸命つらつら長々と書いた作品を死に追い込みます（マジな話です

試行錯誤しましたが、前半は似た者同士の二人の結婚式ごっこ。後半は、プロットに沿って今を生きるダメダメな大人・サンちゃんの写真に向かって独り言劇場で収拾がつきました。
それと、ちょっといよいよプロットが底を尽き始めてきました。まぁ、最近書き足していなかったので自然な現象なのですが……。久々にパソコンでじっくりプロット書くかなぁ。

それと、次回はついに前世編である第一部にちょこっと触れます。
久留美の時よりも明確な物語の背景がわかるように力を入れて書こうと思います。

【壱百六拾弐】　果てしない物語　（前書き）

運命は今、定められる

【壱百六拾弐】　果てしない物語

「――――――ん？」

目を開けると、白い世界が広がっていた。
しかし、それは落ちると感じた瞬間まで見ていたものとは異なる。
何もないという『無』を表現する白。
そう、何もなかった。
白い月も、それが君臨する空も。あの白い蓮畑もない。
地平線も捉えられない白一色の世界は、背中と頭部に感じる足場の感覚がなければ平衡感覚さえ失ってしまいそうな不安定さで、酷く欠乏感を募らせる。

「……ここ、何処だ？　いや待て……前にもこんな状態になったような」

デジャブに惑いながら、直前の記憶を思い出してみる。
凄まじいショックを受けたのか、すぐには思い出せなかった。
確か――――と思索を始めようとした時、

「はろぉ～」

仰向けに横たわる蒼助に差した影と呑気な声の主が、一気にその答えを引きずり出した。

「てっっめ！！」

「いやん、怒んないでよ。餞別はあげたでしょう？」

「んなもん、間髪ナシの心臓一突きと張り合えるかっ……て」

ガバッと身体を起こして、覗き込んでいた黒蘭に噛み付くべく抗議をあげた。しかし、己のそれに違和感を覚える。

「……あ、れ」

心臓にざっくりと突き立てられたはずだった。

しかし、胸元は何事も無かったように着衣にも乱れは無い。

まるで、夢であったかのように。

「……まさか、夢オチとか」

「ここまできてそれはさすがにマンネリじゃない？」

そういう問題ではない。

しかし、仮にそうであるとしても、この状況はどういうわけなのか。

「なぁ、こりゃ一体……」

「……気を引き締めて」

「は？」

「そろそろよ。――――――殺神鬼が【侵食】を始めるから」

貴方に、と続いた言葉の意味を蒼助は理解し損ねた。
そして、再度試みる理解が追いつくよりも早く、

「――――――なっ」

周囲に起こり始めた『異変』に、気を取られた。

白い世界に、地平線が現れたのだ。
しかし、ただそれだけに留まらず、地平線から這い出るように何かが蠢いている。

黒い何か――――――あれは、『闇』だろうか。
それは、まるで白の空間を食うように、世界を塗り替えていく。

「……なんだよ、あれ」

この感覚は、何かに似ている。
前にも経験した覚えがある。

蠢く闇を凝視していた蒼助の脳裏に過ぎるものがある。
黒い剣。

そう、感じるこの戦慄と圧迫感は、初めて目の当たりにした時に感じたものだ。

あれは、

「あれは……殺神鬼、なのか」

黒蘭は、肯定代わりとばかりに蒼助の肩に手を置いた。

「……あれは、いかなる【世界】であろうとも、己以外の存在を許さないわ。絶対不屈。絶対不可侵。……獲物は欠片まで食い尽くすのみよ」

「っ、んなこと言って俺にどうしろってんだよ！」

「さぁ。何も出来ないと思うけど」

「オイッ！！」

元凶に身も蓋も無いこと言われ、さすがに絶望的な気分になる。

「どうしたって食われるでしょう。……でも、己を投げ打ってはダメだよ。たとえ、最後の一欠片が噛み砕かれる瞬間になろうとも。貴方は、貴方でいなさい」

アドバイスと受け取るには、解決の糸口は全く見えない言葉だった。

どういうことだ、と黒蘭を問い質そう振り向くが、そこにいたのは既に黒蘭ではなく、

「――――――っ！」

いつの間にか、あっという間に『闇』はそこまで来ていた。

にゅるり、と動いたそれは蒼助の左腕に巻きつくと、

「うわっ、あ゛、ぁ！」

腕をもぎとった。

否、腕が崩れたのだ。崩れ散る様は、まるで発泡スチロールにように劣化してボロボロと爆ぜていた。

肉ではない。骨は見えない。血は出ていない。痛みも無い。

けれど、それが己を生身の存在ではないように思わせて。殺されるのではなく、物として壊されるのだと悟らされて。

怖い。

怖い。

生きていることすら否定されて、物として在ることも許されない。

ただ、屑ようにされて呑まれて消える。

こんな恐怖は、味わったことが無い。

ひょっとしたら、自分は本当の意味で恐怖など感じたことなかったのかもしれない。

これが――――――これが、恐怖か。

「……あ、ぁ……あ」

食われていく。砕かれていく。侵されていく。潰されていく。崩されていく。汚されていく。散らされていく。踏みにじられていく。滅ぼされていく。

消されて、いく。

白い世界を瞬く間に自分色に塗り替えてしまった『闇』にとって、あとに残るものは蒼助という矮小な存在のみだった。

『闇』は、何処までも非情に無情に蒼助という存在を侵す。

惨めさと虚しさをたっぷりと塗りこんだ屈辱を、存分に与える。

両手両足はとっくに呑まれて、砕かれた。

上弦にやられた時は伴った痛みがないことが、救いになるどころか追い討ちをかける。

ただただ己の崩れていく感覚が、損なわれていく実感のみがある。

あの罵声が懐かしく恋しいとまで思えているのだから、今自分は相当追い詰められているだろう。気をよそへやっているうちに、腹部はとうになくなり肩まで侵食の魔の手は来ていた。

いよいよという時の接近に、蒼助は我を失いそうだった。あれほど想っていた千夜のこともこの瞬間には何一つ残っていなかったし、思い出せもしなかった。

あるのは恐怖。自分が無意味に消えていくことへの、絶望だった。

『――――――もうすぐ、消えるわ』

黒蘭。

薄れゆく意識がかろうじて認識できた声は、励ますことなくただ淡々と事実を述べる。

『さぁ……見せて頂戴。貴方という存在が消えても、消えずに残るものを』

何を言っているのかわからない。

その声が、最後に認識できたものであり、思ったことが最後の意

識となった。

そして――――――玖珂蒼助は為す術なく漆黒に呑み込まれた。

◆◆◆◆◆◆◆

意識の浮上は、泥の中から這い出るそれに近しい重苦しさを伴った。

次いで感じたのは、手首の束縛感。

それだけで、目を開けずとも己に置かれた状況を思い出すことが出来た。

途端、襲い掛かるのは失望感と虚脱感。

夢の中では忘れられることが出来たそれは、ツケを払わすかのように押し寄せてくる。

「……そうか、俺は……っ」

開いた唇がズキリ、と痛む。

小さく裂ける感覚と共に、鉄の味が舌に滲む。

この場所に来るまでに受けた行為を否が応にも思い出させた。
そして、引きずられるように思い出す。
己が何に敗北したのか。何に失望したのか。
「――――――」
全て思い出した。
同時に、あらゆる力が己の中から失われていくのを感じた。
悔しい、と歯を食いしばることさえ出来ない。
ただ無気力に受け止める。
何も為せなかったという事実を。
ただそれだけであったという己を。
「……」
ここは、牢屋だ。罪人として、ここに入れられたのだ。
事が済み次第、人知れず自分は何処か偏狭へ流されるだろう。
一族には何と言い立てるつもりであるかは知れないが、自分がいなくなれば玖珂は彼らの思うとおりになる。全く笑わずにはいられない。現状を打開を志して動いたというのに、結局は相手の思う壺にはまってしまったのだから。
だが、胸を占める失望感は、それだけではなかった。
傍らでその歩合となっているものへ意識を移す。
「……【――――】」

口にしたのは、ここにはいない誰かの名だった。
脳裏を掠める銀色。それは、その名の相手を指し示す証だった。

不意に、薄暗い空間に一筋の光が入り込んでくる。
見遣れば、ひび割れた壁の隙間から僅かばかりに差し込んでいた。

月が出たのだろう、と思う傍らで、喉奥から口を突いて出そうな言葉があった。
ここにいない相手に言っても仕方ないものだが、己は二度とまみえることはないだろう。

だから、

「……すまない」

目を閉じ、差し込む月明かりに言葉を放った。
『彼女』は、月光の似合う人だった。自己満足に過ぎない行為だったが、どうしても言いたかった。一族のことよりも、今は『彼女』に対する罪悪感の方が大きく胸の中を占めていた。

『彼女』に、報いることが出来なかった。
全てを失った今、それだけが――――――

「――――――なにが、すまないんだ？」

響いたのは、己以外の声。
このような場にそぐわない陽気な声色。そして、あるはずのない者の声だった。

衝撃のあまりに目を見開いている己が、見ずともわかる。
これは、幻聴だ。
幻聴でなければならない。

「おいおい。無視するなよ」

幻聴も二度まで聞こえると無視できなくなる。
おそるおそる視線を上げた。

「……やっと、見たな。ははっ、どうしたその顔は。……ちょっと見ない間に、男ぶりが上がったようじゃないか」

男、というには線の細い体つき。女にしては、飾り気の無い軽装。
束ねて揺れる長い髪は、闇の中でも輝きを失わない銀色。

僅かばかりの月明かりがほのかに、その顔を照らし出す。

「何故、ここに……」
「それを聞くのか？」

当たり前だ。
目の前の人物は、ここにはいるはずがない。否。いてはならないはずなのだ。

「わざわざこんな辺鄙（へんぴ）な場所に訪れる目的なんて……ぶち込んだ奴を眺めて悦に浸るか、囚われた仲間を助けに来るかしかないだろう

？」

「……俺を、笑いにきたのか」

明るく言う『彼女』に対して自然と出たのは、己への自虐だった。そんなわけがない。答えはわかっているはずなのに、それを受け入れることはできなかった。受け入れてはならなかった。

「随分拗ねているようだな。……何があった」

この程度の皮肉では、琴線にすら触れることはなかったようだ。それどころか、こちらの様子から何かを察してすらいた。

駄目だ。ここに長居をさせるわけにはいかない。一刻も早く、この場から立ち去らせなければならない。『彼女』は、こんなところに、自分などを助けに来ている場合ではないのだ。

早く己のしていることの無意味さを気付かせなければならない、と口を開くたびに痛む唇を湿らせ、

「覚えているか。……お前は言った。俺は間違っていない、と」

「ああ」

「だから、自分を誤魔化すな、と」

「確かに、な。……どうした、老いぼれどもに突っぱねられたぐらいでそこまで落ち込むこともあるまい」

ああ、何もかも察しているのだな、とその聡明さに溜息が漏れる。この程の器の人物を、どうしてもっと認めてやらなかったのか。思えば、つまらない意地を張り続けたせいで、こんなところまで来てしまったのかもしれない。今となっては、悔やんでもどうにもならないことであるけれども。

「……否定など、されていない。……元老院のやつらは、相手にすらしなかった。俺がどれほど声を張ろうと……やつらは、何も聞こうとしなかった」

口した言葉から、血ではない何か苦いものが広がっていく。

これは、無念だ。

「自分が、取るに足らない……無力な存在なのだと、思い知らされた。俺は自分が間違っているとは思っていない。こうなった今でもだ。……だが、そんなことには何の意味もなかった。俺の正しさなど、奴らには取るに足らない稚拙なものだったのだ」

「……」

「この世のすべてに拒まれたような気分だ。――――……お前は、強いな」

「何だ、突然」

真摯な眼差しが、不意を突かれたように少し見開く。

ようやく琴線に触れることができたのだと、少しだけ気が晴れた。

聞いてくれるだろうか。

意地でも見栄でもないのなら、『彼女』は己の言葉を受け入れてくれるだろうか。

「……俺が、どれほど間違っていると詰ろうと……非難しようと、お前は怯みもせずに己を突きつけてきた。逆に、俺が……あまりにも堂々しているお前に怯まずにはいられなかった」

なんてヤツだ、と思った。

けれども、羨望の念も抱いたのは確かだった。

他者に責められようとも、己を揺るがさないその不動の様は、己にはないものだった。欲しかったものだった。

「俺は、そんなお前が羨ましかった。まぶしかった。憧れた。……お前のようにあることが出来れば、俺もどれほど楽になれるだろう、と」

背負うものがある者として、己を優先することは許されなかった。常に持つものの全体を考えて、それらのために動かねばならなかった。息苦しさと思うようにならない現実に苦悩しているというのに、知ったことかと思うがままに振る舞う『彼女』を、妬んだことだってあった。

「……だが、違うのだな」

いざ同じように振る舞おうとして、わかったことがある。

それは、

「己を曲げず、通すことは……決して、楽ではないのだな」

こうなって、ようやく少しは『彼女』を知れた気がする。

否、否、と放つ己に、少しも揺るがなかったわけではないのだ。揺らぎながらも、それでも己を貫こうと立っていたのだと思う。

『彼女』の前に立つと、己という存在がとても小さく思えた。

己の保身や立場などに脇目もふらず、歪んだ世界を見つめ続けるその姿に、自分の存在を保とうと噛み付いていただけだった。

本当に、叶わない。

「……すまない」

「何故、謝る。……さっきから変だぞ、お前。――――――敵陣へのこのこやって来るなど何を考えている！　何処まで向こう見ずなんだ貴様は！　……とぐらいは聞けると思っていたんだがな」

そんなことを期待してやってくるやつがあるか、と喉から出そうになった。

しかし、そんな場合ではないのだ。伝えたいことは、残り少ないこの逢瀬で言葉にしなければならない想いはそんなものではない。

「俺は……――――――お前との約束を果たせない」

『彼女』の周辺の空気が、変わる気配を感じた。

表情は無いに等しいそこから感情は汲み取れないが、少なくともこの琴線への接触が良き方向へ働いたとは考え難い。

それでいい。

失望してくれなければ、困る。一刻も早く、自分を見限らせなければならないのだから。

「……俺には、もう……立ち上がる力がない。お前の力にはなれない」

返る言葉はない。

返す言葉がないが正しいのかはわからないが、それなら続けるまでだ。

「……聞け。これから元老院は月守村を探すだろう。俺たちのように少数ではなく、持ちうる数を全て投じてくる。見つけ次第、皆殺

しにされるだろう。村人も離反した赤神や織谷は勿論……旋や双七も寝返ったとして処断するつもりだ。……急いで戻れ」

「……待て、【――――】」

呼ぶな。呼ばないでくれ。

「俺には、もう何もない。……草薙と群雲は取り上げられた。この理不尽な状況を覆そうという気力さえも残っていない。……あるとすれば、お前だけは無事であってほしいという願望くらいだ」

少なくとも、事実しか口にしていない。

本当に、もう何をする気力もない。そんなものは、ここに入れられる前に根こそぎ奪われてしまった。

そう、残っているのは、

「俺はダメだった。だが、お前だけは……あきらめないでくれ。この先何があろうとも。お前は……俺にとって救いだった。いや、そうあり続けてほしい。ここで俺は終わりだが、お前は進め。何が立ちはだかろうと……元老院やこの世界で起こっている異変であろうと……お前という、俺の希望を絶やさないでくれ」

そこまで言い切ると、すっと最後の力が尽きるのを感じた。

意地も見栄も含まない、混じり気なしの本音を口にしたせいだろう。

それは、一族の統率者としてではない――――――紛いなき『己』自身の想いであった。

全てを失った今、打ち明けることへ枷となるものはない。

自分はこんな最後を迎えるが、それでも悪くないかもしれない。

ここにいるのは、少なくとも誰でもない『己』であり、それを最後に『彼女』に見てもらえたのだから。

「もう行け。……心折れた者など、お前の足手まといになるだけだ」

折れた剣など、ただの鉄屑に過ぎない。
そんなものは『彼女』には無用だ。
輝かしい存在の傍に、そんな己があることなど耐えられない。

もういい。
ここで、終わりだ。
せめて自分は、一時とはいえ『彼女』に必要とされたことを幸いとして朽ちよう。

だから、もう――――――

「――――――――断る」

幻聴だ、と誤魔化すには、その声はあまりにも力強かった。
その瞬間、何が起きたかわからず、呆然とした。

「お前……自分の言いたいことだけ言って私の話をまるで聞いて

いなかったな？　まったく……状況が状況なだけに繰り返すのは、一度だけだからな。
――――――私は、お前を助けに来たんだ。何で、手ぶらで帰らなきゃならない？」
「ぉっ、お前こそ聞いていなかったのか！」
見張りが来るかもしれない、という危惧すら忘れ、目の前の愚か者に声を荒げてしまう。
しかし、
「あ、聞いていなかった。すまん。――――――だから、知らん。ほら、四の伍の言わずとっとと助けられるがいい」
のうのうと言ってのけた『彼女』の行動は早かった。
闇の中、白い閃光が交差する。
『彼女』と己を隔てていた格子が、ガラガラと崩れていく。
邪魔者はいなくなったとばかりに、『彼女』はその境界線だったものを踏み越え、
「……まぁ、聞いていなかったのは嘘だ。だが、お前の言うとおりにする必要も理由もその気もない。なぜなら、私は義理でも恩でもなく……私自身がそれを望んでここに来ただけだからな」
「……何故だ」
「何故？　言っただろう、私が……」
「――――――こんな人間に何を期待する！！　言葉一つさえ相手に届かなかった俺に……どうしてここまでして俺を助けるなどと言う！？」
その行動を理解できず、思うように動いてくれない『彼女』に苛

立ち、捲くし立てる。
取り乱す己とは対照的に、『彼女』はあくまで自身の調子を崩さない。

「お前が必要だからさ」
「……慰めなどいらない」
「あいにく私にはやって芽の出ない行為などしている暇はない。……だから、一度しか言わないぞ」

『彼女』は、それまで己の余裕の証として浮かべていた笑みを消した。
残るのは、ただ真摯な表情のみだった。

思わず口を閉ざすと、

「お前は言ったな。私は強い……と。――――――何故、そう思う？」

予想だにしない問いを投げつけられ、言葉を失う。

「元老院やその権力、得体の知れない脅威となる怪物……それら相手に臆せず戦う私は、お前にはそう見えたのか？」
「……何を」
「なぁ、人は何故戦えると思う？　戦い続けることが出来ると思う？」

有無も言わない、とはこのことだろう。
『彼女』が一方的に問いかける立場となった今、その向かう先である己に歯向かうことは許されていないように思えた。
常々感じていたことだが、『彼女』の言葉には力がある。言霊と

は異なる、人を従わせる力が、彼女の放つ言葉には宿っているように思えてならなかった。

これが、人が持つ器によって表れる違いというものなのか。

「……信念を、持ち合わせているから……ではないのか」

「信念か。勿論それを欠くことは出来まい。だが、更に元を辿れば、信念とは何から生じ、そして成るのだろうな。――――お前は……お前のその折れた信念は、何から生まれたのだ？」

折られた信念を生んだのは何で――――――『誰』であったか。

自然と目の前の人物を見つめてしまった己に気付く。

再度、ここが暗くて良かったと思う。

赤らんだ頬は、『彼女』に見られずに済んだ。

しかし、食い入るように見ていたことまでは誤魔化せなかった。

「ちょっと離れた間に随分素直になったみたいだな」

「……っ……だ、黙れ！」

「そう照れずともよいではないか。有り難いことだよ。そうであるなら光栄なことと受け取ろう。……だが、それは私も同じことなのだよ。お前が私という存在から信念を立ち上げたように、私もまた己以外の誰か――――――何かからそれを得た。野心であれ、理想であれ……理念は己の外側から得るものだ。そして、それを崩すまいと保たせるのも……己の外にあるものなのだよ」

そして、と続く言葉の先に意識を釘付ける。

「……理念を失うまいと、外側のものを保とうとする。そういうこ

とだよ」
「それは、どういう意味だ」
「お前がここで終わったら、私の信念が崩れてしまう。だから、お前を失うわけにはいかないと言いたい。そういうわけだ。……理解したか？」
「……からかっているのか」
「何だ、意地は健在じゃないか。……からかってなどいない。何とも思わん相手に会う為に、わざわざ敵の陣地までホイホイ足を運んだりするものか」

人も気も知らないで何か言っている。
駄目だ。自分では処理しきれない。

グルグルと同じ科白が脳を巡り、次第に熱が高まっていく。
頭の中が煮えているようだ。何も考えられない。

己の状況も忘れてしまうほどに沸騰する熱を冷ますのは、奇しくも諸悪の根源たる『彼女』だった。

「なぁ。お前は、私が何でも出来ると思っているみたいだが……それは、買いかぶりというものだ」
「っ、そんなことは……」
「少し前まで人の話にロクに耳を貸さなかった男が何を言うか。……まぁ、いい。考えて見ろ、お前のいうとおりならどうして私は人を集めていると思う？　私を殺しに来た人間であるお前に誘いをかけるというのだ？」
「それ、は……」

前者に関しては、考えたこともなかった。
後者に関しては、出会って初めてそれを向けられた時からずっと

付きまとっていた疑問だった。

沈黙に、『彼女』は微笑んだ。

「人が独りで出来ることなど、たかが知れているのだよ。少なくとも、世界の命運を動かすことなど到底できまい。世界は人の手で動かされるものだ。だが、それは大勢の人間の意志が必要不可欠。だからこそ――――――私は、お前を失うわけにはいかない」

「……」

「……お前という人間一人の言葉が届かないことを知った今なら……私の言っていることの意味がわかるな？」

是非の応答すら必要の無い問いだった。

何度目かの無言に、

「まったく、やっと口説き落とせたかと思えば一人で勝手に突っ込んでいきおって……」

あれほど冷や汗をかいたのは久方ぶりだったのだぞ、と溜息交じりにぼやいた後、

「一つ聞かせてくれ。お前は……一族や退魔師としてではなく、自分の意志として何かを突き通そうとしたのはこれが初めてなのだろう？」

「……ああ」

「ならば、これでよかったのだよ」

思いがけない言葉に、思わず耳を疑った。

「……良かった？」
「何故か？　お前はこれで一つ大事なことを識った。意志を通すことは、そう簡単なことではないという事をな。識ることは、大切だ。違うか？」

無知のまま進んだ結果である今の己が、それを否定できるはずがなかった。

「一人で何もなせなかったからといって終わることなどない。一人でないのなら、な。だからこそ、私はお前を迎えにきたのだからな」

一人ではない。
不思議なことに、それまでこびりつくように根付いていた躊躇というものが、『彼女』のその言葉でなんの抵抗もなく剥がれ落ちた。

残るのは、形ばかりの惑いだった。

「だが……だが、俺は」
「怖いのか？」
「――――――っ！」

何に、と問うことではない。
それは何よりも己が知っていることであった。

折れた経験は、傷として残る。痛みは記憶として刻み込まれ、疼きをもってこの先も自分を苛むだろう。

此度にようなことが、二度とないはずがない。
先を往くということは、それを覚悟した上で向き合わなければならないということ。

いずれ再び対面するであろうその時に、己はそれに耐えることが出来るのだろうか。

「だが、それ以上に……お前は悔しいんじゃないか？」

悔しい。

そう、確かに自分は悔しかった。

自分の言葉を聞かない元老院にではない。言葉一つ相手に残す力のない己に対して。己の無力さが、悔しくてたまらなかった。

「それならば……わからず屋ども相手に、意地を通しにいこうじゃないか。迷いは完全に断てぬともいい。今は存分に迷え。迷うことさえ恐れ、何も選べなくなるよりは遙かにましだ。何処へ向かって意地をぶつけければ良いかわからぬのなら、いつかそれが自分で選べるようになるまで……私がお前を導こう」

『彼女』は、己がいた位置から動き、歩み寄りながら言葉を連ねる。

近づいてくる『彼女』にかける言葉もなく、ただ凝視する。

『彼女』が告げた言葉を、これから告げるであろうそれらを、どのように受け止めようか、と考えながら。

ここで終わらなくてもいいという希望。

しかし、それは同時にここで終わることは許されないという絶望も意味していた。

「お前は……ただその志を折らず曲げず、伸ばせばいい。ただ……真っ直ぐに、己のあるがままを貫け」

頭の上で、手を戒めていた枷が外れる音がすると同時、その残骸

らしきものが地面に叩きつけられた。
霊力抑制の枷をどのように外したかは既にどうでもいいことだった。
二度と近寄ることはないと思っていた『彼女』が、今はこんなにも近くにいるのだから。

真っ直ぐと見据えた双眸は、闇の中でも絢爛と輝く銀色――――――白銀だ。そこには、己の姿が映っている。一人では何も出来なかった男が。一人ではないと諭され、もう一度立ち上がることを求められている男の姿が。

「――――――行こう。私がお前を連れていってやる。己を通した者にしか至れない、誇りを得る場所へ」

差し出される掌。
それは、己の無骨な男の手に比べれば、小さくか弱い。

希望を与え、絶望を摘み取る手。

希望とは、本当の絶望なのかもしれない。
絶望とは、ある種の救いなのかもしれない。

何故なら希望は儚い。
潰えれば、一瞬で絶望へとその姿と意味を変える。
何故なら絶望とは重く深い終わり。
少なくとも、終わりを迎えればそれ以上の絶望は訪れない。

己が何を手にすべきかを考えた。
考えながら、見つめる。絶望から己を引き上げようとする希望の手を。

「俺、は――――――」

手ではなく、『彼女』を見た。
そして、気付く。

答えなど、とうに己の中で決していたことに。

◆◆◆◆◆◆

あの手は、最大の幸福であり――――――最悪の後悔の象徴であった。

出会えたこと。求められたこと。
それらは、己にとって紛れもない幸いだった。
そして、後悔とはそのことを示すのではない。
求めたことも同様だ。

後悔とは、己の愚かさにして浅慮さ。
理解されたことに浮き立つあまりに、自分は何一つ理解できていないことに気づきもしなかった。

救われた。
だが、それだけだった。

与えられるばかりで、縋るのみだった。なにも知らなかった身に余るほどの何かを与えられたというのに、自分は何も返せなかった。

――――――俺は……。

思う。
この時を何度思い返しただろう。何十、何百と。

あの時、彼女が心中で【何を秘めていたか】を知っていれば、その手をとる意味が違っていたかもしれないのに。【彼女を失う運命】などなかったかもしれないのに。

もし、もう一度その手を差し伸べてもらえるのなら、救いはいらない。

縋らせてくれなくてもいい。
何もいらない。

ただ、今度は彼女を――――――

◆◆◆◆◆◆

【誰か】の独白はそこで終わった。
終わりと同時に始まるものがある。

それは、

「――――――蒼助」

かかる声と共に目覚める――――――自分の意識だった。

「……黒蘭」

目を開ければ、月と同じく垂直の位置から蒼助を見下ろす黒蘭。
頭部が感じる布越しの柔らかい肉質な感触は、黒蘭の脚らしい。

「おはよう。……気分はいかが？」
「……凄かった」
「そう。災難だったわね」
「……お前が言うな」

元凶は、笑って流すだけだった。
その背後で白い花弁が無数と宙を舞っている。
黒い天上の白い月もまた健在だった。

あるべきここが現実であることを示すそれらは、全て蒼助の意識には夢見心地に感じる。

「……俺、生きてる？」

「ええ。――――――おめでとう」

「なにそれ」

「第二関門も見事突破よ。殺神鬼は、貴方の魂を黒に等しいと認めたわ。これで貴方は私の眷属よ。私が産み出す最後の仔……最後の神狩り」

告げる顔は、屈めるように近づき、

「今、この瞬間から……私たちは同胞。私たちは共犯者。私たちは同じ目的を持つ運命共同体。私たちは、同じ敵に挑む共闘者」

「……」

合格を告げられても、蒼助は何の反応も示せなかった。

安堵すら後回しにして、思うことがあった。

黒蘭も様子がおかしいと察したのか、

「……どうしたの？」

「なんか……変な夢を見た」

「生死の境をさまよっていたはずなのに余裕ねぇ。どんな夢？」

「……細かい部分はよく覚えてねぇけど……手」

「手？」

「偉そうな女に手ぇ差し伸べられる夢」

夢の中の女が、どんな顔をしていたか。何を言われたか。細かい部分や大半の内容は

ほとんど覚えていない。
けれども、夢の終わりに差し掛かる直前あたりでそれが行われたことだけはしっかり記憶にとどめていた。

そして、その記憶に自分は、

「……全く知らねぇはずなのに……すっげぇ懐かしかった」

「……」

「いや、つい最近似たような経験したばっかなんだけど……それのことじゃない気がするんだよな。つか俺、牢屋みたいなところにいたし……」

抱いた感情は純然な懐かしさではなかった。
その想いの中には、溶け込み切れていないものがあった。

「……あと、悲しかった」

「かなしいの？」

「ああ。あれは、助けてくれる夢だ。だけど、悲しかった。嬉しいはずなのにな……」

なんかよくわかんねぇけど、と続けたところで蒼助は、ふいに黒蘭を見ようとした。

しかしその時、一陣の風が吹いた。
花弁と共に、黒蘭の髪も舞い踊る。視線の行き先となるはずだった顔は、その黒髪によって隠れてしまう。

その時、蒼助は何か重要なものを見逃してしまった気がした。
それが何であるかはわからずじまいに終わる。
何故なら、風が通り過ぎて再び黒蘭の表情が露になった時、そこ

には見慣れた微笑があるのみだったのだから。

「……そろそろ頭を退けて貰っていいかしら？」

促しを受けて、悪いと一言口ずさみつつ、黒蘭の脚の上から退くべく上半身を起こした。

そして、黒蘭は立ち上がったと思いきや、手を差し伸べてきた。

まるで、夢の中の再現を試みるかのように。

「……あの子じゃなくゴメンね？」

こいつ見ていやがったな、と何故か奇妙な確信が芽生える。

文句をつけてやりたい気持ちでそれを見つめる。

立ち上がることを促す手。それを手伝おうとする手。

自分は、この手が再び千夜であればよかったと思っているのだろうか。

思考し、蒼助は、

「……別にいいよ。――――――あいつに、そんなこと望んじゃいねぇ」

「では、何を？」

「何も、だ。俺は――――――」

ふと言葉を止めた。

言おうとした瞬間、その言葉の先にあるものに既視感を覚えたのだ。

そう、それは夢の中の『誰か』が、最後に言っていた言葉だ。

自分は今――――――

「……俺は、”あいつの手”なんかいらねぇんだ。あいつは欲しいけどな。……だから」

「……だから？」

「――――――今度は、俺が引っぱり寄せてやる」

手を伸ばし、自分よりもずっと小さな手を掴む。

形ばかりに留め、己の力で立とうとした時、

「……うわ」

思わず声を上げた。

黒蘭を見上げた先の、その背後――――――月がある。

白い月が紅く染まっていくその様子が、そこにあったのだ。

神秘的で神々しいばかりだった白い月は晴れ舞台から引きずり下ろされ、入れ替わりに現れたのは禍々しいまでの妖艶な紅の月であった。

天上にて起きた早替わりに、蒼助は終わった後も暫し魅入っていたが、手の中にほとんど包んでしまう形で握っていた黒蘭の手がクッと力を込めて握り返したことを感じ、注意を元に戻す。

「……それじゃぁ――――――始めましょうか。蒼助」

黒蘭が笑った。

微笑などという表現では留められない――――――不敵で、大胆な笑みだった。

それは、戦いに挑む者の勇猛な凄みを宿していた。
戦い。そうだ自分たちはこれから戦いに行くのだ、と蒼助は黒蘭のそれを以って試験が既に終わっていることを悟った。
名前で呼ばれた。それは、共に同じ立ち位置で戦地を共にする者として認められた証であった。

黒蘭は、月を見上げた。
そして、再び口端を上げた。凄絶な笑みを乗せて、

「あの忌むべき血塗れの月の下で――――――あの子の幸福な結末を目指す物語を」

これから始まるであろう果て無き戦いへ向けた宣誓を口にした。
戻る視線に、応えは一つしかないと、蒼助を笑って見せた。

そして、立ち上がる。
手は取り合ったままだったが、立つその力は間違いなく自分のものであり、自分の意志であった。

【壱百六拾弐】　果てしない物語　（後書き）

書き終えてわかったことがあります。結局のところ、この物語は複雑なようで単純なのだな、と改めて確認した回ですね。

望まずして手に入れてしまった悲劇に納得が出来なかった誰かが、同じ想いを抱いた黒い神様と手を組んで、果てしない時を経て失った誰かを取り戻そうとする。

そんな感じのわかりやすい『御伽噺』なのです。

【壱百六拾参】　動き出した景色（前書き）

ああ、我が道を行く人々よ

［壱百六拾参］　動き出した景色

蒼助は、黒蘭と共に表へ出てきて最初に見たものに言葉を失った。

「――――――やあ」

と、手を上げた人物は、見知らぬ容姿で聞き覚えのある声を発した

蒼助は五回ほど瞬きをした。本当は目を擦りたいところだったが、さすがにあからさま過ぎるだろうと自嘲した。

「二人で出てきたということは、無事に終わった……とみていいのかな」

「コラコラ。展開についていけていない若者の動揺を無視してんじゃないわよ」

当人には見えていないのか無視されているのかわからない、蒼助の内心の揺れを拾い上げてくれたのは先程同盟を組んだ黒蘭だった。

「え、ナニが？」

「何って……あんた」

蒼助はすっとぼけるその人を再度凝視した。

前をきっちりと閉めたダークブラウンのロングコート。

両手には皮の手袋がきっちりとはめられている。

いつもは後ろで束ねられている茶髪は、今はセミロングの長さのままに流れている。
成熟を醸し出す雰囲気に違和感を与える、少しばかり幼げな顔立ちを強調させていた眼鏡は、今は無い。

代わりにそこに鎮座するのは――――丸いサングラスだった。

あらゆる要素がいつもと違うが、それは下崎三途というその人であった。
目に映る相違点を全て呑み込んだ蒼助は、ようやく言葉を吐いた。

「……イメチェンにもほどがあるだろう」
「勝負服といってほしいなぁ。戦闘服も可だよ」
「つまりは、戦闘モードということで？」
「まさしく。私の魔術師としての……【正装】なんだ」

魔術師というヤツは、みんなコスプレめいた格好を基本にするのか。
蒼助が一種のカルチャーショックを受けていると、横で、

「へぇ。”あの時”以来じゃないの。……まだとっておいたのね」

黒蘭だ。
何かを含んだ口ぶりに、三途の表情が僅かに憂いを滲ませた。
そして、胸元の留め具をいじるように指先を引っ掛けながら、

「……私なりのケジメですよ。腹を括った証と解釈してください」

「ふ～ん？」
「ついでに貴方から貰ったコレもまた使わせてもらいます」
ポンポン、とコート越しに腰を叩いた。
腰のラインにしては歪な浮き上がりがあり、そこに何かが備え付けてあることだけはわかった。
「あら、捨てられちゃったと思ってたのに」
「ヌケヌケと。……わかっていたでしょうに」
溜息交じりに吐き捨てる三途は、不意に蒼助を見た。
目が合い、
「……さっきはどうも」
「腹立ったのは本当だから謝んねぇぜ、センセ」
「嫌味じゃないよ。……危うく取り返しのつかない後悔をするところだった。だから、礼を言わせて。――――――ありがとう」
言葉に嘘偽りは無いようだった。
「やけにすっきりしてるじゃねぇか」
「……そうだね。すっきりしたよ。六年分の鬱屈が解消……とまではいかないけどね」
「いかなかったのかよ」
「残念ながら、生憎ね。……これをどうにか出来る人は、一人しかないから。だから……私は、これからその人を連れ戻しに行こうと思う」
蒼助は、それが自分に向けられているというよりも、三途が自分自身に対して決意を一層確固たるものとして固めるべく口にしてい

るように思えた。

「……これが、正しいか悪いかはわからないよ。でも、ここで行動しなかったら後悔するってことだけは……わかったから」

「さっきまでとは随分違う言いようじゃん」

「君みたいにはいかないっていうのは変わっていないけどね。……けど、行くよ。ダメな大人なりに頑張らせてもらうさ」

自覚あったのか、と自分も思っていたことに間違いが無かったことを確認しつつ、

「二人揃ってあいつの恨みに買いに行くんだぜ？」

「覚悟は出来ているよ。それでも……あきらめるわけには、いかないんだ」

三途は、少し困ったように眉を歪めて笑う。

「なにせ、ただでさえダメな大人だからさ。……あの子がいなくなったら……本当にダメになっちゃう」

もう十分見事なダメな大人だ、と蒼助は矛盾を孕んだ感想を抱いた。

こりゃどうしようもない、と後に付けて。

三途に対するイメージが完全にそれで固まった蒼助だったが、不思議と腹は立たなかった。少し前までの彼女にはなかったものがあり、あったものが削り落ちている。そのせいだろう。

加えて、自分も先程までとは大分異なる思考になっている。三途のダメな発言に関して、それほど関心がなくなっている。仮に彼女

が動けないままであっても、自分は一人ででも千夜の下へ躊躇無く向かうことにしただろう。邪魔するなら、殴り飛ばしてでも目的を遂行していたかもしれない。

そこまで考えて、蒼助はそんな自分に少し驚いた。以前よりもロクでもない人間になっているじゃねぇか、と。しかし、眷属となった相手を思い出し、その衝撃もすぐにおさまった。目線を下げて、己の右寄りにいる者を見た。こいつのじゃなぁ、と妙な納得を得て、そのことについて考えるのはもう止めた。

大事なことは、もう一つきりに絞ったのだから。
この期に及んで、迷うこと、惑うことは他に無い。

そう己に確認した矢先、

「……ぐぬ」

ゴン、という鈍い衝突音と共に、そんな呻き声が三人の場に入り込んだ。
三者がほぼ同時に同じ方向を見遣った。

玄関だ。

そこにあるものを見て、最初に口を開いたのは、

「……上弦さん？」

「……前から思っていたが、この玄関は少々低いぞ。三途」

玄関のふちにぶつけた額を摩る上弦は、家主に苦言を申し立てた。
そんな上弦に黒蘭が呆れる。

「……なに八つ当たりしてるの。ところで、あんた何処行ってたのよ？」

「貴方が持って馳せ参じろよ、とおっしゃったものを運んできたところですっ！」

「あー……そんなこと言ったっけね」

少し前の言いつけを随分前のことのような口ぶりで遠くを見る黒蘭を、上弦は拳を痙攣させることで許容した。それを見た蒼助は、見なかったことにした。三途も同様だった。

「……おっさん、何持ってきたって？」

「見ればわかるわよ」

促しを受けて、蒼助は玄関へと近づいた。
上弦はそれを察して退いた。ぶつけ損だったが、そんなことを気にするような場合ではない。そんなことに拘る小さな男でもなかった。

蒼助が巨体を退くことでぽっかり開いたそこを潜り抜けると、

「……あ、俺の」

道沿いに何かが止められている。
単車だった。学校に置いてきてしまったはずの、愛車。

「わざわざこれを取りに行って持ってきたのかよ」
「これから駆けずり回る羽目になるからね。さすがに足がないとキツいわよ」
「かけずり回るって……」
「もう一つ準備が済んだら説明してあげるから。……で、その準備として朱里に電話をかけなさい」
「……はぁ？」

何でこんな時に、と疑問視を向けてくる蒼助に、黒蘭は面倒くさそうに一息。

「早くしなさい。ゴチャゴチャ言っているだけタイムロスよ」
「……必要最低限の説明を求む」
「特定の目的地に行くのに車をただ走らせているだけで辿り着けるの？　案内人（ナビゲーター）がいなきゃ到達できない場所だってあるでしょう」
「ナビゲーター……？」

その時、ズボンの右ポケットの中で携帯電話が震えた。
不意を突かれて驚く蒼助の傍らで、黒蘭がにやりと笑う。

「……先を越されたわね」

言葉は暗に相手が誰かであるかを表していた。
そういえば、千夜の不在の時に連絡を取れるように電話番号とアドレスを交換していたのだったと思い出す。
もうどうにでもなれ、と蒼助は説明の請求を諦め、

「……朱里、か」
『……蒼助』

互いの確認を済ませた後に、先に言葉を放ったのは、

『……今から、姉さんを助けに行くの？』

「ああ」

『……姉さんは、自分から行ったのに？』

「ああ」

迷い無く、断定を施していく。

すると、不意に少し長く沈黙が置かれた。

それでも待った。待つと、

『……いやがられるかもしれないよ？』

「だろうな」

『嫌われて、恨まれて……二度と笑ってくれないかもしれないよ？』

「かもな」

淀みなく返答を重ねていくと、朱里の声に焦りが滲む。

『そ……それでも、行くの？』

答える言葉は、一つしかないのでそのまま告げる。

「――――――行くに決まってるだろ。何でもクソもねぇ。……俺は、そうしたいからそうする。嫌がられたってふんじばってでも連れ帰る。嫌われたんなら、また惚れさせる。けどよ……死んじまったら、どうすることもできねぇ。だから、行く。あいつがどう思うかなんて関係ねぇ。……おまえは、どうなんだよ」

『……』

沈黙に沈む朱里に、蒼助は問いを重ねがける。

「お前は、何で俺に電話してきたんだ。お前の愛しのお姉様の言うとおりにして、そこにいるんだろ？　今更、何しようと思って俺なんかとこうして話してんだ？」

三途が何かを含んだ視線で見ていたが、蒼助は目に入らないふりをした。

黒蘭は淡々とした視線で終わりを待っており、上弦は目を閉じている。

答えが返るまでの間の暇潰しとしてそれらを確認し、朱里が沈黙の殻を破ったところで全てを忘れた。

電話越しに相対する少女に全力で意識を注ぐために。

『……私、姉さんが大好き』

知っている、と蒼助は口の中で出さずに相槌を打った。

示し方は間違っていた。だが、それ自体は何者も及ぶこと叶わない純愛のそれだ。

三途のような罪悪感を含むものでもなく、自分のように欲望を含むものでもない。

ただただ愛するだけの清い存在。献身的に注ぐその様は、純粋という名の一つの結晶であった。

見返りもなく、たった一つの何かを一途に愛せるこの少女を、蒼助は気に入っていた。

そして、自分よりも先にこうして行動に出たことは賞賛すべきものだと思う。

後は、もう一歩踏み出すだけだ。己の意志で。

『……姉さんが、本当の姉さんでなくても大好きだよ。姉さんが……私のこと本当は好きじゃなくても。私と姉さんじゃ、見た目も中身も何一つ本物でなくても……家族でいたかったよ。――――――本当に、心から。姉さんが好き。大好き。愛してる。誰よりも誰よりも……』

蒼助は、自身で持つ情報と朱里の言葉の意味を照らし合わせた。

あの千夜は朱里の姉ではない。本物の『千夜』は死んでいる。彼女が慕っていたのは、姉の名を騙る偽者だった。

既に朱里はそれを知っている。それとも知っていたのか。

どちらであろうと、朱里の中にある『真実』は一つだ。

『姉さんが心から誇れるような、偽物でもかまわないって言ってもらえるような妹になりたかった。良い子でいたかった。……だから、止めなかったの。良い子にして、姉さんのいうとおりにしようと思って。行かないでって……言わないように我慢したの。でも……でも、私……』

あと少し、というところで言葉は止まった。

何が朱里を縛り、踏みとどまらせているのか。その答えを、直前までの言葉の中に蒼助は見出した。

「なぁ、オイ。……お前、あいつが偽物の姉貴でも好きだっつったよな？」

飛び込むことに躊躇する子供を蹴り落としてやるべく、蒼助はもう少しだけ言葉を紡いでやろうと口を開いた。

「お前ら、お前らが思っている以上に結構似たもん同士だぜ？　少なくとも、俺にはそう思えた」

『……』

「別に俺がこれから言うことが正しいなんて言わねぇ。でも、一応言っておく。……あいつだって、お前が良い子でなくなってお前を嫌ったりしねぇよ。お前が、置いていかれてもあいつのこと見捨てられないようにな」

『――――――』

朱里の息が止まる気配を、機械を通して感じた。

そこで言葉は終わる。

もうこれ以上は必要ない。蛇足はない方がいい。

後は待つだけだ、と蒼助は沈黙に腰を下ろす。

そして、

『……け、て』

小さい。しかも聞こえなかった。

何を言いたいかは既に予想済みであり、それにハズレはないというのはわかっていた。

だが、言葉は肝心だ。

行動することも大事だが、言葉による意思表示もそれに並ぶ。

そうだろう、と黒蘭を見た。笑う黒蘭に、蒼助はその選択を変えなかった。

「……なんだ」

『もう……悪くていい。私は……姉さんの言うことを聞けない…

…悪い子でもいい。だから……だから、蒼助』
「ああ」

『――――――姉さんを、助けて』

堪えていたものを吐き出すようなそれを、蒼助は確かに聞いた。
続く嗚咽に、蒼助は大きく息を吐きながら、

「やぁっと言いやがったな。……ったく、たったそれっぽっちを言うのに時間かけすぎだろうが」
『うるさいうるさい馬鹿ぁっ……！』

わああん、と緊張野糸が切れたのか、器用にも朱里は泣きながら罵倒する。
電話から聞こえるやかましい怒声に耳を痛めながら、やっとらしくなりやがった、と蒼助は一つの安堵を得た。この少女はこうでなくては、と。

「はい、ゴクローさま。それじゃぁ、もう本題イケる？」
「え、ああ……なんだったっけかオイ」
「思い出さなくていいから、貸しなさい」

用は済んだのは確かだったので、蒼助は抵抗なく黒蘭に己の携帯電話を明け渡した。

「――――――はぁい、朱里。立ち直って早々悪いんだけど、千夜のところに行くためのお手伝いして頂戴な」

◆◆◆◆◆◆

バイクを暖気させる間、黒蘭が必要最低限の説明を済ませようと口を開いた。

内容は現状と行うべき行動についてだった。

「千夜は、隔離世にいるわ」

「かくりよぉぉっ？」

黒蘭の口から出てきた言葉に思わず声を大きくした蒼助は、己の僅かばかりの知識に確認を求める。

蒼助自身はそこに入ったことはない。何故なら、降魔庁において上級者向けのハイレベルの訓練所として名が通るそこは、蒼助のような若輩者など足跡を五歩残したところで終わるとまで言われる危険な場所といわれている。しかし、噂が単なる誇張された虚仮威しではないことがわかる程度には馬鹿ではない。

「なんだってそんなところに」

「禍神が潜伏しているからに決まってるでしょ。餌場としても工場としても、他にはない適所だからね。おまけに管理者である降魔庁も先手を打たれてしまったら、迂闊に手出しもできない」
「……それって無茶苦茶不利な戦地に突っ込んで行っちまってるってことだよな」
「それ以外のどんな判断ができるの？」

言われなくてもわかってる、と怒鳴りたい衝動が湧き上がるが、無意味であると理性もあって煮えきれないまま留まる。

別れてからどれほど時間が経過したか。
あちらに行った千夜が、今どうなっているのか。

それまで無意識の方へ弾いていた考えと、改めて向き合わざるえなくなった蒼助には、正直この時間さえ惜しかった。
しかし、理解した上で動かなければならない。我武者羅も闇雲もダメだ。
何もわからないまま突き進んだところで、望むゴールに辿りつけるわけがない。

「……落ち着きなさい」
「……わかってる」

事態は切迫している。
だが、こんな時だからこそ冷静になって正しい行動を取れるような状態を維持しなければならない。
蒼助は、言い聞かせるように念じ、黒蘭の静かな叱咤を飲み込む。

「あのコは無謀な行動をしているのは確かだけど、道理は通っている。無茶でも不利でも、今夜必ず【孵化】を阻止しなければならな

いわ。あれは既に肥えに肥え太っている。もういつ爆発してもおかしくない。いくら現世から切り離された亜空間とはいえ、あんなものが内部で産まれたら崩壊するしかないわ。千夜は……それを防ぎに行ったの。片道切符承知の単身特攻でね」
「……何かもが最悪だったんですね。あのコの心の限界も、取り巻く状況も……全てが」

三途が口にした理解の呟きに、蒼助も同調する。

「後に残るのは……一人が死ぬか、皆が死ぬか……ってことか」
「最悪の極みをいくとね。……そして、それは私たちが阻止するべきこと」
「……どうすればいい」
「【孵化】したらアウト。千夜が奴を道連れに死んでもアウト。……このどちらに対しても貴方たちは間に合わなきゃならない」

途中出てくる用語らしきものは、全て省いて理解を進めた。
そうすれば、やるべきことは単純だった。ただ、難易度は高いが。

「間に合えばいい……ってか。簡単に言ってくれるぜ」
「隔離世の入り口は一定の時間ごとに移動すると聞いています。そして、転移先を知っているのは、降魔庁の管理部の人間のみ。……どうするつもりですか」
「馬鹿ね。さっきのは何のための電話だったと思っているの？　立ち上がったからには、いつまでもブランクが言い訳に通ると思っていちゃ困るわよ、三途」

む、と顔を顰めた三途はサングラスの位置を直すふりをしてそっぽを向いた。

「入り口なら、朱里が探している。こういう探索能力に関しては、私たちカミなんかよりもずっと有能だから、もうちょっとすれば……」

「……ずっと思ってたが……やっぱりあいつは」

「あのコはただの子供であってほしいと願っていたから、使わないようにしていたのよ。けれども、悪い子になるというのなら、その願いも聞けなくなるでしょうね」

その時、蒼助の手の中に戻っていた携帯電話が震える。

来た、と誰もが思った。

蒼助は素早く機体を開き、その報告を聞く。

『見つけたよ。たった今出現したばかりの出来立てほやほやの。場所は――――』

「……その入り口の出現時間はどのくらい保つんだ？」

『わかんないよ。一つの、最初に見つけたやつは、様子見してたら五分くらいで気配が消えちゃったけど……』

「――――わからないものを知ろうとするよりも、わかったものを追いかける方が利口よ、蒼助」

会話に割り入るように黒蘭の指摘が入る。

遠まわしに何を言っているのかは、蒼助にはすぐにわかった。

「……っ、わぁったよ。ようは、間に合えばいいんだろ、間に合えば」

暖気もいい頃合だ。

準備は全て整い、すぐにでも走り出せる状態となった。

「センセ、後ろ乗ってくれ。それと、携帯での連絡のやり取りも頼む」
「わかった」
了解を背に受け、蒼助は己の愛車に乗り込んだ。
意気消沈したばかりに、学校にそのまま置いてけぼりにしてしまうという酷い仕打ちをしてしまった愛車に悪い、と思う。
しかし、もう少し無理を強いることになる。
だが、全てが終わったら、念入りに手入れをしてやろうと思う。
千夜と自分に対するそれに及びはせずとも、手に入れる際に次ぎ込んだ初給料分の愛を込めて。
「……出来れば、今から目指す一度目で達成したいですね。下手をすると、一晩中いたちごっこしてタイムオーバー。そして、東京は滅亡です」
「だな」
せいぜい時間切れだけは阻止しよう、とハンドルグリップを握りこむ。
エンジンをかける。
そして、十秒。
東京の存亡と、それを阻止しに行った一人の女の命をかけた、風変わりな追いかけっこがスタートを切った。

［壱百六拾参］　動き出した景色（後書き）

ずっと同じ景色しか見ようとしなかった過保護二人組のそれが、ようやく変化し出したという意味を込めてのサブタイです。まだ完全とはいいがたいですが、それでも大事な一歩です。

あとはそれぞれのタイミングで変わるきっかけを見つけるだけです。まぁ、それが難しくて、そこまで行くのが長い道のりなのだけれども。

次回は、再び隔離世ターンです。

［壱百六拾四］　二人という希望（前書き）

エンドロールはまだ流れない
彼女が一人ではないのなら、まだ――――――

【壱百六拾四】　二人という希望

現世では、物語の道筋を変えようと動き出した者たちが走り出していた。
そして、その現場と隔たれた異界においても、異なる形でそれを為そうとする動きが現れだしていた。

まるで、黒き奇策姫の期待に応えるように、物語の行方は定まりかけたところを再び見えなくなっていく。

世界滅亡よりもタチの悪い、一人の犠牲により多くが救われるという美しくも醜悪な、この物語において最も忌むべき最悪の結末を打ち砕く希望は、まだ絶えていないとでもいうように。

◆◆◆◆◆◆

現世では、主立った駒である救援組が奔走している。
そして、異界・隔離世では、奇策姫が【切り札】と見定め、大きな期待を寄せる対象となった凡庸な少女が、事態の好転を図ろうと

奮闘していた。

救援が来るまで、この場を支えられるのは彼女――――――新條久留美しかいなかった。

この場にいるもう一人、結末の行方を左右する存在の行動を抑止すること。

それが、彼女に与えられた役目だった。

そして、更には――――――

「……よし、作戦内容を復唱するわよ」

「……」

微妙な表情をしている千夜を無視して、久留美は『内容』の復唱を開始した。

「まず神崎の気を引くために私が囮になる。多分、あの馬鹿はあんたが散々コケにしたもんだからブチ切れて簡単に引っついてくるでしょうね」

引っついてくるどころか丸飲みされてかねないかもしれないが、という危惧は胸にしまっておき、

「あんたは私の影の中に隠れて待機。んで、隙をついて神崎の首を、こう」

しっ、と立てた親指を首元で横一線に引いた。

それに対して、

「……首を撥ねるだけでは駄目だ。ヤツの頭部に隠されている角ご

と首を完全に破壊しなければならない」
「ぇっ、じゃ、じゃあソレね！　……あと、多分チャンスは一回こっきりだろうから、完璧にイケるって感じになるまであんたは存在を悟られてはダメ。だから、たとえ私が危なくなっても絶対に手ぇ出しちゃダメよ」

作戦内容はそこで終わる。
久留美は仕上げとばかりに、付け足すように、

「異論はないわよね」
「――――ありまくりだ、馬鹿」

耐えかねたように、ついに千夜はついに不動を解いた。
向き合って座っていた久留美に両腕を伸ばし、その頬を引っ張った。

「い〝っっ、あたたたた、ふぁ、ふぁっ」
「それが、俺とお前の脳ミソ、合計二つ使って出た良案か？　……笑わせるな」

半分据わった目で千夜は、鼻で笑う。
そして、小馬鹿にするその笑みも消して、グイグイと久留美の口角を拡げながら、

「……危険過ぎる。そんな作戦は認められない」
「はぁんへふっへぇっ」

拡げられて、拘束された口を開放することす後回しにして、久留美はまずキレることにした。この女にだけはそんなことを言われる筋合いはないという反発による衝動であった。

暴挙を働く両腕を己のそれで引き剥がし、

「そんな身体で、一人で真っ正面から突っ込むよかマシじゃない！」

「二人して殺される可能性が全体の大幅を占めている作戦の何がマシなんだ」

「あんたの特攻案はどうなのよっ！」

「勝ちはしないだろうが、負けはしない」

痛くも痒くもないと言わんばかりの言葉に、久留美はその頭をぶん殴ってやりたくなったが、握り締めることで堪えた。

けれど、言葉は噛み締めることはせず、

「……何するか知らないと言わんばかりの言葉に、久留美はその頭をぶからね。それこそ却下よ。却下却下、大却下っっ！」

「二人が死ぬかもしれない無謀な作戦よりも、一人が確実に生き残る方がいいに決まっているだろう」

「いいわけないでしょ！　今までなに聞いてたのよ、馬鹿！」

双方は一歩も譲らず、睨み合う。

かち合った視線から火花が飛び散りかねない、激しい闘争であった。

しかし、

「……頼むから」

懇願が、それを断つ。

泣きそうに歪められた千夜の表情から放たれた、それが。

「俺は……お前を死なすために、ここに来たんじゃないんだ」

久留美は、ぐっ、と胸を押されたような息苦しさを感じた。
なんてヤツだ、と久留美は憤る。
しかし、あと少しで泣くのではないかという表情を前に、それも踏み出せない。

今まで懇願されても、ただでは引かなかった。むしろ、それを『弱み』として足元を見た要求をする方が常であった。

それがどうだ、と久留美は己を思う。
なんとも言えないとはこのことだった。
目の前に曝された『弱み』に、久留美は踏み出しを躊躇していた。
これでもし、泣かれたりなどしたら自分は簡単に折れてしまうかもしれない。

なんてヤツ。
なんてヤツなんだ、この女は。

久留美は、呪詛のような悪態を心中で繰り返し、苦し紛れになんとか言葉を吐いた。

それは、

「あんたって……狡(ずる)いヤツね」

非難だった。
手段を選ばない相手への、糾弾だった。

「……狡いわよ。自分が同じことする時は、私が同じ風に言っても……聞き入れようとしないんでしょ」
「……」
少しずつ、呼吸を整えるように言葉の滑りを取り戻していく。
目を逸らせば楽になれたかもしれなかった。
けれど、久留美はあえてそれをせず、千夜のその表情と向き合った。
でなければ、己に酔い、この行為を正当化していまいそうだった。
それでは、ダメだ。
だから、
「そうよね。あんたも、結局は自分の思うようにいけばそれでいい自己チューだものね。私の気持ちとかはどうだっていいんだものね」
「っ、ちが」
「聞いて」
否定に被せるように、久留美はすかさず先手を打つ。
「……別に、あんたのことを責めたりしてるじゃないわよ。ただ……事実を言ってるだけ。私は、その事実に私なりの対応をしようと思ってこんなこと言ってるのよ」
「……言っていることの意味がわからない」
そりゃそうだ、と久留美は己の言葉の曖昧さは尤もであると自覚を持っていた。
あえてそうしたのだから。

これで千夜はとりあえず話に耳は貸すだろう、と考慮して。

幸い、釣らした餌の選択は間違っていなかったようだ。

「――――意見が食い違った時って、どうするもの？　大抵、お互いの意地をかけて勝負に流れ込むわよね。私も、あんたにそれを要求しているの。……私にも足掻くチャンスを寄越しなさい」

「チャンス……？」

「そうよ。これ以上あんたと拘わっていたら私は死ぬっていうあんたの持論に、あんたは納得できても私は欠片も出来ていないのよ。あんたがその持論を下げろって言っているわけじゃないけど、私にだって言い分があるってことを忘れないで頂戴。私の主張する、”私は死なない”という意見を拒否するのはいい。――――でも、無視すんな」

勢いをつけようとして、久留美は、ビッと眼前に人さし指を突きつけて見せた。

しかし、久留美の『敵』はその程度では動じない。

「……お前の言うチャンスとは、つまり……勝負しろ、と？」

「そんぐらい手際よく私の話に耳を貸してくれたら、手間が省けたんだけどね。……そう、私が欲しいチャンスは、勝負する権利。つまり、私が正しいかもしれないという可能性をあんたの中の天秤の乗っけろって話よ。……どっちか、空いてるでしょ？」

「……」

「討論、っていうのもあるけどね。時間ないから却下。どっちもお互いに納得しえる決定的な証拠や根拠がないまま続ける討論なんて、埒が明かないわ。……だから、賭けましょう。私とあんたのどっちが正しいか」

言葉の終わる瞬間、パン、と久留美の右頬が弾けた。
ぴりり、としたその痛みを放ったのは、
「……俺がこんなことを言えた義理ではないのは、わかっている。だが……」
「――――そう、ねっ！」
久留美は、言うよりも早く千夜の胸倉を掴んで、引き寄せた。
鼻先が触れるか触れないかまで距離を縮め、
「でも、それは早とちりってやつよ。私の”かける”って、そういう意味じゃない。”懸命”の方よ」
「どう違う」
「あんた、私の前提忘れてんじゃないわよ。死なないっつってんでしょうが。博打するのは、あんたの方よ」
「……なに」
「私は、私の方針に全力を懸ける。あんたは、私に自分の運命を賭ける。メリットもデメリットもお互いに割り振り出来ているわ。……どうせ最後だっていうのなら、私に賭けてよ。応えてみせるから」
千夜は、信じられないものを見る目で久留美を凝視した。
「……馬鹿か」
「なんとでも」
「……なんで、どうして……そんなことを言うんだっ！」
喉の震えが、叫びとなった。
千夜が俯いたためそれを真っ向から受けることはなかったが、響きは久留美に届いていた。痛いほどに。

「俺は……万能なんかじゃ、ない。何でも出来るわけじゃ……ないんだぞ。わかっているだろ……っ！」

「当たり前のことを今更言うんじゃないわよ。言われなくても、もう十分承知しているっての。それでも言うわよ。私に賭けてよ、信じてよ。……私も、危なくなっても最後は決めてくれるってあんたを信じる」

「馬鹿げている……どうして」

戻ってるぞこのヤロウ、と突っ込みたくなる部分を押さえ、久留美は辛抱強く、

「……今、言った。信じているからに決まってるでしょ。万能じゃないから……それをわかっているから、言ってるのよ」

矛盾した内容に対する千夜の怪訝な表情は、理解したそれとは言い難い。

理屈ではないのだから無理もないと思うと、久留美は、

「あんたが、結構ダメダメなヤツだっていうのは……さっきわかった。……だから、よ。そんな部分でも、相手のこと知らないよりは知っている方が安心するのよ」

「それが、失望に値する部位であっても……か？」

「そりゃそうよ。相手が自分の期待ハズレや、自分の理想に叶っていないという事実よりも……知らないでいる疎外感よか、よっぽどね」

一息おいて、久留美はここにきてようやく保たれた均衡を、されど崩そうと決意をした。

「……あんたのことだから、今までずっと……そんな風に、一人で

どうにかしようとしてたんでしょうね。何もかも、自分一人で解決しようとして、誰にも何も言わなかった。そんなあんたを――――死んでいった人は、どんな気持ちで見ていたかと思う？　どんな気持ちを抱えて、何をして、どうなったの？」

千夜が俯いた先で、息を呑む気配を感じた。

それでも、続けた。

「言わなくてもいいこと言っちゃうのもアレだけどね……言わなきゃいけないことを言わないっていうのは、もっとダメなのよ。……思っているだけじゃ、相手に自分の気持ちなんて、わかりもしなきゃ伝わりもしないんだから」

「……っ……」

「だから、私は言うわよ。少なくとも、今この場で言っておきたいことは残らず全部ぶちまけておくことするわ。悩むのは止めたの。悩んで答えを出そうとするよりも、動いた方が早いってわかったから。……私は、そんなあんたを見ておきながら何も言えないまま死んでいった意気地なしにだけはなりたくないもの」

見たことのない千夜の向こう側にいる人間と、かつての不貞腐れていた己に叩きつけるように、久留美は啖呵を切ろうと口を開いた。

「……こんな馬鹿な作戦だって、あんたと一緒にやるって話だからこんなに推してんの。怖いけど、あんたを信じることを選ぶの。こんなこっぱずかしい科白だって、素面で言えるのは……私がどんな気持ちでいるか、言わなきゃあんたに伝わらないと思ったからなんだからね！」

言い切った矢先、羞恥は耳に集まった。

顔全体に及ぶ前に、まだ素面を保って紡がなければならない言葉

が残っている。

一息挟んで、久留美は声色から棘を抜くように意識しつつ、

「あんたの経験と私の見解によれば……世の中、優しい人間ほど損したり馬鹿みたりするものなのよ。次いで言えば、”憎まれっ子、世にはばかる”っていうじゃない。……私は、間違いなくそう括りに入るわね。――――――だから、死なないわよ」

不意に千夜が顔を上げた。

その目の奥の光が揺れているように見えた。

そこまで届いただろうか、と思いながらも、

「私の両親は、優しい人たちだった。そして、死んだわ。……でも、私は生きてる。そういうことなのよ。――――――だから、信じなさい。私を、信じて。……あんたに生きてもらう代わりに、私は絶対にあんたを置いていかないから」

言葉はそこで終わった。この場で言いたい全てを、久留美は言い切ったのだ。

羞恥心は、勢いを失くすと一気に襲い掛かってくる。

鏡を見なくても、自分の顔が温泉ザルのようなことになっているのは、肌身でわかった。

恥ずかしさで死ねそうだった。

けれども、死なないと言った矢先でそれはまずい。

久留美は、千夜の視線と自分の羞恥心に耐え難くも耐えようと踏ん張った。

その視線から、千夜という存在から目を逸らすまい、と。

それが生きることを強いる者の責任であるのだ、と思った。

互いが不動のまま、視線を絡ませたまま、しばらくその時間が続いた。

その時を終わらせたのは――――――地響きだった。

建物が揺れ出すほどのそれに、一瞬の間互いが互いを忘れて動転した。

「な、なにっ？」

「――――――これは」

千夜ですら把握できていないようで、それを見せられてしまえば久留美など一層焦りが募るばかりだった。

外が見えない密閉した空間にいることへの改まった自覚が、それを尚のこと掻き立てる。

そして、焦りはついに久留美に行動させるまで高ぶった。

「……ああ、もうっ！」

耐え切れなくなったようにヒステリックに唸り、久留美は立ち上がり、窓に近寄った。

開けようと手をかけたが、鉤は外れているのに酷く錆付いているようで、いくら力を入れても開く気配はない。

「このぉっ！　……あ」

ぶつけどころのない苛立ちを叫んだところ、千夜が立ち上がって隣に立ったのだ。

退いていろ、と手振りで示し、埃で真っ黒になった窓ガラスに肘を立てた。

引いたかと思えば、粉砕音。

叩き割った窓ガラスは歪な名残りを内枠に残し、穿った穴を出現させた。

灰色の薄暗い空と、灰色の建物の光景が、そこから伺えた。

ある種の絶景に、この異世界に来るまでの記憶がない久留美は、呆然と魅入っていた。

しかし、その光景に現れた【モノ】を見た瞬間、さっと血の気が引いた。

「……なに、あれ」

久留美の言葉に千夜の返事はない。

何故なら、千夜もそれを見て言葉を失っていた。

「……」

唖然とした表情は、すぐに何かを理解したように歪められた。

灰色のビル群やマンションの群の向こう。

地平線に、何かが見えていた。

初めは蜃気楼かと思わせるそれだったが、よくよく見ていると、

徐々にはっきりと視界に居座っていく。見間違いではないといわんばかりに、近づいてきている、と見る者にわからせるように。

「……建物、よね……？　工場、かしら……」

「神崎の【王国】だ」

王国、という言葉に久留美は訝しそうに反応した。

「なにそれ」

「やつの巣だ。そこら中に散らばった小さな廃工場を密集化させて出来ている巨大な工場地帯。……神崎に言わせてみれば、あれは【王国】らしい」

あのツラでメルヘンかよ、と神崎が己の顔を作り変えたことを知らない久留美は、おなじみの蛙面を想像して、げぇっと苦い表情を浮かべた。

「やつめ……無茶苦茶やりやがる」

「……え？　え？　どう、いう？」

「あの【王国】は、神崎が【核】なんだ。パターンというものがあってな……亀とかが良い例だ。自分の甲羅にこもっている間は無敵だ。……だが、その間は移動できないし、身動きも取れない」

「……あ」

その比喩は的確でわかりやすく、久留美はすぐに意味を飲み込んだ。

「で、でも……移動は出来ないはずじゃ」

「……そう思っていた。だが、考えの視野が狭かったようだ」

してやられた、と言いたげな表情だった。

「あの【王国】は、神崎の思うがままだ。あの【王国】に関しては、中にさえいればなだって出来る。……そう、なんだって出来たんだ」

「……それって、ああいうことも？」

久留美は、遠くのビル群を崩しながら飲み込んでいく【王国】を見ながら問う。

「……あいつが、【王国】から離れられないと思って距離をとったんだが……些か浅慮だったみたいだな」

「ど、どうなるの？」

「……見てのとおりだ。このままこっちに来れば……呑み込まれる。下手すりゃ、神崎といきなりご対面だ」

「……サイアク」

萎えるなんてものじゃない、大いに気力を削られる情報だった。

しかし、挫けている場合ではなかった。

揺れは激しくなり、『その時』は、秒刻みで近づいてきていることは確かであった。

「こうしちゃいられない……――――――千夜！」

自身を奮い立たせるようにその名を呼んで、その肩を掴んだ。

「早く私の影に入って。取り込まれたら、同じ場所に飛ばされるかなんてわかったもんじゃないわ」

「……」

その要求を、千夜は戸惑いの沈黙で制した。
だが、拒絶ではない。
そのことに、久留美は安堵して、苦笑を口元に滲ませた。

「……ねぇ、気付いてる？」
「え……」
「私の話になんか耳貸さないで、さっさと気絶させて自分の意見を押し通すチャンスが、あんたにはずっとあったの。でも、しなかった。あんたは私が喚く言葉にずっと引っ付いていた。無視しちゃえば良かったのにね」

久留美は思う。
面倒くさいヤツめ、と。

自分勝手で。わがままで。お人好しで。頑固で。独りよがりで。
優しくて。残酷で。愛しくて。憎くて。

助けて欲しそうな顔をするくせに、その口で来るなと言う。
扱いにくいことこの上ない。
きっと自分がどんな表情をしているのかも気付いていないに違いない。

これでは、死んだ連中もどうすればいいかわからなくなるはずだ。
助けて、と一言でも言ってくれさえすれば、彼らは迷わずそうしただろうに。タイミングという判断や手段を誤らず、手を取り合って同じ方向を目指して走っていれば、失わずに済んだ未来を失わなかったかもしれない。

やはり、優しい人間ではダメだ。

優しいとこの人を前にして躊躇してしまう。この人を想って、それを主軸に何が正しくて間違っているのかを考えてしまうから。
言葉を待ってあげるような人間に、この人を扱うことはできまい。

「それが、あんたの【答え】なのよ。千夜」

この人は迷っているのだ、とその目を見て久留美は思う。
根本的なところは不動で、彼女の第一は自分を死なさず、失わないことである。
けれども、そこに彼女から見れば余分なものが加わったのだ。

希望という名の、余分な要素。久留美が植えつけたものだ。
それは、千夜自身もここから生きて帰れるかもしれないという久留美の戯言から生まれた微かな可能性を指す。

千夜という人は、本来は絶望の中の希望を臆せず手に取る。そんな人だ。たとえ微かでもそこにあるのだから、と希望を見捨てはしない。それは本能なのだろう。
たくさんの嘘があったとわかった今でも、久留美はそれを信じた。何故なら、久留美は三度絶望的な状況に陥ったが、それでも生きている。それが、千夜が希望を見捨てなかった結果であり、証明であった。

千夜と出会って、久留美は一つ大事なことを知った。
完璧な人間はいない。人が夢見る、理想のままの人間なんてものは存在しない。

ただ、理想を目指し、近づこうとする人間がいるだけなのだ。
千夜はそういう人だった。
久留美は、その姿を好きになった。

そして、今それは途絶えようとしている。志半ばで千夜は尽き果てようとしている。

そんなのは許せない。

諦めてなどほしくない。

だから、久留美は嘘をつくことにした。いくつかの真実を含んだ、巧妙な嘘を嘯くことにしたのだ。

彼女の中の希望を増長させるための、卑劣な嘘だ。

実際に久留美のいう可能性など、神崎の反則的なまでに圧倒的な力を前にして潰えてしまうに違いない。

けれど、目の前の崩れ落ちそうな理想を支えることくらいなら出来るはずだ。

そして、嘘だって貫き通せば本当になる。この嘘は一瞬で終わらせはしない。嘘のまま消えさせはしない。

二人で挑めば、その理想はまだ途絶えない。二人でいることは希望なのだ、と。

その理想を目指す者には決して成り代われない久留美は、そう嘯くことを選んだ。

「さっき言ったこと、忘れていいわ。……私を、信じなくてもいい。でも、あんたの中のその【答え】は……信じなさい」

「……久留美」

「私も私の中の【答え】を信じるわ。……だから、諦めないで。大丈夫、私たちはうまくやれるわ」

久留美は、千夜の目を見ながら語りかけた。

凍るように久留美を見返す千夜。その口が、何か言うまで久留美

は目を離さなかった。

そして、相互の意思の拘わりなく――――――終わりは訪れた。

建物だけでなく、身体、意識、心すら揺さぶりかけるように大きな揺れだった。

その瞬間、久留美は平衡感覚を奪う浮遊感と共に、己の意識が薄れていくのを感じた。

言葉を聞けなかったことを惜しみながら、意識を失った。

［壱百六拾四］　二人という希望（後書き）

こんばんは。焼肉食って腹いっぱいになって帰ってきたらそのままソファで寝扱けてしまった阿呆です。気分で執筆意欲を左右されるようではまだまだですね……。

神崎はガ〇ラ方式で移動を強引に決行したようです。甲羅の中に入っていても高速回転移動する様は幼い頃は衝撃的でした（笑）

次回、神崎ＶＳ久留美。

……なんつー、死亡フラグ。

【壱百六拾伍】　変わりゆく存在感（前書き）

退屈な毎日にさようなら

［壱百六拾伍］　変わりゆく存在感

一瞬のブラックアウト。
そして、浮上はすぐだった。

落ちかけた意識を、無理矢理叩き起こされたような不快感。
それを伴って、久留美は現状と向き合うことになった。

「……っ、ここは……」

ぐらつく頭を奮い立たせ、平衡感覚をなんとか取り戻そうと立ち上がる。
思わずとはいえ、口にした言葉がどれだけ無意味なのかは、久留美も嫌というほどわかっていた。

同じ暗い空間。けれどうっすらと見える内部は、先程までいたものとは明らかに違う。
ここは敵の陣地。戻ってきたのだ。
油断していたら次の瞬間にも殺されていてもなんらおかしくない。

緊張感を張り巡らしていく途中で、久留美はある点に躓いた。

「……千夜？」

小さく呟き、その存在が視界にないことに気付く。

ギュウッと心臓が縮まるのを感じながら、直前までの記憶を探る。

落ちる瞬間まで、結局千夜は自分の影に入らなかった。
それとも、ギリギリのところでなんとか成せたのか。
落ちた後のことはわからない久留美には、正解は見出せない。

そして、一番考えたくない可能性が、望まずとも膨らんでいく。
ここではない何処かに飛ばされてしまったのではないか、という最悪のケースが。

「……、……っ」

名を呼びたくなる。
しかし、それは自らの打開策を潰す要因になる。意味があるかどうかもわからない、

堪えはするけども、不安は拭いきれない。
ここにいるのは、自分一人だったら。もしそうであったとしても、作戦は丸潰れとなる。

久留美は、周囲の闇から目を逸らすように、目を閉じた。
やり場のない腕には、己の体を抱くという役目を与える。震えそうな体を戒めよ、と。

怖い。
さっきまで忘れていた恐怖が、今はとめどなく奥底から溢れてくる。

独りの恐怖。
それは、人ごみの中で自分という個性が掻き消されていくような

ものとは対極の位置にある。誰もいないから、境界線が見えなくなっていく形の恐怖は、今まで気付いていなかったこともあって、久留美の心を不意打つような角度から痛めつける。

縋るものも、頼るものもない。

何もない中で、それでも立ち続けていなければならないなんて。

……なんて。

――――――独りでいくよ。

脳裏を掠めるのは、夢の中で千夜が残していった言葉だ。

そして、余韻が消えるよりも早くフラッシュバックしたのは、独りではもう立てないと吐露していた千夜の姿だった。

自分が突き崩さなければ、彼女はいつまで孤独を抱え続けていたのだろうか。

こんな、狂いそうな痛みを――――――何処まで。

……何が、平気なのよ。馬鹿っ。

言葉なく悪態付くと、不思議と震えが治まりを見せた。

この程度を耐えずして、彼女をこの世に繋ぎ止めようなどおこがましいにも程がある。

抱いた腕に強く爪を立てた。
肌に食い込み、鋭い痛みを脳に走った。
少なくとも、これで正気を保つことは出来ると思っての行動だった。

こんなところで折れるわけにはいかない。

早く終わらせてしまうのだ。

終わらせて、早く――――

「帰る、んだから……」

自分へ発破として呟いた時だった。

「――――――かえれねぇよ」

薄気味悪いくらいの静寂は、突如現れた猛烈な殺気によって破られた。

爆発するようなそれの出現に久留美の思考は硬直した。

固まる寸前に打ち出したのは――――――それが、己の背後から聞こえたということ。

即ち、殺気の主は、

「――――――シネヨ」

その一言で、理性は勝負を放棄した。

ダメだ、と思考の結論はあっさりとしていた。

それは正しく、正常な判断だった・

死ぬ。

間違いない。

殺気が動く気配が、久留美に自身の未来を暗示させた。

突き刺すような殺気と同様、項に感じるそれは頭部を砕く意図を感じた。

振り向く間もなく、殺される。

無様に。

無惨に。
為す術なく。
場違いなまでの冷静さで久留美は、そのシーンをイメージした。
自暴自棄になったせいか、思考は先程よりも研ぎ澄まされていた。
死ぬ――――――避けなければ、間違いなく。
理性の淡白な結論に、久留美は同意した。
そして――――――
「……ぇ？」
思わず呆けた声を漏らす。
風を切った感覚を近くに感じた後、頬がピリリと痛んだが、それ以上はなかった。

理性を自棄にさせた死の瞬間は、ない。

何故なら、

「っ、っけてんじゃねぇよっゴミが！！」

避けるな。

背後から聞こえた怒声は確かにそう言ったのを聞いて、久留美は理解しかねた。

しかし、再度理解を試みる猶予はなかった。

死は再び久留美を襲う。

……あ、ヤバ。『避け』なきゃ。

再びポツリと思う。ごく自然に、容易くないことを。

そこに、可能不可能といったその行為にかかる負荷はない。

そして。

その瞬間、久留美は、ただそれを為さねばなるまいと動くことの

みを選んだ。

思考は再び真っ白になる。
必要最低限の事項のみが残る。

避けるための手段を叩き出すこと。
それだけが、今の久留美には必要だった。

ビリビリと感じる殺気の狙う的は変わらないらしい。

頭部。
重心を左へ偏らせたこの体勢からどう回避するのか。

振り向いてはダメ。
重心を戻して体勢を整えている暇などあるはずもない。
このまま動かなくてはならない。

左は、安直。
右は、時間がかかる。
後ろはもっての他。

なら、残るのは――――――――

「――――――――っ、！」

久留美は前へ身を屈めた。
殆ど飛び込むような勢いで、身体を上半身から前へ押し出した。

寸でのところで、先程までの頭部の位置を衝撃が通り過ぎるのを感じた久留美は、

……ダメっ！

このままでは倒れこむしかない。
一瞬の停止が命取りのこの時に、それは阻止しなければならない。
ここまでの回避を無駄にするわけにはいかない。

ならば、自分の取るべき行動は――――――止まらないことだ。

思った矢先、既に事は成していた。

「くっ……！」

強引に入り込んだ前転により、肩や背中を打ったが気にしていられない。
背後の殺気が膨張する気配を感じた久留美は、止まるな、という本能の囁きに従った。

走る。
後ろは気になっても振り向くことはなく、ただ両足に前進を命じた。

「糞があああああああああああああっ！！」

雄叫びと共に、久留美の周囲に何かが散弾し出す。
それは、足元にも及び、コンクリートの地面を抉った。
怯みそうな自分を捻じ伏せるように、本能が強く命じる。

止まるな。止まれば、恰好の的になる。

神崎は余程頭に血が上っているのか、撃ち放っているものは、被弾する位置が一定していない。こちらに当てることを意図しているが、昂っているせいで狙いが安定していないのだとわかる。

そんな相手にとって、動く的ほど当てにくいものはない。

だから、止まってはいけない。

だから、走る。走る。

真っ白な思考回路には、ただそれだけが刻まれていた。

◆◆◆◆◆◆

無茶苦茶だった。
神崎は自分の殺意を込めた攻撃が当たらないことに癇癪を起こし、狙うべき的の存在も見失ったかのようにやたらめったらに乱射し出したのだ。

かき回すようなその暴挙によって、建物の内部は土埃で充満した。
しかし、それは幸い久留美の味方となった。
巻き上がるそれを目隠しにし、久留美は神崎から距離を取ろうとひたすら疾走した。
神崎の声が遠くなるまで。

広い。
出口は、果ては見えないと思うほど広がりをこの限りなく闇に近い空間は持っていた。
これも神崎の力によるものなのか。
思考の片隅でそんなことを考えながら、足元もほとんど見えない久留美は走り続けた。
段差や障害物となるものに阻まれながらも、せめて止まらないように動き続けた。

そして、足が縺れる寸前まで限界が来たところで、神崎の声と破壊音が心なしか遠く感じるようになったと思った久留美は、ようやく物陰で前進を止める。

「……っぇふ、はあっ……ぁっ……ふっぅ……」

喉が引き攣る。

いくら呼吸しても渇きに追いつかない。

我武者羅に走り続けていた間には感じる間もなかったそれが、一気にどっと押し寄せてくる。押し潰されるような錯覚さえ覚えそうだった。

それでも何度も繰り返しているうちに、真っ白だった思考は再び通常の色づきを見せる。

そして、後回しにしていた疑問の浮上も。

「……なんで」

その矛先は自分自身だった。

更には、己がここまでしてみせたことへ。

おかしな話だけれども、ここでこうしている自分が久留美には信じ難い事実だった。

死んでいるはずだった。

神崎の放った禍々しい殺意の一撃で。

あれには、容赦も手加減もなかった。それは、素人の久留美にだってわかる。

なのに、生きている。

あれを、回避して――――――生きているのだ。

「どうして……なにが」

何が起きているのか。

他ならぬ自分がしたことなのに、実感がない。

あの瞬間、確かに理性は諦めてしまい、あれほど生き残ることを念じていた自分はすんなりと死を受け入れてしまうところだった。

なのに、理性とは別の何かが動いたのだ。

生を諦めていなかった己の中の――――本能、というべきか。

貪欲なまでのそれは、生き残る道を見出そうとあらゆる可能性を一瞬で並べて、最優とよべるものを厳選して遂行させた。

あの状況で。

あんなに冷静に。

緊張はしても、恐慌はしなかった。

異常だ。

普通は、そんなことできるはずがない。

そう普通なら――――――

「ふ、つう……？」

思った矢先、違和感が生じた。
石に躓いたような感覚。
そのまま素通りして歩いていたら、気付かないような――――発見。

「……あ、そっか」

落胆と納得が入り混じる、そんな感情を伴った呟きだった。

ついで出たのは、笑い声だった。
カラリ、と渇いていた。

――――――もう、普通じゃない。

染み入る事実は、何処か気持ち悪い。そして、同時にどうしようもない虚しさも感じた。

これが自分の欲しかったもの。
彼女といるために、欲したモノ。

それが、今の自分なのだ。

「……そう、よね。おかしい……のよね」

普通なら、こんなところで正気を保っているわけがない。
普通なら、この期に及んでまだ生きて帰れるなんて考えられるわけがない。

こんなのは異常だ。
こんなことを考える自分は異常なのだ。

そして、これが――――――この身が非日常の住人と化していく症状の表れ。

「……ぁ、ははっ」

答えに行き着いた拍子に、笑みがこぼれた。
自嘲ではなく、歓喜。

そう、紛いなく歓喜の感情だった。

「それなら……っ」

好都合、と呟いた久留美の目から戸惑いが消える。揺らめく波紋がなくなったそこに、ギラギラとした光が宿る。
生に執着して爛々とする本能の輝き。
いかなる常識をも凌駕して生き延びようとする、純然たる生命力の胎動だった。

「……問題は」

これをどのようにして有効に扱うか、だ。
おそらく、これは初期症状のようなものに過ぎない。これからど

う変化が現れるかはわからないが、それはすぐには結果として現れないだろう。期待しすぎて、これに依存するのは危険だ。

……多分、生命の危機に前より敏感になっただけよね。

生命に対する危機管理能力の向上。

即ちこれは、身体能力の向上とは違うのだと久留美は理解した。ここまで走ったが、疲労感も走行の速度も以前と何か変わった様子はない。

これは、対抗するにはあまりにも貧弱な武装だ。

自分の役目が囮であり、神崎に決定的な隙をつくらせることが目的であるとしても、逃げてばかりではどうしようもない。

迎え撃たなければならない。

僅かでも怯めば、それは自分にとっては些細なことでも千夜には致命的な一撃を見舞える好機（チャンス）になりえるだろう。

……出来ることは限られている。

久留美は、何も出来ないとは考えなかった。

諦めない限り、道は塞がらないと思いたかった。

だから、考えた。

異常と呼ばれる領域に一歩踏み出したばかりの、こんな脆弱な身なれど、何かできることがあるはずだ、と。

「……ほんと、こんな時にこそ使えたらいいのに」

土煙がおさまり出した。
耳を傾けてみれば、絶えず聞こえていた騒音も怒声ももう聞こえない。

事実が暗喩することに焦る中、思わず呟いたのは――――――無いもの強請りという名の弱音だった。

魔法。
かつて憧れたその人は、当然のようにその奇跡を当たり前のように操る存在だった。
あっという間に心を絡め取ったその存在に、久留美もなりたかった。
今は、あの頃とは全く別の気持ちで、あの頃以上にそう思う。
覆い尽くさんばかりの絶望さえ覆す、希望を生み出す奇跡。
それが起こせれば、と。

「せんせぇ……」

置いて行かれたからこそある今。そして、見つけたものがある。

それはわかっている。
けれど。けれども――――――

「……っ！」

ハッと目を見開く。
脳裏で起きたフラッシュバックは、何度も繰り返して思い出す中

で抜け落ちたワンシーンを久留美に思い出させた。

先生は、彼女は、本当に――――――自分に何も残さずにいなくなったのか、と問いかけるように。

徐に己の掌を見つめた。

何かを問うように。

そこには何も無い。

だが、久留美は微かな可能性をそこに見透かしていた。

迷い。戸惑い。ためらい。

そして、

「――――――」

それらを全て握りつぶし、決意に変えて飲み込んだ。

［壱百六拾伍］　変わりゆく存在感（後書き）

久留美の中で何かが弾けちゃった、の巻。

ようやく奉納儀式の影響が出てきたようです。
失ったものは、皆さんや久留美が思っている以上に大きいです。久留美の人生はもう予定のものとは１８０度違うことになっています。詳細はこの先でわかるでしょうが、もうヤツはベッドの上じゃ死ねません。

不人気ＶＳ下衆ガエルは今回入れて二回くらいでまとめるつもりでしたが、三回くらいになりそう。多分、需要ないのに回数が増えるなんて……。

【壱百六拾六】　少女幻想（前書き）

それら全てが
夢や幻だというなら

【壱百六拾六】　少女幻想

「――――お姉さんは、どうして魔法が使えるの？」

素朴な疑問だった。

物事には絶対的な理由や要因があるのだという根拠の無い子供の単純な思考が打ち出した問いかけ。

出会って五日ばかりが過ぎた日のこと。

訪れれば【常に雪の降っている異空間】と化した近所の公園にて、同じベンチに座って今日あったことなどを一通り報告し終えたところで、久留美はここまで溜め込んでいた疑問を解き放ったのだ。

「……それは、私が魔法使いだからだよ」

「そんなのわかってるもん」

馬鹿にしないでよぅ、と頬を膨らませて答えに納得せず、

「私は、魔法使いはどうして魔法が使えるのって聞いてるの」
「ぇ……ええっ？」

今、なんて言ったの、と思わず見返してくる『彼女』に、

「魔法使いがそんなことが出来るのは、他の人とは何か違うところがあるからでしょ？　魔法使いは他とは何が違うの？」
「……うーん」

考え込むように唸り、目を閉じた。
真面目に考えてくれるのだな、と思うと嬉しくなった。
自分でも幼稚な質問をしている気がしていた。他の大人なら、くだらないことを聞くなとまともに取り合ってくれさえもしないだろう。

答えないのではない。
答えられないのだ。
だって、彼らは知らないのだから。

けれど、この人はきっと答えてくれるだろう。
否。絶対に。

何故ならこの人は――――――

「……魔法使いが、普通の人間と違うところ……それは」
「それは？」

胸が高鳴る。
焦れるような口調がまどろっこしくも、期待に疼くこの感覚が満

たされる瞬間が待ち遠しかった。

そして、

「――――やっぱり、魔法使いだから……としか言いようがないかな」

まさかの肩透かし。

「もう、お姉さぁん。真面目に答えてよぉ」

「真面目ですよ。……物事には、事細かな事情や複雑な理由、要因なんて……実は無いということだよ、久留美ちゃん」

「……なぁにそれ？」

深々と降る雪の中で、『彼女』の講義が始まる。

これも一つの怪我の功名、ということにして、その言葉に耳を傾ける。

『彼女』の話は好きだった。

内容は小難しいようだけれど、押し付けるような感じが無い。

何より『彼女』は特別な存在だった。

だらだら長くて角張った校長先生のお話や小うるさい教師の説教など比べるのも馬鹿らしいほどに、特別な『彼女』の紡ぐ話は自分にとっては素晴らしいものだった。

「魔法使いは、魔法使いだから魔法が使える。理由なんて、それだけで十分なんだよ」

「それはそうだけどさぁ」
「凄い人は凄いところがあるから、そう言われるでしょ？　魔法使いが魔法を使えるのも、それと同じこと。……特別という外側からと内側の認識の一致と、そうであるという存在意義があるから魔法使いは魔法使いでいられるんだよ」
「……ちょっと、難しいよ」

ムッと顔を顰めると、『彼女』はクスリと笑った。

「周りが魔法使いの存在を認めて、魔法使い自身が自分をそうだと自覚して……魔法使いは魔法が使える存在になるんだよ」
「……認められなかったら？」
「……そこにはいられない、かな」
「でも、先生は――――」

ここにいるのに、と言い募ると、驚くべき事実が告げられる。

「魔法使いにはね、二つのパターンがあるんだよ」
「パターン？」
「最初から当然のように魔法使いの才能を持った人。御伽噺に出てくるのは、こっち。もう一つは、魔法使いになるためにたくさん努力をして、そうなった人。それが私の方。……今いるのは、私みたいな人たちだけなんだ」
「最初からそういう人はいないの？」
「さっきも言ったとおり……そんなものはいないって世界になっちゃったからね、今は」
「ふーん」

どうしてそんな世界になってしまったのか。
そもそも何で魔法使いはいらないと皆思ったのか。

規模の大きい気になることはあったが、それよりもどうしても本人に尋ねたいことがあった。

これはある意味、『彼女』でなければ聞けない答えだ。

「ねぇ、先生は……」

「ん？」

「どうして、魔法使いになったの？」

問いかける彼女は一瞬だけ無表情になった。

ほんの一瞬であったけれど、その後に何か哀しそうな顔をした。

何かに、それが何かであるかはわからないけれど――――失望するような表情だった。

「……先生？」

「あ……うん……私は――――――何でも出来るように……なりたかったからだよ」

その答えに違和感を覚えた。

なりたかった、と彼女は言った。

それはまるで――――――

「魔法使いになったら……なんだってできると、思っていたのになぁ。もう、世の中は魔法使いでも出来ないことがいっぱい溢れているようになっちゃったのかもね。……いや、違うか」

「……」

「――――――私が、ダメなんだ」

呟いた言葉が、哀しげに響く。

見つかった答えがそれだとしたら。それしかないとしたら。
なんて――――救われないのだろう。

そう思ったらあまりにも切なくて、見ていられなくて――――

「そ、そんなことないっ！！」

思わず、声を大きくして否定をあげた。
加減もなにもないからキィンと響いたが、そんなことは気にしていられなかった。

「お姉さんはすごいよ！　だって、雪降らせちゃうんだもん！　東京は、そんなに何度も雪降ったりしないんだよ？　積もったってテレビの中の寒いところみたく綺麗じゃないし……お姉さんは、こんなすごいこと簡単にやってのけちゃうじゃん！」
「……」
「だ、だから……ダメなんかじゃ……っ」

もっと言葉が欲しい。
この人を安心させられるだけのたくさんの言葉が。
何で自分は子供なのだろう。
子供は嫌だ。
知らないことだらけで、出来ないことが多すぎる。

しかも、簡単に涙が出てくる。

「……ぇ、ぐ……ダメなんかじゃぁ、ないよぉ」
「え、と……」

おまけに困らせている。
最悪だ。
慰めようとしてくれるだろう。

情けない。
慰めたかったのは自分のはずなのに。

「泣かないで。……気持ちはありがたくもらっておくから」
「だ、ダメって、いわな……で」
「わかったから……あーほら、ボロボロ出ちゃって」

目元に溜まった液体を白く長い指で丁寧に拭われる。

「変なこと言ってゴメンね。泣かしちゃったお詫びに何でもするから、元気出して」
「……何でも、してくれるの？」
「うん。魔法使いだから、人よりも出来ることは多いよ？」

現金なことに、それを聞くと涙はすんなり止まった。

「じゃ、じゃぁ……」
「ん？」
「……私にも、教えてよ――――――魔法」

◆◆◆◆◆◆

――――――何故、そんなことを言ったのか。

今もまだ理由といえる理由がわからない。

わかっていたはずだった。

わからないほど、自分は馬鹿ではなかったと思う。

魔法使いであった『彼女』と、自分との間に引かれていた見えない境界線。

どうしたって消せないそれを、どうして越えたかったのだろう。

わかっていても尚、越えたかったのか。

一体、何のために？

――――――いつか、必要になる時のために。

いつか、必要になる。

でも、それは、

――――――【誰】の、ために？

◆◆◆◆◆◆

再び沈下していく土煙を掻き分けながら、久留美は歩いた。
先程まで死に物狂いで行っていた逃亡とは間逆の進行だった。

その向かう先は、自身へ絶対的な死を振りかざす死神の眼前。

諦めた、と。
そう判断するには、前を見据える久留美の目に宿る光は力強く、まるで命そのものが燃えているようだった。
不屈の意思。生を繋ぐために、久留美は不動の決意を胸に死へと近づいていく。

死の回避の手段を変えたのだ。
逃避ではなく、破壊という手段へ。

しかし、手段を変えようにも、依然として久留美は丸腰のままであることに変わりはなかった。それだけはどうにもならなかった。

無謀、とここに第三者がいればそう嗤うだろう。
死に行くようなものだ、と。
愚か者。そう言い捨てられるだろう。
だが、久留美は傍観の視点より与えられる愚かさとは異なる『別種の愚かさ』でその行動に出ていた。

賭け、だった。
まさしく命を天秤にかけた全力投球。

千夜には後で謝ろう、とこの命を賭けの対象にすることに憤った共闘者への罪悪感は既に振り切っていた。
あとは、ただただ前進するのみ。

不思議なことに、高まる緊張感に反して興奮は歩みが増すごとに収まっていく。
余計なものが取り除かれ、寧ろ精神は研ぎ澄まされていくのだ。
神崎の攻撃を奇跡的なまでに正確に避け続けたあの時の感覚だった。

非日常を駆け抜ける者として適応していく、異常な状態だ。

そして、思考もまた同じだった。
出来ないという負の考えは久留美のそこには存在していなかった。
あったが、排除された。
そうではなくてはならなかった。
これから成そうとしていることは、そうでなければ成しえない。

ビリビリ、と肌を刺すような殺気へと近づいていく。

精神の許容範囲の限界までという距離まで来たところで、久留美は歩みを止めた。

震えそうな足を崩すまいと、地面に突き刺す心持ちで、そこに仁王立ちを構えた。

しばらくそうしていると、土煙はすっかり消え去り――――――『害意』の根源がその姿を再び露にした。

「なんだぁ……？」

転がるように逃げていた獲物が、自分から戻ってきた。

神崎は怪訝そうに久留美を睥睨した。

しかし、すぐに都合よく解釈して、にたりと嗤った。

「……かかっ、出てきやがったな虫がぁ。すばしっこく逃げてやがったくせに、随分諦めがいいじゃねぇか」

嗜虐的な神崎の獣じみた笑みを最後に、視界を閉ざす。

それは全ての放棄とみなされても仕方ない自棄的な行為と見て取れた。

だが、必要だった。

そうなる必要があった。

これから行う足掻きのために、一度全てを捨てなければならかった。

恐怖、不安。

そして、それらを促す元凶も。
何もかもが邪魔だった。

あの魔法使いが『教えてくれたこと』を成功させるには。

――――――残念だけど、魔法は教えられないんだ。

教えて、と強請ったいつかの己への返答が、閉ざされた世界で響く。
何でもするって言ったのに。嘘つき、と勝手ながら罵ろうとした。
だが、彼女がそれよりも早く弁解を解いたのだ。

――――――魔法は、教えるものじゃないんだ。自分の力で、それがどんなものなのかを見つけるしかないんだよ。

じゃぁ、見つけるにはどうすればいいの？

問い尋ねた時、彼女は――――――

「ねぇ、あんた……私のこと虫だとかゴミだとか汚物だとか、随分好き放題言ってくれてんじゃないの」

目を閉ざしたまま、久留美は口を開いた。
迂闊なようだが、気配の動作はもうこの方が鋭く感じ取れる。

それに、視界に恐怖の起因となるものが無い方が、心はぶれない。

逃走の最中に、やたらめったらに暴れまわっていた神崎から、先程までのような暴走感は見られない。ストレスを発散したのか、少し冷静さを取り戻しているようだ。

そう、獲物をじっくりいたぶり殺すという本来好むであろう趣向を思い出す程度には。

ぞっとする話だが、それでも時間の猶予は久留美にもある。

少なくとも、神崎の言う無駄な足掻きをとる程度のものは。

「ムカつくけど、今となっちゃあんたにとっては……それが紛いもない事実なんでしょうね」

「何だ、新手の命乞いなのかよそれは」

「――――――でもね」

ばあか、と言いたいのを抑えつつ、久留美はその分声を張り上げた。

「――――――……虫みたいな私にだって、【夢】はあるのよっ！」

そこで一度句読点が打ち込み、久留美は思考を切り替える。

――――まずは、夢を見るんだ。自分の、自分だけの望みを、心に思い描くんだよ。

イメージの固定。
想像自体は曖昧でもいい。ただ、己が何を描きたいかだけは確固たる念として抱かねばならない。

――――――それだけじゃ足らないから、言葉にしてみよう。出来るだけ自分の夢が濃くなるように、それらしい言葉を。

それが呪文であり、詠唱であると言っていた。
あくまでオマケなのだという。
呪文からそれが生まれることはない。補助輪みたいなものらしい。

「……我は、描く」

難しくある必要は無い。
ただ、思うとおりに、望むとおりに。

「……我は、夢見る」

不意に瞼の裏を過ぎる。
初めて教わって、思うように行かなくて喚くいつかの自分の姿が。

『い、いでよ、ほのおぉー……って、やっぱり出来ないよぉー！！』

漫画やゲームで聞いた風な呪文を何度叫んでも、何度思い描いてみてもちっとも言われたとおりにはならなかった。

やっぱり自分ではダメなのではないか。
途方ないことへの挑戦なだけに、諦めの到来は早かった。
けれども、
――――――だって、出来ないって思ってるでしょ？
さりげなく容赦ない指摘に、反論は出来なかった。
半信半疑であったのは確かだったのだ。
自分でやりたい教えてと強請っておきながら。
それでも『彼女』怒らなかった。
ただ、わからない自分にわかるように説いた。
――――――出来ないと思っていたら、夢は夢のままなんだよ。信じて求めることを止めてしまったら、そこでおしまい。だから、『出来ない』なんて考えないで。
どうせダメだけどダメもとで、と。
そう考えながら試みていたことを見抜かれていたのだと思う。
――――――スゴいことをしようなんて思わなくてもいい。ただ、こんなこと出来たらいいなってことを真剣に思ってみて。最初は、それでいい。信じてみてよかったという気持ちを知ることが魔法を見つけるための最初の一歩なんだから。
信じる。
諦めない。

念じるようにその二つを思いながら、もう一度それを望んだあの時、それは確かにこの手に宿ったのだ。

この手に、確かに。

「我は汝の顕現を望むっ！　汝は、我が幻想世界の住人！　そして、踊るがいい幻想……汝に、魔術の名の下に現世に顕現を許すことを――――――」

――――ほら、もう一度。言葉なんか適当でいいよ。大事なのは……何を、どれだけ望んでいるかなんだよ。

もう一度。
もう一度、だ。

あの時のように。否――――――あの時以上に。
こんなにも切望している。

諦めようとしている彼女を、まだ信じさせてあげたいのだ。
たとえそれが――――――ただの幻想（ゆめ）でしかなくても。

だから、

「ここにっ……――――――――宣言するっっ！！」

何かの本或いは何かのゲームの影響からデタラメに構成した、それっぽい嘘っぱちの詠唱呪言。

ただ、そこに込めた心だけは本物だった。

魔法使いの言葉が本当なのなら、それが正しかった。

そして、久留美は知っている。

自分を置いていった魔法使いは、約束は守らなかったが、嘘は教えなかった、と。

『――――出でよ』

あの時と同じ言葉を、過去の自分の気持ちに重ねるように告げた。

無駄な力はなく、ただ凛然と呼び出す言霊を己の世界へと響かせた。

「――――炎」

そして、その返答は言葉なく――――――『顕(あらわ)れた』。

◆◆◆◆◆◆

神崎は驚愕に目を見開いた。
揺れる赤い瞳から、動揺は明白な事実だった。
久留美は、それだけで一矢報いた気分を勝ち得た。

「……なんだ、それはっ」

それ、と指し占められたもの。
久留美の周りの漂い揺らめく炎。
その身体を軸に、円を描いて宙を灯っていた。

久留美を自らが呼び出した『モノ』を、言葉にした。

「――――――【魔術】よ。人が力に憧れ、手にしたいと夢見ることで生じる産物。魔法や奇跡には至れない……幻想(ゆめ)よ。そして、これは私の夢」

魔法使いは言った。
魔法は教えられるものではない、と。

そう言って、彼女が代わりに教えたのは、魔術と呼ばれるものだった。
人の幻想(ゆめ)を具現化させ、まるで魔法であるかのように似せる術だ

という。

誰にでも使える、誰にでも出来ること。

可能不可能に分かれるとすれば、それは自分が出来るかどうか気付くか否かである、と『彼女』は語った。

――――――魔法はね、本当はもうこの世界から失われているんだよ。もう存在しないから、人はそれが現れた時、『奇跡』と呼ぶんだ。

――――――もうこの世界にはない。だから、私たちは夢を見るんだ。それがまだあった日を、私たちには知りえない遠い時代にあった世界を、私たちなりに思い描いてみる。

――――――そして、今度はそれを現実にするために願いながら、魔法へと近づけるべく努力する。それは遠く果てのない道を歩くことに等しいけれど、諦めてしまってはその道を歩くことさえ出来ない。だから、魔法に焦がれた人は歩くんだ。ずっと、ずっと。それこそ、夢を見ながら……それがいつか自分の真実になる夢を。

この幻想（まぼろし）は、いつかは魔法（ほんもの）になるという、夢。

そんな夢を見る人間を魔術師という。

またの名を幻想使い。

「私――――――勝つわ」

久留美は『夢』を口にした。
客観的にも主観的にもそうとしか言えない想いを、それでもただ真摯に。

「……あんたに勝つ。この夢で、あんたに勝つの」
「……馬鹿かぁ、てめぇは」
「私が馬鹿なら、あんたは何？　あんたは馬鹿にさえ勝てないじゃない！」
「なんだとぉ……？」
「違うなら今の自分を振り返って、反論してみなさいよ。できるものなら。……できないわよねぇ？　だって、あんたは欲しいものをその馬鹿なんかに取られたんだもの。あんたは必死に口説き落とそうと散々小細工したっていうのに、あんたの惚れた女は結局あんたに見向きもしないで馬鹿を選んでトンズラこいたじゃないの。求愛アピールして無視されるオスほど惨めなものはないと思うんだけど、どうなの？」

機関銃のように捲くし立て、そして急所に一つ一つ確実に突き刺していく。それは相手の殺意を煽り、暴走へと駆り立てる危険な行為だったが、久留美は冷静だった。

おそらくチャンスは一度きり。
こんな風に魔術を使ったことはなかったし、戦闘の経験なんて勿論ない。
闇雲に攻撃したって、当たるかどうかも保証も自信も操作の腕も無い。
今だって緊張はギリギリまで張り詰められていて、失敗したら確実プッツン。再起不能で虐殺決定だ。

ならば、自分に選べる選択肢は一つ。

迎撃。
それまでに出来るだけ神崎の理性を削り落とし、激情に落とす。
敵は、力と嗜虐心だけは立派な単細胞。
ただでさえ足りない理性や知力を、極限まで擦り減らすのだ。
ゴリ押しで叶わないことは承知している。
そして、そんな相手の『扱い方』も承知の上でいる。

「可哀相にねぇ、神崎陵。あんたは、あいつにかまってほしくて、認めて欲しくて人間まで止めたっていうのに。なのに、あんたは、あんたが否定した人間である私にも勝てないでいる。ねぇ、どんな気分？　私が憎くて仕方ない？　……あれ、足震えている？　私が鬱陶しくて、煩わしくて……いても立ってもいられないって感じ？」
「……っ、て、め……ぇっっ、っ」

自尊心を徹底的に掻き回す。
山よりも高く、海よりも深いそれを汚された時、その相手はどう出るか。

それを知った上で、引っ掻き回す。
本能を昂らせるように、理性を溶解させるように。

罵って。嘲って。見下して。辱めて。蔑んで。貶めて。哀れんで。

持ちうる限りの悪意を全力で叩きつける。
木っ端微塵に砕け散ってしまえ、と台詞一つに一つに憎悪（あい）を込めて。

そして、臨界点は、

「……こ、ろス」

静かに訪れた。
長い沈黙の後、ポツリと言葉が一滴。
けれど、それが沈黙の水面を小さく撥ねた刹那、

「殺す、殺すころすころすころすころすころすころすころすコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスうううううううううううう゛う゛っっっ！！！！」

雄叫びに近い殺害宣言を何十と繰り返しながら、突進が始まる。
かち合った紅い狂気の眼には既に、理性など欠片もない。
ゾクリ、とした悪寒が目的を達成したことを確信させる。
「はっはぁ！　……やってみなさいよ、馬あぁっ鹿っっ！！」
半分ヤケになって声を張った。
それに反応して、空中の炎も勢いを増した。
自分の心持ちようが、この魔術には影響するらしい。
ならば、弱気や怖気は禁物だ。

空元気でも無いよりかはマシである。

高速で距離を詰めて、接近してくる神崎。
だが、久留美にはそれが異様にスローモーションで見えた。
極限の緊張状態で神経が少しおかしくなったのかもしれない。

だが、おかげで少しだけ余裕が生まれた。
そして、その隙間を縫うように、久留美の心に『ある諦め』が生まれた。

それは、自分を置いていった魔法使いへの未練が潰えるという意味を含有していた。

汚い、と久留美は己を嗤った。
己が体現した魔術も総じて、嘲笑った。

ここにある魔術は、幼き日に憧れたものとは程遠い。
エゴと独占欲で織り上げられた――――それは、今の自分を体現している。

もう、戻れない。あの頃には。
ただ純粋に幻想と奇跡に焦がれたあの瞬間には。

先生――――と呼んだあの魔法使いには、多分これで二度と会えないだろう。
言いつけも破ったし、彼女が望んでいた自分ももういない。
人を好きになって綺麗になるなんて、嘘だ。
独占欲やエゴイズムで他人をぎゅうぎゅうに縛り付けたくて仕方

ない、とんだ変態じゃないか。

こんな姿、先生には見せられない。

ならば、せめてあの人が持っていった『幼き日のまま変わらない久留美』という幻想だけは、汚さずにしてあげなければ。

そうして、久留美の中から、長い間しがみつき続けてきたその未練は消えつつあった。

どれだけ忘れようとしても忘れられず、その結果こんなところまで引っ張ってきたというのに、だ。

……それでもっ！

会いたかった人に、会えなくなってもいい。

それでもいい。

だが、ただそれでも自分は――――――

「……渡さないわよ」

唸るように言えば、円を描くように漂うだけだった炎が形状を変えていく。

一つ、二つ、と球状を模す。

やがて、魔術が五つの炎球の姿を成した時、

「私の友達よ。私の唯一の誇れるものなのよ。――――――渡すもんかっ！」

未練と共に長く付き纏っていた疑問が、なくなった。

【壱百六拾六】　少女幻想（後書き）

久留美が魔法に惹かれた理由は、前世の未練の方が大きいです。異能者ではない、という事実はかつての彼女を苛む大きなコンプレックスでした。

「そんなのなくてもいい」と初めて彼女自身を真っ当に評価してくれた人に対して、結局異能がないばかりに何も報いてあげられなかったというのが前世における最大のトラウマを生んで今の久留美があるわけです。

そんなわけで、あれほど『非日常』に執着していた理由にはこういった根源があったのです。

更にもう一つ補足です。

自サイトの用語辞典に載せていますが、本作を初めとした天海の作品の世界観において、魔術は異能ではありません。才能が無くても普通の一般人でも誰でも使えるものとして扱われています。霊力（魔力）っていうのは、生命力と同一のものであるため、基本は誰もが持っているのです。魔術を扱う条件は、気付くか気付かないか、或いは認めるか認めないかなのです。

先に言っておきますが、魔術師は魔法使いにはなれません。基本は、そうです。ゲームみたいなレベル上がって役職変わるとはそんなもんありません。

あるとしたら、魔術師の一部に生まれながら異能者が混じっていて、彼らが魔術を触れたことをきっかけに本来秘めたる異能に目覚めるというだけの話。

大半の魔術師は、この事実を教えても聞く耳持ちませんがね。やつらは己の道しか見えないし、見てませんから。

「出来ないのは何故か？　努力が足りないからだ！」
これが一般の魔術師の基本思考です。ただただ夢見る人。まさしく幻想使いなのですよ。

では、本編における新條久留美はどうなのか？
残念ながら、彼女は凡人です。異能の才能はありません。更に言うと、両親を引き換えにしても異能は得られませんでした。……異能は、ね。（答えは二章でわかります）

［壱百六拾七］　虫の息の心（前書き）

奥底に眠るモノ
死に掛けた息絶え絶えの私の心

［壱百六拾七］　虫の息の心

「あああああああああああああああっ！！！」

腹の底から轟かせる絶叫。
それに応えるように、炎球は一際燃え立つ。

そして、行き場なさそうに周囲を浮遊するだけだったそれらは何らかの動きの気配を纏い、

「いっけえええええええええええええ――――――――っっ！！」

それが合図だった。
解き放たれた久留美の感情が、炎の球体はそれぞれに『役割』を授ける。

暗闇の中で神崎の姿はほとんど見えない。
これでは操作はおろか狙いもつけようがない。
ただでさえ細かい動きを計算する余裕の無い久留美は、ただ一つのイメージのみを固定して、繰り返し描くことで濃くしていく。

突進してくる神崎に直撃する。
ただそれだけをイメージした。

すると、『魔術』は、その望みをかなえるべく動く。
その夢を実現するために――――――宙に身を投げるように飛んだ。

「っ、ぐ……っ！？」

まず、一弾。
飛来したそれは右肩に衝突した。
着弾と同時に火種となったそこで一瞬大きく燃えたが、神崎の足は止まらない。

一瞬顔を顰めたが、燃える肩をそのままに久留美への突進は止めない。
炎は神崎の怒りを煽っただけだった。
照らされた神崎の表情は、目を背けたくなるほどに恐ろしい憎悪と憤怒に満ちていた。

久留美は息と共に恐怖を飲み込み、その明るみとなった神崎を睨んだ。

「燃ぉえ、ろおおおおおおおおおおっっ！！」

雄叫びが闇の中に響く。
それに応えるように残る火炎球が、一斉に射出される。

闇の中を掻き泳ぎ、四つの炎の球は尾を描きながら神崎へと向かう。

そして、一つ、二つ――――――と。

着弾と共に燃え上がる。

先達者となった同胞のそれを煽り立てるように、より大きく、激しく。

足に。

腹に。

顔に。

あらゆる箇所で吹き上げる炎は、神崎の全身を包み込み、火達磨へと変貌させる。

「あっっ！！？　あぁ〝、ががががががあ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝っ、っ、で、でぇ、べええ〝え〝え〝え〝え〝え〝ええええっ！！」

声帯を焼かれ、唇も舌も焼け爛れたであろう神崎の声が、もがき苦しみながらも進める歩みと共に近づいてくる。

もう手持ちの【弾】は撃ち尽くしてしまった。

また創り出す余裕は無い。

一秒すら久留美には惜しい貴重な時間だった。

久留美は肉の焦げる匂いに耐えながら、トドメを刺そうと魔術の言葉を放つ。

「――――――地獄に、落ちろぉぉおっ！！」

脳裏に炭同然となって崩れ落ちる神崎の姿を浮かべながら、怨み言も含めた呪文は、久留美の魔術に正しく望みを伝達した。

そして、

「が――――、――――――」

豪炎と呼べるまでに燃える勢いを増したそれは、虫の息だった声帯のその息の根を止めた。声無き断末魔を幻聴した久留美は、神崎の足が崩れるのを見た。

文字通り、灼熱に帯びた黒炭のようになってグシャリと折れるのを。

それが崩壊の始まりとなり、呆気ないものだった。

【二の腕であったであろう部分】が付け根から剥がれ落ち、残る片方の足も亡き片割れ同様に、潰れるように折れた。

かろうじて人の形を保っていた炭屑の塊は、重みを失ったその体を声も無く地に伏した。

呆気なく。

そう。

呆気なく――――――崩れ落ちた。

「……」

久留美は、それを暫く茫然と凝視していた。
自らの行いを。
そして、その結果を。

あんなに必死になって逃げようとした対象の終わりを、自分がもたらした。
望んでいたことであろうとも、それは同時にあまりにも信じ難い光景だった。

「は、ははっ……は」

何故か無性におかしくて、思わず笑いが零れた。さっきまで痛いくらいに張り詰めていた緊張が、ぷっつんと切れてしまったからだろうか。力が入らない。

「ははははっ……あは、やった……やっ……た」

そして、ついに涙腺まで緩んでしまったのか、涙までポロリと落ちてきた。

精神状態はごちゃごちゃだった。
直接的に両親を手にかけた存在を自らの手で屠ってやり、無事に千夜を勝ち取れたことへの喜び。そして、いよいよ最後の一線を越えてしまったことで本当に後戻りはできないことへの哀しみが、今の久留美の心に混在している。

「や、やれば……出来るじゃん、わた――――――」

ふと湧き上がった『違和感』が、久留美の中の勝利の余韻を霞ま

せた。

何か、変だ――――と。

こんなに簡単に終わるものなのか、と。

ただならぬ緊張に圧迫されながらも、成功することだけを願っていた。

それが成った。それでいいはずなのに、【納得がいかない】というシコリが久留美の中でゴリッと感じる。

……こんなに簡単にいくものなの？

負傷、疲労を負っていたとはいえ、千夜が道連れという最終手段を選ばざるえないと判断した相手に、自分如きがこんなにもあっさりと勝てるものだったのか。

千夜がそこまで危惧していたのは――――

そこまで思い至った矢先、久留美に確信が訪れる。

それは――――

「……――――っ！」

それは、僅かな微動だったが、薄暗い闇の中で久留美の視界は確かに捉えた。
炭屑となった神崎の遺骸が、動いた。
気のせいであればいい、と思う久留美の決死の心境を裏切るように現実は背を向ける。

「……っ、い、て〝……ぇ、ぇ」

しゃがれた声。
けれど、それは確かに燃え尽きた炭屑から発したものだ。
生きていた。
神崎は、こうまでなっても生きている、と久留美は認めざるえない結果を凝視した。

……こいつっ！

千夜の言っていた通りだった。
やはり、神崎の頭に隠れているという角を破壊しない限り、この男は自らで形成した磁場から汲むエネルギーでいくらでも再生するのだ。

……私の炎じゃ、角まで届かないっていうの？

そもそも炎が届いても、魔術で角は破壊できないのかもしれない。
もしそうなら、こちらに打つ手はない。

向こうには手段など腐るだけある。
屍鬼など出されてしまえば、千夜はともかく久留美には成す術がない。

……この、馬鹿！　がっかりしてる場合じゃないっての！

もとより自分では倒せないのは承知していたはずだ。
己のすべきことは、千夜がいかに確実に倒せるような隙を神崎に作らせるか、なのだ。そのための囮を自分が買って出たのではないか。己が再起不能にできる可能性が消えただけだ。

まだ終わりではない。
ならば、次の手を考えねばならない。
この男が、まともな思考を取り戻し、己が思う以上にある自身の有利性をフル活用する前に。

……落ち着け。コトは私が思っていたよりも甘くなかっただけだ。やるべきことは、何一つ変わっていないっ！

ギュッと目を瞑り、震え出しそうな自分に言い聞かせる。
しかし、咄嗟の自分の行動が危ういミスであることに直後に気付き、

……うそ、今――――！

暗闇の中で、目を閉じる。

目の前には敵がまだ存命しているのにも拘わらずに、それをするということは自らの命を無防備に晒すということ。

致命的なミスだった。

そして、それは久留美の危惧を嘲笑うように――――過ちの結果として表れた。

慌てて開眼しても時は既に遅く、今しがたまで見つめていた神崎の姿を見失ったのだ。

「しまっ……」

混乱に火がつき、久留美から冷静さが失われる。

視界で見失った相手のことを追うことに囚われ、気配への注意が散漫する。

故に背後の濃密な気配に気付くのに一歩遅れた。

「――――イ、て、ェ、じゃ、ネ、ぇ、か」

まだ再生し切れていないであろう声帯と舌で紡がれるしゃがれた声色。

声で反応しても遅いとわかりつつも、それでも条件反射が久留美

を振り返らせた。

そこにいたのは――――

「ひっ……！」

喉を突いたのは悲鳴だった。

『それ』は、淡く赤に帯びた発光を成していた。

しかし、それはまだ経過を辿る証であり、その光は闇の中での救いにはならなかった。

再生の光は、未だ治癒途中の神崎の身体の経過を露見させていた。

未だ、殆どの皮膚が焼け爛れ皮一枚下が剥き出しの、おぞましい神崎の姿を。

正視しがたい醜悪な姿に、久留美は驚愕のあまりに我を忘れた。

完全なる停止から生まれる、隙は急所を曝すも同然だった。

開花した本能も、久留美に対処の令を送るも既に出遅れであった。

視界の下部で何かの動きを捉えた。

まずい、と思考が動くが、

「うっ――――――！！」

身体は間に合わなかった。

その動きは、腹部に入り込んで衝撃を与えた。

殴られたと理解が追いついたのは、殴り飛ばされて宙に浮いた体が地面に叩きつけられた時だった。

「――――――か、はっ」

背中から受身も出来ずに打ち付けられ、呼吸が一瞬止まった。
痛みよりも呼吸が出来ないことに身体が震え、動けなくなった。

……骨、は？

思った矢先に、吐き気が喉に競り上がってきた。

「うぶ……うぇっ、げふぁ！」

床に伏せ、えづきに逆らえず込み上げてきた胃液を吐き出した。
咥内が胃酸の味で満たされる不快感の中、

……折れていない。

痛みはあるが、胃を打たれただけで済んだ。
咄嗟に身体が後ろで重心を傾いたのは、気のせいではなかったのだと久留美は己の身に起きた事実を、嘔吐の最中にて理解した。

身体が呼吸を思い出し、主導権がどうにか戻ったところで、

……体勢を、立て直さ……ない、と。

骨が折れていない事実が、心が屈するのを防いだ。
痛む腹部と収まらない吐き気を堪えながら、這うように立ち上が

ろうとした。

しかし、身体は圧倒的な重力に叩きつけられた。

「ぁ、はっ……！？」

背骨が折れるかと思うほどの強い力で一瞬反って、地面に痛みの止まない腹部が再び強制的に密着させられる。

誰の、何の力など、考えるまでもない。

「舐メた、真似シて、くれたナ」

ぐぐ、と背骨の軋む音を立てる元凶は、喉の声帯を残して既に負った被害を殆ど完治していた。

言葉どおり踏み潰されそうな状況で首を僅かに捻り、なんか見上げた先で己の努力が全て無に還った事実を久留美は目の当たりにした。

化物め、と声無き罵りを口の中で噛み砕く。

「さすがに驚いたゼ……あンな真似、ドコで覚えたンだヨ、なァ？」

「ぁ、ぐ、ぅ、ぅ……っ」

ギシギシと軋む。

あと一息で折れてしまうのではないか、という危機感と絶望の紙一重の心境の中で、先に呼吸が出来なくて死ぬのが早いかの状態だった。

「哀れなもンだよ」

背中の圧迫がなくなったと思ったのは一瞬だけだった。
その後に降るのは断続的な踏みつけ。
まるで、蟻の行列を踏みつけるような。
「人間ってナぁ、惨めで憐れで汚らしい生きモンだよなぁ？　こウなってみてわかったがヨぉ……手足の数以外ジャ虫と何が違うっていうんだカ」
地べたを這いずって。踏みつけられてもがいて。
ああ、確かに。虫と変わらない。少なくとも、この化物には同じなのだろう。
「ソう考えりゃ、お前は大シた寄生虫だ――――よっ！」
抜け出そうという無意識に突き動かされ、前で突き出していた右手。
その上を、神崎の足が背中で行われていたように――――手加減なしに踏みつけてきた。
「いぐっ！」
耐えていた声も、これには溜まらず飛び出した。
決して喜ばすまいとしていた努力も、これで無駄になった。
「弱いもんハ強いもんに寄生しテ、自分の身の保障のたメに相手を毒しいく。お前があの女に対シテそうだったようニなぁ。あんナに

骨抜キにしちまイやがって……」

ギシ。

二の腕辺りに置かれた足の下から、強くなる負荷と共に嫌な音が聞こえた。

「どんだケ楽しカった？　どんなダけ良イ思いできタ？　こンなに強いやつヲ飼い慣らしている自分はすゲぇやつなんだって優越感は、どんなモんだっタんだよ？」

ギシ。

ギシ。

重みが加わるごとに、骨が酷く泣き叫ぶ。

それに混じって、久留美は別の泣き声も聞こえた。

おそらくそちらは幻聴であるけれども、確かにそれは泣いている。

胸の奥から込み上げてくる痛みは、神崎の言葉が決して的外れではない証だった。

哀しいけれど、それもまたあるべくしてある事実だった。

千夜の傍にあることで得ていた心地よさの正体は、強い者の近くにある優越感であったのかもしれない。自分は、昔の傷を千夜という存在をもって癒そうとしていた。決して、そんなはずはないなどと言い切れないのが歯痒くて悔しい。

黙れ、と言いたいのに。

久留美自身の中に確かの存在していた、好意に紛れこんでいていた薄汚い下心の存在が、それを阻む。

優しくしてもらって。
友達になってもらえて。
彼女の『特別』になれたことをそういう風に捉えていたかもしれない。

否定できないのは、自分が決して真っ当な人間ではないからだ。
この男の言うとおり、自分は寄生虫だから。

――――――……ゴキ。

腕から聞こえた断末魔。
真っ白になるほどの痛みと共に、久留美の心も悲鳴を上げてさっかさまに落ちていった。

奈落の底に叩きつけられる瞬間、久留美は無数の肉片になって飛び爆ぜるような感覚の中に呑まれていった。

［壱百六拾七］　虫の息の心（後書き）

失踪したんじゃないかと思われても仕方ないような停滞期間の挙句にアップした結果がこれだよ。何でここで切った私……ｏｒｚ

予定よりも酷くはなくなったと思う。
なんだかんだで女の子をボコボコにするなんて酷いことは私にはできないということかな（どの面下げて
もうなんつーか、この後にバッドエンドしか見えない終わり方したけど。
まだだ、まだ終わらんよ。

【壱百六拾八】　人間でいる意味（前書き）

理屈と正論と、ヒトカケラの憎悪。
取るに足らなきくだらないそれらに縋ってでも。

［壱百六拾八］　人間でいる意味

じくじくと熱を孕んだ痛みは、久留美に何処か遠いものに感じさせた。
動かしたらそれこそ金槌で打たれたような痛みをはっきりと示すのだろうが、生憎それは叶わない。

何故なら、痛みを齎した元凶は未だ久留美のそこをグリグリとそこを踏みにじっているからだ。
縫いとめられていては、動かしたくとも強いられてもどうにも出来ない。

「お前みたイな奴は、俺も腐るほどミてきタよ」

久留美のという命に手綱をかけて引く男の声が、降る。
支配欲に満ちた声は、抵抗する気力をなくした久留美に対する満悦した気分を如実に表していた。

「ガキの頃から、そんナやつらばっカだったかラな。タだ、違うのハ、あいツらは俺から得るものガないとわかるとスぐに見切りつケやガった。そリゃ、そうだ。俺は、弱カった。今だから、認めラれる。俺は、弱くてちっチぇ人間っテ生き物だった」

それは神崎陵という男が、人間であった頃の記憶。
今となっては忌まわしいものでしかないそれを今一度振り返る理

由は、一つしかない。

己という存在の誇示。そして、そのための比較として過去は現在をより輝かしく際立てるために必要なものであった。

「だが、俺は変ワった。あの女に……千夜に出会っテ、俺は変わったんだ」

右腕の骨を踏み折ると同時に、死んだように動かなくなった久留美が、僅かに頭部を揺らして反応を見せた。

神崎は、玩具がまだ使えるということに対して嗜虐的な笑みを浮かべた。

「あのケダモノは、俺に教えてくれた。弱肉強食。それが世界の正しくあるべき姿だったってことを……俺の考えが正しいとなぁ！」

「ケダモノ……ですって？」

小さな呟きは問うような響きをもって、神崎の元へ届く。

神崎はそれを断ち切れない執着心から漏れたものだと自己解釈した。

やはり、人間は虫だと神崎は己の考えに賛同した。

足の裏に踏み敷かれ、死を振りかざされても醜くもがき続ける。死ぬその瞬間まで。

ならばわからせてやるまで、と神崎は鎌首をもたげた。

骨の髄まで絶望を染み渡らせて、死を前にした時四肢を固まらせて屈服せざるえないようにしてやろう、と。

これは見せしめになる。

何処かで自分の隙を伺って隠れているであろう千夜の前、この女

を嬲り殺しにしてやるのだ。
　仮に飛び出してくるようなら、動けないように打ち据えてやるまで。こんな女の手を借りて小細工を仕掛けてくるくらいなのだから、既に千夜の状態は芳しくないのだ。ならば、這い蹲らせるなど子供の手を捻るように容易いこと。そして、後は己の思うままだ。

嬲り。
いたぶり。
犯す。

　己を満たすであろう愉悦を生む行為を控え、神崎は手始めに早く目の前の獲物を陥落させてしまおうと血気を逸らせた。

「他に誰がイるって……？　所詮、お前なんかトは程度が違ウ生き物なンだよ。アいつの傍にいるノにふさワしいのは、俺ダ。俺こソが、なんだ。同じ高ミにいる存在に、俺はなっタんだ。お前のよウに自分のとコろまで引キ摺り下ろシ、堕落させるような屑ナんかじゃぁなイ」

　そう、自分こそがあのケダモノの傍にあるべき者なのだ。
　あの女を従えて、あらゆるものが自分に頭を下げる世界を築く。

「そして、あいツは屑の傍にいテいい存在ジャない。俺を更なル高みに……全てヲ見下ろし、支配スる唯一の頂点マで登りつメさせるためにあるベキ、同じケダモノという同種……弱肉強食の法則の中で生きるべき存在ナんだよォっ！」

　その存在意義を揺らがす不安要素。
　あと一息。この虫を踏み殺してしまえば、最後の未練を断つことができる。

神崎はそう信じていた。微塵も疑わず。

「……さぁ、おシャベりはこレくらいで終わりにしヨうじゃないか。モう十分理解しただロう？　今まで、散々こノ俺の女を弄び、誑かしてクれたな。たっプりいたぶって、嬲って、スり潰すように殺してヤるよ」

半ば蹴るように久留美を仰向けに転がした。

重みによる反動を除いて抵抗はなく、口元を己が吐いた胃液で濡らす、虚ろな久留美の顔が神崎の眼下に露となった。

神崎は埃と砂に塗れた久留美の髪を掴み、引きずり上げた。

この程度で壊れられては困る。

まだまだいたぶり足りない。ここまで受けた屈辱の半分はこの女に払ってもらわねば気がすまない。

虚ろの中に束の間の光が戻るように、神崎は正気づく話題を吹っかけた。

「どうせ近くに、千夜がいるんだろ？　呼んでみたらどうだ？　助けてくれるかもしれないぞ」

反応はない。

腕一本くらいで壊れてしまったのだろうか。

だが、そうだとしてもまだ足りない。

それなら、狂気の境から正気を引きずりだすまでのことだ。

「なんだ、御利口じゃねぇか」

試しに、左の頬を弾く。

「まぁ、俺モ大事な女の手足をブチ折るなんテ出来ればヤりたくねぇカらなぁ。アレの時、マグロじゃつまんネぇしよぉ」

ならば、と右を弾く。
それでも反応はない。

この程度の痛みでは芽は出ないか、と神崎は一度久留美を放り捨てた。

「……ははぁ、最後の最後で屑なりに俺に貢献できたじゃねぇか。……そうだ、ご褒美をやるよ。ちょうどいいから、あいつが見ている前で殺してやる。たっぷりじっくりやってやる。そしたら、あいつはお前のこと、一生忘れないでくれるかもなぁ？　みっともねぇ無様な身の程知らずがいたって時々思い出したりしてよぉ」

残っている腕も折ってやるか。
それとも、足がいいだろうか。

なんでもいい。
突き刺さるような悲鳴を聞きたい。
惨めな命乞いをさせたい。

「ほら、どうした。鳴けよ」

――――――あいつが見てるぜ？

これでどうだ、と囁いた言葉に、久留美の目に光が戻るのを神崎は見た。

待ちわびていた、僅かに灯った希望を叩き潰す快感を前に、神崎はいてもたってもいられず、倒れる久留美の胸倉を掴み引き上げ――――

「――――鳴くのは、あんたよ。この――――――負け犬」

瞳の奥の小さな灯火が、一気に燃え盛る瞬間を寸前の距離で目の当たりすることになった。

彼女の口から出た――――――予想もしなかった言葉と共に。

◆◆◆◆◆◆

わかってしまえば、なんてことない。
何だってそうだ。

あれほどわからないといって千夜の心の内を探ろうとして、結局明かされてしまえばなんてことない、自分の不安も絶望を打ち消してしまう紛れもない真実がそこにあっただけだった。

見えない時はあんなに知りたくとも、同時に目に触れるのが恐ろしかったのに、だ。

つまりはこういうことだ。
どんなに膨らませた不安も、真実の前には虚偽でしかなく、等しく無意味なのだ。

だからこれも同じことだ。

あれほど自分を支配していた恐怖心も絶望も、消えた理由は――
――――一緒だ。

「ふふっ、あはは……はは っ」

何故か、笑いが零れた。
理由は――――――否、わかっている。

おかしいのだ。
笑いたくて仕方ない。

笑いが、止まらない。

久留美は、その理由を知っていた。

――――――何もかも、この男のいうとおりだからだ。

故に、久留美は自分の反応に呆気に取られている男に告げる。

肯定を。

「……あんたのいうとおりよ。人間は弱い。汚い。惨めったらしい。本当、屑みたいなどうしようもない生き物だわ」

間違い――――――ではないだろう。

他ならぬ自分がそうだったのだから。

「でも、それを嫌だとか言ったって変わりっこない。そういう生き物に生まれたからには、そういう風に生きていくしかないんだもの。……――――――で、さ」

虚空の視線を放り投げて、一人心地で呟くようにしていた久留美は、ふと神崎を視線をかち合わせた。

酷く、冷めた――――――酷薄な気持ちを込めて。

「それを否定して、人外に昇格したあんただけど……ケダモノとか弱肉強食とか偉ぶってみたところで結局のところ、自分から逃げた負け犬ってことじゃない？」

にや、と笑みを含ませて言ってやると、神崎の赤い瞳がきゅうっと窄まった。

直後に右頬を衝撃が突き抜けた。

図星か、と久留美は攻めどころにハズレはないと確信を得る。

ならば、迷う理由は――――――ない。

「……て、メぇ」

怒りに震える神崎が、憤怒と殺意を燃やしていることは火を見るよりも明らかだった。

けれど、久留美はそれを少しも怖いとは感じなかった。

感情が麻痺しているわけではない。

事実を心が理解し、それ相応の対応を成しているだけなのだ。

久留美は不思議で仕方なかった。

こんな相手に、あれほどまで己が怯えなければならなかったのか、と。

散々虫だのゴミだのと見下した相手からの言葉を、殴るだけで否定もできない輩に。

奇妙な気分だった。

今も自分の命をその手に握る脅威であることに変わりないはずな

のに、今の久留美には神崎が酷く薄っぺらく頼りない生き物に見えていた。

追い詰められておかしくなったのか。

否――――追い詰められて、視えるようになったのかもしれない。

失ってからというものの、こんな形による発見が多くなったと思う。

それは、知りたくもなかったもの、望まなかったものが多く占めるが、それでも無知で終わるよりは良かった。

そうしてわかったことは、決して優しくも喜ばしくない、残念な事実。

自分は弱い人間という生き物であるということ。

けれど、その事実の後ろには――――ちょっとしたオマケがついていた。

些細なことかもしれない。

そう思うのは、自分だけかもしれない。

だとしても、大事なことに気づいたのだと久留美は思っていた。

それが、折れかかった久留美の心を、芯となって生かし支えたのだから。

手に入れたモノは、ちっぽけでも大きなこと。

腕一本と引き換えに見出した――――たった一つの事実。

脆弱で醜い人間たる自分は、それでも神崎に――――

「――――私の、勝ちよ」

勝っている。

埋めようのない圧倒的な落差を考慮しても尚、それでも自分はこの男にだけは負けていない。

絶対に、負けるわけがない。

久留美は揺るぎない自信をもって、それを確信し、言葉にして断言した。

「人以上の何かになんかなれなくてもいい。私は、人間でいい。……自分がなんであるか……その事実から逃げて強くなれるとしても……逃げて負け犬になるくらいなら、私は弱い存在でいた方がマシよ」

「あ、が……っ」

「弱い存在なり、足掻いてやるわ。少なくとも……私は、あんたのような負け犬に負けはしない、ぜった――――」

再び衝撃が阻みにきた。

今度は、先程のように叩きつけるなどという生易しいものではなかった。

その証拠に殴られた右の方で、ゴキリと嫌な音を聞いた。

直後に口から飛び出した白い物を眩む視界に一瞬捉え――――

それが自分の奥歯であることを知った。

口の中を満たす鉄の味が唾液と合わさり、収まりきらず溢れ出した。

痛い。

しかし、それ以上に愉快だった。

目の前の神崎の顔といったらない――――――と。

怖いものか。

負け犬に吠えられたからなんだというのか。

「……私の……勝ちよ。いえ……〝私たち〟の勝ち。あいつは、負け犬になんかさせないわ」

この男のいうとおりだと思う。

脆弱な自分は、千夜を堕落させる。

生きていたら、これからも寄生虫のように張り付いていくのだ。

けれども、

「私みたい、のにっ……引っ付かれて、あんたのいう堕落とやらは……して、いくのでしょうけど……あいつは……この先も、負けはしない。負けさせ、ないっ。何があろうと、誰が立ちふさがろうと……あいつを負けさせたりなんか、するもんか」

「――――――黙れ、馬鹿が！」

ガツ、ガツ、と。
打ち付ける痛みが顔面を襲う。
しかし、それに恐れはなかった。
まだだ、とわかっていたから。

まだ足りない、と。

「お前は終ワりだ……ここで、終わりなんダよぉっ！！」

喚く神崎に唾を吐きかけられながらも、久留美は冷静にその様子を分析していた。
思惑どおり着々と頭に血が昇っているようだが、まだ理性は糸を張らしているようだ。

久留美は希望や都合のいい展開への期待は全て捨てて、考えた。
この場で自分に何ができるかを。
姿の見えない共謀者へ捧げる――――――最高の処刑台という舞台を仕上げる方法を。

そして、わかった。
堕ちるところまで堕ちて、折れる寸前で気づいた。

人間と獣の違いに。

「だったら、殴るだけじゃなくて……きっちり殺してみなさいよ」

簡単でしょ？――――――と挑発を放る。

すると、赤い瞳孔が細くなる。

それだけでなく、瞬きを忘れているのか充血さえしているようだ。

来た、と手応えを感じた瞬間であった。

久留美は、一瞬の頭に血が逆流する刹那に生じる隙を突いた。

理性に火がつく寸前にて――――――　ズボンのポケットに残る左手を突っ込んだ。

利き手ではないそれでは力加減が出来ず、けれど軋むほど握り締めて、

「私のっ――――――勝ちだあああああああアアアああアアアああああああああっ！！！！！」

手が掴み取ったのは、バレッタ。武器ではなかった。

けれども、他に何もない。

手荒に扱うなど以ての外であるはずの、大切なものであった。

けれども、今はそんなこと関係なかった。

形状と、それを有意義に利用すること。

この場での反撃を実現させることのみを特化した思考が優先したのは、ただ一つの行動であった。

久留美はこの時、それが母の形見であることも忘れ去った。

ただ、それを突き刺して――――――　最後の理性の欠片をこの男から完全に引き剥がす。

それだけが久留美にできる全てだった。

そして――――――

「ィ、ぎっ」

悶絶の呻き。

ずぶり、と尖った先端がぬめりを持つそこ――――――右の眼球へめり込んだ手応えが久留美の手へ伝わったと同時の反応であった。

思い切った振り被りにより突き刺さったそこを抉るように力を込め、血肉を捻じ切る勢いで手首に捻りを加え――――――引き抜いた。

飛び散る血飛沫の生温かさを頬で感じ、己の仕出かしたことを実感する。

一方でまだ己の身に起こったことを自覚できていない男に、

「……ばぁか」

最後の一石を投じた。

そして、

「ガ、ぁあああああああああＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡアアアアああああああああああああああ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝っっッっ！！！！」

何かがこそげ落ちた絶叫。

神崎の目から正気は失われた。

怒り。屈辱。

プライドと精神を蹂躙された神崎は、理性と呼べるものが徹底的に除去された。

理性を取り戻す術があるとすれば、怒りの素である久留美を殺すことだ。

そして、神崎はそれを迷うことなく、躊躇させるべきものは何もなく、実行する。

暴走する衝動に突き動かされるがままに。

対する久留美は――――――もう、動けなかった。

無惨に傷つけられた右目を抑える傍らで、開放されたけれども。
極度の緊張からも開放されたことにより、久留美の身体からは一切の力が抜けてしまったのだ。

しかし、久留美は焦ることなくその事実を受け止め、抱擁した。
これでいい――――――と。

自分の役目はここまでだ。
これ以上できることはなく、やることは全てやった。

完璧に理性をかなぐり捨てた神崎は、今や全身隙だらけだ。
更には、意識は全て久留美への殺意に注ぎ込まれている。
完璧だ。

あとは、

……さぁ、御膳立ては済んだわよ。千夜。

裏方に出来るのは、ここまでだ。
ここから先は主役の手に委ねるしかない。

囮となった自分がなんとしてでも神崎に絶対的な隙をつくり、そこを千夜に討たせる。
試行錯誤の果てにようやく望んだシナリオが完成した。
あとは、千夜がクライマックスを飾るだけだ。

――――――この時、久留美は『もしも』のことなど考えもしなかった。

千夜がこの場にいないこと。
決して現れないこと。

このまま自分は殺されるだけで何もかも破綻するなど、考えもしなかった。

必要のないことだったから。
千夜は必ず現れる。
久留美は、そう信じていた。

否。
信じているわけではなかった。
結局のところ、久留美は他人を信用できないままだ。
自分という存在を理解し、認めても尚それは変わらなかった。
理解していようと認めようと、そうでなかろうと、事実は不動のものなのだ。

他人を信じるなど、大それたことを出来るような人間ではないのだ、新條久留美という人間は。

恐れないのは。
そう断言しているのは。

信じているからではない。

ただ――――――『知っている』だけだ。

その対象は、未来ではない。

経験という名の過去から来る確信めいたもの。

千夜は――――――『あの人』は、そういう人だから、と。

「ヴぅ、ぅ……ギィィィ」

神崎の文字通り赤く染まった目が、ギョロリと剥き出しになった血に塗れた眼球が久殺意を以って久留美を射抜く。

今度は虚仮威しではない。

間違いなく、もはやそれ以外考えられなくなっている神崎は、自分を殺すだろう、と久留美は赤い殺意に見据えられて思った。

それでも、やはり恐れはなかった。

ただ、忘れていた腕の痛み、鉄臭い口の中の疼き、全身の打ち身からの悲鳴が甦ってきて、少し意識が揺らいだ。

視界がぼやける。

堕ちるのか、と思った。

しかし、違った。

痛みが、久留美の意識を『此処（ここ）』ではない『何処（いずこ）』へ誘っていた。

霞がかった『風景』に、まず移りこんだのは祭壇のような場所。
鳥居。そして、社。
聖域のようなそこに――――――――　一人の少女がいた。

顔は見えない。
けれど、その姿には途方もない絶望を感じさせられる。

それが、少女の抱えるものであると久留美はすぐに直感した。
というよりも、やはり自身から湧き出た漠然とした髣髴であった。

彼女は何かを待っていた。
そう、待っている――――――――己の死を。それを運ぶものを。

そして、それはまもなくして『風景』に現れた。
見るもおぞましい化け物。何処となく虫を形状しているが、大きさが規格外だ。
ムカデのようなそれは、久留美にも悪寒を覚えさせる。
虫は嫌いだ。小さい頃から、死骸さえまともに直視できなかった。

久留美は、この『風景』を見て、これから何が起こるのかすぐに理解した。

否――――――”思い出した”。

この少女は蟲の化け物に対する生贄。
そのためだけに生きてきた。
だからこそ死を諦観して、甘んじようとしているのだ。
途方もない絶望に心を沈めて、何も感じないように徹している。

馬鹿だな、と久留美はその姿を見て思った。

だって、そうだ。

世界が変わらないなんて勝手に完結して、これから何が起こるかなんて本当は知らないんだから。

久留美は知って――――――”識って”いた。

この後、何が起こるのか。

『風景』の中のわかった気でいる少女よりも、ずっとわかっていた。

久留美は目を閉じ、『風景』を記憶の中にしまった。

そして、再び現実を見据えた。

赤い目を爛々と殺意に輝かせる己の死を。

そして、久留美は嗤った。

この男も、わかっていない。

世界は己が思った通りに動いているのだと信じてやまない愚か者だ。

自分は『あの時』、思い知らされた。

絶対に変わらない世界などない。

世界は思うようには行かないのだ、と。

だから、今この瞬間だって――――――この男の思うようにはならないのだ。

「あんたは、終わりよ」

ただ、うまく行っていたに過ぎない。
自分の手でなるようにしていたなど、大間違いもいいところだ。
わからないというのなら、痛い目を見るがいい。

臆することなく迎え撃つように睥睨する久留美が放った言葉は、神崎には届いていないだろう。

だが、それでいい。
それで、完璧なのだから。
この男の世界を壊す手筈は整った証なのだから。

「思い知ればいいわ。……思い通りになんか、ならないんだから」

思ったくらいでどうにかなれば、この世界で生きることがどれほど容易いことであっただろうか。
足掻かなければ、どうにもならない。
血を吐いて、涙を流して。そうでもしないと、変わる余地すら生まれない。

それを教えてくれた人がいた。
たった今思い出したことだけれど、そんな人が昔いた。

そして、今も――――――いる。

きっと覚えてはいないだろう。

自分だって忘れていた。された側は忘れないものだというのに。

けれど、この直前の追憶は無駄ではなかったと思う。

嬉しいことがわかった。

こんなに追い詰められているのに、こんなに不安がない理由。

その理由には理由がなかったが、それは確かにあったのだ。

「誰に縋って力を得たかは知らないけど、力におんぶに抱っこで偉そうにしているだけのあんたは……私たちには勝てないわ。無力かもしれないけど、私はそれでも自分の力で立つ。あいつは完璧じゃないかもしれないけど、自分の力で立てる。……それすら、放棄したあんたに私たちが負けるわけがないのよ」

あの少女だってそうだ。

死んで当たり前だ。

自分で立つことをはなっから諦めて、周りからの見えざる圧力と己の境遇に悲観して。

だから、『あの後』に思い知る羽目になったのだ。

己の馬鹿さ加減を。

「生きてくってのは――――――それだけで、十分労働なのよ」

あの頃の自分はそんなことも理解できていなかったし、知りもしていなかった。

「それを拒んで……ただの人間として生きることを……苦しむことを捨てたあんたに、負けてたまるかっての！」

それは、決して楽ではないけれど。

楽ではなかったけれども。

「そうでしょ！？　――――――――かずやぁっ！！」

それでも、諦めることを止めた後は――――――――独りではなかったから。

傍にいてくれた人がいた。

ならば、諦めなければきっとまた――――――――『あの人』は応えてくれるだろうから。

そして、

「――――――そうだな、久留美」

返る応えは確かにあった。
この耳で聞いた。

その瞬間、じわりと湧き出た安堵が久留美を意識の喪失へと誘う。

留まろうとしたが、限界だった。
現れるその姿を見たかった、と名残惜しく思う。

代わりに、別の声が響いた。
記憶にしまわれたはずのあの『風景』からのものだった。

『――――――はっきりとはわからないが、お前がいない世界は寂しいよ』

私もよ、と久留美はそれに応えた。

（だからこそ――――――私は、……）

挑むべくした言葉を言い切る前に、久留美の意識は途絶えた。

［壱百六拾八］　人間でいる意味（後書き）

クリスマスまでスルーは阻止できて何よりです。

突然ですが、誰か前世ネタを出してしまった途端に作品が安い電波臭を醸し出さないで済む方法を教えてくれませんか（今更な

え、出さなきゃいい？

いやいやいやそうじゃなく（ｒｙ

何であれ、次回でようやく神崎戦に幕が下りる予定。

そして、長らく見ていない現世の主人公のターンがやっとこさ。

……就活まで終わるどころか結局年越しちまいそうじゃねぇか、くそう。

蒼助と千夜はいつ会えるのやら（本当にな

【壱百六拾九】　果てにあるもの（前書き）

逢えた
そして、そこにいる
それだけで私は

［壱百六拾九］　果てにあるもの

久留美の思惑どおり、神崎の思考回路は壊滅状態となった。
もはや目的も野望も千夜のことも忘れ、目先の殺意と破壊衝動しか残されていなかった。
久留美を殺せば、徹底的に破壊し尽くせば、再び正気に戻るに至ったかもしれない。

しかし、それはもはやあったかもしれない『もしも』でしかない。
それはありえた可能性のあった未来でしかなく、確定のものではなくなった。
他ならぬ久留美の手で引き金が作られ、そして他ならぬ神崎自身が選んでしまった。

完全なる隙をつくった彼は、自らが望んだ理想的な未来を捨ててでも自らが受けた侮辱と屈辱の払拭を遂行することを選んだのだ。

そして、その代価が――――――結果が、生まれる。

◆◆◆◆◆◆

神崎はふと気づいた。
世界が、何故か逆さになっていることに。
その矢先また逆転。
かと思えば、再び世界は正常に。
目まぐるしく変わる世界は、神崎を動揺させ、困惑させた。
何が起きている、と。
しかし、理解はすぐに訪れた。
神崎は耐えなく変化し続ける世界の端で、見つけた。
殺意衝動を上回る困惑によって僅かに戻った理性で、それを認知した。
――――――終夜千夜。
その手には、既に振り抜いた後と思われる純白の直刀。
一体いつの間に現れた？
そして、あれは一体何を――――――『斬り裂いた後』なのか。

思考の直後、神崎はすぐに『答え』を見つけた。
それは己にあった。
否、正確には――――――『かつての身体であったもの』に。

「……ぁ？」

酷く間抜けな掠れ声だが、そんな声しか出なかった。
何故なら、

――――――既に神崎は、『首』だけだった。

視界に捉えたのは、切り離された後に残った身体だった。
それも崩れ落ち、倒れていくのを目にした。

「な、ぁ……！」

徐々に襲い来る恐慌に飲まれながら、何故千夜がここにいるかを考えた。
いくら気配を探ろうとも、『この場所に存在している』ことくらいしかわからなかった。
そして、熱反応やオーラは一切感じなかった。

ならば、一体今まで何処に――――――と思いかけた矢先、神崎は気づいた。

世界が目まぐるしく変わる直前。
視界は一瞬だけ光に包まれた気がした。
本当に一瞬のそれの後、神崎は眩む視界で目の前の獲物を再度捉えた。

薄く笑う顔は、何処かしたりとした表情だった。

それを認識した刹那の後、異変は訪れた。

光。
そして、それが生むのは――――――『影』だ。
それさえあれば、闇の中でさえそれは生まれる。

「ま、さ〝……っ、か〝ッ！」

千夜が、己の身体のすぐ傍にある理由を知った。
そこは己が正面から光を浴びれば、影が生じる。

千夜が自身の手から逃れた術が、脳裏をフラッシュバックする。
もはや全てが手遅れである、今になって。

「――――理解したか？」

千夜が笑み、刀を構え直す。
無駄な動作が一切ないその優雅な振る舞いは、神崎にこれから己が身に降りかかることを忘れさせるほどに美しい。

死神が鎌を掲げる姿に等しいというのに、見惚れてしまうほどに。

「しとめるぞ――――――夜叉姫」

『――――――御意』

落ちていく。

神崎はその一秒一秒がカウントダウンであると感じた。

もはや切り離れ感じないはずの心臓がその秒を刻む。

「――――――ぁ……、」

頭上高く振り上げられたそれが、キィンと白光を放つ。

闇の中で生まれる白い煌き。

瞬きの刹那、空気を裂く音色が耳を貫く。

同時に神崎は、一陣の風がその脳を突き抜けるのを、とても生々しく体感した。

◆◆◆◆◆◆

肌を断つ。
肉を断つ。
骨を断つ。

そして、

……そこか。

硬質で、異質な手応え。
目的のものはそこにある、と手を通して夜叉姫が伝達する。
捉えたそれをどうするかなど、確認するまでもないこと。

通しすぎる瞬間、それはあっけないほどに刃を素通りさせる。
極限の緊張感の中で振り下ろした一刃を阻めるものはない。

直線がたった一本。
呆けたその顔に刻まれた。

けれど、それは必殺。
命懸けでこの僅かばかりの確実なる時間を作り出した親愛なる人に捧げる勝利の一撃。

故に、逃れることはできない。
如何にこの男が不死身に近かろうとも。
それは――――――絶対に、叶わない。

「――――――諦めろ」

彼女の勝ちを認めろ、と。
同じ敗者として、千夜は尚も認めがたいとする男の顔に告げた。

それを切り捨てる肯定の一撃をもってして。

◆◆◆◆◆◆

――――――パァンッ。

何かの弾ける感覚と共に、神崎は力の喪失を感じた。
二つに分かられた頭部は、それぞれ少し距離をもった場所に落ちた。
叩きつけらたことで崩れた肉の断面を、双方の眼球が確認する。
白い骨のような何か。
それが己の正しい意味での『心臓』であることを認知。
角だ。
己の霊力の水源。
無限のそれをかき集めることも、操作も、それなくしては有り得ない。
しかし、それが砕けたということが意味することは――――――
「……死、ヌ？」
「【角】は破壊した。もう再生も治癒も――――――何も出来ない」
無意識の言葉を拾い、応える者がいた。
神崎は今にも零れ落ちそうな目玉を駆使して、ギョロリと見上げる。
静かな眼差しを向け、見下ろす千夜がいた。
今は白刃も下ろし、今さっきまでの殺気はおろか既に敵意すら感じない。
終わった、と言葉なくとも有り様で語っていた。

それに、神崎は納得がいかないと、

「ナ、んで……ダ」

「理由はない。ただ、結果があるだけだ」

「……結果、だ……ト？」

「久留美が勝った。そして――――――負けたんだ。お前が……【俺達】が」

いや、違うな、と千夜はすぐさま己の発言に訂正を入れる。

思い直したように、

「あいつは、ずっと勝っていたんだ。最初から、ずっと。……俺たちがそれを認めようとしなかった。そして、お前が潰そうとし、俺がそれを阻んだ。それだけの話だ」

「どうシて……何デ、だ。……俺ハ……オれ、たち……は」

「負け犬、だろう。聞いていた」

返る答えに、神崎は愕然とした。

お前までそんなことを言うのか、と。

けれど、そんな神崎の絶望など千夜には届かない。

「犬や猫に生まれていたならともかく……俺たちは人間だ。弱くて、ちっぽけな人間だったんだ。死ぬまでな。……なのに、逃げた。――――――自分という存在から」

絶望する神崎など視野の外に置き、千夜は久留美を見た。

殴られ痛めつけられ、恐怖の限界値を迎えて気絶した彼女を見ながら、千夜は『師の言葉』をふと思い返した。

――――――人であることを捨てろ。

今思えば、あれは彼なりの優しさであり、気遣いであったのだ、と。

人であることを拒んでいた自分に対する救済措置。

弱いことから、人間でいることから逃げたがっていた自分へ与えられた逃げ道であったのだ。

結局、自分は守られていた。

守られることが嫌で逃げ出した自分は、愛すべき人たちの不可視の優しさでこの瞬間まで守られ続けていた。

ただ、気づかなかっただけだ。

手に入れてきた結果は全て当然だった、ということに。

逃げる輩に、守れるものなどあるはずなく。

欲しいものが、手に入るわけがなかった。

「俺は、イチ抜けさせてもらう。――――――悲劇ぶるのは、止めることにするよ」

「マ、待てッ……！」

かつては頭部であったであろう、今は目玉と脳漿を僅かに残すばかりの肉片を通り過ぎようとした矢先、そこから聞こえる神崎の声

が上ずった。

「……お、俺を捨てルの……か？……同類でアる俺よリも、あンナ……あんな、馴れ合わナイと何も出来なイようなやツらを……その女を選ぶっていうノカっ！？」

「俺たちは、勝手に人に絶望しただけだ。それが全てであると、勝手に判断した。目に見えるものだけが全てじゃない。所詮……見えるもので判断するしかないがな」

けれども、

「お前には見えなかったのだろうが……俺には、見えたぞ。ちっぽけだが、手放し難いものが、まだそこにあるのを……確かに見えたよ」

意識はなくとも、そこで確かに息づく命がある。

歩みが、そこへ向かおうとする。

「……ま、……ッ」

「次は、もう少しマシになって生まれて来いよ。もっとも、地獄の獄卒どもの浄化を手荒いからな……お前の人格は削り取られてしまうかもしれん。だから、こう言おう。

――――じゃぁな、神崎陵。俺は、まだ【人間】でいることにするよ」

声は聞こえなかった。

ただ、背中越しに忌々しくも同類であった者の気配が消えるのを感じた。

それが、王という頂を目指した愚かなケダモノの末路だった。

◆◆◆◆◆◆

「――――――くるみ……久留美、起きろよ」

泥の底にいるような感覚。
鈍く伝わる声が、自分の名を呼びかけていることはわかる。
けれど――――――誰？

「ん……ッぅ」

動かそうとした矢先、口の中が痛んだ。
特に左の奥が、酷い。
思わず悶絶しつつも、目覚めは促進され、

「ぅ～……い、たひ」

「良かったな。生きてる証拠だ」
「らに、言って……――――――ぇ」

涙が滲む視界を開く。
そこには、笑みがあった。

「――――――おはよう」

うわ、という言葉は内側に収まる。己の声は、何処かに置いてけぼりにしてしまった。
薄暗いはずなのに、その顔ははっきりと見えた。

凛と煌く眼差し。
久しく見ていないと感じるのは、大袈裟なのかもしれない。
けれど、久留美の心は言葉に出来ないほどの感銘を受けた。

……ああ、本当にこいつ綺麗だなぁ。

なんというか、地獄に仏的な効果がかかってより一層という感じだ。
ここまで来たら、女とか男とか――――――そんなの関係ないだろう。
惚れずに済む理由があるなら、何だというのだというやつだ。

ただ見れるならいつまでも見ていたい――――――なんて思いながらも、何か言わなくてはと呆けた思考を叩き起こして、

「……勝ったの？」

自分の脳は思ったよりポンコツだったらしい、としか言いようのない選出結果がポロリしただけだった。

「ああ。……お前の、勝ちだ。久留美、起き……いや、いい。俺がしてやるから、じっとしていろ」

何が起きていたかは影の中で全て見ていたのだろう。

作戦のために助けることも出来なかった負い目から来るのであろう、その慈悲溢れる気遣いには背筋が痒くなるが、正直助かった。

利き腕は折れていて、思うように動けないのだ。

「っ、たぁ～……！」

「あまり喋るな。口の中が切れているんだろう」

「……てゆーか、歯が折れた。多分、どっかその辺に転がってる」

一大事であるはずなのに、今の久留美はそれすらどうでも良くなるくらい心身共にダルかった。

先程まで下手をしたら死に一直線の戦いに投じていたわけで、自分で思っていた以上に身体は限界を迎えていたというわけだ。

「……しんどい」

「お疲れさん」

呑気な軽口を交わしている方が、現実味がないように思えた。

久留美は、千夜の腕に自由の利かない身体の全体重を任せ、

「……私、生きてるのよね？」

「ああ」
「千夜……生きてる？」
「……ああ、おかげさまでな。死に損なったよ」
軽いなぁ、と。けれど、それが言葉ほど軽い事実ではないことを久留美はよくわかっていた。
少しして、久留美は染み渡る実感の存在に、思わず笑った。
「そっか。……やったぁ。私の、一人勝ちぃ」
「ああ、おめでとう」
「勝った勝った」
「そうだな……っ」
それまで微笑で応えていた千夜の表情から、それが消える。
直後に現れた沈痛なそれに、久留美は原因究明の矛先を自分に向けた。
残された左の手でそれを確かめた。
触れた頬は水っぽく湿っていた。
知らぬうちに泣いていたのだ。
自覚の到来と共に、決壊が訪れる。
止め処ない涙が哀しみを連れて来た。
「ぁ……れ」
引っ張り出された感情は今更なものだった。
今になって、哀しい。

両親が死んだことが――――――喪ってしまったことが。

そして、もう一つ。

千夜が生きていること。自分が生きていること。

二人で、まだこの世界にいることが――――――嬉しい。

そして、やはり哀しかった。

何をどう願ったって、全てが手に入ることはないとわかったから。

「緊張の糸が切れたんだ。……怖かっただろう」

べた付く髪を払いのけて、額を撫でる千夜の手は冷たく、けれど仄かに温かい。

その優しさが今は、傷に染みるような痛みを促す。

それが、決して無償で手に入れたものではなく、引き換えに大事な何かを失ったことを拭えない事実として久留美に知らしめるのだ。

意識すると、余計に涙が込み上げてきた。

「……どうした」

「わからない。けど……なんか、泣きたくなった」

「痛いのか……？」

「……違う。でも、止まんない」

そうか、と千夜はそれだけ口にして、それ以上の言及はなかった。

ただ、代わりに、

「……馬鹿だな、お前は」

「は……？」

「怖かったなら、俺の言うとおりにすればよかったんだ。なのに……ああ、本当に馬鹿だ。お前は、どうしようもない馬鹿だよ」

ちょっと待て、とここまで言われてテンションを低空飛行させておくほど、久留美はしおらしい性分ではなかった。

「っの……怪我人に馬鹿連チャンってどーいうつもりよ！」

「怒るなよ」

「どの口が言うか！」

「褒めているんだ。――――――好みだよ」

「……ぁ？」

処理が追いつかない。

クラッと来たのは眩暈ではないことだけは久留美にもわかった。

「な、に……」

「好きだと言っているんだ。友達をそう思うことはおかしなことか？」

「いやいやいやいやまてまてまてまて」

死亡フラグをブチ折った矢先、今度は一体何処に向かっているのだろう。

喜ぶべきか、ツッコむべきか。

グラグラする思考回路で、出来れば素直に前者を選びたいという本能を抑えていると、

「あ。……でも、散々間違いだとか言っておきながらそれはさすが

に図々しいか。ごめん、俺たち友達じゃなかったな」
「ええっ！」
まさかの埋め立て作業が開始される気配に、久留美はもはやしどろもどろだった。
しかも、本気で泣きそうだった。
「――――――……だから、友達になってくれないか」
「……」
「違うか。……え、と……友達になってください」
「……」
「……ダメ、か」
「――――――ハッ！？」
今、何が起きているのか。
久留美は、己の放心の間の僅かな空白にてエラいことが行われていたことを急速に把握し、
「な、なるっ！　なる、なるなるぅっ！！　なりたいですっ！！」
さりげにそれは失恋スイッチであることも、この際どうでもよかった。
ホッとした千夜の顔が、今は全てだった。
「それじゃぁ、握手しようか」
「え……ぅん」
やんわりと握られた手を、握り返す。

指の一本一本、肌の質感まで意識したことはかつてない握手だった。
それは、この手を失わずに済んだことの安堵へ繋がる。

「しつこいと思うが……お前は、馬鹿だよ」
「事前報告の上で尚言うか……」
「でも、俺はもっと馬鹿だ」

長い睫の下で、目が伏せた。

「言えばいいことを……言わなきゃならないことを言わないで、たくさんの大事なものを取りこぼしてきた。その上……意気地なしだ。すごく、それこそ……どうしようもないくらいの」
「……千夜」
「俺は……誰かを傷つけ、傷つけられることが怖かったんじゃない。そうなることで、自分が傷つくのが怖かったんだ。だから、逃げてしまったんだ。弱い自分から。自分が弱いという事実から。……そして、他人といることで傷つくたびに得る痛みから。ずっと、ずっと……――――――あの日から、ずっと逃げ続けていたんだ」

独白に口を挟むことなく、久留美はただ聞き手に徹していた。
何を言えばいいかなんてわからないし、胸の内を見せてくれているという事実はそれだけで光栄に思うべきだと思った。

千夜の言う『あの日』が何なのかはわからない。
『あの日』に何が起こったのかもわからない。

他人といる度に傷ついた痕の中に、自分のつけたものも含まれているのだろうか。
確かめたいという無粋な気持ちがないわけではないが、今はたた

聞きたかった。

連ねていく言葉の先にある――――――彼女の決意を。

「けれど、逃げても逃げても痛みはなくならなかった。傷つきたくなくて、一人でいることに逃げたのに……傷は増えていくばかりだった。当たり前だな。……本当にやりたいことを、我慢して望まないことを自分に強いているんだから」

「うん」

「一人は寂しいよ。楽だったけれど……寂しくて仕方ない。誰かに触れて欲しい。誰かに触れたいって……飢えて、渇きだけが募っていくばっかりだった」

「うん」

「結局、生きていくうちに傷つかないことなんてないだ。傷つかずに、生きていくことは出来ない。なら、俺は……逃げるのはやめようと思う。そして、自分の望みを……――――――我慢しないで、通すことにするよ」

キュッと己の手を包む指に力がこもった。

触れる肌には、じんわりと湿りが出来ていた。

緊張、なのか。

否、緊張しているのはきっと――――――

「だから……――――――俺の傍にいてくれ」

頷けども、声は出なかった。

久留美に出来たことは、歓喜の量に相応する涙を生むことくらいだった。

臆病で優しいこの人に、それを言わせたことの意味とその覚悟を考えると、身体はそれ以外の命令を受け付けなかった。

言葉にならない想いを、久留美はこの瞬間に自覚した。

永遠に叶わない恋の存在を。

それを知ってしまったばかりに、大事なものを失ったことを。

何かが欲しいけれど何も失いたくないと――――――『全て』を望んでも、それは叶わないという残酷な事実を。

結局、千夜の言うとおり、自分の生きている世界というものは虚しくなるほど思い通りにはならない。

けれど、それでもよかった。

この言葉を与えられた自分は、多分きっと、この瞬間においてはこの世界の誰よりも恵まれており、幸せであると断言できた。

この言葉が欲しくて、ここまで来た。
大事なものは失ったけれど、焦がれてやまなかった――――――欲しかった居場所が出来た。
この恋は絶対に叶わないけれど、くだらない自分の中の唯一の誇りとなった。

叶わない、絶対に報われない恋をした。
けれど、それを抱えて生きていこうと思う。
一生手放さないだろう。

誇りがある人生とは、それだけで価値があるから。
幸せになってくれ、と突き放されることに比べたら――――――これを、幸せと呼ぶ以外に定義づけることは出来ない。

「えっぇぇ～……うぁぁー」
「……鼻水つけてもいいぞ」
「ぐすっ」

本当に、幸せだ。

【壱百六拾九】　果てにあるもの（後書き）

久留美ルート、これにして完走。

ちなみに、ここが久留美の人生の最絶頂です（真面目ある意味ではここからが久留美の（自重という名がつく）戦いの始まり。

さぁ、あとはただひたすら走るだけだ（蒼助が

［壱百七拾］　打破の特攻（前書き）

壁があったらどうする？
選ぶのはもちろん――――逃げる以外の選択肢。

【壱百七拾】　打破の特攻

――――――道は定まった、はずだった。

「……どーすんだよ、センセ」

「……どうしようね」

事態は八方塞がりというやつに陥っていた。

とんだ番狂わせである。

何故こうなったか。

時が僅かばかり遡ったところで――――――それは生じた。

◆◆◆◆◆◆

携帯を通した朱里のナビを後部座席に乗せた三途から聞きながら、

目的の隔離世の『入り口』を目指していた。

距離間的に過度な問題はなく、順調に行けると思った。

しかし。

「……何で、あそこでパトカーなんだよ」

速度出しすぎていたのはわかっている。

だが、そんなもの守っている余裕はなかった。

そして――――――異常だった。

一台現れたと思えば、その後を湧き出るように二台、三台と続々と増えてきたのだ。

まさかの大追跡となった。

三途が機転を利かせて、閃光弾を撃たなければどうなっていたことか。

なんとか包囲されることなく突破すること出来たが、

「くっそ……予定の経路からズレちまったじゃねぇか」

一旦振り切るために闇雲に走り、元の走行経路からはすっかり外れてしまい、今は姿を隠すべく建物の資格にて三途と身を潜めるばかりだ。

おそらくもう間に合わない。

今頃、『入り口』は別の場所へ転移してしまっただろう。

「……なんで、見つかったんだ？　やっぱ、ノーヘルは目立ったかな……」

とはいっても上弦が持ってきた愛車に、ヘルメットがなかった。
おそらく何処かに落としてきたのだろう。
滞る状況に対する蒼助のイライラは上弦へと向かいつつあったが、

「違うと思うよ」
「……ああ？」
「……ここまで走って、何かおかしいって思わなかった？」
「わかんねぇよっ！！」

そんなことを気にしている余裕はなかった。
半ば八つ当たり気味に声を荒げる蒼助に対して、三途はあくまで冷静だった。

「じゃぁ、例えば君が私の店に来るまでの間……君は――――――通行人を見たかい？」
「は……、ぁ」

思い当たる節にぶつかった。
そういえば、頭が水浸しの状態で歩いていても、視線というものを殆ど感じなかった。
渋谷は夜遅くまで人の気配が濃い。

それなのに、

「……いや、いたっちゃいただろうけど……それにしては」
「だろうね。君が運転に集中している間、見ていたけれども……この時間帯だというのに人はまったく見当たらなかった」
「それって、どういう……」
「……昔、似たような光景がこの都市では当たり前のようにあった時期があったよ。私の話、覚えているかい？」

三途の紫紺が、サングラス越しに蒼助を捉える。
瞳の放つ意思に応えるように、蒼助の脳裏を引き出された記憶が巡る。

「十四年の……？」
「それと、さっきのパトカー群は……降魔庁だね」
「はぁっ！？」

どう見たってパトカーであったではないか、と蒼助は三途を信じられないと見返す。

「……覆面パトカーさ。”パトカーを装っている”って点が、降魔庁ならではの【覆面】なんだ。それに……運転している人間は黒服だった」

黒服は降魔庁の制服だ。
つまりは、三途の言うとおり――――――

「いや、でもっ……何で俺たちが追っかけられなきゃならねぇんだよ」
「怪しいからさ」

言われ、蒼助はほぼ反射的に三途を凝視した。

「……確かに」
「……私を見て言わないの」

わかってるけどさぁ、と愚痴りながらも、

「……彼らも気付いている。この場合、警戒態勢が敷かれている中にホイホイ飛びこんだ私たちが迂闊だったってことかな」
「……どういうことだよ」
「この独特の嫌な感じ……。普通の人間はわからなくとも、無意識の本能までは誤魔化させない。だから、この都市には……”渋谷には誰もいない”。普段、夜の街を屯する若者は家へ帰り、ホームレスですら今夜に限ってはねぐらをこの区の外に求めて出て行った。誰も彼もが安全領域を求める中、危険領域ど真ん中をバイクで走行する私たちは……十分【不審】だよね？」

嫌な感じ、と言われてみれば自覚は容易かった。

何処か居心地の悪い感覚。

本当に、何がとは言えないけれども――――――『それ』は、蒼助にもあった。

これが隔離世で起きている『異変』による現世への影響ということなのか。

「それと……私、かな」
「ん？」
「……いや、それよりもどうしようか。さっきの閃光弾で私が魔術師だってバレちゃったから、多分追跡増えるよ。今度見つかったら、次は振り切れないだろうしなぁ……同じ手を食らうほど向こうも間抜けじゃないし」

もうこれ以上時間のロスは出来ない。

しかし、警戒態勢が強まるのではどうにもならない。

打開策が浮かばない。

確実に的確に事を運ぶための手段が――――――

「……――――――っ、くそ、こんな時に」

携帯が鳴った。

こんな時だからこそ、相手は考えるまでもない。

用件も相手も、一つであり一人だ。

三途ではなく自分の携帯という辺り、案件は単純に一つきりというわけでもなさそうだと、蒼助は頭痛くも想定し、

「……なんだ、バカヤロー」

『バカアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアっ！！！！！』

鼓膜を破らんばかりの馬鹿の応酬が直撃した。

しかも、二倍どころか四倍返しで。

甲高い朱里の声は、蒼助の思考回路を瞬時に焼いた。

卒倒するかと思った。

『何してんのよ消えちゃったじゃなぁぁいっっ！！　時間ないって言ったでしょぉぉっっ！！？』

「うるっせぇーよっ！　こっちだって予想外に巻き込まれて手詰まりになってんだよ、バーカ！！」

「コラコラ近所迷惑だからあんまり大声出さないで。……消えちゃったものは仕方ないよ。次の出現場所を聞いて」

子供言い争いに発展しようとしているのを三途が嗜め、なんとか収まる。
なにしろ状況が状況だ。
「……だとよ。次は何処だ」
『……もっかそうさくちゅう』
そこから沈黙が電話越しに対応するようになった。
回線を繋げたまま、蒼助は訪れた時間を思索に用いた。
無論、元の話に立ち返るわけだ。
これで、見つかったとしてもどうやって包囲網をかいくぐって辿りつくか。
渋谷区の『入り口』を諦めて、他の区から『入り口』を狙うか。
しかし、そうなると渋谷を脱出するために降魔庁の追跡を逃れなければならなくなる。仮に脱出できたとしても、その先で連絡の方が先に着いていたら結局状況は変わらない。
何処を見ても、道が塞がっている。
これではもう――――――諦めるしかない。
「……センセ、諦めよう」
「なんだって？」
この期に及んで何を言い出すのか、と三途の目が鋭くなる。
非難がましい視線に、蒼助は、
「無難な道を行こうとするのは止めようぜ――――――って話だよ」
「え……」

「ようは、俺たちはそんなこと考えてっから何処にも行けないんだ」

それさえ諦めてしまえば、この問題は実にシンプルなものなのだから。

口端を吊り上げて笑う蒼助に反して、三途の口元が引き攣った。

「……眷属になったからって……【黒蘭化】、早くない？」

そして、その直後だった。

沈黙していた蒼助の携帯電話から――――

『……あ、出たああっ！　え、と……――――――渋谷道玄坂ど真ん中ああー！』

◆◆◆◆◆

スロットルは全開だった。

危険をもたらすような対象がない以上、スピードオーバーに遠慮はいらなかった。
そして、そんな余裕もなかった。

走行を再開した蒼助と三途は、目標をただ一つに絞り、目指すだけとした。
姿を隠せない以上、降魔庁の追跡は避けられない。
だが、そんなことにかまけている場合ではないと切り捨てる。

帰り道の保障はこの際、置いておく。
そして、時間の猶予を踏まえた上でこれが最後のチャンスであるとするならば、遠慮や躊躇など余計な足枷は捨てる他ない。

「……来たよ」

三途がエンジン音の間を縫うように蒼助に囁いた。
意識を傾ければ、確かに背後からその接近を感じた。
何の変哲もないパトカーを装う――――――降魔庁の追跡車。

予想通り、到着する前に降魔庁に発見され、追いつかれた。

「今のところ、三台。”後ろには”あと五台は追加されるんじゃないかな？」
「……まだ、だぜ。センセ」
「わかってるよ」

下手な威嚇は、逆効果だ。
それで、警戒を煽り応戦でもされたらたまったものではない。
だが、何もせずに潜り抜けられるほど楽な道を走っているわけでもない。

今は耐える時だった。
耐えるのをやめるべきは、いずれ避けられない衝突のみだった。

会話は、そこで相手を立ち替えた。
三途は回線を繋いだままの携帯に半ば怒鳴るように話しかけ、

「朱里ちゃんっ！　今、文化村通りを走行中だよ！　入り口はどのあたりっ？」
『――――――そのまま行って！　その先に駅前ビルがあって……そこのスクランブル交差点の中央に今出てる！！』
「確かに丁度ど真ん中……――――駅前ビルの交差点がゴールだよ、蒼助くん！！」
「了解っ！！」

更に加速。
もはや回避や操作は利かないレベルの、文字通り『全速』に達していた。
これでなんらかの障害物が突然入ってきたら即死は確定である。

しかし、それをどうにかするのは蒼助の役目ではなかった。

故に、ただ――――――――ゴールのみを目指す。

そして、

「……っ、アレか！」

ようやく見えた目的の交差点。
あって当然の行き交う人々の姿はない、異様なまでに無人のそれが。

蒼助は見た。
その中央にて、景色が歪にブレている様を。

しかし、同時に前方の右の道路から降魔庁の追跡車の接近も目に入った。
向こうのスピードは蒼助たちよりも劣るが、それでも追いつくのが早かったのか距離間は互いのスピードを維持した末には、先に入り口を通ることかなわず衝突を避けられない。

「……センセっ！！」
「わかっているよ。――――――頭を下げて、目も伏せておいて」

言われたとおりに低姿勢となった蒼助の頭上で、三途が銃を向ける。
ここまでの走行中に弾薬の装填を済まされていたそれは、すぐに火を噴いた。

閃光弾が再び視界を眩く染めるが、追跡車は止まることなく進行してくる。

「効いてねぇっ！？」

「……相変わらず情報の行き来が早いことで。なら、これはどうかな――――――！」

再び引鉄を引く。

しかし、飛び出した銃弾は何も起こさず、地面を跳ねて弾けるに終わる。

閃光の威力が治まり、それを見るに至った蒼助は、

「おいっ不発かよっ！？」

「まぁ、見てて」

「っ！」

含みある三途の言葉は、すぐに解明された。

銃弾が弾けた位置を通った途端、高速回転するタイヤは意図せず方向へスリップし、車はあらぬ進行の乱れを生じた。

後ろに続く車も同じ道を辿る。

そして、その後も一台たりとも、思う方向へ行くことなく本来の進行経路を外れていく。

嘘みたいな光景を視界の端に捉えた蒼助は、危うくバランスを崩しそうになった。

「術式の中に組み込んだ設定の領域に入ると発動するようになっている――――――トラップだよ。地雷とか派手に吹っ飛ばしてやってもよかったけど……無駄な殺生をしている場合でもないからね」

「説得力ねぇ、よっ！」

過激発言をどうこう取り上げるのは後だった。

左の前方にも明らかに接近してくる車体の群が見えるが、まだ遠い。
少なくとも、恐れるに足らない。
ゴールは既に目前にある。
極限状態から僅かに気を抜きかけた――――――その時。

「なっ!?」

三途のトラップは思わぬ結果を生んだ。
一番後方で先人たちが不可思議な結末を辿る光景を目の当たりにしていた一台が、急停車をしようした矢先に起きた『誤算』だった。
その試みも術式の発動範囲に入る手前では成されず、無理な急ブレーキは術式の効果と合わさって――――――『操縦不能の事態』を引き起こした。

術式の生むスリップは車体の進行方向を捻じ曲げるだけでなく、バランスを崩したそれを回転へと追い込んだ。
こうなれば、ブレーキの存在に意義はない。
そして、スピードを制御する術を失い暴走車と化したそれは、不幸か幸いか――――――

「っ、何で……こっちくんだよぉぉぉっ!」

バイクのスピードはこれ以上になく全開。
暴走車の勢いはそれよりも数段劣るものの、切迫した距離間がその落差を埋めていた。

「くっ……！」

「――――――しまっ……」

迫り来る車体に対して迎え撃つべく三途が銃を向けた時。

蒼助は修正しようのない『失敗』をしでかした。

怯んだ際の――――――反射的な行動だった。

一切緩めずにフルスロットルで前進していたことも忘れて、ブレーキをかけていた。

当然、車体のバランスが崩れた。急激な抑止力により、後方が浮き上がる。

万事休す。

言いようのない絶望は、たった一つの総括的な言葉であるのに蒼助の目の前を真っ黒に塗りつぶそうと――――――

「――――――この、馬鹿者がっ！！」

――――――しかけたところを、爆発するような怒号が瞬く前に塗り替えた。

声を認識するよりも先に、突如現れたその巨体が問うまでもなく誰であるかを証明した。

「……おっさんっ！？」

衝突の瞬間に現れたその人――――――上弦は、文字通り全てを引っくり返した。

何故、と問う暇もない。

そして、上弦もまた構うことなく己の行動にのみ徹した。

蒼助のバイクと暴走車の間に立つように現れた上弦は、

「阿々々々々々々々々ああああああぁぁぁ――――――――――っ！！！！！」

掌底を打ち込む動作により繰り出されたのは、膨大な霊質粒子を巻きこんだ衝撃波だった。

不可視の叩きつけにより、暴走車はなす術なく宙へと舞い上がる。

「貴様ら……――――――――【しっかり掴まっていろ】っ！！」

振り返り様に上弦は飛ばしてきた言葉を理解する間もなく、その答えは行動によって示される。

「これで失くしたヘルメットの件は、免除せいっ！！」

言いながら、上弦は――――――『殴りつけた』。
バイクではなく、その手前の『空気』――――――霊質粒子の一群を。

衝撃を加えられたそれらは破裂し、連鎖を起こす。
連鎖は爆発を生んだ。
さながら空気中で爆発が起きたかのように。

その勢いにより車体は完全に反転することになった。
ただし、前進の勢いも付け加えられ、

「……って、やっぱ失くしやがったのよぉぉぉぉぉぉぉっっ！！」

反転状態からの蒼助の抗議も。
しがみ付いたバイクも。

それら全ては、飛び込んだ空間の歪みの中に消えた。

［壱百七拾］　打破の特攻（後書き）

三ヶ月ぶりの更新。
約一年ぶりの主人公。

……いろいろ言うべきことがあるでしょうが、とりあえずはラストバトルは近いとだけ言っておきます。

【壱百七拾壱】　闇の堕とし仔（前書き）

運命は軋み、止まらない歯車
見たくない結末は既に用意されていた

［壱百七拾壱］　闇の堕とし仔

ひとしきり泣いて、久留美の中で感情が落ち着きを取り戻した頃合。
不気味な静寂の中を一つだけ響いていたすすり泣きも止んだ。
疲労した精神と身体を、緊張の解けたがままに休ませていたが、いつまでもこうしているわけにもいくまい、と千夜が行動を切り出した。

お互いの負傷――――――特に、久留美のことを考えるとこれ以上の長居は無用だった。
隔離世の支配者であった神崎を滅ぼしたことで、死霊たちの脅威が去った。
しかし、千夜と久留美の脅威が完全になくなったわけではない。

ここが、死霊たちの世界であることに変わりない。
いつ支配から逃れた死霊たちが生者である千夜たちの気配を嗅ぎ付けて集まってくるかなどは、予想がつく。

久留美に無理をさせるとわかっていても、ここに留まることよりも危険はないことはない、と判断した千夜は、

「……立てるか？　無理なら、肩を貸すが……」
「平気よ」

手助けは無用、と自力で立とうとするものの、その足は完全に笑っていた。

一人では歩くどころか、立つことさえもまだ至らない状態なのは目でわかる。

それでもむきになって力み、なんとか立ち上がりながらもフラフラしている久留美に苦笑しつつ、千夜は了解もなしに手を貸すことを決行した。

後ろへ倒そうなったところを腰を支え、

「万全の状態なら抱き上げてやれるんだが……我慢してくれよ」

「ちょっ……、……大体、抱き上げるって……なによ」

「変か？」

「……もう、いいわよ」

どうして女のクセにこうもフェミニストなわけぇ、とぶつくさと小声で文句をたれるが、久留美はもはや意地もなにも張ることなく腰を抱く千夜の腕を支えとした。

「……あ」

地面に視線を落とした際、久留美は何かを見つけた。

薄闇の中でも慣れた目にはそれが何であるかはわかった。

「……ごめん。アレ……拾わせて」

千夜の手を借りつつも、それを拾うべく久留美は腰を屈めた。

「それは……」

「……」

千夜の声は、少し固かった。

久留美が手の中で無言のまま見つめるのは――――――久美子の形見であるバレッタだ。
赤黒い血に塗れ、先端が欠けて、ところどころにヒビが入っていたが、紛うことなく千夜も知るそれだった。

「……なんて顔、してるのよ」
「どんな顔だ」
「なっさけない顔よ。……いいのよ、あんたが気にしなくても」

破損したバレッタを胸に抱き、久留美は目を閉じた。
無我夢中だった。だが、今更嘆きたいとは思わなかった。
心はそれをわかっているのか、この世で唯一残された母の面影を見せるそれが変わり果てても涙は出なかった。

心の変化というよりは、久留美という人間自体が変化しているというのが正しいのかもしれない。
母の形見さえも勝利を掴みとるための道具としてしまう非日常的な部分を内包する人間に。

そんな自身に、久留美は落胆や畏怖は抱かなかった。
哀愁と喪失感はあれども、拒絶の想念は一向に湧かなかった。

「……帰ろ」

失いながらも、それでも取りこぼさすに済んだ。
その証たる存在に促す。

「……ああ」

返る応えに、出ないはずだった涙が滲む。

心に実感が染み入る感動は、それだけ大きいものだった。

しかし、そんな感涙の気分に――――――ふと、水を挿す違和感が生じた。

「ぁ、れ」

そういえば、何故ここは崩れないのだろう、と。

神崎は死んだ。

今度こそ、死んだ。

この建物は神崎の力でつくられたもの。

元あるものを掻き集めて、寄せてつくりあげられた滑稽な王国。

それなのに――――――主のいない王国には、何も変化を感じない。

まるで王は今だ健在であると言わんばかりに。

これは、どういうことなのか。

「ねぇ、かず……」

「少し待っていろ。すぐに出口をつくってこんなところからおさらばさせてやるから」

千夜は、夜叉姫を手にして振り上げていた。

出口。

それを聞いて、久留美の中での外への欲求が勢いを増す。

悪夢のような戦いの終わり。

千夜との現実世界への帰還。

張り詰める真の安堵への渇きは抑えられない。

もうすぐ終わる。

それを、考えると些細な違和感などどうでもよくなった。

気のせいだ、と。

足に絡み付きそうな不安を振り払うように、かぶりを振った。

「……そう、ね。……早く――――――」

――――――ドクン。

「……っ！」

心臓が、跳ねた。

たった一度だが激しい脈動が起きた。

まるで何かに怯えたような。

しかし、それは一度は刈り取った不安の芽を、今度は摘むまもなく増長させた。

更に、その不安は久留美のものだけではなくなった。

「……千夜？」

いつの間にか、千夜は得物を降ろしていた。

不安を肯定するような仕草に、久留美の胸がざわつき、

「……参ったな」

すぐ後ろで聞こえたのは、溜息のような声だった。

笑うようで、泣きそうな。どちらともつかないような。

そして、

「俺は、なんだかんだで――――――平和ボケしていたらしい」

静寂は、激震に呑み込まれた。

◆◆◆◆◆◆

「……くん、――――――蒼助くんっ」

脳がぐわんぐわんと揺れている。

しかし、それはまだ己の頭蓋に納まっていることを意味している。

生きている。

そう自覚した途端、蒼助の意識は再起動した。

「……ぐ、ぁ……せんせ」

「ごめんね。急だったから、ちょっと手荒くなっちゃって」

手荒くなった、という言葉に反応した思考が、混乱する蒼助の記憶を整理し出す。

上弦の乱入により、かなり強引ながらも蒼助と三途は隔離世への突入は成功した――――はずだった。

直後に襲った衝撃により、短時間でも気絶していた。

しかし、その衝撃とは――――――

「……あんたが実は過激派だってのはもうイヤってくらい理解できたぜ」

ズキズキと痛む脳天を押さえながら、三途を恨みがましそうに睨み上げる。

打って変わってなんてことなさそうに、ケロリとしている三途は砂埃を払っていた。

「蹴り落とした挙句に壁に頭から激突させたのは、悪かったよ。でも、いくらちょっとやそっとじゃ死ななくなったとはいえ、血だるまになられるのはこれからのことを考えても困るもの。――――――あんな風になられちゃ、ね」

と、指差した先では、勢いのまま壁に叩きつけられて蒼助の代わりに見るも無惨になったバイクがあった。

思い出深い愛車の哀れな成れ果てた姿に、蒼助は思わず絶句した。怒りも忘れた。

しかし、ゾッとする寒気、喪失によるショックと未練で固まる時間もロクに与えられなかった。

「……ここが、隔離世……なの、か？」

辺りを見回すも、蒼助にはっきりとした実感を感じるだけの光景ではなかった。

埃と煤に塗れ廃れた工場のように見える、何かの建物の中。

足場は灰のような砂の海。足先で掘ってみると、下はコンクリートだった。

それだけ人の手を離れていればここまで草臥れてしまうのか。

常人の目であれば黒一色塗りの視界となる明暗だが――――――目を凝らせば発揮される人外の視力を持ってすれば凝らすことはできる。

しかし、それも近くにいる三途の姿を捉える程度にしか発揮されない。

「……チッ、こう暗いと出口探すどころかロクに歩けも」

「その心配は無用だよ。この世界の建物には、入り口はあっても【出口】なんてないんだから」

「は？」

「だから――――――こうして【造る】しかない」

その時、突如三途の前に光によって描かれた魔法陣が浮かぶ。

そして、響く銃声がそれを打ち抜き、破壊した。

魔法陣がガラスの破片のように飛び散ると同時に、光を放った。

暗闇の中で一筋の線を描いたそれは終着点へと行き着き――――――爆砕した。

轟音と土煙を置き土産にして。

「げぇほっ！　ぐ、……センセぇっ！」

「ほら、急いで」

予想だにしない行動により充満した土煙をもろに吸い込んでしまった蒼助の苦しみも咳き込みも無視して、三途は蒼助の手をとって走り出す。

向かう方向は先程の破壊音の発生した先だった。

わけもわからぬまま引きずられるように三途に導かれた蒼助が止

まることが出来たのは、三途の足が止まった時だった。

すなわち、暗黒世界からの脱出成功を意味していた。

「ふぅ。……なんとか間に合ったね」

「っ、けへっ……なに、が――――――」

三途のペースに巻き込まれて散々な目に合わされたことへの不平を述べようとした際、蒼助は気付いた。

今、自分がいる場所が暗闇の外であること。

更に付け加えるなら、

「あれ……俺ら、【何処から】出てきたんだ？」

見遣れば、古びて錆びついた鉄臭そうな工場と思しき建物が視界を包囲している。

しかし、いくら見回しても、外にいることを理由付けるモノが見当たらない。

「……さっきセンセが開けた風穴は……」

「塞がっちゃったよ。隔離世の建物は、壊されたからといっていつまでもそうあり続けるなんてない。【ここの住人】たちは不変を好むからね。余程のことがない限り、獲物を逃がしたことよりもなかったことにして知らんぷりする方を選ぶさ。……にしては、ちょっと妙な感じだったけどね」

「……どういうことだよ」

「【ここの住人】は現世で蔓延る奴らよりもずっと獰猛で生者の気配に対しても俊敏、らしいと聞いているよ。なのに、自分のテリトリーの中にいるにも拘らず彼らから干渉は一切なかった。それどこ

ろか、気配すら感じなかった」

三途は手袋に覆われた手を口に添えて、考え込むように黙ってしまった。

そんなことを気にしている場合ではない、と蒼助は焦れる気持ちを持て余しながらも、三途のいう違和感を倣うように思考する。

確かに実際来てみれば、隔離世という場所は想像とは大分異なっていた。

空は重々しい暗雲に覆われていて、陽はおろか空ですら欠片も見えない。

しかし、濁ったような空気の淀みに対して周囲の存在の気配は希薄だった。

痕跡は感じれども、生々しいまでの怨嗟の声や怨念は殆ど感じない。

何故かはわからない。何もかも。

これは死者の世界たるここでは異常なのであること以外は。

あるはずの住人であり支配者である死霊たちは、何処へ消えたのだろうか。

『――――――貴方まで考えこんでどーするのん?』

思考作業は、急停止せざるえなくなった。

それよりも自分の正気を疑う方が、蒼助にとっては優先事項とし

て急遽浮かんだのだ。

黒蘭の声だ。間違いなく。

されど、いくら辺りを見回しても姿は何処にもない。

「……っ」

『いないわよ。少なくとも、貴方の視野に収まる範囲には』

再度、響く。

今度は間違いなく知覚する。

声は、頭の中に響いていた。

「……来るとこまで来たとは思ってたけど、俺も電波の仲間入りか？」

『血よりも濃い関係となったのだから、相対せずとも意志を交わせるなんてあってもなんらおかしいことでもないと思わない？』

どんな屁理屈だ、ととてもじゃないが納得がいくような返事だった。

しかし、どんなに奇想天外な理屈が通っていようとも、この状況は決して悪いことではない。

傍目独り言を大きな声で呟き出した蒼助に、三途も物思いの世界からの帰還を果たした。

「蒼助くん？」

「あー……今、黒蘭からの電波受信中だから」

ああ、と蒼助とは異なり三途は至ってあっさりと納得した。
以前にも同じような光景を見たことがあるのか、それとも黒蘭という存在ありき故か。

それなら人目を気にすることなく、堂々と声に出してこの場にいない存在と会話できるというもので、

「ちょうど良かった。ようやく到着したはいいが、これから何処へどう向かえばいいか手詰まっていたところなんだ。オマケになんかおかしなことになってるみたいだし……」
『あるべき死霊の不在？　連中は、全部一括所に吸い上げられてるのよ。養分として、ね』
「吸い上げられてるって……」

何に、と問うまではいかなかった。
それを飛躍し、事態の理解に至る。

「なおヤベーじゃねぇか！　おい、それ何処だよっ!?」
『言ってもわからないでしょーん?』
「だから、こんな電波なこと出来るんだから、こう、目に見えるナビゲートをだなっ」
『そんなことしなくても、既に貴方にはそういった追跡機能が備わっているわよ』
「んなの、言われたって……」

いつの間にそんなものが搭載されたのか、自覚どころか覚えだってない。
戸惑う蒼助の脳に、直接黒蘭の呆れが溜息と共に広がる。

『しょうのないこと。やっぱり、まだまだ坊やね』

勿体つけるように叱咤して、

『……感覚を研ぎ澄ませて獲物を探しなさい、神狩り。成りたてとはいえ、貴方に与えた【称号】は安くなくてよ』

声は、一転して芯の通った厳格な色に帯びる。

ふざけた要素は一点たりとも感じられない。

『【アレ】を求めることは、既に貴方の本能よ。闘い、殺すこともね。無駄な思考は全て取り除きなさい。……そして、感じるの。貴方の中の……ヤツに対する憤怒を』

考えるよりも感じろということか、と蒼助は解釈した。

言われるままに、蒼助はまずは考えるのをやめた。

そして、感情も停止した。千夜のことさえ追い出した。

思考と心を停止させた蒼助は、静寂を抱いて目を閉じた。

すると、何もなくなったはずの心にポッと何かが灯った。

苛立ち、という名の憤りだった。

蒼助の意志とは関係なく生まれたそれは、見る見るうちにその勢いを増していく。

何処へ向き、何にかき乱されているのか。それを理解するに足るほどの存在感を得ていく。

得た形は――――――殺意。
あっという間に手の付けようのない程に膨れ上がった殺害衝動だった。

殺したい。
見つけ出して、引きずり出して、殺したい。
その我が物顔が赦せない。存在が赦せない。ゆるせない。ユルセナイ。

早く。早く。見つけないと、耐えられない。
跡形もなく殺(け)してしまわないと――――――気が狂いそうなほどに。

一体、何処だ。何処だ。何処だ、何処だどこだドコダドコ――――――

まるで、獲物の臭いをかぎつけようとするかのように意識は自然

と獣の獰猛さに帯びていく。食欲にも似た渇きが殺意と共に蒼助の心を満たす。

蒼助は、気のせいではなく胸が熱くなっていることに気付いた。身体は火照って、興奮が発汗すら促していた。

昂ぶっていた。

下手をすると下半身にまで熱が及んでしまうのではないか、と危惧するほどに。それもどうでもいいと思うほどに、熱は思考すら侵食し、焼き尽くす。

「はっ……はは、は」

楽しい。思わず、笑みがこぼれてしまう。

相手は圧倒的なまでに桁違いの存在だというのに、蒼助はあくまで狩る側の視点で気配を探っていた。見つけない方が幸いかもしれない、手に余る獲物であるとわかっていても、その危険性すら甘美に感じられた。蒼助は熱におかされた異常な感覚のまま、暗闇に閉ざした世界に一人佇んで、探して探して、探し続けた。闇に隠れた、その異物の存在を。

そして、

「――――――……いた」

にぃ、と口端がつりあがる。

心身焼けるほどに焦がれた存在を感知した蒼助に、歓喜を隠すこ

とは出来なかった。

三途は、それをなんともいえなさそうな目で見つめていた。

「蒼助くん……」

豹変と呼んでも過言ではない変わりように、三途は目を伏せた。
これで彼ももはや引き返せないところまできてしまった。
他ならぬ蒼助自身の選択であるとはいえ何の感傷もなく見過ごせるほど、今となっては拘わりの浅い存在ではなかった。

しかし、いつまでも感傷浸っているわけにもいかない、と三途は頭(かぶり)を振って、

「見つかったのかい？　それで、何処に――――――」

ああ、と応える蒼助の口がそれを告げようと開く。
しかし、示す言葉は直後に意味を失う。

何故なら、僅差で地響きと共に遠方から倒壊音が鳴り響いたからだった。

◆◆◆◆◆◆

地鳴りが続いていた。
激震により地面へと倒れこむ羽目になった久留美は、咄嗟に折れた腕を庇うようにして地面に身投げしていた。
仰向けに倒れそうに成ったのを反転した際に打ち付けた背中が痛んだが、それもすぐに忘れた。

目の前に聳える『絶景』は、何もかもを忘れさせるだけの絶大な印象で久留美の意識を縛り付けてしまったのだ。

「……なに、……あれ」

口からか細く伝った言葉は、地鳴りに掻き消される。
激震は建物を大きなダメージを負担させた。
ただでさえ錆びて朽ちかけていた廃墟は、倒壊の気配を見せていた。

足音を聞かせるその危機すらも、目の前に見える形ある危機の塊に比べればか弱い。

巨大な赤黒い肉塊に比べれば。

「う、っぷ」

突如込み上げた嘔吐を抑えつつ、久留美は正視しがたくも逸らせない存在を凝視した。
肉の塊はよく見れば、繭だった。肉質な線維で幾重に重なるよう

に編まれたそれに、『何か』が内包されている。
闇の中でそれはぼんやりと姿を浮かび上がらせていた。
久留美には、人影――――――『胎児』に見えた。

「見るな、久留美。狂うぞ」
「っ、かず」
「そんなに見ていては、ヤツがお前を魅入らせ取り込もうとする。意識をグズグズに腐らせて、な」

久留美の視界を手で覆う千夜自身は、繭の中の胎児を見つめる。
その眼差しに醜悪な肉の塊を忌み嫌うような色はなく、寧ろ哀れむようでさえあった。

久留美は喘ぐように問う。

「……どうしてっ……神崎は、さっき」
「――――寄生虫、というのがあるだろう？　あれはそういうものだ」
「寄、生？」
「神崎とこいつはそういう関係、だったんだ。……アレは、宿主の中で自らは動かない。ただ、欲望を増長させ、傀儡とする。宿主が人を狩り、集め蓄えた養分……魂と血と肉で【肉体】を形成する。そして、力が十分に整い、【肉体】が完成した時――――――宿主という殻を破って――――――【産まれる】」

視界が遮られていることで、聴覚が特化する。
それにより意識もぶれることなく、言葉の意味をしかと捉えた。

よって、久留美は恐るべき事実に行き着いた。

「そんな……っ」

絶望に滲んだ悲鳴をあげる久留美の背後で、千夜は硬い声色で胎児を呼ぶ。

「間に、合わなかった……か。――――――……【禍神】」

その声に反応したのか。

繭の中で、『それ』は微かに笑った。

【壱百七拾壱】　闇の堕とし仔（後書き）

最悪の事態到来。
ここから先は出来うる限り執筆を止めず、期間を開けないように心がけようかと思います。

次回、ついに再会（のはず）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2007a/

鮮血ノ月

2011年5月4日21時15分発行